

不道千景は勇者である

幻在

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

それは、三百年の悲願の物語。
人類の悲願の物語。

人知れずに死んでいった者たちへの鎮魂歌。
終わる事なき戦いに終止符を打つ、命懸けの戦記。

これは、救われるべき物語。

紅い花咲き誇る時、物語はまた始まる。

これは、時を超えた物語。

願いの物語。

友情の物語。

紡がれる、バトンの物語。

紅い花は、悲願の為に咲き誇る。

目次

花結いの章《ユナイト》

六道翼と鷲尾須美の仲は最悪である

桔梗と彼岸花の人には言えない事である

彼岸花はゲーマーである

彼岸花の章《リコリス》

不道千景

勇者になった日

彼岸花の勇者

勇者のお役目について

皆を守る勇気と世界を殺す者たち

新戦力二人

自己紹介

情報交換

新入りの誕生日

歌が苦手な勇者

その笑顔の意味

一人じゃない

決別

花を纏いし勇者VS星の名を持つ魔物と新世界を望む魔族

彼岸花の覚醒

勇者は根性

乃木園子

星砕く拳

後遺症

284 263 242 226 211 184 178 161 153 139 128 107 96 85 64 58 54 41 31 21 10 1

海水浴と豪華な料理

更なる展開

オフィウクス・バーテックス

蓮華の奮闘

妖狐と天狗とがしや髑髏

勇者の真実

再開

帰郷

記憶無き再開

千景のいない間の勇者部

哀しみの果てに

糾弾

スカビオサとマリーゴールド

ゴールデン・ブライト・バリスタ

昇り咲き乱れる華の如く

慟哭

ただ踏み込むだけ

邪竜の決死戦

星を穿つ

究極の聖戦

貴方にだけは負けたくない

終わらぬ命などなく、それでも世界は廻り続ける

約束

原点の章《オリジン》

終わった生活 新たな生活 そして過去を思い出す

683

672

652

626

612

597

581

560

537

513

493

472

452

434

423

411

402

391

379

360

339

325

317

304

怨まない少年

693

天鎖刈と真実

708

たった一晩だけの安らぎ

727

白い露は千景に救われて

738

変わっていく日常

769

花屋の夫婦

780

封じ解き、縛り解く力

801

秋のキャンプ

829

戦火炎上の戦い

857

真解

876

十二月のある日

902

悪意の鬼ごっこ

917

罪《Sin》

931

失格者の罪滅ぼし

948

七つの大罪

966

始動の章《アーリー》

ひねくれものを勧誘せよ！

978

三本立てだよ！日常的一幕

1004

東の郷に、道はあら不

1031

蕎麦の救世主！蕎麦仮面、参上！

1047

背中傷

1066

勇者の章《ブレイブ》

忘却されし少年

1089

再会、そして、出立

1115

忘却した少女

1131

探して見つけて集まって	164
勇者の葛藤	163
救導者VS防人&襲撃者	162
負けず嫌い	159
束の間の休息	158
邂逅する者たち	157
開幕 反逆者(にんげん)VS断罪者(かみのしんか)	156
処刑衆	155
お前がどうしてここにいる	153
アタシの兄貴	150
四神官VS防人最強組	149
怪物となった少女	147
最高司祭(アークビショップ)	146
死へのカウントダウン	143
完全生命体	141
仮令、この身尽きるまで	139
不浄なるもの	136
絶望	135
上里家	134
錯綜する想い	131
園子の強さ	125
乃木	121
覚悟	118
飛翔攻防戦	115
荒れ狂う獣	91

願いを求める者（エゴイスト）

希望VS絶望

願いの為に

それでも君を愛してる

1718170416901665

花結いの章《ユナイト》

六道翼と鷲尾須美の仲は最悪である

ここは、異世界の神々が作り出した、もう一つの四国。

異世界の断罪の神『マジアクルス』を退け、神樹が消滅した後のこと。

どういうわけかマジアクルスと志を同じにする神がこの世界を攻めてきたので、他の世界の神が対抗手段として神樹の勇者や創代の救導者たちを使つて、異世界の神に対抗する手段を取り、さらには過去の勇者や救導者も呼び込んできたこの世界。

これは、その戦いの記録ではなく、その日常の一幕の話である――

六道翼と東郷美森は恋人同士である。

隙あらば人目があるうがなろうがイチヤつき、昼になれば弁当であーんという恋人の恒例行事、互いのしたいことがしてほしいことが分かるのか互い限定で神対応を見せ、隙あらばキスマでしだし、下手をすれば互いに妄想の世界へトリップしたり、最悪、学校内や路地裏でエトセトラエトセトラ・・・

簡潔に述べてとにかく周囲が砂糖を吐きそうなほどにイチヤイチヤするのだ。

このイチヤイチヤカップルに対抗できるカップルといえば、辰巳とひなた以外にいない。

そう、そんな、あまりにも甘い雰囲気を出す二人なのだが、そんな彼らの二年前の実態は――

「まさか、こんなだとは俺たちは思いもよらなかつたんだよな」

そうぼやく千景の目の前で繰り広げられているのは――

「テメエ！今僕の足踏んづけただろ!？」

「あら、そこに足を置いてるあなたが悪いんでしよう?」

「だったら避けてあげるのが親切心つてもものだよな!」

「貴方に与える親切心はありません」

「ぐ……はっ!そんなんだから園子ちゃんにおばあちゃんっぽいって
言われるんだよ!」

「なんですって!?!そういう貴方は六道家の神童と言われてる癖によく
ドジ踏むじゃない!」

「ああ!なんだと糞アマあ!」

「何よこの非国民!!」

小学六年生の六道翼と二年前の美森である鷲尾須美が、壮絶な大喧嘩を繰り広げていた。

「またやってるのかこいつらは」

「変わらねえな。知ってたが」

千景の隣ではげんなりした表情の剛ともはや慣れたと言いたいような澄ました表情の辰巳がいた。

「ああ、喧嘩しないで二人ともく」

「なんでいつもいつもこんな大喧嘩繰り広げられんのこいつら!」

その二人の仲介に入ろうとしているのは千景の恋人である結城友奈とその友人の三好夏凜である。

だが、一方に二人の言い争いは収まりそうにない。

「大丈夫か二人とも? 顔色悪いぞ?」

「ああ、うん、大丈夫。少し昔を思い出して、かなり知られたくない
黒歴史をガン掘りされてるような気分なんだよねうん」

「今すぐにも首を掻っ切って死にたい……」

「ああ、だめだよわっしー!」

その様子を見ているのか大橋組の中学生バージヨンの三ノ輪銀(中)、六道翼(中)、東郷美森、乃木園子(中)である。

「だあー! ボインの癖して威張り散らすなゴラア!」

「臭い汗まき散らさないで汚らしい!」

「国防国防って洗脳してえのか! 馬鹿みてえ!」

「親の前で猫被ってんじやないわよこの詐欺師!」

二人の喧嘩はあまりにもヒートアップしすぎてる。

「辰巳さん、これそろそろ止めたほうがいいのでは？」

「それもそうだな」

千景に言われ、いい加減、業を煮やした辰巳が二人に近づく。

そして・・・

「いい加減にしろ」

「ぎゃん!」

「ふぎゅ!?」

短い悲鳴をあげて、頭に拳骨を食らった二人はそのまま仲良く床に倒れ伏す。

「きゆう・・・」

「銀（小）、園子（小）、こいつら部室の隅に捨てとけ」

「は、はいいい!!」

「い、今すぐやります〜!」

半ばおびえながら二人を担いでしたころさつさと部室の隅に投げ出す銀（小）、園子（小）。

「ああ、やっと終わった」

「それにしても驚いたわね。まさか二人が二年前はあんなに仲が悪かったなんて」

「まあ、僕自身も驚いてますよ。今思い返すとあんなに仲が悪かったのに今じゃ恋人同士なんて・・・」

「私も、こんなことになるなんて思わなかったわ」

美森が翼の隣に立つ。そこでふと二人の視線が交わる。

「翼君・・・」

「須美ちゃん・・・」

「はいそこまでエー!」

「いた!」

「はう!」

が、すかさず千景が二人の額にどこからか取り出したハリセンで引叩く。

「た、助かったよ千景君・・・」

「危うく恥じをさらすところだったわ」

「いや、恥なんてお前から日常茶飯事で晒しまくってるじゃねえか……」
相変わらぬの二人に呆れる千景。

「本当に驚いたよね。あの二人が来たときはね」

ふと友奈がそうつぶやく。そう、あれはほんの数日前のこと……

「あれ？二人だけ？」

「ええ？そんなはずはない筈ですよ？信託では四人って……」

その時の千景の呟きに答えたのは辰巳の恋人である上里ひなた。

巫女として高い能力を有しているが故か、異世界の神の信託も受け取れる優れた巫女でもある彼女の信託では、勇者は四人来ることが分かっていた。

「あれ？……どこだ？」

「あれれ？？ミノさんそっくりなお姉さんがいるよ？？もしかして、ミノさんのお姉さんだったり？」

「ええ？アタシに上の兄弟がいるって言ったら兄貴しかいないけど……って、園子そっくりな人もいるじゃねえか。それどころか須美や翼そっくりな人もいるぞ」

「わあ、ほんとだあ」

「な、なんか園子や銀にそっくりな奴が来たわね」

部室に突如現れた少女二人の存在に、顔を引きつらせるのは三好夏凜。

「そっくり、というか……」

「私たちだね」

そういつて苦笑する銀と相変わらぬほわわんとしている園子。

「わあー、そのちゃんと銀ちゃんなんだー、あの二人」

「二年前も勇者やってたって聞いてたが、まさか本当に来るとは……」

目を輝かせる友奈と、知ってたが驚いたような表情をしている剛。

「あれ、それじゃあ他の二人は……」

「……ん？どうしたの二人とも？」

樹の疑問よりも、風は翼と美森の異変に気付いていた。

心なしか、二人の表情は思いつきり青ざめていた。なんだか、知られたくない過去を知られてしまったかのようなそんな表情を。

「あ、あはは・・・いや、そんな、でも、来るよねこれ、絶対きちやうよねこれ」

「あ、あら？あの時、私たち一体どんな関係だったっけ？なんだか思い出したくないようなことになってたような気がするのだけれど・・・」

二人とも目からハイライトが消えている。そこまで恐ろしいことなのか。

そうなると逆に気になる。

そして、その直後、銀（小）と園子（小）が現れた時と同じ光が輝き、次の瞬間――

「――――くたばれええええええ!!」

相手への暴言と共に、取っ組み合って喧嘩している翼（小）と美森（小）改め須美が何かにダイブするかのように表れた。

「え、ちよまなんでだああああ!？」

『えええええ!？』

「あああ!千景く――ん!!」

千景が巻き込まれて吹き飛ばされ、他の者たちを置いてけぼりにしたまま現れた翼（小）と須美の大喧嘩に思いつきり巻き込まれいった。

「あの時はひどい目にあった・・・」

「二人を引き離すのに、結構苦労したよね」

「あの後、未来の自分たちの実態を見て泡を吹いて気絶してましたよね」

「あれ結構ショックだったんだけど・・・」

「未来は受け入れてほしいわね・・・ああ、空はあんなに青いの・・・」

悲しい笑顔で青空を見上げる翼と美森。本当に悲しそうだ。

「まるであの頃の私たちみたいですよね」

「喧嘩したのはあの日で最後だな」

懐かしそうにするひなたと辰巳。

心なしか、ひなたがデレデレしている。

それはともかく。

「そろそろ帰るぞお前ら」

春信がやってきて一同にそう言った。

小学生組は大赦が用意した寄宿舎へ帰り、ひなたは辰巳が住んでいる家へ帰り、本日、夕飯を食べる約束をしていた友奈は千景の家へ。そのため、帰路には美森と翼の二人だけ。

二人は今、川の塀の上を歩いていた。

「こうして二人で帰っているのも、あのころじゃ考えられなかったわね」

「そうだね・・・あのころは出会う度にメンチ切りあってたよね・・・」

思い出したくもない黒歴史を二人して思い出す。

あのころの二人は本当に酷く、出会い頭の事件が発端でそれ以来、二人は最悪殴り合いの大喧嘩に発展する程酷かった。

今じゃこんなに大人しいが、昔はかなりのやんちゃっこだったのだ。

夕日が照らす中で、ふと二人は、川べりで遊び四人の子供たちを見つけた。

三人が女子で、残りの一人が男子。そんな組み合わせ。

四人で、楽しそうに追いかけてっこをしている様子を、二人は、ただ微笑ましそうに眺めていた。

「・・・僕が銀ちゃんと仲良くしていると、すかさず妨害してきたよね」

「あー、今思うと銀に嫉妬してたからね・・・」

「知ってた。あの頃、僕は銀ちゃんのことを好きだったんだよ？」

「知ってるわ。本当に、分の悪い戦いだっただわ」

自覚できていない恋心に振り回されて、仲が最悪なのに進展するわけもなく、拳句の果てには、「嫌い」とはつきり言ってしまうて。そして、その後、あの戦いで銀がいなくなつて、翼が昇華を使つて十日

間も眠ってしまったこともあった。

やっとの事で本心に気付いても、もう取返しがつかないと思い込んで泣きじやくった夜もあった。

その所為で暴走して、危うく死にかけてこともあった。

だけど、あの祭りの日に、思いがけない告白を翼から受けて、互いに泣いて、キスをして。

あの大橋での大決戦で記憶を失っても、彼はひたすら自分のために動いてくれていた。

そして、異世界の神との最終決戦で、千景が『神王』となって、天変地異が起こるほどの戦いを得て、今がある。

今があるのは、全て、あんな出来事があったから。

「ありがとう、私を選んでくれて」

花の咲くような笑顔で、美森は翼に言った。

「……ごめん、それは反則」

それを見た翼が頬を赤くして思わず目を片手で覆う。

それにくすりと笑った美森。

「今日ね、親、帰りが遅いの」

「……そうなんだ」

美森の言葉に、翼は思わず笑ってしまう。

——今夜も、激しくなりそうだ。

二人で手をつなぎ、歩き出す。

今ある幸せを、噛みしめて——

「……んで、やりすぎて二人とも休みつてどういう了見だア!?」

翌日、羽目を外しすぎた二人が仲良く風邪にかかって学校を休んだのは、ある意味すごいと言わざるを得なかった。

「ぶくぶくぶく……」

「あああ!?!リトルつばくんとリトルわっしーが拒絶反応を起こして

るー!!」

「急いで気絶させてえ！」

「何やってんのあの二人は……」

「今夜俺たちもやるか？」

「ちよ!? あ、と……その、デキたら責任とってよね……?」

「はいはいそこでいちやつかないで二人ともー」

「やれやれだぜ」

「今夜こそは辰巳さんから主導権を奪って見せる……!!」

「そんなことはさせねえから安心しろ」

ある意味カオスと成り果てた部室。そんな部室の隅で、小学生の銀は面白くなさそうにしていた。

「……」

「どうした？」

そんな彼女に、千景と中学生の銀がやってくる。

「あ、銀さんに千景さん……」

「やつぱ須美に翼とられたことがそんなにショックか？」

「ええ、まあ……そうですね」

むくれた様子で目をそらす銀。その視線は絶賛拒絶反応を引き起こしてる翼、ではなく須美に向けられていた。

「……今お前は、須美は翼といつも喧嘩してたのにどうしてあんなに関係になれたんだふざけんなと思ってる！」

「はうあ!？」

千景に思いつきり指摘されて肩が跳ね上がる銀。

「な、なぜ!？」

「神舐めるな。その気になれば人間の心理見抜くことも容易いわ。まあ、今の状態じゃかなり体力カローリ使うんだが……」

「ええ……」

その言葉通り、千景はげっそりしていた。

ふと、銀（中）が銀（小）の頭に手を置いた。

「まあ、そう思うのは仕方ないだろうさ。でもま、こっちの二人見ると、思うんだよね。敵わないってさ」

「……」

その言葉に、何も言えない。

「ま、だからって諦めるわけじゃないんだけどさ。だからさ、お前も諦めんなよ」

「銀さん……」

「ま、今から襲ってもいいんだけどな」

「ぶおっふお!!」

吹く銀（小）。

「ななな何言ってるんすかアンタは!?!」

「ハッハッハ、冗談だよ」

それだけ言って、さっさと行ってしまおう銀（中）。そのまま茫然としていると、どうにか復活した千景が話しかける。

「まあなんだ。勝ち目なくても、諦めるなってことだ」

「はあ……」

「なんなら正妻はだめでも側室狙えばいいさ」

「……そっすね」

千景の言葉に、いつもの笑顔を取り戻した彼女が笑う。

そして、そのまま騒いでいる勇者部のところへ向かう。

「おーいアタシも混ぜろー!」

「な!?!待て今お前混ざったらさらに大変なことにぐあー!」

「ああー!ぐーうー!」

「やれやれ」

今日も勇者部は平常運転。

大半を支配された四国を取り戻すために、今日も勇者たちは奮闘する。

桔梗と彼岸花の人には言えない事である

不道千景は郡千景の血を引く人間である。

ついでに、その記憶を引き継ぎ、その経験までもを受け継いでいるために、その経験は百年相当となっている。

さて、一方、そんな子孫を持つている郡千景というと・・・

「私のような女を娶る男が一体どこにいるっていうのー!」

その経験上、悲惨な子供時代を送ってきた千景には、にわかには信じられない事だろう。

だが。

「また千景の奴が何か言ってるぞ」

「そんなに信じられないのでしょうか・・・?」

叫ぶ千景を遠目で見る球子と杏の二人。

「だって私よ!?根暗でゲームが得意な事以外取柄のない私を、一体どこの誰が嫁に貰うっていうの!?!」

「そんな男がいるから不道さんがいるんでしょう?」

喚く千景を諭すようにひなたが含み笑いで言う。

「そ、それはそうだけどおおお・・・!!」

どうやら、かなり信じられないようだった。

「何してるんだか」

その様子を、件の郡の子孫である不道千景は呆れ顔で見ている。

「ねえねえ不道君不道君」

「ん?どうした高嶋さん?」

そんな不道に声をかけたのは、郡の親友ともいうべき存在である高嶋友奈である。

「ぐんちゃんのお婿さんってどんな人なの?」

「そうだなあ・・・」

「高嶋さん!聞かないで!」

しかしそこで郡の妨害が入る。

「ええー!?なんで!?!」

「私が恥ずかしいからよ!どうせろくでもない男なんですよ!?!」

「ええー、ぐんちゃん綺麗だから、きっと良い人だと思うよ？」

「こんな根暗女を一体誰が貰ってくれるのよ・・・」

(今思うと、勇者時代のご先祖さまってかなり根暗だったっけ・・・)
不道が内心そう思いつつ、横からひよこつと出てきた結城の言動に少し悶える。

「千景君がこんなに恰好良いんだからきつとぐんちゃんの旦那さんも格好良いよー！」

「やめて結城さん貴方まで加勢しないで！」

ダブル友奈の猛攻を受けてその表情を思いつきり赤面させる郡。

その様子に苦笑いしつつ、ふと不道はその様子を面白くなさそうに見ている人物を見つけた。

(・・・え、なんで乃木さんそんな顔してんすか?)

どうにも浮かない顔をして郡の事を見ている若葉。

「んー?どうしたの?ご先祖様?」

「ん、ああ、すまない園子、少し考え事をな」

自分の子孫である乃木園子(小)からの視線を躲しつつ、若葉はそれでも郡から目を離さない。

その様子に不道は首を傾げていると、ふと後ろから何か悪い笑い声が聞こえた。

「・・・どうした、園子?」

「ふっふっふ、私、分かっちゃったんよ」

「何が?」

「ご先祖様があんな顔している理由」

「ああ、何が分かったんだ?」

そこは不道も知りたい所。

「ご先祖様は、ちーちゃんに恋してるんよ」

「・・・」

その言動に、不道はしばしフリーズ。その後、若葉の方を見て、魔眼系統『読心』を発動させる。

「・・・マジか」

「だからさあ、ふーくん」

「いやいやそれはまずいだろ非常に!」

「ええー、良いと思うんだけどなあ」

「この部室にさらに桃色部員を増やす気か!」

「・・・それ、自分も入ってるって自覚してる?」

「どうかしたの二人とも?」

そこで美森が介入してきた。

「ああいや、なんでもないぞ東郷」

「う、うん、ちよつとこの間の依頼について話し合ってたんよ」

「そういえばこの間の依頼って二人で行ってたんだっけ、分かったわ」

美森はそれだけを言い残してさっさと翼の元へ向かい、すぐさまその腕に抱き着く。

「・・・本当にナチュラルにイチヤイチャするよなあいつら」

「もうリトルつばくんやリトルわっしーがいてもおかまいなしだよ
ね」

件の小学生の二人はやはり拒絶反応を起こして気絶していた。

そこまで嫌か。

「できできあ、どうする?」

「チイツ! 上手く話しを反らせたと思ったのに!」

「さつきから何の話をしてるんだ」

と、そこで小学生時代の不道(小)がやってくる。

「おおう俺か」

「やつほー、リトルふーくん」

「だからそれやめてくださいよ・・・それで、一体なんの話してるんですか?」

「いやなんでもな・・・」

「実はねえ」

「つておい!」

不道(中)の叫びを無視して園子が不道(小)に説明した所・・・

「・・・いや、やめたほうがいいんじゃないでしょうか・・・」

「ガーン、こっちのふーくんにも止められたー」

渋い顔で止められショックを受ける園子。

しかし、それは想定済みだったようで。

「ふうんだ！それなら私と一緒にやるもんね！」

「あ、おい！やめろそれは!?止めるぞ！」

「え!?あ、はい！」

わーぎやーと騒ぎ始める園子ズと不道ズ。

それによつて注目を集めてしまうが、気にした様子は無い様だ。

結局、その騒ぎは辰巳の威圧一発で園子ズが竦みあがって収まった。

「すまないな千景、手伝ってもらつて」

「別に・・・あれ以上高嶋さんたちの質問攻めに耐えられる自身が無かつただけだから」

「あー・・・」

あの後、春信に借りた器具を返してきてほしいといわれ、それに若葉が買って出て、郡が友奈たちの質問攻めから逃げるように名乗り出たのだ。

ふと、若葉は、隣にいる千景の姿を盗み見る。

「・・・なあ、千景」

「何かしら？」

「お前はどお思っているんだ？その、未来の旦那の事について・・・」

瞬間、郡から氷壁の如き視線を向けられる。

それに背筋がゾツとする若葉。

「ああ、いや、その・・・」

「・・・貴方には関係ないでしょう。私の事なんて」

「・・・」

どういう訳かその返事にムツとしてしまう若葉。

そのまま黙り合ってしまった二人。気付けば器具庫で、持っていた器具を置く。

器具庫の中は暑く、持っていた器具がどこに置いてあつたかを聞くのを忘れたために、片付けるのに少し難航してしまったが、無事に片

付ける事が出来た。

「さて、戻りましょうか・・・」

「・・・何が関係ない、だ」

「え？何か言った・・・」

次の瞬間、郡——千景は壁に背中を押し付けていた。

「・・・え」

顔の横には、若葉の右腕。肘まで壁につけて、千景の目の前に、その女性にしては凛々しい顔を、ほんの数センチ手前まで近付け、その眼光で不機嫌そうに千景を睨む、若葉がいた。

「・・・乃木さん？なに、してるの・・・？」

「・・・お前はこんなに綺麗なのに・・・」

「ふえ!?!」

突然の称賛。

「なのはどうしてお前はそんなに自分を卑下にするんだ」

「ど、どうしたの乃木さん!?!なんか怖いんだけど!?!」

「その黒い髪もさらさらで、肌はほどよく色付いていて、良い匂いもする・・・お前を嫁にとる男が羨ましい・・・」

「ちよ・・・なん・・・ええ・・・!?!」

「私が男であつたなら・・・」

季節は、夏。そしてここは二人以外誰もいない、完全な密室。その上、密閉されてたから、熱が逃げる事はなく、空気は肺を焼き、熱は脳の機能を低下させる。

そして、生物であるなら、必ず起きる生理現象が起きる。それは発汗。

主に、軀の体温を下げる為のものだが、それすら若葉の理性を崩すのに十分。

若葉が、千景の肌を滴る汗を舐めとる。

「ひゃん!?!」

鎖骨の当たりだったか、素っ頓狂な声を上げる千景。

「の、のぎさ・・・やめて・・・」

「ああ、欲しい・・・欲しいよ、千景・・・この汗も、涙も・・・」

「や、やああ・・・」

いまだ若葉は千景の首あたりに顔をうずめたまま。さらに理性が崩れかかっている若葉の甘い言葉攻めに、千景の腰は砕けそうになる。

いつの間にか、若葉の左手が千景の胸を掴む。

「ん、やあ・・・」

「ここも、小振りに見えて、柔らかいんだな」

「ひう・・・」

若葉が胸をもむたびに、千景の口から甘い声が漏れる。服が、乱れる。

「や、やめて・・・のぎ、さ・・・」

「いやだ、離してやるものか・・・千景はだれにもわたさん・・・千景は、私だけの・・・」

「~~~~~勝手な事、いうな!」

「わ!」

ここでもうにか千景が反撃。若葉を押し返し、足元にあつた箱に足を取られた若葉が、千景もろとも床の上に倒れる。

「う・・・ううん・・・うひゃ!」

その数秒後に、今度は若葉の方から素っ頓狂な声があがる。

「ち、ちかげ・・・?」

「ん・・・あら、汗って美味しいのね」

若葉からマウントをとって見下す千景の目は、サドのそれ。

若葉に顔を近づけ、その顎をくいと持ち上げる千景は、とても意地悪な笑顔を若葉に向ける。

「さんざん言葉攻めにくれたわね・・・私の髪が綺麗だとか、肌がどうだとか・・・ふふ、貴方、私をそんな目で見てたのね」

「ち、ちかげ・・・わ、私が悪かった・・・だ、だからどいて・・・」

押し倒された事で僅かながらに正気に戻った若葉。さらに、若葉は例えるなら『酒を飲んで酔ってもその時の記憶が残る』タイプだ。故に、先ほどの事を覚えている訳であり、千景の性格上、自分に対抗心を燃やしているのも知っている訳であり、そしてこれからされること

も簡単に予想出来てしまう訳であって、だからこそ若葉はすぐさま千景に弁明しようとしたが、この蒸し暑い密室の熱にやられたのは、何も若葉だけではない。

「ふふ、いや」

小悪魔のように笑う千景に、若葉は一瞬、くらつと来てしまう。

その表情が、あまりにも、可愛かったから。

「私からも言わせてもらうけど、貴方だって綺麗な肌をしてるじゃない。それに、髪を纏め上げているから、後ろから見るとなすが、どうしようもなく理性を崩しに来てるの、貴方、自覚あるのかしら？ それだけじゃないわ。何かの目標を真っ直ぐ見据えているその瞳も、貴方の凛々しい顔も、耳が弱い所とか、いつも格好いい貴方のイメージを崩して、可愛いギャップを出すから、もつとそういう所を探したいって思っちゃうの」

一度にいわれ、急に恥ずかしくなる若葉。

「ああ、貴方を嫁に貰う男が羨ましいわ」

「え……」

「私が男だったら、貴方の可愛いところ、もつと見つけられたのに……」

千景の意地悪な笑顔が、いつそうその感情を表に出す。

そして、仕返しと言わんばかりに、若葉の右胸に、自分の左手を押し当て、揉みしだく。

「ん、ひ……あ……」

「あなたをにやんにやん鳴かせて、大事なところ全部いじくりまわして、可愛いペットにしてあげるのに……」

……一つ、千景に誤算があるとすれば。

「……そうか」

「え……きや!?!」

突然、景色が反転する。気付けば千景は組み敷かれ、若葉が千景の上を覆いかぶさっていた。

「たえお前が男でも、ペットにするのは私だ」

若葉もサドっ気があったという事だろうか。

「……へえ……いうじゃない……」

「なんならここで勝負してやろうか・・・どっちが互いを鳴かせられるか」

「いいじゃない、望むところよ」

そう、意気込んでいる二人だが。

(何を言ってるんだ私はあああああああああ!?)

(何を言ってるのよ私はあああああああ!?)

内心、荒れ撒くっていた。

「言ったな、どうなつても知らないぞ」

(まつて!待ってくれ!お願いだから待つてそんな事になつたら私止まれなくなる止まれなくなるからあ!?)

「ふふ、経験もないのに、ずいぶんと自信があるのね」

(ちよ、何口走つてるの!?経験無いのは私も同じなのに!)

このままいけば、確実に何かが切れる。切れたら終わる。

「お前だつて経験ないだろう?接吻の一つもしたことないのだろう?どうだ?私の初めてをくれてやつてもいいぞ?」

(初めてつてなんだ!?何を自信満々に言ってるんだ!?馬鹿なのか!?私
が馬鹿なのか!?)

「あらあら、良いのかしら?大事な旦那様の為にとつておかなくていいのかしら?そつちこそ、私の初めてをあげてもいいのよ?」

(何張り合つてんのよお!?)の、のの乃木さんと、き、きき・・・キスなんてできるわけないでしょお!!)

「ほう、つまり互いに初めてという事か」

(そう、そうだ!だからやめようこんな不毛な戦いなんて!)

「そうなるわね・・・」

(そうよ!ここでやめましょう!お願いやめて!)

(千景とキスなんて・・・)

(乃木さんとキスなんて・・・)

ふと、そこで互いの顔が目に入る二人。

「ふ・・・なんだ嬉しそうに。そんなに私の唇が欲しかったのか?」

「貴方こそ、嬉しそうにしちやつて。そんなに私のファーストキスが欲しかったのかしら?」

(・・・え?)

互いに言われて、改めて気付く。
笑っている。

それも、何かを待ち遠しそうにするような、そんな、渴望するような笑顔。

餌を目前に出された犬のように、はしたなく。

(私、こんな顔で笑っているのか・・・?)

(私、こんな顔で笑っているの・・・?)

それと同時に。

(千景が、私を求めている・・・?)

(乃木さんが、私を求めている・・・?)

なんとも都合の良い解釈(そうとも限らない)。

「ちか・・・げ・・・」

「のぎ・・・さ・・・」

そう、思うと、体の熱が跳ね上がる。

相手が自分を求めている。どうでもいい筈なのに。好きじゃ無い筈なのに。相手が自分を求めてくれていると思うと、躰が、腰のある特定部分が、きゆう、と締まるような感じがして。

そして、そう思うと、だんだんと相手の事しか考えられなくなって。

「ちかげ・・・」

「のぎ・・・さ・・・わか・・・ば・・・」

まずい。これは非常にまずい。

(だ・・・だめだ・・・)

(だ・・・だめえ・・・)

「んん・・・」

「んあ・・・」

どうにか気を紛らわすために、何か、逃げる方法を模索していたら、いつの間にか伸ばした左手が、相手の右胸をひつつかんでいた。

(ひゃあああああ!?)

「な、なんだ千景・・・?そんなに私の胸が気に入ったのか?」

「あ、あなたこそ、そんなに私の胸が好きなの?」

もう、限界だった。

(ああ、もうどうでもいい……)

(このまま女同士経験するのも悪くないかも……)

無自覚の恋心ほど、訳の分からないものは無い。

好きでもないのに気になる。好きでもないのにその人が他人と話しているといライラする。好きでもないのに傍にいと安心する。

そんな矛盾した感情である無自覚の恋心とは、実に厄介なものだ。しかし、すでに二人の目には互いしか映っていない。

(ちかげちかげちかげちかげちかげちかげちかげちかげちかげちかげちかげ……)

(わかばわかばわかばわかばわかばわかばわかばわかばわかばわかば……)

すでに二人の理性はピーク。互いの名前を呟かなければ最後の一线を越えてしまうかもしれないほど、否、もはや互いの事しか考えられないからこそ、二人は名前を呟くこといがい何も出来ないのだ。

二人の顔が、近づく。

部屋は密室、セミの音すら邪魔にならない。夏の日差しは、欲望をエンジン温める要因にしかない。

二人の欲望はすでに、ピークに達している。

あと一押し。それがあれば、二人の理性が完全に粉碎され、獣のように入り乱れる事だろう。

二人の顔が、唇が、触れ合うまで、あと、一センチ。

「ちかげえ……」

「わかばあ……」

(あ、だめだ。もう止まらない)

(名前呼ぶなんて……反則……)

そして、触れ合う——その直後。

「おおい、少し遅くないかお前ら……」

一歩、遅かったのか、そうじゃなかったか。

「……………」

「……………」

「……………」

「あらあらあ、どうりで帰りが遅かったと思つたら、こんな所で盛つてたんですねえ、若葉ちゃん♪千景さん♪」

たつひなが、そこに立っていた。

「……すまん、邪魔した」

ばたん、と扉が閉じられる。空気を読む、精神年齢三百歳の男。

「……………」

黙りこくりに、フリーズする二人。

そして、先ほどまで、していた事を思い出して、そして、互いのファーストキスの瞬間を見られたと自覚して、その顔を急激に赤くして――

「いやあああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああ!!!」

その日、一番の悲鳴が上がったという。

彼岸花はゲーマーである

異世界の神々によって作られた、もう一つの四国。

そこでのんびりと暮らす勇者と救導者たちは、今日も勇者部として楽しく活動を——

「くたばれええええ!!」

「またかア!」

——なんて事は無く、例にもよらず小学生の翼と須美の大喧嘩から事は始まっていた。

一度喧嘩を始めれば二人は止まる事は無く、ただただ己の不満を目の前の相手に叩きつける。

「怒った、もう怒ったわ!ここで今までの因縁に決着をつけてやる!」

「どこのセリフだゴリア!それはそっちのセリフだデカチチ女!」

「なによ極小陰囊男!」

「ちよつと!翼君の陰囊はとっても大きいのよ!」

「それ言っ方がいいのかな東郷さーん!」

「ご、剛のだって負けてないんだからね!」

「対抗すんな風!」

すでにカオスと化している部室。

「お、おはよう千景・・・」

「え、ええ・・・乃木さん・・・」

「・・・」

「『そんな生暖かい目でみないで!』」

「ああー!この間の事で照れる若葉ちゃん可愛い!千景さんも一緒にいると余計映えますねえ!」

「いや、もう忘れてあげたほうがいいだろ・・・」

既に顔を合わせられない若葉と千景、それを生暖かい目で見る子孫ズに高速で千景ごと若葉を写メに収めるひなたに、呆れる辰巳。

その部室の様子を一人微笑ましそうに見るのは、大人びた雰囲気醸し出す一人の少女。

千景の未来の姿である、久我楔である。

「ふふ、賑やかね」

「しつかし、過去のお前と若葉は一体何があったんだ？」

「さあ」

隣には彼女の旦那である久我真一が若干引いた様子で千景と若葉のやり取りを見ていた。

「何かあったのかもしれないわね」

ちなみに、楔の現在の年齢は二十歳であり、真一は二十九歳である。

「はあ・・・はあ・・・どうにか抜け出せたわ」

「あら、お疲れ様、お水飲む？」

そこへ、郡がどうにかこちらに流れこむ。

「ああ、ありがとう・・・って、貴方の施しを受ける気なんてさらさら
ないわ！」

「あら？それはこれを見ても同じことが言えるのかしら？」

と、楔は傍にあった紙袋から一枚のパッケージを取り出した。

そして、郡はその正体をすぐに見破った。

「そ、それは・・・!？」

「ええ。貴方が今ハマっているであろう『ワンダークエスト』の最新作・・・これを見て、貴方は果たしてさっきの言葉を有言実行できるのかしら？」

「ぬ、ぐぐ・・・」

流石に歳というか経験故か、郡が真っ赤な顔して楔を睨みつける様に、楔は笑いをこらえきれない。

「おい今、ワンダークエストの最新作が出たとか聞こえたが？」

「それは俺も聞いたぞ」

「あ、貴方たち!？」

「あら、もう喰いついてきた」

そこへ不道（中）と不道（小）もやってくる。

「どうするく？このままだと二人に取られちゃうわよ？」

「げ、ゲームは一つしかないわ・・・だから、結局は争う事になるわ・・・！」

「でも残念、カセットは二つあるのよね」

「ああああ!!」

郡が耐え切れず絶叫する。

「ずるいずるいずるい!ものずごくずるい!」

「ほら、やっぱり幼児退行した」

「お前・・・過去の自分をコントロールしすぎだろ?」

「年の差よ」

得意気に言い張る楔。

「さて?どうするの?このままだと二人に取られるわよ?二つともね。二つとも、ね」

「ああああ!!ムカつく!その顔ものすごくムカつくうう!!」

もはや勝てないとふんでなのか、最後の抵抗のつもりなのか、地団駄を踏んで駄々っ子のように振る舞い始める郡。

そんな状態の郡を気にしつつ、不道(中)が楔に近寄る。

「てか、それももうすぐあるご先祖様の誕生日プレゼントなのでは?」

「いいえ、違うわよ?ほらただのコピー」

以外とあっさり否定された。パッケージも偽物だった。当然中身も空っぽだ。

「え、じゃあなんなんすか?」

「ただの嫌がらせ」

「どんだけ過去の自分が嫌いなんだアンタ!」

「そういう訳じゃないわよ?」

あつけらかんと返しをされつつ、それでも横眼で床に四つん這いになった地面をぐーで叩きまくる郡を一瞥する。

(昔、あまりリラックスできなかつたからかしらね・・・)

「ん?どうかしましたか?」

「いいえ、何も。それよりも不道君、ちよつと」

楔は不道(中)を手招きして、耳打ちする。

「・・・マジで言ってるんですか?」

「いいじゃない。少しは楽しませてあげて」

「はあ・・・」

生返事を返しつつ、不道は、視界の端で暴れる郡を一瞥したのだっ

た。

そして誕生日当日——

「……なぜ、私は貴方と一緒にいるのかしら？」

「それは聞かないでくれ……」

讃州の街の中を、多少のおしゃれをしたダブル千景が並んで歩いていた。

「あとで結城さんに後ろから刺されそうで怖いわ……」

「こっちは乃木さんにいつ斬られんのか気が気じゃないんだが……」

「……なぜ、そこで乃木さんの名前が出てくるの？」

「……」ジーン

「そんな目で見ないで私が悪かったから!!」

とりあえず黙らせた所で。

「別に、たまにはご先祖様と出かけたと思って思っただけですよ」

「はあ……まあ、そういう事にしてあげるわ。それで、どこに行くの？」

「そりゃあ、行くと云ったら、あそこしかないだろ？」

「……？」

ふと立ち止まった二人の前にあつたのは……

「香川最大のゲームセンター『THE・BARKASAWAGI』です」

「そっち！撃ってください!!」

「分かってるわよ！いちいち命令しないで!!」

最新作のシューティングゲームを、最高難易度で攻略している二人。

二人の反応速度はすさまじく、敵キャラが出てきた瞬間、ものの十秒以内で片付けて行ってしまうほど、卓越していた。

「こ……の……！ 鎧かってーな！」

「甘いわね。こういうのには必ず弱点つてものがあるのよ。そう、このことかね!!」

「んな!? やろお……でもアンタも一つ見落としていたな! ここを撃てばボーナスポイント入るんだよ!!」

「な!? くう、やるわね!」

「誰の血を引いてると思っただオラオラア!!」

瞬く間にハイスコアを叩きだしていく二人。

「おい! 見てみるよ! 最高記録叩きだしやがったぞ!」

「なんだこの数値!? 達人!? 達人なのか!?!」

「いや、神だ!!」

次に行ったのは太○の達人にて。

「ワハハハハハ! 全部フルコンボだハハハハハ!!」

「この程度で鬼なんて片腹痛いわあ!!」

「うおい! 全部良でフルコンボ叩きだしてるやつらいるぞ!?!」

「兄妹か?」

「いやカップルだ!」

続くレースゲームにて。

「おいそこじやまだどけや!」

「どけと言われてどく奴はいないわ! 抜けるものなら抜いてみなさい!!」

「チィ! だったらこのカーブで……」

「なあ!? インコースから押して……やってくれたわね!」

「ハッハッハ! 一位かつさらってやったぜ!!」

「見てみる! さつきシューティングでハイスコア取った奴らがレースで勝負してるぞ!?!」

「なんだこれ!? NPCが相手にすらなっただねえ!!」

格闘ゲーム。

「オホホホホ! どうしたのかしらその程度?」

「だがしのいでやったぜ今度はこっちの番だ！」

「かかってきなさい！しのぎ切つてやるわ！」

「なんだこれ手が霞んで見える！」

「てか画面の方もすごい事になってるぞ!？」

「何が起きてんのか全然わからねえ……」

結局、ゲーム機自体が動きについていけずクラッシュして引き分けに終わった。

そうして遊ぶこと数時間。

「あー……かなりはっちゃけたな」

「こんな遊びしたのは初めてよ……」

ベンチにて、熱を冷ましていた。

息をあげて、休憩している中、不道は郡を横目に見て、呼びかける。

「楽しかったか？」

「え……？」

「前はあまりこんな風に遊ぶことなかったでしょう？」

「……ええ、そうね」

ゲームセンターの喧騒の中、郡は、静かに語りだす。

「子供の頃から、周りは全部敵に見えてた……そんな周囲から切り離せられるのがゲームだけだった。だけど、そんな事に付き合ってくれ友達なんていなくて、だからずっと一人で遊ぶ事が多かった。だけど、そんな中で、勇者の御役目について、高嶋さんたちに出会った。そして、その日から、私は、初めて友達と呼べる人たちが出来た。だけど、ここまで激しく遊んだ事は無かったわね……私が誘わなかったっていうのもあるけど、それでも、こんな風に遊んだ事はなかった」

「そうか……」

「だから、まあ、感謝しているわ。ありがとね」

「そいつはどうも」

そこで、おもむろに立ち上がる不道。

「それじゃあ、最後にあれでもやりますか」

千景が指差した先にあるのは――

「ダンスダンスレボリューション・・・持つかしら？私・・・」

ダンスダンスレボリューション、十字にある矢印パネルを画面に現れた矢印と同じものを踏んでスコアを競う音ゲーである。

「なんなら最低難易度でもいいぞ。当然俺は最高難易度だけだな」

「カッチーン・・・いいわ、私も最高難易度でやるわ」

「オーケー。それじゃ始めましょうか！」

選択した曲は、激しいロックミュージック。

メロディがスピーカーから流れだす。

気付けば周囲には人だかりが出来ていた。

他のゲームで目立ち過ぎた影響だろう。

口々に、「さっきの二人が今度はダンスレボやるってよー」「見ようぜ見ようぜ」「どんなスコアが出るか」などなど言っている。

そうして始まるダンスレボ。最初は歌詞と共に、メロディ部分にも関わらず、とてつもない量の矢印が上ってきて、しかしそれを今までの経験から培ってきた反応速度で対応していく二人の千景。

同じ名前を持ち、かつ、同じ趣味を持った二人は、まさしく息ぴったりにノームスでゲームを進めていく。そして入るサビの部分、メロディ部分とは比較にならないほどの量とタイミングの矢印が出現し、そしてそれを汗だくになりながらも対処していく。

その激しさのままに、二人は全力でそれにのめり込んでいく。

そして、最後の一発にて、思いつきそれを踏みしめた。

そして画面に現れたのは――

『!!FULL COMBO!!! CONGRATULATION!!!』

かなり際どかった。しかし、やり遂げた。

かなり難しく、そして体力的にも限界。その上での、フルコンボ達成。

思わず顔を見合わせる二人。そして、体の中から溢れ出た感情とともに、

「っしやあ!!」

パァンツ！という景気の良い音と共に、二人は互いの右手を叩き合った。

ハイタッチ、とも言えるそれは、まさしく二人の抑えきれない感情の現れであるといえるだろう。

そして、周囲も初めて出たダブルフルコンボに歓声を上げていた。その祝福の中で、二人はその熱を噛み締めるかのように、フルコンボと表示される画面を見ていた。

「ふいー、すっかり遅くなったな」

「そうね」

夕焼け色に染まる空の下、不道と郡は街頭が付き始めた街の中を歩いていく。

「久しぶりね。こんなに熱くなつてはしゃいだの」

「あー、俺も。こんなに楽しかったのは生まれて初めてだ」

勇者部の皆と過ごすものとは違う楽しさ。とあるちっぽけなもの、の最高得点を取るための努力からの喜び。

それは、まさしく『ゲーマー』である二人だけの喜びと言えよう。

「もし・・・」

「ん？」

「もし、昔、私に友達が出来ていれば、こんな風に遊ぶことが出来ていたかしら？」

「・・・」

それは、切望にも近い、彼女の本心なのだろう。

とてもではないが、客観的な『普通』とは程遠い生活を送ってきた彼女だからこそ言える、彼女だけの本心。

そして、それは不道にも分からなくはない事だった。

彼も、とある洗脳のせいとはいえ、いじめられていた経験があるのだから。

「・・・過去の話はやめにしよう」

「え・・・？」

「過去を思い返した所で、その時間に戻れるわけじゃない。必要なの

は今。これから起こる事だ」

不道は、郡の頭に手を置いた。

「今の貴方は、不幸なのか？」

「・・・」

頭の上に置かれた手を眺め、そして、目を閉じて、今の自分にあるものを数えてみる。

やがて、そつと微笑んで、

「いいえ、とつても幸せよ」

そう、短く、そう答えた。

「そうか。よつし、それじゃあ帰るか。もう準備できてると思うからな」

「え？準備つて・・・」

破裂音が炸裂する。

『ぐんちゃん！』

『千景』

『千景さん』

『お誕生日おめでとう!!』

「・・・」

クラッカーから飛び出した紙吹雪を被りつつも茫然とする郡。

「・・・え？」

「忘れたのか？今日はお前の誕生日だろ？」

後ろから不道が押す。

「もう焦ったわよ。千景君、遊び過ぎて完全にこの事が頭から吹っ飛んでたんだから」

「う・・・それは申し訳ない」

「僕が電話をしなければいつまでも忘れたままだっただろ？」

美森と翼の同時攻撃を喰らいつつ、郡を楔の隣に立たせる。

「ほら、今日の主役は貴方なんだから。もつと笑顔になりなさい」
「・・・そういう貴方も、主役でしょう？」

「ふふ、そうね」

楔のつかみどころのない笑みを恨めしく思いつつ、それでも、皆が祝福してくれている今に、郡は感謝をする。

今、この光景があることを、感謝して。

余談、誕生日会の中で、園子ズが小説のネタにしようと出かけようとしていた所を辰巳に阻止という名の鉄拳制裁の隙について若葉が抜け出し、そしてその若葉をひなたが縛り上げた事が、いたずら好きの美紀の口から放たれ、それによつて郡が若葉にとてつもなく冷たい避難の目を向けたのだった。

一方で、不道は後日、結城と埋め合わせの為にデートをする事となった。

彼岸花の章 《リコリス》 不道千景

四国。

そこにある、とある中学にて、一人の少年が廊下を書類らしき荷物を抱えて歩いていった。

行き先は職員室。

「いやあ、悪いね来てもらって」

「いえ、大丈夫です」

いわゆるスキンヘッドという髪型の教師に書類を渡す少年。

「それで、修理して欲しいものとは・・・」

「ああ、こつちだよ」

来てみると、教師が箱から出したのは拳銃——ではなく、マラソンや徒競走などに使われるピストルだ。

「引金を引いても撃鉄が動かなくてね」

「貸してください」

少年は淡々とした口調でそのピストルを奪うように、しかし穏やかに取る。

そして、物色した後、懐から小さな工具箱を取り出し、そのピストルを分解しにかかる。

「ふむ・・・どうやら、詰まっているようですね。・・・これでいいでしょう」

試しに引金を引いてみる。

すると、撃鉄がガチンツ！と音を立てて振り下ろされる。

「おお、ありがとう。助かったよ」

「他に壊れていたり、修理して欲しいものは？」

「いや、他には無いよ。今日はもう帰っていいよ」

「そうですか」

微笑んでそう返し、職員室を出ていく少年。

少年は、廊下を歩く。

自分の教室に戻れば、そこには誰もいない。それもそうだろう。放課後で誰もが部活やら帰宅やらをしているのだから。

まあどうでも良いが。

少年はその中で窓側の一番後ろの席に向かう。そこに置いてある鞆を手に取り、肩にかける。

特に気にする物もなく、少年は校舎を出る。

グラウンドではサッカー部やら野球部やらが試合や練習をしており、なんとも騒がしい。

そんな事を気にせず、少年は校舎を出る……事はせずに何かを思い出したかのように踵を返した。

「忘れてた」

そうぼやき、少年は、走り出す。

彼の名前は『不道千景^{ふどうちかかげ}』。

讚州中学二年。特技は機械の修理。趣味はゲーム。そして、『勇者部』の部員の一人である。

幼稚園にて。

「これで、大丈夫でしょう」

と、電気のついたテレビを見て、そう言う千景。

「ありがとうね」

「いえ、これが俺の仕事ですから」

千景はそう返し、幼稚園の職員室を出る。

「そろそろ終わってる頃だとおもっけど……」

「まあ、この騒ぎようなら……」

と、ある教室の扉をゆっくり開ければ……

「勇者キーツク！」

「ええええ!?!」

そんな騒がしい声が聞こえ、何かがぶつかるような音が響いた。

そこでは、赤毛でポニーテールの少女が、金髪のツインテールの少女の片手におさまっているパペットに自分のパペットをぶつけていた。

「ちよ!?!それキツクじゃないし、というか話し合おうって言っていた所じゃない!?!」

「だってえ……」

「こうなったら喰らえ!魔王ダブルヘッドバット!」

「ぐふお!?!」

金髪の少女の方が反撃といわんばかりに魔王パペットを赤毛の少女の勇者パペットにぶつける。

「やれやれ……」

呆れた様子で千景は、教室の窓側にて、机を置いてBGMなどを担当している二人の少女の元へ向かう。

「樹、BGM」

「あ、千景先輩!」

「千景君、修理終わったの?」

パソコン前に座っている、金髪の少女と同じ色の金髪をしたショートカットの少女は『犬吠埼樹』。讚州中学一年。

一方で、車椅子に座っている黒髪の少女は『東郷美森』。讚州中学二年。過去に交通事故に遭い、両足が不自由になった上に記憶にも障害がおきているらしいのだが、その他に問題はない。ちなみにハイスペック。

「ああ。そんな事より、樹」

「樹、ミュージック!」

「あ、はい!ええつと、じゃあこれで!」

と、樹がパソコンを操作する。

すると、スピーカーから魔王のテーマが流れ出す。

「ええ!?!ここで魔王テーマ!?!」

「フハハハハハ!ここが貴様の墓場だあ!」

「なんか魔王がノリノリにいい!？」

なんだか盛り上がって来た。

ちなみに、魔王役の金髪の少女は『犬吠埼風^{ふう}』。名前の通り、樹の姉だ。三年生だ。ちなみに、この讚州中学『勇者部』の部長でもある。

そして、勇者役の赤毛の少女は『結城友奈^{ゆうきゆうな}』だ。二年生であり、美森の一番の親友であり、この部のムードメーカー的存在でもある。特技に父親からは武術、母親からは押し花を教えられている。

「皆、勇者を応援して！」

ここで美森が機転とばかりに園児を先導する。

「ぐーで勇者にパワーを送ろう！がーんばれ！がーんばれ！」

美森に続いて園児たちが頑張れコールをはじめめる。

「ぐーおお!!?皆の声援が私を弱らせる〜！」

「お姉ちゃん、良いアドリブ！」

なんともそれっぽく演じる風。

「今だ！勇者パーンチ！」

「いつてえー!？」

すかさず友奈が拳（勇者パペット）で魔王（パペットの方だよ）をぶん殴る。

すると魔王はぐったりとし、勇者がそれを支える。

「これで、魔王も分かってくれたよね。これでもうお友達だよ」

「よし、締めろ」

千景がそう言うと、美森はナレーションを再開する。

「と、いう訳で、魔王は改心し、祖国は守られました。めでたしめでたし」

すると園児たちの方から歓声があがり、無事に幼稚園での劇は終了したのである。

そんなこんなで、校外活動が無事終えた勇者部一同。

勇者部とは、福祉的ボランティアを率先してやる事を中心に活動する部であり、その実績はなかなかのもの。

人助けはもちろん、ゴミ拾いやそういった公共の場を綺麗に掃除し

たりする事が主な仕事であり、簡単に言ってしまうえば、困っている人を助ける部活だ。

そこに、機械修理担当である不道千景は入部している。

親はいなく、小学校を卒業する時まで施設で暮らしていたのだが、ある日、施設の人間からいきなり施設を追い出され、ついでに施設を出てアパートに住む事になり、現在の讃州中学に入る事になったのだが、ここでクラスメイトだった結城友奈に誘われ、現在に至るのだ。ちなみに、入部期間ギリギリでの入部だった。

そんなこんなで、昨日の演劇は無事、成功したわけだ。

「起立、礼。神樹様に、拝」

「はい、さようなら」

挨拶が終わり、放課後となる、讃州中学。

その二年の教室にて、千景は教科書などを通学バックの中に入れて、肩にかける。

「千景。今度、うちのテレビなおしてくれよ」

すると前の席の男子からそういわれる。

「ああ。分かった」

「今日も部活なのか？」

「そうだ。『勇者部』だ」

「いつ聞いてもおかしな名前だよな」

「そうかもな。それじゃあ」

と、千景は教室を出ていく。

「はー、羨ましいなあ・・・」

「だよねえ」

先ほどの男子生徒がそうぼやき、隣にいた男子がそう答える。

「何せ、男子部員あいつだけなんだもんな」

「昨日は大成功だったねー」

「ギリギリだっただろオイ」

廊下にて、千景と友奈、そして東郷は真っ直ぐに自分たちの部室に向かっていた。

「友奈、東郷、そして千景はいりまーす」

『家庭科準備室』という看板の下にある『勇者部部室』と書かれた部屋の扉を開ける。

「おー、来たかお前ら！」

「友奈先輩、東郷先輩、千景先輩、こんにちは」

先に来ていた風と樹がこちらに気付く。

「昨日は大成功でしたねー」

「どこがよ・・・ほぼNGだったじゃない・・・」

「しかもそれ本日二度目の科白せりふだぞ」

風と千景のツツコミを受けてもめげない友奈。

「まあいいか・・・今日のミーティングを始めるよ」

黒板には、いくつかのネコの写真と、子猫の飼い主探しの文字がある。

「未解決の飼い主探しの依頼がどっさり残ってるわ」

「結構来ましたね」

「いっぱい来たね・・・」

「という訳で、今日から飼い主探し強化月間とするわ。東郷、ホームページの強化は任せたー」

「携帯からもアクセスできるようにモバイル版も作っておきます」

美森が心強くうなづく。

「私たちは・・・」

「どうしましょう・・・」

友奈と樹が唸る。

「お前ら、海岸の掃除に行くだろ。そこで聞き込みしてみたらどうだ？」

千景が修理依頼されている玩具の山を修理しながらそう言う。

「おお！千景君それナイスアイデア！」

「いいと思います!」

「思い立ったが吉日だ。実践してみると良い」

千景は友奈たちに視線を向け、そう微笑む。

「うし、これで全部か・・・」

「強化、終わりました」

『早ツ!』

ちなみに東郷の強化したホームページはかなり分かりやすかった。

うどん屋『かめや』にて。

良い音を立ててうどんをすすする風。

「——はあ・・・美味しい・・・」

「先輩、それ三杯目ですよ・・・どんだけ食う気なんですか・・・」
かけうどんを食べながらドン引きする千景。

「その脂肪は一体どこへ・・・」

「千景え?その話は女性には禁止事項よ?」

「ハイスママセン」

風の黒いオーラに気圧され黙り込む千景。

「ところでさ、文化祭の出し物の事なんだけどさ」

「あれ?もうそんな時期でしたっけ?」

友奈がそう問う。

「夏休みに入る前に考えておきたいのよね」

「去年は間に合わなかったですものね・・・ずずー」

美森がうどんをすすする。

「夏休みに入る前に、色々考えておきたいのよねー」

「確かに、常に先手で有事に備える事は大事ですものね」

「今年は猫の手もあるしね」

「私!？」

樹の頭をわしゃわしゃと撫でまわす風。

「うーん、せっかくだから一生の思い出になるものが良いよね」

「なおかつ、娯楽性の高い、大衆がなびくものでないと」

「ついでに、衝撃的かつ他者の考えつかないようなものが良いよな」

「でも何をしたら・・・」

「それを皆で考えるのよ。はい、これ宿題。皆考えてくる事」

『はい』

「よし、すみませーん。おかわりー」

『え!?!』

「ついに四杯目突入!?!」

風の胃袋はまだ入るようだ。

うどんを食べ終わり、全員と別れた千景。しかしスマホにダウンロードされたSNSアプリで会話は続けていた。

Yuna：日曜どうします？

Fu：ゴロゴロするゝ

Yuna：私もゝ

東郷：トドですか!?!

Chikage：ゴロゴロしてるといずれ牛になるぞ

Yuna：牛!?!

Yuna：本当!?!

東郷：そうよ。ちゃんと運動しないと

友奈の反応や美森の対応に思わず笑みがこぼれる。

「前までは、こうはいかなかっただろうな」

入学したての頃のまま、いや、友奈に出会わなければ、一生、人を信じずに、独りぼっちなままだっただろう。

携帯をしまい、自分が住むアパートの階段を上がる。

そして、鍵を開ける。

「ただいま」

返事は、無い。

親はすでに死去、しばらく施設生活の上に、家族と呼べる存在がい

ない。

低い机に鞆を置き、ソファに座って、机の上に置いてあったゲームのポータブル端末を手に取り、電源を入れる。

ふとスマホが鳴り、取り出して見て見る。

それは個人で送られてきたメール。

送り主は友奈からだ。

それを見た瞬間、気分が高揚するような感覚を感じて、慌てて内容を見る。

『今何してるかな?』

内容はそれだけ。

だが、それだけでも返信するには十分なものだ。

『ゲーム中でござんす』

返信はすぐに帰ってくる。

『いつも通りだね』

『まあな』

『飽きたりしないのかな?』

『飽きない。というか暇つぶしにこれ以上のものはない』

『文化祭の出し物、何にするか決めた?』

『いんやまだ』

『私もまだー』

『何にしようか』

『そうだな・・・というか、相談するなら東郷でも良いんじゃないのか?』

『えー、君に相談しちや、ダ・メ?』

『わざわざ色っぽく言うな。それとメールじゃそれほど破壊力はねーぞ』

『うー』

『まあ、だめじゃないけどさ』

『ペア! (*^▽^*)』

『わざわざ感情を文字で表現しなくてよろしい』

『あ、お母さんに呼ばれた』

もう終わってしまおうのか。

そう思うと心なしか寂しく感じる。

これがメールで助かった。だと声音で感情を読み取られてしまうかもしれない。

何せ、気遣いが上手い子だから。友奈は。

『それじゃあ、また明日な』

『うん』

平和な一日が続けばいい。

平和な日常が続いて欲しい。

ただそれだけの願いは。

次の日、いとも簡単に打ち砕かれた。

勇者になった日

翌日。

讃州中学。

千景がいる教室にて。

千景と友奈、そして美森の教室は基本的クラスは別々だ。

まあ、友奈と美森が同じクラスで千景だけが違うクラスという感じだ。

しつかりと授業を聞き、ノートを取っていく。

(文化祭の出し物、結局決まらなかつたな……)

ただその内心は昨日、部長たる風から言われた文化祭の出し物について考えていた。

「うーん……」

先ほどノートを取っていると云ったがあれは嘘だ。

ノートには文化祭の出し物についての案が色々と書かれていた。

「ダメだ……良いのが思いつかん……」

唸る千景。

——その時だった。

突如、千景の携帯が騒がしくブザーを鳴らす。

「なっ!？」

驚く千景。

「どうした不道? 授業中は携帯の電源は切っておく決まりだぞ?」

「す、すみません。今すぐに……ん?」

ふと鞆からスマホを取り出し、その液晶画面をのぞいた千景は首を傾げた。

その画面には、こう書かれていた。

樹海化警報

「樹……海化?」

訳が分からない。

だが、そんな事を考えるよりも、もっと大きな『異常』に気付いた。
「あれ……?」

周囲が、まるで時間が止まったかのように動いていなかった。
鳥も、人も、物も、何もかもが止まっていた。
静止、していた。

「どうなってるんだ……」
立ち上がる。

「そうだ、友奈……！」
思い出し、走り出す。

だが、それよりも速く、窓の向こう側から差し込んだ光が、行動を阻止する。

「なんだ!?!」

眩い、虹色の光。それは壁となり、世界を書き換えるかのように侵食していく。

「く……!?!」

その光に思わず腕で顔を庇う。

やがて、その光が収まり、千景は手をどかす。

「な、なんだよ……これ……」

そこは、先ほどまでいた教室ではなく、巨大な根が張り巡らされた空間だった。

その色は様々な色をしており、あまりにも巨大で、自らが立っている足場でさえ、根の一部。

とにかく、広大だ。

「どうなってるんだ……友奈たちは……」

千景は、手に持っていた携帯の液晶画面を取り出す。

「なんだこれ……」

その画面は変わっており、アプリはたったの三つ。

試しに、マップらしきアプリを起動してみる。

「あ……」

そこには、複数の座標を示す表示が出ていた。

「友奈……!?!」

その座標には、結城優奈、東郷美森、犬吠埼風、犬吠埼樹の四人の名前があった。

そして、不道千景の名前も。

千景は走り出す。

目的は当然、友奈の元。傍には東郷もいるうえに、風と樹の二人もその二人の元へ向かっているため、おそらく一緒に合流できるだろう。

「友奈！」

「あ、千景君！」

友奈を見つめる。

それと同時に風や樹も合流する。

「良かった、皆携帯を手放していたら見つけられなかった……って千景!？」

風が安心するようにつぶやいた、が何故か千景を見て驚く風。

「ケイタイ?」

「このマップアプリの事ですか?」

「あ……そ、そう、その隠し機能はこの事態に陥った時に自動的に機能するようになってるの」

だが千景と友奈はそれを気にした様子はなく、その問いに風は慌てて対応する。

「このアプリにそんな機能が……」

美森がそう呟く。

「これ、風先輩に入れろって言われたアプリですよね?」

「風先輩、何か知ってるんですか?ここがどこなのかも」

美森の言葉に、風はしばし俯き躊躇うと、やがて観念したかのよう
に口を開いた。

「みんな、聞いて。実は私……大赦から派遣された人間なんだ」

この外の世界は、死のウイルスによって、この四国以外の全ての国
や土地の生命体が死んだ。

では、何故この四国だけは無事なのか。

その理由は、三百年前に、神樹と呼ばれる木の加護によって、その

ウィルスの侵攻を塞ぎ止め、どうにかこの四国だけは救ったそうだ。それから三百年。生き残った人類はこの世界で何の不幸もなく暮らしていけている訳なのだ。

つまり、神樹とは信仰すべき絶対的存在であり、大赦とはその神樹を祀っている機関だ。

というか、この四国を治めている最高機関と言っても良い。

「樹ちゃんは知ってたの?」

「ううん、はじめて・・・」

「当たらなければずっと黙っているつもりだった・・・だけど、私の班・・・讚州中学勇者部が当たりだった」

「その班とか当たりっていうのは一体・・・」

「今見えてるこの世界は、神樹様の結界の中なの」
「なら、悪い所じゃないんですね」

友奈が安心するように言うが、風の表情は浮かないままだ。

「ええ・・・でも、神樹様に選ばれた私達はここで敵と戦わなければならぬ。ここには、私達以外には、存在しないから」

「敵・・・?」

千景が首を傾げる。

「あの・・・この乙女型っていう点はなんですか?」

美森が、携帯の画面に表示されている、自分達以外の点に気付く。

「・・・来たわね」

風が見据える先に、それはいた。

まるで、映画の怪獣の様な、異形の化物が、こちらに向かっていった。足はなく、どういう訳か浮遊している。

「敵ってまさか・・・あれ・・・ですか・・・?」

友奈が、震える声でそう聞く。

「バーテックス。世界を殺す為に攻めてくる、人類の敵よ」

風が、そう言う。

その間にも敵、バーテックスはこちらに真つすぐ突き進んでくる。

バーテックス
「頂点……」

「世界をコロスって……」

千景がバーテックス、『ヴァルゴ・バーテックス』を睨みつけ、友奈はそんなまさかと言った表情でそう呟いた。

しかし、突如、千景の頭に鋭い痛みが走る。

「ツツ!？」

それと同時に、脳裏にどこかの風景が映し出される。フラッシュバックする。

「お姉ちゃん、今までずっと一緒だったのにそんな事聞いた事ないよ……」

「今初めて話したからね」

泣きそうな樹をなだめるように微笑む風だったが、すぐに表情を引き締め、ヴァルゴを睨みつける。

「バーテックスの目的は、この世界の恵みである神樹様に辿り着く事。そうなった時、世界は、死ぬ」

ごくり、と誰かがつばを飲み込んだ。

「そんな……あんなのと戦えるわけ……」

「でも、やらなければならぬ。ですよね、先輩」

「ええ。大赦の調査で、私達がもつとも適性がある事が分かったんだ。戦う意思を示せば、このアプリの機能がアンロックされて、神樹様の勇者になる」

その時、敵が尾の部分から何か小さな球体が吐き出される。

「な!?何か来るぞー!」

千景が叫ぶが遅い。

その球体は彼らの近くに着弾すると、爆発を巻き起こす。

だが、被弾した者はいない。

「友奈!東郷を連れて早く逃げて!ここは私がどうにかする!」

「わ、分かりました!」

「樹も一緒に!」

だが、樹は姉から離れようとしなない。

「ダメ!お姉ちゃんを残していけない!」

その行動に目を見張る風。

「ついていくよ。何があっても」

樹が、真つすぐに風を見つめる。

「樹……」

「どうすればいいの?」

真つ直ぐこちらに視線を向ける樹。

それに諦めたかのように微笑む。

「……私たちは神樹様に守られているから、大丈夫。樹、続いて!」

「う、うん!」

スマホの画面に表示されているボタンを押す二人。

その姿は、大きく変わり、服装が変化していた。

風の姿はオキザリスを想起させる黄色の装束、

樹の姿は鳴子百合を想起させる緑の装束へと変化する。

風の手には自らの身長もありそうな無骨で巨大な大剣が握られて

おり、樹の片手首には、わか状の飾りがあった。

なんとも勇者らしい服装の風に対し、樹は賢者のような恰好になっ

ている。

ふと、彼女たちの目の前に、謎の生物が出現する。

「わ、ナニコレ?」

「この世界を守ってきた力、『精霊』よ。神樹様の導きで、私たちに力

を貸してくれる攻撃の力!」

駆け出す風。

「戦い方はアプリが教えてくれるわ!」

「わー、待ってよお姉ちゃん!」

一方で、遠い場所へ退避した千景たち。

「本当にここには私たちしかいないみたい……」

「……」

美森がそうつぶやくなか、千景は周囲の光景を見つめていた。

(……俺は……この場所を知っている……?)

まるで、かつてこの場所で戦っていたような、そんな懐かしい感覚。だが、千景にそのような記憶はない。

生まれてこの方、親の顔も知らず、施設で暮らし、こんな場所に来たなんて記憶はない。

ましてや美森のように記憶喪失なわけでもない。

もしそうなら、その空白の部分に何かあるのではないかと思うが、生憎と千景にその様な事はない。

だが、確かに千景はこの場所を知っているし、どういう訳か、あの怪物のことを知っている。

何故、その様に思うのか。

千景には分からなかった。

「風先輩！そっちは大丈夫ですか？バーナントカつてのと戦っているんですか？」

『こっちは樹と二人でなんとかする。そっちこそ、東郷と千景は大丈夫？できるだけ離れてて！』

風の叫び声が、友奈の携帯越しに聞こえる。

「……ごめんなさい……私……怖くて……できない……」

美森が俯きながらそう言う。

「東郷……」

「東郷さん、いいよそんなの。誰だって怖いからね？さあ、早く安全な場所に行こう！」

友奈がそう元氣付けるように言う。

『友奈……東郷……千景……黙っていて……ごめん……』
風からの謝罪。

『三人は必ず、アタシが助ける！』

そんな威勢の良い声が聞こえた。

「……風先輩は、皆の為にと思って、ずっと黙っていたんですね。こんな大変な事、一人でずっと抱え込んで……それって……勇者部の活動目的通りじゃないですか！風先輩は悪くない！」

友奈がそう言い放つ。

だがその直後、向こう側で爆発が巻き起こる。

「風先輩……樹ちゃん……!?」

それを見た友奈の表情が強張る。

(助けないと……)

そう心の中で呟く千景。

だが、体が動かない。

「くそ……なんで……」

あの怪物が、怖いのではない。

そう、これは、もっと別の――。

「お願い逃げて！友奈ちゃんが死んじゃう！」

「ッ!？」

美森の悲鳴によって現実に取り戻される千景。

そこには、今まさにヴァルゴが放った爆弾が友奈に直撃するところだった。

「友奈ちゃん！」

「友奈アア！」

爆弾が、友奈に直撃する。

爆風と土煙が舞い、視界が遮られる。

思わず、腕で顔を守る二人。

やがて風が収まり、目を開けてみると、そこには、拳を突き出し、佇む友奈の姿があった。

その拳には、桜色の籠プロテクター手が装着されていた。

「……友奈ちゃん？」

「友奈……」

「……嫌なんだ……」

友奈の姿が変わる。

爆弾が迫る。

「誰かがが傷つく事。辛い思いをする事」

それを拳、脚を使って迎撃し、すべて撃ち落とす。

「みんながそんな思いをするくらいなら……」

髪の色が、赤から、鮮やかなピンク色になる。

「私がかんばる！」

友奈の姿が、山桜を想起させる桃色の装束へと変化する。

その姿は、まさしく勇者を名乗るに相応しい。

「ッ——！」

その友奈の姿を見たとき、千景の脳裏で、懐かしい情景が映し出される。

俺の^{わたし}大事な——

何をしている？

友奈が飛び上がる。

その拳を振り上げる。

「勇者————パアアアアアンチ！」

そして、その拳をヴァルゴに叩きつける。

その瞬間、ヴァルゴの体の一部が吹き飛んだ。

「友奈ちゃん……」

「……あれじゃダメだ」

「え？」

ふと、千景がつぶやく。

戦え

まるで、自分の血に刻まれた記憶が駆り立てるように。

戦え

細胞に書かれた思いが背中を押すかのように。

戦え

いくつもの世代を渡って、受け継がれてきた遺伝子が、鼓舞するかのよう。

戦え

そう、これは、ずっと昔、不道千景俺が生まれるずっと前、成し遂げる事の出来なかつた悲願。

戦え

悲しい思い出がどうした。一度諦めたからってなんだ。情熱を燃やせ。ただ一人思う者のために前へ進め。

戦え

武器を取れ。俺は、^{わたし}その為だけに、ここにいるのだから！

戦え、友達を、仲間を、彼女の幸せを守るために。

かつて自分を愛してくれた者たちが守ったこの世界を壊す者たちを、すべて刈り尽せッ!!

「千景……くん……?」

美森がそう、震える声で呟いた。

千景の姿は、いつの間にか変わっていた。

紅黒いジャケット、黒いアンダーウェア、紅黒い長ズボン、紅の指ぬき手袋。

そして、その肩には、まるで死神の鎌のような、赤い大鎌が担がれていた。

その姿は、彼岸花を想起させる。

「千景……くん……」

「……下がってろ」

千景は歩き出す。

「みんな、下がっていてくれ」

『千景くん?』

『千景?』

『千景先輩?』

返答、待たずに跳躍。

とても手に馴染む。まるで以前にもこの鎌を持っていたかのよう
に、落ち着くし、そして、懐かしい。

これならば、いける。

そして、私の鎌ではなく、俺過去のこの鎌でできる事をやる。

それは――。

鎌が、変形する。

それは刃に沿って割れ、そこから、半透明の光の刃が出現、膨張す
る。

その刃は、反対方向にも伸び、両刃の鎌へと変形する。

「ハアアアアアアアツツ!!」

そして、その刃をバーテックスへ振り下ろす。

その一撃は、バーテックスを斜めに両断する。

「すつごお……!」

「すい……!」

「千景くん……!」

友奈、風、樹の三人が歓喜の声をあげる。

無事に着地した千景は、鎌を肩にかつき、そしてヴァルゴを見据え

る。

「——世界は壊させない。乃木さんたちが守ったこの世界を、壊させないッ！」

過去私に出来なかつた事を、俺が今成し遂げる為に、

おれ／わたし不道千景は、勇者になる。

彼岸花の勇者

千景が与えた一撃は、確かにヴァルゴ・バーテックスの体を両断した。

だが、それでも再生していく。

「えええ!? また治っちゃうよ!」

「どうすればいいんだか・・・」

「えつと・・・風センパーイ!」

「バーテックスは『封印の儀式』っていう特別な手順を踏まないと絶対に倒せないの! 説明するから避けながら聞いてね!」

「ふえええ!? そんなハードだよ・・・!!」

風の指示を受け、回避に徹する三人。

やがて説明を聞き終え、行動に移す。

「俺が動きを止める、他三人は封印の儀式をお願いします」

「了解!」

「・・・つて千景の奴、なんか急に冷静になってない?」

千景はヴァルゴの前に出る。

そして、勇者化によって強化された身体機能でヴァルゴを攪乱する。いかにも戦い慣れた様子でヴァルゴの攻撃を避けていく。

何やら友奈たちがスマホを見ながら何かを言っている。

あれが祝詞なのだろうか。

と、思った矢先、風が上空から剣を振り下ろす。

「おとなしくしろコンニャロオ!」

「ええ!? それでいいの!」

「魂込めてれば言葉は問わないのよ」

「早く言っつてよお姉ちゃあん・・・!」

「そんな簡単に済むなら早く言えよ・・・てなんか出たな・・・」

ふと、ヴァルゴの下に大きな魔法陣らしきものが出現した途端、ヴァルゴが何か四角推の様な何かを吐き出した。

「封印すれば『御霊』がむき出しになる。あれはいわば心臓よ!」

「ならあれを破壊すれば」

友奈が大きく跳躍し、その御霊を上空から落下の威力を使って拳を振り起す。

もの凄く大きな音が鳴る。が。

「かったあああああ!!? 固すぎるよコレエ!!」

「友奈のパンチで壊れねえほどに固いのかあれ・・・」

「ん? お姉ちゃん、なんだか数字が減ってきてるけど・・・」

樹の言葉通り、なんだか陣の中心に描かれている漢数字が減少している。

「それ、アタシ達のパワー残量! それが無くなるとコイツは二度と倒せなくなるわ!」

「ええ!? それじゃあ・・・」

「こいつが神樹様に辿り着き、全てが終わる!」

風が飛び、大剣を振り上げる。

「喰らえ! アタシの女子力を込めた渾身の一撃をオ——ツ!!」

それが御霊に直撃、僅かにヒビを入れる。

その時、周囲の巨根が風化を始めた。

「これは・・・枯れてる?」

「始まった! 長い間封印していると樹海が枯れて、現実世界に影響が出るの!」

「だったらさっきのでもう一度だ」

今度は千景が飛ぶ。

電光石火の如き速さで御霊に急接近し、また変形した血色の鎌から光の刃を出現させる。

「ッ!」

大きく左側に振りかぶり、すくい上げるかのように斬り上げる。

千景の渾身の一撃は、見事に御霊を真っ二つにする。

「どうだ・・・!」

そのまま落下、着地する。

砕け散った御霊から、何やら光があふれ出たと思ったら、次の瞬間、ヴアルゴは砂となり、その形が崩れ去った。

「終わった・・・」

「よくやったわ千景——！」

「いて!？」

バンツ!と風に背中を叩かれ、賞賛を浴びる千景。だが、すぐさま周囲は光となって、周囲を包み込んだ。

「ここは……」

「学校の屋上、だね」

気がつけば、千景達は讃州中学の屋上に立っていた。変身もいつの間にか解け、いつもの制服姿に戻っていた。

「一応、終わったのか……」

「そうよ!お手柄だったわね、千景!」

「はあ……ありがとうございます」

なんとも釈然としないし実感もわからない。

ただ、勝ったという事実だけが、そこにあった。

「守れた……」

屋上から街を見渡す。

「そうよ。皆この事に気が付いてないけど、確かにアタシたちは守ったのよ。皆の日常を」

「そうか……なら良かった……」

ホツと胸をなでおろす。

何はともあれ、何事も無く終わったのだ。

これを喜ぶ以外、何も言う事は無い。

「ただ現実の時間は止まったままだから、今はモロ授業中だと思うわよ」

「うえええ……!？」

「それはそれでマズいな……」

風のカミングアウトにげんなりする一同。

ただ、その中で一人、浮かない顔がしていた者が一人。

そして、遠い場所、別の場所にて。

「・・・なんだったんだ・・・」

一人の少年は、先ほど起きた事に困惑していた。

勇者のお役目について

「おい千景！」

「なんだ山田」

「今朝のニュース見たか？」

「今朝？」

「昨日、隣町で事故があつてな。二、三人が怪我したんだと」

「へ、へえ……」

後ろの席の山田からそのような話を吹っ掛けられ、内心ぎくりとなる千景。

それもそうだろう。

その事に心当たりがあるからだ。

昨日、千景は、神樹に選ばれ、勇者となった。

まるで『彼岸花』のように赤い服装となった彼は、人類の敵、バーテックスを倒し、一度は世界を救った。

「アレで終わりなわけがないんだよなあ……」

放課後となり、部室に向かつていた千景。

ぼやきながらも、今朝みた夢の内容を思い出していた。

親の関係が原因でいじめられる私^俺。

そんな中に、彼女だけが手を差し伸べてくれた。

まるで、お日様のような人。

そんな彼女になら、私^俺は心を開いてもいいのかもしれない。

そう、最後の一瞬まで。

私^俺は——

夢はそこまで。

簡潔にまとめしてみたが、実際はなんとも辛く悲しい思い出なのだろうか。親のいない自分には到底理解できないものだ。

ふと目の前に、ガタイのデカイ男子が出てきた。

「ぬあ!？」

完全に上の空だった千景にとっては、完全に不意を突かれる登場。思わず飛び退く。

「おい、なんだその反応は？」

それが相手の気に障ってしまったようだ。

ただ、千景はその相手を知っていた。

「今日は来てたんですね、三ノ輪先輩……」

「仕方無くだ。風の奴がうるさくてな」

「納得です」

その男の名前は『三ノ輪剛』。風と同じ三年だ。

俗に言う不良で、あまり学校に来てはいないらしい。

ただ出席日数はギリギリらしい。

「……」

「? どうかしたんですか?」

「いや……」

ふと、剛は千景を訝しむ様に見つめており、千景はクビを傾げた。

「……なあ、一つ聞きてえんだけどよ」

「なんででしょう?」

「お前、変な所に行かなかったか?」

「え……?」

思わず更に首を傾げてしまう千景。

「なんか、スゲエデケエ木の根っこが張り巡らされているような、樹海

みてえなところなんだけどよ……」

「え……」

今度は絶句。

「いえ……知りませんよ。変な事聞くんですね」

しかしどうにか誤魔化す事に成功する。

「そうか。なんか悪いな、風には言っておいてくれ」

「分かりました」

と、去っていく剛。

「……なんでその事を……」

千景は、拭えない疑問を持ちながら、去っていく剛の背中を見つめた。

勇者部部屋にて。

友奈の頭に、角の生えた牛が乗っかっていた。

「その子なついてるんですね」

「えへへ、『牛鬼』^{ぎゆうき}っていうんだよ。ビーフジャーキーが好きなんだ」

「牛なのに!?!」

「おい友奈」

「何?千景君」

「ビーフジャーキーが好きなのはわかった。けどなんで俺の頭を喰ってるんだこの糞ビーフは!?!」

「へ?・・・ああああ!?!ダメだよ!それ食べちゃだめだよオ!」

いつの間にか友奈の頭を離れ、千景の頭をムツシヤムツシヤと喰っている牛鬼。

それをどうにか引き離れた所で、黒板に何かを書き込んでいた風が振り返る。

「さてと、まずは皆無事でよかったわね」

「その後ろの・・・もしかして昨日の事について説明してくれるんですか?」

「そ、話しが早くて助かるわ」

風曰く。

バーテックス。

外から来る、人類の天敵。現代兵器は通用せず、全部で十二体いるらしい。

その目的は、神樹を破壊し、人類を滅亡させる事。

以前は追いつ返すのが精一杯だったらしいが、大赦が、神樹様の力を借りて特定の人物を勇者へと変身させるシステムを作り上げた。それが『勇者システム』。

勇者は、バーテックスに対抗する唯一の手段。

その為、大赦は勇者を全面的にバックアップするらしい。

注意事項として、樹海が何かしらのダメージを受けると、現実にも何かの災いとして影響する事がある。

その為に、千景たち勇者部が頑張らないといけないのだが。

「その面子も、先輩が意図的に集めた面子だったという事なんですよね」

それに対し、風は申し訳なきように答える。

「・・・そうだよ。適正値が高い人は分かってたから。神樹様をお祀りしている大赦から指令を受けてきたの。この地区の担当として」

「知らなかった・・・」

「黙っててごめんね」

樹の事に、謝罪する風。

「一応、次はいつ来るんですか?」

「明日かもしれないし、一週間後かもしれない。もしかしたら一か月後かもしれない。だけど、そう遠くはないはずよ」

「そうですか・・・」

千景は背もたれに大きくもたれかかり、天井を仰ぎ見る。

「・・・なんでもっと早く、勇者部の本当の意味を教えてくださいなかつたんですか?」

ふと、美森が、低い声でそう呟いた。

「友奈ちゃんも樹ちゃんも、千景君も死ぬかもしれないなかつたんですよ」
震える、怒りを込めた声で、そう言う美森。

「……ごめん。でも、勇者としての適性が高くて、どのチームが神樹様を選ばれるか、敵がいつ来るのか分からないのよ。むしろ変身しない確率の方がよっぽど高い」

「そっか、同じような勇者候補が……いるんですね……」

「人類存亡の一大事だからね」

そう、無理に笑おうとする風。

だが、それでも、美森は納得しなかった。

「こんな大事な事、ずっと黙ってたんですか……」

そう言い、美森は出て行ってしまった。

「東郷……」

「私、行きます」

友奈がそれを追いかけるように出ていく。

部室には、風と樹、千景だけが残った。

「……別に、先輩が全部悪い訳じゃありませんよ」

「でも、アタシ……」

「……黙っていたのは思いやりから、でしょう？友奈もそう言ってたじゃないですか」

「……そうね……でも、謝らなくちゃね」

「それは自分でやってください」

「手伝ってくれるんじゃないの!?!」

ショックを受ける風をよそに、千景は懐からゲーム機を取り出す。

「アンタは相変わらずねえ……」

「趣味ですから」

「それが趣味ってアンタはゲーマーか」

「ゲーマーです」

ぬぐつ、と唸る風を他所に、千景はゲームを続ける。

だが、そんな千景を風は先ほどの表情とは一変した様子で千景を見る。

「お姉ちゃん？」

「ん？ああ、なんでもないわよ」

その視線に気づいた樹からどうにか誤魔化す風。

「そう・・・」

「それよりも、どうにか謝る方法を考えなきゃね・・・」

「あ、そういえば風先輩」

「何？千景」

「男の勇者って珍しいんですか？」

千景がなんとなく問うた。

「んー、別にそういう訳じゃないらしいわよ。私たちの前にも勇者はいたみたいだし、その時のグループにも必ず一人はいたらしいわね。まあ、数は女よりも少なかったらしいわよ」

「へえ・・・」

あの微かな記憶の中にも、確かに男の勇者はいた。

「一人だけじゃないって事は、俺以外にも勇者候補はいたんですか？」

その時、風の表情が強張るのを見た。

「ん？」

「お姉ちゃん？」

「えつと・・・それは・・・」

何か様子が可笑しい。

その瞬間、千景のイヤホンから音が聞こえなくなった。

「これは・・・!?!」

画面も動かない。

風たちも異変に気が付いたようだ。

「まさか・・・二日連続・・・!?!」

その風の呟きに答えるように、光が三人を包み込んだ。

皆を守る勇気と世界を殺す者たち

壁の向こう。

そこから、三体のバーテックスがやってくる。

「三体同時に来たか……もてすぎでしょ……」

「あわわ……」

「……」

風の眩きを無視して千景はスマホの画面を見る。

「蟹座^{かに}、蠍座^{さそり}、射手座^{いて}か……ん？」

ふと、千景は、自分たちとは違う点を見つけた。

「この人は……風先輩……」

「ん？どうしたの千景？」

千景の慌てた様子に訝しむ風。

だが、千景が見せた画面を見て、その表情が一変する。だが、その表情は驚きではなく、苦虫を噛み潰したかのような悔し気な顔だった。

「お姉ちゃん、この人って……」

「……やっぱり来てたか」

「先輩……もしかして……この人にも……」

「ええ……適正があるわ」

その点は、真つ直ぐにこちらに向かっている。

やがて、その点の正体が、千景たちの前に現れる。

「おい！風！」

「剛……」

良い体格、鋭く悪い目付き、讃州中学の制服。

風と同級生、三ノ輪剛だ。

「これは一体どういう事だ!？」

「ごめんなさい……でも、説明している暇が……」

剛の怒声に、申し訳なさそうに答える風。

「それにその恰好は一体……」

「三ノ輪先輩、落ち着いて下さい。風先輩、説明は俺からします。だか

「先に行っていてください」

「千景・・・わかったわ。樹、友奈」

「うん」

「分かりました。それじゃあ、行ってくるね、東郷さん！」

「あ、友奈ちゃん・・・」

「おい！風・・・！」

行ってしまう三人。

その時、風が剛のほうをちらりと見た時、その顔は、悲しみにあふれていた。

「なんなんだ・・・」

「三ノ輪先輩」

「説明はしてくれるんだらうな？」

「ええ。かくかくしかじかなんです」

説明を終える千景。

「バーテックスが神樹にたどり着けば、世界が終わる・・・風は大赦の人間・・・訳が分からん」

「まあ、そうですね・・・」

「それで勇者か・・・つまり、俺も戦えるという事なのか？」

「そのはずです。アプリはインストールしていますか？」

「なんかしらんが入っていたな。風の奴、こっそり入れやがったな・・・」

剛が自分のスマホを取り出し、そうつぶやく。

「だったら・・・」

「友奈ちゃん!？」

「ッ!？」

美森の悲鳴。

見ると、スコープオ・バーテックスが、その尾の針で友奈を突き上げていた。

そのまま千景たちのすぐそばに落ちる。

遠くでは、サジタリウス・バーテックスが放つ光の矢を反射するキャンサー・バーテックスの猛攻に、逃げる一方の風がいた。

「友奈！」

「あ、おい!？」

走り出す千景。

それと同時にスコルピオの針が友奈に迫る。

「間に合えエー！」

間一髪のところ、千景が針を鎌の持ち手で防ぐ。

「ぐう!？」

だが、相当に重いのか、思わず膝をつく。

そのまま連続で針が二人を襲う。

「ぐう、が、!？」

それによってその場を動くことができない千景。

「不道！」

叫ぶ剛。

「友奈ちゃん！」

美森も叫ぶ。

その時、美森の脳裏には、友奈と初めて出会ったときの事が唐突にフラッシュバックした。

まだ、事故によって記憶が飛び、不安で一杯だった時の事。

引越した日、自分に手を差し伸べ、微笑んでくれた、あの日。

「やめろ・・・」

美森がつぶやく。

それと同時に、剛の脳裏にも、ある思い出が浮かび上がった。

妹失って、自暴自棄になっていた頃。

中学に上がるときに、自分一人で生きるなんて突拍子もない事を言っておきながら、なんでもかんでもがどうでもよくなり、学校に行く気も起らず、ただ、気に入らないやつを殴っては金を巻き上げる日々。

そんな中で、あの風と出会った。

夏の暑い日だった。

その時、風に言われた事はよく覚えている。

『アンタの妹は、アンタにそんな風に生きろって言ったの!？』

強烈な張り手とともに、そんな事を言われた。
ただ、その一撃は、剛を目覚めさせるには十分だった。

「・・・俺は勇者部じゃねえ・・・」

針が振り下ろされる。だが、それでも千景はそれ以上を進ませない。
い。

「だけどなあ・・・」

スマホを握りしめる。

「——風の大事な後輩を虐めてんじやねえぞおおおお!!」

「——友奈ちゃんをいじめめるなあああああ!!」

刹那、針が美森を襲う。

だが、その針が、突如へし折られる。

「!?!」

それに、千景と友奈は目を見はる。

そこには、巨大な戦槌を掲げた男が立っていた。

「三ノ輪先輩・・・!?!」

「すごい・・・!」

それは剛だった。

剛の装束は、アフエランドラを想起させる黄色だった。

「私・・・いつも友奈ちゃんに守ってもらってた・・・」

美森が、スマホを手取る。

「だから、今度は私が勇者になって・・・友奈ちゃんを守る!」

その瞬間、美森の姿が光に包まれ、大きく変わる。

アサガオを想起させる青を主とした装束、背中から伸びる帯のようなものが、彼女を立たせる。

「・・・綺麗・・・」

友奈が、そうつぶやく。

「三ノ輪先輩、先ほどはありがとうございます」

「おう」

美森が、片手に拳銃を出現させる。

「不道！俺は風たちの所へ行く！こいつは任せた！」

「分かりました！気を付けて！」

走り出し、風たちの援護へ向かう剛。

だが、それを阻止するかのように、スコープオが再生した針で剛を攻撃しようとする。

その時、その針がまたへし折られる。

「もう友奈ちゃんたちには手出しさせない！」

美森は、拳銃からさらに威力の高い二丁拳銃を顕現させる。

それで連続でスコープオを撃ち抜く。

「すごい、これなら・・・！」

一方で、サジタリウスとキャンサーの攻撃から逃げ回っている風と樹は。

「全く、しつこい男は嫌いだったの！」

「もてる人みたいな事を言わないでなんとかしようよお姉ちゃん・・・」

その時だった。

「オラァ！」

突如、キャンサーが操っていた反射板のうち一つが吹き飛ばされ、それに反射させられていた矢はどこかへ飛んで行ってしまう。

「何!?!」

「よう風！苦戦しているようだな！」

その正体は剛だった。

「剛、その姿・・・」

「剛さん・・・」

「大切な奴が戦ってんだ。俺がやらなくてどうする」

「た、大切・・・」

赤面してもじもじとしだす風。

その様子に苦笑いを浮かべる樹。

「ん？どうした？」

「な、なんでもない！・・・てわあ!？」

突然、どこからともなくスコープオが落ちてくる。

上にながってみる三人。

「そのエビ持つてきたよー!」

見ると、友奈が手を振り、千景が敵を見据えていた。

「サソリでしょ」

「どっちでもいいから・・・」

風の反論に苦笑いをする樹。

ふと、風は視線の先で飛んでくる人影を見つける。

「あ、東郷先輩!」

樹が歓喜の声をあげる。

「遠くの敵は私が狙撃します」

「東郷・・・戦ってくれるの?」

その風の問いを、しっかりとした頷きをもって肯定する。

それに安心したように笑う。

「援護は任せてください!」

「分かった。手前の二匹はまとめてやるわよ!散開!」

「二オツケー!」

「了解」

「不意打ちには気を付けて!」

「はい!」

「なんか私のより返事が良い・・・」

「まあ、元気だせ」

走り出す千景。

目指すは敵、バーテックス。

奴らを倒さなければ、世界は終わってしまう。

かつて、あの人たちが守った、この世界が。

そんな事はさせない。絶対に、させる訳にはいかない。

どんな障害にぶつかろうとも――

それは、偶然だった。

「!?」

振り返り、友奈の方向を見た時、友奈の背後から、何かの攻撃しようとしている瞬間を捉え――

「ッ――!!」

千景は方向転換する。

「千景君!？」

後ろへ追隨していた友奈が驚く。

だが、そんな事お構いなしに叫ぶ。

「避ける友奈ああああ!!」

「え……」

間一髪、というのは流石というべきか。

父親の武術を学んでいるからか、その反応速度は、ギリギリの所で、敵の攻撃を防いだ。

だが、空中だったからか、そのまま吹き飛ばされる。

「きゃあ!？」

「友奈先輩!？」

「樹!避けて!」

「え……きゃあ!？」

樹も、何者かによって吹き飛ばされる。

「オオオ!」

千景は、樹をふっ飛ばしたその襲撃者に対して、鎌を振りぬく。

金属音が響き、その襲撃者を吹き飛ばす。

「風先輩!樹を拾って東郷と協力して敵を倒してください!俺は三ノ輪先輩と友奈で襲撃者を抑えます!」

「ツ……分かったわ、気を付けて!」

「はい!」

「おう任せろ!」

襲撃者は三人。

剛と千景、そして友奈は敵を迎え撃つ。
そして風と樹、美森はバーテックスを倒しに行く。

「テメエら、一体誰だ！」

剛は、その襲撃者に対してそう怒鳴る。

先ほど千景が吹き飛ばした小柄な影とはもう一つ、背の高い男がいた。

その男の片手には青黒い片手直剣が握られており、その眼光は、濁り切っていた。

「・・・お前らが知る必要はない。俺たちはただ、この世界を殺すだけだ」

襲い掛かってくる、藍色のロングコートの男。

「先輩、奴は俺がッ！」

「おう分かった！」

それを迎え撃つ千景。

刃が激突する。

千景の持つ鎌はリーチも重さも、男の持つ剣より重い。だから当然、千景が押し勝つ。

そのまま自分の体を軸に鎌を回転させ、同方向から連撃を放つ。

だが、敵はかなりの反応速度で剣を引き戻し防御。

そこから目まぐるしいほどの剣戟が巻き起こる。

一方で、剛と小柄な人影のほうでは・・・

「いいなあ」

「ああ？」

なんとも子供らしい甲高い声が聞こえた。

だが、剛はその姿を見抜いていた。

この子は女だ。

「何がだよ」

だが、剛にとってそれはどうでもよく、訝しむように聞く。

「だって貴方、遅そうだもん」

この悪気のなさそうな言葉に、かつちーんと頭にくる剛。額に青筋を浮かべ、その子供をにらみつける。

「おいガキ。あんまり調子乗ってつと痛い目見るぞ?」

「そうなのかな? そうなんだ。そうする? そうしよう?」

「?」

なんだか言動が可笑しい。まるで、一人で何人も霊が取り憑いているかのような、そんな一人問答を――

突如、少女の姿が霞んだ。

「ッ!」

「遅いよ。お兄さん」

「な!」

いつの間にか懐に入られていた。

その手に持つのは小さな白いナイフ。しかしその正体は、人体を裂くためだけに作られた、メスだ。

「つおッ!」

無理矢理腰を引き、回避する。

その瞬間、剛と少女のメスの間で黄色い閃光が走る。

「あれ?」

「ぬあ!」

見ると、剛がまさにメスを突き立てられようとしていた腹の場所に、胴体が茶釜という摩訶不思議なたぬきがそこにいた。

「なん・・・ッ」

「あー、そつかあ。そういうえばそうだったね。うん」

「・・・なんなのか知らねえが、どうやらこいつは俺を守ってくれる守護霊的存在って訳だな」

なら話が早い。

守ってくれるなら、遠慮なく振りかぶれる。

「うおらアー!」

巨大な戦槌を振りかぶり、それを一気に叩き落とす。

「アハハ! 遅いよお兄さん!」

「それはどうだろうなあ!」

その戦槌は神樹の根に叩きつけられる。

そして着地した少女の体を吹き飛ばす。

「きやあ!?何!?!」

「ハッハッハ!どうだア!」

戦槌を根に叩きつける事で振動を起こし、それで少女を吹き飛ばしたのだ。

「名付けて遠隔打撃!」
グランドクラッシャー

ただ、ここで注意してほしいのは・・・敵味方構わず巻き添えを喰う事だ。

「うわ!?!」

突然起きた振動によって態勢を崩す千景。

それは敵の男も同じなのだが、どういう訳か早く態勢を立て直し、すぐさま追撃をかける。

「ッ!」

千景は、それを鎌の柄尻を突き出す事で迎撃する。

間一髪のところまで剣をそらすことに成功し、距離をとる千景。

「今の振動先輩ですか!?あやうくやられかけたんですけど!?!」

「え!?!わ、わりい・・・!」

「本当・・・」

千景は自分の右脇腹を抑える。

「勘弁してくれ・・・」

千景は、そう呟き、鎌を構えた。

一方で、友奈の方では。

「ぐう!?!」

両手を交差させ、敵の拳を防ぐ。

靴底を擦り減らしながら、後退させられる。

「うう・・・」

「・・・」

友奈の目の前にいるのは、黒髪の少女。

年齢、身長は友奈とほぼ同じ。

服装は友奈のそれとほぼ同一だが、色は黒であり、細部が違う。

「どうしてこんな事を……」

友奈は、相手が人間だと認識したうえで問いかけた。

「……この世界が憎いからよ」

「え？」

眩く暇もなく踏み込まれる。

「うあ!?!」

どうにか体を引き、敵のアッパーカットを回避する。

「く!」

「ふっ!」

そのまま追撃といわんばかりの正拳突きを放ってくる。

「ううッ!」

回避と防御。

敵が放つ連撃を、一切の反撃無しに回避し続ける。

「……舐めているのかしら?」

「ッ!」

懐に入られる。

少女の右拳が突き出される。

その拳が、友奈の鳩尾に突き刺さる。その寸前、牛鬼が障壁を張り、

その攻撃を受け止め——

——られなかった。

「ぐほッ!」

拳が障壁を突き破り、鳩尾に突き刺さり、友奈を吹き飛ばし、樹海の根に叩きつける。

「ぐほッ!」

腹から何かがこみあげ、喉を通過し、口に辿り着き、吐き出す。

「げほッ、ぐほっ……!?!」

(い、痛い……苦しい……!?!)

四つん這いになり、霞む視界を凝らすと、そこには、赤い液体が飛び散っていた。

「あ……ああ……」

ここまで大量な血を、友奈は初めて見る。

だから、恐怖が彼女を襲う。

殺される

「あ……あぎ……」

立ち上がらないと、早く、立ち上がらなければ……

後頭部から衝撃、そして、顔面への鈍痛。

「うあ……!?!」

「どうして攻撃しなかったのかしらね。もしかして、私が人間だから?」

少女の問い掛けに、友奈は答えられない。

それどころではないのだ。

おそらく、内臓がまずい事になっているだろう。

それほどまでに……まずい。

「なんて愚かな考えなのかしらね。そんな幼稚な思いで、この世界を守ろうだなんて」

「うう……」

「何かを守りたいなら、常に何かを壊して生きていく他ない。あなたが、誰かが傷付くことが嫌なら、あなたは、その手を血に染めなさい。世の中、貴方の抱く綺麗事など通用しないのよ」

意識が遠のく。

少女は、友奈を踏みつけていた足を持ち上げる。おそらく、このまま友奈の頭を踏み砕き、殺すつもりなのだろう。

まずい、このままじゃ……

「友奈ちゃん!」

「ッ!?!」

突然、少女が飛びのく。

それと同時に、先ほどまで彼女が立っていた場所に、光弾が過ぎ去っていく。

「とー……ごー……さん……」

霞む視界の先、美森がこちらにむかって狙撃銃を少女に向かって撃ちまくっていた。

「チツ！」

少女は舌打ちする。

そして、少女は美森の方へ走り出す。

おそらく、彼女の狙撃技術に何かしらの危険性を感じたのだろう。

「くー！」

美森は友奈を傷付けられ激怒していたが、頭は至って冷静。

その為、狙撃の精度は落ちていないが、それでも、彼女を捉える事ができない。

「くう……！」

間隔を狂わせても、動きを予測しても、その悉くことごとくを打ち払い、ほぼ無理矢理突進してきている。

「神風……!?!」

その行動に、目を見開く美森。

とにかく撃ちまくる。

脚を狙って動きを止めようとするも、彼女の手甲によって防がれる。

このままでは辿り着かれる。

残り、二百メートル。

「ダメ……東郷さん……」

友奈は、激痛が走る胸を抑えながら、地べたを這いつくばる様に、あの少女を追いかけようとする。

精霊の障壁を打ち貫く敵の攻撃。

いくら、三体の精霊を持っている美森といえども、そんな相手の攻

撃を受ければ、ただでは済まない。

「やらせ……ない……」

だから、行かなければ。自分がどれほど傷付こうとも、どれほど苦しもうとも、誰かが傷付くことだけは、絶対に許さない。

そう、ゼツタイニ……

ふと、少女の背後が輝く。

「!？」

その突然の出来事に、思わず振り向いてしまう。

その光は、まるで花が咲くかの如く舞い散り、吹き荒れる。

次の瞬間、その光から何かが飛び出し、少女を吹き飛ばす。

「ぐうあ!？」

障壁を突き抜ける重い一撃。

質量、面積、その全てが違う。

そう、これは、まるで、巨人の拳に吹き飛ばされたかのような一撃。

「ぐう……」

痛む体を持ち上げ、その姿を確認する。

「!？ 貴方……その姿は……!？」

そこに立っていたのは、友奈だった。

ただ違うのは、服装が変わり、彼女の左右に、巨大な腕が出現していた。

「……東郷さんはやらせない!」

巨腕を振り上げる。

「くッ!」

少女はそれを地面を転がる事で回避する。

「逃がさないッ!」

友奈が振りかぶる。

その巨体に似合わぬ速さは、少女の体を捉えるのに十分だった。

「ぐうッ!？」

大きく吹き飛ばされる少女。

派手に地面を転がりまわり、粉塵を巻き起こし、沈黙する。

「やった……」

「まだだよ、東郷さん」

「ッ!？」

友奈の言葉に、美森は慌てて狙撃銃のスコープをのぞき込む。

そこには、地面に仰向けに倒れるあの少女の姿。

流石にあの一撃を受けては流石に立ち上がる事など――

だが、奴は起きた。

「嘘……なんで……」

「わざと吹き飛ばされて、衝撃を緩和したんだ。それに派手に転がったのも、衝撃を地面に逃がすため。相当強いよ。あの人」

武術に精通している友奈ならではの推測。

実際に、その推測は的を射ている。

後ろに飛び、わざと吹き飛ばされる事によって、自分に来るダメージを減らし、吹き飛ばされた際の推進力は自ら進行方向へ飛ぶ事で緩和し、地面を転がる事で着地の際の負荷を減らしたのだ。

かなりの判断力と冷静さがなければなせない技だ。

「どうすれば……!？」

そういえば、前回の時は彼らと遭遇しなかった。

もし、近くに彼らがいなかったなら、自分たちがバーテックスを倒した瞬間に、神樹は、彼らを危険とみなさず、樹海化が解除したとしたなら。

『東郷!』

突然、スマホから声が響く。風だ。

『最後の奴の封印が出来たわ! だけどあんなに速くちや私たちじや捉えられない! お願い! どうにかして!』

「分かりました」

もし、自分の仮説が正しければ、この戦いは終わる。

美森は、その確信をもって、銃口を、最後のバーテックスの御霊に

向けた。

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・！」

「アハハ！やっぱり遅ーい！」

「うる、せえー！」

戦槌を振り回す。

だが、それでも小柄な敵を捕らえるには至らない。

「くそッ！これじゃあ埒が明かねえー！」

剛の体からは、とところどころから血が流れていた。

その原因は、敵の攻撃。

数十発に一度、障壁を突き抜けてくる攻撃。

それが何度も掠って、いくつもの切り傷を作っているのだ。

文字通り、苦戦している。

「くあッ!？」

弾かれる。

大きく下がらされ、どうにか踏みとどまる。

そして、千景は男を睨み付ける。

ここまです、千景はまともに反撃出来てない。

敵は片手剣。

武器の重さでは、千景の鎌の方が上だ。だが機動力と小回りでは、あの男の方が上だ。

そこまでは良い。問題は、技術の問題だ。千景は鎌を振るうのは初めてだ。が、どういうわけか手にもものすごく馴染む。どういうわけか振り回すのは大分楽であり、扱いやすい。

だが、それを凌駕するかの様に、男の剣劇はすさまじい。どうにか防御するのがやっとだ。

このままでは勝ち目がない。

そう思った時だ。

「・・・何故だ」

「？」

「何故お前たちはこの世界を守ろうとする？何故神樹を守ろうとする？この世界に未来などないのに、何故この世界を守ろうとする？こんなクソみたいな世界を、何故守ろうとする。こんな世界など、終わった方が良く。こんな世界など、消えた方が良くののに、何故だ」

男の見下すような視線に、千景は、歯を食いしばって吠える。

「ふざけんな！絶対に終わらせたりなんかしない。俺の大切な仲間たちが守ったこの世界を絶対に壊させたりなんてさせない！」

そこで千景は気付く。

今、誰の事を言った？

彼の記憶には無い、別の誰かの記憶。

それが、混ざっている。

「こんな世界、守る価値などない」

だが、男はその言葉を一蹴し、長剣に切っ先を突きつける。

「お前がこの世界を壊す理由はなんなのか知らない。だけど、この世界を壊すというのなら、俺はお前を殺すッ！」

先ほどから記憶が混乱してきている。

だが、それは関係無い。

今は関係無い。

ただ、俺はあの人たちが守ったこの世界を壊す者をすべて殺すッ

！

鎌が変形する。

「なんだ!？」

目を見開く男。

半透明の光の刃が肥大化し、巨大な両刀身鎌へと変貌する。

それは、死者をも冒流する呪われし刃。

『大葉刈』——ツ！

そして、その鎌を一気に振りぬく。

「ぐうっ!？」

その一撃は、男の迎撃の一撃をいともたやすく弾き飛ばし、右肩か

ら左脇腹にかけて、斬り落とす。

「ぐう!？」

だが、浅い。敵の命を刈り取るのには、まだほど遠い。
しかし、攻撃はまだ終わっていない。

「う、おおおおおー!」

返す刃で、追撃。

剣も弾かれ、無事とはいえないダメージを受けている男にとっては
絶対絶命。

もはや、直撃はまぬがれない。

だが、どこからともなく矢が飛んできて、千景の鎌を弾く。

「な!？」

思わず態勢を崩す千景。

「下がれ!八神!」

「ッ!」

低い女性の声。その声に反応し、下がる男。

同時、千景に向かって、数本の矢が飛んでくる。

「うわ!？」

千景はそれをどうにか回避する。

「バーテックスが倒された。今回も失敗だ」

「そうか……」

遠くで土煙が上がる。

それと同時に、黒髪の少女が飛んできて、うまく着地する。友奈と
戦っていた少女だ。

そして、その少女の顔を見て、千景は絶句する。

「お前は……!？」

その人物は、随分と見知った顔だった。

「おい待ちやがれ!テメエら……一体何もんだア!」

剛が怒声を浴びせる。

だが、彼らは動じない。

そこには、ほかにも、もう一人、仲間がいた。

全部で、六人。

藍色の装束の男。
黒い装束の黒髪の少女。
灰色の装束の小さな少女。
緑の装束の冷たい眼差し少女。
毛皮の様な焦げ茶色の装束の熊の様に大柄な男。
薄汚れた白色の装束の少年。

樹海化が解除されるなか、彼らのリーダー格らしき青コートの男がいう。

「俺たちは、この神樹の世界を壊す者だ」

樹海化が解除され、千景たちは学校の屋上にいた。

「なんだったのかしら、奴ら……」

「お前が知らねえなら俺が知る事かよ」

風の疑問に、頭を掻きながら答える剛。

「あの人たち、どうして神樹様の世界を壊すなんて言ってるんでしようか？」

「……分からないわ」

樹の質問に、美森はきつぱりと答える。

だが、そこで何かが倒れるような音が聞こえた。

「え？」

そちらに視線を向けると、そこには、地面に倒れ伏す友奈の姿があった。

胸を抑え、その顔を苦痛に歪めていた。

「友奈ちゃん!?!」

「!?!」

剛、風、樹の三人がその声に反応する。

「友奈!?!」

「どうした結城!?!」

「友奈先輩!?!」

そのすぐあと、今度は千景が床に膝をつく。

「千景先輩!?!」

それに気付いた樹が慌てて駆け寄る。

「ぐ……」

「どうしたんですか!?!」

「……脇腹をやられた」

見ると、千景が抑えている右脇腹から赤い液体が滲み出ている。

「そんな……」

「友奈ちゃん! しつかりして、友奈ちゃん! 友奈ちゃん!」

その日、屋上に美森の悲鳴が響き渡った。

大赦のとある一室にて。

一人の少年が、ベッドに横たわる少女と会話していた。

少女の姿は、病院のローブを纏い、体中を包帯で包まれていた。

どうやら、かろうじて眼球と口、そして左手は動かせるようだ。

一方で、少年の方は、黒髪で優しい顔付きで、その顔に笑顔を浮かべている。

ただ、右目は眼帯に覆われており、彼の動きを見る限り、左腕が全く動かしていない。

「やっぱり行くの?」

「うん。行かなくちやいけないんだ。僕の役目は、まだ終わっていないから」

「別にもう戦わなくていいんだよ？今は、別の子たちが戦っているみたいなんだし」

「でも、戦ってるんだ。あの子が。なのに、まだ戦える僕が行かなくて誰が行くっていうんだい？」

「大赦の方から、一人派遣される、って分かっても？」

「それこそ、愚問というものじゃないかな？彼女も知らないんだ。勇者システムの本当の恐ろしさってものをさ」

「そっか。覚悟はもう決まってるんだね。これは止められないなあ」

少女は、諦めたかのように笑う。

「分かった。ちゃんとわっしーを助けてあげて。そして守ってあげて」

「うん。銀ちゃんとの約束だからね」

少年は立ち上がる。

「言ってくるよ」

「いつてらっしやい、つばくん」

少女に背を向け、歩き出す少年。

「まだ少し調整に時間がかかるけど、待っていてくれ、須美ちゃん」
確かな決意と共に。

新戦力二人

前回のバーテックスの襲撃から、一ヶ月半。

重傷を負った友奈と、脇腹に浅くない傷を負った千景は、すぐさま入院する事となった。

比較的、傷の浅い千景はすぐに治った。

友奈の傷も、見た目ほど酷くなく、わずか半月で完治した程だ。

ただ、その時、友奈と千景の携帯端末は大赦によって回収されたのだが……

「……なんで俺のだけまだ返ってこないんだよ……」

不満を吐き出す千景。

「大丈夫だよきつと。次の襲撃までは戻ってくるよ」

「アタシとしては、アンタの状態が心配だワ」

「あう!？」

満面の笑みを浮かべる友奈の額を小突く風。

「そうよ友奈ちゃん。次またあんな目にあったら私……」

「大丈夫だよ東郷さん！もうあんな事にはならないから安心して」

「には……ねえ……」

千景は、友奈をジト目で見る。

あれから友奈の様子がおかしい。

自分たちへの対応は問題は無い。

ちゃんと名前も覚えてるし、知っている趣味も言い当てられる。

部活の事についても何も問題が無い。

ならこの違和感はなんだ？

千景は、そんな違和感の中で、友奈を注意深く観察していた。

「おい、これはどこでいいのか?」

「あ、はい、それはそこでお願ひします」

変化があるとすればもう二つ。

神樹の勇者として活動するという事で、剛も勇者部に入った。

その為、力仕事全般を任されている。

「よつと。こんなもんか」

「ありがとうね剛」

風が彼を褒める。

「あ、友奈先輩、その精霊は……」

「ああ。携帯が返ってきた時に、新しく増えた子だよ。『火車』って言うんだよ」

もう一つは、友奈の精霊が増えた事だ。

猫の様に、毛並みは赤い。『火車』の名の通り、火に関するのだろう。」「……」

千景は思う。

襲撃してきた彼らの事を。

次にバーテックスが来た時、彼らはおそらく、またやってくるだろう。

バーテックスは全部で十二体。うち四体は倒した。

あとは八体。

この全部を倒せば、おそらく、彼らとの戦闘はなくなる筈だ。

戦う必要はなくなる。

友奈が傷付く事は、なくなる。

(だったら早く終わらせねえとな……)

もつとも、今端末を持たない千景ではどうにもならないが。

ただ気になる事は、あの、黒い装束を着た少女の事だ。

「あいつ……なんで……」

そう呟き、千景は昔の事を思い出していた。

彼女の名前は『稲成 幸奈』。

かつて、千景がいた孤児院にいた、同年代の女子の一人。

千景は、その施設で、根暗な性格が理由でいじめられていた。

施設を出る理由も、それが原因だ。

その中で、唯一千景に進んで接してくれたのが彼女だ。

正直、トイレに閉じこもる事無く生活できたのは、彼女のお陰だと
言える。

ただ、そんな優しい筈の彼女が、何故、神樹の世界を壊すといっている輩どもと一緒に行動しているのか。

千景にはわからなかった。

と、千景が修理の為にドライバーを持ち上げた所で、滑り落としてしまった所で。

時が止まった。

『——ッ!?!』

全員の表情が凍り付く。

「来た……!」

「ど、どうしよう、千景君の端末はまだ……」

「大丈夫!」

美森の言葉を、友奈がさえぎる。

「大丈夫、私たちが守ればいいよ!それならきつと大丈夫!」

と、友奈は張り付けたような笑みでそう答える。

その言葉に、誰も言い返せない。

だが、そんな沈黙を破るかのように風が口を開く。

「考えてもしようがないわ。とにかく、戦えない千景は東郷と一緒に行動して。いいわね」

「分かりました」

風の提案を受け入れた直後、世界が光に包まれる。

「来た！」

友奈がそう呟く。

その先には、なんだか舌ベロをだらしなく垂らしているような巨大な怪物がやってきていた。

「あれが五体目……」

「山羊型……カブリコーン山羊座か」

美森が狙撃銃ライフルのスコープを覗き込み、千景は美森の端末を借りてその怪物の名を呟く。

「どこがヤギなんだよアレが……」

「はいはいそこは突っ込まないでね剛。言ってもしょうがないから」

「一ヶ月ぶりだから、上手くやれるかな……」

「えーつと、ここを、こう……」

「おお！」

友奈に自分の端末の画面を見せる樹。

「エエーイ！なせば大抵なんとかなる！しのごの言わず！どうにかするわよ！」

「は、はい！」

「風先輩！」

そこで千景が叫ぶ。

「どうしたの!?!」

「東郷より、我、敵ヲ視認！以前の奴らを思われます！」

「以前って……まさか……！」

風の顔が強張る。

「おい！数はどうなんだ!?!」

剛が叫ぶ。

「東郷、数は？」

「……五」

美森の声が僅かに震える。

「……前の剣の人はいないみたいだけど……」

「……武器無しがいるのか？」

「……ええ」

ギリツ、と美森が歯を食いしばる。

おそらく、幸奈だろう。

「怒るのは分かるが、今はバーテックスだ。配置を教えてください」

「ええ……バーテックスを守るように取り囲んでるわ。あの包囲網を突破しない限りは……倒すどころか封印も出来ないかもしれない」

「そうか……風先輩」

『ええ、聞いたわ。私と剛で突っ込む。バックアップよろしく』

「分かりました」

風の作戦を承諾する美森。

この場合、千景は観測手になる。

幸い、美森の端末のカメラ機能で視界を拡大。それによって、指示を出す算段だ。

一方で、こちらは幸奈たちの方で。

「早く来ないかな」

小柄な少女、『針目美紀』は樹海の足場に腰をかけ、パタパタと足を振っていた。

「油断しないで美紀。翔琉さんが怪我で動けないんだから、ちゃんと周囲を警戒して」

「んー、でも怪我したのは翔琉君の自業自得でしょ？」

「それでも、よ。貴方も自業自得で怪我しない事ね」

「はい」

軽々と飛び降り、カプリコーン・バーテックスの周囲を警備しに行く。

「……阿室さん、敵は見えましたか？」

「ああ、真つすぐこっちに。十二時の方向。ほぼ真正面だ」
弓に光矢をつがえながら、『阿室 佐奈』は答える。

「敵の狙撃手に気をつけて下さい。かなりの使い手です」
「承知している。ただ、あの鎌の男はいないようだ。何かあったのか……?」

「……」

それを聞いた幸奈の心が、少し安心感を覚えた。

「……そうですか」

「終わらせる……邪魔させない……アイツの為に……壊す……この世界……」

「……真斗、少し落ち着いたら?」

幸奈の隣で、ぶつぶつと何かを呟いている大柄な男は『くるまだま車田真斗』。その手には、剛の戦槌とは形の違う巨大なハンマーが握られていた。

「あの……幸奈ちゃん……」

「どうかしたの?加賀」

ふと、幸奈の傍に、『かがひろし加賀弘』がやってくる。

「今回、成功するかな?」

「させるのよ。絶対にね」

幸奈は拳を握りしめる。

「もう……千景君が傷つかなくて済む様に……」

「そろそろ射程だ」

阿室の声が聞こえる。

「分かりました。それじゃ……」

幸奈が何かを言いかけたその時。

バーテックスの上部が突然爆発した。

『!?!』

いきなりの事に、驚く一同。

「なに!?!」

「東郷さん!?!」

美森が狙撃銃を下ろしながら答える。

「・・・私じゃない」

「さっきのは・・・刀か？」

千景がかろうじて見えた爆発の正体を呟く。

そして、上空を見上げた。

「ちよろい！」

「夏凜ちゃん、バーテックスは任せたよ。僕は周りの奴らを引き離しておくから」

「分かりました！翼様！」

「だから様はつけなくていいって・・・まあいいか、行くよ！」

「はい！」

碧い閃光が走る。

それは空中で加速し、真っ直ぐに幸奈たちに向かっていく。

「敵！上から！」

「撃ち落とす！」

佐奈が弓を上空へ向ける。

そして、その光の矢を放つ。

だが・・・

「甘いよ」

「な!?!」

その閃光はまるで翼でも生えているかの様にその矢を回避する。

「零戦飛行」

空中で加速。

そのまま右腕を前に突き出す。

その右腕には、装着型のボウガンがあった。

弓の部分が開く。

すると、そのボウガンの前に青白い円形の光の楯の様なものが開く。

「マシンガンボルト」

次の瞬間、その光の円盤から無数の光の矢がまるで機関銃のように放たれる。まるでサジタリウスの様に。

「な!?!」

それには全員、回避に移る他ない。
ただ一人を除いて。

「ミヨルニールうううううううううう!!」

力任せに振るわれた巨大なハンマー。それには僅かなプラズマが纏われていた。

すると次の瞬間、それは巨大な稲妻として碧い閃光へ向かう。放っていた矢は全て弾き飛ばしていた。

「うっわ、これは……」

だが、その閃光の判断は至って冷静。

弓の部分を収納し、右腕を振りかぶる。

「ボルトパンチ」

稲妻が彼を襲う。

「おいおいあれ大丈夫なのか!?!」

「直撃した……!?!」

剛と風が言葉を失う。

だが、巻き起こった煙の中からは、無傷の少年が出てくる。

その姿はブルースターを想起させる青の装束に身を包んでいた。

右目は眼帯に包まれ、その表情はなんとも安らかである。

「なん……で……!?!」

「真斗君のミヨルニールを喰らって無傷でいられるなんて!?!」

真斗と加賀が驚愕に顔を強張らせる。

理由は至極簡単。先ほどの、ボルトパンチなる技。

『ボルト』とは『矢』の意。

彼のボウガンは、矢が自動装填される仕組みとなっており、マシンガンボルトは、その原理を空間そのものとし、乱発する技。

一方で、このボルトパンチは、自動装填の原理を、一カ所に圧縮する絶技。

その上、あのミヨルニールという雷撃技はあまりにも飽和しすぎて

いるため、一点に攻撃を加えるだけで一部を相殺し、回避したのだ。

「チツ、ならば・・・！」

だが佐奈はすぐに動いた。

矢を一本、つがえ、思いつき引き絞る。

最大まで引き絞った所で、矢が巨大化する。

「喰らえ・・・！」

低く叫び、矢を放つ。

その矢は先ほどとは比にならない程の速度で少年に向かっていく。

「うわつと!?!」

「なに!?!」

だが、少年は何の苦も無く空中で回避する。

「あの人・・・空中で動けるの!?!」

樹がそう驚く。

だが、その間に少年は地面に着地する。

次の瞬間、少年はありえない速度で走り出す。

その速度は、肉眼ではとらえられない程に速い。

少年は加賀に接近する。

「くっ!?!」

加賀はそれを右手の剣で迎撃しようとする。

加賀の武器は西洋剣^{レイピア}。それも無限に増産可能な使い捨て型。

蹴りが迫る。

ダツシュによって加速増幅された一撃が彼を襲う。

加賀は、それを避けれないと判断。レイピアで受け止める。

だが、その威力は絶大だった。

踏ん張りも効かずに吹き飛ばされる加賀。

「加賀!?!」

幸奈が叫ぶ。

だが、彼女らが青い少年に気を取られている間に、もう一人の存在がバーテックスの封印に入っていた。

「封印開始ッ!」

ヤマツツジを想起させる赤い装束を身に纏う少女。

その手には、刀が握られている。

「思い知れ、私の力ッ！」

「まさかアイツ……一人でやる気か!？」

千景がまさかという表情でつぶやく。

だが、封印は成功しており、カプリコーンが御霊を吐き出す。

その直後、その御霊が大量の煙を吐き出す。

「ガス……!？」

それは、猛毒のガス。

「あぶな!?俺あそこにいたら死んでたぞ!？」

「なにこれ!？」

「何も見えない……!？」

煙は友奈たちを包むも、精霊たちによって弾かれている。

「そんな目くらまし……」

だが、少女は一切怖気づく事なく、飛び上がる。

「気配で見えてんのよッ!？」

そして、一切の狂いなく、御霊を両断する。

「殲・滅」

『諸行無常』

なんともカッコつけたセリフ。

「!? しまった!？」

「さて、これで任務終了かな」

そして、自分たちの失態に気付いた幸奈達に対して、少年は安心し

たかのように一息つく。

「ふう」

同時に一息ついた少女。

「えーっと、誰?」

友奈が真っ先に全うな質問をする。

そんな友奈や呆然としている一同に対して少女は……鼻を鳴ら

した。

「ふん、そろいもそろってブーツとした顔してんのね。これが神樹様
に選ばれた勇者ですって? ハッ」

なんとも高圧的な態度。

「あのー・・・」

「ご苦労さま」

「どういたしまして」

友奈が困ったように笑い、その後ろへ美森に抱えられた千景がやってくる。

「何よチンチクリン」

「ちんツ!？」

いきなりの友奈に対しての罵詈。

「私は『三好夏凜』みよしかりん。大赦から派遣された正真正銘、正式な勇者よ」

そう名乗りをあげる、夏凜という少女。

「つまりあんた達は用済みって事よ。ほい、お疲れさぎやん!？」

突如、どこからともなく光の矢が飛んできて彼女の頭部に直撃する。

『えええ!？』

それに愕然とする一同。

吹き飛ばされ、地面に倒れ伏す夏凜。

「きゆう・・・」

目を回し、気絶している。

矢が飛んできた方向を見ると、そこには、あの青色の装束の少年がこちらに向かってボウガンを向けていた。

「・・・聞こえていたのか?」

「さあ・・・」

引き攣った笑みを浮かべる剛に、樹がそう返す。

その間に、樹海化が解除されていく。

ただ、その中で、美森は、あの少年が、自分に向かって、悲しそうに微笑んでいる事に、気付いた。

自己紹介

翌日――。

千景の教室にて、黒板に、三文字の漢字が書かれていた。
人名だ。

「今日から、お前らの仲間になる、『六道翼』だ」
りくどうつばさ

「よろしくお願いします」

昨日の少年が、彼の教室に来ていた。

「……マジで……?」

千景は茫然とした様子で件の少年、六道翼。

「翼は昔、事故にあつて左腕と右目、そして右耳が聞こえねえらしいから、なんかあつたら手伝つてやれ。いいな」

『はーい』

「そうなのか……」

意外な事実^に千景は目を丸くする。

だが、翼は気にした様子もなく、千景に微笑んだ。

放課後、勇者部部室にて。

「そうきたか」

風がそう呟いた。

「転入生のふりなんてめんどくさい。まあ、私と翼様が来たからにはもう安心ね。完全勝利よ!」

グツとガッツポーズを取る夏凜。

「何故、このタイミングで?どうして初めから来てくれなかったんですか?」

美森が最もな事を言う。

「私だつてすぐに出撃したかったのよ。だけど大赦は二重三重に万全を期しているの――」

——最強の勇者を完成させるためにね」

夏凜が、ニヤリと笑う。

「最強の勇者?」

「そ、アンタたち先遣隊の戦闘データを得て、完璧に調整された完成型勇者、それが私と翼様」

スマホを取り出す夏凜。

「私と翼様の勇者システムは、対バーテックス用に最新の改良を施されているわ。その上、アンタたちトーシロとは違って、戦いの為の訓練を長年受けてきている」

ガタン、と手に持つて振り回した箒の柄の先端が黒板に当たる。

「黒板に当たってんぞ」

剛がツッコむ。

「羨がいのありそうな子ね」

「なんですって!?!」

「ああ、喧嘩しないでえ」

風の言葉に喰いかかりそうな夏凜をなだめる樹。

「ふん、まあいいわ。とにかく大船に乗ったつもりでいなさい」

そこで友奈が立ち上がる。

「そっか、よろしくね、夏凜ちゃん」

「!?!いきなり下の名前!?!」

「あれ?嫌だった?」

「ふん、どうでも良いわ。名前なんて好きに呼びなさい」

それに対して友奈は、満面の笑みで、言う。

「ようこそ、勇者部へ」

「………は?誰が?」

「夏凜ちゃんと翼君」

「部員になるって話、一言も言っていないわよ!?!」

きよとんとする友奈。

「違うの?」

「違うわ。私たちは貴方達を監視する為にここに来ただけなのよ」

「え?もうこないの?」

「・・・また来るわよ」

「じゃあ部員になっちゃった方が話しが早いよね」

「そうだな」

「確かに」

友奈の言葉に同意する千景と美森。

「まあいいわ。そういう事にしておきましょうか」

夏凜は仕方が無いといった風に答える。

が、すぐまら高圧的な態度になる。

「その方が貴方達を監視しやすいでしょうしね——」

直後、彼女の顔の横を何か霞め、黒板に当たり、砕け散る。

「・・・」

それは、チョーク。

数秒をもつて、夏凜はその顔を真っ青にする。

そして、ギギギ、とまるで錆びたブリキ人形の様に頭を回転させる。

そこには、爽やかな真っ黒い笑みを浮かべる翼がいた。

「夏凜ちゃん」

「は・・・はい」

「上から目線な態度はやめようって言ったよね？」

「は・・・はい。すいませんでした・・・翼様・・・」

「それと様はつけなくて良いって言ったでしょ？」

「で、ですが、こればかりはどうしようも・・・」

「うくん・・・どうしてこの子だけは・・・」

どうやら翼には頭があがらない様子の夏凜。

「あれ？そういうえば夏凜ちゃんは どうして翼君の事を様って呼んでるの？」

「言われてみればな。お前ら同じ年なんだろう？」

友奈と千景は思った疑問を口にした。

「知らないのアンタたち？」

「え？何？知ってなきやいけないような事？」

「六道家はね、大赦の中でも最高位の発言力を持つ上里家の直系の分家なのよ」

「え、じゃあ翼君、大赦の中で偉い人なの!？」

「次期当主だから、まだそこまでの力はないよ。それに、上里家は元来、優秀な巫女を排出している家系なんだけど、僕ら六道家は、その血を引いておりながら、武術に精通した家なんだ。僕は二年前に夏凜ちゃんの訓練の指導教官として配属になった時に会ってるんだ。その時から何故か羨望の眼差しで見られてるんだけど……」

「貴方は私の憧れ。六道家の神童とまで言われた貴方から指導を受けられるなんて、光栄の至りなんです」

と、自慢げに言う夏凜の言葉を聞いた翼の眼に、陰が指す。

「……僕は、神童でもなんでもない。ただの一人の人間だよ」

その瞬間、勇者部の部屋が重い空気に包まれる。

だが、その時、ムツシヤムツシヤと何かが何かを食べる様な音が聞こえた。

それに一同が視線を向けた瞬間、夏凜が絶叫する。

「よして義輝うろう——!？」

そこには、さつきから出ていた夏凜の武士の様な恰好をした精霊『義輝』が友奈の牛鬼に喰われていた。

「何すんのよこの腐れ畜生!」

無理矢理引き離す夏凜。

『外道メ!』

「外道じゃないもん。牛鬼だもん」

と、ムスツとした表情になる友奈。

「ちよつと食いしん坊なだけなんだもんね」

「自分の精霊の躰もできないの!？やはりトーシロね!」

「皆牛鬼に食べられちゃうから、精霊を出しておけないのよ」

「じゃあこの精霊を早く引つ込めなさいよ!？」

「勝手に出てきちゃうんだよ。どうにもならねえ」

剛がそうツツコム。

「ハア!?アンタのシステム、壊れてんじゃないの!？」

『外道メ!』

「そういえばこの子喋れるんだね」

それを聞いた夏凜がどや顔する。

「ええ、私の能力に相応しい、強力な精霊よ」

「でも東郷さんには三匹いるよ」

その友奈の言葉に、美森は慌ててスマホを操作し、精霊を出す。

東郷の精霊は『刑部狸』『青坊主』『不知火』の三匹。

「出ました」

そこで夏凜は悔しそうな顔を見ると風は予想したのだが、何故か夏凜は鼻で笑う。

「ふん！その程度なのね！翼様の精霊は六体よ！」

『ええ!?!』

それに驚く一同。

なんと美森の二倍の数。

「別に自慢する事でもないんだけどね」

そう言っ、翼は右手だけでスマホを操作し、精霊を出す。

「僕の精霊の『傘』からかさ『三郎』さぶろう『一反木綿』いつたんもめん『河童』かっぱ『猫又』ねこまた『鶴』ねえだよ」

「おお！」

「すっげえ……」

「どーよ！」

「でもね、夏凜ちゃん」

突然、破れた傘の精霊、傘からかさが、夏凜の額に蹴りを入れる。

「はうあ!?!」

「虎の威を借る狐の様に、他人を使って人を攻撃しないように」

「は、はい……すみません……」

「尻に敷かれてる……」

「あ、この子も喋るんですね」

「うん、そうだよ。そうだ」

ふと翼は思い出したかのように立ち上がった。

「千景君……だったね」

「あ、ああ。そうだが」

突然、話しかけられ、たじろぐ千景の前に、何故か日本の戦闘機部隊が出撃時に来ているような服装をした精霊、三郎が、彼の前にスマホ

を差し出す。

「君のだよ」

「ああ、ありがとう」

それを受けとった千景は、試しに起動してみても中身を確認してみたところ、以前のものと全く変わりの無い事に安堵する。

「気を付けて」

「え？」

「それは旧型のもの。それもかなり古いタイプのものだ」

「それだと、なんかまずい事でもあるのか？」

「ああ。その型は、精霊の加護を受けられないんだ」

「加護？」

「精霊の加護がないと君をバーテックスの攻撃から守ってくれないんだ。見た事あるんじゃないかな？例えば牛鬼が友奈ちゃんを守った時、バリアを張って守ってくれた時とか」

「あ、ああ……まさか、俺にはあれないのか？」

「うん」

「という事は……昨日の戦いでもし千景君が前に出ていたら……」

「ガスで死んでいただろうね」

美森の推測を翼が肯定した瞬間、場の空気が凍る。

だが、翼は構わず続ける。

「システムのアップデートも出来なかった。だから、千景君はあまり前に出ないでほしい——」

「断る」

千景が、真っ先に拒否した。

「ハア!? あんた何言ってるの!? 死にたいの!？」

「死ぬ気はないし、戦って負ける気もない。俺は勇者部部員不道千景だ。他の仲間が戦ってるのに、なんで俺だけ後ろで指をくわえて見ていなくちゃいけない?」

夏凜の怒声に引く事無く、千景は言う。

「それに、要するには攻撃を受けなければいいんだろ? 例え加護がなくなっても、それなりにやれる事はあるはずだ。例えば、アイツらの足

止めなんかな」

「危険過ぎる。精霊がない君じゃ、無理が……」

「でも戦えた」

「!？」

それは、千景の持つ、一撃必殺の絶技。

「俺でも、奴らと戦える。だから……」

「それでもダメよ」

だが、そこで風が口を挟む。

「貴方がどれほど強力な武器を持っていても、守りがなつていなくちゃ話にならないわ。ここは大人しく、後ろで様子見してなさい」

「ツ……だけど……」

「千景君」

「友奈……」

それでもなお食い下がろうとする千景に、友奈が歩み寄る。

「大丈夫だよ。千景君は私が守る。だって、千景君が怪我するの、嫌だから」

「……俺は——」

友奈の言葉に反論しようとする千景。

——そう、俺は一人じゃない。忘れないで。俺は、愛あなたされているから——

「づあッ!？」

「千景君!？」

突然の鋭い頭痛が千景を襲う。

だが、それもすぐに収まり、何事もなかったかのようになる。

「大丈夫?」

「ああ……少し頭痛がしたただけだ。最近多くてな」

すでに引いた痛みを若干の心残りを感ずるものの、とりあえずこの案件は受け入れる他なさそうだ。

「……わかりました。ですが、もし誰かが危険だと俺が判断した場合

は——迷わず前に出ます」

「ええ。わかったわ」

承諾する風。

だが、翼はまだ不安そうだ。

「・・・なんだよ」

「いや・・・頼むから、死なないでくれよ」

「?・・・ああ」

妙に深く釘を刺してくる翼に疑問を持ちながらも、千景はそれを承諾した。

夜。

千景は、自分の家にて、ベッドに寝つ転がり、自分のスマホを持って見ていた。

「・・・」

精霊の加護がない。

それは、敵の攻撃から守ってくれるものがないという事。

そんな状況下で戦えば、死なないまでも、まず無事ではすまない。

「・・・何をいまさら」

千景はそれを心の中で一蹴する。

「あの時だって、守ってくれるバリアなんてものなかったじゃねえかよ」

そう、それはずっと昔の事。

五人と一人の仲間と共に、激動の日々を駆け抜けた、あの一年。

一人は盾を砕かれ貫かれ、一人はその巻き添えを喰らい、一人は死ぬ直前に神樹に取り込まれた。

どれも大切な人だった。

だけど、初めの二人は力不足、最後の一人に至っては戦いから離れた。

道を踏み外した代償があれだ。

だけど、今は違う。
戦える。

前みたいな過ちはもう犯さない。
もう、誰も失わせやしない。

「ッ!?!」

そこで我に帰る千景。

「くそ……混じってきてる」

あの変身に続き、症状は軽微なものだが、明らかに記憶が混乱してきている。

まるで、別の誰かの記憶を刷り込まれていくかのような、そんな感覚。

「これは……進行すればまずいかもな……」

結局、自分も友奈と同じだ。

周りに迷惑をかけたくない。誰にも傷付いて欲しくない。だから自分が戦う。

例え、自分の何もかもを犠牲にしようとも。

「せめて……『アレ』を使えば……」

使えるかどうかわからない。

だが、きつとあれは決め手になる。

「……どうにかして精神鍛えねえと」

そう呟き、千景の意識は闇に落ちた。

「わっしーの様子はどうだった?」

「楽しそうだったよ」

「なら良かった」

安心したように顔を緩ませる包帯だらけの少女。

その少女に、微笑む翼。

「君も行ければよかったんだけどね」

「うーん、それは無理だなく。だってこんななつちやったからね」

「ハハハ・・・僕より持たないからね、あれは」

「そうだね。でも、わっしー元気そうで良かった」

「それは僕も同じだよ。まあ、夏凜ちゃんはまだ馴染めないみたいだけど」

「君自慢の弟子なのにね」

「戦いのセンスはずっと良いんだけどね。どうにも集団に馴染むのが苦手みたいで・・・」

「それに君の事を翼様って呼んでいるみたいだしね」

「う・・・本人にはやめるように言っているんだけどなあ・・・」

「良いんじゃないかな？それで」

「僕は困るんだよ。同い年なんだから、もう少し親しくして欲しい所なんだけどね」

困ったように頭を掻く翼。

「アハハ」

それに笑う、少女。

「さて、そろそろ・・・」

「うん。また明日」

椅子から立ち上がり、帰る翼。

少女のいる病室を出て、廊下を歩く。

ふと、廊下の途中で立ち止まる。

「・・・山さんか」

「はい、ハイハイ」

闇の中から声が聞こえる。

「大赦の様子は怎么样い？」

「不道千景を排除しようとする動きが出始めております。あの勇者の血縁ではないかという」

「そうか。調べの方はついたらか？」

「坊ちやまが持ち帰った写真から、特定しました。しかし、所在は不明です」

「バレる事は分かっていたか……分かった、引き続き監視と調査を」「分かりました」

心配が消える。

翼は、ポケットからスマホを取り出し、起動する。

そして、写真のアプリを開く。

そこには、四人の子供が映っていた。

黒髪の少女。

麴塵色の髪をした少女。

黄色の髪をした少女。

そして、翼を幾分か小さくした少年。

「……大丈夫。君が守った世界は、僕が守る。須美ちゃんの事も、僕が守る」

その瞳に、確かな決意を込めて。

翼は歩き出す。

情報交換

讃州中学体育館。

「えい」

『ハアアア!?!』

体育の時間。

翼の投げたバスケットボールが、コート一個分を超えて、ストンとゴールリングに入る。

それに、あんぐりと口を開ける男子たち。

「よし」

「なんで片腕だけであんなに飛ぶんだよ!?!」

「そりゃ片腕だけで逆立ち腕立てするほどの腕力だ！出来て当然だろ!?!」

「だけど一発ならまだしも五発連続で入るなんてありえねえだろ!?!」

「……流石だな」

授業で早速注目を浴びている翼。

それに対して、コート外で休憩している千景は感心する。

翼は、この試合を全て片手のみで制している。

股を抜いたり、残像を作って鉄壁の包囲網を突破したり、誰にも追いつけないような速さで走ったり、拳句の果てには、コート一個分のスペースを軽々超えるシュートでゴールを決めるといふ始末だ。

伊達に大赦の中で最も武術に精通した六道家の神童と呼ばれる事はある。

「ふう、いい運動だった」

「あまり内のバスケット部を虐めないでくれよ。あれでも大会を軽く優勝してんだからよ」

汗を拭きとりながらコート外に出てくる翼。

「それはすまない事をしたなあ」

ハツハツハと、まるで心配していないように笑う翼。

「……」

それに若干引く千景。

「それはそうと千景君。君の指揮能力もなかなかのものだよね」
「ん。まあ、それほどでも」

そこでふと、千景はある事を尋ねた。

「そういえば、六道家ってどんな武術を教えてるんだ？」

「そうだなあ。剣術や組討術はもちろん、居合や槍術や双剣術、暗器術や、あと暗殺術・・・おっと、これは教えちゃらないものだったな」
「今とんでもなく危ないものが聞こえた気がしたが聞かなかった事にしておくよ」

「それは助かるよ」

なんだかホツとした翼。

「そーういや気になってたんだけどさ」

「ん？なんだい？」

「お前、東郷の事、意外と気にかけてるよな？」

何気ない質問だった。

ただ、気になり、聞いてみただけだった。

「・・・」

その時、翼の顔が明らかに曇った。

「・・・あれ？」

何か気を悪くするような事を言ったか？

「なんか・・・悪い」

「いや、君は悪くないよ」

彼は、自嘲するように笑う。

その表情からは、確かな悔恨が感じられた。

「・・・ツ!？」

また、頭痛が走る。

今度の記憶は、長いものだった。

終わった。

長かった。

長い戦いが終わった。

皆生き残った。

私も生き残った。

あの人も生き残った。

今は、この事を喜ぶべきだろう。

これで、私を称えてくれる、褒めてくれる、愛してくれる。

皆、みんな、ミンナ……

「ぬああ!?!」

「千景君!?!大丈夫かい!?!」

「あ、ああ……すまない。またいつもの頭痛だ」

「顔色が悪い……保健室に行ったらどうだい?」

「いや、一応、問題無い」

「なら良いけど……」

入らない心配をかけてしまったようだ。

だが、今回ののは一段と酷い内容だった。

褒めてくれるとか愛してくれるとか、千景には訳が分からない。

「これ、本当になんなんだ?」

そう呟くも、それに答えが出てくる訳がなく、ただ虚空に消えて

いった。

勇者部部屋にて。

「仕方がないから、情報交換と共有よ」

夏凜が、黒板の前に立ち、何故か煮干しを齧りながらそう言った。

「何故に煮干し……?」

「何よ! ビタミン、ミネラル、カルシウム、タウリン、BTA、DHA、煮干しは完全食よ!」

ビシツと指を指しながらそう断言する夏凜に思わず引いてしまう千景。

「あげないわよ」

「いらないわよ」

「じゃあ私のぼた餅と交換しましょう」

「あ、ぼた餅僕大好物だよ」

「それじゃあ一個」

「ありがとう」

「あ、翼様・・・」

「夏凜ちゃんも一個貰ったら?」

「・・・分かりました」

しゅしゅと言った感じで貰う夏凜。

それで早速と言った感じに夏凜が自らの持つ情報を話し始める。

「まず、バーテックスの出現は周期的なものと考えられていたみたいだけど、相当に乱れてる。これは異常事態よ」

と、黒板に書かれている事を指しながらそう言う。

「帳尻を合わせる為に、今後は相当な混戦が予想されるわ」

「確かに、一ヶ月前も複数体出たりしましたもんね」

「私と翼様ならどんな事態にも対処できるけど、貴方たちは注意しなさい。特に不道。アンタは精霊の加護がないから、十分用心しておくこと。じゃないと死ぬわよ」

「分かっている」

「他に、戦闘経験値を貯めると勇者はレベルがあがり、より強くなる」
「ん?」

ふと千景は、翼の表情がそこで曇っている事に気付いた。

(なんだ?)

「それを、『満開』と呼んでいるわ」

「『満開』・・・某死神漫画の『卍解』みたいなもんか?」

「違うと思うわよ剛・・・」

剛の余計な言葉にツッコむ風。

「確か、アンタは経験している筈よ」

「あ、アレの事？」

以前、友奈の姿が光と共に変化した事があった。

恐らく、あの姿の事を言うのだろう。

「みたいね。私は見た事ないから分からないけど、一応、それが満開なんじゃないかしら？」

「つまり、友奈は以前より一段と強くなっただけで事？く、先輩の私を差し置いて……」

「とにかく、満開を繰り返す事によってより強力になる。これが大赦の勇者システム」

「へえ、すごい」

「すごくなかないさ」

何気ない友奈の一言、誰かが冷たい声で叩き伏せる。

「翼？」

翼だった。

「確かに、満開をする事によって勇者は強くなる。だけど、強くなるためにはそれ相応の代償がある。この事は覚えておいて欲しい」

至極真面目に、翼は、千景たちを睨みながら、そう言った。

「……翼、お前——」

「なせば大抵なんとかなる」

千景が何かを言いかけたのを、友奈が遮る。

「友奈？」

「何それ？」

「勇者部五箇条。皆で力を合わせれば、なんとかなるよ」

友奈が、黒板の上にある勇者部五箇条が書かれた紙を指さし、そう張り付けた笑みで答えた。

「なるべくとかなんとかとか、アンタたちらしい、ふわっとしたスローガンね」

「それでもないと思うよ？」

「え？翼様？」

「そうだなあ……例えば、『挨拶はきちんと』。これは、気付けの意味かな？挨拶をしつかりする事で、一日の始まりを感じさせる上に、

挨拶をしつかりする事で、相手に良い印象を持たせ、この部の活動を優位に進める、という感じかな。こんな深い意味はないと思うけどね」

すらつと、何気ない感想を述べる翼。

「おお」

「そこまで深い意味はないんだけどねえ」

それに感心する剛に、苦笑する風。

「さて、今度は僕から」

次は翼が立ち上がり、持っていた鞆の中から、片手で器用にいくつかの写真を取り出す。

それは、この間襲撃してきた六人の顔写真だ。

「我が六道家は、武術に精通しているのは確か。だけどそのもう一つの顔は、大赦の暗部として暗躍する事だ。これは、内の連中が集めた襲撃者たちの顔写真だ」

「すごい。こんなにな・・・」

感嘆する美森に微笑んだ翼は、話を続ける。

「じゃあ、一人ずつから離していこう。まず、この女の子」

まず、白髪のまだ幼い女の子を指差す。

「この子は針目美紀。六年までは、孤児院にいたみたいだけど、ある事件以来、ずっと行方不明だった」

「事件って?」

風が聞く。

「暴動事件だよ。集団薬物投与で商店街で、集団による暴力沙汰が起きてね。被害が大きすぎて、何人か怪我をしたんだけど、その時に居合わせた彼女は行方不明になったつきりなんだ」

「じゃあ、彼女はその時に・・・」

「死者も出た事件だから、彼女の人生を変えるには十分かもしれないね。次だ」

次は、いかにも気弱そうな顔色の少年。

「彼は加賀弘。中学二年だ。彼は、ごく最近まで普通に学校に通ってたんだけど、君たちが初めて勇者になった日に、突如行方をくらませ

た。今はどこにいるのか分からないんだ」

「この人、そこまで悪い事をしなさそうですけど……」

「彼、五年前に二人の妹を強盗に殺されている」

「……」

翼の次の一言で絶句してしまふ樹。

「ここまでよく普通に生活してきたと思うよ。何せ、親のいない状態で精一杯生きてきたんだ。そりゃ精神的に壊れてもおかしくない」

翼は、淡々と無表情に告げ、次の写真を指差す。

「次のこの大柄な男は、車田真斗。幼少の頃、頭を強く強打した事によって言語能力が低下し、判断力その他諸々の脳の機能が低下している。これが原因で親に捨てられたらしい」

「酷いわね……」

「こいつは騙されてるって感がでない」

「知能は五歳の子供並み。コイツがなにでどうしてこうなったかは不明だ。次に行こう」

次は、大人の雰囲気を感じさせる少女だ。

「彼女は阿室佐奈……」

突然言い淀む翼。

「? どうかしたの?」

風が気になり声をかける。

「……彼女は、うちの門下生なんだ」

「え!? それじゃあ……」

「大赦の人間も関わっているって事ね……」

友奈の驚きの声に、美森の落ち着いた推測が続く。

「僕には、兄がいるんだけど……」

「あ、お兄さんいるんですね」

「うん」

「ん? となると……当主になんのはソイツじゃないのか?」

剛が最もな質問をする。

「そうなんだけども……」

俯く翼。それに心配そうな表情をする夏凜。

「・・・さしずめ、この阿室って女が、何か問題でも起こしたんだろ？」
止まる会話を無理矢理進めるかのように、千景が口を開いた。

「千景君・・・」

「・・・うん。彼女は、大赦の暗部に入っていたんだ。まだ中学生なのに、その歳で入るなんて、将来は有望とまで言われていたんだ。二年前まではね」

「二年前・・・？」

美森が、そう聞く。

その時、剛の顔が少し険しくなる。

「うん。彼女は、ある日突然、暗部の人間の殆どを、殺したんだ」

「殺した・・・？」

「うん・・・理由は分かっているんだけど、確信はなくてね。だけど、僕の兄さんは、部下の不祥事は指揮官の責任と言い張り、自ら当主のTHE降りたんだ。そして、僕が次期当主として成り上がった」

翼は、強い眼差しで、皆を見る。

「僕は、どうして彼女がそのような行動に出たのか分からない。ただ、言えるのは、彼女は兄の地位を貶めたという事。そして、六道家の稼業に泥を塗った事。この始末は、僕がつける。だから、皆は手を出さないで欲しい」

しばしの沈黙。

だが、それを破ったのは、翼だった。

「次に行こう」

次に差したのは、黒髪の少女。

「・・・幸奈か」

「そう、君が以前いた施設で、君と一緒にだった少女、稲成幸奈だ」

「え？そうなの？」

「ああ。悪いな、言い出しづらくてな」

「いえ、誰だって、知り合いが敵に回っていたら、言い出しにくいですものね」

樹が上手くフォローする。

「彼女とは、まだ、君たちがまだ小学二年生の時に、どこかに引き取ら

れたんだっけか？」

「ああ、なんか人の好きそうな女性だったと思うが……」

「そうなんだ……まあ、それはともかくとして、彼女、実はそれ以来行方不明なんだ」

「な!?!」

思わず腰を浮かす千景。

「驚くのも無理もないよ。なにせ、幼馴染が行方不明なんて聞いたら、誰だって驚くよ」

「なんで……」

「引き取った人らしき人の行方も、というか戸籍も分からないからね。おそらく、連れ去られたっていう感じだね」

「じゃあアイツは……」

「騙されてる、のかな？」

「……」

拳を握りしめる千景。

その時、その彼の手に、もう一つの手が重ねられる。

「友奈……」

「大丈夫だよ。きつと、戻ってきてくれるよ」

そう微笑む友奈。

確信の無い、無責任な言葉。だが、それは、彼女の臆病な心の現れなのかもしれない。

だが、その笑みは、何者をも勇気づける様なものを感じる。

「……ああ、ありがとう」

千景は、笑って返した。

ただ、その時は。

「あー、コホン」

翼が、咳払いをする。

「あんたら、イチヤイチャするのはいいけど、今大事な会議中よ」
「!?!」

風に指摘され、慌てて手を離す二人。

「友奈ちゃん……」

「アハハ・・・」

「仲良いな」

「・・・緊張感の無い奴ら」

美森は千景にジト目を浴びせ、樹は苦笑し、剛はニヤつき、夏凜はすでに諦めたかのようなため息をついている。

「ま、まあ脱線はそこまでにしておいて、最後だ」

そして、翼は最後の男の写真を指差す。

『やがみかける八神翔琉』。この中では、一番の危険人物と言えるだろうね」

「その理由は？」

「報告書を見た限り、彼はかなりの剣客だ。おそらく、失われた西洋剣術の使い手だろうね」

「西洋・・・!？」

「・・・って何？」

友奈が首をかしげた事ですっこける一同。

「社会の授業で出てくるぞ・・・」

「ほら、英国とか、ヨーロッパあたりの事よ、友奈ちゃん」

「ああ！」

美森の説明で納得と言った感じの友奈。

「しかし西洋剣術か・・・私は良く知らないわね・・・」

「片手剣なら基本的にはレイピアとかその辺りなんだけど、彼の場合は、ソードの方だね。それも長い長剣だ。と、これはいいね。彼の素性だけど、彼は、この中では一番の年長者だ。高校生だね」

「へえ・・・他にはないんですか？」

「彼は、ずっと前行方不明になってるんだ。ここまで、今までの襲撃者と共通している部分だ。可能性としては、騙されているか、自分の意志で入っているのか。そこまでは分からない。ただ、彼が行方不明になった際、家族全員が事故で死んでいる」

「事故？」

「ああ。家が火事になったみたいだね。その時に、彼もいっしょに焼け死んだという事になったらしいんだ。だけど、彼は生きていた。その証拠が、君たちが持ち帰った写真」

と、翼は黒板に新たな文字を書き込む。

「現在分かっている事は、彼らの目的はバーテックスと同じ神樹様の破壊による世界の滅亡。もう一つは、彼らは樹海化世界じゃないと力を使わない。そしてその力は、精霊の障壁を貫くという事。まだ、貫かれたのが友奈ちゃんだけだから、なんともいえませんが、用心にこした事はない。いいね」

全員がうなずく。

「さて、それじゃあ次の議題ね。樹」

「はい」

議題が変わって、翼と夏凜に渡されたのは、一枚の紙だった。

それには『子ども会 お手伝いのしおり』と書かれていた。

「・・・という訳で、今週末は、子ども会のレクリエーションをお手伝いします」

「具体的には?」

「えっと、折り紙の折り方を教えたり、一緒に絵をかいたり、やる事は沢山あります」

「わあ、楽しそう!」

「面白そうだね」

友奈がはしゃぎ、翼が笑う。

「夏凜にはそうねえ・・・暴れたりしない子のドッジボールの的になってもらおうかしら?」

「ハア!? っていうかちよつと待って!? 私もなの!」

そんな感じに言う夏凜の目の前に入部希望所を突き出す。

「昨日、入部したでしょ?」

「け、形式上・・・」

「ここに入っている以上、部の方針には従ってもらいますからね」

「そ、それも形式上でしょ!? それに私のスケジュールを勝手に変えないてくれる?」

「あれ? 夏凜ちゃん日曜日何か用事あったっけ?」

翼が首を傾げる。

「う、な、ないですけど・・・」

「じゃあ、親睦会もかねてやろうよ。きつと楽しい！」

「な、なんで私が子供の相手を——」

「いや？」

友奈の言葉に、気まずい表情になる夏凜。

しばし周囲を見渡し、やがて諦めたかのようにため息をつく。

「わ、分かったわよ！日曜日ね。丁度その日だけは空いてるわ」

「素直じゃないなあ」

「そ、そんなんじゃないません！」

最後は簡単にまとめられ、その日の部活は終わったのだった。

夕方。

千景は手頃な長い棒の先に手頃なサイズの木の板を釘ではっ付けた擬似的な鎌を持ち出して、砂浜にやってきていた。

その理由は至って簡単。

特訓の為だ。

自分の精霊の加護、というか障壁バリアが無い以上、技術で戦うしかない。

一応、一撃必殺の『大葉刈おおはがり』があるが、あれが当たる保証はどこにもない。

その為には、鎌の使い方を十分に覚えておかなければならない。

あの『切り札』も使えるかどうかも分からない。

だから、策を弄する。

鍛える事で、敵の襲撃にいつでも対応できるようにする。

だからこその特訓だ。

自転車で砂浜についた時、ふと、すでに先客がいる事に気付いた。

「あれは・・・夏凜と翼か？」

そこには、二刀の木刀を様になっている様子で振り回す夏凜と、そ

れをまるで指導官の様に見守る翼がいた。

気になり、声をかけてみる。

「おーい、夏凜、翼！」

「ん？不道じやない」

「あ、千景君」

二人に駆け寄る千景。

「どうしたんだい？」

「精霊の障壁がないからな。こうして鍛えようかなと」

「ふーん・・・あ、君の武器は鎌なんだね」

「まあな」

彼らから距離を取り、試しに振り回してみる。

目の前で両手を使って回転。その勢いのまま左手首を軸に体の後ろに回し、背中に来た時、右手で受け取る。

そのままものすごい勢いで振り回し、気持ちの赴くままに鎌を振るった。

そして最後は、体を回転させ、右から左にかけて鎌を薙いだ。僅かに空気が揺れ、風が巻き起こる。

「ふう・・・」

「・・・」

「・・・」

それを見て、茫然としている翼と夏凜。

「ん？どうした？」

「・・・なんだか様になってるわね・・・」

「以前にも、鎌を振った事が？」

「いんや、ない」

きつぱりと答えた。

それにうーんと唸る二人。

「・・・なんだよ・・・」

「いや・・・うん、その鎌、形はしっかりしてるから、夏凜ちゃんと一度手合わせしてみたらどうかかな？」

「え」

「ほら、これから人とも戦っちゃうわけだし、夏凜ちゃんは僕と何度もやっているから、問題無いと思うよ。危なくなったら、僕が止めるからさ」

にこやかに笑って言う翼。

「……どうする？」

「……いいんじゃないかしら？」

いやそこは止めるよ。

と、言いたかったが、もはや流れという感じで始まってしまった模擬戦。

「一応、遠慮はいらんだよな？」

「ええ。どこからでもかかってきなさい」

互いの得物を構える。

右半身を前に、鎌の刃を前方斜め下にして構える千景。

同じように右半身を前に、右手の木刀の切っ先を千景に向け、左手を後ろに下げて構える夏凜。

しばしの沈黙。

「それじゃあ、準備はいいね？」

「OKだ」

「私もいいです」

「それじゃ」

右手を上げる翼。

「いぎ、尋常に——勝負ッ！」

開始と同時に手を振り下ろす翼。

それと同時に、開幕速攻と言わんばかりに夏凜が砂地を蹴って駆け出す。

(速いッ!?)

生身の状態でのその速度に目をむくも、千景はすぐさま迎撃の構えを取る。

「ハアッ！」

左からの薙ぎ払い。

それをよけきれないと判断した千景は鎌の柄で防御。

すぐさま右手の木刀を振り上げ、真つすぐに振り下ろす。

だが、それを上手くさがって避ける千景。

だが、追撃と言わんばかりに夏凜が追いかける。

二刀による連撃。

それを千景は巧みに鎌を動かして防ぎ受け流す。

「くっ！」

「防御してるだけじゃ、勝てないわよー！」

右の木刀による左薙ぎ。

それによつて大きく鎌を横に弾かれる千景。

「やばっ……」

「貰った！」

すぐさま左の木刀の連撃。完全に腹に入る一撃。

だが。

「まだ、だあー！」

「な!？」

自分の体を軸に鎌を背中に回して左手から右手に持ち変え、鎌の刃の峰でその一撃をそらす。

「しまっ……」

「ハアッ！」

そのまま鎌の刃と柄の付け根を叩き付けるように突き出す。

「舐めるな！」

だが、夏凜は無理矢理体を捻り、両手の剣を交差させてその打突を防ぎ、ただし踏ん張りが効かず、後ろに大きく吹き飛ばされる。

砂浜を転がり、しかしすぐさま態勢を立て直し、靴底を擦らしながら立ち上がる夏凜。

「ハア……ハア……やるじゃないの！」

「ゼエ……ゼエ……そりやどうも」

息を切らして睨みあう二人。

だが、しばし膠着状態が続いた後、二人はまた激突した。

結果は千景の負けだった。

体力の問題だったようで、先にばてた千景がだんだんと夏凜に蹂躪されていき、あとはフルボッコ祭りだった。

「くっそお・・・」

「まずは体力付けるところからね」

自転車をこぐ千景と夏凜。

翼は、片腕が使えない上に、住んでいる場所がなんらかの理由で駅前のマンションになっていて、帰りは別となっているのだ。

ただ、どういう訳か千景と夏凜の住んでいる場所は、同じアパートであり、さらに家が隣同士である。

「どーして今まで出会わなかったんだ？」

「それ、私に言われても困るわよ」

アパートにつき、自転車を置く。

「ん？そっぴいやお前、夕飯どうしてんだ？」

「ん？・・・ああ、それは・・・あ」

千景の質問に答えようとした夏凜だったが、何かを思い出したかのように廊下で止まる。

「・・・夏凜？」

「・・・弁当買うの忘れてた」

予想を斜め上に行く答えだった。

「どうしよう・・・翼様からは一日三食と言われていたのに・・・」

青ざめる夏凜に、やれやれと言った感じで笑みを零す千景。

「仕方がない。俺の部屋に來いよ。飯、出してやんよ」

「え？悪いわよ、そんな」

「遠慮すんな。それに、ちゃんと食べねえと愛しの翼様に怒られるんだろ？」

「い、愛しとか言うな！」

千景のからかいに思わず牙を向く夏凜。

だが、その勢いは急激に弱まっていく。

「それに・・・もう私の初恋は失恋で終わってるわよ・・・」
「え？」

「なんでもない。さ、夕飯、食わしてくれるんでしょ？」

「・・・おうー！」

と、いう訳で自分の家に夏凜を招き入れる千景。

千景の部屋は、散らかっている訳ではない。

ノートパソコン、大量のゲームカセット、ゲーム機、etc。

とりあえず電子機器が多い。

「・・・ゲームマーなの？」

「まあ、そうだな」

「こんなんで料理出来るとは思えないわね」

「よく言われるけど、これでも俺がいた施設の所長から手解きは受けてきたんだぞ」

「まあ、期待しないで待ってるわ」

「あ、そう・・・」

と、ソファに座る夏凜。

台所では、千景がタンタンと包丁で材料を切っている。

「ほんと、ゲームばっか・・・ん？」

ふと、夏凜は抽斗ひきだしの上に乗っている写真入れを見つめる。

「これは・・・」

見て見ると、そこには、おそらく千景が以前いたであろう施設の写真があった。

それには集合写真かのように、沢山の子どもや中学生たちが並んで立っており、その端とかには、施設の職員であろう大人たちが笑顔で立っていた。

その中で、唯一笑っていないまだ小学三年くらいの男の子がいた。

「これ・・・不道・・・よね・・・」

目の下にはうっすらと隈が出来ており、足が痛いのか重心がズレている。

しかも、その表情はどこか悲しそうだった。

「……」

夏凜は、千景の多くは知らない。
だが、この写真の千景の様子を見るに、そこまで良い生活とはいえないだろう。

「どうしてこんなもの飾っているのかしら……他には……」
傍にあったアルバムを見てみると、他のは全て讃州中学での生活ばかりだ。

川でのごみ拾い、幼稚園での演劇、機械の修理、困っている老人を助けていたり、どれも勇者部としての活動ばかりだ。

ただ、その中の一枚だけ、なんとも不思議な状態の写真があった。
夏凜でも目を疑いたくなるような写真。

そこには、白いスーツのような服を着た千景がいた。そこまでは良い。

問題なのは、何故かその傍らで笑うウェディングドレス姿の友奈がいる事だ。

「これ……友奈……よね……?」

それは確かに友奈だ。だが、どこか雰囲気は全く持って違う。

それは何故か。

おそらく、化粧だ。

その化粧が、友奈の魅力を存分に引き上げ、全く別の次元の存在へと変えているという事だ。

友奈だけど友奈じゃない。知っている人物だが別人。

そんな曖昧な存在へと変わり果てている。

しかし、何故そんな写真がここにあるのだろうか。

「どうしてなのかしら……」

「ああ、それはデザイナーの人の依頼で、結婚式の際に着るウェディングドレスとタキシードの試着を頼まれてな」

「へえ……って、うわあ!?!」

数秒、遅れて飛び上がる夏凜。

「ついでに宣伝の為に写真を撮られて、その一枚がこれ」
そんな夏凜を無視して説明する千景。

「そ、そうなの・・・」

「あ、飯、出来たぞ」

「・・・いただくわ」

出されたのは、ごく普通のかけうどんだ。

「いただきます」

そんな訳で、食べ始める二人。

「ま、まあまあつてところかしら」

と、すまし顔でうどんをすすする夏凜。

「そりやどうも」

それに顔を引きつらせながらも我慢してうどんをすすする千景。

しばらく無言状態が続く。

ふと、先に口を開いたのは夏凜だった。

「あんたさ。以前、施設にいた頃は、何があつたの？」

「・・・」

思わず、手を止める千景。

そして、天井を仰ぎ見る。

「・・・そうだな・・・虐められていたな」

「隠さないのね」

「写真、見たんだろ？だったら、大抵予想は出来ている筈だ。俺は虐められていた。その範囲は、施設だけじゃない。学校も同じ。少なくとも味方は所長のじっちゃんだけだったよ」

千景は、自分の左耳に触れる。

「髪を切ると言われて耳に傷をつけられた。風呂に入っていれば溺れさせられた。飯の時はひっくり返された。絵を描いていれば破られた。机の上は落書きだらけ傷だらけ。部屋は荒らされベッドはボロボロ。犬を隠れて飼っていたら殺されて。そりやもう散々だったよ」
今でも、耳につけられた傷は、時々痛む。

「お陰で、俺は現実というものをいつも突きつけられた。誰も味方なんてしてくれない。助けてくれない。だからこそ、自分で這い上がり

なくちやいけなかつたんだ」

まだ鮮明に思い出せる。嫌な笑みを浮かべる同じ施設の子どもたち。

手にはハサミを、鈍器を、とにかく自分を痛めつけられるものを持っていた。

「なんか、悪かったわね・・・」

「いや、俺も話したのはお前が初めてだ。誰かに話すっていうのも良いもんだな」

はは、と乾いた笑い声をあげる千景。

「まあ、陰気臭い話はこれぐらいにして、今度はお前の話を聞かせてくれよ。例えば家族の話とか」

「そうね・・・私には、兄がいるの」

「へえ、お兄さんがいたのか。名前はなんていうんだ？」

「春信よ。これがなんでも出来る人でね。大赦でもかなり上の方の地位にいるわ」

「ちなみにそのお兄さんとは？」

「疎遠になつてゐるわね。兄貴がなんでも出来るから、周りにもそれを強要されてね」

「良くある話だな。出来る兄と出来ない妹で見比べられる、てやつか」
「ええ。兄貴の妹なんだからこれぐらいはしろ、なんで出来ないんだって。毎日周りから言われてきたわ。親からもね。それに、兄貴の邪魔をするとも言われたわ。だから私も話しかけなかったわ。それなのに、あの馬鹿兄貴は、私に構ってきた」

「どんなふうによ？」

「勉強分らない所ある？とか、プリン分けてあげる、とか。なんかうざかったわ」

「愛されてるねえ・・・」

「どこがよ!？」

ガタン！立ち上がりかける夏凜。

「じゃあ聞けよ。お前のお兄さんは、自分のようになれ、とか、これぐらい出来るようになれ、とか言われたのか？」

「い、言われなかったけど・・・」

「だったら、やっぱりお前はお兄さんに愛されてるよ。あ、妹としての意味でな。大切な奴に優しくしない奴なんかいない。時々、怒る時はあるけど、それはきつと、間違った人生を歩んでほしくないからじゃないか？」

「・・・でも、そのうちあまり兄貴の方から話しかけてこなくなつたから、もう呆れられたんじゃない・・・」

「お前さ。いつも避けるように行動したら、嫌われてるって思われるに決まつてんだろ？だったら話しかけづらいに決まつてるだろ？」

「・・・そうなのかしら・・・」

「そうなんだよ。ほんと、優しいよお前のお兄さんは」

「・・・そう」

頬を赤く染め、うつむく夏凜。

それから、しばらく談笑し、うどんを食べ終えた。

「一応、ありがとうと言っておくわ」

「そりやどうも。はい、本日三回目科白く」

玄関の前にて、そう軽口を言い合う二人。

ふと、そこで少し考え込んだ千景。だが、すぐに何かに思い立ったのか、顔をあげ、夏凜を見る。

「夏凜」

「何よ？」

「これから、毎日がきつと楽しくなるぜ」

「・・・あ、そう・・・」

興味無さげに、夏凜は隣の自分の家に入っていく。

そんな様子に、千景は不満を見せずに、中に戻っていく。

「さあて、記録、塗り替えに行きますかね」

そう言い、テレビに電源を入れるのだった。

新入りの誕生日

日曜日。

「……来ないな」

「そうだね」

子ども会会場にて、まだ来ない人物を待っている、勇者部一同。
部長の風、同じ三年の剛、二年の千景、友奈、美森、翼。そして一年の樹。

この中で来ていないのは、夏凜だけだ。

「うーん……電話にも出ない……」

「マジかよ……」

「千景は何か知らない？」

「いや。内緒で出てきたからな……」

「まいったなあ……」

「全く、どうしてこんな時に……」

風が頭を抑えて唸る。

「仕方が無い。先に行ってみよう」

それに、全員が拒否する事はなく、仕方なくうなずいた。

「……」

「夏凜ちゃん……」

まだ来ない少女の心配をし、千景と友奈は公民館へと入っていく。

結局、夏凜は来ず、千景たちはパワフル全開ハチャメチャモードの子供たちによって開放されるのに時間がかかってしまった。

三好夏凜。

才能の塊たる、三好春信の妹。

彼女は、子供の頃から、兄と比較され続けてきた。

兄の凄さを熱く語ってくる者もいれば、その兄の様なれと強要する者もいた。

正直に言っとうんざりだった。

いつも兄と比較されてきたため、何か一つでも兄に勝る事をしようと必死になっていたなか、『勇者』という大赦の『御役目』がある事を知った。

血の滲む様な努力の末、夏凜は、どうにか勇者になる事が出来た。

同時に、六道家の次期当主である、翼と共に戦える事に歓喜した。

勇者となった今でも、鍛錬は欠かさない。むしろ、これからが本番と言えるのだ。

休んでいられない。

だというのに。

あの勇者部にいる連中は、バーテックスと戦っている上に、特異点として、あの六人組とも戦わなければならないのに、あの緊張の無さ。もつと、勇者としての自覚を持ってほしい。

翼でさえも、その雰囲気にも飲まれている。
むしろノリノリな感じだ。

今日行われる子ども会でのレクリエーション。

あれは、自分が集合場所を間違えたのだが、そもそもあんな気の抜けた奴らに付き合う必要などない筈なのだ。

そう、付き合う必要などない。

ない、はずなのに——どうしてこんなに心が沈むのだろうか？

ランニングマシンの電源を落とす夏凜。

「滞りなし・・・」

酷く小さい声。

そこで、玄関の方で、来客を知らせるベルが鳴る。

「?・・・!?!」

それは、一回にとどまらず、何度も何度もうるさくベルを鳴らされる。

新手の押し売りか何かか。

木刀を持ち出し、おそろおそろ、玄関へと向かう。

そしてノブへと手をかけ、一思いに思いつきり開ける。

「誰よー!」

『うわあああ!?!』

木刀を向けた途端、複数の悲鳴が響いた。

「・・・え?あんなたち・・・」

そこには、千景、友奈、美森、風、樹、剛、翼の勇者部全員がいた。
その手に、大きな袋を持って。

「あ、アンタねえ!何度も電話かけてんのに、なんで電源オフにしてるのよ!?!」

「それにいきなり木刀向けるたあどういう了見だオイ!?!」

風と剛が文句を言う。

「そ、そんな事より何!?!」

「何ってあんた、心配になったから見に来たのよ?」

「心配・・・?・・・あ・・・」

今日行われる子ども会の事を思い出し、はっとなるが、目を逸らす夏凜。

「良かった。寝込んだりしてたんじゃないんだね」

「それならそれで看病する為のおかゆの材料を買ってきちまったぞ。まあ、それでも歯応えのあるものも買ってきたが・・・」

友奈と千景が安心した様に笑う。

「え、ええ・・・」

「じゃ、あがらせてもらうわよー」

と、風が本人の意志に関係なく勝手に部屋にあがっていく。

「え、ちよつと・・・!?!」

「まあまあいいじゃない」

「つ、翼様・・・!?!」

と、部屋にあがっていった一同。

「殺風景な部屋・・・」

「どうだっついていいでしょ!?!」

部屋の様子を見て風が一言。

「これすごーい!プロのスポーツ選手みたい!」

「勝手に触らないでよ!?!」

ランニングマシンで樹が驚く。

「わあー!?!・・・水しかない・・・」

「買ってきて正解だったな」

「勝手に開けないで!」

友奈と千景が冷蔵庫の中身に落胆。

「なんなのよ・・・いきなりきてなんなのよ!?!」

そこでどうとう夏凜が怒鳴る。

「あのね」

「?」

「ハッピーバースデー!夏凜ちゃん!」

と、友奈がどこからともなくバースデーケーキを取り出した。

「・・・え?」

「夏凜ちゃん、お誕生日おめでとう!」

「おめでとう」

「ど、どうして・・・」

「ほら、昨日出した入部届。そこにちゃんと書いあるんだよ」

翼が説明した通り、風が取り出した入部届には、夏凜の生年月日が記入されていた。

「結城が見つけたんだよ」

「あ、て思っちゃった。だったら誕生日会しないって」

千景以外の全員がパーティーハットをかぶり、剛と友奈がそう言う。

「歓迎会も一緒に出来るねって」

「うん！」

「本当は、子供たちと一緒に児童館でやろうと思ったの」

「なのにお前ときたら、全然来ないからな」

千景が台所であってに料理を作り始める。

「家まで迎えに行こうかと思ったんだけど、何分子供たちのわんぱくさに驚かされてね」

「結局、こんな時間になるまで開放されなかったのよ。ごめんね」

それを聞いて茫然とする夏凜。

それに首をかしげる一同。

「ん？どうした？」

「夏凜ちゃん？」

「あれー？もしかして自分の誕生日忘れてたー？」

「・・・あほ」

夏凜が何かを呟く。

その間に千景は油を入れた深底の鍋で揚げ物を揚げ始める。

「ばか・・・ぼけ・・・おたんこなす・・・」

「へ？」

「なんだよそれ!？」

罵詈を吐く夏凜の眼は、かすかにうるみ、頬はほのかに赤くなっていた。

「誕生日会なんてはじめてだから・・・なんて言ったらいいのかわか

んないのよ……」

「なんだただの照れ隠しかよ」

「う、うっさい!……ってなによそれ?」

「何って、からあげだとかコーンスープだとか、あとサトウのご飯とか色々」

「千景君はね、料理、ものすごく上手なんだよ!」

「私の次にね」

料理を終えてやってきた千景の手には、大量の料理があった。

「ま、なんだ……今日ほどもでたい日はないって事だ」

千景は、壁にかけられているカレンダーに目を向ける。

そこには、六月十二日の場所に、赤いマーカーで丸が付けられている。

それを見た友奈が、夏凜を見て微笑む。

「お誕生日おめでとう、夏凜ちゃん」

夏凜は、それを恥ずかしそうに受けるのだった。

『かんぱーい!』

そんな訳で始まった夏凜の誕生日会。

「アハハ! 飲め飲め!」

「コーラで酔っぱらうな!」

「良いじゃない! こういうのは雰囲気よ」

「そうとは思わないけど……」

千景が作った料理やお菓子を広げ、騒ぐ一同。

「んー! 千景君の作ったからあげはやっぱり美味しいなー!」

「あ、友奈ずるい! 私にも食わせなさい!」

「俺にも食わせろ結城!」

千景の作った料理にがつつく友奈に続くように風や剛がかぶりつく。

「あ、折り紙!」

「上手じゃないか」

「み、見ないで下さいー!」

テレビの下のたんすにある折られた鶴を見つけた樹に、それを褒める翼。そして羞恥に顔を赤くする夏凜。

「ふふ。そういえば千景君」

「ん？どうした東郷？」

「最近、頭痛が多いって言ってたけど、大丈夫？」

「一日一回程度だからな。子ども会やってる時にもう来たよ」

「そう・・・酷くなったらいつでも言ってみてね。悩んだら相談、よ」

「ああ」

ただ、今回はとんでもなく気分の悪くなりそうな内容だったのは覚えてる。

なんだか、壊れた都市の中、大きな卵が大量にあり、その中で何かが蠢いているような、そんな、人類の全てを否定するかのような光景だった。

思い出すだけで気分が悪くなる。

ただ、今回はその光景だけで、その時の心境は分からずじまいだ。

「まあ、それは後で相談するとして、今は夏凜の誕生日会だ。楽しもう」

「そうね」

そう言い合う二人。

「えーっと、勇者部の予定と、私たちの遊びの予定と」

「勝手に書き込まないでー！」

いつの間にか夏凜のカレンダーに色々と書き込んでいる友奈。

「勇者部は土日になんか活動があるんだよ」

「俺も日が浅いが慣れると楽しいぞ」

「忙しくなるわよー」

「勝手に忙しくするなー！」

絶叫する夏凜。

「そっかよ忙しいよ。文化祭でやる、演劇の練習とか」

「え？」

「え？」

「演劇？」

「オイ待て、いつ決まったんだ？」

千景が友奈をジト目で見る。

「あれれ？もしかして私の中の勝手なアイデアを口走っちゃっただけかも……」

「バカなの？」

と、慌てる友奈と呆れる夏凜だったが。

「良いねえ、演劇……」

『え？』

『は？』

風のつぶやきに全員が間抜けに声を漏らす。

「決まり！今年の文化祭の出し物は、演劇で行きましょう！」

今ここに文化祭の出し物が決定した瞬間だった。

「ていうか、アタシも勝手に巻き込まないでよ！」

「いいじゃん、暇だったんでしょ？」

「忙しいわよ！トレーニングとか！」

顔を背けて言う夏凜。

「演劇かぁ……懐かしいなあ……」

と、翼がそう呟いた。

「？」

その時の笑顔に、美森は、どこか悲しそうな表情を感じ取っていた。

ただ、その正体は分からない。

「良かったな。友奈」

「うん！」

そんなこんなで終わる誕生日会。

「そんじゃ、私ら帰るねー」

「帰れ帰れー！」

「俺は後片付けするから」

「また来るねー！」

帰っていく千景以外の勇者部一同。

彼女たちを見送った千景と夏凜は、すぐさま片付けに入る。

「悪いわね、片付けに付き合わせて」

「こうでもしないと生きていけないからな」

夏凜は菓子のごみを、千景は皿洗いを片付けていた。

「それにしても、アンタ、随分と友奈と仲良いのね」

「へ!？」

ゴミを出しに外へ出ていた時に、そう言われ狼狽える千景。

「あら?もしかしてこの手の話に弱いとか?」

「わ、悪いかよ・・・」

「ふっふくん?」

夏凜は格好の餌でも見つけたかのような表情になる。

それに背筋が僅かにゾツとする千景だったが、すぐに振り払ってゴミ袋を置いた。

「そんじゃ、また明日な」

「ええ」

それぞれの部屋に戻る二人。

「さて、風呂にでも・・・ん?」

ふと、千景は自分の携帯にメールが来ている事に気付いた。

こんな自分に、アプリではなくメールという連絡手段で連絡してくる人物を、千景は一人しか知らない。

それを確認した瞬間すぐさまその内容を確認する。

『家が隣同士だなんて知らないよー!』

送ってきた人物は友奈だ。

ただ、その内容を見て、千景は思わず吹き出す。

『なんだ?ヤキモチか?』

『なんだか夏凜ちゃんずるいー!』

『そう言うなって。お前なんてしょっちゅう来てるだろ?』

『そうだけどさあ・・・どうせ夏凜ちゃんにご飯一緒に食べたんでしょー?』

『何故分かったし・・・』

『ひどい!』

『悪かった』

『今度美味しいうどん食べさせたら許してあげる!』

『オーケー、約束だ』

『うん！』

どうにか機嫌を取りなおした事にホツとする千景。

『あ、風先輩が夏凜ちゃんにあのアプリ、ダウンロードさせたみたいだから、続きは夜に！』

「へえ・・・」

千景はすぐに返信を返す。

『分かった。夜にな』

『うん！』

会話を終わらせ、すぐにシャワーを浴び、パジャマに着替える千景。電気を消し、ベッドに寝っ転がる。

風『あんたも登録しておいてね。今日みたいに連絡の行き違いがないようにね』

樹『これから仲良くしてくださいね。よろしくお願いします』

東郷『次こそはぼた餅食べてくださいね。有無は言わせない』

友奈『ハッピースーパースデー夏凜ちゃん！学校のことや部活のことでわからないことがあったらなんでも聞いてね』

剛『困った事があったらなんでも聞けよー。東郷に』

千景『押し付けてどうするんですか・・・』

剛『やかましい』

夏凜『了解』

「お、夏凜から来た。こりやあれるな」

笑みがこぼれる千景。

その言葉通り。

友奈『わー返事が帰ってきた！』

風『ふふふ、レスポンスいいじゃない』

千景『いいじゃないか』

友奈『わーーい』

樹『わーーい』

東郷『ぼた餅』

翼『何故に!?!』

夏凜『うつさい!』

風『ぶはははははは』

東郷『ぼた餅』

剛『いやぼた餅から離れるよ』

「本当にぼた餅好きだな東郷は・・・ん？」

そう呟いた直後。

友奈『これから全部が楽しくなるよ!』

「・・・ふ」

その言葉に、思わず笑みが零れる千景。

千景『ああ、楽しみにしてな』

それを最後に、その日の会話は終わった。

いない。いない。誰もいない。

誰もが死んでいる。

誰かが生きているなんて、そんなの俺^{わたし}たちのただの願望だったんだ。

骨の山、壊されたバリケード、破壊されたビル。

そして、あの光景。

も

あんな風にはなりたくない。死にたくない。あんな死に方はしたくない。

称えられないまま死にたくない、褒められないまま死にたくない、愛されないまま死にたくない。

忘れられて死にたくない。

俺^{わたし}の、わたしの、私の名前は――

歌が苦手な勇者

某日――

「千景先輩、話があります」

本日の千景に対しての樹の第一声はこれだった。

「……どうした？そんな真剣な顔をして……」

樹のらしからぬ気迫に、どうにも嫌な予感がする千景。

一応、作業の手を止めて聞く。

「えっと……その……」

俯いてもじもじとします樹に、千景はいよいよ何かある、と身構える。

いつまでも言い淀むために、気まずい沈黙が二人を支配する。

だが、樹が一度深呼吸し、やがて決意を改めたかのように表情を引き締める。

「よし……」

「……」

千景もゴクリと唾を飲みこむ。

そして次の瞬間――

「私に歌を教えてください！」

「……そっちなか」

犬吠埼樹は、人前で歌を歌うのが、ちよっぴり苦手である。

「つまり、近々、歌のテストがあるから、それに向けて上手く歌えるようになりたいと」

「そうなんです……」

腕を組んでそう言った千景の言葉を肯定する樹。

「なんで千景なんだ？」

剛がそういう。

結局、その場にいた全員が樹の叫びを聞いていた訳なので、勇者部五箇条が一つ『悩んだら相談』に則り、勇者部全員で樹の歌について話し合っていた。

「千景君、歌がものすごく上手なのよ」

美森がそういう。

「そうなのか？」

「去年の内申、音楽の成績は学年トップよ」

「すごいね」

風の言葉に感嘆を漏らす翼。

「俺はただ普通に歌っているだけだが・・・」

「それでカラオケで毎回100点満点取るんだからすごいよね！」

「どんな声帯してんのよ・・・」

うんざりした表情で言う千景に対して、褒める友奈と呆れる夏凜。

「一応、占ってはみたんですけど・・・」

「占ってそうそう当たるもんでも・・・」

結果は――

死神の正位置、意味は、破滅、終局。

「・・・だ、大丈夫だ樹！占いなんてそうそう当たるもんでもねえよ！」

「当たるも八卦当たらぬも八卦、っていうでしょ？」

「そうだよ！こういうのって、もう一度占ってみれば、全く別の結果が出てくるものだよ！」

「そんなに言うならもう一度やってみろよ」

結果！

Take 2 死神の正位置！

Take 3 死神の正位置！

Take 4 死神の正位置！

『・・・』

もはや誰も何も言えない。

「だ、大丈夫だよ！4カードだからきつと良い役だよ！」

「死神の4カード……」

「ああ!?悪い意味じゃなくて……!」

「だあー!占いなんて当てになるかア！」

剛の絶叫で始まる樹の歌のテスト対策会議。

「歌が上手くなる方法かあ……」

「歌でアルファ波を出せれば、勝ったも同然ね」

「アルファ波？」

「良い音楽や歌というものは、大抵アルファ波で説明がつくの」

「いやないから!?俺だせないから!」

美森の言葉に思いつきりツツコミを入れる千景。

「ハハ、変わらないなあ……——は」

「? 翼君何か言った？」

「いや、なんでも」

翼のつぶやきに、反応する友奈だったが、誤魔化す翼。

「樹一人で歌うと上手いんだけどね……人前だと、緊張してしまうっ

ただけじゃないかな?」

「ようは気持ちの問題か」

「そっか、それなら」

ぽんと、手をたたく友奈。

「習うより慣れよ、だね」

そんな訳でやってきたカラオケ店。

「イエーイ!聞いてくれてありがとー!」

風がマイク越しにそう叫ぶ。

カラオケ店の一室にて、千景、友奈、美森、翼、風、樹、剛、夏凜はいた。

そして今歌っていたのは風だ。

「お姉ちゃん上手!」

「えへへ、ありがとう」

「ちよつとごめんね」

ふと樹からパネルを受け取る友奈。

「ねえねえ夏凜ちゃん、この歌知ってる?」

「ん?一応知ってるけど・・・」

その後の友奈の行動は決まっている。

「じゃあ一緒に歌お!」

「ええ!?なんでアタシが・・・慣れ合う為にここに居る訳じゃ無いわ!」

と、断りを入れる夏凜だったが。

「そうよね、私のあとじゃあ、ご・め・ん・ね」

と、風が挑発気味に言っ指を指した先には・・・

結果 92点

「・・・友奈、マイクをよこしなさい」

「え?」

「早くッ!」

「は、はい!」

そして勢い良く歌う友奈と夏凜。

「ハア・・・ハア・・・夏凜ちゃん上手」

かなり飛ばし過ぎたのか、息切れをおこしている友奈と夏凜。

「ふ、これぐらい当然よ」

結果 92点

「変わらないな」

千景がそう呟いた。

「次は、樹ちゃんだね」

「あ、はい」

翼に言われ、マイクを手に取る樹。

結果 惨敗

「はあ・・・」

「やっぱりまだ固いかな」

「あそこまで固い声は聞いた事がねえ・・・」

「緊張がほぐればどうにかなるんだがな」

風が腕を組み、剛があんぐりと口を開け、千景はジュースを飲みながらそう言う。

「誰かに見られていると思っただけで……」

「重症ね」

「夏凜ちゃん、そんな事を言わない」

「はい」

「まあ、今はカラオケなんだし、上手かろうと下手だろうと、好きな歌を好きに歌えばいいのよ」

「流石風、良い事言うー！」

「あ、アリガト……」

剛の誉め言葉に思わず顔を赤くする風。

これで互いに無自覚なのだからなお質が悪い。

「そうそう、気にしない気にしないー！」

「そうだぞ樹、こういう時はお菓子でも食べて——」

瞬間、千景の伸ばした右手に強烈な痛みが走る。

「ぎゃあああああああああ!?!」

「あああああ!?!牛鬼! それ食べ物じゃないから! 食べ物じゃないから食べちゃだめえええええ!!」

牛鬼が思いつきり千景の手に噛みついていていた。

気付くと、机の上にあつた大量のお菓子は全て消えていた。

「こ、この糞ビーフ……全部食いやがったな……ついでに俺の手もー！」

わなわなと怒りの炎を燃やす千景。

「牛鬼は本当によく食べますね」

「食べ過ぎだよお〜」

その直後、盛大な音楽がスピーカーから流れ出る。

「あ、私がいれた曲」

『!?!』

それを聞いた直後、千景、友奈、風、樹の四人がビシツと直立姿勢となり、敬礼をする。

「え!?!」

それに唾然とする夏凜と剛。

「お、なるほど」

そしてそれを察したのか、翼が遅れて立ち上がって敬礼をする。美森がくれたのは、軍歌だった。

終わった後、美森が歌い切ったと爽やかな笑みを浮かべていた。

それと同時に、立っていた五人も一斉に座る。

「さっきのは一体……」

「東郷さんが歌う時、私たちはいつもこうだよ」

「それにしても、翼よく乗ったわね。もしかして知ってた？」

「はは、まさか。ただ美森ちゃんが歌い始めた時にみんなそんな行動してたから、それに乗っただけだよ」

「あの、東郷と呼んで欲しいのだけれど……」

「ああ、ごめん、東郷さん。大抵の相手だと必ず下の呼んじやうんだ」

「ま、一種の癖って奴だな……ん？」

ふと、すぐさま次の曲が流れ出した。

「これは……東郷？」

「私じゃないわ」

それは軍歌だった。

「あ、僕だ」

『!』

まさかの翼だった。

歌い終わる翼。

「ふう……」

「お疲れ様です翼様」

「ありがとう夏凜ちゃん」

「まさか翼が東郷タイプだとは思わなかったわ」

「そうかな？」

翼がそう言った後、その手を取ってがっしりと握る美森。

「是非、是非、国防について話し合いましょう！」

「あ、ああうん……言っておくけど僕は陸軍派だよ？」

「構わないわ！その代わり私は海軍について話すから！何から話しま

しょうか？やはり戦艦長門かしら？それとも空母瑞鶴かしら？それとも——！」

「はいはい落ち着け東郷！翼が困ってんだろ」

「ああ！まだ国防について語り切れていないのに——！」

「ま、また今度でね？」

「ええ！」

美森は心底嬉しそうに翼の言葉を許諾するのだった。

「ねえねえ千景君！今度は千景君が歌ってよ！」

「俺か？そうだな……」

パネルを受け取り、曲を選ぶ千景。

「そうだな……これで良いか」

選んだのはロックンロール。

「お、珍しい！」

「たまには激しいのもな」

そんな訳で歌った千景。

その結果は——

100点

「ふう……」

「千景君、上手！」

「上手です千景先輩！」

「それはどうも」

「あれ？剛先輩？夏凜ちゃん？翼君？」

気付くと、夏凜、剛、翼の三人が口をポカンと開けて茫然としていた。

「……あつれ〜？もしかして千景の歌のうまさ感動して声も出ないとか？」

「……何も言えない」

「……天才としか言いようがないわね」

「……ここまですごいだなんて思わなかった」

どうにか絞り出した言葉がそれだった。

「次なに歌おうか？」

「好きに決めろ」

「おい待て！俺まだ歌ってねえぞー！」

次の歌は何を歌おうかと言いあっている間に、風の携帯に何かしらの連絡が入る。

それを見た風の眼が、見開かれる。

トイレにて。

流れる水を見ながら、黄昏る風。

そんな中に、夏凜がトイレの中に入り、背中を壁にもたれさせる。

「大赦から連絡？」

「……ええ」

「そう、アタシや翼様には何も言ってこないのに……」

何も言わない風。

「内容はだいたい想像つくわよ。バーテックスの出現には周期がある。だけど今の奴らの出現は、当初の予測とは全く違ってるわ」

「……最悪の事態を想定しろ、だってさ」

「怖いのか？」

風の手が、握り絞められる。

「貴方は統率役には向いていない。アタシや翼様の方が上手くやれるわ」

それに対して、風は水道の水を止め、振り返る。

「これは、私の役目で、理由なの。後輩は黙って、先輩の背中を見ていなさい」

そう言い、トイレを出ていく。

「……ふん」

それを見て、夏凜は鼻を鳴らすのだった。

夕刻、帰り道を歩く勇者部一同。

「あく、楽しかったあ」

「歩いて帰るの久しぶりだね」

「東郷は車椅子だから、送って貰わないとダメだからな」

「うん、でも、カラオケはあんまり樹ちゃんの練習にはならなかったかな？」

「でも、楽しかったですよ。皆が歌うのが聞けて」

友奈の言葉に、樹はそう返す。

そんな中、翼が剛にある事を話しかける。

「そういえば、剛さん、実家には帰らないんですか？」

それを聞いた剛の顔が曇る。

「実家？」

それを聞いていた友奈がそう聞いてくる。

「えっと……」

「俺の実家は、実は大赦にある程度の発言力を持つ家の一つなんだよ」

「え？それじゃあ三ノ輪先輩っていいところのぼんぼんってところですか？」

「ぼんぼん言うな」

しばし言い淀んだ後に、剛は自分の身の上話を始める。

「俺の家は、確かに大赦の中でも発言力を持つ家系の一つだ。だけど、発言力があるからといっても、裕福なわけじゃねえんだ。その為、俺は中学に上がると同時に出稼ぎに出ると決めたんだ」

「中学からって、結構大変なんじゃ……」

「親は反対したんだがな。お前がそこまでする必要はないって。だけど俺には妹と弟がいて、さらにお袋の中には赤ちゃんがいて。その上仕事まで大変そうだと思っただけ。そんな親に楽しませたくて、俺は実家を飛び出したんだ」

「立派な理由ですね」

「まあな。だけどな」

剛の表情に影が差し、声も低くなる。

「……その年に、妹が死んだ」

『え……』

翼以外の、全員がそう声を漏らした。

「それを聞いたのは、妹が、小学校の遠足に行った数日後、告別式の日だったよ。その時には、妹は棺桶の中で眠ったように死んでいた。どうも、大赦の『御役目』とやらの最中に、死んだらしい」

「そのお役目の内容って……」

美森が、遠慮がちに聞いてくる。

「よくは知らねえ。ただ、命をかける程の危険な事らしい」

「なんだか、すみません……」

樹が謝る。

「俺は、火葬される前に一度妹の顔を見ただけで……あとは、何もしなかった」

夕焼け空を仰ぎ見る剛。

「まるで、自分が自分でなくなったかの様に、心がどっかに行っちゃまったようになってな。俺は何のために家を出たのか、それすらも忘れちゃった。何もかもがどうしてもよくなつて、学校も行きたくなくなつて、あつちこつちで喧嘩だとかカツアゲに明け暮れる日々だった。だけどな」

剛は俯き、フツと笑う。

「そんな中だよ。わざわざ学校を抜け出してまで俺を引っ叩きに來た奴が來たんだ。ソイツが言った言葉は今でも覚えている」

そう、今でも思い出せる。

とうとう、全てを忘れたくて、薬に手を出し掛けた時だった。

それを奪い取り、思いつき頬を叩いた、一人の少女。

それに茫然とし、見上げる中で、胸倉を掴まれ、涙に濡れた目でこちらを睨み付けてくる少女が、大きな声で、自分を叱った時の言葉を。

『アンタの妹は、アンタにそんな風に生きろって言ったの!?!』

初めてだった。

あんな事を言われたのは。

家では、母の手伝いや、まだ気弱だった妹ややんちゃな弟の世話をしたりで、かなりの働き者だったからそんな事はなかったが、妹が死

んだ事で怠惰な生活を送っていく中で、初めて、叱られる事を、自分の為に放たれる暖かい平手打ちというものを受けた。

「今でも、ソイツには感謝してるんだぜ？なあ、風」

「・・・あ・・・えと・・・その・・・」

剛が振り向いた先では、顔を真っ赤に染める風が立っていた。

「その・・・私は・・・ただ・・・アンタに、全うに生きて欲しかったというか・・・なんというか・・・」

「・・・可愛いね、君のお姉さん」

「はい」

「コラ翼！恥ずかしい事を言うな！それに樹も悪ノリするなあああ！！」

顔を真っ赤にした状態で風が翼と樹を追いかけまわす。

「まあ、心配とかななくてよかったです」

「妹の事は、あいつのお陰で乗り越えられた。だから、俺はあいつに返しても返しきれない恩ってものがあるんだよ」

「あれ？それじゃあなんですぐに勇者部に入らなかつたんですか？」

何気なく鋭い指摘をした美森。それを聞いた剛はきよんとした。

「え？なんでって・・・そりや不良として絶大な評価を持つ俺が勇者部に入れば、部の評価が落ちるんじゃないかという俺の配慮だが？」

「「あー・・・」」

なるほど、と納得する三人であった。

向こうでは、風の追撃を巧みに避ける翼と、すでに風によって轟沈させられている樹の姿があった。

後日、友奈が考え付いた応援方法によって、樹は無事に音楽のテストを合格したというのは、別の話。

人目の付かない、森の中にある、洞窟の中にて。

「傷の方はどう？翔琉さん」

「ああ、大分治ってきた」

幸奈が、ベッドの上で上体を起こしている男、『八神翔琉』と対面していた。

「奴らの動向はどうだ？」

「特に大きな行動は起こしていないと、佐奈さんがそう言っていました」

「そうか。次の襲撃はいつになる？」

「一週間後と」

「ならば、そろそろ一ヶ月の遅れを取り戻さなければな」

ベッドから降りる翔琉。

「その事で、アモルさんから
「？」」

幸奈に連れられ、とある部屋に案内される翔琉。

そこには、翔琉と幸奈以外の全襲撃メンバーの四人がそこにいた。
それともう一人、妖美な気配を漂わせる、白衣姿の女がそこにいた。

「何の用だ、アモル」

「ふふ、貴方のそういう態度、私、好きよ」

「ふざけるな」

女性、アモルを睨み付ける翔琉。

それに呆れた様子で手に持っていた携帯端末を翔琉に向かって投げ
げる。

それを片手で受け取る翔琉。

「アップデートしておいたわ。それなら、幸奈と同じように、簡単に精
霊の障壁を突破できるはずよ」

「それじゃあ……」

「ああ、邪魔な奴らを殺せる」

佐奈が、そう言う。

「それともう一つ、装備に新しいのをに入れて見たから、後で試してみ
ね」

「……感謝する」

澁々と感謝の意を示す翔琉。

「これ……で……全……部……」

「ああ、これで由美と由佳を殺したこの世界を壊せるんだ」

「アハハ、いいよねいいよね。新しい世界！楽しみだな楽しみだな」

「これで……救われる。あの子たちも、きつと……」

それぞれが、感情の高鳴りを抑えきれていない。

「……」

幸奈は、携帯の画面に映し出されている、写真を見ていた。

「……千景君、貴方は私が——」

きつと、不道千景にとって、彼女は最大の壁となるだろう。

「——新世界へ、連れて行ってあげる」

「俺は、殺す。神樹を殺す」

少年は神を憎む。

少女は周囲を憎む。

少年は人を憎む。

少女は世界を憎む。

少年は敵を憎む。

少女は今を憎む。

全ては、新たな世界の為に——。

その笑顔の意味

某日。

「今日は僕と東郷さんだけだね」

「そうね」

放課後、勇者部部室にて、翼と美森はやってきていた。

今日は他の部員は全て出払っているため、今は二人だけなのだ。

千景と夏凜はある屋敷の壊れた機械や道具の修理を手伝いに行っている。

風と樹は資源回収のボランティア。

友奈と剛は生徒会の手伝い。

そんな中で、翼と美森だけは今日は依頼は来なかったもので、こうして部室で文化祭の出し物の準備をしている訳なのだ。

「・・・」

美森は、翼の挙動にどうにも不信感を抱いているのだ。

どうにも、自分に対しては妙に優しいというか、遠慮しているというか、距離を取っているというか。

パソコンを操作する中で、美森は、どうにも彼の事が気になってしまふのだ。

どうしたというのだろうか。

「これを、こうして・・・うん。こうだ」

一方の翼は、片手だけなのに巧みに衣装の材料となる布を切っていた。

さらに裁縫道具でミシンよろしく縫っていく。はつきり言って美森よりもハイスペックだ。

やはり家系というだけあって相当な技術の持ち主だ。

「それで・・・ん？どうかしたの？東郷さん」

「あ、いえ、なんでもないわ」

突然、声をかけられ、慌てて自分の作業に戻る美森。

「ふくん・・・あ」

ふと、翼がポケットから携帯を端末を取り出し、立ち上がった窓際の方へ歩く。

「どうしたんだ？・・・うん・・・そうか・・・分かった・・・
ありがとう。引き続き、調べてくれ。いいね・・・うん・・・
父さんや兄さんには、元気にしていると伝えておいて・・・それじゃ」
通話を終わる翼。

「大赦から？」

美森が聞いてみる。

「まあね。といつても、僕ら六道家が担当している暗部からだけど。
ついでに言つて、今の僕の権限で動いてくれる人からの連絡だけど
ね」

「そう・・・」

なんだか、翼の美森に向ける笑顔が、どこか悲しそうに見える。

「どうかしたのかい？」

「いえ・・・なんだか、貴方が悲しそうで・・・」

俯いてそう答える。

その時の翼の表情は、僅かに目が見開かれていたが、いつものいっ
ぱいの優しさの中にほんの少しの哀しみが紛れた笑みで微笑む。

「そうかな？」

「・・・いえ、なんでもないわ」

「・・・そっか」

と、ポケットへ携帯を入れる翼。

「それはそうと、ホームページに新しい依頼とかの入ってないのかな
？」

「あ、見て見るわね」

パソコンを操作する美森。

「えっと・・・まだ来てないわね」

「そうか・・・なんだか、こればかりだと暇だねえ・・・」

と、すでに作り終えた衣装を畳みながらそう言う。

「あ、そうだ。せっかくだからこの間の約束でも果たそうか」
「！」

瞬間、美森の眼がきらめく。

「ええ！何から話しましょうか！」

「そうだね・・・あ、それじゃあ、デストロイヤーと呼ばれた菅野直はどうかな？」

「日本空軍が誇るパイロットの一人ね！良いわ！」

そこからは、とても会話が弾んだように思える。

時間を忘れて、ただ互いが知る限りの知識を言い合った。

そして、気付けば時刻が六時に差し掛かっていた頃。

「あー、やっと終わった」

「まさか修理だけであんなに疲れるなんて思いもよらなかったわ」

工具箱を置きに来た千景と夏凜の二人が廊下を歩いて部室に向かっていたころ。

「ん？」

「話し声？」

部室から聞こえる楽し気な声。それが気になり、足音を忍ばせて扉の隙間から中をのぞく。

「大和は、その体に何本もの魚雷が突き刺さろうとも、どれほどの砲撃を受けようとも、決して沈む事無く、最後の最後まで戦い続けた、まさに大和魂を体現した日本の誇りであり、世界最大の名に恥じない戦艦なのよ！」

「松坂弘は、アンガウルの戦いにおいて、米兵二百人を擲弾筒及び臼砲で殺傷したともいわれてるんだ。さらに絶望的状况の中、敵から鹵獲した機関銃や銃剣などで、敵の米兵をそれはもう千切っては投げ、千切っては投げ、まさに鬼神の如き戦いを繰り広げたんだよ」

白熱している会話。その正体は、興奮して頬を紅潮させて海軍の事を熱弁している美森と冷静に陸軍の事を分かりやすく簡潔に伝えている翼の姿があった。

「あの東郷があそこまで興奮する所は初めて見たな」

「・・・羨ましい」

ほそり、と夏凜が何かを呟いた。

「ん？なんか言ったか？」

「な、なんでもないわよ!」

と、夏凜が声を抑え気味に怒鳴った時。

「あれ?夏凜ちゃん、戻ってきてたの?」

「え!?!」

そこは流石、武術に精通している六道家のご子息、すぐさま二人の気配に気付いた。

「よう翼に東郷。随分と仲良さげに話してたじゃねえか」

「あ!?!えと!?!これは!?!その!?!違うの!?!違うのよ!」

「何が違うの東郷さん?」

「友奈ちゃん!?!」

さざらに友奈までやってきていた。

「おう友奈、三ノ輪先輩はどうした?」

「お手伝いは終わったんだけど、もうこんな時間だからそのまま解散、て感じに」

「へえ・・・じゃあなんでこっちに来たわけ?」

夏凜がそう聞いてくる。

「何っってお前、東郷の迎えだろ?車椅子なんだから」

「ああ。なるほど」

「そういう千景君はなんでここに?」

「ん?」

千景は持っていた工具箱を胸のあたりまで持ち上げる。

「修理に使う工具箱を置きに来たんだよ。もともと学校のものだからな。ちなみに、いつも持参してるのは俺のだ」

「ああ、なるほど」

納得する翼。

「それにしても、随分と楽しそうに話してたな。大和がどうか船坂がなんたらとか」

「え?東郷さんそんなに楽しそうにしてたの?」

「ええ。それはもう熱弁するほどにね」

「わー!見てみたかったなあ!」

「みんな・・・東郷さんがあまりの恥ずかしさに爆発しそうだからそ

れぐらにしてあげて」

見れば美森が耳まで真っ赤な状態で両手で顔を隠していた。

「……誰か介錯をお願いします」

『しないからね?』

「いつそ殺してくだひゃい……」

『しないからね?』

皆に気圧される形で黙り込む美森。

そんな帰り道。

「東郷さん。そろそろ機嫌治して」

「殺して……」

「もう言うな東郷」

「殺して……」

「どんだけ恥ずかしいのよ」

「きよろして……」

「おい、とうとう噛み始めたぞ」

まだ恥ずかしいのか、顔を隠したままの美森。

ただ、そんな状態でも、美森は、翼のあの笑顔の意味を考えていた。

(結局、あの表情は一体、なんだったのかしら?)

それは、いざれ知る事になるだろう。

たとえそれが、どれほど心を締め付ける様なものでも。

「わっしーらしいね」

「うん。やつぱり須美ちゃんは須美ちゃんだったよ」

「良かったね」

「それでもない、かな？」

「それはまたなんでかな」

「言わなくても分かるでしょ？」

「言ってくれなきゃ分かりませくん」

いたずらっぽく笑う包帯の少女。

それにやれやれと言った感じで苦笑する翼。

「——互いに好き合っている男女の片方が記憶喪失だなんて知って、もう片方の気持ちはどうなるのかな？」

「……そうだね。ごめんね。いじわる言って」

「別に良いよ。そういうのが、君の性格というものだろ？」

「ありがと、つばくん」

嬉しそうに笑う包帯の少女。

「それじゃあ。僕は行くね」

「うん。また明日」

椅子から立ち上がり、立ち去っていく翼。

その寂しそうな背中を見て、少女は、一つ声を漏らした。

「……君が一人で苦しむ事なんて、ないんだよ」

その声は、届かなかったのか、翼は振り返る事なく、部屋を出て行った。

少女は、机の上に置かれた写真を見る。

そこには、三人の少女、一人の少年が並んで映っている写真があつ

た。

それを見て、少女はまた涙を流す。
いつか、彼の心が救われる事を信じて。

そんな中、部屋の扉が開かれる。

「んく？これは珍しいお客さんだね」

「気分はどうだ？」

「重畳」

「そうか。なら良かった」

入って来たのは、ガタイの良さそうな一人の男。

大分老けた顔だが、それでも、威厳ある雰囲気は衰えてはいない。

ボロボロのコートを羽織り、腰には、薄汚れた布で巻かれた一本の棒のようなもの。

男は、少女のベッドのすぐ横に立つ。

「今日はなんの様かな？」

「次のバーテックスの襲撃、お前にも出て貰う可能性が出てきた」
「出る？」

僅かに、少女の表情が引き締められる。

「敵のシステムがアップグレードされた可能性がある。おそらく、精霊の障壁は役に立たない」

「それで経験豊富な私って訳？」

「そうだ・・・お前には、あくまで襲撃者たちの足止めを要求する。ただ、その場の判断を全てお前に任せる・・・」

男は、苦虫を噛み潰したかのような表情になる。

「すまない・・・俺が、まだ樹海に入る事が出来れば・・・」

「自分を責めないでください、師匠せんせい。神に見初められるのは、いつだって、無垢な少年少女なんですから」

「・・・だが」

「分かりました。その時は、喜んで出撃させもります。他でもない、貴方の頼みだから」

少女は微笑む。

「……すまない」

「もー、いつも言ってるじゃないですか。こういう時は、ありがとうございます、
て言うんですよ〜」

「……そうだな。ありがとう」

男は微笑む。

まるで、娘を見る父親のような表情で。

一人じゃない

死んだ。死んでしまった。

呆気も無く、いとも容易く、まるで、ゴミを駆除するかの様に。

二人死んだ。死んでしまった。

何故？何故？何故!?

それは弱かったから。そう、その通り、その通り……の、筈だ。だけど、何故死ななければならなかった？

それが分からない。何故二人は死ななければならなかった!?

嫌だ嫌だ嫌だ。

怖い怖い怖い。

死にたくない。死にたくない。

私は褒められない。私は称えられたい。私は愛されたい。

その為に『■■■』になったのに。

嫌だ嫌だ、死ぬのは嫌だ。

怖い怖い、死ぬのが怖い。

だけど、戦わなければならぬ。

褒められる為には戦わなければならぬ。

称えられる為には戦わなければならぬ。

愛される為には、戦わなければならぬ。

私は、戦う。私は戦う。

だというのに……だというのに———!!!

何故■ ■されなければならぬ!?

「うわああああ!」

跳ね起きる千景。

まるでばね仕掛けのように状態を起こし、そして荒々しく過呼吸を繰り返す。

「ハア……ハア……ハア……ハア……はあ〜」

どうにか息を整え、落ち着く。

ふと、千景は、自分が物凄い汗を掻いている事に気付く。シャツはべつとりと肌に貼りつき、布団は千景が寝転がっていた所だけぐっしりと濡れている。

髪の毛から雫がしたり、体温が奪われていく。

ついでに、体調も余り優れない。

頭痛が酷い。というかきつい。

耳鳴りがする。寒気が酷い。

熱か?

「温度計……」

無理してベッドから降り、温度計を探し出し、それを脇に挟み込む。
「づッ！」

また頭痛。

「酷いな……」

あまりの痛さにまともな判断が出来ない。

すぐに、体温計の測定結果が出た。

「……熱、あるな」

どこかで体調管理を怠ったのだろう。

とにかく酷い。

「夏凜に……だめだ。動く気になれない……仕方がない」
携帯を取り出し、レスポンスする。

千景『割るい。風ひいた』

あまりの痛さに、誤字だらけになってしまった。
ただ、返信はすぐに返ってきた。

風『大丈夫？熱はどれくらいあるの？』

東郷『どこかで体調管理でも怠りましたね』

夏凜『何やってるのよ』

翼『風邪薬でも買ってこようか？』

剛『こういう時はお粥だな』

友奈と樹は朝は弱い方なので、返信が返ってくる事は無いだろう。

千景『39ど4ぶです。それと、ずつうがひどい』

東郷『いつもの頭痛かしら？』

千景『多聞』

剛『多聞？』

翼『誤字ですよ剛さん。多分です』

剛『わ、分かってるわい!』

夏凜『行つてあげましょうか?』

千景『頼む』

風『学校には言っておくわね。しっかりと休みなさいよ』

千景『了解』

翼『薬買つて来るからね?』

剛『選ぶのは俺にやらせろ。風邪の相手の世話は心得てるつもりだ』

千景『お願いします』

千景『もう厳戒』

そこで壁にもたれかかったまま力尽きる千景。

(ま・・・ずい・・・)

意識が落ちていく。どうか保とうとするも、頭痛も相まって、自らの本能が、危険を感じて無理矢理意識をシャットアウトしようとしている。

隣の部屋からドタドタと音がする。

夏凜が暴れているのだろうか?

そうだったら、流石に、毎日が、うるさ——い——

「ん——ん——やん」

誰？

眠いのだから邪魔はしないでほしい。

この睡眠という至福の時間を邪魔しないでほしいものだ。

「——ちゃん——」

■ちゃん

だから、うるさい……ん？この声は……確か……

「——」

■ちゃん！起きて！

「……あれ？」

そして、目覚めた。

「ここは……」

「寝ぼけてるの？学校だよ。学校！」

「が、こう……？」

あたりを見渡してみれば、木造の広い部屋、正面の黒板、七つしかない机、窓から差し込む夕日……いや、これは関係ないか。

なるほど、確かに学校だ。

自分たちの為に作られた、特別な学校。

「なんだ？今、起きたのか■」

「あ……」

ふと、目の前には黄朽葉色の長い髪をポニーテールにした少女が目の前に立っていた。

その傍らには、黒い髪的身長が低い少女が心配そうにこちらを見ていた。

「もう放課後ですよ」

「……そう」

素っ気なく返し、上体を起こそうとする。

だが、あまりの眠気に起き上がるのが面倒くさい。

「……眠い」

「あああ、寝ちゃだめだよ■ ■ちゃん。この後訓練あるんだよ?」

「そうだと言っても・・・眠いものは眠い・・・」

「そんなんでどうする?もし今敵が来たら、どうするんだ?」

「その時は、どうにかして起きる・・・」

寝たい。とにかく寝たい。

「ダメですよ■ ■さん、寝てしまつては」

「あと五分・・・五分・・・だけ・・・」

と、そのまま夢の世界へ行こうとしたら・・・

「起きろ■ ■——!」

「はうあ!?!」

突然、耳のすぐ近くで叫ばれ、飛び起きてしまう。

「ツ・・・貴方は・・・」

すぐさま、自分の右側、そこに立っているパーカー姿の少女を睨み付ける。

その少女はしてやったりと言わんばかりにニヤリと笑っている。

その傍には、おろおろしている色彩の薄い髪をした少女が一人。

「■ ■も■ ■も■ ■も言ってるんだから起きろ!」

「す、すみません。なんだか無理矢理起こすような事をして・・・」

「・・・別に良いわ」

耳で叫ばれた事はこの際気にしない。

どうせめんどくさい事になるのだから。

そこへ、教室のドアが開けられる音がした。

「とにかく、もう訓練の時間だぞ■ ■。俺はもう行くぞ。早く眠気覚ましてこいよな」

山鳩色の髪をした少年が、背中に武骨な長剣を背負い、教室から出ようとしていた。

「あ、待て■ ■! ■ ■が先だぞ!」

「ああ!?!待ってよ■ ■ ■ ■先輩!」

「おいお前たち!・・・行ってしまったか」

「ふふ、皆元気ですね」

「・・・元気すぎるんじゃないかしら?」

「そんな事ないと思うよ?」

「?」

ふと、左に立っていた少女が、自分の言葉を否定する。

「■■■■?」

「だって、元気だという事は、私たちが生きてるって証なんだよ」

「・・・そうだな」

「そうですね」

目の前の少女たちが笑う。

「行く、■■■■ちゃん!」

手を引かれる。

どうしてだろうか。彼女と一緒にいると、とても安心する。

彼女といれば、何も怖くない。

彼女と——いれば——

彼女の名前は——

「——い——う——さい——どう！」
誰……だ？

「お——さい——どう——おきな——い——
ど——！」

いや、そんな事より、名前だ。あの人の名前はなんだったつけ？

「おき——い——ふ——いい——みん——わよ
——！」

あの人の、名前。忘れてはいけない、大切な友達の名前。

「おきなさ——う——なさい——ふど——！」

そう、あの人の——名前は——

「起きなさい！不道！」

そこで意識が覚醒する。

「……夏凜か？」

「そうよ。あんた大丈夫？壁にもたれかかったから心配したじゃない」
「い」

「悪い……ッ！」

頭に鋭い痛みが走る。

「大丈夫？」

「大丈夫……じゃないなこれは……」

「素直でよろしい。待つてなさい。簡単にうどんとか作ってあげる
わ」

「頼む……」

流石に動く事も出来ない。体力の消費が激しい。

これは、かなり酷い。

数分後。

「ほら、出来たわよ」

「ああ……」

どうにか机に移動し、目の前に出されたうどんに食いつく。その間に夏凜はレスポンスを打つ。

「一応、学校にはアタシたちが言っておくわ。不道は今日一日、ここで大人しくしていなさい」

「ん・・・了解」

こくりとうなずく千景。

うどんを食べ終わった後、千景はベッドに戻る。

「それじゃ、学校が終わったら、また来るから」

「ああ・・・」

もはや変に反論する気にもなれない。

千景は、頭痛という苦痛から逃れるために、その意識を落とした。

「ふっー！」

自分の手にある鎌を、ビュンビュンと振り回す。

右手から左手へ、前から後ろへ、片手で回し、薙ぎ払い、振り下ろす。

それらの一連の動作を繰り返し、体に、覚えさせていく。

鎌という武器を、自分の体に馴染ませる。

「ふう……」

一息ついて、鎌の柄頭を床につける。

「お疲れ様、■■ちゃん！」

ふと、横からスポーツドリンクの入ったペットボトルを差し出される。

そこには、桜色の髪をした少女が、汗を流しながら立っていた。

「……ありがとう」

頷き、受け取る。

ふたを外し、中身を口の中に流し込む。

酸味のある味が、舌を刺激する。

ペットボトルから口を離れた直後、ビュオツ！という風が自分と隣の少女に叩きつけられる。

だが、それはそこまで強い訳ではなく、ただ少し強いそよ風が吹いただけだった。

そこには、山鳩色の髪をした少年が、剣を横に水平に持ったまま制止していた。

「わあ、すごいね■■君。すごい風だ！」

隣の少女が彼を褒める。

それに少しムツとしてしまう。

少年は、そんな少女の称賛にこう返した。

「音や風がするって事は、それほど無駄があるって事だろ？別にすぐくもなんともない」

「でも、それだけ筋肉があるってことでしょ！それほど鍛えられるって事は、とてもすごい事だよ！」

それでも少女はめげずに褒める。

「むう……」

やはり、それに少しムツとしてしまう。

「■■は毎日素振りをしているからな。私も見習わなければな」

ふと、そこへ、タオルを首にかけて汗を拭っている黄朽葉色の少女がやってくる。

「お前は今のままでも十分に強いと思うが……」

「そうかなあ。私は直角だと思うけど……」

と、隣の少女がそう言うも、黄朽葉色の髪の少女が謙遜をする。

「そうでもないさ。模擬戦の時は毎回私が負けているのだからな」

「いや、俺は毎度毎度お前には冷や冷やさせられてるぞ?」

「危ない時もあったよね」

と、仲良く話し合う三人。

なんだか、自分だけ仲間外れにされている気がする。

「きゃあ!」

「■■■■!?!大丈夫か!?!」

ふと、この体育館の一角にて、何か倒れる音が聞こえた。

そこへ目を向けると、色彩の薄い少女が床に倒れ込んでおり、それを心配そうに髪を二つにわけて結んでいる少女が駆け寄っていた。

「■■ちゃん!?!」

「おい!」

「■■!」

三人とも、走っていく。他の場所にいた黒髪の少年も駆け寄る。

自分は、その場に立ったまま、という訳ではなく、なんとなく歩いて行った。

「いたた……」

「足を捻ったな……■■■、氷水を袋に入れて持ってこい。急げ」

「あ、うん!分かりました!」

駆け出す桜色の髪の少女。

「痛むか?」

「はい……」

情けない。

そう思ってしまう。

だってそうだろう。

『■■■■』であろうはずの存在が、そんな怪我をしてしまうなんて。

「■■■、お前は救急箱」

「承知した」

今度は、黄朽葉色の髪の少女がかけだす。

「持って来たよー！」

「持ってきたぞー！」

桜色の少女はその手に氷と水の入った袋を、黄朽葉色の少女は、救急箱を持ってきた。

「しばらく当てて、休んでいろ。その後、湿布を張って様子を見よう」

「はい、ありがとうございます」

「すまない■■■、■■■がついていながら」

「もともと、■■■が足元を十分に注意していればよかつたんだ。まあ、言っても仕方のない事だが」

「うう、すみません」

ああ、本当に情けない。

誰がって？

自分がだ。

どうしてあの時、真つ先に駆け寄らなかつたのか。

どうしてあの時、歩いてよつたのか。

どうしてあの時、彼女の怪我を心配してあげなかつたのか。

何故、あの時、優しく出来なかつたのだろうか？

もっと、話がしたかつた。もっと一緒にいたかつた。誰も欠けて欲しくなかつた。

今更遅いと分かっているても、あの頃に戻りたい。そしてやり直したい。

別の結末になって欲しかつた。

誰も、死ぬ事なく、欠ける事無く、生きていて欲しかつた。

死にたくない。だけど死んでほしくない。

何故、今になって、こう思ってしまうのだろうか。

もう何もかも遅いと言うのに。

私は、どうして、あの人のように出来なかつたのだろうか？

私は、ただ、ずっと一緒にいてくれる『友達』が欲しかったただけだっ
た。

そう、彼女の——彼女たちの——名前は——

「……ん？」

「あ、千景君、起きた？」

見慣れた天井が視界に広がる。

うめき声に反応した、一つの声も聞こえた。

首だけを動かし、その人物を視認する。

赤みがかった桜色の髪、誰にでも向ける人懐っこい笑み。

誰でもない、自分が知る、大切な人。

「大丈夫？夏凜ちゃんの話だと、気絶してたって聞いてたけど……」

どうにか体を起こし、額に手を当てる。

「ああ……ありがとう、高嶋さん……」

「え？高嶋さん？」

「え？」

思わず、硬直する二人。

今、自分は何と言ったのだろうか？

高嶋さん、と言ったのだ。

彼女の名前は——違う。

「すまない、友奈」

結城友奈だ。

彼女ではない。

「寝ぼけていたみたいだ」

「びっくりしちやったよ。突然知らない人の名前で呼ばれたんだもん」

気付けば、額には冷えピタが貼ってあり、友奈の傍には洗面器とタオルがあった。

「汗掻いてたから、ふき取ってたんだよ」

「そうなのか」

「突然、返信来なくなったから、夏凜が返信してくれるまで焦ったじゃない」

扉から風が出てくる。

「風先輩・・・学校は・・・」

「もう放課後よ、ほ・う・か・ご。部活も今日は休みにして皆で来たのよ」

「皆で!？」

千景が驚くのと同時に風の後ろからぞろぞろと勇者部一同が入って来た。

「大丈夫かい千景君？」

「千景先輩、お体の調子はどうですか？」

「体力をつけるためにぼた餅持ってきてあげたわよ」

「風邪薬持ってきたぞ千景」

「また来てあげたわよ不道」

「皆・・・」

翼、樹、美森、剛の四人が口それぞれに一度に言いたいことを言う。

茫然とする千景。その脇から、ピピピと電子音が聞こえた。

探ってみると、そこから体温計が出てきた。

「これは・・・あ」

「まだ熱あるわね・・・やっぱり風邪ね」

「それじゃ、これ風邪薬と水な。そのまえに東郷のぼた餅でも食え。体力はつけておいた方が良くい」

それを風が取り上げ、剛が風邪薬を差し出す。

「なんか・・・すみません。俺なんかの為に・・・」

「他人が困っている事を勇んで助ける。それが勇者部の活動目的よ。忘れたの？」

美森がぼた餅の入った箱を千景の前に置く。

「そうだよ。その相手は部員も同じ。だからこうしてきたんだよ」
友奈が微笑む。

その笑顔が、何故か心に突き刺さる。

かつて守る事の出来なかった笑顔。

かつて自分が壊してしまった日常。

かつて守る事の出来なかった仲間。

かつて傍にいる事に気付く事の出来なかった友。

かつてつかむ事の出来なかった幸福。

全て、自分で壊してしまった。自分で手放してしまった。自分で失くしてしまった。

ありふれた、どこにでもある、幸せというものを、俺は

わたし

「ち、千景君？」

友奈がオドオドしている。

どうしたのだろうか？

「泣いてるわよ。アンタ」

「え・・・？」

風に言われ、頬に触れれば、確かにそこは濡れていた。

それが、自分の目から流れているものと気付くまで、そう長くはかからなかった。

「あ、いや、これは・・・」

「そこまで嬉しかったのかい？」

翼が、ハンカチを渡してくれる。

「それならそうと言え、焦ったじゃねえかよ」

剛が笑いながらそう言う。

「助け合うのは当然の事じゃないですか」

樹が励ます。

「そうよ。だって私たちは、勇者部なんだから」

東郷が慰める。

「いつだって頼りなさい。アンタも、勇者部の一員なんだからね」

風が堂々と言い放つ。

「家が隣同士なんだから、私も頼りなさいよ」

夏凜が腕を組んでそう言う。

「千景君は一人じゃないよ」

友奈が、千景の手を取る。

「私たちがいるからね」

満面の笑みで、そう言った。

それがどうしようもなく暖かくて、嬉しくて、涙が溢れてきて。

精一杯の感謝を込めて、千景は言う。

「ありがとう」

決戦の日は、そう遠くない。

決別

熱も下がり、一昨日ぶりの学校へ行く千景。

「大丈夫なの？一応、病み上がりなんだから、無理しないでよ？じやない」と友奈が心配するわよ？」

「なんでそこで友奈が出てくるんだ？」

思わず聞き返してしまう千景。

「まあ、一応全開つてところかね。東郷のぼた餅が効いたんだろ」

「なんだかぼた餅が万能薬が聞こえてきそうね・・・」

「甘いものは体力回復や気分の高揚に結構役立つんだぞ？友奈曰くだが」

「本当に東郷のぼた餅好きよね友奈は」

「そうだな」

と、二人で楽しく会話し、通学路を歩く二人。

ただ、ふと、千景と夏凜の横を、ガタイの良い黒のボロコートを来た男がすれ違った。

そう、恰好からしても、何の違和感もなく通っていた男だ。

特に気にする特徴の無い、ただの何の変哲もない、ただの男。

だが千景は、その男が通り過ぎていった瞬間、勢いよく振り向いた。

「——ッ!？」

あの人は——。

自分はその男を知っている。誰だ？どこの誰だ？

そう千景が模索している中、

「千景、どうかしたの？」

夏凜が、そう聞いてくる。

それによつて我に返る千景。

「いや・・・知り合いに似た人が居たな、と思つて・・・」

「知り合いって・・・さっきの反応からしてアンタを虐めてた施設の悪ガキの事？」

「いや・・・それとは・・・」

関係無い。そう言おうとした。

気付かぬ間に、千景と夏凜の背後に、一つの気配が立って、こちらに視線を向けていた。

殺意にも似た、感情を。

「ツ——！」

二人の反応を早かった。

前に飛び出し、地面から足が離れている間に反転。後ろにいる人物を睨み付ける。

「あんたは……！」

「……幸奈」

そこには、白いシャツのどこかの学校の制服を来た、黒髪の少女が立っていた。

それは、紛れもなく、千景の幼馴染の少女、稲成幸奈だった。

「何の用よ」

出来るだけ声を低くしてそう問いかける夏凜。

二人とも、ポケットに手を忍ばせ、いつでも変身出来るように身構えている。

だが、幸奈は、夏凜から視線を外し、千景に言った。

「……こちら側にきて、千景君」

それに、僅かにでも驚く二人。

「……どういう意味だ？」

聞き返す千景。

「意味はそのままよ。千景君。お願いだから、私たちの所へきて」

「断る」

即答。

何故、世界を壊すと言っている者達の所へ、自分が行かなければならないのか。

訳が分からない。

「そう……まあ、何の説明も無しに言えば、断るのは当然」

「あんた達の目的は一体何？ 神樹様を破壊して、貴方達にはどんなメリットがあるっていうの？」

夏凜がそう問いかける。

そして、幸奈は、こう返した。

「……世界を作り変えるの」

「世界を……」

「作り変える……?」

何を言っているのか分からない。

「この神樹の世界を壊し、新たな世界を作る。それが私たちの目的。誰も苦しまず、誰も不幸な思いをしない世界。苦痛もない、争いもない、血も流れない。そんな世界を、私たちは作るの」

「何を……言って……」

まるで、子供の幼稚な夢物語だ。

「この世界は醜いわ。争い、怒り、憎み合い。拳句の果てには殺し合う。そこに、相手の幸福なんてものはない。だから作り変える。誰もが幸せになれる世界を」

幸奈は、まるで狂信者のような事を口々に述べる。

それに、二人は絶句するほかない。

「私たちは、天の神と契約する事で、この力を得た。この世界を壊す手助けをする為に。そして約束された。新世界に、私たちを連れて行ってくれると」

そして、幸奈は、千景に向かって手を差し伸べる。

「ただ、私にとって、その事はどうだっていい。私は、ただ、貴方が救われればそれでいいの」

「!?!」

あまりにも予想外な事に、驚く二人。

「貴方を救わない世界なんて、私はいらない。だから一緒に来て。千景君」

「……」

立ち尽くす二人。

それは、あまりにも壮大で、無謀で、叶う事のない、絶対不可能な業。

それを、彼女は自身に満ち溢れた口調で言っただけ。

まるで、本気でそれが実現できるかのよう。
誰も傷付かず、不幸にならない世界。
それは、誰もが求めた、理想の世界だ。
好きなものは簡単に手にはいる。
やりたい事は自由に出来る。
そんな、そんな夢みたいな世界を――

かのじよ
彼は欠片一つも求めていなかった。

「嫌だ」

真つ直ぐに、そう言った。

「不道……！」

「……何故？」

幸奈の声は、僅かに動揺していた。

「お前……それ、今ここにいる人たちを見捨てて新しい世界と一緒に
行ってくれって、そう言ってるんだよな？」

「ええ。そうよ」

「だったら嫌だ。俺は行かない」

千景は、幸奈を睨み付ける。

「まだ、この四国では沢山の人が精一杯生きてるんだ。時には他人を
騙す事もあるかもしれない。時には誰かを傷付けてしまう事がある
かもしれない。だけどそれでも、ここにいる人たちは『今』を全力で
生きてるんだ」

あの人は言った。大切な誰かの為に、天敵と戦おうとする人がいる
ことを知っている。

あの人は言った。助けを求める誰かの為に、自らの身を危険に晒し
てでも手を伸ばす人がいることを知っている。

あの人は言った。もし家で何かに怯えていても、目の前で子供が交通事故に遭いそうになった時、恐怖を跳ねのけて助けに行く人がいる事を知っていると。

あの人は言った。皆が皆、天敵に立ち向かう勇気を持つ、勇者なのだ。

あの人は、確かに勇者だった。

あの人は、誰もが認める勇者だった。

あの人は、誰よりも勇者だった。

その人が守り、そして、いざれ必ず人の世界を取り戻してくれると、未来を託したこの世界を、俺は守ると誓った。

そう、これは誰の為でもない。これは俺の自己。

これは、俺の悲願だ。

「誰かを見捨てて手に入れる幸せなんて俺はいらない。悪いがお前の要求は受け入れられない」

そう、きつぱりと言いつつ放った。

「……そ、う……」

俯き、震える声で、幸奈は、呟いた。表情は、分からない。

「……分かったわ。貴方の答えは確かに聞いた。だけど、これだけは覚えておいて」

踵を返す幸奈。

「貴方達に、勝ち目は無い」

瞬間、どこからともなく影が降り、彼女と共に消え去った。

二人は、その空間をいつまでも睨み続けた。

ただ、その僅かな沈黙の中、夏凜が、口を開いた。

「まあ、見直した、と言っておくわ」

「それはどうも」

互いにうなずき合う。

「さ、早くしないと遅刻だ！少し急ぐぞ！」

「ええー！」

そうして走り出す二人。

その日の夕方、時が止まった。

花を纏いし勇者VS星の名を持つ魔物と新世界を望む魔族

樹海の中、千景、友奈、翼、美森、樹、夏凜の六人は、壁の向こうからやってくる敵を見据えていた。

「残り七体、全部来てるんじゃないの、これ？」

夏凜が、携帯の画面を除く。

そこには――

魚型――ピスケス・バーテックス

水瓶型――アクエリアス・バーテックス

牡羊型――アリエス・バーテックス

牡牛型――タウラス・バーテックス

天秤型――リブラ・バーテックス

双子型――ジエミニ・バーテックス

獅子型――レオ・バーテックス

「総攻撃・・・最悪の攻撃パターンね」

夏凜がそう呟く。

「やりがい有り過ぎてサブリが増しましたわ」

と、ポケットからサブリのケースを取り出して、それを口にはおりこむ。

更に何を思ったのか、そのケースを樹に差し出す。

「樹も決めとく？」

「その言い方はちよつと・・・」

苦笑いする樹。

「・・・来てるな」

千景が、携帯の画面から、来ているだろうもう一方の敵を確認する。

全部で、六体。

「あれ、なんで攻めてこないんだらう？」

友奈が疑問を口にする。

「さあ、どのみち神樹様の加護の届かない壁の外にでちゃいけないっていう教えがあるから、アタシたちの方から攻めないけどね」
「……」

夏凜のその発言を聞いて、千景はふと疑問に思う。

(たしか、あの頃は結界の外でも勇者としての力は使えたような……)

そう思うも、気にしている暇は無さそうだ。

千景は端末を覗き込む。

そこには、今進行してきているバーテックス以外は、何も表示されていない。

「ステルス仕様か……」

「アプリじゃ、奴らの位置は確認できないみたいだね」

厄介な事だ、と翼は呟く。

「奴らは、精霊のバリアを無効化する手段を持っているみたいだから、気を付けた方がいいね」

「そうだな」

そこへ、偵察に行っていた風が戻ってくる。

「敵さん、壁ギリギリの位置から仕掛けてくるみたい」

風がそういう。

「決戦ね。皆もそろそろ準備を」

そう断言した時、一同に緊張が走る。

特に、樹は不安そうな表情になる。

そんな時だ。

「んあ!?アハハハハハハハなんですか友奈さん!？」

いきなり友奈にくすぐられ、大笑いする樹。

そんな樹に、友奈は自信たつぷりに言う。

「緊張しなくても大丈夫。皆いるんだから」

そう言われ、振り向くと、夏凜はそっぽを向き、剛は笑ってサムズ

アップ、千景は鼻を鳴らし、翼と美森は微笑んだ。

それに、安心したかのように、樹は返事をする。

「はいー」

それに風は安心し、声をあげる。

「よし！勇者部一同、変身！」

それを合図に、全員が携帯の変身アプリを起動する。

千景は彼岸花。

友奈は山桜。

翼はブルースター。

美森はアサガオ。

剛はアフエランドラ。

樹は鳴子百合。

夏凜はレンゲツツジ。

それぞれが想起させる戦装束に着替え、敵を見据える。

進行を開始した敵。

「敵ながら圧巻ですね」

美森がそう呟く。

「逆に言えば、アレ全部殲滅すれば、戦いは終わったようなものでしょ？」

「そうだと、いいんだけどね」

夏凜の言葉に、翼が重ねる。

（今回の戦い。おそらく、誰かが満開を使う事になるかもしれない……. だけど…….）

翼は、一つの最も引つかかっている疑問を心に浮かべ、友奈を見た。

（友奈ちゃん。君は一体何を捧げたんだ？）

ふと、風が前に出る。

「皆、ここはアレ行つときましよう！」

「アレ？どれよ？」

と、夏凜が疑問に思っている事を他所に、肩を組み始める一同。

いわゆる、円陣だ。

「円陣!? それ必要!?!」

「気合入れるのには必要だよ夏凜ちゃん」

「う・・・」

「夏凜ちゃん」

友奈が呼ぶ。

「しよ、しようがないわね」

夏凜も渋々といった形で円陣に加わる。

「アンタたち、勝ったら好きなもの奢ってあげるから、絶対に死ぬんじゃないわよ！特に千景！」

「よーし、好きなものいっぱい食べよ！肉ぶっかけうどんとか！」

「言われなくても殲滅してあげるわ！」

「守りたいものの為にね」

「私も、叶えたい夢があるから！」

「やってやるよ、全力で！」

「頑張って皆を、国を、守りましょう！」

「平和な日々、変わりの無い日常、俺は、この世に生きるただごく普通の日常を送る人々を守る。それだけの為に、俺は戦う」

全員の心意気を受け入れ、風は声を挙げる。

「よーし！勇者部ファイト、」

『オオー！』

『出陣！』

夏凜の義輝が、法螺貝を鳴らす。

それと同時に、どこからともなく無数の矢が飛んでくる。

それを全員が飛んで回避する。翼を除いて。

「翼君!？」

「翼!？」

美森と剛が驚きの声をあげる。

だが、そう言っている間に矢はがただ突っ立っているだけの翼の脇

を通り過ぎ、唯一直撃コースだった矢を右手で受け止める。

そして、片手の握力のみで、その矢をへし折る。

「打ち合わせ通り！僕と千景君、剛さん、そして夏凜ちゃんて襲撃者を抑える！他の皆はバーテックスを一体ずつ確実に倒して！」

「オッケー、くたばんじゃないわよ！」

「任せておけ風！」

そうして二手に分かれる。

「決して一人も行かせないで。邪魔されると、バーテックスを倒せなくなる可能性がある。いいね！」

「分かった！」

「了解です！」

「了解！」

返事を返す剛、夏凜、千景の三人。

一方で、襲撃側の方では。

「・・・六道翼、三好夏凜、三ノ輪剛、不道千景がこちらに来たな」

佐奈が、強化された視力で敵を見据える。

「そうか・・・予想通りだな」

翔琉が、背中の剣を引き抜く。

黒い片手直剣だ。

「ううう・・・敵・・・倒す・・・」

真斗が、体を震わせてそう呟く。

その間に佐奈はまた矢を放つ。

だが、それは全て避けられてしまう。

「ダメだな・・・やはり迎撃か」

「そうか・・・行くぞ！」

翔琉が一番に出る。

「あ！ずるーい！」

美紀もその後を追い、弘と真斗も追いかける。

「来た・・・！」

「先行を・・・！」

「待て！」

夏凜が前に出ようとしたところを、翼が止める。

「一反木綿ッ！」

翼が、一反木綿を出現させる。

その直後に、一反木綿が左腕に巻き付く。

すると、動かない筈の左腕が、動いた。

一反木綿を使う事で、左腕を無理矢理動かしているのだ。

「猫又、傘！」

さらに二体呼び出し、右腕と左腕にボウガンを装着する。

そして、両腕を突き出す。

弓の部分が収納され、光が集束される。

そして、圧縮されたエネルギーが矢として撃ち出される。

「まずは貴方だ。佐奈さんッ！」

まずは、敵の狙撃手を抑える。

「ツインボルトカノン」

撃ち放たれる二本の山をも穿つ必殺の矢。

「やはりそうくるかッ！」

佐奈が、すぐさま弓を二本つがえる。

直後、二本の矢が、その輝きを増し、圧縮され、放たれる。

四本の矢が正面衝突し、光と衝撃波をまき散らす。

だが、その間に、二勢は数秒立たずに激突する。

「ハァ！」

夏凜が両手の刀を投げつける。

狙いは、美紀だ。

空中であるため、回避は出来ない。

だから迎撃しようとした瞬間、夏凜の刀が爆発する。

「きゃー!？」

吹き飛ばされる美紀。

「翼様！」

「分かった！気を付けて！」

「そちらも、ご武運を！」

互いに声を掛け合い、翼は吹き飛ばされた美紀を追いかける。

夏凜の刀は、爆発する特殊能力を持つ。

そのタイミングは自由自在だ。

「美紀ちゃん!？」

「みき……」

「オオオ——ッ!」

「!？」

突如の気合の一声。

次の瞬間、振り向いた真斗の胴体に、凄まじい質量の一撃が叩き込まれる。

「うげう!？」

そのまま大きく吹き飛ばされる真斗。

彼を吹き飛ばしたのは剛。

その戦槌は、片方が変形し、ジェット噴出口の様な形状していた。

剛の戦槌は、両手持ちであるうえに、千景と同じように変形し、

ジェット噴射による強力な一撃を放てるようになっていたのだ。

「ついでにテメエもだああああ!!」

「な——うわああああ!？」

そのまま一回転して、隣にいた弘まで真斗と同じ方向に吹っ飛ばす。

「掴まれ夏凜ッ!」

「せえい!」

剛に言われ、ハンマーの柄を掴む夏凜。

そのまま、ジェット噴射し、二人を追いかける。

それぞれがそれぞれの獲物を見つけた所で、千景と翔琉もぶつかる。

千景が鎌をふるい、翔琉が右手の剣を薙ぐ。

重い金属音が、樹海に響く。

互いに樹海に降り立つ。

そして睨み合う。

(おかしい……)

その中で、千景は悟られぬように周囲を見回す。

(幸奈の姿が無い・・・どこにいるんだ?)

「ここにいてであろう、少女を探す千景」

「無駄な足掻きを・・・」

ふと、翔琉がつぶやいた。

「無駄?」

「そうだ。お前たちのやっている事は、せいぜい人類の生存を長引かせているだけ。どうせ神樹が力尽きれば、この世界はいつも容易く壊れ消える。そんな世界、守ってどうする?」

そう、冷めた目で言ってくる翔琉。

「どうせ終わるとか壊れるとか、そんな事、どうだって良い」

それに対して、千景は言い放つ。

「世界は取り戻す。新世界なんていらねえ。俺達は、ただ、この世界を取り戻すために戦ってたんだ。壊れるとか終わるとか、そんなの俺たちがいる限り絶対に起こらねえような事を、夢物語に語るな」

鎌を構える。

「どちらにしろこれが最後だ。だから、ここでお前を食い止める!」

真っ直ぐに、翔琉を睨み付ける。

「・・・最後、だど?」

突然、首を傾げる翔琉。

そして、その冷たい視線は、まるで何かを憐れむ様なものになる。「なるほど、信じているものから騙されているという訳か・・・」

「?」
その声は、まるで蚊の鳴くかのように小さいため、千景にはとどかなかった。

「良いだろう・・・ならばその無価値な幻想をこの俺が叩っ斬ってやる!」

殺気が増大する。

「ッ——!」

それに一瞬、気圧される千景だったが、すぐに落ち着きを取り戻し、身を沈め、構える。

(今は、幸奈がどこにいるのか分からない。だけど、今はコイツを抑え

るのが先だ！)

同時に地面を蹴る。

金属音が、樹海に響く。

美森は、自らが持つスナイパーライフルのスコープを覗き込み、敵の進行状況を見ていた。

「バーテックスの侵攻速度にばらつきがある……」

携帯に表示されている敵の動きには、確かにばらつきがある。

最も速いのは、アリエス・バーテックス。牡羊座の名を与えられたバーテックスだ。

まるで地面をうねるかのように動いて、まるで迂回するかのように神樹に向かって侵攻している。

だが、それよりも注目すべきは、最も奥にいる、巨大なバーテックス。

「あの巨大な奴、明らかに別格ね……」

レオ・バーテックス、獅子座の名を与えられたバーテックス。

「だけど、まずは……」

しかし美森は最初にソイツを狙わない。

まずは、確実に倒せる奴から確実に倒していく。

「行くわよおおおお!!」

風が大剣をアリエスに叩きつける。

頭部に直撃する。

その直後に、美森が狙撃。アリエスは、沈黙する。

「他の敵が来る前に、コイツを倒そう!封印の儀、行くわよ!」

「了解!」

風、樹、友奈がアリエスを取り囲み、封印を開始する。

すると、アリエスの尾らしき部分から御霊が出現する。

だが、それが出現した途端、まるでドリルのように高速回転し始める。

「これは……!」

風が眼を見開く。これでは、回転によって攻撃が全て弾かれてしまう。

「私が行きます!」

友奈が飛び出す。

「東郷さああああああん!!」

右拳を振り上げ、高速回転する御霊に叩きつける。

強力無慈悲な鉄拳が、御霊の回転を一撃で止める。

回転によるの防御が出来なくなった御霊。その御霊に情け無用と言わんばかりに美森の狙撃が叩き込まれる。

それによって、御霊は粉碎される。

「ヒューー! ナイス連携!」

「ありがとうー! 東郷さーん!」

友奈が美森に向かって手を振る。

それに微笑む美森。

だが、その表情はすぐに真剣なものに変わる。

「だけど、さっきの奴の動き……まるで叩いてくれと言わんばかりの突出……」

それらの情報を、整理、分析、理解し……答えを導く。

^{トランプ}
罨だ。

直後、先行していた友奈たちを襲う、あまりにもうるさく、鼓膜が破れてしまいそうな程の音が鳴り響く。

「ぐうう!」

タウラス・バーテックス。牡牛座の名前を与えられた、超音波を放つバーテックス。

あまりの音に、耳を塞がるを得ない三人。

「これぐらい……勇者なら……!」

どうかして耐えようとする友奈。だが、動く事ができない。

「皆！．．．あのベルか．．．ッ！」

美森はすぐさまタウラスの上部にある大きな鐘を狙い撃とうとする。

だが、そんな彼女の傍に、地面から巨大な敵が姿を現し、彼女の上をイルカ飛びよろしく飛んでいく。

「!?」

ピスケス・バーテックス。魚座の名を与えられた、地面を潜る事のできるバーテックス。

ピスケスが地面に潜る。その振動によって、狙撃が出来なくなる。

「狙撃が．．．！」

美森が抑えられる。

その状況は、タウラスの超音波の餌食になっている彼女たちにはこれ以上にない痛手だ。

「このままじゃ．．．！」

すでに、天秤のリブラ・バーテックス、水瓶のアクエリアス・バーテックス、そしてレオが接近してくる。

動けない三人。

万事休すか？

その答えは、否だ。

「音は．．．皆を．．．幸せにするもの．．．！」

だから、許せない。

こんな騒音は、全ての音に対する冒瀆だ。音を、誰かを苦しめる為に使うなど、言語道断。

決して許してはならない。

だからこそ、この場で最も予想外な人間が動いた。

「こんな音．．．！」

初めて感じる激情。心の奥からふつつつと湧き上がってくる、怒りの感情。

樹は、初めて怒りに声を張り上げる！

「こんな音はあああああああああああああああああああああああッ

!!!

絶叫。右手にあるリングからワイヤーを出現させ、そのワイヤーで、タウラスのベルを絡め、騒音を止める。

「樹ー」

叫ぶ風。

そこは流石リーダーともいうべきか、行動は早かった。

飛び上がり、後ろにいる二体を見据える。

「まずは、お前らああああ!!!」

風の剣の能力は、サイズの倍加。

大きさを自由自在に変える事が出来、その大きさは、山をも断ち切る。

最大サイズで振るわれる大剣。その一撃が、タウラスの背後にいたリブラ、アクエリアスを両断する。

「お姉ちゃんー！」

「頼りになりますー！」

樹と友奈が歓喜する。

「よし、三体まとめて……」

「うわあああ!？」

「樹!？」

突然の樹の悲鳴。

まだ絡み付けたままだったタウラスにひっぱられているのだ。

「樹ちゃん!？」

「早くワイヤー解いてー！」

慌ててワイヤーをほどく樹。

「この……!？」

そんなタウラスに一矢報いようとした友奈だったが、すぐさま異変に気付いた。

タウラスが後退していくのだ。

タウラスだけではない、リブラやアクエリアスまでも、下がっているのだ。

「後退……?」

そう、思う風だったが、ふと、リブラから何かが降りてくるのを、風は見つけた。

それは、黒い弾丸のように真っ直ぐにこちらに向かってきていた。

友奈を狙って。

「!? 避けて友奈!」

叫ぶ風。

それには、友奈も気付いていた。

両手を交差させ、防御の構えを取る。

「ハァ!」

短い掛け声。

それと同時に、友奈の両腕に重い衝撃が走り、体が浮き、後ろに大きく吹き飛ばされる。

「うわああ!?!」

「友奈先輩!」

「友奈!」

その黒い弾丸の正体。真っ黒い戦装束は、幸奈だ。

「思ったよりも早かったわね……まあいいわ」

突如、レオが光を発する。

まるで太陽のように光り輝き、下がっていく三体のバーテックスを吸収していく。

一方で、美森は、ピスケスに連続で銃弾を叩き込んでいた。

撃ち込まれるたびに、ピスケスのタコのような頭に穴が開いていく。

そこで後退を選んだのか、地面に潜るピスケス。

「潜った……今のうちに狙撃を……」

援護を再開する為に、友奈たちが戦っているであろう敵に向かってライフルを向ける。

「あれは……合体している!?!」

光が収まり、そこにいたのは、レオではなかった。

否、レオではある。だが、その姿は最初の時とは形状が大きく変わった。わっていた。

一方で、風と樹は変形したレオを警戒しつつも、視線を幸奈へと向けていた。

「アレになった以上、貴方達に勝ち目はないわ」

「そんなの・・・やってみなきや分からないわ！」

風が叫ぶ。

だが、幸奈はそれを犬の遠吠えか何かのように軽く聞き流し、彼女たちに告げた。

「バーテックスはね、この世に生きる生物が、何十年何千年とかけて遂げてきた『進化』というものを、融合という形で、一瞬で成し遂げるの。あれは、いわば、バーテックスをさらに進化させたものよ」

「バーテックスが・・・進化？」

樹と風が、信じられないというように表情を強張らせる。

「獅子の星集団レオ・スタークラスタ。それが奴の名前よ。手も足も出せずに、死になさい」

そう言い、幸奈は友奈の後を追った。

「何を言ってる・・・」

「お姉ちゃん！」

「!？」

樹の叫び声に、風はレオを見る。気付けば、レオはその周囲にいくつもの炎球を作り出していた。

そして、それを一斉に放ってくる。

「くー！」

樹と風は、それを回避しようとするも、その炎球は彼女たちを追尾する。

必死に避けようとするも、樹が被弾してしまう。

「きゃああああ!？」

「樹ー！」

叫ぶ風だがそんな暇があるなら回避に徹すべきだった。炎球全てが風に殺到する。

「みんな?!?・・・己・・・!」

美森が仕返しとばかりに狙撃する。

だが、それはレオの装甲に弾かれてしまう。

「効かない・・・!?!」

すぐさまレオからの報復の一撃が迫る。僅かに威力を集束させただけの炎球は、しかし、風や樹たちを襲っただけのものが彼女たちを動けなくしたものが、その倍で迫ってくる!

足も動かない、機動力が最も無い美森では、それを回避する事は――不可能に等しい。

「ああああ!!」

悲鳴をあげる美森。

その数分前。

「オオオッ!」

「ゼアアッ!」

鎌と剣がぶつかり合う。

金属音が鳴り響き、斬撃の応酬が繰り広げられる。

だが、僅かに千景が押されている。

「くッ!」

頬を切っ先が掠める。

その剣を弾き、距離を取る千景。

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・くそ・・・!」

確かに拮抗はしてはいる。だが、それだけだ。

敵は本気でこちらを殺しにかかっている。対して自分たちは、まだ殺人に躊躇がある。

「・・・何考えてるんだか・・・」

自分だって人を殺し掛けたのだ。今更こう思っても仕方が無い。

本気やらなければ殺される。

身を沈め、刃を後ろへ。

地面を蹴り、翔琉に向かって走り出す。

翔琉は、それを迎撃するかのように左半身を前に出し、剣を後ろに置く。

千景が、右から鎌を振り抜く。リーチの差を利用した敵の射程外からの攻撃。

だが、翔琉はそれに動揺する事無く、むしろ自分から踏み出してきた。

右手を跳ね上げ、肩を軸に右手の剣を、右斜め上から叩きつけるように斬りかかる。

懐に入られれば、鎌のリーチでは不利だ。

だが、千景は構わず鎌を振り抜く。

しかし、千景よりも速く、翔琉の剣が、先に到達する。

それに対して、千景はまだ振り切っていない鎌の柄で防いだ。

「!?」

これに翔琉は目を見開く。

そのまますれ違う二人だが、千景は着地待たずして体を反転させ、地面を蹴る。

翔琉は、振り抜いた反動でまだ態勢を元に戻せていない。

背中ががら空きだ。

千景は、その背中に容赦無く刃を、下段から振り上げた。

だが、翔琉はそれに間に合わせた。

体を時計回りに回転させ、どうにか鎌の軌道を反らし、上空へ。だが、同時に翔琉の剣も大きく弾かれ、胴体を晒す形になる。

(取ったッ！)

そう確信する千景。鎌を変形させ、光の刃を出現させる。さらに変化して両刃の鎌へと変貌させる。

これによって、鎌の刃の向きを変える事なく振り下ろせる。

「これで——！」

終わりだ。そう言おうとした。

だが、千景は見た。

刃を当てようとしている胴体。その胴体に隠れるようにそこにいる翔琉の左手。

それに、猛烈な忌避感を覚える千景。
だが、遅かった。

「……………え？」

気付いた時には、千景の腹は裂かれていた。

「な……………に……………？」

気が動転している中で、翔琉は体を今度は反時計回りに回し、左足で直進蹴りを千景に叩きつける。

悲鳴をあげる事すらできない。地面を転がり、うつ伏せになって地面に倒れ伏す。

「ぐ……………う……………」

痛い熱い焼けるようだ内臓はどうなったそんな事より立たないと血を流し過ぎた止血をそんな事してる暇は立っんだ動かない——
あらゆる思考が千景の中で巡り巡って混乱を生み出す。

まともに考える事ができない。

口からは血を吐き出し、斬られた腹からはまるで湯水のように血があふれ出る。

臓腑も裂かれているだろう。

どこからどうみても、致命傷だ。

そんな中で、千景は見た。

翔琉の左手には、千景の血で赤く濡れたもう一本の長剣がある事を。

おそらく、今まで隠していたのだ。

片手のみで倒せるならそれでよし。しかしダメな場合は、奥の手を使う。

始めから全力でやればいいものを。と千景は思うが、それどころではない。

翔琉は真っ直ぐにこちらに近付いてくる。

早く立たなければ殺される。早く立たなければ死んでしまう。

死ぬのは嫌だ。死にたくない。

とにかく立たなくては。

腕に力を込め、立ち上がろうとするも、力が入らない。

「終わりだ」

気付けば、もう目の前。

翔琉は、右手の剣を逆手にもち、その切っ先を千景に向けていた。間違いなく、止めの一撃。

それでも千景は抗おうとする。

まだ、まだ死ぬ訳にはいかない。

(友奈を・・・残して・・・逝けるか・・・ッ！)

「ぎ・・・あああああ!!!」

絶叫する。

だが、無慈悲にも。

翔琉の剣は千景を貫いた。

「ッ——!!」

戦闘中であるにも関わらず、ありえない事に、目を見開く翼。

翼の視線の先には、他のバーテックスを吸収し、変化したレオの姿があつた。

「余所見していいの?」

「!」

背後を美紀に取られる。だが、そこは神童とまで言われた少年、反応は速い。

「ハァー!」

「きゃ!?!」

横薙ぎされたナイフを大きく身を屈める事で回避し、さらにその反

動を使って片足を後ろに向かつて蹴り上げる。

「ぐう・・・！」

腹に直撃し、上空へ飛ばされる美紀。

空中では身動きが取れない。その大きな隙を逃す翼ではない。体を捻って、上空へボウガンを向ける。

「終わりだ・・・ッ！」

一閃の煌きが美紀に迫る。だが、その矢は、どこからともなく飛んできた矢によって弾かれる。

「佐奈さん・・・ッ！」

「そうはさせんぞ、翼」

戦況は二対一。

それも相手は手練れなうえに、遠距離と近距離のしつかりとした組み合わせとなっている。

その為に、決定打を打てない。

美紀を倒そうとすれば佐奈が妨害し、ならば佐奈を倒そうとすれば美紀が妨害する。

(本当に良い連携だ——！)

美紀のスピードは異常だ。

周囲をまるでゴムボールの様に跳ねまわり、それは跳ね返る度に加速していく。

それは、隻眼の翼にはきついものと言えるだろう。

翼が、戦闘のド素人だったらの話だが。

「うあっ！」

回避して、裏拳を叩き込む。

その一撃は美紀の顔を捉え、吹き飛ばす。

(このまま行けば・・・)

少なくとも足は止められる。

そう確信する翼。

だが、翼の左の耳に、確かに聞こえた。

悲鳴が。

「ッ!?!」

思わず振り返る。

そこには、黒煙をまき散らして、根に倒れ伏す樹と風の姿が。

「樹ちゃん!?風さん!」

思わず叫ぶ。

だが、それでも、無慈悲な一閃が翼を襲う。

「く!」

それを右腕で弾き飛ばす翼。

「相も変わらず・・・お前という奴は・・・」

「く・・・何故だ、佐奈さん!」

翼は、佐奈に向かって叫ぶ。

「貴方ほどあの子たちが生きていたこの世界を愛していた人が、何故

この世界を壊そうとするんです!」

翼は、いたって真面目に叫んだつもりだった。

だが、彼は知らなかった。

それが彼女の地雷だという事を。

「何故・・・だと・・・?」

「ッ!」

その瞬間、佐奈の顔が、まるで鬼の様な顔に豹変する。

「その世界に、私は裏切られたんだぞッ!」

咆える佐奈。その姿はさながら怒り狂う狼の様に。

佐奈が弓を引き絞る。

その光が、鮮やかな緑色から、どす黒い赤へと変化する。彼女の怒

りを表現しているかのように。

「まがい・・・!」

すぐさま回避に移ろうとする翼。だが、その横で輝く光に、思わず

目をそちらに向ける。

そこで、変化したレオが、強力な一撃をもつて、狙撃姿勢だった美

森を撃ち抜いた。

それに、翼は脳内で何かが焼き切れる音がした。

「須美ちゃああああああああああああんツ!!!」

その直後、佐奈の矢が翼を撃ち抜いた。

「ミヨルニいいいいルううううう!!」

「うおおおおおおお!!」

真斗の雷撃の一撃。

それを、剛はジェット噴射をもってどうにか回避する。

「くっそ!なんだよあの雷!」

ハンマーの柄の端をもって、剛は真斗に接近する。

「オラアア!!」

そのまま、遠心力と力任せにハンマーを振る。

その一撃は、真斗の腹に直撃し、衝撃波が突き抜ける。

だが。

「ぐふふ……」

「な!」

効いていない。むしろ、笑っている。

まるで、嘲笑うかのように。

真斗は、片手のハンマーを振り上げ、剛に振り下ろす。

「うおわ!」

それを、横に転がって回避する剛。

空ぶったハンマーは、神樹の根に叩きつけられると、そこに大きな

クレーターを作り、地響きを引き起こす。

それによって、剛の体が浮く。

「それはそれで、好都合だああ!!」

ハンマーを振りかぶる。そして、変形し、ジェット噴出口を露出、点

火する。

「ジェットハンマーああああ!!」

先ほどの一撃とは比べ物にならない一撃が、真斗を襲う。

「どうだ——ッ!」

「……ぐふふ、効かない……もんね……」

「なッ!」

もう一度ハンマーを掲げる真斗。

「まず——ッ！」

「みよるにいいいいるううううううううううう!!」

極太の電が、剛を襲う。

「ッ!？」

それは、すぐそばで弘を迎え撃っていた夏凜の眼にも映っていた。雷撃によって大きく吹き飛ばされた剛は、まるでぐったりとし、体のところどころを焦がしていた。

夏凜が目を離れた隙に、弘がレイピアを突く。

「くー！」

回避したものの、手首を切られる。

「精霊の障壁バリアがあまり働いていない……大赦の言った通り……ッ！」

精霊のバリアが使えない。それはすなわち、致命傷であつても、精霊は自分たちを守ってはくれない。

「厄介ね……！」

ついでに、弘の技量もすさまじい。

互いに二刀流。その技量は、全くの互角。

(認めたくないけど……これは……才能……ッ！)

そう、才能だ。弘は、その体から見える筋肉量は、決して多いとは言えないし、剣術をやっている、まだ初心者レベル。

だが、それでも、その反射神経と剣の振りは、達人のソレだ。

正直、夏凜と互角だ。

だが、だからこそ。

夏凜はそんな相手に負けたくなかった。

「舐めるなアアアア!!」

「ッ!？」

夏凜の剣速があがる。

才能でいつも比べられてきた。才能でいつも優劣をつけられた。才能で、まわりから押し付けられた。

そんなもので価値を決められたくない。そんなもので、簡単に諦めたくない。

自分は他の誰でもない。

「アタシはアタシ！三好夏凜よおおおおお!!」

「くうー!」

右手の一撃が、弘を仰け反らせる。

「これで……!」

そのまま左で斬りかかろうとした時、不意に、視界が急激に切り替わった。

「……え?」

理解する間もなく、何かに叩きつけられる。

「ガハア!」

喉の奥から、熱い何かを吐き出す。

ずり落ち、地面に腰を下ろす。

(な……に……が……)

夏凜は、自分が吐いたものが血だと理解するまで、数秒を要した。

そして、夏凜の目の前に、敵が降り立つ。

「助かったよ。真斗君」

「どう……いたし……まして……」

そこには、長身と大柄の二人。

弘と真斗だ。

夏凜が、弘に一撃を入れようとした瞬間、真斗が背後から夏凜を吹き飛ばしたのだ。

(ま……ず……い……)

すぐさま、そばに落ちている剣を右手で拾おうとする。だが、その右腕に、レイピアが突き刺さる。

「あああああ!」

凄まじい激痛が右腕から走る。

「下手に動くな。楽に殺せないだろ?」

弘がレイピアを投げ、夏凜の右腕を縫い付けるように突き差したのだ。

夏凜は、弘を見る。

そして、絶句する。

その表情は、まるでゴミでも見るかのように、無表情だったからだ。「確か、大赦に言われてこの戦いに参加したんだっただよね？可哀想に。騙されている事にも気付かないで。今僕が楽にしてあげるよ」レイピアが、妖しく光る。

(やだ……助けて……翼様……不道……！)

夏凜は、恐怖に、涙を流した。

一方で、こちらは、友奈と幸奈。

そこでは、格闘技のぶつかり合いが巻き起こっていた。

拳と拳が応酬し、蹴りが飛び、決定打を狙おうと、何の間もなく何かがぶつかり合う音が響く。

否、それは、一方的な戦いにも等しい。

友奈が、一切の攻撃を躊躇っているのだ。

「もうやめて！私は貴方を傷つけたくない！」

「そんな綺麗事、今更言っても無駄よ！」

容赦なく攻撃を浴びせる幸奈に対し、一切の攻撃をしない友奈。

巧みに攻撃をかわし続ける友奈。それに苛立ちつつも攻撃の鮮度が落ちない幸奈。

不意に、互いに組み付く形になる二人。

「こんな事をして意味ないよ！ちゃんと話し合って……」

「意味ならあるわ！この世界を壊す、そして新しい世界に千景君と行く！それが私が戦う理由よ！」

「何を言ってる……！」

「だからその為に、貴方を殺す！結城友奈ッ！」

離れる幸奈。一時距離を取ったところで、また踏み込む。

(これは受けちゃだめだ！)

友奈の感がそう告げ、どうにか体を捻る事で、その正拳突きを避け切る。

「チッー！」

それに舌打ちする幸奈。

だが、それでも拳の応酬は止まらない。

「お願い！話を聞いて！」

「何も話す事なんて無いわ！」

必死に呼びかける友奈だが、それでも幸奈は攻撃するのをやめない。

「やめて！」

とうとう、友奈から切り出す。

幸奈に吹き飛ばされる事で距離を取り、右足を後ろに下げる。

「勇者あ……！」

「ッ!？」

友奈が、満開によって得た、新しい力。

力を増幅させるのが牛鬼の他に、新しく精霊となったもう一つの力。

炎をその身に纏い、死人を地獄へ誘う、地獄の獣。

その名は『火車』。

「キイイイイイック!!」

瞬間、友奈の脚に炎が燃え盛り、振り抜いた足から、炎の一撃として放たれる。

「く!？」

幸奈は、思わず飛んで回避する。

そして、少し離れた根の上に降り立つ。

「炎の……！」

「!?!?……まさか!?!？」

友奈が、離れた状態で拳を振りかぶる。

その手に炎を纏わせて。

「勇者。パアアアアアンチ!!!」

真つ直ぐ撃ち出した拳から、炎が放たれ、幸奈に向かって飛ん

く。

それを幸奈は回避する。

「まさか、炎を飛ばせるなんて……」

「終わりにしよう！」

「!？」

立ち止まる幸奈。

「私は、この距離から貴方を攻撃できる。だけど、貴方はその為の攻撃手段を持たない。もう、勝負はついたも同然だよ！」

だから、と友奈は付け加える。

「もう、やめよう。私は貴方を傷つけない……」

それは、友奈の心からの本心だ。

誰も傷付く姿なんて見たくない。だからこそ、友奈は彼女の降参を求める。

だが……幸奈は、それを断った。

「……ふざけないで」

そしてそれは、彼女の逆鱗を逆撫でする。

「ふざけないでッ!!」

突如、彼女の周囲で黒い風が巻き起こった。

「!？」

それに驚く友奈。

「何が終わりにしようよ……何が傷付けたくないよ……」
拳を握りしめる幸奈。

「——ッ」

友奈は、思わず下がる。

その風が、あまりにも禍々しいものだから。

「千景君を、奴らは傷つけたじゃないッ!!」

身を屈め、そしてありえない速度で友奈へと接近する。

「——ッ!？」

「吹き飛べッ！」

反応出来ず、その拳を受ける友奈。

根の叩きつけられ、その根にクレーターを作り、大量の血を吐き出

す。

「ガハアア!?!」

意識が一瞬飛ぶ。

胸が焼ける、お腹が痛い、背中が痛い、体が重い、動かない。だが意識が消える事はなかった。

直後に、幸奈を膝蹴りが友奈の腹に突き刺さったからだ。

「がはっ……!?!」

容赦無い一撃が、友奈を現実に無理矢理引き戻す。

そのまま地面に倒れる筈の友奈の体を、胸倉を右手で掴む事で持ち上げる。

「終わりよ……」

「う……うう……」

意識が朦朧とする友奈。

あまりの痛さに、まともな判断が出来ない。

幸奈は、左拳を引き絞る。その手には、真っ黒い風が纏わりついていた。

「死ね……!」

そして、そのまま拳を友奈に叩きつけようとした、その直後。

眩^{まぼゆ}い黄色の光共に、紅白の刃がその場に降り立った。

彼岸花の覚醒

気付けば、千景は、月下に咲き乱れる紅い花の花畑に立っていた。「ここは……?」

訳が分からないとでもいうかのように、千景は周囲を見渡した。だが、ここは、どこか懐かしく、悲しい感情が溢れてくる空間だった。

何故その様な感情が溢れてくるのか分からない。

ただ足元を見てみると、一面に咲き誇るその花が、彼岸花だと分かった時、千景は、ここがどういふ場所なのか理解する。

「そうか……」

千景は、月を見上げる。

「貴方は……悔しかったんだな」

そして振り返り、そこに立つ人物を見据える。

千景の今の服装は、勇者の装束のそれ。そして相手は、千景のものと酷似している、戦装束。

ただ、千景と違う点は、僅かな身長の違い、髪長さや質感、そして、胸のふくらみ。

相手は間違いなく、女性だ。

だけど、千景はその人物をよく知っていた。

「ずっと後悔し続けた。自分を今まで愛してくれた事、楽しい思い出をくれた事、人との間に壁を作っていた自分に手を差し伸べてくれた事、それに気付かず、傷付けてしまった事。その全てを貴方は後悔していた。出来る事なら謝りたい。貴方はそう願った」

彼女の名前は、『郡千景』。

不道千景の先祖にして、勇者としての力を剥奪された、失格勇者。神樹に受け入れられず、ずっと一人で、いつか、仲間たちともだちに会える事を願い続けた、ただの呪われた少女。

呪われているが故に、神から見放され、そして、全てを失った、ただ一人の少女。

しかし、それでも――

——彼女は確かな幸せを手に入れた。

だが、そうであっても、神樹に受け入れられなかった。
穢れた存在だから。神の意志に背く行いをしたから。

だが、そうであっても——

「俺は皆を守りたい。その為に、力が欲しい」

不道千景は拳を握りしめる。そして、郡千景を見据える。

「だから、アレを使わせて欲しい。危険だと分かっているけど、俺は友奈を……皆を守りたい。こんなところで寝ている暇なんかない」

千景は彼女に問う。

「お前も守りたいだろ。あの人を守ったこの世界を。あの笑顔を。あの景色を。だったら負けていられない。死んでもだめだ。だから、使わせて欲しい。あの力を——ッ!」

その瞬間、千景を取り囲むかのように、何かが現れる。

全部で七体。笠を頭に被り、白い装束に身を包み、鈴を鳴らす。

どれもこれもが皆同じ、七人減る事増す事無し。

そして、少女が微笑んだ。

「——必ず、守りなさい」

優しい、慈愛に満ちたその表情は、まるで、逞しく成長した息子を見る、母親のそれ。

その瞬間、千景の脳裏に、まるでパズルの最後のピースがはまり、完成するかのような感覚がおとずれる。

ずっと引つかかっていた疑問。それが、今、解けたかのように。

力の使い方を理解する。

「……当たり前だ」

千景は、手を伸ばす。その先には、笠を被る七人のうちの一人。
その名は——

「出番だ、『七人御先』」

翼が佐奈に撃ち抜かれる数分前。

剣を引き抜く翔琉。

その刺さっていた場所には、一人の少年がうつ伏せに横たわっていた。

「……ふん」

翔琉は、鼻を鳴らす。

せつかく、幸奈がこちら側へ誘ったのに。断らなければ、今頃は生きていられたものを。

「まあいい。あの女に任せれば生き返させられるだろう」

そう吐き捨て、次の目標へと行こうとする。

だが。

「シャアツ!!」

「ツ!?!」

突如、背後からの殺気を感じ、大きく前に跳んだ翔琉。

どうやら敵の刃を回避できたらしい。

「まだ生きていたのか」

おそらく、千景が不意打ちに出たのだろう。わざと死んだふりをして、翔琉を背後から奇襲するという――

千景の姿を見た途端、その思考は断ち切られた。

「なん……だと……!?!」

その表情は驚愕に染まっていた。

そこには……

「何故……七人いる……!?!」

白い羽織りのようなものを纏い、頭の部分をフードのようなもので隠している千景。

そこまでは良い。

問題なのは、千景が七人いる事だ。

千景は決して忍者ではない。それは普通。そもそも分身の術など、人間の身で出来るような業ではない。

では何か？

翔琉には分からない。

そうもしている内に、千景たちのうち一人が、翔琉に向かっていく、残り六人は、別々の方向へと飛んでいく。

「チー！」

おそらく、他の仲間の救出に行つたのだろう。

そんな事は、翔琉がさせる筈も無い。

両手の剣を瞬かせ、向かってきた千景を、すぐさま斬りつける。

千景は、その攻撃を鎌によつて凌ぐ。

だが、二刀となつて手数が増えた翔琉の攻撃を、姿が変わつただけで全く強化された訳はない千景では、持つはずも無かった。

すぐさま、右肩から左脇にかけて、深く斬られる。

「ふん、こんなものか」

と、すぐさま他の者の所へ行つた千景たちを追いかけようとした翔琉だったが。

「どこへ行くんだ?」

「ッ!?!」

すぐさま、後ろから声が聞こえた。

本能のままに振り返り、右手の剣を薙ぐ、同時に、甲高い金属音がその場に響く。

「バカな・・・!?」

そこには、たった今斬り殺された筈の千景が、全くの無傷で立っていたのだ。

血を流した痕跡の無い、まるで、汚れた服を全く同じ新しいものへと着替えたかのようにそこに立っていた。

ならば、と翔琉は駆け出す。

千景は、そんな翔琉を迎撃する。

斬撃の応酬。

だが、その拮抗は呆気も無く崩れ、大きく弾かれて体を仰け反らせる千景。

そんなながら空きの胴体に、翔琉は、心臓に向かって左の刃を突き立てた。

「心臓ならどうだ・・・!」

剣は貫通し、左胸から背中まで、剣が皮膚を突き抜ける。

それにぐったりとする千景。

今度こそ絶命した。

翔琉は、そう確信して剣を引き抜く。

時間を喰われた事に苛立ち、すぐさままた追いかけてしようとしたその時。

「まだだぞ?」

「ッ!」

また、声がした。

足に鋭い痛みが走る。

「ぐッ!」

大きく飛び、距離を取る翔琉。

そこには、やはり、無傷の千景がいた。

「何故だ・・・確実に心臓を貫いた筈だ・・・!」

「そんな単純な話じゃないんだよ。これはただの分身じゃない」

「・・・そうか、本体か」

翔琉は、剣を向ける。

「あの六人の中に本体がいるんだな?ならば、ソイツさえ殺せば、お

前は消滅する。そういう事だな?」

「そんな事をわざわざ教える馬鹿がどこにいる? いいから来いよ。何
度でも相手してやる」

千景は鎌を構える。

翔琉も剣を構える。

もはや、味方の救援には行けない。

戦況は、今この場で逆転した。

向こうの奴らが、どうにかしてくれる事を祈るしかないだろう。

そして、言葉交わずして双方はぶつかった。

そして――

「……え?」

翼は、絶句していた。

美森が撃ち抜かれた事に激昂し、そのせいで大きな隙を晒し、そこ
を佐奈の矢が撃ち貫く。

そう思っていた。

だが、翼の目の前で、白い装束を身に纏う千景が、翼を押し飛ばし、
代わりにその矢を受けたのだ。

「ち……かげ……くん……?」

そう、名を呼ぶも、目の前に立つ千景の胸には、大きな穴が空いて
いた。

「なんで……なんでなんだ……どうして君が……」

ゆっくりと、前のめりに倒れる千景。

あんな傷では、助からないだろう。

「……」

佐奈は、そんな彼の様子を、哀悼の意をもって目を閉じた、その時。

「きゃあ!?!」

「?!」

突如、美紀の悲鳴が聞こえた。

そこには、今翼の目の前で胸を撃ち抜かれ倒れている筈の千景が、美紀に鎌を振るっていた。

「なッ!?!」

「どういう事だ!?!」

二人して目を見開く。

「驚いてどうする翼」

「え……」

更に、信じられない事に、倒れ伏した千景が消滅し、同じ場所にもう一人の千景が現れたのだ。

「ち……かげ……くん……?どうして……」

「ああ。これか?俺の奥の手らしい」

「まさか……満開か?」

「いや、そんなたいそうなものじゃない。強いて言うなら――

『憑依』だ」

気付けば、美紀を襲っている千景の他に、もう四人。

「く!?!どういう事だ!?!」

佐奈を襲う千景が一人。

他三人は、おそらく他の者の救援に向かったのだろう。

「翼、ここは俺達が抑える。お前はあのバーテックスをどうにかしろ」

「だ、だけど……」

「お前、東郷の事になると集中できなくなるだろ?だったら、あいつの元についてやれ。正直言って、まともに戦えないなら迷惑だ」

「そうかもしれないけど……佐奈さんは……!」

「シャーラップッ!」

ゴンッ!と翼の頭にチョップを叩き込む千景。

「大切なんだろ!だったら自分の事情なんかより、あいつを優先しろ!」

「……分かった。死なないでくれよ」

「死なねえよ。少なくとも、今の状態ならな」

「そっか・・・」

互いに笑い合う。

「ちなみに、七人だからこの俺がそっちにつく。他の奴らは他の俺がどうにかする」

「分かった。捕まっつて！三郎！」

とくに追及する事なく、翼は、三郎を呼び出す。

海戦において、撃墜王と呼ばれた男、『坂井三郎』。それがその精霊の正体だ。

背中に飛行ユニットを展開し、千景を掴んで、飛び立つ。

「途中で夏凜ちゃんたちも拾っていく、いいね！」

「ああ、構わない！」

加速する二人。その先にいるのは、夏凜と剛だ。

「う・・・うう・・・」

「さあ・・・楽になれ」

そうして、弘が、夏凜に刃を突き立てようとしたところで、千景が割って入った。

「うわ!？」

レイピアを弾かれ、さらに蹴りを入れられ、下がる弘。

「無事か！夏凜！」

「ふ・・・どう・・・？」

夏凜は、目の前にいる千景を見上げる。服装が大きく変わり、白い装束を勇者装束の上から来ているようだった。

千景は、夏凜を心配そうにみていた。

その右手には、レイピアが突き刺さっていた。

「大丈夫か……!?!」

「え、ええ……」

ふと、夏凜は、千景の背後を見た。

「不道! 後ろ!」

「え……」

間に合わず、数本のレイピアが千景の背中に突き刺さる。

そのうち一本が、心臓に突き刺さっていた。

「不道!!」

夏凜は悲鳴をあげる。

(嘘……嘘よ……そんなのって……!)

千景は、屈んだ状態で、うつむいた。

「邪魔が入ったけど……これで一人だね」

弘は、少し忌々し気に、背中にレイピアを突きたてられた千景を睨み付ける。

数本のレイピアを投擲して、千景を貫いたのだ。

「ふ……どう……!」

夏凜は、左手で千景の頬に触れようとする。

からんからん

そんな音が聞こえた。

「……え?」

「なん……で……!?!」

弘と真斗が、驚愕に目を見開いていた。

何故なら、突き刺さっていたレイピアが、まるですり抜けるかのよう千景の体から落ちたからだ。

「不道……?」

「安心しろ夏凜。まだ死んでない」

千景は、顔をあげ、微笑む。

さらに。

「ぎゃああああ!?!」

叫び声が轟いた。

見ると、真斗の後ろから、鎌を突き立てている千景の姿があった。

「三ノ輪先輩！」

その突き立てた千景が叫ぶ。

「お返しだオラアアア!!」

背後から飛んできた剛が、反時計回りに振り回したハンマーを真斗に叩きつけた。

「げう!？」

「うわあああ!？」

弘を巻き込む形で、吹き飛ばす。

根の壁に叩きつけられ、土煙をあげる。

「つしやあああ!勇者たるもの!あの程度の雷撃でくたばるかああああ!!」

咆える剛。

「千景が……二人……?」

夏凜は、今起きている事に、混乱していた。

何故、千景が二人いる?それよりも千景は弘のレイピアに貫かれて一度死んだ筈だ。その時の傷はどこに行った?

ありとあらゆる疑問が一変に襲い、訳が分からなくなる夏凜。

「夏凜ちゃん!剛さん!」

「おう翼……つて千景!？」

さらに、翼が千景を引き連れて飛んできた。

これで三人。ますます訳が分からない。

「ちよ、ちよつと不道……」

「ん?なんだ夏凜?」

そこで夏凜は、最も可能性のある事を、千景に聞く。

「もしかして……使ったの?満開を……」

「いや違うけど?」

速攻で否定された。

「いやいやいや、それじゃあその三人に分かれている理由が説明できないでしょう!？」

「説明は後です。まずは、あのデカブツをどうにかしてこい」

そうして、千景は、レオ・スタークラスターのいる方向を見据える。

「夏凜ちゃん、大丈夫？」

「翼様……」

「時間がない。抜くよ」

「あ……あああああ!?!」

待った待たずに一気にレイピアを引き抜く翼。

激痛が走るも、歯を食いしばって、耐える夏凜。

「一反木綿」

翼の左腕に巻き付いていた一反木綿の一部が引きちぎれ、夏凜の傷口に巻き付く。

「良いな？ 奴らの相手は俺たちがする。お前たちはあの化け物の相手に行け！」

「夏凜ちゃん、剛さん、ここは千景君の言う通りにしよう。今の千景君なら、奴らを抑えられる」

「しょうがねえか」

剛が承諾する。

「で、でも……」

「夏凜ちゃん」

だが食い下がろうとする夏凜。それを翼がとがめる。

「今は、千景君を信じよう。僕らは、バーテックスの撃破だ」

「……分かりました」

渋々と承諾する夏凜。

「行け！ 一人連れてけ！」

「行くよ！」

「くたばんじゃねえぞ！」

「負けないですよ……！」

強化された跳躍力で、去っていく翼たち。

その場に残されたのは、千景二人。

一人は、翼たちのもとへ向かったのだ。

「ぐ……う……」

そこで、真斗たちが起き上がる。

「悪いが・・・」

「ここから先は通さない」

鎌を構える千景たち。

「ふざけるな・・・」

弘が、レイピアを取り出す。

「何故邪魔をする・・・どうせ守ってくれない・・・邪魔になったら消されるようなこの世界を・・・どうして守る必要があるんだ・・・！」

弘はレイピアを向ける。

「殺す・・・殺してやる・・・殺してやるううううう!!」

絶叫する弘。

「うがああああああ!!」

同時に、雄叫びをあげる真斗。

千景二人、真斗と弘。双方が激突する。

その一方で。

レオの攻撃で、地面に倒れ伏す、風。

「じょ・・・冗談じゃ・・・ない・・・わよ・・・」

痛む体を動かし、どうにか立ち上がろうとした、その時。

巨大な水泡が、風を捉えた。

「がぼ・・・!?!」

身動きが取れない。水をかいて脱出しようとしても、まるで手応えが無く、脱出する事が出来ない。

「んん・・・!」

ならば。剣を振り回す風。

とにかく脱出しなければ、溺死してしまう。いくら精霊の加護があ

ろうとも、苦しいものは苦しい。

「お．．．ねえ．．．ちゃん．．．？」

樹が、そんな姉の名を呼ぶ。

(だめ．．．だめだ．．．！)

風の中で焦りが産まれる。

樹を置いて、皆を巻き込んでおいて、自分だけが先にくたばる。

そんな事、そんな事は、風には許せない。そんな事に陥ったら、自分を許せない。

そんなの絶対に認めない。認めたくない。出来る訳が――

「そんなの出来る訳ないでしょおおおおおおおおおッ!!!」

その瞬間、風の体を光が包む、水泡を吹き飛ばした。

それと同時に。

紅い一閃が、友奈と幸奈を引き離した。

「え．．．!?!」

「くッ!?!」

それと同時に来た眩い光に思わず顔を腕で覆う友奈と幸奈。

そして、対峙していた彼女たちの間に、一人の少年が降り立っていた。

「!?!」

光が収まり、顔をどかせば、そこには、友奈には背を、幸奈には正面を向ける千景が立っていた。

「千景君．．．」

「千景君．．．どうしてここに?」

幸奈は、苦い顔をして、千景を睨みつける。

対して、千景は真っ直ぐに幸奈を見据え、言う。

「お前を止めに来た」

ぐっと、姿勢を低くして、鎌を構える千景。

「千景君．．．」

「行け、友奈」

「でも……」

「頼む」

短く、そう頼み込む。

だが、それでも友奈は、その場に踏みとどまろうとする。

「大丈夫」

振り返る千景。

「俺は死なないし、お前ならやれる」

白い装束から見える、彼の笑顔に、友奈は、心が安らぐのを感じる。

「……わかった。信じてる！」

すぐさまレオの元に走る友奈。

それを見送る千景。

「……さて」

千景は、幸奈を見据える。

「あいつらの元には行かさないぞ。幸奈」

「………なんで」

幸奈は、俯いており、その拳を握りしめている。

「なんで！」

そして、昂る感情を吐き出す。

「この世界を守ろうとするの！この世界には絶望しかない！神樹が力尽きれば終わるような世界を、何故守ろうとするの！貴方を愛さないこの世界を、何故！」

黒風が巻き起こる。

「……お前、俺を愛さないと言ったな。悪いが、お前は一つ勘違いをしている」

千景は、幸奈に言う。

「俺は、勇者部の皆がいるだけで、それでいいんだ」
「!?」

「俺はただ勇者部の皆がいるだけでそれで良いんだよ。皆が生きるこの世界が好きなんだよ。誰もかれもが一生懸命に生きるこの世界が好きなんだよ。元気な人、賢い人、熱血な人、諦めない人、ずるい人、気弱な人、恋する人、清楚な人、強い人、優しい人、頑張る人、守る

うとする人、戦おうとする人、皆が皆、それぞれの生き方で生きている。この世界で確かに生きている。どれだけ絶望しても、人は必ず立ち上がれる。俺はそれを信じている。だって俺は——」
今なら、迷いなく言える。自分が何者なのかを、自分がなんであるかを。

「不道千景は勇者だからだ」

真っ直ぐにそう言い放った。

「……何よそれ」

幸奈の周囲を、黒い風が取り囲む。

「何が勇者よ……貴方は貴方、不道千景よ……」

幸奈は顔をあげる。

「貴方が自分を勇者だと言うなら……私は貴方を否定する！」

そして、拳を向ける。

「そうかよ。だったら来い！幸奈！」

走り出す千景。

同時に、幸奈はクラウチングスタートの態勢になり、あげた踵に風を圧縮、開放し、初速から高速で千景に突っ込む。

「オオオ！」

「ハアア！」

その瞬間、刃と拳がぶつかり合った。

勇者は根性

七人に分身した千景たちが、翔琉たち襲撃者たちと戦闘を開始した頃。

風は、空中で黄色い光を背景に、変わった勇者装束をいつの間にか着込んでいた。

「お姉ちゃん……まさか……」

樹が、倒れ込んだ状態で姿が変わった姉の姿を見上げていた。

「溜め込んだ力を開放する……それが勇者の切り札……」

「そう、満開だ」

「！」

空中にたたずむ風に、翼が飛んでくる。

「翼……あいつらは？」

「千景君が食い止めています」

「一人で？大丈夫なの？」

「どうやら、大丈夫みたいです」

と、翼の見る先。そこでは、同じ装束を着た六人の人物が、襲撃者たちを食い止めていた。

「……あいつ、六つ子だったっけ？」

「なんでも、彼の切り札というものらしいですよ。それに、あれは満開じゃない」

「満開じゃないって……！」

そこで、レオが風に向かって攻撃をしかけていた。

放たれた炎球を軽々と回避した二人。

「風先輩の能力は剣を巨大化させ、敵を両断する事！ならば、満開によってその力は——！」

「大幅に強化されてるって訳ね！」

「その通りです！行って下さい！」

風が突っ込む。そのままレオに突進する。

すると、今まで歯が立たなかったレオが、いとも容易く吹き飛ばされ、地面に落ちる。

「行ける！」

「流石です……！」

風を賞賛する翼。

その直後、神樹の方向で青い光が放たれる。

「!?!」

「あれは……！」

樹を救出していた剛が、そう声を漏らした。

その光の中心にたたずむは、巨大な船のようなものに乗る、東郷美森だ。

その船につけられた左右四門ずつ、計八間の砲門がある姿は、まるで『戦艦』。

「もう……許さない……！」

額に、日ノ丸印のハチマキをする美森。

「我、敵軍ニ総攻撃ヲ実施ス！」

目の前に現れたピスケス。

それに対し、美森は戦艦の砲門全ての砲撃を——無慈悲にピスケスに叩き込んだ。

その強力な攻撃は、ピスケスの体全てを吹き飛ばし、御霊をむき出しにさせる。

「この程度の敵なら、封印の必要もないみたいね」

八門の砲門のエネルギーを集約して放つ。

その一撃は、ピスケスの御霊を一撃で貫き、爆散させる。

「いつ見ても妙な散り方……」

その様を、なんとも冷めた目で見つめる美森。

だが、突如美森の目の前に何らかのモニターが映し出される。

「!?! 何!?!」

それは、神樹を中心としたリーダー。

そこには、今さまに神樹に向かって近づくと一つの光点が表示されていた。

「神樹様に近い……!?!このバーテックス……何故気付かなかった!?!」
地面を恐ろしい速度で走る、上半身を晒し台のようなもので拘束さ

れた状態で、二足のバーテックス。

ジェミニ・バーテックス——双子座の名を与えられたバーテックスだ。

「こいつ……小さくて速いッ！」

すぐさま追撃を始める美森。

だが、ジェミニは身軽に優雅にその砲撃の嵐をかわしきる。

「軽やかにかわした!?このままじゃ……神樹様が……！」

やられてしまう。そこから先は言葉にはならなかった。

言葉が詰まったからじゃない。すぐそばで緑色の光が輝いたからだ。

その輝きの正体は、満開を発動させた樹だ。

「私たちの日常を……壊させない……！」

「樹ちゃん！」

美森は、それに歓喜する。

「樹ちゃんまで……」

だが、翼の表情は浮かないものだった。

「樹！」

風が、レオの攻撃をかわしながら叫ぶ。

「そつちに行くなああああああああああああああ!!!」

絶叫と共に、背中の中輪から、通常時とは比較にならない程のおびただしい数のワイヤーが伸ばされる。

その無数のワイヤーが、ジェミニに襲い掛かり、絡めとる。

そしてそのままの状態で浮かされ、樹の目の前まで引つ張られる。

「お仕置き！」

樹がギュツと拳を握ると、全身をワイヤーで巻かれたジェミニの体が、ワイヤーが引つ張られた事で、その圧力に耐えられず、粉々に切られる。

「えげつな!」

剛がそういう。まさしく、えげつなく恐ろしい子だ。

粉々にされたジェミニの中から、小さな御霊が現れ、樹はそれを一本のワイヤーで貫く。まさしく千変万化の名に相応しい能力だ。

これで、残りはレオ・スタークラスターのみだ。

「馬鹿な……!?!」

遠くで、佐奈が眼を見開く。

スタークラスターとなったバーテックスの力は、今の勇者システムでは歯が立たない筈だ。それなのに、ただ姿が変わっただけであの力とは、佐奈には思わなかった。

「すごいな。流石俺達の部長だ」

佐奈の前に立つ千景がそう喜びを混じらせた声で言う。

「満開……想像以上に厄介だ……!」

そう確信する佐奈。

狙撃したいと思うも、今日の前にいる男を、排除しなければならぬ。いい。

「させるかッ!」

「チィ!」

鎌が振るわれる。

佐奈が距離を取ろうと常に後ろに下がる。

矢を三本つがえ弓を引き絞り、放つ。

二発弾かれるも、最後の一本は千景の眉間に突き刺さる。

だが、ものの数秒もしないうちに矢はすり抜けるように落ちる。

そして、千景は無傷の状態で佐奈に襲い掛かる。

だが、これで佐奈は一つの確信に至る。

「致命傷に至らなければ、生き返る事はない……!」

ならば、狙うべきはどこか。

矢を二本つがえる。千景は構わず佐奈に突っ込む。

矢を放つ。

「ッ!?!」

そして、千景はその軌道に目を見開く。

例え防衛しなくても生き返るので防ぐ必要はないのだが、それでも生き返るには僅かな時間を要する。

まあ、正確には生き返っているわけではないのだが。

とにかく、常に急所に対する防衛は怠らなかつた千景だったが、その攻撃が急所ではない事に驚いた。

その二本の矢は、千景の脚を正確に貫く。

「ぐッ!?!」

足に走る激痛。

それに思わず膝を地面につけてしまう。

さらに両手を射貫かれる。

「しばらくそこで寝てろ」

佐奈は、二体のバーテックスをことごとく倒した敵を見据える。

「・・・仕方が無い」

佐奈は、二本の矢を弓につがえる。

そして、そのまま引き絞る。

その矢先は、天空を向いていた。

「――喰らえ・・・!」

佐奈は、その二本の矢を、上空に向かって天高く撃ち上げた。

何故その様な事をしたのか。

その理由は、次の瞬間に起こった事で否応なく理解させられる。

「!? 何!?!」

突如、上空が金色に輝き出す。

「・・・あれは・・・!?!」

夏凜が、驚愕に目を見開く。

空の先、雲一つ見えない空、そこから見える、無数の金色の星々。

否、それは星では無い。

「あれは・・・矢!?!それも、とんでもない数の・・・!?!」

美森が、戦艦の能力を使って、その光の正体を見破る。

佐奈が行った事。

それは、一種の信仰行事。

矢を二本、上空に撃ち上げ、祈祷する事で、天の神より、裁きの鉄槌の如き、文字通り矢の雨を振らせる事を願う儀式。

それは、特定範囲にいる敵集団を一瞬にして殲滅する範囲攻撃。その規模と密度、そして威力は、遮蔽物を使った程度では防げるものは無い。

その飽和攻撃を、避ける手段はない。

完全に逃げ遅れた状態では、回避はまず無理。

完全なる、万事休すだ。

「私が・・・！」

樹がワイヤーを操る。おそらく、ワイヤーで網を作り出し、それであの矢の雨を防ごうというのだ。

「いや・・・僕がやるよ」

「翼先輩!」

だが、そんな樹を翼が片手で制する。

「こうなったら、僕も腹をくくるしかないか・・・」

翼は、しっかりと上空を睨み付ける。

「いくぞ、傘」

左脇腹にある満開ゲージ。そのゲージは、すでに満タンだ。

「満開ッ！」

翼が叫んだ途端、翼を中心に青い光が巻き起こる。

「あれが・・・翼様の満開・・・！」

夏凜が、その姿を地上から見上げる。

満開した翼の姿は、やはり他のみなと同じ、服装が変わっており、その両肩辺りから、武骨なアームが伸び、その先には半透明の巨大な楯が備えられていた。

そして、翼は、その二つの楯を重ね、上空に向ける。

だが、それではあまりにも範囲が狭すぎる。全てを防ぐには至らな

い。

「翼君……」

美森が、翼を見守る。

その時、翼は美森に向かって微笑む。

「大丈夫」

そう呟き、翼は、その力を遠慮なしに開放する。

「かむやたてひめ神屋楯比売ッ！」

突如、翼を中心に巨大な光の膜が出現。それは、勇者部全員の上空に広がり、広大な天蓋として出現した。

そして、上空から降り注ぐ無数の矢の雨が、その天蓋に叩きつけられる。

「ぐ……う……！」

その威力と密度に翼の顔が苦悶に染まる。

だが、それでも翼は引かない。引くわけにはいかない。

「この……程度……あの時と……比べれば……！」

輝きが、増す。

「どうってことないんだよおおおおおおおおおおおおおおおおお
おお!!!」

矢の雨が降り止む。

翼は、守り切った。

「ハア……ハア……ハア……ハア……」

強大な力の使用。それによって翼を激しい疲労を襲う。

「翼君！」

そんな翼に美森が飛んで寄る。

「あはは……どうにか防ぎ切ったよ……す……東郷さん」

「ええ。すごいわ。だけど……」

「大丈夫、僕の満開は他の人よりは持つ。もともと防御特化だからね。僕のは」

と、なんでもないかのよう微笑む翼。

だが、その表情に、美森はその笑顔に隠れる哀しみを感ぜずにはいられなかった。

次の言葉を紡ごうとした美森。だが、それよりも大きな緊急事態が起る。

「あれは……!?!」

それに、美森と翼は絶句する。

「そんな馬鹿な……!?!」

佐奈は茫然としていた。

ヘウズ・カタストロフイ
「天の驟雨を、防ぎ切っただと……!?!」

佐奈には信じられない事実だ。

天の驟雨と名付けられたあの技は、佐奈の二つ持つ切り札の片方。敵の殲滅に特化したあの技をいとも容易く、とは言い難いが防がれるなど思っていなかったのだ。

「どうした?」

「!?!」

ふと背後で、すでに再生した千景が鎌を肩に担いで笑っていた。

「自分のとっておきが防がれて驚いたか?」

「貴様……何故……」

「鎌で心臓を刺した。腕は動くからな、無理矢理握ってやったんだ」

「……なるほどな……」

佐奈は納得する。なるほど、確かに心臓を刺せばそれは致命傷だ。

だが、そんな事は関係ない。千景にとっては。

「勇者部を舐めるなよ」

そう言い、千景は佐奈を襲う。

一方で、こちらは弘の方では。

「なんで邪魔するんだよ! お前だって虐められてたんだろ! だったらこんな世界いらないだろ! 壊した方が良いだろ! お前を虐める奴が

生きてていいのかよ！お前はそれで良いのかよ！」

「やかましいわ……」

弘が喚き散らしながら、二刀のレイピアを振るう。

それに対して、千景はたいしてダメージを負わずにその攻撃を迎撃する。

「どうして助けようとする！どうして救おうとする！お前を貶める奴がいるこの世界をどうして守ろうとするんだよおおおおおおおおおおお！！！」

「そんなの友奈や勇者部の皆がいるからに決まってるんだろがこのシスターコンプレックス。正直お前の事情なんて知らねえし気に掛ける気にもなりもしない。俺にとっては皆を守る方が大事なんだよ。お前の事情なんか知った事か」

「僕の気も知らないでええええええ！！！」

弘の形相がどんどん歪んでいくのと比例するかののように、剣劇が激しくなる。だが、千景はそれを冷静に対処して弾き続ける。

まさに、子供が大人に喧嘩を仕掛けているみたいだ。

「くそーくそくそくそー！そんな澄ました顔しやがって！どうして僕の妹たちが殺されなくちやならなかったんだ!?どうして大赦は妹たちを守ってくれなかったんだ!?どうしてお前たちはこの世界を守ろうとするんだああああ!!！」

「……………」

もはや答えるのも面倒くさい。

「騙されてる！お前たちは騙されている！大赦は良い人ぶってる癖に、本当は僕ら庶民を騙して世界の真実を隠し続けている！そんな事許されて良い訳が無い！そんなの偽善者のする事だ！僕は殺す、世界を殺す。大赦が守るこの世界を壊す！大赦を潰してやる！絶対に、絶対に——ツ!？」

突如、明後日の方角が明るく輝く。

思わず二人は距離を取り、その方向を見る。

そこには、レオが巨大な炎球、否、それは小さな太陽ともいえるべきものを作り出していた。

「あれは……」

「……ハハ、アハハ！終わりだ！もう終わりだ！あれが落ちればいくら精霊のバリアがあるからって防ぎきれぬ訳が無い！お前たちはもう終わりだ！アハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！！」

「オイ、高笑いするのはいいけどさ」

千景は、心底つまらなそうに、言う。

「……うちの勇者部を舐めるな」

直後、その場を眩い輝きが襲った。

その数秒前。

レオが、巨大な炎球を作り出している最中。

「何……？この元気っぽい球……」

風が顔を引き攣らせてそう呟く。

だが、その直後にレオがその炎球を風に向かって放つ。

「いけない！」

「お姉ちゃん！」

「避けて下さい！風さんッ！」

美森、樹、翼が叫ぶ。

「風先輩！」

そこへたった今駆け付けた友奈が叫ぶ。

「避けなさい！」

夏凜も叫ぶ。

だが、その中で、その様子を見守っている七人目の千景は、落ち着いた様子で呟く。

「いや、大丈夫だろ」

その言葉通り、風の傍で新たな輝きが放たれる。

「何!？」

驚く風。だが、その脇を誰かが通り抜ける。

「こんじよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ

!!!」

「剛!？」

巨大なアームに巨大なハンマーを握らせた姿に変化した剛が、そのハンマーのジェット噴出口部分にエネルギーを溜め込む。

そして、最大にまで溜め込んだエネルギーを一気に開放し、そのまま叩きつける。

「オオオオオオオオオッ!!!」

絶叫。叩きつけたハンマーは、その太陽を確かに受け止めていた。だが、その圧倒的エネルギーの塊を、どうにも押しかえす事が出来ない。

「剛せんぱあああああい!!」

樹が絶叫する。

「勇者部一同ッ!封印開始イイイイイイイッ!!!」

だが、そんな剛に、風が大剣を持って手助けする。

「風!？」

「アタシにも背負わせなさいよね!」

それに驚く剛だったが、風が笑って返す。

それに、剛も笑って返す。

「おっしやあ!人間様の根性って奴を見せてやろうぜええええ!!」

「やったろうじやないのおおおおおお!!!」

二人が、全力で、ハンマーに、大剣に、力を籠める。

「これがああああ・・・」

「俺たちのおおお・・・」

「『魂』^{たましい}って奴よおおおおおおおッ!!!」

次の瞬間、炎球が弾き飛ばされる。

その軌道上。そこには、弘と真斗、そして二人の千景の姿が。次の瞬間、真っ赤な火柱をあげて、大きな爆発が巻き起こる。

飛ばされたのだろう。

まだ生きてはいる筈だ。

ただ、最も悪夢なのは――あれほどの攻撃を受けて、すぐさま復活した千景の事だろう。

「奴の復活能力は・・・単純な再生ではないのか・・・？」

「だったら、矢がすり抜けるように落ちる訳がないだろう？」

「・・・」

千景が、鎌を構えたままですう言ってくる。

だが、佐奈はそれには答えない。

（このままではレオが倒される・・・だが、この七人に分裂した敵に抑えられては向こうにいく事もできない。おそらく、幸奈も抑えられている。この中で最も可能性があるとするれば・・・）

と、レオの方向を向いた佐奈。

そして、思わず絶句してしまう。

「・・・なんだあれは？」

千景もつられてそちらを見る。

「・・・なんだあれ？」

思わず、千景も絶句する。

それは、あまりにも巨大すぎた。

何から何まで規格外すぎる、その大きさ。それは、巨大なサイズの御霊だ。

あまりにも大きく、あまりにも果てしない。

しかも出現場所が宇宙ときた。

そんなものを、どうやって破壊すればいいのか。

否。

「あの少女なら、やりかねない・・・！」

幸奈から持たされた、結城友奈という少女の満開。

暴力という暴力を集結させたかのような、あの巨腕を使えば、あんなもの、粉碎する事など造作もないだろう。

今、それを止められる存在。それは――

「美紀ッ！」

「!?」

佐奈が矢をつがえ、今、美紀と戦っている千景の脚を射貫く。

「行け！あのピンクの少女を仕留めろッ！」

「う、うん！分かった……！」

「まずいッ！」

佐奈の意図を察した千景が慌てて美紀を追いかけようとする。

だが、突如として千景は吹き飛ばされる。

「!?」

佐奈が蹴り飛ばしたのだ。

「邪魔はさせないぞ」

「この野郎……！」

千景は佐奈を睨み付ける。

一方で、佐奈に射貫かれた千景はすぐさま自殺。再生し、美紀を追いかける。

だが、美紀のあまりの早さに、追いつく事ができない。

「だめだ……速すぎる……！」

どれだけ加速しようとも、美紀の圧倒的速さに、千景は焦る。

このままでは――友奈が殺される。

「だめだ……そんなの……！」

焦る焦る焦る。もし誰かがいなくなったら？誰かが死んでしまったら？自分は正気でいられるのだろうか？

無理だ。

「やめろおおおおおおおおおおおおお!!」

絶叫する。

だが、それで、相手が――止まった。

吹き飛ばされる形で、突如、何の前触れもなく。

横から、伸びた、棒の様な物で、美紀が真横に吹き飛ばされた。

「な……!?!」

思わず立ち止まる千景。

「ごめんね。本当はこのまま見ているつもりだったんだけど、流石にそうも言っていられなくなったからでてきちやったく」

「……」

余りにも、間の抜けた声。穏やかで、緩やかで、優しい。そんな声が聞こえた。

視線を、その声の元へ向ける。

そこには、金砂の髪をなびかせ、紫色の、バラを想起させる勇者装束を着こんだ、体中を包帯で巻いた少女が、如意棒よろしく伸びた槍を元に戻していた。

「」

そして、千景は絶句する。

少女は、そんな事をお構いなしに、千景の前に降り立った。

「こんにちは、紅い勇者さん」

と、馴れ馴れしく話しかけてくる少女。

その柔和な態度に、物凄い違和感を感じるも、千景は、包帯を巻か
れていながらもその顔立ちに似ている人物を、知っていた。

そして、思わず、呟いてしまった。

「——乃木……さん……?」

それに、少女は驚いたかのように目を見開いた。

「あれれ?名前を名乗った覚えはないんだけどな?まあいつか」

だが、その少女は特に気にした様子もなく、一部ほどけた包帯を金
紗の髪と一緒になびかせ、微笑む。

まるで、『彼女』のように。

「お前は……一体……?」

故に千景は問う。

彼女は何者なのか。彼女は誰なのか。彼女は——『彼女』なのか
?

そして、少女は一回、くるりと回って、千景を見て、言う。

「私、乃木園子^{のぎそのこ}って言うんだよ。一言で言って、先代勇者^のって奴かな?
まあよろしくね」

少女、『乃木園子』は、そう名乗った。

圧倒的の神格を見せてつけて。

乃木園子

レオ・スタークラスターが吐き出した御霊。

その大きさに驚いているのは、何も佐奈だけではない。

勇者部一同も、その大きさに驚いている。

「何もかもが規格外過ぎる……」

「しかもこの御霊、出てる場所が……宇宙……」

巨大過ぎるその御霊。それに絶句する一同。

その出現場所が宇宙となると、壊すどころか、辿り着くことすら出来ない。

「おおき、過ぎるよ……あんなものどうやって……」

「あはは……ここまで来て……か……」

翼が引きつった笑みを浮かべる。

「最後の最後で……畜生……」

夏凜が悔しそうに拳を握りしめる。

それもそうだろう。そもそもあのサイズ、どうやって壊せばいいのだろうか？

可能性のある剛はレオの攻撃を弾く事に全ての力を注いで風と共にダウン。

しかも、あれを破壊する事に、どれほどの時間がかかるのだろうか。

とてもではないが、リミットまでに破壊する事は不可能に近い。

そう、諦めかけた時だった。

「大丈夫」

そんな声が聞こえた。

「あれも御霊なんだから、今までと同じようにすればいいんだよ」

友奈だ。彼女は、自信をもって言い放つ。

「どんなに敵が大きかったって、諦めるもんか！」

その言葉に、皆が安心する。

「友奈……」

「友奈さん……」

「友奈ちゃん……」

その中で、美森が言う。

「行こう、友奈ちゃん。私なら、友奈ちゃんを運べると思う！」

「うん！」

「分かった。僕らで封印しておく。二人は、あの御霊を壊してこい！」
翼がそう言い、それに頷く一同。

「気を付けろよ」

千景が、そう言う。

「・・・うん」

そして、友奈が美森の戦艦に乗る。

二人は手を繋ぎ、御霊に向かって一気に飛んでいく。

「・・・頼んだよ・・・」

「翼様！」

「!？」

二人を見送る翼。だが、夏凜の悲鳴にも似た叫びに、思わず振り返る。

そこでは、樹海が激しい速度で腐敗していつていた。

「浸食が速すぎる・・・それに、拘束力も・・・！」

残り七十秒。

それまでが、リミットだ。

「乃木・・・園子・・・」

「そうそう、乃木園子だよ。気軽に、園子って呼んでく」

なんとも間の抜けた口調で語りかけてくる、金色の髪の少女。
その装束は、鮮やかな紫をしており、バラを想起させる、優雅さが
感じられるものだった。

ただ、その容姿に、千景はとある人物を想起させ、またその性格も、
もう一人の人物を想起させた。

ただ、何よりの証拠は、その名に『乃木』の二文字がある事だ。
おそらく、そういう事なのだろう。不道千景が『郡千景』の子孫で
あるように。

「そういえば、貴方の名前を聞いてなかったなあ」

「あ、ああ、悪い。俺は不道千景。一応・・・勇者やってます」

「そんな硬くならなくていいよ。リラックスリラックス」

刹那。

園子は何も見ずに、まるでそよ風に吹かれるかのように回転させた
槍で飛んできた矢を弾いた。

「な!?!」

「ついでに〜」

更に、園子の姿が千景の視界から消える。

それと同時に、背後で鋭い金属音が鳴り響く。

慌てて振り向けば、すぐまじかで、先ほど吹き飛ばした筈の美紀が、
千景に向かって刃を突き立てようとし、それを園子が防いでいた。

「ふーくんには、手出しさせないよ〜」

「え!?!」

瞬間、園子の左足が美紀の脇腹に突き刺さっていた。

そのままレオの方向とは全く逆の方向に吹き飛ばされる。

「きゃあああ!?!」

「美紀!」

そのさなかに、佐奈が美紀を空中で受け止め、着地する。

「お前は・・・!?!」

「こんにちは、私、乃木園子っていうんだよ。よろしくね〜」

「乃木・・・だと・・・!?!」

佐奈の顔が、驚愕に染まり、次に激しい憤怒に変わる。

「あの男……どこまでも……!!?」

「ねえ。それ、もしあの人の事だったらさ……」

佐奈が呟いた言葉に、園子が反応する。

その場の空気が冷え切り、まるで心臓を鷲掴みにされるかのよう
な、そんな声音で。

「——殺すよ?」

「——ツ?!?!?」

呼吸する事さえ忘れる程に、濃い殺気。

それに、佐奈は表情を歪め、美紀は恐怖に顔を強張らせる。

そして、その殺気は、翔琉の元にも届いていた。

「ツ!?!」

思わず、攻撃の手を止める双方。

(なんだ……今の殺気は……!?!?)

翔琉は、その威圧に、冷や汗を流す。

それは千景も同じだった。

だが、すぐさまもたらされる共通される記憶によって、その殺気の
正体を悟る。

(あの人……それほど大事な人なのか……?)

と、よそ見をしていた所で、眼前に黒い何かが迫っていた。

反応する間もなく、大きく吹き飛ばされる。

翔琉が千景を蹴り飛ばしたのだ。

「復活するのはその場だ。つまり、大きく吹き飛ばしてしまえば追
いつけないだろう」

翔琉が走り出す。

(あの殺気の持ち主、このままにしておくのはまずい……!)

翔琉は、その元へ急ぎ駆け出す。

「待て!」

すぐに千景も追いかける。だが、かなり吹き飛ばされた上に、翔琉

の異常な速度に、千景は追いつけない。

(まっずいぞ・・・あれじゃあ食い止められない・・・！)

場面戻って、園子たちの所では。

ほんの一瞬だったが、異常な殺気を発した園子。

ちなみに、その殺気は翼たちには届いていない。

かなり抑えたのか、範囲はそれほどではないらしい。だがその代わり密度があまりにも濃かった。

だから、千景は現実には引き戻されるまでに時間がかかった。

「——ッハア!？」

やっと、肺の麻痺が解けたのか、大きく過呼吸する千景。

「あ、ごめんね。ちよつとらしくなかつたかな」

園子が、それに気付いて振り向く。

その口調は、先ほどまでと同じ、穏やかなものだった。

「おい・・・心臓に悪いぞ・・・乃木さん」

「園子で良いよ。私はふーくん、って呼ぶからさ」

「ふーくん!？」

「あ、それともちーくんの方が良かったかな？それともふろすけかな？」

「・・・ふーくんをお願いします」

「分かつた」

えへへ、と嬉しそうに笑う園子。

完全に園子のペースだ。

「ってそれよりも！」

「大丈夫だよ。周囲に気を配るのは得意だから」

少し落ち着いた声音で返す園子。

それと同時に、槍を背中に回し、穂先を後頭部あたりで止めた途端、矢が迫って弾いた。

「く・・・！」

「無駄だよ。貴方の攻撃は私には届かない。ここから動く事も出来ない。八方塞がりって奴だよ」

「・・・あの男に教授されていたというのは伊達ではないようだな・・・」

「あの男？」

首をかしげる千景。

あの男とは、一体誰なのだろうか？

「そうだよ」

パチン、と園子が指を鳴らす。

すると、彼女の周囲に大量の精霊が現れる。

その数、十六体。

「……………すごい……………」

改めて感嘆する。そして思う。

この少女は、相当の強さを誇る者だと。

「だからさ、ここで手を引いてくれると助かるんだけどな」

と、警告する園子。

その声音は口調こそは穏やかだが、その言葉に込められた意味は、相当重い。

つまりは、『このままやるなら容赦はしない』という事だ。

これには思わず二人はたじろぐ。

圧倒的力を持つ相手に、勝算などありはしない。

更に。

どさり、と真斗と弘が佐奈たちの側に落ちてくる。

見ればそこには二人の千景が立っていた。

さらに、佐奈と戦っていた千景もおり、全員で四人の千景がそこに集まってきていた。

真斗と弘はどうにノックアウト。さらにレオの爆炎を受けて身体中に火傷の痕があり、その痛々しきさを見る限り、とても戦えるような状態ではない。

これで、五対二。状況は園子たちが圧倒的に有利だ。

「……………」

「あわわ……………」

佐奈は悔しさに顔を歪め、美紀は挙動不審にきよろきよろしていた。

しかし。

突如、園子とその場にいた千景が動いた。

千景は避けるように、逆に園子は迎え撃つように、退き、槍を、横に向かつて振り抜いた。

金属音が鳴り響き、園子の手に重い衝撃が走る。

「ん．．．!?!」

「美紀、やれ」

その相手は翔琉だった。

翔琉は何かを呟くと、美紀はそれに反応した。

ダークネス・ミスト
「霧の罪」

瞬間、美紀の体から真つ黒い霧が撒き散らされる、それは広範囲に一気に広がり、園子たち全員うあを包み込む。

「これは．．．」

千景が周囲を見わたそうとすると、突然、呼吸が苦しくなり、激しく咳き込む。

「ゲホツ!?ゴホツ!」

吸い込めば、肺や喉が痛くなる。

「これは——酸か?」

「なんだよこれ．．．酸の霧!」

服の裾を口に押し当て、体内に霧を入れないようにする。

だが、次の瞬間、足を貫かれる。

「ぐあ!?!」

「苦痛だろうな。死なないお前にとっては」

「!?!」

突然、声が聞こえた。

佐奈だ。

「どういう原理か知らんが、お前はどうかやら、他の次元にいる自分と入れ替わる事で復活を促しているようだな。しかも、その数が増減しないを見た。本体がどこにいるのかしらないが、まあ、おそらく仲間たちの所にいった奴である事は間違いないだろう」

方向がバラバラ、聞こえる大きさもバラバラ。まるで自分の位置を悟られないようにしているかのようだ。

しかし、攻撃する時の気配は誤摩化せないようだ。

「ふッ！」

斜め後ろからの攻撃を、どうにかして弾く千景。

遠くでも、激しい剣戟の音が聞こえる。園子が翔琉と、他の千景は美紀と戦っているのだろう。

だが、この霧はまずい。

精霊のバリアを持たない千景にとっては、あまりにもきつい。まるで自分の体を内から溶かされているかのようだ。

「なんだよ……この霧は……!?!」

「とある昔、ヨーロッパのロンドンという所で、このような酸の霧が蔓延していた時期があったそうだ」

姿の见えない敵は語る。

「その町では、子供は救われない。腐敗した人間の本性が表れる街だ。これは、そんな街の状態を具現化した結界。人類の罪の一つだ！」

矢が飛んでくる。

千景はそれを迎撃しようとするも、視界が霞み、防ぎ損ね、矢を胸に受けてしまう。

「ぐう!?!」

膝をつく。しかし、矢は体をすり抜ける様に落ち、千景の状態は最初リセットに戻される。

だが、霧の毒素はなおも千景を蝕む。

「くそ……!」

逃げる事は叶わない。攻撃を当てる事も出来ない。そんな状況の中、千景は武器を構え、敵を迎え撃つ。

一方、園子の方では、怒濤の剣戟が巻き起こっていた。

「オオオオオオッ！」

翔琉が絶叫するも、園子に剣は届かない。

その理由は、園子の卓越した槍技にある。

まるで踊っているかの様に、槍を操り、翔琉の二刀の長剣の乱舞を凌いでいく。何の苦も無いかの様に。

それ故に、翔琉は苛立つ。

この日の為にどれほどの修練を重ねて来たのか。世界を壊す為にどれほどの努力を重ねて来たのか。神樹を殺す為だけに、どれほどの苦痛を受けて来たのか。

分かる訳がない。

「何故だ！」

激しい剣戟の中、翔琉は叫ぶ。

「何故貴様はこの世界を守ろうとする。お前は裏切られた筈だ。この世界に、神樹に、大赦に。ずっとベッドの上で過ごさなければならぬような体になって、何故この世界を守ろうとする!?! 答えろ! 乃木園子!」

互いに弾き合い、距離を取り合う。

「・・・そんなの、決まってるよ」

それに対して、園子は確固たる決意を持って言い放つ。

「せんせい師匠の為だよ」

彼女は、この結界の影響を受けていない。だから、まともに動ける。翔琉が動く。

右手の剣での、突き。

まるでジェット噴射の様な弩級の速度で放たれる強力な突き。

突きは、あらゆる武術において、最も殺人的な攻撃力を持つ型の一つだ。

その一撃は、園子の顔を貫かんと迫る。

「わわ!!」

それを園子はギリギリのところまで頭を傾けて回避する。

その直後に、園子は翔琉を蹴り飛ばす。

「ぐ・・・!」

強制的に距離を取られる翔琉。

(時間はあまりかけてられないかな・・・)

この戦いにおいて、翔琉の成長は異常な速度で進んでいる。かなりの才能の持ち主だ。おそらく、短期間でありとあらゆる剣術をその身に叩き込んだのだろう。

このままでは追いつかれる。

ならば、と園子は次の行動に出る。

「鴉天狗からすてんぐ」

彼女の側に、一体の精霊が出現する。

鴉のようだが、その服装は天狗のような装束をまとっている。

その精霊を出現させた園子は、槍の柄の端を両手で持つと、それを頭上から思いつき振り上げる。

「対天武術『滝打たきうち』」

そのまま一気に頭上から振り下ろす。しかし、槍の射程には、翔琉はいない。むしろ、程遠い。

園子の、その行動に首を傾げる翔琉。

すると、彼女の持っている槍の柄部分が、物凄い勢いで伸びた。

「!?!」

彼女の槍の能力は、長さの無限伸縮。その長さに制限はない。

しかし、翔琉のそこからの防御は、まさに神業と呼べる程の速さだった。

両手の剣を交差させ、その槍を受け止める翔琉。

だが、その衝撃は恐ろしく重い。

「ぐう!?!」

「まだまだいくよ〜」

園子は、槍を元の長さにすぐさま戻すと、今度は自分から接近。

「『牙貫きばぬき』三連ツ!」

ほぼ同時に三撃、神速の突きが迫る。

それを翔琉は両手の剣を持って、一撃目、二撃目を逸らし、三撃目を回避する。

その三撃を凌いだ翔琉は、すぐさま反撃に出る。

恐ろしい速度で振るわれる剣。

「『灯笼とうろう』」

それを園子は、まるで流れるような動作で逸らす。

だが、翔琉はすぐさま、もう片方の剣で追撃。しかしこれもいとも容易く躲される。

まるで、水を切っているかのように抵抗が無い。

翔琉は、両手交互に剣を振るう。その速さは、常人では見切れない。それに対して、園子は流れるように槍をふるい、その連撃を捌き切る。

一見、園子は余裕そうに見える。だが、そうではない。

僅かだが、翔琉の剣が園子の頬を掠める。

「ッ!？」

それに、表情を強張らせる園子。

余裕は、本当は無い。

何せ、最近までベッドの上にいたのだ。体力も大幅に落ちている。

流石に、一年近くもベッドの上で何もしないで生活をしていれば、腕が鈍るのも致し方ない。

それに、感も鈍っている。

(これじゃあ師匠せんせいに鍛えなおされちゃうな)

内心で苦笑しながら、園子はポーカーフェイスを貫き通す。

意識を研ぎ澄ませ。

斬撃に、一切のブレを作るな。

水面を鎮めろ。

決して揺れを作るな。

一切の無駄なく放たれる一撃は、どんな技でも、一級品に昇華する。全てを守る刃となる。

園子は、自身の師匠の教えを、心の中で反芻する。

だからこそ、決める。

(私の一番の得意技ッ!)

「行くよッ!」

「ッ!？」

翔琉の懐に飛び込む園子。

それは、槍使いにとって、自殺行為に等しい行為だ。

だが、園子がやるのは、槍による攻撃ではない。

唯一生き残っている、左手と右足。

それを使つて、園子は、翔琉の腹に強烈な一撃を叩き込む。

掌打だ。

左掌による、打撃。それによって翔琉は空中へ吹き飛ばされる。

「ぐうッ！」

「対天武術ツ——!!!」

園子は、自らの槍の射程から、翔琉が出てしまう前に、右手に持った槍を一気に突き出す。

体中の各所で、捻り、伸ばし、曲げ、僅かな『加速』を起こし、それらの速度を、全て右手へ集束し、ありったけの力で、一気に解き放つ、園子唯一のオリジナル槍術。

『鴉からすうがち穿』

超神速の刺突が、翔琉を打ち貫く——まではいかなかった。

天性ともいえる反応速度で、その突きを防いだのだ。

両手の剣を交差させて、槍の軌道上で防いでいた。

だが、それで良い。

「鴉天狗ッ！」

叫ぶ園子。すると、槍が物凄い速さで伸び、翔琉を彼方へと連れていく。

「ぐうおおおお?!」

彼方へと飛ばされていき、見えなくなる。

ある程度まで伸びた槍は、すぐさまもとの長さに戻る。

「さて、これであの人はしばらくは……」

園子は、元の長さに戻った自分の槍を見る。

「うーん、やっぱり前よりも速さが落ちてるな」

そうぼやく園子。

ふと、殺気を感じた園子は素早く前に飛び出し、振り返る。

そして、腹に鋭い痛みが走る。

美紀が、背後から奇襲し、その一撃が、園子の体を掠ったのだ。

ただ、浅い筈なのに、美紀の顔には狂喜が現れていた。

それに疑問を感じた園子だが、すぐさま彼女の体を引き千切るかのような激痛に襲われる。

「がはっ!」

さらに、吐血。

口から少量の血を吐いた程度だが、体には、刃物で斬りつけられたかの様な痛みがあった。

これは、呪いか？

「あらら、しくじっちゃったかな・・・？」

まあ問題はないのだが。

「どうもこうも」

彼女の側に、新たな精霊が現れる。頭が二つある、奇妙な妖怪だ。その精霊が、園子の斬られた部分を撫でると、その傷は一瞬にして塞がる。

「あら、傷痕は残っちゃったか。まあ呪いの類だからしょうがないよね」

と、気楽に笑う園子。

体の痛みも引き、上手く体も動く。

「どうして!？」

その一方で、美紀は驚いていた。

おそらく、先ほどの一撃で死ななかつたからだろう。

「ごめんね、私に呪いの類はあまり効かないんだ。なんだか、耐性？っていうものがあるみたいだから」

半分神様みたいなもの、とは付け加えずに。

「く・・・でも」

一瞬、悔しそうに顔をゆがめるも、すぐさまその顔を笑みに変えて、もう一度園子に襲いかかる。

「直接、バラバラにすれば・・・!」

と、刃を突き立てようとした、その時だ。

「オオオオオオツ!!」

「え・・・？」

すぐ横から、千景が鎌を変形させて、光の刃を出現させる大技『大葉刈』で美紀におそいかかってきた。

「元凶はお前かア!」

「あ・・・」

下からすくい上げるかのように、鎌を振り上げた。
何かが碎ける音と共に、美紀の体が宙を舞う。
そして、地面に落ちる。

「あ……うう……」

胸から、止めどない程の量の血が流れ出ている。

ナイフで心臓への直撃は免れたようだが、それでも、ナイフは碎かれ、致命傷を負った事には代わりない。

「終わりだ」

「うん、もう終わりにしよう？」

そう、さとす様に言う二人。

「うう……ふええ……」

一方で美紀はあまりにも痛いのか、泣いている。
とてもではないが見てられない。

だが、そうも言っていられないのも事実。

二人は、警戒する。

だが、突如として、千景が殴られたかのように前のめりに倒れる。

「!？」

その後頭部には、一本の矢が突き刺さっていた。

それを見た園子の反応は速かった。

すぐさま槍を手の上で回転。後ろに回して、敵の第二射を弾く。

だが、それでは終わらない。

「美紀から離れろォー！」

「わわわ!？」

佐奈が鬼の形相で蹴りを放ってくる。側面から打撃を加える回し蹴りだ。

それを園子は体を反らし、頭を下がらせることで回避する。

佐奈はそのまますれ違い、美紀の元へ降り立つ。

そして、矢をつがえ、その鏃やじりを園子に向ける。

「うう……佐奈さぁん……」

「安心しろ、すぐに助けてやる」

先程とは一変して、まるで母親のような慈愛に満ちた表情で美紀に

微笑む。

だが、美紀から視線を外し、千景たちを見たとき、その表情は険しいものへと戻っていた。

千景が起き上がる。

「いきなりかよ」

千景は呆れた様子でそう呟く。

「あれ？生きてたんだ」

「そういう設定だからな」

そんな軽い会話をするも、注意は佐奈からはそらしていない。

「……さっきの攻撃、どうして私を先に狙わなかったのかな？」

園子がそう問いかける。

確かに、圧倒的な力を持つ園子を不意打ちで倒せるなら、これ以上の戦果はないだろう。

だが、彼女は千景を先に狙った。

「そこまでのチャイルドコンプレックスって事かよ」

千景が翼から聞いたこと。

彼女は、千景と同じ捨て子だったらしい。理由は不明。

ただ、拾ったのが施設ではなく、六道家傘下の家系の一つの『阿室家』だった。

そこで養子として引き取られ、大赦暗部部隊の一員としての訓練を受けた。

当時、六道家次期当主の座は翼の兄のものだった。当然、道場で会う事は必然とも言える。

格闘技において、目覚ましい成果をあげていた佐奈は、当然の様に目立つ。

足も速く、知能も高い、そして容姿も抜群とくる。

まさしく、『強い者こそ美しい』を体現する人であった。

そんな彼女だが、彼女には、とある願いがあった。

自分と同じ境遇の子供達を救いたいと。

全ての子供達に、少しでも良い。幸福を与えたいと、そう願っていたい

た。

例え全てを救えなくとも、ほんの少しでも、助けられたらと、そう思っていた。

だから、訓練の合間に、近所の子供達と一緒に遊んであげたりと、そうやって生活してきた。

そんななかで、二年前の事だ。

彼女が中学二年にあがりたての三月の頃だった。

彼女と親しかった近所の子供が、強盗に殺された。

それも、彼女の目の前で、だ。

その強盗を行った男は、半殺しになった状態で逮捕されたらしい。

その半殺し状態にしたのが、佐奈だった。

そして、事態はさらなる急展開によって最悪の方向へ向かう事になる。

例の、暗部部隊の壊滅だ。

ほとんどが弓矢によって射殺されていた。

その犯人が、佐奈だったらしい。

唯一の目撃者が、翼の兄であり、その証言から、そういう事になったらしい。

大赦は彼女を指名手配したが、ついで捕まることなく、搜索は打ち切られた。

そして、翼の兄は、当主の座を翼に譲った。

その時、翼は兄を問い詰めたらしい。

何故、当主の座を降りたのだと。

兄は、短く。

『俺は佐奈の想いを理解してやる事が出来なかった』

とだけ、言い、己の持つ権限のほとんどを翼に託した。

それが、千景の知る真実。

このことが、本当なら、佐奈は、相当な子供好きだという事だ。

しかし、何故そんな彼女がこの世界の滅亡を願うのか。

「……お前達も、この世界の真実を知れば、おのずと分かるはずだ」

「世界の真実・・・？」

佐奈の言葉に首をかしげる千景。

だが、園子には分かっていたようだった。

「もしかして・・・壁の外を見たの？」

千景は、彼女たちの会話に、疑問符を浮かべるばかり。理解する事が出来ない。

「そうか、お前は見たんだな？なら分かるはずだ。この世界には絶望しかないという事を！」

佐奈は怒鳴り散らす。

「お前達勇者は永遠に戦わなければならない！死ぬことも許されず、体を供物として捧げ続けて戦い続けなければならない！そんな生き地獄を、どうして守ろうとするんだ！」

純粋な怒り、憎悪を吐き出す佐奈。

「神樹が力尽きれば、どうせこの世界は終わる。子供達も救われない。この世界じゃ救われるわけがない。お前達のような子供を犠牲にし続けていく世界なんて、私はいらぬ。新しい世界なら、そんな事はなくなるんだ。誰もが救済される世界が、確かにあるんだ。誰も苦しまない、不幸にならない。そんな、確かな幸せがある世界が、そこにあるんだ！」

千景には訳がわからなかった。壁の外、絶望、神樹、見た。それらのワードをどうにか繋げようとして、千景は、先祖の記憶を掘り起こした。

そして、行き着いた。

「なのに、何故お前は戦おうとする!?あの男か!?あの男の『命令』だからか!?お前は、道具じゃない。そんな『命令』を聞く必要なんかない！何人もの子供達を、勇者にして戦わせて、殺している、あのろくでなしの男に、何故従う！」

そう言い終えた時だった。

「・・・ろくでなし？」

その、確かな言葉に、彼女は反応した。

そう、反応してしまったのだ。

彼女最大の逆鱗に、佐奈は触れてしまった。

「今、あの人の事を、ろくでなしって言った？」

「……」

何も、言えない。いう事が出来ない。そうだと言おうとしても、彼女の本能が、無理矢理声帯の機能をカットしていた。

言ってしまうれば殺される。本能がそう語りかけてくる。

逃げる逃げろ急かしてくる。だが動く事さえも出来ない。足が動かない。

「……」

それは、隣にいた千景も同じだった。

それは、余りにも濃密な殺気。

その場にいる生物が震え上がり、すくみあがり、絶望する程の、殺意。

化身が見える。彼女の怒りを具現化したかのような、化け物が見える。

それほどまでに、その人物の事を、けなされたくないのか。

「あの人は、いつも苦しんでるんだよ。あの人は、いつも辛かったんだよ。大切な人たちに置いて逝かれ、戦いたいののに戦えなくて、大切な人たちの願いの為に死ねなくて。苦しくて、辛くて、悲しくて、痛くて。誰よりも、置いていかれる苦しみを知っているんだよ。誰よりも、失う事の辛さを知っているんだよ。誰よりも、傷付き傷付ける痛さを知っているんだよ。誰よりも、優しいから、苦しんでるんだよ」

彼女は、自分の胸に、握り拳当てる。

「そんな人を、今、ろくでなしって言ったの……!?!」

それは、明確な殺意。濃密な殺気。触れる者全てを、殺す程の威圧。そんなモノを向けられて、喋れるわけが無い。動けるわけが無い。

穏やかそうな少女の、唯一触れてはいけない逆鱗。

それに今、佐奈は、触れてしまった。

「もしそうなら……」

園子が、槍を構える。

だめだ。それ以上はいけない。
その領域に踏み込めば、確実に戻れなくなる。
そこへ、入ってしまったえば、貴方は、二度とまともではいらなくなる。

止めなければ、あの人の子孫である彼女を止めなければ。
動け、動け動け動け、動いてくれ。

「死んでよ」

彼女が、明確な言葉を呟き、その切っ先を、佐奈に突き立てようとした。

「それ以上はだめだアアアアアア!!」

その前に千景が絶叫した。

「!?!」

それに、園子は、踏み込んだ所で止まった。

「………あ」

そして、怯えた。

「や……ちや……た……」

まるで、怒られて、縮こまる子供のようになり、園子は後ずさった。
そんな彼女を、千景は後ろから抱きしめた。

「——落ち着いて」

「ッ!?!」

「大丈夫、落ち着いて。ゆっくり息をするんだ」

千景は、彼女が落ち着くまで、抱きしめた。

人が安心する行為として、他人の体温を感じる事に、それほど安心する事はない。

「……ん、もう大丈夫、ありがとう」

「そりやどうも」

気付けば、霧は晴れていた。

園子の殺気が切れ、それによって美紀が気絶した結果だった。同時に、佐奈の四肢が弛緩したのか、地面にへたり込む。異常だった。

とても、年の近い少女のものとは思えない程の、殺気。

ただ一人、彼女が『師匠^{せんせい}』と呼び、尊敬している男を貶す事は、彼女の逆鱗に触れる行為であり、やり過ぎれば、『死』すら目に見えてしまう程の殺気を発し、実際、相手を殺しかける。

おそらく、そこまで大切な人なのだろう。

(あまり言わない方がいいな……)

そう心に誓う千景だった。

その直後だった。

空が爆ぜた。

否、それは、御霊が砕け散った時の光だった。

「友奈……やったんだな」

そこへ、翔琉がやってくる。

「チツ……」

舌打ちする。

「おい、二人を回収していくぞ」

「あ、ああ……」

まだ、脱力しているのか、よろよろと立ち上がる佐奈。

二人は、気絶している美紀、真斗、弘の三人を回収し、立ち去ろうとする。

「あ、おい！」

追いかけてよとした千景だったが、園子が止める。

「追いかけても、意味ないと思うよ」

諭すように言われ、引き下がる千景。

「……覚えておけ」

立ち止まった翔琉が、肩越しに振り向く。

「これで終わりでは無い」

そう言っつて、すぐさま遠くへ行ってしまう。

「なんだったんだ……それに、最後じゃないって……？」

「残念だけど、あの人が言ったことは本当だよ」
「え……?」

園子の言葉に、千景は呆然とするしかなかった。

星砕く拳

御霊が破壊される、数分前。

「ハアッ！」

「オオッ！」

拳と刃が激突する。

幸奈の拳は手甲によって守られているため、斬撃によって傷つく事がない。

しかし、衝撃は腕にダイレクトに伝わってくる。

鎌による重い衝撃を、常に拳で、腕で受け止めなくてはならない。だから、腕には大きな負荷がかかる。

持久戦では、断然千景が有利だ。

幸奈が、懐に入る事もある。

だが、どういう訳か、徒手空拳相手には慣れているかのように巧みに鎌の柄で幸奈の攻撃を防ぎ回避してくる。

「どう、して!？」

なかなか自分の攻撃が届かないことに、焦りを感じ始める幸奈。

千景は、この日の為に、戦闘訓練など受けてこなかった筈だ。

だというのに、何故ここまでして戦い慣れているのか。

その理由が、幸奈には分からなかった。

一方で千景といえば。

(似ている……)

鎌を振るいながら、ここまで攻撃を受けず、与えられない拮抗状態の中、幸奈の戦い方を、ある人物と重ねていた。

(高嶋さんの戦い方によく似ている……友奈の場合は父親から学んだから、流派の特色が表に出ているが、高嶋さんの場合、ありとあらゆる武術や格闘技を教え込まれてきたから、決まった型がない)

空手、ボクシング、カンフーに柔道や合気道、様々な武術を教えられていた初代勇者のムードメーカー『高嶋友奈』たかしまゆうなの戦い方に、幸奈の戦い方はよく似ていた。

(その手の戦い方を学んだなら、俺はよく知っているぞ!)

「オオッ！」

鎌を薙ぐ。

幸奈が手甲で防ぐ。

「くー！だつたらッ！」

彼女の周りを黒い風が巻き起こる。

「!?」

「吹き飛べッ！」

掌の中に、風が集束する。

螺旋に渦巻くその風の球体をもって、千景に一瞬にして走り寄る。

そして、掌に収まる螺旋の球体を、千景に向かって一気に開放する。

それを千景は防ごうとする。が、

「ッ?!」

何か嫌な予感が背筋を走り、千景は、すぐさま防御を放棄。代わりに右手を前に伸ばしつつ体を捻り、強風の一撃を避ける。

そして、地面を蹴り、幸奈の肩に右手を置いてハンドスプリングで、次に来た蹴りを回避した。

そのまま幸奈の背後に降り立った千景は振り向き様に鎌を薙ぐ。

それと同時に幸奈が風を纏った拳で迎撃。

双方の攻撃が正面からぶつかりあう。

「ぐあ?」

吹き飛ばされたのは、千景だった。

そのまま靴底をすり減らしながら後退する。

「アアア!!」

「!?」

幸奈が追撃してくる。

黒い風は、ただでさえ強力な力を有する。

まともに受ければ、ただでは済まない。

千景は、回避と防御に徹する。

だが、千景が憑依させている『七人御先』しちにんみさきでは、あまり効果がないといえる。

七人御先。

その能力は、同一個体の七体同時存在。

いわば、一つの存在を七つに分け、同時に存在させる事。

その数は、絶対に増える事も減る事もなく、それ故に、七人いるうち一人が死んでも、別次元から別の存在の千景が入れ替わり、戦闘を続行する。

一体死ねば、一体入れ替わり、二体死ねば二体入れ替わる。

七人全員が同時に死なない限り、決して死ぬ事の出来ない、いわば、『不死化』だ。

本体なんて存在しない。それぞれが別々の個体であり、同一の存在。

それが、千景の操る七人御先の力。

そもそも、この憑依、西暦の時代において『切り札』と呼ばれていたこの力は、神樹の中に存在する概念的記録にアクセスし、その力を概念にあつた形で引き出すと言ったもの。

その使用には、肉体的負荷と精神的負荷の二つがある。

強力な精霊なほど、操れる力の強さは、大きくなるが、その反面、肉体にかなりの負荷がかかり、体自体が摩耗していく。

その上、切り札は、一種の降霊行事のようなものであり、妖怪などの悪霊の類を体の中に宿すのだから、体の中に、なんらかの瘴気が溜まり、精神に影響を及ぼすのだ。

かつて、千景の子孫である郡千景は、その精神的負荷によって一人の勇者を殺めかけた事がある。

だから、切り札の使用は出来るだけ控えるべきなのだが。

(そんな事考えてる暇はねえええ!!)

実に手慣れた動きで幸奈の攻撃を受け流していく千景。

しかし、幸奈の攻撃が激しい事には変わりはない。

一応、幸奈を圧倒する事の出来る精霊はもう一体存在する。

だが、それをやれば別の場所で戦っている別個体の千景が消滅してしまう。

(園子が戦ってるから大丈夫か？いや、いくらアイツでも厳しいだろう)

ならば、このまま戦うしかない。

と、そこで蹴りを入れられ、吹き飛ばされる千景。

「ぐあ!？」

地面を転がり、木の根に叩きつけられる。

「がは・・・っ!」

致命傷故のダメージで血を吐く。

それと即時に別の千景と入れ替わり、完全復活する。

「いい加減に・・・してよ・・・!」

苦々し気に睨み付けてくる幸奈。

「断る」

千景は、鎌を構える。

「——ツ!!」

それに、幸奈は泣きそうな顔になって、黒い竜巻を巻き起こす。

「どいてよ!」

その黒い風を纏って、千景に突っ込む。

「どかねえ!」

鎌を変形させ、光の刃を出現させる。

「アアアアアアアアアアアッ!!!」

幸奈が、拳を突き出す。

「おおはがり大葉刈イイイイ——!!」

刃が、拳が正面から激突する。

宇宙——

美森の満開によって出現した戦艦に乗って、上空にある御霊に向かう友奈と美森。

いつみても、その大きさには圧倒されてしまう。

と、まっすぐに御霊に向かっていた二人だったが、突如として御霊が自らの体から欠片を削り出し、それを友奈たちに向かって放った。

「御霊が攻撃!」

「迎撃するわ!地上にはおとさない!」

冷静に対処する美森。

八門の砲門から、一斉に掃射する。

その一撃は向かってきた欠片を全て破壊した。しかし、それで終わりではなく、次から次へと欠片が向かってくる。

「く……!」

美森は思わず顔をしかめる。

「東郷さん……」

「大丈夫……友奈ちゃん、見てて」

ぎゅつと友奈の手を握り絞める美森。きつと、自分が全ての欠片を落とすきつて見せるという、宣言。

それに、友奈は力強く答える。

「……うん!」

美森は、すぐさま八門の砲門から砲弾を撃ちまくる。

「一個たりとも通さないッ!」

その言葉通り、美森は、全ての欠片を落としまくる。

だが、如何せん、数が多すぎる。

いくら射撃に秀でた美森でも、

当然、撃ち漏らす。

欠片の一部が、通り過ぎていく。

「しまった……!?!」

思わず振り返る友奈と東郷。

だが、それも杞憂に終わる。

撃ち漏らした欠片が、どこからともなく飛んできた無数の矢によって撃ち抜かれる。

「あれは・・・!?!」

「翼君!」

なんと、翼が追いかけてきて両手のボウガンで欠片を撃ち落としたのだ。

「やっぱり心配で来ちゃったよ。バックアップは任せて、心置きなく進めッ!」

翼は、両手のボウガンから矢を連射し、欠片を撃ち落としまくる。

「翼君・・・支援、感謝する!」

「ありがとう!翼君!」

進み続ける戦艦。撃ち抜き撃ち落とし、破壊し突き進む。

撃ち漏らしは、全て翼のバックアップの元、全て撃ち落とされる。

そして、とうとう御霊に辿り着く。

「凄いや東郷さん!ここまで来たよ!」

友奈が歓喜の声をあげる。だが、満開の長時間使用の上、御霊の欠片を撃ち落とし続ける事による疲労によって、倒れかける美森。

それを、友奈が支える。

「東郷さん!?!」

「・・・友奈ちゃん・・・ごめん、ちょっと疲れちゃったみたい・・・」

美森は、無理に微笑む。

それに、友奈は両手で美森の右手を包む。

「うん、ありがとう、東郷さん」

「精一杯の感謝を込めて、

「・・・見ててね、やっつけてくる!」

友奈は、宣言する。

それに、美森は、

「いつも見てる」

送り出す。

「満開ッ!!」

叫び、友奈は、もう一つの姿を、その身に開花させる。

両側に、剛腕を出現させる。

「皆を守って・・・」

拳を、握りしめ、振りかぶり、それを、御霊に向かって振るう。

「勇者になあああああああああああああああああああるツ!!」

御霊に向かって飛ぶ友奈。

それを支援するかの様に、美森と翼が、最大出力を持って、援護射

撃に出る。

フルファイア
八門一斉掃射。

カノンボルト
火砲級貫通矢。

その二つの強力無慈悲の砲火が、御霊の一部を吹き飛ばし、中を露出させる。

「そこだあああああああアツ!!」

そこへ、友奈は剛腕を叩きつける。

そして、何度も拳を叩きつけ、中に入っていく。

「友奈ちゃん……」

美森は、そんな友奈を見送る。先ほどの砲撃で、全ての力を使い果たしたのか、満開が解除されていく。

そんな彼女を、抱きしめる者が一人。

「お疲れ様」

翼だ。

彼は、やはりいっぱいの優しさの中にほんの少し哀しみ紛らせて笑っていた。

「……翼君も……」

その時、美森は、微かに、その言葉に、懐かしい感覚を覚えた。

「……お疲れ様」

青い光が、二人を包んだ。

拳を叩きつけ続ける。

幸奈に喰らったダメージが痛み、意識が何度も飛びそうになるも、耐える。耐え続ける。

拳を叩き続け、突き進み続ける。

だが、やがて、行き止まりはやってくる。

拳を叩きつけても、もろく、砕け散る筈の御霊の物質が、砕けない。

「硬いッ!？」

さらに、御霊が友奈を押しつぶすかのように、その体を再生させていく。

「う、うわあああああああ!？」

再生していく御霊に、押しつぶされる友奈。

(う、動けない・・・!?)

無理矢理、体を動かそうとする。しかし、御霊の再生は、友奈を完全に押しつぶさんと、再生を続けていく。

(う・・・ああ・・・!?)

御霊が再生していこうとする度に、胸のダメージに響く。

(あ、ああ・・・)

意識が飛びそうになる。体が痛い。潰される。死ぬ。息が出来ない。痛い。壊れる。死ぬ。消える。跡形もなく。

様々な恐怖を、友奈を襲う。

朦朧とする、意識の中で、友奈は、ある事を思った。

なんで、戦っているんだっけ？

嵐が過ぎ去ったかのような惨状の場所に、二人は立っていた。

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

息をあげ、右腕から血を流し、背中を丸め、項垂れている幸奈。

「・・・」

鎌を構え、無傷の状態で、幸奈を睨み付ける千景。

はつきり言って、先ほどの正面衝突は、幸奈が勝った。

千景の体半分を吹き飛ばしたが、千景の大葉刈は、幸奈の右手を深々と斬った。

死んでも再生する千景に対して、怪我をすれば、治らない幸奈。

右手が使えない、その上、血を流している量も少なくはない。

持久戦では勝ち目はない。

双方、睨み合って、動かない。

だが、突如として、空が爆ぜた。

「!?!」

二人して、空を見上げる。

それは、御霊が破壊された際の、散り様に発する光。

「・・・御霊が破壊されたのね」

「そうだ。もう終わりだ」

千景は、刃を向ける。

「投降しろ。これ以上は無駄だ」

「……」

幸奈は、答えない。

だが、しばしの間を置いて、幸奈は口を開いた。

「……まだ終わりじゃないわ」

「何？」

「壁の外を見てみれば分かる。この世界は、絶望しかないわ」

黒い風が巻き起こり、千景は思わず手で顔を庇う。

そして、風が収まり、手をどかしてみれば、そこには、誰もいなかった。

「幸奈……」

その名を呼ぶも、誰も答えてくれはしない。

「本当って、どういう事だよ……」

千景は、園子に向かって、そう言う。

「何から話したらいいかな……そうだ。君は、壁の外の事を知って

るかな？」

「壁の……外……？」

千景は、しばし逡巡し、答えを述べる。

「ウィルスに汚染された世界……というのが建前上の大赦の言い訳だろう？」

「あれ？知ってたの？」

「少なくともここまではな」

「それなら、バーテックスが一体何によって作られたのか知ってる？」

それにも、千景は考える。

この場合、二つの結論がある。無知であるか既知であるか。

ただ、この少女の場合は、恐らく、知っているのだろう。

「——天の神が、人類への天罰の為に、使わせた存在。だから、
バーテックス
頂点」

「うん、そうだよ。よく、知ってるね」

「まあな……」

園子は、あえて、千景がその事を知っている事について、追及しない。

「君の言った通り、バーテックスっているのはね、天の神様が、人類への粛清として送り込んだ、天の使い」

「奴らは、地上の生物が数百年かけて成し遂げてきた進化を、融合によつてももの数秒で成し遂げる。さっきのバーテックスが融合したのも、その進化によるものだ……まだ進化するなんてな……」

先祖の記憶の中にある、地獄を千景は思い出す。

「うん。そして、この結界の外にはね。何も無いんだ」

「何も無い？」

流石にそこまでは知らない。

「まるで人類の痕跡そのものを忌み嫌うかのように、全てを焼き払ったんだよ。地上のありとあらゆるもの全て、跡形もなく消し飛ばした

んだよ」

「……………」

それに、千景は絶句する。

消し飛んだ？何故？

記憶には無い……つまり、その瞬間を先祖は見えていない？

「たぶん、人類再興の可能性を片端から排除したいんだと思う。そのお陰で、今、こんな事になってるけどね」

と、園子は、赤い光を纏って落ちてくる隕石のようなものを見る。その眼には、何かを懐かしむ様な、そんな感情が籠っていた。

「……………貴方は、まさか……………」

「……………ごめんね。話せるのは、今回はここまで。次もまた会えると思う。その時は、もっとお話しするね」

園子が、指を鳴らす。

次の瞬間、何かが破裂する音と共に、園子は煙に包まれ、それが晴れた時には、そこには誰もいなかった。

御霊を破壊した。

その達成感と共に、友奈は、地面に向かって落ちていく。

そんな友奈を、美森が受け止め、翼が支える。翼の満開は、まだ解かれていない。

その足元には、美森が満開の最後の力を使って残した、戦艦の船底部分。

「東郷さん……………翼君……………」

「友奈ちゃん……………お疲れ様」

「お疲れ、友奈ちゃん」

成し遂げた友奈を、労う二人。

「……………おいしいとこだけ、とっちゃった」

「……ごめん。最期の力で、これだけ残したけど……持つかどうか、分からない」

美森は、申し訳なさそうに言う。

「大丈夫」

そんな美森に、友奈は微笑む。

「きつと、神樹様を守って下さるよ」

「……そうね」

そう、微笑みあう。

「……あのさ、僕の存在を忘れてもらっちゃ困るんだけど」

翼が、頬をかきながらそう言う。

「あ、ごめんね翼君」

謝罪する友奈。ただ、美森は、真つすぐに翼を見ていた。

「……大丈夫、なんだよね？」

「……うん。君の為なら、どんな事だって出来るよ」

そう言い、翼は、自身の満開の力を開放する。

「僕の力は、守る為の楯と弓だ」

守る為に、どんな距離からでも、助けられるように。

かつて、二人の勇者がいた。

その二人は、姉妹の様に仲が良かったと言う。

その二人がそれぞれ持っていたのが、楯たてと弩おおもみ。

翼の端末は、性質が近い弩の勇者のものに、楯の勇者のものを組み込んだものだ。

故に、彼には全てを守る楯と全てを撃ち抜く弓が与えられた。

船底が、落下を始める。

「守るよ。どんな事があっても」

そう言った瞬間、盾が碧く白く光り出す。

「『神屋楯比売』」

青白い光が、三人を包み込む。

翼が、満開状態において、最大の防御力を誇る、絶対防御の楯。友達の師から与えられた、かつて、初代勇者の持っていた楯の名前を持つ、絶対防御の力。

二度と、大切な人を失わない為の、翼の楯。
それは球体となり、やがて、大気圏に突入。摩擦によって赤熱するも、熱は、通さない。

中にいる、友奈と美森は、手を繋ぎ合い、寝転がる。
その表情は、とても安らかだ。

それに、翼も笑みを零す。

絶対に、この楯が砕ける事はないからだ。

だが、それでも落下の衝撃までは殺せない。

だからこそ、地上にいる者が動く。

ワイヤーが、網状に編まれ、落下物を受け止める。

「樹ちゃん．．．!?!」

樹が、無数のワイヤーを使って、受け止めようとしているのだ。

しかし自由落下による等加速度運動によって、恐ろしい速度で落ちてくる物体を支えきれず、ワイヤーが引き千切れる。

だが、それでも樹は諦めない。

「すごい衝撃．．．!?!」

巻き起こる風圧に、感嘆を漏らす樹。

「絶対、助けて見せますー!」

いくつもワイヤーが落下物に絡みつき、引き千切られ、また絡みつき、無理矢理にでも止めようとする。

絡みつく度に、確実に、その速度は落ちている。

そして、地面に直撃する寸前で、落下は止まった。

「ナイス根性、樹!見て、アンタが止めたのよ!」

夏凜が、歓喜の声を上げる。

白銀之大楯が解除され、中から、友奈、美森、翼の三人が出てくる。

「はは．．．本当にすごいよ．．．樹ちゃん．．．は．．．!」

ばたりとうつ伏せに倒れる翼。それと同時に満開が解除される。

「翼様．．．!?!」

悲痛な声をあげる夏凜だったが更に、樹も力尽きたかのように後ろに向かって倒れかける。

それを夏凜が慌てて支える。

「いつてあげて……下さい……」
「……ええ」

樹をそこに座らせ、夏凜は三人に走り寄る。
「……お姉ちゃん、私、頑張ったよ……」
満開が解除される。

「サプリ、きめとけばよかった……」
そして、倒れる。それを、千景が支える。

「お疲れ様、樹」
彼女を寝かせる。その直後。彼の体が霞み始める。

「もう限界か……」
そう呟いた直後、千景の姿が、消えた。

七人御先が解除されたのだ。
一方です。

「友奈……! 東郷……! 翼様……!」

夏凜は、三人に駆け寄る。

だが、三人とも目覚めない。

「友奈!? 東郷!? 翼様!?!」

呼びかけても、返事しない。

「おい! 皆、しっかりしろよ!」

それでも、起きない。

起きない事で、焦る夏凜。

だが、それと同時に、もう一つの可能性が思い浮かばれる。

それを思うと、胸が締め付けられ、眼尻に涙が溜まる。

その時だ。

「げほ……」

短くせき込む声。

それに、目を見開く夏凜。

「え、えへ……大丈夫」

友奈が、目を開けて、そう言う。

「う……うう……」

美森が、呻き声を上げる。

「はい．．．．．なんとか．．．．．生きてます．．．．．」

風が、仰向けに倒れた状態で手を上げる。

「ぐおおお．．．．．いてえなあ．．．．．おい．．．．．」

剛が、答える。

「げほ．．．．．ごほ．．．．．!?!」

樹がせき込む。

「ハハハ．．．．．結局皆生き残ったね．．．．．」

翼が苦笑いを浮かべる。

それに、夏凜は、嬉しそうな表情をする。

「なんだよ、もう．．．．．皆．．．．．はやく返事しろよ!」

眼尻に、涙を浮かべ、そう言う。

「はは．．．．．やっぱ似てるなあ．．．．．君は．．．．．」

最後に、翼はそう答え、顔を傾け、美森を見る。そして、天高く拳を突き上げる。

(．．．．．守ったよ．．．．．銀ちゃん)

ここに、一つの戦いが決着を迎えた。

勇者部側の被害。

三好夏凜 右腕負傷

三ノ輪剛 火傷軽微

襲撃者側の被害。

稲成幸奈 右腕負傷

針目美紀 胴体重傷

車田真斗 全身火傷

加賀弘 全身火傷

バーテックス

ピスケス 撃破

アリエス 撃破

タウラス 撃破

ジエミニ 撃破

リブラ 撃破

アクエリアス 撃破

レオ 撃破

過去撃破したバーテックスの数を合わせ、十二体。

よって、全てのバーテックスを倒した事が確認された。

勇者側の勝利が、ここに確認された。

ただ、彼らはまだ知らない。

戦いは、まだ終わっていないという事を。

香川県丸亀市。

讃岐国とも呼ばれるその県のある土地にそびえ立つ、一つの城、『丸亀城』。

そのこの石垣の上にて、一人の男が、水平線に沈む夕日を見ていた。
「……………」

黒い髭が程よく口周りに生えており、髪の色は、年相応に、白髪が多い。

ガタイが良く、服の上から分かるほどに、筋肉がとても目立つ。

その男は、以前、包帯の少女——乃木園子を訪ねた男だった。

「……………まずは、一歩だ。ひなた」

自信の携帯を起動し、ポケットに入れていた巾着から、カセットカードを一つ、取り出し差し込む。

すると、データが読み込まれ、出てきたフォルダーの内一つを選び、更にもの中から一つ、写真を選んだ。

そこには、六人の少女と、一人の少年が、二列に並んで写っている写真があった。

武人の様な少女。活発で無邪気そうな少女。大人しく気弱そうな少女。屈託のない笑みを浮かべる少女。どこか困っているような表情の少女。そして、お淑やかに見える、黒髪の少女。

そんな女所帯の中の黒一点、山鳩色の髪の少年がいた。

「……必ず、取り戻して見せる」

ふと、そこへ、一人の少女が降り立つ。少女は、まるで中世の騎士のように、膝まづいていた。

剛と同じ麴塵色の髪。

牡丹と竜胆を想起させる、紅白の装束。

「お前か……」

「たった今、戦闘が終わりました。七体同時に攻めてきましたが無事、全てのバートックスを撃退、更に、襲撃者に少なからず被害を与えました。こちら側の被害は、三好夏凜の右腕負傷、あに……三ノ輪剛の軽微の火傷だけです……ただ……」

「……友奈、風、樹、翼、す……美森、あに……剛の六名が、

満開を使用しました……」

ぎゆう、と拳を握りしめる少女。

「……そう……か……」

男も、重々し気に、答えた。

「ご苦労だった……園子はどうだ？」

「無事帰還したようです。特に大きな問題もなく、今はベッドの上でぐっすりと眠っています」

「そうか。ありがとう、……。よく、戦いには参加しないでくれた。苦しかっただろう」

「いえ」

少女は立ち上がる。

「確かに戦えないのはむずがゆかったけど、勝って良かったって思っていますよ」

少女は、そうにかつと笑った。

勇者部の戦いは、まだ続く。さらなる展開を見せて。

後遺症

バーテックスとの戦いが終わり、多大なる戦果を挙げた、千景たち勇者部一同は、検査の為、しばらく病院に入院している。

「——はい、それじゃあ今日はここまで、お疲れ様」

「・・・どうも」

千景は、カウンセラーの言葉にそう返し、立ち上がった。カウンセリング室を出て、千景は、長い廊下を一人歩く。

「あー、しんどかった」

肩をもんで、そう言う千景。

「まあ、しようがないか・・・」

千景の使った『切り札』。

それは、神樹の中にある、概念的記録にアクセスし、力を抽出、それを自らの体に体現させるというもの。

その反動は、大きく分けて二つ。

一つは、肉体的負荷。

精霊という人の身に余る力を使うのだ。

体になんらかの負荷がかかってもおかしくない。

それ故に、千景の体には、未だに疲労が残っている。

もう一つは、精神的負荷。

先ほどのカウンセリングの理由がこれだ。

精霊と呼ばれるものは、名前というところから調べていくと、怨霊や妖怪のような、人に害を及ぼす存在でもあるのだ。

そんなものを、体の中に憑依させて、果たして精神が無事で済むだろうか。

そんな訳はない。かつて、千景の先祖である郡千景は、その影響で、一人の勇者を殺し掛けたのだ。

常に気持ちを強く持たなければ、いずれその闇に引きずり込まれる。

「その手の文献が残っていたという事には驚いたが……」
そうぼやく千景。

そのうち、友奈たちがいる控室に辿り着く。

「あ、千景君!」

「千景、アンタも検査終わったのね」

「検査というか、カウンセリングなんですけどね」

見れば、車椅子に座る美森、右腕を布で吊るしている夏凜、体の一部を包帯で巻いている剛、特に変わりのないようにみえる翼と友奈と樹、左目を眼帯で覆う風。

「風先輩、その眼帯は……」

「ふっふっふ、よくぞきいてくれ」

「左目の視力が低下してるのよ」

「ちよ!?!夏凜!?!また私の言葉遮って!?!」

「なるほど」

千景は一人納得する。

「なんだか、戦闘による疲労によるものだってお医者さんが言ってたらしいよ、すぐに治るって」

「ならいいけどさ……」

そう、眩く千景。

「夏凜はその右腕大丈夫か?」

「所々に炎症が出てるみたいだけど、それ以外は問題ないって。しばらく訓練は控えるようにと言われたけど」

「あまり無理しちゃダメだよ」

弘のレイピアによつて貫かれていたのだ。そうなつても可笑しくはないだろう。

「東郷と樹も大丈夫か?」

「ええ。私は特に問題はないわ」

「……」

美森はそう答えるも、樹の方は喋る事はせずに表情で答えた。

「ん?どうした?」

「樹ちゃんは声がね」

「ああ、なるほど……」

そう納得し、今度は翼と剛の方へ向く。

「二人も大丈夫なのか？」

「僕は特には」

「俺は右腕動かないが特に問題はないぞ」

「右腕が？」

「ああ」

確かに、剛はさきほどから右腕を動かしていない。

「なんか神経系に問題がおきたみてえだけど、すぐに治るってよ」

「そうですね、ならよかったです」

そう言う千景。

だが、その中で、翼だけはあまり浮かない顔をしていた。

まるで、憐れむかのようなそんな表情を。

「そういう千景はどうだったのよ？」

ふと風が聞いてくる。

「俺ですか？いえ、特に問題は……」

その時だった。

突然、風の右目が、真っ黒い何かに塗り潰されていた。

「え……」

「ん？どうしたの千景」

「ああ、いえ、なんでもありません……」

周囲は、風のその様子に気付いていない。

まさか、見えていないのか。

そう思い、視線を美森達の方へ向けた。

そこでは、樹の首、主に喉当たりと、美森の両足と左耳が、風と同じように黒い何かに塗り潰されていた。

(なんだ……?)

思わず、翼たちの方へ視線を向けた。

「!?」

そこで、千景は、剛の右腕全体が真っ黒く塗り潰されているのを見た。

それだけじゃない。翼の方がもっと多かった。

眼帯をしている右目、右耳、そして左腕。それだけではなく、口と鼻、そして右胸が黒く塗り潰されていた。

ただ、夏凜だけは、何もなかった。

「千景君、どうかしたの?」

ふと、友奈が千景の顔を覗き込んでくる。

「ああ、いやなんでも……」

そこで絶句する千景。

友奈の口元……否、舌が、黒く塗りつぶされていた。

それだけではない。友奈の左胸。

そこにある器官を塗り潰すかのように、黒くなっていた。

「千景君……?」

「千景、あんたどうしたの?」

友奈の怯える声、風の心配するような声に、我に返り、慌てて周囲を見渡す。

全員が全員、こちらを見ていた。

「ああ、いや、なんでもない……」

黒い、クレヨンのように塗り潰されていた光景は、消えていた。

(なんだったんだ……?)

千景は、先ほどの光景に疑問を持つも、取りあえずその考えは蚊帳の外に置いた。

「それはそうと! 私たち、バーテックスを全部倒したんだよ! お祝いしないと!」

と、友奈がそう言い、机の上に、売店で買ってきた、お菓子やジュースが置かれていた。

「随分沢山買ってきたな」

「お祝いは豪勢にやらないと!」

そう言い、友奈は美森にジュースを渡した。

「はい、皆、飲み物を持って下さーい」

全員が、それぞれの飲み物を手に取る。

「こほん。それじゃあ、勇者部部长から、乾杯の一言!」

「え!?あ、と・・・ほ、本日はお日柄もよく・・・」

「真面目か!?!」

一同が笑みを零す。

「堅苦しいのは抜きで」

「それじゃ、みんなよくやったー!勇者部大勝利を祝って、かんぱーい!」

『かんぱーい』

と、一同、ジュースを飲み始める。

その中で、友奈がジュースを喉に流し込んだ瞬間に一瞬何かに気付いたかのように止まったが、すぐにまた飲み始めた。

その様子を見逃す美森と千景ではない。

二人は、機械修理の際に使う通信能力コネクタを使い、無言で会話する。

『友奈を任せる』

『了解』

ふと、風が何かを思い出したかのように、近くにおいてあった段ボールからあるものを取り出す。

「そうだ。みんなに渡すものがあつたんだつた」

と、渡してきたのは新しい携帯端末だった。

「これは・・・」

「私たちの端末は回収されちゃったでしょ?」

「はい、この病院に入る時に」

「なるほど、これはその代わりつて奴か」

「そ、しばらくメンテナンスで戻ってこないから、代わりにこれを使えつてさ」

「それなら僕も聞きました。風さんに渡されるからそこから受け取っておけつて言われました」

ふと、美森は携帯を操作し、そしてある事に気付く。

「あれ?あのアプリをダウンロードできなくなってる・・・」

「ああ、あのSNSアプリはもう使えなくなつてのよ。あれ、勇者専用のだから」

「・・・そういえば・・・あいつらどうなつたんだ?」

千景の一言で、場の空気の温度が下がる。

そう、まだ奴らは捕まっていないのだ。

決戦時、四人に重傷を負わせ、撤退に追い込ませた、襲撃者たちの事だ。

その場に不穏な空気が漂う。

「……その事については、メンテをなるべく早く終わらせるって言うてたから、時間との勝負でしょうね」

「なら良いのですが……」

まだ不安が拭い切れないのか、千景の表情は暗い。

だが、すぐさま友奈が場の空気を保とうとする。

「大丈夫だよ。もしあっても、話し合えばいいんだよ。もう戦う必要はないんだから」

そう安心させるように言う友奈。

だが、千景は知っている。

まだ終わっていないという事に。

(園子が言っていた外の世界の真実……すでに終わっているとは、
どういう事なんだ……)

勇者システムが戻った暁には、すぐさま壁の外まで行くつもりだ。

気になる事は、確かにある。

退院は明後日と決まり、千景は一人、廊下を歩く。

先ほど見た、黒いモヤのようなもの。

あれは一体なんだったのか。

どうやらあれは他の人間には見えていないらしい。

まるで、そこだけが欠落したかのように、真っ黒に塗り潰されて、いや、色が抜け落ちていた。

一面、真っ暗闇のように。

「まさか……戻らないって事はないよな……」

まさか、とその可能性を除外する。

しかし、そこで立ち止まる。

「……いや、目を逸らすべきじゃ、ないよな……」

その可能性を考え、千景はまた歩き出す。

無事、退院できた千景たち。

美森は、もう少し検査に時間がかかるといふ事、夏凜は怪我の療養のため、まだ退院はしていない。

ただ、千景は、退院するまでの間に、自分に変な能力がついた事に気付いた。

真実を見通す眼。だから『真実眼』。

なんとなく、そう命名。

その能力は、相手の体にある真実を見破る力が備わっているらしいのだ。

発見は、この間の、黒くすっぽ抜けたような光景を、勇者部全員に見た時。

それから、千景は、目に意識を集中させれば、いつでも発動出来る事に気が付いた。

そして、病院内で、他に入院している人がどこを怪我しているのか、あるいはどこに病気を患っているのかというのを色で識別出来る事に気が付いた。

ただ、友奈たちに見えた、あの黒く変色した部分は、何故あんなったのか分からなかった。

まあ、以上の事から、相手の体に起きている異常を見破る能力といった所だ。

「本当に、なんだったのか・・・」

と、勇者部部室の扉を開ける千景。

日直の仕事ゆえ、翼には先に行ってもらったのだ。

「不道千景、入りまーす」

「あ、千景君!」

千景を出迎えるのは当然友奈。

「お、来たわね千景」

「どうも風先輩・・・あれ?その眼帯どうしたんですか?」

ふと、風の眼帯が変わっている事に気付く千景。

「ああこれ。ふふくんどうよ」

「・・・中二病くさ」

「酷い!」

千景の冷たい反応にショックを受ける風。

「えー!?かっこいいでしょ!?この眼帯!」

「悪いな友奈。俺にはどうにも風先輩の中二病に磨きがかかったようにしか思えない」

「ごーうー!」

「うおわ!」

涙目で剛に抱き着く風。

「千景がー!千景が冷たいのー!」

「分かった分かった!分かったから!」

そんな風を左腕のみで抱く剛。

「アハハ・・・千景君も、もう少し手加減したらどうかな？」
翼がそう言う。

「そんな事言われても困る」

頭を搔いて、そう唸る千景。

「樹は、最近どうだ？」

『はい、とどこおりありません』

「スケッチブックか、いい案だな」

『お姉ちゃんの案です』

樹がスケッチブックをもって答える。

ただし、それで千景が風へのイメージを変えるつもりはない。
むしろそれでこそその風なのだ。

「あ、そうだ千景。あんた、ホームページの更新って出来る？」

「一応は。そうか、しばらく更新してなかったからな・・・」

千景は、いつも美森が使っているパソコンへ視線を向ける。

「頼めるかしら？」

「今すぐやりましょう」

と、椅子に座って手慣れた手つきでパソコンを操作していく。

「ただ、東郷よりは上手くないので、時間はかかると思いますが」

「構わないわ。それじゃ、アタシたちはアタシたちで、文化祭の演劇について会議始めるわよー！」

「おー！」

「僕は剣道部の練習に行ってきます」

そう、意気込む一同。

「・・・」

千景は、パソコンを操作する中で、友奈を見る。

そこで、最近備わった能力『真実眼』を発動する。

視界が青い半透明のガラスに通して見ているかのように染まり、異常を見破る。

やはり、友奈の左胸、正確には、『心臓』。

そこが、黒く塗り潰されているかのように、色がすっぽ抜けていた。
(なんなんだ・・・あれ・・・?)

能力解除。作業に戻る。

未だに、あれがなんなのか、分からない。

ただ、分かる事は、あの部分に、なんらかの異常が起きているという事だ。

あのすつぽ抜けたかのような光景は、他の部員にも見られる。

一番、聞くのに最適な人物。

千景は、その人物に向かって視線を向けた。

翼と共に、帰路につく千景。

「まさか、あんなに速く更新を終わらせるなんて驚いたよ」

「東郷は、あれの何倍も速く終わらせられるぞ」

「へえ、流石だなあ」

関心する翼。

そんな中、千景は、翼に尋ねる。

「なあ、翼」

「なんだい千景君」

「・・・お前、味分かんのか？」

そう、恐る恐る聞いた。

その瞬間、翼が、確かに動揺するのを見た。

「・・・どうして、そう思ったんだい？」

「・・・お前、カロリーメイトしか食ってないだろ？」

味に関して、これは、確かに言える事だ。

翼は、東郷をぼた餅をよく食べる。

だが、翼が昼にいつも食べているのは、カロリーメイトなのだ。普通、そんな健康だけを考えたものをいつも食べている人間が、果たして特定の甘味だけを食べるだろうか？もっと別の味も味わいたい筈だ。

なのに、翼はそうしない。

まるで、初めから味を感じていないかのように、そんな感じに。

「……まいったな……」

「ゲーマーを舐めるなよ。これでも探偵ゲームもやり込んでるんだ」

「それゆえの推理力か……まいった、降参だ」

そう右腕をあげて、降参の意志を示す翼。

「……僕と美森ちゃんは、一緒にいた」

「だから、東郷のぼた餅が大好物だったのか」

「和食が好きで、英語や横文字が苦手で、僕は、そんな美森ちゃんの傍にいた。もう二人の友達も加えてね」

「だけど……事故によって東郷は記憶を失った……」

美森は、交通事故によって、記憶を失くし、両足の機能を失った。

そう、聞いた。

「僕も、それに巻き込まれたんだよ」

(嘘だ……)

千景は、そう直感した。

声音が、可笑しいから。

いや、全てが嘘じゃない。

何かに巻き込まれたのは確かだ。

だけど、それが何なのかは分からない。

「その結果、美森ちゃんは記憶を失って、僕はこんな体になった。頭を打ったから、味覚どころか匂いも感じないんだ」

「……そうか」

今は、そうしておこう。

どうしても、誤魔化したい事であるのだろう。

ただ、ただ一つだけ、知っておきたい事がある。

「・・・あの時、東郷のぼた餅を、大好物って言ったよな。あれは、本当か？」

「うん」

即答だった。

「彼女の作る和菓子は、この世界のどこを探しても、きっと見つからない程に、美味しいものだって、僕は知ってるから」

そう翼は、千景に微笑んだ。

その表情は、誰かに似ていた。

「・・・やはり、上里さんの子孫か」

「ん？何か言った千景君？」

「いや、なんでもない。東郷には黙っておいてやるよ」

「ありがとう」

そうして二人は、また歩き出した。

千景は、先祖の記憶を掘り起こす。

(今思えば・・・上里さんは、誰よりも、弱さを見せない人だったな)

いっぱいのお優しいさの中に、ほんの少しの哀しみを含んだ、あの笑顔。

きつと、沢山の修羅場を潜り抜け、たくさんの哀しみを知って、自

分の罪を背負って、そうして、六道翼はここにやってきたのだろう。

美森を守る為に。

確かな、決意を胸に抱いて。

(だったら、口を出すべきじゃないだろうな)

千景は、そう結論付け、翼と共に帰路を歩いた。

夏凜の病室にて。

「……」

夏凜は、病院のベッドに寝転がり、天井を見ていた。

右腕は、怪我で動かせない。

レイピアに貫かれた程の重傷だ。流石に後遺症の一つも覚悟していたが、そんな事はなく、炎症を起こしている程度で、他は何も問題はなかった。

ただ、回復までには時間がかかるらしい。

その為、右腕は使えない。

箸が使えない、鉛筆が持てない。

これほど不便な事があるだろうか。

いや、問題はそこではない。

端末を通して、風から知った事実。

満開をやった者は、その全員が例外無く、どこかの機能を失っていた。

翼に至っては、片方の肺が機能を停止したらしいのだ。運動に支障はないらしいが。

千景のあれは、満開じゃないらしいが、それでもその場に七人同時に存在させる力だ。

何かあっても可笑しくない。

「私だけ……何も失ってない……」

この日の為だけに、訓練をし続けてきたのに。

結局、肝心なところで、役に立っていない。

自分だけ何も失っていない。自分だけが、全然戦えていない。

戦うためだけにここに来た。戦う為だけに勇者になった。

血の滲む様な努力の末に手に入れた力の筈なのに、役に立っていないかった。

これほど悔しい事はあるのか？

ふと、病室の扉が開いた。

「夏凜ちゃん、入るよ」

「っ、翼様!?!」

慌てて飛び起きる夏凜。

「と、不道?」

「おつす夏凜。具合どうだ?」

そこには、翼と千景の二人がいた。

さらに。

「こんばんわ、夏凜ちゃん、怪我の具合どう?」

「友奈・・・」

友奈が入って来た。

「大人数でおしかけてごめんね」

「い、いえ、そんな・・・」

「右腕使えないから、飯上手く食べれてないって看護師から聞いたぞ? ほれ、箸使わなくても食べれるサンドウィッチだ。食いタマえ」

「い、いいわよそんな悪い・・・」

「ちゃんと食べないと、治る怪我也治らないよ」

「・・・」

なんだけか、その励ましの言葉が、妙に心に突き刺さる。

苦しい。

「あれ? 夏凜ちゃん?」

友奈が心配そうに声をかける。

「・・・ 戦いは、終わった」

「え? まあ、そうだな。確かにバーテックスは全部倒したな」

「・・・ そう、よね」

「・・・ 夏凜?」

千景は、首をかしげる。

「・・・ 私は、もう、用、済み・・・なのよね・・・」

「「・・・ は?」」

一斉に間拔けな声を漏らす、千景、友奈、翼の三人。

「だって、そうでしょう・・・ 私は、ただ戦うために、ここまでやってきた。だけど、戦いが終わった今、私には、何の価値もない。勇者である事以外、なんの価値もないじゃない・・・勇者部だってそうよ・・・もともと、バーテックスを殲滅するために作られた部でしょ? だったら、殲滅した今、もう、意味なんてないじゃない・・・!」

シーツを、握りしめる夏凜。だが、そんな夏凜の手を包むものがあつた。

「それは違うよ。夏凜ちゃん」

「え?」

友奈だ。

「勇者部はね、風先輩がいて、剛先輩がいて、樹ちゃんがいて、翼君がいて、夏凜ちゃんがいて、東郷さんがいて、千景君がいて、みんな楽しんでながら、人が喜ぶ事をする部なんだよ。バーテックスがいなくても、勇者部は勇者部!」

「でも……」

「戦うとか、そんなの関係ないんだよ」

夏凜の頭を撫でる翼。

「翼様……あだ!」

「お前は頭が固いんだよ。いいか、価値だとか意味だとかそんなもの、他人に求めるな。そして自分で勝手に決めるな。ただ自分が必要とされている。それさえ実感できればそれでいいんだよ。そうじゃないなら、自分が自分を必要としてると思え。事実、お前があの戦いにおいて、あのシスコンを食い止めてくれたから、俺が駆け付ける事が出来たんだ。流石、翼の弟子だよな」

「不道……」

千景の言葉に、夏凜の目尻に涙が浮かぶ。

「俺達は、部員全員揃ってこそその勇者部だ。そこには夏凜、当然お前も含まれている」

「そうだよ。夏凜ちゃんがないと寂しいし、それに私、夏凜ちゃんの事好きだし」

友奈の言葉に、夏凜の顔が一気に赤くなる。

「な……な……!?!」

「あれ?どうしたの夏凜ちゃん?」

「……友奈、それ、あまりその年ごろで多用しない方が良くぞ」

「え?」

気恥ずかしさに口をパクパクとする夏凜に、そんな夏凜の顔を覗き

込む翼、原因である友奈に苦笑する千景に、それに首を傾げる友奈。
(そっか、私、まだここにいていいんだ……)

夏凜は、改めて、そう思った。

そんな様子を見守る者が一人。

「……あれがアタシの後継者……か……」

強化された視力で、病室を覗く、一人の少女。

「問題なさそうだな」

安心した様に微笑み、上っていたいた木から降りる。

「……」

そのまま立ち去ろうとするも、少女は、また振り返る。

「……まだ、会うのは早いよな……それに、満開の本当の恐ろしさも……」

少女は、自分の右腕を左手で掴む。

「……アタシの事も……」

ギュツと握りしめ、少女は仮面を被って、立ち去った。体の内から、白い骨のようなものを体の中から皮膚を突き破る様に出し、それが足に纏わりつき、形を成し、勇者の力を発動させてもいないのに、高く飛び上がった。

少女は誰にも見られたくない。

人成らざる者へと変わってしまった、自分の姿を。

数刻後。

翼と友奈は、美森の病室に来ていた。

「そっか、東郷さんは左耳が聞こえないんだ……」
そう呟く友奈。

美森は、左耳の聴覚が無いのだ。

「一応、右耳は聞こえるんだよね？」

「ええ。問題は無いわ」

心配する翼に、なんでも無いというように、美森は答える。

「なら良かった……」

それで安堵の息を吐く翼。

それに首をかしげる二人。

「それじゃあ、僕たちはこれで」

「バイバイ、東郷さん」

「うん」

そう言い残し、帰る二人。

「……」

二人が行ってしまうのを改めて確認する美森。

そして、携帯を取り出し、ある人物へと連絡を取る。

しばらく、電子音が聞こえた後、誰かが電話に出る。

『はい、こちら勇者部修理部門の不道千景です。今回はどのようなご用件で』

「私よ、千景君」

『東郷か。どうした？』

出たのは、千景だった。

「さっきの対応だと、何か作業してたみたいね。ごめんなさい」

『謝るな。あとはんだ付けするだけで終わりだ、待ってる』

がちやがちや、と何かを置く音と組み立てる音が聞こえた。

『それで、一体何の用だ？』

「単刀直入に言うわ。満開の後遺症について、何か気付いた事は無い？」

『満開の後遺症……風先輩に聞けば何かわかるんじゃないのか？』
「そう思ったんだけど……千景君、この間、皆を見て、何か気付いた事があるんじゃないかしら？」

そう、揺さぶる美森。

『……どうしてそう思った？』

「貴方、この間、突然様子がおかしくなったから気になって・・・それに、貴方の言う『切り札』の事について知りたい事があるの。良いかしら?」

黙り込む千景。

だが、すぐに観念したかのようにため息を吐く声が聞こえた。

『分かった。俺とお前は考えてる事がなんでか知らんが似てるからな。俺が勝手に調べた満開の後遺症について、そして『切り札』の危険性について、そして俺の秘密について、お前に話してやるよ』

「お願い」

そして、千景は美森に、自分が気付いた事について話した。

「真つ黒・・・?」

『ああ。なんでか知らないが、真つ黒だった。抜け落ちたかのようにな』

美森は、自分の脚を見た。

もし、千景の言った事が本当であるなら、満開の後遺症というものは、そんなちよつとやそつとでは治らないものではないのだろうか・・・

「翼君なら、何か・・・」

『知ってるかもしれないが・・・何か様子が可笑しい。満開の事について頑なに話そうとしないし、もしかしたら、大赦から口止めされているのかもしれない』

「大赦は、どうしてそこまでして私たちに満開の事について教えてくれないのかしら・・・」

『それは分からない』

「それに、千景君も、切り札の影響で、精神が不安定になるんでしょう? そつちは大丈夫なの?」

『一回だけだからな。一回程度じゃ、確実な精神の不安定化には至らない。それに、心を強く持っていれば問題も無い。事実、俺のご先祖様は心の弱さ故に、仲間を殺し掛けたからな』

「郡千景・・・千景君と同じ名前です・・・初代勇者・・・」

『あまり悪いイメージもたないでくれよ。これでも、人の為に戦って

いた勇者の一人だからさ』

「思うわけないわ。貴方のご先祖様だもの。ただ、その精霊の憑依システムは、私たちの端末にはないのよね」

『その筈だぞ？何せ精霊が顕現してんだ。おそらく、そのシステムは乃木さんたちが廃止している筈だしな』

「なら、問題ないわね」

ホッと、息をつく美森。

「ありがとう千景君。私の方で、もう少し考えてみるわ」

『ああ、結果が分かったら教えてくれ』

そうして通話が切れる。

そして、美森は思案顔になる。

「もし、千景君の言う、抜け落ちた、というのは……本当は、抜き取られたのだとしたら……」

一つの結論に、身震いする美森。

「まさか……でも、そんな……」

信じられない、という表情で、美森は、パソコンの画面に、視線を落とした。

そこには、勇者部一同の、満開による後遺症についての記述が書いてあった。

結城友奈 味覚機能停止 回復の兆し無し。

犬吠埼風 左目視力低下 回復の兆し無し。

犬吠埼樹 声帯機能停止 回復の兆し無し。

三ノ輪剛 右腕機能停止 回復の兆し無し。

東郷美森 左耳聴力低下 回復の兆し無し。

三好夏凜 異常無し。

不道千景 異常無し。精霊の影響無し。

海水浴と豪華な料理

夏休み。

夏の日差しが照り付ける中、勇者部一同は、合宿として海にやってきていた。

十二体のバーテックスを全て倒した報酬故か、大赦が合宿先を用意してくれたのだ。

場所は、讃州サンビーチ。

意外と近くにある、浜辺だ。

そこで、勇者部一同は、羽目を外して思いっきり遊びまわっていた。

一人を残して。

「……」

千景だ。

千景は、スクール水着である海パンと、上には長袖のラッシュガードを着ていた。

ファッションの欠片も無い、肌の露出を拒んだ水着姿だった。

そんな状態で、傘の下、一人ゲームをしていた。

「千景君、泳がないの？」

「翼か」

ふと、翼が千景君の傍にやってきていた。

「荷物の番は必要だろ？」

「そうとは思えないんだけどね……」

「どちらにしろ俺は泳がないぞ」

「泳げないとか？」

「泳がない、だ」

「はあ……」

いつになく冷たく対応する千景に、翼は頭をひねる。

「翼くん！」

ふと、そこへ友奈の声が届いた。

「東郷さんをおねがい！」

「ああ、分かった！それじゃあ千景君、ゲームはほどほどにね」
「分かってる」

そう言い残し、美森の乗る車椅子を押ししていた友奈と交代する友奈。

すると、友奈は千景の元に駆け寄ってきた。

「あー、楽しかったあ！」

「ほい、水」

「あ、ありがとう！」

千景から水を受け取る友奈。

「ん……ん……あー！運動した後の水は美味しい！」

「そうか」

ゲームをする千景の隣に座る友奈。

ゲームをする音だけが、二人の間に流れる。

「……ごめんね。私が海に行きたいなんて言っただけに」

「いや。この暑さだ。行きたいと思わない方が可笑的い。実際、俺もそうだからな」

「でも泳がないんだよね……」

友奈の笑みが、切ないものに変わる。

「……火傷、大丈夫？」

友奈は、そう言う。

千景の背中には、六割ぐらいを酷い火傷の痕が残っているのだ。

長方形の形で、左肩から右脇腹にかけて、じつくりと。

施設にいたころ、年上の子供たちが、面白半分で千景の背中に熱した鉄板をあてがったのだ。ほんの面白半分に、肉が焼ける音と共に、笑い声が聞こえてきた。

慌てて駆け付けた所長のお陰で、大事には至らなかったが、それでも、一生残る傷跡になったのは確かだ。

一日目に痛むのは骨。だが一番キツイのは三日目、動くたびに傷痕

が服と擦れて死ぬほど痛む。

火傷を晒されては笑い物にされ、水に入れば水の冷たさが傷を苛む。

今考えれば、あれが一番痛かった虐めだ。

一言で言つて、凄惨な日常だ。

その傷痕の事実を知っているのは、友奈だけ。

千景の体にある傷痕は、千景を千景たらしめる要（呪い）のようなものだ。

この傷痕は、千景の過去そのもの。絶対に逃れない、過去の真実。

その事を、友奈は知っている。

「いっただろ。そこまで酷いものじゃないし、痛みはとつくに消える」

「だと、いいけど・・・」

「それよりお前はいいのか、他の皆を遊ばなくて」

「うくん・・・私は千景君とこうして皆が遊んでるのを見てるの、好きだよ?」

「・・・あ、そう」

それ以上、言つても無意味だと思い、千景はゲームに戻る。

以前、美森と満開の後遺症について話し合った。

その時、黒く抜け落ちたかのように、とは言つたものの、実は友奈の胸の黒い部分についてはまだ言つてはいない。

理由は、もしそれを聞いた美森が、どんな行動を引き起こすか、想像がついて怖いからだ。

もし、千景の想像する最悪の事態になった時、最悪、強行手段を使つても食い止めるしかない。

それゆえに、千景は美森に友奈の胸の事については何も言わなかった。

ゲームをしばしやった後、勇者部の皆を見る千景。

そこでは、夏凜と競泳勝負で負けた風、巧みな手さばきで高松城を作る美森に、それに感心する翼と樹と剛の姿があった。

「・・・あいつら、元気にしてるかな」

「ん?千景君、何か言つた?」

「いや、なんでも」

そこで、千景は、ふと自分が呟いた事に疑問を持った。

(あれ・・・なんで俺、あいつらの心配を・・・)

だが、それつきり、考える事をやめた。

思い出そうとしても、思い出せないからだ。

そう思った理由の、一切を。

夕刻。

『おおおおお!!』

「すごい御馳走!」

食卓に並べられた料理を見て、勇者部一同は、驚いていた。

机の上に並べられたものは蟹を主とした豪華な海産物ばかり。

『カニです!カニがいます!』

「カニ・・・」

「て、千景!?ヨダレヨダレ!ヨダレが物凄い勢いで出てるわよ!」

千景の口から恐ろしい量のヨダレが流れ出ていた。

「・・・は!?ま、まあそれはさておき・・・カニ」

「千景君、ヨダレ止まってないよ」

「これカニタマじゃないよ!本物だよ!ご無沙汰してます結城友奈で

す」

なおもヨダレが止まらない千景、カニのハサミをもって握手する友

奈。

「あのー、部屋間違えてませんか?ちよつとアタシたちには豪華過ぎるような気が・・・」

風が苦笑気味にそう言う。

だが旅館の女将さんが、とんでもないとも言おうように言った。

「とんでもございませぬ。どうぞ、ごゆっくり」

と、襖を閉められる。

「私たち、好待遇みたい」

「ここは、大赦が関わってる旅館だからね。それに勇者としての御役目を果たしたご褒美って事じゃないかな」

翼が、そう言う。

(嘘だ……)

だが、千景は何故かそれが嘘だと見抜いてしまう。

しかし、確証がないうえにここでそんな事を言っても雰囲気をごち壊すだけだ。

ここは、黙っておこう。

「つまり、ここは食べてしまつていいと……ぐくり……」

と、唾を飲みこむ風。

「あ、だが結城が……」

友奈に視線が集まる。そこでは、友奈がすでに刺身を食べていた。

「ん！このお刺身のコリコリとした歯ごたえ、たまりませんね」

さらに、しらすを口に入れ、飲み込む。

「んー！このつるつるとした喉越しもいいねー！」

と、自分の喉を撫でる友奈。

どうやらありとあらゆる方法で食事を楽しんでいる様だ。

「もう、友奈ちゃんったら」

「おい待て、頂きますはどうした？」

美森が微笑み、千景は友奈にジト目を向ける。

「ああ、そうだった。ごめんごめん」

(忘れていた訳じゃないな……)

そう見抜いてしまう千景。

友奈の性格上、他人に迷惑をかける事を極端に嫌う。

それ故に、すぐさま行動に出たのだろう。もはや条件反射のよう

に。

「あらゆる手段で味わおうとしては……」

「色々敵わないわね、友奈には」

夏凜と風が感嘆する。

『尊敬しますー！』

樹がスケッチブックに書く。

「それじゃあ改めて」

『いただきます』

そうやって始まる食事。

因みに、位置は片側に美森、千景、友奈、樹、反対側に翼、夏凜、風、剛の順で並んでいる。

おわかりだろうか？これからの展開が。

「場所的に、私がお母さんをする事になるから、ご飯おかわりしたい人は言っておね」

たしかに、美森の傍らには、ご飯の入ったおひつがあった。

「東郷が母親か・・・厳しそう」

「門限を破る子は柱に貼り付けます」

「ひ!」

「分かったなお前たち、母さんをあまり怒らすでないぞ」

さらに隣にいた千景がそれに乗っかる。最後に不吉な言葉を残して。

「あら、貴方が甘やかさなければいい話ではなくて？」

「おっしゃる通りでございます・・・」

「なに、その夫婦漫才・・・」

二人の漫才に夏凜が若干引く。

ふと、千景の皿の上に乗っかっていた刺身が、横から伸びた箸によって奪われる。

「な!?!友奈!?!」

それに気付いた千景だったが時すでに遅く、友奈の口の中にほおりにまかれていた。

「何すんだよ!？」

「……」

声をあげるも、友奈はそっぽを向いて反応を示さない。

ただ、千景とは反対側にいる樹には分かってしまっていた。

友奈が、頬をふくらませていじけているのだ。

つまりは、嫉妬だ。

「千景く、浮気はダメよ」

「浮気!？」

「最低ね」

「夏凜!？」

「男の風上にもおけない」

「三ノ輪先輩まで!？意味わからないんだが!？」

「自分の彼女は大事にしなよ」

「彼女ってなんだ!？そして誰!？」

ますます混乱する千景。

そして馬鹿馬鹿しくなったのか、自分の蟹に齧り付く。

ただ。

「か、彼女……」

友奈はその言葉に反応して顔を赤くしていた。

「……あ」

箸で掴んでいたものを落としてしまう剛。

「あー、左手だけじゃ食いにくいな」

「仕方ないわね」

風が、剛が落としたものを箸で掴み、それを剛へ向ける。

「アタシが食べさせてあげるわよ」

「お、おう……」

その行為に、思わずたじろぐ剛。

「風先輩」

「ん？何よ千景」

「それ、俗に言う、あくん、てやつですよ」

「……あ」

そこで、事の重大さに気付いたのか、一気に顔を赤くする風。

「あ、えと、その……」

理解した事と同時に、彼女の頭の中が、恐ろしい程の速度で回転、次の行動をどうするか考えていた。

(どどうしようつい何気なくやっちゃったけど大丈夫よねいや大丈夫じゃない剛に迷惑いや迷惑じゃない？剛は嫌なのかしらいいえ女子力のかたまりでありアタシにいやこのさい女子力は関係ないそれ以前に私は耐えられるの？いえ無理絶対に無理いや無理じゃない大丈夫アタシは剛の事を思っているわけじゃないからこんな混乱する必要は無い訳でそれで——)

とうとう頭から湯気が出る始末。

「お、おい風」

「ひゃいー」

素っ頓狂な声をあげる風。

「と、とつとと食わせろ。バカ野郎」

「は、はい……」

最終的にしぼむ様な声を絞り出し、大人しく剛に刺身を食べさせる風。

結果、二人の間には、気まづくも甘い空気が形成されていた。

「何してんだか……」

「あ、あの、千景君……」

「ん？」

千景が横を見ると、そこでは友奈が自分の刺身を差し出していた。

「た、食べる？」

「ん、ありがとう」

千景は、何の躊躇いもなくそれを食べた。

「……」

思っていたのが違うのか、少し落ち込む友奈。

「友奈ちゃんからのあーんを、ああもあっさり……許すまじ……」

「美森ちゃん？なんでそんな恨めしそうに千景君を見てるの？」

「……」

「今度は僕……?」

「……東郷」

「え、ああ。うん、ごめん東郷さん」

苦笑いを零す翼。

(どうしてそこまで名前で呼ばれたくないんだろうか……)

それが疑問に思っている翼であった。

浴場にて。

「ああああああああああ……いきかえるうううううううううううう……」

「ものすごく長いですね、剛さん……まあ分からなくもないですけど」

男湯、そこで、まるで焼けたマシユマロのように溶け切った顔をしている剛と、それに苦笑いを零す翼。

「だってそうだろう。露天風呂だぞ露天風呂。これを楽しまなくてなんとするう」

下手すれば寝てしまうのではないかというほどにとろけ切った顔をしている剛。

「驚きました、まさか剛さんがここまでの風呂好きだなんて」

「風呂は一日の疲れを一気に抜き取ってくれるからなあ。なかったら、無かつたらで、もはや終わりだな」

「何がですか……」

「それにお前さあ、思わないかあ?」

「何がですか?」

剛は、ある壁の方向を見る。

「この壁一枚向こうでえ、女子たちがあ、全裸でぬくぬくしてんだぞお。それを想像したらあ、おのずと極楽と思わないかあ？」

「何考えてんですか貴方は!？」

思わず赤面して立ち上がる翼。

「お前え、想像してみろよお。真っ先に思い浮かんだ奴のお、服の下のお、生まれたままの姿をさあ」

「真っ先に、思い浮かぶ人の、生まれたままの姿・・・」

そう思ってみると、まっさきに思い浮かんだ黒髪の妙に日本史について熱く語ってくる少女の、布一枚も付けていない、ありのままの姿が思い浮か・・・。

「あいたア!？」

突如、どこからともなく桶が翼の頭に直撃した。

「あいで!？」

さらに、剛の頭上にも翼に当たったものとは別の桶が直撃した。

「ど、どこから・・・」

「剛!変な事考えない!翼に教ええない!そして想像するなああああ!!!」

どうやら、女湯の方から風が桶を投げてきたのだ。

だが、風が投げたにしてはあまりにも正確無比だ。

そんな芸当が出来るのは、翼が知る中で一人しかいない。

「美森ちゃんか・・・いた!？」

「東郷よ!」

「ごめん東郷さん!」

珍しく上ずった声で叫んでくる美森。

「ど、とりあえず、数が合わないといけなから、この桶返すよ。それ」と、桶を投げ返す翼。

一方の女湯では。

「あ、返って来た」

湯の上に落ちた桶を拾う友奈。

「全く、剛ったら・・・」

「そう言ってる割には、まんざらでもなさそうじゃない」

「そんな事ない！」

むくれる風をからかう夏凜。

「翼君たら、日本男児にあるまじき行為を・・・」

「そういう東郷さんだつて、まんざらじゃないよね？」

「ツ！友奈ちゃん！」

「いたた!?強い!?さっきのより水デッポウの威力が強い!？」

強力な威力の水鉄砲を喰らつて退避する友奈。

「友奈ちゃんったら・・・」

顔を赤くするも、美森は自分の胸に手を当てる。

(どうして翼君の事を、こんなにも思ってしまうのだろうか・・・)
特に交流がある訳ではない。何かときめくような事があつた訳でもない。

だが、それでも、どうしてこんなにも彼の事を思うと胸が締め付けられてしまうのだろうか。

(失った記憶・・・そこに、何かあるというの?)

自分の消えた記憶。きつと、そこに、翼との何かがあるのではないのだろうか。

美森は、今日ほど、自分の抜け落ちた記憶を、求めた事は無かつた。

場面戻つて、男湯。

「いたた・・・それにしても」

桶が当たった頭をさすりながら、翼は扉を見た。

「どうして千景君は一緒に来なかつたんだろう・・・」

「さあなあ・・・」

相変わらず腑抜けた状態の剛が答える。

翼はまだ来ない千景の事を、心配そうに思う。

千景は、与えられた部屋にて、一人ゲームをしていた。

「……………」

高難易度を、初期装備オンリー、回復無しという縛りをもってクリアする千景。

「……………はあ」

溜息をつき、千景は浴衣を脱いで、背中につけられた、痛々しい程の火傷を晒す。

そして思い出す。あの地獄のような日々を。

階段から落とされ、髪を切られ、殴られ蹴られ、まともな手当もしてもらえず、犬をけしかけられるわ、地面に顔を押し付けられるは、固いコンクリートの床に背中から叩き落される上に、万引きまでさせられそうになり、拒否すれば、数日は療養しないとイケない程に殴られ、性格の悪い高校生や中学生にカツアゲの対象にされたり、学校ではなぜか先生もそれを無視する日々。

理由は覚えていない。ただ、自分の以前の親が、何かろくでもない事をしたらしいが、この際どうだっていい。

ただ、千景は、あの日々から抜け出したかった。

ゲームをすれば外界から自分を切り離せる気がしたし、何かに集中すれば、それに没頭する事で何もかも忘れる事が出来る。

そう思い、始めたのが、機械修理なのだ。

どういうわけか、自分には触れた物を理解し、さらにそれを扱う事の出来る能力があったらしいが、その原因はこの際どうでも良い。

ただ、何かに没頭したかった。何かに集中する事で、何もかも忘れたかった。

何もかも……………

「……………ん？」

何か、忘れている。

そもそも何故自分は相手の体の容態が分かる目を持っているのか、何故自分は相手の嘘が分かるのか、何故自分は何も知らないのに物の構造を理解できて扱える手を持っているのか。

何故、こんな事に今まで気付かず、今更、こんな事に気付いたのか。
「……………」

千景は、仰向けに寝転がる。

「なんなんだ……一体……………」

まるで、砕かれたかのように思い出せない。

そこで、強烈な眠気に襲われる千景。

(やば……そういえば昨日、新作のゲームを徹夜でやったから……)
抗う術もなく、千景の意識は闇に落ちた。

更なる展開

遠い遠い昔。

青い勇者がいました。

その勇者には、八人の仲間がいました。

一人は勇者の一番の友達で、神の声を聞く巫女。

一人は竜の力をその身に纏い、勇者の隣で戦った竜の剣士。

一人はその岩をも砕く拳で敵を打ち倒し、勇者の背中を押しした鬼の拳闘士。

一人は弩をもって敵を射抜き、様々な策略で勇者を手助けした雪の弓兵。

一人は楯を率いて敵の攻撃を防ぎ、勇者を敵の害意から守った炎の楯士。

一人は大鎌を使い、敵を屠り、敵を狩り、敵を殺す事を目的とした紅の鎌使い。

一人は鞭を持ち、人々を守り抜き、勇者の良き相談相手となった、緑の守護人。

一人はそんな守護人の友人であり、手助けをした、もう一人の巫女。勇者たちは、世界を脅かす異形たちに、勇猛果敢に戦いました。

人々から賞賛され、褒め称えられ、それに答えるように、勇者たちは人々を救い続けました。

しかし、いついかなる時も、上手くいく時はないのです。

一人、一人と勇者の仲間は倒れていきました。

拳闘の果てには、青い勇者を妬んだ紅の鎌使いが、青い勇者を襲う事もありました。

しかし、それでも勇者たちは戦い続けました。

いつか来る、幸せの未来のために。

少年少女は、神に挑み続けた。

気付けば千景は、真っ白い空間に立っていた。
「……………は？」

思わず、その声を漏らしてしまう千景。
何も無い、真っ白な空間。

いや、何も無い訳では無い。

何か、切れ端のようなものが空中を大量に漂っている。

「なんだこれ……」

思わず、欠片の一つに手を伸ばしてみる。

それを右手で手に取り、そのまま物色。

「……?」

よく解らず、今度は左手で持つてみる。

すると、脳内に明確な答えが浮かび上がった。

「これは……記憶の欠片?」

千景は、その欠片から視線を外し、他の欠片を見渡す。

「だけど……一体誰のだ……?」

『貴方のよ』

「ああ俺の……って」

思わず振り返る千景。

そこには、あの彼岸花の花畑で出会った少女——『郡千景』こおりちかげがいた。

「ご先祖様……!?!」

『それは貴方の碎かれた記憶。貴方の体の事、貴方がとある神の元で御役目についていた事、そして、貴方がどんな思いで戦っていたという事が、それを修復すれば全てわかるわ』

「俺の体と御役目……なんだよそれ……」

千景かれの問いに、千景かのじよは、首を振った。

『それは、自分でみつけるべきだわ。私が教える事じゃない』

「そんな……」

『ただ、記憶を取り戻したいと思うなら、一度故郷に帰ってみたらどう?そこに行けば、何かわかるかもしれないわよ』

「故郷って……」

千景の故郷は高知県にある。

そこにある施設にて、千景は生活をしていたのだが、まあ、諸々の事情で香川まで引越してきた。

そこに戻れば何かあるのだろうか。

『……と、そろそろ時間の様ね』

「は？時間？」

『皆が戻ってきたって事よ』

「みんなって誰が……」

千景は、目を覚ました。

「あ、起きた」

目の前には、二人の少年の顔。

「……三ノ輪先輩に翼か」

「びっくりしたよ。まさか戻ってきたら君が仰向けに倒れてるんだもの」

「それは、すまなかったな」

千景は起き上がる。

「風呂はもういいのか？」

「おう、さっぱりしてきたぜ」

剛がふふん、と鼻を鳴らす。

「そつか。じゃあ俺もいくかな」

千景は立ち上がり、部屋を出ていく。

借りている部屋は二つ。片方は女子組、もう片方は男子組で別れているのだ。

「もうすぐ消灯時間だから急いでね」

「分かってる」

翼の言葉を軽く受け流し、千景は浴場に向かう。

「……故郷に戻れ……か……」

千景は、そう考える。

「……その内、行くか」

たまの里帰り。そう思ってみるのも、いいのかもしれない。

とある山奥の研究所。

「皆の様子はどうか？アモルさん」

「順調に回復してるわ」

幸奈は、妖美な雰囲気醸し出す白衣の女性『アモル』にそう声をかけ、アモルはそれに妖しい笑みを浮かべて答える。

アモルの座る椅子の前にある机には、六つの端末。

幸奈たちの端末だ。

「今回ばかりはいけると思っただけどねえ。まさか、彼女が邪魔してくるなんて」

「乃木園子の援軍は、予想外でした。まさか、彼女が自分から動くなんて……」

「彼女は、あのトカゲの弟子であり、尊敬の対象よ。それに、あのトカゲが目敏いのは知ってたし。ま、仕方ないわね」

アモルは、パソコンを操作する。

「ま、さらにアップデートしておくわ。その為にも、『カプセル』に入って頂戴。また調整するから」

「分かりました」

「ああ、それと、近頃また『侵攻』があるけど、今度は出なくて良いわ」
「……それは、何故？」

幸奈が、肩越しにアモルを睨み付ける。

「十三体目が来るわ。倒せなくても、勇者全員に深手を負わせる事は可能でしょうね。最悪、跡形も無く死んじゃうかもしれないけど」

ふふふ、と妖美な笑みを浮かべるアモルに、幸奈は、なんとも言えない恐怖を感じる。

「それでも、千景君は一緒なのよね？」

「ええ。協力してくれる限りは、ね」

「そう」

幸奈は、部屋を出ていき、また別の部屋に入る。

そこには、巨大な円柱状の水槽がいくつもあった。

その中には、幾人かの人間が入っていた。

幸奈は、服を脱ぎ出す。

全部脱ぎ捨て、空いている水槽の中に、どぶん、と入る。

ぬめりのある液体、ひんやりとしており、不思議と苦しくならない。だが、意識は遠のいていく。

ゆっくりと瞼を閉じ、意識を沈める。

幸奈の意識が完全に闇に堕ちた時、水槽の蓋が閉められる。

彼女以外の、人間の入っている水槽。

そこには、佐奈や美紀、弘や真斗、そして、翔琉が入っていた。

自らの体を、人の領域を超えた存在とするために。

とある、山奥の一軒家にて。

「……本当か？」

「は、はい……」

一人の男が、とてつもなく低い声で呟く。

男の目の前にいる少女は、その声に、思わず怯える。

「この写真に写っているバーテックスが、次の襲撃に来る奴だと？」

「は、はい……さつき壁の外で、一番近そうな奴を写真に撮ってきて……」

「……」

男は、写真を見る。

そして、悔しそうに顔を歪める。

「コイツは、アイツが倒した筈だ……」

その写真に写る、最凶の敵を見ながら。

オフィウクス・バーテックス

高知県。

とある街にある、山の奥にある、一つの神社。

一人の女性が、鼻歌を歌いながら、箒を履いていた。

黒髪で、髪を三つ編みにした、一人の高校生ぐらいの少女。

「……………」

ふと、少女は、社の方を見た。

「……………そうですか」

そして、先ほどの、機嫌が良さそうな顔と打って変わり、とても悲しそうな表情になる。

「……………あの子が、帰ってくるのかもしれないですね」

少女は思う。

あの施設で起きた事件を知ったらどう思うか。

記憶を碎かれた彼は、どう思うか。

「その場の判断は、全て任せる、ですか……………」

少女は、そう、呟いた。

「……という訳で、敵に生き残りがいたから、戦いは延長戦に突入した。大まかに話して、そうなるわ」

風が、そう説明した。

部室にて、勇者部全員の前に、アタツシユケースの中に入った、携帯端末があった。

しかし。

「なんで毎度毎度俺のだけ帰ってこないんだ……」

「言っても仕方が無いと思うよ千景君」

何故か千景のものだけ返ってこなかった。

「それについては大赦にも問い合わせたわ。だけど、まだ千景のだけはメンテが終わってないらしくてね。それに、敵の襲撃までに間に合わないといけないから、アタシたちのが先に返された感じね」

「俺のつてどうしてここまで治るのが遅いんだ？」

「考えてもしょうがないでしょ」

ふと、夏凜が話に口を挟む。

「生き残りの一体や二体、敵の一斉攻撃を殲滅した私たちなら問題ないわよ」

ぐっ、と治った右手を握る夏凜。

「俺の七人御先がいなかったらお前やられてたよな？」

「う……」

「まあ、相手は少ないらしいから、問題ないでしょ」

風が、そう言い、一同が頷く。

「勇者部五箇条、成せば大抵なんとかなる、ですわね」

「おう！何事も、大抵成せば何とかなる！勇者は根性と魂だ！」

ドン、と胸を叩く剛。

「さあバーテックス！どこからでもかかってきなさい！勇者八人が相手だあー！」

風がそう叫ぶ。

と、言っておきながら、二学期が始まるまで何事もなく、時間は過ぎていった。

「悪い翼、今日も職員室で依頼だ」

「分かった、先に言ってるよ」

千景の端末が戻る事もなく、いつも通りの日常が過ぎていく。

未だに、帰郷する決心もつけられず、勇者部の活動をただこなしていく日常が、ただ過ぎていくだけだった。

職員室での依頼が終わり、部室に戻ってきた千景。

「不道入りま——ぐあああ!?!」

突然、千景の頭に何かがぶつかった。

「ああ!?!ごめん千景!」

床に倒れ伏した千景に謝罪する風。

「な、なんなんだ一体・・・」

体を起こした千景の腹には、尻尾が鎌のイタチの様な精霊がいた。

「こいつは……」

『鎌鼬』。アタシの新しい精霊よ」

「鎌鼬……てなんだこりゃああ!」

見ると、部室中精霊だらけだった。

「いやーみんな出てきちゃって」

「軽く百鬼夜行じゃねえか……」

友奈の牛鬼と火車。

美森の青坊主と不知火と刑部狸。

風の犬神と鎌鼬。

樹の木霊。

剛の分服茶釜。

翼の傘、三郎、一反木綿、河童、猫又、鶴。

夏凜の義輝。

よく見ると、夏凜と友奈以外、そして風以外にも、精霊が+アルファされていた。

美森には『川虫』、樹には『雲外鏡』、剛には『狒々』、翼には『天邪鬼』がそれぞれ追加されていた。

「大赦が、新しい精霊を使えるように、端末をアップデートしてくれたのよ」

「お陰で、大分賑やかになったけどね」

美森が答え、翼が千景に手を差し伸べる。

千景は大人しくそれを手に取り、立ち上がる。

「それにしても、夏凜と友奈にが新しいのは来てないんだな」

「ええ。そうなのよね」

「あー……実は私はそうでもないんだー……あはは……」

『え?』

友奈が頭を掻きながら苦笑いする。

「友奈ちゃんにもまた新しい精霊が?」

「うん。でもなかなか出て来てくれなくて……」

友奈が端末を操作しても、その件の精霊は出てこない。

「友奈ちゃん呼び出しにも応じないなんて、なんて無礼な精霊なの

かしら・・・?」

「東郷さん?なんで友奈ちゃんのスマホを睨み付けてるの?」

美森と翼の言い合いを他所に、千景は友奈の精霊について考える。

(友奈のもう一体の精霊、か・・・なんだろうな・・・)

そう、思い老けるのだった。

「ふう・・・やっと端末に戻ったわね」

空が夕焼け色に染まった頃、どうにか全ての精霊をそれぞれの端末に戻した一同。

「相変わらず俺の端末が戻らずか」

「そうね・・・そろそろ戻ってくるころだとは思うんだけどね」

千景のつぶやきに風が答える。

ただ、その中で、夏凜は自分の端末を見つめていた。

(何故、私だけ新たな精霊が・・・)

夏凜だけ、新しい精霊が来なかった。

それについて、夏凜は疑問に思わずはいられなかった。

ふと、夏凜が視線をあげると、そこには樹がスケッチブックに文字を書いていた。

『敵いつ来るのかな ドキドキ』

それに、自分の内心を悟られぬように不敵な笑みを浮かべる夏凜。

「そうね。私の感では、来週あたりが危ないわね」

「実は敵の襲撃なんて気のせい!・・・だったらいいんだけどね」

「まあ、あの諸葛孔明だって負け戦ぐらいあったからな」

「神樹様も予知のミスくらい・・・」

直後だった。

突然、端末からけたたましくブザーが鳴り響いた。

「ええ!？」

「はいフラグ回収乙」

「噂をすれば、って奴ですね……」

千景が額を抑え、友奈が苦笑いをする。

「なんだろう。この既視感……」

「翼君？」

「気にしないでいいよ。君は」

翼の言葉に首を傾げる美森だったが、すぐさまなんでもないと首を振る翼。

そうしている間に、光が迫ってくる。

「来ちやったわね……」

「上等！殲滅してやるわ!」

「おい、俺はどうすれば——!」

周囲が、樹海に包まれた。

「敵は一体……あと数分で陸に到達します」
美森が、そう報告する。

「一体だけなら!」

「今回の敵で、延長戦も終わり。あとは奴らよ」
「バーテックスとの戦いは、これでゲームセットにしてやんよ!」

全員が意気込む。

だが、翼と千景だけは、そんな雰囲気には乗っかっていなかった。

「これが最後なら……ね」

「これが最後なら……な」

そう呟く二人。

「行くわよ！」

全員が頷き、アプリを起動する。

「じゃあまた、あれやろうか！」

「了解です」

「ほんと好きね」

「いいじゃないか」

円陣を組む一同。

「さあ、これで敵さんを昇天させてやりましょう！勇者部ファイト、」

『オー！』

敵が視認出来る距離まで近づいた勇者部一同。

「なに、あいつ？」

夏凜が、敵の姿を視認する。

そこには、今までに見た事もないようなバーテックスがいた。

エジプトのアヌビス神のような上半身で、下半身は、複数のヘビが

タコの足の様に出ている、そんなバーテックス。

「蛇使い型……オフィウクスって言った所か」

千景が、美森の端末を使って、その名を口にする。

「何か、嫌な予感がする……」

美森が、スコープで敵の姿を見据えながら、そう呟く。

「東郷、周囲に奴らは？」

「今のところ……見えません」

美森の報告を聞き、ホッとする風。

得体の知れない相手だ。

襲撃者たちが来ないなら、いざって時に全員で対処できる。

(それに、東郷から聞いた、満開の危険性……もし、東郷の仮説が正しいなら……)

風は、樹を見た。

樹は、首を傾げる。

(いや……今はそんな事を考えている暇はないか)

風は、足を止め、敵、オフィウクス・バーテックスを見据える。

「皆、一つ提案があるわ」

「提案？なんだよ」

剛が、聞いてくる。

「今回は、出来るだけ満開を使わずに、敵を倒しましょう」

「満開を？なんで？」

夏凜が首を傾げる。

「確かに、使わないに越した事はないですね」

翼が、左腕に一反木綿を巻きつけ、賛同する。

「満開に頼る戦法も良くないだろうしね。急激なパワーアップは、いずれ自分の身を滅ぼす事になると思うな」

「まあ、翼様がそう言うなら……」

「でも、大火力で一気に倒した方が良くないか？ほら、神樹様への負担とか」

剛の言う事は最もだ。

樹海化は、人類守護の最終手段。

神樹様の張る境界内の時間を全て止め、自らの根で世界を覆い尽くす。

それによって、勇者が心置きなく戦える場をもたらす。

それが樹海化。

そう、美森は千景から聞いていた。

『風先輩や、翼君の言う通り、満開は使わない様にしましょう。まだ、分からない事が多いですし、それに、前回の満開の影響も治り切っていないでしょう？』

「まあ、そうだな」

剛は、補助ギミックによって動く右腕を見る。

「よし、それじゃあ風先輩たちの言う通り、満開は使わないようにしよう！」

友奈がそう頷く。

それに、全員が頷く。

「よし」

「東郷さん、様子見た。二方向から射撃しよう」

『分かったわ』

美森がライフルを、翼がボウガンをおファイウクスに向ける。

そして、ほぼ同時に、弾丸と矢を放つ。

ミサイルの様な威力を持つ翼の矢と、戦艦の徹甲弾並みの威力を持つ美森の弾丸。

その二つが、おファイウクスへと向かう。

だが、その二つの閃光は、いとも容易くおファイウクスの前に弾かれた。

『!?!』

それに、全員が眼を見開く。

「弾いた・・・ッ!?!」

千景が、その声を漏らした途端、猛烈に嫌な予感を感じた。

おファイウクスが、二人の射撃を皮切りに動いたのだ。

足の蛇が、動く。

声を発する間も無く、その蛇は、翼を吹き飛ばした。

「翼様!?!」

「翼君!?!」

悲鳴の様な声を挙げる夏凜と美森。

さらに、他の蛇の一体が美森の方へ頭を向けたかと思うとその口を開けた。

そして、その口内が光り出したかと思うと、美森に向かって巨大な光弾を吐き出してきた。

「!？」

反応する間もなく、美森、そして、その場にいた千景がその光弾に飲み込まれた。

「千景君————！東郷さああああああん!!!」

友奈が悲鳴をあげる。

だが、オフイウクスは今度は友奈を標的に選んだ。

「友奈！逃げてえ！」

「!？」

風の叫びに反応し、友奈は振り返る。

そこには、既に蛇の頭が迫ってきていた。

「ッ————アア!!」

友奈は、根を蹴り、蛇の大きく開けられた口よりも大きく跳躍して回避する。

だが、その間に、別の蛇が他の勇者たちを襲っていた。

「————あ」

飛び上がった友奈は見た。

目の前に立つ、巨大な存在。

犬のような顔をした、巨大な人の上半身。

その瞳から見せられる、圧倒的恐怖。

『バーテックス』、その意味は『頂点』。

ああ、そうか。ならば、その名がつけられた意味が、良く分かる。

視線を横に向ける。

そこでは、既に、他の勇者も吹き飛ばされていた。
成す術無く、反応する間も無く、呆気無く。

友奈に、重い衝撃が加わる。

それは、敵の掌。

圧倒的圧力を前進に受け、友奈は地面に叩きつけられた。

「……うう……!？」

覚醒する夏凜。

そして、今の状況を確認し、すぐさま立ち上がろうとする。

だが、自分の上に乗っかっている存在に、それを阻害される。

黄色いアフレンドラを想起させる装束。

「剛!？」

夏凜はその名を呼ぶ。

慌てて起き上がり、剛を仰向けにする。

そして夏凜は思い出す。

敵の攻撃を回避しようとして間に合わず、防御さえもする暇も無しに蛇の突進を受ける直前、何かが前に出たのを。

「この……バカ……」

思わず、夏凜は悪態吐く。

「ゲホ……バカで結構……」

剛が、血を吐き出しながらそう言う。

よく見れば、剛の体はボロボロだ。

「!?あんた、起きて……」

「あーくっそ、体中がいてえ……」

剛は、苦し紛れにそう声を発する。

「喋らないで、もしかしたら骨が折れてるかもしれない……」

「それは心配すんな……もともと……頑丈なのが取り柄だしな……」

「そんな事を言ってるんじゃないの。なんで私なんか庇ったりしたの!?」

夏凜は、剛に向かって怒鳴る。

そんな夏凜に、剛はフツと笑う。

「オメエが妹に似てるからだよ」

「妹?」

「そ……妹だ……本当は怖い癖に……意地張って前に進もうとするところがな……そんで……誰よりも……誰かの心配をする……そんなところがな……ぐっ……!?」

痛みに顔をしかめる剛。

だが、それでも言葉を紡ぐ事をやめない。

「だから……よ……つい……体が……動いた……それだけだ……」

「バカよ……アンタ究極のバカよ……」

「ハ……仲間見捨てるぐらいだったら……バカでいい……ね……」
そこで、がくりと力尽きる剛。

「……」

夏凜は、何も言わない。

そつと、地面に横たわせると、すつくと立ちあがり、目元を拭う。

そして、自分の左肩を見る。

そこにあるのは満開ゲージ。

それを見た夏凜は、すぐさま上に上がる。

上に上がると、そこには、ゆっくりと進撃しているバーテックスの姿があった。

強化された視力で、周囲を見渡す。

十一時の方向に、翼が血まみれで倒れている。

四時と五時の方向に、樹と風が、同様に血まみれで倒れている。

三人とも、気絶している。

精霊の障壁が役に立っていない。

おそらく、あのバーテックスの攻撃が強すぎるのだろう。

友奈の姿が見えない。おそらく、樹海の根の中に落ちたのだろう。

美森と千景は、土煙がまだあり、分からない。

だが、確認する暇など無いだろう。

今、戦えるのは夏凜一人。

夏凜は、大切な友を傷付けた化物を睨み付ける。

「よくも、好き勝手やってくれたわね」

すると、オフィウクスが止まる。

そして、ゆつくりと、その犬のような顔を捻り、こちらを見た。

その眼光に、思わず身震いするも、決して怖気づかない夏凜。

「そこから先は通さない」

刀を抜き、両手に構える夏凜。

「行くわよ、義輝」

『諸行無常』

そして――。

(悪いわね。風)

「さあ、見てなさい――満開ツ!!」

赤い光が夏凜を包み込み、新たな姿を顕現させる。

片方二本ずつ、計四本ものアームに、刀身が紅一点に染められた日本刀が一つずつ握られている。

さらに、夏凜自身にも同様に日本刀が握られており、全部で六本の日本刀があった。

オフィウクスが、すかさず蛇の一体を向かわせた。

その仕草は、まるで羽虫をはたくようだった。

その蛇が、大口を空け、夏凜を一飲みにしようとする。

しかし。

その蛇は、一瞬にして木端微塵に切り刻まれた。

「何？こんなもので私が止まるとでも？」

夏凜が、不敵に笑う。

「舐めんじやないわよ。この蛇野郎がッ！」

明確な敵意と危険性。

それを感じ取ったのか、オフィウクスは夏凜に振り向く。

双方が対峙する。

夏凜が構える。

「勇者部部員、三好夏凜。いぎ尋常に、勝負ッ!!!」

そして、夏凜の決死の戦闘が始まった。

蓮華の奮闘

「お——う——きろ——とう——！」

誰かが呼んでいる。

だが、分らない。

体が重い。動かない。何も見えない。眠い。

意識がはつきりしない。

記憶が混乱している。

だけど、目覚めなければならぬ。

でなければ、きっと、心配してしまう。

誰が？友達が。その友達って？大切な人。

忘れてるのにな？

忘れてる？

貴方は忘れてる。とても大切な記憶を。

勇者なのに、役に立たない。戦果を挙げているのは、彼女たちなのに、自分はいまいち役に立てていない。

それは何故か。弱いから。貴方はとても弱いから。役に立たない。

待って、何を言ってるの？

貴方は忘れてる。だからあの時の後悔も思い出せない。

友達を守れない、その事さえも忘れてしまった、哀れなりそこない勇者。

貴方が、彼の一番である資格なんて無い。彼の想いを忘れて、自分の想いさえも忘れて、全てを忘れて、傷痕の意味を解らずに生きていく、失格勇者。

貴方は勇者なんかじゃない。貴方は勇者なんかじゃない。

そう、貴方は、勇者と名乗る資格すらない。貴方は——

——どうしようもない、『失格勇者役立たず』よ。

「起きろ東郷ッ!!」

「はうあ!？」

突如、額にとてつもない衝撃が叩きつけられた。

それによつて目を見開く美森。

「あ……れ……?」

「やっと起きたか」

目の前には、こちらの顔を覗き込む千景。不道千景。

「千景……くん……あ!？」

美森は、今の状況を思い出し、すぐさま起き上がる。

「皆は——つうツ!？」

左肩に酷い痛みを感じ、思わず右手で抑える。

そこは、白い何かの布で縛られた、片腕。

「アイツの砲撃が左肩を掠つてやがったから、とりあえずTシャツ破つて巻いておいた」

見ると、千景の来ていた制服が前開きとなり、その下にあつたTシャツが、大きく破かれていた。

そして、周囲を見渡すと、自分の右側。

そこには、何かに削り取られたかのような惨状の巨根があつた。

「ギリギリの所で、お前を引っ張つてなんとかあの砲撃から逃れられた。反則だろあんなの」

千景は、向こうでなお健在の敵を睨み付ける。

美森も、それにつられて敵、オフィウクス・バーテックスを見る。

犬の様な頭部に、人間の上半身、下半身はまるでタコのように巨大な蛇が蠢いていた。

その姿に、背筋が凍るような感覚を感じる美森。

歯が立たなかつた。

その現実が、否応なく突きつけられた。

「あんな敵、どうすれば……」
「……」

千景は、それに答える事が出来ない。

その時、ある場所で、赤い光が輝いた。

「!?」

「あれは——『満開』か!？」

その視線の先には、四本の巨大なアームに四本の巨大な刀を携え、自らの両手にも刀を持った、夏凜の姿があった。

彼女だけは、比較的軽傷で済んだようだ。

「夏凜……」

「夏凜ちゃん……」

二人は、まるで武神のように空中に佇む夏凜の姿を見守る。

そして、夏凜はオフィウクスに突撃を開始した。
「オオオオオオッ!!!」

咆哮が迸り、六本の刀を振るう。
それに対して、オフイクスは、蛇を向かわせる。

「甘いッー」

始めの一体を縦断する。

二体目は上空へかわし頭部を串刺しにする。

三体目は二体目に刺した刀をそのまま振るい、下段から斬り飛ばす。

四体目、五体目は、同時に左右が襲ってきたので、左右二本ずつのアームを上下交互に振るい、細切れにする。

まだまだ襲い掛かってくる。

夏凜は、それを鍛えられた動体視力と反射神経、焼き切れんばかりの頭の回転によって対処していく。

今日の前にある、景色。

それを認識する為には、今脳に回されている戦闘に必要な無い感覚の殆どを遮断し、その他の感覚を研ぎ澄まさなければならぬ。

視覚から色を消し飛ばし、敵のみを捕らえる。影さえも、必要の無い。

敵の姿だけを捉えろ。

耳からは一切の雑音を聞き漏らすな。

肌から僅かな風の流れを感じ、敵の次なる攻撃を予測しろ。

鼻からは匂いで敵の位置を割り出せ。

口は、呼吸を留めろ。必要な時のみ息を吐き出し空気を吸い込め。

僅かな気の緩みも許されない。瞬き一つも命取り。一切の油断や妥協を捨てろ。

修羅になれ。着けてはいけない力に手を出せ。生存本能を破壊しろッ!!!

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

夏凜の絶叫。

その時、翼が訓練の時に言っていた事が、頭をすべっていく。

『いいかい。その力は、使い過ぎれば命に関わる程のダメージとなつて自分の返ってくる。それは、自らの生存本能を、破壊している行為』

だからね』

自分に与えられた、異常な能力。

本来、生物が持つ事はありません、リミットブレイク制限解除の能力。

人の体は、無意識下で、自らの力に制限を掛けています。

その理由は、自らの体が、その力に耐えられないから。

だから、制限をかける。

その制限を、破壊する事が出来れば？僅かな時間だけ、その限界を突破出来れば？

その瞬間、人は、修羅へと変貌する。

その名は——『鬼気・修羅領域』

止まらない止められない止めたくない止まるな。

それらの想いが、夏凜の中で湯水の如く溢れかえる。

四本のアームと、六本の剣を振り回し、敵の猛攻をしのいでいく。

入れるのは一発。それで決める。決めなければならぬ。決めて

見せるッ！

目まぐるしい攻防の中、オフィウクスの懐に潜り込む事に成功する。

そこで、とうとうオフィウクスの上半身部分が攻撃を開始した。

拳を握り。右腕を引き絞る。

そして、一気に夏凜に向かって振り下ろす。

夏凜は、それを二本のアームで防ぐ。

その重さは、酷く重い。

「ッ?!?!」

(二本で受け止めるのに、こんなに——ッ!?)

だが、それで諦めるほど、夏凜はやわな鍛えられ方はしていない。

「上等よおおおおおおおおおおおッ!!」

オフィウクスの、その図体に似合わぬ速さで、左右の拳を夏凜に向かって交互に、そして残像が見える程に振り下ろした。

「ッ!」

(落ち着けどんなに速くても腕は二本左右どちらか見極める教えられた事を思い出せ色を失くせ神経を研ぎ澄ませ一秒速く相手の次の攻撃を予測しろ——)

息継ぎをする暇も無い。

手刀、拳打、掌打、裏拳、肘鉄。

ありとあらゆる拳の形で、夏凜を攻撃する。

対して夏凜は、巧みに四本のアームを操作し、受け流し、迎え撃ち、ありとあらゆる手段で敵の攻撃を防ぎ弾き逸らす。

だが、それでも、オフィウクスの方が、紙一重で一枚上手。

「ぐ——うう——!!」?

返ってくる衝撃が、夏凜の体力を削っていく。

(この——まま——じゃ——まず——い——)

意識が途絶えていく。

もうそろそろ、限界だ。

(せ——めて——一発——ッ!!)

夏凜は、ここで渾身の攻勢に出た。

両の手が、同時に左右から襲ってくる。

片方は握り拳、もう片方は、掌を広げている。

おそらく、このまま蚊を叩き潰すかのように、手を打ち合わせるの
だろう。

だが、これは、夏凜にとって、待ちに待った、好機。

「ここだあああああッ!!」

左右二本ずつ、渾身の力を込めて、左右の手を弾き飛ばす。

その反動で、オフィウクスの体が大きく仰け反る。

「ここだッ！」

チャンスは一度切り。

彼女は、オフィウクスの頭部目掛けて飛んでいく。

そして、自らの射程に、オフィウクスの頭部を捉えた。

「ッ——!!」

その瞬間、夏凜の四本のアームが、粒子となって消滅した。

満開の稼働限界か？否、違う。

粒子が、彼女の両手で持つ一本の刀に集束していく。

「一斬決戦——」

夏凜は、その刀を高く、高く掲げる。

「——『一の太刀』ッ!!」

そして、振り下ろす。

その一撃は、満開の残っていた力の全てを集束させて撃ち込んだ、

夏凜、渾身の一撃。

決まれば、オフィウクスであっても、無事では済まない。

夏凜の渾身の一撃が、オフィウクスの頭部に叩き込まれる。その寸

前。

オフィウクスが、顔を傾けた。

「ッ!?!」

刃は、頭部から僅かに外れ、鎖骨と首を間に入り、一気に斬り抜く。

その一撃は、オフィウクスの体を確かに両断した。

だが、それではオフィウクスは倒せない。

「くッ————ぐっふっ」

夏凜はすぐさま二撃目に入ろうとしたところで、突然、口から血を

吐き出した。

(無理……しすぎ……た……)

活動限界。

自らの生きる為の力のほとんどを出し切ったのだ。

体がどんどん衰弱していくのを感じる。

暗転していく視界の中、夏凜は、オフィウクスにつけられた、大き

な傷が、急速に回復していくのを見た。
満開も、解除された。

(ち……く……しょう……！)

そこで、夏凜の意識は途切れた。

その様子を、千景は、胸の中に渦巻く激情と共に見ていた。

くそ、くそくそくそッ！

なんでこんな時に限って端末がない。戦う力が無いんだ！

千景の中で、そんな想いが駆け巡っていく。

皆戦っている。傷付いていく。だというのに、何故、自分だけ戦う
力がないのか。

何故、自分だけ、端末が返されなかったのか。

分からない。解らない。判らない。

千景は、拳を握りしめる。

目の前で、夏凜が全力で戦っている。

たった一人で、強大な敵と戦っている。

なのに、自分はただ後ろでそれを傍観する事しか出来ない。

こんなに悔しい事はあるだろうか。

千景が、ただそこで、激情のまま突っ立っている、そんな時。

『考えないで。ただ、貴方の想いを吐き出せばいいのよ』

「ッ!？」

突然、心の中で響いた、声。

『貴方は何をしたいの？戦いたいなの？今日の前にいる存在を、ただ己が望むままに殲滅したいの？』

違う。

『なら、なに？』

千景は、スッと目を閉じる。

「千景君？」

美森は、そんな千景の様子に気付く。

「——守りたい」

千景は、呟いた。

「俺は、皆を、友奈を、守りたいッ!!!」

瞬間、千景の姿が、彼岸花を想起させる装束へと変貌した。

その光景に、美森は、ただ茫然とするしかなかった。

千景の姿が、突然、いつもの勇者装束へと変貌したのだ。

その手には、巨大な鎌。

千景は、ふっと、深く態勢を深くし、鎌を持っていない左手を、地面に置く。

そこから、神樹から、力を無理矢理奪い取る。

「出番だ、『玉藻の前』たまも まえ」

さらに、変化。

一瞬の光に包まれたかと思うと、千景の姿は、赤はそのままに、まるで巫女服の様な服装となり、頭には、三角耳、腰には九本の尻尾が生えていた。

それは、かつて千景が話してくれた、切り札。

それを今、発動したのだ。

そして、美森は確信する。

「行って、千景君」

そう、告げた。

「ああ、行ってくるッ！」

千景は、地面を蹴る。

そして、そのままオフィウクスに向かって突き進む。

その視界の先では、修復されていくオフィウクスが、まだ治り切っていない状態で、夏凜に止めを刺そうとしていた。

おそらく、間に合わない。

どんな手段を率いても、きつと間に合わない。

なら、どうする？

情けない話、他人任せだ。

そして、その他人任せの結果がやってきた。

オフィウクスが、右拳を夏凜に振り下ろそうとした時。

突如、上空から赤い彗星が落ちてきた。

「ぎ・せ・る・かあああああああああああああああああああああ
!!!!!!」

絶叫と共に、その彗星は、両手に持った斧を振り回してオフィウクスの右腕を斬り飛ばした。

その声は、樹海の中に響いた。

「そして、どうにか受け身と取り、比較的軽傷で済んだ翼の耳にも届いた。」

それは、懐かしい、そして、この場にはいない筈の少女のものだった。

「——嘘だ」

視界が、霞んでいく。

「こんなの……何かの夢だ……」

そう、走馬灯の様な、そんな、夢。

彼女が、ここに居る訳が無い。

あの日、確かに、彼女は、死んだ筈だから。

翼は、体を起き上がらせ、オフィウクスを両断した、赤い彗星の姿を見上げる。

両手に、見慣れた巨大戦斧。

牡丹を想起させる、赤と、竜胆りんどうを想起させる、白。その二つが合わ

さった、紅白の勇者装束。

そして、剛と同じ、麴塵色きくじんの髪。

それは、後ろ姿。

こちらを向いてくれなければ、きっとわからない。

彼女だと、信じられない。

「——ちゃん」

翼は、確かに、彼女の名前を呼んだ。

その声に、答えるかのように、その少女は、ゆっくりとこつちを向いた。

そして、その顔が、完全に、こつちを見た時——翼の見ていた夢は碎け散った。

「——よお、翼」

「——銀ちゃん……!!」

紅白の勇者、『三ノ輪銀みのわぎん』が、今、この場に推参した。

銀が、翼の元へ駆け寄る。

「銀ちゃん……どうして……」

「説明は後……いや、どうせ見られるか……」

銀は、翼を抱えて飛ぶ。

夏凜を拾い、風を拾い、樹を拾い、友奈を拾い、そして、剛を拾った。

普通、一人では持てないような人数を、一人で抱えている。

そして、一度、全員をその場に横たわらせる。

「銀ちゃん、何を……」

「いいか、翼……これを見ても、怖がらないでくれ」

「え？何を——」

次の瞬間、銀の右腕、否、装束の下から、『白い何か』が突き破った。

「!？」

それに、眼を見開き驚く翼。

それは、銀の右腕全体を覆い、やがて巨大な腕へと形を整えた。

「銀ちゃん、それは……」

「向こうで受け止めておいてくれ」

銀は、翼をその腕で掴むと思いつき振りかぶった。

「!?」

「オオラアアアア!!!」

そして、投げ飛ばした。

「銀ちゃああああああああああああん!!!」

翼は叫ぶ。だが、成す術もなく、吹っ飛ばされていく。

しばし空中を飛んだあと、やがて、ある場所に落下する。

「翼君!」

「え!」

美森のいる場所だった。

美森は、翼を受け止めようと飛んでいた。

だが、そこで、翼は口を滑らせた。

「須美ちゃん!」

「え?」

しまった、と思ってももう遅い。

翼の頭を足より下。そして、美森は一瞬呆けた。

結果、顔面から正面衝突する。

「ぬあ!」

——という結果にはならず、互いの精霊が翼の持っていた運動エネルギーを全て相殺し、どうにか受け止める事に成功した。

しかし。

「わ」

「きや」

そのまま二人とも、地面に落下。

「ん・ん・ん・ん・ん」

「んぐ!?ふがふが!」

「ひゃん!」

思わず、落下によって頭部の強打を覚悟して目を閉じた美森だが、その衝撃は来ず、代わりに、自分の乳房に感じたなんともいえぬ『感覚』を感じて、思わず体がぴくりと跳ねた。

そして、ゆつくりと目を開けると——

翼が、美森の豊満な胸

の片方をくわえこんでいた。

「……………」

互いに、無言。

そして、すぐさま翼が美森から退いた。

「……………めん！そんなつもりは無かったんだ!?君の○○をくわえるなんて事は決してしたかった訳じゃ無いんだ!わざとじゃないんだ!それは本当だから信じてくれ!」

尻もちを着きながら、後ずさる翼。

その様子は、羞恥と罪悪感で混乱しているようだった。

それに美森は、顔を真っ赤にして、自らの胸を庇うように座り込んでいた。

「……………」

「……………あれ?」

思った以上に騒がない美森に、思わず首をかしげる翼。

その時、翼の上から、風が飛んできた。

「ふがあ!」

「あ、翼君!」

さらに、美森の元には樹と夏凜が降ってきた。

「きゃあああ!」

可愛らしい悲鳴が聞こえた。

しかし、これで終わりではない。

友奈と剛だ。

二人とも、先客によつてすでにノックアウト。

よつて、受け止める者はいない。

ただ、そのまま地面に突っ込んででも精霊が防いでくれるから大丈夫なのだが。

しかしそんな友奈と剛を、受け止める者が一人。

「はい、最後の二名入りまゝす」

金紗の髪をなびかせ、剛を受け止める、一人の少女。

「!」

その声にも、翼は聞き覚えがあつた。

「園子ちゃん!？」

「やつほく、ボロボロだねつばくん」

剛を受け止めた少女、乃木園子が柔和な笑みを浮かべて翼に応える。

「どうして!？」

「皆が傷付いていくのを、見ていられなかった。それだけだよ」

園子は、剛を地面に横たわせる。

「貴方は・・・」

そして、美森は、新たな存在に、困惑していた。

園子は、そんな彼女に、微笑む。

「久しぶりだねく、わっしー」

「・・・え?」

園子の呼びかけに、美森は、さらに困惑する。

「園子ちゃん」

「うん。分かっている。だけど、ほんの少しだけ、希望があるなら、って思っただけだから」

そして、園子も、翼と同じ表情をする。

いつも、自分に向ける、いっばいの優しさの中に、ほんの少しの哀しみを含めた、そんな笑みを。

だが、彼女は、すぐさま翼に向き直る。

「つばくんは、ここでみんなを守って。あいつは私とふーくんが倒して来るから」

「待って、僕も・・・」

「つばくんは、ここでわっしーを守ってあげて。つばくんの、一番大切な人を」

「園子ちゃん・・・」

美森は、二人の会話に、疑問を持つしかなかった。
わっしーとは誰か。翼と知り合いなのか。

何故、翼と同じ表情をするのか。

「それと、ふーくんとわっしーを連れて行くからね」
「!・・・分かった」

翼は、そこで引き下がった。

「・・・銀ちゃんが、いるよ」

「・・・ありがとう、つばくん」

そして、銀。

何故だろうか。とても、懐かしく感じるのは。

「行つてきます」

そして、彼女は、オフィウクスに向かっていく。

美森は、翼に歩み寄る。

「翼君、彼女は・・・」

「・・・乃木園子。そして、僕を投げた張本人の名前は、三ノ輪銀。

二人とも、僕と同じ、『先代勇者』だった」

「先代勇者・・・」

美森は、今飛んでいった少女の後ろ姿を見た。

だが、どんなにその姿をよく見ても、思い出す事は無かった。

「さうて、よくもいろいろとしてくれたみたいだな」

銀は、両手に斧を顕現させる。

そして、他のバーテックスなど比較にならない程の速度で再生していくオフィウクスを睨み付ける。

そこへ、一人降り立つ者が一人。

紅の勇者装束、そして、まるで狐の様な姿をした、一人の男。

「・・・不道千景だな」

「俺を知ってんのか」

「・・・お前、そんな姿だったっけ？」

「その説明は追々と。で、お前は誰だ？」

千景は銀を睨み付ける。

それに、銀はニツと笑って言う。

「アタシは三ノ輪銀！先代勇者だ」

「先代勇者？いや、三ノ輪って事は、三ノ輪先輩の妹か？」

「そ、アタシは三ノ輪剛の妹」

「死んだんじゃないかったのか？」

「まあ、そこは、ね・・・」

言葉を濁す銀。

「一応、味方って事だよな？」

「ああ。まあ、もう人間じゃないけどな」

「？」

銀の悲しそうな表情に、首を傾げる千景。

「それはそうと、もう殆ど治り切ってるな」

千景は、空にたたたさずむ敵を見据える。

オフィウクスの傷は、そのほとんどが治っており、斬り飛ばされた腕ももうほとんど生え変わってきている。

まるで、自分たちの努力を全て否定するかの様に。

そんな中、突然、銀に飛びかかる者が一人。

「ミノさあああああああああああああああん!!!」

「ぐふお!？」

「なあ!？」

銀の背中に園子が思いつきりダイブして、もつれあうように地面を転がる二人。

「いったた……」

仰向けに、倒れ、背中の痛みに苦しむも、ふと頬に落ちた水滴に、思わず視線を上に向ける。

そこには、ぼろぼろと涙を流す園子の姿があった。

「生きて……たんなら……連絡くらい……ちようだいよ……」

「園子……」

顔はくしゃくしゃになり、溢れ出る感情が涙になって零れ落ちる。

言いたい事が沢山あるが、それがどうにも言葉に出来ない。

とにかく、嬉しさや怒り、悲しみが渦巻いて、ぐちゃぐちゃになっているのだ。

「ぐめんな」

銀は、そんな園子の頭を撫でる。

「なあ、感動の再開は後にした方が良いんじゃないか？」

千景が、そんな二人の間に口を挟む。

その視線は、オフィウクスを見ていた。

そこには、もうほぼほぼ再生しているオフィウクスの姿があった。

「この様子じゃ、封印はそう簡単にして貰えそうにないな」

「ぐす……そうだね」

「だけど、御霊の場所はもう特定してる」

「え、分かったのミノさん？」

「おいおい、我らがリーダーが鈍い事で。しばらくベッドの上に寝てたから感でも鈍ったか？」

「お恥ずかしながら」

えへへ、と笑う園子。

「やれやれ……あそこだ」

銀は、オフィウクスの頭部を指差す。

「さつき、夏凜の奴がアイツの頭に一撃を入れようとした時、思いつきり

頭傾けただろ?」

「なるほどな」

「弱点、絞り込んだね」

全員がそれぞれの武器を構える。

「それと、園子……」

ふと、銀が、園子に言う。

「これからアタシのする事見て、怖がらないでくれよ……」

「大丈夫だよ」

園子は銀に微笑む。

「どんな事をして、ミノさんはミノさんだよ」

その言葉に、茫然とした銀だったが、やがて安心した様に、フツと笑う。

「そっか……だったら、遠慮なくやらせてもらう!」

直後、何かバキリと折れるような音が聞こえた。

その音の発生源は、銀。

銀の勇者装束が、というよりも、腕全体が盛り上がったかと思うと、やがて内側から、白い物体が突き破ってきた。

「!?!」

それに驚く園子と千景。

それは、骨。

その骨は、だんだんと形を成していき、銀の腕、そして持つ斧の柄に、骨が纏わりつく。

やがて、その骨は、巨大な腕を形成した。

その様子に、啞然とする二人。

「……怖いか?園子」

「……ううん」

園子は首を横に振る。

「かっこいいよ。ミノさん」

その言葉に、銀はまた安心したように笑う。

「相変わらず、園子の感性は分からないな」

「え」

「褒めてるんだよ」

そして、銀は、上空にいる敵を睨み付ける。

「よっしゃアア！あの蛇野郎を一気に片付けるぜ！」

「言われなくてもやってやるよ」

「殲滅するんだぜ〜！」

再生しきったオフィウクスの体が動く。

そして、勇者三人が構える。

次の瞬間、双方がぶつかった。

妖狐と天狗とがしや髑髏

オフィウクスが、下半身の蛇を一息に千景たちに突っ込ませる。その攻撃を、いとも容易く避ける三人。

「とにかく頭狙つていこう!」

「オツケー!」

「了解!」

蛇の上をつたつて、オフィウクス本体へ接近する園子達。

しかし、それを黙って見ている程、オフィウクスはバカでは無い。すぐさま残していた蛇を三人それぞれに向かわせる。

「オオオツ!!」

銀は、すぐさま自らの体を軸として高速回転。

斧を振り回し、次々に蛇を斬り落としていく。

『対天武術『灯笼』』

園子は、槍を巧みに振るい、天衣無縫が如く、その攻撃を華麗に避けていく。

「ハアアツ!」

千景は、鎌をとにかく振るい、攻撃を凌いでいく。

それぞれがそれぞれの方法でオフィウクスへ接近していく。

一番最初に辿り着いたのは、銀。

飛び上がり、オフィウクスの正面へ。

「貫った——ツ!?!」

攻撃を仕掛けようとしたところで、銀は気付く。

他の蛇が、すでに砲撃の発射態勢に入っている事を。

「ミノさん!骨を射出出来る!?!」

「その手があつたかアアアアア!!」

園子の問いに、銀はすぐさま行動に移る。

銀の背中が隆起し、そこから骨が飛び出す。

「喰らいやがれツ!」

そして、そこからいくつか棘状へと変形させ、それを蛇に向かって射出する。

その骨は、さながら大砲の様な勢いで飛んでいき、全ての蛇の口の中に入る。

その瞬間、蛇の頭部が爆発する。

「よし……!?!」

だが、その隙についてオフィウクスが銀を叩き落とす。

「ぐあああ!?!」

地面に叩きつけられる銀。

だが、落下の衝撃は銀の精霊『鈴鹿御前』が防いだ。

そこへ、千景が飛び込む。

だが、オフィウクスの反応は速かった。

すぐさま、蛇の一体を千景に向かわせ——その胴体を噛み千切った。

「ツ!?!」

その様子は、遠くで見ていた美森や翼にはつきり見えていた。

あまりにも呆気無く、喰い千切られた。

しかし、その驚愕は——次の瞬間、さらなる別の驚愕に塗り替えられる。

喰い千切られた千景が、突如として煙となって消えた。

「………は?」

そんな、間抜けな声が漏れた。

しかし、茫然としている暇は無かった。

突如として、オフィウクスの周りに、無数の千景が煙と共に出現した。

「なツ!?!」

玉藻の前。

九尾の狐とも呼ばれるこの妖怪は、何千年ともいえる修練や修行の果てに成る妖怪、それ故に妖術や呪術の類に長けている。

それ故に、炎を生み出し、水に浮かび、風と踊り、土に力を与える。

特に玉藻の前は、相手を化かす事において、群を抜いている。

その姿は、美しい女性からみすばらしい男まで、多種多様。

化かす事に長けているが故に、実体ある幻想を作り出す事など造作もない。

例えば、実体の持つ分身を作り出し、相手を誘いだす事も可能。

または水で化かして溺れ殺す事も出来る。

はたまた、火で化かして燃やし殺す事だって出来る。

卑しい性格ではあるが、その力は、まさしく、妖魔の王の名に相応しい。

まさしく、千変万化の異名に相応しい——暴力的な
までに美しい妖術の使い手。

「影分身」

さらに、それぞれの分身が、鎌を持っていない掌に、さまざまな輝きを纏わせる。

火遁、水遁、風遁、雷遁——数えたらキリがない程の属性のオンパレード。

さらに、その属性の使い方も多種多様。

圧縮した空気、水の手裏剣、炎の円盤、雷の矢——こちらも数えたらキリがない。

さらに、一部の分身たちは地面に降り立ち、両手を地面に置く。

すると、神樹のものではない樹木や、鋭利な切っ先を持つ岩、四角い面を持つ土など、地面に関係するもの全てを利用した妖術で地面そのものに干渉した攻撃を仕掛ける。

さらに、鎌を構えたまま、その刃に、様々な属性を纏わせて飛びかかる者もいる。

それら全て、自らを殺す事の出来る、真実さえも化かす実体ある幻影。

『オオオオオッ!!』

そして、分身たちは一斉に飛びかかった。

まとめて喰らえば、いくらオフィウクスでも、体の殆どを吹き飛ば

されるだろう。

だからこそ、下半身の蛇を全て駆使して、それらの迎撃に入る。

高速で動く無数の蛇が、無数の千景たちを喰い千切り、噛み砕き、砲撃で撃ち抜き、叩き伏せ、ありとあらゆる危険要素を風潰しに潰していく。

しかし、オフィウクスは気付いた。

千景が、一体何を標的にしていたのか。

それは、千景の分身を殺し続けている蛇。

蛇が、気付けばほとんどが打ち倒されていた。

そう、千景の狙いは最初からこれ。

本体を攻撃しようとするれば、当然、蛇が本体を守ろうとする。

それを逆手にとつて、まずは、蛇を全て倒す事にしたのだ。

炎で焼き、水で叩き、風で斬り、土で封じる。

やられても、本体には何のダメージにもならない分身を利用して、千景は徹底的にオフィウクスを守る蛇を一匹残らず狩ろうとしているのだ。

それだけではない。

例え気付いて攻撃をやめたとして、結局は、残った千景の分身が一齐に本体に襲い掛かってくる。

そうなれば、例え圧倒的な攻撃速度を持つ『腕』でも対応しきれない。

さらに、分身は千景の精神力が尽きるまで、無数に生み出され続ける。

であれば、いくらオフィウクスでも、一瞬の隙が出来る。

それは、他のバーテックスより高い知能を持つオフィウクスだからこそ、考えた。

そもそも、何故、この人間は、自分の蛇を減らす事に専念しているのだろうか。

この数なら、いくらでも自分への攻撃が可能な筈。なのにそれをしていないという事は、何か、別の目的があるのではないのか。

それは、オフィウクスのすぐそばまでやってきていた。

一人の少女が、オフィウクスの背後に飛び出る。
園子だ。

千景のやっていた事は、蛇を破壊する事ではない。『攪乱』だ。
あえて無数の分身で相手の意識をそれらに向ける事で、突破口を開き、見事、園子をオフィウクスの背後へ導いたのだ。

「これで——ッ!？」

そのまま、オフィウクスの頭部へ攻撃を入れようとした途端、突然、オフィウクスの頭部がぐりんと百八十度回転した。

その口は、大きく開かれていた。

「え——!？」

そして、その口が急速に輝き出す。

「ッ!?!まずい!」

千景がそう叫ぶも、すでにオフィウクスは発射態勢に入っている。
そして、その口から、蛇の頭部と同じ、光の砲弾を吐き出した。
その光弾は、すぐ傍にいる園子に真っ直ぐに向かっていく。

回避は、不可。

「させるかああああああああああああ!!!!」

そこへ、銀が、作り出した骨格のばねを使つて、砲弾さながらのス
ピードで園子をかっさらい、砲撃から救出する。

「ミノさん!」

「投げるぞッ!」

「え——うん!」

銀の言葉に、一瞬戸惑うも、すぐにその意図を察して頷く園子。

銀は、右腕に纏わせている骨を増加、変形させ、巨大な腕へと変形
させる。

その手が園子の体を掴み、そして、空中で思いつき振りかぶる。

「喰らえ闘魂!三ノ輪銀様の剛速球は、須美の言う長門の砲弾さえも
ブッチギルッ!受けてみやがれえええええええ!!!!」

そして、園子をオフィウクスへぶん投げる。

まるで砲弾の様に飛んでいく園子。

その園子に対して、すぐさま対応するオフィウクス。

「させるかよ」

それを阻止するかのように、千景が地面を変形させ、伸ばし、オフィウクスの腕を拘束する。

オフィウクスなら、すぐに振りほどけるが、それでも一瞬の隙が出る。

その隙だけで十分。

園子は一気にオフィウクスへの頭部へと再び急接近する。

だが、それでもオフィウクスは園子へあの砲撃を浴びせようとする。

「風遁——」

だが、そこへ千景の分身が真横から迫る。

その手には、空気を限界まで圧縮した球体。

それを、オフィウクスの側頭部にぶつける。

限界まで圧縮された空気が、一気に開放されるその勢いは、その場にあるもの全てを吹き飛ばす。

だから、オフィウクスの顔が大きく横を向く。

「対天武術——」

園子が右手に槍を携え、限界まで引き絞る。

突きによる、殺人的なまでの貫通力と威力を誇る、園子オリジナルにして最強の一撃。

「——『鴉穿』ッ!!」

その一撃が、オフィウクスの頭部を貫いた。

だが、その直前で、御霊がオフィウクスの体から逃げた。

「「ッ!?!」」

それに三人とも目を見開いた。

それと同時に、オフィウクスの体が崩れる。否、分裂する。

「これは——!?!」

その体が、白い、ウジ虫の様な、白い異形へと無数に体を分裂させながら、バラバラになっていく。

「おいおい、どうなってんだ!？」

「わー、いっぱい……」

着地した銀と園子が唾然とする。

「銀！園子！」

千景が叫ぶ。

「こいつらを急いで倒せ！また融合するぞッ！」

「ッ!？」

千景が、無数の分身を使って、小さな異形——『星屑』の集団を全力で削りにかかる。

それに答えるかのように、銀と園子も動き出す。

確実な殲滅力、その為には、もつと別の方法でやらなくてはいけない。

「オオオオッ!!」

銀が、体から棘状の骨を突き出させ、それを無数に連続で射出する。

「ハアアアッ!!」

一方の園子は、他の精霊の武装を顕現させる。某機動戦士のファンネルやら剣やらクナイやら、飛び道具という飛び道具、さらには氷の矢やら炎の短剣やらを顕現させて、それを星屑へと放つ。

星屑は、瞬く間に減っていく。

だが、崩れていくオフィウクスの胴体の上、そこから、いきなり圧縮されていたかのように、中から体から出てくる星屑の数とは比べ物にならない程の大量の星屑が飛び出てくる。

「な!？」

「何!？」

銀と千景が思わず目を見開く。

「もしかして、体の中に飼ってたの!？」

園子の指摘、それは的を射ている。

(あれか——ッ！)

かつての記憶の中、その光景を千景は覚えている。

巨大な卵のようなものの中に、蠢く、あの白い異形。

だが、あれほど大きな卵にあの数、いくらなんでも太多すぎる。

少なくとも人三人分は入る程のサイズを、巨大ではあるが他のバーテックスよりは華奢な体の中にどうやって隠していたのか。

だが、そんな事を考えている暇は無い。

「まずいッー！」

千景が見据える先。そこには、オフィウクスの御霊がある。

星屑たちが、それに群がるように集まっていき、一気に形を成していく。

「おいおい嘘だろ……!?!」

「これが狙いか〜」

銀と園子の顔が引き攣る。

瞬く間に、集まった星屑たちが、形を成していく。

バーテックスは、本来、生物が長い年月をかけて成し遂げていく『進化』を、ものの数分で『融合』という形で成し遂げてしまう。

星屑が、『細胞』だとして、それらが集まった存在は、一つの個体として君臨する。

その『完成体』にまで昇華した存在を、今は『バーテックス』と呼ぶ。

頂点。まさしく、バーテックスは、生物の頂点に座する存在だろう。

星屑が形を成し、再びオフィウクスが君臨した。

また一からやりなおし。

「何回続くのかな。これ」

銀が呟く。

せつかく苦勞して形を崩したのに、これではやりなおし。

流星に連続はきつい。

しかし

「あ、ピッカーンと閃いた！」

そこで、園子が何かを閃いた。

「待ってましたあああああ!!」

「うお!」

銀が叫び、千景がそれに驚く。

「ふーくん、たしか今憑依させてるのって『玉藻の前』だよな?」

園子が、そう聞いてくる。

それに千景は、溜息を一つ。

「……時間を稼げ」

「了解。ミノさん」

「しゃあ! やってやるぜ!」

銀が、腕の骨をさらに増量させる。

これによって、さらに臂力が強化させる。

「それじゃあ、私も頑張っちゃおうよ」

園子の周りに、全十六体の精霊が出現する。

そして、千景は下がり、自らの鎌に、自分の左手を重ねる。

「三分、それ以内に準備を終わらせる」

「分かった。ミノさん、三分だよ」

「分かってるって!」

そして、二人は、オフィウクスに向かって走り出す。

オフィウクスの蛇が砲撃を開始する。

狙いは——千景だ。

「やっぱそうくるよなああああああ!!」

銀が、骨を展開する。

それは、壁となり、砲撃を防ぐ。

「ぐう——ちよつとキツイ……けど、一分は持ちこたえてみせらア

!」

「十分だよ!」

その間に園子がオフィウクスに突っ込む。

別の蛇が、園子に襲い掛かる。

だが、園子は華麗にその猛攻を避け続ける。

「対天武術『岩斬』いわざり」

岩をも断つ、力任せの剛撃。

その一撃を持って、蛇を一匹一匹、確実に討ち取っていく。

「対天武術『疾風』」

さらに、一匹の蛇の上に降り立つと、一気に加速、姿が霞む。

そのまま、一気にオフィウクスへと接近。途中、蛇の妨害にあうも、それをいとも容易く切り払う。

そして、オフィウクスの大きくも華奢な胴体に、強力な打撃を入れる。

「対天武術『熊倒』」

右掌で、オフィウクスを大きく押し出す。

オフィウクスの体が折れ、その巨体を下がらせる。

だが、それでは終わらない。

「ハアアアアアッ!!」

さらに、槍を仕舞い、左手で二撃目を入れる。

そのまま連続で押し、どんどんオフィウクスを下がらせる。

だが、黙ってその攻撃を受けるオフィウクスではない。反撃と言わんばかりに蛇を園子に向かわせる。

「させるかあああああああああ!!!」

しかし、園子の熊倒によって砲撃が止んだことで動けるようになって銀が、巨大な戦斧を振り回して、蛇の長い首を斬り落としていく。

「園子、には、指、一本、触れさせねええええええええええ!!」

拘束で回転し、蛇を斬り落としていく。

その蛇は、西洋の神話に出てくるヒュドラさながらの再生力で首を瞬く間に生やし、また襲い掛かってくる。

その猛攻に、いくら銀一人で、耐えきれぬ筈もない。

やがて、蛇の一匹が、銀の右腕に噛みついた。

「ミノさんッ!?!」

園子がそれに気付いて、叫ぶ。

そして、彼女の脳裏に蘇るは、あの戦いの情景。

鮮血をまき散らして戦う中、右腕を失くして毒にやられてもなお戦い続けた少女の姿を。

その時の、恐怖を思い出し、園子は、つい銀に腕を伸ばした。

だが、銀は叫んだ。

「攻撃をやめるな！園子！」

「ッ!？」

その直後、銀の右腕が喰い千切られた。

あの日とは違うが、それでも、右腕を失くした姿は、あの日、彼女が死んだ時の戦いを思い出させてしまう。

「ああああああああああああああああ!!!」

絶叫する園子。

一方で、銀の喰い千切られた右腕から、大量の血が――

――出なかった。

「悪いな――アタシの武器は返してもらおう！」

それどころか、銀の右腕から白骨の腕が生え、元の形に戻った。

もともと、その腕が初めから骨だったかのように。

銀は、右腕の骨を伸ばし、先ほど右腕を喰い千切った蛇に突き刺す。

その口には、銀の斧が加えられたまま。

銀は、伸ばした骨を巻き取る様に縮小させ、一気にその蛇に近づいていく。

「オオオオッ!!」

そして、左の斧で、その蛇を頭部を斬り飛ばし、それと同時に斧を回収する。

まるで何事も無かったように降り立つ銀。

異形だった右腕も元の形に、しかし骨のまま戻り、まるで自分の腕の様に動かす銀。

そもそも、何故銀の亡くなった筈の右腕が、全部骨で形成されているのか。

それ以前に、銀の扱う体から骨を無限に生み出す能力は一体なんなのか。

強敵との戦いだっただから、気にしないでいたが、園子は、改めて戦慄する。

今の銀は、人間じゃない。

それがどういう事なのか、園子には理解できない。ただ、それでも――

(ミノさんは、ミノさんだよ)

今日の前で、頼もしく戦っている銀。

それは、誰よりも優しく、強く、格好良い、自分たちの切り込み隊長。情熱の勇者『三ノ輪銀』だ。

ならば自分も、精一杯戦うだけだ。彼女たちの、リーダーとして。「よし、それじゃあもう一押しだね！」

そして、園子が、再び、オフィウクスへ攻撃を加えようとした時、それが来た。

「もう十分だ」

「！」

その声は、オフィウクスの正面から。

そちらへ視線を向けると、そこには、鎌を構えて佇む千景の姿があった。

「準備が出来た。離れてろ」

千景が、二人にそう言う。

二人は、それに大人しく従うように、オフィウクスから離れた。主に、千景の鎌。

その刃から発せられる、意志を持った『殺意』。

まるで、この世の全てを妬み恨み憎んでいるかのような、そんな、負の感情に満ちた、殺意を。

そして、オフィウクスは、怯えていた。

「どうした？ そんなにこの鎌が怖いのか？」

オフィウクスは、千景から距離を取る様に、下がっていた。

「なら、お前は正しい、だけど正しくもない。これは、恐怖とかそんな生易しいものじゃない」

千景は、深く体を沈める。

「せいぜい足掻け」

そして飛ぶ。

オフィウクスは、千景から、全力で逃げる。

蛇の砲撃を我武者羅に撃ちまくる。

とにかく撃つ、跡形もなく、消そうとする。

それほどまでに、千景の持つ力は恐ろしいものだから。

千景は近づけない。

このままでは、ジリ貧だ。

だからこそ、仲間がいる。

「オオオオッ！」

銀が、骨を射出する。

乱射された骨の棘は、蛇にどんどん突き刺さっていく。

「対天武術『縄張』」

園子は、槍を伸ばして、蛇の首を斬り落としていく。

それによって蛇は数を失い、同時に、千景はオフィウクスへますます近付いていく。

とうとう、蛇の首の射程に入る。

オフィウクスは、ついに蛇を向かわせる。

まるで、鎌の振るわれる死角から攻撃するかのよう。

だが、それで反応できない千景ではない。

鎌の一撃が、蛇の頭部を掠める。

そして、掠めた瞬間、オフィウクスがいきなりその蛇を根元から斬り落とした。

さらに、その斬り落とされた蛇が、まるで腐ったかのように、崩れ、跡形もなく消滅した。

「やっぱり！」

園子は、その原因を知っている。

玉藻の前の伝説において、その結末は、魔物の物語において必然とも呼べるもの。

平安時代後期、玉藻の前は鳥羽上皇に求愛されたものの、その鳥羽

上皇が病に伏せてしまう。

その原因は、とある陰陽師によって、その正体を見破られてしまった九つの尾を持つ狐、『九尾の狐』の玉藻の前だった。

正体がバレたために栃木県まで逃げたものの見つかり、結局は武士たちに退治されてしまうのが結末だ。

しかし、その直後、玉藻の前は、その姿を永久に命を奪い続ける石に変え、周囲の木々を腐らせ、生命を殺し続けた。

何人もの僧侶が、この石の鎮魂にやってきては殺され、やつとの思いで砕かれても、その怨念はその石に残り続けた。

ありとあらゆる『生』を殺し続ける呪われた石。

そして、玉藻の前、唯一の、幻想じやない、正真正銘の真実。

その名は

『殺生石』。この玉藻の前の持つ全ての妖術において、絶対的な死の呪いを持つ術だ」

千景は、走り出す。

もはや自棄なのか、オフィウクスが、蛇を一斉に向かわせる。

そこへ、銀の骨が飛来、地面を抉り、土煙を巻き起こす。

さらに、園子の精霊の一体が、砂塵を巻き起こし、オフィウクスの視界を四方八方から遮る。

警戒するオフィウクス。

その中で、巻き起こる砂塵の竜巻。

その一方から、オフィウクスにとって、小さな影が飛び出してくる。

オフィウクスは、それに反応し、何者も反応できない速度でその影を殴り飛ばす。

ばきい……

そんな、何かが碎ける音がした。

そして、オフィウクスは猛烈な違和感を抱いた。

これは、肉の感触では無い。

「引つ掛かったな」

それは、骨の楯を張った銀だった。

まさかの囿。ではあの人間はどこへ？

必ず、襲ってくる。

それだけが確か。

「我呪う、常世全てを——」

そこへ、上空から落ちてくる、一人の少年。

誰が言わずもがな、千景だ。

オフィウクスは、すぐさま振り返り、上空へ向かって拳を振るう。

しかし、それよりも速く、迅く、園子の如意棒よろしく伸ばされた

槍が、オフィウクスの引かれた左肘に突き刺さり、完全に阻止される。

「これで、王手だよ」

園子が、笑う。

その間に、千景が、鎌を振り上げる。

「全ての生きとし生けるものに、平等なる死を——」

鎌が変形し、光の刃を出現させる。

しかし、その形は以前とは違う。

刃が通らなければ、意味は無い。

だから、ダメ押しで一撃を入れる。

「故に、これは我が唯一にして最後の真実——」

鎌の形が、左右から刃が生えるだけではとどまらず、その形が斧の

ように形を変える。

「呪い殺され無に帰せ、『殺生・大葉刈』」

全ての生を平等に殺す、死の呪いを、その胸に受けたオフィウクス。その直前に、オフィウクスの御霊は、オフィウクスの頭部から逃げる。

そして、その直後に、オフィウクスの体は、死の呪いによって死滅していく。

分裂する事は無い。

地面に着地した千景は叫ぶ。

「御霊を逃がすなア！」

「言われなくても！」

「やってやるよッ！」

園子と銀が、壁の外へ逃げようとする御霊に同時に襲いかかる

「対天武術『滝打』」

「オオオオオッ!!!」

強力な一撃が、同時に振るわれる。

御霊は、十字に斬られ、そして、その形を爆散させる。

地面に降り立つ園子と銀。

千景は、大葉刈と殺生石を解除し、二人に駆け寄る。

「これで終わったのか？」

「うん。今回の襲撃はこれで終わりだよ」

「あく、終わったよ」

銀が、腕を回す。

「お疲れ様、ミノさん」

「おう！」

「……」

ふと、千景は、銀の右腕を見る。

銀の右腕は、骨によって形成された、異形の腕があった。

勇者装束が破れた事により、それが露出されている。

「ん？ああ、これか」

銀が、千景の視線に気付き、その腕を自分の前に持っていく。

「憑依じゃない……それは一体……」

「話すと長くなるけど……おっと」

周囲が、光に包まれる。

「ごめん、続きは向こうで」

「……分かった」

両手を合わせて謝ってくる彼女に、頷く千景。
そして、周囲が、光に包まれた。

「——ごめんね。少し付き合ってもらおうよ」

光が収まる。

そして、視界に入ったのは、夕焼け色に染められた、海。

「……………は？」

まず一つ目に、いつも送り返される讃州中学の屋上では、海は見えない。

というか、海が目の前にあるなんて、普通あり得ない。

ここはどこだ？

「千景君？」

「!?」

ふと、聞き覚えのある声に、思わず振り返る。

そこにいたのは、美森だった。

「東郷か」

「千景君、ここは……………」

「戻ったは戻ったが、どうやら、別の場所に飛ばされたみたいだな。それもかなり遠くだ」

千景が見る先、そこには、天に向かって大きくひしゃげた、瀬戸大橋の姿があった。

「大橋……………」

美森は試しに携帯を取り出して位置情報を確認しようとする。

「……………電波が入ってきていない？」

美森が首を傾げる。

「何？」

「改造版なんだけど、電波が全然はいってきていないの」

「今ものすつごく聞いてはいけない事を聞いた気がしたが気にしないでおう」

その方が、安全だろう。

だが、そこで千景は考える。

何故、自分と美森だけがこんなところに飛ばされたのか。

神樹によるものか。否、神樹がこんな事をして意味が無いのは分かっている。

だが、送り返される場所を少数ながらも変える事が出来るのは、僅かばかり神をも凌ぐ力を持っている者。

それが出来るのは――

「会いたかったよ。わっしー」

「お前か、園子」

そこにいたのは、病衣を着た、包帯だらけの少女だった。

勇者の真実

「ようやく呼び出しに成功したよ。わっしー」

園子は、戦闘の時とは全く違う、穏やかな様子で、微笑んでくる。

「わっしー……驚……」

千景は、そう繰り返す。

だが、すぐさま、その疑問を振り払い、美森の方を向いた。

「で、東郷はこいつを知ってるか？」

「……いいえ、初対面だわ」

美森は、そう答えた。

やはりか。

千景は、そう思った。

「あ……あはは」

園子は、思い出したかのように声を漏らし、そして、力無く笑った。

「わっしーっていうのわね、私の大切なお友達の名前なんだ」

「なあ、聞くんが、その友達って、翼やあの三ノ輪銀も含まれるのか？」

「うん。私の、大切な友達だよ」

本当に、覇気の無い口調だ。

これが、先ほどの強力なバーテックスを押し返していた勇者の姿なのか。

「俺たちを呼んだ……と、言ったな……それって、あの祠を使っただのか？」

千景が、すぐ傍にある、学校の屋上にもある同一の祠を見た。

「うん、そうだよ」

「そうか……」

どう、切り出せばいいのか、分からない。

千景には、見えていた。

彼女の、体のほとんどが、真っ黒く塗り潰されている事を。

「……翼君から聞いたわ。貴方、翼君と同じ、先代勇者だって……」

「うん。私と、つばくん……あ、つばくんっていうのは翼君の事だよ。

それでね、あと、ミノさん……ああ、さつき一緒に戦ってた子ね。名

前は『三ノ輪銀』て言うんだ。そして、もう一人の友達と一緒に、えいはいおー、って頑張ってたんだ」

「だけどそんなになった……」

「それは、バーテックスにやられたの？」

美森は問うた。

「ううん……私、これでもそこそこ強いんだ」

「だろうな。何せ、あの人の元で、鍛錬を積んできたんだろ？」

後ろから、足音が聞こえた。

こつり、こつり、と、古い革靴の音が、後ろから聞こえた。

「お前の使う『対天武術』のともとの名前は、『対天剣術』。対バーテックス用に作られた、初代勇者が作った剣術だ。それを派生させたのがお前の槍術。そうだろう？」

千景は、振り向く。

そこに立つ、男に向かって。

「足柄辰巳さん」

そこに立つのは、一人の、五十代に見える、男。

その体は逞しい程に鍛えられており、厳ついそのしわのある顔は、威厳ある強者の風格を思わせる。

髭も、妙に似合っている。

「あれ？師匠せんせいの事知ってたの？」

園子は首を傾げた。

「……」

美森は、その男の気迫に黙り込んでいる。

「……千景、という名前を聞いた時から、予感はしていたが、そうか、お前が千景の子孫か」

「不道千景です。一応、先祖から記憶を受け継いでいるので、貴方の事は知っています」

千景は男、『足柄辰巳』に向かって、そう自己紹介をした。

「話したい事は色々あるが……まずは園子の話が先だろう」

それに、園子は、辰巳に目を向けた。
美森と千景はそれに気付いていない。

「……他の奴らは外で待機させている。盗聴器も無い」
「そっか……ありがとうございます、せんせい師匠」

千景と美森は、園子の方向を見た。

「そういうえば、貴方の名前を聞いてなかったな」

「あ、東郷美森、です……」

いきなり振られ、戸惑い気味に答える美森。

「美森ちゃん、か……美森ちゃんは、満開をしたんだよね？ぱーつ
て咲いて、わーつと強くなる奴」

「え、ええ……」

「そっか……」

園子の眼に、哀しみがうつる。

「咲き誇った花は、その後どうなると思う？満開の後には、『さんげ散華』つ
ていう隠された機能があるんだよ」

「散華……華が散る、の散華……」

美森が、繰り返す。

「……おい、待て」

「満開のあと、体のどこかが不自由になった筈だよ」
「え……」

「……そういう事か……ッ！」

美森は絶句し、千景は悔しそうに歯を食いしばる。

「散華っていうのは、神の力を使った代償として、自分の体を供物とし
てささげる事か……ッ！」

「ッ!？」

「うん。そして、その代わり、勇者は、決して死ぬ事はないんだよ」
「……俺以外はな」

「うん、ふーくん以外はね。何せ、神樹様から、無理矢理力を奪った存
在だからね」

千景は拳を握りしめる。

「不道千景」

ふと、後ろの辰巳が、口を開いた。

「お前の勇者システムは、本体なら、機能しない筈だった。お前は、勇者としての適性が一切なかったからな」

「え……なら、どうして……」

美森が聞いた。

「それは分からん。ただ、不道にダウンロードさせたアプリは、他の奴らと同じものだ。それが、不道の中にある千景の魂となんらかの影響で同調して、樹海へと向かわせた」

「本当なら、そこまで終わる筈なだけだね」

園子は、理解しているかのように、口を開く。

「樹海には入れる。だけど勇者には慣れない。本来なら、ふーくんはそんな存在になる筈だった。だけど、それでも、君の魂は、戦う力を欲した。初代勇者の魂じゃない。ふーくん自身の、熱い魂って奴がね」

「魂……」

千景は、自分の胸に手を当てる。

「せんせい師匠から聞いたけど、精霊を憑依させる、あの『切り札』っていうものの代償として、体に瘴気が溜まっちゃうんだけど、どうやら、ふーくんの魂は、その瘴気を消し飛ばしちやってるみたいだね」

そこで千景は気付く。

日本三大妖怪に数えられる玉藻の前を憑依させたのに、千景の精神は異常なほどに正常だ。

普通なら、負の感情が表に出る程、気分が暗くなる筈なのに、今はそれが全く無い。

疲労を感じるが、それ以外には何も問題は無い。

「ふーくんは、自分が思っている以上に、情熱的な人だよ。自分でも気づいてないと思うけどね」

「……それで、お前は、満開をやり続けて、そんな体になったのか？」

千景は、園子に聞いた。

そして、園子は、それを肯定した。

「うん。でも大丈夫だよ。敵はちやんと撃退したからね」

「満開を続けて、戦い続けて……その体は、その代償で……」
美森の信じられないかのような問いかけに、園子は――

「うん」

――もう一度、肯定した。

「――」

二人は、絶句した。

彼女の言う事。

そして、今の、勇者部の現状。

「……神に見初められるのは、いつだって無垢なる少年少女だ」

辰巳が、口を開いた。

「いつの時代において、神々に供物としてささげられるのは、そんな存在だ。穢れなき身だからこそ、大いなる力を宿せる。その力の代償として、体の一部を供物として捧げる。それが、今の勇者システムだ」

辰巳は、淡々と述べた。

「……足柄さん。貴方なら、俺達にこの事を言えた筈だ。なのに……何故、言ってくれなかったんだ」

しばしの沈黙。

そして、辰巳は、口を開いた。

「……すまない。大赦から監視されていて、お前たちと上手く接触出来なかった」

「……翼の場合は、人質ですか？」

「……その通りだ」

「ッ!？」

美森が、息を飲んだ。

「座を放棄したとしても、翼の兄は、未だ六道家の人間だ。さらに、翼と違って、奴は武術面では一切の才能を示さなかった。それに、翼にとっては、たった一人の兄だ。故に、人質としては恰好の的だ」

「大赦は、何故そこまでして……」

美森は、辰巳に聞いた。車椅子に置く、手を震わせて。

「・・・分かん。ただ、今の俺には、今の大赦を変える力はないという事だけだ。出来るのは、次の勇者を育成する事だけだ」

辰巳は、淡々と答えた。

だが、その目は、果てしない程の悔恨の色が見えた。

それは、千景が知る、辰巳の眼とは、程遠いものだった。

ただただ、戦えない悔しさと、次々と死んでいく、勇者や、仲間たちに置いて行かれる苦しみ。そして、いつ終わるかも分からない、戦いへの憎しみ。

自分が戦えない中、ただ、自分の育てた勇者たちが傷付いていく様をただ見る事しか出来ない。

それは一体、元勇者として、どれほどの悔しさなのだろうか。

「・・・なあ、園子」

「なに？」

「お前は、知ってたのか？知ってて、満開を使ったのか？」

その問いに、園子は――

「――うん。知ってた。他の皆も、知ってて使った」

肯定した。

何の躊躇いも無く、ただ、本当の事を言った。

「あ、皆、とは言えないかな。ミノさんはちよつとした事情で戦ってなくて、三人でバーテックスを追い返した、て所かな」

「その二人・・・翼も、知ってて、満開を使ったって事なのか・・・」
「うん。つばくんも、そしてもう一人の友達も、その危険性を知ってた上で、満開を使ったんだよ」

「どうして・・・私たちの時は知らされなくて、貴方達の時は知れたの？」

美森が、そう聞いた。

「師匠せんせいが教えてくれたんだ。大赦自身は知らせるつもりは無かったんだらうけど、師匠せんせいだけは、教えてくれたんだ」

園子は、申し訳なきように、答えた。

「なのに・・・なんで、戦う事をやめなかったの？体の機能を失うと分かってて、どうして、戦う事を選んだの？」

美森は震える手を握りしめて、そう問うた。

怖い、とても怖い。

そんな気持ちだが、はつきりと分かった。

「守りたいものがあつたから」

それに園子は、なんの躊躇いも無く答えた。それだけは本物である事を言うかのように。

「どんなに傷付いても、辛くても、守りたいものがあつたから、私とつばくんは戦つたんだ。どんなに、苦しくても、ね」

まるで、あやすように、落ち着かせるような口調で、答えた。

それに、美森は、背中を丸めて、体を震わせる。嗚咽が漏れる。

「・・・また、今度話そう。これ以上は・・・」

千景の提案に、園子は受け入れた。

「うん。流石に一度に言い過ぎたね。ごめんね・・・」

その時、園子の頬に、何か、煌くものが落ちた。

「お前・・・」

「あれ・・・？」

それは、涙。園子の、残つた瞳から流れ出た、哀しみから来る、涙。

(ああ、そうか・・・)

本当は、園子は辛かつたのだ。

友達に会えない、体が動かない、好きな場所に行けない。

そんな、何もかもが束縛されたような生活を強いられて、果たして、辛くない訳があるのだろうか？

否、断じて、否。

辛い筈だ、苦しい筈だ、嫌な筈だ、悲しい筈だ、憎む筈だ。

体が動かない不幸。

何も出来ない苦痛。

今の生活に対する嫌悪。

友に会えない悲痛。

こんな体にした、神への憎悪。

そんな想いを、体が動かなくなつた時から、ずっと抱き続けて、果たして、正気でいられるのだろうか。

今、彼女の精神が安定している理由は、翼が顔を出している事によるものだろうが、それでも、苦しい事には変わりない筈だ。

そんな想いを、きつと、彼女は、心の奥底に、押し潰して生きてきたのだろう。

「あはは、どうしてだろうね。泣かないって、決めてた……筈なのに……」

だんだんと言葉が途切れていく。

「……」

そんな中で、ふと、美森が動いた。

車椅子を動かし、園子の寝るベッドの横に行った。

「東郷……」

そして、美森は、園子の流している涙を拭った。

それに、一瞬目を見開いた園子。そして、その表情は、笑みへと戻る。

翼と同じ、いっぱいの優しさの中に、哀しみを含んだ笑顔を。

「そのリボン、似合ってるね」

ふと、園子は、美森のトレードマーク、あるいは、チャームポイントともいえる、緑色のリボンを褒めた。

それに、美森は、震える手でリボンを握りしめた。

「このリボンは……とても大切なものなの……それだけは覚えてるの……でも、ごめんなさい……何も、思い出せなくて……」

美森さえも、涙を流す。

それに、千景は、やるせなさどうしようもない憤りを感じ、顔をそむけた。

「……しようがないよ」

そんな様子を、辰巳は黙って見守っていた。

「……東郷美森、不道千景、どうする？今日は、これぐらいにするか？」

辰巳は、そう聞いてきた。
それに、すぐには答えられない、千景と美森。
しばしの沈黙。

しかし、そこで、とある、重要な事を思い出した。

「あの」

「おい」

同時に、辰巳に問いかける二人。

二人は、一瞬、目を合わせ、お互いに、同じ結論に辿り着いた事を確認した。

そして、美森が切り出した。

「……友奈ちゃんは、二回満開した筈です。二回目の満開の代償は味覚だという事は分かっています。ですが、一回目の代償を、私たちはまだ分かっています」

その問いに、辰巳は、思わず目を逸らした。

「教えてくれ、足柄さん。友奈は、一体何を失ったんだ？」

声が、震えている。おそらく、怖いのだ。何よりも、その答えを聞く事が。

その内容が、限りなく、恐ろしい事だという事を。

特に千景は、それだけは最も目を逸らしたかった事案だった。

「……」

辰巳は、躊躇う。

言っても良いのか、ダメなのか。ただ、言えば、おそらく、千景たちは、きつと絶望する。

だって、それは、裏切られていたと解釈しかねない事なのだから。

「……………」

だが、ここで言わなければ、おそらく、最悪の結末を辿るかもしれない。

三百年生きてきた辰巳は、その経験上から、結論を出し、そして、口を開いた。

「……………」

「せんせい師匠……………」

園子が心配そうに、辰巳を見ていた。

千景と美森は、何も言わない。

ただ、辰巳の口から聞かされる『まこと眞実』を待つ。

そして、辰巳は顔を上げ、二人に、告げた。

「……………結城友奈が一回目の満開で失ったものは……………」

大赦によって用意された車の中で、千景と美森は、一言も言葉を発さず、ただ、千景は窓から見える移り変わる景色を見て、美森は、俯いたまま。

ただ、辰巳の口からもたらされた真実を、頭を反芻していた。
まるで、裏切られた気分だった。

友奈の性格上、言わなかった、というのが正しいのかも知れないが、それでも、彼女が、ソレを失ったのなら、満開の代償について気付けた筈だ。

そうなぜなら、結城友奈は、人として、最も当たり前前に動いているものを失ったのだから。

「……どうしてなの……友奈ちゃん……」

ふと、美森の声が聞こえた。

その声は、普段通りの覇気が感じられなかった。

「どうして……どうして……どうして……」

千景は、そんな美森の姿を、黙って見る事しか出来ない。

「東郷……」

名前を呼ぶ。だが、それ以上、何も言う事は出来なかった。

何故なら、気付いていながら、その事を伝えなかったのだから。

「結城友奈が一回目の満開で失ったものは
だ」

『心臓』

再開

オフィウクスとの戦いから、三日。

先の戦いにおいて、端末を返された千景と美森以外は怪我を負ったので、入院している。

特に、夏凜の容態は酷く、生死の境を彷徨っているとの事。

翼曰く、夏凜がやったのは、己の生存本能を意図的に破壊し、本来手を出してはいけない力に手を出したからだと言う。

本来、生物全てにおいて、生きる為として、生存本能というものが、存在する。

それゆえに、人間は本来の三十%以上の力を発揮できないのだ。それを超えればたちまち、自らの体を壊してしまうからだ。

だが、夏凜は、その生存本能を何故か破壊する事が出来た。

理由としては分からない。

ただ、夏凜の、兄を超えたいと思う気持ちは、そのリミッターを破壊するに至ったという事だ。

生きる為のエネルギーを根こそぎ絞り出した夏凜の今の状態はかなりの衰弱状態にあるようで、しばらく、集中的な治療が施されるとの事だ。

場面は変わって、夏凜を除いた勇者部一同は、一つの部屋に集まっていた。

「夏凜ちゃんが……」

友奈の信じられないとでも言うような声が漏れた。

「あれほど使うなって言ってたんだけどね……」

一方で、夏凜の容態を伝えた翼の表情も暗い。

「命に別状はないらしいけど、それでも油断は出来ないらしい。しばらくは、起きられないと思う……」

翼の言葉に、全員が苦虫を噛み潰したかのような表情になる。

「部員がそんなになってるのに……何も出来ないの……?」
「くそ、これじゃあ庇った意味がねえじゃねえか……」
「……」

体のあちこちを包帯で巻いた、美森と千景以外の部員たちは、そう悔し気に言葉を漏らす。

「……夏凜の事については、今は置いておこう」

千景が、そう言う。

「千景君……」

「命に別状がないなら、まず今すぐ死ぬって事はないだろうさ」

「千景、流石にそんな言い方は……」

風が咎めるように言うが、それを遮るように千景が次の言葉を放つ。

「だから今は、すぐにでも解決できる事を話し合おう。あの……三ノ輪銀の事についてな」

「なんだと!?!」

剛が、思わず声を挙げる。

「なんでお前が銀の名前を知ってんだ……!?!」

下手をすれば、今すぐにでも殴りかかりそうな雰囲気になる。

そんな剛を慌てて止めようとする一同。

だが、そんな切羽詰まった状態も一気に意気消沈する事になる。

「兄貴」

ふと聞こえたそんな声。

その瞬間、剛の中の時間が、止まった。

他の全員の視線は、一齐に部屋の入口へと向かう。

そこにたつのは、剛と同じ麴塵色の髪をした少女。

身長は、友奈を超え、髪の毛は頭の後ろで結っているものの肩甲骨あたりまで伸びており、しかしその顔立ちは、翼の知る無邪気さを残している。

剛の顔が、ゆっくりと銀に向く。

その顔を認識した途端、一瞬、それは何かの悪い夢かと思った。

「兄貴、ちよつと遅くなつたけど、ただいま」

だが、確かに、彼女はそこにいた。

そこからの剛の行動は早かった。死んだ筈の最愛の妹が、そこにいるのだから。

「銀！」

一気に駆け寄り、体当たりをかます勢いで銀に抱き着く剛。

「うわ!？」

「銀！銀！」

「分かった！分かったから！ああもう！なんだよ、アタシだって我慢してたんだぞ馬鹿野郎！」

剛の泣き声が、その場にこだましていく。

数分経った後。

「すまん。見苦しい所みせた」

「いいわよ、それぐらい。せつかくの再会でしょ？」

「まだ目が赤い剛を慰めるように風が背中を撫でる。

「えー、それでは改めまして。三ノ輪剛の妹の三ノ輪銀です！兄がお世話になってます！」

『いえーそんな事はありません！』

樹がスケッチブックにそのように書く。

『剛先輩にはこちらが助けていただいているというか』

「いいよいいよそんな事言わなくても。でまあ、もう一つあるって言えば、翼の幼馴染であんたたちの先輩勇者にあたるって事かな？」

「間違つてないよ、銀ちゃん」

翼がそれを肯定する。

「まさか翼が先代勇者だったなんて・・・まあ、薄々気付いてはいたけどさ・・・」

風が額に手を当てて呆れる。

「それで、どうして銀ちゃん、生きてるんだい？あの時、確か君は・・・」

「ああ、確かにアタシは死んださ。ちゃんと一回、きっちりとな」

「火葬もされた筈だよ？」

「そ。その筈だ。だけど、アタシは何故かここにいる」

銀の服装は、黒いジャケットに長ズボン、そしてどういう訳か、右手にだけ手袋をしている。

「何かあったのかよ?」

「……まずはさ、これを見てほしいんだ」

そう言つて、銀は、自分の右手の手袋を外した。

『!?!』

翼、美森、千景以外の全員が息を飲む。

そこにあつたのは、およそ人間のものとは思えないものがあつたらだ。

筋肉、神経、血管、皮膚の下で形成されている、人間が体を動かす事において必要なものが、全て、真っ白い『骨』で形成されていた。

さらに、上着を脱ぐ銀。

下はTシャツみたいだが、問題はそこではない。

右腕の二の腕の半ばまで、その腕は、骨で形成されていた。

「お前……それ……」

「アタシ、実はさ、最後にバーテックスと戦つて気を失つた……いやこの場合は死んだというべきか?……まあそれは置いておいて、気付いたら、敵の本拠地にいたんだよ」

『ハア!?!敵の本拠地!?!』

銀の口から聞かされた事に全員の声が一斉にハモる。

「ぎ……三ノ輪さん、敵の本拠地にいたの!?!」

友奈が身を乗り出してそう銀に聞く。

「銀でいいよ。でまあそうなんだけどさ、その時まではアタシの右腕はなくてさ、それに、変な水槽の中にいて、目の前には八神翔琉やら安室佐奈やら、とにかく何人もの敵がいたわけよ。それで、その中で敵の親玉っぽい白衣を着た女が、アタシに何をしたのか解らないけど、こんな体にしたんだよ」

と、銀はデモンストレーションをするかのように、右腕を変形させ始めた。

バキバキと、プラスチックが割れるような音が響き、銀の白骨の腕がさらに隆起していき、やがて一本の杭のようになる。

それに、全員が啞然とする。

それを分かってたかのように、銀は右腕を元の形に戻す。

「まあ、簡単に言うと、今のアタシに出来るのは『骨の無限生成』。ついでに軽い再生能力までオマケについて、大抵の怪我なら簡単に直つちまう。まあ、しいて言うところの『化け——』」

「言うな」

銀が言わんとしていた事を、剛が止める。

「頼む。言うな」

「……わかった」

まるで、聞きたくないとでも言うように、剛は、そう言った。

それに、銀は、悲しそうに笑って承諾した。

「でまあ、アタシがどうしてここにいるのかと言うとな。この能力を与えられた途端に嫌な予感がしたから、大慌てで逃げてきた訳」

「一応聞くけど、敵のアジトの場所は？」

「逃げるのに無我夢中で覚えてない！」

「だろうね……」

胸を張って言う銀に、翼は分かってたとでもいうかのようにがっくりとうなだれる。

「ま、一応、アタシがこの体になって生き返った経緯はこんな所。それで、どうしてアタシが持つてない筈の三好夏凜にあげちまった勇者システムを持つているのかと言うと……」

「ちよつとまてえええい！」

そこで風のストップが入り込む。

「な、なんですか……?」

「今アンタ、夏凜にあげたって言わなかった？」

「え? ああ、そうですね」

風の質問になんの疑問を抱かずに肯定する銀。

「夏凜ちゃんの持つている勇者システムは、元々は銀ちゃんのものなんですよ」

「そうなの?」

美森がそう聞くと、翼は肯定する。

「銀ちゃんが死んだ直後、大赦で三ノ輪銀の後継者を探す為に、全国から性質の近い適性者たちを集め、育成していたんですよ」

「へえ、そうだったんだ」

友奈がすごい事でも言うように言うも、翼の顔は険しいものだった。

「初めは、かなりの人数がいたみたいなんだけど、僕が来た時には、もうその十分の一もいなかったよ。相当厳しく選抜したんだろうね」

『それで、夏凜ちゃんは選抜を勝ち残ったんですね』

「その通りだよ樹ちゃん。大赦が僕を呼んだのも、最終選抜の時に、誰を次の後継者にするかを決める為だろうね。まあ、その中で、最も成績も良く、なおかつ他人を気にかける存在が、夏凜ちゃんだったと言う訳」

「一応聞いておくが、他にも夏凜に近い奴はいたのか？」

千景が聞く。

「一応、訓練の成績では夏凜ちゃんよりもわずかに勝っていた子はいたよ。だけど、あの子はダメだ。とてもじゃないけど夏凜ちゃんよりも協調性にかけてる」

「だから切り捨てたのか」

「後悔してないよ。あの子はそこまでしないと止まらない子だからね」

翼にしては珍しく冷たい態度だ。よほどその子の事が気に入らなかったのか。

「夏凜の奴がアタシに似てるっていうのは、まあ、分からなくもないけどさ・・・と、話がズレたな。で、アタシの使っているこの勇者システムは、アタシと翼、そして、他二人の勇者が師事していた人のものなんだ」

そう言つて、自分の端末を机の上に置く銀。

「え!? 師匠の!?!」

翼が驚きの声を挙げる。

(足柄さんか・・・)

千景は内心で勝手に納得する。

『せんせい、て一体誰ですか？』

樹が聞いてくる。

「ああ、僕と銀ちゃんど他二人の勇者……というよりも、その中の一人の師匠の事なんだけど……」

「その人も勇者なの？」

友奈が聞いてくる。

「元、と言った方が良いかな。あれでももうさん……いや、六十は超えてるからね」

「そんなになの？」

翼の答えに、目を丸くする風。

「もう勇者としての力は持つていないんですけどね」

「で、アタシはその人のものを受け継いだって訳。なんだかアタシ、師匠とも性質が似ていたらしいんだよね」

「つまりは夏凜もそれが使える……なにかしら、この、今年入ったばかりの部員に一気に追い抜かれていく感じは……」

「風、あんまり落ち込むな」

なんだか落ち込んでいる風を他所に、話は続いていく。

「ま、これがアタシが生きている事についての経緯と、勇者システムについてだ」

「なんとというか、生きててよかったよ。本当に」

本当に安心したかのように言う翼。

「悪かったな。今まで生きてるって言えなくて」

「その腕じゃ仕方がないよ。流石に僕でも驚く」

「はは、そうか」

ふと銀は、美森を見た。

「……？」

思わず首を傾げる美森。

そして、銀が微笑んだ。

(ああ、この人も同じだ)

翼や、園子と同じ、いっぱいの優しさの中にほんの少しの哀しみを残した笑顔を、銀もしていた。

六道翼、乃木園子、三ノ輪銀。

何故、この三人は、自分にだけそんな笑顔を向けてくるのだろうか。

その理由は、きつと――

やがて、話も打ち切りとなり、銀は剛とつもる話を、他の一同はそれぞれ病室に戻っていく。

だが、千景と美森は、翼と風にのみ、昨日、園子から聞いた事を伝えていた。

千景は、翼に、友奈が失ったものを伝えていた。

「そうか・・・友奈ちゃんは・・・心臓を・・・」

「アイツの事だ。きつと心配かけたくなかったんだろうよ」

翼は、俯いて、手を組んでいた。

「ごめん千景君」

「・・・なんで謝るんだよ」

「君に嘘をついていた事についてだよ。僕は、こんな体になった事を、事故の所為だと言って君を騙したんだ。バレた以上は謝るしかないでしょ？」

と、苦笑する翼。

それに、千景は深い溜息をついて、翼の頭に軽くチョップを叩き込む。

「あう」

「そんなもの、とつくにバレてんだよ。謝るぐらいなら、警察はいらな

い」

と、呆れるように言う千景。

叩かれた頭をさすりながら、翼は茫然とするが、すぐに嘔き出す様に笑った。

「はは、やっぱり千景君は優しいね」

「……別に」

千景はそっぽを向く。

「それで、これからどうするんだい？」

「……故郷に戻ろうかと思ってる」

その千景の言葉に、翼は驚く。

「故郷に……って君、またいきなり……」

「気になる事があるんだ。どうして俺が神樹から力を奪えるのか。そして、俺がどうして勇者になれたのか」

神樹に呪われた一族。

それが、千景の血筋だ。

神樹に見捨てられた千景の先祖たる郡千景の血を体に流しているのに、どうして勇者になれたのか。

その理由を知る為に。

「俺は行ってくるよ。自分の事を知る為にな」

「そうか……わかった。僕の方から学校に言っておく。だから、気を付けて」

「ああ。頼んだぞ」

千景が、翼の病室から出て行ったあと、翼は、窓の方へ顔を向けた。
「入ってきていいよ」

すると、がらつ、と窓が開き、外から黒服の男が入って来た。

「山さん、大赦の動きについて報告を」

「はっ、やはり不道千景は排除すべきという動きがあります」

「だろうね。まあ、そんな事僕と園子ちゃんがさせないけど」

「でしょうね。大赦はあまり貴方達を敵に回したくはない筈ですから、そこまで大きな行動には出ないでしょう」

「……やっぱり、神託が降りたのが大きい理由？」

「ええ」

「そっか……」

翼は、窓の外を見上げる。

「……『千景災害』……それを引き起こした張本人の子孫……か……」

「吾輩には、彼がそんな極悪人の子孫とは、到底……」

「うん、僕もそう思うよ」

『千景災害』。

それは、香川の丸亀を襲った、未曾有の大災害。

名前は伏せられた状態で歴史の教科書に載る程のその災害で失われた命は、たかが知れている。

地震が起きた訳でもないのに、何の前触れもなく、建物が崩れ、木が枯れ、生物が腐り、そして、大量の死者を出した、災害。

一切の原因無しにそんな災害を引き起こすには、翼が思いつく限り、樹海への攻撃。

そして、樹海に入れるのは勇者とバーテックスのみ。

基本的に、樹海へ攻撃するのはバーテックス。

だが、神託では、その時の大災害を引き起こしたのは、勇者だとい
う。

勇者であるのに、樹海を攻撃した人物。

「その子孫が、千景君だというのか・・・」
翼には、到底信じられない話だった。

帰郷

高知県の南西。

香川から程遠く離れた、この海に面したこの街には、とある、本当に信じてても良い伝説がある。

山奥に住む、ものづくりの神。その神は、供物と材料を与えれば、必ず望んだものを作ってくれる、と。

事実、山奥に存在する神社にある、『創代の間』^{つくりよ}に、巫女の祈祷と供物を置いておくだけで、巫女が告げた日時きっかりに、それは作られ、置かれる。

巫女が作ったのではないか、と一時期噂されたが、巫女がその場を離れても、ものは作られていたらしい。

つまりは、伝説は本当、という事だ。

しかし——その伝説には、一つの決して破ってはいけない掟があつた。

読者の方々は、『鶴の恩返し』という童話を知っているだろうか？

とある老人が、人間の罫に掴まった鶴を捕まえ、開放した後、その日の夜、美しい女性が道に迷ったと言い、老人の家に来てきた。

家に泊める恩返しとして、女性は、部屋を一つ借りた。

その時、女性は、老人に向かって、強くこう言った。

『決して、部屋の中を覗いてはいけません』、と。

次の日にはそれは見事な布を織った。

それを売れば、高値で買い取られ、老人の家にはたちまち大金が振り込んできた。

そんな日がしばらく続いたが、老人は、ふと、疑問に思ってしまった。

どうやってあんな素晴らしい着物を織っているのか。

そして、老人は、女性からの言いつけを破り、中を見てしまった。

その中で、布を織っていたのは、一羽の鶴だった。

姿を見られた鶴は、大慌てで空へと飛び去ってしまった。

老人は、秘密を知ってしまったが故に、一攫千金の可能性を失って

しまった。

世の中、知らなければ良い、という事もある。

それゆえに、神が作業をしている間に、『創代の間』の戸を開けてしまったら——

——その者は、秘密を知ってしまった代償として体の全てと魂を抜き取られる。

「……帰って来たぞ」

その街の駅にて、千景は、シオルダーバックを引っさげて、街を見渡していた。

この街こそが、千景の故郷だ。

翼の六道家によって、どうにか体調不良と言う名のずる休みをもらい、今こうしてここにいる。

勇者部には、退院した翼と風、そして美森と友奈がおり、樹、剛、夏凜は未だ入院中との事。

そんな中、千景は自分の故郷へ、戻ってきていた。

自分が何者なのかを知る為に。

そして、勇者部の代償をどうにかする為の手掛かりを見つける為に。

「変わってないな……まあ、二年しか経ってないんだから同じようなものか」

街の様子は至って変わっていない。

商店街には人が行き交い、まだ朝早くなので学生が通学路を歩き、道路には普通に車が走っている。

そんな中で、千景の目的地は、ただの一つ。

もうほとんどの家の人が仕事に言っているので、人気の少ない住宅地。

そこにある、何気に大きな建物。

そこに、一人の五十代の眼鏡をかけた優しそうな男が、まだ幼い子

供たちの相手をしていた。

周囲にも、幾人かの職員も相手をしている。

ふと、男が相手をしていた子供が、他の子供の所へ行ってしまう。椅子から立ち上がる男。ふと、そこで、施設の正門にいる人物に気付く。

「・・・おや、これは珍しい客人だ」

「せめて、帰省と言ってくれよ。おっちゃん」

正門に立つ千景の帰りを祝うかのように、男は笑顔で彼を迎えた。

男・・・この施設の所長をしている『氷室雄二』ひむろゆうじは千景を応接間に招くと、しばしの時間をかけて、千景に蕎麦を出してきた。

「おっちゃんの蕎麦を食うのも久しぶりだな」

「向こうでも作っているんだろう？」

「でも向こうはうどんの本場だ。そう表立って蕎麦好きだなんていえないよ」

そう、実は千景は、弩がつくほどの蕎麦好きなのだ。

勇者部の前ではうどんを食べているが、それはあくまで、無駄な面倒をかけないため。

実際には家では蕎麦を自分で作って食べているのだ。

実は、この街の人間は全員蕎麦好きだ。

理由は、西暦の時代に、外のウイルスから逃れる為に逃げ込んできた大量の長野県出身者によるものらしいのだが、千景の記憶としては、長野県諏訪に生き残っていた人たちを護送した事が主な原因。

その諏訪の人たちは、その人たち専用の住宅地を与えられたが、蕎麦を広めたいと野心に燃える者たちが四国各地に旅たち、香川を除く一部の街では蕎麦が流行しているのだとか。

さらに、蕎麦とうどんで論争が起こる程の二つの勢力は拮抗しているのだとか。

ともかく、千景は本当は蕎麦好きだ。

「んー、やっぱおっちゃん作る蕎麦は美味しいな！」

「ははは、私も君にまた蕎麦を食べさせられて良かったよ」

他愛の無い話をしばらくして、千景が蕎麦を食べ終わった頃。

「それで、どうして戻って来たんだい？」

氷室は、千景に聞いた。

「……」

千景は、器を机の上に置くと、改めて聞いた。

「……山奥の神社に用があつて来た」

「え……」

千景の言葉にそんな声を漏らしたのは、目の前の氷室では無い。扉が半開きになっていた。

その扉の向こうから、一人の女性がいた。

「……雅さん？」

「……久しぶりね千景」

その女性の名前は『桐馬雅』きりまみやび。

年齢は二十歳。

この施設で生活をしていた千景の先輩にあたる。

その手には、お盆の上に乗った湯呑が二つあった。

「……珍しいな、貴方がお茶を用意してくれるなんて」

「今のアンタは客人よ。もうこの施設の人間じゃないんだし」

「そっか……」

千景は、なんだか違和感を感じていた。

どうにも、この施設の人間が、千景に対して苦手意識を持っているような感じがする。

虐められていた千景にとっては、庇いもしてくれなかった者たちの事などどうでも良いのだが。

「それで、どうして山奥の神社に用があるんだい？」

「……知りたいたい事が出来た。それだけだ」

千景は、目を逸らして、それだけを言った。

「ふむ……知りたいたい事か……」

氷室は、意味深げに、顎に手を当てた。

「……」

雅は、千景のそんな姿を見て、何故か目を逸らした。

「どうして、あの神社にあると思ったのかね？」

「……記憶が無い」

一旦、溜息を吐いた後に出た、千景の一言。

それで、雅がどういう訳か明らかに動揺した。

「ん、どうした？」

「い、いえ……なんでもないわよ」

あからさまに目を逸らしてくる雅。

(なんだ……?)

それにしばし疑問に思いながらも、千景は話を続ける。

「俺がこの施設にいた頃の夜の記憶、そして、日中途切れている記憶。そして、小学校にあがる以前の記憶が、違和感が無い程に無かった。気付いたのが最近だ」

「ほう……」

「気のせいじゃないのかしら？」

雅が否定的に言ってくる。

しかし、千景はそれに首を振る。

「いや、どうにも可笑しい。それに、記憶が無いような感覚じゃないんだ。記憶が碎かれたような。そんな感じだ」

雅の手が、ギョツと握りしめられた。

「……なあ、雅さん。貴方、一体何を知っている？」

「な、何よいきなり……」

「貴方、さつきから可笑しいぞ。俺の言ってる事を、いかにも知ってる感じが反応してるじゃないか」

「し、してないわよ……」

「歯切れ悪いし」

「うっさいー」

「というかこんなに食って掛かるキャラだっけ？」

「そこはどうでも良いでしょ!?!」

どうにも自分が弄ばれている事に驚きながらも声を荒げる雅。

「とうか、アンタ学校はどうしたのよ？」

「休暇取った」

「あ、そう・・・よく出して貰えたわね」

「仮病というものは、実はあまり使わない方が効果が上がるんだよ。それはともかくとして、何を知ってるだよ」

「う・・・」

話を逸らせたかと思ったがそこまで甘くなかった。

やはり口籠る雅。

「・・・だんまりかよ」

「・・・」

挑発気味に言っても、何も言えないのかさらに俯く雅。

(ここまで弱気な雅さんは見た事ないな・・・)

そう思いながらも、とりあえず追及はやめておく千景。

「おっちゃんは何か知ってるか？」

「ふむ・・・」

千景が聞くと、しばし考え込んだ氷室は、やがて目を細めて、口を開いた。

「・・・君は、よく神社に行っていたな」

突然、過去の事を離し始めた。

「帰りがいつも遅く、夕飯時になるまで帰ってこない。帰って夕飯を食べたと思ったら、すぐに外出してどこかに行ってしまう。そして、気がついたらすでに自分の部屋で寝ていた」

「おい、ちよつと待て」

「たまに、見慣れない怪我をしてきた事もあったね。その時はあまり気にしなかったが、いじめを受けていたにしては、深い切り傷も多かった。まあ、ほんの数日で治ってしまったけどね」

それは、千景の知らない、千景の過去。

氷室の言う過去は、どれも千景の知らない事だ。

「始めは、虐めが激化したものかと思ったが、そうでもなかった。君に対するいじめは、普段通りだった。いや、それ以上な事が出来ないと言った方がいいのか。まあ、取りあえず私は君が怪我する理由を聞き

はしなかった。どうせ聞いても、君は教えてくれないだろうと思ったからね」

「おい待て。俺が怪我？そんなの日常茶飯事だろ？一体、いつそんな怪我を負ったんだ俺が？」

千景は、信じられないとでもいうかのように聞いた。

もしそれが本当なら、自分は、一体どれほどの記憶が抜けているのか。

いや、あまりにも日常的な部分をいくつも抜かれているから違和感が無いのか。

そして、目の前にいる二人は、とても真剣な目となって、千景に言った。

「千景君、君は、この街でとある御役目についていたんだ」

「おやく・・・め？」

「そう、命を賭した、危険な役目だ」

その声音には、とてつもないやるせなさ、後悔が滲んでいた。

「そ、その御役目って・・・」

思わず聞いた千景。

しばし、考えた氷室は、次に、口を開いた。

「新世紀元年、その年において、全ての破壊された筈の『魔器』の破壊。それが、君の御役目だった」

「——ッ!?!」

その時、千景の脳内に電撃が走った。

聞き慣れない筈の言葉なのに、背筋がぞつとするかのような、聞き覚えのあるような言葉。

「君は、私たちには内緒で、その御役目を担っていた。君の記憶が無いのは、その最後の戦いにおいて、君が持つ記憶の全てを破壊されたからだ」

「な——ッ!?!」

さらに、衝撃的な事を言い渡され、混乱する千景。

だが、それさえもお構いなしに、氷室は続けた。

「もし、君が全てを知りたいなら、神社に行くの良い。そこに、答えがある」

氷室は、悲しそうな表情で、千景を見ていた。

千景は、茫然するほか無かった。

自分の知らない事、自分の知らない役割。

千景の心境には、ただ、不安しか無かった。

記憶無き再開

千景の故郷。

香川から、遠く離れたこの高知の海の面した都市には、一際大きな裏山が存在する。

そこにある階段を昇れば、この地に本物の伝説として存在する、『創代神社』がある。

その神社には、必ず一人、巫女なる人物がおり、その神社を管理し、そして、『創代の間』にて、何かを作ってくれるように、神に願われる。

千景は、そう聞いていた。

「……あそこに……」

千景は、街中を歩きながら、そこから見える裏山を見ていた。

「……俺は、毎日ここに……」

そう呟くのは、ほんの数刻前。

『『魔器』の……破壊……!?!』

「私も詳しくは知らない。だけど、君が命をかけて、それらの破壊に順守していた事を知っている」

氷室は、千景に向かってそういった。

雅は、申し訳なさそうに顔を背けていた。

「その魔器ってのは、一体……?」

「一言で言つて、超能力を宿した武器、つてところだね。武器によって能力は様々。しかし、それは例外なく人を傷つける事に特化していた。君は、そんな武器を破壊する為の御役目を担っていたんだ」

「どうして俺がそんな損しかないような事を……」

誰かに感謝される訳でもないようなものなのに。

それを自分が受けるはずが無い。千景はそう思っていた。

「それでも、君は戦っていたんだよ。他でもない、この街の人たちの為

にね」

にわかには信じられない。

何故、自分を虐めてきた者達を守らなければならぬのか。どうして傷付くような事をしなければならぬのか。

そこで、雅が口を開く。

「……気になるなら……行ってみたら?」

「雅さん?」

「創代神社。知ってるでしょ?」

「……俺が、なんか毎日行つてたつていう……」

「そうよ。分からないなら、行ったらどうなの?」

と、そっぽを向くようにそう言ってくる。

その反応に、千景は驚きを隠せない。

親切だからだ。

以前までの雅なら、千景に対してこんな事を言わない筈だ。

むしろ、自分という事を嫌つてすぐさまこの部屋を出ていくはずなのに、彼女はそれをしない。

「一体何があった……」

「……アンタのせいよ」

「は?俺のせい?」

「そう、アンタのせい」

ますます訳が分からなくなる。

一体何がどうなつてこうなつたのか。

混乱する千景に、氷室は続けて言う。

「まあまあ、落ち着いて。とりあえず、雅の言う通りを試してみたらどうだ?」

「まあ、そうするが……」

言われた以上は、仕方が無い。

「今夜、宿はどうする気かね?」

「邪魔じゃなければ、というか不本意ながら宿に泊まる為の金は持つてきていないからここに泊まる事にしてるよ……」

「ふむ……」

「ッ……」

氷室はうなずき、雅は暗い顔になる。

それに、千景はなんとも言えない違和感を感じながら、話を打ち切った。

施設を出て、神社のある裏山に続く商店街を歩いている千景。

時刻としては、学校はもう昼休みだ。

歩いているうちに、商店街に入る千景。

「ここも変わってないな……」

いつも通り人が行き交い、そこに売られている商品を買ったり買ったり、そして、買い物客と店員との世間話が聞こえてくる。

そう、いつも通りの日常が、そこにある。

「うわ!?!」

「おおっと!?!」

そこで、誰かとぶつかってしまう千景。

「す、すいませ……」

「すま……ん……」

そこで、ぶつかってしまった人物と目が合う。

大きな体躯。おおよそマッチョと言うべき肉体。

そしてそれにアンバランスに手に持たれた、花束。

そして、あまりにも厳つい顔。

とても三十代とは思えない程の顔立ち。

「吾郎さん……」

「ち、千景……なんで……」

『春風吾郎』
はるかぜごろう

花屋を経営している男性だ。

思わず互いに黙ってしまふ二人。

「……あー、久しぶりです……ね?」

「あ、お、おう……そうだな」

なんだか歯切れが悪い。

千景は、吾郎の自分に対する反応が可笑しい。

昔は、かなりこちらを毛嫌いにしていた筈なのだが……

「お前、どうしてここに……」

「仮病と言う名のずる休みをしています」

「……とうとう向こうの学校でもはぶられたのか」

「別にそんなんじゃないですよ……」

「……」

やはり互いに会話が途切れる。

互いにどう話を切り出せばいいのか分からないのだ。

だが、そこに。

「ぱぱー!」

と、言ってくる幼い声が聞こえた。

「ん?真琴!?お前、休んでなきやだめじゃないか!」

店の中から走って来たのは、まだ幼い男の子。

吾郎は屈み、その子供を受け止める。

「ごめんなさーい!」

「お前なあ……」

ふと、その男の子は、千景の姿を見ると、その表情を無邪気に明るくした。

「あ、ちかげにいちゃんだ!」

「え……」

そして、抱き着いてくる。

「お、おい……!」

「ねえねえ、いままでどこにいたの?」

「ど、どこって……」

ちなみに、千景はこの男の子の事を知らない。

なのに、何故この子供は自分に向かって抱き着いてくるのか。

「お前は、覚えてないだろうな」

「え……?」

立ち上がった吾郎が、頭を掻きながらそう言ってきた。

「真琴はな、お前に助けられたんだよ。覚えてねえかもしれないけど」
「な……」

絶句する千景。

一体、何時の話だ。しかもどうやって自分はこの子供を助けた。
混乱するなか、吾郎は、あまりの気まずさにそれ以上切り出してこ
ない。

「にいちゃん、あそぼ?」

「ツ……」

千景は、純粹無垢な眼で見上げてくる男の子、真琴に半ば躊躇いが
ちに視線を合わせるようにかがんで答える。

「ごめん、今日は用事があったな。遊べないんだ。また、今度な?」

「えー」

「言つたら?ちかげにいちゃんは忙しいんだ。分かったら、お母さん
の手伝いでもしてきなさい」

「はあい」

やや不服そうに答え、真琴は店の中に入っていく。

それを見送った後、吾郎は千景を見た。

「……神社に、行くのか?」

「……ええ」

千景は、首を縦に振る。

思い出さなければならぬ。

自分が、本当は何者なのか。

どんな理由で、讃州市に行かされたのか。

その理由全てを。

「そうか、気を付けろよ」

こちらを心配する言葉。

その意外さに、やはり、気恥ずかしさを感じずにはいられず、千景

は、やや焦り気味に答える。

「……ありがとうございます」

そして、千景は、高い階段を見上げた。

目的の神社が存在する山に設けられた階段を。

千景は、その階段を昇る。

一段一段、踏みしめるように。

その階段を昇る最中、千景は思い出す。

この街での出来事を。

その理由は分からない。

親は小学生にあがる直前の息子を残して心中した。

理由は分からない。ただ、神社で一人の息子の前で自害したらしい。

その時のショックからか、自分は記憶を失ったらしいのだが、その前に親がしでかした事が原因で自分の評判は地の底だった。

だからこそ、自分は虐められていたのだろう。

そんな親に、恨みはなかった。

顔も知らない、ましてや生きてもない相手に、今更怨んでも仕方が無いからだ。

ただただ、自分に与えられた『咎』を受け入れるだけだった。

しかし、今思い出してみると、中学にあがる直前までの記憶がまるで穴だらけだ。

虐められた内容は思い出せる。

だが、それでも記憶に途切れがある事は確かだ。

その途切れの理由を、千景は知らなければならぬ。
そう、知らなければならぬのだ。

そして、千景は階段を昇り切る。

そこで待っていたのは――

「ようこそ、創代神社へ。今回は、どのようなご用件でしょうか？」

長い黒髪。それを三つ編みに一束に纏めた髪型。

なんの化粧もされていないのに、白くもなく、良い気色が感じられる肌。

何もかもを見通しているかのような、澄んだ暗い碧^{あお}の瞳。

千景よりも、何歳か年上の少女は、千景に向かって、優しく微笑んでいた。

まるで、再開を喜ぶかのように。

「……」

千景は、それにすぐに答える事が出来なかった。

その声に、どうしようもない懐かしさを感じたからだ。
そして、この身に受けた事のある、温もり。

「ああ、自己紹介がまだでしたね」

聞き覚えのある声音。

それは、千景の満たされてもなお空虚な心を、埋めていく。

しかし、少女は、何のためらいも無しに、何かに耐えるかのように、自分の名を告げた。

「私の名前は『神代奏』^{かしろかなで}。この創代神社で、巫女を務めさせてもらっています。よろしくお願ひしますね」

聞き覚えの無い、名前。

それに、千景は思わず、自分の胸倉を握りしめた。

「……う……あ……」

そして、嗚咽。

ここまで、心に響く名前は、初めてだった。

これは、郡千景の心ではない。

紛れもない、不道千景自身の心。

視界が、霞む。

知らぬ間に、頬を何かがしたたり落ちる。

それに、目の前の少女——『神代奏』は、一瞬目を見開くも、すぐに微笑み、その目尻に、涙を浮かべる。

「やはり……頭では忘れても、心は覚えているんですね」

「う……ああ……」

もう、止まらない。

千景の眼から、止めどない程の涙が流れ出ていく。

とても大切な、だけど知らない名前。

先祖の記憶ではない。

これは忘れてしまった記憶。

穴の中にある、大切な思い出。

頭では忘れてしまった、心の中にある、大切なもの。

「……おかえりなさい」

奏の言葉に、千景は、嗚咽を漏らす事しか出来なかった。

古いちゃぶ台の上に、湯呑が置かれる。

「……すみません、いきなり泣いてしまつて」

「ううん、私も少しばかり泣いてしまったから、おあいこよ」

千景は、目の前の巫女服の少女……奏と対面していた。

あの後、居間に案内され、ここでお茶を出されているのだ。

「では、単刀直入に言うと、私は、貴方の事を知っています。当然、貴方も私の事を知っています」

「それは俺が……その、泣いた事に関係するのか？」

「はい」

千景は頭を掻く。

目の前の少女、というか、千景から見たら彼女は高校生あたり。下手すれば大学生なので女性とすべきなのだろうが、とにかく彼女は自分の事を知っている。

そして、自分も彼女の事を知っている。おそらく、失った記憶の中に。

「そして、貴方は、自分の記憶を取り戻しに来たんですよね？」

「ああ」

「それは何故ですか？」

奏が、笑顔を引つ込めてそう聞いてくる。

一種の気迫さえ感じる。

それに、千景は、答える。

「……俺は、知らないといけないんだ」

「それは何故？知らなくても、今の生活に問題はないでしょう？」

「そうかもしれない。だけど、俺はこの御役目とは別の御役目についている」

「それは、どんな？」

奏は、間髪入れずに聞いてくる。

その声音には、僅かな焦りが感じられる。

「……外から来る敵を、神樹様から守る御役目だ」

「……勇者の御役目ですか？」

「知っているのか？」

これには純粹に驚いた。

勇者の御役目の事は、大赦の超重要機密だ。

それを何故彼女が知っているのか。

「ええ、我が神社には、それについての書物が保管されていますので」

「そんなものが……いや、これは良いか」

「それで、貴方は、その御役目において、どうして自身の記憶が必要だと思っただんですか？」

奏は、なおも聞いてくる。

「それは……」

千景は、息詰まる。

そして、考える。

どうして、自分は、自分の記憶を取り戻したいのだろうか。

千景は考える。考える。

そして、思う。

「俺は——守る理由が欲しい」

「……その、理由とは？」

「俺は、世界を守りたいって思う。だけど、俺がどうして守りたいって思うのかが分からなくなっただんだ。ただただ鎌を振るうまま、己の中に走る衝動のままに戦った。だけど、その理由がわからないんだ。信じていたものが、信じられなくなりそうで、怖いんだ。俺は、それがどうしようもなく怖い。もし、俺がその理由を失くしてしまったら、また何かを失いそうなんだ。それが怖い」

「だから、記憶が必要だと？」

「そうだ」

千景は躊躇いもなく肯定する。

「記憶を取り戻せば、守る為の明確な理由が分かるはずなんだ。そう、俺が——」

そこで、ふと思った事を口走った。

「——本当の親に、愛されてたか。そんなちっぽけな、ものを」

それに、奏は、この会話で初めて息を飲んだ。

「……そう、貴方は、結局、そこに何かを求めてしまうんですね？」

表情は、険しい者から、あつという間に、悲しそうなもの変わった。

そして、奏は、一度目をつむり、何かを逡巡し、目を開け、千景を見る。

「では、貴方の依頼は、貴方の記憶の修復。それで、よろしいですね？」

「それは——」

「望み通り、貴方の記憶を治してくれるように、我が神——創代様に願いますよう」

奏は、千景に向かってそう言った。

確固なる決意をもって。

神に干渉する。

それは、並大抵の精神力では耐えられないもの。

しかし、それは意識がある場合の話であって、意識を失っている状態なら、滞りなく可能だ。

千景は、その為の衣服に着替え、神社に存在する、『創代の間』へと案内された。

「準備は出来ているわ」

その前で待っていた奏が、千景を迎える。

中を覗けば、そこには敷布団と枕のみが置かれており、奥には何か

を祀る祭壇があった。

「創代様より、記憶の修復には一週間はかかるとの事です」

「ちなみに、俺の友人の記憶はどうなんだ？」

「申し訳ありません。それは、貴方と違って、抜かれたという形なので、元が分からなければ……」

「不可能って事か……」

この神社の言い伝えでは、ここの神は、『創る』事に関しては、どの神よりも高い力を持っているとの事。

つまり、その気になれば、世界さえも創造しうる事が可能だという事だ。

これでも土地神の一体ののだが、なんでもれっきとした一匹狼らしく、神樹様には協力していないような。

その神が管轄するこの街では、どういう訳か神樹様の加護が拒絶されており、人々は、限られた資源で生活しているような。

そんな事はともかく、創る事に関して圧倒的力を持つ創代は、千景の記憶を修復するのは造作もないらしい。

しかし、物事には何事も代償が必要だと聞いたが、どうやら千景の場合はなんでもストックというものが残っているらしい。

なんのストックかは分からないが、それがあるならありがたい。

千景は、敷布団の上に、仰向けに寝転がる。

「では、修復している間は、目が覚める事はありませんし、死ぬ事もあります。ただし、万が一にでもこの戸が何者かに開けられた場合は

——貴方の記憶の保証はできません」

それだけを言い残し、奏は、戸を閉めていく。

そして、戸が完全に閉まった時、千景の意識は闇に落ちた。

そして、過去の自分の記憶を見せられた。

千景のいない間の勇者部

千景が、自らの故郷に戻って、三日。

六道翼は、廊下を歩いていた。

その手には、大きな封筒。

ちよつとした書類を、職員室に届けに行くのだ。

ただ、その顔はあまり浮かない。

その理由は、この間、千景と美森が告げた乃木園子の話。

そして、その事を犬吠埼風に話し、他の者には話さないと決定した事。

もうバレたために、人質はもはやあまり意味を成さないだろう。

ならば全てを話すべきか、そうじゃないべきか。

だが、それで、誰かが暴走する可能性がある。

それを考えると、慎重に説明しなければならぬ。

「どうしたものか・・・ん？」

ふと、視線の先に、クラスメイトと思われる少女二人を相手に、姉からもらったスケッチブックで何かを伝えている樹の姿が見えた。

樹が何か文字を書いたスケッチブックをその二人に見せると、二人は顔を見合わせ、それじゃあまた、といって別れた。

そんな樹に、翼は後ろから声をかける。

「樹ちゃん」

樹は、すぐにこちらを向く。

「こんなところで会うなんて奇遇だね」

『はい』

と、スケッチブックを見せる樹。

しかし、そこには他にある事が書かれていた。

「ん？用事？」

日曜日に用事がある。

どうやら、何かに誘われたらしい。

樹は、しまった、という顔をした。

「別に日曜日に予定がある訳でもないし、行ってみたらどうなんだい

？」

すると樹は無理に笑って、スケッチに文字を書き込んだ。
そこには。

『カラオケで歌うのが好きな人たちなんだ』

「そうなのか・・・」

さらに、書き込む。

『私がいると、気を使ってカラオケに行けないから・・・』

それに、翼は息を飲んだ。

樹は、満開の影響で声を奪われた。

だから、声を発する事が出来ない。

「・・・そう、か・・・」

そこに、樹は遠慮したのだろう。

『それより、こんなところでそうかしたんですか？』

「ん、ああ。職員室にこれを届けにね」

翼は、自分が持っている封筒を見せる。

『いっしょに行きましょうか？』

「いや、大丈夫だよ。君は教室に戻ってて」

翼は無理に笑う。

それに、樹は心配そうな顔になるも、頷いて翼を脇を通っていく。

「・・・ふう」

翼は、また歩き出す。

翼がこの間の満開で失ったのは肺の片方。

しかし、息苦しさを感じる訳では無い。

それは、おそらく精霊の補助のお陰だろう。

翼の勇者システムはいささか特殊なのだ。

やはり、初代の端末とそのデータを二つ入れている事が原因なのだろうか。

「今後・・・僕だけで・・・」

翼は、そう想い老ける。

学校がおわり、下校路を歩く翼。

そこへ。

「何辛気臭い顔してんだよ」

「銀ちゃん」

銀が木に背をつけて待っていた。

「……ちよつと寄つてかねえか？」

銀にうながされるままに、翼はうどん屋かめやにやってきていた。

「つはあーやっぱうどんは美味しいなあー！」

銀が盛大に声を挙げる。

「銀ちゃん、他のお客さんに迷惑だから声を抑えて」

「良いじゃねえか。たまには二人つきりつてのもさ」

銀は、昔と変わらず陽気だ。

変わった事があるとすれば、髪が昔より伸びた事。

身長が結構伸びた事。

そして、右腕の事。

「おばちゃん！もう一杯！」

「風先輩といい勝負してるな。お金はあるの？」

「師匠からばつちしと貰ったぜ」

「あ、そう……」

もはや追及はしまい。

「それにしても、君が生きててくれて嬉しいよ」

「アタシも、まだ翼と園子、そして須美が生きててくれて嬉しいよ」

銀の表情に僅かばかりに陰りが差す。

「……その体、治らないんだって……？」

「……うん」

翼の体は、もう二度と戻らない。

神に奪われたものは、どれほど足掻こうとも、戻る事は無い。

「そっか……なんか、悔しいなあ……アタシ以外、めっちゃ苦

しんでるのに、こんな悠々としててさ……」

「銀ちゃんの端末には……」

「無いよ。満開は無い。その代わり、師匠せんせいの切り札が入ってるんだ」
「そうか……」

二人の間に、不穏な空気がよぎる。

「……あー、やめだやめだ。こんな辛気くさい話はやめにしよう。それよりも、夏凜の奴が順調に回復していつてるってよ。今日中には目を覚ますみたい」

「本当かい？」

「アタシは毎日が忙しい学生様と違って、暇な怪物なんぞでな。色々と諜報活動やらやってんのよ」

「その為の仮面かい？」

「あれ？言っちゃったっけ？」

「腰のバックに師匠せんせいの端末。動けない先生の代わりに動くなら必要なものだ。それに骨で自分の身長を偽る事だって出来るだろう？」

「ありやりや、やっぱり翼の観察眼には敵わねえな」

銀の腰のバックには確かに変装の為の大赦の仮面と装束がある。

銀の謎の骨の無限生成能力は、どうやら自身の体内に存在する骨を無限に変形、増殖、切り離しなどの事が出来るらしい。

まだその事については詳しくは知らないが、色々と信じられない事だ。

何が、彼女をそんな体にしてしまったのか。

「がしや髑髏」

「え？」

「全身が骨の巨大な妖怪。埋葬されなかつた死者の亡骸の骨と怨念によつて集まって出来て、夜な夜な町中を彷徨って、生きてる人を見つければすぐさま噛み殺す、まさに悪霊の一体。その因子が、アタシの中に入ってんだよ」

「それが、君の骨の無限生成能力の正体だつて言うのかい？」

「そだよ。前、敵の親玉がそう言ったのを聞いた事があるんだ。アタシにこの妖怪の因子を入れるって」

「それで……」

「百万分の一の確率で、適合した」

それに、息をのんだ翼。

「限りなく低い成功率で、アタシはその因子と適合して、そして自分のものに出た。大抵の奴は、その因子に体に乗っ取られて、救いようのない化物として暴れまくる。そして、そんな化物となった奴は、容赦なく殺された。失敗作って言われてな」

つまり、下手をすれば銀はここにいなかったという事になる。

しかし、今の問題はそこではない。

「他にもいたのかい？」

「ああ、見た限り十人以上。鱗を体に出したり、キバが生えたり、毛むくじやらになったり、そして暴走して周りの奴らを襲った。そいつらは全員水槽の中にいて、その中にある水槽が割られれば、そのまま死ぬ。いわば、あの中でしか生きられない奴らばかりだったんだ」

銀の骨の右手が握りしめられる。

「アタシは、最後だった。周りの奴らが死んでいくのをみて、すごく怖かった。アタシもあんな風になって、死んじまうのかなって思っただけ。せつかく生きてるのに、翼や須美や園子に会えずに死ぬなんて、アタシには耐えられなかったんだ」

そして、ついに自分の番となり、因子を入れられた。

がしや髑髏の因子は、銀の中で爆発的に銀の遺伝子を書き換え、すぐさま銀の体を人ならざる者へと変えていった。

だけど、ダメだった。

一瞬にして暴走したがしや髑髏の因子に体に乗っ取られ、意識は闇の底に突き落とされた。

無限の骨に覆われ、研究所を破壊しまくった。

そして、他の奴らに殺された。

そのままゴミのように捨てられ、そこで、終わるはずだったが、銀は生きていた。

どういう訳か、がしや髑髏に存在した『周囲の物質を変換して体を徐々に修復していく体質』によって、銀の体は修復されていて、何

の因果か、すぐ傍にあった木に落ちた雷によって、その雷が銀を打ち、そのショックで心臓が再び動き出した。

因子の暴走は一時的な死によって止まり、そして、銀は骨の無限生成能力を手に入れた。

それから、幾たびもの時間がたち、銀は友人、園子の師匠である辰巳と再会。

そして、現在、大赦に紛れ込んで翼や園子の状態、東郷美森へと改名した友人『鷲尾須美』の様子を知るに至った。

さらに、新たな勇者たちの事も。

「師匠の端末は受け継いで、樹海にも入れるようにはなったけど、アタシは戦闘には参加しなかった。いや、したくなかったんだ。こんな体になった事で、翼はともかくとして、須美に怖がられるのは、結構堪えるからな」

「そうだったのか・・・」

うどんを食べ終わり、二人はさらに話し込む。

「今後、犬吠埼風が暴走する可能性がある」

「それは、樹ちゃんの事で？」

「樹は、ある歌のオーディションを受けているんだ」

「それって・・・!?」

「腕前はアタシは知らないけど、不合格になつてくれた方が・・・」

「問題はそこじゃないだろ」

そう、問題なのは、樹が、オーディションに受けた事にある。

「くそ・・・！僕が初めから満開の事について話していれば・・・！」
「自分を責めないでくれ翼。それなら、いつでも動ける身であいつらに何も言わなかったアタシにだって非があるんだ。翼には、人質がいただろ？」

銀の言葉に、翼は、一旦落ち着く事を選んだ。

「もし、風さんがこの事を知れば・・・」

「妹思いだというのは兄貴の話から聞いた。確実に暴走するだろうな」

そして、自分を責めるだろう。

そうならば、もはやバーテックスどころではない。

「この大赦の秘匿主義さえなければ・・・」

こんなにも後悔する事はなかったのかもしれない。

病院にて。

「・・・・・・・・」

一応容態が安定して、目を覚ました三好夏凜が真っ先に思った事はこれだ。

(やってしまった・・・)

そう、自らが敬愛する翼の言いつけを破って『鬼気・修羅領域』を使ってしまった事だ。

あれは、あまりにも過酷な訓練の末に手に入れた、自分の生存本能を自分で破壊して本来なら手をつければ自らの体を破壊してしまう力に手を付けるというものだ。

そんなことをすれば、当然、体はボロボロとなって、数日の昏睡状態に陥るのは目に見えていた。

「はあ・・・・・・・・」

そして、自分の異常を確認する。

「匂い……か……」

周囲に臭う筈の薬品の匂いの一切が感じられないのだ。

「まあ、別に生活に必要な不可欠なものでもないし、大丈夫でしょ」

そう一人で納得し、起き上がる夏凜。自分の口についていたマスクを外し、周囲を見渡す。

どこにでもある、ごく普通の病室だ。

「……翼様」

そう呟く夏凜。

翼は、満開の使用を極力控えるように言っていた。

そして、その後にもこういつていた。

『代償無き力なんて存在しないんだよ』

強くなる為には時間が必要だ。

そして、その時間を無駄にしないための知識も必要だ。

強くなる為には、確かに時間が必要。

そして、一歩進む度に、戻る事は出来なくなる。

もし、今、匂いが感じられないと言うのなら……

「満開の、代償か……」

ふと夏凜は、そばにある机の上に、自身の携帯端末がある事に気付く。

それを手に取り、軌道させた途端。

「うわ!？」

中から精霊が飛び出してきた。

「な、なに……!？」

それは、義輝と同様の人型精霊。

しかしその風貌は、義輝のような武人というよりも、何かの職人のような……

夏凜は、空中に佇むその精霊の名前を確認する為に端末を操作し、その名前を確認する。

『村正』

結城友奈は、そんな美森の事を心配しているものの、どこか遠慮がちになっってしまったている。

犬吠埼樹は、声が出ない事で、周囲から遠慮されているのか、どこか表情が暗い。

三ノ輪剛は、そんな勇者部の空気に感づき、風に心配している旨の話をしてくるも、風はなんでもないと答え、その違和感を解消できていない。

三好夏凜は、順調に回復していつているものの、まるで何かを感じているかのような表情をしていた。何かしらのノートも取っているらしい。

不道千景は、音信不通……ではなく、代わりの誰かが出てきた。その人物の話聞く限り、今、千景は記憶を取り戻す為の大事な儀式をしているとの事。いささか不安ではあるが、今は、その人の言葉を信じるしかない。

はつきり言って、不穏な空気が流れている。

やはり、園子が告げた事は、大きな衝撃となつて勇者部の空気を乱したのだろう。

これは、どうにかしなければならぬ。

いずれ、誰かが崩れる。

そうなれば、もはや今まで通りとはいかない。

確実な崩壊がくる。

そんな事になれば、敵との襲撃の際に――

あれから、一週間が経った。

特に、大きな事は何も無かった。

しかし、昨日、風は酷く落ち込んだ表情で勇者部部室に入ってきた。その理由を聞いても、軽くあしらわれて、聞く事は出来なかった。

そして、美森の表情も、どこか険しい事になっていた。

「わざわざお出迎えに来て頂いてありがとうございます」

ふと、隣を歩く三好夏凜に声をかけられ、我に返る翼。

「ああ、友達なんだから、当然の事でしょ？」

「友達だなんて恐れ多い……」

「僕たちは同じ年だ。君が謙遜する必要なんてないんだよ？」

「いえ、私は、貴方の強さに純粹に憧れているだけですから」

夏凜は恥ずかしがるように言う。

時刻はすでに放課後。

それもかなり時間が経っている。

(流石に意地張らずに車で来るべきだったか……)

今更後悔しても遅い。

「それにしても、風の奴、ずいぶんと落ち込んでいたような……」

「ああ、夏凜ちゃん、それについては……」

その時、二人の端末に、一本のメールが入った。

「なんだ……?」

そして、メールを開ける。

何か、嫌な予感がする——

「……犬吠埼風が、暴走……」

事態は、最悪の方向へ動いていた。

哀しみの果てに

潰してやる潰してやる潰してやる——ツ!!!
もはや、犬吠埼風の中にはそれしかなかった。

勇者に変身し、空を飛ぶ。

目指すは、大赦本部。

樹の声を奪った、張本人。

始まりは、美森によつてもたらされた、勇者システムと満開の恐ろしきについて。

この間のオフィウクスとの戦いの後、美森と千景の二人は、乃木園子なる人物と対面していた。

その人物から告げられた事が、満開の代償。

神の力を行使する為の代償。それは、自らの体一部を供物として捧げる事。

それを知った時、風は、何をバカな事を、と思った。

医者は言った、すぐに治ると。

だが、それはまやかしなのだろうか？

風は、否定したかった。

しかし、日々の日常の中で、樹は、どこか肩身の狭い生活をしていったのだと思う。

声が出ない事が災いして、音楽の授業に支障が出る。

カラオケが好きな友人と一緒に遊べない事。

目に見える形で、樹の生活が崩れて行っている。

風は、そんな樹が心配だった。

しかし、その数日もしないうちに、東郷が自分だけ呼び出し、新たに分かった事。

それは、精霊が是か非でも勇者を死なせない事。

それだけを聞けば、良い事に聞こえるかもしれない。

だが、問題はそこではない。

それ故に、乃木園子の言っていた、満開の代償は二度と治らないという事を確定させてしまう証拠となってしまうのだ。

もう、二度と治らない。

それは、樹の声が、二度と戻らないという事と同じだった。

さらに、美森は友奈の心臓の事についても告げた。

その事実は、確かに風の心を弱い方向へと傾けて行つた。

そして、今最も精神が不安定な状態の風に、止めが入った。

樹の、歌のオーディション合格。

そして、その時、樹の言つた、姉を称賛する言葉。

もう、歯止めは効かなくなった。

そこから、今に至り、風は真つ直ぐに勇者の跳躍力を使って大赦本部へと走っていた。

憎い、妹の夢を奪つた奴らに鉄槌を下す為に。

潰す、とにかく潰す。奴らに、自分達が受けた苦痛を味合わせる。

文句は言わせない。絶対に言わせない。全部奴らが悪い。私たちは何もしていない。

もう、風の心はぐちゃぐちゃだった。

「よくも——よくも——樹を——ッ!!」

目から、とめどない程の涙が溢れ出てくる。

一刻も早く、潰してやらなければならぬ。

速く速く速く速く……

そう、思っていた風に向かって、突然、地上から何かが飛んできた。

「——ッ!?!」

それをもろに喰らって、地面に落下する。落下した場所は、海の見える展望台。

「ぐ……誰だア!」

何が起きたかわからない。だが、確実に第三者からの攻撃である事

できるに値する破壊力を秘めている。

しかし、そんな喰らえば木葉のように叩き斬られるような剣戟を、男は何の苦もなく回避していく。

「お前たちが初めから満開の事を教えていれば、樹は夢を失わずに済んだんだ！」

涙を流しながら、風は剣を激情のままに振るう。

しかし、男はその剣を逸らしていく。

そして、決定的な隙が出来た瞬間、そこに一撃を叩き込んでくる。

「ぐう!?アアアアッ!!」

その一撃は、生身の人間のものとは思えない程に重い。

おそらく、自身の全体重を乗せて攻撃を叩き込んでいるのだろう。

「アタシたちが、アタシたちが何をしたっていうのよ!どうしてこんな事にならなくちゃいけないのよ!どうして、体を供物として捧げなければならぬのよ!」

「.....」

「答えろッ!!」

「ぐッ!」

そこで、風は初めて男に一撃を入れる。

しかし、その一撃は男の持つ刀によって防がれる。

しかし、その刀は折れなかった。

なんの変哲も無い刀が、神の力によってつくられた風の大剣の一撃を受けても、折れる事が無かった。

だが、その事実は今風の風にはどうでも良かった。
殺す。

何があっても、目の前のこの男だけは殺す。

「フーッ!フーッ!フーッ!」

まるで獣のように、荒く呼吸する風。

しかし、男はあくまで冷静だ。

まるで弄ばれている。

その事実が、風をさらに駆り立てる。

「アアアアアア!!」

先ほどよりも激しい。

もしかしたら、怒りによって、自らのリミッターを軽く外しているのかもしれない。

自滅覚悟の剣戟。

男は、これを迎撃。

しかし、極力攻撃を受けない様にと避け続けてきた男が、ここで迎撃するという戦法へシフトしてきた。

錯綜する二人の剣。

ただただ、相手を斬り殺す為に、精霊のバリアに全てを任せて攻撃一辺倒になる風。

対して、卓越された剣技によって、風の剣を全て逸らし受け、そして隙をついて攻撃する男。

勝負は一見互角のように見える。

しかし、精霊のバリアの存在する風が優性に見えるも、疲労の色が明らかににじんで見える。

それが濃くなるにつれて、風の剣速がどんどん遅くなっていく。

対して、男の剣は一切衰える事なく、風へ斬撃を入れていく。

そして、男がその拮抗を破り、風を刺突によって吹き飛ばす。

「ああ!？」

「.....」

壁に叩き付けられる風。

男は、一切の追撃もせずに、そこに佇む。

風は、地面に倒れ伏す。

「.....どうしてよ.....」

立ち上がる風。

「どうしてよ! そんなに戦う力があるのに、どうして戦わなかったのよッ! そんなに戦えるなら、せめてアタシたちを守りなさいよおとおおッ!!!」

また、突撃する風。

上段からの振り下ろし、男は、それを軽く受け流す。

「守りたいなら自分で守れ! そんなに力があるのになんで戦わないの

よ！どうして他人に任せるのよッ！どうしてアタシたちに押し付けるのよッ！満開なんて機能をどうしてつけたのよッ！どうして樹の声を奪ったのよ！どうして友奈の、東郷の、翼の、夏凜の、剛の大切なものを奪ったのよ！何もしていかない癖に！何もしていかないくせに！」

横に薙ぐ。男は、飛び上がって回避する。

「そんなに怖いのか！そんなに戦うのが怖いのか！そんな力を持っておいて！どうして戦おうと思わなかったのよ！どうしてよ！どうしてよ！どうして樹の夢を奪ったのよ！どうして！」

剣を振るう度に、男の視線が風に突き刺さる。

「答えなさいよ・・・答えたらどうなのよッ！大赦アツ!!」

剣が、地面にめり込む。

「・・・憎いか」

その時、男が、初めて攻勢に出た。

「憎いか！犬吠埼風！」

「ッ!？」

おおよそ、人のものとは思えない膂力。

それが、風をどんどん後退させていく。

「妹の声を奪われた事が憎いかッ！妹の夢を奪われた事が憎いかッ！ならば結構！それは正当で全うな怒りだ！」

風の目では捉えられない、無数の剣戟。

「お前は正しい！その怒りは、正しく我々大赦に向けられるものだ！お前は間違つてなどいない！」

剣を振り下ろす、しかし、その剣を受け、一回転したかと思ったら、その風が放った一撃の威力がそのまま風に返ってくる。

「だが——自分を恨むなッ！」

目の前の風へ、剣を叩き込み続ける男。

反撃しても、その一撃がそのまま自分に返ってくるかのように反撃される。

「傍にいる者を恨むなッ！物を恨むなッ！関係無き者を恨むなッ！ただ俺たち大赦を恨めッ！お前達の体を奪った俺たちをッ！」

反撃しても無駄。

足裏に一撃を入れられる。

「うッ!？」

片膝をつく。

そこへ額に突きが叩き込まれ、仰向けに倒れる。

「うう．．．!？」

その風へさらに追撃を入れる男。

あまりにも速すぎる斬撃。

反射的に大剣の腹を突き出すも、その両手にかかる衝撃が、風の両腕を襲う。

「う．．．アアッ!」

風は、そこから抜け出す為に、剣を振り回して男を追い払い、立ち上がり、剣を構える。

「ハア．．．ハア．．．ハア．．．」

「もう一度言うぞ．．．お前の怒りはその程度か？」

「ッ!」

男は、風に問いかけ、風は、やはり心の中で巻き起こる激情を抑え込む事は出来なかった。

「そんなわけないだろおおおおおおおおおおおおお
お!!!」

ここでついに風は剣の巨大化を使用した。

数倍にまで巨大化した風の剣は、まさに巨人の剣。

確実に倒す。

その為には、斬の攻撃ではだめだ。それでは避けられてしまう。
ならば、面の攻撃で押し潰す。

「死ねエー！大赦ああああああああああああ!!!」

そしたら、自分も死のうか。

そう、思ってしまった風。

その時。

「——だから、自分も責めるなど言っただろうが、バカヤロウ
がッ!!!」

そんな声が聞こえた。

『鬼気・修羅領域』

そう、眩いたとき、明らかに大気が震えた。

さらに、袖から一枚の札を抜いた。

『封印解除』急急如律令ツ!!』

瞬間、何の変哲も無かった彼の刀が、突如としてその刀身になんらかの文様を浮かべる。

そして、札は、燃え、塵も残さずに消えた。

「覚えておけ犬吠埼風」

身を深く沈め、刀を右半身に置き、風の巨大化した大剣を迎え撃つ。

「我が三好の名において、その名の開放を認める——」

刀が、異様な光を発し始める。

「その六百貫の値打ちを持つ刀だと豪語するならば、その力を今ここで示せ——ッ！」

風の剣が、男に直撃する。

「——薙ぎ払え『大般若長光』だいはんにやながみつ」

瞬間、轟音と爆風と砂塵が舞った。

そして、風の横に、何か巨大な物が落ちた。

「……ええ」

それは、風の大剣の半分から先。

綺麗に切断されたそれは、風の大剣が、いともたやすく叩き斬られたという事実を突き付ける。

それに、呆然としながら、風は、前を向いた。

そこでは、剣を右手に構え、左手で狙いを定める男の姿があった。

「——あ」

次の瞬間、男がおおよそ人間とは思えない程の速度で走り抜けた。そして、また砂塵が吹き飛んだ。

「——あ——あ——」

「……覚えておけ」

男の刀は、風の右頬を掠めていた。

しかし、その一文字の長い傷口から、血がペンキのように流れ出ていた。

精霊の障壁を突き破り、かつ、狙い澄ましたかのように、風の右頬を斬り裂いた。

まるで、風の怒りを鎮めるかのように。

「俺の名前は『三好春信』みよしはるのぶ」

男は、刀を降ろし、仮面を外す。

夏凜と同じ色の短く切られた髪、夏凜と同じ色の目、その顔立ちも夏凜に似ていた。

ただ、違うとすれば、強力な力の行使によって引き裂かれた腕袖から見える、傷だらけの腕と、左頬に三本、右頬の二本の切り傷。

「三好夏凜の兄にして、大赦の役人だ」

その眼は、こちらを哀れむかのような目だった。

「全大赦を代表して、お前に謝ろう——すまなかった」

そして、深々と頭を下げた。

それに、風は呆然とする。

しかし、それで彼女の怒りは収まらなかった。

「ふ……ぎ……」

晴信は、顔を上げた。

「ふぎげんな！」

風の拳が、春信の顔面に叩き込まれる。

春信は無様に吹っ飛び、手すりに叩き付けられる。

「そんな、そんな、謝るぐらいだったら……樹の声を返しなさいよおおおお!!」

もはや、訳が分からなくなり、風は、このとめどない怒りを、目の前の男にぶつけようとすする。

春信をもう一度殴る為に、風は春信に駆け寄ろうとする。

しかし、その風に立ち塞がる者がいた。

「やめる風ッ！」

「剛……!?!」

剛だった。

暴走する風の両手首を掴み、必死にその手を握りしめていた。

「そんな事しても、意味がねえ!」

「でも、それでも!こいつらはあ!」

風の両目から、とめどない程の涙が溢れ出てくる。

その声には、確かな後悔と哀しみが感じられた。

風は、必死に剛の手から逃れようともがく。

剛は、必死にそれを阻止するが、そもそも右手の機能が停止しており、なおかつ補助ギミックというあまり期待できない装置では、風の左手をいつまで抑え込んでおけるかわからない。

剛は、考える。

どうやったら、風が止まるのか。

どうしたら、誰も傷つかずに済むのか。

それだけを必死に考える。

泣き叫ぶ風。

そして、剛は、今の風の姿を、一年前の自分と重ねる。

そう、銀を失って、自暴自棄になって、何もかもがどうでもよくなった、あの頃を。

「分からないわよ!...剛には分からないわよ!樹の声を奪われた!妹の夢を奪われた!そんな事されて、黙っていられるわけが無い!そんな苦しみが、アンタには分かるの!?!」

あの時、剛は確かに風に救われた。

「分かる訳ない!アンタなんかには理解されたくない!こんな、こんな事になるぐらいだったら!...こんな!...!」

あの時、言ってくれた言葉が、自分を救ってくれた。

ならば、今度は――

(俺がこいつを救う番だ――ツ!!)

だから考えろ。

両手は塞がっている。離して殴るもよし、しかしその瞬間に風に殴り飛ばされるかもしれない。

そして例え殴ったとしても、風は止まらないかもしれない。

今、この瞬間、風を止められる方法。

それは――

「だから良いのよ！私の事なんかほっといてよ！」

(許せ……！)

剛は、意を決して、その行動に乗り出す。

「私の事なんて――ツ!？」

唐突に、風の言葉が途切れた。

それは、口を塞がれたからだ。

しかし、その方法は、手で押さえるのではない。

強引に唇を重ねる事で口を塞いだのだ。

「んん――!？」

それに、風は目を見開き、一気にその顔を赤くする。

あわてて離れようとする風を、剛は左手を腰に回して逃げられなくする。

ある意味では、捨て身ともいえる、剛の大胆な行為。

ただ、それでも離れようともがく風。

それに苛立った剛は、さらに風の口の中に強引に舌を突っ込んだ。

「んんん――!？」

さらに、風から喘ぎ声が響く。

剛はそのまま風の口内を乱暴にかき乱す。

テクニツクなどなく、ただただ乱暴なだけの接吻^{キス}。

「ん――ん――……」

そうしているうちに、だんだんと、風の体から力が抜けていく。

そして、完全に風の両腕から力が抜け、だらりとなり、そこで剛は口を離した。

「ぷはあ……!!」

互いに息を上げ、風は、膝をついた。

「はあ……はあ……剛……何を……」

「風」

先に息を整えた剛は、へたり込んだ風と視線を合わせるようにしや

がみ、言う。

「お前の妹は、それを望んだのか」

「——ッ!？」

風は、息を飲む。

それは、かつて、自分が剛に向かって言った言葉。

「風、確かに俺たちは大赦に騙されていた。満開の代償を知っていれば、樹は声を失わなかったかもしれない。そこは、怒っても良い。だけど、それを理由に、誰かを傷付けていい理由にはならないだろう?」「でも……でも……私は……私が、勇者部さえ作らなければ……」「おい、またキスすつぞ」「な!？」

「良いか風」

剛は、風の両頬を持ち、ぐつと自分と視線を無理矢理合わせる。

「勇者部作らなければ、とか言うけどさ。お前が俺に勇者としての適性があるから声をかけてくれたんだろ?」

「そ、そうよ……だけど、そうじゃなければ……」

「俺は、それを良かったと思ってる」

「な……!？」

風は目を見開く。

「だって、俺はお前に出会わなければ、今頃、あの路地裏でろくでなしとして生きてた。お前が、俺を止めてくれたからこそ、今の俺がここにいるんだ。それだけじゃねえ。樹や友奈、東郷に千景、翼にも出会えた。それは、俺にとっては大切な思い出だ。だから、勇者部を作らなければなんて、思い出を否定するような悲しい事を言わないでくれ」

風は、目を見開く。

「ア……でも……でもお……!」

「もし、今が辛いなら、俺がこれから楽しい思い出をいくらでも作ってやる」

剛は、顔を近付ける。

「風、お前が好きだ。だから、もうそんな悲しい事言うな」

そして、強引に唇を、また重ねた。

今度は、誰かの暴走を止めるような、乱暴なものではない。ただただ、愛を伝える為の、行為。

唇が離れ、風の中から、とめどない程の涙が溢れ出る。

「……ばか」

「は？」

「ばか！剛のばかあ！」

「ハア!？」

突然の罵倒。そしてポカポカと剛の胸を叩き続ける風。

「ばか！そんな事、そんな事言われたら、剛の事しか考えられなくなるじゃない！ばかあ！ごうのばかあ！」

まるで子供のように泣きじやくる風。

「あー、はいはい悪かった。でも後悔はしてねえからな？」

「うう、分かってるわよ……」

抱きしめ合う二人。

そこへ、歩み寄ってくるものが一人。

「犬吠埼」

春信だ。

それに、風は座り込んだまま、見上げる。

その顔は、殴られた事でくつきりと風の拳の痕が残っており、赤く腫れていた。

だが、その表情は毅然としてもなかった。

「……これは、先々代勇者としての謝罪だ」

晴信は、風に頭を下げた。

「……戦いを終わらせられなくて、すまなかった」

「……」

それに、風は何も答える事は出来ない。

その前に、春信は顔を上げ、そして、陸の方を見た。

「さて、そこで傍観している馬鹿どもはどうする気だ？」

「へ？」

見てみれば、そこには、何故か顔を赤くして苦笑している友奈、樹、

夏凜、翼、銀の五人がいた。

一体いつからいたのか。

いや、その前に、さっきの光景を見られたらしい。

「あ……忘れてた」

そして、剛の眩き。

それを理解するまで、三秒。

「な……なあああああああああああああああああ!!」

一世一代の告白のシーンを、他人に見られた。

それは、風にとっては莫大なダメージと羞恥となつてこみ上げてきた。

「えっと……おめでとうございます、風先輩!」

「……」パチパチパチ

「ま、おめでとうとでも言っておくわ」

「これで晴れて恋人同士ですね」

「流石兄貴、カッコいい事言う!」

「やあめえてええええええええええええええええええええええ!!」
でええええええええええええええええ!!」

風は顔を真っ赤にしてうずくまる。

剛も半ばながらに赤くしている。

しばらく風を弄り倒したあと、翼が春信に近付く。

「それで、どうして貴方がここに」

「……」

春信は、刀を回収して鞘に戻す。

すると、春信の来ていた装束が、突如として消滅し、その下からは、大赦の男性職員がいつも来ている装束が現れた。

「……俺の勝手な判断だ。犬吠埼風は止めるべきだと、そう判断した」

「ちなみに、園子ちゃんへの出撃命令は?」

「一応、出されたが、本人の拒否と辰巳さんの権限で追い払った」

「そっか、師匠が……」

「あ、あの……」

ふと、そこで風が春信に申し訳なさそうに歩み寄ってきた。

「その、さっきは暴走してたとはいえ、殴ってすいませんでした……」
「やめろ」

頭を下げようとする風を止める春信。

「お前は全うに怒って全うに俺を殴った。俺には、お前の拳を受ける権利があり、お前は俺を殴る権利があった。それだけの事だ」

春信は、風の肩に手を置く。

「そして、自分を責めるな。お前は決して、間違った事をしていないんだからな」

風の肩から手を離し、そして、今度は夏凜の方を見る。

「……久しぶりだな」

「え、ええ、そうね……」

春信はともかくとして、夏凜の方は歯切れが悪い。

「最近はどうだ？」

「別に、特に困った事は何も無いわ」

「毎日コンビニ弁当を食っているようだな」

「そうだけ……ちよつと待ってなんでそれ知ってるの？」

「翼から聞いた」

「翼様ああああ!?!」

「ああ、ごめん」

思わず絶叫する夏凜。

しかし気を取り直して、話がある方向へもって行く夏凜。

「それよりも兄貴、さっき、先々代勇者って……」

「あ、そういえば」

友奈が思い出したかのように呟く。

「……ああ、確かに俺は勇者だった」

春信の言葉に、一同は驚愕する。

「だが、今となってはそれはもう関係無い事だ。今の俺は大赦役人の三好晴信だ」

「……そう」

「ただ、一つだけ言わせてもらおうとすれば」

春信は、夏凜を指さす。

「お前の使う勇者システムは、元々は俺のものだ」

「は……はああああああ!?!」

思わず夏凜は自身の端末を取り出す。

「俺から始まり、三ノ輪に行き、そして最後がお前だ」

「そうだったのか、知らなかった」

銀はあつけらかなとした様子で興味深そうに夏凜の持つ端末を覗く。

「これが……兄貴の……!?!」

一方で夏凜はわなわなと震えていた。

「………冗談よね?」

「嘘を言っでどうする?」

「………」

もはや何も言えない夏凜。

しかし、春信はそんな夏凜をおいて翼の方を見る。

「………」

「? なんですか? 晴信さん?」

翼は、春信がじつところこちらを見てくることに、思わず首を傾げる。

「壁の上に東郷美森が……鷲尾須美がいる」

「え………」

翼だけでなく、その場にいる全ての者が呆気にとられる。

「翼、もしお前が、鷲尾の事を愛しているというのなら、お前は、行くべきだ」

「………須美ちゃんが、何かをしようとしていると言いたいんですか?」

「そうだ。おそらく、最悪の形で——」

突如として、その場にいる全員の携帯から、けたたましい程のブザー音が響く。

「な、何?!」

「これは……!?!」

夏凜は思わず画面を見る。

「・・・何よこれ」

そこには、こう書かれていた。

『特別警戒警報』

「・・・ついにやりやがったか」

何故か、おそらくは止まっている筈の世界で動いている春信が眩く。

「兄貴!?何か知ってるの!?!」

「・・・東郷美森が壁を破壊しやがった」

「な・・・!?!」

それに一同が絶句する。

「須美ちゃん・・・」

「須美の奴・・・!」

翼と銀は、悔しそうに顔を歪める。

きっと、それは想定したくもなかった事だから。

「どうして東郷が・・・」

「東郷は、昨日、園子と面会していた。おそらく、その時に何か教えられたのだろう」

光が迫る。

「そんな、どうして・・・」

友奈が、信じられないとでも言うような表情をしていた。

光が迫る中、春信が叫ぶ。

「夏凜ッ!」

「!?!」

「その勇者システムには、満開以外に、もう一つの機能がある!」

「もう一つの機能!?!」

「その力は、きつとお前の仲間を守るのに役立つはずだ!」

春信は、言う。

「俺を超えたいなら、仲間を守り通せ。それが、俺が唯一出来なかった事だ」

そして、勇者たちは光に包まれた。

糾弾

樹海化した世界に、翼、夏凜、友奈、樹、風、剛、銀の七人は立っていた。

真つ先に、夏凜は自らの端末のレーダーで敵の数を確認した。そして、その顔を蒼白にする。

「何よこの数……」

無数の点が、画面を埋め尽くしていた。

「星屑……バーテックスの成り損ないか……」

翼は何かを知っているかのように呟く。

「星屑……?」

「星屑というのは、いわばバーテックスの素のようなものです。バーテックスは、融合する事で進化を促し、強くなるんです。この間、レオや他のバーテックスが融合したのが良い例です」

「融合する事で進化……」

剛がその言葉を反芻する。

しかし、それよりも友奈は声をあげた。

「そんな事より、東郷さんの所へ行かないと!」

「あ、友奈!?!」

友奈が、他の者の制止も効かずに飛んでいく。

「くっ、行きましよう!」

それに全員が頷く。

そして、友奈の後を追おうとした所。

「『^{ヘブンズ・カタストロフ}天上より降り注ぐ裁きの雨』ツ!!」

『ツ!?!』

突如として上空から矢の雨が降り注ぐ。

「避けるオオオオオオオオツ!!」

翼の絶叫。

全員がすぐさま根の下に回避する。

「これは、佐奈さんの……!?!」

一定の範囲内を一掃する、佐奈の大技。

これが降り注いできたという事は――

「もう来たのか……!」

やがて収まる矢の雨。

「今出て行けば、佐奈さんの格好の的……」

「東郷さん!」

「あ!友奈!」

「!」

友奈が、躊躇いも無しに飛び出し、夏凜がその後を追う。

「友奈ちゃん……!」

「行け!翼!」

「銀ちゃん!」

後ろで銀が叫ぶ。

「ここはアタシたちが食い止める!だからお前は須美を止めてこい!」

「銀ちゃん……わかった。ここは任せる!」

「おう!任された!」

三郎の力を使い、飛ぶ翼。

「……さて」

銀は、今こちらに向かってきている敵を見据える。

「義姉^{ねえ}さん、覚悟はいいかい?」

「ええ……ん?待つて、義姉さん!」

「だって、兄貴と結婚するんだろ?」

「待つて!なんで結婚を前提しているの!」

突然の事で動揺している風。

「そうだぞ銀」

「あ、剛……」

「そう呼ぶのは結婚してからだ」

「なんで!」

おかしな事言い合う三ノ輪兄妹に思わず混乱する風。

それに、樹が笑う。

「樹!アンタも笑わない!」

「フルフル

「え？どういわれても無理？どういう事よ！」

もはや茶番と化している会話。

だが、それで無駄な緊張は解けた。

「良かった、大丈夫それで」

銀が、安心したように笑う。

ふと、樹が片手の指を四本立てる。

「ん？アタシたちは四人だけど大丈夫なのかって？ああ、その点についてはもう一人追加で来る筈だから……」

その時、銀の背後に金紗の神をなびかせて降り立つ者がいた。

「……随分早い到着じゃん」

「ふっふっふ、こう見えて、体がうずうずしてるんよ」

「須美を差し向けておいて、よく言えるよな」

「なんのことかな」

その人物は、実に柔和な話し方で、この緊張した空気をほぐしている。

包帯だらけの体ではあるが、その少女は、なんでもないように立っている。

「紹介するよ兄貴。アタシの友達の」

「乃木園子です」

園子は手を振ってそう答える。

「アンタが、東郷の言ってた……」

風は、園子を不思議そうに見る。

「一応味方だから、安心してくださいね」

「まあ、剛の妹の友達なものね」

風は深くは追及はしなかった。

「さあてつとー！」

銀は双戦斧を顕現させる。

それに呼応するように、風は大剣を、剛は巨大戦槌、樹は腕輪、園子は槍を顕現させる。

その先には、五人の敵たち。

加賀弘、車田真斗、針目美紀、阿室佐奈、稲成幸奈、そして、八神翔琉。

「……園子、二人任せられるか？」

「了解。そつちも頑張つてね」

二人は囁き合う。

「五人……？」

「あれれ、他の人たちは？」

「一人不在、他四人は壁に向かったとみていいな」

弘と美紀は首を傾げ、佐奈は冷静に状況を判断する。

「関係無いな」

だが、翔琉は両手の双剣の柄を握りしめる。

「あれは排除対象だ。やる事は変わらない」

「そうね」

幸奈も、手甲を打ち鳴らす。

「どちらにしろ、殺す」

全員が、それぞれの武器を構える。

双方が対峙する。

そしてどちらともなく、激突した。

結城友奈との出会いは、かつての記憶を失い、路頭に迷いに、不安を胸に抱えていた時に、引越した先で、隣同士として、彼女が挨拶に来てくれた時だった。

東郷美森にとって、彼女は、未だ記憶を失った状況に慣れていない自分には、まさに救いだった。

屈託なく、自分にその好意を向けてくれる、唯一の親友。

中学に上がった時に、美森と友奈は、自分たちの教室で、ある人物に出会った。

友奈の隣の席に座り、いつも素っ気ない態度を取る、不道千景という男だった。

後に、彼は自分の故郷で虐められていたと知るのだが、当時、美森は彼の事が苦手だったと覚えている。

部活動をどれにするか悩んでいた時、犬吠埼風という先輩から、勇者部へと勧誘された。

友奈は乗り気で、美森も、そんな彼女についていく事にした。

思いのほか楽しく、他人の困っている事を勇んでする、という事は、なかなか心地良いものだった。

勇者部五箇条も、この時考えたものだ。

そのうち、千景が機械修理に強い事が分かり、さらに、ある事件を通して友奈が彼の入部を強く推し、彼も入部する事になった。機械担当が二人になったお陰で、とても楽になったと思う。

その一年後、風の妹である樹が入部してきた。

その時、得意のマジックで歓迎した事を覚えている。

色々な事があった。

沢山の人たちが困っているのを助けた。

沢山の人たちの笑顔を見た。
それを見るのが、とても嬉しかった。

だが、そんな日常は長くは続かず、突如として、神樹の勇者としてバーテックスと戦うハメになった。

それからは、勇者部としての活動をしつつ、バーテックスと戦う事になった。

変わった事もあった。

三ノ輪剛、三好夏凜、六道翼が勇者部に入った。

新たな仲間と共に、強大な敵を倒した。

満開を、使ってしまった。

もしかしたら、知らなければ、良かったのかもしれない。

オフィウクスとの戦いの後、乃木園子と対峙した時、園子から告げ

られた、勇者の真実。

そして、結城友奈が一回目の満開で、失った、心臓の機能。

その時はあまりにもショックだった。

その部分は、人間として失ってはいけないものであり、誰よりも満開の危険性と勇者の真実に気付く事の出来るものだ。

人間は、心臓というエンジンが動く事で生きていられる。

だが、それが動いていないという事は、それはもはや死んでいるも同然と言える。

つまり、友奈は、勇者は死なないという事に気付いているという事になる。

友奈の性格上、その事は決して言わないというのは目に見えてい

る。
だが、それでも、そうであっても、言つて欲しかった。
友達と言うなら、少しは相談して欲しかった。

それから数日、美森は、ある事をした。

切腹、首吊り、飛び降り、服毒、溺死……。

ありとあらゆる、自殺を試した。

しかし、その全てを、ことごとく精霊に阻止された。

端末の電池が切れていようが関係が無い。

否が応でも、勇者を生かす。

どんな事であろうとも、勇者を生かす。

それが、精霊の存在意義。

園子が言った、勇者は死ねない。それは、精霊がどんな事であろう

とも防ぐという事。

千景の使う精霊とは訳が違う。

これは一種の安全装置。

それだけを聞けば、良い事のように思えるだろう。

しかし、事態は違う。

乃木園子が言ったことは、勇者は死ねない。そして、満開の代償は戻らない。

その片方が証明されたという事は、もう片方の事も、本当の事だという事だった。

そして、美森は園子に会いに行った。

「やっぱり来てくれた〜」

包帯だらけで、微笑んでくる少女、乃木園子。

その傍らには、どういう訳か何の変哲もない刀を携えた、大赦の装束を来た、仮面の男。

「分かってたよ〜。この前は、嬉しすぎて話が飛び飛びだったけど、今度はちゃんとまとめてきたよ、わっしー……あ、東郷さんか」

「わっしーでも良いわ。記憶は飛んでるけど、その間、二年間は、私は鷺尾という名字だったのだから」

そこで、美森は傍らの男へ視線を向ける。

「あ、この人は三好春信さんって言って、私の御世話係みたいな人だよ。信用出来る人だよ」

「そう・・・でも、ごめんなさい。今回は貴方と二人きりで話したいの」

それを聞いた園子が春信へ視線を向けた。

春信は、溜息を一つ吐き、出口に向かって歩き出す。

「・・・人祓いはしといてやる」

おおよそぶつきらぼうともいうべき口調。

「ありがとうございます」

そうして園子の病室から出ていく春信。

「それじゃあ、今回はたっぷりと時間あるから、好きなだけ話し合おうか」

「ええ」

そして、美森は自らが調べたありとあらゆる事を述べた。

自分が、勇者としての適性が高かった事。

それが原因で、大赦の中で力のある『鷺尾家』に養女として入る事になった事。

美森の両親がそれに同意した事。

大橋の方で、六道翼、三ノ輪銀、乃木園子と共に、勇者の御役目についた事。

そして――満開によって、両足の機能と、記憶の一部を失った事。

「敵を殲滅できる力の代償として、体の一部を神樹様に供物として捧げる、勇者システム」

「うん。私はもつと派手にやって、今はこんな体になっちゃったけどね。つばくんの勇者システムは特殊で、満開の持続時間が私たちより

ずっと長くて、それと、満開の形態が二つある仕様になってるんだ」
「翼君の勇者システムが・・・？」

「初代勇者のうち、二人の勇者と性質が似てるから、っていう理由で、一人の勇者システムにもう一人の勇者システムを組み込んだものを使ってるからかな。そのせいで、大赦にも想像できない程ほどの力になっちゃったんだよね」

「そう・・・」

「それでね、大赦は身内だけじゃやっていけなくなったから、全国で勇者の素質を持つてる子を調べたんだよ」

「東郷の家に戻されて、両親も事実を知ってて、黙っていた」

美森の表情は険しい。

「事故で記憶喪失だと嘘までついて、引越した先が、友奈ちゃんの家
の隣だったのも、仕組みられたもの・・・」

「彼女、検査で勇者の適性が一番高かったんだって。大赦側も、彼女が
神樹様選ばれるって分かってたんだらうね」

どれもこれも、仕組みられた事。

満開した後、料理の質があがったのも、労う為でもなく、ただ、祀っ
ていただけ。

そう、全ては大赦の思惑通り——その筈だった。

「だけど、たった一つだけ、大きな誤算があった」

美森は、告げる。

『『災厄の名前を授かりし子』・・・だね』

「・・・そう」

『千景』。

その名を与えられる事は、大赦では『忌み子』を意味する。

その理由は、西暦の時代に起きた、四国の香川県丸亀市を中心とし
て、その周辺の街をも襲った未曾有の大災害。

何の前触れもなく、丸亀の街にある建物のほとんどが崩れ、木が腐
り、多くの命が失われた、未だ解明されていない、大災害。

その災害の名前は、『千景災害』。

千の景色を殺す災害、という意味で与えられたらしい。

「だけど、実際は違う」

美森は、首を横に振り、断言する。

その災害は、樹海の損傷によって引き起こされたものだという事を。

「これは、師匠せんせいから聞いた話なんだけどね、とある勇者が、傷付いた友達を守る為に、神樹様から力を奪って、バーテックスを殲滅した時に、樹海も一緒に攻撃しちゃったらしいんだ。それが、結果的に多くに人たちの命を奪う事になっちゃってね」

「そして、その人の名前も、『千景』」

だから、『千景災害』。

千景という名前の人物が引き起こした災害だから、そう呼ばれるようになった。

それが、真実。

「たぶん、ふーくんの親は知らなかったんだろうね。その名前が、災厄の名前だった事を」

「そして、千景君は、その張本人の血を引く」

「うん。神の力を奪える体質を持っているんだって」

だからこそ、千景は勇者に変身する事が出来た。神樹から力を奪い、自らの体の中にある先祖の記録を呼び起こす事で、それを可能にした。

だけど、それがいけなかった。

「神樹様の怒りは、そろそろ限界らしくてね。大赦では、早急にでもふーくんを排除したいんだよ」

「そんな・・・」

「今は、師匠せんせいや、私が抑えてるから、大きな行動には移ってないけど、これ以上、ふーくんが勇者として戦うなら、大赦は確実に実力行使に出てくる」

「——ッ！」

美森は、携帯を取り出すと、すぐさま千景に電話をかける。

しかし、千景は電話に出ない。

「く……！」

その事に、美森は悔し気に顔を歪める。

そして、項垂れる。

「どうして……こんな……」

美森の体は震えている。

それに園子は、少しの間、逡巡する。

そして、意を決したかのように、園子は、美森に告げる。

「しっかり聞いてね」

「え……？」

「……この世界の成り立ちを教えてあげる」

(ごめんね、師匠せんせい……)

園子は、告げた。

「……東郷……鷲尾は行ったぞ」

「うん。分かってる」

園子が美森に話した事。

それは、壁の外が、すでに炎の海に吞まれている事。

世界を破壊したのは、ウイルスではなく、異世界の神だという事。

そして、異世界の神の襲撃を受けたこの世界の神は、生き残った神たちだけであつまり、神樹となり、四国に結界を作った事。

外は、地獄だという事を。

「……一応、これを渡しておく」

春信は、管理していた端末を、園子の手置く。

「それがあれば、鷲尾を止められるだろう」

「大赦としての建前として、では、ね？」

「……それがあれば、いつでも逃げられるぞ」

春信は、仮面に隠れた顔で、園子を見る。

「うくん、確かに逃げられるけど……」

園子は、全十六体の精霊を一気に顕現させる。

そのどれもが、園子に懐くように体中にその体を摺り寄せる。

「ふふ……でも私は、やっぱり逃げないよ。貴方のように……最後まで戦った、貴方の様に」

「……そうか」

春信は、それだけを返す。

「ねえ、春信さん」

「なんだ？」

「もし、世界が終わるとして……その仮面を取ってくれないかな？」

「何故だ？」

真つ先に聞かれた。

「見たいから。それだけじゃダメ？」

「……なら、一つだけ言う事を聞け」

「内容によるかな？」

「……」

春信は、仮面越しにでも分かる様な不機嫌な溜息を吐き、言う。

「……もし、鷲尾が壁を破壊して、襲撃者たちが勇者たちを襲おうとしたら……勇者たちを守ってやってくれ」

それは、仲間を守る事の出来なかった、春信の唯一の、願い。これ以上、誰かが死に、それで悲しむ誰かを見たくない。

何も出来なかったと、言い訳をしたくないから。

「……分かりました」

それに、園子は承諾した。

それを聞いた春信は、仮面を外す。

「……その方が、格好良いと思うな」

「……あまり、好きじゃない」

春信は、照れたように仮面を付け直す。

それと同時に、病室の部屋が開け放たれる。

「……さて」

春信は、入って来た者達を睨み付ける。

「……どれほどこいつらに辛い思いを押し付ければ、気が済む？」

そして、現在。

壁の外の真実を知った美森は、壁を破壊した。

「生贄が……私だけならよかった……」

今思えば、何故、過去の自分はこうなる事を知っていながら戦ったのか、分からなかった。

だが、もうどうでも良い。

狙うは、こうなる事になった元凶、神樹。

そして、友奈を、心臓が止まった事で、きつと思ひ悩み、苦しめる事になった事に対する、怒りもあった。

だから、美森は、神樹を殺す。

「東郷さん！」

友奈が、美森の立つ壁に降り立つ。

「なに……してるの……?」

星屑が襲ってくる。

しかし美森は、川螢の遠隔型浮遊小型砲台——いわゆる、某機動戦士のファンネルというものを使って襲ってきた星屑を撃ち殺す。

しかしそれ以前に、他の星屑が友奈を襲う。

「セエエイッ!!」

「ボルトパンチッ！」

しかし、その星屑は夏凜と翼によって倒される。

そして、友奈の傍に降り立つ。

「……東郷さん……いや、この際、須美ちゃんと呼ばせて貰うよ。壁を壊したのは、君だね？」

翼は、あくまで、穏やかに聞いた。

「……ええ」

それを、美森は振り返って肯定した。

「壁を壊したのは……私……」

「どういう事よ東郷……アンタ、自分が何をしたか分かってるの!？」
それに真っ先に食いついたのは、夏凜。

「分かってるわ。分かってるからこそ、やらなければならないの!」

美森は、突然壁の外に向かって飛ぶ。

「東郷さん!？」

友奈と夏凜は、すぐさまその後を追う。

だが、美森の姿が突然、空中で忽然と消えた。

「え!？」

それに驚く間もなく、友奈と夏凜も壁の結界を通った。

「え……」

「なに……これ……」

そこは、まさしく、地獄だった。

無数の星屑が飛び交い、大地は炎に包まれ、それ以外、何も無かった。

それにあっけにとられる、友奈と夏凜。

「これが……世界の真実だよ」

遅れて、翼がやってくる。

「翼君……?」

「翼様……これは……」

「バーテックスは、十二体じゃ終わりじゃないんだ」

翼は、申し訳無さそうな表情で、二人を見た。

「壁の中以外は滅んだ」

「そして、世界にも、私たちにも未来はない。私たちは満開をし続けて、体の機能を失い続けて——」

背後には、いつのまにか美森がいた。

「いつか、大切な友達や、楽しかった日々の記憶も忘れて——」

美森の声は、とても震えていた。

「ボロボロになって、それでも戦い続けて、だからもうこれ以上、大切な友達を犠牲にさせないッ！」

その手に、二丁拳銃を顕現させる美森。

「勇者という生贄から解放されるためには、もうこれしか方法がないのッ！」

美森は、その銃の矛先を神樹の壁に向ける。

「ま、待って……！」

夏凜は、そんな美森を止める。だが、その声はどこか弱々しい。

「夏凜ちゃん、どうして止めるの……？」

「だ、だって、私は、大赦の勇者だから……」

「大赦は真実を隠し、貴方を道具として使ったのに……!？」

「どう……ぐ……」

それに、夏凜はよろめく。

「で、でも……！」

「分かって友奈ちゃん。もうこれ以上、友奈ちゃんや勇者部の皆が傷付いていくのを、もう見たくないの……!？」

そう、美森が涙を流しす。

「でも、そんな事したら、世界が壊れちゃうんだよ？ 沢山、人が死んじゃうんだよ？」

友奈は、なおも美森を止めようとする。

「そんなのどうでも良いよ——」

「良くないよ！まだ何も知らない人たちが暮らしてるんだよ？こんなところで諦めちゃったら駄目だよ……だってそれが——」

「勇者、だっていうの？」

突然、美森の声が物凄く低くなる。

その声は、夏凜はともかく、友奈でさえも聞いた事もない程に、怒りに満ちた声だった。そして、翼はその怒りの原因を知っていた。

「友奈ちゃんは、いつもそう。自分の事は何も考えないで、他人の事ばかり優先する。自分が傷付いても、それを良いって思ってしまう」

「と、東郷さん……?」

「その癖に、他人の事なんて何も考えてない。自分さえ良ければ良いって思ってる。誰かの気持ちも考えないで、勝手に自己満足に浸ってる」

「そ、そんな事……」

「今だって、自分の心臓が止まっている事を棚に上げて私を止めてるんでしょ?」

「ツツ!?!」

その瞬間、友奈の顔が蒼白になる。

「え……」

夏凜の表情も、驚愕に染まる。

「ど、どう……して……」

「心臓……人として生きていくために最も失ってはいけない部分を失って、満開の可能性に気付かない訳が無い。勇者の真実に気付かない訳が無い。友奈ちゃんの事だから、周りにその事を知られたくなかったんだと思うけど、それでも、誰よりも早く、その事実に向き着けたのは、千景君を覗いて、友奈ちゃんだけ」

友奈が、後ずさる。その表情を、驚愕と恐怖に染めて、血の気を失ったかのように、口を開けたまま、美森を見る。

振り返る美森、その表情は、とてもではないが、親友に向けるものではない。

否、親友だからこそ——この気持ちを抑える事は出来ない。

「友奈ちゃんだけは気付けた。だけど友奈ちゃんはそれを話さなかった。満開の代償が、体の機能だという事も、勇者は決して死ねないという事も、全部、全部分かった」

「あ……あ……」

どんどん友奈の表情が蒼白になっていく。

その理由は——凶星。

友奈は、初めから気付いていた。

友奈は嘘をつけないからこそ、表情で丸分かりだった。

「やっぱり、そうなんだね……」

「と、東郷さん……私は……」

「友奈、それ、本当なの……?」

「ツ!?!」

友奈の振り向く先。

そこには、まるで信じられないとでもいうような表情の夏凜がいた。

「満開の代償が体の機能だっていうのも……風や樹が、体の機能を失う事も、知ってたの……」

「ち、違うの夏凜ちゃん……私は……私は……」

「友奈ちゃんは、いつもそう……」

美森が、まるで断罪人のように、口を開く。

「自分だけが傷付いて、他人の事なんか何にも考えないで、そして、自分の事を棚に上げて」

「と、東郷さ……」

「呼ばないで」

「ツ……!?!」

初めての、拒絶。

それに、さらに友奈は茫然とする。

「友奈ちゃんはいつもそう。他の人の苦しみを見ないようにしない。しっかりと、向き合ってもくれもしない。そんな人に、勇者だなんて語る事も資格すらもない」

そして、美森は言い放つ。

そんな、そんな誰かの気持ちをくみ取らない、利己主義者——

「——友奈ちゃんは、勇者じゃない」

——『勇者』と呼べるわけが無かった。

「——ア、」

その瞬間、友奈の中で何かが崩壊した。
膝から崩れ落ち、がっくりとうなだれる。

「ゆ、友奈……?」

夏凜が呼びかけても、友奈は反応しない。

まるで、糸が切れた操り人形のように、動かない。

「……わ……たし……は……は……ゆうしゃ……じゃ……」

何かをブツブツと呟きだす友奈。非常に、精神が危うい方向へ現在進行形で向かって言っている。

「それは違う」

その時は、翼が、口を開く。

「翼君……?」

「……何が違うっていうの……?」

「友奈ちゃんは、確かに勇者じゃないかもしれない。名前の上でそうであっても、確かに須美ちゃんにとっては友奈ちゃんは、勇者じゃないのかもしれない」

翼は、美森にボウガンに向けた。

「だけど、それでも友奈ちゃんは誰かの為に頑張った。誰かの笑顔が見たい、知らない人の笑顔を守りたい。そう思い、頑張った事は、賞賛されない事なのか?その人を褒める事は、間違いなのか?少なくとも僕はそうは思わない。だって、誰かのために頑張る事は、決して間違いないんだから」

翼は、続ける。

「人が困っている事を勇んで助ける。それが、勇者部の五箇条以外のスローガンの筈だ。そして、そんな人たちの事を、君は、君たちは、『勇者』と呼んだんじゃないのか?」

「……それでも、友奈ちゃんは勇者じゃないわ」

「そうかもしれない。だけど、僕は違うと思う」

「ならなに?」

問いかける美森。

翼はあくまで、冷静に答える。

「……少なくとも、友奈ちゃんは夏凜ちゃんを道具と思った事は

無い」

「え……」

「出来る事なら、僕——」

その時、背後で爆発が巻き起こった。

いつの間にか、背後で構成されていたバーテックス——ヴァルゴ・バーテックスが卵型の爆弾を吐き出してきたのだ。

「くッ……夏凜ちゃんッ！友奈ちゃんをッ！」

「分かりました！」

友奈が言い終える前に、結界の中へ逃げる夏凜と友奈と翼。

「まずは避難を——」

その時、執拗なまでに追撃してきたヴァルゴが卵型の爆弾を吐き出し、夏凜と友奈を撃つ。

「きゃあああ!?!」

精霊によって防いだものの、その威力はやはりすさまじく、落下していく。

「夏凜ちゃん！友奈ちゃん！」

翼はそんな二人を助けようとするも、ヴァルゴが邪魔をしていけない。

「く……！」

翼は悔しそうに歯噛みするも、両手にボウガンを顕現させ、ヴァルゴを睨み付ける。

そして、その先にいるであろう、美森を見る。

「……須美ちゃん……」

翼は、ボウガンを構える。

スカビオサとマリーゴールド

無数の金属音が響く。

「うがああああ!!」

「オオオオツ!!」

銀と真斗が、互いの得物を振るい、互いに決定打となる一撃を入れようと振り回す。

「だあああーコイツ精神年齢ガキの癖にいつちよまえにハンマーの使い方をマスターしやがって!」

予想以上に真斗のハンマーの使い方が卓越しており、なかなか攻めあぐねている銀。

筋力はほぼ互角。

しかし骨格によって強化した膂力で、どうかかという程度で、正面から打ち合う度に、骨が軋み、その身にヒビを入れている。

「うがああああ!」

「ぐあ?」

モロに入り、双戦斧を交差させて防ぐ銀。

「くっそ・・・!」

予想以上に苦戦している事に歯噛みする銀。

「他の皆は・・・」

と、視線を向けた所。

「オラアツ!」

「ぐう!」

巨大戦槌で弘を吹き飛ばす剛。

「チイツ!」

弘が地面にレイピアを突き立てる。

その瞬間、空中に複数のレイピアが出現する。

「いけ・・・!」

そして、次の瞬間、それらのレイピアがまるで弾丸の様に射出される。

「うおわ!」

剛は思わず飛んで回避。しかし、他にセットされていたレイピアが、剛の足を貫く。

「ぐあ!？」

「兄貴!」

「大丈夫だ!致命傷じゃねえ!」

剛はあくまで大事ではないと言い張る。

だが、それでも痛いのは確かな筈だ。

「兄貴・・・」

「俺の事より、自分の事心配しやがれ!」

「!？」

いつの間にか真斗がすぐそばまでやってきていた。

その右手に持つハンマーは——電気を帯びていた。

「まずッ——」

「ううううああああ!!!」

雷撃が銀を襲う。

雷鳴が突き抜け、樹海を吹き飛ばす。

雷撃の突き抜けた先は、何も残っていない。

「や・・・った・・・」

「そういうセリフを言う時はなア——」

「!？」

「大抵やってねえんだよッ!」

銀が上空から、ブーストした戦斧を振り下ろしてくる。

真斗はあわててそれを防ぐ。

その瞬間、真斗の足元にクレーターが出来る。

「ぐ・・・うう・・・!」

「へへ、もつとやろうぜ、ガキ!」

「なま・・・いきい・・・!」

金属音が、轟く。

閃光が走る。

鮮血が舞う。

「ツ！」

樹は、痛みに顔を歪める。

「アハハ！まだ声上げないんだ？意外と我慢強いんだね？」

「・・・」

樹海の深く。巨大な根が生い茂る、光が僅かにしか差し込まない場所。

戦闘開始いきなりにここに落とされ、樹は防戦一方ともいえる戦闘に陥っていた。

また閃光が走り、今度は右太腿を斬られる。

「ツ——！」

それに、思わず膝を着く。

「・・・」

「アハハ！」

見えた。だけど、すぐに消えてどこに行ったのか分からない。

さつきから、この繰り返しだ。

斬られたらすぐに隠れられ、また現れ斬られたと思ったら、またすぐに隠れられる。

まさにヒットアンドアウェイ。

さらに、気配が一切なく、殺気も感じないので、この上なくやりにくい。

樹にとつては、あまりにもやりにくい相手だ。

真斗や弘など、姿の見える相手なら縛って拘束する事も可能だろう。

だが、この相手は実体があるはずなのに、捉える事が出来ない。

武術、ましてやスポーツもやっていない樹にとつては、こんな相手に太刀打ちできるわけが無い。

また閃光が走り、樹の右肩を斬る。

それに、また顔を歪める樹。

「アハハ！アハハ！」

笑い声が響く。

だけど、向きがさっぱりわからない。

姿の見えない敵に、しかし樹は怯えなかった。

(お姉ちゃんなら・・・諦めない・・・！)

なおも強い眼光で、姿の見えない敵を睨み付ける。

「・・・その目、気に入らないなあ」

暗殺者・・・美紀はにたりと笑う。

一方、樹の姉である風は、幸奈に足止めを喰らっていた。

「ぐうあ!？」

一撃一撃が重く、さらには速い。

風の剣が剣を振るう前に、幸奈の拳は先に風に到達してしまう。

(春信さんの場合は精霊がいてくれたから助かったけど・・・コイツの場合はそうもいかないのよねッ！)

とてもではないが敵わない。

ましてや視界の半分が使えないのでは相手の動きがよく見えない。

「ハアッ！」

「ぐうー！」

幸奈の正拳突きを大剣の腹で受け止め、たたらを踏みながら下がる風。

「・・・チツ」

短く舌打ちする幸奈。

「あーら、予定よりも時間がかかってるからイライラしちやってるとか？」

風は苦し紛れの笑みを浮かべて、挑発する。

「別に、私はさっさと千景君の所に行きたいだけよ」

「お生憎様、千景は今はいないわ」

「なら、すぐに貴方たちを殺して千景君の所へ行くわ」

たった一步で距離を縮める幸奈。

それに慌てて大剣で防御する風。

だが、それでも幸奈の怒涛のラッシュは終わらない。

どうにかその場に踏み止まって、幸奈の連打に耐え続ける風。

「ぐ・・・うう・・・！」

流石に、耐えられない。

先の戦闘で戦った春信は、勇者ではない。

だから、それほどの威力は無かった。

だけど、幸奈は違う。

全て、自分たちを殺すために作られた力だ。

だから、一撃一撃が重い。

突如として幸奈が黒い風に包まれる。

「これはッ!?」

「吹き飛ばッ!」

黒い風を纏った幸奈の拳が風を吹き飛ばす。

「うわああああ!?!」

はるか彼方へと飛ばされる風。

やがて、どこかに落下する風。

「ぐ……う……結構飛ばされた……」

落下の衝撃は全て精霊が防いだが、それでも吹き飛ばされた際の衝撃で体が痛む。

起き上がるのに、時間がかかりそうだ。

「樹……」

しかし、真っ先に心配すべきは妹の事だ。

翼の話では、樹が相手をしている美紀という少女は、相当な実力を持っていると聞く。

樹では、とてもではないが太刀打ちできない。

すぐに、加勢にいかないといけない。

大事な妹を守る為に。

その想いで立ち上がる風。

しかしその時。

「乃木園子オオオオオオオオオ—— ツッ!!!」

「!?!」

突然の怒号に、風ははっとその方向へ視線を向ける。

「今のか……佐奈……?」

確か、佐奈の相手をしていたのは……

矢が飛来する。

それを園子は槍によって迎撃する。

矢を弾き飛ばした瞬間、園子はすぐさま地面を蹴って佐奈に一直線

に突っ走る。

槍を大きく振りかぶり、目の前の敵——安室佐奈に向かってバツトをスイングするかのように薙ぐ。

それを佐奈は、飛んで回避する。

大きく下がり、佐奈は地面に手を付きながら後退する。

園子は迎撃する事無く、槍を構える。

「……何故だ」

佐奈は問う。

「何故、あの男の為に戦う！そんな体になってまで、何故戦うんだ！」

「そんなの決まってるよ。守りたいものがあるから。それだけじゃ不満？」

「その守りたいものから裏切られてもか！」

「裏切らないから大丈夫だよ」

あっつけらかんと返す園子に、佐奈は齒噛みすう。

「それよりもさ」

今度は園子が佐奈を睨み付ける。

「私としては、この間の事を謝って欲しいな、って思ってるんだけどな」

「この間……だと……？」

「うん。師匠せんせいをろくでなしって言ったこと」

殺気が充満する。

それは全て園子から発される、おおよそ中学生が発するようなものでもない殺意。

「……そうか」

だが、佐奈は——動じない。

「……あれ？」

「どうやら、我々は互いの存在を認められないらしい」

何か、様子が可笑しい。

「——あの男の意思を継ぐお前を殺さずして、何が正義かツ!!」

佐奈の手には、何かしらの毛皮が握られている。

「それは——ツ!?!」

園子の表情が驚愕へと変わる。

「何が起きようとも、どんな事になっても、お前を殺すツ！」

——それは神の怒りを纏った、神罰の獣。

「やめて！そんな事をすれば——」

——天の神より解き放たれし、その獣は、人の文明を破壊する。

「もう、遅い——ッ！」

園子の叫びは、届かない。

——天の怒りを纏いしその獣は——人の怠惰を蹂躪する。

「——討ち滅ぼせ『神ヲより解スき放オたれし神罰ノ獣皮ヲ』ッ!!!」

瞬間、佐奈に変化が起こる。

毛皮が黒く妖しく発光したかと思うと、佐奈はそれを自分の腹に叩きつけた。

次の瞬間、その毛皮はその形を闇へと変質させ、やがて佐奈の体を覆う。

そして、その闇が収まった時、そこには、『魔獣けもの』がいた。

「グルルル……」

「ッ……」

本当に獣のように四つん這いになる佐奈。
構える園子。

「……殺してやる」

瞬間、園子でさえ見切れない程の早業で、園子を吹き飛ばす。

「ぐうあ!？」

感だけでどうにか防いだものの、速い。

吹き飛ばされる最中にどうにか踏みとどまる。

「この世界を殺すにはお前は邪魔だッ！」

上から声が聞こえた。

見上げれば、そこで佐奈が数本の矢を同時につがえてこちらを狙っていた。

「くッー！」

「この世界に未来はないッ！どれほどあがいても、あの子たちが幸せになれる未来なんてありはしないんだッ！！」

駆け出し、無数の矢から逃れる園子。

立ち止まって、周囲を見渡して佐奈を探そうとする。

だが、それよりも速く、佐奈が、園子の肩に喰らいつく。

「ぐあー!？」

「グルルルッ!!」

「ッ・・・ただ世界を壊すために、全てを捨てるっていうの・・・!？」
その目は異様なほどに集束され凝縮された憎しみが込められていた。

それほどまでに、あの日、可愛がっていた子供たちを殺された事が憎かったのか。

だが、彼女にこの世界を殺す事にここまでの執着を見せるように、園子にだって譲れないものがある。

「勇者を舐めるな——安室佐奈ッ！」

佐奈の髪を掴んで前方に叩きつける。

そのまま何度かバウンドするも、すぐさま四つん這いのまま態勢を立て直す。

「二目連ッー！」

園子のすぐそばに小さな竜が現れる。

その瞬間、園子の足元で小さな空気が爆発し、園子を一気に佐奈へと接近させる。

「ヤアッー！」

「ぐう!？」

そのまま横に薙いで吹き飛ばす。

しかし斬撃は佐奈は弓によって防がれている。

「ッ！乃木園子オオオオオオオオ——ッ!!!」

佐奈の絶叫。

それと同時に、つがえた無数の矢が放たれる。

「ハアアアアアッ!!!」

園子は、その矢を直撃弾のみを叩き落とし、佐奈に突っ込む。

二つの固い意志が激突する。

「……ん」

目を覚ます夏凜。

体は、それほど痛んではない。

精霊のお陰で、どうにか落下のダメージは防げたようだ。

「く……」

起き上がり、周囲を探す。

そこは、樹海の深く。

どうやら、かなり深い所まで落ちたようだ。

さらに、変身も解除されている。が、端末はある。

「すぐに戻らないと……って友奈はどこ？」

ふと、夏凜は自分が抱えていた友奈を探す。

存外、そこまで時間はかからなかった。

大きな根の背をもたれて座っている友奈を見つけ、駆け寄る夏凜。

「友奈！」

呼びかけても返事がない。

「端末は持っているわね。だったらすぐに変身して、翼様の援護に――」

「むただだよ……」

「は……?」

「どうせ、なにもできないよ……」

「アンタ、何を言って……」

友奈の声が、今までに無い程に弱々しい。

それに困惑するなか、夏凜は、友奈の右手に握られている端末を見た。

「ゆうしやに……へんしんできないんだ……」

『勇者の精神状態が安定しない為、神樹との霊的回路を生成できません』

「な……」

「東郷さんのいった通りだ……わたしは、勇者じゃない……ゆうしやにすらなれない……もう、つかれたよ……」

誰かを騙し続ける事に。

「友奈……」

「夏凜ちゃん……わたしの事はいいから……さきに……行って……」

「何をいつてるの!?そんな事できるわけ」

「おねがい……もうこれいじょう……わたしにみじめなおもいをさせないで……!」

「ッ……」

顔をあげた友奈の眼には、生気が抜けていた。

そして、今にも壊れてしまいそうな程に、その目は、ガラスのように、まるで魂が抜かれたかのように透き通っていた。

「無様だな」

「ッ!?!」

突然、背後から声が聞こえた。

「・・・最悪」

藍色のロングコートを着て、その両手に一本づつ、西洋長剣が握られていた。

「八神翔琉・・・」

「何があつたが、知らんが、好都合だ。ここで死ね」
剣を向けてくる。

「友奈、逃げなさい」

「やだ」

即答。

「これいじょう、いやなおもいをしたくないよ」

「何馬鹿な事を言つてんのよ」

「まつとうなことだとおもうよ・・・だって、わたし、もうゆうしやじゃないんだから・・・」

まるで生気がない。

本当に魂が抜かれたかのように、友奈の声に覇気が感じられない。

「そんなに死にたいなら、望み通り殺してやる」

翔琉が地面を蹴り、友奈に凶刃を振りかざす。

その凶刃が、友奈の体を切り裂く——事は無かった。

金属音が響き、衝撃波が空気を震わせる。

「ッ・・・」

「貴様・・・」

「夏凜ちゃん・・・？」

夏凜が、ギリギリの所で変身して、翔琉の一撃を防いだのだ。

刀を友奈の前にかざし、両手で一本の刀を持ち、どうにか翔琉の一撃を防いでいた。

「せ・・・ええいッ！」

「!？」

片手と両手、力の差は歴然だろう。

夏凜は翔琉の剣を弾き、すぐさま刀から離れた片手でもう一本の刀を抜き、翔琉に斬りかかる。

翔琉はその一撃を避け、後退、構えて夏凜を睨み付ける。

「夏凜ちゃん・・・どうして?」

「どうして・・・ですって?」

夏凜は、友奈を見ず、翔琉から目を離さずに言い放つ。

「東郷が泣いていたからよ」

「え・・・」

結界の中へ逃げ帰る瞬間、夏凜は見た。

東郷の頬に、煌く何かを見たのを。

「アタシはね、東郷がアンタに言った事は、全部アンタを自分から遠ざける為の嘘だと思うのよね。だって、親友に酷い事を言う時ってさ、何か理由があつて、とても辛い事だと思うの」

これは、ただただ兄を超えたいがために努力してきた、友達というもの知らなかった夏凜の客観的視点。

しかし、勇者部として活動している中で、感じた事を、夏凜は胸に抱いて友奈に言う。

「だって、巻き込みたくないでしょ?その親友が傷付く事が嫌で、その親友の笑顔が消えるのが怖くて。だから、酷い事を言う時は、友達の事を思っていて、そして、辛い思いをさせてしまう事に、心が痛んでしまう。今まで友達のいなかったアタシに言えた義理じゃないけど、断言するわ」

夏凜にとつて、初めての友達。

兄に憧れを、そして、今、風前の灯火となつている友達へ、夏凜は、エールを送る。

「東郷は、本心を言っていない」

それに、友奈を目を見開く。

「東郷は、翼様が止める。こんな事言った後で悪いけど、東郷を止める役目は翼様にあると思。だけど、まずは真っ先に謝りに行きなさい。アンタが満開の代償の事に気付いていた事含めて、まとめて謝り倒しなさい!だから立て!生きて謝れ!その為に、立って走れ!」

夏凜は友奈を叱咤する。

誰かが傷付くのは苦しい。

誰かが傷付くのは嫌だ。

それは、分かる。

だって、今、友達が傷付いた姿を見るのは、とても苦しいから。

「わ、わたし……は……」

「迷っても良い！見つからなくても良い！だけど謝りなさい！東郷に、そして勇者部全員にツ！そして、頼りなさい！アンタが気付かせてくれたように、アンタは一人じゃないんだからツ！」

「喚くな」

翔琉が斬りかかる。

夏凜はそれを防ぎ、叫ぶ。

「だから立て！アンタがそれを望んでるなら走れ！走れえええええ！！」

「ツ!!」

その瞬間、友奈は立ち上がり、走り出す。

「チツ！」

「行かせるか！」

追いかけてようとする翔琉を、夏凜が立ち塞がる。

「そうか、なら、お前から殺してやるツ！」

「やれるもんならやってみろオ！」

剣劇が錯綜する。

「ハアツ……ハアツ……ハアツ……!!!」

走る友奈。

夏凜に言われるがままに、走っている訳だが、友奈自身、何がなん

だかわからなくなっていた。

「あ……」

つまずき、無様に地面に体を投げ出し、転ぶ友奈。

「うう……」

倒れた衝撃と擦れた事によって、体のあちこちが痛む。

だが、立ち上がれない程ではない。

しかし友奈は立ち上がらない。

何故なら、分からないからだ。

美森に言われた事。そして、夏凜に言われた事。

この、相對する二つの言葉に、友奈の心はこれまでにない程にぐちゃぐちゃになっていた。

美森によって自分の信念が砕かれた。

確かに、自分は、一度目の満開で自身の心臓が止まり、そして、満開によって失われるものと、勇者は決して死ねない事に気付いてしまった。

そこまで感は鋭くないと思っていたが、今回ばかりは気付いてしまった。

だけど、言えなかった。

話す事によって、余計な心配をかけたくなかった。というのが大きい理由だが、それ以前に、それで美森が負い目を感じてしまう事が、何より嫌だった。

さらに、勇者部を作った風も傷付けてしまうかもしれない。

それが嫌で黙っていた。

だけど、いつか分かってしまう事も、分かっていた。

友奈は、例えそうであっても、誰もが諦めずに一緒に戦ってくれると、そう思っていた。

だけど、現実はそのよう上手くはいかなかった。

風が、現実には耐え切れず暴走してしまった。

それを知った時、友奈は頭をハンマーで殴られたような衝撃を受けた。

何故、そんな事になったのか。何故、そんな事をしたのか。

幸い、夏凜の兄である春信のお陰で、大事には至らなかった。

だが、それに立て続けて、美森が壁を破壊した。

それを説得によって止めようと思った。だけど、逆に自分の信念を叩き潰されてしまった。

まさか、親友から勇者である自分を否定されるなんて、思ってもみなかったのだ。

だから、友奈は一度壊れた。

そして、何もかもが嫌になった。

自分がここまで心が変わりやすい性格なんて思わなかったが、そんな事よりも、美森に自分を否定された事が、何よりもショックだった。どうせ世界が壊れるなら、このまま死んだほうがマシだと、本気で

思った。

だが、夏凜が言ったことで、その決意さえも揺らいだ。

美森が言ったことは、本心じゃない。

そして、自分を遠ざける為の、ただの演技。

自分は、友奈を撃てないから、遠ざける為に、そんな事を言った。親友を、傷つける事になっても、それを成し遂げたいのか。

本当は、傷付けたくない。

だけど、これ以上苦しめたくもない。

だから、神樹を殺して、全部終わらせる。

死んでしまえば、全て無かった事に出来るのを良い事に、そんな事をしたのか。

だったら止めなければならぬ。

その為に、友奈は、勇者に変身しようとする。

だが、出来ない。

出てくるメッセージによって、勇者に変身する事を拒否される。

「どうして……」

美森が言ったこと。

夏凜が言ったこと。

この二つが、友奈を苦しめる。

「やだよ……もうやだよ……」

苦しい。苦しい。考えたくない。だけど考えてしまう。

「助けて・・・千景君・・・」

友奈は、その場で丸くなり、ただ一人孤独に助けを求めた。

灼熱の大地。

いつ見ても、この光景はおぞましいものだった。

その世界を、我がもので跋扈はっこするのは、人類の天敵『バーテックス』。

その正体は、異世界の神より、新世界創造の為に作られた、地上に存在する全ての生を滅ぼす、神の尖兵。

そんなバーテックスたちが狙うのは、唯一残っている人類の生存圏である、四国にある神樹。

その神樹さえ殺せれば、全てが終わり、もう、誰も苦しまなくて済む。

「もう、誰も・・・」

美森は、そう呟くも、突如、彼女の頭を襲った頭痛に顔をしかめ、片手で額を抑える。

「うっ・・・」

その時、美森は、先ほどの友奈の顔を思い出す。

「友奈ちゃん……」

全てを否定され、絶望に染まったかのような表情。

それが、美森の心を締め付ける。

「……ごめんね」

本当は、あんな事言いたくはなかった。

だが、友奈はどんな事があっても、自分のする事を全力で止めようとしてくる。

ならば、確実な手段でその心を折る必要があった。

その事に、後悔はない。

そう、その事には、確かに見切りをつけた筈だった。

「なのに……なんで、こんなに頭と胸が痛いのに……!?!」

狙撃銃を落とし、両手で、頭と胸を抑える。

それと同時に、美森の頭の中を、いくつもの言葉が反芻される。

『役立たず』『勇者失格』『友達を守れない』『頑固者』『小心者』『結局それしか出来ない』『友達を持つ事なんて許されない』『死んでしまえばいい』『彼の愛を受ける資格なんて無い』『勇者なんてやめてしまえ』『忘れん坊』『薄情者』『何も知らない』『消えろ』——

「うるさい……うるさいうるさいうるさいうるさいうるさいッ!!!」

頭が痛い。頭の中の言葉がうるさい。うるさい。黙れ。語り掛けてくるな。私の問題だ。これは私が決めた事だ。だから話しかけてくるな。消えろ。消えろ消えろ消えろ——

「須美ちゃんッ!」

「!?!」

突如として聞こえた声に、美森は顔をあげる。

「翼君……?」

何故彼がここに? いや、それ以前に、あのヴァルゴはどうした?

まさか、たった一人で倒してきたと言うのか。

「ヴァルゴなんて格下相手に僕が負ける筈がないだろう?」

翼は見透かしたように美森に言う。

そして、翼は彼女に歩み寄る。

——『近づけるな』

「い、こないでー」

美森は、思わず叫ぶ。

それに翼は一瞬立ち止まるも、それでも歩みを止めない。

「……須美ちゃん。もうやめよう。これ以上は、君を苦しめるだけだ」

「だめ……来ないで……来ないで……」

そうでなければ、決意が揺らいでしまう。

貴方の声だけは、私の心に響いてしまうから。

「世界を壊せば、確かに、全部終わるだろうね。だけど、それじゃあ、この世界は何の為に今日まで生き続けたんだ？何人もの勇者が戦った。何人もの勇者が死んだ。だけど、どの勇者も、いつか世界を取り戻してくれると信じて戦ってきたんだ。君は忘れてしまったかもしれないけど、僕らの師匠せんせい……足柄辰巳さんが、三百年生きてきた意味がなくなってしまう。僕は、それが嫌だ。だから、僕は君を止める！」

あとずさる美森に、とうとう翼が追いつき、その手を掴む。

「だから、もうやめよう。まだ、戻れる」

真っ直ぐに、美森を見る。

それに、美森は啞然としてしまう。

どうして、彼はここまで、自分の為に必死になるのか。

真っ直ぐこっちを見てくれるのか。

「……っば」

『やめるのか？』

その言葉が、脳内に響き、美森は翼を突き飛ばす。

「!?」

「ごめんなさい……もう、止まらないの！」

突如として、美森の体を眩い光を覆う。

「これはまさか……!?」

その光が収まる頃には、美森は、巨大な戦艦の上に乗っていた。『満開』だ。

「須美ちゃん．．．!?!」

「ごめんなさい．．．消えて」

美森の乗る戦艦の砲門が全て翼に向けられる。

そして、暴力的なまでの威力の砲撃が放たれる。

それを回避した翼だが、翼が立っていた場所が爆発し、その風圧によつて翼は吹き飛ばされる。

「ぐうああああ!?!」

三郎の能力でどうにか空中に踏み止まるが、そのような距離を吹き飛ばされた。

「須美ちゃん．．．!?!」

そして、翼は目を見張る。

目の前に、復活したバーテックスが、結界内に入って来たからだ。それも一体ではない。

サジタリウス、スコープオ、ピスケス、キャンサー、カプリコーン、タウラス、レオ。

計七体のバーテックスがそこに立っていた。

さらには星屑も文字通り無数にいる。

ついでにいつて、他の者は全員襲撃者やらの相手をしており、援護に出来ない。

「僕一人でやれ．．．てか．．．」

思わず苦笑いを浮かべる翼。

その中に、翼は満開して戦艦に乗る美森の姿を認める。

「須美ちゃん．．．」

翼は、その表情が、とても暗い事に気付く。

「．．．スウー、ハアー．．．」

翼は、一度深呼吸をする。

「．．．腹くくるか」

翼は、自分の満開ゲージが満タンだという事を確認し、そして、叫ぶ。

『満開』ッ!!!」

その瞬間、翼を眩い光が包み、その姿を変化させる。

それは、全てを守る、不朽の楯。
左右に巨大な楯を背負い、翼は敵を見据える。

「止めるよ……須美ちゃんツ!!」

翼は、両手のボウガンを構えて、敵軍に突撃する――。

おのおの
各々がそれぞれの戦いを始めた頃。

その戦いを遠くから傍観する者がいた。

「ふうん……まさか壁を壊すだなんて、盲点だったわ」

女性、そして長身。

黒い装束を身に纏い、頭からは、怪しい光を放つ紫色のリングを浮かべ、空中を浮遊していた。

「でもまあ、これで、あの方の悲願が達成される」

女性の顔に、笑みは無い。

「勝手で悪いけど、この世界は一度滅んでもらうわよ……」
女性は、激戦区で戦う仲間を見守る。

ゴールデン・ブライト・バリスタ

「オオオオオッ!!!」

絶叫する翼。

サジタリウス、レオから放たれる矢や炎弾を楯によって防ぎ、ボウガンで攻撃する。

だがその横からスコープピオがその尾針を翼を串刺しにしようと突いてくる。

「喰らうかッ!!」

翼はそれを楯によって逸らし、右拳を握りしめ、そのままスコープオへ突っ込む。

「ボルトパンチッ!!」

そのまま強力な一撃をスコープピオの顔面らしき部分に叩き付ける。スコープピオは、その威力に態勢を崩す。

その翼に向かって、今度はキャンサーが反射板を操作して翼を叩き潰そうとする。

「甘いッ!!」

しかし翼はそれを楯によって一度弾いて、飛び上がって回避する。そしてすぐさま次の敵へ突っ走る。

「ぐう?」

その途端、タウラスが耐えがたい程の怪音波を発して翼を動きを止めようとするも、すぐさま翼の放った矢によって止められる。

「うるさいんだよ・・・!」

そのまま目の前のカプリコーンへ蹴りを入れる。

そして左手のボウガンをカプリコーンへ向け、連続して射出する。

「うおおおおおおおおおおおおおおおッッッ!!!」

絶叫して力の限り連射しまくる。

だが、そこへピスケスが海面から現れ、翼へ突撃してくる。

「ッ!!!」

翼は、カプリコーンから離れてその突撃を回避する。

だが、そこへスコープピオの尾が迫り、薙ぎ払うかのように翼を吹き

飛ばす。

「ぐうッ!?」

ギリギリの所で楯で防いだものの、吹き飛ばされた事には変わりはない。

そこへレオがあらかじめ用意していたいくつかの炎球を翼に向かって一齐に放つ。

『神屋楯比売』ッ!!!」

叫び、翼の目の前に青白い膜のようなものが出現、それが炎球全てを防ぐ。

「ハア・・・ハア・・・ッ!!!」

翼の満開稼働時間は、他の者と比べて異常に長い。

翼自身の根気の問題か、あるいは彼の特異な勇者システムの所為か。

それは分からない。だが、翼はまだ一回程度の満開で、バーテックス七体を相手取っている。

ボウガンに力を収束させ放ち、バーテックスに一体を吹き飛ばし、されど他のバーテックスが阻止、あるいは道連れにするかのように横から翼へ攻撃をしてくる。

一言で言って攻めあぐねている。

翼の満開は、他の者とは違い、防御に特化している。

攻撃力も多少強化されたとはいえ、敵を一撃で屠るには至らない。まさに八方塞がりだ。

だが、それでも翼は戦っている。

その事実が、美森をさらに苦しめていた。

「どう・・・して・・・」

頭が痛い。声がうるさい。胸が苦しい。

さらに、翼の決死の抵抗。

それらが美森を苦しめていた。

「どうしてこんなに苦しいの・・・どうしてこんなに辛い・・・どうして、翼君を見ていると・・・こんなに胸が切ないの・・・?」

「お願い……消えて……」

「くッ！」

美森が主砲を乱射してくる。

翼はそれを防ぎながら回避行動に出る。

(とうとう須美ちゃんまで出たか……！)

翼は苦虫を噛み潰したかのように顔を歪める。

出来れば、他の敵全てを倒したうえで話をしたかった。

背後から、キヤンサーがその体にある鋏はさみを翼に向かって伸ばす。

「ッ!?!」

翼は、上に飛び、その鋏が翼を両断するまえに回避する。

だが、そこへ美森の砲撃が飛んでくる。それを、楯によってどうにか防ぐ。

「須美ちゃん……!」

「お願い……消えて……消えて……」

尚も乱射してくる美森。

翼はバーテックスからの攻撃からも回避しなければならぬ上に美森まで加わるとなると、相当厳しい事になる。

「消えて……消えてよ……」

「くっそお……!」

無数に飛んでくるレオとサジタリウスの炎球と矢。

そして、美森の砲弾。

それら全てを回避するのは、至難の業だ。

だが、翼はその全てを避け切っていた。

「お願い……お願いだから……」

それが、美森をどんどん追い詰めていく。

「もう、消えてよッ!!!」

翼を睨みつけるように顔をあげる美森。

その時、翼は見た。

美森が、泣いている事に。

「——ッッ!!」

それに、翼の中で何かのタガが外れた。

(馬鹿か・・・僕は・・・！)

理屈なんてもう通じない。

だが、それなら、偽りなき自分の心をぶつければ良い。
かつて、そうしたように。

翼が、彼女に想いの長けをぶつけた時のように。

突如、レオがいきなり標的を翼から美森へと移行した。

「!?」

レオが放った炎球に、翼に集中していた美森は気付かなかった。

「きゃああああ!!」

悲鳴をあげる美森。

「須美ちやあああああんツツ!!」

その瞬間、翼は美森すみに向かって突撃を開始した。

「ツ・・・!?!」

精霊のバリアによって防がれたものの、それに気付く美森すみ。

「やめて、来ないで・・・」

美森は、全ての主砲を、翼に向けて、我武者羅に撃ちまくる。

「来ないでええええええええええええええええええええええ!!」

その砲弾が、無意識であるにも関わらずに、翼の楯に全て命中する。

だが、それでも翼の楯は壊れない。どれほど強力無慈悲な砲撃を叩

き付けられようとも、翼の楯は、絶対に壊れない。

(僕は、誓ったんだ・・・！)

どれほど傷付いても良い。どれほど辛くたって良い。

(何があっても君を守ると・・・)

どんなに苦しくても、悲しくても。

(何があっても、君の幸せを願い続けると・・・！)

翼は、彼女を、決して悲しませないと——誰かを失う事で泣かせ

ないと——

(僕は、君だけを愛し続けるって——)

「そう誓ったんだあああああああああああああああああツツ

!!!」

絶叫、そして、とうとう、美森^{すみ}の戦艦に到達する。

「ひっ……」

短く、悲鳴が漏れる。

主砲を、全て楯によつて弾き、楯から自らを切り離れた。

「須美ちゃんッ!!」

美森^{すみ}は、ファンネルもどきを、翼に向かわせる。

だが、翼はそれが放たれる前に、それらを掻い潜り、そして、右手を振りかぶる。

「歯ア、食いしばれええええ!!」

そして、その拳を須美^{すみ}の顔面へと叩き付けた。

「あぐ……!?!」

戦艦の甲板へとその体を叩き付けられた美森。

「う……うう……」

痛い。まだ頭が痛む。胸が苦しい、声が、うるさい。

立ち上がらないと、彼が来る。

彼が来てしまう。

「須美ちゃん」

(ダメ、来ないで)

美森は、必死に立ち上がろうとする。

だが、殴られたせいか立ち上がる事が出来ない。

だが、優しく抱き起され、目を開ければ、そこに、翼の顔があった。

その眼は、真つすぐ美森を見ていた。

「だめ……見ないで……」

『離れる』『お前に彼に抱かれる資格なんて無いんだ』『振り払え』

「須美ちゃん」

「呼ばないで……」

『お前は須美じゃない』『何よばれている』『拒絶しろ』

翼は、美森を抱きしめた。

「……抱きしめないで……こんな……あなたの事を忘れてしまった私なんて……」

『離れろ』『離れろ』『離れろ』『拒絶しろ』『振れ』『振り払え』『遠ざけろ』『今なら隙だらけだ』『撃て』『逃げろ』『失格勇者』『お前が彼の愛を受け取る資格なんてない』——

「……それでも僕は、君を愛してる」

「……どうして？」

「君の事が好きだから」

「でも、貴方も忘れてしまいかもしれないのよ……？」

「そうかもしれない」

翼は、美森の顔を見る。

「それでも、僕はきつと君の所にいつて、何度だって同じ事を言うと思
う」

「どうしてそう言えるの？」

「どうしてかって？」

翼は、自分の胸に手を当てる。

「例え頭では忘れても、心が覚えていてるからさ」

美森は、その答えの意味が分からなかった。

「どんなに忘れても、思い出はいつだってここにある。だって、僕らが
会って、過ごした日常は、確かに存在するんだから」

どれほど忘れても、そこに在ったという事実は変わらない。

どれほど苦しくても、楽しくても、悲しくても、それら全ては、大
切な日常であり、過ぎて行った時間。

そして人は、それを『思い出』と呼ぶ。

伝えたという事実は存在しても、その事を覚えてなければ、意味が
ないのかもしれない。

だけど、その時抱いた想いだけは、どうしようもない、真実であり、
大切な、思い出の一つだ。

だから——

「だから須美ちゃん。僕は忘れられても、何度だって君に言うんだ。
そして、忘れても、何度でも君に言う」

「私は——」

なおも、何かを言おうとする美森の唇に、翼は強引に自分の唇を重ねる。

「僕は、君が好きだ。だから、僕の妻になって欲しい」

それはあの日、空に火の花が咲いた日。

六道家の男子として生まれた者が、惚れた女子に向かって言う、一切の例外無き告白。

爆炎が、舞う。

それが、翼の『神屋楯比売』によって防がれても、その音は通してしまう。しかし、二人の世界に、その音は届かない。

そして、二人の唇が離れた時、美森は言う。

「……私は、忘れたわ」

「知ってる」

「私は、役立たずだわ」

「それも知ってる」

「私は、この世界を壊そうとしたのよ？」

「そんなの関係無い。まだ取り戻せる」

「……友達にも、酷い事を言うのよ？」

「それが、その人の為だと信じてる」

「……そんな私でも、良いの？」

それに、翼は笑みを零す。

「そんな君が好きなんだ」

翼の、何の躊躇いも無い言葉に、美森の心は、形容しがたい何かに満たされ、溢れ出る。

もう、抑えられない。

「翼君！」

美森は翼の胸に飛び込む。

「苦しいよ！辛いよ！もう訳が分からないよ！何が正しくて何が間違いなのか分からないよ！体の中がぐちゃぐちゃになりそうで、胸が引き裂かれそうで、何かがぐずぐずになって崩れそうで怖いよ！大切なものがどんどん消えていきそうで怖いよ！消えるのが怖いよ！友奈ちゃんが私の事を忘れてしまうのが怖いよ！嫌だよ、もう嫌だよ！誰

かが傷ついていくのが嫌で嫌で、でも、消えて欲しく無くて、これが正しいと思っても、頭の中に声が響いてうるさくて痛くて、とてもつらいよ！だから、だから――

――翼君の事で、一杯にして！忘れさせないで！せめて、せめて翼君の事だけは忘れさせないで！」

とめどない程の涙が、両目から溢れ出る。

泣き叫び、力の限り悩みを打ち明けた。

泣いて泣いて、泣き叫んだ。

だが、バーテックスはそんな事をお構いなしに攻撃してくる。

船体が揺れる。

「ツ！私、なんて事を・・・」

美森が、改めて自分がした事の重大さに気付く。

だが、翼は立ち上がる。

「翼君・・・」

「何があろうとも、君を悪人なんかにはさせないよ」

翼は微笑み、自分の端末を取り出し、端末を操作する。

（これを使えば、僕は確実に人として生活が出来なくなる・・・）

変身ボタンをスワイプし、そこに、花のマークの何かしらのゲージを確認する。

その下には、『待機』という文字のボタンがあった。

これを押せば、もう後戻りはできない。

二年前には、この力は使わなかった。その所為で園子は体の機能の殆どを失ってしまった。そんな自分が、今更この力を使う事はおこがましい限りなのかもしれない。

だが、それでも。

（須美ちゃんの為ならば・・・！）

翼がそのボタンを押そうとした、その時、ふと翼の装束の裾を引っ張られる。

「須美ちゃん・・・？」

「……どうせ、止めても、貴方は戦うのでしよう……」
美森は、立ち上がる。

その眼に、確かな決意を込めて。

「私も戦うわ」

「でも……」

「妻は、夫を支えるもの。そして、夫の隣に立つものよ」

「え……」

「貴方が言ったんでしよう？」

美森は、恥ずかしそうに頬を赤く染める。

「あ……」

そういえばそうだった。

そう思い出すも、しかし、後悔していない。

「……後悔、しないね？」

「友奈ちゃんには、悪いけど」

「……そっか」

それを聞き、翼は、端末の画面を見る。

「……それじゃあ、行こう！」

「ええ、貴方と、一緒に！」

翼は、ボタンを押す。

すると、『待機』が『起動』へと変わる。

その瞬間、翼の体に変化が現れる。

第二ゲージ開放。

攻守反転

武装 『楯』から『弩』へ変更、換装。

精霊障壁、障壁レベルを最低レベルへ、その全てを攻撃へ転用。

性質変更 『土居球子』から『伊予島杏』へ。

霊力変更 『神屋楯比売』から『金弓箭』へと変更。

超攻撃特化型満開 『金弓箭』 起動。

防御の全てを、攻撃へと移譲し、ありとあらゆる全てを屠り撃ち抜き殲滅し尽す、超攻撃特化型の満開。

それが——翼の本当の奥の手。

「——『ゴールドデン・ブライト・パリスタ岩盤貫く黄金の弓箭』 ツ!!!」

翼の装束は、全て、白金へと変化する。

さらにその髪でさえも、白く、病的なまでに白くなる。

そして、翼と美森を守っていた楯が消え、代わりに、翼の両手に、巨大なまでの弦無しのボウガンが装着されていた。

それは、まさしく神々しいといえる程に、輝いていた。

「……綺麗……」

「そう言われると、ちよつと恥ずかしいかな」

翼は照れたように頬をかいた。

翼の満開には、ある機能が存在する。

それは自らの全てを攻撃へと転化させる、最大最強の火力を誇る、自滅すら覚悟した超攻撃特化型殲滅兵装を起動させる事だ。

防御に特化した満開『神屋楯比売』は、攻撃を捨てて敵の攻撃から神樹を守る為に作られた、城塞の役目を持っている。

だが、この満開『金弓箭』は、逆に防御を捨てた完全攻撃一点特化の満開だ。

しかし、これの発動には、満開ゲージを二つ消費する必要があるのだ。

前腕にある、巨大ボウガンとの連結部分は、回転が可能で、ボウガンの向きを腕の向きによって上下前後左右をすぐさま切り替える事が可能であり、例えば背後を取られても、すぐさま反撃が可能だという事だ。

さらに矢射出部分とは反対側にある推進力装置によって、超高速起動が可能となっている。

威力も当然、全てを滅する破壊力を持っている。

「すごい……」

「全てを攻撃に回しているからね……逆に、防御は全然ないから、用心しないと」

感嘆する美森。

これほどの力があれば、おそらく、敵の殲滅にそれほど時間はかからないだろう。

だけど、それでも美森には譲れないものがある。

（これは、消えてしまった記憶の中の私のものかもしれない。だけど、この想いは、誰がなんといおうと……本物よ！）

戦艦の状態を確認し、美森は、敵を見据える。

「……いくよ。須美ちゃん」

「……ええ」

そして、二人は敵バーテックスへと突撃を開始した。

漆黒の矢が飛来する。

それを槍の一閃で弾き飛ばす。

そのまま園子は根の上を走り、佐奈へと迫る。

だが、佐奈はなおも無数の矢を放つ。

全てが直撃弾であるそれを園子は『縄張』によつて全て叩き落とし、そのまま佐奈へ上段から槍を振り下ろす。

しかしその一撃はあろうことか躲かれ、粉塵を巻き起こす。

その一瞬、視界が封じられる中で、殺気を感じた園子は飛び上がる。その直後に数本の黒い矢が飛来、先ほどまで園子が立っていた場所を抉り、さらなる粉塵を巻き起こす。

だが、園子は上から殺気を感じて顔をあげた。目の前に、佐奈が園子の顔面めがけて左手を開いていた。

「しまッ・・・!?!」

そのまま頭を掴まれ、そのまま地面に落ちる。

頭を抑えつけられ、身動きを封じられる。

「あの、男のせいで何人の子どもが死んだア・・・」

頬になにかが落ちる。

それは涙。

まさに佐奈は、今泣いているのだ。

「あの、男のせいで・・・!」

その表情は憎しみに歪み、目からは涙を流していた。

だが、園子とて、負けられないのだ。

「う・・・あ!!」

「!?!」

佐奈の胴体を蹴り上げ、自身の頭上へと投げ飛ばしたあと立ち上がり、佐奈に向かって槍の穂先を向ける。

「鴉天狗ッ!!!」

槍の柄が伸び、佐奈に向かって一直線に突き進む。

だが、佐奈はそれを飛んで回避し、槍の上に乗ると恐ろしい速さで園子に接近する。

その左手に、恐ろしい程までに尖った爪を作つて。

槍が振れない園子。万事休すか？答えは否。

「ガアアアッ!!」

爪が園子へせまる。

「ハアアツ!!」

だが、園子はあろうこと槍を離し、カウンターで佐奈の腹に逆に蹴りを入れて吹き飛ばす。

「ぐうあ!」

吹き飛ばされ、地面を転がる佐奈。

その佐奈へ、元の長さに戻した槍を振りぬく。

「ヤアツ!」

「ぐう!」

追撃の一撃によってさらに吹き飛ばされ、地面に叩付けられて粉塵巻き起こす。

「ハア・・・ハア・・・」

体力が落ちているが故に、やはり二年前のようにはいかない。

精霊十六体を持っているとはいええ、体力の無さはどうしようもない。

「もし供物戻ったら、鍛えなおそうかな・・・」

そうぼやけた時、突如として煙が上に向かって伸びた。

「!」

それに目を見開く園子。

その、立ち上った煙の中から出てきたのは、背中に翼を生やして飛んでいる佐奈だ。

「まさか・・・肉体を無理矢理変形させてるっていうの!」

そんな自身の体を壊すような事をすれば、少なくともただでは済まない。

さらに、変形させる度に、恐ろしいまでの激痛が走るはずだ。

彼女は、それすらもいとわなまいというのか。

「天上より降り注ぐ裁きの雨ツ!!!」

さらに、佐奈は上空に向かって矢を放った。

「やばツ・・・!」

佐奈を背にして走り出す園子。

それは、真つ黒い矢の雨となって、地上にあるもの全てを破壊するかの如く、降り注ぐ。

樹海の根を屠り、破壊し、砕いていく。
やがてその雨が収まった頃。

その中で、どうにか逃げ切った園子の姿があった。
しかし、避け切れなかったのか、右肩甲骨あたりから血を流し、頬は切れ、体の各所から血によって装束が紅く汚れていく。

「ハア・・・ハア・・・」

さらに息もあがっている。

このまま押し切れれば勝てる。

佐奈は、そう思い、翼を操作して一気に園子へと接近する。
バキバキと骨が折れる音がするが関係無い。

佐奈の使用している毛皮。

それは、自身の身体能力を強化するだけでなく、自らの体を状況・環境に応じて形態変化させる事が出来るのだ。

だが、その代わりに理性を奪い、凶暴性を増すという欠点も存在する。

さらに、形態変化の際には、まるで無理矢理自らの体を動かしてはいけない方向に動かすような行為をするのと同義であり、変化の際は、全身に激痛がともなう。

だが、もはや佐奈の園子の師匠、辰巳に対する憎悪は頂点に達している為に、その自己破壊行動などおかまいなしにやっている。

だからこそ、佐奈は園子を殺す事に全力を注いでいた。

自ら、子供の未来を願う事に矛盾している事に気付いていながら、それに矛盾した行動に乗り出している。

園子は、その突撃を一撃目をバク転で回避。さらに、弓を使わず両手の爪のみで園子を追撃する佐奈。

園子は、片目だけという不利な状況にあっても、決して冷静さを失わずに、回避する。

「ガアアアッ!!」

「ッ!?!」

爪の間合いから離れた所で、佐奈が弓を使用。
一気に四本つがえ、放つ。

それを園子は、槍を使って弾き、佐奈を槍の射程にいる事を確認すると、反撃と言わんばかりに槍を振るう。

だが、佐奈はあろうことかその槍の穂先を右手で掴み、そして左手を振りかぶる。

「!?」

射程から離れている。

なのになぜ振りかぶった？

園子の疑問に答えはすぐに出た。

振りぬいた佐奈の左腕が伸びた。

「わあ!?!」

園子は顔を傾けて、その一撃をかわす。

佐奈は、まさか左腕を形態変化によって伸ばしてきたのだ。

「そんなことまで……!?!」

「殺す……絶対に殺す!」

自らの全てを捨ててまで、自分を殺したいか。

ならば結構。

それならば、こちらも全力で——叩き潰す。

「ガアアアツ!!」

「対天武術——」

二度目の伸縮攻撃。

それが園子の顔に直撃する瞬間、園子の姿が霞に消えた。

「なに……!?!」

「——『陽炎』」

突如として佐奈の顎が突き上げられる。

いつのまにか園子が懐に入り込み、蹴り上げたのだ。

さらに。

『熊倒』

強烈な張り手が佐奈の腹に入る。

「ぐふ……!?!」

「ヤアアアッ!!」

佐奈の体に、連続で園子の拳打がつきささる。

計七撃、そして最後の八撃目で、園子は大きく振りかぶる。

「対天武術『正拳』」

文字通りの正拳突きが顔面に入り、吹き飛ばされる佐奈。

だが、そのさなかに矢を放ち、園子の足を貫く。

「ぐう!？」

思わず片膝をつく園子。

(やっぱり感が鈍ってる……)

足の痛みを我慢して、園子は立ち上がる。

「死ね、乃木園子……!」

「ッ!？」

いつの間にか高台に上がっていたのか。佐奈がすでに切り札の使用準備を終えていた。

「くッ!!」

園子はすぐさま迎撃態勢に入る為に槍を構える。

だが、足が痛い。

「ツウ——!？」

まともに踏ん張れない。

すぐに治療を——

『ヘブンズ・カタストロフィ天上より降り注ぐ裁きの雨』

空から、漆黒の死の雨が降り注いでくる。

「くっ……!」

園子は全ての精霊を呼び出して、迎撃態勢に入る。

(防ぎきれるか……!)

死の雨が、そのまま降り注ごうとした、その瞬間。

どこからともなく巨大な大剣が降りぬかれ、矢のほとんどを吹き飛ばした。

「なんだと・・・!?!」

「あれは・・・!?!」

それに、驚愕する二人。

「お取込み中のところごめん。そいつアタシにやらせて」

そして、予想外過ぎる乱入者が、二人の間に入る。

「フーミン先輩・・・!?!」

「なんとも可笑しなあだ名付けてくれたわね・・・まあ良いけど」

それは、大剣をかついだ、犬吠埼風だった。

「どうしてここに・・・」

「あの千景大好きっ子に吹き飛ばされたのよ。そんな事より」

風は、園子と佐奈の間に入り、佐奈に向かって剣を向ける。

「アイツはアタシにやらせて欲しい」

「な・・・」

その言葉に、園子は動揺を隠せない。

「待つてフーミン先輩、あの人の狙いは・・・!」

「ごめん、やらせて。その代わりに、アンタは樹の所に行つてほしい

の。樹が相手してるのは、いくらなんでも相性が悪すぎるから」

本当は今すぐにも助けに行きたい。

だけど、暗殺者相手に、素人である自分が果たして助けられるのだ

ろうか？

おそらく、無理だろう。

相手は殺す事においてプロの領域にいるだろう。

そんな相手に、自分のような大雑把な者が勝てる訳がない。

だからこそ、風は園子に頼んでいるのだ。

まだ、会つて間もない相手なのに、だ。

だが、自分が好きな人の妹の幼馴染であるというのなら、信じるに

値する。

翼の話が本当なら、きっと彼女が一番頼れる。

「お願い、いって。こいつはアタシが仕留めるから」

腰を落とす風に、園子は、彼女の覚悟をくみ取る。

「……わかったよ。フーミン先輩」
背を向ける園子。

「……ありがとう」

「だけど約束して」

園子は、肩越しに、風の背中を見る。

「絶対に、生きて」

「りょーかい。任せなさい！」

当然だ。

せつかくできた恋人と、妹を、置いて逝ける訳がない。

返事を聞いた園子は、安心したかのように笑うと、端末のマップを見ながら飛ぶ。

「待てエー！」

当然、佐奈はその園子を追いかける。

だが、その佐奈の前に風が立ち塞がる。

「行かせないわよ。佐奈」

風は、隻眼で佐奈を睨みつける。

「そこをどけエー！」

「いいえ、どかないわ」

風は、剣を構える。

(佐奈、アンタはどつかで進まずに、戻るべきだったのよ)

一度、暴走した風だからこそ、分かる。

大切な者を奪われた苦しみを、そして、奪った者への憎しみを。

風は、剛や春信によって止められる事によって、正気を取り戻し、戻る事が出来た。

「邪魔をするというなら、お前も——」

だが、佐奈は違った。

止める人はいた。だけどその人の制止を振り切って、彼女は復讐の道に走った。

彼女は、自分の正義を信じるが故に、進んだのだ。

例え、どれほど墮ちようとも、どれほど捨てようとも、彼女は止まらなかったのだ。

だからこそ、風はそんな彼女を止めたかった。

これ以上、堕ちて欲しくないから。

(アタシは、樹を思うあまり、周りが見えなくなっていた。周りには、ちゃんと相談に乗ってくれる皆がいてくれたのに、アタシは、それすらも忘れて暴走してしまった・・・。だけど、もう踏み外さない)

勝てるかどうかわからない。

生きてるかどうかわからない。

だが、全力で、必死に、醜く、死に抗おう。

(アンタにも、気付かせてあげるわ)

「——悪いわね」

「——ッッ!!」

その瞬間、佐奈の弓から、憎悪のこもった矢が放たれた。

それを風は回避し、駆け出す。

「行くわよ、犬神ッ!!鎌鼬ッ!!」

二匹の精霊が、答えるように頷く。

そして、風は強大な敵に突っ込む。

昇り咲き乱れる華の如く

一方で、こちらは剛と弘の戦い。

「なんでなんだよー！なんでこの世界を守ろうとするんだよ！僕の妹たちを殺したこの世界をどうして守ろうとするんだよ！こんなろくでもない世界をどうして守ろうとするんだよ！」

「うおおああ!？」

怒涛の剣戟に防戦一方になっている剛。

「ついでに何かを言いまくりながら剣を振るってくるので集中できない。」

「良いよなお前は妹が生きててさー！だというのにどうして僕の妹は死んだんだ!?! どうして妹たちが死ななければならなんだよ!! お前の妹は生きててどうして僕の妹は死んだんだよ!!」

「だあああーうるせえよー！」

剛はハンマーを振るい、弘に距離を取らせる。

「間違ってる！お前は間違ってる！どうして仕返ししないどうしてこんなろくでもない世界を守るんだよ！守っても意味ないのに！どうせこの世界は終わるのにどうして守ろうとするんだよ！」

先ほどから何かを喚いている弘。

それにとてつもないうざさを感じつつ剛は弘を見る。

加賀弘。

過去に二人の妹を強盗に殺された過去を持っている。

当時、翼から初めて説明された事では、そう聞いていた。

だが、詳しく調べていくうちに、ある事実が分かった。

その強盗は、大赦の役員だったのだ。

「大赦がなんで世界を統率してる……あんなろくでなし集団になんて統率されなきゃならない……」

当時、大赦は弘にその事を話さなかった。

いつもの秘匿主義だろう。

だが、その情報が、どこから洩れ、弘の耳に入ったのだ。

おそらく、その時からだったのだろうか。

「彼が、大赦に復讐することを考え始めたのか。」

「大赦はいつも僕らを騙してきたじゃないか……まだ幼い子供を幽閉しているのに……どうしてそんな事が許されるんだ……どうして大赦が絡むと全部許されるんだよ！」

また、斬りかかってくる。

剛は、それを防ぐ。

また、剣の嵐が剛を襲うも、剛はそれすらも防ぐ。

「おかしいんだよ……この世界は！人間は！全部全部おかしいんだよ！神樹が絡めばなんでも許されるなんてありえないんだよ！そんな事が許されて言い訳が無いんだよ!!なんでもかんでも許されるなんてそんな事あつて言い訳が無い！言い訳がないんだあああ!!」

喚きに喚き散らす弘。

「お前だつてそうだろう！妹が死んだ！それも大赦の所為でだ！大赦が勇者なんて奴押し付けなければあんなことにならなかつた筈だろう！なのはどうして——」

その時、弘の顔面に剛の拳が炸裂した。

「一緒にすんなシスコン野郎」

「ぶべらッ!」

地面を無様に転がる弘。

「さつきから聞いてればやれ復讐だの仕返しだのおかしいだの。言っておくがな、俺は例え大赦からアンタの妹は勇者のお役目についていて死んじやいました、なんて言われて怒ったも、わざわざ潰そうなんて思わねえよ」

妹を思うがあまり、周りが見えなくなり、全てを壊そうとしてしまう。

その姿は、風に似ている。

同じ、妹を持つ者。

大切な家族を持つ者。

そう、だからこそ、剛は、弘を止める。

「なんでだよ……」

「望まねえからだ。道を踏み外す事を、アイツが望む筈がねえ」

「!?」

それに目を見開く弘。

「むしろ、怒りが沸くのは何も出来なかった自分自身だ。アイツは、何も知らない人たちの為に、命を賭して戦ってたのに、俺はこのこと、その日常を生きてたんだ。妹が痛い思いをして戦ってたのに、俺だけは後ろで何も知らずに生きてたんだ。言い訳なんて聞かねえ。俺は何も出来なかった。妹の為に何もしてやれなかった。それを思うと、大赦なんて二の次なんだよ」

剛は、弘に向かって言う。

「だからもうやめようぜ。お前の妹たちってのは、これを望んだのか？」

弘は、答えない。

それに、剛は焦る事なく、待つ。

数秒の沈黙。

そして、弘は口を開いた。

「……いんだよ」

「ん？」

「もう遅いんだよッ！」

「!?」

突如として弘の体に異変が起きる。

「何が望んでるだよ！何が何も出来なかっただよ!?そんなの関係無いんだよ!!」

弘の周囲に、何かが無数に出現する。

「あれは……剣ツ!?」

それは、大小形様々な剣。

「望んでいるかだって……そんなの、僕が望んでるからに決まってるだろッ!!!」

その剣が、弘の体に纏わりつく。

まるで、鎧のように。

「壊すと言ったら壊す！妹たちのいない世界なんて生きてても無意味なんだよ！あっても無意味なんだよ！だったら殺した方がマシだ！」

壊した方がマシだ！全部全部、無くなった方がマシじゃないかあああ
あああ!!」

「うお・・・!!」

弘の周りを浮いていた剣が、全て弘に纏われる。

それはまさしく、剣の魔人だった。

『デッドマンズ・ソード
剣だらけの男』

恐ろしいまでに大量に纏われた、剣、剣、剣。

それら全てが、弘の体に纏われていた。

さらに、全てが鞘から出ている。いわば、刀身が丸出しの状態で
くつついていた。

「コイツ・・・!!」

「まずはお前から殺してやるよ!」

弘が、突撃する。

体に付けられた剣を一本引き抜き、それを剛に向かって振り抜く。

それを剛はハンマーで防ぐ。

だが、突如として弘の肩についていた剣が動き出し、まるで表面を
滑る様に剛の顔面に向かって突いてくる。

剛はそれを顔を傾げる事で避ける。

「チッ!」

弘が短く舌打ちする。すぐさま肩の鞘から抜かれた剣を空いてい
る手で引き抜き、すぐさま剛に追撃をしかける。

両手だけでなく、両足、否、体中から斬撃が飛んでくる。

「アハハハハ!!手も足も出ないだろうなッ!お前のそのハンマーさ
え封じてしまえば、お前なんか怖くないんだよッ!!!」

弘の斬撃が、剛の体にどんどん切り傷を作っていく。

「どうしたどうした!さっきの威勢はどうした!その程度か!無様だ
な!そのまま斬り刻まれて終わって——」

「うるせえよッ!!」

その瞬間、剛が左拳を振りかぶる。

それを待っていたとばかりに体中の剣をまるで針山のような状態
にする。

このまま殴れば、

殴られた方はともかく殴られた方もただでは済まない。

下手をすれば、殴った方に大きなダメージがいく。

「ハハハ……これで殴れないだろ！手も足も——」

だが、剛はそれすらお構いなしに弘の顔に殴り飛ばした。

「べぎやあ!?!」

「お前の言い分はよく分かった……だから言わせて貰うぜ」

剛の怒りは、すでに頂点に達していた。

「テメエは兄貴失格だ。一度牢屋に入れクズ野郎がツ!!」

剛は断言した。

妹の言葉に耳を傾けない奴など、兄を語る資格もない、妹と呼ぶ資格もない。

「クズ……だと……? 僕がクズだと……!?!」

弘が立ち上がる。

その顔を怒りに歪めて。

「クズなのは大赦だ！あんなゴミクズの集まりの方がクズだろ！アイツらの方が……!?!」

突如として弘の言葉が止まる。

目の前に眩い光が放たれたからだ。

「………なんでだよ」

弘は、怒りと驚愕にその身を震わせた。

「どうしてそこまでするんだよおおおおおおおおおおおおおおお
おおお!!!」

それは、『満開』。

剛は、躊躇なしに満開を発動したのだ。

「翼から聞いたがよ。満開の代償として体の機能の一部を持っていかれるんだったな……」

だが、そんな事関係無い。

自分が大好きな少女が消えてしまうなんて、何よりも怖いから。

その為なら、自分の体の機能なんて、安いものだ。

「こいよ、失格兄貴。本物の兄貴って奴を見せてやるぜ」

剛はハンマーを構える。

分服茶釜によるブースト。狒々による腕力強化。

そして満開による戦闘能力の大幅アップ。

それに対して弘は剣に対する特別な才能。

体中を様々な剣で覆った、剣山のような鎧。

「ふぎ……ふぎけるなああああああああああああ!!!」

剣と力。双方、共に、激突する。

そして、その姿は銀にも見えていた。

「ハハ……やっぱ兄貴はすげえなあ……」

その体は、所々が焦げており、装束も色んな箇所が焦げている。

あまりにも電撃を浴び過ぎた。

「なん……で……!?!」

だが、真斗は驚いていた。

「ハハ、驚いたか？アタシ、これでもウザイ程に体が丈夫だという事に定評のある女だぜ？」

片膝の状態から立ち上がる銀。

落雷を三発、放電を八発、直接電撃を五発、地面伝導電気を十二発、静電気数十回。

数えたらキリがないが、それでも銀は、立ち上がっていた。

「ただまあ、なんだ、お前がまだ全力を出していない、っていうのが原因かな？」

「ツ!?!」

「え、まさか凶星？それはそれでマジでヤバい気がするんだが……」
事実、真斗は自らの力を制限している。

真斗は自らの力の加減の仕方を知らない。故の安全装置だ。だが、その安全装置が外されれば、まずここら一帯が吹き飛ばされる。

それほどまでに、真斗の力は強すぎるのだ。

しかし制限されているとはいえ、その一撃はビルを一撃で倒壊させる事が可能だ。

だが、そうであつても目の前の少女はものともせず突っ込んでくる。

そう――

「オラアツ!!」

銀の振るつた斧が、真斗の肩に、喰い込む。

「ぎゃああああああああああ!!」

――銀は絶対に傷付かない筈の体に傷をつける事が出来るのだ。

それも、深く。

「なん・・・で・・・どうしてええええ・・・!?!」

銀は、それに応えるように、片方の斧を真斗に突きつける。

「アタシの使っている勇者システムは、西暦の時代、初代勇者の中で最強の勇者が使っていたものだ。その力が、この勇者システムの中にも残っている。その力は、お前の硬い体に傷をつける事が可能だ」

「う・・・うう・・・」

「どうする?このまま降参するか?アタシはそれでも良いけどさ」

真斗は、銀に睨まれ、動けなくなる。

精神年齢は、まだ幼い子供のまま。

動けなくなるのは当然の事だ。

(ひとまずコイツはこれぐらいで良いか。あとは兄貴の援護に・・・)

「お・・・」

「?」

ふと、真斗が何かを呟いた。

その後、真斗の体から小さなプラズマが弾ける。

「!?!」

銀は反射的に構える。

「お……おがぁぎぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁんツツ
!!!!!」
「うおわ!」

突如として上空から雷が落ちた。

「ら、落雷……!?それも自分を撃つたア!?」

突然の事に、困惑する銀。

だが、何か猛烈に嫌な予感がする。

雷によって舞い上がった土煙が収まっていくなか、銀は、空中で何か光が弾けるのを見た。

そして、中に見えたシルエットが、何かを振りかぶっている事も。

「やばッ!」

「みよるにいいいるうううう!!!」

雷鳴が、轟いた。

直線状に、雷が走り、その全てを吹き飛ばした。

「デタラメ過ぎんだろ……!」

銀が、その惨状に顔を引き攣らせる。

いくらなんでも桁外れすぎる。

その証拠に銀の骨の右腕が丸焦げになって、その形を崩されている。

「うがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」

「ッ!」

さらに、真斗の追撃。

二度目の雷撃。

銀は足に骨を纏わせ、それによって生み出された脚力によって雷撃を回避する。

だが、その一撃も直線状に根や蔓などを吹き飛ばした。

「うがぁぁぁ!!」

さらに乱射してくる。

「やっべッ!」

銀は、その猛攻を間一髪で避け続ける。

「ううう……」

「やれやれ、それがお前の本気って訳あ。兄貴の時は完全に手加減してやがったなこんちくしょう」

右腕を再構築し、ぐっぽと握ったり開いたりする。

「……しゃあない」

銀は、右手に出した戦斧を地面に突き立てる。

「師匠せんせいからは使うなって言われてたけど、使わせて貰うぜ」

銀は、目を閉じる。

そして、一度深呼吸をして、再度、覚悟を決め、叫ぶ。

それは天に逆らいし、幻想の魔獣。

空を制し、炎を選んだ、力の象徴の一体。

神々に牙を剥きし、邪悪なる竜。

討たれてもなお、その憎悪を抱き続ける、その竜の名は――

「来やがれ、ファブニールツ!!」

その瞬間、銀の背後に巨大な竜が出現する。

「!？」

真斗は、それに見開く。

その竜が、突如その体をバラバラにして、銀の体に纏われていく。

それは、初代勇者である足柄辰巳の切り札。

邪竜『ファブニール』をその身に鎧として纏い、竜の力を纏って戦う、力。

結ばれていた髪がほどけ、長い髪が風になびく。

装束の一部が消え、代わりに鎧が体に纏われる。言っておくが露出の度合いは、二の腕、腹回り、臀部、と、なかなか露出具合である。他意はない。

二つあった戦斧は、その形を一つにまとめ、一本の武骨な戦斧へと形を変える。

頭部には、竜を模したデザインの鎧が纏われ、顔部分は露出されており、その口元が吊り上がる。

「さあ、やろうぜ」

銀は、戦斧を構えて、真斗を睨み付ける。

「うううううがああああああああああ!!」

真斗が絶叫し、そのハンマーを振り下ろす。

強力な電撃が放たれる。

銀はあろうことかそれを真正面から迎撃する。

その斧に、竜の生命力を纏わせ、その電撃を霧散させる。

「ッ!?!」

「見ときな。これが大橋の勇者、三ノ輪銀様の實力だあああああああああああ!!!」

腰のスラスターから、竜の生命力を放出し、一気に加速する。

そして、銀と真斗が激突する。

「ぐあああ!?!」

背中から叩きつけられ、悶絶する夏凜。

だが、休んでいる暇は無い。

翔琉が、双剣を振るい、夏凜をさらに追撃する。

「うっあああああ!!!」

肉眼では捉えられないほどのスピードで振るわれる翔琉の剣技。

その一撃一撃は、速いだけでなく重く、夏凜の刀をどんどんへし折っていく。

その度に、夏凜の体には無数の切り傷が出来ていく。

「こっのオ!!」

そこで夏凜は刀の一本を地面に突き刺す。

次の瞬間、刀が爆発し、夏凜を後方へ吹き飛ばす。

「これで．．．!?!」

距離を取る為に爆発された刀。オマケとして翔琉を爆風で吹き飛ばそうとしたのだが、翔琉はそれを無視して突っ込んできた。

「ッ!?!」

「甘いんだよ」

怒涛の連撃。

それを夏凜は後退しながら防御し続ける。

まさに防戦一方。

(つよ．．．い．．．!?!)

おおよそ一秒五連といった所か。

一秒の間に、計五回の斬撃を翔琉は放っている。

さらに、その一撃一撃が、夏凜の両手による一撃と同等。否、速さも重さもそれ以上。

(どんな鍛え方してんのよコイツは．．．!?!)

また刀がへし折られる。

「くッ．．．!」

あまりにも翔琉の攻撃が激しすぎて、反撃が出来ない。

刀を何度もへし折られ、その度に次の刀を抜くも、その刀もすぐさま折られる。

いくら無限に取り出せるからと言っても、こうも易々とへし折られては、防げるものも防げない。

(何か……丈夫な刀……)

出血によって、意識が朦朧としてくる。

「ハアッ！」

「うわ!？」

最後の一撃で吹き飛ばされる夏凜。

たたらを踏んでどうにか踏みとどまり、猛攻が止まったが夏凜は翔琉を睨み付ける。

「……何?もう終わり?大した事ないのね?」

挑発する夏凜。

少なくとも、一分一秒でも、翔琉の意識を友奈から逸らす必要がある。

だから、自らの命を危険に晒しても、その意識を全力で反らさなければならぬ。

その為に――

「いや」

「――え?」

「もう終わりだ」

気がついたら、鮮血が宙を舞っていた。

夏凜の体には、いつの間にか深い斬り傷がいくつも出来ており、そこから血が飛び散っていた。

(いつの……まに……)

夏凜の体から力が抜ける。

数歩よろめき、やがて、前のめりに倒れていく。

「貴様のようなザコに、時間を費やした」

翔琉が、夏凜をゴミを見るような眼で一瞥した後、歩き出す。

一方で、夏凜は、ゆっくりと倒れていく。

(こんな……ところ……で……)

ぼたり、と夏凜は倒れた。

薄れゆく意識の中、目の前を血だまりが出来ていく。

(つばさ)・・・さま・・・ゆう・・・な・・・)

そこで、夏凜の意識は地面に落ちた――

兄、三好春信が初めて泣いているのを見たのは、春信が十四歳、アタシが七歳の頃だった。

その日は、兄貴の友人の葬式の日だった。

三好家は、大赦でも下の方に位置する家系であったが、兄貴の才は、他のどの大赦の役員なんかよりも、ずっとずっと優れていた。

どんな事があっても、兄貴は泣き言を言う事は無かったし、涙を流す事も無かった。

本当に、強い人だった。

それに比べて、アタシの才能は、平凡だった。

どれほど頑張っても、天上の存在のような兄に、追いつく事は無

かった。

そして弱かった。

犬に咆えられて竦みあがる。

気が弱くて高い所だと泣く。

周囲の視線が怖い。

周囲は、皆、兄貴の事を豪語してくる。兄貴を褒めてくる。兄貴を称えてくる。

その為、アタシはいつも兄貴と比べられてきた。

『お前のお兄さんはすごいんだ』『お前とは違う』『どうしてこんな春信君と同じ事が出来ないんだ』『お前は春信の妹だろ?』『出来損ない』『どうしてこの子は』『劣化コピー』『本当に春信さんの妹なの?』『こんな事も出来ないの?』『春信君には出来たんだぞ』『お前にも出来る筈だ』『血繋がってないんじゃない?』

正直に言つて、耳を塞ぎたかった。

そして叫びたかった。

アタシは兄貴じゃない。アタシはアタシ、三好夏凜だ、と。

だけど、アタシは弱かった。

まだ幼い子供にとっては、周囲の目は恐怖以外の何者でも無い。

そして、その原因となっていた兄貴も嫌いだった。

だから、いつも自分の部屋に閉じこもっていた。

閉じこもってれば、何の声も聞こえない。

兄貴を賞賛する声も、自分を蔑む声も。

何も、何も、何も――

突如として、扉が蹴破られた。

その時、アタシは恐怖で竦みあがった。

強盗?泥棒?殺人鬼?逃亡犯?

とにかく、怖いものを連想し続けた。

そして、その扉を蹴破った犯人が、兄と気付くまでは、時間はかからなかった。

兄は、部屋の隅で縮こまっているアタシを見つけると、ずかずかと

近寄ってきた。

その時、アタシには、兄貴が怖い鬼のように見えた。

もともと、父親譲りか目付きが悪く、口も悪かった兄貴。

兄貴は、アタシの目の前に立った。

怖くて、口が動かなかったのを覚えていた。

そして、兄貴はアタシの前に、何かの袋を突き出した。

『まともに食事してねえだろ、喰え』

中に入っていたのは——にぼし。

兄貴は、別ににぼしが大好きという訳じゃなかった。むしろ好きなのはプリンだ。

ただ、あまり大量には食べないアタシを見て、少ない量で十分な栄養を取れるものを持ってきてくれたらしかった。

その時は、ただ茫然としていた。

だが、毎日を過ごしていく中で、兄貴はいつも自分を気にかけてくれた。

『ここ分かんねえのか?』『俺これいらねえからやるわ』『プリンくれてやる』『怪我したのか?来い、手当してやる』『また虐められたのか?どこのどいつだ?』『降りられねえのか?仕方がねえな』『夏凜に咆えてんじやねえよ犬公がツ!!』『夏凜と俺を一緒にすんな馬鹿』『お前はお前だろうが』『胸張れ胸を』『お前は俺の妹だろうが。自信持て』『見世物じゃねえよ!』

口は悪くても、いつも優しくしてくれた。いつも守ってくれた。

だから思った。

どうしてここまでしてくれるのか。

どうしてアタシに優しくしてくれるのか。

いつまでこうしているのか。

これに兄貴はこう答えた。

『お前が情けなくて見ていらねえからだ』

『俺は他にも同じだぞ?』

『お前が一人でも大丈夫になるまで、だな』

兄貴は、そう言っただけだ。

だから、強くなろうと思った。

兄貴に心配されように、強くなろうと思った。

犬に咆えられても大丈夫なように、高い所でも泣かない様に、周囲の視線を怖がらない様に。

たくさん頑張った。沢山努力した。

そしていつか、兄貴を超えられるような強い人間になると誓った。

そして、あの日、兄貴の泣き顔を見た。

兄貴は、大赦で何かの御役目についていた事は、知っていた。

それが、どんな内容なのかは知らなかった。

だけど、その御役目の最中に、兄貴と同じ御役目についていた二人の友人が、死んだ。

アタシは、その葬儀に、同席していた。

同じ御役目についていた者の家族として、参加したのだ。

私は、正直言つて実感が沸かなかつた。

誰かが死んだ。それは分かる。

だが、それで何か想う訳じゃなかった。

ただ、淡々と葬儀を眺めているだけだった。

だが、突如として兄貴が泣き崩れた。

どうして、何故、俺だけを残して逝ってしまった。

アタシは、ただ茫然とするだけだった。

あの、どんな時でも泣く事の無かつた兄貴が、その場で、声を挙げて泣いていた。

うずくまり、泣くだけ泣いて、想いの長けを吐き出し続けていた。

その後の事は、あまり覚えていなかった。

アタシは、兄貴が泣き叫ぶ姿が、あまりにもショックで、茫然として過ぎていたからなのかもしれない。

そして翌年、兄貴は高校にあがるのと同時に、家を出て行った。

それから、アタシは努力し続けた。

兄貴を超える努力をし続けた。

そして、その三年と七ヶ月後。
大赦から、『勇者』の御役目の為の選抜をすると聞かされた。

そして――

「アタシは、勇者になった」

葬儀の場にて、夏凜は、春信と対峙していた。

「兄貴は、当然反対していた。だけどアタシはそれを知らずに、勇者の御役目の為に頑張り続けた。兄貴は、先代の勇者して、止める事が出来なかった」

夏凜は、目の前の兄に、そう言い続ける。

「兄貴は知っていた。勇者の御役目の危なさ、満開の代償、勇者の真実。兄貴は、大赦の人間として知っていた」

ただ、それでも、そうであつても。

「・・・知らなかった」

夏凜は、悔しかった。

「兄貴は、いつも完璧だった。テストだって、運動だって、剣術だって、

何もかも完璧だった。だけど、それはアタシの勝手な妄想だった。この世に、完璧な人間はいない。だって、そんな奴がいたら、ソイツはもはや人間じゃない。アタシは、心のどこかで、兄貴を人じゃないと思ってた。どんなに手を伸ばしても、届かないと諦めてた。でも、そうじゃない。兄貴だって悲しむし辛い。アタシは、それを知らなかった。知っていれば、兄貴を支える事が出来た。精一杯応援する事が出来た。例え、目標であっても、その人が辛いなら、支えたいと、そう思う筈なの」

自分の胸に手を当てる。

「でも、だからこそ、アタシは兄貴を超えたい。兄貴に出来なかった事を、アタシが成し遂げたい。兄貴がやりたかった事を、アタシは受け継ぎたい。兄貴の想いを、未来へ繋げたい！」

夏凜は、真っ直ぐに春信を見る。

それに春信は、ひとつ溜息を零し、口を開いた。

「……俺は、友達を守れなかった」

「知ってるわ」

「だが、お前なら出来る。俺は、そう信じてる。何せ」

春信は、初めて、自分の妹に笑みを向けた。いつも仏頂面な彼が。

「俺の、自慢の妹なんだからな」

その瞬間、春信の目の前に、一本の日本刀が出現する。

春信は、鞘に納められているそれを掴み、夏凜の前に差し出す。

「抜けるだろ？」

その問い、夏凜は笑って、当然と返す。

「当たり前でしょ。だってアタシは、アンタの自慢の妹なんだから！」

それを春信から受け取り、そして、その柄に手をかける。

「聞け、夏凜。その力の名前を——」

そして夏凜は、有らん限りの力で、刀を抜き放つ。

突如、翔琉の背後で、何かが爆発した。

「!?」

それに驚いて振り向き、そして驚愕する。

そこには、煤だらけの白い羽織を、赤い勇者装束の上に着て、立っている夏凜の姿があった。

(馬鹿な・・・!?)

先の連撃で確実に命を絶った筈だ。

だが、夏凜は、立っていた。

勇者の歴史において、その力を自在に使えたのは、三好春信ただ一人。

だが、今ここに、その力の担い手が再び現れた。

その名は——『昇華』。

「……」

翔琉は、ただ夏凜を睨み付けていた。

夏凜の右手には、暴力的なまでに美しい日本刀が握られている。

そして、その身に纏う装束も、上から羽織を着ていた。

何か変わったのか。何が変わったのか。

しかし翔琉にはそこは、どうでも良いのだ。

ただ、倒した筈の敵をまた倒さなければならぬという面倒くささしかなかった。

翔琉は、戦闘を楽しむ気はさらさらない。

一刻も早く、神樹を殺し、世界を終わらせたいのだ。

——こんな無意味な世界は。

ふと、そこで夏凜が動いた。

翔琉の後ろで。

「!？」

避けれたのは、もはや奇跡に等しいだろう。

前方へ飛び、夏凜の振るった強靱な一撃を躲す。

しかしその瞬間、翔琉の立っていた地面が一撃で両断された。

「なッ!？」

その威力は、あまりにも異常だった。

刀の力——ではない。

「昇華——言葉の意味としては、ある状態から遙か彼方の可能性まで飛躍する事を指すみたいだけど、この力を使用する点で、その意味は、少し違ってくる」

夏凜は言う。

「これは、アタシの使う『鬼気・修羅領域』に似ているわ。だけど、全く持って違う。これは圧縮。莫大な勇者の力を、一本の刀と体に押し込めて圧縮し、その力を限定的に開放する事で通常の数倍の力を発揮させる力よ」

力の圧縮。

自身にある神の力の全てを圧縮し、それを限定的に開放する。

言葉だけを聞けば、それほどすぐくはないように聞こえるが、実は違う。

水鉄砲の穴が、小さければ小さいほど、水がよく飛ぶのと同じ。

つまり、発揮させる力の穴を小さくすれば、その力は穴以外の所で圧縮され、その穴から爆発的なエネルギーとなって放出される。

しかし、体の中に莫大な力を圧縮するという事は、その器が無事で済む話なのだろうか？

答えは、否。

今まで、この機能を使用して無事で済んだ者は誰一人としていない。

唯一、春信だけが無傷で使えたのだ。

それは、かつて春信の師であった辰巳が推測するに、三好の家系の持つ、ある特性が関係していた。

それは――

「覚悟しなさい、八神翔琉。今アンタの目の前にいるのは、正真正銘の『鬼』と呼ばれた三好春信が妹、三好夏凜よ。そう簡単に友奈の所に行けるとは想わない事ね」

夏凜は、笑わずに告げる。

「そうか」

だが、翔琉はくだらなそうに吐き捨て、三割の力で斬りかかる。その速度は、恐ろしい程に速かった。

コンマ一秒に迫る程のスピード、肉眼では捉えられない程の速さで、夏凜と距離を詰めたのだ。

夏凜は、反応していない。

左の剣による水平斬り。直撃は必至。

(どんなにパワーアップしようが、俺には勝てない)

そう、その自信は確かにあった。

だが、次の瞬間、夏凜はその場で後ろ宙返りをして回避した。何も見ないで。

「なッ!？」

「・・・遅い」

瞬間、翔琉は猛烈に嫌な予感を感じて、左脇に右手の剣を掲げた。

その直後に重い衝撃が走った。

「ぐうあ!？」

翔琉は思いつきり吹き飛ばされ、樹海の根に叩きつけられる。

「がは・・・!？」

あり得ない程の反応速度、そして、自分を吹き飛ばす程の膂力。

それは、もう人間の領域を超えていた。

「三好家、というか、アタシたち三好兄妹の特性かしら?とある極限状態に落ちた時、全ての全神経、全感覚が異常なほどに研ぎ澄まされるらしいけど、なるほどね。そういう事」

夏凜は、脱力した。

完全な無防備な状態。

まるで、相手を挑発しているかのように。

「・・・チツ」

翔琉は、そのあからさまな誘いに乗った。

肉眼では捉えられない程のスピード。

地面を踏み碎き、夏凜に一瞬で迫る。

確実に直撃する距離と速度と角度。

夏凜は反応していない。

直撃は必至。

そう、その筈だ。

(なのになぜ——避けられる!?)

夏凜は、翔琉の背後に立っていた。

夏凜の蹴りが翔琉の背中に叩き込まれる。

「グハア!」

「これが・・・私の、三好私兄妹たちの力よ」

全神経の極限突破、それによって引き起こされる、自動回避。

感覚神経のみならず、運動神経でさえも強化された状態。

それが、彼女の体質。

無意識化でありとあらゆる行動を起こせるようになる状態。

その名は、『鬼気・極限羅刹』

翔琉が立ち上がる。

「貴様・・・!」

翔琉は、その両手の剣を握りしめる。

夏凜は、その手に持つ刀を両手で握りしめる。

「我が名は三好夏凜。先々代勇者、三好春信が妹。いざ尋常に勝負ツ
!!!」

かくして、各々の戦いが始まった。

果たして、そこに一人の少女はいた。

『風が暴走・・・？』

『急がないと！』

信頼する、先輩の暴走。

『え？勇者システムの正体と満開の代償？』

『この際だから言わせて貰うよ』

勇者システムの本当の姿、そして、満開の代償。

『友奈ちゃんは、勇者じゃない』

そして、世界の真実と、友からの辛辣な言葉。

「・・・もう、嫌だ」

少女は、全てから目を逸らし、耳を塞いでいた。

慟哭

地面は穿たれ、大地は崩され、そこは、一面更地となっていた。

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・ハア・・・ッ!!」

だが、ボロボロになり、血まみれになろうとも、それでも、犬吠埼風は諦めない。

矢が飛来する。

風は、痛む体に鞭を撃って、防御の構えに移る。

だが、その圧倒的威力に、風はいとも容易く吹き飛ばされる。

「アアアア!?!」

そのまま落下し、背中から叩きつけられる。

しかして風は立ち上がる。

「諦めろ」

そんな風に、声をかけるものが一人。

「お前に勝ち目はない。大人しく、そこで倒れている」

禍々しい姿で、こちらを見下す佐奈。

だが、風はそんな佐奈に対して、軽く笑い飛ばす。

「ははっ、諦めろ。ですって? そんなの冗談じゃないわよ」

立ち上がる風。

そして、大剣を佐奈に向ける。

「アタシは何があってもこの世界を守る。その為に、そう簡単に諦めてたまるかっての!」

走り出す風。

それに対して、佐奈は矢を複数放つ。

直撃弾を、風は大剣を使ってどうにか弾き、佐奈へ接近する。

もう何度目になるか分からない突撃。

「ハアアアアッ!!」

「ッ!?!」

だが、今度は風は大剣を巨大化させて、それを巨大化させると共に佐奈の方向へ突く。

だが、佐奈はそれをいともたやすく躲すと、そのまま大剣の上を

走って風に接近すると、風に強烈な蹴りを入れて、吹き飛ばす。

「アアアアアアツ!!」

地面を転がり、でっばりに跳ねられ、地面に伏す。

「ぐ……ううう……!?!」

胸に入った一撃で、軽く吐血する風。

その間に、佐奈は歩いてくる。

「……何故だ……」

「……?」

「何故、お前たちはこうまでして抗おうとする?この世界は終わつて
る。どれほど戦おうとも、お前たちに、この世界に未来はないという
のに……!」

風は、ここから見える、壁に開けられた穴を見る。

そこから溢れ出てくる小さなバーテックス。そして、その穴の奥に
見える、炎。

「……そう、かも……しれないわね」

風は、地面に手をつき、ぐぐつと力を入れる。

「けど……さ……もし、いつかこの戦いを終わらせられたら、それ
はやっぱ、すごい事なんじゃないのかしら?」

体はボロボロ、だけどまだ動く。

「それに、アタシは怖い。アタシの作った勇者部が、部員たちが、死ん
じやうところを見るのが怖い。友奈が死ぬ、東郷が死ぬ、千景が死ぬ、
翼が死ぬ、夏凜が死ぬ、銀が死ぬ、乃木が死ぬ……そして、樹と剛
が、死ぬ。それが堪らなく怖い。だからアタシは……」

剣は、先ほど佐奈に蹴とばされた事で手放してしまった。

だけど、剣がなかりうと、まだこの拳がある。

「戦う。どんな事を言われようとも、アタシは戦い続けるツ!!」

地面を蹴り、佐奈に殴りかかる。

「……そうか」

拳を振り上げた。その直後。

腹に重い衝撃が走る。

口から、血が吐き出される。

「げほッ!？」

「なら死ね」

吹き飛ばされる事なく、その場で数歩よろよろとする風。

「あ．．．ア．．．」

「ふん」

「ぐあ!？」

背中にさらに蹴りを入れられ、吹き飛ぶ風。

地面を転がり、さらに血を吐き出す。

「げほッ．．．(っ)ほッ．．．」

どうにか立ち上がろうとする風。

だが、そんな風の顔面に容赦無く蹴りを入れる佐奈。

蹴り上げられ、大きく仰け反る風。

さらにその腹にもう一発蹴りを入れられ、体をくの字に折れ、膝が地面から浮く。

「死ね」

今度は拳が——爪が突き立てられた。

「アア——!？」

「死ね」

そこから、拳が風を襲う。

「死ね、死ね死ね死ねシネ死ネシねしねシネシね死ね死ネしネ死ねシネシねしね死ネ死ね——」

何度も殴られ、その度に意識が途切れ、鈍痛が体中を襲う。

最後に、顔面に強烈な一撃を入れられ、また吹き飛ばされる。

声をあげる事も出来ず、無様に地面を転がる。

「う．．．うあ．．．」

それでも、風は立ち上がろうとする。

地面を見ている視界の中、流れ落ちる血で血だまりが出来ている中、ばさりと黒い何かが落ちた。

「あ．．．」

それは、紐の部分が千切れた風の眼帯。

「ハハ．．．結構気に入ってたのに．．．?」

ふと、そこで、ぎりり、という音がした。

何か顔をあげた瞬間、目の前に黒い矢が飛来してきた。急激にスローになった視界の中、風はふと、思った。

(ああ、これ、走馬灯みたいなものか)

人は死に際、視界が物凄く遅くなると聞く。

きっと、これが、そうなのだろう。

自分は、死ぬ直前なのだろう。

だが、それでも、この矢は確実に自分の頭を貫く。

回避は、間に合わない。

(ハハ・・・アタシ、死ぬんだ)

その中で、風は少しだけ悔しがった。

妹と、せつかく出来た恋人を置いて逝っちゃうなんて、なんて格好悪いんだろう、と。

そのまま、その黒い矢が、風を貫く。

そんな事は無かった。

突如として、矢の軌道が急激に逸れたのだ。

「・・・え」

その矢は、風の顔面のすぐ横を素通りして、背後の蔓を大きく穿つた。

「何・・・!?!」

佐奈は、その光景に目を疑った。

そして、風の目の前には、犬神がいた。

「・・・犬神・・・?」

風は、茫然とした状態で、その名を呼んだ。

犬神は、一度風を見た。

だが、その直後に黒い矢がまた飛来する。

その矢は、まっすぐ風を狙っていた、

しかし、その矢は犬神が立ち塞がる事で、軌道を変えて風の横を通り過ぎていく。

「……………どこまでもどこまでも……………」

佐奈の声に、深い憎悪が込められる。

「そこまで現世に留めたいかッ!!神樹ううううううううううううううううううッ!!」

佐奈が、渾身の力を込めて、矢を何度も放つ。

「犬神……………まさか……………!?!」

犬神の姿が、透けてきている。

おそらく、犬神自身が、その身を削って風を守っているのだ。

通常よりも、強力な障壁を張って、風を守っているのだ。

自分が、どんな事になろうとも、風を全力で守っているのだ。

それはきつと、神樹の意思ではない。

「犬神……………アンタ馬鹿よ……………」

その姿に、風は思わず笑みを零す。

「消エロ」

「ッ!?!」

いつの間にか、佐奈が目の前にいた。

そのまま障壁を突き破って、犬神を蹴り飛ばす気なのだ。

「犬神ッ!!」

それを直感的に感じた風は、思わず犬神に抱き着き、佐奈の蹴りをその身に受ける。

「アアアアアアッ!?!」

キツイ鈍痛。そして、蹴られた右の二の腕が、軋む音が響く。

蹴りを喰らって吹き飛び、その身を地面に擦りつけ、伏す。

「いぬ……………がみ……………」

腕の中の犬神が、心配そうにこちらを見上げてくる。

どうにか動く右手で、犬神を撫でる。

犬神は、その手にその体をなすりつけてくる。

そして、体の惨状に目を移す。

思った以上に、体に穴は空いていない。

おそらく、犬神が渾身の力で障壁を張り、だいたいの矢を逸らしたか防いだのだろう。

だが、それでも脇腹や肩をやられており、出血も激しい。

(これ……は……)

流石にまずい。

目の前には、不安定な足取りでこちらに歩いてくる佐奈の姿が見えた。

佐奈は、その口から何かを呪詛のように吐き続けている。

まるで、死神のように、こちらに歩いてくる。

(どうしよ……流石に……これじゃあ……)

怖い。

今更ながら、とても怖い。

死ぬ事に対してではない。

樹を一人にしてしまう事。

剛に会えなくなる事。

勇者部が、消えてしまうかもしれない事。

それら全てが怖い。

怖くて怖くて、死にたくない。

離れてしまう事が、怖い。

もう、死に体の状態でも、風は、体を動かそうとする。

満身創痍だろうが、風は、醜く抗う。

死にたくない。離れたくない。会えなくなるなんて嫌だ。

それだけの執念が、風を突き動かす。

「ウ——ア——アア——」

右腕を、どうにか、動かし、その手にある大剣を握りしめる。

腕と腹筋に力を込め、起き上がろうとする。

だけど、起き上がれない。

必至に力を入れても、起き上がれない。
立たない。

(ア・・・タシ・・・は・・・しね・・・ない・・・！)
どうにか動く左手を、天に向かって伸ばす。

ねえ、神様、聞いてる？もし、願いが叶うなら――

――アタシに、戦う力をください。

——面白い、その願い、聞き届けた。

その瞬間、佐奈は、吹き飛ばされた。

「ッ!？」

それに驚愕し、佐奈は、目を見開く。

そこに立っているのは一人の少女。

黄色の髪をなびかせ、その装束を、明らかに別物へと変えていた。犬のような三角耳。柴犬のような犬の尻尾。

その姿は、餓えた犬のようだった。

だいたい読者の方々が気付いていると思うが、これは以前、千景が使っていた『切り札』そのものだ。

一見、犬神というものはそれほど恐ろしい妖怪には見えないだろうが、実は妖怪ではなく呪い。

『犬神憑き』と呼ばれるものだ。

飢餓状態の犬の首を斬り落とし、それを辻道に埋め、その上を行き来する人々を利用して怨念を強くしていき、そしてその亡骸を利用して行うものだ。

だがしかし、それが精霊として現れた訳だが、今、風が行った『犬神憑き』は、犬の嗅覚、聴覚、身体能力を大幅に向上させるものだ。

しかし、如何せん、その特筆すべき『速さ』は、風の本来の動体視力ではその速さについていけない。

だが、風はその速さについてきていた。

そこで佐奈は、風の顔を見た。

その両目から、涙が流れていた。

それに首を傾げる佐奈。

だが、風はその左手を胸にあてた。

溢れてくる。

犬神が見てきたもの。

犬神が感じてきたもの。

犬神の想いが、気持ちだが、初めから、今この瞬間まで。

全部全部溢れてくる。

「……知らなかった」

温かい。とても、温かい。

まるで、心が満たされていくように、そして、まだ足りないあのよ
うに。

犬神が感じ、抱いた気持ち、風の心に流れ込んできていた。

「犬神……アンタ……今まで……」

精霊は喋る事が出来ない。だから、その心意を知らなかった。

だが、犬神を憑依させた風だからこそ、犬神の心を知れた。

犬神は風が好きだった。

普段とは異質なものである事による不安。だけど風は、そんな自分
にいつも優しくしてくれた。毛並みを褒めてくれた。そんな、母のよ
うな優しさを持つ風が好きだった。

だからこそ、悲しかった。

風の暴走。その原因の中に、自分がいること。

道を踏み外してしまう事。

大事なものを、失わせてしまう事。

直接的な干渉を、神樹から禁じられ、止める事が出来なかった。

それが、たまらなく悔しかった。

人の暴走は、人にしか止められない。

その事実が、とても悔しかった。

「……ごめんね、アンタの事、何も分かってやれなくて」

自分の体の中にいる犬神に、そう優しく語り掛け、風は、『眼』の調
子を確認する。

(すぐいわね……)

見える。

佐奈が矢を取り出し、それをつがえ、放つまでの一動作。

そのたった0.5秒間で行われているその動作を正確に見極めら
れ、かつ、どこを狙っているのか、そして、それを連射してくる事が
全て見える。

風は、頭の位置を動かし、その矢を軽く避ける。それに佐奈が眼を見開いている事も、見える。これが、与えられた眼。

異常なほどに強化された、動体視力。それが、今の風の両目だ。

風は、その口角を吊り上げ、姿勢を低くし、左手を地面について、犬のような姿勢になる。

「……行くわよ、犬神」

心の中で、力強く返事してくれたのを感じた。

風は、その双眸を黄金に輝かせ、地面を蹴る。

その速度は、おおよそ人間のそれを超えている。

それに、佐奈も反応し、迎撃に突撃してくる。

その速度は、互角。

佐奈が矢を放ち、風がそれを弾く。

そのすぐ後、風が剣を横に薙ぐ。

佐奈はそれを飛んで回避、風の上空で矢を放つ、風はそれを体の向きを変えて下がって回避、飛び上がって佐奈を追撃、佐奈は迎撃にさらに矢を放つ、風はそれを全てを弾き佐奈の上を取り、剣を振り下ろす、佐奈はそれを両足を使いその一撃を受け、地面に向かって斜めに落下、地面に直撃、しかし転がって衝撃を逃がし、着地、佐奈は矢を放たず飛んで風に飛びかかる、右手で手刀を作り、風に向かって突く、風はそれを左手で掴み阻止、右手の大剣を縮小、小刀サイズにして佐奈に突き刺そうとするが佐奈の左手によって阻止、二人は佐奈が突進の際の威力によって一瞬浮くも、そのまま落下していく。

「グウ……!!」

「ウウ……!!」

落下していくなか、完全に拮抗した力の中でどうにか相手に刃を突き立てようともがく二人。

だが、そのまま落下する。

土埃を舞い上がらせ、その中で距離を取り合う二人。

「ハア……ハア……ハア……ハア……」

互いに息をあげている。

だが、すぐさま二人はまた突撃を再開。
恐ろしい速度で繰り広げられる攻防戦。

風は、剣という間合いで圧倒的不利の武器を持っている中で、どうか佐奈に追いつき、その大剣をあり得ない速度で振るう。

対して佐奈は近付かれてしまえば不利になってしまう武器である弓をひきいても、持ち前の格闘技術によって近接戦を克服している。

一見、互角のように見えるが、僅かにでも、佐奈が押している。

大剣というリーチも長く、小回りの利かない武器では、佐奈の俊敏な動きについていけないのだ。

さらに、懐に踏み込まれば、大剣を上手く振れない。

そうこうしている内に、佐奈が風の懐に入ってくる。

これでは剣を振るえない。だが、それでも反撃手段が無い訳では無い。

剣が振るえないなら拳を振るえば良い。

そう思った瞬間、佐奈の顔面に風の拳が突き刺さる。

「がは・・・!？」

「ガアアアアッ!!!」

さらに大剣を放り投げ、右手でさらに佐奈を殴り飛ばす風。

「グウアッ!？」

「グルアッ!!」

まだ風の追撃は続く。だが、それで佐奈が黙る訳が無い。

すぐさま佐奈が拳を振る、風の顔面を捉える。

「グア・・・!？」

「グルウッ!!」

さらにもう片方の拳が風の顔面を追撃する。

しかし同時に殴られた。

「ゴハッ!？」

「ゲフッ!？」

クロスカウンターのように、互いの顔面を殴り飛ばす。

アアアアアアアアアアアアアアアアアツツ!!!!!!」

そして、風は、佐奈に届いた。

!!!!!!

そのまま二人は、地面に向かって落ち、風は佐奈を地面に叩きつけた。

地面に倒れ伏す佐奈を抱き起す風。

それと同時に、二人の纏っていた力が解ける。

「……………私は、どうすればよかったんだ……………」

ふと、佐奈が呟いた。

「知っていたさ……………足柄辰巳が、三百年生きていて、長生きしている分、大切な誰かに置いて逝かれ続けている事に……………そして、彼自身が、勇者だった事も。だけど、それでも、赦せなかったんだ……………」
沢山の子供が死んでいく現実。子供しかなれない勇者。そしてその子供を選定する神樹。その子供たちを死地へ向かわせる、辰巳。

その全てが赦せなかった。

だから抗おうとした。

全ての子供たちを救う為に、神樹を殺し、全ての子供たちが救われる世界を作ろうと思った。

だが。

「それでは、この世界の子供たちが死んでしまう。だから、分からなかった。何が正しくて、何が間違いなのか。もし、子供たちを戦わせる事が正しくて、戦わせない事が間違いだったのなら……………私は、どうすれば良かったんだ……………?」

佐奈の眼から、涙が零れ落ちる。

それを、風は拭い、言う。

「……………結局、何が正しいかなんて、誰にも分からないわよ。だけど、誰かを見捨てる事が正義なんて、そんなもの糞喰らえだわ。それに、世界を壊す事だって、繋いできた何かを断ち切ってしまう。だから結局、正しい事なんて何も無い。けどさ、それでも、その願いを掲げる事は、決して間違いじゃない。ただ、やり方が、誰かを傷付けてしまうものだっただけ」

「……………私は、あの人の期待さえも裏切ってしまった。いつも邪険

にしていたのに、めげずに話しかけてくるあの人を、私は裏切ってしまった。私は、もう、あの人の前には……」

「謝ればいいじゃない。その人の事が好きなら、謝って、一からまたやり直せばいいわよ」

「……土道は、赦してくれるだろうか……?」

「きつと……赦してくれるわ……」

それを聞いた佐奈は、ほっと安心した様に息を吐き、やがて、目を閉じる。

「そう……か……そう……だ……と……いい……な……」

佐奈の体から力が抜ける。

口からは、規則正しい呼吸が感じられる。

どうやら、気絶しているだけのようだ。

風は、そんな佐奈を寝転がらせ、立ち上がる。

「……しっかりと休んでなさい」

そう告げ、飛ぼうとした時、不意に足から力が抜ける。

「あれ……?」

そのままばかりと地面に倒れてしまった。

(ま……ず……安心したら、力が……)

そのまま、風の意識は闇に堕ちた。

ひとまず、風と佐奈の戦いは、風が勝利を修めた。

しかし、その間にも、他の場所での戦いは続いていた。

血が、滴る。

体中には、決して浅くない切り傷がつけられており、そこから血が流れ出る。

「アハハ！アハハ！まだ声上げないんだ？結構頑固だね？」

方向の分からない声。

それに樹は思わず周囲を探してしまう。

だが、その間に、全く別の方向から美紀は襲い掛かり、その華奢な体に新たな傷を増やす。

「ツ——！！」

痛みに声をあげたいが、すでに声を満開の代償によって失っているために、上げる事は出来ない。

それに、失血も激しい。

意識を、保つのも難しい。

助けを呼ぼうにも、声を出せないなら無理だ。

だが、そんな助けを呼べない、絶望的状况の中であっても、樹は諦めない。

ついてしまった膝を懸命に伸ばし、立ち上がろうとする。

「まだアソンデくれるの？嬉しいなく」

キヤツキヤツと嬉しがる声が聞こえる。

どうにかしなければ。

しかしそう思うも、失血によって脳が回らず、まともな考えが出来ない。

視界がくらむ、バランスが取れない、力が入らない。

(お・・ねえ・・ちゃ・・)

「でもそろそろ飽きちゃった」

ふと美紀がそのように呟いた。

「——もう良いよ、オネエサン」

瞬間、美紀がとうとう首を狙いにきた。

そのまま一直線に、愚直なまでに一直線なその一撃は、確実に樹の首を狙っていた。

樹は、それに気付かない。

そのまま、美紀の持つナイフが、樹の首を斬る——

「そうはさせないよ」

———という事は起こらず、何者かが美紀のナイフを弾き、突進を阻止した。

「きゃあ!？」

突然の事に驚きながらも、すぐさま影に隠れる美紀。

次の瞬間、樹の傷が急激に治っていく。

「・・・!？」

「よく頑張ったね。偉い偉い」

それに驚く樹を他所に、樹の頭を撫でるその人物。

樹がその人物の方を見ると、そこには金紗の髪をなびかせ、体に包帯を巻いた少女が立っていた。

「!」

樹は、その少女に驚く。

何故ここに彼女・・・乃木園子がいるのか。

「貴方のお姉さんに頼まれて、貴方を助けに来たんだ」

(お姉ちゃんが・・・)

それにも驚く樹。

「さて、そろそろ戦いを再開しようか」

園子は、槍を構える。

「背中合わせに。そうすれば貴方でも対応できる筈だよ」

樹は、慌てて園子と背中合わせになる。

「大丈夫。貴方ならきつと対応できる。音を聞くのは得意でしょ？」

そう言われ、樹は耳を澄ましてみる。

「眼を閉じないで、だけど、意識は耳に。聞くのは、足音じゃない。空気が揺れる時に聞こえる音を感じて。心を落ち着かせて。静かに、静かに聞くの」

そう言われ、樹は言われた通り、足音ではなく、空気の流れを感じる事に専念する。

静寂の中、敵の気配は全くしない。

だけど、樹は耳を澄ませる。

目の前の景色から目を逸らさず、ただ音を拾う事に専念する。

その時、僅かに聞こえた『空気之音』を聞き取った。

「ッ!!」

その瞬間、樹はワイヤーを伸ばし、敵の突っ込んでくる軌道上にワイヤーを張る。

「えッ!？」

そして、見えた。

目の前から、ナイフを振りかぶる、小さな女の子の姿を。

その女の子、美紀は目を見開き、目の前に展開されたワイヤーのバリケードに突っ込んで行く。

このまま突っ込めば、斬撃も可能な樹のワイヤーが美紀の体を八つ裂きにする。

しかし、そこからの美紀の対応は速かった。

片方のナイフを投げ捨て、そのワイヤーを掴んでであろうことか樹のワイヤーを利用して三次元移動してきたのだ。

「!？」

「えいッ！」

軌道を急激に変えてきた美紀が、樹の懐に入った。

そして、その右手のナイフを、樹の首へ振るう。

そのまま刃は樹の首へ迫り、あっさりと園子が後ろに回した槍によつて弾かれた。

「あ!?!」

そのまま弾き飛ばし、美紀を下がらせ、その後を園子が追いかける。

「上出来だよ、イツつん！」

園子は、美紀よりも速く、その懐に潜り込み、そのまま救い上げるように美紀を上空へ弾き飛ばす。

「きゃあ!?!」

そのまま、深い樹海の中から追い出され、根の上に着地する美紀。

その後、園子と樹が追いかける。

「く……!?!」

ここまで見晴らしが良いと、得意の隠密ステルスは使えない。

「さて、おいたはここまでだよ、美紀ちゃん。言っておくけど、私はそこまで子供に優しく出来ないよ?」

園子の放つ殺意。

それに思わず、怖気づく樹。

だが、美紀は園子を睨み付けたまま。

「……佐奈さんはどうしたの?」

「少し仲間に任せただけだよ。まあ、どうなってるかは、ご想像にお任せするよ」

「そう……でも、貴方はここで死んでもらうから」

「出来るかな?」

「出来るもん」

拗ねたように言う美紀。

「だって……」

ふと、美紀が俯く。

だが、すぐに顔をあげる。

その眼は、異様に紅くなり、その顔は狂喜していた。

「ッ!?!」

「これがあるからねえッ!!」

その瞬間、美紀の体から真っ黒い霧が発せられる。

「——大都市脅かす切り裂きの殺人鬼」

霧は、彼女の体に纏わりつく。

「イヒヒ・・・」

その顔は、おぞましいまでに嗤っており、その紅く輝く眼からは、とてつもない殺意が発せられていた。

「構えて、イツつん」

「・・・」

園子の言葉に、樹は従う。

「アハハ・・・サア、解体スルヨ」

少女は、霧の中で嗤う。

ただ踏み込むだけ

神速。

そう呼ぶしかなかった。

「——ッ!？」

まるで暴風雨のような、凶刃の嵐を、金紗の髪の少女が凌いでいた。その凄まじさは、樹にとっては、まさしく別次元だった。

「アハハハハッ!!」

「——ッ!!」

嗤う少女、無言の少女。

その二人の戦いに、樹は割って入る事が出来なideいた。あまりにも、速すぎる。激しすぎる。

付け入る余地がない程に、その攻防は激しすぎた。

美紀は、攻撃をしかける度に下がり気配を消し、コンマ一秒以下で再度攻撃。

対して園子は己の直感と動体視力、そして鍛えた反応速度で美紀の速さに対抗していた。

両者譲らぬ接戦。

その恐ろしさに、樹は入れない。

(その判断は正しいよ、イツつん)

槍を振るいながら、園子はそう思う。

事実、今この場に樹が入ってくれば、間違いなく邪魔だ。

彼女の攻撃は、はつきり言って異常。

その理由は、彼女が攻撃する際に見えてしまう、自分の四肢が裂かれてしまうイメージ。

否、実際には、体中のどの関節部分が最初に裂かれるのかという別々のイメージが、何故か見えてしまうのだ。

それが見えてしまうのは、一重に彼女の放つ殺気が原因だろうと、園子は推測する。

かつて、辰巳が言っていた。

相手を攻撃する際に、明確なイメージを持っていて、その通りに動

きをトレースすると、相手にそのイメージが幻覚として見える、と。つまり、美紀はその明確なイメージをいくつも見えており、その幻覚を殺気という形で叩きつけて、動きを鈍らせてきているのだ。

しかし、それならそれでやりようはある。

無意識化で発動する危機察知能力だ。

攻撃が迫る場所。例え幻覚が見えようとも、その中で最も錯覚の痛みが強い場所を感じ取れば、自ずとそこへ攻撃が迫っている事が分かる。

しかし、その為には百戦錬磨経験を積んで勘を鍛えなければならぬ。

たかだか中学生にそんな経験があるとは思えないだろう。しかし、彼女の師が足柄辰巳であるなら話は別だ。

何せ、人の三倍の寿命は経験しているのだから。

そんな強すぎる師匠に鍛えられていたら、自ずと戦闘センスが極限までに高められない訳が無い。

その上、辰巳は教えるのが上手過ぎる為にもはや彼女をただの中学生と思う馬鹿はいないだろう。

それはともかく、とにかく園子は美紀の攻撃に対応しきっていた。だが、それでも美紀は攻撃の手を緩めない。

一回一回、どれもこれも角度や威力、速度を変えて全く別の攻撃を繰り出してくる。

否、殺し方を変えてきている。

そのあまりの殺人の暴風雨の中に、樹は入るべきではない。

(それに、コイツの意識を常に私に釘付けにしなくちゃ・・・！)
でなければ、樹などあつという間にバラバラだ。

と、そんな事を思っていた矢先。

樹が何を血迷ったのか一步を踏み出してきた。

「!？」

思わず、動揺する園子。

しかしそれでも防御はやっている。

(イツつん!?)

しかし、その内心は混乱していた。

何故、このタイミングで踏み込んでくるのか。

樹は、園子の動揺を他所において、一步一步、踏みしめるように嵐の中に入ろうとしている。

その表情は、何かしらの算段があるように見えるが、それでも無謀である事には変わらない。

(ダメ、イツつん!)

心の中で叫ぶも、樹は止まらない。

そして、樹が、とうとうある一步を踏み込んだ途端、美紀の視線が動いた。

「ツ！逃げてイツつんツ!!」

叫ぶ園子、しかしもう遅い。

美紀は標的を樹へ変更、そのまま樹に向かって突っ込む。

(間に合わないツ！)

その速さは、あまりにも速い。

例え『疾風』^{はやて}を使っても間に合わない。

このままでは樹は殺される。

刃の軌道は、樹の心臓に狙いを定めている。

樹なら、まともに反撃出来ない上に、園子という強敵がいる事から、先に始末する気なのだ。

槍を伸ばすか？伸びる速さと美紀の速さは同等だ。

なら投げるか？その向こう側に樹がいるから無理。

だが、そう考えている内に、美紀の刃が――

――樹の胸に突き立てられた。

鈍い金属音を響かせて。

「!?」

それに、美紀は目を見開く。

刃が、皮膚に食い込まないのだ。

突進による力の増加、突きによる貫通力、さらに体の節々の動きによる、僅かな加速。

それらを重ねた絶対的殺人法が、どういう訳か、いとも容易く阻止されたのだ。

だが、樹は笑っていた。

まるで引つ掛かったと言わんばかりに。

そこで美紀は気付く。

樹の体に、細長いワイヤーが、無数に巻き付いている事に。

それはいわば、即席の鎧。あるいは鎖帷子^{かたびら}。

その無数に、そして計算されて編み込まれたワイヤーの鎧が、美紀の刃を阻み、死を回避したのだ。

その証拠に、その一撃は樹の薄皮一枚にも到達していない。

そして、美紀は気付く。

彼女は囧だと。

「ツ！」

それが分かった瞬間、すぐさま離れようとする美紀。しかし。

「ナイスだよ、イツつんツ!!」

すでに園子が槍の射程に美紀を収めており、すでに攻撃態勢に入っていた。

「対天武術『振打』^{しんだ}ツ!!!」

まるでバットをスイングするように振るわれた槍の一撃は、美紀を遠くへぶっ飛ばした。

そのまま美紀は樹海の蔓に叩きつけられ、粉塵が舞い上がる。

「ふう……イツつん」

「ツ!？」

突然、低くなった声に樹の心臓が跳ね上がる。

「今後、あんな危ない事はしない。じゃないと君のお姉さんが泣いちゃうよ?。」

「」

それに頷く樹。

確かにそうだ。

自分は、姉のたった一人の血の繋がった家族だ。

自分が死んでしまったら、彼女は一人になってしまう。

そんなのは嫌だ。

「うん、それさえ理解出来ていればいいよ」

安心したかのように樹の頭を撫でる園子。

だが、すぐに園子は美紀が吹っ飛ばされた先を見る。

「構えて」

「ッ」

園子がそう呟いた瞬間、黒い霧を纏った美紀が、砲弾のようなスピードで園子に突っ込んできた。

園子は、そのの一撃をまずは防ごうとする。

案の定、美紀はその刃は構えられた園子槍の柄によって防がれる。

「——私ノ名前ハ切り裂キジャック」

しかし、その刃は右手の刃。

「女ノ人ヲ見ツケテハバラバラニスル。女ノ人ノ中身ハ未知ノ巢窟――」

「――」

本命は、左手の紅く光るナイフ。

「私ヲ捨テタオ母サン。サア、オ母サンノ体ヲ開イチャウヨ」

「しまっ――」

「しまっ――」

「――解体スルヨ『デイスマンタル・マザー我切り裂クハ母ノ体』」

紅い刃は、園子の脇腹を掠める程度でとどまり、美紀は園子の脇をすり抜けていく。

二人はすぐさま振り返り、美紀に向かって構える。

だが――

突如として園子の体から血を噴き出た。

「ゴハア!？」

「!？」

突然の事に驚く樹と園子。

園子は、地面に膝をつき、片手を地面についてしまう。

「こ、これは……!？」

「あれれ? いつもならこれでバラバラになるはずなのに、どうしてかな?」

「バラ……バラ……」

よく見てみると、血が噴き出た所は、どれも関節部分。

両肩、肘、手首、指の節、足の付け根に膝、足首に足の指の節。

さらに腹には縦に一本の切り傷に加え、中身からも傷みが伝わってくる。

これは、文字通り――

「解体……」

美紀の能力はいわば『解体』の概念を操る事だ。

傷の一つでも加えれば、そこから『解体』の呪いが入り込み、敵を一撃で^{殺人}解体する事が出来るのだ。

ただ、その解体の概念を操る能力は、通常時では発動しない。

解体なんぞナイフ一本だけで事足りる事を、何も能力でやる事は無い。それ以前に、概念を操る事自体が美紀には出来ない。

だから、その『解体』の概念を、限定発動型の大技として使用する事で、切り札として使用する事にしたのだ。

それが、現在園子を苦しめている力の正体。

呪いに対して相当な耐性を有している園子だからこそ完全にバラバラにされた訳では無いが、それでも四肢が千切れかかっている事に

は変わりはない。さらに、内臓も千切れかかっている。

「どうもこうも・・・！！」

園子はすぐさま治療にかかる。

だが、傷が治らない。

「これは・・・!!？」

「アハハ、才姉サン、ナンデ死体ヲ治ソウトシテルノ？」

「!？」

美紀の言葉に、園子は理解する。

（『死体』の概念まで植えつけられた・・・!!？）

美紀の能力は、何も『解体』するという概念だけではない。

解体するには死体が必要。だからその為に、相手を死体にしなればならない。

その為に、園子の傷の周囲に死体の概念を与えて、治癒を阻止しているのだ。

園子の精霊の一体である『どうもこうも』という精霊は、もとは二人の天才的外科医『どうも』と『こうも』が、対決の際、互いの首をどちらが早く繋げられるかという対決をした際に、すでに互いの首がないのだから繋げられないので、そのまま命を落としたというなんとも間抜けな死に方をした二人の無念が合わさって出来た妖怪なのだ。

しかし、それでも天才的技術を持つ医者である二人の『外科手術』という能力は、確かに園子の体をもとの数秒で治癒できるだろう。

しかし、『死体』の概念を与えられてしまった状態では、生者を治す外科手術では何の意味も無い。

つまりは、園子は自分の傷を治す事が出来ない。

（やられた・・・）

あまりにも一気に血を流し過ぎた。

それに、こんな状態ではまともに動く事は出来ない。

（情けない・・・！）

体が動かかなかったなんて言い訳にならない。これは鍛錬を怠った自分の責任。

風から妹を守る事を約束しておきながら、なんたる醜態。

「アハハ、アハハ」

その間にも、美紀は掌でナイフを踊らせて歩いてくる。

このままでは樹が――

」

「イツつん・・・!?」

そこで、樹が園子の前に出る。

「ダメだよイツつん・・・!あの子は、貴方の手に負えるような奴じゃ・・・」

そこで、樹が振り向いて、微笑む。

そして、その手に持つスマホの画面を見せる。

『倒してきます』

たった一言。それだけを書いて。

「・・・!?!」

そして樹は美紀を睨みつける。

「アハ、今度ハアナタガ遊ンデクレルンダ?」

美紀は嬉しそうに嗤う。

その笑みに、樹は恐怖を感じる。だけど、そんな、殺される恐怖なんかよりも、誰かが殺される方が怖い。

だから、心を鬼にしろ。相手を傷つける事を躊躇うな。

でなければ、勝つ事は出来ない。倒す事など――不可能だツ!!!

「アハ」

「ツ」

美紀が地面を蹴る。

地面すれすれから左のナイフが迫る。

それが樹の左脇腹へ迫る。

樹は、それを左上腕で防ぐ。鈍い金属音が響き、美紀のナイフから、肉ではなく、何か硬い物にあたる感触を覚える。

それは、先ほど美紀の攻撃を防いだワイヤーの即席の鎧。

美紀の攻撃に、切れ味はあっても、重さは一切ない。ならば、ナイフが通らない程に硬質なものを用意して、それを楯に応戦すれば良い。

(結構才能あるかもね・・・)

その樹の隠れた才能に園子は畏怖を覚える。

しかし、それでも樹が対人戦の素人である事には変わりはない。

美紀はナイフを振りぬいた勢いのまま樹の左脇に右の後ろ回し蹴りを叩き込む。

「ッ」

吹き飛ばされ、地面を転がるも、すぐに態勢を立て直す樹。

そこへ追撃と言わんばかりに美紀が突撃する。

樹はすぐさま腕のワイヤーをほどき、それを網状にしてまるで壁のように設置する。

「!?」

それに一瞬目を見開いた美紀だったが、次の行動にすぐさま移る。

右手のナイフを、網の目に向かって投擲、そのナイフは網目を通って樹の肩に当たる。

「ッ」

ナイフは通り過ぎ、皮が裂かれ、そこから血が流れ、樹は痛みにも苦悶の表情になり、その傷を抑える。

それに美紀はニイツと嗤うが、そこで右太腿に鋭い痛みを感じた。

まるで細い棒を貫通されたかのような、そんな痛みに、美紀はそこへ視線を移す。

そこには、緑色に光るワイヤーが、突き刺さって、後ろへ貫かれていた。

「エ・・・!?」

気付いた時には、美紀はすでに空中に投げ出されていた。

「ッ!!」

そして、樹は上げた右腕を振り下ろし、美紀を地面に叩き付ける。

「ウア・・・!?」

くぐもった声が聞こえ、背中から叩き付けられた事で肺から空気が吐き出される。

ワイヤーで作った網の壁は単なる罠。本命はワイヤーを打ち出して美紀の足を貫く針金撃ち。ワイヤーショット

もともと美紀の動きを網で防いだ後に撃ち込むつもりだったのだが、美紀がナイフを投げた事で焦ってワイヤーを撃ち込んだのだ。ただ結果オーライとしてワイヤーは美紀の足を貫く事になったのだが。

樹はワイヤーを戻し、それを左腕に巻き付け、次の攻撃に備える。舞い上がる粉塵の中、立ち上がる影を見つける。それに身構える樹。

しかし、その影は、突如として消滅した。

「!?」

それに驚き、周囲を探す樹。だが、そこで園子が叫ぶ。

「目を逸らさないでッ!!」

「ッ!」

樹は慌てて目の前を見る。

美紀は、いつの間にか、樹の目の前まで来ていた。

その刃は、紅く光っていた。

「——『我切り裂クハ母ノ体』デイスマンタル・マザー」

その刃が、樹の腹に突き立てられる。

「イツつんッ!」

園子は思わず叫ぶ。

美紀は嗤う。勝った、と。

樹に、園子程の耐性は存在しない。

そこへ、一撃必殺の刃が突き立てられたのだ。

死は確実、樹の体は、四肢が裂かれバラバラに——

——ならなかった。

「.....エ?」

ナイフは、樹が左掌に巻いたワイヤーによって、肉に食い込む事を防いでいた。

そのまま樹は、右手を美紀の胸に当てる。

そして、口を動かした。

つかまえた

ごめんね

そう、呟いた。

次の瞬間、美紀の背中から、四本のワイヤーが突き出た。

それは、樹が右手のリングから伸ばしたワイヤー。

至近距離での針金撃ちワイヤーショット。

その一撃は、美紀を吹き飛ばし、そして、数メートル離れた所で落ちた。

「……」

樹は、地面に倒れ伏す美紀を、悲し気に見つめる。

彼女は、確かに強かった。

だが、彼女は幼かった。

その子供らしい慢心が、彼女より年上である樹に敗北した。

いや、それ以前に美紀は苛立っていた。

自分はお前なんて簡単に殺せる。ナイフを一回突き立てるだけで簡単に死ぬ。一回ぐらい防いだだけで調子に乗るな。

それらの苛立ちが、美紀の動きを単調にした。だから樹でも対応できたのだ。

その結果、彼女は、樹に負けた。

確実に勝てる相手に、彼女は傲慢と慢心によって敗北したのだ。

樹は、息を上げてワイヤーを納める。

とにかく、これで彼女は動けない。

後は園子の元へ行かなければ――

その時、美紀の体から真っ黒い霧が立ち上った。

「!?」

それに目を見開く樹。

「マ・・・ダ・・・マダ・・・終ワツテナイ・・・!!」

その中で、美紀が立ち上がる。手も使わず、まるで何かに引つ張られるように。

「私・・・ハ・・・マケナイ・・・絶タイ・・・ニ・・・負ケナイ・・・！」

その霧は、あまりにも濃すぎる。

しかしそれでも、美紀の姿だけがどういふ訳かくつきりと見える。まるで、自分の存在を主張するかのよう。

「私ハ・・・認メラレタイ・・・誰カニ・・・覚エテテモライタイ・・・ソノタメナラ・・・私ハ・・・誰ダツテ解体スル・・・!!」

美紀の持つナイフが、紅く光る。

この世の全てを殺さんと、バラバラにして、全て終わらせると、その意思が、明確に理解させられた。

「・・・」

ただ、誰かに自分の存在を認められたい。

その理由は、分からない。

だけど、それを理由に誰かを殺すなんて事は、認められない。

「イツつん」

ふと、後ろから声がかけられ、振り向く樹。

そこには、槍を杖代わりにしてこちらに向かって歩いてくる園子の姿があった。

樹は、それに驚いて慌てて園子の元へ向かう。

その最中、園子は膝をついた。

「ハア・・・ハア・・・」

「」

樹は、心配そうに園子の前で膝をつく。

「イツつん」

園子は、左手を樹の前に出すと、目の前に一体の精霊を顕現させる。

気付けば、美紀のすぐそばに、伸ばされた槍の穂先が見えた。

「対天武術『牙貫』二連」

それは、園子の神速ともいうべき刺突の二連撃。

鴉天狗によって伸ばされた槍で、素早く二回、刺突を繰り返して美紀のナイフを弾き飛ばしたのだ。

「後は、任せたよ……イツつん……」

園子は、そのまま仰向けに倒れ、意識が遠のいていく。

（わっしーを……よろしくね……つばくん……ミノさん……）

そのまま、意識を闇に沈めた園子。

これによって、美紀は完全に丸腰。

しかし、それでも美紀の周りには高濃度の酸の霧。

触れば一瞬にして皮膚が解ける程に濃い。

とてもではないが踏み込めるものではない。

だが、樹には園子から与えられた狒犬がいる。

狒犬は、魔除けの象徴。

それ故に、美紀の呪いの霧を打ち払う事が出来るのだ。

樹が、霧へ一歩踏み出した途端、樹の周囲の霧が僅かに消失、浄化

された。

「!?」

それに目を見開く美紀。

だが、完全とまではいかず、樹の体の所々を酸によってやかれる。

それに顔を歪めるも、樹は止まらない。

右腕を振りかぶる。

そして、ワイヤーを右腕に巻き付かせる。

防御ではない。攻撃をする為に。

ワイヤーによって動きを補助し、さらに擬似筋肉として稼働。それによって右腕を強制的に動かし、通常では発揮できない威力のパンチを繰り返す。

そう、樹は、美紀に向かって拳骨を繰り返すのだ。

だから、樹は叫ぶ。

勇者パンチ

樹の右拳が、美紀の顔面に叩き付けられ、そしてぶっ飛ばした。

美紀は、そのまま数メートル飛び、やがて樹海の根に倒れ伏す。

霧は霧散し、美紀は、今度こそ、気絶した。

しかし、樹も全くの無傷という訳ではない。

先ほどまで効いていたアドレナリンが切れかかっており、酸による痛みが体中に走って、意識が飛びそうになっているのだ。

さらに、緊張による糸が切れ、体に力が入らない。

どうにか意識を保とうとしたが、迫る睡魔に抗えず、その場に倒れ込み、そのまま意識を闇に落とす。

ただ、その中で、樹は一つの満足感を感じていた。

(お姉ちゃん……私、頑張ったよ……頑張ったよね……?)

剣が、迫る。

しかし剛はそれを戦槌を振るう事でそれを迎撃する。

「どうしてだよーどうしてそこまでするんだよーどうしてどうしてどうしてだああああああ!!!」

なおも喚き続ける弘。

それに剛は苛立ちを募らせる。

「どうせこの世界は終わるのになん——」

「だからうっせえんだよッ!!!」

「げぶらッ!?!」

拳を顔面に叩きつける。

それだけで軽い弘は吹き飛ぶ。

地面に叩きつけられる弘。

「つちくしよおおおおおおお!!」

しかし弘は立ち上がり、地面に手を叩きつける。

その行動に首を傾げる剛。しかし、その意図をすぐさま察し、上を見上げる。

そこには、みるも巨大なギロチンの刃があった。

「こんなものでッ!?!」

「両断されて死ねッ!!」

それも一つではない。

全部で十個、そのどれもがバラバラな向きに置かれている上に落下するスピードはまるで何かから射出されたかのようにいきなり最高速で突っ込んでくる。

「チィッ!」

回避が不可能と判断した剛は戦槌を振りかぶる。

戦槌の片方が変形し、そこからジェット噴出孔が露出。

そこからエネルギーを貯めるかのように赤く発光し、熱量を帯びる。

「ジェットハンマーッ!!!」

そして思いつき振り抜き、ギロチンを真正面から衝突させる。

自由落下と急激加速によって十分な破壊力を有しているギロチンよりも、剛の戦槌の威力の方が上回り、ギロチンを吹き飛ばす。

だが、振りかぶり隙だらけの状態の剛に向かって弘が懐に入りこみ、そのがら空きの脇腹に長い細剣を突き立てる。

「ぐうツ!？」

その剣は剛の体の反対側まで突き抜け、貫通する。

「ヒヒ、どうだあ?この世界を守ろうとするからこうなるんだ...死ぬのは確定だなあ?」

弘は醜悪な笑みを浮かべる。

剣が体を貫いている。まず致命傷なのは間違いない。

だが、それがどうしたというのだろうか?

剛は、その突き立てられている剣をそのままに、弘のその剣を握っている手を掴む。

「なツ!？」

そして戦槌を捨てたと思ったら、そのままもう片方の手で弘の顔面を殴りにかかってくる。

「チイツ!？」

弘は、体中にある剣をすぐさま集束、まるでハリネズミのように顔面を守る様に展開する。

これなら、普通は誰もが攻撃を躊躇う。

しかし、剛はこれを無視。そのまま突き刺さった剣を砕きながら、力任せに弘の顔面にその拳を叩きつける。

「ぎやああああ!？」

地面に叩きつけられる弘。

その間に剛は自分の体に突き刺さった剣を引き抜く。

「ぐつうつ...!」

引き抜く際に感じた痛みにも顔を歪めながらも耐えきる剛。

そして、剛は地面に倒れ伏す弘を見下す。

「どうした?その程度かよ。案外強くねえんだな」

あからさまな挑発。

「...まれ...」

「ああ?」

「黙れえええええええええええええええええ!!」

弘が立ち上がりと共に剛へ刃を下段から斬り上げる。

だが剛はすでに剣の射程外におり、その一撃は空振りに終わる。

「うるさいんだよ・・・ろくでなしどもに加担しているお前なんか、
どうこう言われる筋合いはないんだよおおおおおおおおおおお
お!!!」

次の瞬間、弘の体中にある剣が、一斉に剛に向かって射出された。

弘の能力。

それは『剣』の無限召喚だ。

ありとあらゆる『剣』を顕現させ、それによって相手を斬り刻むい
かにも単純な能力。

しかしその剣のバリエーションはあまりにも豊富。

長剣、短剣、片手剣、細剣、脇差、打刀、太刀、両手剣、斬馬刀、突
剣、仕込み杖など。

とにかく剣であるならなんでもありなのだ。

その上、投擲したものを空中で自由自在に操る事が可能だ。

さらに何も無い空間から通常じゃ扱えないような巨大なものを顕
現させる事が可能。

まさに某聖杯戦争の傲慢王の宝物庫もどきだ。

それゆえに。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ!!!」

剛は、全力で迎撃するも、その無数の剣を防ぎきれず、体のあちこ
ちに突き刺さる。

「ぐう・・・!?!」

体中に剣が突き刺さり、膝をつく剛。

しかし、その全てが致命傷ではない。

「アハ、アハハ、ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハッ
!!!」

弘が背中を仰げ反らせ高笑いをする。

「どうだあ！ザマアないなア！そんな無様な姿をさらす事になったの

は全部大赦のせいだ！お前が大赦に加担したからこうなったんだア！！」

弘は、すでに勝利の快感に浸っている。

自分の勝ち揺るがない。そう確信している。

そしてそれこそが——命取りだ。

「だから……」

「ん？」

「うるせえんだよッ!!」

いつの間にかジェット噴射で弘の懐に入っていた剛は、そのまま戦槌を振り抜いて弘をぶつ飛ばす。

「ぎゃあああああああ!?!」

空中へ吹き飛ばされ、そのまま落下する。

「ハア……ハア……俺が大赦に加担したからこうなっただあ……？馬鹿な事言つてんじゃねえよ……俺が戦つてんのは、俺が望んだからだッ!!」

剛は叫び、戦槌を構える。

戦いを選んだからには、傷付く覚悟は出来ている。

痛いと感じる覚悟は出来ている。

物事に非情になる覚悟も出来ている。

ならば、あとは敵に突っ込むだけだ。

「ぐ……う……望んだ……だとお……?」

しかし、それでも弘は理解できないと激怒する。

「そんなのは間違つてるんだよおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!」

弘が、剣を空中に無数に顕現させる。

それを見た剛は、満開によって得た飛行能力によって飛び上がる。

「逃げてても無駄だアアアアアッ!!!」

弘は、その剛に向かって一斉に剣を射出させる。

その剣の嵐は、今度喰らえば確実に剛の体を斬り刻み、死に至らせる。

だが、それがどうしたと言うのか。

て地面に激突。ゴロゴロと転がり、やつとの事で仰向けになって止まる。

「ゼエ……ゼエ……」

剛は、樹海化した事によって色が変わった空を見上げる。

「……やっただぜ、風……」

そのまま、意識を遠ざけ、さらに、満開も解除される。

「後は……任せただぜ……銀……」

剛の意識は、そのまま闇に沈んだ。

「ああ、任された」

そして、銀は、雷雲を呼び落雷を落としまくっている真斗を睨み付ける。

「ウウウウウ……」

「さあ、やろうぜ……ガキ」

銀は、邪竜の力をもって、幼い雷神に挑む。

しかし、銀は地面を蹴り、ブーストの向きを変え、緩急をつける事でその落雷を巧みに回避する。

そして、ついに戦斧の射程に真斗を捉える。

「オウラッ!!」

右薙ぎに一気に戦斧を振り抜く。

「ウアッ!」

しかし真斗はそれを雷槌で受け止める。だが銀はそこへブーストを加えて、真斗を浮き上がらせ、そして後退させる。

「ウウ!?!」

「だあああッ!!」

そのまま一回転して追撃。ハンマーを弾かれた事で胴が空きの真斗にはそれを防ぐ術はない。

しかし、真斗は絶叫して、自らの体から電撃を発した。

「ぐう!?!」

思わぬ反撃に、銀は思わず吹き飛ばされる。

その銀に向かって、真斗は雷槌を振り上げる。

「ッ!!!」

雷撃によって飛びかけた意識を舌を噛む事で引き戻し、真斗のその一撃を防ぎ、弾き飛ばす。

だが、真斗の攻撃はそこで終わらず、巨大な黄金の雷槌を、その巨体には似合わぬ速度で振り回してきた。

銀は、それを防ぎながら後退し続ける。

(くっそ、威力はともかく、なんでこんなに速く振れるんだ——ん?)

あまりの攻撃速度に歯噛みする銀の視界に、黄金の雷槌が映る。

その雷槌には、僅かにプラズマが迸っている事に気付く。

(そういう事か...!?!)

真斗が行っているのは、いわゆる『電磁誘導』というものだ。

突然だが『電磁石』というものを知っているだろうか?

電気を流す事で、磁力を帯びる装置だ。

真斗は、それを使って金属である雷槌を強制操作。

さらに発する磁場が強すぎる為か、その速度が、通常の数倍にまで跳ね上がっているのか。

(本当に精神年齢幼稚園かよ・・・!?)

否、これは真斗が意図してやっている事だ。

これは無意識化で行われている事だ。

どういった用途でこうなったのか分からないが、それでもこの力は驚異的だ。

だから銀は、諸に入った一撃をどうにか斧で防ぎ、一気に距離を取る。

「ウウアアアアアアアアッ!!」

しかしそれでも真斗は追い縋ってくる。

しかし今度は、銀が仕掛けた。

竜斧と雷槌の正面衝突。

それによって大気がはじけ飛ぶ。

だが、それでは終わらない。銀は、体内で骨を強化、および、骨による擬似筋肉を増設し、通常より数倍の筋力を持って連撃を仕掛け、真斗は電磁誘導によって加速した雷槌で迎撃。

先ほどは雷撃による体の痺れによって動きが鈍っていたために反撃出来なかったが、今度は違う。

恐ろしいまでの雷撃と斬撃の応酬に、周囲はその余波で亀裂を走らせる。

しかし亀甲というものは長くは続かない。

その拮抗を破ったのはやはり真斗。

「ウガアアア!!」

いきなり銀の頭上から落雷が落ちる。

その落雷が落ちた所には穴が穿たれ、そこには何もいなかった。しかし。

「雷がいきなり落ちてくるのはさっき見た」

背後から声が聞こえた。

それに気付いた時にはもう遅い。

「だったら後は、周囲に気を配れだッ!!」

あの機能は、実は使用者の体質を竜の体質へと変換してしまうという、危険な力を持っている。

それゆえに、辰巳は今日この日、三百年という歳月を生きながらえてきたのだ。

竜の体質というのは、どれほどダメージを受けようとも勝手に治る。体が鋼のように固くなる。身体能力が大幅に強化される。など、様々な恩恵が得られる。

しかし、それは同時に、寿命を延ばされるという呪いをもその身に請け負ってしまうのだ。

不死を望むからそれは素晴らしい事なのかもしれない。

だが、実際不死になってみれば、それは、とても苦しい事だ。

他人より長生きする、という事は、他人が自分より先に死ぬという事。

いくら愛したものがいようとも、その者でさえ、先に死んでしまい、自分を置いていかれる。

そう、不死とは孤独という事に他ならない。

誰もが生きている世界で、自分だけが、たった一人、不死で有り続ける。

それは、一体どれほど苦しい事なのだろうか。

想像できない。出来る訳が無い。

自分は、それほど生きていないのだからだ。

勇者システムそのものの身体機能の強化によって、使用時の体の破壊は起きていない。

だから、それも考えると治癒能力はいらなくなってくる。

だから、銀が竜になる事は無い。

その代わり、死ぬ確率は大幅に上がったと言ってもいいだろう。

ならば、自分は何をするべきだろうか。

「ううあああああああ!!!」

「くっー」

真斗がなおも攻撃をしかけてくる。

今度は、雷撃による遠距離攻撃。

雷撃を連発してくる真斗に、銀は回避に徹する。攻撃するには、どうにかして真斗に近付かなければならない。

近付く？その必要などないだろう？

真斗がハンマーを振り上げる。

しかし、その時、真斗の腹に何かが突き刺さる。

「ぐうええ!!」

それは、銀の戦斧。

それが真斗の腹に食い込んでいるのだ。

「ギイヤーアアアアアアアアアアアア!」

絶叫し、あまりの痛さに転げまわる。その拍子に、斧が傷口から外れ、地面に落ち、真斗の腹からはとめどない程の血が溢れ出てくる。

「イダイ・・・イダアイ・・・!!」

痛みに、今度こそ屈した真斗。

しかし、何故いきなり銀の戦斧が真斗の腹に突き刺さっていたのか。

その理由は、至極簡単、銀が斧を投げたのだ。

「どうだー！これぞ師匠直伝せんせい！武器投げだ！」

それはあまりにも無謀ともいえる行為。

自分の武器を投げて相手を攻撃する、自身の身を危険に晒す行為

だ。

しかし、銀はそれを無視して投げた。

理由は簡単だ。真斗を倒さなければ、他の者に危害が及ぶ事を。

真斗は、おそらく仲間の為なら全てを壊す気でいる。

否、全てを壊す気なのだろう。

神樹を破壊すれば、全てが終わるのだから。

そうだったら、確実に、友達が死ぬ。

翼、園子、美森——須美だけではない。

兄である剛、義姉である風、義妹である樹、そして、千景と夏凜、友奈。

その全員が死んでしまうかもしれない。

だから、銀は斧を投げる事を躊躇わなかった。

それゆえに——斧は真斗に直撃した。

真斗はなおも意識を保っている。

ここで意識を刈らなければ、また立ち上がる。

その為に銀は斧を拾い、真斗に近付く。

電撃による反撃を警戒しながら、ゆっくりと近付く。

「ウ・ウウ・ウウ・ウウ」

地面にうずくまる真斗。

徐々に近づく銀。

しかし、そこで、真斗の体から電気が走った。

「ツ!!」

銀はすぐさま距離を取る。

そしてその直前。

今までとは比べ物にならない程の雷が真斗に落ちた。

恐怖は、最初ハナから無いツ!!

「神聖なる神々は邪竜によって失墜するツ——!!」

「雷神の怒りをその身に知れツ——!!」

「混沌の最中、邪竜はなおも天に咆え猛り——!!」

「ひれ伏せ、絶対的力の前に、己が無力を思い知り——!!」

「世界は今、落陽に至るツ——!!!」

「その身を原初の塵へと回帰せよツ——!!!」

「——撃ち墜とすツ!!! 『神バ失墜ルせしめし邪竜クの怒り』 ツ!!!」

「——消エ去レツ!!! 『原初アへ回帰ミする雷神ニの雷槌』 ツ!!!」

天そらが、落ちてくる。

まるで、巨大な隕石の様に落ちてくる、その雷撃に、銀は竜の息吹を叩きつける。

相反する、天と地の衝突は、周囲の根や蔓を一瞬にして消し飛ばし、大気を弾けさせ、慟哭させる。

その二つの力の衝突は一見拮抗しているように見えるが、よくよく見れば、銀の方が押されている。

「ぐ……うう……!!」

雷とは、神の怒りと同義に扱われてきた。

そもそも、過去において、西洋では様々な災害などは、全て神の仕業だと言われてきたのだ。

その怒りを一点に凝縮されたその雷は、この世の全てを原初の塵と化す。

さらに、かなりの電気量を集束して放っている。

それに対して、銀はたかが一匹の竜の生命力を絞り出しただけ。

それでもなんとか均衡を保っているのはもはや奇跡と言つても良い。

だが、そんなものは長くは続かない。このまま行けば、確実に銀は撃ち負けて全て消し飛ぶ。

(ファブニールの……師匠せんせいの力は……こんなものじゃないツ……!!)

だが、銀は信じている。まだ、この力に、先がある事をツ!!

(押されている理由は、アタシだ……!!)

銀は、恐れている。この力が、自分を蝕む事を。既にがしや髑髏の因子をその体を受け、人の枠から外れた存在になろうとも、さらに人外の存在になる事を、心のどこかで恐れていたのだ。

だけど、今更そんなくだらない事よりも、もっと怖い事がある。

(これに負ければ、翼が死に、園子も死に、須美も死ぬツ!!)

斧を持つ手に力を籠める。あまりの力に、体が仰け反る。だが――

(当たり前前の事実からツ、目を逸らすな――ツ!!!)

無理矢理態勢を整え、そして、銀は叫ぶ。

「神の樹に仕えし眷属が願ひ奉る――」

斧に埋め込まれた青い宝石が輝きを増す。

「アタシに自由なる勝利の輝きを――ツ!!!」

瞬間、銀の放つ竜の息吹ドラゴン・ブレスがその勢いを増し、雷撃を僅かに押し返す。

「ううううおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
!!!」

叫び、斧に更なる力を込める。

だが、それでも完全に押し切るには至らなかった。

(それでも・・・足りないのか・・・)

神樹への全力祈禱。

巫女では無いが、神樹とは力を受け取るという形で繋がっている状態にある勇者であるならば、神樹に懇願する事でその力の上限を開放してもらおう擬似満開なのだが、そのパワーアップは、確かに『神失墜せしめし邪竜の怒り』の威力を高めた。

しかし、それでも真斗の放つ『原初ソへ回帰アする雷神ルの雷槌ニ』に打ち勝てなかった。

徐々に、竜の息吹の勢いが弱まっていき、雷撃がどんどん押し込まれてくる。

(ち・・・く・・・しよお・・・!!)

己の全てを注いでまで勝てなかった事を悔やみ、意識が遠のいていく。

(つば・・・さ・・・その・・・こ・・・す・・・み・・・)
そこで、諦めかけた時。

「――相殺しろ」

突如聞こえた声。

それと同時に、銀の体に、いきなり『鎖』が巻き付いた。

「な・・・!?!」

それに、眼を見開く銀。

それは、徐々に、銀を締め上げていく。

「ぐ・・・う・・・!?!」

それが一体何なのか、銀には理解できない。

しかし、それが限界まで締めあがった時――

――『制限解鎖』生存本能、解――

次の瞬間、鎖が弾け飛び、銀の体の中からとてつもない力が溢れかえり、『神失墜せしめし邪竜の怒り』の威力が底上げされ、『原初へ回歸する雷神の雷槌』を掻き消し飛ばした。

――

銀は、自らの身に起こった事に困惑していた。

一体、何が起きたというのだろうか。

しかし、そう考える間もなく、銀の意識は一気に遠のいていく。

それと同時に、銀の体に、弾け飛んだ鎖がまた絡みつき、やがてそれは消滅していく。

体が仰け反り、銀の意識は、とうとう闇に沈む。

その時、声が聞こえた。

「後は俺に任せろ」

その聞き覚えのある声に、銀は、一つの安心感を抱いて、言葉を紡いだ。

「まか・・・せた・・・ぞ・・・」

それを最後に、銀の意識は、闇に沈んだ。

真斗は、何故自分の大技が相殺されたのか分からなかった。放てばありとあらゆるものを塵に変える雷神の一撃を放って、それを相殺されたまでが良い。

問題は、その行程だ。

最初は、確実に押していた。その後、何をしたのか、威力があがったが、それでも真斗の一撃を退けるには至らなかった。しかし、その後、さらにその威力が爆発的に上がったのだ。

それが、一体どういう事なのか、真斗には分からなかった。だが、そんな事はどうでも良い。

敵がもう一人増えた。ただそれだけだ。

自分は強い。誰にも負けない。

この世界を殺す事が出来る。

敵が一人増えただけでなんだというのだろうか。

しかし、その敵は、目の前にはいなかった。

そして、場面は変わって――

「ハア・・・ハア・・・」

倒れる剛の傍に、立つ者が一人。

「ハア・・・うぎ・・・いん・・・だよ・・・！」
弘だ。

剛の本気の一撃を受けて、それでもなお立ち上がったのだ。恐ろしい執念である。

そんな弘の手には、一本の剣。

「ハア……ハア……死ねよ……このろくでなしがッ!!」
剣を振り上げ、それを剛の首に突き立てようとした、その瞬間。

「誰がろくでなしだ。この失格兄貴」

濃密な殺意。

それを乗せた一撃が、弘の剣を弾き飛ばす。

「なッ!」

弘の懐には、いつの間にか、一人の少年が入り込んでいた。

「——『撃鎖』」

次の瞬間、弘の腹に、一本の鎖が撃ち込まれる。

「ぐげあ!」

それは弘を吹き飛ばし、地面に叩きつける。

「う……げえええ!」

胃に諸に入ったのか、中の吐瀉物を吐き出す弘。

しかし、その原因を作った本人は、それを気にも止めずに剛を抱きかかえ、どこかへ飛んでいく。

その先は、銀のいる場所。

その少年は、銀の横に剛を横たわらせる。

その時。

「死イねええええええええええええええええええええええ!!」

弘が追いかけてきて、剣を無数に放ってきた。

だが。

「ぬるい」

しかし、その剣は全て、どこからともなく現れた一本の『鎖』によって全て弾かれる。

「バカな……ぐあ!」

さらに、その鎖は鞭のようになり、弘に向かって振るわれ、地面に叩き落す。

「な・・・なんで・・・!?!」

弘は、訳が分からないとでも言うように起き上がる。
しかし、少年は彼に向かってこう言った。

「この程度、『玉藻の前』を使うまでも無い」

纏うは、白と紅の彼岸花を想起させる装束。

その手に持つは、見るも大きな大鎌^{デス・サイス}。

そして彼の周囲で浮遊するのは、一本の『鎖』。

突如、横から巨大な雷撃が迫る。

しかしその一撃は鎖によって防がれる。

「ウウウ・・・」

真斗だ。

しかし、今の一撃は、当たれば確実に戦闘不能させる事が出来る程の威力だった。

だが、それをいとも容易く防がれた。

あの鎖は一体なんだ？

何故自分の雷を防げる。

ありえないありえない。そんな事あつてはならない。

「ううううあああああああああああああ!!!」

真斗は、絶叫し、それだけで電気を発動させる。

しかし、少年は動じない。

「なんだよその表情・・・ひょっとして僕たちを見下してんのか・・・？」

その態度が気に障ったのは、何も真斗だけではない。

「うざいんだよ・・・大赦に加担しているクズの分際で・・・僕たちを見下すなああああああああ!!!」

弘の体から無数の剣が出現する。

それはまさしく針の筵^{むしろ}。

近付くもの全て斬り刻むという意思表示。

しかしそれでも、彼は、動じない。

「別に、見下してなんていないさ」

少年は、地面に左手を置く。

「お前らもお前らで、ギリギリの戦いしてる。それに、俺も、これが最後だって覚悟してるんだ」

左手から、何か流れ込んでくる。

「だから、お前らはここで倒して、その後、俺の戦いを全部終わらせる。だから——」

少年——不道千景は、戦う事を選んだ。

「——出番だ『玉藻の前』」

大切なものを、捧げて。

「こいよ。俺が相手だ」

千景は、襲い掛かってくる脅威二つを迎え撃つ。

星を穿つ

「おおおおおおおおおおおおおおおッッッッッ!!!!」
「はあああああああああああああああッッッッ!!!!」

翼と美森が、敵の集団に突っ込んで行く。

目の前には、複数のバーテックスだけでなく、その成り損ないの星屑。

翼が、目の前に出てきたピスケスの頭をぶん殴る。

その右腕についていたボウガン——バリスタが叩きつけられると同時に、極太の杭がピスケスの頭部を貫通。その中にある御霊まで貫いて爆散させる。

そこへサジタリウスの槍のような矢が飛んでくる。

翼はその矢をいとも容易く弾き飛ばし、お返しとばかりに杭を発射しようとする。

しかし、そこへレオが放った火炎弾が飛んできて、直撃もせず空中で爆発。

「ぐう．．!?」

その余波で狙いが狂い、放たれた杭はサジタリウスの体の一部を吹き飛ばすだけにとどまってしまう。

だがその直後に、レオに無数の砲撃が降り注ぐ。

「翼君の邪魔をしないでッ!!」

美森が戦艦から砲撃を乱射しているのだ。

しかし美森が一体に集中している状態を、敵が逃す筈がない。

美森に向かって、スコープオが尾を振るう。

「ッ!」

尾針が直撃、しかし精霊の張る障壁によって貫通はしない。

だが船体は揺れる。

「くッ．．．このおー!」

だが美森はすかさず砲門の一つをスコープオに向かって発砲。

直撃し、スコープオは下がる。

だが、そこへカプリコーンが迫ってくる。

四本あるその足のうち一つを美森に向かって発射。

「ッ!?!」

「須美ちゃん!」

そこへ翼が滑り込み、左腕を振りかぶる。

「ゼエアアアアアアアッ!!」

そのまま迫ってくる足に叩きつける。

「スマッシュユッ!!」

叩きつけるのと同時にバリスタから杭打ち機のように杭が足に叩きつけられその足が爆散する。

だが、本体を破壊するには至らない。

しかしそこへキャンサーの反射板が迫ってくる。

「ッ!!」

翼はそれを両手のバリスタを使って射撃、破壊する。

だが、その一瞬の隙の間に、カプリコーンが残った三本の足を纏め上げてそれを翼と美森に向かって刺しかかる。

「なッ!?!」

翼はそれを両手を交差する事によって受け止めるも、防御面で何の力も持たない今の翼の状態では弾き飛ばされるのが——オチ。

「うわああああ!?!」

「きやああああ!?!」

美森もろとも吹き飛ばされ、それと同時に、二人の満開が強制解除される。

「ッ!」

しかし翼はすぐさま態勢を立て直し、三郎の能力で飛行。美森を拾い、追撃してきたサジタリウスの攻撃をかわす。

「須美ちゃん、大丈夫!?!」

「ええ……」

見た所、身体機能に障害はみられない。

だとすれば……

「胃の感覚が……」

「そうか……」

そこへレオの火炎弾が迫る。

「須美ちゃん！投げるよ！」

「ええー！」

翼は、美森を投げ飛ばし、自分は他の敵へ向かう。

その間に美森は狙撃銃とファンネルもどきを使って周囲に星屑を屠って満開ゲージを貯めにかかる。

「ダアアアアアアアッ!!」

翼はタウラスに襲い掛かり、その巨体に拳を叩きつける。

そして、そのまま駆け上がりながらその巨体に連続して拳を、それと同時に矢を打ち込み続ける。

その間に他のバーテックスから攻撃がしかけられるも、その間に先に美森の満開ゲージが溜まり、再度満開を発動する。

「満開ッ!!」

青い光を巻き散らして再び戦艦を呼び出した美森。

「全主砲、って——ッ!!!」

砲撃が全てのバーテックスを襲う。

しかし決定打にはならず、殺しそこねる。

だが、その間に再び翼の満開ゲージが溜まる。

「満開ッ!!」

黄金の光を巻き散らして、再び翼は敵に飛びかかる。

「落ちろおおおおおおおッ!!」

タウラスにバリスタを叩きつけ、杭を打ち込む。

しかし、直撃にならず。

ならばと、翼は両手のバリスタをタウラスに押し付けるなり、連続発射。

間髪無しに放たれる杭の連射は、まるでレーザーのようにタウラスの体を穿つ。

翼は、それを振り上げ、一気にタウラスを両断する。

その先に御霊があったのか、いとも容易くにタウラスの体は爆散する。

その背後からスコープオが再び尾を振るおうとするが、そこへ無数

の砲撃が叩き込まれる。

「消えろッ!!」

美森の言葉通り、スコープオは跡形も無く消し飛んだ。

御霊が爆散していくなかで、その美森に向かって、カプリコーンが再び足の一撃を加えようとする。

しかし、そこへ翼が横からバリスタを叩きつける。

「うせろ」

ガキンツッ!という音と共に、カプリコーンの本体に杭が撃ち込まれ、爆散する。

残るは、レオ、サジタリウス、キャンサーの三体のみ。

「須美ちゃん!」

「ええ!」

だが、それでも二人は止まらない。

レオの一撃で翼の満開が解ける。

「ッ!」

そこで、翼の体に確かな変化が起きる。

両足が動かない。

それ以前に、右腕に補助ギミックがつかれているから、これで四肢が完全に死んだ事になる。

翼の満開の代償は二カ所同時の身体機能剥奪。ゲージ二つ分の力を使っているのだ。これぐらい当たり前だ。

しかし美森が前線を支え、再び翼が満開すれば、今度は美森の満開が解かれる。

そして、美森は、視界の片方が消えた事に気が付く。

だが、それでも――

キャンサーの反射板を破壊し尽くし、その頭に翼がバリスタを叩きつけ、杭を打ち込み爆散させる。

美森がサジタリウスに向かって砲火を浴びせ、御霊を破壊して消滅させる。

残るは、レオのみ。

しかし。

「ツ!?!さっきよりでかい・・・!?!」

そう、レオの姿が先ほどよりも大きくなっているのだ。

「周囲のザコを吸収したのか・・・!」

バーテックスは、融合する事で、本来生物が何十何百何千年とかけて成し遂げる『進化』を促すのだ。

レオは、それを今やって、何かしら自身を強化したのだ。

だが、それで止まる二人では無い。

翼が突っ込み、美森が主砲を放つ。

だが、レオは火炎弾を作り出すや、それを美森の砲撃に叩きつけてかき消した。

「そんな!?!」

それに美森は驚く。

バーテックスが防御をした。

本体バーテックスは防御なんて事はしない。強力な再生能力と現代兵器が効かない彼らは、そもそも防御をするという発想そのものが産まれない。それ以前に、彼らにはそのような危機感を感じる知性は存在しない。

そんな事をした存在といえ、あのオフイクスしかない。

ならば、何故、その様な事を――

「まさか・・・その知性を手に入れたっていうの!?!」

そうとしか考えられない。

そう考えている間に、レオが再び火炎弾を発射。

しかも、集束させたものだ。

その軌道の先には翼がいる。

「キャノンボルトツ!!」

しかし翼はその火炎弾を迎撃、相殺してさらにレオをに突っ込もうとする。

だが。

「ツ!?!」

火炎弾の次に火炎弾が迫ってきていた。

一撃目の影に二撃目を隠していたのだ。

その直撃を、翼は諸に受ける。

「ぐあああああ!?!」

衝撃によって満開が解除される。

「翼君ー!」

美森はすぐさま翼の元へ向かおうとするが、そこへレオがあらかじめ用意していた火炎弾が襲い掛かる。

「ぎやあああああ!?!」

それによって美森も満開を解除される。

「くう．．．!?!」

そして、実感する。

音が聞こえない事に。

(ああ．．．これで翼君の声を聞けなくなってしまった．．．)
美森は、落下しながらそう思いふけり、ファンネルを使って周囲の敵を殺しまくる。

そしてゲージが溜まったところでまた満開。

(それでも、まだ戦える!)

まだ片目が見えるのだ。

だから、まだ戦える。

一方の翼は――

(参ったな．．．)

残っていた左耳の聴覚さえも失い、さらには内臓の一部と来た。だけど、まだ戦う事は出来る。

(頼む、動いてくれよ．．．)

翼は、一反木綿の力を使って、両腕を強制的に動かし、周囲の星屑を葬る。

そして、再び満開『金弓箭』を発動する。

(たぶん、これが最後だ．．．)

そう思いながら、翼は飛び、美森の方へ視線を向ける。

そこには、覚悟を決めたかのように凜とした態度で敵を見据える美森の姿があった。

その美森と、目が合う。

——これで、最後だよ。

——うん、分かってる。

美森は、ふと、後ろを見た。

そこにいるであろう、友奈に向かって。

(友奈ちゃん……)

もし、最後に会えるのなら——

レオが、火炎弾を放つ。

それと同時に、美森と翼がレオに向かって突撃を開始する。

「我——」

美森は、叫ぶ。

「——敵軍二特攻セリツ!!!」

砲門にエネルギーを集束させる。

レオが、火炎弾を連射する。

そのほとんどが、美森に直撃する。

「ぐ……うううううう……!!!」

苦悶の声を挙げる美森

しかし、美森はそれをお構い無しに、一気にその火炎弾の嵐の中を突っ切る。

「大和魂、舐めるなああああああああああああ!!!」

そして、美森は戦艦と共にレオに激突。それと同時に大爆発を巻き起こす。

「——我、任務ヲ……完遂……セ……リ……」

吹き飛ばされ、満開を解除し、落下していく。

——友奈ちゃん。

そして、その青い爆発は、うずくまっていた友奈に届いた。

「……とうとう……さん……さん……？」

顔を上げ、友奈は、その爆発を目撃する。

そして、その中を落ちていく、一つの光を。

「東郷さん……！」

その時、友奈の体を、何かの衝動が駆け抜ける。

立ち上がり、友奈は走り出し、その光に向かって走り出す。

そして、外角を美森の特攻によつて全て吹き飛ばされたレオの御霊は、しかし最後の悪あがきと言わんばかりか周囲の残った星屑をかき集めて、自らをもう一つの太陽として形成した。

そのまま、神樹を焼かんと言わんばかりに突撃を開始する。

しかし、それを逃がす程、翼は甘くなかった。

「させないよ……絶対にツ!!!」

両手のバリスタのありつただけの力を込め、翼は、その御霊に突撃する。

周囲の星屑が、それを妨害しようとするが、その外せば確実に自滅するその技は、もはや誰にも止められない。

「——荒れ狂え、無限の光よ」

光が螺旋を描き、その発射台に、強大な光の杭が形成される。

「我、楯をもって守られし者。しかし其の楯を裏返し、今こそ反撃の一手を刻む——」

翼は、二丁のバリスタを合わせ、まるで突撃槍のように構える。

「括目せよ。これこそ我が生き様——万人守る、我が信念——
——ツ!!!」

そして、翼はレオの御霊に向かって激突する。

「——撃ち抜け『ゴルト・デイザスター金弓箭・万物必懐』ツ!!!」

黄金の輝きと赤い太陽が真正面から激突する。

「ぐう……ああああ……!!!」

太陽。

それは、科学的に言えば膨大なエネルギーの塊。

また、神話において、その光はありとあらゆる不浄を振り払う。

レオの御霊によってつくられたその太陽は、神樹こそがその穢れと言わんばかりに突撃を続け、翼をそのまま焼き尽くさんと迫る。

翼は、その圧倒的熱量の前に、今まさに押し潰されようとしていた。

「ぐう……ううう……!!」

押されている。このままではやられてしまう。

負けてしまう。これに負ければ、全てが終わってしまう。

そして、何より——美森が——須美が死ぬ。

「……させるものか」

翼は、さらにバリスタのつけられた腕に力を込める。

「絶対に、それだけはさせない……」

人は、強い。

どんな困難にあっても、どんなに辛い目にあっても、どんなにくじけても、何度だって立ち上がったのだ。

だから、自分もここで立ち上がろう。

逃げろと言われても、絶対に逃げない。この想いだけは、嘘にしないから。

だから、だから——

「——土居球子さん——伊予島杏さん——」

自分の端末に込められた想いの主に、翼は叫ぶ。

「僕に——全てを守る力を——」

その瞬間、翼の左右に、二体の精霊が現れる。

片方は車輪の中央に炎が燃えている妖怪、片方は綺麗な白い着物をまとった女性。

その二体が、翼の両腕のバリスタに片方ずつ入ったかと思うと、右のバリスタからは冷気が、左のバリスタからは火炎が舞い上がった。

十分だった。

これでいい。今は、これで良い――

「八神翔琉は……任せたよ……夏凜……ちゃん……」

そして、翼の意識は、闇に沈んだ。

そして、美森は――

根の上に仰向けに横たわっていた。

その上、彼女の体は少しも動いていない。

そんな彼女に、一人駆け寄る者がいた。

「東郷さああああああん!!!」

友奈だ。

友奈は息を切らしながら、そして、その目に涙を貯めながら、美森に駆け寄り、抱き寄せる。

「東郷さん！東郷さん！起きてー！」

必至にゆすり、彼女の意識を無理矢理叩き起こそうとする。

「ん……」

その中で、美森が確かにその相貌を開いた。

しかし、その目に光は無かった。

「もしかして……友奈ちゃん？」

美森が、そう言ってくる。

そこで、友奈はどういえば良いのか分からなかった。

「ごめんね……両目と両耳を持っていかれたから、分からないんだ……」

「ツ……そんな……」

友奈の表情が絶望に染まる。

「友奈ちゃん……」

美森は、その手を上に向かって伸ばす。

友奈は、思わずその手を取る。

「ああ、この手は友奈ちゃんだ・・・」

美森はさぞ安心したように微笑む。

それに、友奈は思わず美森の手を握る手に力を込めてしまう。

「友奈ちゃん・・・怒ってるよね・・・友奈ちゃんに、酷い事言つて、壁を破壊しておきながら、どうして今度はこの世界を守る為に戦ったのかって・・・自分勝手・・・だよね・・・」

「そんな・・・事・・・」

「でもね・・・それでも・・・友奈ちゃんには笑顔でいて欲しかった・・・友奈ちゃんの悲しむ姿を見たくなかった・・・これ以上、皆を苦しめたくなかった・・・だけど、友奈ちゃんは必ず、私を止めに来るって思った。だから、あんな事、言っちゃったんだ・・・」

美森の両目から涙が流れる。

それはきつと、心が苦しいからだろう。

「東郷さん・・・」

友奈は、それに、どうしようもないやるせなさを感じていた。

「——ごめんね」

美森が、謝る。

「あんな事を、言っちゃって・・・」

「違うよ・・・謝るのは私の方だよ・・・」

「友奈ちゃんは、いつも他人の事ばかり優先しすぎるけど、それが、友奈ちゃんの優しさだって信じてる。黙っているのは、友奈ちゃんの悪い所だけど、それは友奈ちゃんの優しさからくるものだって知っている」

「ダメだよ・・・こんな私を許しちゃだめだよ・・・」

「友奈ちゃんは、誰よりも優しいって知ってる。友奈ちゃんは、他人の為ならどんな怖い事にも向かっていける。だからね——」

「東郷さん・・・私・・・わたし・・・!」

美森は、微笑んで、告げる。

「——友奈ちゃんは、勇者だよ」

その言葉が、友奈の心に突き刺さる。

「がん・・・ばって・・・ゆう・・・な・・・ちゃ・・・」

それを最後に、美森の体から力が抜ける。

「とう……う……さん……」

美森が告げた、最後の一言。

それに、胸が締め付けられ、やがて、その想いは、友奈の両目から溢れ出る。

「う……う……！」

「——くだらない」

突如、背後で聞こえた声。

「何が勇者よ。何が優しいよ。そんなくだらない事を告げて、わざわざ力尽きる事に、一体何を掛けているのよ」

その声の正体を、友奈は知っている。

襲撃者の中で、唯一友奈と同じ格闘タイプの存在。

千景の幼馴染の、稲成幸奈。

「そういう奴を、馬鹿っていうのよ」

幸奈は、友奈に向かってそう吐き捨てた。

まるで見下すかのように、そして、小馬鹿にするかのように彼女は友奈を見ていた。

しかし……

「……取り消して」

「ん？」

友奈は、美森を地面に置くと、立ち上がって、振り向いた。

「東郷さんに向かっていった、馬鹿って言葉を取り消してツ!!」

ここで友奈は、初めて『怒り』という激情に駆られた。

それに対して幸奈は——

「貴方に言われる筋合いは無いわ。命懸けの勝負で命かけない貴方なんかにね」

それは、まさしく正論であろう。

だけど。

「そうだね。私は貴方との戦いで、全力を出してこなかったよ」

友奈は、ポケットに手をつ突っ込む。そこから、スマホを取り出す。『だけど、気が変わった』

そこで幸奈は気が付く。

友奈の雰囲気明らかに変わっている事に。

「ここで今、貴方をぶん殴るッ!!!」

友奈が、アプリを起動する。

直後、赤い炎が舞い上がり、友奈を包み込む。

その姿が、やがて、山桜を想起させる装束へと変化する。

「——ぶん殴る、ですって……?」

それと同時に、幸奈の周囲を、黒い風が渦巻く。

「それはごっちの科白よ。徹底的に叩きのめしてあげるわ」

赤い炎と黒い風。

結城友奈と稲成幸奈。

双方、睨み合い、やがて、地面を蹴ってその拳をぶつけ合う。

桜と黒の戦いが、ここで幕を切って落とされた。

そして……

因縁の戦いが始まった様子を、遠くで見ている、例の女性がいた。

しかし、彼女が戦いに参加しない。

「・・・せめて、因縁にケリはつけるべきよね」
女性は、嫌らしい笑みで真っ直ぐに激戦区を見ていた。

究極の聖戦

それはまさしく、ただの人間には認識できない、神速の戦いだ。剣が錯綜し、斬撃が飛び交い、血が舞い上がる。

二人の戦いは、そんなものだった。

「うおおおおおおおおおおおッ!!!」

「はあああああああああああッ!!!」

夏凜と翔琉の、神速ともいえる戦いは、たった数百にも及ぶ剣の衝突が、たった十秒以下で行われていた。

否、互いに数十回剣を振る間に時間はたった一秒しかたっていないのだ。

威力と速さのある両手持ちの夏凜に対して、手数で押す双剣の翔琉。

その二人の実力は拮抗していた——否。

「遅いッ!!」

「ぐお!!」

夏凜が圧倒していた。

夏凜の下段から一撃が翔琉を仰け反らせ、その間に腹に一閃。

翔琉はどうか腹を引っ込めるも、その一撃は当たっており、腹から血が噴き出る。

「ぐう・・・!?!」

「ハアアアッ!!」

『鬼気・修羅領域』を使わずにこの速さ。

この『昇華』という力は、確かにすさまじい。もはや満開など必要ないだろう。

しかし、この力は夏凜と春信にしか扱えないと言われている。それもそうだろう。

満開は力の上限を介抱し、その力を上乗せする力。

対して昇華は、力を無理矢理、圧縮してその力を一気に開放する力だ。

満開は、外側が強化したようなものだ。そして昇華は内側の強化す

る力。

だが、その内側強化は、自らの体を摩耗させるだけ。

その摩耗の度合いが比較的、全く無かったのが、春信だけ。

夏凜も同じなのかどうか分からないが、今、夏凜は夏凜を圧倒していた。

「ハア・・・ハア・・・」

翔琉は腹を抑え、膝を着いている。

「どうしたの？さっきの威勢はどうかしたのかしら？」

「パワーアップしたぐらいで調子に乗るなッ!!」

翔琉は立ち上がり、夏凜に斬りかかる。

しかし、夏凜はそれを軽々とかわし、その隙をついて斬りかかる。

だが、翔琉はそれをどうにか防ぐ。だが威力は大きく、下がらせる。

「・・・煩わしい・・・」

「ん？」

「貴様如きに、本気を出さなければならぬとはッ!!!」

突如、翔琉がそう咆哮したかと思うと、明らかに先ほどまでとは段違いの速さで夏凜に迫ってきていた。

「ッ!」

それに目を剥き、夏凜が反応する前に、その横を翔琉が通り過ぎる。

「・・・!?!」

その頬は、斬られていた。

先ほどまで、全くの本気では無かった。

「・・・どんだけの自己中心者よ・・・」

だが、これで分かった。

翔琉は、今、本気になった。

「貴様は殺す、三好夏凜」

「それはごつちの科白よ八神翔琉。叩き斬ってやるわッ!」

双方、沈黙。

しかしその沈黙は間もなく破られる。

同時に地面を蹴り、第一刀を互いに叩きつける。

次の瞬間、二人の姿が消えた。

その直後、周囲の根が蔓が両断され、空気が無数にはじけ飛び、耳が痛い程に大きな金属音が響く。

二人が、もはや肉眼では捉えられない程の速さで動き回っているのだ。

「はあああああああああッ!!」

夏凜が右から横に薙ぐ。しかし翔琉はその一撃を左手の剣で弾いたかと思うと、反撃と言わんばかりに右手の剣を薙ぐ。夏凜は、弾かれた勢いを利用して高速回転。一回転したところで柄頭を剣先に叩きつけ、その軌道を逸らす。

その激しい攻防は、止まる事をしらない。

互いの剣が、互いの体に届き、その身に傷を増やしていく。

その姿は、さながら手を取り合って踊っているかのように見えるが、内心互いに本気で殺す気がかかっている。

そこに愛など好感などの感情は一切無い。

あまりにも激しすぎる攻防。

互いに、力も速さも拮抗している中で、突如として翔琉の剣が光り出す。

「な・・!?!」

「————」 『血肉を喰らい尽くす暗黒の魔剣』

『抜けば死を求め続ける呪剣』

そして、剣はまるで導かれるかのように夏凜に向かって、先ほどとは全く違う速さと恐ろしさで斬りかかってくる。

「くッ!!」

夏凜はその二撃を弾き飛ばすも、その剣は弾かれたにも関わらずぐさま切り返して襲ってくる。

その連撃に、夏凜は防戦一方になってしまう。

「ッ———そっちがその気なら———満開ッ!!!」

瞬間、夏凜の中で赤い光が輝く、しかし翔琉はそれすらお構いなしに斬りかかる。

だが、夏凜も夏凜で先ほどとは段違いなスピードでその双剣を弾き飛ばす。

「ッ!？」

夏凜の姿に、変化はない。

しかし、その体に満ちる力は段違いだ。

本来、『外側』に纏われるべき力を、昇華によって『内側』に閉じ込める事によって、通常の数倍の力を発揮しているのだ。

また剣劇の応酬。

しかし今度は拮抗している。

あまりにも、激しい攻防。

互いの体に沢山の傷を作り出し、血が剣を振るい、体を動かす度に飛び散る。

やがて、二人はその場から消え、樹海の中を駆け抜けながら剣を交える。

夏凜は兄の力と、翼に教えてもらった技術で。翔琉は自身の剣の才と与えられた力で。

まさしく神さえも啞然とする、究極の戦いが繰り広げられていた。剣を打ち合わせる度に空気が爆ぜ、地面が砕け散る。

剣を振るえば空気が裂け、大気が震える。

その全てが、行動した事さえも認識できない程に、速く、ただただ、耳が痛くなるような金属音が響くだけだった。

翔琉の剣が夏凜を後退させる。その夏凜に向かって、翔琉は斬撃を飛ばして迎撃。夏凜はそれを横に回って回避。すぐさま夏凜も斬撃を飛ばして応戦。それをたやすく回避した翔琉は今度は一気に接近、夏凜にさらなる一撃を入れる。しかし夏凜はそれを回転して回避。その回転の勢いそのまま反撃するも翔琉はそれをもう一本の剣で防御。そのままもう片方の剣を引き戻して反撃し、夏凜はそれを僅かに後退して回避。しかしすぐさま踏み止まって剣を上段から振り下ろす。それを弾き返し、余ったもう片方の剣で下段から斬り上げる翔琉。だが、夏凜がありえない勢いで剣を引き戻しその剣を弾き飛ばす。その瞬間、互いの剣が一瞬霞んだかと思いきや金属音が一秒間に十回響き、互いに後退する。

「ツ!!!」

もはや、互いに譲らぬ一進一退の攻防。

恐ろしい程の速さで繰り広げられる剣劇は、互いにもみ認識できない争いだった。

だが、その拮抗は、長く続くはずが無かった。

その拮抗を破ったのは——翔琉だった。

「ッ!?!」

下段から繰り出された一撃が、夏凜を大きく仰け反らせる。

「しまッ——」

そのまま、翔琉は自身の放てる最大の攻撃を繰り出す。

片腕十回、計二十回で繰り出される、超神速攻撃。

その二十連撃が、夏凜を襲う。

その全てが夏凜に直撃し、夏凜の体からおびただしい程の血が舞い上がる。

「あ……が……!?!」

「終わりだ……」

夏凜が、よろめき、翔琉とすれ違うようによろよると前に足を踏み出す。

翔琉は、そのまま自分の勝ちを信じたまま、歩き出す。

さらなる敵を探し出し、殺すために。

果たして、そうだろうか？

倒れ行く夏凜。

体中に斬撃を浴び、その意識は、確かに飛んでいた。

だが、飛んだ意識の中で、彼女は聞いていた。

風の叫びを、樹の足音を、剛の咆哮を、翼の絶叫を、美森の決意を、園子の信頼を、銀の覚悟を。

今更来た、千景の声を。

あの日の、兄の慟哭を――

ザツ、と夏凜は、その場に踏み止まった。

その音に、翔琉は、驚愕する。

そして、ゆつくりと振り向けば、息を上げ、こちらを睨み付ける、血まみれの夏凜がそこに立っていた。

「ハア・・・ハア・・・」

既に、戦う力は残されていない筈なのに。その身に、無数の斬撃を受けた筈なのに。

それなのに、夏凜は立っていた。

「――何故だ」

翔琉は、狼狽する。

「何故そこまでして立ち上がる。何故そこまでして戦うとする。こんな無意味な世界を、何故そこまでして守ろうとする」

「ハア・・・無意味・・・ですって・・・?」

血を滴らせ、夏凜は答える。

「何言ってるのよ・・・全然無意味じゃないわ・・・勇者部に出会った事、勇者になった事、誰かの為に働く事、誰かを助ける事、兄貴の妹に生まれた事。そんな沢山の『意味ある事』の中に、今のアタシのいるの」

今までの思い出があるから、今の自分がある。沢山の、誰かの『意味ある事』が、今の自分を作っている。その意味の中に、友奈がいて、千景がいて、翼がいて、美森がいて、風がいて、樹がいて、剛がいて、園子がいて、銀がいて、そして、兄である春信がいる。

そんな、沢山の意味ある事を成し遂げている人がいるから、今があるのだ。

今日まで、世界は繋がって来たのだ。

だって――

「だって、無駄な事なんて、何一つないのだから――ツ!!!」

それは、夏凜が見つけた出した、自分だけの答え。

今までの事に、無駄な事なんて、何一つ無い。

それが、夏凜の見つけた答えだ。

「だから、アタシはアンタを倒すツ!!」

この世界を、無意味などと言う、この馬鹿を叩き斬る。

「……ふざけるな」

その時、翔琉の殺気が、濃密に膨れ上がった。

「ならば俺の母さんがした事はなんだったんだ。俺の父さんがした事はなんだったんだ。少しでも世界の為に頑張ってきた俺の両親のしてきた事はなんだったんだ。否定され蔑まれ、拳句の果てには揉み消された。それに絶望した俺の両親は自殺し、家に火をつけ、全てを無かった事にしようとした!」

翔琉は嘆く。

「無駄だったのだ!何も残せずに死んでしまったのだ!偉業ともいえる行為を、たかが気に入らないという理由で揉み消されたのだ!なんなのだこの理不尽は!この不条理はツ!!賞賛されるべき者が死に、そうでないものが生きる!!こんな世界を無意味だと言って何が悪いツ!!」

翔琉の二対の剣が、一つにまとまる。そして、その刃に濃密なエネルギーを宿す。

「だから俺はこの世界を殺し、全ての人間の存在意義を無にするツ!!その為ならば、この命捨ててやるツ!!」

それは、ありとあらゆる伝説のおいて、その名を知らぬ者はいないとと言われるほどの、伝説の聖剣。

「――束ねるは我が憤怒、蹴散らすは有象無象」

しかしその剣に込められるのは、憎悪と憤怒、そして暴力。

「――その黄金の身を漆黒に染めてもなお、我は敵を討つ為身を滅ぼさん」

自らの持てる力の全てを持って、翔琉はその闇に染まった聖剣を抜く。

「――全ては、この世の全てを無に帰すため。常世全てを破滅へと導くために」

その名は――

「――『されど悪意を纏いし星の聖剣』ツ!!」

そんな、あまりにも有名で最強の剣を前に、夏凜は何で対抗するべきか。

「――我が御手を持って、神の領域に踏み入る事を赦し給え」

それは、一人の鍛冶師がいきついた、剣製の最奥。

「――一つの間違いなく槌を打ち、一刻のずれも無く火にくべる」

かつて天下を治めた一族を脅かした妖刀を作り出した、刀鍛冶の一族の始祖の、全てを込めた最高の一品。

「――それはまさしく神の一刀、神の剣、願わくば、その刀を創る事を、赦し給え」

その名は――

「――『都牟刈村正』ツ!!」

夏凜の手に、焼けるような熱さが伝わってくる。

その手に握られるのは、刀身が焼かれた鉄のように輝いている刀だ。

それは、まさしく最高の状態を保った、究極の刀。

釜戸の火を纏い、一寸の狂いも無く、一刻のズレも無く創り上げた神域に辿り着きし刀。

立ちほだかるは、星が創り上げた呪われた最強の聖剣。

相對するは、人が到達し創り出した究極の神剣。

されど雌雄を決するのは剣の力では無い。

すなわち、使い手の技。

「行くぞおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ」

「望むところだあああああああああああああッ!!!」

二人がぶつかる。

音速を超え、光速を超え、神速を超える。

斬撃が斬撃を呼び、それと同時に血が舞い上がる。

しかし、それでも二人は剣を振るう事をやめない。

走る二人。その最中にぶつかれば耳が痛くなる程の金属音が鳴り響く。

踏みしめた大地は砕け散り、剣を振るえば大気が裂け、空へ飛べば、そこでも剣戟が始まる。

翔琉が夏凜の胸倉を掴めば地面に叩き落とし、夏凜の肺から空気が全て吐き出される。

しかし、ほぼ無意識化で夏凜は蹴りで翔琉の顔面を蹴っ飛ばす。

吹き飛ばされるもすぐさま態勢を立て直し、再び夏凜に斬りかかる。しかし夏凜も同時に立ち上がり、地面を蹴って翔琉に斬りかかる。

またぶつかり合い、剣閃と血が舞う。

「ハアアアッ!!」

夏凜が剣を振り上げ、一気に振り下ろし、翔琉がそれを受け止める。

「三好春信——すでに役目を終えた勇者けんしが最後の障害とは……これも因果かッ!!」

「ううあああ!!」

夏凜が翔琉を弾き飛ばす。

そして、弾いた所でさらに一太刀入れる。

「ぐうッ!!」

「ハアアアッ!!」

今度は横からの鋭い一閃。

しかし翔琉はそれを下に剣を滑り込ませて上に逸らし、がら空きの腹に一撃を入れる。

「ぐう?」

血が舞い上がる。しかし、夏凜はそれでも止まらない。

もとより、翔琉もそれで止まるとは思っていない。

同時に斬りかかる。

互いに同時に放った一撃が互いの体に入る。
それだけで血しぶきが舞う。

すぐさま反撃に転じたのは翔琉。

蹴りが夏凜の腹に入り、夏凜を後ろへ吹き飛ばす。

それに血を吐く夏凜。しかし踏み止まり、反撃。

片手を剣から離し、その拳で翔琉を殴り飛ばす。

そのまま追撃に入り、翔琉が態勢を立て直し、そのまま鏢迫り合いに持ち込まれる。

互いに押し切らんとありつたけの力を込めて地面を踏みしめる。

しかし、どちらかが押し切るよりも先に、擦り合う事でダイナマイ
ト数百倍のエネルギーにも匹敵するほどの熱量を引き起こした
『^エこれ^クと^ス悪意を纏いし^カ星の^バ聖剣』と『^{ムツカリムラマサ}都牟刈村正』の接触部分が爆発し
た。

「ぐうああ!?!」

「があああ!?!」

お互いに吹き飛ばされ、ここでたった一時の剣戟は終わった。

しかし、それでも、二人は立ち上がる。

互いの持つ願いの為。そして、自分に与えられた^{ロール}役割を果たすため
に。

目の前の敵を、討つ。

雌雄を決するは、たった一振り。

同時に、地面を蹴る夏凜と翔琉。

互いに選んだのは、一方から斬りかかり、一方から斬り抜ける斬撃。そして夏凜は、ここで『鬼気・極限羅刹』の上に『鬼気・修羅領域』を上乘せした。

己の全てを一分の間に使い切る、失敗すれば自滅する諸刃の剣。その力を、たった今使用したのだ。

己が全てを掛けて、相手を斬る為に。

これが最後の一撃。ラスト・チャンス

だから、二人は咆哮する。

互いに切り出すのは自身の持つ、最高の一撃。

翔琉が放つのは自身が最も得意としている、右手のみでの、右斜め上からの斬り下ろし。

対して夏凜が放つのは、同様に、両手で持った刀での、右斜め上からの斬り下ろし。

しかし、その勝負。その速さは——翔琉が勝っていた。

その軌道上、翔琉が今まさに斬ろうとしているのは、夏凜の首。

夏凜の首を斬り飛ばす事で、この戦いを終わらせてようとしているのだ。

このままでは、確実に翔琉の剣が先に到達する。

だが、それがどうした？

もとより、相手がこちらを殺しにかかっているのは当たり前。

ならばこちらは引くのか？否、全力で迎え撃つ。

この一撃は、夏凜が——春信が最も得意としていた剣技。

自分が、兄より劣っているのは、すでに分かり切っている。

ならばどうする。簡単だ。

足りないなら掻き集めろ、至らないなら振り絞れ。一分は惜しい、一秒もいらぬ。

ただ一刀。ただ一振りに、己の全身全霊、魂、全てを掛けて、振り

抜くのだ。

そして駆け抜ける——
——極限の、私おれの最強の一瞬をツ
!!!!

秘奥『蓮華の太刀』

果たして、決着は着いた。

金属音が、響き渡り、鮮血が、舞い上がり、折れた刀身が、宙を舞う。

果たして、その刀身はどちらのものか。

結果は、見れば明らかだった。

「ば……か……な……」

ずるり

そして、

べちやり

そんな音が聞こえた。

そこにあるのは、一人の男の、肩から脇腹にかけて真っ二つにされた、無残な姿だった。

そして、立っている勝者は、その姿を、決して余裕の無い表情で、見ている。

「ハア……ハア……ハア……」

その手に、焼けた鉄の刀は無く、ただの普通の刀がその手にあった。だが、彼女もそこまで持たない。

何故なら——己の全てを使い切ったのだから。

「う……」

仰向けに倒れ、夏凜は空を仰ぎ見る。

遠くから聞こえる轟音。

飛び散った血の匂いはしないが、それでも、誰かが戦っているのは明白だった。

それに、一つの安心感を覚えながら、夏凜は、空に向かって、拳を突き出す。

「——勝ったわ、兄貴」

貴方にだけは負けたくない

「うわああああああ!!」

「ガアアアアアア!!」

二人の叫びが響き、剣と雷が降ってくる。それを千景は鎖を率いて全て弾き飛ばす。

「風遁」

そのまま千景は駆け抜け、左手に集束させた風圧を前方に放つ。

巨大な大気を掌サイズにまで圧縮された空気の戻ろうとする反動は、ミサイルの着弾時の爆発の数倍に匹敵する。

その威力を、まともに喰らう真斗と弘。

だが、二人とも聞いた様子が無い。

「そんなものが効くかよおおおお!!」

「うがああああ!!」

「だろうな」

ふと弘の背後から声が聞こえた。

振り向けばそこには鎌を振りかぶった千景の姿。

だが、千景が鎌を振りかぶる前にその千景に向かって雷が落ちる。

真斗が落としたのだ。

だが、その千景は、雷を喰らった直後に煙となって消滅する。

影分身だ。

「ハ、そんなもので僕たちを——」

馬鹿にしようとして前を見た時、弘の言葉は途切れる。

何故なら、目の前に数百にも達する千景がいたのだから。

そのどれもが、炎やら水から、または土や木を使ってこちらを攻撃しようとしていた。

それに対してどう対処すべきか。

「舐めるなあああああ!!」

「ウガアアアアアア!!」

弘は体中にある無数の剣を射出。真斗は雷を落としまくって千景たちを殺しまくる。

その中にいる本体を殺すという、当たらぬ鉄砲も数撃ちや当たる戦法を使ってきたのだ。

しかしそれは無駄な行為に他ならない。

何故なら、その中に本体はいないのだから。

「甘いんだよ」

「な!？」

「!？」

気付けば、二人は斬られていた。

地面から、まるで水中に潜水していたかのように、二人の足元から出てきたのだ。

片方一撃、計二撃。

その二撃が、二人の体から鮮血を舞い上がらせる。

そして、真斗と弘の二人は狼狽する。

真斗は絶対に傷付かない筈の体の信頼に、弘は剣に纏われている筈の自分の体に。

「な……んで……!？」

「ドウシテエエエ!？」

しかし、それで千景の攻撃は終わらない。

「おいどうした?その程度か?」

挑発。それに乗らない二人では無い。

「バカにするなあああああ!!」

「ウガアアアア!!」

二人同時に襲い掛かってくる。

「黙れよクズが!こんな世界守ってるクズの分際で、僕をバカにするなあああ!!」

両手に持っている細剣を振るい、千景を追い詰めようとする弘。

しかし、その言葉は、真斗との猛攻と共に唐突に途切れる事になる。

じやりん、という金属がこすれる音と共に、ガキンツ!という鈍い音が聞こえた。

そして、二人は自らの体に鈍色の鎖が纏わりついている事に気付く。

「な!？」

「ん!？」

「言わせて貰うけどさ。ただ相手を下に見る事しか出来ない馬鹿を馬鹿と言って何が悪い」

次の瞬間、真斗と弘の顔面に、とてつもない衝撃が走る。

それと同時に二人は宙を舞い、地面に落下する。

彼らを吹き飛ばしたのは、変形した土だ。

千景は、足元の地面を変形させて真斗と弘の顔面を殴ったのだ。

吹っ飛んでいった二人を見送る千景。

しかし土煙が舞う中、突如として土煙が吹き飛び、代わりに直線状の雷が千景を襲う。

しかし千景はそれが分かっていたかのように鎖を操作。

四本の鎖を、円状にし、さらにその中心を二本の鎖で交差させ、はみ出た部分を背後へ伸ばす。

そしてその鎖に雷が叩きつけられると、その電気は全て千景の背後へ逃げてしまい、霧散していった。

「ふざけるなよ……」

そして、今度は空中に無数に装填された剣。

「お前のような奴が、僕の前に立つちやいけないんだ……こんなゴミのような世界が、存在しちやいけないんだ……」

立ち上がるのは、もはや人とは思えない形相の少年。

「こんな世界は、壊れるべきなんだああああああああああああああああああ!!!」

そう、叫んで、空中に装填された剣を全て発射する——事は無かった。

次の瞬間、どこからともなく飛んできた鎖が、空中に装填された数千にも及ぶ剣が全て砕かれた。

「……は？」

「お前のくだらない持論に付き合ってる暇は無い」

そして、今度はあまりにも濃密な殺意。

前を向けば、そこには禍々しい気配を放つ鎌を持った千景の姿。

「そんなにこの世界が嫌なら、さっさと死ねば良かっただろ」

——我呪う、常世全てを。

「だけどお前は死ぬ事が出来なかった、いや、結局死にたくなかったんだな」

——全ての生きとし生けるものに、平等なる死を。

「それは憎しみじゃない、ただ怖かっただけだ。お前はただ死ぬ事を恐れたんだ。だって——」

——故に、これは我が唯一にして最後の真実。

「妹たちの命を、見殺しにしたんだからな」

助けられた筈

——呪い殺され無に帰せ『殺生・大葉刈』。

その時、二人を呪われた凶刃が襲った。

ああ、そうだ……僕は、二人を——見殺しにしたんだ。

千景は、二人を地面に横たわらせる。

その二人からは、規則正しい寝息が聞こえた。

「ふう……なんとか殺さずに済んだ」

その横たわる二人というのは、真斗と弘。

何故、二人が死んでいないのか。

理由としては、玉藻の前の化かす力が大きく関係しているが、理由はもつと別にある。

それは――

突如、遠くで大きな爆発音が聞こえた。

「!?」

それは、海、壁に穴が空いている方向だ。

そこには、黄金の光が輝いていた。

「あれは……」

それを、自ずと自分の仲間が放った光と直感する千景。

ならば、行かなければ。

「間に合ってくれよ……」

千景は、鎖の力を使って、飛ぶ。

「ハアアアアアアアッ!!」

友奈と幸奈が叫ぶ。

そして互いの拳が正面から叩きつけられる。

「ッー」

幸奈が体を捻って友奈の顔面に右足で蹴りを入れようとする。

しかし友奈はしゃがんでそれを回避。

そして幸奈の右脇腹に左でブローを決める。

「ぐう!?!」

さらに左膝で膝蹴りを叩き込み吹き飛ばす。

「がは!?!」

踏み止まって蹴られた脇腹を抑える。

(もともと強いと分かってたけど、ここまでなんて……)

「ハアアッ!!」

友奈が飛びかかってくる。右拳を振りかぶり、幸奈に向かって振り下ろす。

しかし幸奈はそれを左手で受け止める。

「!?!」

「舐めるな」

その直後にカウンターで友奈の顔面に右ストレートを叩きつける。

「ぐう!?!」

思わずよろける友奈。そこへ幸奈のアッパーが腹に叩きつける。

「げあ……!?!」

相当重い攻撃の筈であり、腹を抑えて一歩二歩下がる友奈。

そんな友奈にさらに追撃を仕掛けようとする幸奈。

だが、それよりも、友奈の膝蹴りが幸奈の腹に叩き込まれる。

「があ!?!」

友奈が耐えきって、反撃に転じたのだ。

さらに顔面に左ブロー。さらに右でもう一度ブローをかます。

だが幸奈はその二撃目のブローを防ぐなり友奈の脇腹に右フックを叩き込んだ。

「あ……!?!」

確実に決まった。しかし、友奈はその右手を掴むと無理矢理投げ技に持って行って後方へぶん投げた。

幸奈は空中で態勢を立て直しどうにか着地。

そこへ友奈が右拳を振り上げて迫ってきていた。

だが距離はあった。

その間に幸奈も右拳を振り上げて待ち構える事が出来た。

そして拳が正面衝突する。

鈍い音と共に、互いの腕に衝撃が走る。

やはり互いの力と技量は同等。

ならばなにで差をつける？

「ハアッー」

「!?」

突如幸奈の周囲に黒い風が舞ったかと思ったらそれは強力な風圧になって友奈を吹き飛ばす。

「ぐう!？」

しかし友奈は、その風に一つの肌寒さを感じていた。

幸奈の黒い風の正体は、極寒の吹雪^{フリザード}。

全てを氷漬けにする絶対零度の風が、幸奈の力だ。

吹き飛ばされた友奈は空中で一回転して着地する。

だがそんな友奈へ追撃しない訳が無い。幸奈はすぐさま友奈に襲い掛かる。

しかし、幸奈が友奈に向かって拳を振るう前に、今度は友奈の周囲に赤い炎が舞い上がった。

「ッ!？」

それは、友奈の精霊『火車』の能力。

「ハアアアアッ!!!」

気合の一声と共に炎の勢いで幸奈を吹き飛ばす友奈。
だが幸奈は踏み止まる。

互いに目が合う。

ムカつく。

そう思った瞬間、二人は同時に地面を蹴る。

「アアアアア!!」

拳を振るってぶつける。

燃える拳と凍てつく拳。

互いに正反対の性質を持つ、二つの力。

炎は、熱であり、空気を膨張させ、個体を溶かし、液体を蒸発させる。

対して氷は、冷気である、空気を縮小させ、気体を液体に戻し、液体を固まらせる。

これほど、正反対で似通った力があるだろうか。

拳と拳、炎と冷気。

その二つがぶつかり合い、互いの体をどんどん傷付けていく。

友奈の拳が幸奈に当たればその体に火傷を与え、対して幸奈の拳が友奈の当たればその体の凍傷を与えていく。

その傷は、度合いが過ぎれば感覚が無くなる程の傷だ。

それほどまでに、二人は命掛けで殴り合っているのだ。

そして、クロスカウンターで互いの拳が互いの顔面に叩きつけられ、互いに距離を取る。

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

二人の体は、見るも無残な状態になっている。

殴られた箇所は数え切れず、その体に痣や火傷、凍傷の後が残っている。

たった一回殴られた程度でこれだ。

しかし、それで戦いをやめる二人で無い。

だがこのまま行けば平行線である事も間違いない。
ならどうすれば良いのか。

生憎と、幸奈なら持っている。

「これは、千景君のとの戦いまでにとっておいたかったけど、仕方無いわ・・・」

突如、幸奈の周囲に黒い風が舞い上がる。

「何・・・!?!」

さらに、幸奈の装束が、変化していく。

両腕には、巨大化した手甲。

それはまさしく、巨人の力を圧縮した腕。

「——『彼の者は霜の巨人の王』」

彼女から発せられる冷気は、まさしく殺気そのものだった。

「・・・」

そのあまりの迫力に、友奈はその場に立ち尽くす。

しかし、友奈が呆けている間に、幸奈は体を沈め、そして地面を蹴って一気に友奈に近づく。

「!?!」

だが、そこで友奈は我に帰り、幸奈の振るった右拳を一撃をどうにか受け止める。

だが、いささか威力が強すぎた。

直感的にまともに受ければ体が砕けると感じた友奈は後ろに思いつき飛び、殴られる際のダメージを軽減。しかし吹き飛ばされる際の威力が強すぎて思いつき吹き飛ばされる。

木の根には、精霊の障壁によって叩きつけられる衝撃は緩和された。

だが、幸奈の右拳を受け止めた右腕は、その大部分が凍傷によって凍っていた。

「・・・!?!」

それに声を失う友奈だが、休んでいる事は出来なかった。

幸奈が襲い掛かり、今度は左拳を振るってきたのだ。

それに対して友奈は体を左に傾けその一撃を回避。だがそれだけでは終わらず幸奈の左の蹴りが叩き込まれ吹き飛ばされ、さらに吹き飛ばされる中で追いつかれて蹴り上げられる。

その時点でもあまりにも重い幸奈の攻撃で、友奈の体はすでにボロボロだった。

そこへ止めの両手を組んで振り下ろすダブルスレッジハンマーが友奈の背中に叩き込まれ、幸奈の斜め下前方の地面に叩きつけられる。

「ぐ……あ……」

重い。あまりにも重い。

そして痛い。

あの状態の幸奈は、相当なパワーアップをしていた。

力だけではなく、速さも段違いに上がっている。

まともに受ければ、ただでは済まない。

いや、すでもうただでは済まない状態になっている。

こうして地面に倒れ伏している間にも、幸奈は刻一刻と近付いてくる。

このままでは負けてしまう。

(い……や……だ……)

これが、世界の命運をかけた戦い、というものがある。

しかし、例え試合であろうと死者の出ないケンカであろうと――

――幸奈にだけは――この女にだけは、負けたくない。

「ッ……」

友奈は、歯を食い縛って、自らの端末を取り出し、操作する。

「おね……がい……」

今、この状況を打開できる、最後の手段。

今まで、おそらく自分の心情を察していたからこそ出て来てくれなかったのだろう、その存在。

沢山の人たちに隠し事をしてきた自分が今更おこがましいのかもしれない。だけど、それでも、今だけは、絶対に負けたくない。

絶対に、勝ちたい。

果たして、願いが届いたのかどうかは分からない。

だけど、そう思うしかない。

目の前に、一体の精霊が現れた。

それは、こちらを見下すかのように睨み付けていた。

無様に地面に倒れ伏す、自分を嘲笑うかのように。

ああ、まさしくその通りだ。自分は無様だ。

あれほどの啖呵を切っておいて、こんな様なのだから。

だけど、だからこそ、今、彼の力が欲しいのだ。

友奈は、彼に向かって手を伸ばす。

そして、叫ぶ。

「来い——」

「『酒吞童子』」

幸奈は、すでに拳を振り上げて、友奈を捉えていた。
友奈に、自分に勝つ手段は、無い。
だから、自分の勝ち揺るがない。
そう、その筈だった。

なのに友奈は立ち上がり、幸奈の腹にこれまでにないほどの重い打撃を食らわせた。

「が・・・あ・・・!？」
それだけで、十分だった。

油断していた。それが、幸奈に多大なるダメージを与えた。腹への一撃、そして、胸への二撃目。

それだけで、幸奈は一気に友奈と同じ状態にされた。

「げほ!?がは．．!?」

思わず膝をついて、項垂れる。

あまりにも予想外の反撃に、反応出来なかった。

反撃出来た事。それはどうでも良い。

問題なのは、自分と同等以上の打撃を与えて来た事だ。

見上げれば、そこには、巨大な手甲を持った、友奈の姿。

その頭からは二本の角を生やし、装束は別のものへと変化していた。

その姿は、さながら、『鬼』だった。

そんな姿に突然変異した友奈に、幸奈は驚きを隠せない。

今の勇者システムには、切り札の機能を搭載されていない。むしろ、排除されている筈だ。

なのに、何故彼女はその切り札を使っているのか。

だが、そんな疑問に答える前に、友奈は言った。

「来い」

友奈は構えて幸奈を睨み付ける。

それを聞いた幸奈は、一瞬呆け、そしてすぐに表情を引き締め立ち上がる。

「上等よ」

幸奈も、構えた。

巨人と鬼。

互いに、力の象徴とさえ言われる存在。

そんな二人が、今まさに衝突する。

「ハアアアアアッ!!!」

絶叫、そして、拳がぶつかり合う。

それだけで大気が震え、地面がへこむ。

「ッ!!」

互いの腕に返ってくる衝撃に顔を歪めつつも、二撃目を放つ二人。

今度の攻撃は、すれ違って互いの胸に叩きつけられる。

「がほ……!?!」

「げお……!?!」

あまりにも強力な一撃に、互いの口から血が飛び散る。

だが、それでもやめない。

互いの殴られた腹から酷い鈍痛が響く。意識が持っていないかそれになる。

それでも、それでも――

この女にだけは負けたくない。

そこから先は、誰が見ても無残な、泥仕合。

しかし両者倒れぬ、激しい殴り合い。

拳がぶつかり合い、脚がぶつかり合い、互いの打撃が互いに叩き込まれるたびに血が飛び散り、痣が深くなり、骨が砕ける。

しかし、殴られる度、だけではない。

二人の使う、『スリュム』と『酒呑童子』。

互いに、力の権化とされる存在ではあるが、そんな規格外の力を身に纏って、果たして体に負荷はかからないのだろうか？

答えは、否。

勇者の力は、どれも『殻』の力。

力を身に纏うという事は、力の全てを外側に纏うという事。中身は一切強化されないのだ。

つまり、身に纏う力によって、外側は強化される。だが、それによって体は強制的に動く為に、自分の許容限度を超えた力に耐えられず、おのずと自滅してしまうのだ。

その点、千景の使う『玉藻の前』は、肉体破壊という点ではその心配はほとんどない。

しかし戦える。痛みなど涙が出る程度。足が動く。腕も動く。しっかりと地面にその足を踏みしめていれば、何の問題も無い。

だから殴り合え。

その場から一步も引かず、ただただ目の前の女を殴れ。

無様に、激しく、苛烈に殴り合え。

前に進め。決して物怖じするな。

体が壊れるならなんだ。相手を壊す事だけ考えろ。他の事は何も考えるな。

欲しいものがあるなら奪え。己が感情に従え。拒絶するな。受け入れろ。欲のままに。傷害を壊していけ。

さあ拳を振るえ。避ける事もするな。負けて後退するなどありえない。ただ前に進め。どれほどの相手だろうと、奪う事に一切の躊躇いを捨てろ。

欲しいと思うなら、勝ち取れ。

友奈と幸奈が、咆哮し、拳を振るう。そして、それが相手に叩き込まれる度に、血が舞い上がる。

そこからは、二人とも避ける事を放棄し、ただただ相手を捻じ伏せる為に、力のみでの真つ向勝負に出た。

互いに一步も引かず、倒れる事はせず、ただただ目の前の相手に打ち勝つ事しか考えず。

いつしか、二人は相手しか見えなくなっていた。

もし、出会い方が違っていたら、二人は友達になれただろうか。

もし、敵同士でなければ、二人はこんな戦いをしなくてよかったのではないのだろうか。

しかし、二人の思考に、もはやそんな事は片隅にも無かった。

幸奈の拳が、友奈の顔面を捉える。

「ア、――」

友奈は、それだけを漏らした。
確実に入った会心の一撃。

後ろに向かって、ゆっくり倒れ込む。

しかし——友奈は踏み止まった。

「ぎ……あ……」

「そんな……!?!」

幸奈は驚愕に、そして友奈は拳を振るうべき敵に狙いを定める為に、目を見開いた。

「あああああああああッ!!」

そして、友奈の右拳が、幸奈の顔面に叩き込まれ、そして、吹き飛ばした。

幸奈は地面に倒れ伏し、そして、友奈も地面に倒れた。

それと同時に、友奈の変身が解除され、酒吞童子も解除された。

「ハア……ハア……ハア……」

体中が、痛みを通り越して何も感じない。動かない。

血が物凄い勢いで体中から流れ出ている。

立ち上がる事も出来ない。

「う……ぼええ……」

さらには血を大量に吐き出す。

しかし、それでも、友奈は、幸奈を殴り飛ばした。

「……か……た……」

そう、眩いた時。

振れば凍らされ、吹き飛ばされる、死の風。

それに、友奈は呆気に取りられる他なかった。

そしてその竜巻は、徐々に友奈に近付いていき、そして友奈に到達する。

「ああああああああああああああああああ!!?」

振れた友奈の肘が、凍り、全く別の痛みを伴い、友奈を絶叫させた。このままでは凍る。風に吹き飛ばされるよりも速く、凍らされてしまふ。

しかし体が動かない。死ぬ。死んでしまふ。嫌だ。死にたくない。逃げよう。どこに。どうやって。

友奈の体は動かない。その間に友奈の左肘は凍っていく。

しかし突如として友奈の体が何かに引っ張られ、竜巻から引き離される。

浮遊感。その後、背中を叩きつけられる。

「あぐっ!?!」

叩きつけられた衝撃で、友奈は一瞬視界を明滅させる。

だが、今度は左肘を温められるような感覚を感じ、そちらに目を向ければ、火車が友奈の凍った肘を溶かそうとしていた。

「火車・・・」

さらに、友奈の頬を何かが舐める。

「牛鬼・・・」

牛鬼だ。まるで、彼女を慰めるかのように、顔についた血を舐めとっていた。

そして、ふと首をあげれば、目の前には、こちらに背を向ける酒呑童子の姿があった。

「酒呑童子・・・」

彼の見る方向。そこには、あの黒い竜巻を巻き起こす幸奈の姿が。そこで、友奈の視界が急激に狭まる。否、遠視を発動させられる。

「・・・!?!」

そこで、友奈は見た。幸奈の体に霜が降り、さらには、その体に亀裂が入ってきている事を。

あの竜巻は、幸奈の体さえも傷付けて引き起こしているのだ。
あのままでは、いずれ体中が凍り、砕けてしまう。

そうなったら、彼女は死んでしまう。

そんなのは、嫌だ。

例え、負けたくない相手だとしても、死んでしまうのは、嫌だ。

誰かが死ぬなんて、そんなの、認められない。

それに、彼女が死ぬ事を————千景が、望むはずが無い。

友奈は、体を無理矢理動かさず、うつ伏せになり、酒呑童子の方へ這いずる。

「牛……鬼……火……車……」

そして、手を伸ばす。

「酒……呑……童……子……！」

歯を食い縛って、友奈は、もう一度、言う。

「おね……がい……もう、一度……力を……」

私の全てを代償にして、力を貸して。

果たして、願いは聞き届けられた。

酒呑童子が振り向き、友奈を見下す。

しかし、友奈は笑う。

「……ありがとう」

一度、深呼吸をして、友奈は黒い竜巻を見つめ、叫ぶ。

「ううううううううああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああ
ああ　ああ　ああ　ああ　ああ　ああ　ああ　ああ　ああ　ああ　ああ　ああ　ああ
あああああああああああああああああああああああああ」

その絶叫に、答えるかのように、友奈の体が炎に包まれ、その姿を、勇者装束へと変える。さらに、その背後に、見るも巨大な、剛腕が出る。友奈の装束をさらに変化させる。

そして極めつけに、友奈の頭部に二本の角が生え、その歯は恐ろしい程に尖りだす。

それは、紛れも無い『鬼』。

この世の全てを力と暴力で奪ってきた、暴虐の化身。

おおよそ友奈の性格上、合わないと思うだろう。

しかしそれは否、断じて——否ッ!!!

彼女は傲慢である。

己の力で他人を笑顔に出来るという傲慢を持っている。

彼女は強欲である。

他人の笑顔を勝ち取る為になんでもする強欲さを持っている。

彼女は横暴である。

勇者部という立場を利用し、他人の笑顔を横取る横暴さを持っている。

彼女は、鬼である。

自らの障害には、一切の容赦を問わない鬼である。

即ち

——彼女は目の前の竜巻を叩きのめし、幸奈を助ける。

「がああああああああああああああああああああああ!!!」

満開の力で、飛翔し、友奈は、その剛腕を竜巻に叩きつける。

物凄い力が反発してくる。

その重さに、友奈は思わず顔をしかめる。

既に自身の体はボロボロ。満開によって力を強化し自らを強化したとはいえ、体の傷が治る訳ではない。

これが長引けば長引くほど、友奈の体はどんどん傷付いていく。

このままいけば、取り返しのつかない事になるかもしれない。

(かまわ・・・ない・・・!)

取り返しのつかない。それならそれでも構わない。

だって、誰かが死ぬのなんて、そんなの嫌だから。

傲慢と言われようとも構わない。偽善だと言われようと構わない。

それでも、友奈は、諦めない。

だって、彼女は、鬼であり、一人の少女であり――

勇者なのだから。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッッ!!!」

竜巻を突き破る。それと同時に剛腕が砕け散る。

しかし、その中にも逆回転する風の壁。

それを、今度は酒呑童子によって巨大化した拳を叩きつけ、それさえも突き破る。

そして、突き破ると同時に、酒呑童子の力さえも砕け散り、勇者装

東が元に戻る。

だが、さらに一枚、また逆回転する風の壁があった。

しかし、友奈はそれさえも拳を叩きつけ、突き破る。

何かが碎ける音と共に、友奈の勇者装束が消える。

だが、それで、十分だ。

幸奈に到達すれば、それで、良い。

友奈の指先が、幸奈の胸に触れる。

そこで、目があった。

幸奈は、友奈が来た事で、先ほどまで無かった正気を取り戻した様
だった。

しかし、幸奈は、友奈の姿を認めると、やがて、眠る様に目を閉じ
た。

次の瞬間、幸奈の胸を、友奈の炎が貫いた。

黒い竜巻が消え、幸奈と友奈が落下していく。

二人に意識は無く、成す術も無く、落下していく。

しかし、どこからか金属同士が擦れる音が響いたかと思うと、友奈と幸奈の二人を、一つの影が捕まえ、地面に着地する。

幸奈はすぐに地面に降ろされたが、友奈は、どういう訳か躊躇われた。

「…………お疲れ様」

友奈を支える人物、千景はそう呟くと、すぐに幸奈の横に降ろされた。

立ち上がる千景。

そして、周囲を見渡す。

既にバーテックスは翼と美森の奮闘によって全て消滅している。

だが、まだ樹海化が解除されていない。

その理由は、バーテックスがまだ残っているか、あるいは、まだ壁が修復されていないか。

「……………ここで最後にするか、か」

千景は、振り向く。そして、見上げた。

そこには、頭に妖しく光るリングを頭に、ピンクの髪を靡かせ、腰から純白の翼を生やし、ノースリーブのシャツのようなものと丈の長いスカートを履いた、美しい女性がいた。

「お前が黒幕か」

「まあ、ボス的な立場で言ったらそういう事になるのかしら？」

「天の神の使いとは、随分と派手な装いに身を包んだな」

「それは、貴方も同じではなくて？」

「そうかもな…………まあ、その理由も、この世界の神じゃないなら尚更か」

そう、彼女はこの世界の存在ではない。

事の始まりは三百年前。西暦の時代。

この世界に、異世界の神々が侵攻してきた。

そして異世界の神はこの世界の神々にこう宣言した。

『この世界にいる生命を全て消し、新しい世界を創る』と。

当然、この世界の神々はそれに憤り、戦いが始まり、——そして呆気も無く敗れた。

しかし、異世界の神々は、この世界の神々との戦いで大きく消耗し、自ら手を下す事が出来なくなったために、異世界の神は生物の頂点である、『バーテックス』を作り出して、地上に解き放った。

それによって地上は蹂躪され、この世界の生命は絶滅の危機を迎えた。

生き残った神々は、せめて最後の抵抗として、自ら集まり、今の神樹となったという。

これが、千景が自らが信仰する神から聞いた真実。

「なんでこの世界を狙った」

千景はそう聞いた。

「別に、貴方達に話す義理は無いわ。どうせ死ぬんですもの。話したところで無駄に終わるだけよ」

しかし女性はその質問を蹴っ飛ばした。

「そんな事はさせねえよ。絶対にな」

「いいえ、成し遂げるわ。我らが主の娯楽の為に、貴方達『勇者』には死んでもらうわ」

彼女の周囲に、八つの浮遊する剣の様なものが見れる。

「そうかよ。だったら俺はこの世界を守る為に、お前を倒させて貰う」

千景は構え、九つの尾の毛を逆立たせる。

今、ここに、天と地の代表同士の戦いが始まる。

終わらぬ命などなく、それでも世界は廻り続ける

千景は地面を蹴る。

正直、相手の手の内はさっぱり分からない。

どんな攻撃を仕掛けてくるのか、どんな手段を持っているのか、どんな能力を持っているのか。

それらがさっぱり分からない相手に、いきなり突っ込むのは、あまりにも無謀。

しかし、先手を打たなければ、戦いのペースとやらを相手にとられかねない。

ならばどうするか。

「影分身」

千景は、自分の分身を無数に作り出す。

そして、その分身たちに、軽くていい。とにかく様々な属性で相手を攻撃するように指示を下す。

それを聞き入れた分身たちは、それぞれが様々な属性の攻撃をアモルに向かって仕掛ける。

一人は炎を吐き、一人は水を打ち上げ、一人は雷を落とす。土を変形させてそれを棘状のして飛ばす者もいれば、風を圧縮して作った空気爆弾なるものを直接ぶつけようとする者もいた。

とにかく誰もかれもがなんでもかんでも様々な攻撃を繰り出そうとしている。

しかし、アモルはそれに、微笑した。

次の瞬間、無数の光の軌跡が飛ばされた攻撃、そして、分身たちに逆り、全てを無効化する。

その内の一つが、千景に迫る。

「ッ!?!」

千景はそれをどうにか鎌で防ぐも、その重さに大きく下がる。

「ぐうッ!?!」

「こんな攻撃で、私を仕留められるとでもっ!」

アモルは、挑発するように嘲笑う。その周囲には、あの剣状のファ

ンネルのようなもの。

「……ぬかせ」

また、千景は地面を蹴る。

最初の攻撃は失敗に終わった。

分身如きが本物と同じレベルの術を放てるわけが無い。

しかしそれでも、一体だけでも岩盤を壊す事ぐらいは出来る筈だ。

それを、いとも容易く防ぎ、分身のほとんどを倒された。

あの浮遊する剣は厄介だ。だが、それに対する対処法も知らない。

出来るとすれば――

「ハッ！」

「あら？」

鎌を持って迎撃する事だ。

分身の一体が、高圧の水弾を放つ。

しかし、それは光る浮遊する剣の腹に止められる。

だが、その間に別の一体が砂塵を巻き起こし、アモルの視界を遮る。

「これは……ツ!？」

その間に、千景が背後に回り、鎌を振り上げる。

その鎌の刃は、半透明の三日月型となっていた。

「――『大葉刈』ツ!!」

「くッ!!」

アモルは慌てて三本の剣を重ねて千景の大葉刈を防ぐ。

火花が散り、アモルの剣と千景の鎌が押し合う。

「小癩な手を……!」

「それが俺なんぞでね!」

千景が弾かれ、すぐさま砂塵の中に隠れる。

アモルだけがよく見えるように舞い上がっているために、千景からはアモルの姿がよく見える。

しかしアモルからは千景の姿を捉えられない。

状況的には、千景が有利に見えるだろう。

しかし――

「そんな魔法を使えるのは、貴方だけじゃないのよ」

手をかざすアモル。

「暴嵐よ、駆け抜けよ」

次の瞬間、アモルの頭上に緑に輝く魔法陣が展開されたかと思えば、いきなりアモルを中心に竜巻が巻き起こる。

「なにッ!？」

風に引つ張られる。千景はそれになにか耐えるも、その代わり、砂塵は全て吹き飛んだ。

「雷鳴よ、打ち据えよ」

今度は黄色の魔法陣かと思ったら複数の雷が、的確に分身たちを撃ち貫いていく。

そして、今度は本物の千景に向かって雷が落ちてくる。

「ッ!!—— 『天鎖刈』 ツ!!」

突如として千景の周囲に無数の鎖が出現。

その鎖が、千景を守る様に渦巻き、雷を防ぐ。

「へえ。それが貴方の本来の力ね……」

アモルが興味深そうに千景が出した鎖を見る。

『天鎖刈』

その正しい名前は『御神刀・天鎖刈』。

それは、千景の故郷の神、創代が作った魔器を破壊する為に作られた神造兵装。

その能力は、主に『鎖』。

主武装は大鎌であるが、特筆すべきは能力である鎖だ。

鎖により多彩な攻撃や防御法によって相手の魔器を破壊する武器だ。

詳しい説明は、後にしておき、とにかくこの天鎖刈の能力は『鎖の概念を自在に操る』事だ。

「見た目、弱そうだけど……それが『概念』となると話は別になり

そうね」

今、千景の持つ武器は、天鎖刈に大葉刈の霊力を与えた状態の、いわば神樹と創代の力を織り交ぜた状態なのだ。

装束が、以前とものと変わって紅白だというのも、その二つの力を織り交ぜた結果なのだ。

だが、侮る事なかれ。鎖の能力が付与された事で、千景の戦闘能力は大幅に向上している。

千景が地面を蹴り、飛び上がる。

「あら、翼もないのに空中戦を挑むというの？」

アモルは、手をかぎす。

「水流よ、叩き流せ」

複数の魔法陣が展開され、そこから高圧の水流が放たれる。

それに対して千景は、鎖を操作して、自らの体に絡みつかせ、その水流を回避する。

「ッ!?!」

(鎖を使つて、無理矢理・・・!?!)

時には引つ張られ、時には乗り、時には押し出され、千景は鎖を使つて、身動きの取れない空中だというのに攻撃をかわしていた。

「雷遁——」

千景が反撃に出る。

空中に、紫に光る玉をいくつか設置する。

「あれは・・・!?!」

「紫電よ——」

紫電が迸り、アモルを撃つ。

「くうッ・・・!?!」

そこで一瞬怯んだアモル。

その隙を千景は逃さず、一気に飛びかかる。
しかし。

「引っ掛かったわね」

「何・・・!?!」

次の瞬間、千景の体から鮮血がほとばしる。

「な・・・!?!」

背中が斬られているのだ。

「あら、浅いわね」

「くッ!!」

自らを鎖で引つ張り、どうにかアモルと距離を取って地面に着地する千景。

「くそ・・・」

「そろそろ、本気で行こうかしら?」

そう、アモルが呟いた。

それと同時に感じた濃密な殺意が、千景の体中のうぶ毛を逆立たせる。

何か、とてつもなく嫌な予感がする。

「――消し去れ」

ただ、一言。

それだけで空中に展開された、直径が大人三人分のサイズの魔法陣。

そこに、何かが集束されていく。

(あれは――まずい――ツ!!!)

喰らえば、確実に死ぬ。

千景は、そうなる前に行動を起こす。

そして、それが解放された。

「――『^{ハルマゲドン}終焉の砲』」

強大なエネルギーが、樹海の根を焼却する。

その砲撃が、走った場所は、その全てが焼かれ、塵も残さず消滅していた。

「あら、上手く避けたみたいね」

その、大きく消滅した場所のすぐ横に、千景はいた。

「ハア・・・ハア・・・」

焼け焦げた匂いが、鼻腔に突き刺さる。

焼かれた空気を吸い込み、肺が焼けそうになる。

先ほど放たれたのは、それはまさしく燃えるエネルギーそのもの。

太陽の発するエネルギーそのものだ。

それが小規模ながらも放たれればどうなるか。

空気は焼かれ、大地は溶け、そこあるもの全てを塵一つ残さず消滅させる。

「やれやれ、人間の体だから、威力が小さくなってしまったわ。まあ良いわ」

アモルは、千景を見下す。

「もう少し遊んであげる」

アモルは、近くに浮遊する光る剣のうち、四本を千景に向かわせる。「くッ！」

千景はその最初の一撃を防ぎ、その衝撃を利用して後ろに吹っ飛び二撃目を回避する。

しかし三撃目は避け切れず右肩を掠ってしまう。

そのまま後ろに倒れ込み、地面から垂直に落ちてくる剣を地面を転がって回避する。

剣そのまま地面に突き刺さるも、他の剣が、千景を襲う。

千景は、その度に鎌を振るい、弾き飛ばす。

「ふふ……」

しかし、どういう訳か早く終わらせたいのか、アモルはさらに無数に魔法陣を展開する。

「な……!?!」

「くたばりなさい」

アモルが手を振り下ろせば、ありとあらゆる属性を纏った巨大な矢が降ってくる。

炎の矢、雷の矢、風の矢、氷の矢、ありとあらゆる属性の矢が降り注いでくる。

それが地面に着弾する度に爆発を巻き起こし、地面を吹き飛ばす。さらに、その中にはあの砲撃の劣化版を放って、千景をさらに追い詰める。

やがて攻撃の嵐が収まる頃には、千景はすでに満身創痍で地面にひれ伏していた。

「無様ね。あれほどの啖呵を切っておいて、この様なんでアモルは声を挙げずに嘲笑う。」

(ち……く……しょう……)

玉藻の前と、天鎖刈の力を率いても、アモルに圧倒されている。このままでは、敗北してしまう。

そうなれば——この世界が終わる。

(そんな、事は……させない……!)

千景は、動かない身体に鞭を打って立ち上がろうとする。

「あら、まだやる気なの?」

アモルが、そう言ってくる。

当たり前だ。こんなところで、寝てなんてられない。

皆、頑張ったのだ。

風は佐奈を倒し、剛は弘を否定し、樹は美紀を殴り、園子は命懸けでその手助けをし、銀は己の全てをかけて真斗の天撃を相殺し、翼と美森は全てのバーテックスを倒し、夏凜は強敵である翔琉を討ち取った。

そして友奈は、幸奈に勝った。

全員が、それぞれ頑張ったのだ。

ならば、自分もやらなければならない。自分だけノコノコと後から来ておいて、何も出来なかったなんて、そんな恥晒しな事、死んでも出来ない。

だから——

『本当に良いの?』

郡千景かのじよが聞いてくる。

——ああ、構わない。

不道千景かは頷きを持って答える。

『もう、皆に会えなくなるかもしれないわよ』

誰かが消えるよりはマシだ。

『怒られるかもしれないわよ』

その時はその時だ。殴られる覚悟もある。

『泣いてしまうかもしれないわよ』

その時は……いや、どちらにしろ泣かせるのは決まっている。

『そう……戦いは、終わらないわ』

その点については、貴方にすまないと思っている。俺の勝手な都合で、貴方の願いを断ち切ってしまう。

『いえ。貴方は間違っていないわ。友達よりも世界を優先するなんて事は、私が許さないもの』

それは、手伝ってくれるって事で良いのか？

『そうなるわね。もともと、貴方を止められるとは思っていなかったから』

随分と気前が良い事で。

『そうね。私は『失格勇者』。誰かを止める権利も、咎める権利すらもない、人間以下の存在だもの。でも、それでも、誰かを守ってはいけないなんていう決まりはないから』

なら、決まりだ。

『ええ、私たちの全てをにかけて、奴を倒しましょう——』

果たして、覚悟は決まった。

神から、力を奪い取れ。

怒りを買おうが、恨まれようが関係無い。

俺わたしにとって、神樹おまえの事なんざどうでも良い。

ただ、皆が笑顔でいられるこの世界を守りたいだけなのだから。

その為に、千景は左手を神樹の根に押し当てる。

さあ、怒り狂え。

お前が最も嫌っている人間風情に力を奪われる事に屈辱を感じる。

俺の願いのため、俺の守りたいものの為、俺はどんな悪意も受けよう、罪を受け入れよう、罰を刻もう。

ただ、たった刹那の時だけは、俺に猶予をよこせ。

樹海が、震えた。

「これは．．．!？」

アモルは、その震動に、目を見開く。

樹海の全てが震え、大気が震え、神樹が咆える。

それはさながら、怒り狂うかの様に。

そして、その怒りの矛先は、アモルに向けられていない。

アモルの目の前で今まさに起き上がろうとしている少年に向けられていた。

「どうして．．．!？」

アモルは、困惑する。

この世界の敵であるアモルにその怒りを向けず、何故、一人の少年にのみ、その怒りを向けるのか。

しかし、それはすぐに分かった。

千景の髪の毛が、急激に伸びる。

「!？」

さらに、白く、金色に染まっていく。まるで、激情が駆け抜けていくかのように、想いを全身に行き渡らせるように、黄金に染まっていく。

それだけではない。装束が大きく変化し、腰から生える九本の尻尾はその大きさをさらに大きくし、頭に生える三角耳はさらに獣らしくなる。装束は中に白い勇者装束と羽織と袴へと変化し、その姿はならがら――

妖美な狐娘のようだった。

「……」

その美しさに、アモルは思わず絶句してしまふ。

それもそうだろう。何せその美しさは、ありとあらゆる男を魅了し虜にする妖狐のものなのだから。

しかし、その絶世の美女に変化した千景が眼を開ければ、その呆けは一瞬にして吹き飛んだ。

その目は、こちらを射抜き、今にでも殺すともいうかのような殺意を向けていた。

アモルは、それに対して、身構えた。

一体何が来る……？

そう、疑問に思った時、千景が鎌を持ち上げ、構える。

そうして、地面を蹴った時、一瞬にしてアモルの後方に迫った。

「!?!」

それに驚く間もなく、千景は飛び上がり、アモルの眼前へと迫り、鎌を振るう。

アモルは、それを慌てて二本の剣によって防ぐも、鎌の進行方向より反対側から爆炎が舞いブースト。そのまま一気に吹き飛ばされる。

「ぐう!?!」

吹き飛ばされるなか、千景はさらなる攻撃を仕掛ける。

鎌を振り切った状態から術を発動。

目の前に、何かの力を集束させた黒い玉を出現させ、それに左手をかざせば、それからどす黒い流れの砲撃が放たれる。

「これは……!?!」

その砲撃はアモルを直撃し、爆発を巻き起こす。

しかし、煙が晴れば、そこには何かのバリアを展開したアモルの姿があった。

「……まさか、反物質を作り出すなんてね」

それはある物質に対して、全く逆の性質を持つ物質の事だ。

そのエネルギーは強大で、小さなものでも強大な爆発を引き起こす事の出来るエネルギーであり危険なもの。

千景はそれをいとも容易く作り出したのだ。

「その力・・・まさか、神から力を奪って私と同等以上の力を手に入れるなんて、貴方は神の敵になりたいようね」

その皮肉に対して、千景は、

「・・・もとからそのつもりだ」

否定しなかった。

「そう、でも、貴方はここで殺して、神樹を殺すわ」

「そんな事させないって言ってるだろ」

睨み合う二人。

しかし、すぐさま二人は動く。

アモルは樹海を焼いた砲撃の魔法陣を複数展開。

対して千景は反物質を生成し、さらにそれらを分身に任せる。

そして同時にその強大な力を真正面からぶつけ合わせる。

大気が焼かれ、激しい衝撃波を巻き散らす。

その衝撃波が収まったところで千景が飛び出す。

「オオオツ!!」

鎌を振り上げ、アモルに斬りかかる。

「ハッ!!」

アモルはそれを剣の一本を持って迎撃。

千景はそれを天鎖剣の鎖を持ってしぼりつけ、それを足場にしてき

らに加速。

それに対してアモルは拳を振り上げる。

『ジャイアント・ブロー
巨人の腕』

アモルの目の前に現れた魔法陣。

それに向かってアモルが拳を振るった瞬間、その魔法陣から巨大な腕が出現。

「なッ!?!」

その巨大さは、友奈の満開の剛腕よりも大きく、電車の車両三台分はあるほどに長く大きい。

しかし千景は体を回転させ直撃を回避。スレスレの所で、新幹線のように迫ってくる剛腕を回避し、千景はその腕に鎖を打ち込み、その腕を伝ってアモルに接近する。

「暴嵐よー!」

しかし、後一步のところで風に吹き飛ばされ距離を取らされる。

だが、それでも千景は諦めない。

地面に降り、脚から地面にアクセス。妖力を流し込んで地面を変形させ、その土を一気にアモルへ向かわせる。

アモルは、それを爆炎を持って破壊。

お返しとしてアモルは氷のナイフを雨のように降らせる。

それを鎖によって初めの数発を弾き飛ばし、その隙を使って火焰で全て溶かす。

さらに鎌を振りかぶって、カマイタチを引き起こしてアモルへ飛ばす。

アモルはそれを回避し、その間に千景は飛び上がる。

そして紫電の球体を出現させ、それを一斉にアモルへ放つ。

それらがアモルに直撃する。

「ぐう・・・!?!」

苦悶の声をあげるアモル。

その隙に、千景は一気に距離を詰める。

そして鎌を振り上げ、一気に振り下ろそうとした。

しかいその時、頭上から巨大な足が出現し、千景を叩き落す。

「ぐうあ!?!」

その質量に思わず悲鳴をあげる千景。

地面に叩きつけられる前に鎖でどうかその足から逃れ、踏みつぶされるのを回避する。

「ジャイアント・スタンプ巨人の脚」

アモルがギリギリの所で発動した魔法のようだ。

だが、アモルの攻撃はそこで終わらない。

また魔法陣を展開するアモル。

「打ち据えよ、その身果てるまで」

次の瞬間、まるで多段ミサイルのような砲撃が、千景に向かって放たれる。

「ッ!？」

千景は慌てて飛び、その砲撃を回避しようとするが、その砲撃のほとんども千景を追尾してくる。

「チッー！」

千景は鎖を持ってその砲撃から逃げる。

その際に爆発が巻き起こされるも、千景は逃げ続ける。

しかし、これでは罫が明かない。そのために千景は、その無数のレーザーのような砲撃に対して電撃を巻き散らした。

するとそれに反応したレーザーミサイルが一斉に爆発、相殺される。

そして千景はアモルに向かって反撃を仕掛ける。

両手を広げ、左右に一つずつ、力を集束させる。

それは圧倒的熱量を持った砲撃。

「喰らえ……！」

二つの極太の熱線が、アモルに迫る。

これに対し、アモルも同じような砲撃で対抗。

双方真正面からぶつかり合い、大きな衝撃を巻き起こし、相殺する。

その激しい攻防の中で、二人とも、一進一退で戦った。

「……見事だわ」

そんな中、アモルが感嘆の声を漏らす。

「この私にここまで互角に戦える人間がいたなんてね」

アモルは、自分と対峙する千景を心から賞賛する。

「だから、最大の敬意を持って、私の最大の一撃で貴方を葬ってあげるわ」

アモルの目の前に、巨大な魔法陣が展開される。

それは、天上の存在のみが放てる、絶対的殲滅攻撃。

「そうか。それは光栄な事だな」

しかし、千景はそれを前にしても動じない。

「だけど、葬られる訳にはいかない」

大きく振りかぶって、千景は、自らの持つ鎌に、死の概念を圧縮する。

「守りたいものがあるんだ」

そのために、千景は己の持つ最大の攻撃を放つ。

「恐れよ人間、あがき苦しみ、本心を晒せ」

「恐怖に身を委ねよ、終わりをその身に受け入れよ」

「――終焉をここに、守護する神無き今、等しく死に晒せ」

『ディザスター・ロストランド 災厄・大陸終焉』

大陸を焼き尽くす破壊の一撃が、千景に向かって、放たれた。

それは全てを焼き尽くし、全てを薙ぎ払い、地面を焼き、跡形もなく、灰も残さずに消し飛ばす。

その直撃を、千景は諸に喰らった。

（終わったわね・・・）

アモルは、そう確信した。

自身の最大の攻撃であり、大陸をも滅ぼすこの攻撃を受けて、無事
でいる者などいないだろう。

それこそ、神でもなければ防ぐ事など不可能だ。

そう、目をつむり、哀悼の意を表した時――

「――咲き乱れるは紅い花、染め逝くは死した生命」

「!?」

確かに聞こえた、千景の声。

「馬鹿な、一体どこに……!?」

アモルは、慌てて探す。

砲撃は今なお続いている。

そして、千景は確かに飲み込まれた筈だ。なのに、どうして――

「――花は時と共に散り、それ故に世界は廻る」

「どっかに……!?」

アモルは、必死に探す。

もしこれで見つけられなければ、間違いなく自分が殺される。

「――故にこれは世界の真実、我が唯一にして最後の真実」

そして、彼は姿を現した。

アモルの放った大陸を全焼させる砲撃の中を突き進んで、魔法陣を突き破って。

「……………嘘」

アモルは、その千景の行動に目を見開いた。

あまりにも、千景の無謀な行動に、啞然としているのだ。

装束のほとんどが焼け消え、残っているのは下半身の装束のみ。

さらに体の所々も火傷しており、決して無傷で来たわけでは無いようだ。

だけど、それでも、あまりにも異常過ぎる。

こんな自らの体を灰にしてしまうかもしれない砲撃を前にして、まさか、自分から突っ込むなど。

一歩間違えれば、消し炭になって死んでしまうかもしれないのに、何故自ら真正面から突っ込んだのか。

(ああ、そうか……………)

しかし、アモルは、千景の目を見て悟った。

その目に、諦めは無かった。

もし、この戦いに負ければ、大切なものが消えてしまう確信の恐怖が彼の背中を押し、そして、その恐怖が彼を前に進ませているのだ。そして、必ず勝つという、勝利への執着が、彼を砲撃の中を突っ走らせるという行動を引き起こしたのだ。

だから彼は迷わず飛び込むことが出来た。

それに、アモルは最大の敬意を持って、その一撃を受け入れた。

それは、この世の理。

生きとし生ける全ての生命いのちに与えられた、回避不可能な運命。

鳥も、犬も、猫も、狼も、獅子も、木も、花も、草も、人も、――

――そして星も。

この世にあるもの全てが持つ、終わり。

これは、その終わりの力

「『終わらぬ命ヒなど無く、それガでも世界ナは廻りセ続けるキ』」

地面に降り立ち、千景は周囲を見渡す。

そこには、激戦によって悲惨な事になっている、樹海。

「……終わった」

そう、確かに、戦いは終わったのだ。

そして、守り切った。

この世界を、この世に生きる人々を。

それに、千景は安堵の息を漏らす。

先ほどの砲撃を受けて、上半身の装束は全焼。下半身の方も決して無傷という訳ではなく、いくつか焼け落ち、体の節々にある火傷も目立つ。見るも無残とはこの事だろう。

しかし、生きている。

皆生きている。

まずはそれでよしとしよう。

そう思い、千景が友奈の元へ向かおうと歩き出す。

次の瞬間、千景の体を、根が背後から貫いた。

「な．．．!?!」

それに目を見開く千景。

胸を貫かれ、しかし血の一切が撒き散らされない。

それはまるで、彼の中身だけが目的であるかのよう。

意識だけが、何かに引きずり込まれるように、薄れていく。

(そう．．．だった．．．)

そこで千景は、アモルとの戦いによって忘れていた事を思い出す。

自分は今、神から怒りを買っている。そこへさらに火に油を注ぐような事をすれば、こうなるのは当然。

千景は、もはや抵抗も忘れてそれを受け入れる。

もともと自分は神から嫌われている存在。

こうなる事は分かっていたのだ。

ならば、その運命を受け入れよう。

(ご．．．めん．．．みんな．．．な．．．)

そして、千景の意識は、完全に闇に落ちた。

ここに、一つの戦いが終わった。

誰にも語られぬ事のない、小さな聖戦が、幕を閉じた。

これは悲願の物語。人が世界を取り戻す物語だ。

しかし今は、一時の安らぎを・・・

約束

大赦本部。

「先日の戦いにおけるの結果を報告させて貰います」

広い会議室にて、春信は、手元の書類を読み上げる。

「まず、勇者の被害から。」

乃木園子、関節部の断裂間際、内臓にも傷がついており、しばらくの療養が必要。しかし後遺症は残らないとの事です。よほど綺麗に切られたのでしよう。

次いで、犬吠埼姉妹については、姉の犬吠埼風が体中に矢傷を負い、特に脚の損傷が深いようですが、しばらく安静にしていれば後遺症は残らないとの事です。次いで妹の犬吠埼樹は最も軽傷と言えるでしょう。問題は皮膚が酸によって溶けているという事で、体には、その痕が残るとの事です。

次に三ノ輪兄妹。兄の三ノ輪剛は手の損傷が激しく、穴がいくつもあり、縫合が難航したため、完治には数年が必要との事。後遺症も残るとの事です。

妹の三ノ輪銀に関しては、何かしらの原因で意識不明の重体。生命活動に必要な体力が著しく低下しているとの事です。しかし、万全の状態に安静にさせていれば、数日中には起きるとの事です。さらに、右腕の再生が進んでおり、数日の間に元に戻りそうです。

次に六道翼。彼は満開『金弓箭』の連続使用により、体のほとんどを供物として捧げ、現在、視覚及び聴覚も完全に停止、さらには声も出せないとの事です。

東郷美森も同様に、声は出せませんが、六道翼同様、視覚と聴覚の機能を完全に停止、うかつに動かせない身体となっています。

次に三好夏凜。彼女は体中に切り傷をつけられ出血も激しく、現在重度の低血圧と酸欠状態に陥っているとの事で、集中治療室にて、輸血と治療に専念しています。しばらく起きる事はないでしょう。

そして最後に、結城友奈。両腕の完全損壊。ほとんどの内臓破裂。体の一部に凍傷がみられ、体中の骨も砕けており、血管もいくつか破

裂。治療不可能と推定されています。今後の生活において、支障が出る事は間違いないでしょう。特に、腕には、これまでにない程に制限がかかりそうかと」

「家族の方には？」

一人の神官がそう聞いてきた。

「すでに連絡済みです。三ノ輪銀の安否と現状についても、この際、三ノ輪家に明かしました」

「そうか、では、今度は襲撃者側について」

「はい。」

阿室佐奈。体の構造が一部変形しており、外見には表れていませんが、おそらくある程度の行動は制限されてしまうでしょう。多少の打撲もみられます。しかし日常生活においての問題は見られず、このままにしているのも大丈夫でしょう。

車田真斗は背中に大きな切り傷がある事以外、大きな傷は見られず、順調に回復しているとの事。

加賀弘は、顔面の骨が多少変形していますが元に戻ってきているとの事。しかし胴体には方は巨大な圧力にかけられたためか肋骨が何本か折れており、一部肺に刺さっていたとの事です。しかし精神面ですどいう訳か少なからずダメージがあるようで、しばらく放心状態が続くとの事です。

針目美紀はこの中で最も軽傷。顔面に打撲の後があるのと、胸に急所を外して何かに刺されたような跡がある程度で、それ以外に気になる外傷はありません。

次に稲成幸奈ですが、こちらも結城友奈同様に全身ボロボロ。しかし損傷はこちらの方が軽く、回復の見込みはこちらの方が高いとの事です。胸の火傷が気にはなりますが、それ以外にこれといった外傷はありません。

八神翔琉は、胴体切断により『死亡』。

そして、襲撃者たちの親玉と思われる人物『倉科愛里』——阿室

佐奈の証言から、異世界の『断罪の神』の傘下である『愛を司る天使』『アモル』も、何者かによって死亡しています」

「それだけかね？」

「はい、それだけです」

「このトップの人間であろう問いかけに、春信はそう答えた。

「では、今度は現実世界への被害を」

「はい。今回の戦いにおいて、現実世界への影響に、あまりにも多い落雷。建物の原因不明の倒壊。強い酸性を持つ酸性雨。交通事故の同時多発。これらの被害により、死者は千人以上に上るとの事です」

会場がざわつく。

しかし、それを一人の男が手をあげた事によって一瞬にして静まり返る。

「・・・西暦の『千景災害』ほどじゃないだけマシだろう」

そう、感想は一言だけ呟いただけだった。

「今回の戦いにおいて、東郷美森の処罰はどうする？」

「今回、勇者が誰一人駆ける事なく勝利出来たので、不問にしてもよろしいかと思えます。前例無き快挙です。通常、このような状況が起これば、確実に死者が出ていたでしょう。故に、勇者が誰一人死ななかつた事に、喜ぶべきではないでしょうか？」

勇者は人類最後の希望。どんな時代においても、勇者を務めた者は、必ず一人以上死んだ。

今回は、それが無かつたのだ。

「それもそうか・・・しかし、壁を壊し、神樹様に少なからず力を使わせた事については、やはりそれ相応の処罰をするべきだろう」

「そうですか・・・ならば、彼女を六道家の監視下に置くのがよろしいのではないのでしょうか？」

「その真意は？」

「六道家次期当主である六道翼と東郷美森は、二年前の神樹館にいた時において、すでに恋人同士です。ここで婚約を認めてしまえば、彼女は自然と六道家の人間となります。そうなれば、彼女は自然と我々の管理下に置かれる事になります。そうなれば、彼女が勝手な行動を起こす事は無くなるでしょう。常に監視されている訳ですから」

「そうか・・・」

「それに、過剰な罰を与えれば、六道翼が黙っていないでしょう。彼らは暗部。いつでも我々を皆殺しにする事が出来るのですから」

その、脅しともいえる言葉は、確かな説得力を持っていた。

しかし、長であるう神官はそれに怯える事無く、それを了承した。

「良いだろう。東郷美森の件についてはそれで良しとしよう」

そして、その神官は手をあげる。

「今回の会議はこれまで、各自、それぞれの執務に戻る様に」

春信は廊下を歩いていった。

「春信」

そんな春信に、声をかける者が一人いた。

辰巳だ。

「辰巳師匠……」

「会議の結果はどうだった？」

「東郷美森への処罰は、六道翼の婚約によつ六道家の監視下におくという事で纏まりました」

「そうか……」

「今回の戦いにおいて、襲撃者全員の身柄を捉える事に成功しましたが……」

「……文化祭には、参加できんだろうな」

彼ら勇者部が最も楽しみにしていたイベントの一つ。

今回の戦いで、彼らはあまりにもダメージを負い過ぎた。

完治までに、文化祭に参加する事は——不可能に等しい。

「……何故、俺達は、大事な物しか奪えないのだろうか」

辰巳の懺悔のような言葉に、春信は何も言えない。

体中に刻まれたこの傷は、春信にとっては罪の証。友を守れなかった、自分への罰。

「春信」

辰巳は、春信に向き、告げる。

「お前、確か理科の教免を持っていたな」

「はい」

「ならば、讃州中学へ教師として行け。そこで顧問として、勇者部を守れ」

辰巳の『命令』に、春信は――

「――御意」

確かな頷きを持って答えた。

丸亀城の石垣の上で、夕日を見るのが辰巳の日課だ。

かつて、辰巳にとって大切な人と、一度しか見れなかった、その夕日を見る事が。

その夕日を見ながら、辰巳は、呟く。

「・・・必ず世界を取り戻す。それが、お前との約束だからな。ひなた」

死ねない呪いをその身に受けた、孤独の竜。

約束をその身に背負い、誰にも理解出来ぬ苦しみを知る、独りの竜。

それは、彼に課せられた『呪われた約束』。

辰巳は、拳を握りしめ、仮初の夕日を見る。

「必ず……この約束を果たして見せる」

その日、一人の少女が眼を開けた。

見知らぬ天井。体中にまかれた包帯。いくつもの機械に、何本ものチューブ。

体を動かそうとしても動かない。

手を伸ばそうとしても、伸ばせない。

体は拘束され、ただただ、縛り付けられていた。

どうしてこうなっているのか、彼女には分からなかった。

しかし、次第に思い出していく。

一人の少女と、全力で殴り合った。

体がどれほど壊れようと、己の全身全霊を込めて戦った。

その結果、勝った。

しかし代償が大きかったようだ。

おそらく両腕は使い物になっていない。治るどうかもわからない。体の中も、なんだかぐちやぐちやなような気がする。

もはや、自分が生きているのかどうかも分からない。

しかし、一つだけ気になる事がある。

皆は無事だろうか。

勇者部の皆は生きているだろうか。

痛い思いをしていないだろうか。

大丈夫なのだろうか。

いつも他人の事しか考えなかった彼女は、ただの一度も自分の心配をせずに、他人の心配ををする。

東郷美森、六道翼、犬吠埼風、犬吠埼樹、三ノ輪剛、三ノ輪銀、三好夏凜、名前の知らない金髪の子。そして――

（――あれ？もう一人、誰かいたっけ……？）

いや、いなかった。勇者部は、三ノ輪銀と金髪の子を除いて全員で七人だ。

そう、七人だ。

（うん。ちゃんと、皆、生きてるよね）

少女は、そう想い老け、襲ってきた睡魔に身を任せ、闇に意識を沈める。

――なんで、忘れられるの？

暗い、昏い、声を聞きながら。

そして、数日後の別の場所で。

「……………」

少年は、神社のとある間で目を覚ました。

しばし天井を見上げた後、起き上がり、そして額に手をあて、呟く。

『「……そうか、戻れたのかね」』

声が混じっている事に気付き、慌てて確認を取る。

「気分はどうだ？」

『「どうか。貴方の方は？」』

「俺も問題はないな」

一つの体に二つの精神。

そんな感じで互いに会話をしている。

『「どうか、一々声に出さなくても、心の中で話せばいいじゃない」』

「それもそうか……」

『寝起きで寝ぼけてるのかしら?』

(かもしれない)

少年は立ち上がり、いつの間にか開かれている戸から外に出る。

そして、鳥居に立ち、少年は、日の出を見る。

「……」

『もう、皆忘れてるでしょうね』

(そうだな。だけど、これで良い。これで良いんだ)

彼がそこにいるだけで、彼女たちに更なる不幸が降りかかるだろう。

だから、そこにいてはいけない。

いれば、きつと、迷惑をかけてしまうから。

日常を壊してしまうから。

「だから、ここでお別れだ」

『もう、会う事も、無いでしょうね』

少年と少女は、これから目覚めていくであろう仲間たちに、最後の言葉を送る。

『『ありがとう、さよなら』』

ふと、背後から足音が聞こえた。

振り向けば、そこには見知った顔がいた。

「……おかえりなさい」

「……ただいま」

そして、彼は、もう一つの居場所に帰っていった。

これは、悲願の物語。

人類の世界を取り戻す勇氣の物語。

人知れず死んでいった者達への鎮魂歌の物語。
終わる事なき戦いに終止符を打つ戦いの物語。

これは、救われるべき物語。

勇者を救う物語。

決して、人間以下の失格勇者を救う物語ではない。

しかし、それでも――

郡千景と不道千景は、確かに誰かを守った。

これは、悲願の物語。

そして、人間以下の烙印を押された一族が、人知れず人を救い続ける

——人の未来を悲願^{ねが}う物語だ。

不道千景は勇者である——『彼岸花^リの章^ス』完

原点の章 《オリジン》

終わった生活 新たな生活 そして過去を思い出す

高知県からくち緒久良市。

そこが、千景の故郷の名前である。

そして、千景が香川に行くまでにいた施設の名前は『百合籠』。

そこの一室にて、不道千景は目覚めた。

「・・・そうだった」

『おはよう』

『おはようご先祖様』

頭の中に響いた声、千景の先祖である郡千景（以下『郡』）に挨拶し、千景は、自分がどこにいるのかをもの数秒で理解し、起き上がる。引越した時のままの部屋は、意外と綺麗だが、ベッドはつきはぎだらけで、机は傷だらけだ。

しかし、それでも掃除はしっかりとされていた。

一階にある食堂に出て、すぐそばに繋がっている台所に入る。冷蔵庫を開けて中に入っている食材の量を確認する。

「確か、前よりかは数が減ったな。その代わりちびっこどもが増えたからなるべく食べやすいもの・・・」

『無難なもので良いんじゃないかしら？ほら、焼き魚とか』

「よし、無難にいくか」

千景は冷蔵庫からある程度の食材を取り出すと、包丁を片手に料理を始める。

『手際良いわね』

「そりやどうも」

その数分後、食堂に、ここの管理人である氷室雄二が出てきた。

「ああ、そういえば料理当番は君だったね」

「おはようおっちゃん」

「おはよう」

「前まではアイツらがやっててくれたみたいだからな」

「そろそろ起きてくる時間だと思うよ」

そう話し合っていると、食堂の扉が開いた。

「む……」

「おはよう、浅羽」

それは眼鏡をかけた目付きの悪い少年だった。

「……チツ、そうだったな」

「相変わらずだなお前は……」

「別にお前が何をしていようが態度を変える気は無い」

と、冷淡に椅子に座る少年の名前は『浅羽海路』。

千景と同じ年であり、この施設で友に暮らしていた同僚のようなものだ。

（ま、以前のようにゴミを見るような目じゃないだけマシか……）

そう一人納得して調理を続ける千景。

そのすぐ後、扉が勢い良く開かれる。

「いっちばー……ああ!?もう海路が来てる!？」

次に入って来たのは茶髪のショートカットの活発な少女。

「おはよう、白露」

「ああおはよ……って君に言われるとなんかむず痒い……」

『新井白露』。それが彼女の名前だ。

彼女は赤ん坊の頃からここにおり、名前の由来は白露の日に拾ったからだそうだ。

料理が完成し、皿に盛りつけようとしたところで、さらに人がやってくる。

「ういーっす」

「おはよ」

「グッモーニンッ!!!」

「ぐえええ」

「おはよう、皆」

上からここの職員の一人であるやる気なさげなオジサンは『森谷真武郎』。

小柄な電波少女のような可愛らしい薄水色の髪をした少女は『水霜』

冬樹^{ふゆき}』。

そして朝から英語で叫んだのは『浜田徐丹^{はまだジョニー}』という頭を金髪に染めた高校生の男。周りからは『ジョニー』と呼ばれている。

そしてそのジョニーに首根っこを掴まれたまま引つ張られているのは病的なまでに真っ白い肌をした低血圧の少年『冷泉充^{せいぜんみつる}』。

そして最後に来たのは、大学生にもなつてここに残っている『桐馬^{りきま}雅^{みやび}』だ。

「おはよう」

「おはようつス所長」

氷室が入つて来た彼らを出迎えた後、盛り付けをしている千景の元に雅がやってくる。

「手伝いしましょうか?」

「じゃあその味噌汁頼んだ」

その後も、ここにいる施設の子供たちや職員が続々と食堂に入つて来た。

そして、千景や雅、他数名が全員の前に食事を運んだところで、その者達も席に着く。

「ん? 信也の奴はまだ来てないのか?」

「あの馬鹿・・・」

千景が気付いて、雅が額に手をあて呆れる。

一応、千景はこの場にいる数名がこちらに向かつてきまらずそうにしている事に気付いている。

「起こしてくる」

『扉の後ろにいるわね』

「いや、その扉の後ろにいる」

「あ、そう・・・」

千景の指さす先に行った雅は、そこへ入っていくと、何度かの鈍い音の後に中に入つて来た。

「連れて来たわ」

「わーお強引だねえ雅ちゃん」

真武郎が苦笑し、雅の手には頭にたんこぶを作った一人の少年が引

き摺られていた。

「いくらなんでもそれは……」

「この方が良いのよコイツは」

「分かった。分かったから放してくれ……」

少年が懇願する。

「あ、そう」

それで雅はあっさりと手を離れた。

「おはよう、信也」

「……」

千景の挨拶に、返さずにそっぽを向いて千景の隣の席に座る少年。彼の名前は『磯部信也』。

かつて、千景の虐めていた中心メンバーの一人だ。

その信也の反応に時に気にした様子も無く、千景は目の前の食事に向く。

「では、食べようか」

『頂きます』

氷室の合図とともに、全員が一斉に食事を開始する。

「そういえば千景。アンタ今日はどうする気なの？」

「今日は椿さんと一緒に神社に行く予定だよ。昨日は奏さんに会えなかったからな」

「昨日は学校で夜遅くまで神事やってたからね。仕方ないでしょ」
ごく普通に話し合う雅と千景。

「……」

その様子を遠巻きながら見る白露。

「どしたの？」

「ん？ああ、雅姉はすごいなって思ってたね」

「ん……それは、同感」

なにせ、彼を助けなかったのに、普通に話しているのだから。

「どうして、雅姉は普通に話せてるんだろ……」

「それは、わから、ない」

二人して、不思議がるのだった。

「それじゃ、行ってくるよ」

「遅くなるようだったら連絡を入れるように」

「分かってんよ。じゃ」

百合籠を出て、千景はとある人物の家に行く。

『変わってないわね』

「三百年経ってるんじゃないか？」

郡とそのような会話をしながら、千景は目的地へ向かう。

そこは、ごく普通の一軒家。

その玄関前で。

「それじゃあ、優をお願いします」

「分かりました」

「行ってくるねお母さん」

「ああ、いってらっしゃい」

二人の女性と、子供が二人。

二組の親子が向かい合っており、片方の小六ぐらいの子がもう一人の子供の方へ行き、そのまま別れて行ってしまおう。

残ったのは子供が行ってしまった女性の方。

白髪で褐色肌の長身でスタイルが物凄くよく、美森以上の胸を兼ね備えた容姿をした女性。

「椿さん」

「ん？ああ、千景か」

そして、千景はその女性をよく知っていた。

「優は友達の家？」

「ああ。都合よくな。向こうで昼もとるそうだ」

「なら、昼過ぎまで神社にいても大丈夫そうですね」

「そういう訳にはいかないさ」

彼女の名前は『安座間椿』。

千景と同じ、『救導者』である。

「向こうでの生活はどうだった？」

「大変でしたよ。毎日毎日人助けやら猫探しやら、休みなんて一日もありませんでしたよ」

「でも楽しかったんだらう？」

「まあ、それが俺の本分ですからね」

二人して商店街を歩く千景と椿。

椿は、一児の母ではあるが、夫は、とある事件にて死去しているために今は未亡人だ。

生涯、そのままであり続けるそう。本人曰く、『愛する者は一人と決めている』だそう。

ふと、目の前に花屋見えた。

千景は、その店の前で花の手入れをしているマッチョの男性に声をかける。

「おはよう吾郎さん」

「ん？ああ、千景か」

花屋の店主、吾郎が千景と椿に気付く。

「最近はどうだ吾郎」

「いやあ、その・・・まあ、ボチボチです」

「む？なんでそんなに緊張しているんだ？」

吾郎の態度に首を傾げる椿。

しかし千景は知っている。

かつてヤクザの一員だった吾郎をフルボッコにしたのは、椿だという事を。

『末恐ろしい人ね・・・』

(ある意味、東郷以上にな)

「まあ、とりあえず、真琴は元気ですか？」

「あ、ああ。この上なく元気だよ。風邪にはかかりやすいがな」

吾郎の言葉に、千景は安心した様に笑う。

そうして吾郎と別れ、千景と椿は、神社へと続く階段を昇る。

その先にある、神社につけば、一人の少女が、巫女装束を着て、神社に落ちている落ち葉を箒ではいていた。

「奏さん」

千景が声をかければ、その少女は振り向き、そして表情を綻ばせる。
「久しぶりね。といっても、三日ぶりか」

少女、神代奏は、笑顔で千景を出迎えた。

「で、早速膝枕ですか・・・」

「ご無沙汰だったからね」

出会って早々、神社の縁側で奏の膝に頭をのせている千景。

「こうしてみると、あの頃を思い出すな」

椿が懐かしそうに呟く。

「まあ、この態勢からこの庭を見るのも、随分と久しぶりに感じますから、分からなくは無いです」

千景も思う。

この景色を見るのも、一体何年振りなのだろうか。

「本当に、懐かしいわね。貴方がまだ小学生だった頃を」

「あの一年は本当に忙しかった・・・」

「はは、違くない」

三人して笑い合う。

本当に、あの一年は大変だった。

そう思うほどに、あの一年は刺激的で、危険で、命懸けで、そして、千景が命を賭してでも守りたいと思った、この街での、ごく普通に過ぎていく、当たり前の日常を――

「どうしたの？」

「いや、思い出してただけ。友奈たちと出会う前まで、俺がやってきた事を、全部」

「そう・・・」

記憶を取り戻した今、千景は鮮明に思い出せる。

終わった日常の事を、そして、自分がこの街でやってきた事を。

それは、一人孤高に戦い続けた、少年の物語。

彼は救いと報いを感じる事は無く、ただ一人、他人の幸せだけを願って、ただ一人傷付き続けた。

彼に平穏など無く、安らぎなどなく、束の間の安息すらも無い。

彼に向けられるのは、明確な悪意のみ。

しかしそれでも彼は戦い続けた。

孤高に戦い続けるその姿に、何も知らない人々は、こう呼ぶだろう。

『哀しい勇者』と。

時は、二年前。神世紀二九八年。

その日、街には雨が降っていた。

ありとあらゆる音は、その激しく降り注ぐ雨の音にかき消され、誰も、その音に気付かない。

否、気付いていながら無視をする。

そこは空き地。

そこに一人の少年がボロ雑巾のように寝ていた。

傷口からは血が流れ、青い痣がその肌によく目立っていた。

しばしして、少年は起き上がる。

雨に打たれ、体温が低下しているものの、それは少年にとってはさほど問題ではない。

問題は歩けるかどうか。

歩けなければ、施設に帰る事などできないし、また、雨宿りも出来ない。

最も、雨宿りすら出来ないが。

そこで、ふと少年は空き地の片隅に、光る何かを見つけた。

少年は気になり、それに歩み寄って拾う。

それは、何かの柄。

刀身を根元の少しだけ残した状態で、とてもではないが、これでは
使い物にならないだろう。

「.....」

しかし、少年はそれに不思議と惹かれ、そこらに落ちていたポロポ
ロのランドセルの中に入れた。

そして少年は、帰路につく。

のちに、彼は、この街で『勇者』と呼ばれる事になるのだが、それ
は、まだあとの話だ。

怨まない少年

高知県絡久良市。

そこは、現代にも伝えられている生ける伝説の残る、この四国で唯一神樹を信仰していない土地であり、神樹の支配下に置かれていない唯一の街。

そこに住む人々は、良くも悪くもしつかりと生きていた。

善性に生きる人もいれば、悪性に生きる人もいる。

いわば、どこにでもあるありふれた街である。

ただ、その街の、たった一つだけ異常な事があるとすれば、二つ。

一つ目は、この街で起こる、手口が一切分からない事件が一年に数回起こるといふ事。

その事件は、警察がどんなに手をこまねいても解決できない、手口が不可能と言われるほどに難関な事件が起きているといふ事。

どれほど真相を突き止めようとしても、手口自体が証明不可能なものであるため、解決不可能なのだ。

そして、もう一つ。

この街では、一人の少年を、忌み嫌っている事。

「孤児養護施設『百合籠』」

その一室。

割れたガラスを透明のガムテープで補修した窓。
傷だらけの壁。

つぎはぎだらけのベッドの上に寝そべる一人の少年が、目を覚ます。

無理矢理な感じで修理されている時計が示す時刻は五時。

しかし、これで良いのだ。

少年は、扉を開けて一階の食堂にやってくる。

そして、そこにある台所に入り、ありったけの食材を取り出し、それを台の上に置く。

手を洗い、包丁を取り出し、それらの食材を手慣れた手つきで切り刻んでいく。

やがてそれを沸騰させた湯の中に入れ、煮込んでいく。

ふと、扉が開く。

「おはよう」

そうやってきたのは、こここの所長である『氷室雄二』という初老の男だった。

「今日はなんだったかね？」

「焼き魚と味噌汁、主食にご飯を入れた定食です」

少年は、氷室の言葉に淡々と返す。

「いつも悪いね」

「いえ、これが俺のやりたい事なので」

少年は、なおも料理を作る手を止めない。

「そうか、では・・・」

「いっちばーん！」

ふと、食堂の大扉が勢いよく開け放たれる。

「おや、白露じゃないか。今回は一番だね」

「おはよう氷室おじちゃん！そうなんです！私一番に早起きしました！」

と言いつつ、少女『新井白露』は台所にいる少年に目を向けた。

「あ、いたんだ」

「・・・」

少年は何も答えない。

ただ、少女の眼はこの上ない程に冷めている。

しかし、この所の長の前なのか、それだけを呟いてさっさと席についてしまった。

ただ少年は淡々と、料理を作り続ける。

その後も、まだまだたくさんの方々の施設内の役員や孤児たちがやってくる。

しかし、その誰もが、千景を無視する。否、見下すような眼を一瞥した。

千景が料理を分ける。しかし手伝うのは氷室だけで、他の者達は仲間内でのみの会話を楽しみ、千景に対しては一切の感謝を述べない。

そして、朝食が始まれば、千景は一人、部屋の片隅の床で食べていた。

まるで、あらかじめそこに席が用意されていたかのように。

誰も彼の事を気にせず、ただただ自分たちだけで話し合っていた。

そして登校の時間。

「行ってきまーすー！」

と、元気に声をあげ、施設を出ていく子供たちに紛れ、少年は一人、歩く。

しばらく歩き、施設から結構離れた所で、少年は、とある子供の集団に囲まれた。

一人の少年を中心に、その集団は少年を見下すかのように、そして、軽蔑し、卑しい笑いを向けていた。

それに少年は表情を一切変えず、ただこれから先起こる事をぼんやりと想像していた。

「オラッ！」

「ッ・・・」

人目のつかない空き地にて、先ほどの少年が、集団にリンチに遭っていた。

(今日はいつもより酷いな・・・)

少年は、ただ為されるがままに殴られていた。

「へへっ、昨日ママにゲームやってて怒られたからなあ・・・」

「ああ、そういう事か」

少年は、今さっきまで殴っていた少年に向かってそう淡々と呟いた。

それが気に障ったのか、その少年は、殴られていた少年を蹴り飛ばす。

「ッ・・・」

「黙ってるゴミ。ゴミはゴミらしく地面に捨てられて黙ってる」

頭を踏まれ、地面に顔面を無理矢理押し当てられる。

しかし、それは少年にとってはさほど苦痛ではない。

もう、すでに慣れた痛みだ。

ただ、ここは苦しそうなふりをしておこう。

「ぐ・・・う・・・」

「まったく、なんでお前のようなクズが生きてんだよ。パパから聞いたぞ。お前の親はどうしようもないろくでなしだっけな」

「・・・」

その瞬間、少年の心は、芯から冷えた。

「はっ、ろくでなしの子供は同じろくでなしなんだ。こんな事しても・・・」

「黙ってる」

とてつもなく低い声が、少年から発せられた。それに、殴りつけていた少年が思わず後ずさる。ただ、その後で少年は少しだけ後悔する。またやってしまった、と。

「……い、いくぞ」

その少年の言葉に周囲にいた子供たちも同意し、さっさと行ってしまふ。

「……」

少年は、その様子を見送り、立ち上がって自分の体の状態を確かめる。

(腹に数回、右腕を七回、左腕を五回、脚はどちらとも無事、か……) 歩く事に問題が無い事を確認すると、少年は、歩き出す。

服はボロボロ、顔にも痣が出来ており、みずも無残だ。

しかし、少年は気にした様子も無く歩く。

商店街を通る。

しかし、そこですれ違う人全てが、少年に対して冷たい視線を向ける。

嫌悪、嘲笑、忌避。

それらの感情が、全て少年に向けられていた。

しかし、少年はその視線の全てを受け入れていた。

そして、学校。

まだ、授業は始まっていないようだが、ホームルームはもう始まっているだろう。

そして、校門前には、一人の男性教師がいた。

「今日も遅刻だな」

「……」

あざけるかのように言う男性教師、その手には、竹刀。

そして、その教師は、突如として少年の腹を竹刀で殴る。

「……ッ」

「返事しろ」

「……はい、すみません」

いつもの事に、少年はいつものように答える。

「チツ、なんでテメエのようなガキがこの学校にいんだよ」

男性教師はそう悪態吐き、去っていく。

少年は殴られた腹の感触を感じながら、何事も無かったかのように歩き出し、校舎に入っていく。

そして、他の教室の点呼の声を聞きながら、少年は自分の教室の扉を開ける。

「……チツ」

誰かの舌打ちが聞こえた。

その相手を、少年は知っている。

しかし少年は追及せず、窓際の自分の席に向かう。

しかし、少年の机は見るも無残な状態になっていた。

椅子はどうか原型を保っている、というような様子でボロボロになっており、机の方も、刃物で切りつけたのか、ボロボロだった。

そして、そのありとあらゆる場所に、油性のペンで、何か文字が書かれていた。

その内容は——これでもかというほどの罵詈雑言の数々だった。

しかし、少年は気にした様子もなく、それに座った。

「ハア……それじゃあ、最後だ」

担任教師は、名簿を見ながら、少年の名を呼ぶ。

「不道千景」

「……はい」

『不道千景』。

それが、彼の名前だった。

千景は、今日も一日乗り切ったと想い老けた。

そんな彼が倒れ伏しているのは学校の人目につかない裏手の地面。そこには血がいくつか飛び散っており、それら全ては千景のものだ。

(耳を切られたな……)

最近伸びてきた髪を切るという名目上でカッターで耳を切られたのだ。

それが証拠に耳から血が滴り落ちている。

「まあ、別に、問題はないが……」

この方、病気にかかっても無理矢理学校に行かされた身だ。体の丈夫さと精神力の強さにはそれなりの自負がある。

千景は立ち上がり、ボロボロのランドセルを背負って歩き出す。

すでに空は日は落ちかかって、夕焼け色になっていた。

「……」

すれ違う人全てが千景に敵意を込めた視線を向けてくる。

その理由を、千景はある程度把握していた。

千景の両親は、父親の方はのんだくれで殺人罪を起こした父と浮気に手を出していた母の間に生まれた子で、母親はこの辺りにある黒い

噂の絶えない会社の社長令嬢だったらしい。

そんな二人の間に生まれたのが千景。

ろくでなしな親の子供同士の間に生まれた子。それが千景。

いわば、親子三代にわたってろくでなしと言われ続けているのだ。

そんな千景の父親は警察官、一方の母親は専業主婦だったと聞く。

すでに家族との縁は切っていたみたいだが、問題なのはそこではない。

ある日、千景の両親が殺人を引き起こしたのだ。

理由は不明。否、追及されなかった。

ただ、ろくでなしの子供はやはりろくでなしという事で片付けられたのだ。

動機など無い。否、動機は娯楽のため。人の悲鳴を聞きたいだけなのだろう。

それだけの事で片付けられ、両親はただの犯罪者にさせられた。

しかし——両親はその殺人を犯した日に死んでいた。

死因も不明。ただ外傷を受けたわけでもなく、毒を飲んだわけでもなく、そこにただ横たわって生きていなかった。

そして、やはりその死体もゴミのように扱われた。

ただ、その時、二人の両親に大事そうに抱えられていたのが——

——当時、小学校に上がる直前の千景だった。

千景には、小学校にあがる以前の記憶の一切が無い。

その理由は、両親を失った事によるショックという事で片付けられた。

その後、千景は引き取り先がないまま、施設に入れられ、そしてそ

こからさき五年、現在小学六年生になるまで、毎日のようにいじめを受けてきた。

体中には傷があり、背中にはその六割を占める程の火傷の痕がある。

しかし、今の千景にとつてはそれが苦ではない。

親のした罪は受け入れている。

それが理由で自分がいじめられている事も知っている。

ただ、彼に一つ異常な事があるとすれば。

だれも怨んでいないという事だ。

普通、こんな事を毎日受け続ければ、怨みの一つぐらいを抱く筈なのだ。

怒りはする。なのに千景は一切の怨みを持たず、そしてこんな世の中を心の底から嫌ってはいなかった。

まるで、その感覚が麻痺してしまつたかのように、彼には嫌というほどに淡々とし過ぎていた。

そして千景は、それを疑問どころか気にしてすらいなかった。

ある意味でいって、気が狂つているともいえる程に怨みに無頓着なのだ。

何故、彼はそれほどまでに、怨みの念を抱かないのか。

それは、彼自身にも分からない。

そして、周りは誰もそれに気付かない。

施設に帰り着き、料理を作つた後、千景は自室に戻つた。

自室は、ここにいる子供たちによって、無残な程にボロボロだ。
そんな彼の唯一の趣味はゲームだ。

幅広いジャンルのゲームをやり込んでいる千景は、すでに小学生ながらにプロ並みの腕を兼ね備えていた。

FPS系のゲームを初期装備の縛りでやっていた時の事。

ふと、外からいくつかの足音が聞こえた。

「……………」

千景はそれを聞くと、ゲーム機の電源を落とす、それを引き出しに入れ、隠す。

そして、足音がなくなり、少ししたら、扉が勢いよく開けられた。

「よお」

そこには、数人の子供の集団。

中学生もいれば、小学生もいて、さらには女子もいる始末だ。

そして、千景はまたか、と思いつつ立ち上がるのだった。

水面に顔面を押し当てられ、がぼがぼと空気を吐き出す。

周囲からは笑い声。

水面に叩きつけられる音が聞こえ、水が耳に入る。

ここはトイレの水道。

そのシンクいっぱいに入れられた漂白剤を入れられた水溶液に顔面を押し当てられているのだ。

飲めば少なくとも腹を壊す事は確かだ。

それ以前に、空気を吐き出して酸欠状態となって溺死してしまう。

しかし、彼らもそれが分かっているのか、あえて千景の頭を掴んで、その水面に押し付けていた。

息を止めて我慢しようとするれば殴って痛めつける。あるいは、アイスピックやフォーク、カッターなどで斬りつけて痛めつける。

そうすれば、人は簡単に無理矢理に息を吐かせる事が出来る。

呼吸する動物とは、そういうものだ。

ありとあらゆるシヨックを外部から受ければ、心拍はあがり、そして、呼吸の回数も増える。

それが分かっている者もいるのだが、あえてそれをやっている。

「ほら、飲めよ」

「ぐ……が……」

苦しそうに息を吐き出す千景。

流石にこればかりは限界がある。

やがて、千景に限界が来たところで、水面から顔をあげさせる、一人の中学生男子。

「ここに住ませてもらってるだけありがたいんだぜ？お前のようなくでなしの子供がここにいられるのはじいちゃんのお陰だ。だけどな、お前のような奴が誰かの世話に焼かれるのは本来あっちゃいけないんだよ」

千景と同じ小学六年の男子である『磯部信也』が、そう嘲笑うかのように千景にそう囁いてくる。

「そうよお」

さらに、膝をつく千景のふくらはぎを踏みつける千景と同じ中学生の女子生徒の『日照花』ひでりはながそれに同調するかのように言ってくる。

「貴方のようなくでなしを置いてあげてるのは、たしかにおじいちゃんのお陰だけどねえ。こうして今、貴方がここにいられるのは私たちが仕方なく置いてあげてるからよ？そんな私たちのために、こういう事をするのは当然じゃないのかしら？」

ギリギリと、上靴越しに千景の脚を踏みつけてくる花。

しかし、千景は答えない。

否、答える余裕がない。

「だんまりかよ？」

「……」

「チツ」

「ぐっ……」

壁に叩きつけられる。

もたれかかって座り込んだところで、肩あたりを踏みつけられる、壁に押し付けられる。

「今、お前がここにいられんのは俺達のお陰なんだよ？わかる？お前は俺たちに生かされてんの？こうしてボロボロの部屋にいられんのも食べ物にありつけんのも皆俺達のお陰なんだよ。ついでにこの街に住めんのも、俺達のお陰なんだよ？だからお前がこんな事になんのは当然なの？良いな」

なんて滅茶苦茶な理屈だ、と千景は思う。

そもそも料理を作っているのは千景なのであつて千景以外の誰かが作っている訳でもなければ、それこそ美味しい料理にありつけていられるのは千景のお陰だ。

ついでに、千景を管理しているのは氷室であつて彼らではない。

それこそ何かしらの告げ口をすれば、評価を落とす事も出来れば、千景は反論もしなければ何かを言う事すらない。ついでに氷室にとって重要なのは生活態度ではなく、彼の技量なのだ。

小学六年、おそらく奉仕という言葉を知らないのだろうが、まあ、彼らの言っている事は、そういう事なのだろう。

だから千景は追及しない。

「信也！持って来たぜ」

「お、やつと用意出来たんだな！」

ふと、トイレに一人の男子が駆け込んでくる。

その手には、水の入ったバケツ。

しかしそのバケツは、嫌と言うほど黒ずんでいた。

周囲の卑しい笑みが、嫌でも目に入る。

本当なら、誰もかれもが目を逸らしたくなるだろう。

しかし千景は逸らさない。

すでにどこかのネジが飛んでいるのだから。

汚れた水を浴びせられ、それらを洗濯機に突っ込んで風呂に入り、着替えて自室に戻る頃にはすでに時計の針は一時を過ぎていた。

いつものように、ベッドに倒れ込もうとして、ふと、千景は抽斗に目を留めた。

しばしその抽斗を眺めたあと、その抽斗から、刃の折れた刀の柄を取り出した。

「……」

根元の部分のみが僅かに残っており、そこから先は無い、使い物にならない刀。

最近、本当にごく最近、三日前に拾った一本の刀ではあるが、それが、妙に手に馴染む。

「……なんなんだ、これ……」

それが、千景にとって初めての疑問だった。

何故か、手に馴染む刀の柄。これが一体、どういったものなのか、千景には一切の検討がつかない。

しかし、これ以上は流石に明日の生活に響いてしまおうと思い、千景は早々にその柄を片付けてベッドに倒れた。

絡久良市にある、大きな山の上には、一つの神社が存在する。

その神社こそが、この街を根底から支えている神が祀られている、『創代神社』なのだ。

その鳥居の前に、二人の少女と女性がいた。

片方は、巫女装束を身に纏い、長い黒髪を三つ編みにした、中学生ぐらいの少女。

片方は、長身でスタイルもよく、若干薄めの金髪でヘアバンドをしている、獣耳風のツインテールをした、一人の褐色肌の女性。

すでに深夜だというのに、二人は、寝静まった街を見渡していた。

「……今回の目標は『刃』です」

「そうか……」

「この間の『天鎖刈』の紛失もありますが……」

「心配するな。今まで一人で頑張ってきたんだ。今回も、成し遂げて見せる」

女性は少女に向かってそう微笑むと、その手に持つ脇差の柄に手を添える。

「行くぞ」

「はい」

女性は、一呼吸、深呼吸をし、そしてその刀を抜き放つ。

「——『陸鎧布』ツ!!」

次の瞬間、刀が光り出したかと思ったら、『布』の文字と共に、刀と鞘が形を変え、まるで幅広の包帯となり、女性の両腕の肘まで巻かれ

る。

さらに、服装まで変化し、まるで昭和の学生の着ているようなブレザーを羽織り、胸をサラシによつて巻き、腰には肌にフィットするような黒ズボンを履いている。

それは、さながら喧嘩番長のような恰好だった。

「では、気を付けて下さい」

「ああ」

少女の言葉に、女性は頷き、そして、人間ではありえない跳躍力で、街に躍り出た。

天鎖刈と真実

金曜日。

その日は、次の日が休みだという事で、学校がある日のなかで最も暇の多い日。

そんな日だというのに、少年、千景はまたいつものようにリンチされていた。

「服燃やされたな・・・」

焼却炉で何の躊躇いも無しに上着を燃やされ、今千景はTシャツ一枚という姿だ。

しかし、それを気にしている様子も無く、立ち上がる千景。

そして、ランドセルを持ち上げようとしたところで、そこから何か落ちる。

それは、刃の折れた脇差だった。

「そういえば、なんでこれ持ってきたんだっか・・・」

そこで思い出す千景。

刀といえば御神刀。だから神社に行けば何かわかるかもしれないと思っただけによるつもりだったのだ。

「・・・行くか」

ひとつの結論をつけ、千景は歩き出す。

周囲の冷たくも嘲笑うかのような視線を受けながらも千景は気にせず歩く。

そして、長い階段の前に立つ。

「・・・」

それを見上げ、千景はその階段を昇り出す。

とても長く、気が遠くなりそうだが、千景にとってはそれは苦ではない。

やがて、その階段に終わりが見え、上り切って、千景は振り返った。

そして――

「・・・嗚呼」

そう、感嘆してしまった。

見渡す限り、夕焼け色に染められた街は、千景にとってはとても美しいものに見えた。

嗚呼、この街はこれほど美しかったのか、と。

ふと、背後から人の気配を感じ、振り返る。

「ようこそ」

そして、千景は、その少女を見た。

「創代神社へ、私はここで巫女を務めております『神代奏』と言います。よろしくお願いしますね」

それに対して、千景は――

「……不道千景です」

そう、答えた。

「なるほど、それでこの神社に来たのね？」

「はい」

居間に案内され、千景は、彼女の前に例の刀の柄を渡した。

それを見た巫女、奏の眼が見開かれたと思ったら、しばし物色、そして千景に要件を聞いた訳なのだが。

「ありがとう。実は、以前、この刀が何者かに盗まれて……」

「そうだったんですか」

「ええ。本当に助かったわ。ただ……」

奏は、刀の刃を見る。

「……やはり、破壊されたか……」

「？ 何か問題でも？」

「いえ、なんでもないよ。どうかしら？ お礼として、お菓子でもどうでも食べてく？」

「いえ、俺は……」

「他人からのお礼は、受け取っておくものよ？」

にっこりと笑う奏。

しかし、このままでは施設に帰るのが遅れてしまう。

「ご自宅の方へは私から連絡を入れておくから、どう？」

何かを見透かしたかのように、奏は言ってくる。

どうやら、相当もてなしたいのだろう。

だが、このままここにいるというのにも問題がある。

帰って夕食の用意をしなければならぬのだ。

だから、断ろうとした時。

くう

腹の虫が鳴った。

それに、奏は思わず吹き出し、千景はなんともいたたまれないような感じに顔を歪ませる。

こうなってしまうたら仕方が無い。

「……お願いします」

「はい」

立ち上がって、台所に向かう奏。

その間、暇になる千景だったが、ふと、ダンスの上に、いくつかの写真立てがある事に気付く。

立ち上がり、それを覗く千景。

どれも、彼女の家族の様に見える。

しかし、一枚だけ、明らかに、千景にとっては気になる一枚の写真があった。

二人の幸せそうに笑う男女の前に、同じように笑う少年が一人いた。

しかし、まだ幼稚園児に見えるその少年は——あまりにも千景に似ていた。

「これは……」

そこで、廊下から足音が聞こえ、千景は慌てて元居た場所に座りなおす。

「お待たせ」

「ありがとうございます」

それは、カステラだった。

さらには湯呑に緑茶が入れてあり、湯気が良い感じに空中で揺れていた。

「・・・いただきます」

「どうぞ、召し上がれ」

そうしてカステラをいただく事になった千景。

しかし、その間に、階段を上がってくる、一人の男がいた。

その男は鼻歌を歌い、なんとも上機嫌で階段を昇っていく。

ふと、男は前に手を伸ばす。

その瞬間、何かに弾かれるかのように手が後ろへ弾かれる。

「おー、いてえいてえ」

しかし、男はなんでもないかのように笑う。

「痛くて痛くて・・・攻略のしがいがあるじゃねえか」

男の手首、そこに嵌められている腕輪リストバンドが光り出す。

そして、男の足元に光の輪が展開され、その中心に、大きく『攻』の字が現れた。

それが、徐々に上がっていき、男の姿を別の装束へと変換する。

「さあ、仕事の時間だ」

「今日は突然すみませんでした」

「いえ、私も久しぶりにプライベートに会話が出来てよかったわ」

神社の前で、頭を下げる千景になんでもないというかのように返す奏。

（そういえば・・・）

そこでふと千景は思い出す。

（こんな風に親切にされたのはおっちゃんとき奈以外で初めてだな・・・）

彼女が、自分の噂を知っているかどうかはともかく、仮令嘘であったとしてもこんな風に親切にしてくれるのは、千景にとっては珍しい事だった。

ただ。

(そんな事よりも早めに帰らないとな)

「では俺はこれで」

「ええ、機会があれば、またきてね」

もう会う事もないと思うが。

そう、千景は思った。

「いたいた探したよ」

ふと、背後から聞こえた声。

それに、振り向く千景。

そこには、一人の長身のひよろりとした体格の男。

しかし、その男の服装はあまりにも奇想天外で、露出の多い忍者装束のようなものを着ていた。

何故、その男はそんな恰好をしているのか。

否、問題はそこではない。

千景は、今までずっと他人の悪意にさらされ続けてきた。

裏に隠れた悪意。

隠そうともしない悪意。

軽い悪意。

本気の悪意。

それらを見てきた千景には、他人の悪意には異常なまでに敏感だった。

だからこそ、千景には分かった。

この男は危険だ。

故に千景は思わず身構えた。

そして奏は。

「……何故、入ってこれたのですか？」

そう、低い声で男に問うた。

その問いに、男は口角を吊り上げ、その手にもつ軍刀を持ち上げ、その柄に何かしらの光の円を展開する。

その円の中には、『攻』の文字があった。

「分かるだろう？」

「……『攻略』ですか」

「そう、本来俺達『魔器使い』には絶対に入れない結界を攻略したんだよ」

千景は、二人の会話についていけない。

魔器？結界？攻略？なんの話だ。

故に千景は問わない。

「しっかし以外だな。まさかこんな所に子供がいるなんてな。それも、先代の息子とは恐れ入ったぜ」

「ッ……」

「先代……？」

何か、気になる単語を呟いた男に首を傾げる千景。

しかし、千景が葛藤して答えを得る前に、男が動いた。

「ま、どうせすぐに死ぬんだから良いんだけどな」

男が、軍刀を振り上げる。

そのある刀。その刃が、異様に光り出す。

「『飛び攻撃』」

「ッ!? いけない! 逃げてー!」

奏が、千景を抱えて横に跳ぶ。

次の瞬間、男が振り降ろした刃から、光を纏った斬撃が飛び、神社

の本殿を斬り倒す。

石畳さえも切り裂き、そこに大きな亀裂を作る。

「な……!?!」

その、ありえない現象に啞然とする千景。

しかし、そうも気にしていられないと疑問をさっぱりと斬り捨て、立ち上がる。

同時に立ち上がった奏の手を引き、一気に神社の中へと逃げ込む。

「逃がすかよッ!!」

男がまた剣を振りかざす。

「合図で横に飛べッ!!」

千景がそう叫び、そのすぐ後に男が剣を振り下ろす。

「右だッ!!」

「ッ!!」

千景と奏が同時に右へ飛び、飛んできた斬撃を回避する。

「建物の中へッ!そこなら狙いもつけにくい筈だッ!!」

(透視とか使われてたらアウトだけどな)

とにかく叫び、神社の中へ逃げ込む千景と奏。

その次の瞬間。

『崩攻』ッ!!」

——神社が、崩れた。

「——ッハア!」

舞い上がった粉塵を吸い込まないようにと息を止め、やっとそれが張れたところで息を吐き出す千景。

現在は、どうにか崩れなかった屋根のお陰で押しつぶされずに済み、どうにか無傷で済んでいる。

「神代さんは……」

そして、すぐ傍にいた者の安否を確認しにかかる千景。

そして見つける。

左肩から血を流しているのか、白い巫女装束が赤く滲んでおり、その傷口を片手で塞いでいる奏の姿があった。

「千景くん……」

「神代さん、その腕……」

「アハハ、木の切れっ端が当たったみたいで……」

「少し待っててください」

千景は、すぐさま自分の下着であるTシャツを引き千切る。

そして、それを奏の左肩に巻き付ける。

「手際が良いのね」

「よく、怪我するので」

「そう……」

奏は、悲しそうに呟いた。

そこで、ふと千景は地面に落ちていた一枚の写真を見つけ、それを拾い上げる。

「……神代さん」

「何かしら？」

「この写真は、もしかして俺の家族ですか？」

それは、二人の男女と一人の少年の写真。

その写真に写る、小学一年あたりの少年は、あまりにも千景に似ていた。

「……どうして、それが君の家族だって思ったの？」

「……俺が、そう思ってるから」

「率直、だね。だけど、それだけじゃ……」

「確かにそれだけなのかもしれない。だけど、俺は、知りたいんだ」

そう、それは、千景が唯一求めていた、たった一つだけの答え。

「俺は——父さんと母さんに愛されてたのか、それが知りたい」

千景は、そう真剣な表情で、聞いた。

それに奏は……

「……全く、その顔は、千歳さんにとつても似てるわね」

そう、諦めたかのように呟いた。

そして、奏は答えた。

「ええ。貴方は愛されてたわ。喜んでいる時も、楽しんでる時も、虐めが辛くて泣いている時も、二人は、決して貴方を見捨てないで、愛してた。そして……」

奏は、千景を厳しい眼差しで睨み付けた。

「——貴方のせいで、死んだ」

」

それに、千景は何も答える事が出来なかった。

「貴方が記憶が無い理由は、とある男のくだらない願いの為に、貴方の全てを供物として創代様に捧げられたから。そして、その目論見は、貴方のお母さんによって呆気も無く阻止された。そして、貴方のお父さんとお母さんは、自ら願った。『自分たちの全てをあげるから、どうか息子の全てを返して下さい』ってね」

奏の言葉は、どこか辛そうに聞こえた。

「そして、貴方は記憶以外の全てを返してもらった。多少、改造されたけど、それでも貴方は記憶以外の全てを返された。自分の両親の全てと引き換えにね」

そして、奏は言う。

「貴方は、そうやって今を生きてるの。貴方は、二人の夫婦の犠牲の上に生きているの。良いわね？貴方は少なくとも二人の人間の犠牲から成り立っている存在なの」

そう、奏は冷たく言い放った。

そして、同時に思った。

(これで良い)

これで、彼は戦いに参加しないだろう。

そして、彼は俯いた。

シヨックなのだろう。それもそうだ。何せ、自分の所為で、親が死

んでしまったのだから。

それが証拠に、彼は、泣いている。

ぽたぽたと、その双眸から、涙を流していた。

きつと、辛いのだろう。

そうして、奏は、彼に慰めの言葉を掛けようとした。その時。

「——よかった」

予想外な言葉が、彼の口から洩れた。

「俺は……見放されてなかった……父さんと母さんに……愛されてた……」

その言葉に、奏は唾然としていた。

彼は、見ていない訳では無かった。

ただ、重要だったのが、自分が愛されていたという事実のみだったのだ。

それだけを、彼は実感しているのだ。

そして、彼はすぐに涙を拭いた。

「俺は、先代の息子なんだよな？」

「ツ……」

「だったら、あの刀には何かしたの意味があるって事だよな？」

「……」

奏は、答えない。答えたくない。

それに答えてしまったら、彼は迷いなく、この戦いに足を踏み入れる。

下手をすれば、死ぬ事すらありえる、この戦いに、自ら足を踏み入れてしまう。

それだけは、それだけはなんとしてでも食い止めたい。

だというのに、彼はそれを探す。

「教えてくれないなら、自分で見つける」

「そんな事、出来るわけ……」

「得意分野だ。俺は、説明書なんて読まなくても、操作方法なんてある程度使えば分かる」

それは、ありとあらゆるゲームをやってきた千景だけが持つ能力。

ありとあらゆる機械や道具を、見ただけで自分が持つ経験からその用途を予想し、使いこなす、経験習得。

故に、彼は見つけた。

故に、その使い方を理解した。

故に、それに必要な事を聞き出す必要があると断定した。

「教えてくれ神代さん。いや、奏さん。これの『名前』を」

「もうそこまで……」

「時間が無い。奴はもうすぐそこまで来てる。早くしないと、アンタも俺も死ぬぞ」

「ッ……」

千景の言葉に、奏は目を見開き、そして、辛そうに俯く。

千景の手には、刀身が根元まで砕けた脇差。それでは、その刀はその力を発揮しない。

だけど、直感してしまう。

そんなもの関係ない、と。

「奏さん……」

「……後悔、しないわね……?」

奏は、そう千景に問う。

それに、千景は迷いなく答える。

「ああ。俺が後悔する時は、きつと、戦えずに誰かが死ぬ時だ」

その言葉に、奏も覚悟を決める。

「一度しか言わないわ。その刀、『救導者』の証たる『御神刀』の一つである、その刀の名前は——」

一方で、神社を文字通り斬り倒した男、『川下太郎』かわしもたろうは、自分の目標である奏を探しながら瓦礫をかき分けていた。

「やれやれ、俺の文字はあくまで『攻』であつて『探』じゃねえからな」
太郎はしんどそうに瓦礫をかき分けていく。

しかし、ふと、周囲に夕日に煌く何かが、空中に舞っている事に気付いた。

「ああ？」

それに、太郎は首を傾げ、それが流れていく方向を見る。

その煌きは、街の方から流れてきており、それが、崩れた瓦礫の一点に集まっている事に気付く。

太郎は、初めはそれが何なのか分からなかった。

しかし、すぐさま、それが、自分にとつて最大の脅威となる武器だと気付き、剣を振りかざした。

『飛び攻撃』ツ!!!

振り下ろし、その煌きの集まる中心点を切り裂かんと飛ぶ斬撃を放つ太郎。

その斬撃は、そのまま煌きの集まる中心を切り裂こうとした、その時。

『天鎖刈』

出現した光の輪。その中心には、『鎖』の文字。

それが出現した直後、そこから無数の鎖が出現し、それが飛んできた斬撃と正面衝突し、霧散させた。

「な……に……!?!」

そして、その輪が出現した場所の瓦礫が吹き飛び、中から白い光が矢の飛び出し、神社の石畳の上に突き刺さった。

光が巻き散らされ、そこには、一人の少年がいた。その傍らには、恐らく助け出されただろう巫女服の少女がいた。

その装束は、白を基調としたもので、中には黒のインナー、肋骨あたりまでを覆うジャケット。手には指ぬきの黒の手袋。足先がまるでぶかぶかな白いズボン。そして、体中にまるで拘束具のように鎖が繋がれており、胸当ての上下の上から繋がれた鎖は首に巻き付き、手甲には鎖が肘まで巻きつかれており、脛当てには脛全体に鎖が巻き付き、腰の左右にも、飾りのように鎖が垂れ下がっていた。

その姿は、まるで罪人。

白と鎖と鎧のような拘束具を身に纏う、罪人。

その手には、おおよそ、彼の身長に合わぬ、巨大な大鎌。

そして、その大鎌こそが、太郎を仕留めるに足る、武器。

我は人を傷付けぬ、されど我はその身に巣くう悪意を斬る。悪意を誘う『魂』を斬る。故に我は『救導者』。

『救い導く者』——それこそ我らが存在意義。人の悪意を利用する悪しき『魂』たちに、鉄槌を下し、利用された者を救い導く者なり。

故に我ら全員『救い屋稼業』。

人に知られず、人を救う、見返り求めぬ者である。

太郎は、後ずさる。

それは、自分の天敵。

自分を唯一殺せる存在。

千景は、一步踏み出す。

「やめろ……」

その一步を踏み込み、深く体を沈めた。

「来るな……」

鎌を、大きく構える。

そして、一気に地面を蹴り、一気に太郎に接近する。

「来るなああああ!!!」

太郎は、軍刀を振り上げる。

千景が鎌を振るい、太郎がそれを迎撃するかのようには剣を振り下ろす。

しかし、小学生と大人という圧倒的体格差があるにも関わらず、太郎の剣が弾かれる。

それは、一重に武器の重量が関係してくる。

軍刀に比べ、千景の大鎌は明らかに重量が上だ。

それを軽々振り回している千景も大概だが、何より、太郎は剣術に關しては素人。故にその一撃を逸らしきれず、吹き飛ばされる。

「ぐあああ!」

しかし千景はすぐさま二撃目に入る。

「く、来るんじゃないよ!!」

しかし、太郎はさせじとばかりに剣を無造作に振るった。

『連続飛び攻撃』ツ!!』

太郎が刀を振るう。

そこから、まるでマシンガンのように斬撃が飛んでくる。

「ツ!」

それを見た千景は、すぐさま行動に移る。

想像するは檻。

鎖で作られた、強固な檻。

ありとあらゆる衝撃を緩和し、防ぎきる、鎖の檻。

『檻鎖』
わりぐさり

どこからともなく網目状に展開された鎖が、斬撃の嵐を防ぐ。

「畜生!なんでこんなところで『鎖』が復活するんだよツ!!」

「知るか」

「ツ!」

突如として、千景が鎖の一本を、鎖の網の目から放つ。

それは無数に放たれる斬撃を掻い潜り、一気に太郎に接近。その腹を打ち据え、上空へ吹っ飛ばす。

「ぐえ!」

空中、そこは、世界で唯一、作用反作用の法則が効かない、唯一の危険地帯。

そのまま斬れば、この戦いは一旦終わる。

踏み込んだところで、千景は躊躇した。

果たして、このまま斬っても良いのか。そこまでは分からないのだ。

この歳で犯罪者になる気はないし、かといって見過ごす訳にもいかない。

しかしそこで、奏が叫んだ。

「大丈夫!御神刀は、貴方が傷付ける意思さえ持たなければ、相手の精神だけを斬る事が出来るわ!!」

それを聞いた千景の行動は速かった。

もう先手は撃たせない。

確実に奴を仕留める。

「く、来るな・・・」

空中で避けようともがく。

実際、あまり頭の良い方ではない彼は、頭の回転も恐ろしい程に遅かった。

「ハアッ!!!」

容赦無い一撃が、太郎の胴体に突き刺さった。

そして、彼の体から浮き出た『攻』の字が真つ二つに割れ、消滅していき、太郎の姿が、元のださいパーカー姿へと戻っていた。

それと同時に、太郎がつけていたリストバンドが、手首から外された状態で地面に落ちた。

千景は、それを直感的に鎌で切った。

するとガラスが割れる音とともに、不思議な光を発してそれは砕け散った。

その様子を、奏は見上げた。

特に大きな怪我もせず、危なげなかったかのように見える。

しかし、夕日に照らされるその姿は、まるで、哀しい勇者のように見えた。

「奏!!」

ふと、背後で声が聞こえ、奏が振り返れば、そこには、眼鏡をかけた褐色肌の長身の女性がいた。

しかし、その姿は異様で、あまりにも露出の高い恰好であり、胸にはサラシ、黒い学ランのような上着を羽織り、その両手には、布が巻かれていた。

「大丈夫か!?!」

「あ、はい。どうにか」

「そうか・・・良かった・・・」

その女性は、心底安心したかのように胸をなでおろした。

そして、奏の背後の神社の惨状を見る。

完全崩壊、とまでいかないまでも、少なくとも応接間のある建物は倒壊してしまっていて、半壊という惨状だった。

そして、女性はその瓦礫の上に佇む千景を見上げた。

千景は、いつの間にか先ほどまで持っていた大鎌を、元の刀、脇差に戻していた。

片手で襲撃の張本人である太郎を引き摺り、女性の前に立つ。

そして、ゆっくりと見上げた。

「お前は……」

一方で、女性は、驚いたかのように、千景を見た。

まるで、彼を知っているかのように――

「思い出せば、あれが俺とアンタの最初の出会いだったな」

そう、千景は空を見上げた。

「あの頃は本当に驚いた。まさか、戦いに参加させられなかったお前が、いつの間にか救導者として戦っていたんだからな」

椿が、縁側に座りながらフツと笑う。

「あの後、創代様が神社を直すまで、椿さんの家にお泊りに行きましたよね」

「優はお前にとっても懐いていたな。まあ、アイツが一年の頃に、お前に

はかなりお世話になったようだったからな」

「偶然ですよ。まさかアイツの母親が貴方だなんて普通思わないですよ」

そう笑い合う。

そして、話は思いのほかはずみ、気付けば、夕方。

「あ、いたー！」

「ん？・・・優!?!」

鳥居の前で、一人の少女が椿を見て怒ったような表情を見せてズカズカと歩み寄ってくる。

「やっぱりここにいた！もうお母さん、いくら千景さんがいるからって遅くなりすぎー！」

「す、すまない、久しぶりだったもので・・・」

「一時間も待ったんだからね！」

少女の怒声に、一気に縮こまる椿。

「あらあら・・・」

「娘に怒られる母親って・・・」

それに苦笑する千景と奏。

その少女の名前は『安座間優^{ゆう}』

紛れも無い、椿の娘だ。まだ、小学六年生である。にも関わらず、胸の大きさは小学生のそれを超えている。

(東郷と同じ類の妖怪かなんかかだろうか・・・?)

『流石にそれは無い』

頭の中で聞こえた先祖の声に苦笑しながら、千景は優に声を掛ける。

「よっす、優」

「あ、千景さん！」

千景が声を掛ければ、優はたちまちその顔を赤面させて後ずさる。

「お前・・・まだその恥ずかしがり屋の性格直してないのかよ・・・」

「だ、だって・・・まだ慣れなくて・・・あう!?!」

「中学に上がるまでに直しておくよーに」

優の額を小突き、そう釘を刺しておく。

「あう……」

「さて、それじゃ俺はそろそろ戻るよ」

そう言い、千景は歩き出す。

「あ、氷室さんや施設の人たちによろしく言っておいてね」

「了解」

そうして千景は神社の前にある長つたらしい階段を降りる。

そして、夕焼け色に染まった街を見る。

夕日が海に反射し、心が安らぐ。

『久しぶりね』

ふと、郡千景が呟いた。

『この景色を見るのも、もう何年も前の事かしら?』

「知るか。俺はアンタのいた時代にいなかったんだぞ」

『それもそうね。でも、また見れてよかった』

とても優しい声が、脳裏に響く。

その声に、千景はなんとも言えない気持ちになりながらも、階段を降りていく。

そして、物語は進んでいく。

たった一晚だけの安らぎ

「それで、奏。どうして彼を戦いに巻き込んだんだ？」

「ここは、とある一軒家。」

その畳床の部屋にて、互いに正座をして、向かい合っている奏と褐色肌の女性がいた。

その様子を、遠巻きながらお茶をすすりながら見ている千景。

「彼が、千歳の息子だと知っていて、戦いに巻き込んだ。彼に、アイツと同じような結末を歩ませるつもりか？」

「ご、ごめんなさい。私がつとしっかりしていれば・・・」

「ハア・・・もう終わってしまった事だ。彼は、もうやめる気はないだろうしな」

そう言つて千景を見る褐色の女性。

その人物を、千景は知っている。

学生時代。

嗜んでいた空手で近場のヤクザの殆どを何度も壊滅させる程の豪快さと実力を持ち合わせておりながら、性格は至って真面目で冷静沈着。

夫はとある事故において死亡して女手一つで一人娘を育てている彼女の名は、『安座間椿』

この街が、ある意味で最も恐れている、最強の女だ。

千景も、出来れば無理に関わりたくなかったが、彼女も自分と同じだと言うのなら仕方が無いのだろう

「話は終わりましたか？」

「ああ。このまま説教しても仕方が無い」

「うう・・・」

申し訳なさそうに縮こまる奏に、千景は呆れる他無かった。

そんな中で、椿が千景の方を向く。

「改めて、安座間椿と言う。お前の母とは、友人関係だった」

「不道千景です、母がお世話になっていたようで」

「気にするな。むしろ世話になったのは私の方だ。千歳には、良く助けられた」

「……一応、俺は貴方とも会っているのですよね？」

「……ああ」

つまりこれは彼女にとっては初めてではない。

記憶の喪失。

それがこんなところで問題になってくるとは。

おそらく、以前の自分と彼女の知っている自分は、全く持って違うのだろう。

その頃の自分は、さぞ、笑顔で溢れていたのだろう。

でも、今は違うのだ。

千景は、そう一人、合点して椿を見上げた。

「では、この刀と、貴方たちがやっている事について教えて欲しい」

「……良いだろう」

椿が、そう歯切れ悪く答え、一つずつ、答えていった。

「まず、その武器からだ。それは『御神刀』。創代様が作った、『魔器』を唯一破壊出来る、神の武具だ」

「御神刀……だから刀なのか」

「ああ、元の形状は全て刀で統一されている。その理由は未だ不明だが、少なくとも日本に刀の技術が伝わったばかりの頃に創代様は神になったらしい。それが理由なのかもしれない」

「成る程……それで、魔器ってなんだ？」

「それについては、私から……」

奏が口を挟み、それに千景と椿が頷く。

「ごほん。この絡久良市には、『穢れの洞』と呼ばれる、大きな穴が存在します」

「穴？そんなものどこに？」

「神社のすぐ裏手。一見、木々が生い茂って見えるでしょう。しかし、実際はその下には、悪霊を閉じ込める結界が仕込まれているんです」
奏は話す。

かつて、この絡久良市は、とある呪術師によつて日本中の悪霊を集められ、危うく壊滅しかけた事があった。

それに、自分を信仰してくれる者がいなくなり、物を作れなくなる事に憤った創代が、集められた悪霊をとある洞窟に纏めて押し込め、封印したそうなのだ。

しかし、それで諦める呪術師では無かつたらしく、その結界を百年に一度緩まる様に細工。

結果、百年おきに閉じ込められた悪霊が出てくるようになったのだ。

しかし、街に退魔師などいないため、創代はとある対策を用意した。

呪術師は、悪霊を人に取り憑かせる事で街の壊滅を凶つた。

すなわち、悪霊は人の精神に取り憑いている。

ならば、肉体を攻撃せず、精神体からその悪霊を切り離して殺してしまえば良い。

それによつて生まれたのが『御神刀』。

収納形態として普段は脇差の形をしているが、名と共にその本当の姿を解放すれば、その刀に込められた『文字の概念』を使えるようになり、敵を討ち取る事が出来る。

すなわち、悪霊退治に繋がるのだ。

しかし、敵も敵で抵抗しない訳がなく、悪霊は、憑依した人間が身近に身に着けているものに憑依し、そして、その姿を武器へと変え、自らに与えられた『文字の概念』で対抗してくるのだ。

それが『魔器』。

故に、その魔器を破壊すれば悪霊は消え、その人も元に戻るのだ。

その戦いは何年も続き、百年経つにつれて何度も解放されてきた。

しかし、時代が進むにつれ、その御役目はやがて闇夜の中、人知れず行われるようになり、現在に至っているのだ。

「そして、貴方は創代様より、その御神刀『天鎖刈』を使うに値すると認められたのよ」

「なるほど」

「今回出現したのは、おおよそ百体近く。現在、その数はこの十五年の間にやっと五体にまで減らしたわ」

「ん？十五年？」

千景は、その不相応そうな数字に首を傾げた。

「悪霊は、回数を重ねるごとにどんどん強力になっていっているの。年月を重ねる事でその怨みを募らせる。まさしく、悪霊の在り方そのものね」

奏がやれやれというように溜息を吐いた。

「・・・椿さん程の実力があれば、ものの五年で全て片付くのでは？」

「確かに、私と千歳でかかれれば、ものの数年で色々と片が付くだろう。

しかし、今回の敵は、あまりにも強い奴がいたんだ。」

「強い奴？」

椿は、組んだ腕を掴む手にさらに力を込めた。

「確かに、そこらにいる雑魚なら私一人でも十分だ。だが、現在生き残っている奴らは、私の想像を遥かに凌駕する力を持っていたんだ。」

「その、敵の力というのは・・・」

そこで奏が紙を取り出し、その紙にある事を書き、それを千景の前に出した。

そこには、『強』『燃』の二文字が書かれていた。

「・・・？」

「現在確認されている敵の力の中で、椿さん、そして、貴方のお母さんが手に負えなかった敵が使っていた力の文字よ」

奏曰く。

『強』の字は、何よりも強く、という意味を示し。

『燃』の字は、ありとあらゆるものを燃やす、という意味を示す。

「この三文字は、今まで唯一、取り逃がした敵よ」

なるほど、どうやらこの御役目は、かなり気長なものになりそうだ。

しかし、それも良いかもしれない。

「分かりました。大体の事情は分かりました。ようは残り五体の魔器を破壊すれば良いんですね」

「そうなる」

「魔器とは、人の悪意に付け入り、一気にその意思を増大させていきます。それ故に、人は悪行を行いやすい」

「ただ、その悪意が増大するのは、人気のつかない夜。それ以外の時間に、魔器は行動を起こさない。もちろん、例外は存在するが」

「……分かりました」

「どうやら、睡眠時間はかなり削られそうだ。」

「そんな鬱な気分になりながら、千景はふと、夜、という単語を思い出し、そしてそこから、ある事を思い出した。」

「……あ」

「案の定、その時間に百合籠へ連絡を入れたら飛んできたのは怒声だった。」

『どこにいるんだよこのクズがッ!!』

「申し訳ありません……」

『てめえの仕事は住ませてやってる俺達への奉仕だろうが!』

「はい……」

『さっさと帰ってこい!』

「わかりまし……あ」

ふと、後ろから伸びた手が千景が持っていた受話器を取り上げる。

「もしもし」

『ん? 誰だよあんた』

「安座間というものです」

『……え?』

「彼は現在、こちらの不手際の所為で、怪我をしまして、一晩だけここに置かせて頂けないでしょうか? 明日はどうせ休み。別に良いでしょうか?」

『し、しかし……』

「良いですね?」

『……分かりました。よろしくお願いします』

「一気に勢いが萎えた声を受話器越しに聞こえ、やがて向こうから切るような音が聞こえ、その後樁も受話器を降ろした。」

「うむ。これで良いだろう」

「良いのか、それで・・・」

千景はもはや何も言えない。

「どうやら、彼女の恐ろしさは、この街の人間にとっては常軌を逸しているらしい。」

「今夜は泊まっていけ。一日ぐらいは大丈夫だろう」

「俺にとってはその一日が怖いんですよ・・・」

そう呟いた時。

「お、お母さん・・・」

「ん？あ、優」

ふと、壁に隠れてこちらを見ている少女を見つけた。

椿ほどの褐色ではない、が、少し焼けた肌の椿とは対照的な黒髪の少女がそこにいた。

「お母さん、ごほん・・・」

「あ、ああすまない。今から作るから待っていてくれ」

千景よりも身長は低く、内気のように見える。

「紹介する。私の娘の『優』だ。恥ずかしがり屋だけど、根は良い子だ」

「はあ・・・」

（果たして俺に対して良い態度とった奴はいただろうか？）

そう思いながらも、千景は自己紹介する。

「不道千景だ。お前のお母さんとは、俺の母親が友人関係だったらしい」

「ゆ、優、です・・・よろしくお願いします・・・四年生です・・・」

千景より二つ年下。

喋り方や挙動からして明らかに気弱な性格だ。

「それも、周囲から悪い印象を受けている、かつ物凄い虐めや暴行を受けている千景に対してまで気を遣うほどだ。」

相当優しい性格なのだろう。

それ故に、彼女は脆そうだ。

「しばらく優と待っていてくれ、すぐに夕飯を作る」

「あ、俺がやります」

「良い。今日のお前は客人だ。それに、優は男を知らないからな。話し相手になつてくれると嬉しい」

「俺のような男が話し相手になつても……」

そこで千景の言葉を遮るように椿が頭を撫でる。

「っ……!?!」

突然の事に思わず硬直する千景。

「何、少し会話してもらっただけで良い。互いの趣味とか、特技とか話し合うだけで、それだけで時間はすぐに過ぎていくものだぞ」

「はあ……」

「では、任せたぞ」

そう言つて去つていく椿。

そこにぽつんと置かれた二人。

千景はゆっくり振り向いて優を見た。

「ひう……」

早速怯えられた。

まるで小動物のように体を縮こませて小刻みに震えている。ただ見ただけだ。それだけでこれだ。

しかし、このまま突っ立つていても仕方が無い。

「……居間に行くぞ」

そんな訳で、居間に来た千景と優。

そこにはくつろいでいた奏がいた。

「あ、優ちゃん」

「奏さん……!」

奏の姿を見た途端に嬉しそうに表情を明るくする優。

それに千景はツツコミを入れない。

どうせ慣れている事。滞りなど無い。

「元氣してた?」

「はい」

「学校はどう?」

「あー、まだ一人で図書室に……」

「友達もつと作りなさいよ」

「はい……」

「おい、なんかしぼんで行ってるぞ」

奏の言葉にしゅんとなつてしまった優。

それにツツコミをいれる千景。

「何ヨ、それならちーくんは優ちゃんを元気つけられるっていうの?」

「なんで俺に振る?それにちーくんとはなんだ?」

仕方が無く優と話す事になった千景。

「あー……」

「……」

「……お前、どんな本が好きなんだ?」

「え、えつと……特に決まってる……その、恋愛ものを……」

「ふむ。ならば俺としては『悪役令嬢に騙されない男』がおすすりめだな」

「え!」

その瞬間、優の表情がこの上なく輝く。

「あの、転生物でゲームの世界に入ったが周りに悪役として演じていた名家の令嬢さんに一途に恋し続ける少年のお話ですか?」

「ああいう、本来幸せになる運命ではない人物が幸せになる物語はたいてい好きだ。まあ、俺に当てている訳ではないが、ああいう、不幸が人間が幸せになれる、というのは、客観的に見ても良いものだ」

「それは私にも分かります。自分の運命を知っていながら、それでもなお悪役を演じ続ける孤独な少女に手を差し伸べる優しくも真つ直ぐな少年。最終的に国を追い出されてしまいますが、それでも噂の少ない田舎で幸せに暮らすと言う最後はとても感動的でした」

「そうだな。しかし、正規ルートの主人公に味方する者たちはなんて酷な事をするんだろうな。自分の罪を重々理解しているのに、さびれた田舎に追い出してしまふなど」

「確かにあれは酷かったです。人の努力も知らないで、悪口を言うなんて」

いつの間にか会話が弾んでいる。

それに奏は茫然としながら心の中でこう思った。

(なんだ・・・上手く話せてるじゃない・・・)

そう、頬を綻ばせるのだった。

「それですね。最後の主人公とガキ大将の決闘が物凄くて、私手に汗握る思いで魅入っちゃいました」

「あの戦いの描写があまりにも詳しく描かれていたから、その時の人物の惨状が目映る様だったが、確かにあの戦いはすさまじかった」
「最後のヒロインの『頑張つて』て叫んだ時は思わずきゅーっとなってしまいました」

「そこは理解できないが、人は誰かの言葉で少しの間だが強くなるものなんだな」

食事の時間。

それでも会話をやめない二人。

その様子を微笑ましそうに見る椿と奏。

「歳は違うが、優に親しく会話が出来る男が出来て良かった」

「趣味も合いますしね」

ちなみに、椿の作る夕飯はとても美味しかったとの事。

就寝の時間。

千景は、ソファの上で寝ていた。

流石に女所帯の中に男が一人というのは、いささか抵抗がある為、どうにか交渉して千景は一人、居間にあるソファの上で寝ていた。

「・・・」

仰向けに、天井を見上げる千景。

知らない天井。

そして、まだかすかに漂う、夕飯の匂い。

(・・・なんか・・・楽しかったな・・・)

千景は、そう思った。

「……こういう事も、悪くないかもな」

千景はふと、そう思った。

しかし、その表情に、笑みは無かった。

ただ、天井に向かって手を伸ばし、想う。

自分は、両親に愛されていた。

ただ、それだけを知れば、あとはどうでも良い。

虐められようが攻撃されようが罵倒されようがもはや関係無い。

俺は人を守る。

かつて、母がそうしたように。父が、周りから罵倒されようとも警察官になったように。

ただただ人を守れる存在で在りたい。

千景は、ただ、そう想った。

「今思えば」

ふと、奏が呟く。

視線の先では、椿が優に思いつきり叱られている。

しかし、その光景からすぐ目を離し、夕焼け色に染まった空を見上げる。

「彼の行動原理は、人として、あまりにも『憎しみ』の感情から離れていたわね……」

奏は、彼の異常な性格を、思い返していた。

「人間以下の証明として、罪を背負う一族……」
奏は、その言葉を呟いた。

白い露は千景に救われて

ある日の事。

本日は土曜日。学校は一部を除いてどこも休み。ついでに会社も休み。あっちこっちの企業がコンビニなどの年中無休で動き続ける店以外は休みを取れるという素晴らしい休日の日。

その日、千景は孤児院『百合籠』の廊下を歩いていた。

「♪」

その耳にはイヤホン。

それは、樹が暇な日にくれた樹の歌が入ったウォークマンだった。

千景はそれを聞いているのだ。

『良い曲ね』

(だろ?)

郡が感想を述べ、千景が頷く。

ふと、そんな千景の背後から忍び寄る手があり、その手が千景がつけているイヤホンの片方を取り上げる。

「な・・・!?!」

「ふむ・・・聞いた事無いね。誰の曲?」

「お前か白露!?!」

そこにいたのは千景から取り上げたイヤホンの片方を耳につけて曲を聞いている白露だった。

「良い声してるじゃん。ねえねえ、誰の誰の?」

ずいっと聞いてくる白露。

「誰って・・・うちの後輩だよ」

「え?君の後輩が作ったの?」

「逸材だぜ。なにせ未来のスーパースターだからな」

「ふくん・・・」

「反応薄いな・・・!?!」

まじまじとイヤホンを眺める白露。

「・・・珍しいね」

「ん?何が?」

「君が他人を褒めるなんて」

白露が、怪訝そうに言ってくる。

「・・・そうだな」

千景は窓の外を見る。

「讃州に行かなければ、俺はずっと、あの頃のままだったかもな」

「あの頃の君って、色々と可笑しかったよね」

「かもしれないな」

フツと笑う千景。

しかし、白露にとっては、そこは重要な事だった。

(そう、あの時も、君は私を――)

それは、同じ土曜日の事だった。

昨晚、椿の家に泊まった千景は、すぐさま施設へと戻った。

その際、御神刀は肌身離さずもっておけと奏から言われ、しぶしぶ鞆の中に御神刀を潜め、戻った時に彼を出迎えたのは冷たい視線と陰口の嵐だった。

分かっていた事だ。

それに、以前よりかは応えなくなつた。
やはり、幾分か気分が良いからだろう。
それはともかく。

早速ぶん殴られた。

「昨日お前がいなかつたお陰でストレス溜まつてたんだ。良かったよ
お前が戻ってきてくれて」

信也が醜悪な笑みでそう言ってくる。

この間と言つてる事が違っているような気がするが、そこは言わぬ
が仏というものだ。

周囲には同じような笑みを浮かべる男女それぞれ。年下もいれば
年上もいる。

男女問わず、というものだ。

そこからはいつも通りの罵倒と殴る蹴るの暴行。

しかし、今回ばかりはそれが過剰だった。

否、新たな虐待方法を使ってきた。

持ってきたのはノコギリ。それを持っているのは少し筋肉質の中
学生。

彼らは、あろうことかそれを他の奴が押さえつけた千景の腕に押し
当て、木を切るかのように前後に動かした。

肉が引きちぎられるような感覚と、ぐちゃぐちゃにされるような激
痛が千景の脳を突き刺す。

しかし、これならまだ耐えられる。

「ぐ……う……」

予想はしていたが、流石にこれは手当をしなければならぬ。

などと冷静過ぎる程冷静に今の状況を理解する千景。

まさかこのまま腕を斬るとかしないよな？

なんて思っていると、ふとノコギリの刃がかなり食い込んだところ

でやめる。

そのノコギリには血がべつとりとついており、千景の傷口からは止めどない程の血が溢れていた。

未だに、周囲は嫌な笑みを浮かべていた。

そのあと、彼らは千景の四肢を一回ずつ、ノコギリで斬った。

「今回も手ひどくやられたね」

「別に、いつもの事です」

オマケの一発で頭部に石を喰らったので頭に包帯を巻き、ノコギリで斬られた部分には丁寧に包帯が巻かれている。

その手当をしたのはこの所長である氷室だ。

「すまないね。こんな事しか出来なくて」

氷室は、本当に申し訳なさそうに言う。

その点については千景も理解している。

彼は、立场上、施設の子供たちを平等に見なければならぬ。

それは千景に対しても同じ事。

彼一人を最優先し続ける事は出来ない。

それに、たった一人が多勢に勝てるはずも無かった。

だから、千景はこれを仕方のない事だと割り切り、気にしないであらう。

「さて、私はそろそろ溜まっている書類を片付けに行くよ」

「分かりました」

そうして保健室を出ていく氷室。

とりあえず床に立ち、保健室を出る千景。

ふとそこで、千景は一人の少女と鉢合わせになった。

「ん？」

「あ」

茶髪のショートカットヘアの少女、新井白露だ。

その少女は、千景を見るなり嫌そうな顔をする。

「げ」

そしてこの一言である。

「なんで君がここにいるの」

「単純な話だ。ノコギリで斬られた」

「あ、そう」

身長的に千景の方が高い。

故に千景が彼女を見下げる形になる。

それが気に入らない白露は、ムツとして。

「ふん！」

「ぬぐ!?!」

足を踏んづけた。

「縮め！」

「無理な話だ・・・」

白露はそこまででは無いが低身長だ。

だがそれとは真逆に胸の方は大きい。

だから『ロリ巨乳』と揶揄される事が多く、実は数少なくない者達からからかわれている。

故に、比較的に身長的高いものに対しては理不尽の事をする事が多い。

特に千景に対しては。

そのままさっさと行ってしまおう白露。

それにやれやれと溜息をついて、千景も白露とは反対方向へ歩いていく。

その先は居間だった。

そこには何人かの子供たちや職員たちがおり、全員、世間話をして、この間放送したアニメの感想を言い合ったり、あるいはそこらにある玩具で遊んでいる。

千景は、その中を通る事はせず、死角になっているテレビの方へ向かった。

ソファがあり、そこへ腰かけようとした、千景はふと気づいた。

そこに、髭の中年の男がいた事に。

ここの職員の一人の森谷真武郎だ。

その手にはコーヒードが入っているとと思われるカップが握られていた。

その視線は千景に向けられておらず、今テレビで流されているニュースに向けられていた。

千景の事は眼中に無かった。

千景は、そこで立ったまま真武郎を眺めていたら、ふとニュースの内容が耳に入ってきた。

『それでは、次のニュースです。絡久良市にて、例の連続誘拐事件が発生。警察はなおも捜索を続けていますが、足取りがつかめずにあります。現在分かっている事は、ここ十五年間で誘拐されているのはどれも小さな女の子だという事であり、さらに、年齢が十五を過ぎたあとで見つかり、その見つかった少女たちは、どれも性的暴行を受けた様子であり、精神的ダメージも見られるとの事です——』

「……」

千景は、そのニュースを聞く。

「どうした？」

ふと、そこで真武郎から声かけられる。

「座れよ」

「……」

真武郎に促され、千景も席につく。

『犯人についてはまだ何も分かっておらず、ただ分かっている事は、異常な性癖を持つ男性だという事です。よって、警察はさらに警戒態勢をあげると同時に、近隣の住人、特に十五歳未満の少女たちに注意を呼び掛けております——』

「注意如きでどうにかなる訳がないだろ」

真武郎は、まるで独り言のように呟く。

「十五年かかって足取りどころか容姿も分かんねえのに、どうやって探すんだっての」

無責任な愚痴だ、と千景は思うが、それも仕方が無いだろう。

ここの施設も、何度かその連続誘拐犯の被害にあっており、そして、

真武郎はその誘拐犯から自分が担当していた子供たちを守れなかったのだから。

だから、千景は黙ってその愚痴を聞き入れた。

それから、いくつかのニュースを聞き、千景は席を離れ、自室に戻った。

そして、机の上に置いてある脇差、御神刀『天鎖刈』を見た。

名の由来は『天の鎖に繋がれた鎌で刈る』という意味らしく、能力は『鎖』の概念を自在にあやつる事。

千景は、奏からそう聞いている。

先代の天鎖刈の持ち主である千景の母親は、この鎌の力を最大限引き出せなかったと聞くが、そこはまあどうでも良い。

問題なのは、千景がこの天鎖刈をうまく使いこなせるかどうかだ。そんな訳で、千景はそこに置いてあった工具箱を引っ張り出してきた。

そして、傍に置いてあった段ボールから、無線機を取り出した。

「明日までに直しておけて事だったよな」

千景は工具箱からドライバーを取り出すなり無線機を解体し始める。

千景は、これでも類稀なる機械に対する技術が高い。

その年で、壊れたテレビも直せるほどの腕前を持っている。

まあ、そもそもの始まりは一年の頃に冬を越すためにストーブを修理したからなのだが。

そうして、千景は無線機を修理していく。

新井白露は、友人たちと公園で遊んでいた。

土曜だから、午後から外に出て、そこから五時までぶっ通しで走り回っており、すでに白露も友人たちも疲れ切っている。

「あー、楽しかった」

門限となり、帰り路を歩く白露と同じ施設にいる同年代の子供たち。

「疲れた〜」

「帰ってシャワー浴びたい」

流石に遊び過ぎたか、彼女らは全員汗だくだった。

だから、一刻も早く施設に帰りたかった。

「今日も白露ちゃんの圧勝だったね」

「ふふん！走りには自信があるからね、私！」

自慢気に鼻を鳴らす白露。

「だけど・・・」

だが、そこで拳をわなわなと震わせる。

「アイツにだけ負けてる事が気に喰わないー!!」

アイツ、というのは言わずもがな千景の事である。

実は、身体的に施設内で千景が一番高いのだ。

手先の器用さも相まって、特に走る時の速さは尋常じゃない。

「ぐぬぬ」

「確かに、アイツが足が速いのは認めるけどね」

白露の隣にいた少女がそうぼやく。

事実、千景の脚の速さは周囲が認める事実。

さらに、彼の特技である『歌』の上手さも、認めざるを得ない。

何せ、手を抜いてカラオケで高得点をとるのだから。

「ろくでなしの癖に、生意気なのよ」

それにその場にいた全員が同意する。

「あ、そうだ！この後アイツに八つ当たるってのはどう？」

ふと、少女の一人がそう提案した。

しかし、白露はそれを拒否。

「むーり、今日は流石に疲れたわ」

「冗談だって」

そうやって笑い合う一同。

「あ、そうだ——」

ふと、白露がある提案をしようと口を開いた時——

「ぐふ、ロリ巨乳だ」

そんな、恐ろしいまでに嫌らしい声が、白露の耳元で囁かれた。

「——ッ!？」

その時、千景を自分の首が何か鎖のようなものに締め付けられるかのような感覚が襲った。

それに驚き、千景は思わず片手で自分の首を触る。
しかし、そこには何も無い。

「なんだ……？」

それに怪訝に思いながらも、千景は、中身を修理し終えた無線機を
ネジ止めし、ドライバーを片付けた。

「こんなもので良いか」

と呟き、その無線機を手にとって、部屋を出る千景。

そして居間へ行き、そこにいる中学生に声をかける。

「ジョニーさん」

「ん？」

中学生で髪の毛を金髪に染めたなんとも悪ガキそう見えるその少
年の名前は浜田徐丹。

その名前故か、分かりからは『ジョニー』と呼ばれている。

千景もその一人だ。

「直しておきましたよ」

「Oh, Thanks」

そして英語もかなり達者だ。

今の時代、あまり必要もないように思えるが。

ジョニーは、そのまま同じ無線機を持っている友人たちの元さつさ
と行ってしまう。

そのいつもの反応に特に気に障ったわけでもなく、そのまま自室に
帰ろうとした。

その時、施設の扉が勢いよく開けられた。

『!?!』

その音に、その場にいた者たちの視線が一斉に集まる。

そこにいたのは、頭から血を流す少女。

その少女は、この施設で暮らしている子供の一人。

「た、たすけ……て……」

息を挙げて、そう助けを求める少女。

それに、訳が分からないとでもいうかのように棒立ちになる一同の
中、二人だけが彼女に駆け寄った。

「おい、どうした」

真武郎と千景だ。

真武郎は、倒れかけた少女を抱きかかえ、容態を確認する。

「どうですか？」

「頭をぶつけたらしい。救急箱を持ってこい」

「分かりました」

千景は走り出し、すぐそこにある救急箱を取りに行く。

「しつかりしろ。まだ眠るなよ」

「うう．．．しら．．．ちゃん．．．が．．．」

「なんだ？」

少女が、必死に何かを言おうとする。

一方で、救急箱を取りに行つて戻つてきた千景。

「真武郎さん、持つてきまし——」

「しらつゆ．．．ちゃんたちが．．．変な男のひとに．．．さら

われちゃった．．．」

それを理解した瞬間、場の空気が凍った。

それは、彼女と一緒にいた者達が、何者かにさらわれた事を意味す

る。

そして、今現在、世間を騒がしている、そんな事をする犯罪者は—

—

「連続誘拐．．．!？」

「嘘だろ．．．」

「それに白露たちが攫われちゃったって事なのか．．．!？」

場が騒然とする。

そして、真武郎の表情は、見るからに焦っていた。

「なん．．．だと．．．」

そう、漏らす事しか出来ない真武郎。

「おね．．．がい．．．白露ちゃん．．．たち．．．を．．．」

少女は、必死に懇願する。

頭から血を流し、大量の汗を流しつつも、必死に言葉を紡ごうとし、

助けを求めている。

だが、いくらなんでも突拍子過ぎて、誰も動けない。
真武郎でさえ、過去のトラウマから動けないでいる。

誘拐されたのは、白露と他数名の女子。

やったのは、例の連続誘拐犯。

その誘拐犯に掴まった少女たちは全員――

――社会復帰不可能なほどに凌辱される。

「真武郎さん」

ふと、千景が呟いた。

「……？」

「ソイツの治療、お願いします」

「何……!? オイ！千景!!」

いきなり救急箱を真武郎の傍に置いたかと思ったら、千景はいきなり走り出して施設を飛び出した。

「何してんだアイツ!？」

突然で予想外な行動に、真武郎とその場にいた者達は啞然とするしかなかった。

だが、千景は全速力で走っていた。

（――ツ!!）

さつきから感じる、首を絞めつけるような感覚。

そして、引っ張られるような感覚。

（間違い無い……白露は――ツ!!）

ならば、急がなければ。

千景は、人生初めて全力で歩道を駆け抜ける。

気がつければ、そこは薄暗い場所だった。

「ん．．．んう．．．？」

「あ、気が付いた？」

「ッ!？」

いきなり、すぐ眼前から白露の顔を覗き込む、物凄く酷い顔立ちの男。簡潔に言つてブスだ。

白露は、その顔から逃げる為に動こうとするが、どういう訳か両手を縛られていた。

「ぐへへ。ロリ巨乳なんて初めてだから、つい興奮しちゃったよ。怖いよね？でも大丈夫、すぐに楽になるからね」

男は、舌なめずりをする。異常に分泌されるヨダレが、白露の顔にかかる。

「い、いやあ．．．」

「大丈夫、怖くないよ。心配いらない。きつと、すぐにキモチヨクなるから」

男は、あくまで優しく語り掛けているつもりなのだろう。

しかし、その顔が語っているが故に、白露は男がしようとしている事を直感的に悟っていた。

コイツは、自分に、なにかする気だ、と。

その内容も、容易に想像できる。

白露は、すぐに叫ぼうとする。

「た、助けて．．．!」

力の限り叫んだつもりだった。

「大丈夫、怖くないよ。すぐに、他の子たちのようになるから」

「え．．．」

「見てごらんよ」

男が、視線を横に向け、白露もそちらに向けた。

そこには、数人の少女たちが鉄格子の檻の中にいた。

その数は、十人を超えていた。

「みんな、僕のお陰でキモチヨクなってくれてね。僕の傍にいてくれるんだ」

その少女たちは、どれも幼い。

小学生のような少女もいれば、まだ幼稚園の子もいる。しかし、どうやら中学生以上の少女はいないらしい。

しかし、その眼は、あまりにも濁っていた。

「……!?!」

「君も、すぐに同じようになる。だから怖くない。何も怖がることなんてないんだ」

希望を見失い、生きる事を諦め、ただこの男の玩具として生きていく。

「一緒に捕まえた子も、君の後で同じようにしてあげるからね。だから、大丈夫——」

男は、白露に向かって手を伸ばす。

その手は、白露の服を掴む。

「——寂しい思いなんてしないからね」

そして、一息に白露の上半身の服を引き裂いた。

「——ッ!?!」

白露は唾然とする。

自分が何をされたのか、理解できていなかったのか。しかし、すぐに自分が何をされたのかを理解し、そして、次の男の行動で、自分も彼女たちと同じようになってしまうという事を——

「僕が守ってあげるからさあああ!!」

「ひ、いやあああああ!!」

白露は、人生で初めて、悲鳴を挙げた。

男は、そのまま白露に向かって一気に顔を近づける。

そして、そのまま男と白露の顔が合わさる——

「――させるかアツ!!」

という事は無く、誰かが男の頬を蹴り飛ばした。

「ぶぎやあ!?!」

そのまま吹っ飛んでいき、置いてあつたガラクタのに突っ込んで行き、埃を舞い上がらせる。

「……え?」

白露は、何が起きたのか分からなかった。

「白露、大丈夫か?」

ただ、白露に声を掛けてきた人物の声で、全てを察した。

「君……!?!」

「手ひどくやられたな。これ着てろ」

その人物とは、千景だった。

千景は、自分が来ていた上着を脱ぐと、それを白露に羽織らせる。

「他の二人は?」

「わ、分からな……ていうかなんで来たの!?!」

「なんでって……!?!」

ふと、そこで千景は白露に背を向けて構える。

そこには、先ほど千景が吹っ飛ばした男が立ち上がっていた。

「……お前が連続誘拐犯か」

千景が低い声でそう答える。

一方で、男は苛立ちを全く隠していない声で応える。

「誘拐? 違うよ。僕は守ってるんだよ……小さな女の子たちの純潔をね」

男は、なんともおかしな挙動で動き、喋る。

「それを、良くも邪魔してくれたなガキが……!」

振り向けば、その表情は見た事もない程に歪んでいた。

「僕の、崇高なる僕の役目を、よくも邪魔してくれたな! まだ清い彼女たちの純潔を守ると言う、僕の使命をツ!!」

「純潔を守る? 他の奴らに奪われる前に、自分がそれを奪う事が守る

だと？ふざけるなよ、石鏡健吾!!」

「な・・・なんで僕の名前を・・・!?!」

千景の言葉に、男、『石鏡健吾』は後ずさる。

「これでも調べるのは得意でな。周りが誰も教えてくれないから、自分で色々調べる事が多いんだ。だから、ある程度のこの街の人間の名前なら憶えてる。しかし、まさかこんな近場に、お前のような奴がいたなんて驚きだよ」

千景は、男を睨み付ける。

「もう終わりだ。俺がここに来た以上、ここにいる誰かを一人でも連れ出せばあとは警察がお前を捕まえる。それで全部終わりだ」

自分の言葉には耳を貸さないだろうからな、と千景は内心でそう思いつつ、健吾の出方を伺う。

「ぼ、僕が警察に・・・なんで？僕が？警察なんかには掴まらないといけないんだ？なんでなんでなんで・・・」

まるで信じられないとでも言うように、独り言をつぶやく健吾。

「今のうちだ。さっさと外に出よう」

「そ、そんな事より、なんでここに・・・!?!」

千景は白露を立たせ、言う。

「お前を助けに来た」

千景は単純で明快な、そしてありえない理由を言い放った。

それに、白露は、狼狽した。

「走るんだ。俺は牢屋の中にいる奴らを・・・」

「調子に乗るなよ・・・」

ふと、健吾が何かを呟いた。

それに千景は思いつき振り返った。

そこには、何かカメラのようなものを手に持った健吾の姿があった。

「まさか・・・」

千景の表情が強張る。

「ガキが・・・ろくでなしのガキ風情が・・・僕の崇高なる行いを汚すなあああ!!」

次の瞬間、男がカメラを天井に向かって掲げる。
そして、そのカメラから、何かしらの光の文字が現れる。
その文字は『紙』

「え．．．!?!」

光が巻き散らされ、それが収まる頃には、健吾の姿、というか服装が全く違うものとなっていた。

その手には、薄い刃の西洋剣。

「なに．．．あれ．．．」

「魔器．．．!」

「え．．．?」

千景が意味が分からない事を言う。

しかし、そうしている間に、男は行動を起こす。

突然、周囲に散らばった紙が浮き上がったかと思ったら、それらが全て千景に向き、一斉に襲い掛かってくる。

「白露ツ!!」

「きゃ!?!」

千景は白露を抱きかかえるとその紙の嵐から逃れる。

外れた紙は、全て千景の背後にあったコンクリートに全て突き刺さった。

「マジかよ．．．!?!」

千景は、その様子に冷や汗を流す。

「お前は死ぬべきだ」

健吾が剣を振りかざす。その刃がいきなり柔らかく、そしてしなやかにになる。

「ツ?!まずい!?!」

「僕の役目を邪魔するお前は死ぬべきだツ!!」

健吾がその剣を振った瞬間、その刃は一気に伸びて、まるで紙のようになつて千景と白露を襲う。

「ツ!!」

「きゃあ!!」

小さく悲鳴をあげる白露。

どうにか転がる事で回避したが、紙の刃がつけた傷痕は、途轍もなかった。

コンクリートの壁に、大きな切り傷が出来ていた。それはあまりにも綺麗に、すっぱりと、斬られていた。

あんな、狂的なまでに鋭い切れ味の攻撃を喰らったら、間違いなく体の一部が吹き飛ぶ。

そう思うと、白露は恐怖で動けなくなる。

「い、いや……」

死にたくない。

白露の心境には、それしかなかった。

ふと、千景は白露を降ろした。

「え……!?!」

それに驚く白露。

そして、千景は立ち上がり、白露に背を向けて健吾を睨み付けた。

「……なんだよ、その眼は……?」

「……お前、他人の人生を狂わせて楽しいか?」

「何?」

「ここに居る奴らは、将来結ばれるであろう人達の為に残しておいた大切なものを、お前に奪われた。お前のような変態で最低な奴の為に、大切なものを奪われた。それだけじゃなく、心が壊れる程に使いまくって、これからの人生の全てを狂わされたんだ。刻まれた過去は絶対に覆らない。過ぎた時間は絶対に戻らない。終わる事なんてない。消える事すらも無い。ただただ、一生自分の体に刻まれ続けるんだ。お前は、それが守る事につながるのか?」

千景は、断言する。

「そんな訳ねえだろうが。少なくともこいつらには、約束された未来があった。幸せになるべき未来があった。それを、お前のようなクズの願望を押し付けられて潰されたんだよ」

千景は、どこからともなく、一本の脇差を取り出した。

「俺はお前を許さない」

それは、本来なら、白露にも向かって言える言葉だ。

しかし、千景はそうしない。なぜなら――

――すでに自分の人生は狂っているのだから。

彼は憎む事は出来ない。だが、怒る事は出来る。

千景は今、憤っている。

誰かの未来を潰した、この男を。

まさしく、偽善の正義を掲げて。

「石鏡健吾、および、魔器『紙』、『救導者』の名において、その魔器を破壊させて貰うッ!!」

千景は、刃を引き抜く。

「『天鎖刈』ッ!!!」

次の瞬間、千景の姿が変わる。

白い装束の上に、鉛色の軽装鎧が纏われ、それらに鎖が繋がれる。

それはまさしく咎人。彼岸の日に咲き乱れる、純白の花のような装束。

故に彼は、その手に刃を振りかざす。

そして、白露は、その姿に唾然とする。

「アンタ……一体……」

「……安心しろ」

千景は、背を向けたまま答える。

「お前は必ず、俺が家に帰してやる」

千景が、背中越しにそう宣言する。

「死ねええええッ!!」

紙が飛んでくる。

それに対して、千景は即座に防ぎきれないと判断し、すぐさま無数の鎖を呼び出す。

そしてそれらを千景を軸にまるで渦の様に回転させ、飛来してきた紙の刃を全て叩き落す。

「な!？」

「ツ!!」

千景は、全て叩き落した事を確認すると息もつかせず地面を蹴る。

「舐めるなあ!!」

健吾は剣を振るう。

その手に持つ剣はしなり、まるで鞭のように振るわれる。

(そんな見え見えの攻撃――)

当たらない、と思っていたが、そこで千景ははたと気付く。

後ろに白露がいる。

「ツ!!」

「死ねえツ!!」

男が剣を振り下ろし、しなる剣の切っ先が千景に向かって真っすぐ突き進んでいく。

千景は、あろうことかそれを鎌の柄で防いだ。

「があ!？」

だが、刀身が紙のようにしなる剣の切っ先は、まるで蛇のように鎌の柄をするりとよけ、千景の左肩に突き刺さる。

「ぐあああ!？」

「ちか・・・」

思わず、千景の名前を呼びかける白露。

しかし、その紙の刃は止まらず、そのまま一気に白露に向かって直進する。

「ひ・・・!？」

短い悲鳴が漏れる。

しかし、その刃が、白露に届く事は無かった。

その刃は、白露の眼前で止まっていた。

「・・・え?」

恐怖ですっかり腰が抜けてしまった白露には、何が何だか分からない

い。

「ぐ……う……」

しかし、その理由は単純だった。

指が斬り落とされないように鎖で巻き、その手で自分の左肩を貫く紙の刃を掴んでいるのだ。

それによって、白露へ向かっていた薄刃の脅威を阻止したのだ。

「おい、離せ」

健吾がそう言う。

「……断る」

千景は、苦し紛れの声でそう答える。

「離せよ」

「断る」

「離せよ」

「こと……わる……」

「離せつつってんだろツ!!」

「断るツ!!」

次の瞬間、紙の刃が僅かに引かれ、それによって千景の肩の肉に、その刃がさらに深く食い込む。

「ぎい……!?!」

「お前の、ような、ろくでなしの、ガキが、僕の、神聖なる僕の、行いを、邪魔、するなあああ!!」

「ぐああああ!!」

健吾が腕を振るえば、剣が唸り、千景の肩の傷をさらに深く傷つける。

しかし、千景は、その手を離さない。

「ツ——て……ん……さ……が……り……い……ツ!!」

千景が叫ぶ。

その瞬間、千景の周囲に鎖が出現する。

『撃鎖』ツ!!」

鎖が一斉に健吾を襲う。

「ぐべべべべべ!?!」

それらはまるでマシンガンのように健吾に叩き込まれ、健吾を吹き飛ばす。

その時、吹き飛ばされた反動で千景の肩に突き刺さっていた刃が引かれ、さらに千景の肩の肉を引き裂く。

「ぐあああああああ!?!」

今までに感じた事の無い痛み。中身から引き裂かれるような痛み。これまでに受けてきた虐めで、痛みにはかなり耐性がついていると思っていたが、どうやら、そうでもなかったらしい。

そう、千景は焼けるような痛みにこらえながらそんな事を考える。刃が全て抜けきる。

しかし、その刃は再び千景に向かって飛来する。

「チッ!」

「死ねッ!!」

紙の刃は千景を襲う。

しかし、千景はそれを鎌ではなく鎖で迎撃する。

刃は、鎖によって弾かれるが、すぐさま千景に斬りかかる。

さらに、周囲の本のページが千切れ、それらが一齐に千景を襲う。

紙の刃は鎖を掻い潜り、千景の体に傷を作る。

その刃は、そのまま白露の元へ向かおうとするが、それを千景が鎌を持って弾き飛ばす。

「邪魔するな!彼女は僕の傍にいるほうが一番安全なんだッ!!」

「お前の傍にいるなんて、もはや恐怖でしかねえよ!そんなところで、不安抱えている事のどこが安全だ!」

「彼女たちの為を思っただけでやっている事だ!」

「その後に傷痕を残すなッ!!」

血が飛び散る。

しかし千景は守る事をやめない。

失血によって、死ぬかもしれない。

あるいは急所にあたって死ぬかもしれない。

それなのに、千景は、彼の目的である白露を守り続ける。

その姿に、白露は、彼に――

「……馬鹿じゃないの」

罵声を浴びせる。

「私なんか救つても、私はなんにも感謝なんてしないわ。アンタのようならくでなしに助けられた事が、私にとっては一番いやな事なの。だからやめなさいよ。私なんて見捨ててどっかいつちやえ」

その言葉に、千景は、きつぱりと。

「断る」

一蹴した。

「なんで？ 私は今まで君を虐めていたんだよ？ 憎いでしょ？ 怒ってるでしょ？ なのに守ろうなんて馬鹿もほどほどにしてよ」

白露は、なおも彼を馬鹿にする。

「たかが、そこにいるだけでも邪魔なだけのクズな癖に、人を守って満足？ 誰にもありがたられないのに、それでも守るっていうの？ 馬鹿、馬鹿馬鹿、大馬鹿よ。そんな馬鹿のするような事をして、君にとって何か特があるの？」

千景は、鎌を振るうのをやめない。

「無いよ。君に、なんの得なんてないじゃない。なのに、なんで、私を守ろうとするの？」

「……」

「ねえ、答えてよ。 どうして君はそんな損しかない事をしようとするの？ どうしてそんな得の無いような事をするの？ どうして——」

その時、千景の耳に、雫の音が聞こえた。

「——こんな惨めな私を守ろうとするの？」

白露は、知らぬ間に泣いていた。

その理由を、白露は理解できない。

だけど、千景は、まるで気付かないかのように答える。

「馬鹿、だとか、ろくでなし、だとか、憎い、だとか。全部、関係無いな」

千景は、攻撃を防ぎつつ、喋り出す。

「俺は、こんな目に合う事は当然だと思ってる。だって、どうしたって俺の親がした事は、立派な犯罪で、人としてはやってはいけない事だ。

だから、俺は自分の罪を受け入れてるし、そんな親を怨んでいない。俺はただ——母さんと父さんに愛されていたという事実さえあれば、もう、他に何もいらぬ」

ごく普通に与えられる筈の愛。誕生日の日に与えられる祝いの品。ごく当たり前に一緒にいる家族、友人。

しかし千景は、それらを全て、いらぬものと捨てて、ただただ他人の幸福のみを祈っていた。

「綺麗事上等、余計なお世話はなおの事。俺はただ、誰かの命を守りたいだけだ」

千景は鎖を操る。そこへ健吾が無数の紙の刃を突撃させる。

「その為なら、俺は——」

千景は鎌を振り上げる。

「——偽善者でも構わない・・・ッ!!」

次の瞬間、天井が砕け散った。

そして、その砕かれたコンクリートの中から、黒い影が躍り出て、千景と紙の刃の間に入る。

それに、眼を見開く千景。

だが、そうしている間に、紙の刃は、その影に向かって全て突き刺さる。

しかし、次に聞こえたのは、まるで弾くかのように響いた金属音だった。

「な・・・!?!」

それに、健吾が驚く。

だが、その間に、低い女性の声が響いた。

「驚くだろうな。この斬撃を受けて、一切の傷どころかダメージすら与えられていないのだからな」

その声に、千景は聞き覚えがあった。

「だが、我が家に伝わる『琉球空手』には通用せん」

その人物を、女性を、千景は知っていた。

「椿さん……!!」

「すまない。遅くなった」

救導者装束を身に纏った椿は、千景を肩越しに見て、微笑む。

しかし。

「ツ!?椿さん!前!」

「む」

次の瞬間、椿の顔面に紙の刃が突き刺さり、椿が大きく仰け反る。

「ツ!?!」

それに息を飲む千景と白露。

しかし、大きく仰け反った椿だが、何事も無かったかのように態勢を戻す。

「な、なんで……!?!」

「この程度の攻撃、私に通用すると思ったか。馬鹿め」

椿の顔には、傷が一切ついていない。

そこで、千景は思い出す。

椿は、今までの喧嘩において、その体に一切の傷を負わなかったそうだ。

その理由の一つとして――

――車に轢かれても傷一つつかない程に頑丈な打たれ強さを誇っていたという。

構える椿。

それは、空手の正拳突きの構え。

「う、うわああああ!!」

健吾が紙の刃を椿に突っ込ませる。

しかし、その紙の刃はどれも椿の体に弾かれる。

それに大きく驚く健吾。しかし、すぐさま健吾は、椿の背後で瀕死

になっている千景に視線を向ける。

「む」

「だったらお前から死ねえええ!!!」

「な!?!」

健吾が振るった紙のようしなる剣が、その刀身を、椿を素通りして千景に向かわせた。

その刃が、そのまま千景に突き刺さる——事は無かった。
「舐めるな」

椿の低い声が響き、次の瞬間、紙の剣が、椿の横ですつぱりと斬れた。

「え……?」

その一瞬、健吾は何が起きたのか分からなかった。

「千景には、一切手は出させん」

半ばから断ち切られた、紙の剣。

そして、いつ行動を起こしたのか、椿の手の形は、いつの間にか手が開かれていた。

そして、椿の視線は、この地下室の廊下にむけられた。

そこにいるのは、複数の女子数名。

そのどれもが、手遅れ。否、ただ二人のみ無事。

そして、最近世間を脅かしている、女子のみを狙った、誘拐事件。

「そうか……」

そして、椿は理解する。

「最近、友人の娘が行方不明になったと、本人から聞いていたが」

椿は、これまでにない程に恐ろしい眼光で健吾を睨み付けた。

「貴様か——ッ!!」

その瞬間、椿は地面を蹴った。

「ひっ……来るなあああッ!!!」

健吾は紙を集めると、それによって壁を作る。

いくら紙、とはいえ、それらが重なれば、この世のどれよりも強固な物体となる。

二つの本を、一ページづつ重ねて、束にしたものは、どれほど左右

に引つ張ろうと抜ける事は無い。

さらに、重なり合う事で頑丈さも強化されている。

それが、鋼の硬さを誇るのならなおの事。

しかし――

「私の『陸鎧布』の素の能力は、纏う事による皮膚の保護、動きの補助、および害意に対する鎧の役割を持っている。だが、私はそれをあえて腕の保護のみに使用している。理由としては――」

椿の『四本貫手』が、その紙の壁を貫いて健吾の胸に突き刺さった。

「な・・・あ・・・!?!」

「私の戦闘スタイルが格闘技である『空手』だからだ」

椿の家系は、元は沖繩からやってきた、その街で少し名の知れた空手道の家系だった。

両親より、その空手の神髄を叩き込まれ、その上、元からもついていた通常より固い皮膚と打たれ強さが相重なって、彼女は、空手の究極に辿り着いていた。

その最奥の名は『化身刀』タケミカツチ。

椿は、空手道において、天性の才能を持った存在だった。

それ故に、今までの戦いにおいて負け知らずだったのだ。

その力が御神刀の力によってさらに引き延ばされているのだから、なおの事、その力は強力になっていた。

「ぎ・・・ああ・・・!?!」

「終わりだ」

椿は、手を振るい、紙の壁をまるで刀で斬ったかのように切り裂き、右拳を引き絞る。

「琉球空手――」

『鶴嘴拳』かくしけん 『指股』ゆびまた 『虎爪』こそう 『四本貫手』

四つの型を、ほぼ同時に連続させて健吾の心臓に突き立てた。

血は舞い上がらず、健吾の脳髓を叩くのは、幻覚の痛み。

それによって、健吾の意識は吹き飛び、その身から魔器の力が離れる。

それはカメラ。彼の願望の源となった、魔器の依り代。

椿は、それを手刀てがたなを持って両断し、破壊する。

「魔器『紙』、破壊完了」

そう淡々と告げ、椿は、そのカメラから『紙』の文字が消滅した事を確認する。

「――」

千景は、それに絶句するほか無い。

椿の力の片鱗を、その眼に見たのだから。

その間に、椿は振り返り、千景に駆け寄る。

「千景、大丈夫か？」

「え……」

それで思い出す。今、千景の体は体中が傷だらけでボロボロだ。

出血も酷い。

「待っている」

椿は、自分の御神刀の能力を発動する。

『癒しの布切れ』

椿の腕に巻かれていた布がほどけ、それが千景の傷に包帯のように巻かれる。

「うお……!?!」

「あくまで応急処置だ。しばらくは安静にしておいた方が良いでしょう」

「俺にはその安静にする時間が無いのですが……」

「なら私の家にいればいいだろう？」

「そういう問題じゃないでしょう……」

しかし、痛みが引いてきているのは確かだ。

これなら、すぐに――

「どう……して……?」

そこで、忘れていた。

すぐ傍に、白露がいた事を。

「どうして……私を守ったの……?」

白露は、今にも崩れそうな表情で、千景に問いかけた。それに、千景はやれやれというように溜息を言った。

「俺が守りたかった。それだけだ」

「でも！私は君に酷い事をした！それなのにどうして守るって言い切れるの!?可笑しい、そんなの可笑しいよ!!!」

白露は、何が何だかわからなかった。

本当は、お礼が言いたい。

だけど、心のどこかにある自分の知らない感情が邪魔をして、彼にその言葉を伝えられない。

だけど、彼は、それでも――

「可笑しくても構わない。それが俺の生きる理由だ」

礼なんて、いらぬ。感謝の言葉も同様に、千景は、ただ、誰かを守れたという事実だけを実感したいだけだった。

喝采などいらず、賞賛さえも遠慮する。ただ人を守り、自分がただ満足する為にやっているのだ。

「千景……」

椿は、その言葉に思わず怪訝に思ってしまった。

だって、その言葉は――人としてはありえないからだ。

「だからよ」

千景は、白露の頭を撫でる。

それは、温かく、そして優しくかった。

「今まで通りで構わない。俺は、そのまま戦い続けるから」

千景は、笑っていない。単純に、笑い方を知らないのもあるが、なにより、自分に笑顔は似合わないと思っているからだろう。

そう言った後、千景は立ち上がる。

「椿さん、もう大丈夫です」

「いや、まだ肩の穴がふさがっていない。まだ安静にしている」

「じゃあ、あそこにいる奴らを頼みます」

「ああ、任せておけ」

立ち上がる椿。

「椿さんー!」

「来たか、奏」

見上げれば、椿によって開けられた穴から、奏が顔を覗いている。

「千景君はいますか？」

「ああ。ただ、敵の攻撃を受け過ぎてな。肩に深い傷が出来ているから今私の能力で治している所だ」

「そうですか・・・良かった・・・」

「それと、警察を呼んで欲しい。魔器使いが例の連続誘拐犯だった」
「分かりました！」

そうして、奏は携帯を取り出して、110番通報をする。

それからは、白露はよく覚えていなかった。

そのしばらく後、警察がやってきて石鏡健吾を現行犯逮捕。

牢屋に閉じ込められていた少女たちも無事に救出され、しかしその精神はすでに壊れており、捕まったばかりの白露たちも誘拐時の恐怖の為に一緒に病院へ搬送された。

しかし、千景だけは、その場に置いていかれた。

その救急車を見送った千景は、一人事件現場を遠くから眺めていた。

「初めての御役目お疲れ様、千景君」

そこへ、奏が歩み寄り、千景の横に立つ。

「・・・」

「どうかしたの？」

「今回、俺は奴を倒せなかった」

「まともに戦闘訓練を受けていなかった事もあるが、何より、白露を守りながらの戦いを想定しなかった。」

「それに、奴程度の相手に苦戦してしまった」

「まあ、今回は椿さんと相性が良かったからどうにかなったけど。でも、貴方が気に病む必要は無いのよ」

「・・・ダメなんだ」

千景は、奏の言葉を否定する。

「それじゃあだめなんだ」

「千景君」

「俺は、これからさっきの奴のような敵と戦わなくちゃならない。椿

さんが余裕で倒せる相手にいつまでも足元すくわれている暇はないんだ」

千景は、自分の拳を握りしめる。

「・・・」

そんな千景を、奏は心配そうに見る。

正直にいつて、彼がここまで責任感の強い人物とは思わなかった。

大抵の人間なら、あれほどの仕打ちを受ければ投げやりになるものだ。

しかし、千景はそれとは真逆で、人を守る事にここまで真剣になるなんて、普通じゃありえない。

一体、何が彼をそこまでさせるのだろうか。

何が彼をそこまで奮い立たせるのだろうか。

「奏さん、一つ聞きたいのですが」

「なに？」

「椿さんは、空手を学んでいたんですよね」

千景は、警官と話し合っている椿を見る。

「ええ。喧嘩じゃその空手のお陰で無敗だったわよ」

「そうか・・・」

「千景君？」

千景は、警察と離れた所の椿に声をかけた。

「椿さん」

「ん？どうした千景？まだ安静にしていなければ・・・」

「頼む、俺に——」

千景は、人生で初めて、他人に頼み事をする。

「俺に、戦い方を教えてくれ」

変わっていく日常

ある日の事。

とある道場にて、千景と椿が、その拳を交わっていた。

「ハアアアッ!!」

千景の右拳が、椿の顔面を狙う。

椿はそれを見事な無駄の無い動きで最小限で左に回避する。

千景は、すぐさま右手を引く反動を利用して左で膝蹴りを放つ。

しかし椿はそれさえも予測していたかのように左掌でその膝を受け止める。

「やばっ・・・」

それによって嫌な予感を感じ取った千景は片足のみで後ろへ後退する。

「ふんッ!!」

その直後に椿の正拳突きが千景の腹に直撃する直前で止まり、風圧を巻き散らす。

ギリギリの所で椿のリーチから逃れたのだ。

「つぶねえ、危うく本気の一撃もらうところだった」

「前よりも反応が良くなっている。向こうで何か鍛えていたのか？」

「まあ、とあるツンデレ少女とやりやりましたからね」

ふと、椿が構えを解く。

「少し休もう」

「分かりました」

畳の上に壁に寄りかかって座る千景とその隣に正座する椿。

そこへ、道着を着込んだ優がやってくる。

「千景さん、お水です」

「お、ありがとう」

優から水の入ったペットボトルを貰い、それを一口飲む千景。

「しかし、やっぱり椿さんには空手では敵わないな」

「いや、お前も着実に上達している。二年も空いていたというのに、まるで衰えてない」

「そうなの？お母さん」

「ああ、私が指導していた時もそうだが、千景はとても物覚えが良い。教えた事はすぐに努力して覚えようとする。優ほど物覚えは良くは無いが、千景はそれを努力で補っている。良い事だ」

「しっかし、驚いた。まさか優が椿さんから空手を教わってたなんて。どんな心境の変化だよ」

千景がそれを聞いた途端、優はなんだか不機嫌そうになった。

「……全部貴方の所為です」

「え？」

首を傾げる千景。

それを見て、椿は思い出す。

千景に、空手の稽古をつけていた時の事を――

時は、あの魔器『紙』の使い手である石鏡健吾を倒してから数日経った日の事だ。

「ハッ!!」

「ぐう!？」

千景の腹に、椿の強烈な蹴りが入れられる。

「ダメだ。それでは以前のようにまたボロボロになるだけだぞ！」

「げほっ、ごほっ……」

咳き込みながらも、立ち上がる千景。

ここは、神社のすぐ裏手にある森。

そこで、千景は、椿から空手の稽古をつけて貰っていた。

「ハアッ!!」

椿が千景に向かって蹴りを放つ。

それを千景は踏ん張って防ぐ。

ことの発端は、あの魔器『紙』を操る石鏡健吾との戦いの直後。

千景が、椿に稽古をつけて欲しいと言ってきたのだ。

これまで、千景は自分から何かを頼むのは、百合籠の所長である氷室雄二を覗いて、椿が初めて。

ここで断れば、千景は引き下がっただろうが、今回は、千景は積極的に椿に懇願。

これからの戦闘において、今後も千景は同じ様な怪我をしかねない。

それを考えると、椿も不用意に断る事も出来なかった。

結果、椿は千景に空手の稽古をつける事になったのだ。

これまで千景は、散々椿に殴り飛ばされてきた。

ものの二週間で基礎体力をつけた千景だが、椿からまず教わるべきは防御だと言われた。

千景の御神刀である『天鎖刈』は武器が大鎌なのだが、もしそれが手元を離れてしまった時の為の自衛の手段として体術を学んだ方が良いと言われて、現在、その為の訓練として、椿の攻撃を必死に防いでいるのだ。

防御の型は、もうとつくに身に着けているうえにもとものスペックが高い千景だが、流石に空手の達人である椿の蹴りを受け止めるのは結構きつい。

というか――

「がはっ!？」

受け止められない。

吹き飛ばされて木に叩きつけられる千景。

そのままずると地面に腰をつく千景。

「ううむ、少しやり過ぎたか……」

もう何十発と蹴りを叩き込んでいるために、千景の足腰は疲労によってかなり弱ってきている。

「ま、まだ……」

千景は、膝に手をつけて立ち上がろうとする。

「いや、一旦休もう。無理すると今後に響くぞ」

「……分かりました」

千景は、渋々と言った感じで椿の提案を受け入れる。

「以外と、上達が早いな」

「そうでしょうか？俺はまだ貴方の攻撃を防ぎきれていない」

「いや、あれだけ止められれば、大抵の奴は大丈夫だろう」

椿の言葉を聞きながら、千景はスポーツドリンクを喉に流し込む。

「んぐ……あとどれくらいで、俺は一人前なのでしょうかね？」

「そうだな……せめて自分の身を守るぐらいの力をつけたころ、
だろうな」

椿の言葉を、千景は頭の中で反芻する。

自分の身を守る。

(今まで、考えた事も無かったな……)

千景は、そう思い老けた。

チャイムが鳴る。

それと同時に、昼休みが始まり、一部の生徒がグラウンドに行くために教室を出ていく。

千景は、最近始めた空手の為に外に出る事にした。

歩いて階段を降りる。

その時、ふと千景の後ろから、誰かが背中を押した。

「ッ!？」

予想していた事だが、最近虐めの回数が減った事で、油断していたようだ。

視界がスローになるなか、千景の体はなおも下の階の床に向かって落ちていく。

このまま頭から落下すれば重傷は間違いないだろう。

ただ、慣れている事なので、別にこのまま落ちてても良いのだが。

ふと、千景は思った。

これ、地面を手についたらどうなるんだ？

最近学んだ『受け身』なる技を試してみるのに絶好の機会なのでは？

そう思った千景の体は、速かった。

右手を伸ばし、目の前にあった階段の段の一つに手をつく、そのまま手を折り曲げ、体の軸がついた右手よりも前になったところで思いつきり伸ばし、体を浮かせ、そのまま下の階の床に見事に着地した。

「おっ……」

上手くいった。少し右手を痛めたが、他に問題は何も無い。

ふとそういう達成感を感じ取り、次の瞬間、周囲の視線に気付く。

「ッ！」

すぐさま顔をあげれば、そこにはありえないものを見たかのように驚愕している女子の姿があった。

さらに周囲も、予想していた展開とは全く違う事にあとずさりしていた。

それに千景は想う。

——やってしまった。

今まで保ってきた自分の価値というものを変えてしまった。

これでは、これから生活に支障が出る。

「これではだめだな……」

そう呟き、千景は外へ出ていく。

その様子を、一人の少女は黙って見ていた。

放課後。

「今回は、御神刀を使った訓練とする」

「分かりました」

神社の裏手の森にて、千景と椿が御神刀を持って対峙していた。

「——『陸鎧布』」

「——『天鎖刈』」

椿はその身を喧嘩番長のようなバンカラな装束。

千景は罪人のような白と鎖と鎧の装束。

「まず、お前は自分の御神刀の能力は理解しているか？」

「能力・・・鎖を呼び出し操る事ですか？」

「正確に言うとは違う」

「違う？」

「創代様が作る道具、特に武器には、必ず『文字の概念』というものが与えられるんだ」

「文字の概念？」

「そうだ。その点の説明は、奏の方が良いだろう」

椿が、すぐ傍にいた奏に視線を向けた。

「では」

奏が、説明を始める。

「御神刀、および、魔器には、必ず、その能力を決める『文字の概念』というものがあります。御神刀発動の際、文字のある魔法陣のようなものが出てるでしょ？」

「ええ・・・そうか、あれが俺の能力か」

「天鎖刈の能力は『鎖』。貴方は、無意識のうちに『物理』方面でそれを使っているのよ。あの『撃鎖』っていう技もその一つね」

「なるほど・・・あ、となると、椿さんの能力は『布』ですか？」

「そんなところだ。以前やった『癒しの布切れ』も、その一つだ」

『癒しの布切れ』

『包帯の布』という概念のもとに布を巻いた対象の怪我を治すのが『癒しの布切れ』の能力だ。

「布自体に、力は無い。だけど、『布』がもたらす恩恵を、この『陸鎧布』は、その結果みたいな事で発動できるの。ようは、『連想ゲーム』よ」

「連想ゲーム、ですか・・・」

「そう、貴方が、『鎖』と聞いて、何を連想する？」

「・・・」

そうして、しばらく考え込んでいると、千景の周囲の雰囲気が変わる。

（物理的ではだめ・・・ならば、何か、枷のようなものを――）

千景は、左手を持ち上げる。

「――」一つの概念を、それに縛り付けてしまえば・・・」

千景が呟いたその言葉に、椿と奏は眼を見開く。

「その発想は・・・」

「千歳さんの・・・」

「――『封印縛鎖』――不朽」

千景の放った鎖が、とある一本の木に巻き付く。

ギリギリと縛り付き、やがてその鎖は光に溶けていった。

「もしかして・・・」

「『不朽』の概念を縛り付けて、強度を高めました。他の木よりも硬い筈ですよ」

千景がそう呟いた途端、椿が思いつきその木を叩いた。

重い衝撃波が迸り、木が唸る。

しかし、木は、揺れて新緑の葉を落としただけで、あとは何も起こらなかった。

「・・・ふむ、どうやら、強度があがっているのは本当のようだな。『朽ちない』という概念を縛り付けて、そうできないようにしているのか・・・」

「その通りです」

その言葉に、千景はうなずく。
なるほど、これなら、色々な事が出来そうだ。
ふと、思い出す。

これ、人に使ったらどうなるんだ？

「……」

ふと、考え込む千景。

「千景君？どうしたの？」

「……」

ふと、千景は奏を見上げて、一言。

「これ、人に使ったらどうなるんでしょうか？」

「……」

素朴な疑問、の筈だった。

「……事実上、他人にその能力を人に使う事は、不可能だったわ」
奏が、噛み締めさせるように千景に言った。

「……それは、母さんが出来なかったって事？」

「そうなるわね……」

奏は、誤魔化すように千景に告げた。

事実、千景の母親である千歳は、その能力を他人に使えなかった。

ただし——初代天鎖刈の所有者であった『久我楔』は、自身

の『限界』をその能力で突破出来たと言う。

(だけど、それにはリスクがともなう……)

その使用は、とても危険なものらしい。

だから、奏は彼にそれを教えない。

文献によれば、彼はその先祖のようだから。

「なるほど……」

千景は納得したかのように頷く。

どうにか誤魔化せたことに胸をなでおろす奏。

しかし、奏は同時に後悔する。

縛り解放する。それが、『鎖』の本質だという事を、彼に告げなかったのだから。

「では、今回は、さまざまなバリエーションを考えながら模擬戦をしていくぞ」

「分かりました」

二人は構える。

その一時間後、千景は人生初めてのグロッキー状態で百合籠に戻って、泥のように寝た。

そんな、日常が何日も続いた中。

椿との稽古もだいたい慣れ、肉体的にかなり逞しくなってきた頃。

千景は、廊下を歩いていた。

「ん？」

その先に、白露が壁に寄りかかって、千景を見ていた。

「・・・最近、あの椿って人に稽古つけて貰ってるみたいね」

「流石に噂になるか。それがどうしたんだ？」

「・・・ねえ。その所為で、私たちが手を出しにくくなってるって事知ってるの？」

白露は、皮肉たっぷり千景に言う。

それに千景は、罰が悪そうな顔になる。

「そうか・・・それはすまない」

「何が？」

「え？」

「何がすまないなの？」

白露は、千景に詰め寄る。

「なんで謝るの？貴方は何か悪い事したの？」

「なにと言われても・・・俺はお前たちの気分を害しているだろう？」

「ッ・・・」

白露は千景の脚を踏む。

「知らない」

「・・・」

そのままさっさと行ってしまう白露に、千景は首を傾げる。

「・・・結局何が言いたかったんだ？」

本当に、純粹無垢に、苛立ちもせずに、千景は首を傾げた。

一方で、白露は苛立っていた。

(なんで、なんで何も言わないのよ・・・！)

千景は、何も返さない。何も返そうとはしない。

返す気などない。

それが、無性に苛立ち、白露の罪悪感をさらに掻き立てる。

本当は、あの時の礼を言いたかっただけ。

なのに、なんで、心がそれを拒否するのだろうか。

「ッ・・・」

なんでこうなる。なんでこうならない。

自分の悪心が、自分の行動を阻害しているような、そんな感覚を、白露は感じていた。

そこで、ふと思った。

自分はいつからこうなってしまったのだろうか。

夜の街。

その中にある廃ビルの中にある椅子に座る一人の少年は、この絡久良市を一望していた。

「ふふふ……彼が天鎖刈を手にしたか」

その少年の笑みはとてもいやらしく、そして、反感を買うかのように、その口角を歪めていた。

「あとは、彼に接触すれば……」

男は、片手を持ち上げ、夜空に輝く朧月に向かって手を伸ばした。

花屋の夫婦

とある晴れの日。

千景は、商店街の中を歩いていった。

その斜め前には、雅がいた。

「雅さん……付き合えとは言われましたが、一体に何に……」

「単純な話、花を選んで欲しいのよ」

「花……ですか……なんのために？」

千景は思わず首を傾げた。

「ほら、貴方って意外と花に詳しくかったですよ？実は先輩の結婚式があつて、その人に花を送りたいのよ」

「ふむ………失恋ですか」

拳骨が落ちた。

「?…?…?…?」

千景は拳骨を喰らった頭を抑えながら訳が分からないというような表情で雅を見た。

「人のデリケートな話に軽く踏み込むな」

一方で雅は頬を赤くして拳を握りしめていた。

「別に、失恋したとかそういうのはどうでも良いのよ。これが十二回目目の失恋だつて言う事もどうでも良いのよ。ただ今まで恋したなかで一番好きな人が他の女に取られちゃったからとかそんなのどうでも良いのよ……」

「分かった。俺が悪かった雅さん」

千景はようやく事態を理解してそれ以上何も言わないようにした。

そうこうしているうちに、目的地についたようだ。

「春風さん」

「ん？雅じゃないか」

そこは、春風吾郎が経営する花屋だ。

今回は、レジの方にも女性がいた。

「こんにちは。吾郎さん、泡沫さん」

千景が二人に挨拶する。

女性は千景の姿を見ると、一瞬目を見開いて、そして微笑む。

「来たのね、千景」

女性の名前は、吾郎の妻の『春風泡沫』。

この花屋の店長だ。

「今回は何の用だ？」

「実は……」

「雅さんが先輩の結婚式に送る花を探していて、俺がアドバイザーとしてきました」

「へえ……失恋か？」

顔面にストレートが決まった。

「……」

「あらあら……」

吾郎がノックアウトされ、地面に倒れ伏す。

それに泡沫は苦笑いを零す。

「それで、何を御所望かしら？」

「そうですね……」

雅が屈んで花を物色する。

その様子を横目に、千景もそこに飾られている花を見渡す。

今は秋上旬。

『その時期となると、祝福の意味を持つ花は……』

「これだな。雅さん」

千景が雅の名を呼び、雅が立ち上がる。

「良いの見つかったの？」

「これですよ」

そこにあるのは赤い花だった。

「人物像聞いてなかったので、よくは分かりませんが、この花が良いかと思います」

「これは？」

千景が指したのは、真紅の花びらを持つ花だった。

「あら、それはグズマニアね。良いチョイスじゃない」
泡沫がそう褒める。

「花言葉は四つ、『理想の夫婦』『いつまでも健康で幸せ』『情熱』『あなたは完璧』です」

「様々な色の花が咲くから、トロピカルな色合いで楽しめるのも魅力ね」

千景と泡沫の言葉に、雅はうなずく。

「うん、確かにあの人に合うわね。泡沫さん、これをお願いします」
「分かったわ」

会計を始める雅と泡沫。

「ぐ．．うおお．．」

「大丈夫ですか吾郎さん？」

「安心しろ。頭の硬さなら人一倍自身があるからな」

顔を抑えながら立ち上がる吾郎。

と、そこへ千景に背後から抱き着く子供がいた。

「ちかげにーちゃん！」

「おっと」

それは吾郎と泡沫の子供の真琴だった。

「真琴か」

「あそぼー？」

真琴は無垢な笑顔で千景に言ってくる。

それに困ったような笑顔を浮かべて、屈む。

「分かった。あとで公園に行こうか」

「わーい！」

嬉しそうにはしゃぎ、母である泡沫の方へ走っていく真琴。

「悪いな、真琴の相手をしてくれてよ」

「いえ、それが性分ですから」

吾郎の言葉に、千景はそう返す。

「そうか．．．」

そこで、吾郎は思い出す。

(あの日も、お前は同じ事を言ってたよな．．．)

それは夏のとある日の事。

時間は前回の白露が誘拐された事件からかなり経つが、現在夏休みに入り、子供たちは外で虫取りなどで遊んで汗を掻く時期となる。

小学生生活最後の夏休みである千景の行動は、まず初めの一週間で宿題を全て終わらせる事から始まる。

問題集、読書感想文、コンクールの絵、自由研究、などなど。

それら全てを一息に終わらせ、あとは残りの夏休みを適当に過ごす。

それが千景のいつも通りの夏休みだ。

夏休みという事もあって、施設の子供たちのほとんどはそれぞれの友人たちの家に遊びに行き、遊びに外へ出かける。

つまり、その期間だけは、千景への虐めの頻度は下がるという事だ。ただし、あくまで下がるというだけで無くなるわけではない。

ただ、今日ばかりは……

「買い物に付き合いなさい」

「……分かりました」

随分と度合いの低い要求だった。

桐馬雅という女子高生の存在は、千景にとってはなんとも不思議な存在であった。

特にこちらに干渉するわけでもない。だからといって助ける訳では無い。

特に関わろうとはせずに、ただ自分の生活だけを優先する。

そんな人物だと千景は認識している。

そんな彼女が千景に突っかかってくるのは、決まって一つ。

買い物だ。

長つたらしい買い物の荷物持ちとしてこき使われるのだ。

実際に、千景は現在、おおよそ小学六年生が持つような量じゃない量の買い物袋と箱を持たされている。

しかし、それを毎度持たされたうえに、椿との稽古の成果であまり重くは感じなくなっている。

それよか軽い。まるで羽毛の袋を持たされているようだ。

実際、それは本来なら車に積むべき量なのだが、それを持っている千景が異常なだけなのだろう。

「次、あそこ行くわよ」

「今日は随分と多いですね。何かあるんですか？」

その荷物のほとんどが布や生地など、主に衣服を作る為に必要なものばかりだ。

「貴方に教えてあげる義理はないわ」

しかし雅はその質問を一蹴、答えるつもりはないらしい。

しかし、千景は知っている。

雅は、ファッションデザイナーを目指している。

その為に沢山研究する為の材料である生地や道具、またはファッション関連の雑誌を買っているのだ。

その使い方に躊躇いは無く、よくそれで金欠を起こすらしいのがたまにきずらしい。

それはともかく、雅は千景を引き連れて商店街を歩いていた。

そんな時でも、商店街を行きかう人々の蔑むような視線を、嘲笑うかのような陰口は、千景の肌突き刺さり、耳に届く。

千景は、それをいつもの事だと気にせず、雅の後をついていく。

そんな中で、雅と千景はある花屋の前で止まる。

「泡沫さん」

「あら、雅じゃない」

その花屋の前で花に水をやる女性がいた。

「この店長の『春風泡沫』だ。」

「今日も来たのね」

「はい」

雅はよくここに通う。

理由は、部屋に飾る花を探すためだと言う。

実際、彼女の部屋に花が飾られているのは千景も知っているし、食卓の上にある花も、このものだ。

千景は、その場で突っ立ってその様子を眺める。

本当に楽しそうに話し合う雅と泡沫。

しかし、二人とも務めて千景を視界に入れないようにしている。

そして、千景も自ら気配を殺している。

こんな楽しそうな雰囲気壊したくないし壊す気にもならないからだ。

そう思いながら、千景は、御神刀『天鎖刈』の能力について考察していた。

すると、千景に向かって話しかける少女がいた。

「千景さんー！」

「ん？」

振り向けば、そこにいたのは優だった。

「優か」

「はい！そのお荷物大丈夫ですか？」

「大丈夫だ。お前のお母さんに鍛えられているからな」

「それは良かったです」

優は嬉しそうに笑う。

椿ほどではないにしろ焼けた肌と、対照的な長いサラサラな黒髪。

「今日は何をしているんですか?」

「雅さんの買い物に付き合ってるだけ」

優は雅を見る。

「・・・むう」

優は不機嫌そうに頬を膨らませる。

「どうした?」

「なんでもありません」

ぷいっとそっぽを向く優。

なんなのか、と思う千景であったが、それ以上は追及しない千景。

そのまま、優と話し合って時間を潰していると、不意に店の奥から

誰かが出てくる。

それはまだ三歳にも達していない小さな男の子だった。

「?」

「あれは、真琴くんですね」

「真琴?」

「この家の子供です」

男の子、真琴は酷く眠そうに店の前に出てきた。

「ふああああ」

可愛らしくあくびをする真琴。

「あら、真琴」

その真琴に気付く泡沫。

「あ、おかあさんだ」

「どうしたの?」

真琴ははにかんで、泡沫はそんな子供の頭を撫でる。

「んとねー。なんとなくー」

「貴方ね・・・体が弱いんだから・・・」

その会話を聞いて、千景は優に聞く。

「どういう事だ？」

「あ、真琴くん、実は……」

「——お前が知る必要は無い」

ふと、背後から聞こえた低い声に、千景はそこまで踊かないまでも優はその肩をびくりと跳ねらせる。

そして優は慌てて、千景はゆつくりと肩越しに、振り向いた。

そこには、あまりにもガタイの良い、大男がいた。

「……」

その巨体に圧倒される優。しかし、千景は澄ましたような表情でその男を見上げた。

「いけない事を聞いたようで、すいませんでした」

そう千景は謝罪した。

「あ、吾郎さん」

そこへ泡沫がその男へ駆け寄る。

千景はどうにか荷物を落とさないようにと避ける。

「おかえりなさい。どうだった？」

「良いのが手に入ったぜ」

そう微笑み合う二人。

彼の名前は『春風吾郎』。

泡沫の夫だ。

そのいちやつきぶりに優は赤面するも千景はまるで興味無さげに見上げていた。

それはともかく。

ふと千景の服の裾を引っ張る誰かがいた。

「ん？」

振り向けば、そこには真琴がいた。

真琴は、千景を不思議そうに見上げていた。

「……なんだ？」

「どうしてみみにせんがあるの？」

その質問に思わず息詰まる千景。

そこは、この街にとつてはあたりまえの事で、かつ、その理由を追求する事は、この街の常識としてはタブーだ。

しかし、やはり子供なのか、無垢かつ素朴な疑問を投げつけられて千景は思わず動揺してしまう。

それに答える為にたつぷりと時間をかけて、千景は口を開く。

「すこし、木の枝に引っ掛けてな」

「そうなのお？」

千景が視線を逸らす。

子供の無垢さがとても痛い。

「ほら真琴、お前は気にするな」

「え〜」

ここで吾郎が真琴をどこかへ行かせる。

真琴はとても不服そうに行ってしまう。

「ふう・・・」

「何故安心したような表情になってるんですか？」

優が首を傾げる。

「お前な・・・俺の噂を知ってるだろ？ どうせ悪い影響がなんたらで遠ざけたいんだろ」

「・・・千景さんは悪い影響なんて与えません」

「それでも、俺の両親は殺人を犯してる。それだけじゃない。父さんの方のじいちゃんは殺人で牢屋送り、ばあちゃんは浮気してどっか行ってるし、母さんの方のじいちゃんは悪徳企業の社長。ばあちゃんは・・・」

そこでふと思い出す。母方の祖母は、今は一体どうしているのだろうか？

今思えば、その祖母の事を、千景は知らない。

(今度、奏さんたちに聞いてみるか)

「千景さん？ どうかしたんですか？」

「いや、こつちの話だ。それよりも、椿さんはどうしてる？」

「お母さんはお仕事で、私は気分転換に散歩を」

「そうか・・・」

なんか余計な事も言っていた気がしたがそこは気にしない。
それはそうと。

「長いな」

「ですね」

雅と泡沫の会話があまりにも長くて退屈だった。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

(気まずい！)

優は心の中で悲鳴を挙げた。

千景は優が心を許す唯一の存在だ。

しかし、千景はともかく優は彼の事を何も知らない。

だからどんな話をすれば良いのか分からないのだ。

何か話を――。

そう考えている優を他所に、千景は、とある視線を感じていた。

自分に向けられていない悪意。

その視線の先には――。

(吾郎さん、だど?)

その悪意の視線は、吾郎を刺していた。

吾郎は、花の手入れに夢中で気付いていない様子だ。

千景は、その視線の正体を肩越しに見る。

そこにいたのは中年の男。

路地の影からこちらを伺い、何かしらの機会を狙っているようだ。

(もし魔器使いであるなら・・・)

千景は懐に忍ばせている御神刀へ意識を向ける。

最悪、雅の荷物をぶちまける事になるかもしれないが、誰かが不幸

になるよりかは数倍ましだ。

それに今回の買い物に割れ物は無い。多少痛むだろうが、落とした程度ではすぐに直せるから良いだろう。

どちらにしろ、あの男が行動に出たのなら即刻叩きのめす。

小学六年の身で何を言ってるんだと思うが、それでも警察がくるまでの時間稼ぎくらいにはなるだろう。

そう決め、千景は視線を正面に戻す。

真琴がまたこちらを覗き見ていた。

「……」

「……」

目が合い、微妙な空気になる。

真琴は純粋な眼差しで千景を見つめ、千景はその視線から視線を外せない。

ここで根負けしてしまったら、何かに負けてしまうと思ったからだ。

だが、そうしていると、まだ吾郎が真琴に声をかける。

「真琴、家にいなきやだめだろう?」

「ねえおとうさん、あのおにいちゃんとおはなししちゃだめなの?」

その場の空気が凍った——と感じたのは千景だけで、周囲はやれやれと言った感じで過ぎ去っていく。

「……だめだ」

「なんで?」

「なんでって……」

「ねえなんで?」

あまり強く言えないのか、吾郎が口籠る。

「……俺は他人と長時間話すとその相手に呪いをかけて一生友達が出来ない様になってしまうんだよ」

なんとも幼稚で儂い嘘なのだろうか。

しかし、相手はまだ幼稚園にも上がっていない子供、この手の嘘に

ひっかか——

「のろいとともだちってなに？」

残念、相手は想像以上に白かったようだ。

「……………」

千景渾身の嘘も、この超純粋少年の前に呆気無く破られてしまい、絶句してしまう。

「あ、えーっと、わ、私と遊ばない？」

そこで優が割り込んでくる。

これなら、流石に真琴も——

「…………おねえちゃんつまらなそ」

子供は残酷である。

「つまらないつまらない……………」

「元氣だせ優、所詮は子供の言葉だ」

先ほどの一言がよほどショックだったのか、道の隅で膝を抱えて落ち込む優。

そんな優を千景が慰める。

「そんな事いっちゃだめじゃないか」

「だって、おもったことはいえっておかあさんが」

(貴方が泡沫さん…………)

純粹に育ってほしいという想いで言葉だろうが、それで誰かが傷付いていたら意味がないのでは、と千景は思った。

「では、これを下さい」

「分かったわ。吾郎さん」

「ん？分かった。会計だな」

吾郎は、花の手入れの手を一旦止め、雅が指名した花を包装する。

「やっとか」

「遅いですね」

「きっぱり言うな」

「悪かったわね」

どうやら聞こえていたらしく、雅がこちらに歩いてくる。

「貴方は安座間さん家の子供ね」

「……優です」

あくまで礼はしないらしい。

それを雅は気にした様子は無く、優から視線を外して千景を見る。

「花は私が持つわ」

「分かりました」

これもいつもの事だ。

どうやら花ばかりは自分で持って帰りたいらしい。

「はい、雅」

「ありがとうございます」

あくまで、千景は視界に入れない。

泡沫は、この街では千景を視界に入れないように努めている。あるいは、認識しないようにしているのだ。

そこまで、自分は醜い存在なのだろうか。まあ、どうでも良いが。

吾郎の方へ視線を向ければ、吾郎はこちらを嫌悪感のこもった視線を向けていた。

しかし、あくまで答えない。

面倒事は避けたいのだろう。

それはそれで千景も助かる。

これ以上時間はかけられない。

「それじゃあ優、またな」

「あ……」

去っていく千景を呼び止めようとした優だったが、やめた。

千景にとっては、おそらくこれは迷惑な行為なのだろう。

だから、優はやめた。

「……もつと、お話したかったな」

そう名残惜しそうにつぶやいた。

一方で千景は、そんな優の様子を理解出来なかったが気にせず、前を向いた時、不意に、吾郎に悪意の視線を向けていた男が視界に移った。

その瞬間、男の視線が僅かにずれたのを千景は見逃さなかった。

この歳で、そこまでの観察能力を持っている千景は、まさしく希代

の天才だろう。

そうでなくても、3Dアクションやガンシューティングゲームによって培われた弱点を見抜く観察眼は、まさしく照魔鏡が如しだった。

ガンシューティングによって培われた動体視力と観察眼、そして反射神経、狙撃の腕、クイズゲームによって得た高校レベルの頭脳、戦略ゲームによる状況の把握、戦略立案、指揮能力、予測能力。そして、天賦ともいえる、身体能力。

まわりは彼に張られたレッテルによって気付かないが、実はとんでもない『天才』だった。

そして、そんな千景の最も突出するべき『相手の悪意を感じる』能力は――

――その悪意の矛先が真琴だという事を捉えた。

翌日――

みーんみんな――

セミたちが叫びまくっている炎天下で、千景は公園のベンチで汗を垂れ流していた。

「あつい……」

今日は今年の最高気温と言われている日。

流石夏、あまくみている。

「……んぐ」

千景は持っていたエネルギードリンクを飲む。

なんと刺激があまりにも強すぎて『未成年はのんじゃだめだぞ♡』なる旨を伝える文字が書かれていた。

しかし、今気張らなければいずれ暑さにやられて熱中症になってしまう。

そんな事になってしまったら、今やっている事が全うできなくなってしまう。

そのやっている事というのは――

「もーいーかい？」

「まあだだよー」

まだ幼稚園児の孤児たちの御守りである。

端的に言って今日園児たちの当番だった奴らが友人との約束を優先して千景に押し付けた、だ。

ただ、あまり事情を理解していない園児たちは、皆、千景に見られているのにも関わらず純粹に遊んでいる。

その様子を遠目から、そして炎天下の暑さと格闘しながら見ている。

しかし、この暑さ故か缶の中身もだいぶぬるくなってきてしまった。

(どうにかしねえと……)

しかしこの暑さはどうにもならない。

「あー、あづい・・・」

ふと、そこへ千景じゃない誰かの声が聞こえた。

そちらへ視線を向けると、そこには――

「奏さん・・・？」

「あら、ちかげくんじゃない。おはよー」

グロッキー状態の奏がいた。

とりあえず冷たい飲み物を十秒以内で買ってきて奏に手渡し、奏はそれを一気に飲み干した。

「んぐっ・・・んぐっ・・・ぷはあ！助かったあ！」

「なんでここに・・・？」

「神社の仕事も以外と退屈だね。こういう休みとなると、幾分か暇が出来るのよ。学校がある日はその真逆だけど」

「そうなんですか」

「それにしても子供の御守り？よく引き受けたわね」

「これしかやる事がないので」

「宿題は？」

「夏休み開始一週間で全部」

「真面目か・・・」

「そういう奏さんはどうなんですか？」

「・・・」

視線をそらす奏。

「どうやら、これはやっていないようだ。」

「早めにやっていた方が良かったですよ」

「うう・・・」

「どうやら責められるのは弱いらしい。」

「それはともかくとして。」

「最近、どう？」

「夏休みに入ってほとんどの奴らが遊びたい放題ですよ」

「それってどっちの意味で？」

「自分たちで遊んでるって事です。どうやら俺に時間をとられたくないらしい」

「君は普段は何してるの？あの子たちを見る限り、普段やらないでしょう？」

「家でゲーム」

「そ、そうなんだ・・・」

あまりにもあつさりと返され、言葉に詰まる奏。

さらなる話題を出そうと頭をひねるが、奏は彼の事をあまり知らない。

だからどう話せばいいのかわからないのだ。

「うーん・・・」

奏が頭を抱えている間、千景は、ふと、この間の事を思い出す。

(結局、あの男は一体・・・)

「あ、そういえば、優ちゃんと泡沫さんが経営してる花屋であつたんだよね？」

「え、ええ・・・」

「実は、泡沫さんの夫の吾郎さん、実は元ヤクザなんだけど、まだ中学生だった椿さんのボコボコにされたんだって」

愉悦、とても言うかのように笑う奏。

「椿さんが？」

「そ。その頃から椿さんかなり硬かったみたいだね、いくら殴つても全然ダメージ通らなくて、結局一方的に返り討ちにあつちやつたんだって。私それ聞いた時はおかしくておかしくて」

けらけらと笑う奏。

「ふむ・・・」

吾郎が椿にボコボコにされた所はどうでも良いが、椿なら吾郎とあの男の間に何が起きたのかを知っているかもしれない。

よくよく考えてみると、子供を先に作ったのは年下の椿なのか・・・なんて千景が思ったのはこの際おいておく。

翌日、千景は創代神社の縁側で椿にその手の話を聞いてみた。

「昔吾郎に何が会ったかだと？」

「ああ」

「それはまた何故？」

千景は、椿にこの間、吾郎の妻の泡沫が経営していた花屋での出来事を説明する。

「うむ……確か、泡沫は吾郎と付き合う以前、別の男と交際していたと聞く」

「そうなんですか？」

椿の言葉に、思わず聞き返してしまう千景。

「ああ。初めは、互いに良好な関係だったらしいが、次第に相手の方の独占欲が強くなってな。毎日大量のメールを送って来たり、他の男と話しているとその男を威嚇して遠ざけたりと、迷惑な事をするようになってきたらしく、そんな中で、質の悪い奴らにナンパされていた所を吾郎に助けられたらしい」

確かに泡沫はこの街での指折りなほどに美人だ。いわゆるすつぴ

ん美人というものだ。

そこは千景も認める。

「そこから二人の関係が始まったらしい。そこからは私もよく知っている。その頃の吾郎に向かって私は喧嘩売ったからな」

「あんたが喧嘩売ったのか!？」

「そこは気にするな。ま、吾郎と親しくなったのはその後だ。それで、私は二人の恋を応援したわけだよ。ただ互いに一歩踏み出さないうえにまだ泡沫が離れられない男の件もあって、色々と難航してな。そのまま数年が過ぎて御神刀の担い手に選ばれたりとうんぬんかんぬんで、結局私が結婚して優を授かった時にやっと結婚したという訳だ」

「以外とアバウト・・・」

とりあえず、これで仮説くらいはたてられる。

要はあの男は泡沫の元交際相手でそれを吾郎にとられた。そしてその男は吾郎を怨んでいるという事なのだろう。

その怨みを今日まで持っているとは、なんとも根深い男だ。

(まさか魔器使いじゃないよな)

そうであればこの御役目も早めに終わらせて良いのだが。

「しかし、その例の男・・・警戒しておく必要があるな・・・」

「一応、帰りに寄ってくれませんか？俺ではだめです」

「はあ、何故この街はこうもお前を嫌うのだろうか」

「それが人というものですよ」

いつの時代も人々にとつての悪は存在してきた。

歴史において、悪とみなされるのは必ず敗者。

源頼朝が弟義経を殺した時も、義経が悪いように歴史を作り、また、第二次世界大戦においても、日本に勝ったのはアメリカなのであって決して中国やその他周辺諸国ではないのに自分が勝利者だと主張する。

いわば人間とは身勝手な存在なのだ。

この街の人間が千景を悪と見定めるように、千景がそんな者達を守りたいと思っっているように。

それは、神々が人に与えた、醜い美点なのだろう。
それはともかくとして。

「俺はそれを否定しないしする気もありませんよ」
「……そうか」

椿は、そう答える。

「千景君、椿さん」

「ん？」

振り返ると、そこには二人の御神刀を持った奏が立っていた。

「御神刀の手入れ終わりましたよ」

「ありがとうございます」

椿には茶色の鞘の御神刀を、千景には白い刀身の御神刀を手渡す。

「俺でも御神刀の手入れができれば良いんだが……」

「御神刀とは神がお創りになった人智を超えた代物。そうそう簡単に
手入れは出来ませんよ」

そう、神が創りしものとは言え、使い続けていけば傷むし弱る。

だから、その手入れの為に創代に願ひ、また万全な状態にしなけれ
ばならないのだ。

「御神刀は、そのままでも十分に人を殺める力を持っている。だけど、
人を殺すために、それを預けてるわけじゃないのよ？」

「分かっていきます」

千景はそれを懐に忍ばせる。

「では奏、私たちはこれで暇させて貰う」

「はい。気を付けて帰って下さい」

そんな訳で長つたらしい階段を降りる二人。

千景と椿は、別れ、千景は百合籠に向かって帰る。

道中には必ず吾郎と泡沫の花屋がある。

しかし――

「なんだ？あの人だかりは……」

千景が怪訝そう見る先には、騒然とする人だかりがあった。

その中には、優の姿もあった。

「どうした？何があったんだ？」

「あ、千景さん！」

千景が声をかけると、優が振り返り、なにやら慌てた様子で駆け寄ってきた。

「それが、吾郎さんちの真琴ちゃんが攫われたみたいなんです！」

そして、その耳に入って来た情報は、千景の頭を鈍器でぶん殴るかのような衝撃を与えた。

封じ解き、縛り解く力

吾郎は、走っていた。

理由は、自分のまだ幼い息子が攫われたからだ。だから走る走る我武者羅に走る。

場所は、八階建ての廃ビルの屋上。

普段は誰も立ち入らず、滅多な事がなければ入ってくる事は全くと言っても良い程に来ない。

ただし、誰も立ち入らないという事は、自殺などの命が失われるような行為を誰にも知られずに行えるという事でもあるのだ。

だから、犯人はここを指定した。

吾郎が裏階段を使って屋上へ駆け上がる。

「真琴!!」

屋上につくと同時に叫ぶ吾郎。

「お父さん!」

すると、すぐ目の前で声が聞こえた。

そこには、真琴が一人の男に片腕で抱えられていた。

一瞬、真琴へ視線が釘付けになったが、しかし吾郎はゆっくりと、自分の愛する息子を攫った不届き者を見る。

そして、絶句する。

「お前は・・・!?!」

その男の手には切れ味の良さそうなナイフ。

そのナイフは、真っ直ぐに真琴に向けられている。

しかし、問題はそこでは無い。

そのナイフを持っている男。

そこに問題があった。

「久しぶりだなあ、吾郎」

眼鏡をかけた、秀才そうな男。

スーツを着込んでいるその姿は、まさしくサラリーマンのそれだろう。

しかし、どうしてか。

男からはその風格の一切が感じられない。

「政人……」

男の名は、『旗田政人』。

泡沫の、かつての交際相手。

何故、彼がこんな事をするのか。

理由は、分かる。

「お前、そこまで泡沫の事を……」

「いやね、もうこの際、彼女との過去なんてどうでも良いんだよ」

「は？」

首を傾げる吾郎。

しかし、政人からはこれまでにない程の憎悪を感じていた。

「僕はこれまで上手くいっていったんだ。小中高全ての学校でトップの成績を取り、大学では将来有望と言われ、そして会社にはトップの成績に入り、泡沫のような美しい女性と付き合う事が出来た。だけど、だけど……」

男のナイフを握りしめる手に力が籠る。

「お前が彼女の前に現れてから全てが変わった！」

「な……!?!」

「お前が彼女を口説き、僕の元から離れさせたから僕の人生の全てが狂ったんだ！全部、全部全部お前の所為でなア！」

あまりにも身勝手過ぎる言い分に、僅かながらに頭にくる吾郎。

「十六年前にお前が彼女の前に現れなければ、僕は今頃全て成功していたんだ！お前の、お前のせいだな！」

「うるせえ！んなもん、取られるような事してたお前が悪いんだろうが！そんな下らねえ事を言いにならねえ真琴攫ったのか!?!」

もしそうであるなら許さない。許してはならない。

そんな、子供を巻き込む様な事でもない事で自分の息子を攫うなど言語道断だからだ。

しかし、突然政人はとてつもなく嫌な笑みを浮かべた。

それに、吾郎は背筋がゾツとした。

「くだらない？君にとってはそうだろうね。だけど、これは僕にとつ

ては意味のある事なんだよ」

政人は語り出す。

「泡沫を失った事で、僕の仕事ぶりは一気に転落したよ……会社からの評価は失墜し、ミスを繰り返し、ついには首にされるしまつた……だから、復讐する事にしたよ」

政人は、真琴を掴む手を動かし、そして、あるところで止めた。

「お、おい、まさか……!?!」

「ここで君の子供を落として殺す。その後君を殺す。そしてそのあとに泡沫を凌辱し、孕ませる。それで彼女は僕のものとなる」

なにを馬鹿な事を、と普通の人間なら思うだろう。

しかし、政人の恐ろしい嗤い顔と、迫真な口調から、吾郎は、今度こそ体の芯から冷えるような感覚を覚えた。

彼の言っている事を詳しく説明すると、

まず、真琴を殺し吾郎を絶望させる。

吾郎を絶望させた後に吾郎を殺す。

そして二人の死によつて茫然自失となった泡沫を強姦^{レイプ}する。

そして、そのまま彼女を孕ませ、政人との間に子供を作り出す。

結果、彼女は完全に政人に縛られてしまう。

まさに、悪魔の囁きともいうべき計画。

おおよそ、人としてまりにも外れた告白に、吾郎は、一旦は冷えた感覚が、一気に沸騰し爆発する。

「ふ、ざけんなア!!」

「おっと、下手に動かない方が良い。というか、どうせ動いても動かないくてもどっちでも良いんだけどね」

「ッ!!」

政人の言葉に、吾郎は止まる。

「そこで傍観していると良い。君の子供が死ぬところをね」

「ま、待ってくれ!頼む!!」

吾郎は懇願する。

この際、自分のプライドも何もあつたところで何かを救える訳じや

ない。

「頼む。代わりに俺が死ぬ。だから、真琴だけは殺さないでくれ……！」

頭を地面に押し当て、あまりにも不格好な土下座で、プライドも何もかもを捨て去り、まるで無様とでも言うかのように必死に懇願する。

「頼む……!!」

真琴さえ助かるなら、この際、全てを投げうっても良い。

「ふむ、君にそこまでの誠意があるというのなら、考えてやってもいいかな」

ふと、政人がそう言った。

「本当か——」

それに、思わず顔を上げる吾郎——。

政人の手には、真琴はいなかった。

「——!?!」

それに、目を見開き、そして、その後に見た政人の顔は——

「なあんていう訳ないだろ馬ア鹿」

まさしく悪魔の嗤いだった。

その瞬間、吾郎の中で何かが焼き切れ、膝を地面についた状態から地面を蹴り、咆哮を上げ、政人に殴りかかる。

「咆えるなよ、社会の汚らわしいゴミが」

次の瞬間、唾う政人の左手に付けられていた腕時計が発光する。

その光が、やがて集束し、形を成す。

それは文字。其れは、『霧』。

いきなり政人の周囲に発生した霧が、確かな打撃となって吾郎の腹を殴り飛ばした。

「ぐはッ!」

そのまま宙を舞い、元居た場所に仰向けに落ちる。

あまりにも重く、そして、耐えられるほどのものでもなく、吾郎はその場にうづくまる。

「アハハハ! 無様だなあ。お前それでももと極道社会のゴミかよ? 情けないなあ?」

「う……る……せえ……!」

吾郎は、どうにか立ち上がろうとする。

そして、どうにか立ち上がった。ところで――

「ま、そうだろうね」

吾郎の顔面にまた衝撃が走った。

その衝撃は吾郎を吹き飛ばし、そのままの勢いでいけば、屋上から投げ出されてしまう。

「どこにいくんだ?」

が、今度は全く反対方向から衝撃が来て、吾郎を全く反対の方向へ吹き飛ばす。

そして、また屋上へ投げ出されるかと思いきや全く別の方向から衝撃が来て、吾郎を全く別の方向へ吹き飛ばしていた。

やがて、それが終わるころには吾郎はズタボロになって、コンク

リートの地面にひれ伏していた。

その無様な様子に、政人はとうとう嗤いを抑えきれなくなる。

「くく、アハハハハハハハハハハッ!!」

政人は、高嗤いをする。

「無様だなあ！春風吾郎！僕から、この約束されたエリートであるこの僕から未来を奪ったくせに、そんな奴がここまで遅いなんてなあ！」

何が起こったのか分からない。何故自分は吹き飛ばされた？何故、こうなった？

「なあんにも守れないくせにい、この僕から未来を奪うなんて、弁え知らずも甚だしいんだよお。お前のような奴があ？泡沫を幸せにするなんてえ、無理な話なんだよオ！」

政人が、地面に伏せる吾郎の頭を踏んづける。

吾郎は、耐え切れずに涙を流す。

「ちく……しょお……」

真琴を守れないどころか、このクズを殴り飛ばす事も出来ないのか。

それが、悔しくて悔しくて、今すぐにでも、死にたい。

もう、このまま、終わった方が――

そう、吾郎の心が弱い方向で傾きかけた時。

「自分を諦めないでください、吾郎さんッ!!」

次の瞬間、政人が吹き飛ばされた。

「ぐはあああ?」

背中からの衝撃は、政人を屋上の手すりに叩きつけ、ぐったりときせるに至った。

そして、吾郎は、頭の重みがなくなった事で、その頭を挙げた。

そこにいたのは――

「ち……千景……?」

そこにいたのは、まるで罪人のような拘束具の鎧を纏った、白い装束を着込み、その小さな体で持つにはあまりにも大きすぎる大鎌を持った、千景がいた。

「すみません。来るのが遅れてしまいました」

「なん……で……?」

吾郎は、何が何だか分からないとでもいうような表情になる。

「説明はあとです。今は、ここを離れましょう」

「え……」

何かを言い返す前に、千景はありえない程の臂力で吾郎を持ち上げ、そのまま政人が吹き飛ばされていった方向とは反対の方向へ、空中へ躍り出た。

「な、なああああああ!?!」

落下しながら絶叫する吾郎。

だが、千景はこの高さをもともしないで地面に足を向け、もの見事に地面に着地してみせた。

「吾郎さん、怪我は?」

千景がそう聞くと、吾郎は、ふとある事を思い出し、いきなり千景を振り払った。

「触るんじゃないええ!」

「ツ!?!」

振り払われ、地面に落ちる吾郎。

しかし、吾郎の内心は悔しきでいっぱいだった。

「今更、いまさら、お前が来たところで……真琴は……!!」

「……」

悔し涙を流し、嗚咽を漏らす吾郎。

それに千景は何も言わない。

「ぐ……くう……」

生き残ったところで、真琴は帰ってこない。

こんな自分が、泡沫の夫である資格など――

「おとうさん!」

時が、止まった気がした。

ゆっくり、ゆっくりと、声がした方向へ顔を向ければ、そこには――

「おとうさん、大丈夫?」

「吾郎……」

無傷の真琴と、泡沫がいた。

「ま……こと……?」

「真琴が落ちてくるのが見えたので、どうにか下で受け止めました」
「どういうことだ……?」

真琴が吾郎に駆け寄り、そして、満面の笑顔で言った。

「おにいちゃんに、うけとめてもらったんだ!」

「……!?!」

それはほんの数分前。

千景は街中を全力で走っていた。

「あの手紙の内容では、この辺りだった筈……」

犯人が、恐らく吾郎宛に出したと思われる手紙には、『速やかに東の一番高い廃ビルの屋上まで来い』とだけ書かれていた。

犯人はバカなのかと思うが、これでは警察に場所を特定されやすい。何か捕まらない自身でもあるのか。

それ以前に、おそらく犯人があつた男だと特定しておいて、あの体格では吾郎には勝てないだろう。

やはり、何かある。

「早まらないでくれよ……」

つい、手紙を奪い取って読んでしまい、周囲から殴られかけたが、今はそんな事を気にしてられない。

泡沫は、吾郎が飛び出した数十分後に出たと聞く。

泡沫はあまり運動するのは得意ではないと聞く。

ならば、泡沫が吾郎に追いつく事など不可能だ。

しかし、それは逆に、千景が彼女においつける事を意味している。

「あれは・・・」

ふと目の前に見えた人影。その身長、体格、そして今の状況から、その人物を特定する。

「泡沫さんッ!!」

「え・・・!?!」

呼んでみれば案の定だった。

その人物は、泡沫だった。

「貴方・・・なんで・・・!?!」

「説明は後です。吾郎さんがどこにいるか分かりますか?」

「なんで貴方に・・・」

「こんなところで時間喰ってていいんですか!?!」

千景の怒声に、泡沫は一瞬怯み、やがて観念したかのように言った。

「たぶん、あのビルだと思う・・・」

千景は泡沫が指さしたビルを見上げる。

そこは、たしかに犯人の要求通り、この街の東にある廃ビルの中で一番高いビルだ。

といっても、三百年前に、東京というところにあると言われていた『東京スカイツリー』なる建物と比べれば、また、東以外の地区にあるビルよりかは低い。ただ、その地区だけは、そのビルだけが突出して高かった。

「行きましょう!」

「あ、待ちなさい!」

千景が走り出し、泡沫がそれについていく。

やがて、例の廃ビルの下に辿りつく頃。

二人は、真琴が落ちてくるのを見た。

「真琴ッ!!」

泡沫は、悲鳴のようにその真琴の名を呼んだ。体から、血の気が引くような感覚を覚え、思わず、足がもつれ、転ぶ。

「真琴おー!」

倒れ伏し、泡沫は上体だけ起こして悲鳴をあげる。

その間にも、真琴はどんどん自由落下によって加速していく。

さらに態勢は最悪な事に頭が下だ。このまま地面に頭から入れば、即死は確定。

死。それは人にとってはあまりにも当たり前な事。いついかなる時でも、死は突然にやってくる。

死が確実な病気にかかっても、一体いつ死ぬのか、そんなもの医者であつても分からない。

もしかしたら容態が急変して突然死したり、また、逆に奇跡的に回復するかもしれない。

そう、奇跡が起きれば、だ。

千景は、こう結論付ける。

この世で起こる事全ては必然の元、起きているのだと。

偶然などなく、誰かが手を加えるだけで、その運命は確かに変えられると。

落下しても、打ちどころが悪い良いを決めるのは、所詮、落下する時の態勢で決まるのだと。

そして、誰かが手を加えるだけで、その運命は簡単に変えられるのだと。

「オオオオオオッ!!!」

だから、千景は全力で走る。

リミッターを突破する。

速く速く、足を速く動かし、歩幅を大きくしろ。

足が痛くなっても、脳に酸素が回らなくなつたとしても、とにかく足を動かして、落下してくる彼を救うのだ。

(間に合え——ッ!!)

果たして、運命は変えられた。

「ハアッ——ハアッ——」

落下してきたものを受け止め、受け身をとりそこねて衝撃を全て受けて、地面に仰向けに倒れる千景。

どうにか頭を死守した。

そして、千景の手には——不思議そうに眼を見開く真琴がいた。

「ハア——間に……あつた……」

千景は心底安心して、まだ動く体を起こし、真琴の容態を確認する。

「痛いところはないか？」

「うん……?」

首を傾げる真琴。

見た所、外傷はおそらく触られた時に出来た手の痕だけだろう。

とにかく、千景は立ち上がり、急いで泡沫の元へ走る。

「あ、おかあさん——」

「真琴……!」

泡沫は、腰が抜けたのか、立ち上がらない。

だが、それをお構いなしに千景は彼女に真琴を預ける。

「おかあさん——」

「真琴……真琴……!」

泡沫は、しっかりと真琴を抱きしめる。

その様子に、千景は安心したように笑う。

その瞬間、千景の首を何かが締め付けた。

「ッ!」

引つ張られる感覚のもと、千景はすぐさま背後を、そして上を見た。

先ほどの首が締まるような感覚は、魔器発動を告げる、御神刀の警告機能。

つまり——

(真琴を攫ったのは、魔器使い!?)

その事実には、千景は啞然とする。

しかし、それは次に聞こえた音で確信する。

その音は、何かを殴るかのような鈍い音。

それは、すなわち——

千景は、迷わず懐に隠していた御神刀を取り出す。

「——『天鎖刈』ッ!!」

叫び、千景の装束が瞬時に変化する。

それは罪人の鎖。罪人を封じる拘束具。

白は無を意味し、持たざる者を意味する。

鉄は罪を意味し、咎人であるという事を自覚させる。

ここに、罪人の救導者は現れり。

限りなき願いを持って、悪しき魂を殲滅せよ。

御神刀『天鎖刈』、着装完了。

千景の姿が突然変わり、泡沫は唾然とする。

「わあ」

真琴は目をキラキラさせているが、そうしている間に千景は膝を折り曲げ、すぐさま真上に飛び上がった。

さらに鎖を顕現させ、それを壁に打ち込んで体を引っ張り上げて機動力とし、ビルを駆け上がる。

その時、確かに、誰かを悪意を感じた。

それと同時に、誰かの諦めを感じた。

もし、その諦めの正体が、彼だというのなら、千景は迷わずに叫んだ。

「自分を諦めないで下さい、吾郎さんッ!!」

故に、千景は吾郎を救出し、ここに来るに至ったのだ。

「千景!」

ふと、別の方向から、千景と同じく御神刀を発動させた椿が文字通り飛んできた。

「椿!?!」

それに吾郎は驚く。

「吾郎、大丈夫か!？」

吾郎の状態を見て、はたからみても焦った様子で椿は吾郎の容態を確認する。

「それよりも椿、その恰好はなんだ!？」

「うえ!? ああいやこれは・・・」

椿の恰好は、よくよく見れば、かなり際どい、胸はサラシでしつかりと巻かれているが問題なのはそのサラシが椿の胸の形にぴったりフィットしているという事で、下手をすればあってもなくても変わらないような恰好なのだ。

それにくわえてへそ出しに太腿丸見えな短パンに学ランとあまり子供のいる母親がするような恰好では無い。

が、千景にとつてはどうでも良いが。

それはともかく。

千景は救急車を呼んでいた。

「救急車呼んでおきました」

『早ッ!?!』

「それよりも椿さん、この上に」

「・・・ああ、いるな」

椿と千景が、ビルを見上げる。

ふと、後ろから吾郎が千景の肩を掴む。

「おい、これは一体どういう状況なんだ? お前が真琴を助けて、政人の奴は変な力を使って、あまつさえ椿もお前も変な恰好してる。説明はしてくれるんだろうな?」

吾郎が睨み付けてくる。

確かに、魔器の対処は自分たちの管轄だ。それも、他人に極秘裏に行われなければならない。

バレては人々の平穏を守れない。それが出来なければ、こんな事もありえるだろう。

だが、それでも、一貫して守らなければならない事があるのだ。

「すまない、吾郎。それは——」

「申し訳ありませんが、貴方に話す義務はありませんし、知ったところ

「何でも出来ません」

椿の言葉を遮って、千景がそう言った。

「なんだと・・・？」

「貴方も先ほど感じた筈です。奴には勝てない、と」

「そんな事——」

「事実、貴方は奴の攻撃を受けて、本来なら一歩も動けない程の傷を負っている筈です」

「ッ」

千景の指摘に、吾郎は押し黙る。

「たしかに、自分の子供を危険に晒されたら、誰だって許せないと思うでしょう。しかし、許せないと思っただけで、何が力が無ければ、その怒りは無意味なものです」

その言葉が、吾郎の心に突き刺さる。それは、泡沫も同じだった。自分には力が無い。だから何も出来ない。

それは、とても悔しい事だ。

「だらか」

だが、彼は、言葉を続けた。

「だから、俺が貴方たちの怒りを背負うんです。たとえ偽善であったとしても、俺は、貴方達が安心してくらせる街を守りたいから」

振り向いて、千景は、笑った。

それは、心から、誰かを慈しめて、どれほど傷付いても誰かを守りたいと思える、少年の本音だった。

その笑顔に、吾郎は、怯えた。

その笑いが、まるで、自分たちへの意趣返しのような、悪魔の微笑みに見えたから。

「行きましよう」

「ああ」

二人は飛び上がり、一気にビルの屋上へ駆け上がる。

そして、そこには一人の男がふらつきながらも立ち上がった。

「ジャーニーカンパニー社員、旗田政人とお見受けする」

千景が、男に告げる。

「貴様が行った行為は、人の命を奪い、人の未来を奪い、人の尊厳を踏みにじる事。その行為は、我らにとっては許されない事だ。故に、我らは、貴様を狩る」

宣告はした。

「魔器『霧』、破壊させてもらう。覚悟しろ」

千景と椿が構える。

「……うざい」

政人が、頭を抑えながら、唸る。

「なんでこんなところで魔器使いが出てくるんだ……これじゃあ僕の人生設計が台無しじゃないか。どうしてくれるんだよ。この落とし前どうつけてくれるんだよ……」

「知るか」

冷徹な言葉を同時に放つ千景と椿。

「ふざけんなよ……僕はまだ終わらないぞ……絶対に……絶対になア!!!」

政人が動く。

それに身構える二人。

だが、政人がとった行動は、二人の予想の外側の行為だった。

「『霧化』ア!!」

「!?!」

突然、政人の姿が霞んだかと思うと、その姿が一瞬にして煙――

―否、霧となってその場にただよった。

「じゃあな」

「まずい!逃げられるぞ!!」

霧となった事で実体を失くし、そのまま飛び去ろうとする政人。

「逃がさねえよ」

ここで、千景は天鎖刈の能力を発動する。

「『封印縛鎖』・『結界』・『水蒸気』ツ!!」

鎖が展開される。

それは周囲に見えない金具にでも縫い付けられたかのように展開された。

「ハッ！そんなもの——ぐふ!？」

その間を抜けようとした政人が、突然壁にでもぶつかつたかのよう
に止まった。

「な、なんだア!？」

「封印縛鎖。鎖で概念を封じ込め、その概念に対しての『縛り』をうな
がす。その結界を張った」

「いわば、条件付き結界。

霧は、いわば水蒸気が眼に見えるようになったものだ。

ならば、展開した鎖の結界に、水蒸気を封じ込めるといふ条件を与
えれば、水蒸気そのものである霧になつて政人はその結界を抜け
られない。

「というか、水蒸気や霧の事は中学で習う内容なのだが。

「くそッ!」

「集束しろ!」

「なに!？」

結界が千景を中心に小さくなつてくる。

それに政人は一気に押し戻される。

「魔器『霧』、お前を捉え損ねた理由は、その実態の無さ故だ。その所
為で私はお前を足止めできず、逃がすに至った」

だが、と椿は言う。

「この縛り付ける『鎖』がある限り、逃げられると思うなよ」

そう霧になつた政人を睨み付ける椿。

だが、そのまま黙っている政人ではない。

次の瞬間、政人は周囲にとつともなく濃い霧を発生させた。

「『濃霧』ッ!!」

「!？」

これによって視界は一気に塞がれた。

「これは……ぐッ!？」

突然、千景の脚が斬られた。

「なんだ・・・ぐあ!？」

さらに顎を下から衝撃を襲った。

「気を付けろ千景、こいつ、霧になって四方八方から打撃を繰り返してきているぞ！」

樁の鋼の体には、その攻撃に一切は効いていない。

しかし、頭部を狙ったその連撃には脳が揺さぶられてしまう。

樁としても早々に捉えなければジリ貧だ。

「ッ!!」

千景は打撃を喰らった傍から鎖を飛ばす。しかし、その全てが空を切る。

「あたらねえよそんな攻撃ッ!!」

さらに攻撃が襲ってくる。

「ぐッ・・・うッ・・・」

千景は樁ほどではないが打たれ強い。

しかし、それも長くは続かない。

「千景ッ！大丈夫か・・・!？」

樁が叫ぶ。

このままでは先に千景がやられる。

その様子を、政人は嗤ってみていた。

(ひひ、このままあのガキを攻撃し続けければ、その内くたばるだろ)

思わず嗤い声が漏れる。

(身の程知らずが、将来を約束されたエリートを殴り飛ばした罪を、その身で味わえ！)

打撃の嵐が、千景を集中して襲う。

「コイツッ・・・!？」

そこで樁は敵の意図を取る。

敵は一度樁と戦っている。

その時に、樁のバケモノのような頑丈さを知っている。

だから、政人は先に千景を殺しにかかっているのだ。

なるべく、長く、苦しめるように、ゆっくりと。

確実に追い詰める為に――

椿は千景に覆いかぶさろうとする。だが――

「待ってください――」

「!?」

「あと、もう少し……」

千景の言葉に、椿は止まる。

それに、政人はニヤリと嗤う。

今だ、と。

霧に、確かな形は無い。

故に、さまざまな形に成る事が可能だ。

故に、刃を作り出す事も可能だ。

だから政人は刃を作り出す。

千景の首を搔つ切る為に。それで、千景は絶命する。

(僕に屈辱を与えた罪、死んで償えッ!!)

霧の刃を、千景の首に飛ばす。

『霧斬』ッ!!!

そして、その霧の刃が、千景の首へ到達し――

千景は体を思いっきり逸らして霧の刃を避けた。

「はっ。」

あまりにも、本当にあまりにも突然に、あっさりとかわされた事に、政人は呆氣にとられる。

「ぐうむっ?」

ついでに言って、その霧の刃は千景の背後にいた椿に直撃した。

当然、その鋼の体には通用しないが。

「な、なんだ・・・!?!」

「な、なんで避けれたんだ!?!」

先ほどまで、予測も出来ずに殴られまくっていた筈だ。

なのに、何故突然、避ける事が出来た？

(ま、まぐれだ。絶対まぐれだ!)

それを確認するために、もう一度、『霧斬』を発動して、再度千景にその刃を向かわせる。

しかし、千景はその全てを、まるで踊るかのようにことごとく躲していた。

「な、なんで・・・!?!」

「お前が散々足跡を残してくれたからだ」

千景は、言つてのける。

「打撃の順番から、お前の手順を探り、そして、その打撃から感じる『悪意』をくみ取り、そして、お前がどういう人間で、どういった悪意を持っているのかを理解すれば——」

その瞬間、政人は背筋が凍るかのような感覚に陥った。

何故なら、千景の視線が、寸分狂わず、政人を射抜いていたからだ。

「——お前がどこにいるのかを理解するのはさほど難しくない」

状況を冷静に見る状況把握、物事を冷静に見定める観察眼、手順から相手がどういう事をしてくるのかを予測する知性、今自分の周囲がどうなっているのかを感じる空間把握、敵の動きを見定める動体視力、そして、相手のありとあらゆる悪意を感じ取る直観力。

それらの要素が集結し、彼の小学生にしてはあまりにも高すぎる『推理力』が、洞察力が、敵がどういう存在なのかを、隅々まで理解した。

否、それは武術で言うなら、『盗んだ』に等しい。

千景は、『旗田政人』という『人間』を盗んだのだ。

「捉えた。もうお前は、逃げられない」

千景の言葉は、まさしく断罪の宣告に聞こえた。

身を沈めた千景。

「椿さん、俺が奴を实体化させます。その瞬間——」

「——斬ればいいんだな。行けッ!!」

椿の返答に、千景は地面を蹴る。

「く、来るなあああ!!」

政人はもはや我武者羅に斬撃やら打撃やらを繰り出す。

しかし、千景は分かっているかのように避けまくる。

時には鎌で弾き、時には鎖で防ぎ、時には巧みに躲す。

まさしく、踊っているかのように。

「く、くそッ! だったらこれだア!」

政人が、何かをする。

(なにを——ッ!?)

次の瞬間、千景の呼吸が止まった。

『凝結』ッ!!」

それは水蒸気が水に戻る現象の一つ。

空気が、一立方メートルの中に蓄えていられる水蒸気量は、常に温度によって変化する。

一方で水蒸気が水になる時も、常に温度によって決まっている。

空気中に蓄えられた水蒸気は、その量によって、水に変わる時の温度、『露点』が変わる。その露点まで温度を下げれば、ガラスや壁などに水滴となって出てくるのだ。

政人は、その原理を、千景の肺の中に入った霧を使って行い、肺を水で満たしたのだ。

これによって、千景は呼吸困難に陥り、決して助かる事もなく、死んでいくだろう。

(これでこのガキは——)

勝った、と確信した瞬間。

『圧縮縛鎖』

千景がどうにか紡いだ言葉。次の瞬間、千景の口から大量の水が吐き出された。

「なに……!?!」

それに目を見開く政人。

しかし、そうしている間に、千景は、同時に鎖を操作する。

『封印縛鎖』『水蒸気』『実体化』

いつの間にか、政人の周囲には、鎖が出現していた。

「しまっ……」

「もう……おそい……!」

千景が空いた手を握りしめる。

それと同時に、鎖が実体無き政人に絡みつき、その体を実体化させる。

「な……!?!」

「魔器使いはバカなのか……人間は地面に足をついているものっていう常識が残ってるぞ」

「ッ——!?!」

これで、政人は逃げられない。

「覚悟しろッ!!」

樁が走り出す。

「畜生ッ!!」

政人が、樁に向かって『凝結』を発動する。

『封印縛鎖』『体内干渉』ッ!!」

しかし、それよりも速く、千景が樁を鎖で縛りあげ、体内への干渉を阻止する。

「く、くそおお!!」

政人がなおも抵抗する。

突然、樁の動きが止まる。

「な!?!」

まるで、体を粘土で固められたかのように、動きが重くなる。

霧で体の自由を奪っているのだ。

「く、こんなところで……」

「お前はあとだ!まずはアイツから——」

次の瞬間、千景が叫ぶ。

『封印解鎖』『拘束』ッ!!」

次の瞬間、樁に纏われていた霧が消滅する。

「な・・・!?!」

千景が、政人の『霧』に与えられていた『拘束』の概念を引き千切り、椿を拘束から解いたのだ。

それによって、椿は、一気に政人の距離を詰める。

「ハアッ!!」

椿の手刀が、政人を切り裂く。

しかし、椿の手に、手応えは無い。

「むッ!?!」

「それは偽物だよバアカッ!!」

政人が椿の背後に出現する。霧で作った分身だ。

それによって、椿を欺いた訳だが。

「それは分かっていた」

「へ?」

いつの間にか、政人の背後に、大鎌を振りかぶる千景がいた。

「もう、逃がさないッ——」

地面を踏み砕く。

鎌を、背中から前へ。

刃を、政人へ、突き立てる。

そして、切り裂いた。

「ぎやあああああああ!?!」

断末魔の叫びをあげ、政人の姿は、元のスーツ姿に戻り、魔器も元の腕時計に戻った。

そして、霧も晴れ、戦いが終結した事を告げる。

千景は、鎌を振り上げ、腕時計を破壊する。

「魔器『霧』、破壊完了」

「これで、残り三つだな」

霧の文字が砕け散り、虚空に消えていく。

その様子を、千景と椿は、静かに見た。

顛末を話せば、政人は拉致及び暴行の罪で逮捕された。

終始、こうなったのは吾郎の所為だ。全て吾郎の所為だと、事の責任を全て吾郎に押し付けようとしていたが、今聞かれているのは暴行と拉致したという事実なので、問答無用で留置所に入れられた。

裁判では、それ相応の判決が下されるであろう。

一方で、犯人逮捕に貢献した椿は賞賛されたが、千景に対しては誰も褒めなかった。

が、この一件で真琴は千景に懐いてしまい、他人が近付いてはダメと言っても真琴はそれらを無視して千景に遊びを求めてくるようになった。

千景にとつてもいい迷惑なのだが。

それはともかく。

「これで、魔器は残り三つとなったわ。判明している『強』と『燃』、そして未だ姿を見せない最後の魔器。これらを破壊すれば、今回の御役目は終わると思うわ」

神社の縁側にて、奏が千景に向かって、そう報告した。

「残り三つか・・・」

「この数ヶ月で二つ。ペースとしてはまずまずだけど、このままいけば、全ての魔器の破壊に成功すると思うわ」

「はあ・・・」

やはり、実感が湧かない。

魔器が無くなるのは良い事だと思う。しかし、その後の事を、千景は想像できないのだ。

いつも通りの生活が続く。ただ、それだけの筈だ。

「・・・」

千景は、青い空を見上げる。

その空では鴉が飛んでいた。

「・・・」

その様子を、奏は横目で見て、ふと何かを思いつき、それを口に出

す。

「ねえ千景君」

「なんですか？」

「膝枕してあげよっか？」

「……何故？」

思わず怪訝そうな顔になる千景。

「別に深い意味はないわよ。ただ少し休んでみたらどうって話」

「今こうして座って休んでいますが……」

「体は休んでいても心はそうじゃないでしょ？ さあお姉さんの膝にその頭を沈めなさい！」

「それ、一体どういう意味ですか……」

「ほらほらあ、これでも私の膝は柔らかいのよ？」

妙に誘惑してくる奏。

それに、思わずジト目になる千景。

しばし考える千景。

「……分かりました」

千景の返答に、奏は思わずガッツポーズを取る。

そうして千景はあっさり奏の太腿へその頭を投げ出す。

「んにゅふふ……」

「その笑い方は流石に気持ち悪い」

「酷いなあ、君の顔はこんなに可愛いのに」

「確かに俺の顔は女寄りですが……」

「自覚してるんだ……」

確かに千景の顔は男子にしては女子に近い顔立ちをしている。女装してもバレないかもしれない。

ふと、奏は千景の髪を撫でた。

「……？」

「ああ、気に障ったならごめんさい。でも、貴方の髪って意外とサラサラなのね」

まるで、絹のように、引っ掛かる事の無い、綺麗な黒髪。

くせつ毛も無く、寝癖も出来なそうなその髪は、とてもきれい

だった。

「それが何か？」

「もつたいない。もつと自慢してもいいのよ？」

「それは周りの奴らを不機嫌にさせてしまう」

千景は、あくまで自分よりも他人を優先させてしまう。

それ故の、答えなのだろう。

(もう少し、自分の事も気にすればいいのに……)

そう思いながら、奏は彼の頭を撫でていると、ある事に気付いていた。

「ん……んう……」

「……」

なんだから、瞼が閉じようとしたり、そう思ったら開いて、また閉じられようとしている。

(これってまさか……)

寝かけているのか。

それに、奏は思わず吹き出しそうになる。

(なんだ。顔だけじゃなくて、以外と可愛い所あるじゃない)

うとうととしだしている千景の頭を撫でる手をやめず、奏は、一つ、歌を歌った。

「眠れ、眠れよ、哀しみを知る者よ」

下手では無く、むしろ、凡人の中で、上手い方の、歌声。

「今はただ、目を閉じて、夜が明けるのを待ちましょう」

その歌声は、その場の静寂を破り、小さなメロディを奏でる。

「あなたは哀しみを知る人、今はただ、夜の安らぎを感じなさい」

その静かな歌声は、千景の眠気をさらに呼び起こし、だんだんとその意識を遠のかせる。

「心配しないで、私はここにいる」

千景は、眼を閉じ、眠りにつくとき、一つの情景が、瞼の下を横切った。

「あの蒼穹は、決して、あなたを見放さないから」

それは、在りし日の、大切な誰かが歌ってくれた――

千景が、涙を流しながら、眠りににつき、奏がその涙を拭っていた時、椿がやってくる。

椿は、音を立てぬように、二人に近付いた。

『蒼穹』・・・か、久しぶりに聞いたな」

「千歳さんオリジナルの子守歌ですものね。千歳さんのお母さんがよく歌ってくれたって聞きました」

千景の母、千歳の母は、例の悪徳企業の社長に、金で買われた孤児だった。

その時、千歳の母の両親は、何者かに殺害されており、まるで仕組まれていたかのように母は攫われてしまったのだという。金で買われたというのは、犯罪者グループを雇う時に支払った金の事だ。

そんな不運が続き、社長の慰め物として扱われ、その時、儲けてしまったのが、千歳だった。

社長は、丁度千歳の母に飽きており、タイミングが良いのか悪いのか千歳の母を捨て、その時、そんな千歳の母を養ったのが、奏の両親だった。

まだ奏は生まれていなかったうえに、千歳の母は千歳を生んで六年後に病気で死去してしまったのだ。

その時、千歳の母が歌っていたのが、この子守歌の『蒼穹』。名前に意味は無く、ただ、単純にそんな名前を付けたという。

「千景にも、歌っていたんだな・・・」

「そうですね・・・」

千歳と千景。

共に、母と過ごした時間は、小学一年にあがるまでの六年間。

「こんな、悲しい事って、あるんでしょっか？」

「さあな。ただ、私にとっては、千歳が一番つらかったと思う」

千景と違い、千歳は誰かを憎む事が出来た。誰かに想いを馳せる事が出来た。

ただ、それだけの違いだった。

「でも、今生きているのは、千景君です」

「ああ、千歳じゃない」

縁側の柱に手を置き、椿は、千景を見る。

すやすやと眠る、千景の寝顔を見る。

いつか、千景も、心の底から笑う事が出来たなら――

「♪」

「千景、なに、うたって、るの？」

皿洗いをする千景に、冬樹が聞いてくる。

「ん？ああ、俺もよくは分からねえんだ」

「そう、なの・・・？」

「ただ、奏さんが歌ってくれたって事だけだよ」

千景が洗った皿を、冬樹が渴いた布でふき取る。

「というか、お前まで手伝う事は無かったんだぞ？」

「いい。わたしが、やりたい、だけ」

冬樹は、皿を拭いていく。

「……なあ、もしかしてあの時の事でやってるならそれは余計なお世話というもので——」

「余計、でも、いい」

冬樹が、芯とした声で応じる。

「私は、ただ、償いと、恩返しが、したい、だけ」

そう、力強く言い返した。

それに千景は頭を掻きたくなる衝動に駆られる。

(絶対に二年前のキャンプが原因だよな……)

『キャンプって?』

ふと、郡が聞いてくる。

(ああ、二年前の秋にな……)

千景は、横目で冬樹を見る。

そこには、真剣に皿を拭く、冬樹の姿があった。

やがて、千景は思い出す。

千景にとって、最大の戦いの記憶を——

秋のキャンプ

秋――

そんな季節になってくると、夏の暑さも薄れていき、涼しくなってくる。

木にある葉は赤くなり紅葉となり、地面へと落ちていく。

そんな肌寒くなってくる季節に、千景の学校、主に学年である六年では、ある事が企画されていた。

「やっぱキャンプファイアーだよな！」

「さつきからそればかり言ってるよね？」

「鬼ごっこしようぜ！」

「いやこは――」

いわゆる、キャンプという奴だ。

近々、六年では近場の森へ遠足に行く事になり、さらに特別企画として一泊二日するというらしい。

というか、それがこの学校の伝統となっているらしいが。

そんななか、千景はその様子をつまらなそうに見ていた。

単純に興味無いのはそうだが、どうせ自分は行けないし、百合籠で職員たちにごき使われるのを想像していた。

とりあえず、学級委員が、黒板に生徒たちが言い合った案を書いていく。

「それじゃあ、この中でどれが良いか、手をあげて」

結果。

「それじゃ、今回のキャンプでは肝試しに決定！」

喜ぶ生徒もいれば、ええーと嘆く生徒もいた。

「と、いう訳でくじでペア決めよっか」

『早ッ!?!』

まるで分っていたかのように取り出されたくじの箱。

(相変わらず用意周到だな、うちの学級委員は)

呆れ半分で関心する千景。

まあ、自分には関係ない話だと思い、窓の外の景色を見る。

「それじゃあ、一人ずつ引いてね」

(さて、帰ったら何しようかね)

「はい」

「……これだ!」

「それじゃあ、今度は……」

(帰る前に椿さんとの空手の練習があるしな。まあ問題はないだろ)

「よし」

「次」

(そういや新作ゲームが出ていたな。おっちゃんに頼んで買ってもらおうか)

「とったよ」

「それじゃあ……お前だゴミ」

(まあどうせ皆いないんだし。早めに終わらせてしまえば……)

「……んん?」

そこで気付く。

いつの間にか自分のまえにくじの箱が突き出されていた。

顔をあげれば怖いぐらいにニツコリしている学級委員の顔があった。

「……引けと?」

「それ以外になにあるんだよ」

と、嘲笑うかのような含み笑いで千景を見下す学級委員。

「……」

まさか

——俺も参加するの!?

内心で驚いてしまう千景。だがよく考えてみれば、森に引き込んでしまえば一風変わった虐め方法を実践できるのではないのか?

そう考えてみると、なるほど参加しろというのは妥当だろう。

千景はそう勝手に合点してくじを引く。

「……五番」

そう呟いた途端、教室の空気が変わる。

いわずもがな、千景と一緒にペアになりたくないという一心でクラス心が一つとなっただろう。

まあ、予想していた事だが。

そうして、クラス全員がくじを引いた結果――

千景とペアを組む事になったのは――『水霜冬樹』だった。

「なぜ、よりもよって、あなたなんかと……」

一応、相手のペアを知っておけという事で顔合わせをする千景と冬樹。

しかし冬樹は、千景を親の仇とでもいうかのような眼で見ている。

実際、そうなのだが。

「変わって」

「無理な話だ」

「変われ」

「そんなに嫌ならお前が」

「もうやった」

「もうやったのかよ」

冬樹は、この街のいじめっ子の中で、唯一理由が最も理不尽な人物だ。

千景もよくは知らないのだが、なんでも、彼女の両親は警察官で、とある犯人を追っていたら返り討ちにあって、死んだらしい。

その時、その犯人と同伴していたのが千景の父親で、彼は謝罪した

みたいだが、当時五歳だった冬樹は理解できるはずもなく、自分の両親を見捨てたクス野郎という認識で千景の父親を目の上の仇にしているのだ。

ついでにその子供である千景も怨んでいる。全く持って迷惑な話だ。

しかし、理不尽故に、千景を虐めてくる者たちの中で理由が一番はつきりしている。

その点については、千景も彼女の事を苦手としていない。

むしろ歓迎しているといっても良い。

全く持つておかしな話だが。

「ううう・・・」

「睨み付けられても困るぞ・・・」

とてつもなく低い声で犬のように唸ってくる冬樹に、千景は思わず呆れるしかなかった。

とにかく、一泊二日のキャンプを、終始彼女と過ごさなければならぬ事が決定してしまった。

(まあ、上手く立ち回るほかないか・・・)
なるようになるであろう。

「遠足だど?」

「一泊二日、のですけどね」

「場所は?」

「近場の森。スケジュールとしては、肝試しにキャンプファイヤー、あと、自炊の為にカレーを作る事になっています」

「楽しそうじゃない」

「俺の立場がこんなじゃないですけどね」

神社にて。

最近、いきつけともいうかのように通う頻度が増している場所にて、千景は椿と奏にそのように報告していた。

「あの小学校の遠足といえは、私も千歳との思い出が懐かしいな。千歳の奴、以外とお化けが苦手らしくてな。肝試しの時の悲鳴といえは、もう可笑しくておかしくて」

あつはつは、と笑う椿。

「しかし、水霜の所の子とペアとは……」

「あいっただけ動機がはつきりしてるから、俺としては嬉しい限りですがね」

「貴方の感性、時々疑うわ……」

「水霜は、お前の父親、景矢と同じ警察官だったが、ある犯人の所為で死んだ、というのは知っているな？」

「ええ、それぐらいは……」

「さて問題だ。銃を持っている警察官相手に、その犯人は丸腰で立ち向かってきた。さて、この状況で、犯人はどうやって銃を持っている、それも三人もいる警察官相手に、どうやってその内の二人を殺せたと思う？」

「丸腰で、ですか？」

「ただの殺し方ではない。殴って内臓を破裂させるほどのダメージを負わせたうえで殺害だ」

「流石にそれには無理があるのでは……」

そこで、千景の言葉は止まる。

残っている魔器は、残り三つ。

その内二つは判明している。

唯一、椿と、千景の母である千歳が取り逃がした、二つの魔器。

その文字は、『燃』と――

「――『強』の魔器……」

「その通りだ」

椿は前のめりになり、手を組んで肘を膝の上に置き、その手に顎を乗せた。

「丁度良い機会だ。お前に、魔器『強』と『燃』の能力の概要について

話そう」

椿は、真剣に話を始める。

「まず、『燃』の能力だが、この能力は、そのまま文字の通り、『燃やす』という概念を操る。燃焼はもちろん、火炎放射など、燃やすに関係する事なら出来る。骨を燃やす、肉を燃やす・・・そう言った事が、奴には可能で、死体を完全焼却すれば、証拠もそうそうに残らない。いわば、完全犯罪も可能な能力だ」

「燃やす・・・それならば・・・」

「ああ、燃やす概念で出てくる炎その物は、天鎖刈の鎖で封じ込める事が出来る。問題なのは、相方の方だ」

「相方・・・それが・・・」

「そう。『強』の魔器だ」

椿は、組んだ手に入れる力が、さらに強くなる。

それに、ただならぬ理由があるのかと千景は推測し、息を飲む。

「『強』の魔器、その恐ろしさは、奴の至ってシンプルな能力にあるんだ」

「シンプルな・・・？」

そこへ、椿が口を挟んだ。

「『強』の能力は、『なよりも強く』よ」

「どういう意味なんですか？」

「そのままの意味よ。最初、奴は椿さんより弱かった。それも、いとも簡単に蹂躪されるほどにね」

「それならなぜ・・・」

「強くなったからよ。彼が、椿さんの攻撃を受けた数秒後には、椿さんよりも強くなっていたの」

「・・・!?!」

『強』

その能力は、前述した通り、『なよりも強く』なる事。

それは、ありとあらゆる『強さ』に関係するもので、例えば、自分

よりも強い敵と対峙し、その強さを実感する。

『強』の魔器は、その強さを感じると、使用者の精神に作用しつつ、使用者の肉体を急激に強化するのだ。

そして、やがてその強化された肉体は、肉体の限界を超えて、ありとあらゆる事象よりも強くなる。

それは、樁の拳よりも強い皮膚を作り出し、樁の拳打よりも強い攻撃力を生み出し、そして、樁の鋼のような皮膚よりも強い拳を創り上げる。

その強化は、肉体的及び物理的に留まらず、概念にも作用する。

全てを封じ込める『鎖』よりも強く。

全てを縛り上げる『鎖』よりも強く。

全てを閉じ込める『鎖』よりも強く。

この世のありとあらゆる強さ、概念、真実、現象。その全てを超越する為の『強さ』。

それが、魔器『強』の恐ろしさ。

「七年前。私と千歳は、『強』の魔器使いに敗北をきした。そして、その翌年に——」

「・・・冬樹の両親がソイツに殺された・・・」

「ああ・・・奴の片目と引き換えにな」

「・・・え？」

「ああ、いつてなかったわね。御神刀と魔器は、発動しててもそれなりの物理保護機能がついてるんだけど、それでも限度つてものがあってね。弾丸程度は皮膚に弾かれるんだけど・・・」

「唯一、ナイフとかでなら、人体で最も脆い目を潰す事ぐらいは出来るんだ」

「そうだったのか・・・」

つまり、そこらにあるナイフ程度なら、ある程度の抵抗は可能という事か・・・

「用途がよく解らん・・・」

「使っていけば、その内分かるわ」

「それで、千景は参加するの？」

「参加しなければ、色々と言われそうなんで」

「そうか・・・」

椿はもの悲しそうな表情になる。

「安心してください。いつもの事なので」

「それをいつもの事だと言っているお前が心配なんだ」

椿の言葉に、千景は分かっているかのように首を傾げる。

そして、改めて思う。

やはり千景はどこか狂っている。

百合籠に戻った千景。

早速ではあるが、冬樹に恨めしそうに睨まれた。

「・・・・・・・・」

「なんで帰って来たの？」

「いやなんと言われてもここしか来る場所ないし・・・」

「神社に住めばいいでしょ？」

「それじゃあ奏さんの家計が炎上するだろ考えろ」

「それ小学生の思考じゃない気がする」

「それは関係無いだろ!？」

と、こんな言い合いをしつつ。

「ペア変われ」

「だから無理な話だって・・・」

「出来ないなら死ね」

「辛辣だな・・・死なないけど」

「死んでしまえ」

「あー、そう・・・」

相も変わららず辛辣な言葉を投げかけてくる冬樹。

だが、その時、何かが勢いよく閉じられる音がした。

「おい・・・」

低いその怒声は、とある男子から発せられたものだった。

「夫婦喧嘩なら他所でやれ」

「夫婦じゃない」

その男子というのは、『浅羽海路』という少年だった。

直接的ではないにしろ、言葉攻めをしてくる。

「水霜、貴様の言葉如きでペアが変わる訳がないだろ」

「ぐ・・・」

「不道はさっさとどっかいけ、目障りだ」

「言われなくてもそうする」

「ならさっさと消えろ」

そう言って、海路は読書に戻る。

これでも運動は出来る方だ。

「それじゃあな」

「あ、まだ話は・・・」

「なんなら俺の部屋に来るか?」

「・・・いいい」

「ああ、そう」

そう言って千景はいつてしまう。

それに冬樹は。

「・・・チツ」

舌打ちをした。

自室に戻った千景は、ベッドに寝転がり、思案に暮れていた。

「……………」

母千歳と、椿が取り逃がした、『強』と『燃』の魔器。

その片方で、最も注意すべきは『強』。

相手が強ければ強い程、その強さを超えてくる、最強の魔器。それに、果たして自分は勝てるのだろうか。

「……………」

千景は考える。どうやったらそんな敵に勝てるのか。

やりようは、いくらでもある。

この役目が終わるまで、あと、三つ。

終わらせるには、全てに勝利しなければならぬ。

そのためには、何か、新たな力が必要だ。

ある程度のものであれば、見ただけでその構造を把握してしまう千景の洞察力を持ってすれば、千景は、天鎖刈の能力の隅々まで考察する事が出来る。

もし、その予想が本当であるなら……

「試してみる価値はあるかもな」

千景の声は、闇夜に溶けてゆく。

数日が経ち。

向かえのバスが来て、ある程度の荷物を持った子供たちがバスに乗り込む。

必要最低限の荷物しか持っていない千景は、その手に荷物を持ったままバスに乗り込む。

席は一番前。

ただ、二人並ぶ席である。

普通、誰もが千景の隣に座りたがらない。

が、それはバスの許容人数がぴったり収まった場合では、否が応でも座らされるのは必然だ。

その隣に座る奴というのが、冬樹だ。

「.....」

「.....」

なんとも気まずい空気が二人の間に流れる。

実は、肝試しのペアを決める際のくじは、この為のもの。

どうせなら誰が一緒の席に座るのかというのを同時に決める為のものだったらしい。

当然の如く、冬樹は猛反発。しかし、それで誰かが変わってくれるわけがなく、冬樹の意見は通らなかつた。

結果、千景と冬樹が一緒に座る事になったのだ。

ついでに、キャンプの際に使うテントも二人で使う事になっている。

はた迷惑な話だ。

周囲は向こうに着いたら何をやるかなどの話で盛り上がっている。
「……………」

その中で唯一無言を貫き通している冬樹と千景。
なんだろう。このままでは間が持たない気がする。

内心、物凄く胃痛がしてきている千景は、冬樹から発せられる嫌悪の悪意に苛まれている。

まるで犬に無言で圧力を掛けられている嫌われている飼い主の気分だ。

(はやくつかないだろうか……)

千景は早速、帰りたい気分になった。

キャンプ場に到着。

(や、やっと解放された……)

千景は近場の木に前のめりに寄りかかって深い溜息を吐いた。

病気ではない筈なのに、かなり腹が痛かった。

視線を向ければ、広場にてテントを設立している子供たちの姿があった。

それぞれ一生懸命にテントを張ろうとしている。

上手くできる者もいれば、そうではない者もいる。

しかし、このまま気に寄りかかっているのもよろしくない。

千景は仕方が無く、冬樹がテントを広げているであろう場所に向かったが――

「……………何してるんだ？」

「……………」

そこには崩れたテントの下敷きになっている冬樹の姿があった。

とりあえず抜け出せないようなので、助ける。

「・・・別、に、一人で、抜け、出せた」

「いや、足が引つかかかってたから一人じゃ脱出なんて・・・」

「うる、さい。そこで、みてろ」

彼女の独特な喋り方で告げられる辛辣な言葉に、千景は頭を抱えたくなる。

どうにもこの冬樹の事だけは苦手のようだ。

それはともかく。

Take 1 再度組み立てようとしたら石に躓いて、後ろへ組み立て前のテントと共にすてーんと派手に転んだ。

Take 2 落ち葉に足を取られてパーツをぶちまける。

Take 3 張られた鉄のパーツが跳ねて冬樹の額に直撃した。

Take 4 栗が落ちてきた。それによってテントが脆くも崩れ去る。

Take 5 どうにか骨組みを完成させたが、いざビニールを掛けようとしたらネジを一本つけ忘れて一瞬にして崩れ去った。

「・・・」

あまりにも酷過ぎる。

完成一步手前というところで崩れ去ったテントの残骸を黙って見る千景と冬樹。

しばらく沈黙が続いた後、不意に嗚咽が聞こえた。

「・・・ふ、ふえ・・・」

(泣いた!?)

なんと冬樹が涙を流して泣き始めたのである。

「うええくん・・・」

「あああ!?!泣くな泣くな!」

慌てて荷物からハンカチを取り出して涙をふき取る千景。

「ッ!」

「うお!?!」

しかし冬樹はそれを振りはらう。

「余計、な、お世話・・・!」

「いや余計と言われてもお前ない……」

「ないて、ない……」

あからさまな拒絶。

それに千景は肩を落とす。

振り返って、千景はテントの残骸に目を移す。

「……仕方ない」

ここでどうとう千景はテントの設置に手を出す。

「あ、お前……」

「流石に見てられない」

そう言って、千景はテントを組み立て始める。

骨組み、および、釘を地面に刺していく。

その手際の良さに、冬樹はただ茫然と見ていた。

やがて、千景一人でテントが完成する。

「よし、こんなものでいいだろ……んん?」

振り返って冬樹を見た千景の言葉が唐突に止まる。

そこには、さらに目尻に涙をためて、頬膨らませてこちらを睨み付けてくる冬樹の姿があった。

「……!!」

「いや、なんでそんなに……」

「わたし、ひとりで、できた……!」

ああなるほど、と千景は理解する。

ようは、彼女なりの意地なのだろう。

そこを千景が横からずけずけと余計な事をした所為で彼女のプライドに傷をつけてしまったのだ。

「……すまない。そんなつもりは無かったんだ」

「くちでは、なんとも、いえ、る……!」

抑えきれず流れ出る涙に、千景は頭を抱えなくなる。

どうすれば泣き止んでくれるのだろうか。

これ以上は、流石に彼女のそっち名譽的じやないにだまらずい。

「あー!千景が冬樹が泣かせてるぞ!」

「サイテー!」

とうとう他の生徒まで知られた。
いや、そこはどうでも良い。

今はとにかく、冬樹の涙を止めなければ――

「ツ!!!」

(逃げたア!?)

どこかへ走って行ってしまおう冬樹。

それに唾然としてしまおう千景。

が、その間に誰かに肩を掴まれてしまう。

ゆつくりと振り返れば、そこには悪い笑顔を向けてくる信也を筆頭とした虐めグループがいた。

「ちくかくげ〜」

「.....」

もはや殴られるのは回避できない。

午後三時。

椿は、久々の休暇を家で過ごしていた。

ただし、休暇といっても、立てた太い丸太に向かって拳を打ち込むという鍛錬を行っている。

「セアッ！」

気合の一言と共に、殴り続けてへこんでいる丸太のへこみ部分の中心に拳を叩き込む。

「ふう……」

ノルマをこなし、椿は休憩に入ろうと縁側に向かう。

そこでは、優が本を読んで座っていた。

「お疲れ、お母さん」

「うむ」

優の隣に座る椿。

「最近、千景とはどうだ？」

「うん。学校で、良く会うんだ」

「そうか」

「この前ね。千景さん、図書室で本を読んでいたんだ。その本がね、怪談ものでね。あんな本も読むんだなって思っちゃった」

「そうか」

優が、ここまで話してくれるようになったのは、一重に、千景のお陰だろう。

以前までの優だった、ここまで楽しそうに話しはしない。

（千景には、感謝しなければな）

そう、心の中で思う椿。

ふと、そこへ。

「椿さん！」

視線を向けると、塀の向こう側から奏が焦った様子でこちらを見ていた。

「どうした？奏」

「大変なんです！少し耳を貸してください！」

「……？」

椿は、訝し気に奏の方へ歩み寄り、耳を寄せる。

」
そして、奏は椿に告げた。

「……なんだと？」

「すみません。私も連れて行ってもらえませんか？」

「分かった。すぐ行こう。少し待て」

椿は家の中に入ろうとする。

「すまない優、少し急用が出来た」

「神社でのお手伝い？」

「その通りだ」

「頑張つてね」

「ああ」

椿が中に入り、来ていたアンダーウェアの上にジャケットを着用して外に出る。

「いってくるー！」

「いってらっしゃい」

優は手を振って椿を見送った。

その一方で、椿と奏は走る。

「本当に、奴らが・・!？」

「はい！目撃者の話しでは、奴らの容姿と同じ男二人が、千景君のいるキャンプ場の近場の森に入っていたそうです！」

「ならば急がなければ・・・!」

椿が、脇差の刃を引き抜く。

「——『陸鎧布』ツ!!」

その姿を、バンカラな姿へと変える。そして、奏を抱え、飛び上がる。

到着まで、おおよそ二時間。

「お願い・・・間に合って・・・!!」

奏は、椿の腕の中で、そう懇願する。

人気の無い森の中で、夕焼け色の空を見上げる千景。

その体は殴られた事によってボロボロで、ナイフでつけられた切り傷が、新しく出来ており、血が滴っていた。服もズタズタだ。

「……うん。着替え持ってきていて正解だったな」
いやそこも問題だけどさ
備えあれば患いなしとはこのことだ。

千景は何事も無かったかのように起き上がり、土を払う。

「冬樹は戻ってるかね」

「まだ戻ってきてないわよ」

ふと、いきなり誰かの声が聞こえた。

「白露か」

そこにいたのは白露だった。

「どうした？こんなところで？」

「別に、様子を見に来ただけよ。その様子じゃ、問題無さそうね」

「ああ。慣れてるからな」

なんでもないかのように答えた千景は、白露の横を通ってキャンプ場へ戻り始める。

その後を白露もついていく。

もう日没。時刻としては、五時かその辺りだろうか。

「そろそろキャンプファイアーを始める頃よ」

「そうか」

「荷物、隠した方がいいんじゃないかしら？」

「それについては抜かりはない」

「あ、そう……」

それについては問題はないようだ。

しかし、やはり白露は、中々ある一言が言えない。

(なんで……)

お礼が言えない。

否、彼に対しての労いなどの言葉が言えないのだ。

この間、千景が年下の少女と話しているのを見た事がある。しかし、彼女は、どういう訳か彼と楽しそうに話していた。まるで、何かしらの枷が無いかのよう。

その事実には、白露は苛立ちを募らせていた。

しかし、その苛立ちの解消方法は、千景を殴る以外思いつかない。

「白露、どうした？」

「え……」

「なんか悩んでいるようだが……」

千景は、心配そうに白露の顔を覗き込む。

それに、白露は思わず千景をどついてしまう。

「うお……!?!」

「あ……」

その事に、白露は、後悔する。

だが、口は謝罪とは全く別の事を告げる。

「か、顔を近づけるな……」

「そうか……すまない」

千景は、しゅんとなったように謝った。

違う、そうじゃない。謝るのは――

「ツ!!」

「あ、おい」

白露は、千景の脇をすり抜け、去っていく。

「……?」

それに千景は首を傾げつつも、気にせず歩き出す。

やがて、キャンプ場に到着し、自分で設立したテントに戻る。

ことのほか、テントには手を出されていなかった。

おそらく、冬樹も、とうか冬樹が使うからだろう。

そこで、ふと千景は冬樹がいない事に気付く。

周囲を見渡しても、冬樹独特の薄い青髪を見かけない。

「どこいったんだ？」

そう思うも、すぐに戻ってくるだろうと、千景は一人早合点し、木

に寄りかかって、ついさつき来た眠気に身を委ねて、そのまま意識を沈めた――

だが、千景であっても、予想は出来なかつただろう。

「おー、やってるねえ」

一人の男が、崖の上から、夜なのに明るい場所を見下す。

そこは、現在千景の学校の六年たちが、キャンプファイアーをやっている場所だ。

かなりの距離があるが、そこからでも、子供たちが楽しんでいるのが見える。

しかし、彼が聞きたいのは、その声じゃない。

「そんなちっぽけな炎じゃ楽しめないっしょ」

男の手にはライター。

「もっとすげえものを見せてやるよ」

次の瞬間、男は、その手に――『燃』の文字を顕現させた。

絡久良市に存在するこの森は、水霜冬樹にとっては、両親との思い出の場所だった。

よく、車でこの森に連れてきてもらい、キャンプをしたり、虫取りをしたりした。

その中で、唯一見つけたのが、峠の上にある洞窟。

見晴らしが良く、穴はそれほどまで深くない程の穴だった。

なんの拍子に出来たのかは知らなかったが、冬樹にとっては、そこは、秘密基地みたいなものだった。

「ひぐ……えぐ……」

冬樹は、泣いていた。

ただただ、寂しくて泣いていた。

テントは、いつも父が建てていた。料理は、いつも母がやっていた。故に、冬樹は、アウトドアグッズを使う事も、家事すらも出来ないのだ。

ただ、それが両親の愛情だと思って、甘えていた。

そのツケが、これなのか。

よりにもよって、あの恥晒しの男の息子である千景に、何もかも先を越されている事実が我慢ならなかった。

何故、自分には出来なくて、彼には出来るのか。

何故、彼はなんでも出来て、自分は何も出来ないのか。

何か、出来るとしたら、それは剣道。

父と母のように強くなりたくて、武道の道に進もうと思って、始めたものだ。

ただただ一心不乱に振って、だんだんと強くなって、道場で誰にも負けない強さを手に入れて。

ただそれだけの事しか出来ない。

なのに、彼はなんでも出来た。

それが、悔しくて悔しくて、そして、寂しくて、涙が溢れてくる。

「おと、さん・・・おか、さん・・・」

両親を失ったショックで、上手くしたが動かなくなった口で、両親の名を呼ぶ。

そんな風に縮こまっていると、不意に、周囲が明るくなった事に気付く。

「・・・え？」

顔を上げれば、そこは――

「ッ!!!」

首を絞められる感覚。

それに千景は思わず顔をあげ、立ち上がる。

そして、遙か彼方の空を見上げた。

その様子に、隣の本で本を読んでいた海路が気付く。

「どうした?」

千景の様子から、何かを察した海路が聞いてくる。

だが、千景は答えない。

海路は、千景の見る空を見た。

「……………どうなってやがる……………!?!」

空は、赤に染められていた。

日は落ち、空は月夜に照らされる。
しかし空はなおも明るいまま。
その理由は――

「さあ、楽しめよ」

一人の魔器使いの仕業だった。

「山、火事……?」

冬樹は、信じられないとでも言うように、その光景を見ていた。

まず、炎があがっているのは分かる。

だが、それが、まるで意図的に燃やされているかのように円を描い

ているのだ。

冬樹のいつ峠を含め、キャンプファイアーの炎を中心に、まるで逃げ道を囲うように、炎があがっていた。

「なにが、どうなって……」

ふと、そこで背後から足音が聞こえた。

(え……)

振り返る。

そこにいたのは、マントを羽織り、そのフードで顔を隠している男だった。

「ああ？」

ふと、男が何かを呟いた。

「なんだよ。ここにも生きのいいのがいるじゃねえかよ」

男の、嬉しそうな声。

その瞬間、風がまいあがり、男のフードがなびき、その顔が露わになる。

『——今回の事件で、二人の警官が殉職する事となった原因である犯人は——』

息が、止まる。

『——交戦の際、左目を負傷しており——』

風になびき、脱げたフードかた、覗いた素顔が――

『――今もなお、逃走を続けているとの事です』

あまりにもテレビで提示された犯人の写真に似ていた。

「パパツ……ママツ……!!」

絞り出すように、出した声。

次の瞬間、男の口角が吊り上げり、その手に持つメリケンサックが光り出す。

その光は円を描き、その中に『強』の文字を露わにする。

男の姿が代わり、シンプルなタンクトップとミリタリーパンツとなり、その筋骨隆々な体格を露わにした。

そして、男が拳を振り上げて――

「――血イ、見せろ」

――一気に振り下ろした。

地面が陥没し、砕け散った地面の破片が飛び散り、粉塵を巻き散らす。

しばし、止まる男。

「……なんだよ」

男は、嬉しそうに笑う。

そして、視線を別の方向へ向けた。

そこには――

「もつと生きがいいのがいるじゃねえか」

罪人のような白の装束を来た千景が、冬樹を抱えて男を睨み付けていた。

戦火炎上の戦い

数分前。

キャンプ場はパニックに陥っていた。

「火事だああ!!」

「どこに逃げればいいの!?!」

「炎で囲われちゃってるよー!」

「先生助けて!」

誰が言ったのか山火事だと叫び、それを理解した生徒たちが、一斉にパニックに陥って、泣いたり叫んだり暴れたり、もはや教師たちだけでは収集がつかなくなっているのだ。

しかし、今更大騒ぎしたところで、あまりにも早く火の手が回って逃げ道を塞いでいるのだ。

死を目前にパニックにならない方が可笑しい。

教師陣は、生徒を落ち着かせるためにどうにかなだめようとしているが、教師であつてもやはり半ば混乱している。

このままでは、血迷って火に飛び込む生徒も続出するかもしれない。

そんな事態を——この少年が許す筈がなかった。

「落ち着けッ!!」

そのあまりにも大きく、響く声が、一瞬にして生徒たちのパニックを止めた。

同時に、竦みあがる。

「わーぎゃー叫ぶなッ!!そんな事をしてても火が広がるのを待つだけだッ!!」

その声の正体は千景だった。

「先生たちはまず消防車を呼べッ!!!生徒はとにかく煙を吸い込まないように口にハンカチを当てろ!燃える物を木に近付けず、なるべくそれから離れるようにしろッ!つねに周りを意識して、火が収まるのを

待つんだッ!!火は燃えるものが無ければ自然に消える!!それまで辛抱強く待つしか生き残る方法は無いつ!!」

千景の言葉に、啞然とする周囲。
それにイラついた千景が、すぐさま次の言葉を叫ぶ。

「今すぐ動けッ!!!死にたいのかッ!!!」

その言葉に、周囲は慌てて動き出す。

それにとりあえず安心したかのようにため息を吐く千景。

そして、千景は踵を返してどこかへ行こうとする。

「どこに行くの!?!」

そこで呼び止める声があった。

白露だ。

その声に、千景は止まる。

「……………今回の山火事は、俺でないと解決できない」

「……………そう」

「お前は、皆と一緒にいろ。俺は、どうにかして火の手がまわらないようにする」

「……………分かった」

白露は、それ以上なにも言わず、生徒が固まっている所に行く。

それを肩越しに見送った千景は、懐から刀を取り出し、その刀身を露わにして叫ぶ。

「————『天鎖刈』ツ!!!」

叫び、その姿を白い装束に変える。

そして走り出し、ある程度のところまで進んだところで、鎖を出現させる。

『封印縛鎖』『炎上』『進行不可』

鎖を、まるでポリステープのように木々に縛り付ける。

炎上の概念を封じ込め、炎があがらない様にしたのだ。

「これで、「応火は行かない……………次は……………」

そこで千景は、一旦戻って、避難がどこまで進んでいるのかを確認

しに戻る。

木の上で、避難状況を確認する。

どうやら教師や学級委員が先導したお陰である程度まで完了しているようだ。

このままなら、しばらく持つだろう。

ふと、女子の会話が耳に入った。

「ねえ、冬樹ちゃんはどこ？」

「え？知らないよ」

「そんな…どうしよう、まだこの火事に気付いていなかったら…」
それを聞いた千景は、血の気が引くような感覚を覚えた。

(俺の所為だ…!!)

あの時、彼女を泣かせていかせてしまったから、彼女は――
魔器の反応は二つ。

片方は、一番初めに火の手があがった方向から。

もう片方は、ここからでも見える、峠の方向から。

そして、峠の方から来る、鎖の締め付け方は、これまでにない程に強いものだった。

もし、この反応が正しいものなら――

「ッ!!」

ここは風潰しに動くしかない。

最悪、彼女が襲われている可能性がある。

(間に合ってくれ…!!)

鎖によって機動力を確保し、新幹線並みのスピードで、千景は急いだ。

「うくん、以外と対応が早いな」

この火災の犯人である『阿良々木城谷』あららぎじょうやは、あまりにも早い生徒たちの対応に、城谷はつまらなそうに呟いた。

「これじゃあ楽しめねえじゃねえかよ……あ、そうだ」

城谷は、手を振りかざす。

「火の勢い強めちまえばいいんだ」

次の瞬間、生徒たちを囲う火の勢いが急激に強まった。

その炎は瞬く間に生徒たちに迫る。

その様子に気付いたらしい生徒たちが、一斉に悲鳴をあげる。

そのまま、火は生徒たちを襲うが――

「……は？」

それ以上、火は進まなかった。

火は、おおよそキャンプ場から三十メートルの時点で止まっていた。

「どうなって……!」

そこで、城谷は気付く。

この炎の止め方は――

『アイツ』は死んだはずだ……!!」

信じられない、と思うが、逆に城谷は想う。

「く、くく……いいぜ。なら、その概念、灰一つ残さず、燃やしてやるよおおおお!!」

炎が、猛る。

まるで火柱のように炎が舞い上がり、千景の結界を燃やし尽くさんと、猛る。

鎖は鉄。熱せば、やがてその鉄は溶けていく。

その認識の元、城谷は炎の勢いを強め、文字通り鎖を燃やすつもりなのだ。

炎が勢いがあまりにも強くなり過ぎた事で、生徒たちが悲鳴を挙げる。

「アハハハハ!! そうだ、もっと恐れろ! もっと叫べ! 俺にその悲鳴を聞かせるッ!!」

まさしく、愉快犯。

その犯行動機は、悲鳴が聞きたいから。人が燃える時、まるで狂ったように踊り、叫び、それが可笑しくて楽しいからだ。

「燃えろー！燃えて悲鳴を聞かせろー！悲鳴を聞かせてくれよッ!!」

このままでは、鎖が焼き切れる。

そうなったら、キャンプ場にいる生徒や教師たちが一気に燃えてしまふ。

「アハハハッ!!」

城谷は笑い声をあげる。

だが——突如として城谷の上から襲い掛かる者がいた。

「ッ!」

それに気付いた城谷は、炎の操作をやめて、大きく飛び退く。

その者は、拳を振り上げており、空振ったその拳は地面を殴り碎いた。

それを見て、城谷は悟る。

「ああ、以外と早かったな、安座間椿」

「久しぶりだな。阿良々木城谷」

城谷を睨み付けるのは、バンカラ衣装に身を包んだ、椿だった。

「悪いが邪魔しないでくれよ。今良い所なんだからよ」

「そうはいかない。お前はここで倒す」

「ちえ、あー嫌だ嫌だ。人の嫌がる事はするもんじやないぜ?」

「どの口が言う」

構える椿。

「おいおい、もう少し話し合おうぜ?」

「悪いが、そうはいかない。早急にお前を倒す」

「せっかちなな・・・まあいい」

いきなり、城谷の両腕から火が燃える。

「こいよ。バーサーカー」

「言われなくてもッ!!」

地面を蹴り、椿が城谷に殴りかかる。

その様子を、近場の木に隠れて見ていた奏は、戦闘の開始と共に、森の方を見る。

炎の急激進行によって、火があまりにも大きくなりすぎている。これでは、まともに避難する事など出来ないだろう。

さらに、魔器の力が干渉していない所まで燃えているために、早急にあの魔器使いを倒さなければ、間違いなくこの森は焼け野原となってしまうだろう。

今の所、キャンプ場の方へは、おそらく千景が張ったであろう鎖の結界が機能して、火が回らない様になっているが、先ほどの大炎上のせいで、その結界が解けかかっている。

自動的に解除されるのも時間の問題だ。

「椿さんに、任せるしか……」

ここで、『燃』を破壊すれば、火は全て消える。魔器が現在進行形で引き起こしている事象は、魔器使いの任意か、あるいは、魔器その物が破壊されれば、すでに終わった後でなければ、全て消え収まる。

だが、すでに破壊されていた場合は、残念ながら元に戻る事は無い。

「……」

奏は、拳を握りしめる。

彼らに情報を提供する事しかできない自分が、今、とても情けないと思っっているからだ。

その時、大きな音が響いた。

「!？」

そちらに目を向ければ、そこには、峠の崖の上から大きな土煙が舞い上がっていた。

あまりにも遠いので、何が起きているのか分からない。

だが、もし、自分の予想が正しければ。

「千景君……」

奏は、心配そうにその名を呟いた。

千景が、冬樹の所に辿り着いたのは、あまりにもギリギリなタイミングだった。

「ぐ……」

冬樹を襲う男の拳が背中を掠ったが、それでも、その男の拳があまりにも高威力で、携帯が壊れた音がした。

だが、それでも、冬樹を助ける事が出来た。

携帯なんぞ、後でいくらでも買えばいい。

「ち……かげ……なんで……」

「お前を助けに来た」

千景は、背後でへたり込んでいる冬樹の質問に短く簡潔に即答した。

「ハッハッハ、その装束、誰かに似てるかと思ったら、そうかあの女のか！」

一方で、男が愉快そうに笑っていた。

「母さんの事か……?」

「ああ。あの女には随分としてやられたぜえ。鎖で殴られたり斬られたりしたけどよお。なかなか楽しめたぜ?というかお前、あの女の子供か?」

それを認識した男の口角がさらに吊り上がる。

「じゃあ、お前もあの女と同じように楽しめるって事だよなア!!」

男が動き出す。

その瞬間、千景の直感が告げる。

——今動かないと死ぬ。

「ッ——!!」

「きゃ!」

すぐさま千景は冬樹を抱えて、脚に力を込める。

次の瞬間、男が、瞬き一つすら長い速さで千景に迫った。

「ツア——!!」

同時に、千景は地面を蹴って冬樹を抱えたまま峠の壁に向かってジャンプ。

男の拳が地面を抉る。

そのまま千景は峠の壁を蹴った男の背後に回り込もうとする。

「速さはなかなか——!!」

「なッ!」

だが、男は千景にすぐさま追い縋ってきた。

その拳が、千景を捉える。

どうにか、片手で鎌を突き出し、その一撃を防ぐも重く、吹き飛ばされて地面に叩きつけられる。

冬樹は、どうにか抱えて死守する。

「がは!」

「ッ・・!?!?どうして私を・・・わ!」

千景は、地面に叩きつけられるなり冬樹を自分の後方へ投げた。

「オラオラどんどん行くぞオ!!」

その理由は、すでに男が迫ってきているからだ。

『封印縛鎖』『作用半作用の法則』『慣性の法則』『筋力制限』『物理的移動』ツ!!!

四つの概念をまとめて男に縛り付ける。

「おおっと!」

男が縛られ、派手にすっ転ぶ。

「おお、いいねえ・・・。だけどなア・・・。」

千景が、男に鎌を振り上げる。

だが、その一撃は、何故か動いた男の手によって止められた。

「な・・・!?!」

「俺の魔器の前じゃ、無意味なんだよッ!!」

作用半作用の法則は、互いに互いの衝撃によって全く反対の方向に動く法則だ。

手を地面に押し当て、地面に向かって力を加える事で、逆に自分の体を浮かせるための力が働くのだが、その概念を封じられた事で、本当なら男は立ち上がれない。

その上、筋力を極限にまで制限されているため、千景の鎌の一撃は、防ぐどころかつかめない筈なのだ。

だというのに、男は、何事のなかったかのように立ち上がり、あるうことか、千景ごと鎌を片手で持ち上げた。

そして、そのまま千景を地面に叩きつけた。

「がはっ・・・!?!」

正面から叩きつけられた。

「ほら、立てよ」

男が、挑発してくる。

この男、名を『御門弦哉』みかどげんやと言う。

その犯行動機は、血が見たいから。

血が噴き出す瞬間が、非常に興奮するというサイコパス。

その為に、体を鍛え、殴る事によって噴き出る血が見たいのだ。

「ぐ・・・うう・・・」

立ち上がる千景。

その千景に向かつて、弦哉が蹴りを放つ。

千景は、あろうことか前に跳び、その蹴りを回避、避けた所で受け身を取りつつ転がり、また弦哉の方を見る。

「おせえ!!」

だが、いつの間にか、一回転してきた蹴りが千景の顔面を捉えた。
「が・・・!?!」

あまりにも速過ぎて予想外な攻撃に、千景は対応しきれずその一撃を貰う。

吹き飛ばされるも、持ち前の精神力で千景は意識が吹き飛ぶのをこらえ、どうにか弦哉を視界に捉える。

弦哉は、まだまだ千景に攻撃をしかける。

「オラオラオラア!!」

「ぐッ・・・!」

拳の乱舞に千景は防戦一方になる。

鎌のリーチ上、懐に入られれば弱い。

「どうしたどうしたア!?!その程度かあ!?!」

「ぐッ・・・!!」

恐ろしいまでのラツシュに、千景は、僅かに出来た隙を縫って弦哉の懐に飛び込んだ。

「ああ!?!」

それに目を見開く弦哉。しかし、一方の千景も、この距離では鎌を思うように振れない筈。

だが、千景が振りかぶっているのは、鎌ではない。

『鉄鎖甲』

千景の右拳に、鎖が巻き付いていた。

鎖を使い、腕を強制的に動かす事によって、強力無慈悲な拳の一撃叩き込むつもりなのだ。

「椿さん直伝、正拳突きッ!!!」

恐ろしい程に綺麗に決まった、千景の正拳突き。

その一撃は、弦哉の鳩尾に決まり、その衝撃は、背中へ突き抜ける。

(どうだ・・・!?!)

千景は、確かな手応えを感じる。
だが。

「ハハ・・・ハハハ・・・アハハハハハハハッ!!!」

弦哉が、高笑いをする。

(効いて・・・ない・・・!?!)

その事実にも、驚愕する千景。

次の瞬間、千景の腹に弦哉の拳が叩き込まれていた。

「が……あ……」

それは、あまりにも重く、重く、何よりも重く、そして、速過ぎた。男のアツパーカットが、千景を天高く突き上げる。

そして、そのまま千景は冬樹の後ろに落下する。

「千景……!?!」

「が……あ……」

口から僅かばかりの血を吐き出す千景。

「ほう、ギリギリの所で鎖で威力弱めたのか。いいねえ、その方が面白い」

弦哉が笑う。

「もつと、もつと来い。それで血を俺に見せろよ。なあ、もつとだ。俺は血が見るのが好きなんだよ」

(くっそ、以外と重くて、すぐに動けない……!?)

千景は、あまりにも重い一撃に、体が動かなかった。

弦哉が近付いてくる。

「ほらほらあ、まだまだやれるだろ?」

にたりと笑って歩み寄ってくる。

千景は、どうにか立ち上がろうとするが、あまりにもダメージに腕に上手く力を入れられない。

その時、弦哉の額に、小石が当たる。

「ああ?」

そこにいたのは、冬樹だった。

「ふゆ……き……?」

「そうやって……」

冬樹は、震えていた。それでもなお、冬樹は、叫んだ。

「そうやって、パパとママを殺したのか!?!」

「ッ!!」

それで千景は気付く。

この弦哉は、冬樹の親の仇なのだ。

「ああ……?」

その問いに、弦哉は一瞬怪訝そうな顔をするが、すぐに、ある事を思いついたようだった。

「お前・・・まさかあのポリ公どもの子供か!？」

その顔が、歓喜に歪む。

「おいおいおい子供がいるなんて聞いてねえぞ！そうかそうかお前が俺の眼を獲りやがったあのポリ公のガキか！アハハハ!!」

弦哉は、天に向かって高笑いを上げる。

「嬉しいぜえ。初めて俺に手傷を負わせた人間はお前の親が初めてだったよ！だけどなあ、いささか力が足りなかった。だが血を巻き散らして死んだと思ったらいきなり銃を向けて目を撃たれた時は流石に焦ったぜ。思わず止め刺しちまったぜ」

愉快そうに語り出す弦哉。

その様子に、冬樹は唾然とする。

「驚いたぜえ。泣き言どころか悲鳴の一つもあげなかったんだからよお」

楽しそうに、

「あれはすげえ。腕もがれても内臓壊されても、それでも向かってくるんだからよ」

愉しそうに、

「それが面白くて面白くて、ついつい本気でやっちゃまったよ」

本当に、面白そうに、

弦哉は、嘲笑っていた。

その表情に、冬樹は――

「・・・ひぐ・・・」

泣いた。

冬樹は、周囲が思っている以上に、泣き虫だ。

普段は無口で、強気にふるまっているが、それは、ありがちな弱い自分を隠すためのフェイク。

本当の彼女は、自身が認める、泣き虫。

今まで、親に守ってもらってきた反動か、彼女は、弱かった。

「丁度良い」

弦哉が、拳を振り上げる。

「お前も、血い見せろよ」

ニヤア、と弦哉の口角が吊り上げる。

そして――

「あのポリ公と同じようになアツ!!!」

「ひっ……!!」

拳が、冬樹に振り下ろされた。

粉塵が舞う。

冬樹は、目を閉じたまま。しかし、すぐに来るであろう、衝撃は来なかった。

眼を開けば、そこには――

「ツ――無茶……するな……!!」

鎌で拳を防ぎ、鎖で弦哉の体を縛り付けた、千景がいた。

「ちか……げ……」

冬樹は、その名を呼ぶ。

「そして……泣くな……!!」

千景は、鎌を押し出し、弦哉を下がらせる。

「おおっ!?!」

たたらを踏んで後退する弦哉。

それに、にいつと笑う。

「そここなくつちやな」

弦哉が笑う。

「ちかげ……」

「お前の親、泣き言言わなかったんだろ」

「え……?」

「だったら、お前も泣くな」

千景は、振り向いて冬樹の頭を撫でる。

「どれほど辛くても、お前の親は、最後まで泣かなかった。お前も、そんな親の娘なら、その涙拭いて、勇気を出せ」

冬樹の頭から手を離し、鎌を構える。

「来いよ」

「へ、言ってくれるじゃねえかッ!!」
弦哉が襲い掛かり、千景が、それを迎え撃つ。

城谷が拳を椿に突き出す。

椿はそれを僅かに体をずらす事で回避。

すかさず城谷の蹴りが顔面に迫り、それも回避。

そこから、城谷のラツシユが続くが、椿は、それを受けもしなければ触れもせずに回避に徹した。

それはなぜか？

燃えているからだ。

城谷の文字の概念は『燃』。

ありとあらゆるものを燃やす、燃烧の力。

その力は、たとえ椿の鋼の肌でも防ぐ事は不可能だ。

その力は、外側から焼くのではなく、内側から焼くものだから。

その所為で、椿は城谷の攻撃を避けざるを得ないのだ。

「オラオラどうした？その程度か？」

城谷がラツシユを繰り出しつつそう言ってくる。

それに対して、椿は至って冷静に回避に徹している。

「早く俺を倒さねえと、あの鎖、切れちまうぜ？」

「言われなくとも……」

そこで椿が動いた。

「ッ——!!」

「そうするさ」

ここで椿が反撃に出る。

城谷のラツシュを掻い潜り、懐に潜り込んで拳を引き絞る。

だが、その瞬間、城谷は自らを燃やした。

「ッ!？」

「——つぶねえ!!」

椿は驚き、突き出した拳をギリギリのところまで引っ込める。

「ふう、あぶねえあぶねえ。危うく殴り飛ばされるところだったぜ」

城谷がそう言う。

一旦距離をとった椿は、再度構える。

「お前対策に開発した『炎状鎧』えんじょうがひっていう技でな、接近できねえように自動で発動する仕組みになってる」

その言葉に、椿は僅かに眉を寄せる。

「へへっ、どうした?これじゃあ手も足も出ないだろ?」

嘲笑うかのように、顎をあげて椿を見下す城谷。

なるほど、確かに、近付かれた瞬間に自動で発動するなら、近接攻撃しか出来ない、ましてや武器ではなく、徒手空拳でとなると、拳を振り抜いた際に拳を焼かれるのは必至。

これでは、攻撃は出来ない。

そう、攻撃は——

「……なるほどな」

椿は、口を開く。

「ん?」

「確かに、いくら私の自動反撃オートカウンターの速度をもっとしても、その炎に焼かれてしまうだろう。それに私の文字の概念は『布』お前とはあまりにも相性が悪いともいえるだろう。だが……」

椿は、両拳を腰に当てる。

「お前は知らないだろうな。魔器と違い、御神刀には、第二段階が存在する事を」

腰を落とし、椿は、力んだ。

「なんだと・・・!?!」

「お前たちを取り逃がした時には出来なかった。そして、千歳も救えなかった。だが、今は、違う」

椿の足元に輪が現れる。

そこに描かれているのは、『布』。

「今を生きる者達のため、そして、千歳と景矢が残した千歳を守る為に、私は今、『呪い』をその身に受けよう」

輪から、黒い煙が——瘴気が巻き散らされる。

「覚悟しろ。これが私の『真解』だ」

椿の『布』が黒く染まる。

『真解』

それは、御神刀に秘められた、『第二の文字』を解放した力。

二重に重ねられた文字は、意味を明確にし、その力を強くする。

椿に与えられた『第二の文字』は『呪』。

その文字を与えられた『陸鎧布』は、その名を、別のものへと変えた。

その名は——

——『呪装滅布』

バンカラ衣装は消え、巻かれていた布は深淵の如く真つ黒になり、それが、肩の除いた上半身の殆どに巻かれ、顔半分にまで巻かれ、下半身には道着のような黒いズボンが履かれ、足にも包帯が巻かれていた。

その姿は、まるで呪われた存在のようだった。

「.....」

その姿に、城谷は絶句する。

しかし、そうしている間に椿は腰を落とす。

そして拳を引き絞り、地面を蹴り、一気に城谷に接近する。

「ッ!？」

そのあまりの速さに、城谷は一瞬、目を剥き、すかさず『炎状鎧』えんじょうがいを発動させる。

この高温の炎の中に拳を突っ込めば、骨まで焼かれてしまう。

しかし、椿はそれすらもお構いなしにその炎の中に右拳を突っ込んだ。

次の瞬間、椿の拳は——城谷に腹に突き刺さった。

「げぼあ!？」

城谷は、体を曲げて吹き飛ばされる。

木に叩きつけられ、腰を地面に降ろしてしまう。

「げほっ、ごほっ……て、ため、何考えて——」

顔を上げたところで、絶句する。

そこには、今もなお健在な椿の姿があった。

右手は、焼け落ちていなかった。

「なん……!？」

「この程度の炎、私にかけられた呪いに比べれば、どうってことない」

椿は、なんでもないかのように、拳を持ち上げた。

椿の『呪装滅布』は、二文字同時使用の代償として、『使用している間は呪いに体を苛まれ続ける』という効果を及ぼしている。

その痛みは、常人が受ければ必ず発狂してしまうほどの痛みだが、椿はその痛みに耐えていた。

さらに、呪いによつて瘴気が体の内に急激に溜まり込み、負の感情の奔流に精神も振り回されてしまう。

だが、椿はそれすらも抑え込んでいた。

そして、その見返りとして、椿は、通常の数倍の身体強化に加えて、布の強度が上がり、もはや『燃』の能力では椿は燃やせなくなっていた。

「……く」

その事実には、城谷は、笑った。

「アハハハハハハッ!!なるほどそう来るか!アハハハハハ!!」

体を反らして、夜空に向かって嗤った。

「呪いの力で自らを強化する。なるほどな、自己犠牲の精神を持つて
るお前らしい能力だよ!!」

「知った風な口を聞くな」

「いいや、お前はそういう奴だ。他人の為なら、その体を喜んで投げう
つ。それがお前だ」

城谷は、立ち上がって指を指してそう指摘した。

「そのせいで、勝てるはずだった俺との戦いにも負けた」

「……」

「でも、今は違う。今なら邪魔する奴らはいねえ。お前は存分にその
力を振るえる。そうだろう？」

城谷は面白げに言う。

「だったら捻じ伏せてやるよ。それでお前を今度こそ泣き喚させてや
る」

「ほざけ。その前に地面に這いつくばるのはお前だ」

空気が張り詰める。

互いの殺気が衝突しあい、今にも弾けそうになる。

その硬直はしばらく続き、やがて、一つの轟音と共に二人は同時に
地面を蹴った。

周囲は、衝撃によるクレーターだらけとなり、岩の破片が辺りを飛び散っていた。

そして、冬樹は、目の前で、血まみれで倒れ伏す少年を見下ろしていた。

「アハハハハハハッ!!!」

その頭部の方向で高笑いをする、弦哉。

冬樹は、震える手を伸ばして、その名を呼んだ。

「……ちかげ?」

少年、千景は、地面に倒れ伏していた。

真解

圧倒的過ぎた。

魔器『強』の力は、千景の予想を遥かに超えていた。

どんなにその体に制限をかけようとも、相手はそのことごとくを打ち破り、そして、千景よりも速く、強く、重い攻撃を仕掛けてくる。どれほど策を弄しても、まるでどこ吹く風の如く、全てを打ち破つて千景を圧倒してきた。

故に、千景は成す術無く、その力の前にひれ伏した。

最後の一撃、上空に打ち上げられてからの地面への叩きつけは、千景の意識を吹き飛ばすのに十分だった。

あまりにも、一方的な戦いだった。

「……ちかげ……？」

そして、冬樹はその事実にも、震えていた。

千景が負けた。

おそらく、相当な強さを有していた筈の千景が、今、この男の前に敗北したのだ。

「アハハハハハッ!!! 楽しかったぜ小僧!! あの女よりずっと興奮したぞ」

まさに愉悦とでもいうかのように笑う弦哉。

純粹に戦いを楽しみ、血を見る事が大好きなサイコパスであるこの男。

もはや恐怖以外の何者でもないと言える。

「……ちか……げ……」

だが、冬樹の視線は、千景に釘付けになっていた。

微動だにしない千景。

その姿は、まるで死んでいる様だった。

「ちかげ……」

呼びかけてみるも、反応は無い。

その事実にも、冬樹は、心の底から凍てつくような感覚を覚えた。人が、死んだ。

今、目の前で、死んだ。
父と、母と同じように。

あの男に、また、殺された。

「……………ひぐ」

そして、自分は、何も出来なかった。

何も、しなかった。

それが、情けなくて、悔しくて、今にも、胸が押しつぶされて――

――どうした？笑えよ。

突然、聞こえた声。

――裏切り者の子供が死んだんだ。喜べよ。

どこから聞こえてくるのか分からない。
だけど、頭に直接響くのが分かる。

――嫌いだったんだろ？そんな奴が消えたんだ。笑って喜んじ
まえよ。

その声に、冬樹は、引きずり込まれていく。

「待たせたなあ」

気付けば、目の前に、弦哉がいた。

その顔は歪み切っており、冬樹を見下ろすその顔は、嗤っていた。
その表情に、冬樹は動けない。
千景は負けた。
もう、自分を守ってくれる者はいない。

——嗤えよ。

声が聞こえる。

「さあ、血を見せてくれよ」

弦哉が、囁く。

——嗤え。嗤って楽になれ。きつと、気持ちいいぞ。

ああ、そういえば、私は、彼の事が嫌いだった。

弦哉が拳を振り上げるが、それまでの動作が、酷く遅く感じた。

——そうだろ？嗤っちまえよ。

心の声が、そう囁いてくる。

もう、どうせ自分は死ぬ。

だったら、今のうちに楽な方へ行こう。

そうすれば、きっと、苦も無く、パパとママに――

口角が吊り上がりかけた、その時、冬樹の視界に地面に倒れ伏す千景が映った。

ふと、冬樹は、自分が千景が嫌いな理由を考えた。

彼は、いつも虐められていた。

カッターで体を切られ、火箸で体を叩かれ、殴られ蹴られ、階段から突き落とされて、罵倒を浴びせられて、ゴミを被り、汚れた水に顔を押し付けられて、縛られ吊られ、金を巻き上げられ、掃除を押し付けられ。

しかし、それでも彼は反発する事なく、受け入れて、反撃せず、ただ耐えていた。

皆、それを良い事に虐めて行った。

自分は、それが当たり前なのだと思います、何もしなかった。

そう、何もしなかった。

彼は、一切の反撃も、反論もせず、何もしなかった。
何もしなかったのだ。

なんで何もしなかった？

自分はいつも親から言われてきた筈だ。

虐めを許すな。正義であれ。人を嘲笑うな。常に人助けを心掛ける。困っている人がいれば躊躇わず手を差し出せ。

常にそう言われてきた筈だ。

——そんなのただの妄言だ。

何故、私は何もしなかった。
泣き虫だから？

——そうだ。それは恥ずべき事じゃない。

気が弱いから？

——お前は間違っていない。

違う。全部違う。

——悪は奴だ。悪は憎まれるべき存在だ。

千景は、何もしていない。何かをしたのは、彼の親なのであって、彼じゃない。

親と子供は違う。それは、いつでも強くあり続けた両親とは真逆に、弱かった冬樹だからこそ分かる事だ。

親と子は、決して同じじゃない。それを誰よりも痛感してきたのは誰だ。

——お前はそれで良いんだ。

良くない。私は良くない。

絶対に、頷いてはいけない。

——お前は変わらなくても大丈夫だ。

これじゃあダメなんだ。

——ダメじゃない。お前は良い子だ。

千景は、何も悪くない。悪いのは——

——それを認めるな。

——認めるな。

——認めるんじゃない。

——認めてはいけない。

——認めてしまったら今までの自分を否定する事になってしま
うぞ。

——認めるな。認めるな認めるな認めるな認めるな認めるな認
めるな認めるな認めるな認めるな——

うるさいッ!!!悪いのは——

「死ぬ!!」

弦哉が拳を振り下ろす。

その瞬間、冬樹は叫んだ。

「悪いのは、私だあああああああッ!!!」

その瞬間、冬樹の中で何かが壊れ、それと同時に現実で何かが衝突する音が聞こえた。

「——はは」

弦哉が、嗤う。

「——」

冬樹は、微笑む。

大粒の涙を、両頬から流して、冬樹は、その名を呼ぶ。

「千景!!」

そこにいたのは、大鎌で弦哉の拳を受け止める千景だった。

「アハハハハ!!!嬉しいぜ!!まだお前がくたばってなかったなんてなあ!!!」

「黙れ」

冷徹な一言と共に、弦哉の腹に無数の『撃鎖』が叩き込まれ、されど弦哉を僅かに後退させる程度で収まった。

「・・・はっ!だけど惜しいな。もうお前は俺に届く事すらねえ。終わりだ」

そう言つて親指を立てて、まるで首をきるかの様な挑発をする弦

哉。

「……お前の魔器は」

「ああ？」

「自分よりも強い奴して、その攻撃を受ける事で、使用者の限界を強制的に突破させて強くする、『条件強化型』だ」

ふらふらな状態で、千景は語る。

「何度も限界を超えた強化は、普通なら体が持つはずが無い。だが、それを可能しちまうのが、魔器であり、御神刀だ」

千景は、鎌を構える。

「ありとあらゆる現象と概念を縛り付ける『縛鎖』と逆に、制限を解除する『解鎖』。その、解鎖の力を、自分に使ったら、もしかしたら、自分の限界さえも超えていけるんじゃないかと思ったんだ」

その言葉に、城谷と冬樹は、首を傾げた。

だが、千景は続ける。

「ずっと疑問に思っていた、どうして俺の装束の『これ』が、鎧じゃなくて拘束具なのかを」

突如、千景の足元に輪が出現する。

「なんで、自分の身を守る為の鎧ではなく、拘束具が俺の天鎖刈の装束なのか。それを考察し続けて、今やっとわかったんだ」

その輪の中心には『鎖』の文字があった。

「拘束具は、俺の『限界』。それを突破し、さらなる高みへ『解放』させる為の試練だった。だったら、やる事は同じだ」

文字が変化する。

「限界を突破し続けるお前の魔器があつて、良かった。お陰で、俺は、この天鎖刈のその先を見つける事が出来た」

千景は、その天鎖刈の第二の名前を解放する。

「——『真解・解限咎乃鎖』」

千景を拘束していた拘束具が吹き飛び、その下に白い装束を見せる。

金属の類は全て消滅し、まるで戒めから解き放たれた罪人のような姿になった。

その姿を、冬樹は純粹に思った。

「——綺麗」

一方で、弦哉が違った。

「く、くく、アハハハ!!なんだよそれ!そんな隠し玉あったんなら早く出してくれよ!お陰で楽しい事逃すところだったじゃねえかよ!!」
弦哉が嗤う。

「来いよ!一発受けてやるぜ!!」

「そうかよ」

千景が呟いた瞬間、何か、無数の鎖が引きちぎれる音が響いた。

次の瞬間、弦哉が吹き飛ばされ、崖の壁に叩き付けられる。

「ぐうお・・・!?!」

意識が飛びかけ、ぐったりとする弦哉。

「……………すごい!」

冬樹は、それに大きく感嘆する。

千景は、今、弦哉を蹴り飛ばしたのだ。

それも、今までの天鎖刈の力を大きく上回るスピードとパワーで。

「ぐ……………くく、ハハハ……………!!」

だが、弦哉は立ち上がった。

「今のは効いたぜ」

嬉しそうに笑う弦哉。

しかし、千景は微塵も油断していなかった。

『天鎖刈』の『真解』である『解限咎乃鎖』。

その能力は、天鎖刈そのものに与えられた『制限』を解放し、使用者の『限界』を解放し、『限界』の無限突破の力を与える。

自身の限界を鎖と断定し、それを引き千切る事で、自分の限界を突破する。

それによって、自らの強化が可能であり、鎖の強度および縛り付ける力も強くなる。

限界がある限り、強くなり続ける、『鎖』と『解』の力。

もともと、『文字の概念』の力は、人が扱えるようなものではない。その本来の力は、万物万象の真理を狂わせ、この世の理を変革してしまうほどの力を有しているのだ。

その力を、『創造』だけでなく、『文字』を司る創代は制限した。

この『解限咎乃鎖』は、その創代がかけた制限を『解放』してしま
う力。

千景が、自らの限界を突破し続ければ、彼に与えられた『鎖』と『解』の力は、その本来の力を取り戻してしまう、危険なもの。

その為に、彼のこの力にも、『代償』が存在するのだが。

だが、いささか千景は限界だった。

解限咎乃鎖を発動できたとはいえ、体はその使用に耐えられる程大
丈夫では無かった。

流石に、弦哉の攻撃を受け過ぎた。

だから、千景は、背後の冬樹に言った。

「冬樹」

「え？」

「次、俺と奴がぶつかったら、なりふり構わず下り道を走れ」

「な、何言ってるの・・・？そんな事・・・」

「俺の目的はお前の安全だ。だから、お前には生きててもらわなく
ちやいけないんだ」

千景は、構える。

「大丈夫、ここから先には行かせない」

それは、死んでも通さないと同じだった。

千景は、右拳を引き絞る。

おそらく、次の攻撃で右腕は壊れる。

こういつてはなんだが、少なくとも右腕は無事じゃすまないだろ
う。

だが、それでも確実に仕留める。

出来なくても、時間ぐらいいは稼げる。

その間に、冬樹が逃げ切ってくれる事を願うだけだ。

そう、冬樹さえ逃げられれば、彼の――

「嫌だ」

その言葉に、千景は思わず振り返った。

そこには、震える足で無理に立ち上がろうとする冬樹がいた。

「千景、絶対に、死ぬ、つもり、だよね……」

「……そうだ」

だが、それはお前には関係ないことなのでは？そう千景は思った。

「千景……」

顔を挙げた冬樹。

そして――

「――頑張つて。信じてる」

真つ直ぐに、そう言つて来た。

生まれて初めての、声援。

その事実には、千景は、頭をハンマーで殴られたような感覚に陥った。

何故、いきなり、突然。

どうして、自分とは無縁の筈の言葉が、聞く事が出来た。

そんな疑問が、千景を葛藤させる。

「……千景」

だが、その疑問は、冬樹の呼ぶ声に引き戻され、再度、彼女の目を

見た時に消えた。

真つ直ぐだった。

あれほど泣いていた筈の冬樹の目が、今は一点の曇りもない瞳で、

千景を見ていた。

それは、まさしく信頼しているという証明。

その事実には、千景は内心苦笑する。

(まさか、こんな日が来るなんてな……)

初めて、誰かから応援された。

椿でもない、奏からでもない、優からでもない、今まで自分を助け

なかつた少女からの声援。

そして、初めてかけられた言葉。

その事が、千景にどうしようもない勇気を与えた。

「……ああ」

そして、千景は股を開いて地面を踏みしめる。

「任せろ」

千景は、天鎖刈の大鎌デス・サイスを脇差、収納形態に戻す。

これほどまでに巨大な武器を持つての移動は、とてもではないが目立つ。

だから、力を保持したまま武器のみを元に戻す機能が、これだ。

これによつて、千景は拳での一撃で弦哉を倒す事を選んだ。

その事に、弦哉はニタアっと笑った。

「良いぜ。受けて立ってやるよッ!!」

瞬間、弦哉の放つ気迫が千景に叩き付けられる。

「……ッ!!」

冬樹は、その気迫に圧倒される。

それは、弦哉の力の高さのあらわれ。

そして、意思そのものだった。

確実にお前を倒すという、有言実行の意思だ。

勝負は、たった一撃で決まる。

だから、二人は同時に出た。

右拳を振り上げ、千景は正拳突きを、弦哉はただ無造作なストリートを。

否、弦哉のそれは、ボクシングで言う、最も威力の高い『コークスクリュー』だ。

その二つの拳が、互いに正面から叩き付けられた。

衝撃波が撒き散らされ、二人のぶつかり合った拳を中心にクレーターが発生、轟音が撒き散らされる。

「ぐ……う……!!!」

「くく……はは……!!!」

鎖が引き千切れ続ける音が、何度も何度も、耳が痛くなるほどに響く。

千景が、何度も限界を突破しているのだ。

しかし、それと同時に、弦哉も魔器『強』の力でどんどん強くなつてきているのだ。

このまま二人が限界を超え続けたら、天変地異にまで到達してしまうのではないか？

「アハ、アハハハハハハハ!!いいいぜいいぜえ!サイツコウだねツ!!ここまで強え奴に会えるなんて、俺はつくづく運が言いなツ!!でもなツ!!」

徐々に、千景の拳が押し返される。

「俺とお前の唯一違いツ!!それは体格だツ!!お前の体は小さい!!だからその分、重力に抗わなければならねえんだよツ!!」

このままでは、負ける。

拮抗しているのなら、一度押し込まれてしまったらそれを持ち直すのは厳しい。

押し戻すには、相手よりも強い力で押し返さなければならないのだ。

だが、互いに相手を超えようと限界を突破し続け、その強さが拮抗しているのだ。

押し返す事など、不可能に近い。

だが、そうであっても、千景には、負けられない理由があるのだ。

「……けるな」

冬樹が、叫ぶ。

「負けるな!千景!!」

冬樹を、守らなければならないのだ。

だから——!!

「う——おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ!!!」

絶叫し、千景は、さらなる限界突破に挑む。

「ツ——!?!」

(なんだ!?!急に押し戻され——)

右腕の骨が、バキバキと折れていく。

だが、それでいい。

「ち、千景・・・!?!」

悶絶する千景。困惑する冬樹。

しかし、やがて、鎖が消滅し、千景はゆっくりと後ろに倒れていく。それを、冬樹が後ろから支える。

どうにか膝の上に千景の頭を置き、寝かせる。

服装はいつの間にか元に戻っており、その表情は、激戦を終えた後とあつてか、ぐっすりと眠っていた。

右腕は、それはもう酷いありさまとなっていた。

骨は粉碎しており、血管の破裂によつて皮膚が破裂し、そこから血が流れ出ていた。

その全部が痣だらけとなり、黒ずみ、見るも無残な状態となつていた。

こうなつた全ては、冬樹を守るため。

その事実には、冬樹は、少し悔しそうに顔を歪め、涙を流しながら、千景に一言、告げた。

「・・・ありがとう、とう」

木が薙ぎ倒される。

それは、一重に椿の手刀の強さを示していた。

どれほどの障害物を容易しようと、そのことごとくは椿の前では無意味。

全て、真正面から碎かれ、斬られる。

まさに、一本の刀。

「本当に反則だろ・・・!!!」

城谷がそう眩く。

さらに、今の椿は『真解・呪装滅布』による『炎を呪いによって打ち消す』能力で城谷の炎を無効化していた。

椿の拳が城谷を襲う。

「でも」

しかし、城谷はその攻撃を掻い潜り、椿の懐に飛び込む。

そして、密着した状態から椿の腹に掌を当てる。

「重ね当てには弱かったな。お前の皮膚は」

「ッ!?!」

次の瞬間、城谷の掌から炎が炸裂。

『『爆破燃焼』』

「ぐは!?!」

空気を圧縮したまま燃やし、エネルギーそのものである炎をそのまま炸裂させたのだ。

実は人間の体は衝撃を受けた直後は脱力するという欠点を持つ。それは一重に人間の体は卵と同じように大部分が水。条件次第ではコンクリート並みの硬さを発揮するが、人体である以上、体を構成する筋肉には全て反射が存在する。それ故に触られた瞬間は脱力が発生するのだ。

そうでなくても水の硬度の基もととなる慣性と粘性、筋肉という弾性は、押さえつける事で無効化できる。

例として、心臓マッサージと同じ要領だ。

つまり、密着した状態での打撃攻撃に椿は弱い。

それが、椿の持つ鋼の皮膚の最大の弱点。

手が腹に当てられた状態での攻撃は、椿にとっては唯一通用する攻撃と言えるだろう。

「ぐ……う……」

「やっぱ炎は防いでも衝撃自体は効くんだな」

「それが……どうした……」

口の端から血を流す椿は、苦し紛れに城谷の言葉に反応する。

城谷はニタリと笑う。

『爆破燃燒弾』

城谷の掌からピンボールのような炎の玉が無数に出現し、空気中をシャボン玉のように漂う。

「これは……」

「下手に触らない方がいいぜ？なにせそれは……」

ふと、火の玉の一つが椿の肩に当たる。

それに僅かながらに感触を感じた瞬間——爆発した。

「ぐうあ!？」

「爆弾なんだからな」

おおよそ、手榴弾並みの威力に、思わずよろける椿。

「ついでに、それ、連鎖的に爆発するぜ」

「!？」

次の瞬間、無数の爆発が巻き起こる。

黒い煙が舞い上がり、焦げ臭いにおいが鼻の奥に突き刺さる。

「椿さん……!!」

思わず名を呼ぶ奏。

だが、椿はそれほどダメージを受けていなかった。

「へえ、てがたな手刀で空気を引き裂いて、衝撃を全て逸らしたか」

その指摘は間違っではない。

事実、椿は持ち前の反応速度で全ての爆発に対応しきって見せたの

だから。

だが。

「その無理な動きが、かえって傷を悪化させたな」

「……」

腹と肩に受けたダメージは、常人が受ければ尋常じゃない程の激痛をとこなう。

だが、椿はそれに耐えている。

耐えてはいるが、それでも表情出してしまうほどの痛みだ。

かなり、きつい筈だ。

しかし、今や椿は『真解』を発動させている。その能力は『布』と『呪』。

呪いを纏った布で体を覆う事で、これまでにない防御力を兼ね備えている。

主に現象系の攻撃は全てこの皮膚の前では防がれる。

それ故に、打撃などの物理的攻撃には弱い、エネルギーそのものである炎に対しては完全遮断する。

だから、椿は——突撃する事にした。

「うお!?!」

地面を蹴り、一気に城谷に接近する椿。

そして、一気に連打を繰り返す。

「うおお!?!」

「オオオオオツ!!」

その連打を、どうにか避ける城谷だが、その全ての攻撃が浅くも当たっていた。

「ぐ、この破廉恥女が!!」

「悪かったな破廉恥で!!」

「げぼあ!?!」

ついに椿の拳が城谷を捉える。

その一撃が城谷をよろつかせる。

(……だ……!?)

そのまま畳み掛けようとした椿だが、それで黙っている城谷ではない。

『『爆破燃焼弾』ツ!!』

「な……!?!」

また爆発する火の玉だ。

それに触れてしまう椿。直後に、火の玉は爆発し、さらに連鎖的に他の玉が爆発する。

黒煙が巻き散らされる中、城谷は地面を蹴る。

(これであの女がくたばる訳がねえ……ここで終わらせてやるツ!!)

城谷は、ここで椿を仕留めるつもりなのだ。

呪いの届かない内部から、一気に燃やして、椿に止めを刺す気なのだ。

「死ねッ!!」

拳を突き出す城谷。視界の先に見えるシルエットに向かって。しかし、それで黙っている椿では無い。

腕を前方に突き出し、拳を逸らすかのように回す。

空手で言う、『回し受け』という防御の技だ。

しかし城谷は突き出した片方の拳を一気に引き戻した。

椿の手が、通過する。

だが、城谷の片手は僅かに切れていた。

それと同時に、椿はこれで完全な隙を作った。

そこへ、城谷はもう片方の手を一気に突き出す。

(これでチェックメイト——!!)

「受けるだけが能じゃないぞ」

「ッ!?!」

だが、椿は、あろうことか避けた。

(まじかよ・・・!?!)

狙いが外れ、空ぶる。

そこへ、椿が城谷の装束の襟首を押さえつけ、動きを封じる。

これは、空手道の技の一つ——

『押さえ突き』

次の瞬間、連続四回の貫手が城谷に叩き込まれた。

「・・・やれやれ」

城谷は、星が輝く夜空を見上げていた。

「大人になっても成長するもんなのかねえ」

「それが私たち人間だ。例え大人になり、子を授かっても、私たちは成長し続けるんだ」

城谷の魔器であるライターを手に持つ椿。

「はあ、これで俺の逃亡生活も終わりか」

「そうだ。刑務所に入って、罰を受けろ」

「わーってるよ」

椿が拳を振り合げ、ライターを破壊する。

ガラスが割れる音と共に、『燃』の文字は消失した。

炎が消えて、子供たちが無事に救助されて数日。

「……」

病院のベッドで仰向けに寝ている千景。

そんな状況で、千景は、あまりにも退屈感を感じていた。

これは、奏から聞いた事だが、千景が気絶した後、椿が無事に山火事を引き起こしていた『燃』の魔器使いを撃破。お陰で森で燃え盛っていた炎はその強さを弱め、消防隊が到着した事によって事なきを得た。

一方で、千景と冬樹は、駆け付けた椿と奏と遭遇。千景の惨状を見て、椿がすぐさま『癒しの布切れ』を発動して千景の腕をある程度ま

で治した。

その後、椿が千景を抱え、奏は冬樹の手をとってクラスの元へ戻った。

その時は、椿が脅s——説得した事によって千景は病院へ搬送。

今回の事件を引き起こした城谷と弦哉も捕まり、事件は終結した。

千景が弦哉逮捕に最も貢献した事実は、面倒事にならないように奏が隠し、事実を知るのは、椿と奏、そして、冬樹だけ。

千景は、病院に搬送されてから丸一日は寝ていたという。

「……暇だな」

医者からは最低一週間は安静にしろと言われている。

正しい事を言ってくれと椿が脅——説得したようだが、確かに右腕がボロボロというのはいなめない。

さらに奏からもある事を言われていた。

『解限咎乃鎖』を使ったみたいね」

「ええ、まあ……はい」

「……」

千景の返答を聞いた奏の口から、あまりにも重い溜息が漏れた。

「……?」

『真解』、その概要は御神刀に込められた第二の文字を引き出す事にあるわ。だけど、貴方の使う『天鎖刈』は、実は違うわ」

「え?違う?」

奏は、言う。

「御神刀『天鎖刈』はね、本当はね。『魔器』なのよ」

「……はい?」

いきなり予想もしなかった事が出てきた。

「初代『天鎖刈』所有者だった『久我楔』。その人は、元々魔器使いでね。その人が使っていた魔器が『鎖』の魔器なのよ」

「そうだったんですか」

「ええ。経緯自体は分からないけど、なんだか色々あって、その『鎖』

の力を、当時創代様が当代の救導者たちの為に作った強化型御神刀『解限』に合成させて作ったのが、『天鎖刈』よ」

「なるほど、だから『解限咎乃鎖』なのか・・・」

「解限の力は、御神刀に込められた文字の概念の強化に使うつもりだったみたいだけど、その前に彼女の力を押さえつける為に使ったと文献には書かれているわ」

「そうですか・・・それで、俺の体が動かない事については・・・」
「貴方の真解の反動は、解放した限界の分だけ体にその分の反動が帰ってきて、突破した限界を全部元に戻される、という複雑なものになってるわ。ま、そうでもしないと貴方が天変地異を引き起こす程の力を手に入れかねないからという正しい措置といったところね」
「・・・」

確かに、こんな力は、使い方を間違えれば、星そのものを破壊しかねない兵器になりかねない。

(これは本当にいざという時以外は使わない方が良さそうだな)

千景は、そう決めた。

が、それで体が動くようになるわけがなく、しばらくまともに動く事は出来なさそうだ。

つい昨日の会話を思い出し、溜息を吐く千景。
そこで。

「・・・ため息、つくと、幸せ、逃げる、よ」

変な所で区切る、この独特な喋り方。

そんな喋り方をするのは、千景は一人しか知らない。

「・・・冬樹か？」

「ひさし、ぶり」

三日ぶりの、冬樹だった。

「珍しいな、お前が見舞いに来るなんて」

「助けて、貰った、お礼、しかたかった、から」

「別にしなくてもいいのに」

「ダメ」

冬樹が、切った林檎を突き出してくる。

「恩は溜めるな、て、うちの、お母さん、が、行って、た」

「……あ、そう」

流石にこれは追い返せる雰囲気じゃない。

とりあえず林檎は食べる。

「んむ……これはなかなか」

「みかんも、あるよ。愛媛県で、作られ、た」

「ふくん……」

シヤクシヤクと林檎を食べる千景。

ふと、冬樹がうつむく。

「……どうした？」

「……ごめんなさい」

冬樹が、服の裾を握りしめて、突然謝罪してきた。

「……いきなりどうした？」

噛み砕いた林檎を飲み込んで、そう聞く千景。

「私、貴方の、こと、誤解、して、た。お父さん、と、お母さんのこと、

見捨てた男の、息子だから、って、貴方に、酷い事、言っちゃった」

「……」

「親、と、子供は、違う。決して、性格、が、全く同じで、生まれてく

る、わけじゃ、ない。罪も、子供に、引き継がれる訳が、ない。のに、

私は、貴方、を、傷付けて、しまった……」

とても、苦しそうな声で、冬樹は言った。

「だから……ごめん、なさい……」

その後、涙を流して泣き始める冬樹。

その様子を、しばらく黙って見ていた千景だったが、上体を屈めて、

右腕を伸ばした。

そして、その右手で、冬樹の頭を撫でる。

「別に、謝らなくていい。どちらにしろ、俺の父さんと母さんは殺人を

犯してるんだ。お前が、謝る事じゃない」

「……でも……」

「今の生活についても、俺はこれから変えるつもりはない」

「え!?ど、どうし、て・・・!?」

「お前さ、いきなり俺が反抗して、それで俺とあいつらの立場が逆転したらどうよ? そうなったらさらに俺への怨念溜め込んでまた逆転される。まさしく不幸のループだろ。それで逆転されないように立ち回る事は出来るだろうさ。だけど、それであいつらに心の平穩は訪れるのか?」

千景は淡々と告げる。

「来るわけが無いし、俺はそれをしたくない。ようはそういう事。単純に俺がやりたくないだけなんだよ。そんな面倒臭い事を」

「で、でも・・・」

「でもま」

ふと、言葉を切った千景は、冬樹に視線だけを向けて笑った。

「お前が謝ってくれた事だけは、予想外だった。でも、なんか嬉しかった」

「・・・」

千景の言葉に、冬樹は、目元が熱くなるような感覚を覚え、そして泣いた。

「ふええ・・・」

「ああ、泣くな泣くな。泣くんじやない」

その日は、見舞いに来たはずの冬樹を、千景が慰める事になった。

創代神社。

「その縁側にて、お茶をすすりながら空を眺める奏の姿があった。やあ」

「そこへ、椿がやってくる。」

「椿さん、仕事はもう良いんですか?」

「ああ、今日は早めに終わってな」

「そこまで会話したところで、ふと椿は、奏にある事を聞いた。」

「・・・千景には言ったのか?」

「・・・いえ」

「そうか・・・」

本来、御神刀は他人へ継承する事は出来ない。

その全てがその者の為に作られたものであるからであり、その本人しか使用する事が出来ないからだ。

しかし、

継承する相手が、血縁であるなら問題ない。

それも、その者の子供である事に限定される。

しかし、そういう事は大体なく、大抵はその当時の者で役目を終えてしまう。

さらに、大抵の御神刀は役目を終えた所で、破壊されるのが鉄則だ。その血統を、役目に縛り付けない為だ。

しかし、唯一、三百年経っても破壊されない御神刀があった。

唯一、ただ唯一、初代の想いが込められ、決して破壊される事無く残され続けている御神刀にして魔器。

奏は、膝の上に置いた文献のページをめくる。

『久我楔』・・・またの名を『郡千景』・・・かつて、香川を崩壊

させた『千景災害』を引き起こした、災厄の勇者にして、当代救導者が一人、『久我真一』の妻……」

それが、初代『天鎖刈』所有者。

「……せめて、彼が、幸せでありますように……」

奏は、そう、すぐるような気持ちで空に呟いた。

十二月のある日

十一月――

「今日から、お前らと一緒に勉強する、不道千景君だ。皆、仲良くするように」

その日は、千景が絡久良市立坂上^{さかがみ}中学に転校する日だった。

千景の転校した二年三組には、信也と冬樹の二人が一緒のクラスだった。

「よ、お前と同じクラスだなんてな」

「そうだな」

信也の反応は相変わらず素っ気ない。

「私、には・・・?」

「ああはいはいお前とも一緒のクラスでウレシイヨ」

「棒読み・・・」

千景の薄情な反応に半ばショックを受ける冬樹だった。

屋上にて。

「・・・うん。千景、の、作る、お弁当、は、やっぱり、美味、しい」

「右に同じく」

「そりやどうも」

千景の作った弁当を食べる千景、冬樹、白露、海路、信也の五人。

「なんで俺まで・・・」

「おい、俺は良いのか?」

男子二名は女子二名に強制連行だが。

「これまでのわだかまりを解消するためだよ」

白露の言葉に、反論できない海路と信也。

「いや、俺は別に・・・」

「貴方は良くても私たちはダメなの?アーユーアンダースタンド?」

「下手」

「発音がなってない」

「もう少し勉強しろ」

「そこじゃないでしょ!？」

男子三人の辛辣なコンビネーションにダメージを受ける白露。
(それなら白鳥さんの方がいくぶんかマシだったの)

『その意見には賛成ね』

「ううう……」

「白露、元気、出して」

屋上の隅でいじける白露を慰める冬樹。

ふと、冬樹はこの学校のグラウンドを見た。

「……」

「どうした？冬樹」

不意に立ち上がった冬樹に声を掛ける千景。

「……もう、二年なんだね。あの事件から」

その言葉に、他の者達も反応する。

横一列に並んで、屋上からグラウンドを見下ろす五人。

「そうだな」

海路が感傷に浸りながら返事を返す。

「……」

信也は辛そうな表情をする。

「あの日は、酷かったね」

白露が、あの日の事を思い出す。

「……ああ、あの日は、本当に酷かった」

千景が、そう呟いた。

それは、二年前のクリスマスの事。

町全体を巻き込んだ、最悪の事件。

そして、千景にとって、人生最悪の誕生日だった。

十二月。

本格的に肌寒くなってきたこの時期。

そんな日に限って、雪とかそういう外で楽しめる要素が無いと、誰も外に出たがらない。

しかし、その寒い日なのに、簡易的な防寒具しか身に着けていない少年が、外を歩いていた。

千景だ。

その手には、ビニール袋で、その中にはあまりにも大量の食材が入って来た。

しかも、今回は彼はいつになく上機嫌だった。

「冬のバーゲンセールで、いつもより大量の食材が安く買えたぜ」

「千景、この日、だけは、本気になる、ね」

が、今年に限っては違った。

その千景の隣には、薄水色の髪をした少女、冬樹がいた。

「ただ椿さんたちもバーゲン狙ってたとは思わなかった」

「流石、絡久良市、の、番長……あの、勢い、は、恐ろしかつ、た」
冬樹は、鬼の形相の椿にぶつ飛ばされた時の事を思い出していた。

あの日以来、千景と冬樹の関係は、良好なものになっていた。別にベタなチョロインのような展開になった訳ではないが、それでも良き友人という関係には成り上がったと冬樹は認識している。

「あと、一つ、何故、か、あの人の、娘、さん？、に、睨まれ、た、んだけ、ど……」

「ああ、あれな。俺にも良く分からん」

「そう、なん、だ」

本当に、優のあの視線は訳が分からなかった。

それはともかく、無事に百合籠に戻った千景と冬樹。

「それじゃ、それは貰う」

「あ、でも……」

「お前の立場については妥当な判断だ。いいから貸せ」

「あ……」

冬樹から奪い取る様に、買い物袋を手取る千景。

その様子に、冬樹は泣きかけるも堪え、落ち込んで先に歩いていく千景のあとを歩いていく。

「戻りました」

「ただいま……」

千景はいつもの機械的口調になり、冬樹は普段通りに努めようとするも、やはりやや暗そうな声になってしまう。

「おかえり、二人とも。珍しいね。君たちが一緒にいるなんて」

「たまたま出会わせました」

「……」

千景がそう答える。

冬樹はなにも言わない。

「食材を冷蔵庫に入れておきます」

「ああ、よろしく頼むよ」

そんな訳で、台所に向かう千景。

そんな様子を見送った冬樹は、ふと広間の掲示板に張られたチラシを見た。

「ああ、もうすぐだったわね。クリスマス」

ふと、冬樹の後ろから、雅が呟いた。

「雅姉……」

冬樹が見ていた紙、それは、近頃、子ども会で行われる『クリスマスパーティー』のチラシだった。

対象は小学生以下。

公民館にて、行われるらしい。

「雅姉、は、なにか、予定、ある？」

「友達の家でやるわね、パーティー。結構な所帯でやるみたいだけど、ま、気長に楽しんでくるわ」

雅はそう言つて、自室に戻っていく。

その様子を、冬樹は黙って見送った。

食材を冷蔵庫に入れ終え、自室に戻ろうとする千景。

そこでふと、千景は立ち止まった。

「……今回も、随分と早いですね」

その問いは、千景のすぐ横、曲がり角で壁に寄りかかっている雅に向かつて言われた言葉だった。

「……そろそろだったわよね。貴方の誕生日」

そう言つて、雅は何かを投げてくる。

それを受け取った千景。

「……例によって、お菓子ですか」

「嫌なら別にいいのよ」

「いえ、ありがたくいただきます」

言つておこう、これが彼らの通年の行事だ。

この街において、実は彼、不道千景の誕生日を知っているのは、雅ただ一人なのだ。

いやありえないだろと思う者も多いかもしれないが、実は、雅だけが、彼の誕生日を覚えていた。

その事実は、無論口外されていない。

そして、千景がいつも彼女の買い物に付き合っている理由がこれなのだ。

毎年、この十二月になると、雅は決まって、隠れて千景に贈り物をする。

それは、毎回買い物に付き合ってくれる千景への報酬なのか、または、毎日虐めを受ける彼への労いなのか、または、餌付けし手懐けるためか。

ただ、千景は、それを黙って受け入れていた。

彼女がどう思っているように、ただ、一人だけでも祝福してくれる人がいるなら、この好意は受け取っても良いのかもしれないと、千景はそう思っていた。

ただ一つの労い。

それが、彼の一年を生きる為の活力だった。

「部屋で食べなさいよ」

「言われなくてもそうしますよ」

そう言い合い、二人は分かれた。

されど、彼の生誕を祝福する者は、彼女を除いて他にはいなかった。

絡久良市立坂上中学。

そこは、当時奏が通っていた学校である。

そんな奏が廊下を歩いていると。

「カーなでちゃん」

「・・・」

声を掛けられたところで、奏は振り返った。

そこには、活発そうな少女が奏に向かって手を挙げていた。

「悠木・・・」

「やつほー」

「何？」

「呼んでみただけだよ。それより神社の方はどう？」

「別に変わった事はないわよ」

「ふーん・・・」

彼女の名前は『おおやまゆうき大山悠木』。

奏とは、小学校の頃からの幼馴染であり腐れ縁、この方違うクラスになった事が無い。

「奏ちゃん、今日も神社で神事？」

「ええ。町の人たちから集められた貢物をお供えしないといけないから」

「そっかー」

「なんだったら神社うちに来る？」

「ああ、いいよいいよ。別に無理して遊びたいって訳じゃ無いし。ついでに神社つまんないしあの階段上るのいやだし」

「あはは・・・」

廊下にて歩きながら話し合う二人。その様子はまさしく女子中学生のそれ。

「最近、安座間さんも神社に出入りする事多くなったよね」

「ええ。だいぶ暇が出来たからって言ってたわ」

本当は千景の空手の上達が以外と早いから本腰を入れているからなのだが、この街の人間に対して千景の話をするのはタブーだ。

だから、奏は小学校時代を共に過ごした幼馴染に対して、千景の事は話さない。

「奏はすごいよねー。絡久良の番長安座間椿とまともに話せるのは、後にも先にもアンタだけよー」

「そうでもないわよ。あの人、案外優しいから」

「いやー、私はそうは思わないわね」

そう、話し合っていた時だ。

「やあ、お二人さん」

「あ」

「げ」

ふと、後ろから声をかけられ、振り向くと、そこには一人の少年がいた。

人の良さそうな顔立ちに立ち姿。その人物の出現に、何故か悠木は嫌そうな顔をする。

「いきなり、げ、はないんじゃないかな悠木」

「うっさい。それもこれもあんたが奏ちゃんをストーカーしてるのが悪いんでしようが」

「酷いなあ。僕はただ単純に奏さんと話したいだけなのに・・・」

「一度振られたんだからいい加減諦めろっての」

「奏さんは考えさせてくださいって保留にしたらただだよ？」

「同じよ同じ、さっさと帰れー！」

「ま、まあまあ悠木、別に新人君あらとがいたって問題ないでしょ？」

彼の名前は『戸愚呂新人』。

クラス一の優男と言われる少年である。

しかし、先ほどの会話にあったように、実は新人は奏に向かって告白をしているのだ。

しかし奏は彼の告白を保留にし、ここ一年ずっと先延ばしにしているのだが・・・

「アンタもアンタで、こんな奴、しつこいならしつこいっていえばいい

のに」

「ええ、でもなあ・・・」

「僕はいつでも良いよ。ちゃんと返事してくれるまで、僕はいつまでも待つつもりだから」

そう言う新人に、奏は、思わず赤面してしまう。

「これから純粋な奏ちゃんをたぶらかすなこのチャラ男。いくよ奏」

「ああ・・・!?!」

「行っちゃった・・・」

悠木に引つ張られる形でさっさと行ってしまう奏。

「あんたも物好きよねえ。あんな男、さっさとばっさり振っちゃえばいいのに」

「うーん、それもそうなんだけさあ」

奏が彼を正面切って振れない理由。

まず一つ。

彼が奏にとつてタイプな人間だから。

容姿はもちろん、性格もばっちりだ。

常に他人を気遣い、誰にでも優しく、色んな事を率先してやる。

そんなベタな設定男のような人間なのだが、それがどういふ訳か奏の好みにぴったりハマってしまったっているのだ。

そう、それなら普通にOKしても良いんじゃないかと思う者も多いだろう。

問題なのは、何故か奏自身の直感が、彼を受け入れてはいけないといってくるのだ。

その理由は分からない。しかし、彼のあまりにも完璧すぎる性格が、奏には不自然に見えて、そして、彼もまた、千景を嫌う存在だという事が、返事に歯止めをかけているのだ。

故に、奏は彼の告白を受け入れられず、しかし、かといって退く事も出来ないのだ。

「あ、私こっちだから」

「おおそうだったそうだった。それじゃあまた明日ね」

「ええ、また明日」

そうして別れた二人。

ふと、奏は夕焼け色に染まった空を見上げた。

「……もう、十二月、か……」

もうすぐ、彼の誕生日だった筈。

もう、随分前の事だから、詳しい日時を忘れてしまった。

誰も、彼の誕生日など覚えていどころか、知りたくも無いだろう。

だって、この街は、そうなのだから——

「ん？」

「あ」

神社に上る階段にて、何故か千景とぼったりと鉢合わせになった奏。

「こんにちわ、奏さん」

「……あ、ええ、こんばんわ、千景君。今日は何しに……？」

「少し、文献を見に来たんですよ」

その千景の返答に、思わず奏は表情を強張らせる。

「……な、なんで？」

「俺はまだ『天鎖刈』の事について知らない部分があります。最後の魔器使いを打倒する為にも、知識を頭に叩き込んだ方が良いかと思いついて」

「そう……」

「……あまりに乗り気ではありませんね」

「そ、そんな事は……」

「いいんです」

千景は当然のように答える。

「もともと貴方は俺がこの戦いに参加する事も、貴方は乗り気では無かった。しかし、それは仕方のない事です。何せ、俺は、貴方たちにとって恩人ともいえる母さんの子供です。戦いに巻き込みたくないのは当たり前です。ですが」

千景は否定する。

「俺は既に戦いに参加している。この先、俺を生かしたいなら、俺を強

くする方法を教えてください」

強い眼差しで、まっすぐに、そう言ってくる千景に、奏は、思わず息詰まる。

だが、やがて千景の言葉の正しさに、いつの間にか頷いていた。

「・・・分かったわ。ついてきて」

そうして、奏は千景を神社の書庫に案内していく。

その様子を、遠目から誰かが見ている事に気付かずに。

「・・・『久我楔』・・・それが俺の御先祖様なのか・・・」

千景は一人、書庫にて文献やら書物やらを一つ一つ漁っていた。

「この『久我真一』って人も、かなり凄い救導者だったのか・・・ええつと、二丁拳銃の御神刀『連双砲』れんそうほうの使い手で・・・」

読めば読む程、天鎖刈や、初代の周囲の事が分かってくる。

天鎖刈についての詳しい使い方や概要。

当時魔器『鎖』の頃の力。

そして、久我楔が、救導者として戦った戦歴。

そして、なんとも幸せたつぷりな日記。

「ええつと・・・やめよう」

流石に千景も見てて恥ずかしくなつたらしい。

というこれは日記というよりも、その形式の官能小説である。

あまりにも書いてて恥ずかしくないのかといえるほどにとんでもない内容の話が詳細に書かれている。

これは確かに『封印』の御札が張られた箱に嚴重に隠しておきたい筈だ。

その封印を『封印解鎖』で解く千景も大概だが。

「・・・あ」

そこで、千景は時間がギリギリな事に気付く。

「そろそろ帰らないと」

千景は、急いで書庫で引つ張り出した書物を全てしまい、書庫を出る。

「あら、もう帰るの？」

鳥居の前で箒を掃いていた奏がそう聞いてくる。

「飯当番なので、また明日来ます」

「そう、気を付けてね」

そう言つて階段を降りてくる千景を見送る奏。

しかし、その表情を悲しげで、心配そうな表情だった。

「・・・千景君・・・」

奏は、そう、彼の名を呼んだ。

翌日――

千景はいつも通り、通学路を歩いていった。

その横には、何故か冬樹がいた。

「……なんているんだお前」

「別に、いい、でしょ」

「なんだか、この頃彼女の我儘に拍車がかかって来たような気がする。」

気のせいであって欲しい所だ。

「最近、虐め、の、方、は……」

「ん？ああ、ヒートアップしてきてるよ。あの一件が原因だろ」

一件とは、あの山火事事件である。

あの時、千景はパニックに陥っていたクラスメイトたちを一喝した後、すぐさま冬樹の救援に向かったために、指示して自分だけ逃げたという濡れ衣を着せられ、さらに自分一人で逃げたから大怪我を負ったなどと理不尽な理由で、評価が落ちに加え虐めがヒートアップしてきたのだ。

「ひどい……」

「そう言うなや。あの状況からそう言われても仕方が無い」

「……千景、は、少し、他人が悪い、という事も、肯定、すべき、だと、思う」

「……どういう事だ？」

そう、首を傾げた時。

千景は、首が思いつきり首を締め上げられるような感覚を感じた。

「ッ!？」

(ここで魔器だと!?)

そう驚愕しつつ、千景は、首を絞められるのと同時に感じる引つ張られる感覚の方向を探ろうと意識を集中させる。

「千景……どう、した、の？」

「ん、ああ、別になんとも……」

そう言いかけた時、千景たちの真正面から、複数のあまりにも音の大きい足音が聞こえた。

「!？」

そちらに気付き、視線を向ける二人。

それは、数名の警察官。

どれも、千景に向かって険しい表情で睨み付けており、あまり良い予感がしない。

「冬樹、下がってろ」

冬樹を言葉で下がらせ、身構える千景。

「……不道千景だな」

警察官の一人が、そう質問してくる。

「そうですが……」

そう、答えた瞬間——

「ッ!？」

千景が思いつきり顔を傾け、その頬を弾丸が掠めた。

「ひっ……!？」

それに、冬樹が驚き尻もちをつく。

「チッ」

その発砲を行ったのは、先ほど質問してきた警察官だった。

「いきなり何を……」

千景がそう言いかけた時、警察官は言った。

「不道千景、貴様を放火罪で、処刑するッ!!」

「は?」

その言葉に、千景のみならず、冬樹までが間抜けが声を発した。

悪意の鬼ごっこ

とある学校の屋上で、一人の少年が立っていた。

「……くくく」

一人、嫌らしく笑う。

「とうとう、とうとうこの街に復讐出来る……！憎き父さんの夢を潰したこの街を……！！くく……あははははははは！！」

少年は、天に向かって高笑いをした。

一方、商店街の方では――

「処刑……？」

冬樹は、信じられないとでもいうように呟いた。

「どういう事だ……？」

千景が問う。

「そういう事だ。不道千景、お前を放火罪で処刑する」

「まずは逮捕じゃないのか。それ以前に、証拠があるのか」

もつともな指摘をする千景。

「黙れ。貴様が森に火を放った事は決定事項だ。即刻処刑する」

一人の警察官が千景に拳銃を向け、他の警察官も千景に銃を向ける。

「ま、待って、くだ、さい……！」

そこで冬樹が千景の前に出る。

「そこをどけ」

「千景、は、そんな、こと、しな、い。何か、の、間違、い」

「これは決定事項だ。その男は処刑しなければならぬ」

「その、前に、証拠、見せ、てよ……！！」

確かに、逮捕するに値する証拠やネタがなければ、逮捕するには至

らない。

否、それ以前に、裁判も通さず独断で処刑するなど、法律以前の問題だ。

「黙れ！」

しかし、警察官はそんな冬樹の言葉を怒鳴って一蹴する。

「決まったのなら異論は許さん！これは決定事項だ！コイツは即刻処刑する！処刑するのだ！処刑なのだ！」

「おか、しい！なんの理由も、無しに、人を、殺す、なんて……貴方が、貴方、達が、犯罪者に、なる、だけ!!」

「黙れ！黙らないと貴様を処刑するぞ!!」

もはや論理が破綻している。

そもそも、この警察官はまともじゃない。

(どういう事だ……!?)

そこで、千景は気付く。

「殺せ」

「殺してしまえ」

「処刑する」

「捕まえろ」

「逃げられない様にしろ」

「今すぐ殺せ」

「逃げる前に」

「このクズを殺せ」

「犯罪者め」

「殺人鬼」

「人殺し」

周囲の人間の様子も何かおかしい。

「これは……!?!」

その瞬間、かちやりという音が千景の耳に入った。

それは、拳銃の撃鉄が起こされる音。

その事に気付き、千景は真正面を見る。

そこには、冬樹に拳銃を向ける男たちの姿があった。

「——ッ!!」

それを見た千景は、すぐさま血の気が引くような感覚を覚えた。

「処刑処刑処刑イツ!!」

警察官たちが引金を引く。

轟音と共に、弾丸が撃ち出される。

その銃弾全てが、冬樹に向かって突き進む。

その弾丸が、全て冬樹に叩き込まれる——その寸前で——

「——『天鎖刈』ッ!!」

千景が、鎖を使って弾丸全てを叩き落とした。

「千景……!」

「逃げるぞ」

御神刀発動による物理保護による身体強化で冬樹を抱えて飛び上がる千景。

「逃げるぞッ!」

「追え! 追え! !!」

建物の屋上を走る千景。

「みんな、どうし、ちゃった、の?」

「分からない。とにかく今は創代神社に向かおう」

背後から弾丸が飛んでくる。

しかし、千景はそれをかわしつつ、神社に向かった。

「これは一体……!?!」

神社に繋がる階段の所で、奏は絶句していた。

そこには、まるでゾンビのように階段を上がってくる、絡久良市の住人がいた。

しかし、その全てが、創代の張った結界に侵攻を阻まれていた。

「これは、まさか、魔器・・・それも精神操作系の、町全域に広がる程の・・・!?!」

その事実には、奏は驚愕する。

一体、いつ、これほどまでの人間を掌握したのか。

精神操作系の魔器の特徴として、まず、相手の洗脳するのは、洗脳する相手に何かしらの接触をしなければならぬという事がある。

眼をあわせる、直接触れ合う、所有物を持たせるなど、さまざまだが、その全てが必ずなんらかの直接的なコンタクト行動をとらなければ、相手を洗脳する事は出来ない。

一体、いつ、これほどの人間と会う事が出来るのか。

「く・・・」

「奏!」

「あ、椿さん!」

そこへ、椿が飛んでくる。

「やはり魔器か」

「ええ。結界が彼らを拒んでいる時点で、結界が作用する程に彼らは危険な状態のようです」

創代の結界は、魔器使いの侵入を阻むだけでなく、魔器使いの傀儡となった人間の侵入も拒絶するように作られている。

これによって、巫女は敵の攻撃を受けにくいのだ。

もちろん、四月あたりの『攻』の時のような例外も存在するが、滅多に起きない。

そこへさらに、冬樹を抱えた千景も飛んでくる。

「奏さん、椿さん!」

「千景か・・・それとそっちは水霜の子か」

千景が冬樹を下ろし、奏と椿は二人に駆け寄った。

「奏さん、これは一体・・・!?!」

「おそらく、最後の魔器が行動を起こしたみたい。それも、相当厄介なのがね」

「厄介……ですか」

「ええ」

そこで、奏は冬樹に歩み寄り、そして、目線を合わせるようにしやがんだ。

「ごめんね。こんな事に巻き込んで」

「い、え、私、まだ、どういう、状況、なのか、わから、ない、けど、大変、な、こと、なん、です、よね……？」

「……ええ。とつても危険よ。だから、貴方はここで大人しくしててね」

奏は、彼女の頭を撫でる。

その間に、千景と椿は街の住人の対応について考えていた。

「さて、千景。こいつらどうする」

「できるだけ傷つけたくありません。どうかして洗脳を解く事が出来ればいいのですが……」

「別に殴ってもいいんだぞ？」

椿が目を細めながら、そう諭すも、千景は首を振る。

「俺が人を傷つけるのは嫌なのは知っているでしょう」

「お前は理不尽に暴力を受けてきたのだぞ？」

「それでもです」

千景は、頑固として彼らを傷つける気はないようだ。

「物好きめ。本当に千歳に似て来たなお前は」

「母さんに、ですか？」

「ああ、自分の心情については一度決めたら手小でも動かないし、曲げない奴だった。本当に、変な所で似ているなお前たちは」

「そうですか」

それを聞いて、千景は気分が高揚した。

母親と同じという事が、彼にとっては嬉しいのだろう。

それはともかく、千景は考える。

（敵は、この街全体の人間を掌握し、俺達をいきなり襲わせた。何故

だ。何故このタイミングで魔器を起動したんだ……？」

そこで、千景は奏に聞く事にした」

「奏さん。精神操作系の魔器の特徴について、教えてくれませんか？」

「魔器自体の武器は、決まった形ではないというのは知っているわね。ゴーグルであったり、首輪であったり、ハンマーであったり。それは分かっているわね？」

「ええ」

「それで、特徴についてだけど、魔器に決まった形がないから、武器ではどんな能力なのか、当然分からないわ。ただ、精神操作系の魔器が相手を操る時に必ずする行為は、相手との直接的干渉コンタクトが必要になってくる。体に触れる。目を合わせる。言葉を交わす、とか。電話越しでの会話は、含まれないわ。そして、魔器の能力にハマってしまったその人は、初めは魔器の能力にかかった事には気付かないわ。ただ、記憶に関しては色々と変わってくるわ。洗脳されている間の記憶が無かったり、曖昧な場合、あるいは、記憶がありながら専横されている、という事があるわ」

「なるほど」

千景は階段で結界に進行を阻まれている人々を見る。

「……助ける方法は……？」

「……あるにはあるわ」

奏は、懐から一冊の書物を取り出す。

「それは……？」

「『教導御書』……代々の教導者たちが、後世の魔器使いたちの為に記した、魔器対策書って言った所ね」

「それに、何かヒントが……？」

「ええ。これによれば、精神操作型には、遠隔操作型と自動操作型の二つがあるみたいね。重要なのは、これは、御神刀において、『断ち切る』という概念を想起させる『文字』の持ち主にしか、解除は出来ないって書かれているわ」

「断ち切るの概念を持つ文字……」

椿が繰り返す。

それはいわば、魔器使いと彼らとの間の繋がりを断つという事を意味する。

「どうやったらそれが出来るのだろうか。」

「なるほど、だいたいわかりました」

千景が階段を降り始める。

「千景？」

「千景君？」

ゆつくりと階段を降りていく千景は、鎌を大きく掲げる。

ゾンビのようにうめき声をあげる市民は千景の姿を視認すると、さらにそのうめき声を張り上げて千景に襲い掛かろうとする。

「—— 『束縛解鎖』 ツ!!」

千景が、鎌を一閃し、最前列の人々を横一文字に斬った。

「!!?!」

その光景に、驚愕する椿、奏、冬樹の三人。

しかし、それを受けた最前列の人々は、いきなり前のめりに倒れた。

それはすなわち、結界内に入った事を意味する。

「え．．．!?!」

それにさらに驚く三人。

しかし、倒れた人々が、起き上がった時、その様子は先ほどとは一変していた。

「お、俺は一体．．．」

「私、何を．．．」

「正気に戻っているだ．．．?!」

なんと、洗脳が解けたのである。

「精神を束縛している、という事にして洗脳を解きました。縛っているものを鎖と想定すれば、断つ事は容易いです」

千景が、そうなんでもないように答える。

「さて、次の奴らも．．．」

「ち、千景．．．!?!」

「ん？」

ふと、千景の名を呼ぶ人物がいた。

それは、魚屋の店主だった。

「……………」

「……………何か?」

「どうやら、何かを言いたかったようだが、やがて耐えるように俯いた。」

「……………なんでも、ない」

「そうですか……………?」

その様子に、千景は思わず首を傾げる。

その時、また結界に洗脳された人々がぶつかる。

「り、梨花……………!」

「ッ!」

魚屋の店主が向ける視線の先、そこには一人の女性がいた。

「処刑、処刑、処刑……………」

「正気を取り戻してくれ梨花、俺達は……………」

「あの人は貴方の妻ですか?」

千景が、視線を向けずに聞く。

「……………そうだ」

その質問に、魚屋の店主は答え、やがて、悔しそうに顔を歪めながら俯いた。

「俺は、いままで何をやってたんだ……………!!」

血が滲む程に手を握りしめている。

それほど、悔しいのだろうか。

今まで、自分らしくない事をしていた事について。

「……………そういう事か」

魚屋、そして、周囲の千景が洗脳を解いた者達の反応から、千景はある推測を立てた。

そして、キレた。

千景は歩き出す。

「ふぎけるなよ……………」

千景は、体内に煮えたぎるマグマのような怒りの蓋を、静かに開けた。

「この街の人たちは、お前の道具じゃないぞ・・・!!」

瞬間、千景が集団の中に飛び込み、一気に階段を駆け下りた。

そして、すれ違いざまに、階段に群がっていた人々全ての洗脳を斬った。

それによって、人々は正気を取り戻す。

「椿さんツ!!」

千景が階段の下から叫ぶ。

『布』は『縄』にもなりますツ!!それなら洗脳を『断ち切る』事が可能でしょう!!」

「ツ！その手があつたか！」

千景の言葉に椿も気付き、そして飛んで千景の隣に降り立つ。

「全員の洗脳を解いて、こんな事をしたくそツタレをぶん殴る！それでいいですね!!」

「珍しくキレているなお前。だが、その案には賛成だツ!!」

街の人々が襲い掛かってくる。しかし、二人はそれを一気に迎え撃つ。

千景は鎌で、椿は手刀^{てがたな}で、洗脳を引き裂いていく。

一方で、とある学校の屋上で、例の少年が一人笑っていた。

「いいぞ、こっちに来い。復讐の為に、さっさとここに来い、不道千景君・・・!!」

少年は、高笑いをしていた。

「ハアツ!!」

一旦、樁と別れつつ、洗脳された人々を斬り、洗脳を解いていく千景。

「ガアアアツ!!」

「ッ!」

そこへ、信也が千景に向かって金属バットを振り下ろしてくる。

「信也・・・!」

「死ねえ、千景え・・・!!」

再度金属バットを振り下ろそうとする信也。だが、この数ヶ月鍛錬を重ねてきた千景には、そんな攻撃は泊まって見える。

すぐさまかわしてその胴に一閃を入れる。

「が・・・!?!」

やがて地面に膝をついて、震えた。

「お、俺は・・・」

「信也、大丈夫か?」

千景が、他の人々の洗脳を解きながらそう聞いてくる。

「千景・・・俺は・・・」

「何も言うな。話はあとにしよう」

千景は走り出す。

その様子を、信也は茫然と見るしかなかった。

「ハアツ!!」

一方の樁は、操られていた自分の娘、優を助けていた。実は、優の様子が昨夜から変だったのだ。

「優、しっかりしろ！」

「げほっ・・・おか・・・さん・・・？」

「どうやら意識が朦朧としているようだ。」

「どういう事だ・・・他の者は全員・・・」

「おかあ・・・さん・・・わたし・・・まけ・・・ちや・・・った・・・」

「負けた・・・？　どういう事だ？　優」

「そこへ、奏がやってくる。」

「椿さん！　優ちゃんは大丈夫ですか!？」

「ああ、どうにか・・・でも、どういう事だ？　何故、優だけこんなに意識が朦朧と・・・」

「おそらく、洗脳の深度が深すぎているようです」

「どういう事だ？」

「魔器の洗脳には、その度合いがあつて、その度合いが高いほど、その相手はより精神に影響を及ぼすようです。おそらく、優ちゃんは・・・」

「魔器使いに、かなり重い洗脳をされたのか・・・!？」

「おそらく、今優ちゃんは危険な状態です。まずは安全な所に・・・」

「私、が、やり、ます」

「冬樹ちゃん・・・」

「そこへ冬樹が優を抱える。」

「私、なら、大丈夫、です、ですから、千景を、助けに、いつて、くだ、さい」

「水霜・・・分かった、優を頼んだぞ」

椿は冬樹の頭を撫でて、立ち上がる。

そして走り出し、奏もその後を追っていく。

逆に、冬樹は振り返って神社の方へ走る。

今安全なのは、あそこ以外にない。

だから、冬樹は走った。

そして。

「ここが魔器使いの居場所か……」

「だがここは……」

千景、椿、奏の三人は、御神刀の探知機能を使って見つけ出した魔器使いの居場所に辿り着いた。

しかし、ここは——

「……坂上中学」

奏の通う、坂上中学校だった。

「でも、どうしてこんなところに……」

「坂上の生徒、という可能性があるのかもしれませんが」

「魔器使いに選ばれるのは、十五年前に結界から悪霊たちが出てきた時だけです。生まれたばかりならば、可能性もあるかもしれませんがね……」

奏の説明を聞き入れ、千景は見上げる。

「だが、どちらにしろここにいるのは確かだ」

椿の言葉に二人は頷き、坂上中学のグラウンドに足を踏み入れる。

その時、奏を前後で挟む様に後ろにいた千景は、首筋にちりり、という悪寒のようなものが走った。

「……ッ!?!」

(いつの間に背後にッ!?!)

それに気付いた時、そこには、一人の女性が立っていた。

その右手は、すでに千景の胸に向かって振り下ろされていた。

そして——

「千景ッ!!」

椿が奏を押しつけて千景を背後から抱きしめるように、首あたりに左手を回していた。

そして、女性の右手は、その椿の左腕に振り下ろされた。

その手には、何か小さな拳銃のようなもの。

その引金が引かれ、プシュツ、という炭酸飲料の缶を開けるかのような音が聞こえた。

すぐさま千景がその女性を鎌で斬る。

そして、千景はその女性の正体を知った。

「雅さんッ!?!」

そう、桐馬雅だ。

「……………あ」

やがて、雅は自分がしでかした事に気付きつつ、地面に膝をついた。

「ああ——」

「椿さん！大丈夫ですか!?!」

奏が椿にかけよる。

「ああ、私は、なんてことを……………」

「ご苦労様、姉さん」

『!?!』

突如、どこからか聞こえた声に、千景が身構える。

「信じていたよ安座間さん。貴方なら必ずその子を守ろうと体を張るって」

だが、奏は、その声を震わせていた。

「……………嘘、嘘よ……………」

その人物は、千景たちの前に現れる。

黒い装束を身に纏い、こちらに恐ろし気な笑みを向ける、その少年。

「だって、貴方は……………」

「ごめんね、奏さん。でも、お陰で復讐の準備は整ったよ」

そこに立っていたのは——

「……………戸愚呂新人」

「こんにちわ、不道千景君」

始まりは、六年前。

あの日、千景が全ての記憶を失った日。

そして、千景の両親、不道千歳と不道景矢が、死んだ日。

その日から、この復讐は始まっていた。

罪《Sin》

「戸愚呂新人……」

その名は、奏に向かって告白をした、少年の名だ。

されど、今日の前に立つその少年は、千景たち救導者たちの敵だった。

「こんにちわ、不道千景君」

新人は社交的な笑顔で千景に話しかける。

「お前が、最後の魔器使いか」

「その通り、といたいところだけど、僕はそれ以前に『復讐者』だ」
アウエンジャー

新人の言葉に、千景は首を傾げる。

「僕はね、ずっとこの時を待っていたんだ。この街に復讐する機会を」
「なんだと？」

千景が問いかける。

「どうして……」

そこで、奏が前に出て問う。

「どうして、貴方が、魔器に？魔器に選ばれるのは、十五年前の結界が緩んだ時だけ。だけど、その時は私も貴方も生まれていなかった。

だって、私たちが産まれたのは、その一年も後だから……」

「ああ、これの事ね」

新人の手には、あまりにも中途半端な大きさの、剣とも言い難く、かといって小さなナイフとも言い難いサイズの剣が握られていた。

「面白いよね、魔器って。何せ、執念が深い魂の魔器ほど、破壊されてもその魂は残り続け、また呼応する相手が見つかったらまた取り憑くんだから」

「それ……じゃあ……」

奏が青ざめる。

「そうだよ。僕は破壊された筈の魔器『悪』に選ばれたんだよ」
「!?」

その事に、驚愕する一同。

「『悪』……『憎悪』の『悪』か……」

「その通りだよ。やはり君は賢い。しかし、君は同時に愚かだ」

「なに・・・？」

「君は考えても良い筈だ。人に仕返しする事をね。君は散々理不尽な暴力を受けてきた。知らない罪で殴られ、金の為に殴られ、人のストレス発散の為のサンドバックとして殴られ、だけどそれでも君は決して反撃しようとしなかった。それは何故だい？君は怨みの一つや二つ抱いても良い筈なのに」

それは最もな事だ。こんな理不尽な事をされれば誰だって怒るし、絶望する。

しかし、千景はそのどれも抱かなかった。

「だからこそ、君は愚かだ。悪感情こそが人間の醜き部分であり、人間らしいところだ」

「・・・それで、俺に何が言いたい？」

「別に、君はその事について、どう思っているのかと聞いているだけだ」

「別に俺にはあいつらに起こる理由もないし怨む理由も無い。これもこれも道理だと思ってる」

「それは何故だい？」

「俺の親は犯罪者だ。そして俺はその息子。その息子が親と同じように咎められても、仕方のない事だと思っっているからだ」

「それ、他の同じ境遇の子たちには言えるのかい？」

「言えない。これは俺だけの持論だからな」

「そうか。でも、だからこそ僕には君が愚者に見えて仕方が無い」

新人は語る。

「人とは、負の感情があつてこそ人たりえると僕は思うんだよ。怒りがあるから争い、哀しみがあるから嘆き、苦しみがあるから奪い、憎しみがあるから嫌う。それこそが人間の美点であり、人が最も嫌う部分だ。だけど、それを否定してしまったらこれまでの歴史をどうやって証明していく？苦しいから誰かから奪う事、それが理由で争いあう事、そしてそれはどんどん広がっていく。そういう事から人の歴史は成っていったんだよ」

「それでも、人はそれを乗り越えてきたんだ」

千景がそれを否定するも、新人はそれを肯定する。

「その通りだよ。だからこそ、僕のこの行為は、人の歴史において当たり前の事なんだよ」

突如、新人の手の中にあるナイフが、妖しい光を放つ。

その光は輪を描き、その中心に『悪』の文字を顕現させる。

そして、千景たちの周囲に数人、囲うように現れる。

その手には、金属パイプや本物の刀などの武器を持っていた。

「こいつらは・・・!?!」

「彼らはこの街の中でもかなりの実力者たちだよ。学校の部活、大会のトップ入りなどね。ちよつとやそつとじゃ倒されないと思うよ」

ふふ、と新人が嗤う。

「どうして・・・」

そこへ、奏が問いかける。

「どうして、こんな事を・・・するの・・・? 貴方は、今までずっと、他人の為に尽くしてきた。笑顔を絶やさず、人への気遣いも忘れず、間違った事は嫌って叱りつけ、そして、誰にでも優しくった貴方が、何故・・・」

「ああ、それ、全部演技」

なんでもないかのように、新人は答えた。

「そんなの僕の計画を気付かせない為のブラフに決まっているじゃないか。それに、僕の魔器は従来の魔器の洗脳とは違うからね」

新人は右手のナイフを掲げる。

「この魔器『悪』はね、フィールド単位でその範囲内にいる集団を一斉に洗脳出来るんだよ」

『!?!』

その事実を、雅を覗いた全員が驚愕する。

それはつまり、彼は、相手と直接接触しなくても相手をいつでも洗脳出来たという事ではないのか?

「僕は、ずっとこの日を待っていたんだ。父さんを殺したこの街の人

間全員にね」

新人は嗤う。

しかし、その眼は、嗤っていないかった。

「新人……」

そこで、ふと後ろの雅から声が上がった。

「貴方は……あの日お父さんが殺された理由を知っているの？だから、貴方は今まで、ずっとこの事を夢見てきたの？」

「うん、そうだよ姉さん。僕は知っているんだ。父さんが殺された日の事を」

雅の問いに、新人はうなづく。

「雅さん、貴方は……」

会話の様子に、千景は、気付く。

「……あの新人って奴は、私の実の弟よ」

『!?!』

さらなる衝撃。

「お父さんが死んだあの日、私は孤児院に、当時優秀だった新人は、それなりの名家に引き取られたの。その家では、あと弟一人を養うのが精一杯だったみたいだったみたいだから、仕方ない事だと思ってたわ。だけど、私はその時から……」

「そう、姉さんは僕に洗脳されていたんだ。でもまあ驚いたよ。まさか姉さんが千景君の誕生日を知っていただなんて。ま、そんな事はこの際どうでも良いか」

ここで新人は話を一旦区切った。

「何故、僕がこんな事をする事に至ったのか、教えてあげるよ。事の始まりは六年前。その日までは、僕ら、桐馬家は幸せだったんだ。けどね、それをある日、壊されたんだよ」

新人は、ありありと話す。

「母さんは、ある日、殺されたんだ。理由は会社の虐め。それに耐えられなくなった母さんは、自殺したんだ。その日からだよ、父さんが可笑しくなったのは。会社への憎悪を滾らせて、母さんへの渴望を求めて。けどね、可笑しくても父さんは僕らを養ってくれていたんだ。」

苦しい生活だったよ。家賃はもちろん、家にあるもののほとんどを売り飛ばして金にして、やがて売る者が無くなっても父さんは夜遅くまで働いてお金を稼いでいたんだ。だけど、それでも僕らは幸せだったんだ。例え苦しくても、母さんがいなくても、笑って暮らしていける生活があつたんだよ。だけど、奴らはそれすらもぶち壊したんだ」

新人の声が、低くなる。

「たかが気に入らないという理由でデマの情報を流し、父さんは仕事を追われ、僕らは孤立した。そして、とうとう奴らは母さんの事を侮辱したんだ。それで父さんは何をしたと思う？——創代様に願ったんだよ。奴らに絶望を、奴らに地獄を、死んだほうがマシとさえいえる程の苦しみを味合わせてやってくれと、創代様に願ったんだ」

だけど、と新人の表情が、一層険しくなっていく。

「その願いさえも、ある警察官によって潰されたんだ。心臓を撃ち抜かれ、殺されたんだ。僕はその瞬間を見た。そして、憎んだ、この街の全てを。母さんを殺した会社も、会社の情報に踊らされた町の奴らも、そして、父さんの願いを聞き入れなかった創代も、何もかも、全てをね！」

その声に、憎悪が込められていた。憎しみが込められていた。怒りが込められていた。

まるで、この世の全てを怨んでいるかのように。

「だから僕は願ったんだ。この街の奴らに復讐出来る力を下さい、てね。もしたら、創代とは違う何かが、その力をくれたんだ。それがこれだよ。この魔器『悪』が、僕に復讐の機会を与えてくれたんだ。だから僕は考えた。どうやったらこの街の人間を絶望させたまま殺す事が出来るのかってね。そして気付いたんだ。洗脳して、その矛先を一人の人間に向け、そして、自分たちが操られていた事を自覚させて、そして、自分たちが虐めていた人間に復讐されるというシナリオをね！」

「その標的が、千景だとしても言いたいのか!?」

雅が声を張り上げる。

「その通りだよ。千景君はね、僕の父さんを撃ち殺した男の子なんだよ」

「……まさか」

そこで奏は気付く。

「あの男は……貴方のお父さんなの……？」

それは、奏でも覚えている。

六年前に、突然神社に押しかけて来た男が、当時巫女を務めていた奏の母を脅し、それを拒否された時にはたちまち殺し、あまつさえ父親まで殺した後、千景を生贄に捧げる事で願いを成就しようとしたのだ。

「その通りだよ。だけど、これだけは分かって欲しい」

新人は奏に手を伸ばす。

「君に惚れたのは本当だよ。いつも物静かで、だけど本当はお茶目で、あわてんぼうの君が、僕は好きだったよ。だから、君だけは特別に生かしてあげるよ」

新人は千景に言う。

「不道千景君、君が六年前に記憶を失った理由。それは僕の父だ。父が君を生贄として願いを成就しようとした。だけど、生贄をささげたにも関わらず、創代はその願いを叶えなかった。だから、君は『無駄な犠牲』のもと、記憶と体の機能全てを失った。そして、君の両親は、そんな君の記憶以外の体の全ての機能を戻してもらおう為に、自分たちの体の機能全てと命全てを捧げたんだよ。だからね、千景君」

新人は自分の胸に手を当てた。

「僕の父は、君の両親の仇だ」

千景に、その事実を突きつけた。

「……あ、そう」

しかし、千景は、あまりに感心はしなかった。

「……あれ？そんなに驚かないんだね」

「そいつはもう死んでるし、かと言ってお前を殺す気にもなれない。そもそも俺は人を殺したくないんだ。例え、親の仇であろうと」

千景は、そう斬り捨てた。

「……なるほど、どれほど君の憎悪を煽ろうとも、君はそもそも、憎悪そのものを持っていないみたいだね」

新人は、やれやれと首を振る。

「仕方が無い——無理矢理にでもその憎悪生み出させて貰うよ」
その言葉を発した瞬間、一齐に周囲の武装した者たちが襲い掛かってくる。

「椿さん！」

千景が叫ぶ。だが、椿から返事は無い。

「椿さん……!?!」

千景は封印縛鎖で結界を張り、椿の方を見る。

そこには、息苦しそうにうずくまる椿がいた。

「椿さん!?!」

「ごめんなさい……さつき私が安座間さんに打ち込んだのは、筋弛緩薬というもので、筋肉を動かなくする薬で、それで……」

「——心臓の筋肉が止まるって事かツ!?!畜生!!」

千景は鎌を振るう。

『封印解鎖』『解毒』『鼓動』ツ!!『封印縛鎖』『心臓停止』ツ!!!」

千景は、すぐさま二つの能力を同時発動する。

「——ッハア」

「椿さん！大丈夫ですか!?!」

奏が駆け寄る。

「ハア……すま……ない……まだ、体の筋肉が……」

「っ、『筋弛緩』入れるのを忘れた……!」

「余所見をしている場合かい?」

『ツ!?!』

気付けば、新人が千景が張った結界の目の前に立っていた。

『『悪意開錠』』

新人のナイフが、千景の鎖に触れる。

すると、まるで錠が外れるように結界が解かれた。

「ツ!!」

その途端、周りにいた武装した人たちが一齐に襲い掛かってくる。

それを、千景は一人で凌いでいく。

新人は下がって、安全地帯からその様子を見ていた。

敵の数は、全部で六。

新人を加えれば七だが、今襲い掛かってくる者たちは全員で六人だ。

しかし、そのどれもが、武器を扱う事に関しては長けた武道家。

千景の攻撃をもの見事に躲していた。

「くっ……!!」

さらに、千景は背後にいる奏、椿、雅の三人を守らなければならず、完全に防戦一方だった。

そこで、ボクシングで仕掛けてくる男が、千景の腹に強烈なアツパーカットを叩き込んだ。

「ぐう?」

千景の体重は平均より軽い。ここで粗食が祟り、高く打ち上げられる。

そこへ、弓を持った女の一矢が迫る。

それを千景はどうか鎌で弾く。

しかしそれで落下する事には変わらず、その下には木刀を構えた男が下段に刀を構えていた。

(ここだッ!!)

そこへ千景は鎌を一閃。

するとその斬撃が鎖となり飛び、下にいた男に直撃する。

『封印解鎖・飛』ッ!!」

解鎖の力を斬撃に乗せて男を叩き斬ったのだ。

そのまま着地、すぐさま槍を持った女が千景を襲う。

しかし、千景はその一撃を見切つて懐に飛び込むと、女の鳩尾に掌底を叩き込む。

金属が砕ける音が響き、女の洗脳が解除される。

「これで……」

「千景、後ろよ!」

雅の叫び声に、千景は背後を向く。だが、向いた瞬間、いきなり顔

面を何者かに掴まれる。

「捕まえた」

「——ッ!？」

なんと新人だった。

先ほどまで後ろで高みの見物をしていた少年が、何故今になって前に出てきたのか——

「僕の洗脳能力は、フィールド単位で集団を洗脳できる。でもね、より強い洗脳をかけるには、直接触れる必要があるんだよ」

「まさか——」

その新人の言葉に、奏はその表情を蒼白にさせる。

「君は、他人からの攻撃じゃ決して憎しみを抱かない。だから、僕が直接植えつけてあげるよ!!最高の憎悪をッ!!」

「やめて新人く——」

奏が叫ぼうとするも、それよりも早く、新人は、千景に洗脳を開始した。

妖しい光が発せられ、その光が蛇のように唸り、直接千景の頭の中へ入っていく。

「があああああああああああああ!？」

そして、千景は絶叫する。

「ふふ、ハハハ、アハハハハハハハ!!委ねろ千景君!!その憎悪に、怒りに、憎しみに、その全てに身を委ねろ!!そうすれば、君は楽になれるさ!!そう、きつと、爽快だぞ!!!」

千景の中に、ありとあらゆる負の感情が流れ込んでくる。

『憎い』『殺す』『ぐちゃぐちゃにしてやる』『苦しめてやる』『殺してやる』『ムカつく』『死ぬ』『憎い』『全てが憎い』『よくも虐めてくれたな』『仕返ししてやる』『復讐してやる』『壊してやる』『跡形も無く殺し尽くしてやる』『消えてしまえ』『消してやる』『殺したい』

溢れ出てくる憎悪。

それは、本来なら千景自身が自ら抱くべき感情だ。

その圧倒的奔流に、千景の意識は、どんどん流されていく。

「ガア……ア……」

心が、真つ暗な何かに塗り潰されていく。

精神が、最悪な方向へ堕ちていく。

何かの歯止めが外れていく。

頭の中で、声^ががささやいてくる。

『もう終わりだ』『全部壊してやる』『何もかも跡形も無く』『全て消してやる』『殺して殺して殺し尽くして』『一人残らず殺して』『血を舞い上がらせて怖がらせて』『絶望させて』『苦しみを味わせて』『全部消して』『何もかも、ひとつ残らず』

壊したい、と叫ぶ自分^{だれか}がいる。

殺したい、と咆える自分^{だれか}がいる。

消したい、と囁く自分^{だれか}がいる。

そう思う度に、心がぐずぐずに崩れていく。いけない方向へ堕ちていく。

自分が自分で無くなっていく気がする。己の全てを捨ててでも、壊したいと思ってしまう。

だから思ってしまう。

もう、疲れた——と。

殴られ続ける日々、罵声を浴びせられ続ける日々、大切な物を、どんどん失っていく日々。

もう、嫌だ。

こんな人生、生きていても良い事なんて何一つない。

ただ損な事をするだけだ。

自分はこんなに傷付いて、守ってやっているのに、周りの奴らは感謝の一つも述べない。

助けてやつても、何も言わない。

もう、疲れた。

人を助けるのも、虐められ続ける日々も、何もかも、全部。

だったら、全部壊しても、誰も咎めないだろう。

だって、咎める人は誰もいないのだから。

全部壊してしまえば、誰も自分を咎める人なんていないのだから。
もう、このまま――

御神刀は、その心に敵意を、相手を傷つける気になれば、それは、他の凶器と変わらない、武器となる。

そうなれば、御神刀は、人を傷付ける兵器となる。

今まで、人を守る為に使ってきた武器を、今度は、人を殺すために振るおうとする。

そう、想い始めた時――

ふと、目の前に、一人の少女がいた。

千景よりは年上で、奏と同じくらい、長い黒髪の少女。
その少女が、両手で千景の頬を包み込んでいた。

しかし、その表情は険しく。

その顔をぐいっと眼前まで引き寄せ、千景に、告げた。

「――我らは罪を背負う一族」

「――人を傷つける事を許されず、人を守る事を義務とする一族」

「――背中の刻印の元に、それは永久不滅の我らの誓約であり、未
来永劫消える事の無い罪科」

「――貴方の行為は、私たちの誓いを蔑ろにする行為」

「――それは赦されない行為。私たちに、その資格などないわ」

「――その身を炎で焼きなさい。そして罪を自覚しなさい」

「――我らは罪の一族。故に人としての権利を剥奪された一族」

「――これは私の罪。私で終わるはずだった罪。だけど、私はや
はり諦めきれなかった」

「――だから私はこの罪を未来に託した。いつか世界を取り戻す
事を願って」

「――だから手始めに、この街を救いなさい」

「――救い、胸を張りなさい。私たちにその行為しか赦されてい
ないから」

「——たとえ 仮令、この身を灰にしようとも、人を救いなさい」

「——それが、私たちの誓いにして呪いにして罪にして、願い」

「——私の名を受け継ぐ子。今こそその忌み名を知り、その身を業火で焼き、誓いを果たしなさい」

「——勇者は永久に不滅。私は千の景色を殺した失格勇者。故に私は消えず、永久に消える事などない」

「——さあ、立ち上がりなさい——罪を力に変えて、立ち上がりなさい」

「——救い導く者、それが私たち——」

その瞬間、千景の背中から、紅い炎が舞い上がった。

『!?!』

その炎は、千景を包み込み、火柱となって天を貫く。

新人は慌てて下がり、その炎の範囲内から逃れるも、その熱波に思わず顔を隠す。

「——これは、全て我が罪、我が咎、我が戒めにして、願いの証」
千景の姿が、変わる。

上半身の装束は全て焼け、かつてつけられた背中への火傷を晒す。

「——それは永久に不滅であり、失格者としての証でもあり」

そして、その背中に、光る輪を背負っていた。その輪の中心には――

「――我ら、千の景色を殺す一族の誓いの象徴である」

――『罪』の文字が描かれていた。

「――『かいごうつみのくさり戒業罪乃鎖』」

炎が蛇のようになり、千景の周囲を飛び回る。

それはまるで、魔女狩りの炎のようだった。

「……『罪』……?」

奏は、彼の背中に現れた『罪』の文字に、戸惑いを隠せなかった。

何故、彼の背中に、文字の概念があるのか。

それ以前に、あの炎は一体何なのだろうか。

何故、彼の背中から、自らをも焼き尽くすかのように燃え上がっていた。

「ツ……」

一方で新人は後ずさっていた。

(なんだよあれ。あんなの聞いてないぞ……天鎖刈の真解はただの限界突破の筈だ。なのに、なんで炎なんかを……!?)

新人が葛藤している間に、千景は鎌を振り上げる。

「戸愚呂新人」

そしてその鎌を新人にむかって叫ぶ。

「お前は許さない」

ただ一言、それだけを告げ、鎌を振り上げると、その柄頭を地面に叩きつけた。

すると炎が波状に広がり、周囲にいた洗脳された人たちを包み込む。

すると、彼らに掛けられていた洗脳が焼かれ、正気を取り戻してい

く。

それだけでは収まらず、炎は広がり、やがてこの絡久良市全体を包み込む。

それだけで、町中にいた洗脳者たちの洗脳が一斉に解かれていく。

「……!?!」

その現状に、新人は立ち尽くすしかない。

「終わりだ。これでお前の目論見は全て潰えたぞ」

鎌を向ける千景。

一方の新人は、まだ茫然としていた。

「ぐ……う……」

「椿さん！大丈夫ですか？」

「あ、ああ。あの炎を受けたら、いきなり調子が良くなった」

「そうですか……良かった……」

奏が心底ほっとする。

その間に、雅が千景の隣に立つ。

「新人、もうやめましょう。貴方の計画は、失敗したわ」

雅も、そう諭すように、新人に言った。

しばし、茫然としていた新人だったが、やがて、その体をわなわなと震わせて、口を開いた。

「ふざけるなよ……ふざけるなよッ!!」

怒りに顔を歪め、その周囲に黒い瘴気を巻き散らす。

「無駄になんかさせない。無駄になんかさせるものか。僕は、今日この時の為に頑張つて来たんだ。この街を全て壊して、ここに住むゴミ共を全部殺してやるってあの日誓ったんだ。それを、それを、こんな簡単に終わらせてたまるものかッ!!」

突如、新人の体が膨れ上がる。

『!?!』

同時に、その手に持つナイフまでも肥大化し、巨大な幅広の大剣に成り変わる。

「椿さんッ!!」

「真解——『呪装滅布』ッ!!」

椿が真解を発動し、その姿を変える。真つ黒な包帯を体中に巻きつけ、その口元さえも覆う。

「お前が殺さないなら僕が殺す、殺して殺して殺し尽くしてやるツ!!!」

「やめなさい新人!」

「危険です、下がって下さい!」

新人を止めようとする雅を、奏が抱き着いても阻止する。

その間にも新人の体は肥大化し、おおよそ三メートルの大男になる。

『憎悪強化』ア・・・!!!」

黒い瘴気を巻き散らして、醜い怪物に成り果てる新人。

「戸愚呂・・・!!」

椿は、そんな新人の様子を憐れみ。

「そんなに壊したいか」

千景は、彼に怒りを向ける。

「だったら俺が止めてやるよ・・・!!!」

炎を纏って、千景は憎悪に立ち向かう。

千景と椿は、悪意に立ち向かう。

失格者の罪滅ぼし

「ガアアアアアアッ!!」

「椿さんは正面からッ！俺は側面から攻撃を試みますッ!!」

「承知したッ!!」

新人が大剣を片手で振り上げる。

そこへ、椿が正面から飛び込む。

そして新人は一気に大剣を振り下ろす。

そこで椿の直感が告げる。

(この一撃はまずいッ!!)

すぐさま左手を伸ばす。

そこへ新人の大剣が振り下ろされ、椿の左手を沿って逸れ、椿のすぐ横の地面を抉る。

そして、椿は、引き絞った右拳を、新人の鳩尾に叩き込む。

しかし。

「ッ!」

「ガアアアアアッ!!」

攻撃は通用していなかった。

拳は、新人の纏う瘴気によってギリギリの所で止められていた。

すぐさま拳を引こうとした椿だったが、瘴気が右手に絡みつき、引けない。

その間に新人が次の攻撃を仕掛けようとする。

単純に、もう一度大剣を振り下ろす気なのだ。

そうして大剣を振り上げた時、横から燃える蛇が新人の顔面を殴り飛ばした。

「ゴガアアアア!」

あの巨体を押し、尚且つ吹き飛ばすその威力は、目を見張る。

その一撃を放ったのは千景だ。

炎を纏い、自分の手足のように従えるその姿に、周囲は驚きを隠せない。

されど、その攻撃の正体は炎を纏った鎖。

千景の御神刀『天鎖剣』の『撃鎖』あらため、『撃焼鎖』ともいうべき攻撃である。

そこで奏は気付く。

(まさか千景君、椿さんの攻撃が通用しない事を見越して、椿さんをわざと囷に・・・!?)

戦略的に頑丈な椿を囷に使うのは、確かに敵の注意を引くには懸命だ。

しかし、それは流石に椿にとっても重荷と言うものではないだろうかと思つた矢先。

「椿さん！今のうちに手刀を打ち込んでください！瘴気であっても所詮は煙、実体無いものが実体あるものを捉えられる訳がありませんッ!!」

「なるほどな」

「イメージを強く。貴方の文字は『布』と『呪』。この馬鹿の『憎悪』を、貴方の『呪い』で打ち破つて下さい」

「それならば承知したッ!!」

椿が拳を振り上げる。

その手は開かれ、四本の指が真っ直ぐ揃えられていた。

「『四本貫手』ッ!!」

呪いをその切っ先に込め、一気に突き刺す。

「ガアアアッ!!」

されど新人がギリギリの所で左腕を掲げ、その一撃を防ごうとする。

しかし、その一撃は、新人の腕を貫いた。

「グギャアアアアア!？」

「チッ！しくじった!!」

痛みに暴れる新人。

人体そのものにダメージはないが、精神的に痛覚が痛みを訴える為、その痛みが彼の脳を貫いたのだ。

剣を振り回し、どうにか上に覆いかぶさる椿をどけようともがく新人。

「く、この、大人しく・・・」

「ガアアアアアアアッ!!!」

新人が絶叫する。しかし、次の瞬間、新人の体が膨れ上がった。

『!?』

「ガアアアアアアッ!!!」

さらに力も増強されたのか、上にのしかかっていた椿を振り落とす。

「ぐう!?」

椿を振り落とした新人は立ち上がり、咆哮を放つ。

その殺人的音量に、周囲にいた者たちは耳をふさぐ。

「ぐ・・・うう・・・!?」

「うあ・・・!?」

しかし、その中で、千景と椿はそれをお構いなしに新人に攻撃を仕掛ける。

千景が鎌を横一文字に振る。

新人はそれを飛んで回避し、それを椿が追うように飛び上がる。

新人が剣を振るい、椿がその一撃を防ぎ、脊髄反射でによる反撃が可能な『自動反撃^{オートカウンター}』で反撃。

その応酬が続き、圧倒的防御力を誇る椿の体には傷一つつかず、反対に呪いの力によって新人の体には瘴気が払われたようにその体にダメージを蓄積していく。

落下と同時に二人は離れ、下がる新人を、横から千景が追撃。

炎を纏ったその攻撃は瘴気を焼き払い、新人の体に深い一撃を入れる。

それに悶絶した新人だったが、すぐさま反撃に移り、千景の真上から大剣を振り下ろす。

「遅い」

しかし、その瞬間に聞こえた無数の鎖が引き千切れる音が響き、千景の姿はそこから忽然と消える。

それは、千景が自らの限界を突破した音。

千景は、上段振り下ろしの一撃をかわし、新人の頭上を取ったのだ。

燃える刃を掲げ、千景は、戒罪^{Sin}の一撃を叩きつける。
『解戒煉獄』ッ!!』

強力無慈悲の煉獄の一撃が、新人に叩きつけられる。

「ギャアアアアアアアアアアア!?」

新人が絶叫する。

「新人……」

新人が悶える様子を、ただただ歯を噛み締めて見守る雅。

その視線の先では、あれほどの攻撃を喰らってもなお、戦おうとする新人の姿があった。

その新人に、千景と椿が連携して迎え撃つ。

しかし時が経つにつれ、攻撃を受け続ける度に、その体を大きく、その動きを速く、その攻撃を重く、強化していく。

「ぐう!」

「くあ!」

その度に、千景は限界を超え対応するも、しかし徐々に椿が遅れ始めていく。

そんな様子を、雅は眺めていた。

「……雅さん……」

「……新人は」

ふと、雅が語り出す。

「新人は、昔は、とても真面目な子だったわ。何事にも素直で、どんな事にも一生懸命取り組んで、いつも、お母さんの役に立とうとしてた。お母さんは、いつも仕事が忙しくて、帰りが遅いから、新人はいつもお母さんの代わりに家事の事をやってた。私は、寂しさのあまり、お母さんの事をいつも避けてた……私が、千景の誕生日に、贈り物をしてたのは、そんな、いつもお母さんの為に頑張ってた弟への贖罪のつもりだったの……千景のやる事は、いつも、新人と同じだったから……」

いつの間にか、雅は俯いて、泣いていた。

「……守っていればよかった。私が新人を見捨てて、百合籠に逃げ込まなければ……新人は、あんな風には……ならなかった……」

ならなかったのに……」

崩れ落ちて、嗚咽を漏らす雅。

「雅さん……」

奏は、そんな雅を、背中から抱きしめた。

「ぐあああ!?!」

「があああ!?!」

しかし、そこへ千景と椿が吹っ飛んでくる。

「ッ、千景君、椿さん!」

「ぐう……くそ、どんだけしぶといんだアイツ……!?!」

千景が起き上がる。

しかし、椿は立ち上がれない。

「椿さん……!?!」

「ぐう……う……」

「いけない、もう限界よ……!」

奏がそう叫び終えるのと同時に、椿の真解『呪装滅布』が解除される。

「な……!?!」

「椿さんの真解は、その文字が『呪』なだけあって、常にその体を呪いに蝕まれるの。だから、その状態を保っていられるのも、時間制限があるの!」

「マジかよ……」

立ち上がる千景。

「ガアアアア!!!」

「オオオツ!!!」

千景と新人がぶつかる。

「ぐ……くそ……」

「大丈夫ですか？椿さん」

「すまない……私が至らないばかりに……」

「いえ、気にしないで下さい……」

「そうも言ってもらえん……奇しくも、あの時と同じだ……」

椿の視線の先、そこには炎を纏って新人と戦う千景の姿があった。

どうやら、千景の使うあの罪の力は、天鎖刈の真解である『解限咎乃鎖』の上に乗せするように発動しているものらしい。

だが、その負担は如何ほどのものか。

「また、私は……」

「椿さん……」

千景が鎌を振るい、新人の大剣を弾き飛ばす。

(もつとだ……)

スピードが上がり、切り返しの速い新人の攻撃をさらに仕掛けてくる。

しかし、千景はそれを解限咎乃鎖の力で限界を突破し、その連撃を全ていなす。

(もつと……もつと……)

拳が飛んでくる。

それを千景はその上につて転がって回避する。

(もつと……もつと……限界を超えろ……!!)

新人は、さらにその憎悪を募らせ、強くなっていく。

千景は、解限の力で限界を突破していくが、いささか、その強化が遅れている。

「ぐう!?!」

もはやトルともいうべきサイズに巨大化した新人の強烈な蹴りを諸に受ける千景。

べきい、と骨が軋み、地面を転がる。

「千景君!!」

奏が叫ぶ。

それと同時に、別の方向からも声が上がる。

「千景!!」

「千景さん!!」

校門で、冬樹と優がいた。

彼女たちだけじゃない。この街にいるほとんどの人たちが集まってきた。

「お前ら……なんで……」

「さつき、炎が見えたから・・・」

「心配、で、来た」

千景の叫びに優と冬樹が答える。

一方で、後ろの者達は浮かさない顔で千景と新人の戦いを見ていた。

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツツ!!」

そこで新人の絶叫が迸る。

恐らく、憎き相手が大量に表れた事で、憎悪が膨れ上がって行つて
るのだ。

その体はさらに大きくなり、学校の校舎のように大きくなる。

「新人、もうやめて・・・!!」

「魔器の浸食が激しい・・・このままじゃ・・・魔器に喰われて、
完全に人じゃなくなっちゃう・・・!!」

もう、新人の面影はなく、その姿は完全に怪物のそれだった。

そして、その手に持つ、巨大な大剣を、街の人々に向かって振り下
ろす。

「やめろおおおおおおお!!」

しかし、千景が間一髪のところでも大量の鎖を大剣に巻き付かせて、
その攻撃を防ぐ。

『鉄鎖甲』 ツ!!」

そして、燃える鎖を右手に巻き付けて、無数の限界を超えて新人の
顔面を殴り飛ばし、グラウンドに倒す。

「馬鹿野郎!!なんで逃げなかったんだツ!」

そこで千景が街の人々に向かって叱咤した。

「ここは危険だツ!!早くここから離れてくれ!!」

千景が叫ぶ。

だが、その声に、誰一人として答えようとしな

い・・・

ふと、一人の年老いた老人の男が、口を開いた。

「わしらは今まで、お前に酷い事をしてきた・・・」

「それは操られたからであって、決して、貴方達が悪い訳じゃない」

「お前にとってはそうなのだろうな。だが、この街の者にとって、誰か

を傷つける事は赦されない行為なのじゃ。わしらは、その報いを受けなければならんのだ」

「報いなんて俺は望んでいない」

「お前が望んでいなくとも、わしらは、そう望んでいるのだ」

「ふざけないでくれ・・・」

「ふざけとらんよ。わしらは、いつだって、真面目に、誰かの幸せを願っているから生きてきたのじゃ」

まるで話が通らない。

しかし、どういう事だ。

誰かの幸せを願い続けながら生きていた、というのは一体・・・

「ガアアアアアアアッ!!」

「!？」

新人が起き上がる。

その両目を怒りに血走らせ、千景たちを見下ろす。

「くそ・・・!!」

『それじゃあダメよ』

「!？」

突然、頭の中に直接響くように、声が聞こえた。

『心に迷いがある状態じゃ、まだ天鎖剣の真価を發揮できない』

「じゃあ、どうすれば・・・」

『一つ、少し昔の話をしましょうか』

「そんな暇ないでしょう!？」

『すぐに済むわ』

新人が、剣を振り上げようとするが、どうやら顔面を、それも顎を殴られた時の衝撃でまだ脳にダメージが残っているようだ。

『この街は、貴方が記憶を失う前は、とっても楽しくて、笑顔で溢れていたわ。だけど、それをある日、一人の少年によって壊されてしまった』

「楽しくて、笑顔で・・・」

『そう。貴方も、その輪の中に入っていた。この街は、誰かの為に頑張る街だった。貴方もそうだった。その中で、貴方のお母さんとお父さ

んは、一番感謝されていた』

「え……」

『その理由は、貴方のお母さんが、人の為に勇んでやらないような事を
して、貴方のお父さんが、危険を冒してまで人を守ろうとしたからよ。
いつも、誰かを笑顔にするために頑張っていた。例え、相手がどれほ
どの極悪人であろうと、しっかりと改心させて、牢に入れていたわ。
どんな辛い目にあっても、人は必ず立ち上がれる、と、いつもそう言っ
ていたわ』

「……」

『貴方は、街を守りたい。だけど、まだ貴方は、心の中で、不信を抱い
ている。本当に、奴を倒せるのかってね』

「……」

『安心して。これは一族の、私たちの想いを込めた武器。ありとあら
ゆる罰を受け、怒りを受け、怨みを受け、憎悪を受け……そして、
全てを失って、また得て、その私の人生の結果が込められたのが、こ
ぶ武器よ』

「これなら、アイツを倒せるとでもいいいたいのか……?」

『ええ。紡いだのは『勇氣』と『大切な思い出』。忘れてはいけない思
い出と、どんな困難にも立ち向かう勇氣。その二つが、これには込め
られている。いわば、これはバトンよ』

「バトン……」

『さあ、お話はこれまで。でも、貴方に聞いわ。貴方のお父さんとお母
さんは、この街を全力で守る為に戦った。その想いを、貴方はどうし
たい?』

新人が、大剣を振り上げる。

それだけで大陸な割れそうな一撃を、人々は恐れながらも、決して
その場を動かず、その時を待った。

その、想いをどうしたいかって?!

そんなの決まってる。

「——分かり切った事を聞くな馬鹿が」

次の瞬間、新人の大剣が大きく弾かれた。

『!?!』

その光景に、その場にいた全員が驚愕する。

「ゴガアアアアア!?!」

また態勢を崩し、盛大に倒れる新人。

そして、空中に佇むのは、なおも炎を蛇のように操って空中に立つ、一人の少年。

その炎は、気のせいか、否、確かに勢いが強くなっていた。

『『戒業罪乃鎖』——』

一方で、新人はすぐさま立ち上がって、少年に再度の攻撃を仕掛ける。

「我が罪は未来永劫消える事は無く、永久に不滅する事の無い、戒め」
しかし、その攻撃はいとも容易く弾かれ、その顔面に拳を一撃を喰らう。

「嫉妬で友を傷付け、友情を忘れ、仲間を失い、人権をも剥奪された我

に、人を傷つける事は赦されない」

しかし新人は踏み止まり、その拳を振るう。

「されど、我は罪人。故に、我は過ちを知っている」

拳が燃える鎖に巻き付かれる。その炎に、腕が焼かれる。

「全ての『喪失』。及び、全ての『剥奪』。そして全ての『清算』。その身に受けた罰は数知れず、故に我は痛みを知り、苦痛を知る」

千景の鎌に、炎が集まる。その炎は光り輝き、焼けた鉄色へと変わる。

「故に我は人の痛みを理解できる。故に我は人の苦しみを理解できる。故に我は人の過ちを理解できる。故に我は、人が死ぬ瞬間を知っている」

新人が再度攻撃をしかけるも、千景はそれをあつさりと蹴り飛ばす。

「理解できるからこそ、私は貴方を倒す」

そして、夢くも、雪の中に一輪だけ咲き誇る、白い花びらが舞った。

「――悔い改めよう『失格者の罪滅ぼし』」

炎が白く輝き、その白炎を纏った大鎌の一撃が、新人の体を肩から脇腹にかけて断ち斬る。

「ガアアアアアアアアアアアア！」

しかし、それでも新人は倒れない。

とてつもない執念である。彼は、全てを殺すまで、諦める気など無いのだろうか。

しかし、彼にもう誰かを殺す力は無い。

一撃目、『剥奪』を実行。

彼から、憎悪によって強化された力が、一瞬にして消え去る。

「グアアアアアアアアアアアッ!!」

それでも新人は手を伸ばして、千景を握り潰そうとする。

しかし、鎖を伸ばしてその手を避け、もう一度、新人の体に斬撃を叩き込む。

二撃目、『喪失』を実行。

その瞬間、新人の中から、ありとあらゆる負の感情が抜ける。

それによつて、彼の思考が止まり、暴走していた野性が消え、理性が表に出てくる。

(あれ……僕は……)

だが、もう遅い。

彼がしでかした事は、気付いてからではもう遅い。

だからこそ、今までの『清算』が返ってくる。

地面に着地した千景が、思いつきり右拳を振りかぶる。

その手に鎖を巻きつけ、威力を底上げする。

ふと、千景は、見知らぬ景色をその脳裏にフラッシュバックさせた。

桜の木の元、一人の赤髪の少女が、こちらを向いて微笑んでいた。

その少女が、呟いた言葉。

それは、呼び名。

その瞬間、千景の脳裏に、一つの言葉が思い浮かんだ。

「……」発入魂「……」

その言葉を、千景は叫びながら、新人を殴り飛ばした。

「――勇者パンチッ!!!」

全てが終わり、一人の少年が、地面に倒れ伏している年上の少年を見下ろしていた。

その姿は、もう元に戻っており、規則正しい寝息を立てている。

しかし、見下ろしている方の少年はボロボロで、血を流している。

その姿は見るも無残で、上半身の装束が焼け落ちたその背中にある、背中の火傷のみならず、体中に打撲や切り傷などが刻まれていた。

そして彼は微動だにせず、ただそこに佇んでいた。

「千景君……」

そこへ、奏が歩み寄る。

しかし少年は答えず、その場に立っていた。
それだけで、彼女は気付いた。

「……ッう……」

奏は、膝を着いて、涙を流した。

怯えもせず、決して気にもせず、敵に立ち向かうその姿は、とても高貴で、勇ましかった。

そして、今も、彼は、倒れる事無く、その場に立っていた。
気高く、立っていた。

「勇者……」

それは、一体だれが言ったのかは分からない。
しかし、彼はまさしく、そうだったであろう。

想起するは、高山に咲き誇る、純潔なる白の花。

『大切な思い出』を抱え、

『尊い思い出』を守り、

『忍耐』強く、

そして、どんな恐怖にも立ち向かう、『勇氣』を持っている。
それはまさしく『高貴なる白』。

白い、勇者だった。

その時だった。

突如として新人の体から黒い瘴気が現れる。

『!?』

その場にいる全員が目を見張った。

『オ……ノ……レエ……!!!』

その瘴気を中心、おそらく魔器『悪』の魂そのものだろうか。それが呪詛を呟きながら、上り出す。

『オノレエ……コオリチカゲ……マタ……オレノマエニタチフサガリ……ヤガツテ……!!』

その瘴気は、だんだんとその密度を濃くしていく。

『カクナルウエハ……フウインヲトイテヤルツ!!』

突如として瘴気が黒い矢となり創代神社のある山の方へ飛んでいく。

「何を、しに……」

その行動に、首を傾げる冬樹。

「さつき、封印を解くって……」

優も、先ほどあの魂が呟いた言葉を反芻する。

「……まさか」

その中で、奏だけが理解していた。

その間に、黒い瘴気は山に近付き——そして障壁にぶつかった。

『ギギ……ギイ……!!』

弾かれる事は無く、瘴気は創代が創った結界に引っ付いて離れない。

だが、結界の押し返す力も強く、少しでも気を抜けば弾かれてしまおうだろう。

『ギギ……『アクイカイジヨウ』……ツ!!』

突如、結界に穴が空いた。

その穴の中に、瘴気はどうにか入り込んだ。

そしてそのまま神社の後ろの森へ向かう。そこの地面に辿り着くと、瘴気は一層その濃さを強めて——

『アクイカイジヨウ……!!』

創代の封印を解除した。

その瞬間、ありとあらゆる悪霊の魂が解放され、溢れ出す。

「そんな……」

奏は絶望したような表情となり、空を見上げた。

空を舞う魂は、数えるのも億劫なぐらい、大量にいた。

すぐさま、その勢いは止まったが、解放された魂は幾数百。

「ふり……だし……だ……」

その光景に、奏はただただ、絶望した。

彼が守ったこの街は、また、黒い何かに塗り潰されていく——

下校路を歩く、千景、冬樹、白露、信也、海路。

「・・・でま、東郷の奴から日本史の素晴らしさを耳にたこができてまで聞かされたって訳」

「どん、だけ、好き、なん、だろう・・・」

「なんか面倒くさいを通り越して尊敬するわね」

「なんで一緒に帰ってんだ俺達・・・」

「文句、いわ、ない・・・!」

「いでえ!」

信也の脚を踏む冬樹。

「おーいて」

「大丈夫か?」

「ふ、普段からサッカーで鍛えている俺の脚力舐めんな」

「じゃあ、これ、で、殴って、みる?」

「やめろそれはマジで洒落にならん」

冬樹は肩に担いでいた竹刀を取り出す。

「面倒くさい奴らだ」

「まあまあ」

あきれ果てる海路に、それをなだめる白露。

しかし、こうしてみると、以前よりも、大分良くなっていると思う。

彼らは、二年前まではこんな風に会話する事は無かったからだ。だから、この変化は、千景本人としても素直に嬉しい。

ふと、彼らは吾郎の花屋の前を通った。

「ん？おお、お前ら」

「吾郎さん？」

「ちよつと雅に届けて欲しいものがあつてな」

「花ですか。別に良いですよ」

「悪いな」

吾郎から花束を受け取る千景。

「ん？これ、ウスユキソウ、だ」

ふと冬樹がある花に目を止めた。

そこには、小さな植木鉢に一輪しか咲いていない花があつた。

「これ・・・高山にしか咲かない筈じゃ・・・」

千景がそう聞く。

「ああ、真琴が山から種を取ってきてな。別に問題じゃねえし、真琴が育てたいつて言ったから植木鉢やってみたら、もの見事に咲きやがったよ」

「へえ、これ真琴君が作ったんですか」

白露がかがんで花を物色する。

「別命『エーデルワイス』。西暦の時代存在したヨーロッパというところて人気のあつた花だな」

「おお、千景詳しい」

千景の説明に周囲が関心する。

「花言葉は『大切な思い出』『尊い思い出』『勇気』『忍耐』。どれも十な言葉ばかりな上に、普段咲いてる場所が場所で、登山家にも人気のある花だ」

「ほう・・・」

そのウスユキソウ、エーデルワイスの花言葉を聞いて、ふとその場にいた全員が千景を見た。

「・・・ん、何？」

「勇者部との思い出が『大切な思い出』」

「俺達との思い出が『尊い思い出』ってお前は思ってる」

「あの時と同じように『勇氣』があつて」

「無駄に『忍耐』がある馬鹿」

「……確かに俺にあつてるかもな」

頭を搔いて苦笑する千景。

しかし、彼らにとっては、あの頃の思い出は、今もなお、彼と自分たちを繋ぎとめている思い出だと思っている。

だって、彼は、この街にとっては、唯一無二の『勇者』なのだから。

「……罪を知ってるから、気高くあれる、って奴なのかしらね」
遠くで、奏がその様子を見ていた。

もうすぐ十二月。

あれから、もう二年が経とうとする中で、物語は、やがて終盤へ。

七つの大罪

あの戦いから、早くも、三日。

神代奏と安座間椿、そして、百合籠の所長である氷室雄二に加え、桐馬雅、水霜冬樹、磯部信也、新井白露、浅羽海路、森谷真武郎、そして安座間優が、創代神社の居間にて、顔を見合わせていた。

そして、奏は、彼らに、一つの決断を教えた。

「彼の、記憶を消します」

その言葉に、その場にいる全員が一瞬目を見開き、やがて納得するかのように俯いた。

一人、海路を覗いて。

「奴の記憶を消すのは良い。だが、何故俺達まで呼んだ。それを聞くのは所長だけで良いだろう」

「ちよつと海路……」

白露が彼を咎めようとするが、海路は聞く耳を持たない。

「……今日集まって貰ったのは、水霜冬樹ちゃん、桐馬雅さん、新井白露ちゃん、森谷真武郎さん、磯部信也君、浅羽海路君、安座間優ちゃん、貴方達七人に、創代様の御役目を受けて貰いたいからなんです」

「お役目……千景が、アイツを倒す時にやってたっていう……」
「ええ。千景君が、貴方達に隠れてやっていた、命懸けの御役目の事よ」

その言葉を告げ、奏は、御役目の説明を始める。

やがて、それが終わりに近付く頃、奏はある事を告げた。

「そして椿さんの『陸鎧布』は、優ちゃんに次がせる事にしました」

「え!?!」

その事に、驚く優。

「なんで私が、お母さんの……」

それはもつともな事だ。しかし、椿が口を開く。

「……すまない。奴の攻撃を受けた時、どうやら御神刀の使用権に何かやられたみたいでな。変身が出来なくなった」

「そんな・・・!?!」

その事実には、優は驚きを隠せない。

ようはこういう事だ。

椿は、魔器『悪』の持ち主、新人の暴走した状態での攻撃を受けた。しかし、その時何かしら魔器の能力が発動し、椿自身が何かしらの影響を受け、御神刀『陸鎧布』を発動出来なくなった。

そういう事らしい。

「それに、この間桐馬にやられた薬も関係しているらしい。おそらく、体の硬化化は、もう出来ないだろうな」

「ツ・・・!!」

優は雅を睨み付ける。

その事に、雅は項垂れる。

しかし、椿は優を咎める。

「優、そんなに非難するな」

「だって・・・」

「お前をそんな子に育てた覚えは無いぞ」

「う・・・」

「ごきり、と指を鳴らす椿の威圧感に思わず怖気づく優。

「優、お前はそんなに強くはない。だから、誰かと協力しあわなければならぬんだ」

「でも・・・この人たちとなんて・・・」

優にとって、この場にいる者達は、千景を傷付けていた悪者。

その事を、彼らは否定しない。

しかし、

「優、それはお前にも言える事だぞ」

「え・・・」

「知っていないながら傍観する事も、同じように罪だ」
「・・・!!」

椿の言葉にハツとする。

「つまり、お前も彼らと同罪。どちらにしろ、お前は彼らと同類だ。それは変わらない」

「……………」

「だからこそ、お前にこれを託したいんだ」

椿は、その手に持つ陸鎧布を優に差し出す。

「この陸鎧布は、誰かを包むためのものだ。私は思っている。だから優。強くなれ。強くなつて、誰かを守るようになれ。アイツは、そういう男だったぞ」

椿の言葉に、優は口籠る。

そして、その刀に、手を伸ばす事を躊躇う。

そこで、ふと冬樹が口を開いた。

「奏さん……」

「ん？なに、冬樹ちゃん」

「千景、は、どうして、私、たちを……」

「……そうね」

冬樹の言葉に、奏は答える。

「彼は、言ってたわ。お父さんとお母さんに愛されていたという事を知れただけで、それで良いって。それだけで、誰かを守る理由になるって。どれだけ傷つけられても、それだけが、俺がアイツらを傷付ける理由にはならないって、そう言ってたわ」

奏は、悲しそうにそう言った。

「……そ、つか」

「冬樹……？」

白露の問いかけに応えず、しばし考え込んだ冬樹は、やがて顔をあげ、答える。

「やり、ます」

『！』

「私、その、御役目、やり、ます」

冬樹が、そう胸に手を当てて、確かなる眼差しで答えた。

「冬樹……！」

「千景、は、いつも、酷い事、言って、た、私、を、命、かけて、守つて、くれ、た。だから、今度、は、私が、誰かを、守る、番、だから……！」

「そう・・・」

冬樹の言葉を聞き入れる奏。

「私も」

さらに、雅も答える。

「私も、やるわ」

「雅さん」

「千景を弟に重ねて、それでこき使っていたのは事実よ。その上、命まで助けられたとあっちゃ、もう後戻りはできないわ」

雅も覚悟は決まっているようだ。

さらに白露も名乗り出る。

「わ、私だって、彼に助けられた。そんな彼に、いっぱい酷い事をした。だから、せめてその罪滅ぼしがしたい。だから、私もやる」

「白露ちゃん・・・」

そこで、さらに真武郎からも声があがる。

「俺は、アイツに、俺が出来なかった事をやって貰っちゃった」

それは、十五年前から続いていた幼女連続誘拐事件。

当時、百合籠で働いていた真武郎は、その誘拐犯に、自分が連れ添っていた子供を攫われた。

その三年後、彼女がみつきり、すでに壊されていたのを見た時は、その事を悔しがった。

「俺は、自分が情けなかった。ずっと探し続けていたものを、壊された事に対して、全てに対してやる気がでなくなっちゃった。そんななかで、またアイツが現れた時に、アイツが真っ先に動いた。俺は、その場に佇む事しか出来なかった」

だからこそ、と真武郎は言う。

「そのツケを、これで支払わせて貰う。やらせてくれ、その御役目って奴を」

「真武郎さん・・・」

その真武郎の覚悟に、奏は感じる。

「真武郎君」

「所長、すみません、しばらく・・・」

「いや、君のやりたいようにすればいい。私は止めないよ」

「……ありがとうございます」

真武郎は、氷室に頭を下げる。

「……なあ」

その中で、信也だけは、奏に問うた。

「なんで……俺なんだ……」

信也は、何故自分が選ばれた事に、疑問を抱いていた。

「……創代様が選んだ、ていえれば、どんなに楽だった事でしょうね」

奏は、彼に近付き、彼の頭を撫でた。

「それもあるけど、この中で、貴方が一番自分の罪を自覚しているから。貴方の、『強欲』の罪を」

「強欲……確か、私たちで『七つの大罪』という名義で……」

「ええ。お役目を受けるうえで、解放奴らに対抗する為に、まとまりを持つ為に組織名を考えた。それが『七つの大罪』」

大罪を持つからこそ、痛みを知り、弱さを知り、苦しみを知っているからこそ、悪質な悪霊を退治するに値する、からだとか。

「それぞれの罪の名前は後で教えるけど、貴方は、自分がした事の重さを知ってる。だからこそ、貴方は過ちを、もう犯さないって、私が信じたからよ」

「……でも」

「それに、きつと千景君だって気にしない筈よ。それは、貴方にとって苦しい事かもしれないけど、きつと、彼は貴方に笑っていて欲しいと思うわ」

「……ぐ」

信也の両目から、涙が零れ落ちる。

「……チツ」

その中で、海路が舌打ちをする。

「どうせ俺も参加しろっていうんだろ。この空気を断れるかっての」
海路も諦めたかのように言う。

これで、六人。

後は――

「お前だけだぞ、優」

「……」

椿の言葉に、優は、顔を歪ませる。

他の全員は承諾したのに、自分だけ、承諾が遅れた。

その事が悔しいと思う。

だけど、意地を張っている場合では無さそうだ。

「……分かった。やるよ。私」

「うん。それでこそ私の娘だ」

優は、陸鎧布を受け取る。

「それでは、皆さんの返答を受け取りました。改めて、全員参加という事で良いですね」

その奏の問いに、その場にいる者達がうなずいた。

創代が彼ら専用の御神刀が出来るまでの三日、しかし、その前にやらなければならぬ事がある。

それは、創代の間に寝かせた、一人の少年にあった。

その少年の額を、奏はそつと撫でた。

「千景君……」

新人との戦いから、彼はずっと目覚めない。

傷は塞がっているものの、下手をすれば、彼はそのまま目覚めないかもしれない。

そんなのは嫌だ。だけど、目覚めて事態を把握すれば、きっとまた彼は、人々の為に傷付き、血を流すだろう。

それも嫌だ。

ならばどうすればいいのだろうか。

やる事は、簡単だ。

彼の記憶を消す。

奏に出会った事、椿に出会った事、創代の御役目の事。

彼の御役目に関する記憶全てを創代によって破壊、再構築し、全く別の記憶を書き込む。

それは記憶改竄ともいうべき行為だ。

それは、彼のこの街での思い出も奪ってしまう行為でもある。

そして、彼の代わりに、優たちを駆り出す自分は、果たして人として正しい事をしているのだろうか。

しかし、そう思うも、それよりも千景の事が大切な奏にとって、その決断に迷いは無かった。

彼の記憶は消す。そして御役目から遠ざける。その代わりに、彼らを『七つの大罪』と称して駆り出す。

しかし、それだけでは、彼は御役目に気付いてまた始めてしまうだろう。

だから氷室を呼んだ。

彼に、千景の引越手続きをさせ、ここから最も遠い、香川に行かせる。

それが、奏の決断。

もう二度と、千景が傷付かない様にするための、苦肉の策だ。

それを、奏は、考えはするが迷いはせず、決断したのだ。

だから――

「ごめんね、さよなら」

奏は、彼から離れた。

創代の間から外へ出た途端、戸が勝手に閉まる。

創代が、しめたのだろう。

「.....う.....」

そこで、奏は膝をついた。

「うう.....うう.....うわあああ.....!!」

そして、その場にうずくまって、泣いた。

ただただ、哀しくて、悲しくて、泣いた。

声を押し殺して、嗚咽を漏らして、泣いた。

年も明けた、一月五日。

「それで荷物は全部かい？」

「はい」

トラックに、ある程度の荷物が積まれる中、氷室は、千景に話しかける。

「向こうはここより北だからね。寒いだろうから、冬は暖をちやんと取る様に」

「はい。心配ありがとうございます」

見送りは、彼の他にいない。他の者達は、それぞれの仕事に行ってしまうている。または、遊んでいる。

「荷物積み終わりました」

「ご苦労様。それじゃあ、向こうでも頑張って」

「ありがとうございます」

千景は、淡々と答え、トラックの助手席に乗る。

「それじゃあ、彼をよろしく頼むよ」

「分かっていますよ」

トラックが、出発する。

「……彼は行ってしまったよ」

「分かっている」

椿が、道角から姿を現す。

遠ざかるトラックを見ながら、椿は、何も言わずに、ただ見守った。
「……今日は、皆の初陣だったね。君は見なくて良いのかい？」

「いいんだ。もう、あいつらに見送りは必要ない。それほどまでに、彼らは弱くは無い。そして、なによりも強い」

椿は、この街にそびえ立つ山を見た。

「皆さん、準備は良いですね」

奏の言葉に、その場にいる七人がうなづく。

「今回が初の戦闘。敵の数は三人。ですか、決して無理はしないように」

「分かってるよ」

「うん、大、丈、夫」

白虎柄の装束を纏った白露が威勢よく答え、水色のだんだらを羽織り、かの新選組のような装束を纏い、その腰に刀を差した冬樹がうなづく。

「まだ真解の使用までには至りませんでした。今回は数がいます。しかし、その反面、連携が必要となります。指揮の方は頼むよ、海路君」

「問題無い」

巨大な狙撃銃を肩に担いで、黒い暗殺者のような装束を纏った海路が鼻を鳴らして答える。

「そんなに心配しなさんな巫女さん」

「貴方はお気楽過ぎるのよ真武郎さん」

気楽に笑う、トロイヤの兵士のような装束に、穂先が横に長い鍔と刃を携えた槍を持つ真武郎を、女武将のような装束を纏った雅が咎める。

「いけるか？」

「誰の心配をしてるんですか？問題ありません」

『そうだぜガキ、なにせこの俺様がついてるんだからな！』

赤いロングコートをベースとしたライダーのような装束を来た信也を、腕に包帯を巻き、ジャケツトを着込んだ装束をまとう優は笑って返す。

そしてもう一つ聞こえた声の正体は、創代が面白半分に行った実験の結果だ。

「それでは、皆さん、ご武運を」

『応ッ!』

第十九代目救導者『七つの大罪』

『憤怒の罪』御神刀『水誠刀』所持『水霜冬樹』

『嫉妬の罪』御神刀『虎之威』所持『新井白露』

『暴食の罪』御神刀『重華扇』所持『桐馬雅』

『怠惰の罪』御神刀『爆撃槍』所持『森谷真武郎』

『傲慢の罪』御神刀『射墮填』所持『浅羽海路』

『色欲の罪』御神刀『虚像布』所持『安座間優』

『強欲の罪』御神刀『剛蹴脚』所持『磯部信也』

我らは人を傷付けぬ、されど我らはその身に巣くう悪意を斬る。悪意を誘う『魂』を斬る。故に我らは『求道者』。

『救い導く者』——それこそ我らが存在意義。人の悪意を利用する悪しき『魂』たちに、鉄槌を下し、利用された者達を救い導く者なり。

故に我ら全員『救い屋稼業』

人に知られず、人を救う、見返り求めぬ者である。

我らは罪を知る。

故に我らはその過ちを二度と犯さない。

その過ちを、他人に犯させない。
だからこそ、我らは、戦う。

人々が、二度とその身に『大罪』を起こさせぬように。

時は過ぎて、春。

桜の花びら散る季節、その日の到来は、新たな生活の始まりを意味する。

香川県讃州市にある、讃州中学。

その教室の一室にて、一人の少年が、窓から離れた場所から、窓の外を見ていた。

ふと、彼の隣に、誰かが座る。

「こんにちわ!」

その声に、少年は振り返る。

そこには、一人の少女が、少年に花の様な笑顔で微笑んでいた。
「私、結城友奈って言うんだ。貴方の名前は?」

普段なら、彼は彼女を、結城友奈を無視していただろう。

しかし、彼は、不思議と自分の生来の名前を口に出していた。

「……不道千景」

「千景君か、よろしくね」

手を差し出してくる少女。

その手を、千景は自然と握り返していた。

その手は暖かくて、そして、懐かしく感じた

不道千景は勇者である

原点^{オリジン}の章『終』

始動の章《アーリー》 ひねくれものを勧誘せよ！

讃州中学。

そこへ入学した千景は、初日は周囲から色々と話しかけられた。理由としては自己紹介の時に香川から遠い高知からやってきたからだ。

何故ここへ来たのか、前の学校では何をしてたのか、趣味はなんなのか、部活は何に入るのか、と。

こういう反応に慣れてはいなくて戸惑いつつも、どうにか受け答え、凌いで溜息をついたところで、ふと隣から笑い声から聞こえた。

そちらへ視線を向けると、赤髪の少女が笑いを堪えていた。

「ふふ……ごめんね。初日からすごい人気だったから」

「……」

「あれ、無視？」

千景は特に応える事はせずに顔を教室正面へ向ける。

一方の隣の少女、名を『結城友奈』というのだが、その少女は少なからずシヨックを受けていた。

と、その時だった。

不意に千景の頬を何かかが後ろから掠めた。

「……」

ゆっくりと振り返ってみると、そこには車椅子に座った黒髪ロングの絶世の美少女（あくまで一般論）が黒い笑みでこちらを見ていた。その姿を認めた後、改めて投擲物を確認すると、それは先が当然如く尖っている針のあるコンパスだった。

それが今、思いつきり千景の机の端にブツ刺さっており、それには何かしらの紙が結ばれていた。

（矢文がかんかかよ……）

とりあえずコンパスを抜いてその紙を呼んでみる。

『結城友奈を構いなさい』

中身はあまりにも短く単純明快だった。

しかし、故郷で常軌を逸した虐めにあつてきた千景にはさほど効果は無い。

千景は紙を丸め、それと同時にコンパスを先ほどの少女の方へ投げる。

「わっ!？」

見事に少女の机に突き刺さり、少女は驚いた様な声を上げ、その隙に千景は丸めた紙を遠く離れたゴミ箱へ投げ入れる。

「おぉー!」

が、その様子を横にいる結城友奈に見られたらしく、拍手された。

(何故拍手する)

疑問に思うも、千景は、気にしない事にした。

背後からどす黒い殺気を感じながら。

結城友奈は中学生である。

それもごくごく普通な中学生。

元気があり、活発で、度々空気の読めない行動をする、ありがちなヒロインのような性格をしている。

そんな彼女の親友は、車椅子に座り、その姿はまさしく大和撫子と
言うべき少女、東郷美森である。

冬に友奈の家の隣に引っ越してきた少女であり、事故で両足が動かなくなり、ここ二年間の記憶を喪失してしまっているらしいのだが、今はそんな事は関係ない。

「部活何にしようか？」

「友奈ちゃん、チアリーダーディング部に誘い受けてたよね」

「押し花部からの誘いだったらなあ」

「そんな部活ないでしょ?」

美森の車椅子を押ししながらそんな風に彼女と雑談する友奈。

そんな風に話し合っていると、不意に横から声がかけられた。

「貴方達にとつておすすめの部活は、他にあるわ!」

「.....?」

横を見てみれば、片手に紙の束、片手にその中から一枚引き抜いたであろう一枚の紙を持っている黄髪のツインテールの少女がいた。

そんな少女が、友奈と美森を見ていた。

「貴方達にとつておすすめの部活は、他にあるわ!」

「何故に二回?」

「どちらの勧誘なんですか?」

そこで相手方の少女が名乗った。

「アタシは二年の犬吠埼風。勇者部の部長よ」

「勇者部?」

「なんですかそれ?とつてもわくわくする響きです!」

「え?」

何故か食いつく友奈。

「おお、君フィードリングあうねえ」

そんな訳で彼女、犬吠埼風から説明を受けた所。

勇者部とは、猫探しや幼稚園などでの手伝い、老人に手を貸したりなど、世のため人の為になる事を勇んでやる事を中心にする部活らしい。

いわばボランティア部の事だ。

後に、この勧誘が大赦の策略だつて事は、友奈と美森の二人は知る由も無かったが、今はそんな事関係ないのですつ飛ばす事にする。

友奈は以前から憧れていた勇者という言葉に、一方の美森はそんな

友奈についていくように入部した。

後々気付くのだが、この勇者部は今年から始まる部活らしい。

数日後、それなりに仕事が板についてきて、帰路についている、友奈、美森の二人。

風とは別々となって、町中を楽しく雑談しながら歩いていた時の事だ。

「あ」
ふと、友奈は視界の先にある公園で、一人の少女が泣いているのを見た。

状況を確認してみると、どうやらボールが木の枝に引っかかって取れないようだ。

「あの高さじゃとれないわね・・・」

「私行ってくるよ」

友奈が、その女の子に駆け寄ろうとした時。

「おい、どうした？」

それよりも早く、一人の少年が女の子の前で屈みこんだ。

「あ」

千景である。

「あれは……」

「千景君……?」

思わぬ存在の登場に戸惑う二人。

しかし彼はそれに気づかず泣きじゃくる女の子の話を聞く。

「ボールが……」

女の子が指さす先にある、木の枝に引つかかったボールを確認する千景。

「なるほどな……」

「ふえええ……」

「ああ、泣くな泣くな」

千景は女の子の頭をわしゃわしゃと撫で回す。

「とってやるから待ってろ」

と、立ち上がる千景は、そこらに落ちていた小石を拾い上げ、ひと思いに振りかぶって――

「せいッ!」

見事、ボールに小石をぶつけ、落として見せる。

そのまま落下するボールをキャッチするや否や、そのボールを少女に渡す。

「ほら、次からはもう引っ掛けんなよ」

そのボールを受け取った女の子は、涙を拭くと、無邪気に笑って千景にお礼を言う。

「うん、ありがとう、お兄ちゃん!」

そしてそのまま向こうへ去っていく女の子を見送る千景。

ふう、と息を吐いた千景は、ふと背後から近づいてくる音に気付き、振り返る。

「……見てたのか」

「ごめんね、なんだか予想外で」

「悪かったな予想外で」

「よくボールに当てられたわね」

美森の言葉に、千景は木を見上げる。

「別に、当てようと思えば誰でも当てられる」

「そうだ、千景君、一緒に帰らない？」

「え」

いきなりの友奈の言葉に千景のみならず美森まで声を漏らす。

「一人だと、寂しいでしょ？」

その彼女なりの気遣いな理由に千景はしばし呆然とするが、表情を少し険しくして二人の横を通り、一言。

「別に、一人で帰るのが当たり前だったから問題ない」

「え……」

その一言に友奈は思わず振り返り、去っていく千景の後ろ姿を見つめた。

家にて、友奈は風呂上りの湿った髪を乾かしながら、千景のあの言葉を考えていた。

『一人で帰るのが当たり前だった』

『どういう意味なのかな……』

さきほどからそのことが気になる。

そして、彼自身のことがとても気になる。

入学初日から彼を見た時から、思っていたこと。

何故なら、初めに見た彼の顔が、とても悲しそうだったから。

「……よし」

そこで、友奈は一つの決意を固めた。

翌日。

「千景君」

「……なんだ」

友奈は早速千景に声を掛けた。

「何の部活入るか決めた？」

「まだだしどこにも入る気はない」

「じゃあ勇者部入ろうよ！」

友奈は彼を勇者部に誘う気なのだ。

「断る」

「即答!？」

「とういかなんだその胡散臭い名前の部活は」

「ええ、とても惹かれる響きじゃん！」

「それに惹かれるお前の感性を疑うぞ……」

「まあそんな事でも良いから、入ってみない？今なら給料安いよ！」

「バイトかなんかか。それでも入らないぞ」

結局のところ、千景は断固拒否を貫き、その日の勧誘は失敗した。

「はあ」

「どうしたのよ友奈」

その時のショックが抜けないのか、勇者部部室である理科準備室にて机に突っ伏す友奈。

そんな様子の友奈に疑問を持つ部長の風。

「実は、同じクラスの子を部活に誘おうとしたんですけど、失敗したみたいで」

「え……」

「え？」

何故か、気まずそうな声を漏らした風、首を傾げる美森。

「ああいや……もう他の部活に入る予定なんじゃないの？その子」

「実はそうでもないんですよね〜」

友奈が否定する。

「不道千景君って言う男の子なんですけどね」

「え、男なの」

「はい。その子、この間、女の子が気に引つ掛けたボールをとってあげてたんですよ。だから勇者部に最適だーって思ってた声かけたんです」

「へ、へえ……」

「でも入らないっていう一点張りで、思いつきり断られてしまったんですよ」

「そうなんだ」

「風先輩からも何か言ってやってくださいよー」

「え……うーん……」

ここで風は迷った。

勇者部の創立の真の目的は、外から来る怪物『バーテックス』に対抗するため、チームを結成するため。

表向きとしては人を助けるいわばボランティア部なのだが、もしこの勇者部がヒットすれば、間違いなく部外者である彼も、戦い自体には参加しないが、少なくとも巻き込まれるのは必至だ。

だから彼を引き入れるには少なからず、いやかなり抵抗がある。

「うーん……」

「何か問題でもあるんですか?」

考え込んでいると友奈がそう声を掛けてくる。

「へ……ああ、うん。まだアタシってそいつの事知らないじゃない? だから勇者部に引き入れるのにはいささか抵抗があるかなーって」

とりあえず嘘ではない。

実際風は千景の事を知らないし、そんな見ず知らずの存在を勇者部に引き入れるわけにはいかない。

友奈と美森に関しては事前に資料があったから大丈夫だったが、その不道千景の事については本当になにも知らないのだ。

「あれ、私たちの時は……」

「そうですね。そういえば風先輩千景君の事知りませんでしたよね」

「え、ちよつと友奈ちゃん?」

「風先輩に千景君を紹介すれば、勇者部に入れるよね」

「え!? ああつと、その千景ってやつ性格とか性根によって変わるかな・・・」

「こうしちやいられない! すぐに呼んできます!」

「待って友奈ちゃん! 千景君もう帰宅してるよ!」

「あ、そうだった」

それなりに体力のある友奈だったが、こういうところは抜けているのが彼女である。

「ま、そいつの事はまた明日ってことで、今日はうどん食べて帰るましようか!」

と、町中を歩きながら風がそう言い、

「おお、良いですねうどん!」

「賛成です」

「よーっし! それじゃあかめやに行くわよー!」

「おー!」

手を振り上げて叫ぶ風と友奈、そしてそれに微笑む美森。

ふと、美森は視界の片隅で、見慣れた制服を見かけた。

それは塀にかけられており、そのすぐ近くにはボンネットが開けられた車の前で何かしらの作業をしているワイシャツ姿の少年がそこにいた。

「ん? どうしたの東郷さん」

「友奈ちゃん、あれ」

「ん?」

「何々?」

美森が指さした先を見る友奈と風。

そこにいる少年が、ボンネットから顔をあげた時、友奈は思わず彼の名を呼んだ。

「あ、千景君!」

「え、あれが!? 意外と美男子じゃない!」

なんか風が変な事を言っているが、問題はそこではない。

問題は、彼が何をしているのか、だ。

「何をしてるんだろう……」

「見たところ、車の修理かしらう？」

「みたいね」

彼の傍らには工具箱が置いてあり、レンチを持ち上げて、さらにかしら手を加える千景。

ある程度の作業を終えたのか、ボンネットを閉じた千景は、運転席にいる車の持ち主に声をかけた。

「エンジン、掛けて見て下さい」

すると、車が軽快な音を発してエンジンが入った。

「おおーありがとうございます！」

「別に、それなりに知っていれば、簡単な事です」

千景は工具を片付けつつ、車の持ち主の男性の言葉に答える。

「ありがとう。あ、そうだ。これはお礼だ」

そこで男性は財布から一万円を取り出して差し出してきた。

「……せめて出すなら千円とか……」

「値下がりしてるけど……まあいいじゃないか、受け取っておきなさい」

「はあ……まあ、そこまで言うなら」

油で汚れた手を洗い、大人しくその差し出された一万円を受け取る千景。

その後、彼らは分かれたが、千景は受け取った一万円を眺めながら、渋柿でも食ったかのような表情になっていた。

「あれが不道……」

「はい」

「なるほどね……技量はそこそこ。その上美男子と来るとは……」

「え？風先輩？」

美森は何か嫌な予感がしてならない。

「採用ですか？」

「ううむ……」

やはり考え込む風。

「……直に話し合ってみないと……」

「それじゃあ呼んできますね。おー……むぐ!?」

「待った待った!いきなり呼ぶな!」

慌てて友奈の口を塞ぐ風。

「むぐぐ……なんでですか?」

「まだ心の準備が出来てないのよ!勝手に話しを進めるな!」

いきなりやられても困るのは当然。

だから風は友奈を止めたのだ。

「とりあえず、明日!明日話し合しましょう!」

「分かりました!」

友奈は特に気にする事もなくその提案を受け入れる。

「大丈夫かしら……?」

美森は、そう疑問に思わずにはいられなかった。

翌日――

「断る!」

やはり千景は拒否の一点張りだった。

「そこをなんとか!」

「だからそんな胡散臭い部活には入らないっつーの!」

「千景君、人助けの才能あるよ!」

「それは俺が好きでやってる訳であって決してお前らにアピールしたい訳じゃない!」

「好きならやろうよ勇者部!」

「なんでそうなる!?!」

グラウンドの一点にて壮絶な口論を繰り広げる千景と友奈。
千景はどうか友奈を追い返そうと、友奈はどうか千景を勇者部に引き入れようと。

両者一歩も引かぬせめぎあい。

「今回ばかりは私も粘らせて貰うよ！」

「ぎげんな！人の都合を少しは考えろ！」

「千景君どうせ暇なんですよ!?!」

「そうだが入る気は無いッ！」

「どうして入らないの!?!」

「単純に部活に縛られたくないだけだ！」

「縛らないよ！」

「俺が気分的にそう感じてしまうんだよ!?!」

その様子を、傍で見ている風と美森。

「凄いわね……」

「友奈ちゃんの誘いをこうも頑なに断るとは……許すまじ」

「東郷？」

ふと、彼らの口論が唐突に止まった。

「あら？」

「どうしたの？友奈ちゃん？」

「いや、猫の声が聞こえて……」

「あそこだな」

上を見上げると、近場の木の上、そこに一匹の子猫がいた。

「あ、いつの間に」

「首輪……誰かの飼い猫か？」

よく見ればたしかに首輪をしている。

「あのネコ……やっぱり依頼の写真と同じだ」

風が携帯を確認しつつ答えた。

「降りられないのかしら？」

「じゃあ私が下ろしてくるよ。木登り得意だし！」

友奈が木に登り始める。

「あ、おい!?!」

千景の声に止まらず、すいすいと昇る友奈。

そして、丈夫そうな木の枝に乗って、手を伸ばす。

子猫は警戒して友奈を威嚇する。

「大丈夫だよ。こっちにおいで」

友奈は、優しく語り掛ける。

その様子を、緊迫した空気で見守る三人。

「大丈夫か……」

「それはアタシにも分からないわ」

まず、子猫の依頼はこれが初めてである。

そして、風は友奈の子猫に対する対応の仕方を知らない。

だから心配なのだ。

「ほら、大丈夫、おいで」

友奈は、徐々に子猫との距離を縮める。

ふと、千景は気付いた。

(あの枝、やばくないか?)

友奈が乗っている枝は、傍から見れば確かに丈夫そうな枝だ。

しかし、千景の高い視力は、その木の枝の異常を見抜いていた。

「まずいぞ……」

めき、と音がした。

「え……」

「あの枝……というかあの木、虫に喰われてるぞ!」

「なッ!」

「え?」

気付いた時にはもう遅い。

友奈が足をかけていた、中身がほぼ空洞な太い枝が、ぱきりと折れ、

友奈は地面に向かって落下する。

「あ……!」

落下していく。

このままいけば、背中から地面に叩きつけられ、運が悪ければ頭から落下して、最悪怪我じゃ済まないかもしれない。

しかし、車椅子に乗っている美森は動けないのは勿論、風は反応が

遅れ間に合わない。

万事休す、と思うかもしれない。

しかし、友奈は自然と慌てていなかった。

何故なら、この木の異常をいち早く見抜いて、そして誰よりも早く動いた者がいるのだから。

故に、千景は友奈を受け止める事が出来た。

「危なつかしいな、お前」

「……えへ」

「……なんで笑ってるんだ？不謹慎な奴だな」

「ごめんね。ただ、きつと助けてくれるって、なんとなくだけど分かってたから」

「そうかよ……」

とりあえず、友奈が助かった事に安堵の息を吐く千景。

「あー、おほん。ちよつとお二人さん」

「ん？」

「なんですか？風先輩」

「お取込み中の所申し訳無いんだけども、そろそろ降りたら？」

「……」

風が指摘してるのは千景の友奈の持ち方、いや、この場合は抱き方だろうか。

お姫様抱っこなのだ。

それも、受け止めた筈の千景の首に、とっさに友奈がしがみ付くような形で。

その事に気付いた友奈は顔を真っ赤にし、千景はいたたまれないような表情になる。

美森に至ってはとてつもない真っ黒なオーラを放ちながら懐から短刀を抜き始めている。

「よし東郷美森、その刀納めようか銃刀法違反で捕まりたくないなら」とにかく命の危険を感じた千景はすぐさま友奈を下した。

「あ、えっと、ありがとうね。千景君」

「・・・別に」

どこかぎこちない二人の会話。

「うぐぐ・・・」

「東郷？アンタどうしたの？」

美森が眼から血の涙を流しながら血が滲みそうな程手を握りしめている様子を風がドン引きしたような表情で見ると。

しかし、この状況から、風はある一つの決断を決めた。

「ねえアンタ」

「なんでしよう？」

「千景って呼んでもいいかしら？」

「まあ構いませんが・・・」

「じゃあ千景、改めてアンタ、勇者部に入らない？」

「・・・」

そう、これだ。

先ほどの千景の行動で確信した。

彼は、困った人、特に、危ない状況に陥った人を見過ごせるほど薄情な人間ではない事を。

そして、その人が助かる為に、何をすれば良いのかを状況を見てすぐに思いつき、すぐに実行する事が出来る人間だと。

それだけの要素が揃っているなら、問題は無い。むしろ、知らない誰かの為に役に立とうとする彼の姿勢は、褒められて当然であり、風にとっては大歓迎な人材だ。

その上に、友奈からの推薦がある。

(まあ、どうせアタシの班が当たらなければ入れても入れなくてもどっちでもいいからね)

そして、風からの誘いの上にさっきの状況を見られた事に、流石に千景も黙り込む。

横を見れば友奈が期待たつぷりにこちらを見つめており、一方千景の入部に反対してそうな美森の方を見れば、そっぽを向かれて無視された。

周囲からの助け船が出ない以上、千景は、苦し紛れにこういうしかなかった。

「……少し考えさせてください」

そういつて、その場を去って行ってしまった。

その返事に、三人はしばし、茫然とした。

下校路。

「うーん、すんなりといかないまでもオーケーしてくれるとは思ったんだけどね〜」

風が頭を掻きながらそう唸った。

「千景君、どうして頑なに勇者部に入りたくないんでしょう？」

「それは私にも分からないわよ」

友奈の言葉に、風も頭を掻く。

「あれほどの技巧には、私も認めざるを得ません。しかし、性格に一つ難があると私は思うのですが……」

「そうよねえ。でも、人を助けたいって思いは伝わったわ」

そこは美森も認める所だ。

彼には、人を助けたいと思う心がある。

どうにかできないものか。

そんな事を思っていた時。

「だあかあらあ、感謝料払えって言ってるんだよ！」

「!?!」

その声は、すぐ横の路地裏から聞こえた。

偶然、その路地は一本続きとなっており、すぐに、その声を発した者、否、者達の姿が見えた。

それは、質の悪そうな不良と、一人の気弱そうながり勉の、なんとも定番な組み合わせ。

「お前が肩に当たったお陰で、俺の肩が痛んじまったんだよなあ」

「だから、それに対する慰謝料十万円を払えって言ってるんだよ？分からねえの？アタマイカれてんの？」

「そ、そんなお金、持ってたな……」

「そんな事知らねえんだよッ!!」

「ヒイツ!？」

すぐそばにあるごみ箱を蹴っ飛ばす不良A。

それによって疎みあがるガリ勉強鏡。

「いいからお金払えって言ってるの。もし払えないようなら、その体で支払って貰おうかな？」

ごきり、と指を鳴らす不良B。

そこへ。

「やめなよ」

友奈が横から割って入った。

「ああ？」

「人からお金を巻き上げるなんて、そんな事しちゃいけないだよ」

友奈のその指摘に、呆気にとられた不良たちだったが、すぐに声を挙げて笑った。

「おいおいお嬢さん、俺達は金を巻き上げてる訳じゃねえんだよ。コイツはな、俺にぶつかって、肩を痛めたの。だから慰謝料を請求してんの？」

不良Cがそう誇示する。

「それにしても、あまりにも高額過ぎるんじゃないかしら？」

しかし、そこへ後ろにいた風と美森がやってくる。

「風先輩、東郷さん……」

「ああ、なんだお前ら」

「彼女の友達って所かしら。そんな事より、たかが肩に当たったぐらいで、十万円なんて、いささか高すぎるんじゃないかしら？」

風が指摘する。

「はあ、相場だろ相場」

「別に今後の生活に支障をきたす程でもない程度の打撲で、たかが慰

謝料十万円。それ、貴方たちが単純にお金に困って、人からお金を巻き上げるなんていうくだらない方法をとっただけなんじゃないんですか?」

「なんだと!?!」

美森の言葉に、喰いかかる不良B。

「そんな選択しか出来ないとは、貴方達の今後が危ぶまれますね」

「おいアマ、舐めた事ぬかしてると、痛い目を見るぞ?」

額に青筋を浮かべて脅す不良A。

しかし美森は毅然としたままだ。

その態度が、彼らの気に障る。

「やめろ!」

そこへ友奈が立ちはだかる。

「東郷さんに手を出すな!」

しかし、その友奈の行動が、不良たちの行動の歯止めを吹き飛ばす。

「ああ? うっせえんだよ。正義の味方きどりかテメエ。そんな下らねえ肩書かざしているぐらいなら——」

不良Cが、拳を振り上げる。

「ツ!?!」

「友奈ちゃん!」

「友奈!」

不良たちの次の行動に気付いた三人。

「病院のベッドで寝てろ!」

「くッ!」

不良の殴る事バレバレなテレフォンパンチが友奈を襲う。

しかし、友奈はその攻撃を軽々と避ける。

「な・・・!?!」

拳を振り抜いた事による完全な隙。

しかし、友奈は相手を攻撃しない。

「チィッ!」

攻撃が当たらなかった事に苛立った不良Cは再度友奈に殴りかかる。

それも連続で。

しかし友奈はそれを軽々とかわし、時には逸らし、かわしていく。「くっそ！なんで当たらねえ!!」

「お父さんから武術を学んだからねー！」

友奈は得意げに答える。

友奈の父親はそれなりに名の知れた武道家だ。が、友奈の母親との結婚を気に引退。

しかし友奈に、その名の通り強く生きて欲しい願い為に、友奈に武術を教えていたのだ。

それが功を奏し、友奈は不良Cの攻撃をかわせるのだ。

しかし、友奈は反撃しない。

理由は彼女の性格、人を傷つける事の出来ない事にある。

仮令、人からお金を巻き上げる不良であろうとも、友奈に相手を殴るという度胸は無い。

それ故に、足元をすくわれやすい。

「調子に乗るなよー！」

不良Aが、近くにあったゴミ箱を蹴っ飛ばす。

実はこの不良A、周囲の状況を冷静に分析し、どうすれば友奈の動きを止められるのかを考えていたのだ。

だから、倒れて転がる円柱状のゴミ箱が、友奈の脚に当たり、友奈を転倒させる。

「あ!?!」

ものの見事に転んだ友奈。

「いたた・・・あ!?!」

「くたばりやがれ!この糞女がア!!」

そして、不良Cが友奈の胸倉を掴んで地面に押し付け、拳を振り上げる。

「友奈ちゃん!」

「友奈!」

今度こそ、絶体絶命。

友奈の腕力では、男の伸ばされた腕を振りほどく事は出来ない。

そのまま、不良Cの振り上げられた拳が、友奈の顔面を打ち砕――

「――本当に、あぶなかつしいな、お前は」

――なかつた。

「え……」

「な!？」

不良Cの振り下ろされた手は、友奈の眼前で、なんとどこからともなく現れた千景に受け止められていた。

「な、なんだお前!？」

「ん？俺か？」

千景は、ぐぐぐ、と不良Cの拳を友奈から遠ざけると、空いた手で不良Cの胸を押し飛ばす。

「うお!？」

「気にするな。ただの知り合いだ」

そう答える千景に、他の不良二人に支えられた不良Cは茫然とする。

「ち、千景君……」

「大丈夫か？」

「な、なんとか……」

友奈に手を貸す千景。

千景は腕を回す。

一方の不良Cは完全にブチ切れていた。

「テメエ、何勝手に邪魔してくれてんだ……!!」

「知らないな。人を平気で傷つけるような奴に言われたくはない。ましてや、こんな女一人にむきになるような輩に、かける情けは無い」

「ほざけエ!!」

不良Cが飛びかかる。

しかし、彼らは知らない。

記憶は失っていても、その体に叩き込まれた空手の技術を、千景は使えるという事を。

いや、この表現は正しくない。

千景が空手を使える事を、その場にいる者達は《全員》知らない。

「ハッ！」

基礎中の基礎である、単純に手を回して相手の攻撃を逸らす受けの型。それで不良Cの拳を、少しアレンジを加え、弾き、態勢を崩させると、そのどてつぱらに一発、ややアツパー気味な一撃を叩き込んだ。「ぐえっ」

短くそう漏らし、アスファルトの地面の上に沈む不良C。

「安心しろ。痕は残らないし、その上痛みも残らない。今後の生活に何も問題はないだろう」

「て、テメエッ!!」

そこで不良Bが懐からナイフを取り出す。

「・・・」

「よくもやってくれたな・・・だけど、ここまでだ。これでぶっすり刺されたくなかったら、すぐに慰謝料十万・・・いや、二十万払え！今すぐにだ！」

不良Bの言葉に、千景は動じない。

否。

「こいつ、ナイフ突きつければなんでも言う事聞くとか思ってますよ」

「千景、そいつはぶん殴ってもいいわ」

許可が下りた。

ならばやる事は決まっている。

だから千景はゆっくりと歩み寄る。

「く、来るな！」

この男の行動は、決して恐怖からくるものもあるだろうが、それ以前に、ナイフを突きつければ大抵の相手は怯え竦み上がり、言う事を聞くから、という経験談から来るものだ。

が、彼はもう少し考えるべきだった。

千景がそんな平気で人を傷つける事の出来る者に、一切の容赦をしないという事を。

「ふざけるなッ！」

「べぎやあ!？」

ものの見事に顔面を殴り飛ばされ、完全に沈黙する不良B。

「ヒイツ!？」

一人になってしまったこの状況に竦みあがる不良A。

だから、Aは必至になって考える。

だが、それよりも先に、千景は不良Aに声をかける。

「おい」

「は、はいッ！」

「こいつら連れてさっさと失せろ。そして、二度とこんな事をするな。まともに生きたいならな」

「わ、分かりましたアー!!」

不良AはBとCを担いで、すたこらさっさと逃げていく。

「ふう……」

どうにか終わらせた事に安堵の息を吐いて、振り返る千景。

「ありがとう、千景君」

友奈が感謝の言葉を述べる。

「お前が危なっかしすぎるからな」

「えへへ……」

「笑い事か」

「あう!？」

軽く友奈の拳を小突く千景。

そこへ風と美森が寄ってくる。

「ありがとう。助かったわ」

「買い物の帰りに偶然見かけただけですよ」

千景は淡々と答える。

「何かお礼させてくれないかしら?」

「別にいいですよ。そこまでの事はしてない」

「人の善意は素直に受け取っておくものよ?」

風の言葉に千景はうなる。

どうすれば引き下がってくれるのだろうか?

そこでふと、友奈が千景に言った。

「ねえ、千景君。本当に勇者部に入る気はないの？」

「またその話か。何度も言ってるだろう。俺は入らない」

「で、でも、千景君、力強いし、機械の修理も得意だから、それなりに人の役に立てると思うな」

「機械の修理は確かにできるが、あれはあくまで俺がそうせざるを得なかった技術の産物でだな」

「え？そうせざるを得なかった？」

「あ」

そこで千景は自分が口を滑らしたことに気付く。

しかし、すぐに表情を引き締めると、逃げるようにその場から立ち去ろうとする。

「別にいいだろ。ほっといてくれ」

「ま、待って！」

「いい加減にしろッ！」

「ッ・・・!?!」

そこで千景が怒鳴った。

「なんなんだよお前。しつこいにもほどがあるぞ。今回はただの俺の気まぐれだし、前だつて俺がやりたくてやっただけだ。ただ、それだけなんだ。勇者部なんてまとまりの中にいたくはないし、強制されたくもないんだ」

千景は友奈をにらみつける。友奈は後ずさる。

「俺の自由を取ろうとするな」

千景の言葉は、確かに友奈の心に突き刺さった。

決定的な部分に、突き刺さった気がした。

だけど、それでも――

「だからもう――」

「――だって、君が、不安そうだったから・・・」

今度は友奈の言葉が千景の心に突き刺さった。

「ッ・・・!?!」

それは決定的な衝撃となって、千景を撃ち抜いた。

そして、千景はそれを否定できない。

事実、千景は、不安だったのだ。

故郷での仕打ちを、ここでも受けるかもしれないという恐怖があり、自分の体の『秘密』が知られるかもしれない恐怖があり、そして、褒められる事に慣れていない事への疑心感があった。

要は、怖かったのだ。

ここでの生活が、まだ知らぬ、別の場所での生活が。

「だから、勇者部に入れば、その不安も和らぐかなって思ってた……」
友奈は、申し訳なさそうにそう呟く。

その発言に意図はない。何か手の込んだ事を考えることのできるほど、友奈は器用ではないから。

完全に、彼女の善意だ。

それは、まさしく致命的だった。

同情などされた事はなく、相手は自分の過去しじょうをしらず、ただただ、自分を心配された事がない。

だからこそ、その言葉は、千景にとっての致命傷だった。

「……なんだよそれ」

「あ、気に障ったならごめんね。本当に迷惑だったら、もう、誘わないから……」

それっきり黙りあってしまう二人。

ふと、そこへ、風が突拍子もなくある事を言い放った。

「勇者部五箇条一つ！『悩んだら相談』！」

それに、思わず反応する千景。

「なんだそれ……」

「勇者部五箇条、私たちが活動する上でのスローガンみたいなものよ」
簡潔に説明を終えた後、風は千景にいう。

「あんたの勧誘は、とりあえずやめるわ。その代わり、何か困ったことや、不安があったら、すぐに相談しに来なさい。いつでもいいわ」
「な……」

その風の言葉に目を見開く千景。

「人が困ってる事は勇んで助ける。それが勇者部の活動目的であり、勇者部設立の理由よ。だから、アンタが何か困ってるなら、必ず力になるわ。それが、勇者部だから」

風は千景に向かってそう告げた。

それに千景はしばし呆然とする。

「それに、助けられればなしってのも、勇者部の名折れだからね。ま、それほど無理なお願いじゃなきゃ、全部相談に乗ってあげるわ。それに一応アタシ先輩だし」

自慢げに自分に向かって指さす風。

しかし、その言葉にその場にいる者たちは何も言えない。

だが、やがて千景が頭を掻き始め、考え込み、一つの結論に至って、やがて諦めたかのようにため息をついた。

「分かりました」

「ん？」

「入る。勇者部に」

本当に、突拍子もなく、千景がさりとて。

沈黙すること二秒。

「「ええええええ!!」」

「いきなり大声出すなよ・・・」

「いいの!?!千景君!?!」

友奈は驚き半分、喜び半分で聞いてくる。

「さっきの犬吠埼先輩の提案だと、俺ばかり借り作る事になるだろ。

それは性に合わない。だからそうならないように入るんだよ」

「いいの？」

「お前らが先に言い出し始めたんだろうが・・・」

「いやあ、いきなり意見変えるから帰って驚いちゃって」

「嫌なら別に取り下げるが・・・」

「いやいや嬉しい、嬉しいよ!むしろこちらからお願いしたいくらい!」

友奈が慌てた様子で言う。

「本当にいいのね？」

「まあ、仕方ないですから」

風が、安心したように笑う。

「そっか」

「むう・・・」

一方、蚊帳の外になっていた美森は、その事に頬を膨らませていた。

「・・・なんだよ」

「別に、私も歓迎するわ。不道千景君」

「淡々としすぎてる気がするが・・・まあいい」

「千景君」

そこへ、友奈が千景に歩み寄り、一言。

「ようこそ、勇者部へ」

そして、花のような笑顔で笑った。

三本立てだよ！日常的一幕

↳ 『邂逅・部長の妹』↳

不道千景が勇者部に入って数日――

(気まずい……)

うどんをすすりながら、そう思う千景。

「やっぱりうどんが一番だよねー」

「確かな噛み応えに汁の深い味わい」

「この四国でうどんが嫌いな奴らなんて、『諏訪民』だけよね」

「千景君も、うどんは美味しいって思うよね」

「ソ、ソウデスネー」

言えない。絶対に言えない。

千景は、本当はそば派の人間だという事を。

この四国には、二つの勢力が存在する。

それは、うどん好きな『香川民』と、そば好きな『諏訪民』である。その理由は、西暦の時代、ウィルスに世界中が覆われた時、どうか四国に逃げてきた諏訪の人たちが原因で、四国にそばブームが巻き起こってしまったのだ。

それに対抗するようにうどん派の者たちがどうにかそばブームの広がりを抑えようとして、結果、ここ三百年、ずっとうどん派の『香川民』とそば派の『諏訪民』の間で激しい抗争が繰り広げられているのだ。

「しっかし、今じゃそばの本場になってる高知から来たって聞いたけど、安心したわ。アンタがちゃんとうどん派で」

「アハハ、ソレハヨカッタデスネー」

「なんでカタコト？」

この際、彼女たちとの信頼関係を築く為に、自分がそば派である『諏訪民』だという事は言えない。

それはともかく。

「ごちそう、さまでした……」

どうか、うどんという敵意しか感じられない感触の食べ物を食べ

終えた千景は、それでも作ってくれた者への感謝の意を忘れず手を合わせて合掌する。

うどん屋かめやを出る勇者部。

「そんなじゃ、俺はこっちなんで」

「それじゃーねー」

「また明日ね」

友奈と美森は車で、風は自転車を押して、千景は徒歩で、それぞれの帰路についた。

「……そば食いてえ……」

しかし先ほど夕飯を食べてしまった。

空はすでに暗くなっている。

「……明日の夕飯の食材買って帰るか」

横の視界に移ったスープー。

千景はそこに入っていく。

買い物かごを取り、それなりに食材を手を取っていく千景。

「なあんか向こうより高い気がするな……」

そんな事を愚痴りながら、千景は調味料コーナーにやってくる。

「えーつと……ん？」

目的のものを探してみると、ふと横で、上の棚に向かって手を伸ばしている少女がいる事に気が付いた。

「うーん！……うーん！……」

どうやら、届かないらしい。

傍から見ても低身長。ただ、決して極端に小さいという訳ではなく、おそらく小学六年という平均において、低いといったところだろうか。

ただ、その必死さ故に、決して届かない高さに無謀な挑戦をしている少女を見ていられず、千景は迷わず、その少女に近付いた。

「これか？」

「あ……」

それを手に取り、少女に手渡す千景。

それに一瞬呆気にとられた少女だったが、気付いてあわてて頭を下

げた。

「あ、ありがとうございます！」

そして千景が差し出した調味料を受け取る少女。

ふと、千景は彼女が持っている買い物籠の中身に目を止めた。

「……多すぎねえかそれ」

「あ、うちのお姉ちゃんが沢山食べるので、これぐらいは軽い方なんです」

「その量で軽いつてどんだけ食いしん坊なんだお前の姉は」

(まるで風先輩だな)

ふと、そこで千景は気付いた。

少女の容姿。肩よりもやや上のところで切りそろえ、顔の左右で一部まとめた髪型はいいのだが、その髪の色は風のものに似ていた。

その上、目の色も同じだ。さらに、その顔立ちも、表情ではわからないが、よく見れば風を思わせるようなパーツをしている。

「あの……」

「ん？」

「私の顔になにかついてますか？」

「ああ、すまん。お前がうちの先輩に似ていてな」

「そうなんですか……」

少し疑問に思っているような顔をする少女。

「しっかし、それ持って帰るのキツイんじゃないの？」

「あ、心配しないでください。いつもお姉ちゃんが持っていますか……」

「余計心配だオイ」

どうにか話をつけて、帰宅時千景が代わりに持つ事にした。

「どうもすみません。持ってもらって」

「別に俺が好きでやってるだけだ。気にするな」

「それ、結構重いですよね……？」

「安心しろ。買い物時はこれの数倍の重さのものは持つてるから」

「え、どういう意味ですかそれ……」

暗い夜道、街灯が照らす中で会話をする二人。

「しかし、えらいな。こんな大荷物を一人で持ち帰ろうとするなんて。いつもなのか？」

「いえ、いつもならお姉ちゃんも一緒なんですけど、今日は帰りがおそくて」

「そうなのか」

少女の言葉に、千景はそう相槌を打つ。

そのまま、少女が住んでいるという、マンションに辿り着く。

そして、部屋に着くと、少女は躊躇いも無しにドアを開けた。

「ただいま」

少女がそう言うと、奥の方からパタパタと音が聞こえ、千景にとって見覚えのある少女が出てきた。

「おかえり樹……って千景!?!」

「風先輩……!?!」

なんと、勇者部部長の犬吠埼風だった。

そして、その妹らしき少女は、え？なに知り合いなの？とでもいうような表情で千景と風を交互に見ていた。

「犬吠埼樹です。紹介が遅れてもうしわけありません」

「不道千景だ。一応、風先輩の後輩をさせてもらっている」

犬吠埼宅にて。

「いやあ、まさか樹と一緒にいるなんてね」

「俺でも驚いている」

何故か御馳走になっている千景。

彼の目の前には、あまりにも大量の料理。

「あの、俺、さっきうどん食いましたけど……というかうどん四杯食っただけでまだ食う気なんすか!?!」

「え？あんなのまだまだよ」

「お姉ちゃんにとってはまだ腹二分目です」

「どんな胃袋してんだうちの部長は……!?!」

改めて風の胃袋の広さに驚愕する千景。

しかし、そう思っている間に目の前にあった大量の料理がどんどん減っていく。

「一体その脂肪はどこに行ってるんだ……」

「千景え」

「はい？」

「その話は女性には、厳禁よ？」

「にっこりと笑う風。」

「あ、はい……」

それに思わずビビる千景であった。

「ま、なんというか、ありがとね」

「ん？何故お礼を？」

玄関の前で、風の感謝の言葉に首を傾げる千景。

「なんでもなにも、うちの妹を送り届けてくれた事よ。樹、ドジな所あるからね」

「そうなんですか……」

「それに真夜中の街で変なオジサンとかに路地裏に引き込まれないか心配だったのよね」

「過保護か」

そこで、ふと千景はある事を聞いた。

「そういえば、親御さんはどうしたんですか？」

「ん？ああ、いないのよ。去年の秋にね」

「……死んだんですか」

「きっぱりと言うわねアンタ……」

「デリカシーの無さに苦笑する風。」

「大橋の事件、知ってる？」

「あの、いきなり反りあがって崩壊したっている災害じみた事故でしょう。原因は未だに分からず、死者は多数に及んだとか」

「西暦の大災害ほどじゃないにしても、この三百年来の原因不明の災

害だからね。うちの親、それに巻き込まれちゃってね」

「そうですか・・・」

そこで、ふと千景は考え、言う。

「・・・俺とは違うんですね」

「え？どういうコト？」

風は首を傾げる。

「俺、物心ついた頃から、親はいなかったんです」

「え・・・そうだったの？」

「ええ。なんでも殺人犯した後二人揃って仲良く心中したみたいで。その結果で俺は虐められるようになったんです」

「そっか・・・だからその耳の傷なのね・・・」

千景の耳には、いくつかの傷がある。髪を切るといふ建前の元、物の見事にハサミで切られたのだ。

今でも、その痛みはじくじくと痛む。

「気付いてたんですか・・・」

「そりや部員の事よ？観察したいと思うじゃない」

「そうですか・・・」

「・・・なんか、悪かったわね」

「なんで先輩が謝る必要があるんですか？」

「アンタは、初めから親がいなかったんでしょ？それに対してアタシたちには、去年まで親がいて、それで、その・・・家族の温もりとか色々と・・・」

「ふむ・・・別に俺はそんな事気にしませんが・・・」

風が首を傾げる。

「どちらにしろ、今の俺たちには親はいない。それでいいじゃないですか」

「・・・」

ぽかーんとする風。

「ああいや、この表現は良くないか・・・ええつと」

しばし考えてから、言い直す千景。

「俺たちには親がない。だから同じです」

そうきつぱりと言い切る千景。

その答えに、ぷつと風は噴き出す。

「・・・なんか面白い所ありましたか？」

「ああいや、ごめ、なんか、安心してさ」

落ち着いた風が、千景に向かって言う。

「そうね。おんなじね、アタシたち」

二カツと彼女らしく笑う。それにやれやれと笑みを零す千景。

「それでは、俺はこれで失礼します」

「機会があつたらまた来なさいよ。御馳走してあげるから」

「流星に量に關してはアンタの五分の一でいいですよ」

そして別れる二人。

辺りはすっかり暗くなり、空には満点の星空が輝いていた。

その空を見上げながら、千景は、帰路を歩く。

「さて、明日の天気はどうなるかね」

それは、突然起きた、あまりにも奇想天外な事件だった。

夏——灼熱の日差しと大気が、生きとし生けるものを苦しめる、地獄の季節。

そんな季節。人々、特に学生にとって癒しと言える時間がある。

いや、一部の人間にとつてはそうでもないかもしれないが、とにかく癒しである事には変わりないだろう。

その癒しというのは他でもない。

プールの時間だ。

「プールだあああああッ!!」

「ヒヤッハーツ!!」

男子達が歓喜の声を挙げてやっと解禁された目の前のプールに今にも飛び込まんといっていた。

のだが——

「なんだこのエリアの狭さは……」

なんと、男子のエリアはたった一コースだけなのだ。

「なんでこうなった!？」

「俺達が何をしたっていうんだ・!？」

「お前らが女子の着替えのぞき見してたからだろーがッ!!」

極端な話、今年の女子達はレベルが高いから千景以外の男子が女子の着替えを覗き、それを気付いた美森が無実の千景を巻き込んで全員制裁。結果、教師たちの判断でペナルティとして一コースだけしか使えなくしてしまったのだ。

「自業自得でしょー」

「ほんとサイテー」

「当然の結果ね」

女子たちからの視線が痛いうえに白い。

「女子の着替え覗かずして何が男子だア！」

「そうだそうだー！」

「俺達はただオアシスを拝みたかっただけだー！」

「もつと罵つて下さい我々の業界ではご褒美ですう！」

男子達の変なテンションに頭を抑える千景。

その時、どこからともなく高圧で飛んできた水が男子達を直撃した。

「「ぐおおお!」」

美森が持つてきた水鉄砲で撃ち抜いたのだ。

「なんで俺まで・・・」

「千景君、大丈夫？」

どういう訳か巻き添えを喰らった千景もいる。そんな様子に友奈に心配にされる。

「そっういや千景え・・・」

ふと、倒れている男子の一人が千景に聞いた。

「なんだ？」

「なんでラッシュユガードなんて着てんだ？」

「ん？ああこれか？気にするな」

千景は今、学校指定の水着に上半身にラッシュユガードを着ている。

その理由は読者の方々には知っているだろうから語らないでおく。

それはともかくだ。

「仕方ない。この範囲で泳ぐしかないか」

「ええー」

「くっそお」

「覗きたぐらいで大げさすぎるんだつての」

後、転校してきた翼にこの話が伝わり、覗きに加担した者全員が制裁されるのだが、それはまた別の話で――

そして、始まった授業なのだが・・・

女子達が広い事を良い事に思いっきり遊んでいた。

一方の男子は狭いのもくもくとノルマを泳いでいた。

もちろん、そんな温度差があればストレスが溜まるのは必至。そして爆発するのも当たり前前の事だ。

「ちくしよおおお!!やってられるかあああ!!!」

とうとう男子の一人が放棄しだした。

「なんだよ女子ばかり楽しそうにしやがって!」

「俺達だって遊びたいっつーの!」

「たかが覗きぐらいで大げさ過ぎんだよー!」

「コラア!言われた事はきちんとやりなさい!」

そんな男子達の様子に体育教諭の男が叫ぶが。

「うるせーんだよ!」

「大人だからってなんでも許されると思うなよ!」

「とうとうかどうせアンタも女子の裸みたいって思ってたんだろ!」

「引きずり下ろせー!!」

(とうとう先生にまで反逆し始めやがった・・・)

もはや混沌カオスとなり始めている男子たちのテンションに、千景は茫然とする。

「あはは、なんだか元気だねー男子」

そこへ友奈がやってくる。

「いや、あれは元気というよりも怒りで我を忘れてると言った方がいいんじゃないかねえのか・・・」

やれやれと首を振る千景。

しかし、千景は、この日プールにいた者たち全員は予想だにできなかった。

本当の混沌カオスはここからだという事を。

異変は、突然だった。

「きやあああああああああ!?!」

「!?!?!」

女子の悲鳴が響き渡る。

「どうしたの!?!」

「み、水着があ・・・」

見ればその女子の水着が破れ、一糸纏わぬ姿になっていた。

「えええ!?!」

「何が起きたの!?!」

女子たちが困惑していると、今度は二人の女子の悲鳴が轟いた。

「きやあああああああ!?!」

「何よこれえ!?!」

見ればその女子の水着も跡形も無く破られており、先ほどの女子同様素っ裸だった。

そのまま連続して次々と女子達の水着が破られていく。

女子達の黄色い悲鳴。そして突如さらされた裸体。そしてレベルの高い体つきに、男子達の脳はオーバーヒートした。

「!?!?!?!?!」

大体の男子がその鼻から鼻血を出す。

「ちよつと男子! 見ないでよ!」

「変態! へんたーい!」

「なんなのよもー!」

「買ったばかりなのに!」

女子達が泣き喚く。

「アハハハハ! 天国だあああ!!」

「何が起きてるのかしらんが、俺生まれてきてよかったー!」

「やべえ起ってきた・・・」

「我が生涯に一変の喰いなーし!!」

一方で男子達は歓喜の悲鳴を挙げていた。

「んな事言ってる場合か!？」

が、千景はそんな事に興味はなく、むしろツッコむのだった。

「くそ、一体何が起きてるんだ!？」

「分からない。でも、良くない事なのは確かだよ!」

友奈と千景が周囲を探す。

その間にどんどん女子達の水着が破かれていく。

その時、高い視力を誇る千景の眼は捉えた。

水中を走る筒状の何かを。

「ぎよ、魚雷!？」

それはまさしく魚雷と言うべき形のものだった。

その本来なら爆薬が詰まっている部分には、向きを安定させるための翼のようなものがついており、おそらくそれが、女子達の水着を引き裂いたのだ。

そして、今現在、それが友奈に向かって進行している事に、千景は声を挙げる。

「逃げろ友奈——ツ!!」

「え……?」

だが、遅かった。

友奈が着ていた水着が、一瞬にして破れ、そのまだ幼さの残る裸体がさらされて——

「ぶほあ!？」

「いやなんでお前が鼻血噴き出すんだよ!？」

それを見た美森が鼻から鼻血を盛大に噴いた。

「みみ見ないでえ!!」

友奈が水面から首から下まで潜る。

「くっそ、とうとう友奈にまで手を出しやがったなあ魚雷……ん?」

千景が過ぎ去っていった仮称『魚雷』を見ると、その行先に、ふと気づいた。

「……やばい」

その進路に気付いた千景は、慌ててプールから出た。

次の瞬間、魚雷が男子達のコースに入り、男子の水着を片っ端から破っていった。

それを理解するまで、三秒。

「ぎやあああああああああああああ!?!」

「きやあああああああああああああ!?!」

男子と女子の悲鳴の大合唱が巻き起こる。

「あ、危なかった・・・」

「おいコラ千景てめえ!!」

「自分だけ逃げるなんてずりいぞツ!!」

「知るかお前らが女子たちに見惚れていたからだろウがツ!!」

とりあえず男子達を黙らせた後、千景はプールサイドの上からプールを見下ろす。

魚雷はなおも生徒たちの水着を引き裂かんとしている。

「なんでこんな事に!?!」

「あんた達の所為じやないの!?!」

「知るか俺達は何も知らねえよツ!!」

「でも女子達の裸体を拝めたのは・・・ぐへへ」

「気持ち悪いツ!!」

まさしく混沌^{カオス}。

その状況に千景は頭痛に頭を抑える。

プールサイドに上がって休憩していた美森は友奈の裸を見て鼻血拭いてノックアウト。

友奈は水着を破かれた事でまともに動けない。

そして他の生徒のほとんどが水着を破られている為、行動不能。

そして、今無事なのは千景ただ一人。

「やるしかないか・・・」

すでに魚雷の位置は分かっている。今もなお移動し続けているが、見切れない程ではない。

「ち、千景くん・・・」

友奈が涙目+上目遣いで見上げてくる。

(やめろ友奈それは流石に破壊力がヤバイ)

「ぶほあ!？」

「だからなんでテメエが嘔いてんだゴラア!!」

美森が鼻血を噴いた。

しかしそうこうしている間に千景はすでに臨戦態勢に入っていた。チャンスは一度、失敗すれば自分の水着が引き裂かれるかもしれない。

もしそうなれば、『背中秘密』がバレてしまう。

だから、細心の注意を払って、あの魚雷をどうにかしなければならぬ。

最悪片手が犠牲になっても良いからどうにかしなければならぬ。

だから、千景は――

「セエイッ!!」

水の中に飛び込んだ。

そして、その目の前から魚雷が迫ってくる。

その距離、およそ十メートル。

速さはおそらく秒速三メートル。

残りおおよそ三・五秒で到達。

それを考えて、構える。

残り、二秒。

周囲が一瞬にして緊迫する。

ある者は唾を飲みこみ、ある者はその光景を目に焼き付けんと目を見開く。

残り、一秒。

美森の出血は止まらず、友奈は心配そうにその結果を待つ。

そして、魚雷が、千景に到達する。

残り――零秒。

千景が、手を振り抜く。

形は手刀。下から、救い上げるのではなく、居合切りの要領で、左手を振り抜いた。

魚雷の頭に千景の手刀が衝突し、一気に跳ね上げられる。

手が、魚雷の羽によって傷つく。

しかし、その結果、魚雷は水中からはじき出され、プールサイドに叩きつけられる。

フィンはなおも回り続けているが、空気では進む為の推進力とはならず、虚しく回り続けるだけだった。

そして、その数秒後、千景が水面から顔を出した。

「いってえ、流石にこれには慣れてなかった」

千景は切れた左手を抑えながらそう言う。

それに、一同は茫然とし、やがて、それは喝采へと変わった。

「うおおおおお!!」

「すげえ!」

「あんなに速かったアレを一発で仕留めちゃうなんて!」

「千景君凄いわ!」

周囲が彼を賞賛する中、ただ一人、彼に焦った様子で駆け寄る少女がいた。

「千景君、その手大丈夫!」

友奈である。彼女は千景の左手の様子を慌てた様子で見る。

「問題ねえよ。その内、塞がる」

「だめだよ、急いで保健室にいかないと・・・!」

「いや、その前に・・・」

「今すぐ、保健室行つて!」

「いや、そのだな・・・」

「何?」

友奈が頬を膨らませて聞いてくる。

「・・・お前、今自分が裸なの気付いてる」

「え・・・?」

千景の指摘に、友奈は自分の体を見下ろす。

そう、友奈は先ほど、あの魚雷によって水着を引き裂かれているのだ。

そんな訳なので・・・

「ひやああああああ!!!」
当然、悲鳴を挙げた。

「それは災難だったわね」

風が受けて笑う。

「笑わないで下さいよ」

千景が玩具の車を修理しながらそう言い返す。

「ごめんごめん。だから友奈はずっと隅っこで縮こまっているのね」
見れば部室の隅で三角座りでうずくまっている友奈の姿があった。

「うう・・・もうお嫁にイケナイ・・・」

「嫁にいけないって・・・友奈それなりに可愛いんだからきつと嫁に
貰ってくれる奴いるだろ」

千景がマジレスで言い返す。

「うう・・・」

「・・・なんで俺を睨む？」

「アハハ・・・ま、東郷は友奈の裸を見て現在保健室で寝てるのよね」
「後で迎えに行かないとなあ」

どうにか復活した友奈。

ふと、そこで友奈は彼の背中に目を向けた。

（それにしても、どうして千景君、ラツシユガードなんて着てたんだろ
う・・・？）

それが、友奈にとっての心残りだった。

余談だが、この事件は後に『讃州中学水泳競技場事件』と呼ばれるようになる。

↳ 『讃州一の不良、三ノ輪剛』 ↳

「なあ千景、こんな噂知ってるか？」
「なんだいきなり」

なんでもないある日の事、千景は学級委員としての仕事の最中に、同じクラスの鈴木に声をかけられていた。

「この讃州には、この讃州最強の不良がいるんだってよ」
「ふーん、で？」

「その強さはまさしく熊が如し。その拳はどんな屈強な男を一撃で沈め、その讃州の不良界の頂点に立つ男！」

「その名は？」
「いやそこまでは分からない」
「なんで分からないんだよ？」
「だって名前は秘匿されてるからな」
「自信満々で答えるな」

そうツツコミをいれつつ、千景は鈴木に聞いた。

「それで、なんで俺にその話を？」

「いやだってお前なら勝てそうだから」

「俺とそいつを決闘させる気だったのか・・・」

驚くを通り越して呆れる千景。

「そんなのダメだよ！」

そこへ別の方向から声があがる。

「喧嘩なんてしちゃダメ！」

友奈である。

「友奈……」

「ああ、わりいわりい。単なる興味本位だからよ」

それじゃあなー、と言いつつ残して去っていく鈴木。

「やれやれ」

「本当にやらないよね？」

「お前は俺をなんだと思ってるんだ……」

軽く友奈の額を小突く千景。

「あう!？」

「しねえよそんな事」

そう言い、千景は担任から頼まれていた仕事を済ませ、席に戻る。

それと同時に、次の授業の担当がやってきた。

昼休み。

どうにか購買で焼きそばパンを手に入れた千景は、そのまま教室に戻ろうと歩いていると、目の前に廊下を歩く風の後ろ姿が見えた。

「あれは……」

が、しかし、どこか妙に足取りが弾んでいるように見える。さらにその両手には、弁当箱が二つ。

風自体の胃袋の大きさなら、まだ足りないと思うが、それにしても何か様子が変だ。

と、ここで千景の好奇心は風の後を付けるに至った。

風の行く先は屋上。

その後を千景はこっそりと付いていく。

(何しに行くんだ……?)

扉から、屋上の様子を見る。

すると、そこには――

「お待たせ」

「ん、来たか」

一人の屈強な体をした男子だった。それも眼つきは悪く、男らしい顔立ちの男だった。

髪の色は麴塵色。短くさっぱりとした髪型。その風格は、普通の中学生にはないものを醸し出していた。

（へえ、何かと思えばだれかと弁当食うつもりだったのか。それも男・・・ん？）

そこで風は、その男子に向かって、弁当の片方を差し出した。

「はい。アンタの分の弁当」

「悪いな」

「いいのよ」

（な、なにいいいい!?)

風が、まさか自分の弁当を他人に渡すなど、誰が想像したか。

いや、むしろあの会話の内容は以前からもその様な事をしているようだ。

つまり、風はあの男子の為に毎度弁当を作っている事になる。

それ即ち――

（風先輩の愛妻弁当・・・!?)

というのは考えすぎなのかもしれないが、風が他人、それも男性に對して弁当を渡すなんて、これは何か裏があるように思えて気になる。

「それとアンタ、またどつかで喧嘩してきたでしょ?」

「う・・・なんで分かった・・・?」

「手、怪我してるでしょ?全く、これぐらいでアタシを誤魔化せるとでも?」

「わりい・・・」

（随分と観察みしているようで・・・）

内心にやける千景。

そう思っている間に、二人並んで座り、弁当を開ける。

そして、男子の方が、具材の一つを掴み、口の中に放り入れる。

「ん・・・やっぱうめえな、風の弁当は」

「そんな事はないわよ。剛ごうの腕には劣るわ」

「何を言ってるんだよお前は。十分美味いっての」

「ふふ・・・ありがと」

嬉しそうに笑う風。

(あんな顔も出来るのか・・・)

「わあ、風先輩あんな顔出来るんだねー」

「あら珍しい、風先輩が殿方と一緒にいるなんて」

「ああ、そうだな・・・てんんん!」

いつの間にか友奈と美森が千景の横にいた。

「お、お前ら!」

「千景君、焼きそばパン買いに行っただっきり帰ってこないから心配して見に来ちゃったよ」

「す、すまん・・・」

「でも、風先輩にあんな殿方がいたなんて意外ね」

美森はこっそりと風とその傍らに座る男子の様子を覗く。

「本当だよねー。あんな素敵な人と一緒にご飯食べられてるんだから」

「お前、恋愛には疎そうなのにこういう事には色々と言うよな」

「でも、あの男子、一体だれなのかしら?」

美森の言葉に、千景も同じように思うのだった。

「それはきつと、三ノ輪みのわごうさんですね」

「三ノ輪?」

そんな訳なので、犬吠埼風の妹である犬吠埼樹に公園でその話を話

した結果、意外な事に、樹はその男子の事を知っていた。

「はい。お姉ちゃんが初めて家に呼んだ人で、初めは流石に怖かったですが、話してみると案外面白い人ですよ」

「なるほどな・・・」

「剛さん、なんでも大赦の方では偉い地位にある家系の次期当主みたいなんです、出稼ぎという理由でここ讃州にやってきたみたいなんです」

「そうなのか・・・」

「お姉ちゃん、その人の話になるととても嬉しそうに話すんです」

「一応聞いておくが、付き合ってるのか？」

「聞いた話だとまだだそうです」

「あれでまだなのか・・・」

千景は意外そうにつぶやいた。

「ただ・・・」

「ただ？」

「剛さん。あまり学校には行っていないみたいでして・・・」

樹の言葉に、千景は首を傾げる。

(じゃあ昨日は稀に来る日だったって事か・・・?)

そう推測を立てつつ、千景は昨日の剛と風の様子を思い浮かべた。

ある日、千景と友奈と美森は依頼で街を歩いていた時の事。

「それでね、東郷さんの牡丹餅を食べてね、そしたら猫が食べようとしてたんだよ」

「なんでそのタイミングで出てきたんだその猫は」

「ふふ、友奈ちゃんが止めたからやめたけど、本当なら縛り上げて……」
「東郷、それはやめようか」

そんな事を言い合いつつ、三人は住宅地の中を歩いていた。
ふと、友奈はその歩みを止めた。

その視線はすぐ横の空地に向けられている。つられて千景と美森も前を見ると、そこには複数の男子学生たちがいた。

しかし、どうやらそのグループは二つに別れているようで、どうい
う訳かいがみ合っていた。

「なんか、嫌な予感がするな」

「うん……」

「ええ……」

ふと、片方のリーダーらしき男が口を開く。

「ここは俺たちが先に陣取ってた場所だ。さっさと立ち去れ」

それでもう片方のグループのリーダーも言い返す。

「何言ってるんだ。ここは元々俺たちももんだ。お前らがどっかいきや
がれ」

互いに譲らぬ様子で睨みあう双方。

「どうしよう……止めに行った方が……」

「ここで喧嘩に発展して警察沙汰になれば、そばにいた俺たちも重要
参考人として警察署に出頭、それによって友奈と東郷の両親に迷惑が
かかるからなあ……」

「あの……私の事はいいんだけど……」

三人が止めに入ろうとする。しかし、その前に、一人の男がその間
に割って入った。

「何してんだお前ら」

『!?』

「?」

その声を聞いた集団は、その顔を青ざめさせ、一方で千景と友奈に
は何が何だから分からなかった。

しかし、そこへ歩いてきた男を見て、驚く。

「あ!?!」

「あの人は!？」

その男というのは、

『み、三ノ輪の兄貴!？』

件の三ノ輪剛だった。

「三ノ輪先輩・・・!?何故ここに・・・」

「あれ、千景と友奈と東郷じゃない」

「あ、風先輩!」

驚いている千景と友奈の元に、何故か風がやってきた。

「何故ここに?」

「え、あーえつと・・・た、偶々よ!偶々!」

どうにか誤魔化そうとする風。

一方で。

「な、何故貴方がここに・・・!?」

「ん?そんなのお前らがなんか言い争ってるからだろ?なんだ?喧嘩か?」

剛の言葉に、息詰まる男子たち。

それにやれやれと息を吐きつつ、剛は言葉を続ける。

「お前らがどうしてそんなにいがみ合ってるのかは知らねえ。けどね。家族に迷惑かけるような事だけはするな」

剛は男たちに言う。

「お前らがこんな所で喧嘩して、もし家族に迷惑がかかってみる。親は相手に謝りに行き、そして慰謝料で家計が厳しくなる。生活も苦しくなって小遣いが減る。飯もまずつくなくなる。いいか?お前らが喧嘩一つするだけで、こんだけの事が起こるんだ。そんなものバレなきやいって思ってるかもしれないけどなあ、見ろ」

剛はある方向を指さす。

その先には千景たちがいる。

「なんでこっち指差してるんだ・・・」

「あそこに偶然にも見物人がいる。つまりだ。アイツらが電話一本するだけで警察が飛んでくるんだよ。いいか?ここで喧嘩を始めればすぐさま警察が飛んでくる。それで、お前達の生活は変わるんだ。も

しそんな事になりたくなかったら、いがみ合って喧嘩すんな。なるなら仲良くなれ。無理ならどっちもさっさとここから立ち去れよ」

そう言い残して、立ち去ろうとする剛。と、そこでふと立ち止まり、剛は最後の最後に釘を指してきた。

「あ、そうそうお前ら。これでもまだやるっていうなら——」

「俺が直々に相手になってやる」

その一言だけで十分であり、彼らを竦み上げさせるには十分であり、彼らの心を一つにするには十分だった。

そのまま剛は風たちの所へ歩いていく。

「わりいな風。待たせちまって」

「あ!?剛!」

「ん?なんだよ?」

慌てて風が剛の発言を止めようとするが——

「先輩、樹から三ノ輪先輩の事は聞いてますよ?」

「ちなみに屋上でお弁当食べている所も見ちやいました」

「とてもいい笑顔でしたよ」

「はうあ!」

その事実には、風は開いた口がふさがらなかつた。

「えーっと、そんな訳でコイツがアタシの友達の三ノ輪剛よ」

「コイツってなんだコイツって。ま、よろしく。風の後輩ども」

近場の公園にて、ジュースを飲みながら、剛の紹介が行われていた。

「不道千景です。一応部長代理の権限を持っています」

「結城友奈です!元氣担当です!」

「東郷美森と言います。部のホームページの更新などを担当させてもらってます。東郷と呼んでください」

挨拶を返す千景、友奈、美森の三人。

「しかし、三ノ輪先輩が讃州の不良たちをまとめている噂の不良だったとは。

「まあこつちに来た時に色々とやらかしてな。風とはそんな中で会ったんだよ」

「ほう・・・不良に絡まれていた所を三ノ輪先輩が救出したとか?」「いやいや東郷、剛とは単にクラスが同じだったってだけよ。まあ、剛が不良になるまで交流が無かったのは事実だけど・・・」

「ま、あんときは色々と荒れてたからな。ムカついたらとりあえず喧嘩吹っ掛けてボコってたし」

「壮絶・・・」

「それで、どんな風に会ったんですか?その点を詳しく教えて下さい！」

友奈が面白そうに聞いてくる。

「そんなの秘密に決まってるでしょ!」

「ええ〜いいじゃないですか!教えてくれたって!」

「だーめー!」

問い詰める友奈と断固拒否する風。

「おいおい友奈、それくらいにしとけて」

とりあえず友奈と止めておく千景。

「あ、そうだ!剛先輩って風先輩とよく一緒にいるから、勇者部に入ってますよ、いつも一緒にいられますよね」

「ちよ!?!」

友奈の発言に思わず赤面する風だったが。

「悪いが俺は入らねえぞ?」

と、ばっさり断った。

「そんな〜」

それにショックを受ける友奈。

「剛先輩ほどの威圧があれば先ほどのように喧嘩とか止められて結構

役に立つと思うのですが・・・」

「それについては否定しねえよ。まあ、俺が入らない理由としては、難しい話、俺のこの街での立場にあるんだよな」

「立場・・・この街で一番強いから、不良たちにカリスマ的存在として扱われてるって事からですか？」

「そ。その上学校での俺の評価は最悪。そんな俺が現在人気急上昇中の勇者部に入ったら、なんか支障きたすだろ？」

「別に、評価については勇者部で活動していれば改善できると思うのですが・・・」

「んー、それもそうなんだけどな」

剛は頭を掻きつつ、ある決定的な問題を提示した。

「俺はこの街では最強と言われている」

「まあ、そうですね」

「だけど他の街では？」

「？」

その剛の言葉に風以外の全員が首を傾げる。

「他の街から、俺の噂を聞いて喧嘩をしにくる奴がやってくる。その時、俺が勇者部の活動をしていたらどうだ？俺の性格上、当然喧嘩を受ける。そうでなくても、あいつらは俺を引き込む為に周囲を巻き込む筈だ。そうなると勇者部に迷惑がかかるし、俺が喧嘩おっぱじめれば、止めれなかった事で学校側から指導される。そうになったら」

「勇者部の評価が下がる・・・そういう事ですか、三ノ輪先輩」

千景が、剛の言葉に続いた。

「そうだ。だから俺は入れない。今すぐ降りようと思っても、この街にはまだタチの悪い奴らがいる」

「つまり、自分が名をはせる事で、自ら抑止力になると、そういう事なのですか？」

「そうだ東郷。俺の名と顔が知られていけば、俺がその場に居合わせるだけでそいつは悪事をやめる。そういう事をしなきゃなんないや」

「ずいぶんと、深く考えてますね」

千景が関心する。

「これでも、とある大家の次期当主だからな。これぐらいは考えとかねえと、これからが大変になりそうだからな」

「なるほど……」

千景はうなずきを持って納得する。

後々知る事になるのだが、剛は大赦で発言力を持つ『三ノ輪家』の次期当主なのだ。

「えーっと、つまりどういうコト？」

しかし、この中で唯一、友奈だけが取り残されていた。

それに一同は苦笑しつつ、美森が上手く噛み砕いて説明した。

「そういう事だ。だから俺は勇者部には入らねえ」

「それなら仕方がないですね。わかりました。剛先輩の勧誘は、しばらくやめます」

「やめるってお前、いつかまた再開するって事かよ」

「え？そのつもりだけど？」

友奈のきよとんとし、それに笑い声をあげる一同。

「風」

「ん？何？」

「良い後輩をもったな」

「……ありがとう」

二人は、別れ際に、そう言い合った。

東の郷に、道はあら不

初め、私は彼の事は苦手、いや、嫌いだった。

親友を取ってしまう悪い虫。

私よりも高い技能を持って、立場を奪おうとする盗人。

それが、あの頃の私の評価。

だけど、あの日以来から、私は彼に――

「ほら、終わったぞ」

最後の玩具を籠の中に入れ、伸びをする千景。

「おおー！千景君凄い！」

「流石ね。あれだけの量を一日で終わらせちゃうなんて」

勇者部の部室である家庭準備室にて、今日も平常運転に活動をする勇者部一同。

新しく勇者部に入った千景は現在、依頼で送られてきた玩具などの修理に勤^{いそ}しみ、それをもの一時間で全て片付けたのだ。

「さて、暇が出来た事だし、何か手伝う事とかはないか？」

「そうね・・・それじゃあ、これから友奈と一緒に依頼の女子ソフトボール部の練習に行つて来てくれないかしら？」

「分かりました・・・ていうか何故俺が女子部の手伝いに・・・」

「なんでも、アンタの指示は的確だとか言う噂を聞きつけて、ものの試しに依頼してきたらしいのよ」

「なんすかそれ・・・まあ、他に予定があるわけじゃないし、いいですよ」

「了解です！行こう千景君！」

そんな訳で早速部室を出ていく、友奈と千景。

「大分、アイツも仕事が板についてきたわね。ね、とうご・・・」

ふと、美森の方を向いた風。

瞬間、その表情が引き攣って固まる。

「ふうー……ふうー……」

そこには、真つ黒いオーラを発しながら、ハイライトの消えた目でパソコンの画面を覗き込み、機械的に、されど一回一回呪詛を込めるかのようにキーボードを打っている美森の姿があった。

さらに、鼻息も荒い。

「あー……わ、私も依頼に行ってくるわねー、アハ、アハハハハハ……」

風が渴いた笑い声をあげながら部室を出ていく。一刻も早くこの真つ黒く重い空気で満たされた部屋から出ていきたくったからだ。

そんな訳でぴしやりと閉じられるドア。

その音がした数秒後、美森は突如として机に突つ伏した。

「……風先輩に気を遣わせてしまった……」

先ほどのアレは確実に自分が悪いというのは自覚している。

あの感情の矛先は、風ではないので、風が逃げる必要はないのだが、それでも気を遣わせたことに変わりはない。

そんな、周囲に迷惑をかけるような自分が嫌になる。

いや、そもそもこんな事になっている理由は、あの不道千景とかいう悪い虫のせいだ。

最近、親友であるはずの結城友奈に物凄く気に掛けられ、さらに技能で褒められ、その類稀なる才に引き寄せられていく。

端的に言つて友奈を取つてしまう泥棒猫ならぬ泥棒犬。

あるいは、ずる賢い狐！

早急に排除せねば、友奈をとられてしまう。

そんな使命感が、美森の中に沸くが、同時にそれが実行できない事に歯がゆくなる。

彼を勇者部に推薦したのは他でもない友奈だ。

それ故に、その彼を勇者部から追い出そうとすれば、少なからず友奈はショックを受ける。

ねちねちと悪い噂を広めて追い出すのもいいが、それでは友奈が失望からのショックを受ける。ついでにその情報の発信源が自分だとバレれば友奈の心は離れてしまうからその案はそもそも除外。

故に、美森は彼を追い出さず、どうにか友奈の気を、千景から自分に向けさせたいのだ。

「どうすればいいのかしら・・・」

起き上がり、車椅子の背もたれに体重をかけ天上を見上げ、そう呟いた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・で？なんでこうなってるの!?!」

気付けば千景は美森の家で椅子にくくりつけられていた。

ナンデコウナツタ？

「知るか!?!」

シヨールガナイジャン、オレデモワカラン。

「しよらがなくねーよ!?!ナレーターが知らなくてどうするんだよ!?!」

「黙りなさい。貴方もナレーターも」

「あ、ハイ」

ア、ハイ、トリアエズモドシマス。

「よろしい」

「で?なんで俺こうなってるの?」

千景が美森に訊ねる。

「簡単な話よ」

美森がフツと笑う。

それに千景は緊張に顔を強張らせる。

「友奈ちゃんと馴れ馴れしくしないで」

「・・・え?それだけ?」

「そうだけど・・・」

「・・・はあー」

「え?なんでそんな重い溜息つくの?」

「お前、それ直接言えばいいだろ?」

「誰に?」

「友奈に」

「・・・」

しばし考え込む美森。そして・・・

「ツ!」

「いや今更にその手があつたかつて顔すんな!?馬鹿なの!?お前馬鹿なの!」

「あ、貴方に言われたくないわ!」

イヤ、アナタカレヨリセイセキヒクイデシヨ?

「何か言ったかしら?」

イエナンデモアリマセン。

「というか一々会話に入ってくるなよな」

そう言いつつ、千景は美森を見る。

「で?そろそろこの拘束をとつてくれると嬉しいんだが・・・」

「ダメよ。友奈ちゃんと別れるっていうまで絶対に解かないわ」

「おい。その言い方だとまるで俺と友奈が付き合ってるみたいじゃねえか」

「もちろんそうは思っていないわよ?」

「じゃあなんでそう言った!？」

「知らないわよ!？」

一向に進まない会話。

「だー、もう。そろそろしねえと、夕飯の時間になるぞ」

「あら？ いいじゃない。断食は良い修行になるわよ?。」

「友奈が来るんだよ」

「はい!？」

千景の思わぬ返し、というか内容に驚愕する美森。

「この間、ちよつとした依頼で俺の家に近くに来たからそこで夕飯振舞ったら、週一で来るようになってな」

「な、なんでこと・・・すでに友奈ちゃんの胃袋を掌握していたなんて・・・!」

「そこで取引だ。お前家に来るか?」

「え・・・」

千景の突然の提案にたじろぐ美森。

「このままじゃ友奈は夜の中俺の家の前で待ち続ける事になる。それを黙っていられるほど、お前は薄情じゃない。どうする?俺が帰らないと、アイツ、犬のように外で待ち続ける事になるぞ?」

「ぐ・・・」

その千景の言葉に、何も言い返せない美森。

確かにこのままでは友奈は夏とは家、蒸し暑い夜の中、一人で千景の家の前で待ち続ける事になる。その間に質の悪い男たちに掴まっ
てしまったら、それでもし、凌辱の限りを尽くされてしまったら――

「どうなるんだろうなあ?」

・・・テ、オマエガイツテタンカイ。

「・・・」

その千景の言葉に、美森は――

「・・・あ」

千景の住むマンションにて、突っ立って待っていた友奈。

しかし、足音が聞こえ、そちらを向くと、そこに彼女が待っていた人物がいた。

「もう、待っちゃったよ千景君・・・それと、東郷さん？」

友奈は以外なものでも見るかのように、千景に車椅子を押される美森を見た。

「実は偶然会ってな」

「そうなんだ！」

「え、ええ、そうなのよ」

その誤魔化しがどうか通用し、千景は二人を家に入れた。

「殺風景で悪いな東郷」

入ってみれば、内装はかなり質素。

気になるものと言えばゲームやそのソフトやカセットのみで、他に特に気になるものは何もない。

確かに殺風景と言われても仕方が無い。

「適当に、と、友奈、東郷を床に座らせてやってくれ。机低いからな」
「分かった！」

千景の指示にうなずき、美森を床に座らせる友奈。その間に千景はエプロンを着用し、料理に取り掛かる。

「そんじゃあ、テレビでも見ながら待っていてくれ」

「うん！」

パチツとテレビをつけると、最近話題のバラエティ番組がやっており、しばしそれを見て待つ友奈と美森。

「ねえ、友奈ちゃん」

ふと、美森は気になった事を友奈に聞いた。

「何？東郷さん」

「週一でここに来てるみたいだけど・・・そんなに美味しいの？」

本当は千景と一緒にいる頻度を聞いたかっただけなのだ。

「うん！すつごく美味しいよ！」

屈託のない笑顔で答える友奈。

「そ、そう・・・」

そのあまりにも輝かしい純粹さに、思わず引いてしまう美森。

「あ、でもお菓子なら東郷さんの方が美味しいよ」

「そうなの？そうよね。うん、そう」

「？」

意外な所で褒められ、気分が高揚する美森。

ふと、美森は千景の方を見る。

巧みに包丁を使い、食材を切っていくその姿は、熟練の料理人を想起させてしまうほどすさまじいものだった。

そう思っているうちに、料理は完成し、目の前に出される。

それは、肉じゃが。

「わあ！肉じゃがだあ。頂きまーす！」

友奈は嬉しそうにはしゃぎ、両手を合わせ、早速その肉じゃがに食いつく。

一方の美森は、出された料理の以外な簡単さに驚いていた。

「悪いな、ちよいと買い物する時間がなくて。でもごはんと一緒に食べばそれなりに美味しい筈だぞ？」

「あ、ううん。私、一応客人で、それなりに張り切った料理が出てくると思ってたから」

「俺は基本こんなものしか作らないぞ？」

千景は、肉じゃがを口に運びつつ、そう答える。

「・・・そう」

美森はそう小さく呟き、肉じゃがを箸で掴み、試しに一口、口に入れた。

「……美味しい……！」

その、意外なおいしさに、感嘆するのだった。

「送らなくてもいいのに」

「今回は東郷がいるからな。夜道二人、片方一人が車椅子なんて、危ないだろ？」

千景の最もな言葉に、頷く友奈。

現在、美森は友奈に押されて帰り道を歩いていた。

時間としては夜の七時。

「とりあえず、美味しかったと言っておくわ」

「そりやどうも。そういや、気になったんだけどさ」

「何かしら？」

「お前、そのリボンいつもつけてるよな。誰に貰ったんだ？」

それは、美森の髪を結ぶのに使われている、緑色のリボン。

美森は、その問いに、そのリボンを握りしめながら、切なそうに答える。

「……分からないの」

「分からない？」

「私が事故にあって、足の機能と、記憶を失ったのは、知ってるわよね？」

「まあな」

「その時、目覚めた時に、手首に結ばれたの。きつと、事故の時に誰かが結んでくれたんだと思う。だから、きつと大切なもので、手放しちゃいけないものなの」

「だから、ずつつけてるのか……」

「そうだったんだ・・・」

美森の、悲しそうに応える様子を見て、千景は空を見上げ、友奈は静かに呟いた。

「だから、これが本当は、他の誰かの物であっても、ずっと持っていないくちやいけないものだと思うの。だから、こうしてるの」

「そっか。それならそれ以上何かいう必要はないな。ほら、ついたぞ」

気付けば、三人は、友奈と美森の家の前にいた。

「送ってくれてありがとね、千景君」

「わざわざ夜遅くにごめんね」

「いいよ。俺もお前たちも勇者部の一員だ。部員を助ける事も、俺達の目的の一つだろう?」

「それもそうね」

「うん!その通りだよ!」

その言葉は、夜の空に響いた。

「あ、友奈ちゃんに千景君との事を言うの忘れた」

別の日。時間はしばし飛ぶが夏休み。

その日、美森は千景と二人きりで、依頼に行っていた。

依頼内容については割愛させてもらうが、季節な夏な今、喉が渴いたために、公園の日陰にて、休んでいた。

「暑い……」

「大丈夫か東郷？」

暑さにやられてぐったりしている美森。それを心配しつつ自分のジュースを飲む千景。

「貴方に……心配されるほどじゃない……わ……」

「んな苦しそうに言われたってさほど説得力ねーよ。落ち着くまで日陰にいろ」

「ん……」

千景の言葉にとりあえず頷く美森。

一応、依頼は終わらせている。

その帰り道において、あまりの暑さに休む事になったのだ。

「友奈ちゃん……今頃何してるのかしら……？」

「風先輩が一緒とはいえ・・・何かやらかしていないといいが」
二人して、他の仲間二人の心配をする。

「・・・暇だな」

「・・・暇ね」

「・・・なんか面白い話ないか？」

「面白い話・・・ふむ・・・」

千景の質問に、しばし考え込み、美森は答える。

「軍艦について興味はないかしら？」

「軍艦だったら俺は暁型、特III型駆逐艦が好きだぞ。特に『雷』」

「ッ！」

千景の予想外な答えに、美森の眼が光る。

「どんな!?!どんな所が好きなの!?!」

「うお!?!お前この話にはすぐ食いつくのな・・・」

「どんな所が好きなの?」

「だああああ!近いわ!」

一旦落ち着いて。

「まあ、好きな所といえば、そいつら自体の性能じゃなくて、その戦歴。例えば、一番艦の暁は、その最後は、味方に敵の位置を教えるため、夜の中、己の危険を顧みず、探照灯で照らした所とかな。それで、俺がなんで雷が好きなのかという・・・」

「敵国の船の乗組員を救助した事ね」

「そう。その時の工藤俊作艦長の心情については、感動した」

「敵も味方も助ける、それまさしく武士の道!あれこそ、本物の武士よね!」

いつの間にか盛り上がっている、会話。

「まさか、千景君が軍艦の事について詳しかったなんて」

「いや、俺がよくしってるのは暁型だけなのであって、お前ほどの知識はないぞ?」

「それでもよ。私にとっては、共感が持てる相手がいるだけでも嬉しい事だわ」

「あ、そうですか・・・」

なんとも珍しい反応に戸惑う千景。

以前までだったら、ここまで話し込む事は無かった筈なのに。

ふと。

「にゃあ」

「ん？」

「あら？」

ふと、彼らに向かって、猫がやってきた。

「猫か」

子猫ではなく、一般的に誰でも見かけるような大きさの猫。

その猫は、じつと美森の方を見ており、微動だにしなかった。

「・・・何かしら？」

気になり、声をかけた、その瞬間。

いきなり猫が美森に飛びかかった。

「ぎゃ!？」

「東郷!？」

思わぬ事態に驚き、美森は顔を守る様に腕を掲げ、千景は思わず立ち上がる。

しかし猫は、美森の肩に引っ付いたかと思うと、すぐさま何かをくわえてどこかに行ってしまう。

「なんだったんだ・・・」

「ええ」

その猫の行方を気にしつつも、ふと千景は美森の方を見た。

そこで、違和感に気付く。

「あれ・・・」

「ん？千景君、どうかしたの？」

「お前・・・リボンどうした？」

千景が指摘する。

美森は、それに己の髪に触る。

いつの間にか、束ねられていた髪が解かれていた。

その理由は、美森がいつもつけていたリボンがないから。

その事実には、美森は――

「あ」

その表情を蒼白とした。

「ま……ま……て……」

弱々しく、逃げ去る猫に向かって手を伸ばす美森。

「かえ……して……おねが……」

記憶に無い、ものの筈なのに。

それが、過ぎ去っていく様子を、実感する度に、美森は、自分の何かがどんどん瓦解していくような感覚に陥っていた。

それは、美森という人間を一気に不安定にさせてゆき――

「――お前はここで待ってる」

ふと、そんな頼もしい声が聞こえた。

気付けば、隣にいた彼が、いなかった。

「待ってッ！そのリボン返せッ!!」

声が出た方を見れば、千景がありえない速さで猫を追いかけた。た。

美森は、その様子を、ただ茫然と見ている事しか出来なかった。

それから、どれくらいの時間がたったのか、わからなかった。

気付けば周囲は夕焼け色に染まり、美森は、ただ茫然と虚空を見て

いた。

友奈や風に連絡する事も忘れ、ただ、その場で、石像のように、その場に佇んでいた。

ふと、そんな彼女の元へ、走ってくる者が、一人。

「はー……はー……良かった。まだここにいた」

「……千景君……?」

「よっす」

顔を向ければ、そこには、かなりボロボロな状態の千景がいた。

制服はどこもかしこも泥や煤がついており、顔や手にはひっつき傷ばかりで、髪も幾分か荒れていた。

「どうして……」

「どうしてって、これ私に来たんだよ」

差し出されたその手には、先ほど、あの猫に奪われた緑色のリボンが握られていた。

「あ……」

「全く、あの猫には色々とやられたぜ。すばっしこいわ、塀の上に乗るわ、小便かけられるわ、捕まえたかと思ったら思いっきり引つかかれるわ。それなのにリボンだけは頑なに手放そうとしねえわ取ったら取ったらで、全力で奪い返しにくるわ。それで格闘になった結果、どうにか取り返せたよ」

千景が疲労困憊の様子で事の顛末を話し、茫然とする美森を見て、笑う。

「どうした? 取り返してくれた事がそんなに予想外だったか?」

「……なんで、なんで、こんなものの為に……」

他人にとっては、それほど気にするものではない。その上、彼にとってもそれほど重要なものでもない筈だ。失くしたなら、代わりのものを用意すればいいのに、何故、彼はそこまでして取り返してくれたのか。美森にはそれが理解できなかった。

「いやお前、これ取られた時かなり動揺してただろ?」

しかし、千景はさぞ不思議そうに首を傾げていた。

「え……」

「お前にとっては大切なものであって、絶対に無くしちゃいけないもの。そして、それを取られて困ってたお前を見捨てておけなかった。勇者部の活動目的にもあるだろ。人が困っている事を勇んでやる。その困ってる人っていうのは、部員も含まれるのは当然だろ？」

「……」

「それにさ」

千景は美森に近付いて、そのリボンを結び始める。

「俺は、お前らと一緒にいるのが楽しいんだ。友奈がいて、風先輩がいて、お前がいる。その中で、お前だけが笑ってなかったら、気になつて楽しめねえだろ。だからさ」

結び終わり、千景は半歩下がって言う。

「これぐらいの事はさせてくれよ。他でもない。お前の為にさ」

美森は、結ばれたりリボンに触れる。

そして、千景の言葉を、心の中で反芻し、俯きながら笑う。

「……ん？」

「貴方、それ、口説きに來てるの？」

「え？何言つてんだお前？」

「ふふ……そうね。貴方はそういう人だものね」
くすりと笑い、顔をあげる。

「ありがとう、千景君」

そして、満面の笑みで、そう感謝の言葉を告げた。

それに、千景は笑って返す。

「ああ、どういたしまして」

そう、言葉を交わした時、向こうで声がした。

「おい！東郷さーん！千景くーん！」

「アンタ達ー！いくらなんでも帰りが遅いわよー！」

それに、二人は顔を見合わせる。

「あー、やっぱ心配してくるか」

「そうね。行きましょう」

「だな」

千景が車椅子を押し、迎えに來た彼女たちの元へ向かう。

また、別の日。

「千景君、これの処理お願いできないかしら？」

「ん？ああ、いいぞ。それと東郷、ホームページのアップデートの件だが、この間パソコンに新しく画像いれといたから見ておいてくれ」
「分かったわ」

美森から渡された書類の束を受け取り、それに早速とりかかる千景。

「ふーむ・・・」

「ん？どうしたのよ友奈？」

「最近、千景君と東郷さんの仲が良いなあ、って思ったので」

「ああ、確かに、前より結構話すようになったわね。あの二人」

二人の視線の先にて、息の合った動きで、仕事を進めていく黒髪組がせつせと働いていた。

蕎麦の救世主！蕎麦仮面、参上！

冬の十月。

その日、千景は見た。

「そ、蕎麦屋……だと……!?」

目の前には、一目の付かない場所で開店している、一軒の蕎麦屋。

「まさか、こんな所で……!!」

それに歓喜する千景。まさか、こんな所で、大好物の蕎麦に出会えるとは！

「ふ、ふふふ……」

今、千景は完全にフリー。勇者部の依頼を受けていなければ、なにかしように思っているわけでもなく、ただそこらを散策していただけだった。

ただ、あまりにも予想外過ぎて、歓喜に震えているのだ。

「思わず千景は周囲を見渡す。

他に、人はいない。

部員の仲間もいない。

今なら、入れる……!!

「よ、よし……」

この、蕎麦が禁忌の場所で、みすばらしくも堂々と店を構えている人物に興味を沸き、千景は、その戸を開ける。

「お、お邪魔します……」

なかばビクビクとしながらも、入る千景。

中は……惨憺としたありさまだった。

まともに掃除しているとは言えず、どこぞのラーメン屋のような造りで、人気が出そうな所とは言えない。

こんな所じゃ客は寄ってこないだろうに。

「い、いらっしやいませー!」

ふと、なんだか緊張しきった叫び声が聞こえた。慣れていないのか少々響きが足りないが、それでも接客の精神は十分に伝わってくる。そちらに視線を向ければ、がりがりな体型の男がそこに立ってい

た。

頭にタオルを巻き、黒いシャツを着ているその姿は、一丁前とも言えるだろう。

「よ、ようこそ。蕎麦屋『水戸』へ。自分、店主の『藤森水門』と申します」

「あ、ああ、俺は不道千景だ・・・今、大丈夫？」

「は、はい！器具は常に手入れしているので！」

「じゃあ、蕎麦を一杯」

「かしこまりました！」

男・・・藤森水門の顔がぱっと明るくなり、早速料理に取り掛かった。

千景はカウンター席に座り、蕎麦が出来るのを待つ。

その間に、千景は水門という男の手際を見る。

（へえ・・・手順はしつかりしてるし、蕎麦を切る時の幅も均一だ・・・なかなかいい腕してる）

お湯が沸騰するのと同時に、切った蕎麦を投入し、茹でている間に、水門は具材を切りに取り掛かる。

ものの数秒で切り終え、今度は汁の準備に取り掛かる。

（かつお節ね・・・出汁の取り方も上手いな・・・）

彼が使っているのはどれも高級とは言えない食材ばかり。それでも、腕には目を見張る物があり、相当卓越していた。

やがて、蕎麦が完成する。

「お待ちどう様、掛け蕎麦です」

出された蕎麦に、千景はしばし見つめ、やがて割り箸を割って一口蕎麦をすすった。

「ん・・・！」

一口入れた瞬間、千景の目が光る。

そのまま物凄い勢いで蕎麦を食べていく。

「この歯応え、ずる、汁の味わい深さ、ずるる、濃すぎず薄すぎず、ずぞぞ、蕎麦との相性がとてもあっていて、ずばば、その上、具材がそのおいしさを引き立て、ずるぞぞ、そして、何より、美味しい・・・！」

こんなに美味しい蕎麦は食ったことが無い・・・！」

気付けば丼は空、汁の一滴残らずを飲みつくした千景は、一言。

「美味しかったです、店主」

「ほ、本当ですか！よ、よかったあ・・・！」

水門は、とても安心したように膝をつく。

「・・・何かあったので？」

「ああ、自分、これでも大赦の方でかなり高い地位にある家系の末っ子でして」

「そうなのか・・・いや、そうなのか」

思い出してみると、そうか、『藤森』

大赦でスリートップにある『上里家』『乃木家』『白鳥家』の内、白鳥家と密接な関係にある家系。それが確か藤森家だった筈だ。

今現在、大赦において最も高い発言力を持つ上里家が乃木家、白鳥家と水面下での対立状態にあると聞いている。

その藤森家から出たとなると、金には困らない筈だが。

「自分、蕎麦が好きで、そのおいしさを、香川民の皆さんに知ってもらいたいと思って、こういう場所ですが、店を構えてみたんですが、どうにも客が来なくて・・・」

「それほどの腕があるのに人気が出ないとは・・・許すまじ」

ゴゴゴと、拳を握りしめ怒気を発する千景。

「いえ、君が来てくれただけで、自分は嬉しいです。出来れば、これからも来てくれると嬉しいのですが」

「是非来ます毎日来させてもらいます！」

「そ、そんなに・・・まあ、いつか」

目を輝かせて水門の手を取る千景。

しかし、やがて何かに気付いたかのように苦い顔をして姿勢を正す。

「いや、やっぱり無理だ」

「ど、どうして!？」

「部活があるんだ。流石にそれに時間を削られる・・・さてどうしたものか」

真剣に考え始める千景。

「ハハ……週に一度くらい来てくれるだけで充分ですよ」

「そっか……でも、流石にこのままじゃアンタの家計的に破綻する」

「い、いや、そこまで考えてくれなくても……」

バンツ！と千景は机を思いっきり叩いた。

「よくない！勇者部五箇条第四条『悩んだら相談！』及び、悩める人は助けよ！俺はアンタを助きたい！どうにかしてここを人気のある蕎麦店に見せる！」

「で、でも、具体的にどうすれば……」

それには流石に千景も止まってしまう。

だが、すぐさま過去の記憶において、ある案が浮かんだ。

「……ふっふっふ」

「ん？どうしたの？」

千景の悪い笑みに、水門がビビる。

「掴むなら……まずは子どもの心だ……」

それから数日。

「ふーむ」

美森が、とあるネットの記事をみて、そう唸った。

「どうしたの？東郷さん？」

「ううん、ただ、気になる記事があつて……」

「何々……蕎麦の救世主『蕎麦仮面』？なのそれ？」

両脇から友奈と風が画面を覗き込み、その記事を見た。

「なんでも、最近有名になつてる、軽犯罪狩りみたいなのよ」

「軽犯罪狩り？」

「ひったくりや強盗、さらにはスリまでもとらえて警察に突き出す、今香川の子ども達の人気急上昇中の英雄……私的には、国防意識の高いから、好感は持てるんだけど……」

「……蕎麦の部分ね」

蕎麦、それは、香川民にとっては宿敵ともいえる勢力の好物の一つ。

そのヒーローみたいなのは、その名前を使っているのだ。

「最近、蕎麦を食べ始める子どもたちが増えて行つてみたいなのよね」

「え!?香川で育つてるのに!？」

「そう、香川で育つてるのに」

果たして、オウム返しする必要はあつただろうか。

それはともかく。

「まあ、悪いことしてないんなら、問題ないんじゃないかしら？」

「活動目的は、私達とほぼ同じ。ただ違うのは、私達は依頼を受けてからだけど、この人の場合、突然現れて困つてる人をその場で助けて、あとは風のように去っていくて感じですよ」

「へえ、私達と同じ、人を勇んで助ける人かあ。千景君はどう思う？」

そこで、さつきまで会話に入らず黙々とおもちゃの修理をしていた千景に話が振られた。

「そんなに興味ないな」

「ええー、ゲームしてるのに？」

「なんでそこでゲームが関わってくる」

千景は一切振り返らず、そう答えた。

それに何かしらの違和感を感じた友奈だったが、特に気にする事は無かった。

「あ、動画あるのね」

「再生してみましよう」

美森がマウスを動かし、カーソルをスタートボタンに重ね、押した。再生される動画。そこに映っていたのは、とあるひったくりの現場。

『だ、誰かー!』

鞆を取られた女性は倒れ、上手く立てないのか、手を伸ばすだけ。

一方のひったくりした男は、してやったりとほくそ笑み、そのまま走り去ろうとする。

誰も、突然の事に反応できず、男に押しどかれるだけ。

このまま逃げられると思われた、その時、男の前に、とある人影が立ちはだかった。

一言で言つてコスプレ。

頭全体を覆う仮面。そのマスク部分には『蕎麦』の文字。さらに全身はプラスチックのアーマーで覆われており、マントをなびかせていた。

というか、そのマントにはどっかの住所と店の名前だろう名前がくつきり書かれていた。

その姿は、さながら『仮面ライダー』。

そんな、変質者としか言いようがない人物がひったくり犯の男の前に現れた。

「ちっーどけ!」

男が、その人物を押しつける。そのまま横を素通りし、走り去っていく。

その様子に、友奈、美森、風の三人は首を傾げた。

『助けて、と誰かが叫ぶ』

しかし、ひったくり犯は突如として足を止める。

『返して、と誰かが願う』

そして、その手にあるはずの物を確認する。

『——故に、馳せ参じるは正義の味方』

その腕の中には何もなく、

『——そして——』

男は慌てて振り返る。

『——蕎麦の救世主である!』

そこには、片手にひったくられた筈の鞆を持ったさつきの変質者の姿があった。

「おおー!」

「うっわ・・・」

「これは・・・」

友奈は目を輝かせて、風はその厨おまえ二つがぶりに引いなき、東郷も同様な反応だった。

『デメエ!』

男が、鞆を取り戻そうと、謎の人物に襲い掛かる。

だが、謎の人物は、男の突進をひらりとかわす。

『な!?!』

その事実には驚きつつも、男は謎の人物に、今度は殴りかかる。

だが、これも軽い動きでかわされる。

『く、くそ・・・なんだこいつ』

『・・・』

ふと、狼狽する男を、ただ黙って見つめる謎の自分。

『こらあ!』

『警察だ! 神妙にしろ!』

そこへ警察がやってくる。

『チツ! 覚えてろ!』

『いや・・・』

逃げようとする男の肩をがっしりと掴む謎の人物。

『お、おい離せ!』

『殴りたくはないが、少し反省しろ』

振り払おうとする男。だが、謎の人物の握力が強すぎるのか、なかなか逃げる事が出来ない。

そのまま男は掴まり、一方の謎の人物はひったくられた女性に鞆を返していた。

『ほら』

『あ、ありがとうございます』

見た所、謎の人物は中学生くらいの子で背丈であり、体格からして少年といった所だろう。

そして、彼はそのまま立ち去ろうとする。

『……あやべ名乗るの忘れてた』

が、そこでふと立ち止まりやがて慌てるように振り返り、突如として、高らかに名乗りを上げた。

『俺の名前は、蕎麦の救世主『蕎麦仮面』！』

そして決めポーズと言わんばかりに、右足を折り、しかし左足はのばしてしゃがみ、両手を、十時の方向へ伸ばしてポーズをとった。

『また会おう』

そういつて、蕎麦仮面は走り去っていく。

『H A H A H A！』という大きな高笑いを残して。

「……なんというか、すごいわね」

「あの一瞬で、鞆を取り返すとは……なかなかやりますね」

「うん！かつこよかったよね！」

友奈だけがハイテンションだった。

「これが発端で、他にも、強盗がとっていた人質を救出したり、スリからスリ返したり、あんなド派手な服装なのになぜか思いつきり人に溶け込めたりと、とにかく神出鬼没で、その先では必ず何か軽い犯罪が起きてることです。その件数、実に十件以上にのぼるとの事です」

「すごいわね……」

「うん。この人はあれだね。勇者だね！」

友奈の発現は、この際無視。

「ひどい！」

「誰に言ってるの友奈ちゃん？」

「それはともかく、この蕎麦仮面・・・なんか裏がありそうなのよね・・・」

考え込む風。

「確かに・・・うどんの本場である香川で、蕎麦を名乗るとは・・・それに、背中のマントにある住所・・・」

美森が、何かを調べ始める。

「・・・やっぱり、なんだかこのごと子ども達に人気の蕎麦店がある所よ」

「それじゃあ、蕎麦仮面は・・・」

「ええ・・・この讃州に、蕎麦文化を広めようとしてる！」

瞬間、三人の間に落雷が落ちた。

「・・・この香川で、蕎麦の布教するとは・・・良い度胸してるじゃない」

「ふふふ、これは少し、思い知らせないといけませんね」

「よーっし、この人に負けないように頑張るぞー！」

何故か、友奈だけがずれた視点にいた。

ふと、そこで千景が立ち上がり、荷物を手に取る。

「あれ？千景君今日も？」

「ああ、悪いな」

「いいわよ。個人的に受けた依頼でしょ。頑張ってください」

風はそのまま千景を送っていく。

「・・・さて東郷」

「千景君が依頼を受け始めた時期と蕎麦仮面が現れた時期が合致します。これは、何かしら関係があるものと推測されます」

「何かの偶然じゃないかな？それといつ調べたの？」

何故か、どこぞの刑事のように会議を始める友奈、風、美森の三人。

「これは、尾行する必要がありそうね・・・」

「無理じゃないかな？」

「なんでそう思うの友奈ちゃん？」

「だって、千景君もう校門でちゃったし」

友奈が指さす先、窓の向こうで、瞬間移動でもしたのか全力疾走する千景の姿があった。

「はや!?!」

流石にその足の速さには絶句するしかなかった。

と言う訳で。

「えーっと、この辺りなのよね？」

「ええ。あのマントに書かれていた住所は、この辺りを示しています」
車椅子に座ってノートパソコンを操作する美森が今開いているページを見てそう答える。

「にしても、住宅街の中とは……」

「この先に一体、何があるのかしら……」

「楽しみだなあ。蕎麦仮面！」

もはや、友奈の意識は完全に蕎麦仮面に会う事に集中していた。

「アイツの正体……もし千景だったら……」

アメリカンに笑う蕎麦仮面に頭を撫でられて喜ぶ子供たち。その様子を、遠目から呆然と見る事しかできない風と美森。

「なんというか、大人気ね」

「はい。まさか子ども達にこれほどまでに人気があるとは・・・おそろべし蕎麦仮面・・・」

そう呆然としているなか、向こうで何か変化があった。くう

「ん？」

「あ」

一人の男の子が恥ずかしそうにお腹を隠す。

「あう・・・」

それを見て、蕎麦仮面が笑い声をあげる。

「H A H A H A、腹が減ったのかい？」

「ううー」

「ならば店に入ると良い。美味しい蕎麦が食べられるよ。大丈夫、きつと君たちの口に合うハズさー！」

それに、と蕎麦仮面は続ける。

「この蕎麦が、俺の強さの秘訣だ」

キラリーンと決め台詞を吐く蕎麦仮面。

それが子供たちに受け、蕎麦仮面はその子供たちと一緒に店の中に入っていく。

一人、あまりにも身長が違う女子一人交えて。

「ゆ、友奈ちゃん!?」

「何してんのアイツ!？」

慌てて追いかける風と美森。

がらら、と入れば、そこにはカウンター席に順番に並んでいる子ども達と蕎麦仮面、そしてその蕎麦仮面から丁度サインをもらっていた友奈がいた。

「ん？新しいお客さんか」

「ど、どうも、いらっしやいませ」

「こっちだよー！」

「・・・何してんの？」

「え？蕎麦食べに」

「そうじゃなくて！私達の目的は、蕎麦仮面の正体を探る事でしょ！」

「え!? そうだったの!？」

「話聞いてたの？」

「H A H A H A！」

茶番劇のような会話に、蕎麦仮面が笑う。

「この俺の正体を探りにくるとは、予想はしていた。だが、俺という正義の味方というものは、その性質上、その正体をバレてはいけないのだよ」

蕎麦仮面が得意げに何かを話し始め、やがて風と美森に向かって指を差す。

「故に、俺はお前達に正体を晒さない！」

ズバアアーンツ！という効果音が出てきそうな決め台詞を吐く蕎麦仮面。

「というか、こんな所でなにしてるの？千景君」

と、美森がいきなり爆弾発言する。

「え!?千景君なの!？」

と、友奈が驚く。

「その仮面を脱ぎなさい千景。もうネタはあがつてんのよ！」

どーん！と風が決まったとばかりに指を差す。

その、いきなりの事に、蕎麦仮面は・・・

「・・・何をいつてるんだお前たちは？」

と、すつとぼけた。

「東郷さん？違うみたいだよ？」

「そんな簡単に信じないで友奈ちゃん！」

「とぼけても無駄よ！ここ最近、アンタは個人で依頼を引き受けてたみたいだけど、その依頼を受け始めてからと、蕎麦仮面が現れた時期は一致するのよ！」

「ふむ・・・仮に俺とその千景、という奴がその依頼とやらを引き受けた時期が一致するとして・・・俺がその千景という奴が同一人物

だという決定的証拠はないのだろうか？」

「うぐ……」

その返しに思わず唸る風。

「確かに……」

流石の美森も証拠が足りない事でうまく言い返せない。

「うーん……私は、違うと思うなー」

「え？どういう意味よ友奈？」

何故か、友奈だけは違う意見を出していた。

「だって……」

その時だった。

「こんな所に蕎麦屋あったんだなー」

千景が入って来た。

「……え？」

全く持って予想外。

まさか、千景が、後ろから、扉を、開けて、入って、来るなんて、誰が予想できただろうか。

「え？え？」

「なんで？どうして？」

風と美森は訳が分からず、友奈はやっぱりと、一方後ろの子ども達は「あ、ちかげにいちやんだー」と手を振って、この店の店主である男はいらっしゃいだけいい、一方の蕎麦仮面は、なぜかほっとしていた。

「……なんでいるんだ？」

「「すみませんでした……」」

「HHHHH！何！間違いを犯してこそ、人間というものだからな！」

完全に予想が外れて、その上相手方に迷惑をかけてしまった事に、迷惑をかけてしまった事をうしろめたく思ってしまったている風と美森が隣に座り、そのさらに横に友奈。向かいには蕎麦仮面と千景が

座っているというこの状況。

「まさか、千景が近所の家でベビーシッターをしていただけだなんて……」

「完全に予想外だったわ」

「私もびつくりだよー」

完全に落ち込んでいる風と美森、そして苦笑いしている友奈。

千景も苦笑いしており、蕎麦仮面に至っては気にしてないかのよう
に笑っていた。

「それにしても、どうして千景こっちに来たの？」

「え？まあたまには気分切り替えて蕎麦屋にお邪魔でもしようかな
と……」

「うどん派の香川民なのに蕎麦を食べるとは……やはり貴方は敵！」

「なんでそうなる!?!」

「H A H A H A H A !」

「ハハハハ！」

せめてもの謝罪の意思として蕎麦を食べる事になる。

「どうぞ……」

「この蕎麦は絶品だぞー！俺が保証しよう！」

「んじや頂きまーす」

「頂きまーす！」

「い、いただきます……」

とりあえず蕎麦を一口入れる千景、友奈、風、美森、蕎麦仮面の五
人。

感想は……

「う、美味しい!?蕎麦なのに美味しい!」

「塩辛くも無く、出汁が濃すぎる事も無く……ここまで心を動かされ
るなんて……屈辱!」

「それはあんまりじゃないか東郷？」

「美味しい!今まで食べた蕎麦のどれよりもおいしいよ!これがS I
NSHU=SOBA!」

「うむ!やはりこの蕎麦は美味しい!」

三者三様の驚き方で、それぞれが興奮に身を震わせる。

風はただただ美味いとだけ言って蕎麦を感触し、美森は苦い顔をしながらもその味の凄さに屈し、千景はものの数秒で平らげ、友奈はなぜか外国風に叫び、蕎麦仮面は相変わらずアメリカンに笑っていた。

「それじゃあ、また明日ね、千景」

「お邪魔しました」

「じゃあね、千景君！」

店の前で友奈、風、美森の三人と別れる千景。

「……………はあああああ」

見えなくなった所で、思いつきり疲労からくるため息を吐いた。

「ど、どうにか切り抜けた」

「あれがお前の部活の仲間たちか」

店の中から蕎麦仮面が出てくる。

「ええ。それにしても、まさか貴方のような人が来てくれるなんて、思
いも寄りませんでした。『白鳥友奈』さん」

蕎麦仮面が、その仮面を外す。

その仮面の下は——女性。

それも、友奈そっくりな顔立ちだった。

年齢は、おおよそ二十代後半。なんでも、この蕎麦屋の店主である
水門の幼馴染であり、婚約者らしい。

「いやあ、この仮面凄いな！声がまんま男のものに変声させる機能が
ついてるなんてな！これ作ったお前はすごいよ」

正直、物凄い違和感がある。

性格は男勝り、一人称は『俺』で、笑い方も、千景の知る友奈のも
とは全く違う。

一言でいうなら『中身が男の友奈』だ。

「しかし、本当に貴方は二十代なんですか？とてもそうとは思えない
んだが……………」

「ああ、それは俺の体にちよつとした異変が怒つちまってな。ここで成長止まっちゃうんだ」

曰く、ある病気にかかったせいで体の成長が止まり、ずっとこのままらしい。

ただ、生殖器官は無事なので、問題はないらしい。

「それにしても、あれが今の世代の友奈か・・・」
「？」

「いや、こつちの話だ。気にするな。おーい水門！蕎麦食わせろー！」
「分かつてるよ！ちよつと待ってて！」

さっさと店の中に入っていく白鳥友奈。

事の始末はこうだ。

当初、蕎麦仮面になるのは千景だった。

しかし、そこへ偶然にも、白鳥友奈がやってきて、学業もある千景の代わりに白鳥が蕎麦仮面となって数々の事件を解決していったのだ。

白鳥は、かの白鳥家の次女。当主とはなれないため、とりあえず藤森家の末っ子を結婚させる事になったのだが、一方の相手の水門が、今のままでは幸せに出来ないからと、婚約は決定したまま、結婚はせず勝手に家出。そんな水門を追いかけた白鳥が、結果、店を繁盛させるための計画に巻き込まれてしまったのだ。

まあ、本人は乗り気だったが。

そして、千景の方は、偶然にも近くでベビーシッターを欲しがっていた家族と鉢合わせとなり、蕎麦屋に通いつつも、ベビーシッターの仕事をしていたという訳だ。

勇者部が蕎麦屋を訪ねた時、会話を聞いた千景は聞き耳を立てて、何故か蕎麦仮面が自分という事になっている事に気付いて、慌てて起

点を利かせる為に店に入ったのだ。

どうにか、自分が蕎麦好きの諏訪民だという事は誤魔化せたので、問題はないのだが。

「それじゃあ、俺もこれで」

「分かった」

「じゃーなー!」

そのまま、店を出ていく千景。

そうして二人だけになった店の中。

「・・・なあ、水門」

「なんだい? 友奈ちゃん」

「お前、こんな事してるけど・・・本当に俺でいいのか?」

「・・・え?」

白鳥は、カウンターにつつぶしながら、そう吐露するかのようにな、何かを呟き始める。

「女として、あまり体つき良くないし、性格も男っぽいし、自分の事も、俺っていう・・・そんな、女らしくない俺を、嫁にして、お前はいいのか?」

その言葉に、水門は一瞬いびき、やがて、その質問に答える。

「・・・覚えてるかな。君が、初めて泣いた日の事」

「う・・・あの時か」

「君が大事にしていた犬が死んで、わんわんと泣いていたよね」

「ううー、恥ずかしいな・・・」

白鳥は顔を赤くして顔をうずめる。

「その時、からかな。僕が君を絶対に幸せにするって言ったの」
「え・・・」

「僕さ、君のように強くないけどさ。せめて、君が不自由しないように頑張る事は出来る。だから、その為の土台を作る為に、今こうして店

を開いてるんだ」

水門は振り返る。

「全部、君の為だよ。君が好きだから、僕はこうして、頑張っ
ていら
れるんだ」

「……うう」

その言葉に、白鳥は思わず顔を伏せる。

「お、おま……そんな、恥ずかしいこと、いなよ……」

「え!?あ、つと……ごめん……」

何故か二人して顔を赤くする。

クチカラサトウガー

「おいナレーター!!」

最終的に千景の突っ込みがとんできた。

背中への傷

冬、一月。

「「寒い!!」」

男子が、そう叫ぶ。

年が明けて、本格的に冬に入って来たこの時期。

早速始まった体育にて、半袖で極寒のグラウンドに投げ出されている男子たちがいた。

「なんでこんな目に!」

「俺たちが一体何をしたんだ!」

「お前らが女子の着替え覗いていたからだろうが!!」

千景の猛烈なツツコミが炸裂する。

事の発端は、もはや恒例と化している『女子の着替え覗き隊』が懲りもせず女子の着替えを覗き、美森に気付かれ、先に外に出ている千景をも巻き込んでまとめて制裁され、教師の判断の結果、男子全員半袖＋下着無しで低温の外へ投げ出されたのだ。

だから全員震えている。

「くそ、なんで俺までこんなとばっちりを……」

「貴方が男子を止めなかったからでしょう?」

ふと声が出てそちらに視線を向けて見れば、そこには美森を筆頭に冷めた目で男子達を見る女子達の姿があり、唯一友奈だけがおろおろしていた。

「別に見てもいいじゃねーかへるもんじゃねーし!」

ふと男子の一人がそう叫んだ。

その直後に、その男子の額に折り紙で作られた手裏剣がさくつと軽快な音を立てて突き刺さった。

『んな?!』

「それ以上いいたら、今度は連帯責任で全員にやりますよ?」

何故だろうか、美森の笑顔が怖い。

『は……はい』

「なんでこんな事になるんだよ……っとうおわ!」

愚痴をこぼした千景に向かって、手裏剣が飛ぶ。

「なんで!？」

「貴方も同罪よ!」

「それはあんまりじゃないから東郷さん……」

と、友奈がそう庇おうとするが……

「甘いわ……」

「え?」

「甘いわ! 友奈ちゃん!」

「ええ!？」

美森にビシッと指差されてびっくりする友奈。

「貴方は千景君に甘すぎるわ! それじゃあ、千景君がダメ人間になって、勇者部として墮落してしまうわ!」

「えう!？」

「もつと厳しく接しないと! じゃないと千景君の将来が危なくなるわ!」

「ええ! そんなのダメ!」

「でしょう! だからここは心を鬼にして!」

「わ、分かった。よし! 結城友奈は鬼になる!」

と、いって、ふくれっ面になる友奈。

「……あほらし」

「はうあ!？」

そこで千景の言葉が突き刺さり、ダメージを受ける友奈であった。

そんな訳では始まる授業。授業内容は学校の外を走るマラソン……
なのだが――

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ――

――!!!」

何故か男子全員全力疾走していた。

その理由は、マラソンが始まる前に、体育教諭が言った言葉が原因だった。

『ビリから十番目までの奴、罰ゲームな』

千景たちの担当をしている体育教諭の罰ゲームは、とにかく洒落にならない。

だから絶対に罰ゲームを受けないように、男子達は抜いて抜かれての大接戦をしているのだ。

後ろの奴らは前の奴らを追い抜かそうと、前の奴らは抜かれまいと、とにかく全力疾走していた。

先頭を走っているのは、陸上部のエースである『鈴木』。

では千景はどこにいるのか。簡単だ。

「どうしてここにいるの千景君？」

「ん？さぼり」

女装して女子に紛れているだけ。

わざわざこんな事に付き合う気等毛頭ないのだ。

故にこんな事になっているのだが・・・

「バレたら皆に怒られちゃうよ？」

「というか友奈、良く俺だと分かったな」

「え？」

千景は、ただ単純に黒髪ロングのウィッグを被っているだけだ。千景の容姿は比較的女子に近いので、こうしているとあまりバレないのだ。

以前に、個人で受けた依頼で話を聞く為に女装した事があり、それで手柄を取った事がある。

この讚州の体操服は基本的に男女同一。ブルマ？ナニソレオイシイノ？

色も統一されているので女装して紛れれば大抵の場合はバレない。

何故か友奈は一発で見抜いているが。

そしてなぜか無自覚なのだ。

「だめだよ千景君、ちゃんと授業受けなきゃ」

「あんな馬鹿共と一緒に走れるかっての」

「先生たちにいつちやうよー？」

「それじゃあこの間、蕎麦屋に行つてた事をこの場で・・・」

「ごめんなさい言いません」

「よろしい」

「でも庇わないからね」

「それでもよし」

今現在女子も男子同様マラソン・・・というよりは、グラウンドをただただ走るだけの持久走をしているだけだった。

その女子だらけの輪の中に女装して一人紛れる千景。

美森は当然の事ながら走れないので、見学だ。

ただ、友奈は千景と並走して走るなか、気になる事があった。

千景が頑なに背中だけは隠そうとする。

プールの時は教師に言われても頑なにラッシュガードを取ろうとはせず、夏服になれば、なぜか黒い下着を着て汗で透けない様にする。以前水を被った事があったが、それでも誰にも見られないように着替えていた。この体育の着替えの時も、誰かに気付かれる前に着替えをすませていた。

(気になるなあ・・・)

ボーっとしながら、そう思ってしまう友奈。

そのまま時間は過ぎていき、男子たちがマラソンから戻ってくる。相も変わらず大接戦が繰り広げられているが、どうにも数が合わない。

「ありや全力で走り過ぎて途中でくたばったな」

「あはは・・・」

もはや笑うしかない。

「それじゃ、俺はこれで」

「あ、うん」

男子勢が女子を追い抜かず瞬間、千景は紛れるのと同時にウィッグを外して見事気付かれる事なく男子勢に紛れる。

ウィッグはどういう訳か千景の服の中に入り、外からみてもそこに

まさかウィッグがあるなんて誰も思わないだろう。

凄まじい収納術である。

「すごいなあ・・・」

「あと二分——」

美森の声が響く。その間に、千景は男子勢に紛れてゴール。

全ては千景の計算通りにすすんだのだ。

その事に内心苦笑しながらも、友奈は残り二分を走り切った。

今日の空は、曇り空。

今にも雨が降りそうな天気だ。

そう、雨が降りそうだ——

「————って思ってたなら本当に雨が降って来たよ！」

「うわわわわわ!?!」

偶然にも一緒に帰っていた千景と友奈。

美森は病院の検査の為に入院しており、風とは先ほど別れたばかりだ。
それで下校路を歩いていたのだが、もののまさかと雨が降ってきた。

て、今、千景と友奈は全力で走っていた。

「ど、どこかで雨宿りしないと・・・」

「俺の家が近い！来い！」

「う、うん！」

千景に従い、千景の家に転がり込む友奈。

「ハア・・・ハア・・・くそ、災難だな」

「ふう・・・ふう・・・そうだね」

二人ともびしょ濡れ。

雨に濡れた制服は重く、水が滴り、体温が低下する。

さらに、今は冬。気温がとても低いのだ。

「タオル持ってくるから待ってろ」

「あ、うん・・・」

成り行きで来てしまった千景の家。

今まで何度も来ていた筈だが、どうにも今は気まずい。

「ほら」

「あ、ありがとう」

千景から受け取ったタオルで体を拭く友奈。

「今から風呂沸かすから、それとシャワー浴びとけ」

「あ、千景君先に浴びていいよ？」

「何言ってるんだお前は・・・ここは俺の家だ。だから俺がルールだ」

「うわあ何その支配者発言・・・」

「というかこういうやりとりしてないでさっさと風呂入ってこい」

それだけ言って千景はすでに制服を抜いだ黒Tシャツ姿となってリビングへ歩いていった。

「・・・ふう」

ちやぷん、とお湯の張られた風呂に浸かる友奈。

「千景くん家のお風呂、初めて入ったなあ」

疲れがとれて熱が戻ってくる感覚を覚えながら、友奈は、大きく伸びをする。

天井を見上げて、友奈は、一人ごちる。

「・・・千景君」

誰に言うでもなく、そう呟いた。

「・・・」

一方の千景は着替えてテレビを見ていた。キリっと。

「今夜ずっと降り続けるのか・・・」

天気予報を見て、頭を抱える千景。

「友奈の親に来てもらうか・・・いやさつき帰り遅くなるとかなんとか言ってたな・・・それじゃあ友奈はここに止まる事になるのか・・・ぐっ!？」

突然、背中に焼けるような痛みが滲みあがってくる。

「くそ、またか・・・」

千景は、耐えるように、歯を食い縛る。

そこへ。

「千景君、上がったよ」

「ッ!？」

友奈が風呂場から出てきた。

「えつとね、このシャツ、ちよつと大きすぎるかなとも思うんだけど・・・」

見ればそこには千景が希に切るワイシャツを上半身にのみ着ている友奈の姿があった。

見た所、下着も来ているのはパンツだけで、ブラはつけていない様子。

「なんッ・・・ちよッ、おまつ、ズボンはどうした!？」

「あ、えつと、サイズ合わなくて、着れなかつたんだ・・・」

確かに友奈の来ているワイシャツは大きくて、友奈の腰まで覆い、袖は指がどうにか出ている程度。その姿だけでも煽情的な上に、本人の容姿が類稀なる可愛さを誇っているためにその破壊力はすさまじい。

さらに仕草も相まって千景の理性はかなりまずい事になっている。

「そ、そうか・・・じゃあ、ちよつと待ってる。ついでに、親にも連絡しとけ。心配かけさせちやいけなからな」

「う、うん。分かった」

そのまますれ違う千景と友奈。

ふとそこで、千景はどうにも歩きにくい事に気付く。

その原因は主に下半身から。なにか嫌な予感がしてゆっくりと見下ろしてみると――

「・・・oh」

思わず、そんな声が漏れた。

(すごかったなすごかったなすごかったな・・・って何考えてるの私!?)

自分がとんでもない事を考えてる事を自覚しつつ、友奈は親に電話をかけていた。

今日は帰りが遅くなるかといっていた。だから、携帯に直接電話をかけなければならぬ。

「・・・もしもし、お母さん?」

『あら友奈、どうしたの?』

「実は、今日雨降っちゃってね。それで今、友奈の家に泊まってるんだ」

『あら、そうなのね。大丈夫かしら・・・』

「うん、大丈夫だよ」

『ご飯はどうするの?』

「作ってくれるから大丈夫だよ」

『なら安心ね。・・・あ、そうだ、友奈』

「なに、お母さん?」

『その友達って・・・男の子よね?』

「・・・」

沈黙。後に。

「ソ、ソシナコトナイヨ」

『ふふ、誤魔化さなくてもいいわ。この間、家の前まで来てたあの男の子でしょ?』

「ふえ!?み、見てたの!?!」

『実は買い物してる時に会ってねー。とても誠実そうな子で、貴方にぴったりなんじゃないかしら?』

「ど、どういう意味なの・・・?」

『そりゃ未来のだん——』

「アアア聞こえない聞こてない聞いてなーい!!」

『ふふ、かーわいー』

「こ、これ以上の話し合いは無駄のようだね!お父さんによろしくいっついて!」

『ああ!ごめんごめん悪かったわ。だからまだ切らないで?』

「・・・何?」

『せめて間違いは起こさないようにね』

「それ、千景君にいうべきなんじゃ・・・」

『あら、千景君っていうのね?』

「——ッ!!!」

容赦なく通話終了ボタンを押す友奈。

「ハア、ハア・・・もう、お母さんのばか」

火照る体を必死に鎮めるように、そう一人呟いた。

「・・・あ」

そこで気付く。

これじゃあ、ここに泊まるような言い回しになってしまった。

だが、もう一度電話をかけようにもあの母がまたからかってこないとは限らない。

あのからかい上手のあの人の事だ。きつと隅々までいじくつてくる筈だ。

「・・・まあ、いつか」

もう、泊まる事にしよう。その旨を伝える為に、友奈は洗面所へ行

く。

「千景くーん、さつきお母さんと話して泊まる事にしたからー」

そう言って、洗面所のスライド式のドアを開けた。

普通、誰かが入っているのを分かっているのに、ドアを開ける事は、本来ならありえない事だ。

しかし、友奈はさきほど母親にからかわれてしまい、そんな思考はどこかに行ってしまったのだ。

だから、見てしまった。

彼の背中にある、大きな火傷を。

「――あ」

まだ、風呂から上がったばかりなのか、体や髪の毛は濡れていて、タオルも取っているために、ほぼ全裸といってもいい。

その体には、以前から分かっていたが、体中傷だらけで、殴られた痕もあれば、何かで切られたような痕もあった。見るからに、異常な程の傷の数々。虐待、または、イジメ。しかし、そんな生半可なもので形容できるようなほど、傷は少なくなかった。

とにかく、惨い。そして、何より、目にとどまったのは――背中の六割ほどを占める、大きな火傷。

互いに硬直。友奈は、口元に手をあて、千景は、タオルを頭にかぶせたまま、止まっていた。

しかし、やがて千景が苦い顔をして、俯き、一言。

「……リビングで、待っていてくれ」

それだけ、呟いた。

目の前に、暖かいココアが出される。

しかし、互いに無言のまま。

気まずい沈黙が、友奈と千景の間に流れていた。

「・・・え・・・っと」

そこで、友奈が、切り出した。

「ごめんね。勝手に、洗面所に入っちゃって・・・」

千景は、答えず。

それに、友奈は、また、落ち込む様に顔を俯かせる。

「・・・友奈」

すると、今度は千景が口を開いた。

「この傷は、俺が以前いた高知でつけられた傷だ」

「そ、そうなの・・・?」

「ああ」

千景は、友奈に言った。

両親が犯罪を犯したこと。自分に、小学校にあがる以前の記憶がない事。両親の所業のせいで自分が虐められていた事。そして、背中の火傷を、隠す理由を――

「結局、俺は同情されなくなかったんだ。そして、気を使われる事が。だから、この傷だけは隠してきたんだ」

千景は、自虐するように、そう語った。

が、そこで友奈の様子が変な事になっている事に気付いた。

「う・・・ふえ・・・」

「なぬ・・・!?!」

なんと泣いていた。

「な、なんで泣く!?!」

「だ、だって・・・千景君・・・何も悪くないのに・・・そんな・・・そんな、イジメられるなんて・・・間違ってる・・・間違ってるよお・・・」

両目からボロボロと涙を流し、嗚咽を漏らす友奈。

その様子に何故か慌てだす千景。

「おいおいおい!? わざわざお前が泣く必要なんてないんだぞ!?!」

「でも、私・・・そんなにひどかったなんて・・・思わなかった・・・」
もちろん、友奈だって、千景の耳や手などの傷の事は気付いていた。

それを聞かなかったのも、せめてもの気遣いからだった。

だが、背中の傷だけは、友奈も知らなかった。

そんな様子の友奈に、千景は、なんとも言えない気分になった。

(まさか、俺の為に泣いてくれる奴がいるなんてな・・・)

千景は、思わず友奈の頭を撫でた。

「・・・千景君？」

「もういい。それくらい泣いてくれれば、もう大丈夫だ」

「で、でも・・・」

「お前の場合は笑ってる顔が一番だ。人間、笑ってる時が一番だからな」

「・・・うん」

友奈は、涙を拭う。

「それに、お前の可愛い顔が台無しだぞ？」

「かわいッ!?!」

ぼんツ!という効果音が出てきそうなほどに顔が真っ赤になる友奈。

それに、千景は笑う。

そして友奈は、からかわれた事に気付いて、顔を真っ赤にして怒る。

「も、もう!」

「はは、悪い悪い」

「うう〜」

顔を真っ赤にして、膝を抱える友奈。

「・・・千景君」

「ん?」

「悩んだら相談、だよ?」

まだ赤い顔で、そう言う友奈。

(ほんと、コイツは・・・)

それに、千景は、ふっと笑い。

「ああ」

そう一言だけ、答えた。

結局、火傷の事は、千景と友奈の二人だけの秘密となり、誰にも公言しない事にした。

まだ、心の準備ができていないから。それだけではないのだが、それでも、秘密にすることにした。

ただ今まで感じていた背中の焼けるような痛みは、いつの間にか、消えていた。

それから時がたって――

「うう、友奈ちゃん……」

「も、もう、東郷さん。そんなに泣かなくても……」

「だってえ、友奈ちゃんが、こんなに綺麗になって……」

「大袈裟だなあ」

「そんな事ないわ！今まで一番綺麗よ！ああ、これから、千景君と愛を誓いあってしまうのね……」

「えへへ……ってちよつと待って東郷さん!？」

「何かしら？友奈ちゃん?」

「これ、ただの撮影だよ?」

今現在、友奈は、白と桜のウェディングドレスに身を包んでいた。

白い手袋に、ノースリーブのドレス。いくつもの薄い桜色の装飾に純白の生地を使ったそのドレスは、友奈の可愛らしさをさらに引き立てていた。

しかもそれだけでなく、友奈の顔に施された化粧によって友奈の魅力が一層引き立てられているのだ。

「それにしても、中学生の私達に、被写体になって欲しいだなんて、私達も結構に有名になったよね」

「取られるのは、友奈ちゃんと千景君だけだけどね」

「あはは・・・」

友奈は恥ずかしそうに笑う。

ここはとあるドレス店で、宣伝の為に誰か被写体になってほしいと依頼が来たのだ。

中学生にそんな事をさせるなんてどういう事なのかと言いたくなるが、依頼されたからには受けなければならない。

店側は、友奈達の顔を知らないのです、出来れば全員で来てほしいと言われており、丁度全員相手いたので全員出来た所、本当なら女子の中から選ぶはずだったものを、千景を見た途端に雷が落ちたのか、千景に新郎役を申し付けたのだ。

結果、千景が新郎、友奈が新婦となつて、撮影する事になったのだ。

「千景君と撮影か・・・嬉しいなあ・・・」

えへへ、と笑う友奈に、美森も思わず微笑む。

「おーいアンタら、準備できた?」

「あ、風先輩!」

「はい、ばっちりです」

ふと友奈達のいる更衣室に、風が入ってくる。

「どれどれ・・・え!?天使!?!」

と、突然に思わず叫ぶ風。

「——つとお、友奈だった。びつくりした。なんかいつもと違うしかなり綺麗だったからどこぞの女神様かと思ったわ」

「位が上がってますよ」

しかしそれは美森も否定しない。

「ええー、そんな事ないですよ」

友奈はもちろん謙遜する。

「あ、そうだ、千景はもう撮影室に行ってるから、行って上げなさい」
「分かりました」

そうして、千景の待つ撮影室に向かえば、そこには、今回撮影を担当してくれるカメラマンと話している千景がいた。

「千景君」

友奈が声をかければ、千景が振り返る。

そして、自分の姿を見られて顔を赤らめる友奈を見て、千景がフリーズする。

「どう．．．かな．．．？」

「．．．」

しばし沈黙。だが、以前よりかなりの精神力を持つ千景は、すぐさまその意識を引き戻す。

「うえ!? あ、ああ．．．き、綺麗．．．だ．．．」

一方の千景も、着なれない筈の白いタキシードを着て、黒いダービーネクタイを首に着用していた。

こっちは友奈と違ってあまり化粧はしていないが、それでも新鮮さという点では、友奈は見惚れていた。

「そ、その．．．千景君も．．．かっこいい．．．よ．．．」

「そ、そうか．．．」

互いに顔を赤くして、どもる。

その様子に、いの一番にツツコミを入れたのは風だった。

「まだ結婚したての夫婦か!」

「うええ!」

「なぬ!」

さらに、周囲もなにやらニヤニヤとこちらを見ていた。

その様子から、二人は羞恥のあまり、顔を真っ赤にする。

「まあまあ、そろそろ撮影を始めましょう?」

結局、美森に促されて、撮影をする事になる。

二人並んで、友奈はその手にブーケを持って、千景は友奈の斜め後

ろから密着するように立つ。

まだ、カメラの方の準備は出来ておらず、少しの間時間がかかる。

その時、友奈が、千景に声をかけた。

「千景君」

「ん？なんだ？」

「もし、さ、私が結婚するとしたらね。私、このドレスを着て式をあげたいな」

「おいおい・・・それ俺にいうか？」

「えへへ。でも、もし、そうになったら嬉しいな」

無自覚にも、友奈は、そう呟く。

「・・・その隣に、俺はいるのか」

「ん？何かいった？」

「いや、なんでも」

そこで、カメラマンから声がかかる。

「はい、準備オツケーです」

「こつちもいつでもいけます」

「私も大丈夫です」

そう返答を返し、今度は、千景が友奈に話しかける。

「友奈」

「なに？」

「・・・これからも、よろしく頼む」

その言葉に、友奈は、驚いたような表情になるが、すぐに顔を綻ばせ、花のような笑顔で返事を返した。

「うん」

それは、いつかの約束。

勇気と希望と願いのバトンは、確かに紡がれていき。

大罪と悲願と想いのバトンは、静かに紡がれていき。

願いは——今、一人の少年に——

「ああ、くっそ。なんでこの状況で思い出すかね」

一人の、白い彼岸花とエーデルワイスを想起させる装束を纏った少年が、そう呟いた。

後ろには、一人の少女。

ここは、地上では無い。

少年の目の前には、人知を超えた存在がいた。

それぞれの四大元素を武器に持つ、四人の神官。

黒い顔全体を覆う仮面を被り、黒い浮遊する憎悪の剣を持つ、金髪の女性。

巨大な軀からだに、獣のようにこちらを見据える、男。

白いローブを纏った、いかにも弱そうであるものの、並々ならぬオーラを感じさせる、男。

全身真っ黒な装束に身を包み、漆黒の槍を持つ、いかにも先ほど述べた奴らより別格な強さを感じさせる、男。

その背後には、あまりにも大きな存在。

人ではなく、ましてや、生物ですらない。

形容しようにも、それは機械的のしか言えず、全身金属のようで、金属なのだろう硬質な肌は、歯車のようなもので動き、それら一つ一つが『秩序』を象徴しているようにも見えた。

顔は無く、頭はあって、腕は二つではなく、無数にあって、足はなくても腰はある。

まさしく曖昧にして、確固たる存在。

人は、その存在を、まさしくこう呼ぶのだろう。

『神』と。

そんな相手に、少年は、もはや笑う事しか出来ない。

「諦めろ」

ふと、黒い装束の男が話しかける。

「お前達に、もはや生き残るといふ手段は残されていないぞ」

「さて、それはどうかね。人間諦めなければなんでも出来るんだぜ？」

「はっ」

ふと、炎を司る神官が鼻で笑う。

「バカじゃねーのか？ たかが人間如きに、アタシらに勝てると思ってんのか？」

「勝てるとは思ってねーよ。だけど、生き残る事は出来る」

少年が立ち上がる。

「ふん、やはり人間は傲慢で愚かしいですね。この状況を覆せるとお
思いとは・・・」

氷を司る神官が、冷笑を浮かべて嘲る。

「アハハ、ねえねえ、やっちゃっていい？ やっちゃっていい？ もう断罪
しっちゃっていい？」

「少し待ちなさい。我が主の指示を待ちなさい」

風を司る神官が、その見た目に反して子どものようなテンションを
見せ、土を司る神官に止められる。

そこで、神が動いた。

『——人間よ。お前は何故、そうまでして運命に抗う』

その問いに、少年は答える。

「そんなの決まってるんだろ。認められないからだよ。お前らが勝手に
決めた運命なんぞ、くそくらえだ」

その返答に、『神』は明らかに呆れた。

『やはり人間にこのような質問を投げかけても無駄か。この世界の人間は、やはり愚かで醜い。故に、全て粛清する必要がある』

「させねえよ。そんな事」

『人間如き、何が出来る？。それも、お前のようなちっぽけな存在に、一体何が出来ると言う？。』

「確かに俺一人じゃ何も出来ない。だけどな、俺には仲間がいる」

『お前の事を忘れた者たちを頼ってどうする？。』

「関係ないねそんな事」

『なんだと？。』

少年の返答に、神は思わず聞き返す。

「例え、忘れてても、あいつらはきつと、戦う事を選ぶさ。ぶつかる事もある、泣く事もある、絶望する事もある。それでも、俺たちは、前を向いてきた。立ち止まる事もあっても、また、歩き出せるんだ。人間は決して弱くない。失敗から学べる、そんな存在だ。だから、俺は諦めない」

少年は、鎌の力を開放する。

『——愚か』

その直前に、神は、少年の左胸に何かを打ち込んだ。

「ぐツ!？」

「ああ!？」

後ろの少女が叫ぶ。

『実に、愚か。やはり、この世界の人間は傲慢で愚か。故に、滅ぼすべきである』

「だから、そんな事、させねえと言ってんだろうが——!!」

少年は咆える。

『貴様に、何が出来る？。』

また、神が問う。

それに、今度は少年はニヤリと笑って——

「これだよ——」

その時、少年の周囲に、いくつかの輪が出現する。

その中心には、文字が描かれていた。

『何を——』

「真解——」

その文字は、『鎖』『解』『罪』『砲』『弾』『刀』『影』そして『滅』

「——『滅砲・解業罪乃鎖刀之弾影』」

鎌は形を変えて、一本の刀に。

少年の装束は、紅くなり、一つの戦装束へ。

刀と装束は、ある花を想起させるもの。

刀の名は——『沈丁花』

『不滅』と『永遠』の花言葉を持つ花。

装束の名は——『天竺葵』

『君ありて幸福』の花言葉を持つ花。

少年は、左手に持った刀を振り上げる。

「覚えておきなさい。人間は、必ずお前たちに勝つ」

そう一言呟いた瞬間、少年はその刀を振り下ろした。

やがて一つの爆発が轟き、宇宙に浮かぶ要塞から、一つの光が、神樹の作った結界の中に入っていく。

物語は、まだ終わっていない。

それは、三百年の悲願の物語。

人類の悲願の物語。

人知れずに死んでいった者たちへの鎮魂歌。

終わる事なき戦いに終止符を打つ、命懸けの戦記。

これは、救われるべき物語。

一輪の花咲き誇る時、物語はまた始まる。

これは、時を超えた物語。

願いの物語。

友情の物語。

紡がれる、バトンの物語。

たった一輪の花は、悲願の為に咲き誇る。

不道千景は勇者である—— 『始動の章』完

勇者の章《ブレイブ》 忘却されし少年

——暗い、世界があつた。

そこには何もなく、ただ、無限の闇があるだけだった。

いや、何もないわけじゃない。

鏡が一つ、そこにあつた。

その鏡を覗けば、ある場所が映された。

そこは街で、そこに生きる、まだ幼い少年少女の姿が見て取れた。

そこに移る、まだ、十八を超えぬ子供たちは、楽しそうに暮らしていた。

しかし、この鏡に映る彼らは、必ず、とある御役目を受けていた。

それは、とても辛く、苦しい事で、毎回、誰かが死ぬのが見えた。

その姿は勇敢で、凄惨で、死ぬ度に、わたし、というものはや曖昧な存在は、その精神と言つていいのかというものを擦り減らしていく。

そして、毎度思う。

わたしがしたことは、一体なんだつたのか。

そして、わたしは今日も、今回も、新たな御役目につくものたちを見た。

前は、一人の少女の命が消えた。その前は、二人の少女の命が消えた。

今回は、誰が死ぬのだろうか。そう、思っていた。

しかし、わたし、という存在は、とある存在に釘付けになる。

彼女と同じ名前の、少年。

彼女と同じ髪の毛、彼女と同じ瞳、彼女と同じ趣味。

仕草は、男でも、彼女と同じ。笑い方も、彼女と同じ。

ただ、違う事は、明るい事。

そして思う。ああ、彼女も、こんな顔をするのか、という事を――

気になって、彼の事が気になって、彼に魅入った。

死にかけて時には、息がつまりそうになり、戦っている時は、頑張れと応援して、そして、覚悟を見せた彼の表情に、心が締め付けられる。

彼女も、あの時の覚悟を決めた時は、こんな表情をしていたのか、と思つて。

そして、彼が、仲間から忘れられた時――わたしは、私という存在は――

――ちよつとだけ、神に反乱した。

冬、十一月。

寒さが街を包み込むなか、高知県絡久良市に存在する育児養護施設『百合籠』にて――

「――だから、そこはそうじゃない。こうするんだ」

「おお、流石、千景」

「お前が出来なさすぎるんだよアホ」

「あう」

ぱたん、と頭を叩かいたのは、絶賛勉強会中で教師ポジションにいる『不道千景』、叩かれたのはそんな千景に教えられている絶望的な成績を持っている水色に近い黒髪の少女、『水霜冬樹』。

「ふん。その程度出来ないとは……」

「お前はその上から目線な言動やめろ」

「お前に言われる筋合いはない」

威圧的な言動が目立つこの少年は、『浅羽海路』。

「そういう君は、理科負けてたよね？千景に」

「ぐ、だまれロリ巨乳」

「な!?言ったなこの伊達眼鏡!」

「やめなさい!」

「ぎゃん!」

「へぶ?!」

余計な一言を言ったのは中学一年茶髪の『新井白露』。そして白露と海路に鉄拳制裁したのは『桐馬雅』だ。

「おー、怖いねー雅ちゃん」

その様子をコーヒー飲みながら見ているのは、ここの職員の『森谷真武郎』。

「あのー信也さん、ここの文章問題がよくわからないのですが……」

「ん?ああ、これか。ここはこうやって式作るんだよ」

「ああ、なるほど」

そして、小学生にしては胸の特定部分が異常に成長した少女『安座間優』と、この中で数学がダントツトップな『磯部信也』がいた。彼らは、この絡久良市という唯一、神樹を信仰していない街で、そこを収めている土地神『創代』から御役目を受けている神の使い『救導者』。

この中で、千景を除く七人は『七つの大罪』と呼ばれる救導者であり、千景は彼らより前にやっていたため、代は同じだが、七つの大罪には入っていない。

「順調かな？」

ふと、そこでこの育児養護施設『百合籠』の所長である、『氷室雄二』が人数分のココアを持ってやってくる。

「ココア！」

「ありがとう氷室おじちゃん！」

「お、ありがてー」

「なんで貴方が飲もうとしてんのよー！」

「理不尽!？」

「何してるんだか……」

「そうだな」

「ああ」

「そうですね……」

パツと明るくなる冬樹と白露、横から飲もうとする真武郎に蹴りを入れようとする雅。そしてそれに呆れる千景、信也、海路、優の四人。「どうかね？皆の様子は？」

「まず冬樹がほぼダメ、特に英語と国語が絶望的。白露は数学はいいんだが暗記などを必要とする理科と社会が著しくなく、海路はほぼ問題無し。信也に至っては数学は文句ないんですが、英語がダメ。優に至っては数学が絶望的という始末」

千景のあまりにもきつぱりとした物言いには、誰も何も言えない。

「アハハ……やっぱ学年総合一位が言うとな誰も文句は言えないわね」

「まあ、コイツはガキの頃から色々万能だったからな」

それに、苦笑する雅と真武郎。

そこへ。

「お邪魔します。皆、やってる？」

「あ、奏さん」

ふと、百合籠に入ってきたのは、巫女服にある程度の防寒具を来た少女が入ってきた。

高校生であり、救導者のサポートを担っている、創代の巫女である『神代奏』だ。

「やっほ。」

「優、勉強は順調か？」

「お、お母さん!？」

「椿さんまで・・・」

優の母親にして、優の使う御神刀『虚像布』、元の名を『陸鎧布』の元所有者である『安座間椿』も、一緒に入ってきている。

「一応、順調ですよ」

千景が答える。

「それは良かったわ。皆、苦手分野が結構危なかったみたいだったから。それじゃあ御役目にも支障が出るから困るわよ？」

「ぐ・・・」

「そういう貴方はどうなんですか？答案こつそり見ましたけど、冬樹ほどじゃないしても酷かったですよ」

「な!いい、何時の間に・・・って、それを中学生の貴方に言われる筋合いはありません!」

「大学レベルの問題を解ける俺に良く言えるなあんだ」

それを言われると、奏は何も言えなくなる。

「まあ、勉強が順調だという事は良かったとして・・・いきなりで悪いが、今日は中断してくれないか？」

「え?なん、で?」

冬樹が首を傾げる。それは他の者達も同様。

「御神刀の手入れが終わったのよ。それと、千景の天鎖刈の錬成もね」
そう言って、綺麗な笑顔で千景を見る奏。

その笑顔に、千景はどういう訳か引きつった笑みを浮かべる。

そして、周囲から突き刺すような視線も感じていた。

「次は、勝手に持ち出して一人で無茶なことしないようにね？」

「は……はい……」

何故、この様な事になっているのかというと……

それは、数日前の事。

「……ん？」

ふと、千景が自室にて窓の外の星空を見ていた時、とある違和感に見舞われた。

『どうかしたの？』

その直後に、彼のもう一つの人格、というよりも、入り込んだ意識であり、千景の御先祖様の『郡千景』が、話しかけてくる。

「いや、なんでもない」

『そう……何か、忘れてる事とかは……』

「忘れてる事？……いや、無かったような……」

『そう……そうよね……』

郡が、何か考え込む。

「どしたぐんちゃん？」

『その名前で呼ぶのはやめて。呼んでいいのは高嶋さんだけよ』

「手厳しい事で……」

その様なやり取りのあと、千景はまた考える。

(何かを忘れている……何をだ……?)

しかし、千景はその考えを切り、ベッドに倒れ込む。

今はもう就寝時間。寝なければならぬ。

横向きになって、目を閉じようとする。

ふと、その視線の先にて、軍艦の事について書かれた辞典のようなものと、そのすぐ横にある、『海軍』という題名の本が視界に映り、そのまま眠りにおちた――

――『友奈ちゃんと馴れ馴れしくしないで』

なんだ・・・

――『あ、貴方に言われたくないわ!』

何か、忘れているような・・・

――『送らなくてもいいのに』

誰だ・・・

――『だから、きつと大切なもので、手放しちやいけないものなの』

お前は・・・

――『どんな!?どんな所が好きなの!?!』

お前の・・・

――『それでもよ。私にとっては、共感が持てる相手がいるだ

けでも嬉しい事だわ』

お前の、名前は・・・

——『ありがとう、千景君』

「——東郷!!」

跳ね起きる千景。

『やっぱり何か忘れてたわね。うかつだった・・・』

「その口ぶりからしてアンタもか・・・どういう事だ」

千景は、今起きている事態に混乱を隠せない。

そこで、千景は香川の新聞を広げてみる事にする。

ほとんどの子供や職員が眠っているなか、千景は唯一、起きて新聞を広げていた。

そこには・・・

「・・・ない」

それは数か月前、とある記者がとった当時五人だけだった勇者部全員の集合写真が載っている記事だ。

しかしそこには、千景は当たり前前として、勇者部でハイスペックを誇る、東郷美森の姿が無かった。

「どうしてだ・・・」

『貴方はともかく、東郷さんまでもが消えてるなんて・・・』

千景が、この写真の中から消えた理由。

それは、『郡千景』の血を引く者に与えられた、『神殺し』の力が原因だった。

その名は、『神奪』。

郡千景の血を引く者、それともう一つ、『一番最初に生まれた子供』にのみ、その力が継承されるその力は、千景の代までずっと受け継がれてきた。

本来、郡の血を引く者は、この高知から出られない。

しかし、当代『神奪』保持者である千景が、何の因果かこの高知を出て、香川へとやってきた。そして、そこで千景は、『神樹』より勇者の御役目を与えられている少女たちと接触してしまったのだ。

彼女たちと共に過ごしていく内に、千景は、知らず知らずのうちに、神でさえも気付かぬうちに、彼女を経由して神樹から力を奪い、その体に、『樹海に入る為の権利』を、その体に刷り込ませてしまった。

その結果、千景はあのはじめの襲撃の日に樹海に入る事が出来、そして、今度は本格的に力を奪って勇者となつて、結界外からの襲撃者『バーテックス』と戦った。

しかし、それがいけなかった。

神から力を奪う事。それ即ち、神との敵対行為であり、神の寿命を削っているも同然。故に、彼は神樹を怒らせてしまい、そして、結果としてこの四国から、彼の存在したという事実を消され、また、千景は故郷の地に縛られる事となったのだ。

だから、今、この四国で、彼を覚えているのは、この絡久良市にいる者達だけ。

勇者部も、ましてや大赦までもが、彼の事を覚えていない。

最も、それだけではないのだが。

「だけど、なんで東郷まで消えてるんだ……？」

『それが一番の問題ね……』

考える千景と郡。

『・・・ねえ』

「なんだ？」

『あのアプリ、まだあるわよね？』

「ん？ああ、大丈夫だ」

千景は、ポケットからスマホを取り出し、そしてあの勇者に変身する為のアプリ『NARUKO』を起動させる。

『そのマップ機能は・・・』

「だめだな。もう完全に神樹とのリンクが切れてるから、機能の全部使えない」

『そう・・・なら、結界の外にいったらどうかしら？』

「結界の外・・・？」

結界の外。それはおそらく、神樹の作った、『四国大結界』の事だろう。

この四国の外は、全てが焼け野原となっている。

責めてきた神々が、人類再興の可能性を完全に消すために、この結界に守られた四国以外のすべてを破壊した。

今、四国を囲うように出来ている植物性の壁は、神樹が創った、四国を守る為の結界。

神が創った尖兵、『バーテックス』の侵攻を防ぐ為の、大結界。

それが、あの壁。

そして、今映されている空模様は、全て神樹が外の現状を、人々に知られないようにするための幻だ。

『もう、強化は終わっているのでしょうか？』

「・・・そうだな」

もはや、千景に出来る事といったらこれしかない。

千景はコートを着て、外に出る。

まだ秋に入ったばかりか、肌寒いものの、コートを着ているのでそれほど気にするほどの事でもない。

百合籠の前の道路に立ち、千景は、手をかざす。

「来い、『天鎖刈』」

瞬間、この街で一番高い山から、光の矢が迸り、その矢が千景の掲

げられた手を叩いた。

その光の矢の正体は、一本の脇差。

彼の救導者としての武器『天鎖刈』だ。

その能力は、『鎖』。

鎖の概念を操り、相手を束縛するだけでなく、上限の解放、概念を縛り付けて強化、または弱体化が可能。

御神刀には奥の手である『真解』が存在し、天鎖刈の真解時に解放される文字は『解』。

能力は、通常時では出来ない『自らの限界突破』。

ただし、代償として『突破した限界の分だけ体に制限をかけられる』というものがある。

さらに上限解放として『罪』の文字が存在し、前述の二つの上に、『業火による追加ダメージ』という効果も付与される。

まあ、それが彼の御神刀が『特殊性』と言われる由縁でもあるのだが、今の彼の天鎖刈は、以前のものより比べ物にならないほどに強化されている。

千景は、刃を引き抜き、その力を解放する。

彼の足元に光の輪が出現、その中心には鎖の文字。

それが砕け散ると共に、彼の姿が変わる。

まるで罪人のような装束に身を包み、その体を拘束具のような軽金属装備に身を包む。

『この感覚も、久しぶりね・・・』

「そうか、この時だけは感覚共有してるんだったな」

『ふふ、そうね。鏡見てると思うけど、貴方、本当に真一さんに似てるわ』

「そうか・・・まあ、あんな日記書くぐらいだからなあアンタは」

『ツ!?あ、あの内容は忘れなさい!』

「そりゃ無理だ」

郡の喚き声を見捨てて千景は飛ぶ。

海岸まで来ると、千景は鎖を伸ばして壁に飛ぶ。

壁に激突すると同時に、千景は壁を駆け上がり、壁の上に立つ。

そのまま、結界の外へ――

「毎度思うが……」

『これは酷いわね』

外に出れば、そこは、地獄。

海はなく、大陸は燃えあがり、そこら中には、白いウジ虫のようなものが無数に飛び交っている。

一面、焼け野原、というのも正しくない。

まさしく、煉獄。

人が、足を踏み入れているのかというほどに、惨いほどに残酷な世界。

これが、世界の真実――

「……さて、東郷は……」

千景は、周囲を探す。だが、そこには何もない。

上空を見上げてみるも――

「……なんだあれ」

丁度、四国の真上。

そこに、巨大な何かがあった。

面積はおおよそ、かつて関東と呼ばれたとされる地方にあったときれる東京ぐらいか。

その巨大な何か、高知の上に存在しているのだ。

「……」

これにはさすがに絶句せざる得なかった。

だが。

「……行ってみるか」

『そうね』

という、なんとも間の抜けた理由で、二人はその巨大な何か――上がってみればそれが城だったのだが――に侵入して、そして、見つけたのだ。

その城のとある一室に、東郷美森が囚われていたのを。

美森は、何か、得体のしれない球体のようなものに囚われており、嫌な予感がして警報が鳴るのもお構いなしに破壊。そのまま気絶した彼女を持って、そのまま逃げかえってきたわけなのだが。

その後、千景はこっそり美森を讃州の病院に置いて行き、そのまま絡久良市へ帰っていった。

その後、奏や他の救導者にこっぴどく叱られたのは言うまでもない。

結果、千景はしばし自身の御神刀である天鎖刈の使用を制限されているのだ。

そんなこんなで神社に向かう為に歩道を歩いている訳だが。

「全く、今の貴方にはちゃんと頼れる仲間がいるんだから、ちゃんと相談しなさいよね」

「いやこの場合まだ俺の天鎖刈以外の御神刀では神樹の結界外での活動は不可能と聞いていたんでついでにいうとバーテックスとの戦い方を知らないこいつらを同伴させるのははつきり言って足手まといになると思ったから単独行動をしたのであって決してあんまり信頼してなかった訳じゃなくてですね・・・」

「言い訳はよろしい。とにかく黙りなさい」

「はい・・・」

有無を言わせぬとはこの事だ。

『厳しいわね』

(いつとくが、怒られてんのはアンタとて同じなんだからな)

『ふふ、そうね』

一方の郡は面白がっている。

「ちつくしよー」

「なに、が？」

「誰に行ってるの千景？」

そのまま、神社につき、その神社にある、『創代の間』に、八本の脇差が一枚の布の上に綺麗に並べられていた。

それぞれ、色違いで。

ふと

『おっせーよー!』

突如、どこからか声が聞こえた。

すると、八本の御神刀の内の一つが飛び上がったかと思うと、それが煙を出して変身。まるでマスコットキャラクターのような蝙蝠のような羽の生えた小さなドラゴンが出てきた。

「う、うるさいな! 虚くん黙ってて!」

それを見た優が慌てて声を張り上げる。

このぬいぐるみみたいなのは、創代が面白半分で作った実験作で、まだ幼かった優の補助として、彼女の御神刀『虚像布』に実装した人格『虚』だ。

ちなみに名前は優がつけた。

『うっせえー! こちとら手入れの間はずっと暇だったんだぞ! あとでプリンおごりやがれ!』

「こっちは君が手入れしている間に楽しみの時間を全部使って勉強してたんだからね!」

『何かしてたんじゃねーか! 何も出来ねー苦痛をお前に理解できるのか!?! ああ!?!』

何故か喧嘩に発展している優と虚の会話。

その様子を面白がりながら、奏が残りの御神刀を拾い、それぞれの御神刀を渡す。

信也の『剛蹴脚』、冬樹の『水誠刀』、白露の『虎之威』、雅の『重華

扇、『真武郎の『爆撃槍』、海路の『射墮填』、優の『虚像布』、そして、千景の『天鎖刈』。

それぞれがそれぞれの御神刀を受け取る。

「とりあえず、今回の手入れはこれでおしまい。それと、千景君が持ち帰った『勇者の力』を組み込んでおいたから、今度は、結界外での活動が可能になる筈よ」

「それじゃあ・・・」

「ええ、今度は、皆一緒に戦えるわ」

奏のその言葉に、みな、また一段と覚悟を決めた様な表情になる。それに、千景は苦笑する。

彼らは強い。それは、この街に戻ってまた創代の御役目を再開して、みだから言える事だ。

仲間が増えるのは、心のどこかで安心するものだ。

『仲間って、いいわよね・・・』

(そうだな・・・)

そして、その仲間の大切さを、郡千景の血を引く彼は、よく知っている。

「あと、千景君の『多重文字解放』に耐えられるように強化、調整しておいたから。ただ、今度は丈夫さ重視だから、前よりは扱いづらくなっている筈よ」

「なるほどな・・・試してみてもいいか？」

「構わないわ」

「あ、それなら俺も」

「私、も」

「私もやります!」

「私もやってみてもいいかしら?」

「なんなら俺も」

「あ、私もやります!」

「・・・チツ」

千景に乗っかって他の救導者たちも手入れされた御神刀の試運転をする。

御神刀は、神樹の力とは違い、刀の中に戦う為の装束が武器が収束されている。

そして、その力を使うには、使用者の精神力、こちらの呼び方で『神力』じんりきを使わなければならない。

御神刀は、ちよつとやそつとでは絶対に折れないほど丈夫であり、そう簡単に壊れる事は無い。

だが、たびたび能力を使ったり、武器をぶつけ合わせれば、御神刀は摩耗し、その力を十全に引き出せなくなるのだ。

だから、創代様にお願ひして定期的に手入れしなければ、十全に力を発揮できず、魔器使いたちに敗北して命を落とす事があるのだ。

だが、手入れするタイミングも考えなければならない。

手入れしている間は御神刀を手放す訳だから、その間に魔器使いたちに襲われる可能性もあるのだ。

だから、タイミングを見計らって、手入れしなければならないのだ。

鎌を持つ。そのまま振り回す。曲芸のように上空へ投げ飛ばしたり、回転させてピザ回しのように振り回したり、拳句の果てには逆立ちして足で回したりする。

「テメエはピエロか！」

そこで信也からツツコミが入る。

が、千景はこの際無視して鎌の具合を確かめる。

「重いな・・・」

「やっぱりそうかしら・・・」

そこへ奏がやってくる。

「まあ、以前より少し重いつて程度なので、慣れれば問題ありません」

「そう、じゃあ私、他の人たちのも見て来るわね」

「分かった」

そのまま別の救導者の所へ向かう奏。

そこで千景は、他の救導者の力を見た。

信也の御神刀『剛蹴脚』。

『蹴』の文字を持つ御神刀。

その能力は、『蹴』の概念を操る事。

単純に言つて、『蹴り』などの攻撃を主体とした、ブーツ型の御神刀だ。

しかし、その能力はすさまじく、空気を蹴つて飛ばす遠距離攻撃が可能で、さらに空中を走る事も出来る。さらに、その蹴りは岩盤を砕くほどで、ひとまず喰らえば、ただ怪我するだけではすまないだろう。

優の御神刀『虚像布』

『布』の文字を持つ御神刀。

文字通り布の御神刀なのだが、優は先代にして母である椿と同じように腕に巻いて格闘で戦う。

母直伝の空手を使用するも、その体は椿の鋼の体とは違い、もろい。さらに実力は完全に隔絶している。

その為に、椿の使っていた時の記録を御神刀を通して、優にトレースさせ、そして御神刀を使っている間は椿の鋼の体の正体である『化身刀』タケミカツチを発動させる事が出来るようにしてある。

まさしく虚像、故に虚像布。その御神刀を使っている間は、優は、椿の力を振るう事が出来るのだ。

当然、御神刀本来の使い方も出来る。

冬樹の御神刀『水誠刀』。

文献において最強の文字とされる四大元素が一つ『水』の文字を持つ御神刀。

武器としての形は『刀』。剣道を習っている冬樹にとっては扱いやすい武器である。

能力は『水』に由来し、高圧流水による物体の切断。水泡を作り出してそれを使った対象の治療など、用途は幅広い。

が、使用者本人の頭はある意味お釈迦なので、千景やまわりにアドバンスされないともたもに扱えない。

ただ、どういう訳か医療に関する事においてはダントツで、どういう訳か治療に関してはかなり頼れる。

雅の御神刀『重華扇』

『重』の文字を持つ扇形の御神刀。

ただ、雅はこの御神刀の能力を『重力』という概念を中心に使用している。

その為、重力を使ったサポートなどを担当している。

まあ、理由としては彼女の発想が仲間を巻き込んだとてつもなく危険なものである為に、戦闘は滅多にしたいくないというだけなのだが。

その気になればブラックホールを作り出す事が出来る。

真武郎の御神刀『爆撃槍』

『爆』の文字を持つ槍型の御神刀。

そのまま、爆発する槍。爆発を率いた投擲してもよし。叩き付けて爆発させるのもよし、投げて着地点を一面更地にするのもよし、とにかく破壊に特化した御神刀。

小さな爆発する玉を作って相手に叩き付ける事も出来る。爆発の規模、方向は自由自在に変えられる。

白露の御神刀『虎之威』。

『虎』の文字を持つ変身型の御神刀。

おおよそ虎に関する事ならなんでも出来る。隠密、強襲などなど。特筆すべきはその速さで、カメラの認識を追い抜く程の速さで動く。

隠密能力においても、相手にその一切を悟らせない事が出来る。

戦闘面でも爪で相手を切り裂いたり、速さを生かした打撃で相手を叩きのめる事が出来る。

海路の御神刀『射墮填』。

『射』の文字を持つ、狙撃銃型の御神刀。スナイパーライフル

その能力はどこからでも狙撃が出来る事。

視界に映っている、イメージした場所、座標、および空中、壁、床、水面など、さまざまな場所から好きなタイミング、場所から狙撃が出来る。

簡単にいえば任意の場所に『銃口』を設置して、そのから神力の弾丸をぶっ放す事が出来る。

ただし、弾道変化は出来ない。『銃口』を重ねて威力を底上げする事は出来る。

この様に、それぞれがそれぞれの御神刀を使いこなしている。その様子を、千景は微笑まし気に見つつ、自らの鍛錬に戻るのだった。

絡久良市近隣の森にて。

一匹の猿が、枝から枝へ飛んでいた。
が、

ここに猿がいるというのも既に一つの問題なのだが、重要な問題はそこではない。

毛皮が緑色なのだ。

しかもそのサイズも可笑しく、まるでぬいぐるみのマスコットキャラクターのように小さいのだ。

しかも、群れる事を習性とする猿が、何故こんなところを一匹、堂々と動き回っているのか。

ふと、その猿がとある枝に飛び乗ったところで止まり、振り返る。そこには、浮遊する二匹の何か。

片や、白い着物を来た人形のように綺麗なぬいぐるみ・・・のようなもの。

片や、車輪の中心が燃えている妖怪のぬいぐるみ・・・いや、実際燃えてる。

そんな、普通じゃ驚いて一目散に逃げる様な存在を前にしても、緑

色の猿は逃げるどころかまじまじと見ていた。

と、何故か白い着物を来た人形のようなものがなぜか疲れている表情をしていた。

猿は、何故そんな疲れているのか分からないように首を傾げていた。

が、それにどういふ訳か人形はお前が速いという事を伝えるかのよ
うな素振りを見せる。

それに対して猿はそうか？という感じで首を傾げた。

それに車輪は、その炎の中にある目でジトつと睨み付ける。

しかしその視線に猿はやれやれと小馬鹿にしたような素振りを見
せ、それにキレた様子の車輪は、そのまま猿に襲い掛かる。当然、猿
は逃げる。

その様子に人形はおろおろと慌てだす。

ふと、人形は、ある方向に顔を向けた。

そして、とある山の頂上で、光の線が迸るのが見えた。

それを見た人形は、鬼ごっこをしている二匹をほっぽって、そちら
に向かった。

まるで、導かれるように――

結論から言つて、この三匹の存在は、千景のこれからの運命を左右
するに至る。

「——すつげえ」

『ソレ』を見た信也の開口一番の言葉がそれだった。

「……うん」

そして、『ソレ』を放った千景は、その手にある拳銃の様子を確かめつつ、満足気に頷く。

「上手く出来たわね、『文字連鎖』」

奏が、その様子を遠目で見ながらその完成度に感嘆を漏らす。

『文字連鎖』

それは、千景の天鎖刈に与えられた、新たな力。

その概要は、『真解』状態での二文字同時使用時の文字を変える事。ここで新たに説明すると、第一の文字、天鎖刈の場合は『鎖』であるが、この第一の文字は武器の形に直結している。

当初、変換するのは、能力を追加する『第二の文字』を変換するだけにとどめる筈だったのだが、千景の血筋が血筋で、三百年前の救導者全員の御神刀を使えるものだから、その為の文字全て使えるのだ。

おさらいするが、御神刀の継承は血統に完全依存する。

そうして、三つの御神刀を結合させた、この『真・天鎖刈』は、三百年前の救導者、『久我真一』の『連双砲』と、『笹木野暁』の『無形刀』を扱える。即ち——

『文字連鎖』は、御神刀の形そのものを変えるまでに至ってしまったのだ。

現在、千景が使える武器の形は三つ。

一つ目は天鎖刈の鎖を操る『鎌』。

二つ目は連双砲の弾切れも弾詰まりも起こさない『二丁拳銃』。

三つ目は深影刀の変幻自在の『刀』。

それぞれの文字がそれぞれの形の形の原点となっているため、その為に、変換するごとに形を変化させてしまうのだ。

そして、今現在、彼が使った組み合わせは、『砲』と『解』を組み合

わさせて、一発の限界を解放した一撃を放たせたのだ。

「ぐツ!？」

千景が苦悶に顔を歪める。

真解の一つである『解』は、その解放の代償として、解放した分だけ、体に一時的な制限をかけるのだ。

その際に痛みを生じる為、事実『解』の解放は他の御神刀の真解より危険を伴うのだ。

「それに他の文字も使えばその分の代償も重なるから、考えものね・・・」

「そうですねえ・・・」

最も、今の千景にとっては、それよりも重大な問題を抱えているのだが。

「皆、そろそろ終わりにしましょう」
奏が手を叩いて、そう全員にいう。

それに、皆が頷き、御神刀を解除して、階段を降りて街に出る。

「オートカウンターまだ自動反撃が上手くできないなあ・・・」

「あれは脊髄反射から促すものだ。徐々に習得していくといい」

『けっ、椿ならあんな攻撃、しっかり踏ん張ってたぜ。なんだよあの様は』

「う、うるさいな!」

優は、椿の体術の特性の一つである『オートカウンター自動反撃』について頭を悩ませ、椿が助言をし、虚が鼻で笑う。

「今日も一発も当てれなかった・・・」

「ふっふっふ、速さでは一番だからね!私!」

「白露は、調子、乗り過ぎ」

「う、うるさいな!」

ボロボロな状態でつぶやく信也に、自慢するように胸を張る白露と、そんな白露を冬樹はジト目で見ていた。

「設置の方法はあれでいいとして問題は他の奴らのタイミングにあわせなければならぬ所だだが最近の奴は俺の攻撃について情報を得てきているためにそのタイミングをうまくつかませなければならぬ

いうまく信也や白露を使い敵を誘き出しここぞというタイミングで……」

「海路は相変わらずね」

「まあ、あんなこと言ってるが、俺達の事を一番考えてるのは海路だからな」

何やらブツブツと呟いている海路を、雅と真武郎は苦笑いで見ていた。

「変わらないな。皆」

「ふふ、そうね」

寒い中、千景と奏は、そう言い合う。

「二年前までは、こうして大勢で歩く事なんて出来なかったわね」

「そうですね」

「向こうでは、こんなに賑やかだった？」

奏が、千景の方を向いて、そう聞いてくる。

それを聞いた千景は、空を見上げて、ふと思う。

(……あいつら、何してるかな)

目を閉じて、あの家庭科準備室を思い出す。

そこに、食いしん坊な部長、ハイスペックな大和撫子、頼りない歌姫、ツンデレな剣士や、頼れる番長、心優しき優男、そして、元氣滂刺な少女が、楽しくミーティングしているのを、瞼の裏で見る。

しかし、その中に、自分はいない。

そう、いなかったのだ。

だけど、自分は、確かに、そこにいた。

「ええ」

そして、千景は答える。

「楽しかったです」

千景は笑って答える。

「そう」

それに、奏は、安心したように微笑む。

「ん、なんだろうあれ」

ふと、白露が立ち止まって、目の前のやや上を見た。

それに、他の者達も立ち止まる。

「ん？どうした白露？」

「白露ちゃん？」

「見えませんか？あれ」

白露が指差す先、そこに、確かに何か浮かんでいた。というか、動いていた。

全身真っ白い、人形のような何かが、飛んできていた。

「本当ですね」

「なんなんだあれ？」

「ブツブツブツ……」

「つて、アンタは気付きなさいよー」

皆、その浮遊物体に注目する。

「なんだろう、あれ」

「さあ……ん？」

思わず千景も首を傾げかけたが、ふとあのぬいぐるみのようなものに既視感を感じた。

いや、感じたのではない。実際には見た事がある。

(あれはまさか……)

いや、しかし、ありえない。

ここは神樹に支配されていない土地。そして、神樹が絶対に干渉しない街。

それなのに、何故、『アレ』がここにいる。

そう、あれの総称は――

「――精霊？」

その名前を叫ぶのと同時に、浮遊する白い人形のようなものは、一直線に千景たちの方へ飛んできていた。

「あ、こつち、来る」

そう、ぼやく冬樹。

だが、物凄い速さで飛んでくるそれに、何か良からぬ者を感じ取った一同が身構える。

だが、その人形は、冬樹たちを無視し、そのまま真っ直ぐ――

千景の胸に飛び込んだ。

「な——ッ!?!」

そして、その人形は——千景の体の中に入った。

一瞬、視界が揺れる。

情報が頭の中に入ってくる。何か、水面に叩きつけられたかのような感覚に叩き落される。

体が重い。ドロドロな液体の中にいるような、そんな、重い感覚。

これは一体なんだ？何が起きて——

「ち、千景……?」

白露が呼ぶ声に、千景は、途端に視界がクリアになるのを感じた。

「……あれ?」

「だ、大丈夫か!?!」

信也が慌ててそう聞いてくる。

「あ、ああ、別に、気持ち悪いとかそんな事はないんだが……」

「ええっと、それじゃあ……貴方、髪の毛の事、気付いてる?」

「へ?髪の毛?」

そうして、千景は自分の髪の毛を一房掴まえて自分の目の前に持つてくる。

「……は?」

そして、そんな間抜けな声を出した。

真っ白い。真っ白いのだ。

まるで雪のように真っ白なのだ。

「な、なんだこれ……!?!」

それに、狼狽する千景。

真っ白なのだ。

千景の髪も、肌も、爪も、何もかもが、真っ白なのだ。

『な、なんで……』

そして、郡の、狼狽する声が聞こえた。

「(先)先祖様……?」

『どうして……貴方が……ここに……!?!』

そして、千景も、その声を聞いて、悟った。

『——やっど、会えました』

「・・・マジかよ」

その人物を、千景は、否、郡千景は、良く知っていた。

『——伊予島さん・・・!?』

『やっど会えました！千景さん！』

少年は、また、香川^{せんじょう}へ。

再会、そして、出立

「……それで？」

千景は、目の前の机の上にいる三匹の精霊をじろりと睨みつけ、一言。

「なんで貴方達がここにいるんですか？伊予島さん、土居さん、白鳥さん」

その問いに対して、彼らは――

『今四国に危機が迫っているんです』

『だからお前を呼びに来たんだよ』

『貴方の力が今こそ必要なのよ』

そう答えた。というか、この三匹は全員女性である。正確には、精霊の中身の精神が、だが。

「えーっと、こいつらなんて言ってるんだ？」

「可愛いですね」

「もふもふ、かな……」

「この炎、本物なのかな……？」

「下手に触らないようにね。火傷するかもしれないから」

「どういう仕組みなんだこれ？」

「知らん。興味ない」

「その割には、メモとってるよな、海路」

「まあまあ、いいじゃないですか」

一方で、千景を除く救導者たちは、この三匹の事について興味津々だった。

ここは育児養護施設『百合籠』。その一室の応接室であり、そこに、千景、信也、優、冬樹、白露、雅、真武郎、海路、椿、奏の九人と、この三匹の精霊の事について議論を始めようとしていた所だった。

そして、どうして、神樹の使い魔のような存在である精霊が、この神樹の加護のない土地にいるのか。

それは今から数時間ほど前に遡る――

体中の全てが雪のように白くなった千景。

その原因は、千景は知っている。

「これは・・・雪女郎か」

雪女郎。

それは、雪山にて、登山者を凍死させてしまう、死の象徴として謡われる妖怪の一種だ。

俗に雪女とも呼ばれ、主に自然現象と言われる存在だが、事実上、死を招くのは事実であり、冷気を操り対象を凍らせて凍死させるという能力を持つ。

試しに、すぐ横にあつた八百屋にあるリンゴを手に取り意識を集中させてみる。

すると、リンゴが一瞬のうちに氷漬けになり、真っ白になった。

「マジか・・・」

「ち、千景・・・？」

ふと、声がした方向を見ると、そこには驚くような、怖がるような顔で千景を見る信也たちがいた。

「い、今のどうやったんだ？御神刀も発動させてないのに・・・」

「あー、なんとというか・・・うん、少し落ち着いてから離そうか」

千景は、とりあえず彼らにそう言うしておく。

ただ、問題なのは、千景自身の精神の方だ。

『ちよつ、伊予島さん！分かった！分かったから離して！お願い！以外と苦しいの！』

『私達はどうせ精神体です！だから苦しいって思うのも気のせいです！』

『た、確かにそうだけど・・・分かった！分かったから！今まだ見られてないからいいけどこれ子孫に見られたら恥ずかしいから！』

正直に簡潔に言ってるさかい。

(うっせーよ。少し黙っててくれ)

『あ、すみません、千景さんの子孫さん』

(不道千景だ。不道で良い)

『分かりました』

『もう仲良くなってる・・・』

(ていうか、なんでアンタがこんな所に・・・)

『あ、そうでした!』

そこで、千景の中に現れたもう一つの精神体、『伊予島杏』が思い出したかのように声をあげた。

『不道さん! 貴方にすぐに香川に戻ってほしいんです!』

(・・・どういう意味だ)

表情を険しくして、心の中でそう答える。

『それは・・・』

『ちよつと待って。目の前からまた何か来てない?』
「え」

ふと視線を挙げてみると、信也たちの後ろから、改めて二匹の精霊がやってきていた。

一方は緑毛のサル。もう一方は火のついた車輪。

それらが、こちらに向かって猛スピードで迫ってきていた。

『・・・まさか』

郡が呟くももう遅い。

「土居さんと白鳥さんかああああああああああ!」

絶叫と共に、千景は吹っ飛んだ。

その結果、今、百合籠にて、彼女らと話し合う事になったのだ。

「一応、創代様からこの子たちと会話できる装置を作ってもらったわ」
そう言つて、奏は時代錯誤も良い所な近未来型の円盤のような装置

を杏たちの下に置いた。

「ありがとうございます。それと、こいつら俺と同年代、下手すると俺たちより三百は上かもしれん」

「てことはババアか？」

瞬間、サルと車輪のダブルアタックを喰らった信也。

「ぐおおお!」

「自業、自得」

「何してるの・・・」

そこで、杏が装置の上で声を出してみる。

『あ、あー、聞こえますでしょうか?』

「おおー!」

「本当に聞こえたな」

千景がよく知る杏の声が、精霊、雪女郎から発せられる。

『マイクチェック、ワンツー・・・よし、私、歌野です!』

『どこのネタだよそれ・・・ああ、そうだった。タマ・・・というか私は土居球子って言うんだ。よろしくな』

『改めて、伊予島杏です。よろしくお願ひします』

「おお、これはご丁寧に。森谷真武郎だ」

「桐間雅よ」

「磯部信也だ」

「安座間優です」

「水霜冬樹」

「新井白露だよ」

「浅羽海路だ」

「安座間椿、優の母だ」

「神代奏です。よろしくお願ひしますね」

互いに自己紹介が済んだ所で。

「それで、俺に香川に戻ってほしいってどういう事なんだ？」

「香川に戻る?どういう事だよ?」

信也が、そう聞いてくる。

『それについては、香川で起こった事を、まず話さなければなりません』

ん』

「頼む」

『では。先の大戦。不道さん……千景さんが、勇者として最後の戦いをしたあの決戦から数週間後、当代の勇者たちは次々に回復していききました。重傷者も、神樹様の加護のお陰で、多少の後遺症は残ったものの、生活には問題ないほど回復しました。ただ、結城友奈さんに關しては、腕はまだ完治してませんが……』

『だけど、東郷美森が決戦のきっかけとなった壁を破壊した……これは把握してらるわよね?』

「ああ、一応な」

『周りはついていけるかしら?』

「それについては、私が創代様を通して話しています。気にしないで続けて下さい」

『OK。それで、東郷が壁を破壊したお陰で、壁の外の神……異世界の神『マジアルクス』に、壁の中の事を知られてしまった。二百年の抵抗の末に、戦力を知られてしまったって訳。そして、その計画も割れてしまった。だから大赦は、猶予を貰おうと、ある儀式をしようとしたのよ』

「ある、儀式、って、なに、それ……?」

『『奉火祭』だよ』

「奉火祭……?」

「奏、何か知ってる?」

雅が奏に聞く。

「えっと、なんて言えばいいのかしら……ようは、キャンプファイアーみたいなものなんだけど、火に貢物をくべて、それで天に送るっている儀式って聞いてるけど」

『その貢物は、巫女です。つまりは——生贄です』
ダンッ!と、強い音が響いた。

千景だ。

「千景……?」

「……その儀式に東郷が……?」

『指名、だそうです。マジアクルス自らが、生贄を指定してきたんです』

「東郷はそれを受け入れたって言うのか？」

『以前より、罪悪感はあるみたいで・・・』

『それに、言う通りにしないと・・・他の勇者たちが危ないの』

「危ない・・・？」

一瞬、目を見合わせた精霊たち、否、初代勇者たち。

『———以前に、別の人を捧げたら、危うく世界が滅びかけたのよ』

「どういう意味だ？」

『以前にね、指名があったのよ。それで、別の人を捧げたら、私と辰巳が、危うく殺されかけた』

「なっ・・・」

それを聞いて、千景は絶句する。

それは、つまり———

「三百年前に、やったのか・・・!？」

『その通りです。そして、その儀式で———

———ひなたさんが、犠牲になりました』

何も言えない、とはこのことだった。

『・・・嘘』

郡が、その声を漏らした。

『じゃあ、足柄さんは・・・三百年、ずっと・・・』

その苦しみをずっと抱えて生きていたのか

それを聞いた郡は呆然とし、千景は、力が抜けたかのようにソファに座り込み、項垂れる。

「千景・・・」

「・・・すまん、もう大丈夫だ」

幾分か悪くなった顔色のまま、顔をあげる千景。

「続けてくれ」

『では・・・それで、東郷さんは、その身を、外の炎の海へ投げ出し

ました。だけど、そこで大赦にとって、神にとっても、大きな誤算が起きたんです』

「・・・俺の救出か」

『はい。貴方は、神樹様の記憶操作をいち早く破り、そして、ほんの数時間で東郷さんを助け出してしまいました』

「それじゃあ、千景の行動が、結果的に良い方向に行っただって訳ね」

雅が、そう推測するも、それに首を振る杏。

『そう簡単な話じゃないんです』

『ようは取り返しに来そうなんだよ』

球子の言葉で、納得がいった千景。

「つまり・・・あいつらがまた東郷を取り返しに来るから、俺を讃州に呼び戻して、守ってやって欲しいと・・・」

「だけだよ。あいつ等だつてその勇者の力つて奴持つてんだろ？大丈夫なんじゃないのか？」

『今、その為の端末を持っていないんです。貴方たちの刀と同じようなものです』

つまりは、今の勇者部は、完全に無防備だという事だということか・・・

「一応聞くが、大赦はこの事把握してるのか？」

『してない』

予想外の返しに思わず黙ってしまう千景。

『これは、若葉がその事を感知して、タマたちに千景に伝えるように言ってきたんだよ』

「乃木さんが!？」

思わず身を乗り出す千景。

『若葉はね、三百年前の十天将との戦いで、勇者の力を失ったわ。だけど、魔王の力だけは失わなかった。だから若葉は、自分の魂を刀に転写したのよ。そして、三百年間、ずっとその刀の中で、一人生きていた』

「乃木さんが・・・」

千景はもう一度呟き、やがて力抜けてソファにまた座り込む。

『でも、三百年間ずっと一人でいたから自分が何者か忘れちゃったみたいでして。もう自我はほとんど残っていないんです。というか、あれはある意味一種の地縛霊ですね』

「その乃木さんが教えてくれたんだろう。だったら、信じる価値は十分にあるさ」

『そうですか・・・では・・・』

「ああ、いく——」

「待って！」

ふと、そこで突然の制止の声。

「・・・また、千景に、つらい、思い、を、させるの?」

冬樹が、彼女たちを睨み付けてそう言った。

『それは・・・』

「千景の、事、は、皆、忘れ、てる。それは、きつと、千景、に、とつて、とつても、苦しい、こと・・・それなのに、貴方、たち、は、そんな千景を、また・・・」

それは、千景を思うが故の怒り。

「・・・私も、千景さんが讃州に行くのは反対です」

さらに、優までが反対し始める。

「だって、千景さんが行く必要なんてないじゃないですか。貴方たちが、神樹様に報告して、それで対処させればいいだけの話。それなのに、何故、千景さんに助けを求めるんですか?どこにも、千景さんに助けを求める必要なんてありませんじゃないですか」

『そ、それは・・・』

「私、正直に言っただけで貴方たちが信用できません。貴方たちが、神樹が差し向けた刺客だという事もありえます。それで隙をついて、千景さんを抹殺しようとしているって事も考えられるんです。悪いですが、他の当たって下さい」

『・・・』

杏の反論に耳を貸さず、そう突き放す優。

他の者たちも、同様だった。

千景は、向こうで精一杯頑張っていた。それなのに、神や大赦の都

合で、仲間たちから記憶を消されて、その上、その地から出る事を禁止された。

そんな仕打ちを与えておいて、今更助けを求めてくるなんて、甚だしいにも、程がある。

だから、彼らは、千景の讃州への救援は認めない。

「……それでも」

だけど、千景は、そんな彼らの想いを無視してでも、助けに行きたかった。

「俺は行くよ」

『不道さん……』

その言葉に、真つ先に反論したのは優だった。

「どうしてですか!? 貴方が行く必要なんてどこにも……」

「あるんだよ。理由も必要もある」

千景の即答に、思わず動揺する優。

「ど、どこに……!?!」

「俺が、仲間を助けたいって思ってるから。そして、俺達の願いが、世界を救う事だから」

千景の一族は罪の一族。初代の名を受け継いでいる千景だからこそ、彼は、行く事を選んだのだ。

「罨だろうとかまわらないし、この人たちが言ってる事は嘘なんかじゃないさ。刺客でもなんでもない。十分に、信じられる」

「どうして……そう……」

それでも納得がいかないかのように、優は言いつのろうとするが。

「俺が、この人たちを信じたいと思ってるからだ」

千景の言葉に、曇りは無く、それが、優の心を締め付ける。

「……勝手にしてください」

その言葉をかわぎりに、優は駆け足でその部屋を出て行った。その時、彼女の顔から、煌く何かが零れるのを、千景たちは見逃さない。

その様子を、その場にいた者達は、ただ黙って見ていた。

「ごめん椿さん」

「いや、優には、私からフォローを入れておくよ」
そう言っつて、椿は百合籠を出ていく。

あの後、千景の意思が固い事を示して、解散という事になった。
皆、不満がっていたが、そもそも千景を説得できるはずもなく、諦め気味だった。

施設内に戻り、千景はいつも通りの事をする。

夕飯づくり洗濯、そして、自室でしばしの休学届け。

中学にそのような機能があるとは思っていないが、とりあえず書いておこうと思っただのだ。

『ごめんなさい』

ふと、そんな声が聞こえ、振り向けば、そこには日本人形姿の杏がいた。

「別に、気にしてないよ」

『ですが、あの子を泣かせるような事をしてしまいました……』

しばし考えて、千景は、杏の額にデコピンを叩き込んだ。

『痛い!?!』

「アンタは別に何も悪くねーよ。というか泣かせたの俺だし。それに――」

突然、千景の表情が変わる。

それはまるで、母のような慈愛に満ちた表情だった。

「――伊予島さんが、気弱で優しい性格だった事を、私は知ってるから」

その口調に、杏は一つの納得がいき、やがて嬉しそうに。

『はい、そうですね。千景さん』

ベランダにて。

信也は、月を見ていた。

「よっす」

ふと声が聞こえて、振り向けばそこには千景いた。

「・・・なんだお前か」

「月を見てるなんて珍しいな」

「・・・別に、なんかもやもやした時はここに來てるだけだ」

素っ気なく答えつつ、また月を眺める信也。

その隣に、千景が立つ。

「・・・やっぱ行くのか」

「ああ、いくよ、俺」

「・・・どうしても、なのか?」

「まあな」

「・・・本当に、信じられるのか?」

「まあ、俺がやっちゃまったっていう所もあるからな。それに、あの人たちが嘔吐くわけ無いし。ていうか、あの人たちも命懸けでここに來てるんだよ」

「・・・どういう事だ?」

千景の言葉に、思わず食いつく信也。

「精霊つてのは本来、神樹様の監視下にいなくちやいけない。理由は神樹からの力の供給、ようは、顕現していられるための力を、常に神樹様から供給されなきゃいけないんだよ。その効果範囲は神樹の支配下にある土地だけ。つまり、神樹の加護がない土地ではあいつらは本来現界できないんだよ」

「・・・それじゃああいつら」

「案の定、消える寸前だった。今は俺の神力使つてどうにか現界してる」

千景が手を掲げると、鎖が三本、千景の手に出現する。それは、一定の方向を向いており、それら全てが途中で透明になるかのように消えていた。

「・・・『回路結鎖』」

「今は俺の部屋で休ませてる。当然あの人たちも連れていくつもりだ。早くても明日の早朝。どんな手段使つても俺は行くぞ」

あくまで、いく事前提。その決意は、生半可なものじゃない。

その姿に、信也は、ただ、黙って見るだけだった。

「……でだ、お前たちにも一緒に来てもらいたいんだよ」

そこで、千景が、なんかとんでもない事を言い出した。

「……何言っただお前？」

「正直、俺一人であいつらとやりあうのは無理。勝てる気しねえし守り抜かれる気がしない。だからお前らに手伝って欲しいんだ」

千景は、自分の左胸に手をあてて。

「……もう、長くない命だから」

その言葉の真意を、信也は知っている。否、この街の人たち全員が知っている。

しばし沈黙していると、千景がふっと笑って歩き出す。

「ま、無理なら無理でいいさ。とにかく、俺はいくからな」

そう言っつて、千景はベランダから出ようとする。

「……待てよ」

だが、そこで信也から声がかかる。

「……誰がいかないっつていった？」

「……ありがとな」

振り向いて、嬉しそうに言う千景だった。

一方で、安座間家。

「優、いるか？」

優の部屋の前で、扉をノックする椿。

だが、返事がない。

玄関の靴の有無、僅かな涙の痕、そして、その涙の痕の行き先。

「……優」

優が部屋にいと仮定して、椿は彼女を慰めにかかる。

「お前が、千景が讃州に行くのが反対のは分かる。私だって、千景に、これ以上辛い思いをしてほしくないからな。だけど、それでも、千景は行く事を選んだ。私は、その時、彼に彼の母親の面影を見てしまったんだ。説得になるか、分からないが……彼の母親、千歳は、誰よりも仲間を大切にする奴だった。どんな状況に立たされても、アイツは、仲間を見捨てる事はなかった。私も、助けられた者の一人だ。私は、そんな千歳の生き方を、アイツが継いでくれている事に、心のどこかでホツとしているんだ。どんな事になろうとも、仲間を助ける。私は、そんな生き方を出来るアイツを応援したい。もう、アイツを守る立場にはいないが……それでも、背中を押す事は出来ると思ふんだ。アイツが、助けたいつて思う者達を助けるという意味を、尊重してやりたいんだ……お前はとうしたい？」

椿が、扉の向こう側にいるであろう、優に語り掛ける。

「千景の手伝いをするか……このままうづくまるか……または、止めるか。選択肢は三つある。お前が、決めろ」

椿は、それを告げて、扉の前から離れる。

「夕飯時には呼ぶ」

最後にそう言って、椿は一階におりていく。

部屋の中、優は、ベッドにうつ伏せになって、その言葉を聞いていた。

「……」

目尻に涙を浮かべ、やがて、窓の外の月を見た――

翌日。

荷物をまとめ、背負う。

「信也たちはともかく、貴方まで来る必要はないですよ、奏さん」

「私は貴方たちの指導官です。それに、声は離れていても届きますの

で、創代様からの神託も必要になってくるでしょう?」

駅の前にて、そう言い合う千景と奏。

「ていうか、悪いですね。こういうの作ってもらって」

見ると、千景の服装は、黒一色に染められていた。

ぶかぶかなある意味戦闘服ともいえるべきミリタリージャケット&パンツを、千景は身に付けていた。

手袋やインナーに至るまで、全て黒一色だった。

「創代様が創った、ステルス装備よ。結界を通り抜けられるうえに、神樹様の感知を完璧に誤魔化す事が出来るわ。ただし、御神刀を発動させれば、その効果はなくなりますので、気を付けてね」

『すごいなー、創代様って』

車輪姿の球子が、そう感嘆する。

「まあ、創る事に関しては神樹以上だからな、創代様は」

『もしかして、勇者装束も強化できるのかしら?』

「出来るんじゃないか? やった事がないから分からないから」

「おい、勝手に一人で話し合うんじゃないやねえよ」

そこで信也から突っ込みが入る。

『それにしてもすみません。私たちの為に、このような事をしてくれるなんて・・・』

杏がそう謝罪してくるのには理由がある。

創代の力で、千景の御神刀『天鎖刃』の『文字連鎖』イデオムチェインに文字として組み込む事で、神樹からの供給がなくても大丈夫なようにしたのだ。

ちなみに、雪女郎である杏は『凍』、輸入道である球子は『焼』、そしてこの中で強力な能力を持ち合わせている歌野は『蛇』と『覚』。合計四つの文字が、千景の『文字連鎖』イデオムチェインに組み込まれたのだ。

これで、合計十二文字。

「また千景が強くなったね」

「ていうかこいつに限界はないのか・・・」

白露がうらやみ、真武郎が呆れたような表情をしている。

「ははは・・・それにしても、お前も来てくれるなんて嬉しいよ、優」
見れば、そこには未だ不満そうな表情の優がいた。

「勘違いしないでください。今だって私は反対してるんですからね」

「はいはい……」

「だけど……」

優が、顔を赤くして、そっぽを向きつつ答える。

「貴方が心配だから、ついていくんです」

それに微笑し、千景は、リュックを背負う。

「それじゃあ椿さん、行ってきます」

千景は、見送りに来た椿にそう告げた。

「ああ。出来れば、勇者部の者達も連れてくると良い。もちろん、全て終わった後で良いがな」

「わかりました」

頷き、彼らは、電車に乗る。

『敵の数は分かりません。しかし、相当な数が攻めてくると思います』
「対して俺達は八人で対処しなくちゃいけないのか……甘くはないな」

「まあ、大丈夫だろ」

横から、信也が自信ありげに言ってくる。

「信也……」

「俺達は『救導者』。人を助けてなんぼな役目を担ってる大馬鹿の集団だ。神だろうが化物だろうが、恐れるものなんかねえよ」
「……そうだな」

信也の言葉にうなずき、千景は、窓の外を見る。

（待ってるよ……友奈）

心の中で、そう呟いた。

香川県讃州市。

その街の片隅にある家にて、赤毛の少女は、今日も起きる。
天井に手を伸ばし、誰かを探すかのように。

「――まただ」

そして、その言葉と共に、泣いている事に気が付く。

忘却した少女

結城友奈は勇者部に所属する平凡普通趣味は押し花特技は父親から学んだ格闘技の女子中学生である。

両腕全体に包帯を巻いている事を除けば、どこにでもいる普通の中学生であろう。

しかしその実、彼女は神樹より選ばれた正真正銘の『勇者』であり、その勇者のみで構成された讃州中学『勇者部』の部員でもある。

ただ、神樹の勇者として戦うのは裏の顔であり、表、というかこっちが本来の『勇者部』の活動は、『困っている人を勇んで助ける』というスローガンのもと、ボランティアなどの人助けを目的として部活なのだ。

その有名度はただのボランティア部とは比較にならず、ホームページがあるだけでなく新聞に載るほど、その知名度は高い。

そんな勇者部に所属するのは何も友奈だけではない。

「須美ちゃん、ホームページの方どう？」

「新しいのが来てるわよ。隣町だけど、そこの掃除を手伝ってほしいんだって」

勇者部の部室である家庭準備室に置かれたパソコンの前に座るのが、『東郷美森』。勇者部のホームページなどの広報部門などを任せられており、何よりハイスペック。大体の事が出来てしまう。そんな彼女だが、その実、二年前は大橋の方で勇者として戦い、以前の名前は『鷲尾須美』という名前だったらしい。まあ、勇者部の一部の人間にはその以前の名前で呼ばれている。

そんな彼女に声をかけたのは、美森の恋人にして、彼女と同じ大橋の勇者であった『六道翼』だ。彼は、今年入ってきた転入生であり、その正体は大赦で最も高い発言力を持つ『上里家』直系の分家である『六道家』の次男にして次期当主。そして、一部の暗部を使役する権限も持っている。彼の能力は美森以上で、特に肉体関係の仕事は完璧にこなす。さらに顔の事もあって女子からの人気が凄まじく、さらにその性格から男子にも人気がある。ただ、恋人である美森からは、女子に

絡まれるたびに黒い笑顔とともに、嫉妬と独占欲の視線を向けられるために、内心びくびくしている・・・と、思われるだろうかどっこいどっこいで互いに互いを溺愛している・・・という関係になってる。ちなみに友奈との関係は考慮している。

「樹、ちよつとその針、とつてくれるかしら？」

「あ、はい。これですね」

その一方で、裁縫をしているのは、『三好夏凜』。端的に言ってツンデレ。つんけんとした雰囲気を出す少女であるが、その実、勇者としては凄まじい力を発揮する。マンションに一人ぐらしをしており、常にトレーニングは欠かさないために力仕事もこなせる。一見、近寄りたくない雰囲気を出しているが、性格はいたって優しく、だれかのために戦える心優しい少女であ「うっさい！・・・一応、彼女もこの勇者部の部員である。」

その隣で彼女の手伝いをしているのは『犬吠埼樹』。歌手を夢見る未来のスター。その歌の実力は平凡を凌駕し、ありとあらゆる人の心をつかむ。気弱な性格に見えるだろうが、その実、勇気があり、やるときはやる。やればできる子である。

「銀、ちよいとそっち終わったらこっち抑えんの手伝ってくれ」

「あいよ、今終わりましたよつと」

一方、床で何かを組み立てているのは三ノ輪兄妹である。

兄の『三ノ輪剛』は筋肉質な大きな体をしており、学生陣の中では一番の伸長を誇るほど大きい。それが原因で一時期『剛熊』と呼ばれたことがあるがこれは完全に余談なので無視。この讚州市では、不良の頂点に立つ男であり、その実力は年上の大柄な男を拳一つでノックダウンさせられるほど。そんな教師陣には毛嫌いされそうな彼が、なぜここにいるのか。理由は勇者部の後ろ盾が最大の原因だが、とにかく彼も勇者。だからここにいるのだ。元不良ではあるがこれでも恋人持ち。

そしてそんな彼の妹である『三ノ輪銀』は、翼や美森と同じ、大橋の方で勇者をやっていた。ただ、ある日の境に死んだとされており、そこから二年、大橋の勇者全員の師である『足柄辰巳』の元で活動し

ていた。豪快でガツツな性格であり、他人は放っておけない。ただ、それが崇つて一種の『不幸体質』を患っており、道行く人、何かに困っており、彼女自身放っておけないのでついつい手伝ってしまうのだ。それが原因で小学生のころは遅刻の常習犯だった。

一か月前に、他二人とともにこの勇者部に入ってきたのだ。

「おい、風」

「あ、なんですか春信さん」

「春信先生だ。この書類、記入ミスがあるぞ」

「へ？ああ!?本当だ!？」

そして、ある書類を手渡されて狼狽しているのは、この勇者部の部長である『犬吠埼風』だ。樹の姉であり、剛の恋人。女子力を連呼している女子力の亡者であるが、部員の事を誰よりも考えている。ただ、ミスをすることも多く、部活への依頼が急増したりするが、中二病みたいな発言も多く、胃袋が見た目の数倍の許容量を持ってたり、物事をすぐ女子力につなげようとする事以外は、部長として尊敬される存在だ。何気に料理も得意。ただ、これは前述しなかったが、彼女たち姉妹は二年前親を亡くしており、料理も、妹である樹を養うために身に着けたスキルである。

そして、そんな彼女に書類を渡したのはこの勇者部の顧問である『三好春信』である。銀とともに入ってきた教師であるが、その正体は銀たちと同じ大橋の勇者であり、銀たちの先代にあたる勇者。その実力は歴代最強と言われており、剣術においては他の追随を許さず、勇者訓練指導官である足柄辰巳をも圧倒する。現在はその辰巳の指示で讃州中学に教師としてやってきて、勇者部顧問として監視と護衛をしている。ただ、勇者部としての活動はしっかりと務めており、主に書類関係の仕事を担当している。

「やつほー、お待たせ〜」

「あ、園ちゃん」

そして、今さっきこの部室に入ってきたのが、『乃木園子』。大赦スリートップの『乃木家』の御令嬢であり、春信同様、辰巳に直接師事してもらっていた勇者の一人。その実力はすさまじく、ただでさえ天

才的で勘が鋭いのに、それに磨きがかかっているのだ。以前、大橋の方で計十五回の満開を行った事で日常生活が送れなくなって、事実上大赦に隔離されていたが、先の大戦の後に神樹に捧げた筈の供物を全て返上されたらしく、今こうして讚州中学勇者部の部員として活動している。

「お、遅いぞ園子」

「ごめんねくミノさん。ちよつとトラブルにあつちやつて〜」

「トラブル？一体何があつたんだい園子ちゃん？」

「実は、水道の水が溢れちやつて〜」

「なるほど、妙に廊下の方が騒がしいと思つたら」

「そういう事だったのね・・・」

「・・・え？何か聞こえたの？」

どうやら廊下の水道から何の拍子か水が溢れ出て、その対応に見舞われていたらしい。

「でもそのうち、その前は確か先生に職員室に書類を届けに行つてたんじゃない・・・」

「その途中でね〜」

「なるほど」

その答えに、美森は納得する。

ふと、春信が園子の頭を手をおいた。

「ん？」

「今は寒い時期だ。水を被らなくてよかったが、風邪は引かない様にな」

「は〜い。・・・えへへ」

気長な返事の次に、園子は耐えきれないかのように顔を溶けた飴のように綻ばせて体をうねらせる。

「うお!?!園子が溶けた飴みたいな顔になりやつた!?!」

「はわわ・・・」

「ふふ、相変わらず春信先生には弱いわね、そのっちは」

「園子をここまでデレさせるなんて・・・一体どんな口説き方したのよ!?!」

「何故、俺が責められている?」

そんな皆の生暖かい視線に気づいた園子は、次の瞬間、いつもの雰
囲気からは考えられないような表情と慌てようで弁明をしはじめた。

「ち、ちちち違うんよ〜!こ、これは、そ、そう!猫!猫と同じだよ!」

「園子ちゃん、言ってること滅茶苦茶だよ?」

「いいのよそのっち。私は応援するから」

「ああ、大橋組の中でアタシだけが遅れてる・・・そろそろアタシも相
手探そうかな?」

「だから違うんだって〜」

耳まで真っ赤になってそう言い訳しようとする園子だったが、三人
の生暖かい目からは逃れられず、全て空を切るだけだった。

「銀を嫁に取る男だと・・・清い交際以外認めないぞ!」

「そうよ!銀も立派なアタシの妹(仮)なんだから!変な男とは絶対に
交際させないわよ!」

「剛さん、お姉ちゃん・・・」

ただ銀の彼氏探そう宣言に真っ先に食いついたのは剛と風だった。
もう既に結婚が確定しているみたい(風はヤケクソ)なので、銀はす
でに風の事を『義姉さん』と呼んでいる。

ただ、樹はまだ恥ずかしいのか剛の事は未だ『さん付け』である。
が、それも人前での話なのだが。

「じよ、冗談だって兄貴、義姉さん」

「だから違うんだって〜」

「園子、その話は終わったわ・・・」

兄妹の二人をなだめる銀と、恥ずかしさのあまりとうとう部屋の片
隅で丸くなる園子と、それに呆れる夏凜。

その光景に、友奈は呆れてしまう。

「もう、皆つたら」

「さて、茶番もここまでにして、今日はここでお開きにしてかめやいく
わよー!」

「お!いいっすね義姉さん!」

「行こうぜ行こうぜ!」

「やれやれ、しょうがないわね」

「そう言ってお前も食いたいんだろう？」

「う、うるさい！」

「何食べようか須美ちゃん」

「私はなんでもいいわ。貴方がいてくれるから」

「はわわ・・・二人とも熱い・・・」

「そこー、ナチュラルにいちやつかない」

「なんだかタガが外れたよねー、二人ともく」

「園ちゃん復活早いね」

「でも本当はいますぐにでも布団にくるまっていたい・・・」

そんな、みなへの反応に、友奈は、いつも通りだと思う。

犬吠崎風、犬吠崎樹、三ノ輪剛、三ノ輪銀、乃木園子、六道翼、東郷美森、三好夏凜、三好春信、そして、結城友奈。

勇者部部員と顧問、総勢十名。

つい最近まで、世界を守る為に、命懸けの戦いをしてきた筈なのに、今は、こんなにも笑顔で溢れている。そんな、平和な日常に、自分はいる。

「友奈ちゃん、何してるの？」

「あ、ごめんね、すぐ行くよ」

置いて行かれている事に気付いて、友奈は慌てて部屋を出ていく。

そして、これから、いきつけのうどん屋に行くのだ。

その後は、解散して、恋人を持って毎度自分が悲しくなるような色話を親友から聞かさせる。

そして、家に帰って、シャワーを浴びて、ベッドに入って、寝る。

そんな、いつも通りの日常を送っている。

「それじゃあ、また明日ね、友奈ちゃん」

「うん。おやすみ、東郷さん」

家の前で別れ、友奈は自宅に帰る。

そのままシャワーを浴びて、パジャマに着替え、いざベッドに入つて寝ようとした所で、不意にその表情が曇る。

「……」

視線を、ベッドから自分の勉強机の方へ向け、その上にある、一冊のノートを見つめる。

それをしばし見つめてから、友奈は電気を消してベッドに潜る。

「……今日も、見るのかな……あの夢」

それだけを呟いて、友奈は目を閉じて、眠りについた。

「……ん、んう……？」

目が覚めると、そこは部屋だった。

どうやら、いつの間にか寝てしまっていたらしい。

「ん、起きたか」

「あ……」

顔をあげると、そこには、はんだこてを持った一人の少年がいた。

男にしてはさらさらな黒髪に、茶色の目。耳にある傷跡が目立つものの、その顔立ちは良く、健康な人間そのものである。

「あれ……私、寝ちゃってた……？」

「まあな」

気付けば、自分には毛布が掛けられており、これのお陰で安眠出来ていたようだ。

「ごめんね、これ、かけてもらって」

「今は寒いからな。ちゃんと羽織っておけ」

「はあい」

ヤニ入りのはんだの匂いが鼻の奥をつく。

少年は、友奈が見ているのを気にせず、目の前にある車のおもちやの修理をしていた。

「……」

「どうした？そんなにニヤニヤして」

「んー、こうして部屋で二人だけっていうのも、なんだか慣れちゃった

な—って思って」

「そうだっけか？」

「うん、そうだよ」

少年の問いかけにうなずき、友奈は、少年の手際のような修理を眺める。

「よし、終わり」

「お疲れ様」

おもちゃを籠に入れ、立ち上がる少年。

「どうする？帰るか？」

「東郷さんがまだ帰って来てないから、もう少しだけここで待ってる」
「そうか」

少年はかばんを持ち、部室を出ようとしてスライドドアに手をかけて立ち止まる。

そして振り返り、友奈に一言。

「それじゃ、明日な。友奈」

「うん、明日ね、——」

そこで、口が動かなくなる。

(——あれ、この人の名前、なんだっけ?)

いつも一緒にいた筈なのに。

いつも一緒に話していたのに。

いつもここにいたのに。

どうして、彼の名前が思い出せないんだろう?

どうして、思い出せないんだろう? どうして、彼の名前が分からない

いのだろう。

いや、それ以前に、彼は一体誰だ?

勇者部に、彼のような人はいなかった筈。機械の修理を担当するよ
うな人間は、存在しなかった筈。誰だ? 彼は一体、誰なんだ?

思い出せない。大切な人の名前の筈なのに。

気付けば、周囲の景色は霞み、どんどん真っ白になって消えていく。

「やだ……」

霞む景色の中で、友奈は少年に手を伸ばす。

「盗らないで・・・」

すぐそこにいた筈の少年は、いつの間にか、遠い所に立っていた。手を伸ばす程、遠のいていく。

「お願い・・・」

どれほど走っても、どれほど急いでも、どれほど手を伸ばしても、追いつけない。

結城友奈には、追いつけない。

「私から、彼を、奪わないで！」

そして、友奈は朝日差し込む天井に向かって手を伸ばし、目覚めた。

「・・・あ」

目尻から流れる冷たい感触を感じて、触れてみれば濡れていて。そしてまた。

大事な事を忘れた気がした。

そんな、何か、大切なものを思い出せそうで思い出せない夢を見始めてから、数日。

「今日はなんだか調子悪かったね」

「え？」

向かいの席でうどんをすすする翼にその様に指摘される友奈。

現在、かめやにて友奈は翼と銀の三人でうどんを食べていた。

「あー、なんか友奈にしてはやけに打たれまくってたよな」

友奈と銀は、女子ソフトボール部の試合服を着ており、いわずもがな、三人は女子ソフトボール部の助っ人をしていたのだ。

「そうかな？」

銀の言葉に首をかしげる友奈。

「まあ、調子悪かったといっても、ただ投球に力が籠っていないかな、て僕が思ったただけだけどね」

「そうかあ？アタシからしたら、かなり力が入ってなかったように見えただけど？」

「銀ちゃんから見たらそうなんだろうね」

「あはは・・・そっかあ」

二人の指摘に、友奈は苦笑せざるを得なかった。

力が籠っていないかった。たしかに、そうだったかもしれない。

最近、あの夢を見るようになってから、だんだんと気分が沈んで行っているような気がしているのだ。

「大丈夫だよ。そんなに調子悪いわけじゃないから」

「だと、いいんだけど・・・」

翼は、どうにも煮え切らないような表情だった。

「それじゃあ、また明日ね」

「うん、よく寝るんだよ」

「寝不足にならないようにな」

そうして三人は別れた。去っていく友奈の後ろ姿を見ながら、翼と銀は、互いに顔を見合わせる。

「・・・やっぱり、須美の言った通りだったな」

「うん。友奈ちゃん、最近元気が明らかになくなつて来てる」

いつも元気はつらつな友奈が、最近になって、落ち込んで行っているように見えるのを、美森は見逃していなかった。

その事を、美森は翼に話していた。

だから、今回の部活の助っ人に翼は参加して、友奈の様子を見ていたのだ。

「春信さんも気付いてたみたいだし、こりゃいよいよって感じだな」

「春信さん、観察眼凄いいからね」

「たぶん、皆も気付いてだろうな。特に園子なんかもうとつくに気付

「いてるだろうぜ」

「うん。とりあえず、この話はまた明日って事にしよう」

「おう、それじゃ、また明日な翼」

「銀ちゃんも、帰り気を付けて」

「……」

春信は、自宅にて目の前の机の上に置かれたノートを眺め、思考を巡らせていた。

そのノートには、勇者部全員の健康状態や行動の全てが逐一事細かに書かれていた。

顔色から身体の動き、呼吸、眼球の動き、髪の毛の状態、肌、歯、爪、拳句の果てには言動まで。

もはややりすぎと言っても過言では無い程に勇者部の健康状態を全て書き記していた。

完璧超人と揶揄されるほどの超人っぷりをみせる春信にしか出来ない芸当だ。

さて、そんな彼がみているのは友奈の健康観察帳。

そこには、友奈のこれまでの言動および行動、体調などが事細やかに書かれている。

「……」

それを見て、春信は、友奈の精神状態が低下の傾向にある事を理解していた。

最初に見た友奈の状態は、いわゆる『正常』。

しかし、それが最近になって徐々に『不安定』になってきているのだ。

まだ友奈の事はそこまで知らないために、確認の為に美森に見せた所、確におかしいと言われた（その後、高値でこれ売ってくれとねだられたが）。

それから考えて、やはり結城友奈の精神は何か、悪い方向に傾いて

きている。

「早急になんとかしないとな・・・」

しかしどうする？

まだそれほど親交を深めていない自分が言っても、彼女は認めはしないだろう。

ならば親友の東郷美森か？否、彼女は変に暴走しかねない。

ならば部長である犬吠埼風か？否、彼女も下手に最悪な方向で暴走しかねない。

他の部員も、無理だろうか・・・

「・・・」

しばし、考えたすえ、春信は――

――電話を一本、かけた。

休日――

「今日の依頼は簡単だったね、夏凜ちゃん」

「そうね・・・」

依頼を済ませ、帰路につく友奈と夏凜。

笑顔で話しかける友奈に対して、夏凜の表情は、あまり浮かない。

「この後どうしよっか」

やや前を歩く友奈の後ろ姿を見て、夏凜は、手に持つスマホの液晶画面を見た。

画面の電源は切っており、暗いまま。

「・・・ねえ、友奈」

「ん？何？」

「行きたい所が、あるんだけど・・・」

その夏凜の表情は、どこか、覚悟を決めたかのようにだった。

そこは、海……の、港。

そこで友奈は座り、夏凜は立って、夕焼けに煌めく海を眺めていた。

「この景色を二人で見るのって、初めてだよね」

「そうね。よくあの浜辺でトレーニングしてるけど、こうして二人で見るのは、初めてね」

「翼君といつも見てるの?」

「まあ、そうね。よく、翼様に指導してもらってる時に、よくね」

「いいなあ。東郷さん羨ましいだろうなあ」

「流石に東郷は敵に回したくないわね。特に恋愛関係になると。翼様の事になると、アイツかなり可笑しくなるから」

その時の美森の顔を想像すると、思わず身震いしてしまう。

しばしの談笑。

それらをして、夏凜は、昨日の兄の電話を思い出す。

『どうかして結城友奈から原因を聞きだしてほしい』

友奈に元気がなくなってきた事には、もう気付いていた。

だが、まだ確証はなく、そんな事ないと言いきられてしまったら、それ以上聞ける気がしなかったのだ。

だが、昨日、突然、兄の春信から電話がかかってきた。

そして、先ほどの事を言われた。

兄が、自分を頼った事は、初めてだった。なんでも出来た兄が、初めて、自分を頼ってくれた。

それが堪らなく嬉しくて、そして、友達の事を大切に思うから、夏凜は、今、ここに居るのだ。

だから――

「……ねえ、友奈」

「ん?なに?夏凜ちゃん」

夏凜の言葉に、友奈は夏凜の方を見た。

「……私達って、友達、よね……?」

「そうだよ?」

「だったらさ、その……話して、くれない、かしら……?」

「何を？」

「……………何か、隠してるんじゃないの？」

「……………」

夏凜のその言葉に、友奈は、答えず、また、海の方を見る。

しばし、気まずい沈黙が、二人の間に流れた。

「……………あ、ゆ……………」

「最近ね、夢を見るんだ」

「え……………」

突然、話し出す友奈。

「その夢の中ではね、勇者部は夏凜ちゃんたちが来る前なのでね。そこに、知らない男の子がいるんだ」

「知らない……………男……………」

「彼はね、おもちゃを修理するのが担当で、いつも、すごい速さで沢山のおもちゃを直しちゃうんだ。うん、東郷さんよりも速く。それでね、私は、いつもその彼と話すんだ。部室で、教室で、花壇の前で、帰り道で、彼の家で。彼と話せば話す程、心が軽くなって、嬉しい気持ちになるんだ。でも、思い出せない……………」

「……………」

その時、夏凜は見た。友奈の頬を伝う、夕日に煌めく、涙を。

「思い、出せないの……………顔も、名前も、声も……………全部、思い出せないの……………まるで、誰かに取られちゃったように、思い出せないの……………思い出せないの……………」

友奈は、嗚咽を必死にこらえて、胸に手をあてて、蹲るように身をかがめる。

「ねえ、夏凜ちゃん……………」

友奈は、涙でくしゃくしゃになった顔を夏凜に向けた。

「私……………どうすれば良いかな……………？」

その一言が、止めだった。

「ッー！」

「あ」

夏凜が、友奈を抱きしめる。

「……夏凜ちゃん……?」

「……勇者部五箇条『悩んだら相談』」

「え……」

「悩んでるなら、相談すればいいじゃない。困ってるなら、求めればいいじゃない。アンタは一人じゃない。勇者部がいる、皆がいる、東郷もいる、アタシがいる。アンタの悩みを聞いてあげられる人は沢山いる。だから頼りなさい。一人でよくよ悩まないで、全部ぶちまけなさい。大丈夫、アタシが、いるから」

「か、りん、ちゃん……」

「話しましょう。皆、聞いてくれるから」

「うん、うん……うわああああああん!!!」

耐えきれずに、子供のように泣き出す友奈は、夏凜に抱き着いて、大声をあげて泣いた。

それを、夏凜は、手放さない様に、しっかりと抱きしめた。

慟哭が夕焼け空に響いていく――

探して見つけて集まっ

黒板に、殴り書きされた文字。

それを書いた本人である三好春信は、改めて、黒板の前で座る勇者部一同に向く。

「では、これより、『勇者部のもう一人の部員』についての議論を始める」

その宣言に、一同はうなづく。

「昨日、夏凜の尽力により、結城友奈から、この勇者部に、お前達以外に部員がもう一人いるという事が分かった」

十人、という文字の横に、『十一人』と書き足す。

「その部員は、性別は男、特技は機械修理と料理で、趣味はゲーム。ただし、容姿については臆気。それでいいな？結城」

「はい、間違いありません」

春信の問いにうなづく友奈。

「夢を見始めたのが三週間前だな。最後のバーテックスの襲撃から、おおよそ一ヶ月後だ」

「三週間前……」

「……あれ？言いましたっけ？そんな事」

思わず聞き返す友奈だったが。

「友奈、兄貴は私達の言動を逐一記録してるし、そこから推理できてもおかしくないわ……」

「あー、ありえる……」

夏凜の呆れた発言に同意する風。

「話を戻すぞ」

だが、春信はそれを否定するでもなく話を進める。

「でだ。結城が夢を見始めるようになったのは、一重にある一件が関わっていると思ってる」

「ある一件？春信さん、それは一体……」

翼が聞くと、春信は美森を見た。

その視線に、美森は思い当たる節があるのか表情をこわばらせる。

それによって、他の者たちも気付く。

「……『奉火祭』」

「そうだ。その時はあまり追及しなかったが……東郷、お前、誰に助けられた？」

奉火祭。

神樹の四国大結界の外、今は完全に破壊されて火の海へと変貌した世界に、巫女を何人か捧げる事で成立する、生贄を必要とする儀式。

実は三週間前、美森は、勇者と巫女、両方の性質を持つ存在として、その奉火祭に参加、一人火の海へと身を投げ出し、敵の神に願い乞うたのだ。

だが、そこであるイレギュラーが発生。

その数時間後に、どういう訳か美森は病院で保護されたという報告を聞いて、大赦は一時期パニック状態に陥ったのだ。

その際、美森は、『誰かに助けられた』と言っており、大赦では、未だにそれが誰なのかわかっていないのだ。

その時、勘の鋭い園子が辰巳に連絡、そしてそのまま勇者部一同に知れ渡った訳だという事だ。

「あの時、お前を助けられる存在はいなかった。勇者システムも持たず、炎の世界に足を踏み入れる事など不可能な筈なんだ。だけど、お前を助けた奴がいた。少なくとも俺の『刀』の力じゃ炎の世界に足を踏み入れる事は不可能だ」

「精霊バリアを突き破れるのに何言ってるんだか……」

「ん？」

「な、なんでもないわ……」

春信に一睨みされて黙る夏凜。

ただ、美森はしばし考えて、口を開いた。

「……白い、勇者のような装束を着た男だったと覚えてるわ」

「白い装束の男……少なくとも俺たちの誰でもないな」

「紅白、って訳じゃないんだよな？」

「ええ。それに、不思議な武器を使う人で、人より大きい大鎌を振り回してるかと思ったら、いつの間にか二丁の拳銃を持って乱射してた

り、また気付いたら刀だったり・・・それに、鎖を操ってたりしてたわ・・・」

「それは、武器を換装しているんじゃない、その形状が変化してるって事でいいのかな、わっしー」

「ええ・・・あれは精霊というよりも、もつと別のもの・・・そうだわ、力を使う度に、なんだか、文字が出てきていたわ。それも、漢字。力に合わせて、文字が彼の周囲に出てきていた・・・」

「ふむ・・・文字か・・・」

春信が、黒板に、その部員についての特徴などに、新たに『文字を操る』と書き足した。

「ちなみに、その文字は全部でいくつあった？」

「えつと・・・『鎖』『解』『砲』『刀』『影』『弾』『罪』・・・それと『滅』だったと思います」

「全部で七つか。他にはなかったんだな」

「はい」

美森が言った漢字を、黒板に書いていく春信。

「ここまでの事を纏めると、その男の容姿は不明。ただし、特技としては機械の修理と料理で趣味はゲーム。俺たちのような力を使い、その力は主に文字にちなんだ力を使う事・・・把握したか？」

一同はうなづく。

「それにしても、文字を操る能力、ですか・・・」

樹が、黒板に書かれた事を見て、そう呟く。

「それが一体どのような力を持つのか分からない。だが、敵陣に単体で乗り込むような馬鹿だ。それほどの力を有しているのだろう」

「末恐ろしいな。東郷助けてくれたから味方だろうが・・・出来れば敵に回したくねえな・・・」

「同感ね・・・」

剛の言葉に同意する風。

「そうか、なら続けよう。今度は、結城が見た夢の内容についてだ」
「分かりました」

春信にうながされ、友奈は、ぼつりぼつり、と覚えている限りで夢

の内容を話した。

「……以上、です」

「……ご苦労」

短く労い、春信は、もっていた手帳を閉じる。

「友奈ちゃん……」

暗い表情になっていいる友奈を、心配そうに見る美森。

その横で、翼がふと口を開く。

「友奈ちゃんが話しているのは、勇者部創設初期の一年間の事……僕や夏凜ちゃんたちが出ていないうえに、須美ちゃんがまだ車椅子に乗っている事から、その事が分かる……その全部に友奈ちゃんが関わっているし、風先輩や、樹ちゃんとも、関わりがある……」

しばし考え込むかのように、口に手をあてる翼。

しかし、翼が何かを思いつく前に、春信が言葉を発する。

「結城、お前のいうその男の家の場所は分かるか？」

「え、一応……」

「そうか」

春信は、得心が言ったのか、彼らに向かって言う。

「行く場所が決まったな」

とあるアパートにて。

「友奈、本当にここであつてるの？」

「うん……その筈だけど……」

「まさか、夏凜ちゃんの家の隣だなんて……」

そこは夏凜の部屋の隣にある、五〇五号室。

「一応、大赦の名目を使って鍵は借りてきた」

「だったら後は入るだけね」

「大家の話では、ここには誰も住んで無いみたいだが……」

全員の同意を持って、扉の鍵を捻った。

がちやり、という音と共に鍵が開き、扉も開く。
扉が、開いた時――

『――待ってたよ』

そんな声が聞こえた気がして、友奈の鼻の奥を、懐かしい匂いがついた。

扉を開ければそこは、夏凜の家と変わらぬ廊下。

だが、他の者たちが警戒するなか、友奈だけは迷わずその部屋に駆け込んだ。

「あ、友奈ちゃんー！」

それに驚きつつも追いかける美森、それに続く勇者部一同。

友奈が駆け込んだ先である、リビングで、友奈は立ち止まり、その後ろから、皆がやってくる。

「え……」

「これは……!?!」

そこは、まだ人が生活していたかのような、机や本の入った棚。写真たてに、料理器具まで、生活に必要なものが、つい最近まで手入れされていたかのようにそこにあった。

まるで、人が住んでいたかのように。

「これは……」

「状態から見て早くても二ヶ月かそれ以上だな」

「そんな事も分かるなんて、春信さんマジで何者……」

「ゆーゆー？大丈夫？」

そんな中で、友奈だけは、呆然とその部屋を眺めていた。

「……ない」

「ん？」

「……思い、出せない……」

振り向いた友奈の顔は、泣いていた。

とても辛そうに、その顔をくしゃくしゃにしていた。

「知ってるはずなのに……何も、思い出せない……ここを知ってる

はずなのに……思い出せない……彼の事を……思い出せない……
思い出せないよ……」

その場に膝をついて蹲る友奈。嗚咽を漏らし、床のカーペットを濡らす。

その友奈の状態に、一回は呆然とする。

「……須美ちゃん、友奈ちゃんを」

「分かったわ」

「僕らは、この部屋を探索してみよう。何か見つかるかもしれない」

翼の言葉には、全員が同意し、この部屋を探す事となる。

美森は、泣いている友奈の背中をさすり、風と樹は台所を、剛と銀は寝室。その他はリビングや風呂場などを搜索していた。

「ん？これは……」

ふと、翼は、棚の上にあるアルバムらしき本に目を止めた。

それを手に取り、翼は開いてみる。そうして、中の写真を見ていくと、その表情を強張らせて、翼は一同に声をかけた。

「皆！これを見て！」

「どうした翼？」

「何？」

友奈の目の前でそのアルバムを開いて、中の写真を皆に見せた。

「あれ、これって、勇者部を始めて作った時の写真じゃない、これがどうかし……」

風の言葉が唐突に途切れる。

「こっちは、猫を捕まえた時のもの、です……ね……」

「これは夏凜たちや俺が来てから取った写真だな……」

樹や剛の表情も曇る。

それもそうだろう。

「……この男は、誰……？」

その写真のほとんどに、知らない男子の姿が映っていたのだ。

黒髪で、茶色の目。やや女性っぽい容姿をしており、その体格はやや筋肉がついている程度だ。

夏服では、腕などについた傷が目立つものの、本人は気にしていな

い様子だった。

そのどれもが、勇者部との写真であり、依頼の時のもの、かめやでの事、カラオケ店の事、取られている写真全てが、勇者部全員に覚えのあるものだった。否、園子、銀、春信の三人を除いて。

「友奈ちゃん」

翼が、友奈に問う。

「この、男に、見覚えは？」

その問いに、友奈は・・・

「・・・ある」

掠れた声で、肯定した。

「この、男の子だ・・・夢に出てくるのは、この男の子だ・・・この・・・」

辛そうな表情で、集合写真に映る男の顔に触れる。

「でも・・・思い出せない・・・」

それは、まるで神に懺悔するような声だった。

「声も、名前も・・・何も思い出せない・・・こんなに、こんなに胸が苦しいのに、何も思い出せない・・・どうしてかな・・・どうして、何も、思い出せないの・・・？」

涙が零れ落ちて、写真を覆う透明フィルタの上に落ちる。

友奈の嗚咽がその部屋に響いて、黄昏色の光が、窓から差し込む。

夏凜は、そんな友奈を見る事しか出来なくて、ふと台所を見た。

その時、かすかに、誰かがそこで料理をしている姿が、頭をよぎった。

「ッ!？」

しかし、それはすぐに消えて、そこには何もなかった。

「・・・」

それを呆然と見つめて、夏凜は、目を瞬かせる。だけど、もうその姿は見えなかった。

結局、手掛かりらしいものは、写真以外に見つからず、その日は、それで解散となった。

皆、浮かない顔であったものの、それでも次を見て、帰路についていた。

物語は、また、別の場所でも――

冷たい廊下を、歩く一人の少女は、首のついた金属製の首輪を慣れたとでも言わんばかりに裸足で歩く。

服装は、病衣。セミロングの黒髪をなびかせて、少女、『稻成幸奈』は廊下を歩く。

とある部屋の前で立ち止まり、その横にある開閉スイッチを押せば、その扉が横に開いて、幸奈は中に入った。

「ふう……」

「幸奈おねーさん！」

「わつと……美紀……」

そんな彼女に抱き着くのは、同じように病衣を纏ったまだ小学生の年頃の少女『針目美紀』。

「どうだったか？幸奈」

幸奈に声をかけるのは、この中で一番の年長者である『阿室佐奈』

だ。

「はい。腕の調子も、大分戻ってきているようで」

「なら良かった。だが無理は禁物だぞ」

「分かっているわ」

ふと、佐奈の後ろに視線を向ければ、そこではトランプをしている二人の男子を見つけた。

熊のような体格をしている少年は、精神障害で精神年齢が幼稚園あたりで止まっている『車田真斗』。

一方で、少し痩せた体をしているのは、そんな真斗のお目付け役である『加賀弘』。

彼ら全員にも、幸奈と同じような首輪がつけられている。

彼女たちは『襲撃者』。

かつて、この世界を殺そうとバーテックス側についた、人類に叛逆した人間たち。

しかし、その野望も、勇者たちによって阻止され、その力も剥奪されてしまったのだが。

ただ、彼らに指示を下していた異世界の神の使いである愛の天使『アモル』によって精神に異常をきたしていたが、今はそれも落ち着いているようで、大人しくここ、大赦が用意した対勇者用の収容施設で暮らしていた。

「来年、佐奈さんはここを出られるのね……」

「まあ、私はお前達より年長者だからな……美紀が心配だが」

「大丈夫だよ！わたし、がまんするから！」

「そっか、偉いな」

美紀の頭を撫でる佐奈。しかし、その表情は浮かない。

その様子には、幸奈は気付いていた。

その時、施設内の放送が流れた。

『——稲成幸奈、阿室佐奈、針目美紀、車田真斗、加賀弘の五名は、至急、広間へ集合してください。繰り返します——』

「広間に……？」

「なんの様だろうね」

「うう、勝てなかった……」

その放送に、真斗以外の者たちが首を傾げる。

「とりあえず行こう。私達に、それ以外の選択肢はないんだからな」

「代償、て奴かしらね……」

幸奈が、片手でもう片方の腕の二の腕を掴む。

「……今、何してるのかしら、友奈は……」

天井を見上げながら、そう呟いた――

また、一方にて。

香川にそびえたつ巨大な塔、『ゴールドタワー』。

そこにある、訓練場にて――

「うおおおおおおおおお!!」

一人の少年が絶叫しながら物凄い速さで腹筋をしていた。

そんな様子を、眺めるのは、ジャージ姿で銃剣を模した木の模型を持った少女。

「相変わらず、なんでそんなに早くやれんのかしら?」

「ぜえ、ぜえ、ぜえ……なーにこれぐらい!勇者になる為には、これぐらいの努力はお茶の子さいさあああ!!?」

と、突然、床に転がってたペットボトルを踏んづけて派手にサマーソルトキックを披露する少年。

そのまま後頭部を強打。

「やれやれ……」

「……まだだア!!」

だが、すぐさま起き上がる少年。

「よーっし次はこの訓練場を百周だア!」

「私もいいかしら?」

「お、良いぜ芽吹！」

「負けないわよ？」

「望むところだぜコンニャロ！」

少女、『楠芽吹』が、少年、『正道明日香』を挑発し、明日香がそれに乗る。

いざ二人して走り出そう、とした所で・・・

「メブうううう！明日香さあぁん!!」

「ん？雀？」

訓練場に飛び込んでくる少女が一人。

「どうした雀？」

「ハア・・・ハア・・・し、神官さんが、今すぐ広間に集合しろって・・・」

「広間に？新しいお役目かしら？」

「たぶん、そうだと思う・・・」

芽吹の質問に、『加賀城雀』はおどおどしながら答える。

「お！新しい任務か！腕が鳴るぜ！」

一方の明日香は楽しみとでもいわんばかりにガッツポーズをとる。

そんな明日香の背中を叩く芽吹。

「うお!？」

「頼りにしてるわよ」

「へへ、おう！」

芽吹の信頼が最も信頼している存在である明日香。

彼らは『防人』。勇者に代わり、四国の外で活動をする、別の形で神樹に選ばれた者たちである。

深夜――

「・・・どうして、こんなに、遅く、なった、んだっけ・・・？」

「だいたいは白露の所為だな」

「な!?!わ、私の所為なの!?!」

「ごめん、流石に私も弁護できないわ」

「こいつに地図を任せたのが間違이었다・・・」

「もういいじゃないですか。どうせせめても時間の無駄です」

「それもそうだな」

「道案内は任せられるわね？——千景君？」

駅前にて、八人の人影があつた。

「ああ、任せてくれ」

『戻って来たわね』

『行きましょう、敵はすぐそこまできています』

一人の少年が、仮初の夜空を見上げた。

救い導く者、『救導者』

世界を守る者、『勇者』

世界を殺す筈だった者、『襲撃者』

活路を見つける者、『防人』

その四つの勢力が、今、香川に集結していく。

今回は、誤算だった。

まさか、人間風情に奪い返されるとは。

罪深き人間どもが捧げる生贄を、こちらの戦力として作り変えようとするまえに、あの忌々しき人間にいと也容易く取り返されてしまった。

だが、それはどうでもいい。

三百年前の時点では、人間どもを滅ぼす事は根絶するのは不可能だった。

神樹だけだったのならまだよかった。だが創る事において、自分よりも強い力を持つ神がいなければ、今頃、この世界を滅ぼせていた。あの神なら、今の自分の力を超える力で強力な結界を作り、こちらの干渉を完全に遮断してしまうだろう。

それだけではなく、この自分を殺す武器を作って反撃してくるだろう。

だから待った。なるべくその神を刺激しないように、神樹のみを攻撃し、摩耗させつつ、力を蓄える。

そして、今、時は満ちた。

『時は満ちた』

故に、今こそ、この世界の人間を断絶する。

我は、その為に、ここに居るのだから。

『今こそ、この世界の人間を断罪する時だ』

異世界の断罪の神『マジアルクス』は、自分達の配下の者たちに命令を下す。

そして、配下たちは、膝をついて、承諾する。

「御身の御心のままに」

最大の敬意を持って、彼らは、神樹の張った四国大結界を目指す。

決戦は、近い――

勇者の葛藤

謎の男子部員が住んでいたと思われる部屋の搜索から、早翌日。友奈と美森は並んで学校に向かっていた。

しかし、二人の表情は暗く、友奈に至っては、表情があまりにも虚ろだった。

「友奈ちゃん、大丈夫?」

「……」

「友奈ちゃん?」

「あ、何? 東郷さん?」

「どうしたの? なんだから、ボーっとしているように見えたけど」

「そうかな、そんな事……ないよ?」

友奈は、美森から視線を外して躊躇いがちに答える。

昨日より、さらに元気がなくなっている。

笑い方が、あまりにも、虚過ぎる。

このままでは、その笑顔さえも、失ってしまうかもしれない。

(早くなんとかしないと……)

美森は、心の中で、そう決意を固めた。

その時、全身真っ黒な服装をした少年が、反対の歩道ですれ違った。

二人は、それに気付く事は無く、そのまま去っていく。

その様子を、男はしばし歩いたのち、振り向いて確認する。

「……どうしたんだ?」

『あまりにも元気が無かったわね、結城さんと東郷さん……』

少年、不道千景は、かつての仲間たちの変わりように、しばし動揺していた。

そんな彼の顔の横に、白い日本人形のような精霊『雪女郎』こと、伊予島杏が出てくる。

『分かりません。ですが、何かあったのは確かです』

『喧嘩……とかじゃないわね』

郡が杏の言葉に応える。

「どつちにしろ。俺の目的はアイツらを守る事だ。東郷は勘が鋭いから、バレない様にしないと・・・」

「一応、他の人たちにも置いてきたけど、貴方一人で大丈夫なの？」

そこへ、頭の上に緑色の猿の精霊『覚』こと白鳥歌野が現れる。

「問題無い。それに、貴方たちがいるんだ。負けねえよ」

『自信満々でよろしい。だけど油断は禁物よ。私でも右腕持っていないから、肝に銘じておきます』

「肝に銘じておきます」

フツと笑って、しかしすぐに表情を引き締める。

（幸い、さつきすれ違った時に二人とも俺に気付かなかった。やはり『認識阻害』が組み込まれてるから、存在自体を察知しにくいんだな）
千景は、改めて創代が創ったこのミリタリー服、『隠密』の効力を実感する。

この服装には、創代の力の一つである『文字』のうち、『認識阻害』『気配遮断』『迷彩』の三つが付与されており、これを着れば、誰でも暗殺部隊の仲間入りなのだ。

ついでに、『対神』までついているために、神樹の眼も欺ける優れものだ。

ただし、デメリットとして御神刀を発動されればすべて無効化されてしまうため、天鎖刈を使う時は使いどころを見極めないといけない。

それはともかく、二人の様子がどうにもおかしかった。

何かあったのか。

「調べる必要があるかもしれないな・・・」

千景はそう思うも、思いとどまり、首を振る。

「いや、それよりもやる事がある」

千景は、ポケットから何かの石を取り出す。

「これを指定の場所に置かねえと」

千景はスマホを取り出して地図を出す。

「この先だな」

そして走り出す。

今日から起こる、敵の襲撃に備える為に。

今日一日、授業の内容は頭に入ってこなかった。

話しかけられても、ちゃんと答えられたかどうかとも思い出せない。それほどまでに、今日一日の事が臆気で、力が入らない一日だった。やはり、昨日の事がきつかけだろうか？

例の彼の事について、近付いてきたからか、あの夢の内容が、濃く思い出されるようになった。それ故に、辛い気持ちも大きくなってきて、今にも、胸が張り裂けそうな気分だ。

どうすればいいのか、全く分からない。

そんな気持ちの友奈は美森と翼が見ている間に、他の者たちは、例の少年について議論していた。

「一応、容姿は分かった。問題なのは、名前と声、そして身の上ね」

「何か心あたりはないのか？話から察するに、俺と銀との面識はない」

「すみません、私も、どこか知ってる気はするんですが、どうしても……」

「園子は何かわからない？」

「うーん、こればかりだとなんとも……」

皆、頭をとにかく捻って考えている。

しかし、考えても考えても、何も良い答えは出ない。

「……なあ」

ふと、銀が声をあげた。

「どうしたの銀？」

夏凜が聞き返す。

「その、ちよおつと言いいにくいんだけども……実は大赦では、黒髪で茶色の目の女の子って、大赦じゃ忌み子らしくて……」

「ミノさん」

その時、園子から僅かに怒気を孕んだ声がその場に響いた。

「まさか、この子がその忌み子だっっていたいの？」

「ま、まさか！ただ、その時つける名前がまさかなーって思ったってだけで……」

「いやいやありえないでしょ？そんな縁起でもない名前なんて」

と、重くなりかけた空気をどうにか持ち直した。

「結局、分からずじまいね……」

「そうだね、お姉ちゃん……」

結局、話は何も進まず、その日は解散となった。

帰り道、友奈、美森、翼は三人で帰っていた。

「翼君、ついてこなくてもいいのに……」

「女の子二人だけで帰るのは危ないでしょ？せめてものボディーパードと思ってくれていいよ」

「本当は東郷さんといいたいだけでしょ？」

「バレたか……」

たははー、と苦笑する翼。

それはそうと、やはり友奈に元気がない。

やはり、夢の中に出てくる、あの男子が原因なのだろう。

それほどまでに、友奈にとって、大事な人だという事なのだろう。

(情けない……)

翼は悔いる。こんなにも、恋人の親友が苦しんでいるというのに、何もしてあげられない事が、今、とても悔しいのだ。

(園子ちゃんは、今、師匠せんせいの所に向かっている。何か、有益な情報を聞き出せばいいんだけど……)

翼は、今、大赦に向かっていて園子の事を心配して、空を見上げた。

大赦本部より、駅を一つ挟んだ山に、足柄辰巳の家がある。

一時期、修行の為に三ヶ月近く泊まった事があるので、家に行くための道のりは知っている。

しばし山道を歩いていると、一つの古ぼけた家を見つける。

「師匠せんせい、いますかー?」

園子がそう声を挙げると、少しして小屋の扉が開き、そこから、一人の筋肉質な体格をした老人のような男が現れた。

「園子か」

彼こそが、勇者訓練指導官にして、西暦最強の勇者、足柄辰巳だ。

「何の用だ?」

「少し、聞きたい事があるんです」

辰巳は、園子を家に招き入れる。

中は昔の日本家屋そのもので、居間の中心には暖炉があり、他には、生活に必要な最低限なものばかりだった。

それに、かなりボロボロだ。

「懐かしいな」

「お前がここに来るのは二年も前になるな。それはともかく、何を聞きたい?」

座布団を用意し、それに園子を座らせ、聞いてくる辰巳に、園子は持っていた鞆から一枚の写真を取り出す。

「この男の子について、知ってる事ありませんか?」

辰巳はそれを受け取り、まじまじと眺める。

「・・・黒髪に、茶色の眼・・・」

「勇者部のもう一人の部員なんです、なんでもゆるゆが見る夢の中に出てくるんです」

「そうか・・・」

辰巳は、しばし考える素振りを見せて、そして一言。

「・・・悪いが、知らない」

「そうですか・・・」

園子は、心底残念そうに、返された写真を鞆に入れる。

「師匠せんせいでも、だめですか・・・」

「すまない、力になれなくて・・・」

「いいえ、師匠せんせいは頑張っています。ただ、それを知っていても、理解する事は出来ませんが・・・」

足柄辰巳の体は、竜そのもの。どうか人の形を保っているが、本来なら、彼は伝説の怪物、竜に変化していても可笑しくはないのだ。

しかし、それは、三百年前に、辰巳の恋人であった上里ひなたが、死の直前に神樹に願った『願い事』によって、今はどうか人の形を保っているのだ。

そして、その体が竜へと変質した事で、人間の数倍の寿命を持ち、この三百年間、生き続けているのだ。

未だ、死ぬ予兆が見えないが。

「勇者部の状況は春信から聞いている。結城の精神が不安定になっているようだな」

「はい・・・このままじゃ、ゆーゆは、その笑顔を失ってしまいます・・・」
「・・・」

辰巳は、その園子の様子に、しばし考え、そして答える。

「・・・その男の事だが・・・」
「え?」

「もしかしたら、神樹が絡んでいる可能性がある」

「神樹、ですか・・・」

園子の表情が険しくなる。

「お前の供物が返還される前の、戦いにおいて、神樹が樹海化を発動させる度に、その力の減りが大きくなっている事があった。その為に、大赦では、どういう事なのか調べる事にした。勇者全員の身体能力や、変化など、隅々までな。一方で襲撃者が神樹の力を使って神樹の力を奪っていたのではないかという事もだが、後になってあいつらと神樹とは何の関係も無い事は、神樹の神託で分かった。だとすれば、必然的に勇者たちの誰か、という事になるのだが、それが誰なの

か分からない。結局、この案件は迷宮入りという事で片付けられた。だが、お前の言う、消えた部員というのが存在するのなら、ソイツは、何か存在を消されるような事をしてかしたという事がうかがえる」

「・・・何が、言いたいんですか？」

園子は、表情を険しくして。

「結城には悪いが・・・その男は神樹によって殺されている可能性が高い」

「ッ・・・!?!」

考えたくもない、最悪の可能性。園子でさえも、思いもよらなかった、最悪の答え。

「そ、んな・・・」

「勿論これは憶測にすぎない。はじめから存在しなかったかもしれないし、もしかしたら、存在したという事実のみを消されて、どこかで生きているかもしれない・・・どっちにしろ、最悪の可能性は考えていても損はない。ただ、すでに決定した事は、覆す事は出来ないがな」
辰巳の辛辣な言葉に、園子は、背中を丸めて、拳を膝の上で握りしめる。

(何をしてるんだ・・・私は・・・)

忘れられる苦しみを知っている筈だ。他人と認識される苦しみを知っている筈だ。なのに、忘れてしまった。その苦しみを、知っている筈なのに。

「・・・師匠せんせい」

「なんだ？」

「・・・私、どうすればいいかなあ・・・？」

酷く、震えた声で、そう問う園子。

「・・・醜く足掻く、それだけだ」

短くシンプルに、しかし果てしなく険しい答えを、辰巳は述べた。

「・・・はは、やっぱり、師匠せんせいは厳しいなあ」

顔を上げる園子。

「ありがとうございます、師匠せんせい、もう少し、足掻いてみます」

「それがいいだろう。ああ、そうだ」

辰巳はふと立ち上がると、部屋の隅にあったアタッシユケースを取ると、園子の前に出す。

「神樹から神託が降りた。『現在、この神樹を殺すに値する力を持つ輩が、讃州に存在する。すみやかに排除せよ』という事らしい」

「神樹様を、殺す・・・？」

「どつちにしろ、神樹が死ねば人類は終わる。それだけは避けなければならぬ。それともう一つ『おおよそ三日後、敵の本隊が攻めてくる。それに備えよ』、という事らしい」

辰巳は、ケースの留め具を外して、開け、その中身を園子に見せた。
「・・・勇者システム」

「本隊、すなわち、バーテックスなど比較にならない奴らが攻めてくるという事を考慮し、満開を強化しておいた」

「強化・・・？」

「満開と昇華を組み合わせた。これによって、昇華による肉体破壊を、満開によって抑えるように出来、さらに、力が圧縮されたために、通常の数倍の力で戦えるようになった。通常の威力の攻撃を、半分以下の力で発揮出来るようになったって所だ」

「そうなんですか・・・わ!？」

園子が、自分の勇者システムが搭載された端末を手に取ると、そこから一匹のぬいぐるみのようなものが現れた。

「わあ! 鴉天狗!」

鴉天狗は背中の羽をぱたぱたと動かし、園子の頭の上に乗った。
た。

「久しぶり〜」

園子は嬉しそうに鴉天狗の頭をなでる。

だが、そこで一つ懸念が浮かび上がる。

「師匠^{せんせい}、散華はどうなったの?」

そう、満開を使うと、体の一部を神樹に供物として持っていかれる。それは記憶や体の機能などランダムでどれか一つ。片足だけかもしれないし、もしかしたら両足同時に失うかもしれない。そんな、恐ろしい機能。

「・・・安心しろ、散華の機能は無くなった」

「そうなんですか？」

「ああ、上手く神樹に取り入る事が出来てな。散華無しに満開を発動させる事が出来るようになった」

辰巳は、園子にそう説明した

「そうですか・・・」

園子は、どうにも心にひっかかる懸念とやらを感じつつも、自分の端末をポケットに入れ、そしてアタッシュケースを持ち上げる。

「では、これを皆に渡してくれればいいんですね」

「ああ、まあ、その場の判断はお前に任せる」

「分かりました」

園子は、一度、頭を下げて、辰巳の家を出る。

「それでは、今日はありがとうございました。さよなら」

「気を付けて帰れ」

辰巳は、園子を見送り、やがて、独り言のように呟いた。

「・・・すまないな、園子」

散華は無くなっていない。

ただ、代償の矛先が、別の人物にむいたただけだ。

「後俺は、この先二千七百年は生きられるらしいからな」

辰巳の寿命は、おおよそ三千年。そして、三百年消費して、残りは二千七百年。

神樹には、辰巳自身の寿命を代償として、満開を使えるように仕込んでおいた。

満開一回につき、十年。猶予、二百七十回。

それだけあれば、問題ないだろう。

「・・・もう、神樹は力尽きかけている。これ以上、時間はかけられない」

仮令、この身が減んでも――

夜――

「まっさか、アイツらが俺の部屋を調べてるなんて思わなかった……」
格安の宿にて、救導者八人十巫女一人で男女別れての大部屋に泊まっている時の事、千景がそう呟いた。

風呂にも入って浴衣姿になってはいるが、この部屋に千景のジャケットと同じ効果のある結界を張ったために、神樹にはバレない。

「せっかく金使わないで止まれると思ったんだが……また来られる可能性があるからな」

「妥当な判断だろう。どっちにしろ、隣にいる三好夏凜とかいう女に感づかれる可能性もあった。ならば、宿をとった方が安全だろう」

海路が本を読みつつ眼鏡のブリッジを押し上げ、そう答える。

「だけど、お前の部屋を調べたって事は、あいつら思い出せてるんじゃないのか？」

信也が、そう千景に問う。

「いや、あの戦いのあと、全員、気絶するほどの大ダメージを負っていた。おそらくその間に神樹が記憶を抜き取って俺の事を忘れさせた筈だ。だから、どうあがいても、アイツらは俺の事を思い出さない……筈だ」

「確信ないんかい」

どうにもはつきりしない千景の言葉に、真武郎がつっこみを入れる。

しかし、千景はその間に敷いた布団の上に寝転がり、天井を見上げる。

「……まあ、期待してないっていえば、嘘になるかな」

「そうなのか……」

「まあな。また、アイツらと一緒にいられるのか、と思うとな」

その千景の言葉に、信也は、どうにも言えない気持ちになる。

「…もし、アイツらの記憶が戻ったら、お前は、その、戻るのか…？」

「ん？うーん、今すぐ、とは言えないかな。もう向こうの学校の生徒になっちまった訳だし。でも、そうだな。戻りたいとは、思うよ。出来る事なら、な」

起き上がって、千景は自分の左手を見る。

「この左手さえなかったら、今頃、アイツらと一緒にいられたかもしれない。だけど、この左手が無かったら、今は無い。どれほど考えても、過去は確定してしまう。それを変えるなんて事は、俺には出来ない。だけど、せめて最悪の未来だけは回避できると思うんだ」

ふと、千景は立ち上がる。

すると浴衣を脱いで、黒のミリタリージャケット、前身黒づくめの姿に着替える。

「ん？どっか行くのか？」

「まあな。先に寝ててくれ」

千景は、それだけを告げて、部屋を出る。

そのまま宿を出て、しばらく宿から大きく離れた、廃工場のある場所をやってくる。

すでに廃棄させられた後で、そこに人影はない。

ふと、千景のすぐそばに、杏が姿を現した。

『こんなところに来て、どうかしたんですか？』

「いや、ちよいと客のようだな」

いくつもの、足音が聞こえる。

『え……!?!』

『……来たわね』

気付けば、周囲には、草色の装束を纏った集団に囲まれていた。

『まさか……防人!?!どうして……!?!』

「少し誤算だった。この服のお陰で俺の存在は察知されない。だけど、神樹と密接な関係にある精霊だけは別だ。簡単に探知されてしまう」

『それじゃあ・・・』

「ああ、お前らを認識されて居場所を特定された」

認識の対象を、千景から精霊に切り替えれば、認識は可能。その上、千景にはどれほど隠蔽しても隠せない力がある。

『神奪』

常時、空气中を漂う神気を吸い続け、エネルギーに変え続ける、第二種永久機関じみた力。

それについて、力を完全に抑える為の手袋も作ってもらわなければならないが、こうなっては後の祭りだ。

敵は全員、なんらかのバイザーを装備している。おそらく、あれで創代の作った隠蔽装備を破って千景を認識しているんだろう。

相手が攻撃してくるなら、反撃するまでだが、それでもどうにか話し合いで解決できないか。

そう思い、千景は彼らに話しかける。

「よお、真夜中にこんな大人数で出かけてるとは何かのパーティーか？ だったら俺も混ぜてくれると嬉しいんだけど」

普段の口調からは考えられない様なふざけた口調。ただ、この緊迫した空気をどうにか解きたいという本心は垣間見える。

「・・・貴方は完全に包囲されている。無駄な抵抗はやめて、大人しく捕まりなさい」

ふと、一人の少女が前に出て、お決まりのセリフを吐いてきた。

「アンタがリーダーか。見た所十八歳以下で構成されてるようだな、この集団」

「御託は良い。捕まるのかそれとも反抗するのか。決めなさい」

「取り付く島なしかよ・・・」

(なんだか夏凜みたいいな奴だな・・・)

苦笑しつつ、さらに説得を試みる。

「しっかし大袈裟すぎやしないか？ たかがこんな男一人のために、こんな数揃えるなんてさあ？」

「打倒な判断だと思っわ。貴方、神から力を奪えるみたいだから」

その発言から、千景は理解する。

なるほど、こいつらは神奪の事を知ってるって事か。

見た所、武器は銃剣と楯。それぞれの適性に合わせて、武器を持たせているらしい。

ただ気になるのは、女子と男子の比率が三対二という状況の中で、たった三人だけ、大小二つの片手で振り回すには大きすぎる双大剣、あまりにも巨大な大槍、自らの二倍の身長はあるであろう大弓を装備した者たちがいる。

そのどれもが男。その三人が、どうにも気になる。

(あいつらは警戒すべきか……)

「無駄な抵抗はやめろー!」

「ん?」

いきなり、二振りの大剣を持った少年が声をあげる。

「お前は完全に包囲されてるー!反抗してもむだだぞー!」

「……ねえ、そういうと私たちが完全に雑魚の集団に見えるからやめて」

何故か周囲から落胆の雰囲気が出た。

「なぬ……」

「あー。そろそろいいか?」

「ああ、ごめんなさい」

呆れてる様子の千景に対して、リーダーらしい少女は向き直る。

「それで、どうする?『降伏』か『抵抗』か」

「悪いがまたお前らに捕まる訳にはいかないんだ。第三の選択肢としてお前らの『撤退』を望みたい所なんだが……」

「悪いけど、そうもいかないわ。上から貴方を必ず捕まえろっていう指令が下ってるの」

少女は、とても不服そうにそう告げる。

「そうだよなあ……」

「貴方は、この世界を終わらせる力を持って。それは、私達としても見過ごす事は出来ない。もし反抗するというのなら、威力を行使させてもらおうわ」

少女が銃剣を持っていない方の手を挙げる。

すると周囲の防人たちが、一斉に銃剣を構える。

交渉は決裂。即ち――

「仕方がないか」

『ごめんなさい……私達のせいで……』

「気にすんなよ……元はと言えば、俺の自業自得だ」

千景は、ジャケットの下に隠しておいた脇差を手に取り、その鏢を弾き飛ばす。

「――『天鎖剣』」

光が迸り、千景の姿を変化させる。

その身を白い装束に身を包ませ、その上を拘束具のような金属装備で固める。

「さあ、来いよ。防人」

身をかがめ、構える千景。

「……いいわ」

少女、楠芽吹が、一言呟いて、その手を振り下ろす。

無数の銃声が鳴り響き、実体無き弾丸が銃剣から放たれる。

そのどれもが勇者のそれには劣るが、確実にバーテックスを屠る事を可能とする一撃。まともに受ければ、いくら御神刀を発動させていようともただでは済まない。

『鎖撃結界』ッ!!
カウンターシールド

左手を地面に置き、その瞬間千景の足元に『鎖』の文字と環が出現し、その環にそって鎖が渦を巻く様に出現する。

その鎖は、襲い掛かる銃弾の嵐を全て弾き飛ばす。

『文字連鎖』、『鎖』、『砲』、『解放』、『連鎖砲』ッ!!
イデオムチエイン

次の瞬間、左腕に『鎖』の文字が現れ、それに重なるように『砲』の文字が出現。それが重なる、鎌が形を変えて、その姿を二丁の拳銃ハンドガンに変える。

「武器が!？」

「変わった!？」

防人の中から声があがる。

『魔砲』、『銃弾舞踏』
バレットダンス

千景は、彼らが驚いている間に、銃を構える。

「ツ！護盾隊！前に出て！構えて！」

しかし、千景の思惑を悟った芽吹がすぐさま防人たちに指示を飛ばす。すると大楯を持った者たちが銃剣隊と入れ替わるように前に出て、楯を構える。

その直後に、今度は千景の方から銃弾の嵐が飛んでくる。

銃弾全てが楯に直撃し、甲高い金属音を響かせる。

「ぎゃああああ!!今！今すぐい音したよ!!大丈夫だよね!!この楯壊れないよね!!」

一人、とんでもなく情けない悲鳴をあげている者がいる。

「そこか——!!」

千景はそこを綻びを判断して声がした方向を集中砲火する。だが、その方向にいた護盾隊の内、一人だけがどういいう訳か予想と反して全ての弾丸を僅かな角度操作で弾き飛ばした。

「なぬッ!」

「うわああああ!!こっちー!こっちに集中してきたよー!殺される——!助けてー!メブううう!!」

相変わらず情けない声をあげている筈なのに、その防御は的確、否、的確なんてもものじゃない。本能のままに盾が痛まないように、かつ、完璧に千景の銃撃を弾いていた。

(うっそだろ!?バケモンかよ!?)

「ハッハッハー！情けない声を挙げているからって甘く見たな！彼女こそが、我が防人部隊の守護神、加賀城雀だ！」

ふと槍を持った大男がそう高笑いをしながら言ってくる。

「なるほどな！そいつは認識を改めないといけないな!!」

「いや違うから！私そんなじゃないから!!私弱いから!!」

雀と呼ばれた少女はどうにも否定したいようだが、あんな防御を見せられたら流石に納得せざる得ない。

だが、それでも千景の銃撃は止まらない。

「弾詰まりどころか弾切れさえも起こさないな。おそらくあの銃、弾数に上限ないんだらうな」

ふと、大弓を持った少年『亜門優理』がそう冷静に分析する。

「反撃しようにも、あの鎖の結界が邪魔ですわね」

その隣で、『弥勒夕海子』が含みある笑みを浮かべながらそう付け足す。

そして、芽吹に向き、聞く。

「どうしますの？隊長さん？」

「どうするのかって？決まってるでしょ」

芽吹は、大剣を持つ少年、正道明日香の方を向く。

「行けるわね？明日香」

その問いに、明日香はニイツと笑って。

「ああー！」

次の瞬間、明日香が、包囲網を一人、弾丸のようなスピードで飛び出す。

（一人出てきた——）

『予想通りね』

千景はすぐさま迎撃に銃弾を放つ。

それを明日香は小振りな方の剣を持って全て叩き落す。

だが、それは予想通り、だが、この結界は流石に突破できな——

「うおりやああああ!!」

「なッ!？」

だが、明日香の大剣は、あろうことか結界を無効化して切り裂いた。

「馬鹿な・・・!!」

「もういっちょおお!!」

叩き付けた剣をそのままもう一振りの剣で千景を追撃。その攻撃は突き、狙いは左肩。

それを千景は体を捻って回避。

しかし無理にかわしたからかバランスを崩して地面を転がり、すぐさま立ち上がる。

「・・・おい、その剣どうなってやがる・・・?」

千景は、認識を改める。

目の前にいる敵は、そんな甘い敵じゃない事を。

「へへ、どうだ、驚いたか！」

明日香は、得意げに笑って、千景を見下ろす。

だが、千景は不敵に笑っている。

「ああ、驚いたよ。だから、ちよいと助っ人頼んどいた」

千景は人差し指を立てた。

次の瞬間——

「標的確認、方位角固定——『大砲爆槍』、吹き飛びなア!!」

「集まれ 水よ 激流となりて 打ち砕け——『龍水激流撃』、打ち砕けッ!!」

突如として、上空から二つのミサイルが落ちてきた。それが大きな爆発を伴って、防人たちを吹き飛ばす。

「「うわあああああ!」」

「「きゃあああああ!」」

突然なことに加え、大量の防人たちが吹き飛ばされる。

「な!?!」

「安心しろ、派手だが死人は出ない。だが、しばらく動けなくはなる」
爆発と水流が収まるころには、そこには大量の防人たちが転がっていた。

そのどれもが気絶していた。

「嘘だろ……!?!」

「嘘じゃない。お前が俺の結界を切ったように、今、お前達の大半が倒れた」

千景の傍に、二人の男女が降り立つ。

中年で、自身より大きい槍を持った男、森谷真武郎と、刀を携えた少女、水霜冬樹だ。

「千景、あれ、じゃあ、わかり、にくい」

「そう思ってるのはお前だけだよ冬樹ちゃん」

「悪いな。でも、信じてたよ」

千景は、銃を鎌に戻し、構える。

「芽吹!被害は……」

「三分の二がやられた！幸いどういう訳か死人はいないし重傷者もない」

「そうか、なら良かった・・・」

「そう思ってるのはお前だけだ」

明日香を叱咤するかのように、優理が弓を構えて叫ぶ。

「あんな攻撃、他の奴らじゃ防げねえ！俺たちがやるしかないぞ！」

「うむ、そうだな！」

優理の言葉にうなづく様に、大槍を構えた『前田将真』まえだしょうまが、真剣な表情で千景たちを睨みつけていた。

「ああもう、どうしてこうなるかなあ?！」

そして、他の防人と同じ銃剣を持つ少年『羽村昴』はむらすばるが泣きごことを叫びながら、しかし誰よりも状況を理解しながら銃剣を構える。

「弥勒夕海子、加賀城雀、山伏しずく、正道明日香、前田将真、亜門優理、羽村昴以外の防人は、倒れた防人をすぐに安全な場所に移動させて！名前を呼ばれた人たちは奴らを迎え撃つ！いいわね！」

芽吹は防人部隊の隊長として指示を飛ばしている。

「えええ!?ちよ、ちよつと待って！どうして私が入ってるの!?!死ぬって！さっきの見たでしよ絶対に死ぬって絶対!!！」

雀はなおも泣き言を叫んでいるが、それでもその場から逃げるような事をしない。

「待ってましたわ！ここで武勲を挙げて、我が弥勒家の名を世に知らしめて見せますわ！」

一方の夕海子は、やる気を出していた。どうやら、何かの野望を抱えている様だ。

「へっ、やっと俺の出番か、あの首かつ切ってやるぜ！」

先ほどまで大人しくしていた筈の『山伏しずく』が、いきなり豹変して荒い口調で銃剣を構える。

「行くわよ！明日香！」

「よっしやああ！目に物みせてやらああああ!!！」

芽吹の言葉に、明日香は気合と共に、二振りの大剣を構えた。

戦いの火蓋は、切って落とされた。

そして、その様子を、ビルの屋上から見るのは、五人の影。

「始まったな」

阿室佐奈が、開戦を告げる。

「そうですか……」

「んー、なんで私たちここで待機なんですかー？」

幸奈の呟きが続いて、美紀が退屈そうに足をパタパタさせる。

「仕方無いよ美紀ちゃん、僕ら、この世界を破壊しようとしたんだから」

「うう、美紀、我慢……」

「はあい」

弘と真斗に諭され、不服そうに返事を返す。

「かなり被害を被っているな」

「なら……」

「ああ、助太刀した方がいいだろう」

暫定リーダーである佐奈が、そう答える。

それを待っていたといわんばかりに美紀が立ち上がり、弘と真斗も
うなずく。

「行くぞ」

「はい」

「悪いが、行かせねえぞ。幸奈」

その時、声が聞こえた。

そして、幸奈は驚愕に目を見開く。

向かいのビル。その屋上に、五人の人影があった。

「誰だ!？」

佐奈が弓を構え、弘が西洋剣レイピアを構え、真斗がワンハンドハンマーを
取り出し、美紀がナイフをその手に持ち身を沈める。

だが、幸奈だけが、構えなかった。

それどころか、その胸に手を当てて、激しい動悸を鎮めようと必死

だった。

「・・・どう、して・・・」

目の前には、信じられない光景。

「どうして・・・貴方が、いるの・・・信也・・・」

そこにいたのは、幼馴染の磯部信也、新井白露、浅羽海路、姉のように慕っていた桐間雅、そして、幸奈の知らない少女、安座間優。

「幸奈、知ってるのか？」

「・・・前に私がいた、孤児院の幼馴染・・・」

「なに!？」

佐奈は思わず引き絞っていた弓の弦を緩めてしまう。

「幸奈ちゃん・・・本当なんだね・・・」

「まさか、幸奈が敵になつてたなんて・・・」

どうして、ここにいるのか。どうして、こんな所にいるのか。

何故、私の前にいるのか。その全てが、幸奈には分からなかった。

何より、信也が立ちはだかつているという事実が、幸奈に大きな衝撃を与えていた。

「どうして・・・皆・・・だつて・・・」

「幸奈、お前は知らないだろうけどな、あの街には秘密の御役目があるんだ。俺たちは、その御役目って奴をやってる。そして、お前達が狙っている奴を守る為に、ここにいます」

「待て、そいつはこの世界を殺す事が出来る力を所有していると聞いた。そんな奴を、お前達は守るっていうのか？」

佐奈が、信じられないとでもいうように、そう聞いてくる。

「何も知らないくせに・・・!!」

そんな佐奈の質問に、優は怒りの形相を持って睨みつけた。

そんな優をなだめるように、雅が優の肩に手を置く。

「確かにアイツは神を殺す力を持つてるよ。だけどな、あいつは、この世界を守る為にここに来たんだよ!アイツ自身、自業自得って言うてるけどな・・・それでもあの仕打ちはないだろ!」

今、千景たちは、防人たちと戦っている。何故、世界を救おうとしているのに、襲われなければならない。

「なんで、世界を守った筈のアイツが悪役にされなきゃなんねえんだ。なんで世界を守ろうとしているアイツがあんな目に合わなきゃなんねえんだ。おかしいだろ・・・なんでアイツだけがあんな辛い目に合わなきゃいけないんだよ・・・俺たちが言えた事じゃねえけどよ。アイツは何も間違った事しちやいないだろうが!!」

信也の怒号に、襲撃者たちは、呆気にとられる。何を言っているのか分からないからだ。

世界を守った？それは一体いつの話だ？そんな突拍子もない話を
出されても、理解できない。

だが、不思議と幸奈は理解していた。

「・・・そう、私が知らない間に、そんな事があつたのね・・・」
「・・・このまま引いてくれれば、俺たちは戦わなくて済む。頼む、引いてくれ」

信也は、幸奈にそう頼む。

確かに、ここで戦って、利益なんてないかもしれない。

だけど――

「・・・ごめんなさい。それは、出来ないわ」

首にある、毒薬入りの首輪が、それを許さない。否、それ以前に、幸奈は、自分の罪を償う為に、ここに立っているのだ。

アモルによって洗脳されていた事で、正気に戻って、第一に自分がした事を思い出した。

そして、決めたのだ。この力を、この、『黒百合』の力を、世界を守る為に使うと。

「たとえば、世界を守る為といっても、彼が神樹から力を奪える事には変わりない。何かの手違いで、神樹の力を全て奪い取って、神樹を殺しかねない。そうなれば、この世界は終わってしまう。だから、ごめんなさい」

幸奈は、構える。

「ここは、引けない」

幸奈は、真つ直ぐに、信也たちに向かって、そう言い切った。

その言葉に、応えるように、他の襲撃者たちももう一度構えなおす。

「何言ってるんですか、千景さんがそんな事・・・」

「しないとは言いい切れない、でしょ？優ちゃん」

「え・・・」

『ちったあ落ち着けよ馬鹿。どつちにしろ、切羽詰まったらアイツが神樹から力を奪う事には変わりねえんだからよ』

虚が、そう諭すように優に言う。

優は、その言葉に、激しく歯噛みするも、渋々と了承する。

「どうする？信也」

白露が聞く。

「・・・幸奈は俺がやる」

「そっか・・・わかった。出来るだけ集中できるようにするよ」

白露は、手の先から鋭い爪を露出させ、構える。

海路は狙撃銃の引金に手をかける。

雅は鉄扇を閉じ、能力発動の為に構える。

優は空手の構えを取り、信也は、深く身を沈めて、突撃の構えを取る。

千景、真武郎、冬樹は防人と、信也、優、白露、雅、海路は幸奈たち襲撃者と。

それぞれ、激突する。

救導者VS防人&襲撃者

正道明日香。

幼少期より、親より聞かされた勇者という存在に憧れを抱き、常日頃から異常なほどに体を鍛えてきた少年である。

その鍛え方はまさしく普通の学生の域を超えており、逆立ちで腕立てをするほどである。

さらに、運動神経も他人よりすさまじく、喧嘩でも負けた事が無い。ただ、それ以外はからつきしで、成績は常に最底辺だった。それでも親は彼を見捨てる事はせず、常に最上の愛をこめて彼を育てた。そんな彼に、大赦より招集がかけられたのは、まさしく彼の運命を左右するに至っただろう。

当時、大赦では『防人計画』というものを立てており、その為に必要な元勇者候補たちを集めていた。

その中にいる男子数名を選抜し、『悪魔』と契約させて、防人たちの生存率を上げる為の企てを、乃木及び白鳥、そして足柄辰巳は画策した。

そして、その中で最も悪魔との相性が良かったのが——勇者適性率0%だった、正道明日香だった。

故に——

「ウオラアア!!」

「くッ!」

大剣を振るい、冬樹を追い詰める明日香。

否、そう見えてるだけであって、冬樹は明日香の射程の外から様子見をし、反撃の糸口を探っているのだ。

それに明日香が追い縋っているだけだ。

(攻撃が途切れない・・・どれだけ底なしの体力なの・・・?)

なかなか明日香の攻撃に隙ができない。明日香の攻撃は、一見雑に見えて、かなり洗練されているのだ。一刀一刀に最大限の力が込められており、一足一足の踏み込みが深く思い切りが良い。

このまま後手に回り続けていけば、やられる。隙が無いのなら、作るしかない。

ここで冬樹は初めて構成に出る。

振り切られた右手の大剣。その瞬間に冬樹は左の剣が迫るのもお構いなしに踏み込む。

「ッ！」

それに目を見開く明日香だったが、構わず刃を左から薙ぐ。

迫る刃。対し冬樹は刀を、迎え撃つように振るう。同じ左からの薙ぎ、交差法。刃と刃が衝撃を巻き散らし、両手で振っている筈の冬樹の一撃よりも、明日香の一撃が上回っている。だが、一瞬だけ、その勢いがそがれる。その一瞬で十分。その間に冬樹は明日香の腹に蹴りを一発叩き込む。

「ぐッ!？」

うめき声をあげつつ下がる明日香。その一瞬の隙の間に、冬樹は自身の御神刀『水誠刀』の能力『水』の力を発動する。

『水刃』

水をチェーンソーのように振動させて、万物を両断する高周波ブレード。

だが、その本当の思惑は、リーチを伸ばす事。

『水蛇』ッ！」

突きの構えから、僅かに距離を空けた状態で、刀を突く。すると、纏われていた水が蛇のように伸び、明日香に向かって迫る。

さらに、それは突然、木の枝のように分裂し、計四つ、水の刃が明日香に迫る。

だが――

「うおらア!!」

一重に明日香が大剣を振るえば、その実体無き刃は切り裂かれ、やがて地面に落ちて染みていく。

「やっぱり……操作が出来ない」

本来、切り裂かれたとしても、冬樹が操った水は未だ冬樹の支配下だ。本当なら、あの水は空中でもう一度明日香を狙い、貫くはずだっ

ただ。

だが、あの剣に斬られる。否、触れた瞬間、繋がりそのものが絶たれたかのように動かせなくなった。

つまりは、そういう事だ。

(あの剣には、私たちの能力を無効化する力が備わっている・・・!!)

冬樹は、そう推察し、そしてまたそれは、正解だった。

明日香が契約した悪魔は『正』。

能力は、『ありとあらゆる現象を、本来の姿、形に正す』。

神によつて起きた奇跡を正し、妖怪の手によつて変えられたものを正し、また、人間の手によつて変えられてしまったものを、正す。

ありとあらゆる、この世界となんの関係もない、あまねく全ての『異能』『超常』『魔法』全てを正して無効化する。

変えられてしまったものを、正す、人類の新たな切り札。神によつて変えられた世界さえも正す事の出来す可能性を秘めた、新たな希望。

それが、明日香の力。

「へへ、どうした。もうおしまいかア!？」

「まだ、まだ、行ける・・・!!」

明日香と冬樹が同時に地面を蹴り、ぶつかる。

一方で。

放たれた漆黒の矢を、千景は苦も無く弾く。

だが、その間に接近してきた銃剣使いの攻撃が、迫る。

「オツラア！」

二重人格者、山伏しずく、その裏人格たる『シズク』の荒々しい攻撃を、『文字連鎖イデオムチェイン』によって変化した刀によって捌く。

突撃そのまま後ろにすれ違っていく。

「チツ、夕海子！」

シズクの後ろから、今度はブロンド髪の少女がやってくる。武器は同じ銃剣。しかし、今度は銃弾を放ってくる。それを体を僅かに移動させてかわし、次に来る銃剣による突きを刀の腹で受け止める。しかしそのまま押し合いに発展させず刃を滑らせて後ろに受け流す。

「——『鎖刀』」

続けて刀を変化させて、その形状を鎖に繋がれた双剣へと変える。

そして、右半身を前にした状態での背中から奇襲してくる、楠芽吹の攻撃に備える。

芽吹は、近くにあるコンテナの上から、銃剣の刃を振り下ろす。

それに対して千景は反時計回りに回転、左の刀で迎え撃つ。

「ハアツ!!」

「セツエイツ！」

刃一閃、反撃一閃、刃が交錯し、火花を散らす。

芽吹は着地待たずにそのままの状態から蹴りを放ち、それを千景は左足を軸に今度は時計回りに体を回してかわす、そのまま芽吹の鎖骨と首の間に刃を突き入れようとするが、何時取り出したのか腰に常備されていたナイフを抜いて防御。地面に着地、銃口を千景に向けようとするがそれは未だ密着したままの千景の左手の刀によって動きを阻害されて不可能。であるならば下がって撃つ。

距離を取った芽吹が、銃口を千景に向け、その一連の動作の前に千景は『文字連鎖イデオムチェイン』を発動し、『刀』から『砲』へ変更。その手に拳銃を出現させ、芽吹に向ける。さらにもう片方の手で後ろから接近してくるシズクに向かって発砲。

「うわっ!?!」

その隙で芽吹が発砲、一拍遅れて千景が反撃の一発。

二つの弾丸がすれ違い、千景の弾丸は芽吹の右肩の装甲を吹き飛ば

し、芽吹の弾丸は千景がよろけるようにかわした事がかすりもしなかった。

(まずは分散させて各個撃破・・・といきたいが)

千景はその武器を鎌に変化させて、飛来してきた黒い矢を弾き飛ばす。

千景はそちらに視線を向ける。

そこには、積み上げられたコンテナの上で堂々と弓を引く少年の姿があった。

(あの狙撃手が邪魔だ)

現在、千景は芽吹、夕海子、シズクとあの弓兵と四体一で戦っていた。

あの明日香と呼ばれていた少年とは冬樹がサシでやりあっており、真武郎は大槍を持った少年と楯の少女、そして銃剣を持っているあの爆撃を生き残った少年とやりあっている。

本当なら、もう少し引き受けても良かったが、目の前にいるこの四人の連携や個々の強さが、その余裕を削り取っていた。

「隙あ——」

「ねえよー」

「きや!?!」

鎖を飛ばし、コンテナの上で背後をとっていた夕海子の放った弾丸を弾き飛ばしそのまま鎖を叩き込もうとしたが、後ろに倒れ込むようにかわされる。

最後に「ふぎゅ」とおおよそ少女らしからぬ声が聞こえた気がしたが、この際無視して、最も警戒率の高いに芽吹へ視線を向ける。

案の定、芽吹は突進してきた。その銃口から二、三発、発砲し、追撃に銃剣を突いてくる。

最初の弾丸を鎌で叩き落とし、次の銃剣による刺突を鎌の柄で反らし、罅迫り合いに持ち込む。

「・・・答えなさい。貴方たちは一体何が目的なの!？」

「端的に言って異世界の神の打倒及びこの世界の防衛、かな。本当ならお前らとも協力したいところだがな・・・」

「そりやいいわね。私もそう思っていたところよ！」

芽吹が千景を押し返す。

「だったらこんな事してないでさっさと撤退してくれると嬉しいんだがな!？」

「そうしたいところだけど、貴方を捕えないといけないから、大人しくお縄につけ！」

「それで終わるならいいんだけど、お生憎様、今はそういう訳にはいかない！」

「だったら交渉は決裂よ！」

「まだ予知はあると思うんだがな!？」

芽吹の銃剣と千景の鎌が火花を散らしてぶつかり合う。

「オラアッ！」

「ッ」

コンテナの上からシズクが襲い掛かる。千景はシズクが振り降ろしてくる銃剣の切っ先を鎖を巻きつけた左手で弾き飛ばし、そのまま右手のみで鎌を薙ぐ。シズクは転がってその射程から逃れる。

「チッ！隙がねえっ!!」

「落ち着いてシズク、この人数差よ。必ず隙は生まれるわ」

「そうなる前に俺がお前らを倒してやんよ」

千景がそう言い切った時、背後から殺気を感じた。

「倒されるのはお前だ。阿呆が」

「ッ!？」

放たれる無数の漆黒の矢。

『カウンターシールド
『鎖撃結界』ッ!!』

鎖が渦を巻き、矢を弾き飛ばす、が、その内の一矢が、千景の肩を貫く。

「グッ!？」

(いつの間に・・・!?)

予想外の事に、千景は目を向いた。

「まずは一撃だ」

そこには、眼鏡をかけた大弓を持った少年が立っていた。

亜門優理。

大赦の名の知れた赤嶺と並ぶ名家、亜門家の子息であり、幼少より英才教育を受けてきた才児。頭脳明晰、容姿端麗、運動万能の三点セットで、右に並ぶ者はいない存在だった。親の期待を一身に背負い、常に完璧であり続けた、一人の少年であった。

しかし、そんな優秀な彼でも、素質はあっても勇者になる事は出来なかった。

理由は無く、ただ単純に、神樹に選ばれなかった。ただ、それだけ。彼は何も気にせず、ただ受け入れるだけであつたが、もし、と思う事はあつた。

そんな彼に、ある機転があつた。

大赦が立案した、『完成型勇者計画』。

先代の端末を後継に継がせるという計画に、優理は呼ばれた。

それは、過酷なもので、当初数十人もいた候補者たちは、一夜にして、その大半が減らされていった。

そして、選抜が続いて、最終選抜の時、優理は、他の追隨を許さない程の成績を叩き出していた。彼に次ぐ、楠芽吹と三好夏凜には、迫られていたが、それでも彼が勝っていた。だが――

――どういふ訳か、最後まで残つた三人の中で、最も成績が低かつた夏凜が選ばれた。

ありえない、と優理は思った。

優理は、この人生を全て、己の為に使つてきた。親の期待など関係無く、ただ自分の為に、使つてきた。だが、負けた。平凡も良い所の、ただの努力家である、三好夏凜の負けたのだ。

何故、自分が負けたのか。それが一切、分からなかつた。

だから、納得できず、芽吹と共に直談判をした。だが、当時、最終選抜をした本人である、六道翼と勝負をして、二体一、それも相手は片腕と片目が見えないというハンデがの上で、完膚なきまでに叩きのめされて、こういわれた。

『君たちが、夏凜ちゃんに負けた理由が、さっぱり分からないなら、残

念だけど君たちには彼女の勇者システムを継がせる訳にはいかないよ。楠さん、亜門さん』

六道家における、苗字呼びは、相手を軽蔑した時にのみ、使われる相手の呼び方であり、そして改めて優理は、自分がただの秀才で、六道翼は本物の天才だという事を思い知らされた。そして、また、夏凜の合格に、まだ納得がいかなかった。

そうして数ヶ月、親に見放されて生活してきた中、また大赦から呼び出しがあつた。

それが、防人計画。結果——彼は悪魔と契約した。

亜門優理が契約した悪魔は『霊子』。

空気中に漂う、別次元の原子、『霊子』を操り、物理限界を超えた動きと、霊子による攻撃を可能とする、万能型能力を有する悪魔。

「——貴様を滅却してやろう」

「あ、そうかよ・・・」

千景は、穿たれた傷口に鎖で止血を施して、鎌を構える。

「悪いが、そう簡単にやられてやるつもりはねえよ」

千景は、その笑みを崩さず、襲い掛かる敵を迎え撃つ。

「オオオオオッ!!」

「うぐお!？」

猛烈な槍のスイングに、真武郎は思わずさがる。

「ぬうううんッ!!」

「その掛け声、は、中学、生が、出す、ような声じゃ、ないと、思うんだが!？」

途切れ途切れに真武郎は激しい翔真の連撃を、その射程に外れつつ

かわしまくる真武郎。

「なんのこれしき、俺は農家の人間故に、こんな掛け声でなああ!!」

「元気がいい事は大変よろしいこと、で! だけどオジサンにとってはその暑苦しいテンションは勘弁願いたい、ね!」

「ぬあ!?!」

反撃の一刺し、しかし、そお一撃は脇をすり抜けてかわされる。

「なかなか当たらないな」

「うおおおお!」

「チツ!」

さらに、コンテナの上から奇襲してくる一人の少年。銃剣の一撃をバックステップでかわし、槍を薙いで反撃する。

「うわああ!!」

だが、そこで悲鳴をあげて楯をもった一人の少女が割り込んできて、少年への反撃を容易に防がれる。

「くそツ!」

「助かったよ雀!」

「ひいいい!」

感謝する少年、羽村昴がすぐさま走り出し、それに追従するように加賀城雀も走り出す。

「セエイツ!」

「ぐおお!?!」

その間に翔真が真武郎に向かって大槍を振り下ろしてくる。その重い一撃を真武郎は正面から受け止める。

「ぬぐ・・・重い・・・!?!」

「我が父直伝の、鍬打ちだ!」

「舐めるな、よ!」

片足を挙げた真武郎は、そのまま地面にその足を叩きつける。

次の瞬間、翔真の足元が爆発、吹き飛ばされる。

「ぐあああ!?!」

「翔真!?!」

「翔真さん!?!」

吹き飛ばされて、地面に叩きつけられるも、翔真はすぐさま立ち上がる。

「心配するな！まだいける！」

「頑丈な奴め……」

「それが取り柄だからな！だが明日香には敗ける！ワツハツハ！」

高笑いをする翔真。

「笑い事じゃないよ翔真！」

「うむ！分かっている！」

構える翔真。

「そちらが能力を使ったのならば、俺も使わなければ失礼というもの」

「こんなオジサン相手に礼儀はいらないんだけどね」

「であつても遠慮なく使わせて頂く」

槍を手の上で踊らせて、突如謎の構えを取る。するとどうだ？

動きに呼応するように地面が盛り上がった。

「な!？」

「喰らえ！『ダブルハンマー』 ツ!!」

巨大な二つの土の拳が、左右から真武郎を襲う。

「チツ！」

それに対して、真武郎は槍を一瞬のうちに振り回す。その切っ先が土の拳に直撃した瞬間、爆発して木端微塵になる。

『ボムエンチャント
爆撃付与』

「ぬう……」

それを見て、唸る翔真。

前田将真。

白鳥家所有の土地の農家に生まれた長男。

彼を筆頭に、その家は子宝に恵まれており、彼を筆頭におおよそ八人の子供に恵まれていた。しかし、家は裕福とは言えず、いたって平凡。しかし八人の子供を養うには、いささか無理があった。

故に、翔真や他三人の上の弟たちは必然的に家の手伝いをする事になつてしまつていた。

そんな時に、大赦から召集がかかった。その時、翔真はある一つの条件を出した。

『家に生活にする事において、不自由のない程の援助をしてほしい』と。

防人計画において、使い捨て、という前提条件があったが、悪魔との契約が可能な者でもあったために、それは飲まれた。故に――

翔真が契約した悪魔は『土』。

大地と密接にかかわっていた翔真だからこそ扱える悪魔であり、その能力は、土に関するありとあらゆる超常を引き起こす。

その能力は、大地を踏みしめる『舞い』によって強化される。

『ロックバレット弾 岩』ツ!!』

舞いを舞い、岩石を叩き出し、大地を踏みしめ、その岩石を弾丸の如く放つ。

「爆ぜろ」

それに対して、真武郎は左手を前に出して、その掌から爆発を引き起こし、礫を全て吹き飛ばす。

爆風に思わず顔を庇い、それによって視界が一瞬遮られる。

爆発によって巻き起こった黒煙の中から、真武郎が飛び出し、翔真に接近する。

「しまっ……」

「悪いねッー」

そのまま隙だらけの翔真の腹に槍を突き立てる、その寸前。

「うわああああ!!」

雀が泣きながら割り込んで、槍を受け止める。

しかし、その槍には未だ『ボムエンチャント爆撃付与』が発動したままなので、切っ先が擦れた瞬間、爆発を引き起こし、吹き飛ばされる。

「ぎゃああああ!!」

「うぐあああ!?!」

耳をつんざくような悲鳴が響くも、どうにか二人は無事。

しかし、それでは終わらない。舞い上がる黒煙の中、真武郎の横から、昴が銃剣を突いてくる。

「うおおおおー!」

「ぬあ!?!」

不意打ちにおどろきつつもバックステップでかわす真武郎。だが、避けられたと悟るや否や、昴は銃剣の銃口を真武郎に向けて、引金を引く。

「うおおあ!?!」

顔を傾げる事で難を逃れる。そのまま無理な態勢のまま、真武郎は昴を蹴っ飛ばす。

「うぐあ!?!」

蹴り飛ばされた昴は地面を転がり、翔真たちの元へ。

「大丈夫か昴?!」

「ああうん大丈夫大丈夫。ちよつと腹に響いてるだけだからね、うん」
どうにか起き上がり、無事だという事を伝える。だが、腹にくる鈍痛はかなり痛そうだ。

「ひいいい、楯まだ壊れてないよね? ひびとか入ってないよねえ!?!」

「安心しろ雀、ヒビは入っているが壊れてはいない」

「ひいいい!?!じゃあ次で終わりつて事じゃん!?!助けてええええ!!メ
ブウウウ!!」

やはり悲鳴をあげるのは雀であり、翔真がいった通り、楯には先ほどの爆発によってヒビが入っていた。

御神刀は、人間自体は傷つけないが、物は破壊するのだ。

その間に、真武郎は構える。

「来なよ。引けない理由があるんだろ?」

その額に冷や汗を流して、真武郎は告げる。

(さあて、向こうはどうなってるかなあ・・・?)

脚は、体全身を支える為に、腕の三〜四倍の力を有していると言われている。

さらに、ボールを蹴るなど、常に足を酷使するスポーツであるサッカーをしている者の脚力は、いかようなものになっているのか。

答えはこのすぐ後。

拳と脚が衝突する。

「ぐっあ・・・」

「オラアッ！」

拳に激しい衝撃が走り、苦悶に顔を歪める幸奈。そこへ、すかさず、直蹴りを繰り出した右足を引っ込めつつ体を回し、左足で回し蹴りを幸奈の顔面に叩き込む。

幸奈は、間一髪のところまで右腕で防ぎ、同時に吹き飛ばされる方向にわざと飛んで威力を削いで吹き飛ばされる。

讚州市公共の道路の上で、幸奈と信也は激突していた。

格闘技で戦う幸奈に対して、信也は足技のみ。しかし、筋力^{パワー}で圧倒的に劣っている幸奈は、今まさに押されていた。

『馬兎蹴』^{バットキック} ツ!!!」

まるでバットを振るうかのように薙がれる右足を、幸奈は交差させた両腕で防ぐ。

しかしすかさず飛び上がった信也の両足の連撃が襲い掛かる。

『魔進銃蹴』^{マシンガンキック} ツ!!!」

「く、うう・・・!」

どうにか捌き防いでいく幸奈。

「どうした!? その程度かよ!」

「そんな訳、ないでしょ!!」

左手に黒風を集束させ、圧縮、それだけで、風の爆弾の出来上がり。

「ハアッ!!」

「ッ!」

風圧の爆弾を持った左手による掌打。

それに対して、信也はその左手に右足を叩きつけて、大きく後ろに跳んだ。

(蹴ってショックを・・・!?)

衝突の際の衝撃を、全て足のバネを使って殺したのだ。

地面に着地した信也は、そのまま地面を蹴って、幸奈に突っ込む。

「ッ！」

迎え撃つ幸奈。信也はすさまじい速度で蹴りを連続で繰り出す。

「オラオラオラアツ!!」

「せつええええいッ!!」

互いに拳と脚がぶつかり合い、衝撃が巻き散らされる。

「オツラアツ!!」

「ッ!?!」

何度か打ち合った後、信也は左足を幸奈の顎目掛けてサマーソルトキックを繰り出す。

それをすれすれでかわす幸奈だが、風圧が襲い掛かり、仰け反った体に負荷がかかってバランスを崩す。

だが、追撃させない為に信也の背中に風を叩きつける。

「ぐう!?!」

案の定吹き飛ばされるも、信也はすぐさま態勢を立て直して靴底を擦り減らしながら地面に着地。

(追撃を阻止された)

(かわしきれなかった)

一瞬の思考、のち、駆け出す。

反応が遅ければ、やられる。

だから、考えるのは一秒以下にして考える。

「オオオオオオツ!!」

咆哮が炸裂し、信也が左足で飛び蹴りを放つ。それに対して幸奈は右手で迎え撃つ——と見せかけて信也の脚を抱え込み、回転して投げ飛ばす。叩きつける筈が、信也は態勢を立て直して吹き飛ばされた先の壁に着地、そのまま蹴って幸奈に向かって飛来。弾丸の如く迫る

信也に幸奈はギリギリまで引き付けて飛び上がり、上空から拳で叩き落す手段に出る。目論見は成功。信也は地面に叩きつけられる。アスファルトが砕かれ、呻き声を挙げる間もなく幸奈は信也に馬乗りになり、そのまま拳を叩きつけようとする。だがその前に幸奈の首に信也の脚が組み付き、無理矢理引きずりおろす。そのままブレイクダンスしながら逆立ちになって、踵落としを振り下ろし、それを幸奈は横に転がってかわす。

アスファルトがさらに砕かれる様子に恐怖を感じつつ、幸奈は信也を睨み付け、また信也も幸奈を睨みかえる。

(なかなか攻めきれない・・・!!)

(懐に入れない・・・!)

互いに攻めきれない事に歯噛みする。

しかし、幸奈の中にあるのは、ある意味の清々しさだった。

(ああ・・・信也君が、私を蹴り飛ばしてくれて・・・)

稲成幸奈。

彼岸花の章リスにおいて、千景にこれまでにない程の執着を見せた少女。

だが、その本質は、ある特定の人物の間違いを正そうとした副産物に過ぎなかった。

そう、千景はあくまで防衛対象。本当に幸奈が見ていたのは信也だったのだ。

幸奈にとって、信也は光だった。

親に捨てられたショックで塞ぎ込んでいた幸奈を、一番に励ましたのが信也だったのだ。だけど、それがある日、突然変わってしまったのが、千景が百合籠に来てからだだった。

人が変わったように千景を虐めるようになってしまった信也を、どうにか止めたかった。

だから、幸奈は信也と対立した。そんな溝を作ったまま、幸奈はアモルに引き取られてしまった。

それから、ずっと会っておらず、また、アモルの洗脳によって、幸奈の認識が変わってしまった。

神樹によって千景の事を頭の中からすっぽりと抜かれてしまった幸奈ではあるが、それ以外の記憶はちゃんとあった。

だから幸奈は、ほっとした気分になっていた。

間違っていた事をしていた事に対する、罪。

その罰が、彼なのだと、幸奈は確信していた。

だけど、それでも、負ける事は許されず、幸奈は信也を殴らなければならぬ。

だから――

(もつと、もつと私を傷つけて。私の間違いを、あなたの蹴りで正して。私を、徹底的に虐めて・・・!!)

もはや一種の被虐性質になってしまった幸奈は、信也に蹴り飛ばされるために殴りかかっていた。

空中に無数の剣を装填し、それを一気に射出する弘。その先には、今ビルを飛び上がっている雅の姿があった。

「喰らえッ!!」

殺到する無数の剣。それを雅は鳥、否、鳥ともいえぬ凄まじい空中機動力で全て躲し切った。

「重力展開」
グラビティオン

躲し切った雅は反撃と言わんばかりに自身の周囲に黒い球体を展開する。それら全てが、強力な重力によって作られた、ありとあらゆる全てを喰らうブラックホール、光さえも喰ってしまう、宇宙の絶対危険地帯。

「『重力砲』ッ!!」

それを、雅は指向性を持たせて解放。全てを飲み込む闇の光線が、弘に襲い掛かる。

「くっー」

弘はそれを体を捻る事でかわし、ならばと思い、剣を呼ぶ。

大赦の計らいによって、襲撃者たちは神樹より、それぞれに合った

精霊をその身に宿している。

それによつて、以前よりも強力な力を振るう事が出来るようになって
いる。

故に――

「――『万海灼き祓う暁の水平』ツ!!」

それはシユメールの戦の神ザババが使用した、『水平線』の概念を持
つ大剣。

そのサイズは尋常では無く、巨人であつてもまともに振れるかどう
かわからない程の巨大さを誇っていた。その本体からは、炎が複数の
刀身を形成しており、まともに喰らえば、まず間違いなく消し炭にさ
れてしまう。

「なぬツ・・・!?!」

その巨大さに目を向く雅。

「薙ぎ払うツ!!」

弘が腕を振るえば、炎の大剣は、雅に向かって振り下ろされる。

「くつ、だったら――」

しかし雅も反応が早い。

「重力展開――黒刃・断割ツ!!」

閉じた鉄扇に重力を集束。光が喰われ、鉄扇の周囲が黒くなる。さ
らに、その範囲が拡大し、雅の体の二倍の大きさになる。

「アアアアアツ!!」

絶叫と共に、全てを焼き尽くす、暁の大剣に向かってその黒刃を叩
きつける。

炎が全て黒い大剣に吸い込まれ、拮抗を生む。だが、吸い込みきれ
ない。

「まづつ・・・!?!」

あまりのエネルギー量に、黒刃の吸収が間に合っていない。

「だったらあ!!」

雅は、さらに黒刃を生成、それを暁の大剣に叩きつける。

すると、『万海灼き祓う暁の水平』が、その勢いを弱める。

そこへ雅はすかさず『重力砲』を叩き込んで弾き飛ばす。

「くッ!？」

その衝撃に思わず吹き飛ばされる弘。だが、それで追撃をやめない弘ではない。

「扉を開ける、宝物庫ッ!!」

次の瞬間、弘の周囲に空中に穴が空き、そこから剣の刀身がその身を覗かせる。

「重力展開グラビティオン——重力砲ッ!!」

対して雅は無数のブラックホールを作り出し、その標準を全て、弘に向ける。

「喰らえッ!」

「落ちろオ!」

剣と重力が、空中で衝突する。

ビルの中を、佐奈は自身の瞬足を持って駆け抜ける。

そんな佐奈に向かって、突如、壁、天井、地面から『射』の文字を備えた光の輪——砲門が出現。

その砲門から、光の弾丸が飛び、佐奈を襲う。

「くッ!」

その計三発の弾丸を巧みな動きで全てかわして、佐奈は新幹線さながらの俊敏さを持って、ビルの廊下を駆け抜ける。

(遮蔽物、例え視線を遮ってもどういう訳か正確に私の位置を割り出して射撃してくる——どういう事だ・・・?)

そんな中で、佐奈は考えていた。

六道家での訓練によって培われた勘と身体能力によって、どこからともなく飛来してくる射撃をかわしている。

「建物に逃げ込んだつもりが、逆に追い詰められたか・・・」

やはり、襲撃者のリーダーだからか、彼女は至って冷静だった。

「打って出るか」

しかしその様子は、あらかじめ撃ち込まれた『射』の能力によって

筒抜けだった。

「来るか・・・」

狙撃銃を、佐奈が逃げこんだビルに向け、うつ伏せに倒れている海路。

彼の使う御神刀『射墮填』の能力の元である『射』の能力によって、『目』と『耳』をビルのそこらじゅうに『射』ちこんだのだ。

だから、佐奈の動きは筒抜け・・・の筈なのだが、佐奈の走る速さが尋常では無く、事実、音しか拾えないのだ。

海路の打ち込んだ『目射』は、いわばただ映像を映し出すだけの監視カメラ。スローどころか録画も出来ないのだ。

だからこそ、海路は冷静に佐奈の姿をどうにか捉える事出来た位置に向かって『銃口』を飛ばす。

狩るか、狩られるか、そんな勝負を、二人はしている。

接近される前に撃ち抜く事が出来れば海路の勝ち、接近する事が出来れば佐奈の勝ち、ただそれだけで、この戦いの全てが決まる。

二人の戦い方は、そんな感じなのだ。

「ううううああああああ!!」

真斗が振り上げたハンマーを、白露はその俊敏さを持つてかわす。

ここは信也と幸奈が戦っている場所とは違う道路。

その路上で、真斗と白露がぶつかっていた。

真斗の力は、かの雷神の下位互換。だがそれは人間にしてみれば、十分脅威となる力。

一方の白露の力は、『虎』の力であり、密林の覇者の力。こと俊敏さとパワー、そしてテクニックにおいて、凄まじい能力を發揮する。

さらに、野性の勘も相まって、白露は、真斗の強力で速い攻撃をすべて間一髪でかわしていた。

右斜め上から振り下ろされる鉄槌を、白露は真斗の右脇に潜り込んで、その脇腹に爪を立てる。

だが、応えている様子が無い。

真斗が、あまりにも痛みに対して鈍いのだ。
だが。

「オオオオオッ!!」

走る走る、速く走る。虎の、神速にまで達する速さでもって、真斗を翻弄する。

真斗が反応出来ない速さで、真斗の体に爪を立てていく。

だが、真斗の学習能力は、常軌を逸していた。

「そこッ．．．!」

「なッ!」

たった五撃。それだけで真斗は白露の速さを見切って今攻撃しそ
うだったその右腕を掴んだ。

その反応も凄まじき事この上なく、しかし驚いたのは一瞬。このま
までは右腕が握り潰されてしまう事を悟った白露は足を振り上げて、
真斗の顔面に強烈な蹴りを叩き込む。

「ヴっ．．!」

それによつて真斗の手が離れ、その間に白露は距離を取る。

そして、白露は、相性の悪さを痛感していた。

(コイツ．．雅姉に任せるべきだった．．)

雅の能力なら、真斗に有効な攻撃を与えられるかもしれない。か
つた。

だが、それをいままさら考えても仕方が無い。

「コイツとぶつかったのは私の運の無さが原因。でもコイツとぶつ
かった以上、やらないのは七つの大罪の名折れだよね!」

白露は不敵に笑つて、真斗に向かって、神速を持って飛ぶ。

それに対して真斗はハンマーを振りかぶる。

雷鳴がとどろき、虎が駆け抜ける。

そして——優は一方的に攻められていた。

殺気ของการ操作によつて、位置を掴ませぬ美紀は、持ち前の速さと殺し
の技術を持って、優を責め立てていた。だが、硬い。

(なかなか刃が通らない・・・)

その事実には、美紀は少なからず驚いていた。

優は、腕を交差させてその場に仁王立ちしているだけで、避けようとしていないのだ。

それが証拠に、優は未だに微動だにしないのだ。

さらに、美紀が何度も斬撃を叩き込んでいるのに、優の体には、一行に傷がつかない。

まるで、その体が鋼であるかのように――

(体は、鋼。何者にも、壊されない・・・!!)

それは実際その通りであり、優の御神刀『虚像布』の能力でもある。椿の御神刀であった優の御神刀は、布を纏う事で、ありとあらゆる能動的行動を補助し、物理保護を促す力を有していた。

しかし、創代によって別の形に強化されたこの虚像布は、優の身体能力を、椿のものへと変化させ、さらに、その鋼の体の硬度を底上げしているのだ。

故に、優の体には傷は一切つかない。だが、椿最大の強みである『自動反撃』オートカウンターは、未だに発展途上であり、まともな反撃は出来ない。

だが、敵の動きを見切る時間は、ある。その打たれ強さゆえに、相手の攻撃に耐える事が出来るからこそ、強み。

『覚えたかア?』

「うん、もう大丈夫」

防御の構えを解く優。そこへ、美紀は飛び込む。

狙うは、鳩尾。誘いと分かっているとしても、構えを解いた瞬間であるなら、すぐには反撃出来ない筈だ。そんな即決即断する美紀故の結論だが――相手が悪かった。

優の右の手刀が、振り抜かれる。

その瞬間、美紀の右手のナイフが砕かれ、脇腹に鋭い激痛が走る。

「ツウ!」

バランスを崩し、床を転がる。

「もう、動きは見切った。貴方はもう、私に勝てない」

美紀は、空手の独特の構えを取り、美紀を威圧する。

鋼鉄の体を前に、殺人鬼の刃は通らない。

それぞれの場所で、激しい戦闘が繰り広げられている中で、拮抗する戦況。

だが、その拮抗の中では必ず、変化が訪れる。

芽吹の一撃を鎌で受け止め、飛来してくる漆黒の矢に対しては鎖で防ぐ。

されど防ぎきれず結局、動いて躲さなければならず、間に合わずに矢が体に突き刺さる。

足を貫かれ、思わず膝をつく。そこへシズクと夕海子が放った弾丸が飛んでくるので転がってかわす。

誰がどうみても、追い詰められているのが分かる。

体は何度も矢で穿たれ、その度に『鎖』で止血し、失血を抑える。だが、そのささやかな抵抗にも、限界は来る。

しかも、今度の足への矢の直撃は致命的だ。

「諦めなさい」

芽吹が、千景の目の前に銃剣の銃口を向ける。

「これ以上戦っても、無駄に傷を作るだけよ」

確かに、千景は確実に追い詰められており、とてもではないが、勝算は無いに等しい。

どの武器を使おうが、三人の銃撃と一人の弓が、千景を襲い、そして確実にその体を穿つ。

さらに、優理の能力が脅威的だった。

一瞬で別の場所へと移動してしまう瞬間移動、翼の『機関弩』マシンガンボルトの様

に矢を無数に連射してくる射撃、さらに彼の腰に携帯された柄から出る霊子の刃。

そんな武装をした優理の存在があるからこそ、千景は追い詰められていた。

だから、芽吹は彼の降伏を推す。これ以上、戦って欲しくない。これ以上やれば、確実に殺してしまうから。

「……………はっ」

だが、それに対しては、鼻で笑った。

「……………何がおかしいの?」

「お前、考えないのか?ゲームとかよくある、奥の手って奴をさ」

「ッ!?!」

その言葉に、芽吹は目を見開く。

それに、千景はその笑みをさらに深めて、鎌を掲げる。

「今更気付いてもおせえよ」

『行くわよ』

体の中で、郡が叫ぶ。そして、千景は、自身の御神刀『天鎖刈』の力を、開放する。

「真解——『解限咎乃鎖』ッ!!」

その瞬間、千景の装束の金属防具が全て弾け飛ぶ。

天鎖刈の第二の文字は『解』。その能力は、使用者本人の限界突破。身体能力、思考速度、五感、物理限界、人間としての限界を突破する事で、通常じゃありえない行動を引き起こす、千景の奥の手。

巻き起こる、威圧の風圧に、芽吹は思わず後ずさり、夕海子とシズク、そして優理は呆然としていた。

「……………構えろよ」

身をかがめる千景。

「じゃないと、訳が分かんないまま終わるぞ」

次の瞬間、無数の鎖が引き千切れるかのような音と共に、千景がその場から姿を消した。次いで、風圧が巻き起こる。そして——

「があああああ!?!」

「ッ!?!」

「優理さん!?!」

夕海子の目の前に、優理が落下してきた。

それもうつぶせ。何かに蹴り飛ばされたかのように。

どうしてそうなったのか。そう、思考する前に、夕海子、シズクの意識が吹き飛ぶ。

「あつ……!?!」

「何……が……!?!」

何が起きたのかわからず、倒れ伏す夕海子とシズク。

「弥勒さん!?!シズク!?!——ッ!?!」

その異変に芽吹も気付くも、二人が倒れ切る前に、芽吹も、吹き飛ばされる。

「うあああ!?!」

地面を数度跳ね、夕海子、シズクの傍に倒れ伏す。

「ぐ……う……」

「上手く防いだな」

先ほどまで、芽吹がいた場所に千景が立っていた。

芽吹は、意識を保っている。通常、御神刀でやられたのなら、体に損傷はなく、意識だけ刈り取られる筈なのだ。その理由は、御神刀には、相手の精神体のみを斬る状態と、肉体を斬る状態の二つの形態があるからだ。

だが、芽吹は意識を保っている。御神刀の精神喪失を逃れる方法はおおまかに二つ。

まず一つ目は御神刀の攻撃を受けない。これは当たり前。二つ目は、精神が刈り取り切れない程の精神力を発揮する。

後者はほぼ不可能と言っているが、例外がないわけではない。救導者の歴史において、御神刀の精神の刈り取りを耐えきった魔器使いは数知れない。

だが、芽吹が意識を失っていない理由は前者。寸前で千景の攻撃を防いだのだ。しかし、それでも先ほどの攻撃がかなり重かったようで、すぐには立てないようだった。

「さっきの攻撃に対応されるとは思っていなかったが、もう動けない

ようだな」

千景は芽吹に近付く。

「ぐ……」

(この……ままじゃ……)

確実にやられる。そんな恐怖が、芽吹を襲う。

あの日、夏凜に負けて、全て無駄になつてしまつて自暴自棄になつてしまつたあの日から、今日この日まで。

芽吹は、全ての経験が無駄ではなかつたと感じる事が出来た。努力は、必ず結果を見せてくれると、そう実感する事が出来た。だが、それに気付けたのは、果たして誰のお陰か。

(明日香……!)

いつも破天荒で、無茶ばかりをして、バカで、諦めの物凄く悪い、防人の切り込み隊長。

だけど、誰よりも強くて、皆を引っ張っていく、頼れる存在であつた。

だからこそ、芽吹は誰よりも彼を頼つた。

その所為で、彼が大怪我をする事があつた。瀕死の重傷を負う事があつた。その度に、泣いている自分がいた。

そうだ。そうなのだ——

(諦め……ない……!!)

諦めない。諦める訳にはいかない。

(春信さんが……言つてた……三好さんに出来るなら、私にも、出来るはず……!!)

右手には、自分の銃剣。左手のすぐ傍には、夕海子の銃剣。

(借りるわよ。弥勒さん……!!)

突然、千景がその歩みを止めた。そして——

「つア!？」

飛来してきた弾丸を、間一髪でかわした。

「——おいおいおい……」

そして、引きつった笑みを浮かべた。

そこには、芽吹がしゃがんだ状態で、銃剣を二丁構えていた。

だが、その雰囲気は明らかに違っていた。

「……『鬼気・極限羅刹』」

春信と夏凜にしか出来ない筈の、武術の究極系。無意識、無思考で、ありとあらゆる攻撃に対応し、反撃する、全自動戦闘を可能とする力。

それが、『鬼気。極限羅刹』。

「お前、夏凜の従姉妹かなんかか……!?!」

「はっ、笑えない冗談ね」

千景の問いを笑って蹴って、ふと、芽吹は思う。

(こいつ……なんで三好さんの名前を……?)

だが、そう思考する前に、千景が構える。

芽吹も構える。

「……そういや、名前聞いてなかったな」

「……楠芽吹よ。間違っても三好さんの親戚とかじゃないから」

「そうかい。俺は不道千景。救導者だ」

双方睨み合い。

(さて、どこまで行けるかな……)

(速攻で片づける……)

地面を蹴る。

「来いッ!」

「行くぞッ!」

そして、戦況は別の場所でも。

金属音が響き合い、大剣と刀がぶつかり合う。

冬樹が振り下ろした一撃を明日香は左の大剣で弾き、右の大剣で薙ぎ払うも、冬樹はそれを体を水平にして飛んでかわす。巨大な刀身の上を転がり、その回転のままに剣を薙ぐ。その右腕を狙った一撃を明日香は左の大剣を振りかぶった右腕の上に回して、その右脇腹を庇うように構えて受け止める。

防がれたと知るや否や、刀を引いて、距離を取る。

「ハア・・・ハア・・・」

（攻め切れない・・・）

相手の反射神経もさることながら、冬樹の動きを覚えたのか、どんな動きが良くなつてきている。

さらに、あの剣には、御神刀の力を封じる何かがあるようで、能力を使って攻撃しても悉く防がれる。

刃は能力を切り裂き、剣の腹は力を弾き返す。

ただ、御神刀そのものは切れないようで、どうにか拮抗を保っているものの、このままでは、動きを完全に追い抜かれて負ける。ならばどうする？どうやったら相手に勝てる？

「・・・これしか、ない」

冬樹は、刀を、御神刀『水誠刀』を正眼に構える。

「？」

その行動に首をかしげる明日香だったが。

「真解——『水底之武士』みなそここのものものふ」

冬樹が羽織ついていた浅葱色のだんだらが水となり、その下にはノースリーブの浴衣のような服装と、手甲、脛当てのみとなり、その手にある刀は、先ほどまでとは違う、刀としての美しさを放っていた。

「なん・・・っだ・・・!?!」

その、異様さに、明日香は武者震いを止められなかった。

（すっげえ・・・）

同時に、感激した。これほどまでに、凄い存在と戦えることを——

「——行くよ」

そう一言呟いた瞬間、明日香は身の毛のよだつような殺気を覚え、慌てて大剣を掲げた。

次の瞬間、明日香は空中に投げ出されていた。

「——な!?!」

一瞬、何が起きたのか分からなかった。だが、明日香は本能のままに大剣を振るった。

返ってくるのは、熊にでも殴られたかのような衝撃。

同時に、明日香の右腕は大きく跳ね上げられ、さらに空中で軀を回される。

「ぐうお・・・!?」

そのまま、ただ本能のままに剣を振るい、訳の分からないまま飛んでくる攻撃全てを防いだ。

そして、地面に落ちて、すぐに立ち上がる。

「——次元超越——」

だが、冬樹は、すでに明日香の懐に潜り込んでいた。

「しまっ——」

「——『三武斬』」

頭上、右、左からの、完全同時攻撃。

ほぼ同時に飛んでくる三撃の斬撃が、明日香を襲う。

「ぐ——おあ!?!」

しかし、明日香の超人的身体能力は、その三撃の隙を見つけて、どうにかそこに飛び込んで躲した。

地面を転がり、しかしすぐさま立ち上がって冬樹を睨みつける。

(何が起きやがった・・・!?)

明日香には、訳が分からなかった。

先ほどの、完全同時の斬撃。

三発連続でやるならわかる。だが、あの攻撃は、まったく同時に三方向から斬撃が飛んできた。

まるで、別々の次元から攻撃してきたかのように——

「——真解。私達、の、力を、あげる、御神刀の、もう一つ、の力。さつき、まで、私、は、水、を操つ、て、いたけど、今の私は、『武士』、の、力も、ある」

冬樹の真解。

それは、『武』。

その文字は、冬樹の『武術』を根底から底上げし、冬樹の剣技を極限以上に高める事が出来るのだ。

それが証拠に、彼女は今、次元さえも超越して攻撃した。

それが、あの完全同時攻撃。次元すらも超越して、別の三つの次元、および可能性から三撃同時に明日香に向かって攻撃したのだ。

「……へへ」

その答えに、明日香はどういう訳か、笑った。

「つまり、さっきの攻撃は、異能とは全然関係ねえんだな……だったら尚更面白えじゃねえか」

「……貴方、今、の、状況、分かって、るの？ 剣技、じゃ、私、には、かなわ、ない」

「そんなのやってみなきや分かんないでしょーが」

「やら、なくて、も、無駄、諦め、て」

「へっ」

冬樹の言葉を鼻で笑い、明日香は言い切る。

「諦めないのが、俺の勇者道だツ!!」

明日香は、突然、右手の大きい方の大剣を投げ捨てる。

「!?」

それに見開く冬樹。しかし明日香はそんな冬樹を置いて、左手の剣を右手に持ち変え、自身の目の前で水平に構え、その刃に左手を添える。

「ふうー」

深呼吸を一つ。そして、自分の中をめぐる力の存在を感じ取る。そして、その循環を早め、増幅させ、やがて――

――表に出す。

「ツ……!?!」

突然、明日香の姿が変化し、剣を持っていた右手を中心に、何か、がうごめく様に黒い痣が右腕を覆っていた。さらに、こころなしに右肩甲骨あたりから悪魔の羽のようなものが片翼、突き出していた。

そう、その姿はさながら――悪魔だった。

「……この、際、その力の事は、聞かない」

「おう。実は俺もこれがどういふものかあんま理解してないんです

わ。でもまあ……」

身をかがめる剣を持った右手を引く明日香に対して、冬樹はすぐさま正眼に構える。

「この力で、お前を倒すッ!!」

「やって、みろ……!!」

明日香が飛翔する。冬樹が地面を駆け抜ける。

まるでロケットのように突き進む明日香に対して、冬樹は弾丸のように。

刃と刃がぶつかり合う。

爆発する槍を振り回し、真武郎は将真の放つ土の攻撃を凌いでいた。

「どうした!?その程度か!」

「つたく、俺君たちより年上なんだけどなッ!」

飛来してきた岩の弾丸を飛んで躲し、突きあげるかのように盛り上がってくる土の拳を槍の穂先で爆破して砕き、砕けた土がまた真武郎に向かって飛来してくる。それをさらに槍を振り回して破壊しても、今度は銃剣の銃弾が飛んでくる。

「チッー」

それをどうにかという事で防いで、地面に着地する。

「このままじゃ埒があかない……」

数の不利もさることながら、相手の技量も高く、能力も強力だ。このままでは、確実に負ける。

ならばどうするべきか。

「やるつきやないでしょ……」

しやがんでいた状態から立ち上がり、真武郎は槍を改めて構える。

一方の将真たちの方では。

「ま、まだ降参してくれないのおおお。もうやだああああ」
雀は相変わらず涙目で喚いていた。

「ぬう。ここまでしぶといとは……」

将真も細い目をさらに細めて真武郎を睨みつける。

「でも、確実に押しつけて言ってるよ。このまま行けば、きつと勝てる」
昂は、恐怖を振り払うようにそう言いながら、銃剣を構えていた。
だが、そう警戒している間に、真武郎は、この御神刀『爆撃槍』の力を開放する。

その瞬間、周囲を熱気が叩く。

爆撃槍の真解は、使えばこちら一体が更地になってしまうほど強力
で、だからこれまで、一度も使用してこなかった。そして、今回も使
えば、その近くにいる千景や冬樹だけでなく、信也たちまで巻き添え
を喰らってしまう。だから真武郎は、この御神刀の真解を使わない。
だが、能力を最大限使わないとは言っていない。

爆撃槍は、大軍使用で、殲滅力に優れている。放てば、そこにい
る者たちを纏めて一網打尽に出来る反面、仲間まで巻き込んでしまうデ
メリットを背負っている。故に、真武郎は、動きながら戦った。

出来るだけ、二人から離れられるように。

「悪いな・・・お前らはここでリタイアだッ!!」

「ッー」

将真が慌てて土で壁を作ろうとする。

「無駄だア!!」

真武郎が叫ぶ。そう、それはまさしくその通りだ。

打ち込めば、ひとつたび轟音と共に、全てを吹き飛ばす。

「標的確認、方位角固定—— 我は全てを吹き飛ばし、全てを消し去る
者、故に我は不滅也——」

—— 『アンクリア・エクスプロージョン核 爆 弾 頭』、吹き飛びなアッ!!』

瞬間、真武郎がいた廃工場周辺が、吹き飛ぶ。

それは、核にも等しい爆発であり、しかし威力は抑えていたためか、
千景たちの所まで広がらず、ただ、そこにあるもの全てを吹き飛ばし
た。

だが、一つだけ、真武郎が覚悟していた事があった。

それは、自分も爆発に巻き込まれるという事を――

真武郎が引き起こした爆発によつて、地面が揺れる。
些細なものではあるそれは、信也と幸奈には関係無かつた。

「ああ!？」

顔を蹴り飛ばされ、建物の壁に叩き付けられる幸奈。

「く……あ……」

蹴られた胸の前で腕を交差させる幸奈。立っているのがやつとな
のか、足ががくがくと震えている。

一方の信也は……

(な、なんだ……この気持ち悪い感覚は……)

蹴る度に、何故か幸奈の口から悲鳴ではなく嬌声のような声が漏れ
てるのだ。

「は……う……うああ……」

実際それは事実で、幸奈は悦んでいた。もはや変態である。ついで
に言つて折角の雰囲気か台無しである。

「ッ……」

(そうそうに片づけないとまずい事になりそうだ……)

そう思い、すぐに攻撃を仕掛けようとするが。

「だめ……」

「ん……?」

「これじゃあ、ダメ……私は、まだ……罪を……」

気付けば、無風だった筈の周囲に風がそよいでいた。その風は、だ
んだんと強さを増していき、同時に、肌寒さを増していく。いや、実
際に気温が下がってきている。

「な・・・!?!」

それに驚く信也だが、幸奈はすでに準備を終えていた。

「来なさい——『スリウム』」

吹雪が吹き荒れ、幸奈の姿が変化する。

「——ッ!?!」

「ごめんなさい信也君、でも私は、戦わないといけないの・・・!!」

吹雪が吹き荒れる。息を吸う度に、肺が凍りそうになる。それほどまでに、空気が冷たいのだ。

息が白くなる。体に霜が降りる。手がかじかむ。このままでは、凍傷になってしまう。

「幸奈・・・」

「ごめんなさい・・・ごめんなさい・・・」

幸奈は、殴ってこない。しかし、彼女を中心に吹き荒れる吹雪は、信也を徐々に凍らせていく。

そんな、泣いている彼女を前に、信也は・・・

「———そうかよ」

右足を前に出して、叫んだ。

「真解——『炎帝之蹴馬』」
えんていのしゅうば

突如として信也の足元から炎が舞い上がり、火柱となって立ち上る。

信也の御神刀『剛蹴脚』の第二の文字は『炎』。

自身の前に立つ全てを、蹴って焼く、二段構えの攻撃方法を手に入れる。

ついでに、炎のエネルギーによって、攻撃の威力もあがり、その威力は、岩盤をも溶かし砕く。

装束が変化し、黒かったコートが赤くなり、ロングブーツからは、炎がゆらゆらと燃え続けていた。

「しん・・・や・・・く・・・」

「俺にだって、譲れないもの一つや二つはあるんだよ・・・だから覚悟しとけよ、幸奈」

信也は、幸奈に向かって指を突き付ける。

その、死刑宣告とでも言わんばかりの言いように、幸奈は、胸を抑える。

吹き荒れる吹雪の中で、真っ赤な炎が燃え上がる。

それはまさしく命の輝きであり、信也は、今、魂を燃やしてそこに立っていた。

信也が地面を蹴り、幸奈に向かって、その脚を振り下ろす――

それぞれが、それぞれの思いを持ってぶつかり合う。

あまりにも全力で戦っている。

そして、その様子を、眺めている者が一人。

「つくづく、人間というものは醜いですねえ。同じ目的を持ったもの同士で戦うなんて、おろかにも、程があります。そう思うでしょう？ 救導者の巫女、神代奏さん？」

激戦地より、遠いビルの上で、黒いドレスに身を包み、仮面をつけた、金髪の女性。豊かに膨らんだ胸や、髀のラインは、身体にぴったりとくつついたドレスの上からでも十分に見え、扇情的とまで言えた。

だが、そんな事は関係なく、奏は、彼女と対峙していた。

「貴方が、千景君が言っていた、敵の幹部の一人、『憎悪のヒュアツインテ』ですね」

「ええ。私こそが、マジアルクス様の忠実なる僕しもべにして、罪の名を与えられた、使徒の一人、ヒュアツインテです」

仮面の奥で、ほくそ笑むのが分かる。

「ああ、憎い、憎いです。何故このような醜い争いをする生命体がいるのでしょうか？どうして人間などという害虫がこの世を跋扈しているのでしょうか？私にはそれが理解できない。故に私は憎い。この人間という存在が。私も、人間と同じ姿をしている事がこれ以上な程に忌々しい。貴方に分かりますか？私のこの身を焦がすような憎悪を」

「分からないし、知りたくもないわね」

「あら、そう」

瞬間、奏に向かって、いつの間にか真つ黒な剣が飛来してきていた。

「ツ・・・！」

思わず体が硬直する。しかし、その刃は奏に届く事はなく、寸前で弾かれてしまう。

「ふふ、驚きましたか？貴方が、貴女方が信仰する神によって守られている事は知っています。私程度の力では、その結界を破る事は出来ませんからね」

ふふ、とまるで子供のように笑うヒュアツインテ。

奏の周囲には、『完全防御』『絶対不可侵』『不朽』『不滅』などの文字が無数に空中にあらわれ、それがバリアのように展開されていた。

仮面の奥で、笑っているのかは分からないが。しかし、奏は直感していた。

(こいつ・・・笑っていない)

この女から、笑ってる時に感じる、陽気な感覚がしない。むしろその逆。全てを押し潰すかのような、冷たく、深海のような場所にいるかのような、そんな威圧を感じていた。

そう、これこそが、深淵の如し憎悪。ヒュアツインテに与えられた、『憎悪』の名の通り、彼女は、憎悪のままに、感情を燃やしていた。

「ああ、忌々しい、忌々しい。人間がこんなにもいるというだけで、こゝも胸糞が悪くなるとは、思いも寄りませんでした」

美しいとさえと言える、夜景を見下ろしながら、呪詛ともいえない呪詛を吐くヒュアツインテ。

「・・・何故、貴方はここに来たの？」

奏は聞いた。そこまで人間を憎んでいるなら、その眼に納める事さえも嫌う筈だ。なのになぜ、彼女はここにいるのか。

その問いに、彼女は――

「さて、なんででしょうね」

そう、あつけらかんと答えた。

「そう・・・」

あくまで、答えない。

「貴方こそ、まさかそんな事を聞く為にここに来たんですか？」

「冗談、単純な話。貴方が彼らを攻撃しようとしたらそれを阻止する為にここに来ただけよ」

「ふうん、私を止め・・・具体的にはどうやって？」

「こうするのよ」

奏が答えた瞬間、突如、ヒュアツインテの周囲に、『拘束』『束縛』『不動』などの文字が出現し、光の檻としてそこに展開された。

「これは・・・」

「創代様特製の檻よ。そう簡単に出られるとは思わないでね」

「なるほど。これは力づくでは出られそうにありませんね」

檻の壁に触れ、そう結論付けたヒュアツインテは、大人しくその場に座った。

「良いでしょう。ここで楽しく傍観させていただきます」

「そう・・・」

意外にもすんなりと大人しくなった彼女に、奏は違和感を覚えつつ、千景たちのいる方向を見た。

(これで、いいのよね・・・千景君)

ヒュアツインテは気付かない。

その結果に、『集中肉体調査』という文字がある事を。

戦いは、まだまだ続く。

負けず嫌い

斬撃が交錯する。

二丁の銃剣につけられた短剣による斬撃に対して、鎌の斬撃が応酬する。

人間離れた身体能力及び反応速度、身のこなしで、ぶつかり合う千景と芽吹。

弾丸もかくやという速度で動きまわり、銃剣から銃弾が放たれ、鎌の斬撃が飛来する。

『断鎖』ッ!」

鎌の斬撃が鎖となり、芽吹に飛来する。

それに対して芽吹は飛んで体を回しかわし、そのまま銃弾を三発連続で放つ。

それを千景は鎌を回して弾き飛ばす。

一進一退。銃剣を手の上で踊らせて弾丸を放ったり斬撃を繰り出してくる芽吹に対して、千景はリーチの長い大鎌と鎖で反撃している。

突如として芽吹の蹴りが飛んでくる。

「ッ!?!」

横薙ぎでくるそれを頭をさげて紙一重でかわす千景。傾きかけた体を片足を下げて支え、そのまま戻る反動を使って鎌を薙ごうとする。だが、それよりも速く、二段構えで芽吹の蹴りが千景の腹に突き刺さる。

「がっ!?!」

そのまま吹っ飛び、コンテナに叩きつけられ、いくつか弾き飛ばす。

芽吹はそのまま銃剣を千景が吹っ飛んでいった先に向ける。

警戒したまま、睨み付ける芽吹。

だが――

「ッ!?!」

突如として芽吹がその場でサマーソルトを披露しだした。

いると、先ほどまでであった芽吹の足の所に、いつの間にか黒い刀身

が突き出ていた。

(これは――)

芽吹は迷わず自身の影に向かって銃弾を連射する。だが、弾丸はどれも地面を穿つだけで、刃はすぐさま影の中に引っ込んでしまった。

「――つたくこれかわすかよ普通!?!」

しかし、今度はコンテナの影から千景が走り出てきた。その姿は変化しており、白かった装束は、黒く染まり、まるで『影』のように暗かった。さらに千景の皮膚に黒い入れ墨のようなものが体中を駆け巡っていた。その千景に向かって飛んだまま芽吹は銃剣から銃弾を放つ。

それに対して、千景は向かいのコンテナの作る『影』に足を踏み入れた途端、千景の体が影に沈んだ。

「ッ!?!」

それに目を見開く芽吹。

だが、それを思考する間もなく、千景が、芽吹の影から躍り出て、その背中に右逆手に持った忍者刀を横一文字に薙ごうとする。

しかし、芽吹はしゃがんでその一閃を躲し、薙がれた事によって反時計回りに捻られた千景の脇腹に蹴りを叩き込もうとする。

『影身代かげみがわりの術』……』

しかし、芽吹が千景の脇腹に蹴りを炸裂させた瞬間、千景の姿がシルエットのように真っ黒になり、芽吹の蹴りをすり抜ける。

「ッ……!?!」

流石に芽吹もこれには驚く。実態あった人間が、突然、真っ黒な『影』となってしまったのだから。

だが、思考する間もなく、千景が影から出てくる。

それに芽吹は驚異的な反射神経で、銃口を千景に向け、五、六発を連射。

それに対して千景は――両手の拳銃を向けた。

(刀じゃない……!?!)

ついでに装束も変化しており、入れ墨はなくなり黒かった装束は灰色のロングコートへと

「バレットカウンスター
弾撃」

芽吹が放った銃弾と同じだけの銃弾を撃ち返し、そして、正面衝突させる。弾丸はどれもてんでバラバラな方向へ、否——

「ッ!!」

跳弾して全て芽吹に向かって飛んで行った。

その全てを、芽吹は恐ろしいほどの身のこなしで躲す。全て必中の筈の十二発の弾丸を、全て躲したのだ。

「これも躲すのかよ」

千景は歯噛みする。

ならば——

「——土居さんッ!!」

『おうよ!』

イ・デ・イ・オ・ム・チ・エ・イ・ン

『文字連鎖』——『焼却砲・解』ッ!」

突如として両手の拳銃が光となり、千景の両腕全体にまとわれ、そこに機械的な腕が出現する。

同時に、彼の周囲の地面が溶ける。

「な・・・!?!」

彼から放たれる圧倒的熱量が、おおよそ半径五メートルの空間を焼いているのだ。

その熱量は、おそらく彼の変わってしまった両腕から発せられているのだろう。さらに、熱量だけで何かしらの磁場が発生しており、千景の体が浮く。

そして——千景が攻撃を仕掛ける。

両肩のジェット噴出孔から炎が噴き出し、千景を一気に芽吹に接近させる。

その、ジェット機顔負けのスピードで放たれる飛び蹴りは、さながらミサイルの如く。

しかし、芽吹はそれを足を折り曲げ、背中をそらすことで回避する。あまりにも無理な態勢でだ。

「ッ!」

かわされたと悟るや、掌から炎を噴出し、一瞬の減速と体を向きを

変え、上空へ飛ぶ。そして、右足を掲げ、ジェット噴出によって高速回転、地面にいる芽吹に向かって隕石の如き踵落としを繰り出す。

それを芽吹はその場から退避する事でかわし、一方空振りに終わった千景の踵落としては地面に巨大なクレーターを作り出した。

回避する際に飛んだ事によって未だ空中にいる芽吹。

舞い上がる土煙の中、その煙が突如として緋色に輝く。

「やばッ……」

『焼却砲』ッ!」

左手から放たれる、灼熱の砲撃。芽吹は、両手の銃剣をある方向に向けて発砲。反動によって地面に向かって落下することでその砲撃を回避する。

「かはぁー……」

焼却砲がそのエネルギーを全て吐き出したところで、千景が口から煙を吐いた。

（くそ、これ、結構体力もってかれる……）

『ひゃつはあああ!!まるでサイボーグみたいだなこれ!』

（お前……いくら自分の体力削れないからといって酷使の度合いを考えろッ!!）

『悪い悪い……つと、来るぞ』

球子に促され、構える千景。

視線先、そこには、どうにか焼却砲を回避した芽吹がこちらを睨み付けている姿があった。

「あー、降参してくれると助かるんだけど……」

「冗談。こう見えて、私負けず嫌いなものよね」

「だよな……なら、仕方ない」

構える千景。格闘戦特化型の真解『焼却砲』。その、無限限界突破バージョン。

対して芽吹は、己の身体能力の限界を超えて全自動回避および攻撃を可能とする戦いの境地『鬼気・極限羅刹』。

互いに体に重大な負荷がかかる状態で、先にくたばるのはどっちか。

我慢比べの戦いが繰り広げられていた。

一方で――

「やつああああ!!」

「どっせえええい!!」

冬樹と明日香が空中で激突する。

が、吹き飛ばされたのは明日香。

「ぐおおあああ?」

大きく弾き飛ばされるも、まるで翼でも生えてるかのよう空中を飛行。そのまま再度冬樹に突撃を仕掛ける。

「どりゃあああ!!」

「せえええい!!」

明日香の再度の攻撃に、冬樹もその手の刀を振るう。だが、空中で身動きの取れないはずの冬樹と空中で加速できる明日香では、圧倒的に明日香の方が威力が勝っているはずなのに、どういう訳か明日香の方が吹き飛ばされる。

「ぐおおあああ!?!」

またしても吹き飛ばされ、地面に斜めに叩きつけられコンテナをいくつかふっ飛ばす。

普通、ここまでされたら誰だって突撃を諦める。

だが、この正堂明日香という男は、あまりにも諦めが悪かった。

「まだだああああああ!!」

「ツー」

再度突撃を敢行する明日香。もはや無謀としかいいようがない。このパターンはもう何十回と繰り返しているのに、明日香はやめるなんて事を一切しない。

「しっっ……っ!!」

先に我慢の限界が来たのは冬樹。刀を左肩より高く構える。そして、渾身の力を込めて、振りおろす。

その瞬間、明日香の表情がこれまでにないくらい不敵な笑みを浮かべた。

(ツ!?しまった、誘われた!)

気付いてももう遅い。

冬樹の繰り出した本気の一撃へ、突撃の軌道をわずかにでもずらした明日香へ直撃する事なく空振りに終わり、そして、冬樹の左側へ抜けた明日香は、冬樹の背中へ右手の大剣を振り下ろす。

「くッー」

振った反動を利用して振り向き、冬樹は明日香の渾身の一撃を受け止める。

「あああー」

今度は冬樹が叩き落されて地面に垂直に墜落する。

土煙が舞い上がる中、冬樹はなんでもないようにがばりと起き上がる。

「舐め、るなー」

「だろーうなあああ!!」

立ち上がったばかりの冬樹へダメ押し of 追撃を繰り出す明日香。

冬樹は、その突撃の突きを刀で受け止める。

衝撃波が周囲の大気を震わせ、冬樹と明日香は鏝迫り合いとなる。

「どんだけの馬鹿力なんですかあー！俺の唯一の自慢がなんかとられちゃってるんですがどうしましょうかねこれ！」

「しら、ない！つい、でに、鎌倉、時代の、武士は、皆、ばけ、もの、つて聞いた、事が、ある」

「なるほどね。でも、俺は負けん！諦めるのは論外！」

「いって、ろー」

冬樹が明日香を弾き飛ばす。

「パワー、が、自慢、みたい、だけど、私には、敵わ、ない」

「へへ、行ってくれますねえ。そんなのやってみなきやわかんねえだろーうが！」

「ッ!?!」

押し返される冬樹。

「嘘・・・!?!」

「まだまだあー!」

明日香が両手の剣を交互にふるう。その合間は無いに等しく、あまりにも細かく速い。

とにかく洗練されているのは確かだ。

左手の剣が下から斬り上げられ、それを受けた冬樹の体が大きく仰け反る。そこへすかさず右手に持った剣を掲げ、垂直に叩き落とす。

———対天剣術『滝打』

振り下ろされるその一撃を、冬樹は、どうにか地面につけた足を蹴って横に転がるように避ける。一方の躲されたその一撃は、地面を砕いて、土煙を巻き起こす。だが、冬樹が避けたのは明日香の左側。故に、明日香は横に構えた剣を左側から一気に薙ぐ。

『水圧操作』ツ!!」

逆さまの状態のままつま先から水を噴出。その勢いを利用して体を垂直にしてその横薙ぎをかわす。地面に足をつけて、そして、その猛烈に無理な態勢から剣を薙ぐ冬樹。

「ぬあ?」

それをギリギリのところかわす明日香。

「逃がさない・・・!!」

態勢を立て直し、右手に持った刀を体の左側に構え、その刀身の鏢元を左手でぎゆうっと握りしめて、腰を限界まで落とす。

「居合——『抜影』ぬきかげツ——」

そして、その状態で抜刀術を放つ冬樹。強く握られた左手によって制動がかかり、デコピンの原理と同じように放たれたその一撃は、空気を切り裂いて真空の刃として飛ぶ。

「なろっ——!?!」

それをすぐさま剣で切り払おうとした明日香だったが、やめ、避けに行動を変更して上空へ逃げる。

「よけた・・・!?!」

その判断は正しく、あれは冬樹の持つ圧倒的膂力によって生み出された物理現象。故に、明日香の剣では正す事はできず、逆に弾かれて

しまうのだ。

「どりゃああああ!!」

すかさず明日香は反撃の突撃を敢行する。

「くっ!」

それに苦い顔をして冬樹はその攻撃を迎え撃つ。

「・・・げほっ!げほっ!・・・ああ、酷い目にあつた」

真武郎が、何もかも吹き飛んでいない工場のコンテナ置き場で起き上がる。

「ふう・・・『物体破壊』解除しておいて正解だったな」

御神刀には、ある機能があり、それを使えば相手の人体を傷つけることなく精神のみを刈り取って倒すことができる。その機能さらに強化して人間だけでなく物さえも傷つけないようにすることが可能なのだ。故に、真武郎が吹き飛ばしたのは防人の意識だけで、あとは何もかも無事なのだ。それなら別に真解を使ってもよかつたのではないのかと言いたいところだろうが、いくら御神刀といっても敵味方を区別することはできない。故に、巻き込む可能があつたから使わなかつたのだ。

真武郎を周囲を見渡し、すぐそばに土のドームがあることに気付く。

それに警戒しながら近づいて、壊してみると、そこには気絶している三人の防人がいる事に気付く。

「よっし、ちゃんと気絶しているな」

真武郎は安堵の息を吐いて、真武郎は周囲を見る。

すると、向こうの方で大きな爆発が連続で起きていた。千景のいる方だ。

「うわあ、やってるねえ・・・と、いけねえいけねえ」

真武郎は何かを思い出すかのようになり、すぐさま何かを探すかのようになり周囲を見渡した。そして、ある一点を見て、眩く。

「さて、一番初めに終わった俺が奏ちやんを迎えに行かないとな」

「……さむ」

オフィスの受付の机の陰に隠れて、佐奈はそうつぶやいた。

「幸奈の奴がスリウムを使ったな……」

佐奈は、懐からある黒い毛皮を取り出す。

「……」

それは、あの決戦の日に、園子を殺すために使った、呪いの毛皮。神話に曰く、とある国の王が神々へと生贄を捧げる際に、たつた一柱にのみ捧げず、その神の怒りがかってしまい、その神から神罰のための魔獣を送られた。その魔獣によって国は被害を受けたために、国中から優れた狩人を集め、これの討伐に向かわせた。

しかし、無事に討伐することはできたが、その毛皮をどうするかでもめてしまい、争いは殺し合いに発展。ゆえに、その毛皮は神の怒りと殺し合いをした狩人たちの憎悪と血を一身に受けてしまい、呪われた。

これを纏えば、猪は魔獣に、人は凶悪な魔人へと変貌してしまう。だが、それで確かな強化を促せるのは確かなのだが。

「……だめだ。これは使わない」

佐奈はそれをしまい、弓を握りしめる。

「……行くか」

短く呟き、佐奈は受付の机の壁の方に向かって矢を放つ。矢は壁を碎き、佐奈はその碎かれた壁の穴を通して、廊下に出て走る。

そして――

「……チツ」

舌打ちをする海路。

「仕留めきれなかったか」

伏せていた状態から立ち上がり狙撃銃を構える。

そして、狙っていたビルのある窓から、窓を割って飛び出る、一人の女性が姿を現す。

そして・・・

「・・・目標を補足、これより追跡を開始するッ！」

空中に飛び出したまま、佐奈は弓を引き絞って、そして放った。

拳と脚がぶつかり合う。

「ドツラァー！」

「あう!?」

信也の蹴りが、幸奈の顔を捉え、蹴り飛ばす。大きくのけ反った幸奈の体だが、どうにか踏みこらえて、身を屈めてボディブローを叩き込もうとする。

しかし、信也は幸奈を蹴った右足を引き戻し、その拳に足を叩きつけ、その際の衝撃全てを殺して大きく飛び上がる。

「あ・・・」

「空襲脚ッ!!」

信也の脚は今や人知を超えた脚力を有している、ゆえに、信也は、空気を蹴って空中を駆ける事が出来る。

空を蹴り、加速し、そのまま落下の威力さえもプラスしてライダーキックよろしくの飛び蹴りを放つ。

「ッ！」

あまりの速さに、幸奈は防御を選択。ほぼ垂直から来る攻撃を受け止める。

「ぐっうっあ・・・!?!」

「ドラルララアッ!!!」

さらにダメ押しの乱打。

最後の一撃で飛び上がり、幸奈の真正面のアスファルトに着地した信也。その前傾姿勢のまま、地面を蹴って、幸奈に突撃をする。

「くっ……!?!」

避けようとするが、先ほどの一撃によって脚が地面にめり込んで動けない。

一方の信也は、右足に炎を纏う。それはまるで地獄の業火のような勢いで信也を包み、巨大な火球へと変化する。

「ひのわ日輪」

信也が、自らの射程に、幸奈をとらえる。

「ひづめうがち火爪穿」ツ!!」

全てを焼き尽くす、炎の一撃が、幸奈の腹に直撃し、吹き飛ばし、ビルに叩きつける。

ビルのコンクリートの壁が砕かれ、煙が舞う。

「ハア……ハア……ハア……ハア……やったか?」

信也の真解『炎帝之蹴馬』の代償は、体の体温調節機能の停止。

すなわち発汗が出来ずに、ただひたすらに体温が上昇し続けるのだ。

ただ、使用者の負担を減らすために、炎や外部からによる気温の変化では体の温度は変化しないように出来ている。だが、体を動かす際に生まれる熱だけは別だ。

運動すれば体は温まる。その言葉通り、信也の体温は、激しい戦闘による運動によって上昇し続けている。

人が耐えられる体内温の限界は四十から五十まで、それを過ぎればたちまち脳が解けて死んでしまう。

それほどまでに、信也の真解は危ないものなのだ。下手をすれば、千景の『限界を開放した分だけの衝撃が一度に返ってくる』のような代償よりも危険なものなのかもしれない。

幸い、幸奈が吹雪を起こしているために体温は一定に保てているが、このまま続けければ、体温以前に体が真解に耐えられない。

「耐えてくれよ……ッ!」

突然、身構える信也。その理由は、巻き起こる煙の中から幸奈が現れたからだ。

その体はボロボロ。信也の足は炎を纏っているために、幸奈の体に

は火傷の後が多く残っていた。

ここまで、一方的ともいえる戦いとなっていたが、幸奈の拳は、大きく、重く、受ければ一撃で体を砕かれ戦闘不能に陥る可能性があった。

しかし――

「ハア……ハア……しん……や……くん……」

やはり、幸奈の目がとてつもなく怖い。

何かを求めているのが目に見えてわかる。だが、その求めているものが、どうにもおかしなものな気がしてならない。その、並々ならぬ雰囲気思わず後ずさる信也。

だが、ここで幸奈を叩かなければいけない。だから信也は身を屈めて突撃の姿勢をとった。

その時――

『――全救導者に通達！敵幹部『ヒュアツインテ』の検査に成功及び終了！』

「やっとか！」

白露が真斗の攻撃を避けながらそう声をあげる。

「わかりました。今すぐ撤退します」

優が冷静に応答し、その場から離脱を始める。

「ここまでようだな。おい、他で終わらせたやつはいるか？」

海路が他の者たちに連絡を取る。

「おう。今、行ってるぜ」

それに真武郎が応答し、

「じゃあ任せたわよ。逃げ道は任せて」

雅が高く飛び上がる。

「どこに連絡していたんですか？」

ヒュアツインテが、奏に問う。

「何の話かしら？」

瞬間、奏のすぐそばで衝撃が爆ぜる。

「質問をしているのは私ですよ？連絡をしていたでしょう？」

その声に苛立ちは感じられない。

だが、明らかに苛立っているのは確かだ。

「……撤退の命令をしていただけよ」

「あらつまらない。このまま殺し合ってくれば、手間が省けるのに」「お生憎様。貴方たちの思い通りにそう簡単にさせてたまるもんですか」

と、言っではいるが、幸奈は、創代から教えられた検査結果に衝撃を受けていた。

(それってマジ……?)

にわかに、信じられない。だけど、あの神が、間違えるはずがない。なんていったって、自身が信じる神様なのだから。

「では、そろそろこれを解いていただけじゃないでしょうか。今回の事をあの方に報告しなければならぬので」

「あ、そう……いいわ」

奏がそう呟くのと同時に、ヒュアツインテを囲っていた結界が消滅する。

「随分と気前がいいですね。まあ、今回はこの気前の良さに免じて問答はしないであげましょう。では、私はこれで、ごきげんよう」

その言葉と共に、ヒュアツインテはその場から飛び上がる。黒い流星を想起させるように飛んでいき、やがてまやかしの夜空に消えていく。

「……っあ」

次の瞬間、奏の足から力が抜け、体中から脂汗が流れ出る。

(こ……こわかったあ……)

あまりにも張り詰められた空気が解放され、四肢が弛緩してしまっただのか。立つことが出来ない。

重圧な殺意と憎悪に塗れた空間で気丈に振る舞うなんて、あまりにも無理があつた。

それも、創代に精神を保つていてもらわなければ、すぐに失神してしまうかもしれない程だった。

それほどまでに、彼女は強大だった。

「これが……かの……英雄の……の……憎悪……」
掠れた声で言葉を紡ぎ、そして次に聞こえた声で、奏は、その身を屋上から空中へ投げ出した。

何を血迷つたのか。しかし、彼女が地面に叩きつけられて、血をまき散らして肉片になることはなかった。

「はい落下一名様ご案内」

真武郎が落下中に受け止めたのだ。

「ありがとうございます真武郎さん」

「どういたしました。そろそろ他の奴らも来るぜ」

次の瞬間、轟音と共に、全てを飲み込む闇の砲撃が放たれた。

そして――

あまりにも激しい高速戦闘の中、ふと千景が芽吹から距離をとる。

「!?」

「悪いな。そろそろ退散しなくちゃならなくなった」

「な!?逃げる気!?!」

「そういうことだ」

千景の姿が光る。

『文字連鎖』——『鎖』『解』——『解限咎乃鎖』
イデオムチエイン かいげんとかのくさり

それは、先ほどの、エーデルワイスを想起させる白い装束。

「そんじゃ、逃げるが勝ちって事で」

「待ちなき——!?!」

逃げる千景を追いかけようとするが、突然体から力が抜けて、無様に地面に倒れる芽吹。

「……………これは……………!?!」

「流石に無理があつたか。『鬼気・極限羅刹』てのは、武の境地なだけあつて、体力的にかなり負荷かけてたんだろ」

千景が立ち上がれない芽吹を見下ろしながら、そう告げる。

事実、芽吹は今日初めて『鬼気・極限羅刹』を使ったのだ。夏凜も例外なく、数日ぶつ通しで寝ていたのだ。

「ぐ……………くそ……………」

「悪いな。今度会うときは、味方同士である事を祈ってるよ」

ふと、千景は芽吹に歩み寄り、一枚の紙を彼女の前に落とす。

そして、鎖を出して、飛び上がり、そのままどこかへ立ち去って行った。

「……………」

その様子を茫然と見ながら、芽吹は仰向けになって、仮初の夜空を見上げた。

「……………なんなのよ」

悔しそうにそう呟きながら、芽吹は、千景が置いて行った紙を見る。

「……………これは……………」

一方、明日香も同様に夜空を見上げていた。

「……………だあ——逃げられたああああ!!!」

叫び、地面を駆けまわる明日香。

実は先ほど、冬樹に地面に叩き落された際に、水によって体を拘束され、そのままの状態逃げられたのだ。

なので、拘束が解かれた後でもこうして地面に寝転がっていたの

だ。

「はあ・・・まあ、剣交えてみて分かったけど、やっぱり悪い奴らじゃないかっただな・・・」

冬樹と剣を交えて、明日香は冬樹の剣から感じたひたむきさを感じていた。

一介の剣士にしか分からない境地なのだろうが、それでも明日香は、冬樹の心情を察していた。

起き上がる明日香。

「芽吹と相談してみようか・・・」

(できる事なら、防人の皆とも、相談すべきだよな)

明日香は、心の中でひそかにそう決め、立ち上がる。

「へへ、次会う時は、味方だといいな」

明日香は、冬樹が去っていった方向を見ながら、そう笑みを浮かべた。

「悪いな」

「え・・・」

ふと信也が幸奈に背を向ける。

「信也君・・・？」

「どうやらこっちの目的が達成したみたいだからよ。ここで退散させてもらう」

「ま、まって・・・！」

幸奈は思わず信也を引き留めようとする。

「い、いかないで・・・」

掠れるような声で、そう、引き留めた。だが、

「・・・お前が、置いて行ったのにか？」

その言葉に、幸奈は、その体をびくりと震わせる。

そして、その手を、力なく下ろした。

そうして、信也は、振り返ることなく飛ぶ。

その様子を、幸奈は力なく見送り、スリユムの解除と同時に、その場に膝をつく。

「う……うう……うああああ……!!」

そして、その場に蹲って、泣き叫んだ。

だが、幸奈は気付かない。

「……くそ、なんであんな事言うんだよ……」

信也が、ずきずきと痛む胸を押さえながら、苦しそうな表情を浮かべていた事を。

事前に指定していた集合地点にて。

「……お」

千景が信也に気付く。

「信也、が、最後、だね」

「ぶぶぶー、おっそーい」

「ようしい度胸だ白露。今その顔面蹴り飛ばしてやるッ！」

「はいはい喧嘩しない喧嘩しない」

今にも喧嘩に発展しそうだった信也と白露を雅が止める。

と、そこで。

「あー、そんな訳で……」

千景が頬を掻きつつ、皆が領いた事を確認したところで――

絶叫が夜の街に鳴り響いた。

「ハア……ハア……」

「千景さん、大丈夫ですか？」

「悪いな優……」

「い、いえ、これぐらい……」

地面に力無く倒れ伏す千景を優が担ぎつつ、一同は奏の方を見る。

「それ……で……奏……さん……例の……結果は……」

「ええ、ばっちりよ」

『どうだったんですか!?!』

杏が千景の脇差から現れ、奏に詰め寄る。

「落ち着いて杏さん。そうね……なんて言えばいいのかしら……貴

方の懸念通りだったと言っておきましようか」

「そう……ですか……」

千景は、辛そうに顔を俯かせる。

『そんな……それじゃあ……』

杏の狼狽に、奏は、頷きをもって肯定するしかなかった。

そして、少女は今日も、夢の中で涙を流す。

戦いの日は近い。

束の間の休息

防人、襲撃者からの襲撃から逃れて、早一晚。

千景たち救導者一同は、持参していた野宿セットで山の中で夜を過ごした。

そして、敵の襲撃の前日の昼。千景は――

街の中を走っていた。

「くそお！どんだけ追いかけてくるんだよあいつら!？」

左手の神奪で位置がばれるのが分かる。

だが、今問題なのは、創代によって作られた体によって超人的な身体能力を発揮している千景に追いつがってくる大赦暗部の人間たちの事だ。

千景の体は、あの大決戦の日に神樹によってその身体機能全てを奪われた。

その為、創代に体を作ってもらい、そのお陰でその気になれば御神刀使用時の身体能力の四分の三の身体能力を発揮する事が出来るのだが、どういうわけか千景の背後から追いかけてくる者たちはその千景に追いつがっているらしい。

『そこ、右に曲がってください!』

「ッ!」

杏に誘導され、千景は十字路をほぼ靴底のスリップ無しに直角に曲がる。

『前に三人、待ち伏せがいます!』

『飛ばば流星錘の餌食になるわよ。殴り飛ばしなさい!』

「了解ッ!」

体の中にいる者たちの言う通りにして、千景は人混みの中見えた三人の敵を視認。

そのまま真っ直ぐ、突っ込んでいく。

一方の相手は、身構えつつも、内心驚いているようだ。身を低くして、人混みを走り抜ける。

そして、眼前にスーツや作業服、あるいは私服を着て人混みに紛れていた大赦の役員たちと対峙する。

その距離は千景があと三步踏み込むだけで到達する距離だ。

このまま突っ込んでも、すれ違いざまに当て身をされて終わりだ。ならばどうする？

千景は、突然、自分の前方に両手を突き出した。そしてその手を地面につける。

そのまま彼は逆立ちになって、目の前にいた男に向かってかかと落としを放つ。

男は千景のあまりにも奇天烈な攻撃に驚きつつも、冷静に横に避ける。

空振りに終わった千景のかかと落としだが、すぐにその足を折り曲げて足の裏を地面に叩きつけ、その反動を使って立ち上がる。

それを待っていたと言わんばかりに、男の右手が首に迫る。

だが、その手が千景の首をつかむ前に、千景の腕が蛇のようにその男の右腕に巻き付いた。

その行動に、男は目をむく。

スネイクアーツ『絡み折り』

千景が、その腕を伸ばした瞬間、男の右腕から、バキンツ！という音が鳴り響き、男の右腕の関節が曲がってはいけない方向に曲がる。

「ぐあ……」

「悪いなー」

絡めた腕を外して、千景は一気に走り抜け、路地裏に逃げ込む。

その後を男たちは追いかけてくるが、そこに千景はいなく、見失ったと言わざるを得なかった。

一旦、周囲を見渡した男たちはすぐに走り出す。

そうして、誰もいなくなった路地裏のごみ箱から。

「……行っただか？」

『一応わね』

「ゴミ箱から出てきた千景の言葉に歌野が答える。

『なんとか撒きましたね……』

『きつきの絡み折りは良かったわよ。どれ？もう少し伝授してやってもいいわよ？』

「それはまた次の機会で」

どうにか追手を撒いた千景はフードを深く被って、再度、隠密装備の隠密機能を発動させて、大通りに出る。

(あれが六道家・・・大赦の闇を任されている一族か・・・)

『火野が覇権を握ってから、火野自身が作った一族でね、次男に六道の名前を与えて、大赦の闇全てを任せたのよ。あの時、残っていた書物全部を読み漁って、その技術の全てを叩き込んだそうよ』

『その結果が、あの六道式って訳ね』

六道家。

上里家初代当主上里ひなた、本名足柄火野が、自分の二番目に生まれた子供を使って作った、大赦の闇を任された一族。

その活動内容は、まず、上里に反抗する者たちの粛清。クーデターが起こりそうになったらその火種の根絶やし。情報収集。機密事項の管理。上里家当主の護衛など。

主に粛清などの『暗殺』を主に活動する家系であるが故に、その殺してきた数は数知れず。

そんな血塗られた一族の末裔が、翼なのだろう。

即ち・・・

(一歩間違えれば、俺は翼に殺されていたのか)

下手をすれば、翼は誰よりも残酷な存在になっていたかもしれない。

そう思うと背筋がぞつとするのは否めない。

改めて、あの時は味方で良かったと安堵する。

それはともかく、千景は現在『覚』^{さとり}を憑依されている。面白い事に西暦勇者の意識のある精霊及び文字を使っていると、その者の経験を体に刷り込ませる事が出来、先ほどのスネイクアーツも歌野の経験が千景の体に反映されていたから出来たのだ。

歌野のスネイクアーツは、どうやらあの追手たちの技術を勝っていたようだ。

「あいつら・・・上手くやってるかな・・・」

千景は、ただいま別行動中の仲間たちの事を思った。

千景は、自らの持つ神奪によって場所を特定されている事を視野にいれ、別行動をとっていた。

その為、敵の襲撃に備える為の『仕込み』をしていた雅であったが。

(どうしよう・・・)

公園にて、雅は・・・

(こんな所で、結城友奈に会うなんて・・・)

ベンチに座って、完全に落ち込んでいる結城友奈を見かけてしまったのだ。

あまりにも暗い雰囲気を纏っている様子から、周囲の人たちも彼女に近付こうとしない。

一方の彼女はそれを気にした様子もなく、遠くで遊ぶ子供たちを眺めていた。しかし、その子供たちが笑顔になる度に、重い溜息を吐いていた。

「・・・」

さらに一方の雅は、どういう訳かその場から立ち去る事が出来なかった。

比較的设置に時間が掛からず、昼頃にはすべての『仕込み』を終わらせてしまった為にぶらぶらしていただけだったのだが、どうにもこうにも、雅は彼女に出会ってしまった。

(千景の話じゃ笑顔の絶えない子だって聞いてたけど・・・今の様子じゃ、その面影は全く無いわね)

そんな友奈に対して、雅はしばしの逡巡の後に・・・

友奈の座るベンチに腰をかけた。

それから少しの沈黙の後に、

「・・・どうかしたの？」

雅は友奈に話しかけた。

一方、白露と冬樹の方では。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

三好兄妹に出くわしていた。

ファミレスで昼食を済ませようとしただけなのに、なんの偶然か相席になってしまったのだ。

互いに向かい合って無言。あまりにも気まずい空気。

(ど、どうしよう冬樹ちゃん・・・)

(そんな、事、いわれ、ても・・・)

この状況は完全に予想外。

ただゆつくりと食事をしたかっただけなのに、こんな所で勇者部の面子に会うなんて、悪運が良いにも程がある。

しかも、兄である三好春信はただ無言でその手に持つ手帳をじーつと眺めており、妹の三好夏凜は落ち込んでいるのか机に突っ伏していた。

その空気は、あまりにもどんよりとしていた。

そんな状況で、ゆつくりなんてできるわけが無かった。

さて、この空気をどうすればいいのか。そう思案にくれる二人であつたが。

「・・・・・・・・ごめんなさいね」

「え」

いきなり夏凜が口を開いた。

「こんな辛気臭い空気にしちゃって。ゆつくり食べたかっただけでしょう？」

「ああいえ。たぶん、そっちの事情が関わっていると思うので、わたくしどもの事はお気になさらず」

「気に、しない、で」

無理に笑顔を作ったどうか心配させないように取り繕う二人。

「……心拍が妙に早いな」

「へ？」

だが、春信という男だけはどうしても欺けない。

「視線も明後日をむいているうえに声音も僅かに上擦っている。嘘をつくならその点でもう少し努力をし……ぬぐ」

瞬間、ガスツ！という鈍い音が響く。

「そういうデリカシーのないこと言わないツ！」

「しかしだな……」

「人の善意を無駄にするなっっていつてんの！」

「むう……」

妹に押し切られ、しぶしぶと言った表情で黙る春信。

これが勇者なのだろうか。

真っ先に思ったのがこれだ。

こんなテンションの奴らが、世界の守護者たる勇者なのだろうか。

そう思っ、即座にその疑問を否定する。

こんなテンションなのは自分たちも同じか、と。

と、そう思っている間に、また夏凜が机に突っ伏す。

「……何かあったので？」

あえて、聞いてみる事にした。

「んー」

唸るような声。真面目に何かを考えているようだ。

一方の春信は何も言わない。

「……アタシたち、実はある部活やってね」

そこで、夏凜が語りだす。

『『勇者部』っていうんだけどさ。で、ちよつとした事情で、ある仲間を一人忘れててね』

「ツ！」

その言葉に、二人は息を呑む。

「そのおかげで、部活の友達が、とても落ち込んでいて。励まそうと

思っても、空振りに終わっちゃってね……」

自嘲するように笑い始める夏凜。まるで、自分自身を憐れんでいるかのように。

「どうにかしたい、って思ってるんだけど……どうにも、アタシ自身も忘れてるから、どうにも出来ないのよね……」

その夏凜の自白に、二人は、何も言えない。

やがて夏凜がフツと笑い、その体を持ち上げ、背もたれに体重をかける。

「ごめん、こんな話をしてもしょうがないわね。でも、話したお陰で少しすっきりしたわ。ありがとね」

「ああ、ううん。こっちこそ、なんだか力になれそうになくて、ごめんね」

「そう……そうだ。こうして話し合ってるのも何かの縁だし、奢ってあげるわ」

「え!?!」

「そんな、滅相も、ないこと……」

夏凜の突然の提案に、思わず動揺してしまう二人。

「おい」

「いいじゃない。どうせ兄貴のお金の使い道、無いも同然なんだから」
「お前の場合はサプリの買い過ぎじゃないのか?」

結局の所、押し切られてしまい、白露と冬樹は奢らされてしまった。

ファミレスの前で別れ、冬樹と白露は並んで歩く。

「……なんだか、いい奴らだね」

「うん。千景、が、言ってた、とおリ……」

その事実には、二人は寂しそうに笑う。

「ここで過ぎしてきた事は、千景にとって、とても大切な事なんだね」
だから、彼は思うのだろう。

ここを守りたい、と。

「……冬樹」

「言わなくて、良い。私も、おんなじ」

「そっか」

二人は頷き合い、仕込みを終わらせる為に、別れる。

一方、夏凜と春信はというと。

「・・・あの二人、何か知っている風だったわよね」

「ああ。お前があれを言ってから、あいつらは目に見えて動揺していた」

「・・・敵、じゃないといいわね」

「さあな。だが、俺の見立てでは、奴らは園子の言っていた明日の敵の侵攻の時に、敵対する事はないだろう」

「そう・・・」

夏凜は、ポケットからスマホを取り出す。

勇者システムの入った、特別な端末だ。

「神樹様の言う、神樹を殺す存在。そして、明日の敵の大規模侵攻・・・敵の策略で樹海化が封じられる可能性も、無いわけじゃないのよね」
「ああ。だが、俺たちはその敵の侵攻に備えなければならぬ。その為に、森に行くぞ」

「ええ、分かったわ。早く極限羅刹を極めなくちゃいけないからね」

「あ、それと今日は芽吹が来るぞ」

「え」

瞬間、夏凜がその場で固まる。

「どうした？」

「・・・芽吹って、もしかして、楠芽吹？」

「そうだが？」

「・・・なんで？」

「園子から聞いていないのか？一応俺は奴の訓練指導官なんだが・・・」
「しばらく休業してなかったっけ？」

「事情が変わった。奴は俺たちと近い体質だからな。どうやら先日の任務で極限羅刹を使えるようになったから、それを極める為に鍛えて

ほしいとつい今朝連絡が来た」

「ええ」

正直言うと、実は夏凜は芽吹ともう一人の男子が翼にボコボコにされてる現場を目撃してしまっているのである。しかも間の悪いことに、その場に居合わせてしまったので、余計気まずいのだ。

「どうした？何がそんなに嫌なんだ？」

「い、いや、別に嫌って訳じゃ・・・」

「何を迷っているかは知らないが、どうせ手合わせすればそんな憂いもなくなるだろう。行くぞ」

そういつて、なぜか飛び上がって民家の屋根の上に上がる春信。

「ちよ!?!」

「ついでにい」

「無茶言うなああああ!!!」

しかし夏凜も結局の所、屋根に上って春信を追いかけるのだった。

一方、こちらは六道翼が一人、外をあてもなく歩いていた時の事。
「あれは・・・」

ふと目に留まった知り合い。せつかなので翼は声をかけてみることにした。

「おーい、しずくちゃん」

「ん・・・?」

その知り合いとは、山伏しずくの事である。

しずくは、街道に設置されたベンチに座っていた。

「久しぶりだね。僕の事、覚えてる?」

「・・・翼」

「よかった。どうしたの?こんな所で」

「実は・・・友達と、一緒に・・・」

「友達?」

と、首を傾げた所で。

「あ、あのお！」

「ん？」

ふと、誰かが声をかけてきて振り向いてみると、そこには両手にアイスクリームを持った少年がいた。

「ナンパはやめてください！」

「・・・あー、なるほど」

そういわれて翼は、どうやらナンパと勘違いされているのだと自覚する。

確かに、相手方は翼の事を知らないようだし、その両手を見る限り、

「もしかしてデートだったのかな？」

「違う」

ばつさりとしずくから否定される。

「あれ？」

「べ、別に俺たちは、そんな関係じゃないから！全然違うからね！」

「あー、うん分かった。わかったから一旦落ち着こうか。アイス落ちるよ」

「へ？うおあ!？」

一悶着の後。

ぺろぺろとアイスを舐めるしずくを眺めつつ、翼は、先ほどの少年、

羽村昴に話しかける。

「大赦の方で、防人をしてるって聞いてるけど？」

「ああ、うん。俺たち、結界の外での活動が主なんですけど、昨晚、神樹を殺す者を探してここ讚州に来たんです。聞いてますよね？」

「うん。聞いているよ」

翼は顎に手をあてて、考え込む。

（防人を市内にまで駆り出してまで排除したい存在・・・そこまで危険な存在なのか・・・？）

「あの一、翼さん？」

「ああ、ごめん。それにしても、しずくちゃんは大丈夫なのかい？とても戦闘に向いているとは思えないけど・・・」

ちようど、しずくがコーンまで食べ終え、ごくりと飲み込んだ数秒

後。

「――へ、問題ねえよ。何せ俺が守ってんだからな」

「……なんだ二重人格か」

「二反応薄ッ!」

あまりにも薄い翼の反応に二人して突っ込む。

「なるほどね。どうやら君がしづくちゃんを守ってくれてるんだね」

「ああ。こっちじゃ初めてだっけか?」

「そういう事になるね」

しかし、と翼は思う。

二重人格とはいわば、防衛本能のようなものであり、本人の精神が崩壊したり危険な状態になった時に、本来の人格を守るために、別の人格を作って本来の人格を守ろうとするのだ。

それが二重人格。

この場合、実はしづくの両親は自殺しており、そのショックで第二人格であるシズクが生まれたのだ。

元々、弱い精神であるしづくから強い精神のシズクが作られるのは、仕方のない事だろうと翼は思っている。

まあ、六道家の情報網を使えば、このぐらい調べるのは造作もない。ただ、防人部隊は上里家が主導権を握っている。

上里家は、大赦に反発するものを片っ端から排除する思想を持っている。その始末に必ず六道家を使うのだが、その歴史において、六道家及び暗部は上里家の命令に背いた事が無い。

暗殺対象には、当時の当主の友人や、部下の恋人などもいた。だとこののに、その誰もが、上里家の命令に従っている。

これは、一体どういう事なのだろうか。

いつかの日、翼の祖父である六道陣は言った。

『いずれ、お前も六道の運命に捕らわれる事になるだろう』と。

(結局、どういう意味だったんだろう?)

「……おい、どうかしたのか?」

シズクに声をかけられ、我に返る翼。

「ああ、ごめんシズクちゃん。ちよつと考え事してて……」

「つたく、そんなんで大丈夫なのかよ？明日の侵攻じゃ協力する事になんだから、しつかりしてくれよ？」

「分かってるよ」

「……あれ？俺忘れられてる？」

一人、置いてかれていた様子の子であった。

真昼間。樹は銀と剛と一緒に掛けており、故に風は一人街の中をぶらぶらと歩いていた。

特にあてがあるわけでもなく、ただ、ひたすらに町中を歩いていた。その、町をただあてもなく歩いている理由は、昨晚まで分からなかった、写真の少年の事だった。

結局、何も思い出す事もなく、何か手掛かりが見つかることもなく、そのまま解散になってしまい、自宅で個人で調べてみても分からず、そのまま寝落ちしてしまったのが昨日。

なので、風は、町中を歩いていけば、何か見つかるかもしれないと思っ、ただいまそれを実践している最中なのだ。

だが、今のところ収穫無しというのが現状。

「はあ……私も剛たちと一緒に手掛かり探しすればよかったかしら……」

そうぼやいた矢先、ふと視界に人だけが出てくる事に気付いた。

何からトラブルが起きたのだろうか。何かの小競り合いには人が集まりすぎているように見える。

興味を惹かれ、風はその人ばかりへ向かう。

「すいません、通してください……」

やがて、その騒動の原因が見える位置まで来たところで――

「がっ!？」

「え」

一人の少年が、一人の大人を殴り飛ばしている場面にでくわした。

その殴られた大人は、そのままかなり吹き飛んで、人だかりのあるところへ丁度落ちていった。

だが、それすら気にする暇がない程のタイミングで、別の男が全身黒尽くめの少年に飛びかかる。だが少年はそれを見切つて横にかわすとそのまま回転して後ろ回し蹴りをその背中に叩き付ける。すると男はバランスを崩して地面に倒れる・・・前に手を地面について見事に受け身をとって立ち上がる。さらに別の男が少年を殴ろうとするが、少年は今度は態勢を低くしてその右拳をかわし、次いで飛んでくる左拳のブローを右手でいなしつつその手首を掴むと、体を回転させてもの見事な体落としを決める。しかし、喰らった男は上手く受け身をとったのかダメージはそれほど感じられなかった。

そんな息を持つかせぬ攻防を繰り返している少年と男たちの戦いは、もはや一般人の目には理解出来ない速度で展開していた。

そう、今この状況で、唯一その動きの全てを見切ることの出来る風を除いて、は。

風の両目は、あの決戦の日、名も知らない神から、『瞬動の魔眼』を貰っているのだ。その魔眼は、発動させれば即座に演算を開始し、風の目に映る全ての事象や動きなどを逐一見えるようにしているのだ。単純に、風の意識を加速させて、風自身が、周囲の時間の流れが遅くなっていると勘違いしているだけなのだが。それでも、見えないよりはマシだ。

そんなわけで、風にはこの攻防全部が見えている訳なのだが。

あの黒づくめの少年は、数の不利をもつかもしれない様子で戦っていた。まるで蛇のようにしなやかな動きで、相手の攻撃をかわし、関節を決めて骨を折ったりと、中々にえぐい戦い方をしている。

折られた相手が可哀そうだが、が、同情はしない。

何せ多勢に無勢だ。自業自得である。

さて、と風は呟く。

どうやって加勢しようか、と考えていると・・・

不意に、少年のフードが脱げる。

そこから現れたのは——黒髪に茶色の目をした少年だった。

」
心臓が、跳ねる。

その少年の顔は、あの、写真に写っていた、少年の顔と、全く同じ顔だったから。

「やべっ」

フードが脱げた事に気付く少年であったが、その隙をついて、背後から男が一人、殴りかかってくる。しつかりと地面を踏みしめた、明らかに鍛錬をした者の正拳突き。決まれば、背中からの衝撃で肺から空気が全て吐き出される事だろう。

少年は、それに気付いて、すぐさま迎撃の態勢に入ろうとした、その直後。

風がその男に向かってタツクルをかました。

『は．．!?』

あまりにも突然な事に、当事者及び野次馬までもがそんな間抜けな声を出してしまう。

とにかく、風にタツクルされた男はバランスを崩し、どうにか転ぶまいとたたらを踏む。

その間に、風は少年の手をつかんで、走り出す。

「ごっちー！」

「ふうせんば．．．うおあ!？」

少年が何かを言いかけたが、それすら無視して風は少年の手を引って張って走り出す。

「く．．．なんて事だ」

「よりにもよって犬吠埼様が．．．応援を呼べ。追いかけるぞ！」

ここでの風の誤算は二つ。一つは相手が手練れの六道家である事。もう一つは——今一緒に逃走している男が、とある事情によってどこに逃げても見つかってしまう体質の人間だという事だ。

少年——千景は後ろを見る。

案の定、六道家の人間が、陸上選手もかくやという速度で追いかけてくる。

風ではとてもではないが逃げきれない。

(よりもよつて、ここで風先輩に出くわすかよ!?)

最も、千景にとつての最大の懸念の一つである、勇者部に遭遇してしまうという事が今起こっている訳なのだが。

しかし、このままでは追いつかれてしまつて自分どころか風まで捕まつてしまう可能性がある。

流石にそこまで迷惑はかけられない。

(仕方ない——!)

千景は、腰に手を回す。

それと同時に、風に握られている右手を引っ張る。

「きやあ!」

いきなり引っ張られて後ろに倒れる風。その風を右手で抱え、空いた左手で、腰の脇差の鍔を弾いて刀身を曝け出す。

「天鎖刈ツ!!」

「え——」

叫ぶのと同時に、千景にエーデルワイスを想起させる白い装束と拘束具のような鎧が纏われる。

「え、なん——」

「黙っててください。舌噛みますよ!」

「え、ちよ、待って——きやあああああああ!!」

風の制止を無視して、千景は高く飛ぶ。

ちなみに千景は風を横抱きになっている。

(剛先輩、すみません!)

心の中で剛に謝りつつ、千景は上空千メートルまで飛び上がり、鎖で移動していった。

邂逅する者たち

「・・・なんでここに三好さんが？」

「それはこっちのセリフよ楠」

人気の無い森の中で、夏凜と芽吹は対峙していた。

「俺が連れてきた」

「ええ、それはわかっています。問題なのはどうして三好さんを連れてきたって事ですよ？」

芽吹の睨むような視線に春信は肩をすくめる事なく答える。

「明日の敵の侵攻に備えて、少なくとも、憂いというものは多少は解消しておこうと思つてな。俺の経験上、お前たちの場合は剣を交えれば何の問題もないだろう？」

「一体その自信はどこから来るのよ・・・」

「経験からだ」

「あ、そう・・・」

はもった事はこの際、無視するとして、春信は二人を交互に見つ話しを始める。

「お前たちの戦闘スタイルは酷似している。理由は当然、三ノ輪銀の端末を受け継ぐ故の訓練の内容によるものだ。ただし、お前たちは俺も含めて体質が同じだ。それが、『鬼気・修羅領域』と『鬼気・極限羅刹』だ」

「それは理解しているわ」

「おさらいだ。聞いておけ。まあ、鬼気・修羅領域は己の全てをたった一分の圧縮して通常の数倍の力を発揮するのに対して、極限羅刹は感覚を研ぎ澄まして、己の全ての動きを全自動とする武術の境地だ。ただし、お前たちのそれは未完成だ。故に」

春信は、持ってきていた木刀を二人に投げる。それを二人はつかむ。夏凜、芽吹ともども二本づつだ。

「とにかく打ち合え。お前たちには、それが一番効率的だ」

顔を見合わせる夏凜と芽吹。しかし、このまま硬直しても仕方がない。

「・・・手加減しないわよ」

「それはこつちのセリフ」

向かい合い、木刀を構える二人。

「・・・はじめ！」

春信が唐突に合図を出した瞬間、二人同時に地面を蹴る。

その直後、夏凜が進みながら回転。

「なッ!？」

それに驚き、芽吹は防御の姿勢になる。

夏凜の振るう右の一刀目は空振り、しかし本命の二撃目の右が、芽吹の右側面を襲う。

しかし芽吹はそれを右の木刀でいなすと、すかさず左の木刀で反撃。狙うは夏凜の右肩。だが夏凜はすぐさま左の木刀で上に逸らすと、右の木刀で突き返す。

(何よ・・・これ・・・)

その攻防の中で、芽吹は苛立つ。

夏凜の剣が、あまりにも、情けないほど脅威を感じないのだ。

常人が受ければ、それは鋭い斬撃ではあるだろう。しかし、百戦錬磨の春信に鍛えられた芽吹の目から見ると、夏凜の剣は、あまりにも腑抜けている。

それが、どうしようもなく、ムカつく。

何合目かの衝突で、鏢迫り合いに持ち込む二人。

「・・・なんなのよ」

「？」

「なんなのよ！その腑抜けた戦い方は！」

「うわ!？」

押し込まれ、たたらを踏む夏凜。すかさずその夏凜に対して芽吹は猛攻を仕掛ける。

「攻撃が軽い体捌きもなっていない剣から情熱を感じないッ！これが私に勝った奴の剣!?!笑わせるんじゃないわよ！」

「ぐ・・・く・・・」

乗り気じゃなかった剣に、いつの間にか熱が入って、芽吹の攻撃が

どんどん激しくなる。それに対して、夏凜はどんどん防戦一方となる。

「そんな腑抜けた顔するぐらいなら勇者システムをよこせ！変なことであじうじするな！見ていて腹が立つのよ！」

烈火の如き連撃を浴びせられ、夏凜はとうとう木に背中をつける形で追いつめられる。

すかさず芽吹は左右の木刀を叩き込む。

「私に勝ったならもう少し誇らしくしてなさい！勇者であるならそうありなさい！何がアンタをそんなにしてるのか知らないけど、そんなになるぐらいなら、勇者システムなんて返上してしまえ！」

「——うっさいッ！」

ここで、とうとう夏凜がブチ切れる。

「好き勝手言いやがって！アタシだって好きでこんなうじうじしてるわけじゃないのよ！仲間が消えた！忘れてた！そんな苦しみはアンタに分かってたまるかっての！それに何よその口調!?!お前はアタシの母親か！」

「誰がアンタの母親よ!?!ふざけんな！」

「じゃあやめろお！」

無意識なのかそうでないのか、二人ともいつの間にか極限羅刹を発動させて完全に無意識で剣をふるって戦っていた。

だが、やがて木刀が二人の動きに耐え切れず、最後に木刀同士をぶつけ合わせただけで、二本とも砕け散った。

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

「もういいだろう」

そこで春信が二人の間に入る。

「もう十分に憂さは晴らせただろう？」

「・・・凶ったわね」

「何のことだ」

夏凜の恨めしそうな上目遣いにどこ吹く風と受け流しつつ、春信は口を開く。

「人は怒りに飲まれると、周囲が見えなくなり、気付けば周囲にその怒

りをまき散らした結果が広がっている。極限羅刹とは、その状態を意識のある状態で発動するようなものだ。故に——」

「発動に必要なのは怒り……」

げんなりとした表情で同時に答える夏凜と芽吹。

「攻撃に必要な感情がそれという話だ。俺の場合は、そうだったからな」

春信がこの境地に至った理由。それは、勇者として活動していた時の二人の友人の死が引き金だった。あの時の相手はサジタリウスで、後方支援の役割を担っていた者をかばう為にサジタリウスの矢を受け止めようとしたもう一人が、その腹を貫かれ、貫通した矢が後ろにいた者の腹さえも貫いた。

その瞬間を春信は目撃し、そして、その死も看取った。

そして、なおも無慈悲に侵攻してくる敵前に、春信の中で、何かが切れ、昇華と極限羅刹を発動させた。

それから、勇者としてのお役目が終了するまでの十八の誕生日まで、春信はその二つを使って、戦い続けた。

いつの日か歴代最強の勇者と呼ばれるようになっても、あの時の悔恨は、いまだに残ったままだ。

だからこそ、妹と一番弟子にだけは、そんな思いをさせたくはない。

「さて、そろそろ次に移るぞ。今度は丈夫なものだ」

「わかったわ。さつき色々と言われたし、なんか負けた気分だからね」

「言ってなさい。また追いつめてやるわ」

「いや、今度はお前ら二人で俺に打ち込んでみる」

「……え？」

その数分後、森の中から二人の少女の悲鳴が聞こえたとか聞こえなかったとか。

逃走する事、どうにか遠くの海岸にまで逃げてきた千景と風。

どうにか六道家の追跡を逃れ、天鎖刈を解く千景。

その様子を、風は怪訝そうな表情で見ている。

「・・・あんた、勇者なの？」

「ん？ああ、違いますよ。俺は救導者という者です」

「救導者？なにそれ？」

「まあ、勇者と似たようなものですよ。まあ、あなたたちが相手にしているのは違って、俺たちの場合は悪霊なんです」

「あ、そう・・・」

そう呟きつつ、風は、名も知らない少年の顔をまじまじと見る。

(やっぱり、似てる・・・)

あの写真と、全く同じ顔。

やっと見つけた、目的の人物。だけど、思い出せない。

まるで記憶がすっぽり抜けたかのように思い出せない。

「それじゃ俺はこれで失礼させていただきますー」

「あ、待ちなさいー」

「ぐえっ!？」

そのまま立ち去ろうとする少年、というか千景のジャケットのフードをひつつかむ。

「ちよ、あん、首・・・」

「ああ、ごめんなさいー」

首を絞められ、咳き込む千景。

「なんですか・・・」

どうにか復活して立ち上がる千景。

「えっと・・・良かったら、名前、聞かせてくれない、かしら？」

「・・・」

その風の言葉に、千景は、息を呑む。

しばし、考え込む、千景だったが。

「・・・すみません。名前は、言えません」

「・・・そう、分かったわ。ごめんなさい。変なことを聞いて」

残念そうにうつむいた風だったが、やがて取り繕うような笑顔で、

そう言う。

「いえ……」

一方の千景も、浮かない顔で会釈をして、そのまま立ち去る。

「……すみません、風先輩」

誰にも聞こえない声で、千景は、そう呟いた。

「どうかしたの?」

突然、知らない女性に声をかけられ、友奈は思わず困惑する。

また、知らない少年の夢を見て、気分転換に外を散歩していたのだが、いつも通りの町の喧騒を見ていると、また辛くなってしまい、逃げるようにやってきたこの公園。子供たちの遊んでいる様を見れば気持ちも和らぐかと思っても、やはり辛く、やがてふさぎ込むように下を向いた直後に、話しかけられた。

見てみれば、綺麗な黒髪の女性が、友奈の隣に座っていて、まるでこちらを心配するかのように見ていた。

「……えっと」

「ああ、いきなり話しかけてごめんなさい。ただ、あなたが悲しそうだったから、ね」

「ああいえ、別に、迷惑なんて思ってませんから」

事実、友奈はうつとうしがっていた。

ここまで人を嫌いになれるのか、と自分でも驚きだが、それでも、今は一人にして欲しかった。

だが、この女性はともそんな事にはさせてくれそうになかった。「もう一度聞けど?どうしたの?」

「……」

その二度目の質問に、友奈は、顔を逸らし、やがて自虐的な笑みで答えた。

「別に、あなたには関係ないですよ」

「教師志望の私としては、まだ中学生っぽい貴方の事を放っておけないのだけど」

「気にしないでいいですよ。私なんかに構う事なんて、時間の無駄です」

「その無駄にする時間があるのよねえ、私には」

「そうですか」

「私の見立てでは・・・誰か、友達の事を忘れてた、とか？」

その女性の指摘に、友奈の心臓が跳ねる感じがした。

「・・・あら？もしかして、凶星？」

「・・・そんな事、ありませんよ」

「あら、そう・・・」

顔に出ていただろうか、女性の声が、先ほどよりも明らかに心配の色が見て取れた。

わざとなのか、そうじゃないのか。

今の友奈には分からない。

「・・・私の経験上、忘れられるってのは、かなり、悲しい事だと思うの」

「・・・忘れられた事があるんですか？」

「ええ。といつても、年下の子にだけどね。まあ、しばらく会ってなかったから仕方がないってのもあるんだけど、それなりに仲良くしてた身としてはショックだったかな」

「そう・・・ですか・・・」

友奈は、なおも、落ち込んだまま。

千景の話では、絡久良市の人間以外は、全員、千景の事を忘れているという。

ネットや個人情報。その他彼が存在したという事実そのものを抹消されたが故に、彼女は、彼の事を覚えていない筈だった。

ここで、彼女から何か情報を貰えれば良かったと思っていたのだが、どうやらあまり望めないようだ。

「・・・まあ、こんな話したところで仕方がないわよね。ごめんなさ

い。私、そろそろいくわね」

「いえ・・・話しかけてくれて、ありがとうございます。少しだけ、気が楽になった気がします」

「そう・・・」

立ち上がって、再度友奈の方を見た雅。いまだ暗い雰囲気を出す彼女の様子に後ろ髪を引かれるような思いだったが、自分には、これ以上にも出来ない判断して、雅はその場を去る。

「それじゃあ、機会があれば、また会いましょう」

そう最後に言い残して、去っていく雅。

果たしてその判断は、正しかったであろう。

「・・・なんだったんだろう、あの人」

不意に、彼女の額に浮かんだ黒いもやのようなものが、確かに、二本の角のような形を取ったのだから。

逃走する事、数時間。

「ぜえ・・・ぜえ・・・だあー、くっそー！しつこいー！」

空が夕焼けに染まり、千景は森の中で身を隠していた。

幸い気配は服のお陰でばれて居ないが、どういう訳か最終的にはバレて追いかけられる。

そんな地獄のような鬼ごっこを続けてはや数時間。

一度は予想外なハプニングが起きたものの、それからというもの、休みなしに走り続けているのが現状だ。

「くっそ、この体じゃなかったら今頃過労で倒れてるぞ・・・ぐっ!？」

突然、左胸を抑えて顔をしかめる千景。

『大丈夫ですか!？』

「ああ、問題ない・・・」

だが、すぐに元の表情に戻り、千景は周囲を警戒する。すると千景の頭上に緑色の毛の猿が下りてくる。

『周囲に敵影無し。しばらくは大丈夫そうよ』

「だけど森に逃げたのは失敗だった」

『なんでだ？森の方が見つけにくいだろ？』

「森を包囲されれば、そのまま包囲を狭めて俺の隠れられる範囲が狭まるだろ。相手は暗殺特化の六道家だ。当然、森の中での活動の仕方
も熟知しているはずだ」

『な、なるほど・・・』

『まあ、いざとなれば御神刀で逃げればいいわ。幸い、こっちは戦略に長けた伊予島さんがいるんだから』

『や、やめてくださいよ千景さん・・・恥ずかしい・・・』

「ま、便りにしてるよ。さて・・・」

千景は、寄りかかっていた木の陰からこちらにまつすぐ歩いてくる足音の正体を探りに出る。

『え!?なんで!?私が見たときは何も・・・』

「そりやそうだろうな。何せ相手は、足柄さんを最も尊敬している弟子だ」

『まさか・・・!?』

「ああ・・・園子だ」

「ここにきて、勇者部の最大戦力の一人である、乃木園子に遭遇するとは、我ながらついてないと苦笑する千景。

「ん〜。出てきてくれないかな〜。お話したいんよ〜」

園子は、いつも通りのほんわかとした口調で話しかけてくる。

それに対して、千景は思考を開始する。

(どうする?ここで姿を現すか。だけど、俺としては何も知らない状態
でいてほしいのが最大の願いなんだが・・・出来る事なら今後一切、
勇者の力を使わないで欲しい所。どうにかならないか・・・)

「ゆーゆも〜、とつても悲しんでるんだよ〜?」

「ツ・・・!?!」

園子の言葉に、思わず反応しそうになる千景だったが、寸でのところで郡が体の主導権を奪って阻止した。

「・・・出てこないか」

しゅん、とした様子でそう呟く園子。

「じゃあ・・・」

ふと、千景は、背筋を這うような悪寒を感じた。

「力尽くでも、連れて行くから」

「マジかよ・・・」

園子が、勇者システムを起動し、その身を、蓮を想起させる紫の装束に身を包む。

「天鎖刈——！！」

「対天武術『総薙』」

園子が、槍を一閃する。

すると周囲の木々が薙ぎ倒され、そこら一体の見通しが一気によくなる。

「・・・これで死んじやったらどうしよう、って思ってたけど、良かったよ」

「テメエ・・・今のガチで俺を殺しに来てただろ・・・!!」

千景は、どうにか躲していた。救導者としての脚力によって上空へ飛び、攻撃を躲したのだ。

「ごめんね。でも、これ以上、友達が傷ついていくのが嫌なの。だからお願い。大人しく一緒に来て。貴方の事は、私が守るから」

園子の提案は、千景にとっても悪い事じゃない。

園子という名家の令嬢にして、重宝するべき勇者である園子が相手では、流石に大赦も手が出しづらいだろう。

そう、それが、園子本人の認識での話で済むの事ならば。

だが、現実には、そう簡単にはいかない。

「・・・知ってるか？六道家は、その歴史において、一度も上里家に逆らった事がないんだってよ」

「・・・それがどうかしたの？」

「その理由は、なんだと思う？上里家が、どうして三百年の間、暗殺もされず、その地位を確実なものとしてきた理由を」

千景の左手は、神からその力を根こそぎ奪い取る事の出来る、神殺しの力『神奪』。

これは、神と密接な関係にある勇者と一緒にいれば、確実に不幸に
してしまふ力だ。

そして、使い方を間違えれば、この世界を簡単に終わらせる事が出
来る力だ。

これは、とある神から与えられた力だ。

だが、果たして、その神から与えられた力を持っているのは、千景
だけなのだろうか？

答えは、否。

『強制遂行』。当主のみにしか継承されない、自分より身分の低い者。
年齢、地位、財力、土地、人の優劣を決定づける要素において、相手
に勝つていれば、必ず相手にそれを実行させる事の出来る、対人絶対
命令執行権だ」

それがあつたからこそ、最も優先される項目である『地位』の点で
劣っている六道家を自在に操れたのだ。

それが、神樹によつて与えられた、上里ひなた、否、足柄火野を象
徴する上里家最大の切り札なのだ。

「上里家は、その人望も、地位も、土地も乃木家に勝っている。ついで
に、まだ当主の座についてないお前じゃあ、その強制遂行に逆らうこ
とは出来ないんだよ」

「そん……な……」

園子が、明らかに動揺で揺れる。

「もし、ここに来たのが翼で、強制遂行をかけられていたら、戦わざる
を得なかつたが、お前はそうじゃない。ここで俺を捕まえれば、俺は、
強制遂行の元お前によつて上里家に差し出される」

だから、行かない。行けない。そんな、勇者であつても抗えない力
を相手に、時間を食わせるつもりは、毛頭無い。

「……どうしても、ダメなの……？」

「ここで上里家を陥れようとすんなよ。もしそんな事をしようとすれ
ば、即座に翼に殺されるぞ……最も、強制遂行の発動条件が一体な
んなのか、検討もつかないがな」

ちなみに、何故千景がこの情報を知っているのかは、当然、杏たち

に聞いたからだ。

「だから悪いな。俺はお前たちと一緒にいられない」

そんな、あまりにも残酷な事実があるから。

どんなに非道な事をして、上里家の持つ強制遂行によって、勇者であつても抗う事の出来ない力によつて、何もかもが許容されてしまふ。

「でも……それでも……これ以上、私の友達を、苦しめないでよ……」

「そつか……でもごめん。俺はやっぱ戻ることには出来そうにない」

強制遂行は千景であつても破る事は出来ない。強制遂行とは、精神ではなく、体が反応してしまうものだからだ。意思は関係なく、ただ体はその命令を執行するから。

気付けば、園子の顔は涙に濡れ、くしゃくしゃになっていた。

その表情に、千景は、心が押しつぶされそうになるも、堪え、踵を返す。

「あ……」

「もう、俺を探すのはやめろ。余計苦しくなるだけだ」

「でも、このままじゃ……ユーゆうが……」

壊れてしまふ。それほどまでに、友奈の心は崩壊寸前なのだ。

「……ごめん」

だが、それでも千景は、友達よりその周囲の世界を選んだ。

生きていれば、必ず何かの幸せにたどり着けるはずだから。

その幸せに、自分の名前は——邪魔だ。

「あ……！」

千景は、顧みずに飛び上がる。

大赦に用意されたホテルにて、幸奈は、ベッドに身を投げ出していた。

「おい幸奈。一体いつまでそうしているつもりだ？」

「・・・敵の襲撃まで」

「そんな迷いなく答えるんじゃない・・・」

佐奈が呆れながら頭を押さえる。その膝の上では、美紀がすやすやと寝息を立てていた。

「その、だな。幼馴染と戦うのは、いささか、苦しかったと思うが、それでもうじうじしている暇はないと思うぞ？」

「それは・・・まあ、分かってますけど・・・」

彼女が落ち込んでいるのは、幼馴染である信也と戦ったからではない。

自分のとんでもない性癖についてだ。

(まさか私にあんな性癖があるなんてえええええええ!!)

「ああああああ・・・!!」

ベッドの上で悶える幸奈。

「ど、どうした？」

「嘘よお。私はあるな変態じゃないいいいい・・・!!」

「ほ、本当にどうしたあ!？」

「そうよ、信也君、信也君だけどあんな変態な私を見せるのは!そう!信也君だけ信也君だけ信也君だけ信也君だけ・・・」

「と、とにかく落ち着けえ!」

その直後、幸奈にどばしゃ!と水がぶっかけられた。

「・・・あれ?」

「ど、どうにか止まりましたね・・・」

我に返った幸奈に水をかけたのは、一人の巫女装束の少女だった。

「いや、別に水をかける必要はないんじゃないのか?亜耶」

「ええつと、実は師匠せんせいの教えでして・・・誰かの名前を連呼している馬鹿には水をかけろと・・・」

「それを鵜呑みにするんじゃない!!」

「あう!？」

彼女の名前は国土亜耶。防人部隊直属の巫女の一人であり、防人と最も親密度の高い巫女でもある。

「また足柄辰巳か・・・」

「ああ！師匠せんせいを責めないでください！それもこれも本当は引つ叩けっ
て意味を私が理解してなかったってだけで・・・」

「それもそれで問題だ！」

佐奈のツツコミが突き刺さる中、ふと襲撃者専用の部屋の扉が開く。

「おおい、防人のみんなが帰ってきたよ」

「ただ、いま・・・」

「ただいま亜耶ちゃん。つて、どうして幸奈はびしよぬれなの？」

「うおあ!?何があつたんですかあああああ!?」

「明日香、貴様は相変わらずうるさいな」

「こんな事するのは亜耶ちゃん以外にありえないでしょう？」

「がっはっは！また亜耶殿せんせいの師匠せんせいの教えとやらが炸裂したようだな
！」

「将真君、笑いごとじゃないよそれ・・・」

「あややがまた何かしでかしたか」

「あ、皆さんお帰りなさい！」

襲撃者である弘と真斗。それと防人の主要メンバーたちが部屋に入ってくる。

「亜耶ちゃんに変な事してないでしょうね？」

「むしろ私の方が被害を被つてると思うのだけれど・・・」

「とにかく風呂入ってこーい！そのままじゃ風邪ひきますよー！」

「というか、どうして正堂はそんなにハイテンションなんだ？」

「実は道中、蕎麦仮面なる人物を目撃して、それ以来ずっとこのまま
で・・・」

弘の説明にああなるほどと納得する佐奈。

「この香川に蕎麦文化を広めているという、謎の軽犯罪ハンターでし
たよね」

「特に彼のスポンサーと思われている蕎麦屋には毎日近所の子供たち
が足を運んでるとか」

「ああ！同じ諏訪民としてうれしい限りですわね！」

「そう言ってるのは貴様だけだ夕海子」
一気に賑やかになる室内。

「……」

幸奈は、その様子をただ、静かに見ていた。

そしてこうも思った。

自分も、道を間違わなければ、こんな未来もあったのではないかと。

(今更ね……)

しかし、首を横に振って、自分の首につけられた戒めに触れる。

これは、自分が世界を殺そうとした咎人としての証明。これが、自分に与えられる筈の幸福全てへの拒絶の証。故に、幸奈は、信也に思いを……

「どっせええええい!!」

「うげあ!」

直後、明日香の突き飛ばしが幸奈に炸裂する。

「な、なにすんのよ!」

「とにかくお前はお風呂に入って来い!そのままじゃ風邪ひくぞ!安心しろ!駄菓子は残しといてやる!」

「いやそういう問題じゃ……」

「とにかく入って来い幸奈。風邪を引けば、明日の戦いに響くぞ」

佐奈に言われたら、流石に従わざるを得ない。

「分かりました……」

「あ、私もご一緒してもよろしいでしょうか?」

「え?でも……」

「それなら私も入りたいわね。ちよつとした野暮用で泥まみれだから」

「ああ、春信パイセンとの訓練か」

「だったらわたくしもご一緒させてくださいな」

「わ、私も!」

「……」

「しづくよ、言わんと伝わらんぞ」

どうやら、他の女子陣もお風呂に入りたいそうだ。

「でも……」

「何迷ってるのよ。さっさと行くわよ」

「あ」

芽吹に手を引つ張られ、連れていかれる幸奈。

「さて、美紀、起きろ。お風呂行こうか」

「んんー……お風呂？行く行くー！」

「そうかそうか」

佐奈は膝に乗せた美紀を起こし、皆についていく。

何故だろうか。なぜ、みんな、自分に優しくしてくれるのだろうか。

その理由が、分からない。だけど、とても嬉しい。

だが、明日、こんな素敵な光景を壊しに来る奴等が来る。

ならば、守ろう。

幸奈は、無意識に握られた芽吹の手を握り返した。

夜は明ける。

「そろそろか？」

「正確には六時から三時間後。仕込みが発動するのはその十分前」

真武郎に言葉に、奏は双眼鏡を構えながらそう呟く。

「千景。上手く逃げられているかしら……」

「大、丈、夫。千景、は、強い」

雅の心配を取り払うように、冬樹が雅の肩に手を置く。

「一応、準備はすべて終わっているんだな？」

「さっきからそう言ってるだろ……」

海路にツツコミを入れる信也。そんな彼らに、奏は双眼鏡を目から離し、彼らの方を振り向く。

彼らが立っているのは、讃州市で一番高いビルの屋上。

「今は千景君はいないけど、言うわ。時刻は六時。今から三時間後に、敵が襲来します。私たちの役目は、襲来してきた敵の撃退。および、

撃破です。これから、創代様が己の力のほとんどを使つてこれの支援にあたります。街の人たちには事前に説明し、出来る限りの供物を捧げてもらっています。無論、神樹のように人体を捧げるようなものはありません」

一度、そこで話を切り、皆を見渡し、そして、今度は声を高らかにして言う。

「貴方たち七つの大罪に、指令です！世界を殺す神々を討ち、今この世界に、本当の空と確かなる海、そして、全ての恵みをもたらす大地を取り戻してください！これは『神命』です！」

『諒解！』

奏の言葉に、全員が応える。

「ハア・・・ハア・・・くそ、本当に真夜中中追いかけてきやがつて！」

街の路地裏で、壁に手をつけて息を荒げる千景。

『あと三時間で敵が来るわよ！』

「分かつてる・・・」

千景はどうかにか体を持ち上げ、息を整える。

「あと三時間で、あいつらに出くわす」

腰に隠した御神刀を握りしめ、千景は走り出す。

七時。目を開けた、友奈が見たのは、自分の伸ばされた左手。もう慣れたのだから、いい加減、こんな事しなくてもいいのに、と思いつつ、友奈は体を起こした。

そして、自分の右手を見て——異変に気付いた。

「・・・なに・・・これ・・・」

それを見て、狼狽した。

そこにあるのは、いつもの右手……の、筈だ。

問題なのは、その甲の一部の皮膚が、まるで、固まったペンキが剥がれるかのように剥がれており、その下からは、真っ赤な何かが見え込んでいた。

まるで、自分が人間の皮を被った何かのように――

決戦まで、あと、二時間。

開幕 反逆者（にんげん）VS 断罪者（かみのしんか）

—— 身体が、塵と消えていく。

それもそうだろう。それほど、無茶をしでかしたのだ。

死んでもはや骸と化した躰で、本来、人が行つてはならない領域へ足を踏み入れて、痛覚の無いまま、時間を許すまま、躰が完全に壊れるまで、全ての感覚が狂つていくのにまかせて、戦い続けた代償がこれなのだろう。

だけど、不思議と後悔は無い。

伝える事は伝えた。

守る事は守れた。

戦える事は戦えた。

やれるだけの事は、やった。

もう、十分だ。

—— だけど—— ああ、だけど、最後に、一言だけ、彼女に伝えたい事が、あった。

「—— 好きだ、友奈」

少年—— 千景は、そう、声どころか音にすらならない言葉を告げて、その意識を闇に投じた——。

二度と抜け出すことのできない、無限の闇へ、温かいぬくもりと一
緒に——

その数時間前——

「ぬおおお!!」

千景は全速力で街の中を走っていた。

「くそおー! どれだけ追いかければ気が済むんだあいつらア!!」

『地の果てまで追いかけてきそうね・・・』

彼の背後からは、六道家の刺客たちが明確な殺意を持って追いかけてきていた。

「ツ——」

(街中じゃ下手に御神刀は使えない・・・!)

『その上、相手は複数で、常に回り込もうと動いてる』

『あ、前の車に気を付けてください!』

歩道のすぐ近くに、不自然に止まっている車を見つける千景。

中の様子は、窓が反射して伺えない。

だが、その中に敵がいる事は分かり切っている。

ならばどうする? 簡単だ。

突然、手を地面についてハンドスプリングをする千景。その着地点は、車のボンネットの上。そのまま車に乗り上げて、飛び越える。

相手の目論見は、千景が車の横を通ると同時に飛び出て捕まえるという魂胆だったのだろう。だが、それは相手も予測済みのようで――

『頭ア!』

「ツ!」

頭の中で響いた歌野のシャウトに身を任せ、頭を思いっきり下げる。次の瞬間、千景の頭上を何かが音速を超えた速度で掠めた。

「つぷねえ! 射線だった!」

そう、狙撃だ。

千景の身体能力はすでに知られている。そして、その動き方も筒抜けだ。

ならば、歌野の精霊である『覚』の能力を使って相手の心理を読み取り、全ての行動において先読みするしかない。

これは、その為の力なのだから。

「伊予島さん！あとどれくらいだ!？」

『あと二十分・だけど、本当にこの時間なのかはわかりません！あくまで予測ですから・・・』

「だといいんだがなあ！」

叫び、千景は、なおも走る。

一方で――

「翼君！」

「須美ちゃん！」

息をあらげ、美森は翼と合流する。

「友奈ちゃんは・・・」

「ごめん、見つけれなかった・・・」

「そんな・・・それじゃあ、一体どこに・・・」

朝、いつも通り友奈の家を訪ねた美森だったが、友奈は家におらず、なんでも何かから逃げるかのように家を出て行ったらしい。

電話をかけても応答せず、メールを送っても帰ってこない。

だから、いま、勇者部を総動員して友奈を探しているのだ。

「春信さんも見つけられていないみたいだ」

「春信さんでも見つけられていないの？それじゃあ、どこに行ったの？」

今日は、敵が襲撃してくる当日。いわば開戦日。

そんな日に限って、友奈がいなくなる筈が無い。

きつと、何かあったのだ。

その上、今の友奈の精神状態は非常に危うい。下手をすれば、崩壊してしまうかもしれないのだ。

「友奈ちゃん・・・」

美森は、胸が押しつぶされそうな思いで、その拳を握りしめる。

そんな拳を、翼が優しく包み込み、その額に額を当てる。

「大丈夫、きつと見つかる」

「・・・うん」

翼の言葉に頷き、美森は、出かけた涙を拭き取る。

「今度は南の方を探してみよう」

「ええー」

二人はまた、走り出す。

そして、件の友奈はというと、実はそんなに遠くない場所でふらふらと歩いていた。

その右手には、包帯がきつく巻かれていた。

背中を丸め、両手を胸の前で握りしめ、ふらふらと覚束ない足取りで歩いている。

そして、地面を俯きながら歩けばどうなるか。

結果は御覧の通り。

「あ」

「うお」

他の通行人と当たる。

「すみません・・・」

「チツ、気をつけろ」

この場合、相手はしつかり友奈の事を避けようとしていた。だが、何故か友奈がその男の方へ向かっていき、結果、ぶつかったのだ。

故に、避けたのにぶつかったという事実が作られ、必然的に友奈が謝らなければならなかった。

しかし、そんな細かい事を気にしてられるほど、双方は器用ではない。というかそんな事を説明したら収集がつかなくなる。

ただ、友奈は、包帯を巻いた右手を、ただひたすらに握りしめていた。

剥がれかけていた皮膚。そこからのぞいた、赤い皮膚。中の血肉なんかじゃない。あれは真正正銘、何かの皮膚だった。

それが、どうしようもなく、怖かった。

だから、逃げた。

誰かにみられる前に、誰かに拒絶される前に。

「逃げなきゃ・・・逃げなきゃ・・・逃げなきゃ・・・」
ぼそぼそと呟くのを繰り返し、友奈は終わりの無い絶望を感じて
いた。

本当に、気が狂いそうだ。

このままでは壊れる・・・このままでは毀れる・・・このままじゃ・・・

その瞬間、友奈の前に、一人の黒尽くめの少年が現れた。

丁度曲がろうとしていた路地の角から、何かから逃げるかのように
飛び出してきた、その少年。

その少年の姿を見た友奈。友奈の姿を見た千景。

二人の視線が交わった瞬間——

『人間よ。己の罪を悔いるが良い』

戦争が始まった。

反応したのは一瞬。

何かが崩壊する音を聞いた千景は、すぐさま友奈から視線を切って
後ろを——四国大結界のある方向を見た。

そこに見えた、確かな穴。神樹が作り出していた、全ての幻想を壊
すように、そこに、確かに穴が開いていた。

神樹が作っていた幻影、嘘、虚偽。その全てを引っぺがすかのよう
に、そこに、穴が開いた。

それを認識したなら、迷う必要は無い。

千景は、腰に手をまわして、御神刀の鐔を弾き飛ばす。

そして、叫ぶ。

『天鎖刈』 イイ——！！』

光が、迸る。

千景の足元に鎖の文字を携えた輪が出現し、瞬時に千景の服装を白い戦装束へと換装。ものつくりの神、創代によって作られた、対魔器破壊兵装。今は、神を討つ、対神兵装。

エーデルワイスを想起させる白を身に纏い、千景は飛び上がる。

天高く、街の全てを見渡せる、ほど、高く飛び上がり、そして、敵の侵攻を確認する。

敵が空けたであろう穴から、無数の白いウジのようなもの——言わずもがな、人類の天敵たる、『バーテックス』だ。

人から空を奪った、張本人。

それらを引き連れるかのように現れるのは、彼らが集合して出来た存在、完成型バーテックス。ご丁寧に、牡羊、牡牛、双子、蟹、獅子、乙女、天秤、蠍、射手、山羊、水瓶、魚、そして蛇遣。

ご丁寧にオールスターが揃っている。

つまり、これからあれらと戦わなくてはならないという事だ。

樹海化の発動は感じられない。想定通り、封じられているようだ。

故に、民間人が巻き込まれてしまう——。

(ふざけるな)

千景は、心の中でそう呟き、そして、胸いっぱい息を吸う。そして——

「創代様ああああああああああ!!!」

思いつきり、叫んだ。

すると、讚州を中心とする広範囲に及ぶ街や都市を囲うように光の輪が出現する。

その中心には——『脱』の字。即ち——『脱出』。

ここにいて、全ての民間人を、ある地点に脱出させる。

その光が、目も開けられないほどに輝くと、やがてその光は収まり、輪が囲っていた場所の人々のほとんどが、その場から消えた。

「奏さん！」

『今確認してる！……一般人は全員大赦敷地内へ送り届ける事に成功したわ。だけど……防人および襲撃者、そして、勇者部だけは残っ

た』

「く、やっぱりか！」

この『脱』の力は、創代の任意によって対象を特定の場所へ脱出させるのだ。ただし、創代が脱出させる必要はない、あるいは脱出させてはならない者たちを選んで残らせる事が出来ないのだ。

この場合、創代の判断は——救導者だけでは敵を抑える事は出来ない、だ。

だが。

「その方がどちらにしる楽でいいか……俺はいくぞ！」

『ええ、第二段階もすぐよ』

次の瞬間、町の各所が光りだし、そこから巨大な回転式機関砲やカノン砲、その他、艦砲やら機関銃だかが突如として現れる。

それら全てが、創代によって作られた、対神兵器。

だが、生憎と砲手がない。しかし、雅が真解を発動させなければの話だ。

「雅さん！」

「任せなさい！」

雅が、その鉄扇を開き、高らかに叫ぶ。

「真解——『重皇無尽』!!」

雅の装束が、一瞬霞と消え、すぐさまその体に、赤い鮮血色の振袖の着物を身に纏う。

それは、まるで、高貴なる存在と自らを誇張するかのよう。

『『皇帝権限』』

雅が鉄扇を振るう。

「聞け！意思なき鉄くずどもよ！」

そして、高らかに声を上げる。

「今、何の役にも立てないお前たちに、意思と役目をくれてやろう！その体に目があるならば見据えよ、耳があるなら聞き届けよ！あれは我らが領土を蹂躪せしめし憎き蛮族である！奴等が貴様らの敵であるならその銃身を持ち上げよ！熱を帯びよ！意思を示せ！お前たちは兵器！血を浴びてこそその真価が理解される鉄くずだ！ならば鉄く

ずらしく、この我に使え、敵を討ってみよ！これは、皇帝命令である！！」

雅の叫びは、やがて、物言わぬ鉄であった兵器たちに息を吹き込んだ。

その体を輝かせ、熱を帯び、やがて雄叫びのように、その銃口から火を噴いた。

放たれた弾丸は、全てバーテックスを屠るに値する威力を誇り、瞬く間に侵攻してきていたバーテックスの大群の進撃を止めた。

「名演説です」

「ありがとう」

これが、雅の重皇無尽の能力である『皇帝権限』。

雅の第二の文字は『皇』。支配を意味する文字である。

その力を使い、創代が作った銃器たちを支配して今、迎撃にあたらせているのだ。

今、バーテックスたちがいる方向では、凄まじいほどにバーテックス、星屑たちが墜ちて行っている筈だ。

機関砲、カノン砲、艦砲、迫撃砲、対空砲などなど、数えたらキリがないほどの大量殺戮兵器が、数々の建物の屋上や壁に出現していた。

それら全てが目の前からやってくる敵を撃ちぬいていく。

これが、作戦の第二段階。雑魚の全部を、雅の能力と創代の力によって封殺する。

これによって、救導者は、星屑を気にする事なく戦える・・・筈なのだが。

「やはり完成型は無理があったか」

レオが放った火炎弾。サジタリウスの放った矢。ヴァルゴの卵型爆弾。キャンサーの反射板。アクエリアスの水。それらが反撃して創代が作った兵器たちを破壊していつていた。

そのほかのバーテックスも、あまり効いている様子が無い。

「奏さん、敵に核は？」

『あるわ。だけど、視覚化は可能よ』

「分かった。真武郎さんにやってくれ」

『分かったわ。任せて』

千景との通信を切り、奏は真武郎に連絡を送る。

「真武郎さんー!」

『オーケーだぜ奏ちゃん』

奏の声に答え、真武郎はその手の上で槍を躍らせる。

イメージするのは、かつて日本を恐怖に陥れた、人類最凶の爆弾兵器。

「あん時はかなり手加減したからな・・・今度は、容赦しねえぜ」

御神刀に与えられた、人体を切らない機能、物を破壊しない機能全てをカットした状態で、その兵器を打ち込んだらどうなるか。

「喰らいな、化け物ども」

真武郎は、槍を大きく振りかぶる。

「標的確認、方位角固定——我は全てを吹き飛ばし、全てを消し去る者、故に我は不滅也

——『核^{アンクリア・エクスプロージョン}爆弾頭』、吹き飛びなア!!」

真武郎が放つのは、全てを吹き飛ばす核兵器の一撃。

その一撃に、神の力が込められていけば、いくらバーテックスでも、防ぐことは出来ない。

故に、核が彼らに炸裂する。

光が奴等を飲み込み、音が全て消え去り、全てを奪い去っていく。それが、核という兵器の恐ろしさ。光が収まれば、全てが消えているというその兵器は、人類の歴史上、最も忌むべき代物である。

故に、それは人類が犯した大罪の一つでもある。

その大罪の一撃を、完成型バーテックス全てが受けた。防ぐ暇もなく。

光が収まれば、そこには何もいなかった。

「終わったぜ。これでいいのか?」

真武郎は、千景に連絡を送る。

『ええ。これで出鼻は挫けた。だけど、こっからが正念場です』

千景は、鎖による立体起動で街の中を飛び回っている。

それを確認している奏は、町全体を見渡せ、かつ、戦場から離れた場所から、その様子を見ていた。

「では、これより『四大総力作戦』を開始します！他の者たちと協力し、敵幹部の打倒にあたってください！」

『諒解！』

そして、その返事と共に、開けられた穴から、黒い流星が讃州の街に落ちた。

「何が起きた・・・!?」

三ノ輪剛と三ノ輪銀は、突如、あまりにも早い展開で起こったバーテックスの出現と消滅に困惑していた。

「兄貴・・・これって・・・」

「敵が来たって事なんだろうな・・・たぶん、俺たちじゃない誰かがやってくれたんだろうけど・・・」

「でも、アイツらやってくれたって事は味方って事だよな！ならいいじゃねえか！」

銀はポジティブにそう述べる。

「・・・そうだな」

その銀の言葉に、剛も頷く。

「とりあえず、今は風たちと合流しよう」

「ああ！」

そうして走り出そうとした所で、彼らの前に、黒い流星が墜ちた。「!?」

それに、彼らは思わず足を止める。

粉塵を巻き上げ、その黒い何かから現れたのは、仮面をつけたひよろりとした男だった。

「・・・ふむ、どうやら先手を打たれたようですねえ」

「・・・誰だお前」

剛が男に向かって問いかける。

「おや、どうやらまだ残っている人間がまたいたとは、これは探す手間が省けて助かりました」

男は、剛たちを見つけると、本当にうれしそうに明るい口調で喋る。しかし、そんな明るい声が、すぐに恐ろしいものだと理解するまで、二人はすぐに理解した。

「では早速死んでください」

「兄貴イ!!」

瞬間、剛の視界が空を向いた。

「・・・は!?!」

のちに、背中に衝撃を受ける。

「が!?!」

「あつぶな・・・」

剛は何が起きたのかはわからなかったが、どうやら銀に助けられた事だけは分かった。

理由は足に来る鈍痛。

おそらく銀が剛に足払いをして後ろ向きに倒したのだ。

「おやあ? 確実に首を跳ねたつもりですが、どうやら外してしまったようです」

「お生憎様、アタシらはそう簡単にやられる訳にはいかないんでね」

「ああ、お前のお陰で俺らのやる事が分かったぜ」

剛と銀が、ポケットからスマホを取り出す。

「はて? 何のことでしょう?」

「簡単な話だ」

「ニテメエをぶっ飛ばすツ!!」

その言葉と共に、剛と銀は勇者システムを起動する。

剛はアフエランドラを想起させる黄。

銀は竜胆と牡丹を想起させる紅白。

剛は巨大な戦槌を、銀は巨大な双戦斧を持ち、敵に向ける。

「この世界は終わらせねえぞ、糞つたれども!」

「そう簡単にアタシら三ノ輪兄妹を倒せると思うなよ!」

高らかに叫ぶ二人。

ら光の壁が現れ、それが迫ってから、樹海に誘われる。私たちのシステムでは、その光の壁の中に無理矢理入るようになっていたけど、そもそもからして貴方たちじゃ樹海の中に入ることには出来ないわ」

「それもそうか・・・」

芽吹はしばし考え込む。他の者たちも同様だった。だが――。

「なあ？何をそんなに考えてるんだ？」

この明日香という天性の馬鹿は違った。

「街の人たちが消えたついでにいつても、どっか安全な場所に行つたつて事だろ？だつたらそれでいいじゃねえか」

明日香が、背中の大きいほうの大剣を抜き放つ。

「だつたら俺たちのする事は変わらねえ。敵を倒して倒して倒しまくる！そうだろ！」

自信満々に言い切るその勇ましい姿は、いつもの彼らしくて、芽吹はしばし茫然とした後に、すぐに噴出した。

「ぶつあははは！」

「なんだよ・・・」

「ごめんごめん・・・でも、そうね・・・」

一度領いてから、芽吹は、自分の仲間である防人たちの方をむいて、叫ぶ。

「これより私たちは壁の向こうから攻め込んできたくそつたれ共を迎え撃つ！私たちが勇者に劣らない存在だって事を、大赦の馬鹿どもに分からせてやりましょう!!」

『オオ――ツ!!』

雄叫びが、仮初の空に轟く。

この人望、これは、芽吹自身が己の行動で勝ち取ってきたものだ。

芽吹が、あの選抜での挫折からの今日までの努力の全ての集大成が、これなのだ。

故に――

「――立派になったね。芽吹ちゃん」

「ッ!？」

突然、聞こえた聞き覚えのある声。

その声に、芽吹の表情が僅かに強張る。

だが、自然と恐ろしい感じはしなかった。

「・・・六道・・・翼・・・」

「久しぶりだね」

そこには、ブルースターを想起させる青い装束に身を包んだ、六道翼がそこにいた。

「六道翼!?!」

「えええ!? 六道様あ!?!」

「翼様がどうしてここに・・・!?!」

「・・・え? だれ?」

優理はともかく、一度顔を合わせた事のある雀や面識のある夕海子はとても驚いている。

ただし、明日香だけが知らずにボケている。

「あらあら、翼君の名声は、どうやら防人の人たちにまで広がってるのね」

「当たり前でしょ東郷・・・翼様を一体なんだと思ってるのよ・・・?」

「未来の私の旦那さん♪」

「はいはい御馳走様あ・・・ったく甘すぎるつつの」

その後ろからは、東郷美森と三好夏凜まで来ていた。

「東郷様や三好様までえええ!?!」

「え? いやだから誰なんですかあの人たち?」

「おまつ、現役勇者の事を知らないのか!?!」

「へえ、現役勇者・・・なにいいいい!?!」

そこで事の重大さを理解した明日香が絶叫する。その直後、なぜか高速連続前転で翼の前に出ると、いつ取り出したのか、否、どこにしまっていたのか色紙とサインペンを差し出してきた。

「サイン下さあああああいい!!」

「違うでしょ!?!」

見事なドロップキックを芽吹から食らって吹っ飛ぶ明日香。

「あはは・・・ず、ずいぶんと個性的な子だね」

「あいつが天性の馬鹿っただけです……それにしても、どうして……」
「いや、何やら威勢の良い声が聞こえたからね。誰かと思っけてきてみたんだけど……あの時の言葉の意味、分かってくれたみたいだね」
「ええ……まあ……」

芽吹は恥ずかしそうに頭を掻く。

そんな芽吹の頭にぽん、と手を置く翼。

「それが聞けただけでも十分だよ。さてと……」

ふと翼は、防人たちと一緒にいた襲撃者たちを見る。

「……頼りにしてるよ」

頬を緩め、翼はスマホを取り出す。

そして、何やらのメッセージを送ったあと、それを仕舞う。

「それじゃあ、皆、聞いてくれ。これより僕らは、合同で敵の迎撃に当たる。既に、僕らの他に動いている勢力がいるみたいだから、彼らとも出来る限り協力していこうと思う。防人の指揮は芽吹ちゃん、襲撃者の動かし方は佐奈さんに任せる。各自、それぞれが最善だと思う行動をとり、誰一人死なずに勝つ。いいかい、これは遊びでも訓練でもない……これは戦争だ。周りの状況一つで全てが変わる。だから、皆、勝とう！」

翼のその言葉に、皆が頷き。

「行動開始！速やかに、敵を迎撃せよッ!!」

『オオ——!!』

再度、雄叫びが轟き、その場にいたもの達が一斉に動き出す。

「芽吹ちゃん！防人の中で勇者と同等ぐらいに戦えるのはどれくらい!?」

「私を含めて四人……いえ、八人よ!」

「分かった！僕はこれから他の勇者部の皆と合流するつもりだから、指揮は任せよう!」

「ええ、防人の力を見せてあげるわ!」

芽吹の自信たっぷりな言葉に頷き、翼は、飛ぶ。

背中に装備されたスラスタールによって、勇者で唯一の飛行能力を有する翼ならではの利点だ。

青き流星となりて、翼は天高く飛ぶ。

「さあ！事前に説明した通り！各自、それぞれのグループに分かれてそれぞれで敵の迎撃に当たって！いいわね！」

『了解！』

「様になつてるじゃない」

芽吹の姿に、夏凜が素直に称賛を送る。

「当然よ」

芽吹は得意げに答える。

その直後、芽吹たちの目の前の広場に、複数の黒い流星が落ちる。

『!?!』

そこへ、視線が集中する。

舞う粉塵、そこから四つのシルエットが移される。

「……んだあ？誰もいねえじゃねえか」

「何を言っているの？あそこにいるじゃない。愚かな人間どもが」

「アハ、アハ、いたよいたよ。断罪するべき罪人がいっぱい」

「ふふ、そうだな」

赤、青、緑、茶。それぞれ別々の色をした衣装に身を包んだ、四人の女性。

「……あれ、どう思う？」

芽吹の言葉に一同は……

「敵だな」

「とりあえず倒す奴」

「打ち抜く対象」

「畑の肥料」

「なんか知らないがぶっ飛ばす相手！」

「なんでそんなあつさり!?!」

雀の懇親のツツコミの無視し、一同は襲来してきた敵を見据える。

「よし、全会一致という事で」

「待って私は——」

「あれは私たちがやるわ！いいわね！」

「話聞いてえええええ!!」

高いビルの屋上から躍り出る、芽吹、明日香、夕海子、優理、雀、将真、しずくもといシズク、昴の八人が躍り出る。

「頼んだわよ、芽吹！」

「ツ！ええ、そこで指をくわえてみてなさい！夏凜！」

夏凜の激励に答え、芽吹たちは目の前の四人の敵と対峙する。

「へえ、自ら断罪されに来るとは、良い心掛けじゃねえか」

「誰が断罪されに来たですって？ 私たちは貴方たちを倒しに来たのよ」

「あらあら、罪人の分際でもくもまあそんな身の程を弁えない発言が出来るものね」

「身の程ってなんだお前ら一体何様ぞクラア！」

「はいはい明日香落ち着け、見苦しい」

「アハ、アハ、もうやってもいい？ いいかな？ いいよね？」

「ほぎくなその姿で餓鬼が貴様」

「ひいひい！だめだよ優理様！こういう手合いは必ず強敵って相場が決まって……」

「ハツハツハ！心配するな雀！俺たちは負けん！」

「ずいぶんと自信ありげに言うな、罪人共。これから断罪されるのはどちらか、しっかりと分からせてやる必要があるようだな」

「残念ですがわたくしたち、断罪されるような事は一つもしておりませんわ。それに、貴方たちに断罪される筋合いもありません」

防人たちが武器を向ける。一方の相手も、その手に持つ武器を構える。

戦いの火ぶたは切られる――

各所で、戦いが始まる。

「まさか、こうして一晩でまた再開できるなんて嬉しいんよ」

「そんな呑気な事を言ってる場合か」

彼らの前にいるのは、憎悪のままれた感情を纏い、空中を浮遊する一人の女性・・・否、少女。

その、殺意の圧に、二人は、今にでも膝をつきそうだった。

「ふふ、私の相手は貴方たちですか？」

「ああ。アンタに関しては、絶対に俺たちがやらなくちゃならないからな」

「ここは壊させないよ。絶対に」

二人は、それぞれの力を解放する。

水蓮を想起させる紫の装束を園子は纏い、エーデルワイスを想起させる白の装束を千景は纏う。

彼らの前に立つのは、『憎悪』のヒュアツインテ。

その周囲に、八つの剣を操る、憎悪の化身である。

「ふふ、では、裁判を始めましょう。断罪されるのは、もちろん貴方たちだけですけどね」

そのヒュアツインテの言葉に、二人はこう答えた。

「言ってる」

戦いの火蓋は、斬って落とされる――

そして、戦場に、一人の男も向かっていった。

「―――どういう事だ」

その手には、一枚の紙。

とても老体とは思えない、否、人とは思えない脚力で森を突っ切って讚州へ向かうこの男。

その表情は切羽詰まっております、まるで、何かを探し求めるかのように焦っていた。

「どういふことなんだ・・・一体・・・!？」

足柄辰巳は、その紙に書かれている事を確かめる為に、戦場へ向かう。

処刑衆

「——うわああああ!!」

風は、今、全力で走っていた。

それは何故か。簡単だ。

炎が襲ってくる。

「何よ何よ何よあれ!? 炎ってあんな風に襲ってくるつけエ!?」

「そんなわけないでしょお姉ちゃん! どっからどうみても敵の攻撃でしょ!」

「やっばそうよね!」

腕に抱える樹にそう怒鳴られつつ、風は背後から襲ってくる火炎から全力疾走で逃走しながら見る。

(これって、やっぱり園子が言ってた敵の大規模侵攻って事よね)

突如として飛び上がる風。その先にはビルの壁があり、それを蹴つて、次の角を三角飛びの容量で曲がる。

それでも炎は襲ってくる。

まるで、こちらを呪い殺さんとばかりの悪霊の大群のように。

突如として、神樹が作った壁を破壊された。それまでは、想定のうちだった。

だが、突如としてビルや道路に出現した重火器や大砲、そして周辺の町から、人が一気に消えた事、挙句の果てには、先ほどまでそこにいた大型バーテックス全てが消し飛ばされる始末。

雑魚どもはまだ残っている物の、それも殲滅されるまで時間の問題だろう。

しかしながら、後ろから襲ってくる炎は一体なんなのか。

まるで津波のように、そして意思を持っているかのようにこちらをピンポイントで襲ってくる。

止まれば、すぐさま炎に飲まれてしまうだろう。

その様子を、空中で見ている者がいた。

「ふっふっふ・・・この『火刑』のレジーナ様の『魔女狩り』から逃げられるとは思わないことねえ」

まるで相手を見下すかのようなゴシックドレスに身を包んだその女性、レジーナはその手に持つ鞭を振り上げる。

「さあ、好きだけ逃げ惑いなさい。逃げられないと悟った時、それが貴方たちの最後よ^{ぜっぽう}」

また、別の場所では。

「オツラアー!」

信也が蹴り上げる。その対象は——獅子。

それだけではない。

背後からは虎が襲い掛かり、それを蹴り上げた足の勢いをそのままに回転してオーバーヘッドキックをその虎の頭の上に叩きつける。

怯んだ所を飛び上がって距離をとる。

「もー、だめじゃないかきみい」

そこへ不満を漏らすような声。

「ちゃんと喰われてくれないと、処刑にならないじゃないか」

「うっせえよ、ガキが」

「ひどいなあ。ボク、これでも君より年上なんだよ?」

「知るかそんな事」

信也が睨む先には、シルクハットをかぶった金髪の少年。その手には洒落たステッキ。

「んー、そんな事、聞いていいのかなあ?」

「あ?」

突如、信也の背後からハイエナが襲い掛かる。

しかし、そのハイエナの横腹を、白露が蹴っ飛ばす。

「なんの事だオラ」

「ちよっと、勝手にしゃべってないで手伝ってよー、優ちゃんが一番噛まれてるんだよ?」

見ると、確かに文字通り複数の肉食獣たちに噛みつかれている優の姿がある。しかし、本人は全く平気そうだ。

「はっ、心配する事あねえよ」

信也が態勢を低く構える。

「アイツの強さは、俺が一番よく知ってんだよ」

次の瞬間、信也の姿が掻き消える。

「あ、そう」

白露がそう呟いた直後、周囲にいた肉食獣のほとんどが吹っ飛ぶ。

『神速蹴』
マツハキツク

得意顔で、技名を言う信也。

「……なんですかそれ」

そこへ、優の声が聞こえたかと思うと、次の瞬間、優に噛みついていた肉食獣たちが一齐に血を噴き出して、アスファルトの地面の上に沈む。

「貴方に言われても、全然嬉しくないんですけど?」

「その割には、嬉しそうだよね」

「そんな事ないですよ?」

そんな余裕そうな彼らに、少年はとても不満そうな顔になる。

「むう……つまらないなあ」

少年は、本当につまらなそうに、腰をかけていた瓦礫から立ち上がる。

「じゃあ、面白くしょうか」

少年が、そのステッキの先を地面に向かってとんと叩くと、突如として地面に倒れ伏していた肉食獣たちが起き上がり、その毛皮を赤黒く変質させていく。

『猛獣刑』のレンリ。今から君たちを処刑する。——猛獣たちの餌としてね」

「はっ、言ってるよ。第二ラウンドだ」

「ッ！」

雷鳴が、春信を襲う。

しかし、無意識化での回避を可能とする春信には、その攻撃は当たるどころか掠ることすらない。

「んー、今のは確実に当てたと思っただんですがねえ？」

「・・・『電気椅子』か」

春信が目の前に立つ巨漢の体の一部が機械の男に向かってそう呟く。

電気椅子というと、囚人をその椅子に括り付けて、電流を流して殺す処刑法の一つである。

「イグザクトリー。わたくしは『感電』のマキム。神官には劣りますが、電撃使いでございます」

オーバーにリアクションをするマキム。

「そうか」

しかし、春信はそれを聞くだけ聞いて——その首を刈りに行った。

「おおっとー！」

だが、マキムは体に電気を纏わせると、一瞬でその場から離れ、まるで電流のように春信の斬撃を躲した。

「危ない危ない。危うく斬られる所でした。しかし、これで確信しましたよ」

マキムは、春信に指を突き付けると、いきなり叫びだす。

「貴方は神の使いである我々『処刑衆』に牙をむいた！これはまさしく法への反発、神への反逆、我等が主、マジアクルス様に逆らうという意味の表示！これ即ち、貴方たちは罪人となったのです！わかりますか!? 貴方はこれから、この私によって処刑だんぎいされるのです！」

喚くように叫び散らすマキム。

しかし春信はなおも冷たい視線を彼に送る。

「無駄話が良い。俺はこれから他の仲間と合流しなければならぬ。そんな事を喚く時間があるなら、さっさと俺を殺しに来てい」

「ほう、この私に対して挑発とは……いいでしょう！その罪の重さ、私の電撃によって思い知るが良い!!」

電気を纏い、マキムは、春信に襲い掛かる。

斬撃が飛ぶ。

それを銀は躲す。すかさず剛が反撃に出るが、それよりも早く、次の斬撃が飛んできて、それを戦槌の柄で受け止める。

「ぐうつ!?!」

吹き飛ばされ、着地する剛。

「手強いな」

「ああ……なかなか攻めきれない」

三ノ輪兄妹の目の前にいるのは、カタロフと名乗った仮面の男。

「シエエエイッ!」

男が手を振ると、そこから地面が五本の線状に裂け、銀たちの元へ飛んでくる。

「うおあ!?!」

「チイッ!」

それを躲す二人。

「くそ、何なんだあの斬撃!?!」

「わからない……でも、分かるのはあれが不可視の斬撃ってことぐらいだ!」

飛んでくる無数の斬撃。どういう原理か、それはカタロフが腕を振ると同時に飛んでくるといふ事だけしかわからない。

(手に秘密があるのか?それともあれはただのモーシヨンで、本当はもっと別の何か……それこそアタシの体質のような骨の無限生成と似た何かか?くそっ!わからない!)

飛んでくる斬撃を躲しながら、そう思案に暮れるも、何もわからない。

「……」

「……!? 兄貴!?!」

だが、突如として剛が避けるのをやめる。

「何をして——」

「ほう！自らその首を差し出しますか！いいでしょう！お望み通り、その首、斬り落としてあげましょう！」

道路の中央に仁王立ち、攻撃を待ち構える剛。

「兄貴！」

「もう遅い！」

銀が助けに入るも、カタロフはすでに右腕を振り切っていた。

斬撃は飛び、剛の首へ向かって飛ぶ。

「おおおおおおお!!」

だが、それに対して剛はあろうことか、戦槌を振りかぶった。

その巨大な槌が変形し、反対側からジェット噴出孔が出現し、熱をためる。

「必殺——」

斬撃が迫る。

だが、剛は臆することなく、その戦槌を振るう。

「——ジェットハンマーアアアアア!!」

正面衝突。押し負けたのは、剛。

押し負けた剛は宙を舞い、やがて地面に落ちる。

「兄貴！」

悲痛な悲鳴を上げて、銀は剛にかけよる。

「いつてて……」

「大丈夫か!?!」

「ああ、安心しろ……でも、お陰でアイツの能力の正体が分かったぜ」

「え、本当か!?!」

剛は立ち上がり、カタロフを指さす。

「お前の能力の正体。それは、空气中に漂う塵や目には見えない程小さえ小石をかき集めてワイヤーにして、それを何らかの力で結んで強力なワイヤーカッターにしている。さっきのでかなり近くで見ることが

出来たからな」

ニツと笑う剛。

それに対して、カタロフは。

「……ご名答。まさか、貴方のようなガサツな方に私の『見えざる断頭台』ギロチン・オブ・ダストを見破られるとは……」

「お前らは一人一人そんな能力持つてんのか？だとしたら残念だったな。そんなんじや俺たちは倒せねえよ」

「……不愉快、実に不愉快です……あなたたち罪人が、我々断罪者に歯向かうなど、言語道断。あつてはならない事なのです！」

カタロフが、腕を振るう。

それによつて、見えざる刃が飛来する。

しかし、その一撃は全て銀によつて防がれる。

「ネタがわかりやこつちのもんだ！」

「何……!?!」

銀が使っているのは辰巳の勇者システム。彼女本来の勇者システムは夏凜が持っているからだ。

しかし、であるならば彼女が辰巳の竜の力を使えないという道理はない。

竜は元来、炎を吹く存在。故に、斬撃の正体が目に見えない塵であるのなら、それを連鎖的に全て燃やしてしまえば良い。

「舐めるなよ……お前らが思っている程、俺たち人間は甘くないぞ！」

さらに、剛の力も本質は炎。さらに彼の精霊である分福茶釜は、幸運を呼びこむ妖怪であるのと同時に、茶釜であるがゆえに火にくべられる存在。

故に、剛もカタロフの攻撃を防ぐことが可能。

「ぐ……ぎぎ……人間風情があ……!!」

怒り心頭という風に体を震わせるカタロフ。

「いいでしょう……お前らがそう来るといふなら、私はこうするまでです！」

「ニツ!?!」

カタロフが片手を掲げる。すると、空中に無数の刃——ギロチ

ンの刃が現れる。

「なぬ・・・!?!」

「そつちで来るかよ!?!」

それに驚く二人。しかし、そうしている間にカタロフはその腕を振るう。

『パーズング・ギロチン
踊る断頭台』

そして、二人に無数の断頭台の刃が襲う――

炎、風、水、土、四大元素と呼ばれる四つの敵意が、今、防人の八人の襲い掛かる。しかし――

「だらっしやああああ!!」

明日香の『正す』力で、全て無効化される。

そこへすかさず、優理の矢と将真の石の弾丸が放たれる。

それだけでなく、雀以外の銃剣持ち全員の銃口からも弾丸が発射される。

それを、敵の四人の神官はいとも容易く躲してしまふ。

「チツ！あの馬鹿そうなやつが厄介だな」

「ほんと、無能そうな猿の癖に、忌々しいわ」

「ムツキィー！猿を舐めんなよテメエらあ！」

「明日香、そういう事じゃないと思うわ」

優理が弓弦を引き霊子の矢を無数飛ばす。

「行くぞ！明日香、芽吹！」

「ああ！」

「いつでも行けるわ！」

「では・・・そいや！」

将真が踊り、それによって地面が盛り上がり、明日香と芽吹を投げ飛ばす。

「アハ」

ふと、緑の装束を着込んだ少女がその口角を吊り上げる。

次の瞬間、その姿が電気と共に掻き消えると芽吹の目の前に現れる。

「な!?!」

「私は操る元素は風。知ってる? 雷の元素はね、風なんだよ」

掌から、雷が放たれる。

しかし――

「発動が遅い!」

「え!?!」

芽吹がその手首をつかんで引つ張り、少女の頭上へ飛び上がる。寸前で手を離れた事で、電撃は直撃せず、そのままあらぬ方向へ飛んでいく。

「ハアツ!」

「うあ!?!」

そのまま背中を蹴り飛ばし、さらに飛ぶ。

「ヴェント!」

赤い装束の少女が叫ぶ。しかし、

「フォイア!」

「ッ!?!」

「隙だらけだぜ!」

赤い装束の少女――フォイアの背後へ飛んできていた明日香が、右手の大剣を振り下ろす。

振り下ろされた大剣は、フォイアの持つ槍のような錫杖、否、錫杖のような槍によって受け止められるも地面に向かって落ちる。

だが――

「舐めるな!」

「うおお!?!」

フォイアが放ったのは、炎の鞭。それが明日香の足に巻き付き、無理矢理道連れにしようとする。

「くっそ・・・!」

すぐさま切り落とすも、それが炎なうえにすでに上に行くための力

が無くなった為に、明日香も地面に向かって落ちていく。

建物の屋上に着地した芽吹はその明日香の姿を見て叫ぶ。

「明日香！」

「心配すんな芽吹！俺はそう簡単にやられねえよ！」

「余裕ぶっこいてんじやねえぞ！」

フオイアが、炎の矢を乱射してくる。

「俺は勇者の素質はねえ……だが、それでも俺は——」

明日香は、両手の剣を振り回す。

「——勇者になああああある!!」

「なッ!？」

一見、がむしやらに振り回していると思うが、その剣が振るった剣は、明日香に直撃する矢のみ、全て叩き落していた。

そのまま二人して地面に落下。

土煙が舞う中、明日香は悠然と剣を突き付け言い放つ。

「さあ、かかってこいやア！」

「人間風情が……ッ！」

フオイアがその顔を激怒に変える中、芽吹は屋上でその様子を見て呆れていた。

「あの馬鹿……ま、それがアイツらしいっちゃアイツらしいけど……」
いつもの事にふつと微笑み、後ろに向かって銃剣の引き金を引いた。

何か、ガラスが砕けるような音が響き、振り向けば、そこには青い装束の少女——ヴァッサーが、無数の氷の矢を生成して佇んでいた。

「貴方が遊んでくれるのかしら?」

「遊ぶ……? いいえ、違うわ。これは断罪。罪深き貴方たち人間への

粛清よ」

「冗談。私、今まで裁かれるような罪をした事ないのだけけど?」

「何をいうかと思えば、貴方たち人間は今まで数多くの罪を犯してきたでしょう? 戦争、紛争、麻薬の売買、殺人、窃盗……挙句、この神世紀という時代になっても、数多くの勇者を使い潰し、尊厳を踏み

躰り、都合の良い道具と解釈してきた・・・さらに、人々を騙してまで自らの体裁を守ろうとする大赦の行いは見過ごす訳にはいかないのよ」

「それについては大いに同感。危うく私たちの大切な仲間を死なせる所だったわ。だけど――」

芽吹は、銃剣をヴァッサーに向ける。

「――私、神って奴がすっごく嫌いなよ。神樹も異世界の神も、全部が思い通りになってるって思ってるような連中の思惑通りに動く事が、心底屈辱的で、私の最も嫌いなものの一つなのよ。神風情が人間を断罪する？ふざけんな私の罪は私のもの。この世界も人間のものだ。神如きに壊される程、柔なものじゃないのよ」

芽吹は、断言する。

「神に断罪されるぐらいならその神って奴を殺す。異論は言わせないし、もちろんこっちの損害はゼロでいかせてもらう。そう簡単にやられるとは思わないでよね」

勇者の歴史において、代ごとに犠牲にならなかった勇者はいなかった。

防人は総勢五十人。元々、犠牲を覚悟したうえで編成させた、勇者に選ばれなかった勇者候補者たちの集まりのようなものだ。

そんな、勇者よりもあるかに多いチームを、誰一人として死なせない芽吹は、まさしく、勇者の歴史において、他者を生かす事において最も秀でた勇者と言えるだろう。

「・・・神の臣下である私の前で、神を愚弄するか、人間」

どす黒い威圧が、場を支配する。

その威圧に、芽吹は冷や汗を流す。しかし、その表情は笑ったままだ。

「いいでしょう。この四神官が一人、『水』のヴァッサー。今から貴方を断罪してあげましょう。そう簡単に死ねるとは思わないでください」

「はっ、だったらこっちは一瞬で片付けてやるわ。せいぜい、死んだ事に気付かない事を祈るわ」

銃剣を構え、芽吹は、飛来する氷の槍に向かって突撃する。

その一方で、アスファルトの上、将真たちの方では。

「ふんぬ！」

将真が、土の拳を、同じように向かってくる土の拳と正面衝突させる。

「チツ、よりもよって私と同じ『土』とは、忌々しいな。人間は」

「ハツハツハー！俺はこれでも農家出身でな！大地の事ならなんでも分かるぞ！」

「ぬかせ。無知な人間どもが」

茶色の装束を着た少女——エアデが忌々し気に舌打ちする。

一方の将真は豪快に笑うのみ。

「おい将真、油断してんじやねーぞ」

しかし、シズクがその足を蹴る。

が、蹴ったはずのシズクが足を抑えてうずくまる。

「うむ、すまんな！」

「くつそ、かてえ・・・」

「じゃあ蹴らなければいいのに・・・」

「ああ?」

「いえなんでもないです！」

シズクの眼光にビビる昴。

「うむ、これは、俺が奴の攻撃を受けるからお前たち二人はその隙をついて攻撃してくれ、だな！」

「なんでそんな堂々と公言してんだ馬鹿か!？」

「それが将真君だよシズク・・・」

「ああ!？」

「なんでもありません！」

尻にしかれてるとはこの事である。

「ふん、何を考えているのか知らんが、どうあっても貴様らに勝ち目はないぞ」

「言ってくれるな！だが俺たちは負けん！なぜなら、俺たちは絶対に諦めないからだ！」

「ぬかせ、そんな言葉一つで全てが片付くものか」

「悪いが、俺たちはその言葉を体現する男を知っている！」

「何・・・？」

そう、知っている。

どれほど傷ついてても、どれほど絶望的な状況に立たされても、くじけず、折れず、倒れない、何度やられても立ち上がる、男の存在を。

その男のお陰で、防人たちは今の今まで、諦めた事などなかった。

一度は絶望しかけた。だが、彼が『まだだ』と叫ぶ度に、自然と勇気をもたらえた。

「俺たちにとつては、奴こそが『勇者』！諦めない事こそが奴の『勇者道』であり、俺たちの『勇者道』！故に、お前がどれほどの絶望を与えようと、俺たちは決して諦めん！」

堂々と言い張る将真。

それには、シズクも鼻も頷く。

「ぬかせ」

しかし、エーアデはくだらないと一蹴する。

「そんなものなど、我々の前では無力だ。どんな事があるうとも、戦場では、勝った者こそが正義だ。そして、正義は常に我々にある」

その手には、錫杖のような槌。

それを振り回し、土を盛り上がらせる。

「故に、お前たちはここで負けて死ぬ」

襲い掛かる土の拳に対して、三人は、臆する事なく、突撃を開始する。

さらに一方で。

「アハハ、アハハ、遅いよお！」

電撃をまき散らすまま、暴風を巻き上げるまま、まさしく嵐とでも言うべき戦い方をするヴェントに翻弄される優理、夕海子、雀の三人。

「速いですわね！」

「ひいひい！終わった終わった絶対終わった！こんな奴に勝つなんて無理無理絶対にむりい！！」

「黙っている！集中できん！」

優理と夕海子が矢と銃弾を乱発しても一向に弾丸が当たる心配がない。

それほどまでに敵は速く、とらえられないのだ。

「アハ、無駄だよ。私は風。風は自由気ままに絶対に捉えられない。空中にある全ての空気は私のものであり、力。貴方たちにはどうあがいても私の姿をとらえる事は出来ない！」

風の刃が迫る。

「うわあああ!!」

それを未来視にも匹敵する危機察知能力を持つ雀によって防がれるも、その一撃だけで全てが終わる訳がない。

四方八方、ありとあらゆる方向から飛んでくる風の刃は、たちまち休む間もなく優理たちに襲い掛かる。

「ぎゃあああああ!」

「悲鳴を上げてるのに、流石雀さんですわね・・・」

「だが、長くはもたんぞー!」

そのほとんどを雀の盾によって防がれるも、長くはもたないのは目に見えている。

「・・・雀、あとどれくらい耐えられる?」

ふと、優理は雀に聞く。

「あ、あと、一分!」

「十分だ。道を作ってやる。それまで時間を稼げ」

悲鳴交じりに答える雀に優理はうなづく。

「何を言ってるのかしらないけど、そんなに耐えられる訳ないでしょ? なんてかかって? それはこれから本気を出すからだよ!」

ヴェントがそう言った直後、先ほどよりもはるかに多い刃が無数に飛んでくる。

流石に雀も、それを全て防ぐ事は不可能——だが、

「甘いですわね、神の神官とやらも」

「え?」

次の瞬間、雀の姿がかすんだかと思ったら、残像まで残して風の刃を全て防いでいた。

「え!?!」

「加賀城雀さんの恐ろしい所は、その死にたくない思いから来る超人的反応速度と防御能力ですわ。彼女がわたくしたち防人の守護神と呼ばれる所以は、その未来視にも等しい危機察知能力によって予測した相手の攻撃を完璧に防いで見せるという事。先ほど、彼女が一分といったのは、貴方がこれから本気を出したうえで防げる時間という意味ですよ?」

加賀城雀、その神がかった防御は、あの三好春信でも突破する事は出来ない。故に無敵。

防御する事しかできない、無勝無敗の力を有する、ある意味での『人外』。

それが、加賀城雀という人間バケモノだった。

「ぎゃあああああ!!早く!早くしてよ優理様あああ!!」

「く、そんな泣き言言ってるのに、なんで全部防ぐことが出来るの!?!」

「そんなもの、至極簡単だ」

優理が、眼鏡のブリッジを押し上げる。

次の瞬間、三人姿が掻き消えた。

(え・・・消え・・・!?!)

「こつちだ」

「!?!」

声がして、振り向けば、そこには弓を構え矢をつがえた亜門優理の姿があった。

「なん・・・!?!」

「俺の契約した悪魔の力は『霊子』。周囲にばらまかれた目には見えな
い『霊子』で道を作り、高速移動を可能とする。それが俺の絶技の一つ『インレジブルロード霊子滑走』だ。そして、今つがえている矢は矢であつて矢では無い! 霊子によって作られた刃、即ち剣! 無数の霊子による振動で、まるで高周波ブレードのようにお前の体を、豆腐のようにスパツと斬るだろう!」

叫び、放たれる矢。優理曰く『ゴーストブレード霊波刀』と呼ばれる剣は、真っ直ぐヴェントを襲う。だが。

「それでも遅いよー！」

その体に雷を纏わせ、発生する磁場によって促される磁力によって移動し、回避するヴェント。

「そんなのろい攻撃なんて当たらないよ」

「だろうな。だが、予言しておこう」

優理は、ビシィツとヴェントを指さす。

「貴様は、その体にある力という力を根こそぎ奪われて死ぬだろう」

「アハ、生意気だなあ」

そして――

血の刃が、夏凜と美森を襲う。

「チィー！」

その刃全てを夏凜が叩き落とし、反撃に美森が狙撃銃をぶっ放す。

「無駄よ」

その一撃は、中世風のドレスを纏った女性に向かって飛んでいくが、形成された血の壁によって防がれる。

さらに、二人の足元から、無数の杭が飛び出る。

「東郷ー！」

「きや」

夏凜が美森を抱きかかえ、飛び上がってそれを回避する。

「これを避けるか、娘」

「チツ、なんて面倒な」

そこには蒼白として肌と長い髪を揺らす男が一人。

その手には槍を持ち、赤い眼光を二人に向けていた。

「もう、先の一撃で仕留めなさいよ」

「ふむ。あの赤い装束の娘の反応速度があまりにも早すぎる故、な」

「肝心な所で役に立たないんだから」

「辛辣だな」

男と女の会話に耳を傾けつつ、夏凜は思考する。

二人の能力で分かっているのは、血を操る事と杭を出現させる事。

一方のこちらはそんな特殊能力は持っていないし、あるとすれば自分の『鬼気・極限羅刹』のみだ。

さらに、美森は不意打ちを受けて左肩を負傷。狙撃銃をまともに構えられない状況だ。

ここでとる選択肢は何か。

「東郷、行きなさい」

「え!?何言ってるの夏凜ちゃん!?!」

「まともに撃てないアンタがいた所で足手纏いよ。それに、まだ友奈だつて見つかってないんでしょ?その上、勇者システムも持っていないんじゃない、もし敵に見つかったら、死ぬかもしれないでしょ」

「それは・・・」

美森は下手に反論できない。

「ここで時間を喰わせるよりも、私がこいつらを倒して、その間にアンタが友奈に勇者システムを渡して戦力を増強する方が何よりも確実よ。いい。私がこいつらを倒す。その間に、アンタは友奈を探し出す!理解した!?!」

「夏凜ちゃん・・・武運を祈るわ」

「あんたもね」

一通り、作戦を立て、夏凜は敵を睨みつける。

そして、刀を向け、堂々と名乗りを上げる。

「さあさあ今宵はどうぞ我が目の前にお越し下さりましたア!ここからが今日一番の大見せ場!剣鬼にして剣聖、三好春信が妹、三好夏凜がお相手仕りましょう!!」

その夏凜の行動に、ふと男がその口角を大いに吊り上げる。

「ふっ、これはこれはご丁寧に、自己紹介恐縮の至り。名乗られたからには名乗らざるをえまい。我が名は誉れある処刑衆が一人、『串刺し刑』のダーナ!汝、三好夏凜に敬意を表し、本気でお相手致そう!」

一方で、女の方はやれやれと呆れた様子ではあるものの、乗ってくる。

『辱刑』のラミア」

そう短く、簡潔に述べた。

「・・・参る」

そう短く、夏凜が呟いた直後、夏凜が足をあげたかと思ったら、突然、美森を後方に向かって蹴り飛ばす。

「!?!」

その行動に目を見開くも、その間に美森は態勢を整え、その勢いのまま一気に戦線を離脱。

「ダーナ」

「あの一蹴りで、我が『領地』を抜けた。追いかけるにはこやつを倒さなければならぬようだ」

「チツ、面倒な事を・・・」

舌打ち一つ。しかし、夏凜は表情を崩さず、先の発言通り、二人に突っ込む。

「一人で向かってくるとは、大いに結構！ならばその自信、おおいに叩き潰してくれよう！」

「それには賛成ね！」

杭と血の刃が夏凜に襲い掛かる。

「喰らうかア!!」

しかし、夏凜はその悉くを打ち払う。

そのまま、三人は激突する——

そして——

「やあああ!!」

襲い掛かる黒い剣を、園子は槍で弾き飛ばす。

しかしその剣はまるで誰かが降っているかのように戻ってきて、巧

みな剣術で園子を翻弄する。

その全てを、園子は槍と体術で全てを弾き飛ばす。

(きりが無い！)

たった一本、それも使い手がいないものを、園子は一人で相手にしていた。

(あの子は、三本も相手にしているのに！)

園子の視線の先では、白い装束の少年——不道千景が鎌や剣を使い、三振りの黒い剣を全ていなしていた。その表情は、園子と違って、かなり涼し気だった。

「なかなか粘りますね」

その剣を操っている主、ヒュアツインテは心底つまらなそうにその戦いを傍観していた。

「あー、忌々しい忌々しい。何故こうも人間は醜く抗うのでしょうか」

「醜くても抗う、それが俺たち人間だ」

剣をいなしながらそう答える千景。

「というか、アンタがそれを言うのか？」

剣を鎖で絡めとり、次の瞬間、不意打ち気味で襲ってくる鋭い一撃を弾丸の一発で弾き飛ばす千景。

「はて、なんのことでしようか？」

「とぼけるなよ。誰よりも人間の強さを知っているアンタが、こんなことしてるとっていう事実が心底腹立たしいが、それも仕方ない事だと分かっている」

鎖に絡めとられた剣が鎖を振り払い、再度千景を襲うも、今度は影によつて地面に縫い付けられる。

「ちよ、ちよつと待ってー！」

そこで園子が声をあげる。

「さつきから一体なんの話をしてるの!? なんだか、君があの人を事を知ってるみたいだけど……!?!」

園子が、剣をいなしながらそう質問する。

「ふう……お前、足柄辰巳が持っている写真を見た事あるか？」

「え!?!」

「その写真の中に一枚、集合写真のようなものがあるはずだ。九人の俺たちと同じくらいの中学生たちが映る写真がな」

「それが、なんだって言うの!?!」

「その写真を見た事があるなら、一人一人よく覚えていられるなら、これから見るものは、お前にとって、そしてお前にとって一番尊敬している人にとっては、信じたくもない事のはずだからよ」

千景は、鎌を構える。

『イデオムチエイン文字連鎖』——『イデオムチエイン戒業罪乃鎖』

炎が燃え上がり、彼の上半身の装束を全て焼き払い、その背中に罪の文字を表す。

「焼き打ち——」

腰を低く、鎌を大振りに構えて、千景はそれをぶつ放す。

「——『断鎖』ツ!」

「ツ!」

振るわれた鎌の刃から業炎の刃が放たれ、周囲一帯を薙ぎ払う。

それを、浮遊能力を有するヒュアツインテは飛び上がる事で回避する。

その一撃によって建物が崩れ、粉塵が舞い上がる。

「粉塵を自ら撒いて、視界を断ちますか・・・無駄な事を・・・!?!」

呆れる間もなく、その煙の中から、無数の光弾が飛んでくる。

『イデオムチエイン文字連鎖』——『無想砲弾』

その手に鎌は無く、背中に火は無く、その姿はコートを纏った軍人のような姿の千景。

その手から放たれたのは、ヒュアツインテを自動追尾する『ホーミングキャノン追尾砲弾』。

襲い掛かる無数のミサイルにも匹敵する威力を持つその弾丸たちを、ヒュアツインテは、己の手元にある四振りの剣で迎え撃つ。

凄まじい速度で振るわれる四振りの剣は、たちまち弾丸を全て叩き落して爆発させていく。

「爆発させる機能もありましたか・・・」

だが、そう呟いた直後には千景は次の攻撃に移っていた。

投げたのは、瓦礫。それもかなり大きなサイズの瓦礫をいくつも。

「これが一体なんだっていうんです？」

ヒュアツインテは嘲笑う。

やはり人間の考える事は低能だ、と。

しかし、彼女は気付かない。

瓦礫が彼女の頭上にあり、彼女と瓦礫の向こう側には、太陽があり、それが光であるなら、その光の当たる反対側、いわゆる『影』が出来る場所があるのなら——

『文字連鎖』——『妖刀影宗』

イデオムチエイン

ようとうかげむね

——影移動で、その影へ移動する事が出来る。

その瓦礫へ移動した千景は、そのままヒュアツインテへ襲い掛かる。

「ツ!?しまっ——」

「——もう、やめてくれ——」

逆手に持った妖刀を振り下ろす。

その一撃は、ヒュアツインテの仮面を叩き、やがて、砕く。

「やった……!」

初めて、一撃を入れることができた。

その事に、園子は思わず歓喜しそうになる。

だが、その、頭全体を覆う仮面が砕かれ、その下の素顔を見た時、園子の表情は、凍った。

「以前、お前が俺と防人たちとの戦闘を傍観しにきていた事があったよな」

千景は、地面に降りる。

「その時に、お前はうちの巫女と神によって、その体を調べさせてもらった」

ゆっくりと振り返り、千景は、彼女を睨みつける。

「——本当に胸糞がわりいよ」

砕かれた仮面の下。

まるで麦畑のように輝く金髪。その若さではあまりにも発達し、熟れた体。そして、やや色付いた肌。

そこまででは、その人を特定する事は、不可能に近い。しかし——
顔さえ見えれば、識別する事は可能だ。

「……な……んで……」

園子は、その場に立ち尽くす。
身の毛のよだつような恐怖を感じ、ふと、息をするのを忘れてしま
う。

いつか、師の昔の写真を見せてもらったことがある。

同年代の勇者たちとの集合写真を、恋人と並んで映っている写真を
見た。

——忘れるはずがない。

それは、その人にとつて大切な人。決して忘れちゃいけない人。そ
して、死んだはずの人。

その名は——

「なんで、あんたがそこにいるんだ——」

『どうして、貴方がそこにいるの——』

『——上里ひなたア!!!』

ヒュアツインテ——上里ひなたが、そこにいた。

「……何を言ってるんですか?」

彼女は、憎悪にまみれた視線を、彼らに向けた。

崩れていく、崩れていく。

どんどん化けの皮が剥がれていく。

怖い怖い——自分の正体を知るのが怖い——

「やだ……やだ……」

誰もいなくなった街の路地裏の奥で、友奈は一人、崩れていく自分
の皮を、眺める事しかできなかった。

お前がどうしてここにいる

上里ひなた。

足柄辰巳の恋人にして、辰巳が生涯、唯一愛した少女である。

三百年前、百年の停滞の為に火の海へその身を投げ出した巫女であり、巫女でありながら勇者と同じ『精霊』を使う事の出来る唯一の人間でもあった。

その少女が、今、千景と園子の前に立ちはだかっていた。

「そんな・・・」

「三百年前の敵の神が要求した生贄・・・その理由は自らの戦力の増強だと俺たちは予測している・・・くそつたれな事をしてくれぜ、異世界の神とやらはよ・・・」

マジに切れているのか、千景の額に青筋が浮かび上がっている。

『本当に許せない・・・』

それは、郡も同じだった。

かつて、共に戦った仲間の一人であり、友達でもあった少女を、このような事に使うなど。

しかし、一方のひなた——ヒュアツインテは、何のことだがさっぱりなのか首を傾げていた。

「先ほどから、何を言っているのでしょうか？上里ひなた？誰ですか？それは」

「あんたの本当の名前だ」

「なんとも笑えない冗談ですね。私が『上里』？あの罪深き、多くの罪と血を被ってきた一族と同じ名前なんて、へどが出ますね」

「ツ・・・」

その返しに、千景は歯噛みする。

彼女は、ひなたという名前ではなく、上里という苗字の方に注意がされている。名前なんてどうでもいいかのように。そして、その苗字を忌み嫌うかのように。

「本当に、虫唾が走りますね。貴方たちに人間に、まさか仮面を破壊されるなんて。ああ、憎い、憎いです」

黒く艶やかだった髪は、麦畑のような黄金色に輝いて風に靡き、その瞳は憎悪を映す。

かつて見た、彼女の面影はなく、その誰にでも向けていた慈母のような笑顔は、もはや、憎悪に塗り潰されていた。

「あ、あの……」

ふと、園子が彼女に話しかける。

「乃木若葉……高嶋友奈……土居球子……伊予島杏……足柄辰巳……白鳥歌野……この名前に、覚えはありませんか……？」

それは全て、勇者の名前。初代に活躍した、勇者たちの名前だ。

彼女が上里ひなたであれば、それに多少の反応は見せてくれるだろうか。

それとも――

「くどいですよ」

ああ、と千景は思ってしまう。

「どれも憎き勇者と名乗っている罪人共の名前ではありませんか。その名前を覚えていますかつて？当然でしょう？殺したい相手を覚えていないのは、間抜け以外の何物でもないでしょう？」

やはり、彼女は、何もかもが憎悪で塗り潰されている。

「う……あ……」

彼女の放つ圧倒的憎悪に気圧されて後ずさる園子。

「無駄だ」

その後ろから、千景が前に出る。

「今のあの人は記憶が抜き取られている状態だ。おそらく人格そのものを抜いて、そこから別の人格を植え付けたんだろうが……本当に、ひでえよ」

あまりにも、彼女の笑顔は憎悪に包まれていた。それはすなわち、彼女の行動原理は憎むことであり、彼女の戦う力もまた憎悪だという事。

「今は戦うべきだ。その上で、抑え込んで記憶を取り戻す。今の行動目標はそれでしょう」

千景はその手に持つ鎌を構える。

彼の体からあふれるのは怒気。憎悪とは違う、純粹な怒りを込めた感情を、彼は体から滲み出していた。

その矛先は、目の前にいるひなたヒュアツインテではない。

その奥、もっと深くにいる、全ての元凶。

そうだ。

もとより、自分は、その為にここに立っている。

友人を脅かす者、師の想いを踏み躪り、その願いを奪おうとする者、そのあまねくすべてを排除する為に、自分はあの日、この槍をとったのだ。

もう園子に迷いは無い。

(あの人に対抗するには、これしかない)

突如として、園子の体が光りだす。

「これは――」

その光に、ヒュアツインテは顔をしかめる。

そして、千景は、その光の正体を知っていた。

その力の名は――

「――『満開・千剣八咫鳥』せんけんやたがらす」

光の中心に立つ園子の装束は大きく変わり、さらに武装も変化していた。

槍の穂先は無数の刃で構成され、さらに彼女の周囲に浮遊するものも刃。

その数は大が十本、中が十二本、小が二十本、合計三十二本もの刃が彼女の周囲に展開されていた。

「・・・準備、良いよ」

園子は、ヒュアツインテを睨みつけて、槍を構える。

「手数で来ますか・・・いいでしょう。ならば私は力で押し通るのみです」

彼女の持つ刃、否、剣は八本。

その一撃が、破壊力抜群の威力を持つ剣を持って、ヒュアツインテは・・・ひなたは彼らを殺す気にいるのだ。

すでに戦いの準備は整っている。

ならばあとは、ぶつかるのみ。
合図、待たずして、三人はぶつかった。

筈だった。

「——ひなたあああああああああああああ!!!」

その間に割り込んで、落ちてきた一人の男がいた。

「え!?!」

「なんですか・・・!?!」

「・・・遅い」

その男を、千景と園子は知っている。

そして、本来なら、目の前にたつ彼女も知っているはずの男。

今は三百年の時を経て老け、しかしその強さは健在の、初代勇者最強の男。

足柄辰巳。

「師匠!?!」

「俺が呼んでおいた」

「なんで!?!というか師匠せんせいの住所知ってるの!?!」

園子の渾身のツツコミを無視して、千景は辰巳の後ろ姿を見る。

その後ろ姿からでも分かる通り、彼は今、とてつもなく憤っており、
そして、困惑している。

「・・・なんでお前がここにいる?」

「はて、なんでと言われましても、それはあなた方が一番分かっているのではないでしようか？」

ひなたは心底不思議そうに首をかしげる。

(足柄さんを使って記憶に揺さぶりをかけようと思ったが、姿を見ただけじゃダメか・・・?)

心の中でそう思案しつつ、千景はそれでもひなたを見据える。

「どういう事だ？」

「はあ・・・これだから罪深き人間どもは・・・もはや私たちがここに来た意味さえも見出せないなんて・・・」

その目は本当に憐れむようで、そして、嘲るような冷たい視線を放っていた。

「そういう事を言っているんじゃない・・・なんでお前が・・・ひなたがそこにいるんだ!」

次の瞬間——辰巳の腹を黒い剣が貫いた。

「ぐぼあ!？」

「師匠!？」

「くだいですよ」

鮮血をまき散らして吹き飛び、やがて地面に落ちる辰巳。

その様子に顔を青ざめながらも駆け寄る園子。

その一方で、千景は案の定という感じでひなたから一瞬外してしまった視線を戻す。

「ひなたひなた、と・・・一体誰の事ですか？もしかして私ですか？なら心底不愉快です。なぜ、私の知らない名前で私を呼ぶ意味が分からない上に、人間如きにそんな名前で呼ばれなければならないのですか？理解不能です」

本当に、本当にうんざりとも言わんばかりに、ごみを見るような目でひなたは倒れ伏す辰巳を見下す。

しかし、その目はすぐに驚嘆へと変わる。

「あらっ」

それもそのはず。なぜなら辰巳の体は、その体質が空想上の生き物である『竜』そのもの。

その再生力は人間を凌駕し、その生命力はそこらの生物とは比べ物にならない。

そして、そのスケールが大きい分、その数分の一サイズである辰巳の体はその力が収まっているのだから、その生命力や治癒力は過剰に発揮される。ゆえに、ひなたが与えた腹に風穴を開けるほどの怪我をものの数分で治癒することが出来るのだ。

「あら、確実に仕留めたと思ったのですが……ああ、そうですか。あなたが足柄辰巳ですか」

ひなたは思い至るように眩き、

「あの、三百年生きてなお死ねない哀れなトカゲの」

もはや、ひなたの頭の中では辰巳は人間と認識されてすらいない。

(残酷、だな……)

最愛の人であるはずの人に、人間ではないもの呼ばわりされる気分は、さぞ最悪な事だろう。

もはや、裏切られたと思えるレベルで衝撃的だ。

(でも、だからこそ……)

辰巳は、どうにか起き上がろうとしている。

「せんせい師匠！無理しないでくださいー！」

「ぐ……だが……」

「諦めてください」

「?!」

ふと、辰巳とひなたの間に、千景が立つ。

「あなたは……!?!」

「お前……」

「もう、上里さんの記憶を取り戻すのは現状では無理です。ここでは戦って倒し、かつ拘束するべきが賢明かと思えます」

鎌を構える千景。

「今は戦いましょう。そのうえで記憶を取り戻すというのなら勝手にしてくれていいです。ですが、それで俺は止まりませんよ」

その言葉に、辰巳たちは茫然とする。

「……しつかりしろ。足柄さん」

「……!!」

千景のつぶやきに、辰巳は目を見開き、やがてすつと立ち上がる。

「師匠？」

「その通りだな……ありがとう。いいかつが入った」

辰巳は、背中 of 剣を引き抜く。

かつて、辰巳とともに、いくつもの苦難を乗り越えてきた、彼の愛

剣、滅竜剣『バルムンク』。

その神秘は、いまだ保たれ、三百年たっても錆びず欠けずのその剣は、それ相応の輝きと威光を放っていた。

今の辰巳は勇者ではないが、それでもその身体能力は勇者のそれに匹敵する。

「構えろ園子。今までの相手とは勝手が違うよ」

「……うん。師匠せんせいがそれを選ぶなら、私はどこまでもついていくよ」

園子も、槍を構え、敵を見据える。彼女の周囲には無数の浮遊する刃が浮かんでいる。

「ふふ、たかが三人で私の相手を出来ると思っているとは、本当に、貴方たち人間は私を不愉快にさせてくれますね」

その笑みからは考えられない程の殺気と憎悪を感じながら、千景、辰巳、園子はひなた——ヒュアツインテと対峙する。

一方で——実は、先ほど襲い掛かってきた完成型バーテックスたちではあるが、第一陣は全て真武郎の力で全て吹き飛ばされた。しかし、敵は、あらかじめ第二陣を用意していた。

「まあ、そんな上手くいくとは思っていなかったけどね」

そう一人呟きつつ、幸奈は、新たに壁の穴から入ってくる完成型をみすえる。

「第二ラウンドといたところか」

「敵はすでに奴らを吹き飛ばした奴らを抑えているはずだ。しかし……」

問題は、その完成型バーテックスの数だった。

十二星座に加え、さらに増えているのだ。

他のバーテックスよりもさらに巨大で、鯨のように巨大な鯨座——
—ホエール・バーテックス。

その上に、人影のようなものがあり、丸い盾とハルパーを持った甲冑を来たペルセウス座——ペルセウス・バーテックス。

その傍らには翼をはやした馬のペガスス座——ペガサス・バーテックス。

さらには巨大な熊のおおぐま座——ベアー・バーテックス。
などなど、大量の完成型バーテックスたちが存在していた。

「前までは奴らを守る側だったのに、今じゃ、倒す側なんてね」

なんとという皮肉か。しかし、不思議と悪い感じはしない。

「私たちに封印の儀は行えない……でも、それなら中の御霊ごと破壊すればいい」

佐奈の言葉に、他の襲撃者も頷く。

「今や神樹と契約して、その恩恵である精霊を使えるようになった。ならば、その力を存分に振るわせてもらおうぞ！」

「もう僕たちには戦う以外の選択肢なんてないからね」

「うう……倒す、全部、全部ううう！」

「もう間違えないよ。みんな、切り刻んでやる！」

「ええ。絶対を守るわ……それが、私の贖罪だから」

そう、それぞれの意気込みが呟かれたあと、佐奈の号令と共に、襲撃者たちがその身に精霊を纏う。

「行くぞお！」

「ぶっ壊せ——『スリウム』！」

「威厳を示せ——『ギルガメッシュ』！」

「つぶす——『トール』！」

「やっっちゃうよ——『ジャック・ザ・リッパー』!!」

「我に力を——『アタランテ』!!」

それぞれの装束が変化し、人ならざる力が宿る。

幸奈が宿すは、かつて北欧の神々に反逆せしめし、霜の巨人の長。弘が宿すは、世界最古の王にして、この世の財宝全てを牛耳る英雄。真斗が宿すは、雷の神にして、凄まじい力を有する闘神。

美紀が宿すは、かつて倫敦の街を恐怖に陥れた、世紀の殺人鬼。シリアルキラー

佐奈が宿すは、神に拾われ、ギリシヤ最高の狩人となった、神速の女狩人。

それぞれがそれぞれに見合った精霊を宿し、五人は今、強大な敵に立ち向かう。

さらに、開幕速攻で佐奈が大技を放つ。

「——『天上ヘヴンズ・カタストロフより降り注ぐ裁きの雨』!!」

撃ち放たれた二本の矢が天上にまで飛び、そこから無数の矢の雨を降り注がせる。

それが全てのバーテックスに直撃し、その装甲を削っていく。

「先制はとった!各自、それぞれのバーテックスを仕留めろ!」

『了解!』

そして、彼らはぶつかっていく。

「ば……ばかな……」

地面を転がる機械人間を見下しながら、春信は刀を払う。

勇者のそれよりも防御力は低く、力もない。しかし、敵を殺すには十分な力を持つこの刀と装束は、敵の幹部を余裕であしらう程の恩恵をもたらしてくれた。

だが、春信に喜びはない。

「次はどこにいる……?」

「な!?!ちよ、きさままで——」

もはや鉄くずと化した敵の頭部を踏み砕いて殺し、春信は次の敵の

元へ走る。

味方の合流はともかく、今は一人でも敵を減らすべきだ。
その判断の元、春信は走る。

追いかけてくる炎。

まるでこちらを呪い殺すといわんばかりにしつこく追ってくる。

「最悪ね！ 私たちにはあれに対抗する手段がない！」

「そう思うならそれなりの作戦考えてよお！」

今度は樹がワイヤーを使ってスパイダーマンよろしく三次元的に
にげているのだが、まるで鳥の群れのように炎は空中にまで追つてく
る。

ただ、風は空中で、その目に与えられた全てを見切る目をもって、炎
を操っている犯人を捜していた。

(こんだけ精密に追いかけてくるなんて、普通はありえないわ……きつ
とどこかに炎を操っている奴がいるはずよ……！)

逃げるのを樹に任せながら、風は敵を探す。

「あ……!?!」

「え……」

しかし、とあるビルの所を曲がろうとした所で、先回りされたのか、
目の前から炎が襲う。

「しまっ……」

樹は、その事実思わず硬直し、反応が遅れてしまう。

そのまま、炎が、樹と風を飲み込んでしまう……その直前に、水
を纏った何かが、樹と風を攫う。

「がぼぼぼ……!?!」

「んごあ……!?!」

いきなりの事に気が動転してしまう二人。

しかし、そのおかげで炎に吞まれるのは回避され、そのまま、ビル

するといきなり冬樹が風を指差したかと思うと、

「探して」

それを促した。

「え・・・ああ!」

「私、が、おさえ、とく」

「諒解! えつと冬樹だったっけ? よろしく頼んだ!」

風はビルの縁に立つと、すぐさま魔眼の力を開放した。

必ず、どこかにいるはずだ。だから、この高い場所へ来たのだ。

「無駄ア!」

再度、勢いを取り戻して三人を襲う炎を、冬樹が抑える。

その間、風は必至に敵を探す。

「お姉ちゃん、頑張つて・・・!」

そんな姉を、樹は静かに応援する。

(どこだ・・・どこにいる・・・)

とてつもなく高い動体視力と視力を有する今の風なら、ここら一帯の景色を全て見通す事など造作もない。

故に・・・

「いたあ!」

「じゃあ、行こう」

「へ、まだ心の準備がああああ!」

「うわああああ!」

風の報告を聞くや否や、冬樹が二人を抱えて、ビルの屋上から身を躍らせた。

「どっ!」

「ああ、もう! 十一時! あのビルの上え!」

「分かった—— 『水流噴射』アクア・ジェット」

すると、冬樹は水を纏い、一気に風が指差した建物の屋上へ一気に飛んでいく。

そして、その建物の屋上に激突し、冬樹は、その屋上にいた女性を睨みつける。

「・・・お前が、炎を操つて・・・」

そのゴシックドレスに身を包んだ赤髪の女性を冬樹は睨みつける。

「・・・不敬よ、罪人^{にんげん}」

冷たい声が響く。

「この火刑のレジーナ様を、そんな目で見るなど不敬。不敬罪で、焼き殺してあげるわ」

「あいにく、私、は、燃や、され、ない」

刀を構え、冬樹は言い返す。

「チツ、人間風情が・・・」

「あんたね・・・さつきから私たちをしつこく追い回していたのは・・・お陰で焼き鳥になる所だったじゃない！」

「お姉ちゃん・・・その例えはどうかと思うよ・・・？」

うがー、つと怒りをあらわにする風に樹は呆れつつ、しかしそれでもレジーナに対する敵意はむき出しにする。

「ふふ、不敬不敬、ふけーい。だから、今ここで死ね！」

レジーナが鞭を振るう。すると、背後から巨大な火球が出現し、それが冬樹たちに向かって叩きつけられる。

豪炎が舞い上がり、三人を包み込む。

「ふふ」

その光景に、思わず笑ってしまうレジーナ。だが、

「無駄無駄無駄無駄無駄無駄ア!!」

「WRYYYYYYYYYYY!!!」

「やああああ!!!」

水弾の連発によって対応する冬樹、半ば狂乱状態で剣を振り回す風。そしてワイヤーによって風を巻き起こして炎をどうにか凌ぐ樹。

「なんツ・・・」

「まあた私の樹を焼き鳥にしようとしてくれたわねえ！許さない！もう許さない！今の私の精神状態は樹が声を奪われて暴走した時と同じよ！今すぐぶっ殺してやるう！」

「・・・あれ、この人こんな人だったっけ？」

「たぶん、ありえない事が連続で起きたからおかしくなってるんだと思います」

暴走している状態の風に引いてしまう冬樹と樹。

「……はっ」

その様子を、嘲笑おうとするレジーナ。しかし、

「次に貴方は『たかが私の炎を凌いだからっていい気になるんじゃないわよ』という！」

「たかが私の炎を凌いだからっていい気になるんじゃないわよ!……ハッ!」

なんと、樹がレジーナの次の言葉を当てたのだ。

「おおー」

それに冬樹が驚いて感心する。

「さらに貴方は『どうして私の次の言葉わかったのよ』というでしょう!」

「どうして私の次の言葉が分かったのよ!?!……ハッ!」

思わず自分の口を覆うレジーナ。

「どうしましょう……ただ漫画のネタを使ってるだけなのに、とても楽しんですけどこれ」

「うん、羽目、を、外し、過ぎない、ように、ね?」

何故か笑いを抑えきれない樹。

「こ、このお……」

怒りに体を震わせるレジーナ。

「怒りますか?ならそれで結構!人は簡単に怒りを抑え込めませんか!逆!逆!逆!こっちは予想が当たってとってもハッピーな気分での戦いを楽に勝てそうにです!」

もう半ば調子に乗っている樹。

「いいわ、いいわ、もう怒ったわ……お前たち全員、不敬罪で全員死刑にしてやるッ!」

「やれる、ものなら、やってみろ」

「がああああ!死刑になるのはお前の方じゃああああ!!!」

「いくらでも貴方の心の中なんて呼んでやりますよ!占い師舐めないでください!ヘルトウーユー!」

各所にて、戦いが巻き起こる。

「みんな・・・」

戦場の外れにて、奏は、戦いを見ていた。

「心配？」

その傍らには、街に出現した兵器の操作に集中している雅がいた。

「ええ・・・とても・・・」

「そうよね・・・何せ、戦うのは貴方たち巫女ではなく私たち救導者・・・いいえ、戦う力を持つ者たちだからね」

雅は、思い出すかのように、そう呟く。

「・・・私も、戦う事が出来たなら、ていつも思っています」

「知ってるわ」

「でも、私には私の役割があつて、彼らにも、与えられた役割がある・・・それを考えると、その役割を与えられた責任というものを守らなければならない。だから、私はここにいるんです」

「・・・そっか」

納得したように、雅は前を向く。

突然、目の前に何かが落ちた。

「・・・!?!」

「何・・・!?!」

それによつて巻き起こった風圧をその身に受けながら、二人は、目の前に現れた存在に驚く。

「・・・あーらら」

「これは・・・!?!」

それは、バーテックス。

どの星座、文献にも載っていない、さらに全く異質なバーテックスが、そこにいた。

「キルルル・・・」

青い双眸、人のようにも見えるその手足は同じ長さであり、その全身は他のバーテックス同様、真っ白。口はギザギザ、人とは思えない顔に、その背中には円錐のような突起物が縦四つ横二列に並んでいた。

「とうとう気付いたか」

「ええ、そのようですね」

雅は、今、その力のほとんどを兵器の操作に割いている。故に、戦闘に参加する事は出来ない。

さらに奏は非戦闘員。

即ち、絶体絶命なのだ。

だというのに、二人は、酷く落ち着いていた。

一方のその正体不明のバーテックスは、そのギザギザの口を開ける。その中から現れたのは、砲門。赤い光が収束し、今、まさに雅たちを打ち込まれようとしていた。

しかし、それが発射されるまえに、そのバーテックスの周囲に突如出現した光の陣から放たれた砲弾によって、滅多撃ちにされる。

「ナイスよ、海路」

雅の言葉に答えるように、そのバーテックスと二人の間に、一人の男が降り立つ。

「敵性個体、仮称を『キルル・バーテックス』とします」

「それ鳴き声よね?」

「だって面倒くさいんですもの」

「そうか・・・まあいい」

奏の言葉をあえて無視して、海路は、目の前の敵——キルル・バーテックスを睨みつける。

「結構強いわよ?」

「分かっている。お前たちはそこで見ている」

「あ、そう、使うのね」

雅のその問いに、海路は、言葉の代わりに行動で返事をした。

「真解——『超武装絶射無双』」

海路が光輝いたかと思うと、彼の体に、数多くの武装が身に纏われていた。

背中には巨大なミサイルポッド、その両側には四丁のガトリングガ

ン、その上下の間にはレールガンに加え、超素粒子砲など、様々な未
来兵器が彼の体を覆い尽くしていた。

「本当、いろいろと反則な真解よね」

雅は、かなりの畏怖と敬意をもって、その真解を見た。

「さあ来い化け物。俺が塵も残さずに消し飛ばしてやろう」

海路は、キルルを睨みつけながら、そう告げた。

アタシの兄貴

アタシ、三ノ輪銀は、須美や翼に会う前は、とても弱虫で泣き虫だった。

いわゆる、女の子らしい性格という奴だ。

そのころの兄貴はやるときはやる性格で、気が強く、とつても格好良くて、喧嘩では負け知らずだった。

元々打たれ強いってのもあるけど、それでも兄貴は強くて、決して泣き言なんて言わなかった。

そんな兄貴の背中を、アタシはいつもとことんついて行っていた。その時のアタシは本当に泣き虫で、その所為で、いつも兄貴はアタシを守るために喧嘩していた。

やがて、兄貴は神樹館では上級生にも勝つガキ大将として君臨していた。

でも、それでもアタシに対する批判は強くなって、その度に兄貴はアタシの為に戦った。

それが嫌で嫌で、兄貴がアタシの為に傷つくのは嫌で、だからアタシは強くなるうって思った。

今すぐ、は出来なくても、とにかく、家の手伝いをして、アタシは一人でも出来るんだってことを知らしめたかった。

流石に喧嘩はしなかったけど、それでも、そうしていたら、だんだんとアタシの周りに人が集まってきてくれて、それがどうしようもなくうれしくて、もつと手伝いを張り切った。

そして、兄貴が出稼ぎに、讃州に行くっていった時は、やっぱりアタシは兄貴がいないとダメなんだなった思った。

だって、アタシは、兄貴がいなくなること怖がって、小学五年生なのに思いつきりダダをこねた。

今思えばかなりの黒歴史だけど、それでも、アタシがまだ兄離れできない事を十分に思い知った。

結局、兄貴は讃州に行ってしまった。

だから、アタシは、これまでに以上に強くなるうって思った。

勇者にも選ばれたから、もっと、頑張ろうって思った。
兄貴に、追い付きたかったから。

ギロチンが飛んでくる。

「だらっしやああああ!!」

「オラア!」

それを、銀と剛は悉く弾いて、そのギロチンを飛ばしている張本人のカタロフに接近を試みる。

しかし。

「セアア!」

「ツ!兄貴!」

「うおっと!?!」

地面からギロチンが飛び出て、それによって後退せざるを得ない。

「野郎・・・!」

「なかなか近付けないな」

奴の操るギロチン。それはどこからともなく四方八方から出現して飛んでくる。

さらに、見えるギロチン、見えないギロチン。この二つが、二人の防御に隙を生じさせ、ダメージを与えようと飛んでくる。

どうにか、銀のカバーによって、全て流しきれているが、それでも限界があるのは確かだ。

「どうしましたあ?先ほどの威勢はもしかして去勢ですかあ?」

カタロフは、その仮面の奥で笑う。

「ならばさっさと死になさい!目障りです!」

またしても、ギロチン刃が飛んでくる。

それを銀と剛はどうにか防ぎ凌ぐ。

「くそ!どうやったらこの斬撃の嵐を掻い潜れるんだ!」

「……………」

「ツ……兄貴?」

ふと、剛が防御しながら何かを考えている事にきづく。

その表情は酷く冷静で、まるで全ての物事が俯瞰出来ているかのよう
うに、真っ直ぐだった。

(この……目は……)

銀は、この眼差しを知っている。

「……銀、ちよつと待ってろ」

「え!?兄貴!」

いきなり、剛が前に向かって走りだす。

「また突撃ですか!もうその手は使えないと言ってるでしょう間抜け
があ!」

「間抜けはテメエだ仮面野郎!」

カタロフがギロチンを飛ばす。

それを、剛は防がず全て避ける。

しかしカタロフは気にせず見えない刃を飛ばす。しかし、剛はそれ
すら防ぐ。

「なんで……」

そして、銀は気付く。

地面からギロチンが飛び出す。しかし、剛はそれすら避けて見せ
る。

「な、何故だ!」

突然、剛の動きが変わったことに動揺するカタロフ。しかし、それ
で剛が止まる訳じゃない。

その射程に、カタロフをとらえる。そして、ハンマーを振りかぶる。

「ツ!隙だらけですよ!」

「だろうな」

ハンマーを振りかぶる事で、剛に隙が生じる。そこを突こうとした
カタロフの顔面目掛けて、剛はその拳を叩き込む。

「げぼあ!」

そのまま吹っ飛ぶカタロフ。

「まだまだア！」

そのカタロフを追撃する剛。しかしカタロフはその追撃をさせないとも言おうように、吹き飛ばされながらギロチンを投げつける。だが、剛はそれをハンマーの一振りですべて弾き飛ばし、一気にカタロフに接近する。

「なんで、なんで当たらない!?!」

そう、先ほどから剛にギロチンが全く当たらないのだ。目に見えないものも含めて、全て回避されている。まるで、攻撃を予測できているかのように、それほどまでに、剛はカタロフの攻撃を悉く避けていた。

その答えが出る前に、剛はカタロフの腹を蹴っ飛ばす。

「ぐべ・・・!?!」

「オオオオオ!!」

それでは終わらず、剛は、ハンマーを投げ捨ててカタロフをボコボコにする。

「オラオラオラオラオラオラア!!!」

「げぐがばぐべがらくげらあ!?!」

友奈ほど精密で鋭くはない。しかしその分、重く体にダメージの残る剛の拳の連打は、カタロフの全身を叩きのめす。

「がぼ・・・こんなことが・・・!?!」

「っし」

吹っ飛ばすカタロフを見てガッツポーズを取る剛。

「すげえ・・・流石兄貴」

その光景に、銀は簡単せざるを得ない。もともと観察眼だけは優れていた剛は、どんな喧嘩も相手の弱点を見抜いて豪快なパワーでノックアウトさせる程強かった。

即ち、剛は相手の弱点を見抜いたのだ。

「オラ、立てよ」

そして、剛はその弱点を相手に教えるなんて事はしない。だって教えたら相手もそれに対応してしまうからだ。

ここでもばらすとするなら、カタロフはさつきから剛や銀の『首』し

か狙っていないのだ。大抵は一撃で倒せるからか、あるいは彼に与えられた『斬首』の名故の矜持か、とにかくカタロフは首しか狙っていない。そこを剛は突いているのだ。

挑発と言わんばかりに剛は手招きをする。

「き、貴様あ……！」

カタロフは、歪んだ仮面を抑えつつ、怒りをその目に宿して剛を睨む。

「もう許さん、貴様はもう許さん。もう首を狙うのはやめにしましょう……貴様にはこれから今までにないほど惨たらしい方法で、殺してやろう！」

「ッ！」

剛は、戦槌を呼び出す。

そして、それを思いっきり振り回す。

すると、とてつもない衝撃が、戦槌を何度もたたいた。

「ぐっお……!?!」

よろける剛。その衝撃の正体は、先ほどのギロチン。

「野郎、もうプライドとか捨てて俺を確実に仕留めに来やがったか！」

「兄貴！」

「来るな！」

「ッ!?!」

援護に入ろうとした銀を、剛は止める。その間にも、無数のギロチンは剛を襲う。

「テメエは自分の心配だけしてりやあ良い！俺の事は気にすんな！」

「で、でも……」

「安心しろ！俺は負けねえ！」

飛んでくる刃、それを剛は、一回のミスもなく、躲し弾く。

確かに、剛は攻撃を全て弾いている。見えないものも含めて、その場で全て弾き飛ばしている。

しかし、見ているだけの銀は、ハラハラした気持ちで見っていた。

(違う……そうじゃない……)

動けない。

今、駈け出せば、剛を助けられるかもしれない。でも、逆に足手纏いになって、剛を死なせてしまうかもしれない。

そんな恐怖が、銀を、その場に縛り付ける。

(どうして・・・どうして動かないんだよ・・・どうして兄貴のピンチの時だけ動けないんだよ・・・！)

須美のピンチの時は動けた、園子のピンチの時も動けた、翼の時も同じだった。

だけど、どうして、兄の時だけは、自分は動けない。

兄のピンチに、駆け付けられない。

そんなのはもう嫌だったはずだ。嫌で嫌で仕方がなかったはずだ。もう、心配をかけないように、強くなったはずだ。

がしや髑髏の力も、手に入れたはずだ。

辰巳の竜の力もものにした筈だ。

兄よりも、強くなったはずだ。

なのに、どうして――

「おいカタロフ！」

「黙れ罪人！」

「テメエ、さつきから同じ攻撃しかしてこねえなあ！なんだ!?もしかしてこれぐらいしかできないのか!？」

「黙れ」

「もしかして、今まで一撃で仕留めてこられたのに、仕留められないからイライラしてんのか!？」

「黙れと言っている・・・」

剛が、防ぐのに精いっぱいいなはずなのに、カタロフを挑発する。

「そりゃそうか！こんなんじや下っ端と思われても仕方ねえもんなア！」

「――貴様ああああ!!」

逆鱗に触れたのか、カタロフがギロチンを一斉に剛に向かって飛ばす。

隙間の無い、確実に剛を木端微塵にする、斬撃の嵐。

「――それを待っていた」

そして、カタロフは思い知る。
それが剛の作戦だということを。

「オラア!!」

剛が、戦槌を変化させて、その片方にジェット噴出孔を出現させる。
既に、その噴出孔にはエネルギーがため込まれているために、あとはもう、点火するだけだ。

故に——あとはただ振るうだけでいい。

「ジェットハンマーアアアア!!」

剛最大の戦槌の一撃が、全ての刃を吹き飛ばす。

「……馬鹿な」

茫然とするカタロフ。しかし、そうしている間に、剛は戦槌の勢いをそのままに、カタロフに接近した。

「終わりだ」

そして、再度貯めたジェットハンマーを放ち、カタロフを叩き潰した。

結局の所、銀は一步も動けなかった。

「ふいー……」

剛が戦槌を上げれば、そこにはカタロフの潰れた死体と飛び散った血があった。

その真つ赤な血は、まるでカタロフも人間だともいうかのように、残酷なまでに真つ赤だった。

それはつまり、剛は人生初めて、殺人をしたという事に他ならなかった。

最も、相手がただの人間だったら、剛も多少の罪悪感を抱いていただろうが、あいにくとカタロフを殺した剛にそれはない。

だが、それよりも、銀は、自分が最後まで動けなかったことを、悔やんだ。

(アタシは……結局……)

拳を握りしめて、銀は、顔を悔しさにゆがめた。

力を与えられておいて、チャンスをもらっておいて、何もしなかった。何も出来なかった。

(結局、アタシは・・・あの頃と何も・・・)

剛が銀の元に戻ってくる。

そんな時――

「ほう、カタロフを倒すとは、貴様中々の重罪を犯してくれたな」

絶望の呼び声が、聞こえた。

無数のバーテックス。それらを、たった五人で相手にすることは、どれほど大変か。

そのうち、七体のみならず、自分たちを含めた状態でたった七人で相手にした勇者部がいる事は事実ではあるのだが、今は、その敵を、自分たち襲撃者だけで対処しなければならない。

それを考えると、問題は、ない。

「ハアアア!!」

幸奈の剛腕がアリエスの腹をぶん殴ってその体をくの字に曲げらせる。

「弘!」

「万海灼シユルき祓シヤうう暁ガの水平ナア!!」

権限した灼熱の大剣を薙ぎ払い、アリエスの体半分を灰塵にする。

そこへサジタリウスの矢が飛んでくる。しかし――

「飛ポラーレ・ヴィーアんでいけ!!」

その矢を自ら迎撃し、叩き落す幸奈。

「ミヨルニールウ!!」

そのサジタリウスに向かって、今度は雷が叩き落される。

「くたばれ」

すかさず、装甲がもろくなったサジタリウスに向かって佐奈が矢を放つ。

その矢はサジタリウスの装甲を突き破り、中にある御霊に突き刺さ

る。が、砕くことは敵わない。

「チッ！」

その佐奈に向かって、今度はスコープオの針が迫る。

「舐めるな！」

その針を躲したかとおもうと、その上に乗っかって、佐奈はその長い尾の上を駆け抜ける。

彼女の宿す『アタランテ』という女狩人は、その瞬足で知られる。

曰く、その足に追い付けた者は誰もおらず、競争で負ければ殺され、また、彼女を娶った男でさえも、彼女の好物を使つて気を逸らさなければ負けていたという。

そして、彼女の性格上、アタランテと佐奈は相性は非常に良い。故に、その走力は極限にまで再現され、肉眼ではとらえない程のスピードでスコープオの本体に到達する。

「ハア！」

そして、その脚力を利用してスコープオを蹴っ飛ばす。

「喰らいやがれ！」

そこへ弘が、剣の雨を降らせてスコープオを滅多打ちにする。

弘が降ろすギルガメッシュは、いわば王の中の王であり、彼が持つ財宝はまさしく千差万別を言われるほど大量の宝具を有している。

剣から弓まで、また、薬から防具まで、ありとあらゆる世界中の宝の原点をその宝物庫に持ち、それゆえに、その武器を射出する戦法を取る。

「弘さん！右から来ます！」

「ッ！」

この中で最も攻撃力の小さい美紀が、バーテックスの体の上を走りながらそう叫ぶ。

その叫びのとおり、弘の右から、カプリコーンの足が迫ってきていた。

「やせ・・・ないいいいい！！」

その一撃を、真斗が真正面から受け止める。

「真斗君!？」

「ううううああああああ!!」

高速回転するカプリコーンの足攻撃。それを真斗は体を張って受け止め、その回転を止める。

そして、そのまま振り回して、海面に叩きつける。

凄まじい怪力である。

それもそのはず。真斗が宿すのは神。それも北欧神話最強と言われしめる雷神トールである。

その怪力は神々の終末・ラグナロクにおいて、大蛇ヨルムンガンドと死闘を繰り広げ勝利する程。

たかが神の尖兵風情であるバーテックス如きがその怪力に勝てるはずもない。

しかし、高い知能を有するのもバーテックス。

カプリコーンが叩きつけられた海面から、今度はピスケスが飛び上がった、真斗に体当たりをかます。

「いっふ・・・」

ただ神を宿した程度、その体はまだ人間の範疇を超えず。

その衝撃が体を叩き、たちまち吹き飛ばす。

「真斗ー!」

幸奈が悲鳴のように叫ぶ。だが、すぐにその目に怒りを宿し、ピスケスに殴りかかる。

「こいつッ!」

「幸奈ちゃん!上!」

「ッ!?!」

だが、それを阻止するかのようには、ヴァルゴが幸奈の頭上からその長い布のような触覚を叩きつける。

しかし、幸奈は逆にそれを掴む。

「舐めるな、化け物風情が」

幸奈が宿すのは、トールのミョルニル奪い、トールと同等の力を持つ、霜の巨人の王『スリユム』。

その息は空気を凍てつかせ、振ればそれは氷塊と化す。

しかし、そんな伝承は存在しない。だが、幸奈にとってみれば、ミョ

ルニルを盗むことに成功した唯一の存在。その怪力は、ツールと大差ないだろうという、確信がある。

故に——幸奈は、その巨人の力を信じる事にした。

幸奈が掴んだ布のような触覚、それが一瞬のうちに凍りつき、ヴァルゴの体を半分凍らせる。

「私たちは、勇者のように戦えない。だけどねえ……」

幸奈は、凍った触覚の上に乗れ、飛び上がる。

「勇者より弱いと思ったら、大間違いよおおおおお!!」

ヴァルゴの体に拳を叩きつけ、その体が半分砕け散る。

「くたばれ」

そして、露出した御霊に向かって、その拳を叩きつける。

御霊が粉碎され、ヴァルゴの体が砂を消える。

それを見届けた佐奈は、すぐさま指示を飛ばせる。

「このまま行くぞー!」

『はい!』

その声に、体当たりから復活した真斗も含めて、応える。

「ゼアアア!!」

信也の蹴りが、ライオンの腹を貫く。

「ゴア……」

血を吐いて地面に倒れ伏すライオン。しかしすかさず横からハイエナが迫る。

「失せろ!」

そのハイエナを白露が爪で切り裂いて殺す。

「だあもう!これじゃあ切りがない!」

白露が喚きつつも、無制限に溢れ出す猛獣たちを次々と倒す。

「やっば、あの野郎を倒さねえと終わらねえみてえだな!」

そう言いつつ、信也は向こうで高見の見物をしている子供——

『猛獣刑』のレンリを睨みつける。

「んー、なかなかくたばらないなあ」

その様子を、レンリは建物の屋上で退屈そうに見ていた。

たしかに、先ほどから大量の猛獣を召喚してはいるが、それをもつてしても、中々彼らは倒れない。

疲弊もしない。むしろ召喚するスピードよりも速いように見える。

このままでは確実に召喚が間に合わず全滅してしまうかもしれない。

「うーん。あ、そうだ！」

ふと、レンリはその見た目通りの笑顔を作ると、その手のステッキを振るつた。

その直後――

「ん？」

突然、猛獣たちが呻きだしたかと思うと、いきなり興奮して、先の倍以上のスピードで襲い掛かってきた。

「ぬあ!？」

飛び掛かってきた大型犬の噛みつきを回避する信也。その空ぶつた噛みつきが目の前で凄まじい音を立てて通過する。

「なんだ!？」

「いきなり速度が上がったと思ったら、力も上がってる……!？」

その事実には、二人は驚愕を隠せない。

「ついで皮膚も硬くなってきてるな……まあ蹴り殺せない程じゃないが……セイツ！」

それでも余裕な姿勢を崩さず、信也は目の前に飛び掛かってきた猫をサッカーボールを蹴飛ばすような感覚で蹴つ飛ばす。

「でも、どうしたんだろうこの動物たち」

背中合わせに相談する二人。

「ドーピングか何かじゃねえか？」

「まあそれが妥当だよね」

が、それも一瞬の事。すぐさま襲い掛かってきた猛獣たちを足と爪で一蹴しつつ、入れ替わるように互いが攻撃した猛獣たちに止めを刺す。

「ま、そろそろ面倒になってきた所だ」

「うん、もう我慢する必要もないよね」

白露が、突如その場に四つん這いになる。

それは陸上で言う所のクラウチングスタートの姿勢ではなく、虎のように獲物に狙いを定める時のような恰好だ。

『虎疾駆』

次の瞬間、白露の姿が掻き消えたかと思つた瞬間、すぐさま周囲にいた獣たちの半分が切り裂かれる。

これが白露の速度と力に特化した『虎之威』の能力。

虎に関する事ならなんでもできる。ついでその身体能力も数倍にまで跳ね上がる。

一方の信也は地面を踏み碎いてアスファルトを空中に飛びだたせる。

『小石蹴』
ストーンシユート

そして、浮かした小石を全て蹴り飛ばし、それらすべてを残りの獣に命中させる。

「あーらら、全部倒しちゃったか。これじゃあ『魔獣化液』ドールベリソング使つても意味ないじゃないか」

いかにもつまらなそうにぼやくレンリ。

「あ、そうだ」

しかしまた何かを思い出したかと思つたら、ステツキの先で立つていた建物の屋上の床を叩く。

すると、二人を挟み込むかのように、巨大な魔方陣が二つ現れる。

「今度はなんだあ？」

「別に、もう一度倒すだけだよ」

しかし、そのような状況に陥つても二人は余裕を崩さない。

「ふふ、恐怖するがいいよ。その二匹は僕の持つ猛獣の中で、最強の猛獣だからね」

魔方陣から、何かが出てくる。

まず、片方から現れたのは、とてつもなく巨大な腕。まるで大黒柱のように太く長い腕が現れたかと思うと、次に現れたのは、巨大な角——それも肩から生えた。さらにはまるまると太った胴体が現れ、

そして、牙の生えた口を持った頭部もでてくる。足は腕よりは短いものの、それでも人間からすればかなり巨大。

腕と足、そして丸い耳は黒く、胴は白い。というかこれは――
「パンダだな・・・」

「うん、それもすつごく大きな」

さらに一方で、化け物パンダと同様のサイズで、同じように巨大な大黒柱のように太く長い腕に巨大な胴体。パンダのように牙は生えていないが、額からはこれまた立派な角が生えている。

が、それを除けばそれは完全な――

「クマだね」

「ああ、ちつとばつかしでかいクマだな」

だが、その巨大さは、二人からしてみてもかなり圧巻だ。

だが、それでも二人とも恐怖をおくびにも出さない。

「どっちがどっちをやる？」

「じゃあ俺がパンダをやるからお前はクマやれ」

「オーケー。死なないでよ」

「分かってんよ」

そうして、二人して身構えた所で、クマとパンダが同時に仕掛けてくる。

そして、ほんの一瞬で二人をその拳の射程に収めた。

「!?!」

その巨体に反する、驚異的なスピード。

その二体の拳が、二人を挟みつぶすように叩きつけられる。

しかし、飛び散るはずの血が出ない。

「あつぶねえ」

「回避が遅れてたら危なかったね」

どうにか上に飛ぶことで回避したのだ。

それを確認した二体は、すぐさま飛び上がって二人を迎撃する。

「やベツ・・・!?!」

「反応もはやっ・・・!?!」

拳がまたもや叩きつけられる。しかし今度は二人とも迎撃して弾

き飛ばす。

(おもい・・・!?)

(長く受けてられないかも・・・!?)

そのまま、クマとパンダのラツシュが二人に殺到する。

「くおおあああ!!」

「ぎつあああああ!!」

ラツシュが殺到し、二人は背中合わせでそのラツシュを凌ぐ。

(このままじゃやられる! だったら!)

ここで信也は後ろにいる白露の襟首を引っ掴むと、空気を蹴って、空中に逃げる。

「ッ!」

「流石に二段ジャンプなんて事は出来ねえだろ!」

そのまま白露を下にすると、足を折りたたんで白露に向ける。

「行くぜ・・・」

「いつでもオツケーだよ!」

「そんじゃあ・・・タイガーシユート虎蹴」オ!!」

そのまま白露の足裏を蹴り飛ばす。白露は地面とクマとパンダに向かって一気に落下する。

「トラノツメ範囲拡張——『虎之爪』!」

そして、二体が反応する前に、その胸を爪で切り裂く。が、その前に二体は互いに押し飛ばして、その爪の直撃を回避した。

(薄皮一枚・・・くそ!)

そのまま虎のようにしなやかに体を反転させると、地面を踏み碎いて着地する。

その横に信也が着地する。

「野郎、パンダの癖してなかなか戦いなれてやがる」

「あつちもクマもね。どつちもすごいよ」

「こりやあ気合入れないとな」

「そうだね」

白露が虎伏の構えを取り、信也も構えを取る。

その様子を、レンリはにやにやとした様子で眺めていた。

「んー、実にいい眺めだ。罪人が苦しむ様は、見ている飽きないものだからねえ」

事実、レンリは猛獣を調教する上で、その悲鳴を聞くのが大好きだ。故に、罪人が生きたまま猛獣に食われる時に上げる悲鳴も彼を高揚させるのに十分。

「さあ、悲鳴を聞かせてくれ。お前たちの奏でる悲鳴を聞かせておくれ。安心してくれ。観客は沢山いるから」

故に、レンリは決して危険を冒さない。

だが、その一方で、傍観者に徹していたレンリだから気付いた事がある。

「あれ？あの女の子は一体・・・？」

その眩いた時——背後から殺気を感じたレンリはすぐさまそこから横に飛び退く。すると先までレンリがいた床がスッパリを斬られる。

「なに・・・!？」

『おい！最後の最後で感づかれちゃったじゃねえか！お前やつぱ暗殺向かねえだろ！』

「うるさいな！外したなら外したでこっちの独壇場なんだからいいでしょー！」

その犯人は、優だった。

ジャケツトを着込んで腕に包帯を巻いたその姿はさながら不良のようだ。

「おつかしいなあ。さつきまであそこにいたよね」

「お前の目を欺いてここまで接近した。大人しく私に殺られろ」

優は手刀をもって、レンリを睨みつける。

「ええー、やだよー。まだアイツらの悲鳴を聞いてないし、まだまだ生きていたいもん」

「残念だけど、もうお前が悲鳴なんてものを聞くことはない。なぜなら、私がお前を殺すからだ」

「んー、殺せるのかなあ？君のようなガキに」

「お前もガキだろうか」

実を言うと、この汚い言葉遣いの優が本来の優だ。

どうにも椿の血を濃く継いでいるからか、まさに不良のような性格になってしまっているのだ。

「さっさとかかってこい。ザコ」

「んー……」

単純な挑発。それでレンリは乗ってくるか。そう思っていた優だが。

「やだ。逃げるが勝ち！」

「な!？」

レンリは逃走を選んだ。

そのまま隣の建物へ飛んでいってしまう。

「逃がすか！」

だが、優がたちまち追い縋って、レンリの無防備な背中に向かって拳を掲げる。

「引つかかったな」

「な!？」

しかし、レンリの脇から、一本の刃が伸びて、それが優の腹に直撃する。

「ぐう……!？」

「甘いんだよ罪人がある。お前如き、この僕に勝とうなんざ、百万年早いんだよお！」

そのまま吹き飛ぶ優。それと同時に、血が飛び散る。

優は床に落ちて倒れ伏す。

「ハハハハ！上手く後ろを取ったみたいだけど、残念だったね！お前はここで終わるんだよ！見ろよ。この血を……あれ?！」

レンリは、自分のステッキに仕込んでおいた刃を見る。

だが、優を突き刺したその剣には血が一切ついていない。地面には、ちゃんと血が飛び散って――

ふと気付けば、優の右手には血が垂れ流れていた。

「はっ、誰が終わるって?！」

優が鼻で笑う。

「黙れ——お前の言葉なんて聞く耳を持たない。お前の体を搔つ
捌いてその中身ぶちまけて死ぬのはお前の方だ」

左手を前に、右手を腰に、左足を前に、右足を後ろに。

そのような構えを取り、優は、言い放つ。

「来いよド三流、格の違いを見せてやる」

凄まじい程に、刃と刃が交錯する。

ヒュアツインテの操る二つの剣と、園子の千本の剣。

その全てが、亀甲していた。

「こ……のお……！」

「ふふ、どうしました？その程度ですか？」

激しい攻防に園子は苦しさに顔を歪め、一方のヒュアツインテは汗
一つかいていない。

「こ……の……こっちは千本なのに……あっちは、二本だけなの
に……どうして……」

「あまりにも大量の剣を操るのに集中力を使い過ぎですよ？そんな
じゃあ私の攻撃を上回る事なんでできませんよ？まあ、二本の時点
で、貴方に私を超える手段は、ありませんがね」

「オオオオオ!!」

そのヒュアツインテに、辰巳が剣を振り下ろす。しかし、その一撃
はヒュアツインテの操る八本ある内の一本に防がれる。

「ははっ、不意打ちのつもりですかあ？丸見えなんですよ……」

『紅蓮の魔女』！
ジャンヌ・ダルク

「ッ!?ぐおああああ?」

突如、辰巳の剣を受け止めていた剣が燃え上がったかと思うと、そ
の炎が辰巳を襲い、吹き飛ばす。

「ッ!?師匠!」
せんせい

「余所見すんな！」

「ッ!？」

千景の叫び。しかし、それに気付いても、すでにヒュアツインテの迎撃に向かわせた二対の剣の内、一本が園子に襲い掛かる。

「うっあ!？」

その一撃を、その手に持つ槍の柄で弾き飛ばすも、もう一本の剣が園子の脇腹に突き刺さる。

「が……!？」

『人喰らう女王』

剣が突き刺さる、その直後に、園子は、体の血の気が一気に失せるような気がした。

「いや、これは……本当に血がなくなってきた……というか、これ……喰われてる!？」

なんと、剣が園子の体を喰っているのだ。まるで、剣の表面に無数の口が突いているかのように、少しずつ、しかし確実に園子の体を喰っていた。

「ぬ、抜かないと……」

「天鎖刈！」

園子はその剣を抜こうとする前に、千景がその剣の柄に鎖を巻き付かせて、力任せに引き抜く。

「ぐ……うう……」

そのまま園子は地面に降りて座り込む。

「大丈夫か？」

「な、なんとか……」

「止血しておくぞ」

「あ、ありがとう……」

『封印縛鎖』で体外に出る血を止めると、千景はヒュアツインテを睨みつける。

「魔女と呼ばれ、炎に焼かれた聖女『ジャンヌ・ダルク』、国を守った英雄的存在はあるもののその反面、人の肉を喰らうサディスト『ジнга』……どれもこの世界の人間じゃねえか」

「ええ、そうですよ。一本を除いた七本の剣たちには大罪を犯した女たちの名前が刻んであります」

ヒュアツインテは、一本の剣を彼らに向ける。

「丁度良い位置にいますね」

にこりと笑ったヒュアツインテの笑顔にぞっとした直後に、剣が炎を纏い、やがて一匹の龍へと変化する。

「炎を纏った龍……まさか!？」

『嘘殺しの龍女』

愛する人に嘘を吐かれてその身を龍へと変えた悲しい女性『清姫』。それがヒュアツインテが向けた剣の正体だった。

炎の龍が襲い掛かる。

『文字連鎖』——『八岐大蛇』ツ!!」

千景の装束が変化する。

その装束を金糸梅を想起させる装束へと変化させて、その体に蛇の痣を浮かび上がらせる。

そして、自ら生み出した水を壁のように展開させる。

その壁に炎の龍が激突する。

「ぐ……おあ……」

水の壁が蒸発していく。しかし、次から次へと溢れ出る水の勢いに勝る事は出来ず、その進行は阻まれる。

「——ツ!!園子オ！」

『千剣八咫鳥・一角』——ツ!!」

園子が掲げた槍の穂先に刃が集まり、やがて鋭いドリルの形となつて、水の壁に突撃、その先の龍——の中にある剣に直撃し、弾き飛ばす。

それと同時に龍も掻き消える。

「チツ、凄いだか」

『文字連鎖』

「ツ!？」

千景が影の中に沈む。

すると、園子がヒュアツインテの後ろに浮かべておいた刃の一片の

影から千景が現れる。

『影移動』

そのまま、その手に持つ刀を鎌へと変化させてヒュアツインテに背後から奇襲する。

「甘いんですよ」

しかし、その動きを読んでいたのか、ヒュアツインテが振り向いて剣を一本、千景に向かって放つ。

だが――

「ひいなあたああああ!!」

「!？」

そのヒュアツインテの背後から、辰巳が剣を掲げて突貫してくる。

その構えはまさしく突きの構え。自身を砲弾として、園子に撃ち出してもらい、その背後を攻撃する気なのだろう。

それも殺す気で。

二方向からの同時攻撃。それにヒュアツインテは避ける事は出来ない。

このまま行けば、ヒュアツインテは双方片方の攻撃を受けてしまうかもしれない。

しかし、それでもヒュアツインテはさらなる手を用意していた。

「だから甘いんですよ――『毒セミラミスの女帝』」

その途端――

「ぼ……!？」

「があ……!？」

二人が急に苦しみだす。

アツシリアという国を支配した女帝『セミラミス』の名を冠する剣。その能力はありとあらゆる毒を生成する。

今、その剣は、空气中に皮膚をも溶かす酸性の毒を空中に散布したのだ。

これを喰らえば、間違いなく常人なら死ぬ。

辰巳はその体質故に、一時体は解け、そのまま態勢を崩してヒュアツインテの下を通過。

しかし、千景は——むしろ耐えきって鎌を振った。
しかし、その一撃はヒュアツインテの操る一本の剣によって防がれる。

「あら、耐えたのですか」

「痛みには強くてなあ．．．!!」

「ふふ、そうですが。ですが、やはり一手足りない」

「ッ!」

『ラ・ヴォアサン
残酷なる魔女』

剣が千景の鎌を弾き飛ばし、その胸に一閃の傷を入れる。

「づっ!?!体が．．．」

すると突然、体が動かしづらくなり、そのまま受け身を取れないまま地面に落ちる。

「ぐ．．．あ．．．!?!」

「希代の悪女にして魔女『ラ・ヴォアサン』。その所業は、毒薬などの売買にだけにとどまらず、黒ミサと呼ばれる神を冒瀆する儀式をやっていた最低な女．．．この剣の能力は相手に呪いをかけてその動きを制限するものです」

「そう．．．かよ．．．『封印解鎖』!!」

「ッ!?!」

鎖が砕けるような音とともに、千景を縛っていた呪いとやらが消え、体が自由になる。

「まさか、呪いをこうも簡単に解くとは．．．」

「解くだけなら簡単なんだよ」

「そうですねか．．．ふむ、そっちはそっちですすでに適応してしまいましたか」

ヒュアツインテが後ろを見れば、そこには何事もないかのように立ち上がった辰巳の姿があった。

「俺の体は異常な再生能力を持っているからな。体を治しながら抗体を作ったぞ」

「適応力も凄まじい．．．ああ、本当に憎い。今も生きているお前たちが憎い．．．」

あまりにも深い憎悪。彼女の操る八つの剣が、その憎悪を具現化しているかのようだ。

「ひなた・・・」

「ひなたさん・・・」

決め手は見つからず、相手はすさまじく強く、勝機が見えない。

さらに相手は見知った顔。それも、愛する者であり、自身が敬愛する者の愛する者であり、そして、友人。

(やはり手加減してしまう・・・)

相手はすさまじい程に強い。

三人で戦っているのに、まるでこちらが押されている。

(使うしかないのか・・・『アレ』を・・・)

しかし、それを使えば、手加減できずに相手を殺してしまう可能性がある。

それだけは、避けなければならない。

そう、思った、直後――

「まだ仕留めていなかったのか、ヒュアツインテ」

あまりにも、重い、殺気だった声が、聞こえた。

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

どんどん、崩れていく。

自分の体が、自分の、皮膚が。

中身が、どんどん曝け出されていく。赤い皮膚が、どんどんその姿を見せる。

怖い、怖い、怖い。

これが、怖い。自分を、知るのが怖い。逃げたい。だけど、逃げられない。

「やだ・・・やだ・・・まだ・・・まだ・・・私は・・・」

思い出したくない。気付きたくない。何か、自分の正体が何かを、思い出したくない。

助けて、誰か、これを止めて、お願い、助けて。

「だれか・・・たすけて・・・」

四神官VS防人最強組

炎が迫る。しかし、その一撃を、左の剣で斬り払う。

「だらっしやあああ!!!」

そして、右の大剣で目の前の女に——フォイアに叩き落とす。

しかし、その一撃は容易に交わされて、再度追撃の火炎弾が飛ぶ。

空中にまき散らされた火球が、フォイアの指示によって動き、それぞれが意思を持っているかのように、襲い掛かってくる。それも明日香の周囲に散布されているために、四方八方から襲い掛かってくる。

「こんにゃろー!」

それに対し、明日香は両手の剣で迎撃を敢行する。

明日香の剣は、己が契約する『正』の悪魔の力によって、二つの使い用途がある。

一つは断って正す。

剣刃による斬撃で、相手の異能系の攻撃を全て無効化する。

二つ目は返して元の場所へ正す。

剣の腹で叩くことによって、その攻撃を全て元の発射主へ弾き飛ばす事が出来る。

まあ、この場合は『正す』というより『返す』というのが正しいのだが。

それはともかく。

「ドララララララッ!!」

襲い掛かる火球全てを、驚異的な身体能力をもって全て弾き飛ばす。

明日香は、その子供時代を、ほぼ森の中で過ごしてきた。

故に、気配の察知にはすさまじい程の獣ぶりを発揮する。

弾かれた火球全てがフォイアに返っていく。

「あめえんだよ」

だが、その攻撃全てが突如現れた炎の壁によって防がれる。

そこへ明日香がさかさず大剣を叩き落して、炎の壁を破壊。さらに左の剣を突き出して突き刺そうとする。

「ウラア！」

しかし、その一撃はフォイアの放った後ろ回し蹴りによって、右に逸らされる。

そのまま回転したフォイアは、錫杖のような槍を突き出す。

その突きを、明日香は顔を傾けて顔面への直撃を回避、頬を掠め、斬れる。

しかし、それで終わらない。前に進む体を足で無理矢理止めて、左の剣を薙ぐ。

フォイアはそれをしゃがんで躲し、そのしゃがんだ所へ右の大剣が振り下ろされる。

それすらも躲され、アスファルトを砕く。

「なんで馬鹿力だよ・・・！」

「くおらああ!!逃げんなあー!!」

「黙れ人間!お前なんかには逃げるなんて言われたくないわ!」

槍が突き出される。明日香が迎撃する。されど正面衝突、鏑迫り合いに持ち込まれる。

「チイツ!忌々しい・・・まさか人間如きにアタシの炎が封じられるなんて・・・!」

「ハッハッハ!ソイツいいなザマミロ!さんざん俺の事を猿と言ってくれた罰だワッハッハ!」

「ああ!?確かにテメエらは猿だがそれ言ったのはアタシじゃねーよ!」

「否定しないんかーい!?!」

「だあああ!うっせえ!黙ってアタシに殺されろおおお!!」

「やあなこつたあああ!!」

互いを弾き合い、距離を取る明日香とフォイア。

「うおおああ!!」

「だらあああ!!」

そのまま、二人は激しく打ち合う。

優理が無数の霊子の矢を放つ。

それをヴェントはその隙間を縫うように躲す。

反撃にヴェントは風の槍を放つも、それは全て雀の持つ盾によって防がれ、その盾の影から夕海子が銃剣から弾丸を放つての反撃を返す。しかしそれすらも躲される。

「当たりませんわね！」

「うう！速く仕留めてよー！」

「分かっているー！」

再度、無数の矢を放つ優理。しかし、やはり躲される。

「チツ、無駄にすばしっこい奴め」

「アハハ、さつきは驚いたけど、分かっちゃうとそうでもないねー？」
「ッ!？」

それもそのはず、ヴェントが操るのは風の元素。そしてその派生は雷が含まれており、その力によってヴェントはすさまじい速度で空中をかけていた。

だから、そう簡単に矢は当たらない。

「今度はこっちから行くよー！」

宣言、その後、ヴェントが乱射される矢の雨を掻い潜って優理たちに接近する。

その狙いは、当然優理だ。

その足に風を纏い、そのまま難いで優理を攻撃する。雀の防御は己に向けられる害意にのみ反応するもの。他者への害意も当然察知できるが、それでも反応は一拍遅れる。

「優理さんー！」

「優理様……！」

間に合わない。しかし――

「心配するな」

優理が腰から抜いた薄い長方形のケースのようなものを取り出すと、その片方の穴から、光の刃が現れ、その一撃を防ぐ。

「え……!？」

「霊子によって構成された刃だ。構成された霊子は振動している為、まるでチェーンソーでそぎ落とすように、お前の体を切り裂く」

その言葉通り、光の刃は叩きつけられた風の一撃を全て掻き切つて、相殺する。

「そんな・・・」

「ハッ！」

振るわれる光の刃。それをヴェントは軽い身のこなしで躲す。

しかし、脛を僅かに掠める。

「逃がすか！」

しかし、すかさずその剣を矢に番え、放つ。

それすらも躲すが、その刃はヴェントの頬を掠める。

「う・・・わ・・・!？」

「チツ、仕留めそこなっただか」

さらなる矢を番える優理。

だが、突如としてヴェントが笑いだす。

「ふふ・・・アハハ・・・!」

「・・・何が可笑しい？」

「何が・・・?どうして私が怪我を負ってるのかなあ?」

「・・・?」

顔を上げたヴェントの頬には、一閃した傷口からたらりと血が流れ出ている。その表情はあまりにもその見た目相応のものとはかけ離れており、あまりにも、何かが欠落していた。

「これは間違いだね。うん、だって私が人間如きに傷つけられる訳ないもん」

「ふん、どうやらプライドが傷つけられて、おかしくなったか」

「アハアハ、そう、これは間違い。こんな事あっちゃいけないんだ」

ヴェントの周囲の風の流れが、何か、おかしくなる。

「うん。こんな事あっちゃいけない。だから消さないよね。アハアハ

「・・・雀」

「分かってるよおおおおお!!」

次の瞬間、間髪入れず、竜巻そのものが叩きつけられた。

なんの前触れもなく、いきなり、優理達の所に竜巻が落とされた。

全てを巻き込んで壊していく、破壊の風。

その威力は、巻き込む物が多ければ多いほど強くなる。

あまりにも激しい暴風が、三人のいた場所を、跡形もなく消し飛ばす――

「と、思ってたか？」

「え!？」

しかし、その暴風の中、三人は生きていた。

雀の持つ盾を霊子によって強化し、その暴風の槍を受け止めているのだ。

「な、なん・・・!？」

「なんで、と思う前に、貴方は防御に徹した方がいいと思いますわよ!？」

そして、『インビジブルロード霊子滑走』に乗ってヴェントの背後に回った夕海子が、ヴェントの背後へ弾丸を放った。

それを間一髪でかわし、ヴェントは反撃に電撃を飛ばそうと右手を突き出す。

だが、それよりも速く、ヴェントの肩の背中側に、霊子の矢が突き刺さる。

「やつとまともな一発、といった所か」

竜巻を雀に任せ、優理は、その矢の一発をヴェントに叩き込んだ。

「う・・・あ・・・!？」

「これで、トドメですわー!」

そして、夕海子がヴェントにその銃剣の刃を叩きつける。――
その直前。

「うわあああああ!!!」

ヴェントを守るように、竜巻が発生した。

「な!？」

「これは・・・!？」

「ひいやあああああ!？」

あまりにも突然な事で、反応が遅れる。

だが、すぐさま優理は気付く。

「ツ!?まずい・・・離れる弥勒——」

しかし、その叫びは一足遅かった。

その竜巻は、風を引き寄せ、それによって周囲の物をなんでもかんでも引き寄せていく。

その餌食に——夕海子がなってしまった。

「きゃあああああ!!」

夕海子の『戦衣』が砕け散り、風に巻き上げられていく。

「弥勒さ——」

「チイツ!!」

優理が、『インビジョンフルロード霊子滑空』を使い、すぐさま風に流されていく夕海子を回収。すぐさま雀の元に戻る。雀は巨大化した盾の下部部分についたエッジによって固定しているため、風に流される事は無い。

「うう・・・」

「ああ!弥勒さん・・・!」

「直撃を受けた。たが致命傷にはなっていないが・・・これでは戦えんだらうな・・・!?!」

突然、横の建物が崩れる。

「ぎゃああああ!?!崩れたああああ!!」

「チツ!ここまでの威力があるのか!」

「どどどどうするんですかああああ!?!」

「ええい!黙れ!今考えている!」

ヴェントが引き起こした巨大な竜巻。それは周囲を引き寄せ、跡形もなく粉々にする暴嵐そのもの。

(何か攻略法があるはずだ・・・あの竜巻をどうにかする方法が・・・) そこで優理は自分の弓を見る。

「・・・」

「あ、あのー、優理様?わたくしはいつたいたいどれくらいこうしていればいいのでしょうか?」

「・・・あの竜巻がなくなるまでだ」

「じゃあ私の命が終わるまで永遠に終わらないじゃないですかあ!!うわあああん!!」

とうとう泣き始める雀。その頭をぶん殴る優理。

「酷い！」

「喚くな。俺がどうにかしてやる」

「へ？」

間拔けな声を発して、優理は霊子を足に纏い、地面にしっかりと固定させる。

それを繰り返しながら、優理は盾の防御範囲を出る。

「弥勒を頼んだぞ」

「は、はい……」

優理は、弓を握りしめ、目の前に荒れ狂う竜巻を睨みつける。

「さて……始めようか」

優理は、矢をその弓につがえ、そう呟いた。

地面が割れに割れまくる。

「うおおおおお!!」

「わあああああ!!」

その惨事に対して、シズクと昴はとにかく逃げていた。

「くそがあ!やり過ぎだアイツらア!!」

「そうはいつでも仕方がないよ!互いに似たような能力なんだから!」

「くそつたれがあああ!!」

しかし、叫ばずにいられないのもまた事実。

将真が、槍を振るいつつ地面を踏みしめ踊る。

それによって地面が盛り上がり、巨大な手となって、エーアデを襲う。

だが、その両手の、まるで蚊を叩くかのような手を合わせる攻撃を、

エーアデは土で作った柱状の棒を挟んで防ぐ。そして、地面を両手で叩いて、土の波を起こす。その波は将真に向かって飛んでいき、それを将真は地面を踏みしめて、波が起きる事、それ事態を防ぐ。

そして、巻き上がった土煙をまとめ上げて礫とし、それをエーアデに打ち返す。

それをエーアデは土の壁を作って防ぐ。すかさず、その土の壁を叩いてその壁から土の杭を伸ばして将真を攻撃、しかしそれを将真は槍の一撃をもって粉碎する。

「チツ！どこまで追いつてくるんだ!？」

「ハツハツハー！追いつているのは果たしてどつちかなあー!」

「ほぎけ!」

エーアデがにやりを笑い、その手を真上に掲げる。そのまま指を鳴らす。

すると、突然、どこからともなく巨大な岩石が二つも出現する。

「なんとおー!？」

「つぶれろ」

落とされる巨大岩石。

だが、始めこそは驚いた将真ではあったが、すぐさま槍を振り回して独特な動きを完了した後、自らの左右に先ほどと同じような巨大な手を出現させる。

「無駄だ。いくらその手をもってしても、その岩石を受け止める事は出来んぞ」

「ハツハツハー！受け止めるのではない!ぶつけるのだ!」

そう言つて、将真は手を操作する。

その手は、巨大な岩石の片方を掴むと、そのまま横に——もう一つの岩石にぶつける。

「な!？」

「そいやっさあああああ!!」

巨大な岩石はそのまま進路を変えられ、将真の横を通過し、地面を砕いていく。

「チツ、二個だったのが仇になったか・・・!」

「今度はこちらの番だ！」

すぐさま将真が反撃に出る。

突如として片足をあげ、まるで相撲のしこを踏むかのように、地面に叩き落す。

だが、それだけで何も起きず、将真は、そのまま低い姿勢のまま、両手を地面につく。

それは、さながら相撲を取るときの格好そのままだった。

「なんだ・・・？」

それを、シズクと昴も見ていた。

「あれは・・・！」

「でるぞ・・・」

そして、エーアデが何か理解する前に、将真が前に出た。

「はっけよい」

瞬間、将真の頭突きが、エーアデに炸裂した。

「ぐああああ!？」

「ぬッ!？」

否、直撃はせず、ギリギリの所で土による鎧を作って防御していた。

「距離があつたのが仇となつたか・・・!？」

しかし、威力は殺しきれず、そのまま後ろに吹っ飛んでいくエーアデ。しかし、どうにか踏みとどまって転倒だけは防ぐ。

「ぐ、なんで殺人的な体当たりなんだ・・・!？」

それでも将真は相撲をたしなんでいる。

故に足腰は丈夫だし、ちよつとやそつとでは絶対に倒れない。

いや、例えどんなトラックが突っ込んでも倒れる事はないだろう。

これは流石に言いすぎか。

「ハッハッハー!このまま押し切つてやるぞ！」

「やれるものならやってみろ！」

さらに一方で。

無数の氷の刃が降り注ぐ。

しかし、その氷の刃を、芽吹は、まるで予知でもしているかのように全て避ける。

時には、躲せないものもあるが、それはその手に持つ銃剣によってことごとく弾かれてしまう。

「く、なんてすばしいの・・・!?!」

その避けられているという事実には、ヴァッサーは苛立つ。

だが、それでも芽吹に攻撃が当たらないのは事実。

そこでヴァッサーは芽吹の動きを封じる事にした。

芽吹の立つ、建物の屋上の床に、氷を張る。

氷は摩擦性が極端にない。故に、足を滑らせやすいのだが、芽吹はまるで苦にもせず氷の上を走っていた。

「なんツ・・・!?!」

「甘いよ・・・!?!」

引き金を引く。放たれる弾丸は真つ直ぐヴァッサーに飛んでいく。

だが、それをヴァッサーはドーム状の氷を作って滑らせて、芽吹にそのまま返す。

「チッー」

舌打ち一つ後にかわして、そのままヴァッサーに近付こうとする。

それに対してヴァッサーは氷の刃を大量に、まるで隙の無い程に展開すると、そのまま、まとめて芽吹にぶっ放す。

それに対して、芽吹はその隙間無い無数の氷の雨に向かって止まらず、むしろ加速して突進する。

そして、銃剣を右手の上で踊らせる。襲い掛かる氷の雨を、直撃するもの全てを銃剣の剣と弾丸、そして体術をもって弾き飛ばす。

そのまま突破。ヴァッサーに接近する。

「なんツ・・・!?!」

「ウラアッ!!」

振り下ろされる銃剣。

それを生成した氷の剣で防ぐ。ヴァッサーはもう片方の手の錫杖を捨てると、その手で冷気を収束した球体を生成すると、それを芽吹

にぶつけるべく振るおうとしたが、それよりも速く芽吹の蹴りがその手首を叩き、阻止する。

だが、本命はそれではない。ヴァッサーの足はすでに建物の屋上の床に触れている。ならば、そこに張られた氷を使って攻撃する。すぐさまヴァッサーの足元から氷刃が出現し、芽吹を襲う。

だが、それを芽吹はヴァッサーを蹴り飛ばす事で紙一重で躲す。

そのまま空中に飛び出たまま引き金を引き絞り、銃弾を連発する。

その全てをヴァッサーはまたドーム状の氷を作ってそのまま返す。

それを芽吹は体を捻って空中であつても躲す。

そのまま着地する芽吹に、ヴァッサーは忌々し気に呟く。

「罪人のくせに、よくもそこまで動けるものね」

「罪人罪人うるさいわよ。罪人だからってなんでもやっていいって思ってたら大間違いよ」

「はあ、うるさいわ。罪人がきゃんきゃんとうるさいわ」

「人を小うるさい小動物みたくいうな」

「だから、奥の手を使うわ」

そう、ヴァッサーが呟いた直後――

パキッ

「ッ!?!」

耳に届いた、何か割れるような音と共に、芽吹は一気にヴァッサーから距離を取った。

そのまま屋上から落ちる。

そのさなかで、芽吹は自分の頬に触れる。

(こ、凍ってる・・・!?!)

そう、芽吹の頬が凍っているのだ。

芽吹の『鬼気・極限羅刹』をもつてしても、この氷結を回避できなかったのだ。

(何が起きたの・・・!?!)

そのまま地面に着地し、見上げればそこからヴァッサーが接近してきていた。

「このまま奴を近づけるのはやばい――」

「うおあああああ!?!」

「ツ!?!きやあああ!?!」

突然、横から飛んできた明日香をぎりぎり回避する芽吹。

「ぎゃふん!?!」

そのまま明日香は建物の壁に激突する。

「ちよ!?!明日香!?!」

その事に驚きつつ、芽吹は上から接近してくるヴァッサーを警戒して距離を取りつつ明日香の元へ向かう。

「ちよつと明日香!?!何があつたの!?!」

「ぬぐぐ．．．ばらっしやあああ!!あー!死ぬかと思った．．．」

めり込んでいた顔を抜きつつ、明日香はそうぼやく。

「くつそ、いきなり奥の手とか言つた途端に強くなりやがった」

「奥の手．．．?それって．．．」

ふと、向こうでヴァッサーと共にフォイアもやってくる。

「あらフォイア、あなた使ってるのね」

「そういうテメーこそ、『神技』使つてんじゃねーか」

何か、聞き慣れない言葉を言い合う二人。

「神技?なんだそりゃ?」

「奥の手って事なんじゃないの。とにかくかなりやばいってのは分かるでしょ?」

頬についた氷から手を離しつつ、芽吹は銃剣を構える。

目の前からは、熱波と寒波の両方がやってきていた。

「．．．突つ込むか?」

「やめておいた方がいいかもしれない．．．あれは、そういう次元の話じゃないと思う」

近づく二人の神官、それに対して、芽吹と明日香は、それぞれの得物をもって対峙する。

しかし、そこでヴァッサーが動いた。

足の裏にスケートのブレードのような部分が出現したかのような見ええた途端、とてつもない速度で二人に接近する。

「明日香、黒モードッ!!」

「ああ！」

芽吹の叫びに、明日香はすぐに応じる。

「遅い」

しかし、明日香が何か行動を起こすよりも速く、ヴァッサーは二人に接近した。そして――

――明日香の体が凍り始める。

「な!?!」

「明日香!?!」

あまりにも速く、明日香の体が凍っていく。

「私の『神技』『氷結世界』は冷気を操る。その範囲内に入ったものは、最大三十秒で体の芯まで氷になるわ」

「ぬ、ぐっおああああ!!」

体全体が氷になる寸前、明日香が己の中を流れる悪魔の力を開放。その直後に氷が全てはじけ飛び、すぐさま横で同時に氷になりかけていた芽吹をつれて空へと飛ぶ。

そして、その氷をすぐに砕く。

「た、助かったわ・・・!」

「くっそ範囲内に入るだけで凍るとかチートかゴラア!!」

「でも範囲はあまりにも狭いみたいね。だったら・・・!」

芽吹が銃剣を向け、銃弾を放つ。銃弾は真っ直ぐ飛んでいき、ヴァッサーの眉間に直撃する――咎だった。

「な・・・!?!」

しかし銃弾は空中で止まっていた。

「無駄よ。この『氷結世界』は冷気を操る。それはすなわち、大気すらも凍らせるという事なのよ」

「んな!?!」

「そんなのマジ・・・?!」

つまり、大気を凍らせて弾丸を止めたという事なのだろう。

ようは見えないバリアのようなもの。即ち芽吹の弾丸は通用しない――

(そんな相手にどうやって戦うっていうのよ・・・?)

思わず、そんな思考が芽吹の脳裏に過ぎる。

が、それよりも速く、明日香が上空へ芽吹を投げる。

「!? 明日香!?!」

「下がってろ芽吹!」

今、明日香の体を流れる悪魔の力は、全ての異能を問答無用で粉碎する。

そして、その力を使って、高速飛翔も可能だ。

そのまま、ヴァッサーに向かって突撃を敢行する明日香。しかし。

「アタシを忘れんな」

「!?」

横からフォイアが飛び込んでくる。

「アタシの『灼熱地獄』ヴァッサーとは真逆、つまり、全てを溶かす熱気を操る事が出来る!」

「ぐ、あああああ!?!」

灼熱の大气が、明日香を襲い、その空気を吸った明日香の肺をすぐさま焼く。

そして、人間の体は、四十度以上の熱には耐えられない——だが。

「な、めるなあ!」

剣を振り回して熱波を斬り払う。

それによって明日香を襲っていた熱波が掻き消える。

「チツ、意外と厄介だな」

「うおらあああ!?!」

左の剣がフォイアに直撃し、そして間髪入れずに右の大剣でヴァッサーを叩く。

「ぐっ……」

「くう……」

ぎりぎりの所で錫杖で防いだようだが、意外に重い。

「野郎!」

「舐めるな……!」

「こいやあああ!!」

絶叫し、再び二人に向かって突撃する明日香。

その様子を、芽吹は建物の屋上から見ている。

(悔しいけど、あれは私の手には余るわ……どこかから援軍を……)
思案していた所を、背後の轟音によって中断させられる。

「ぬあああああ!?!」

そして悲鳴。その悲鳴の主が芽吹の横に落ちる。

「え!?!」

「ぬ……うう……」

その正体は将真だった。

「将真君!」

「将真!」

さらに、シズクや昴もやってくる。

「シズクに将真!?!何があったの!?!」

「ああ、それが……ってあぶねえ!?!」

上空から飛来してきた無数の礫を回避する一同。

「申し訳ない、相手方のパワーアップについていけず……」

「なるほどね……」

見れば、地面を変動させながらこちらに向かって歩いてくるエア
デの姿があった。

「……聞くけど、あれは将真の手に負えないわけ?」

ブラック
「黒になれば問題はないが、それでも勝てるかどうか……」

「あっちもどうすんだよ?」

「ああ、あれね……」

シズクが指差す先にも、なぜか巨大な竜巻が起こっていて、これ
じゃあまさに災害のオンパレードである。

「いや、そもそもからして災害なのか……」

そう呟いて、芽吹は、一つの結論を出す。

「将真は明日香の援護に入って、シズクと昴は私と一緒にアイツを叩
く、いいわね?」

「うむ、承知」

「いいぜ」

「分かった」

手早く指示を出し、四人はすぐさま行動に出る。

「むっ！明日香はすでに黒ブラックになっていたか！ならば俺も——
ぬううんツ!!」

槍を水平に構え、もう片方の手で柄を掴む。

そして、己の中に流れる悪魔の力を表に出す。

体に黒い痣のようなものが広がり、やがてそれが両腕全体を覆う。

その姿はまさしく悪魔。

「助太刀するぞ！明日香！」

「おおー！サンキュー将真ア！」

「チツ、仲間が来たか」

「問題ないわ。すぐに片付ける。」

一方で。

「ふむ、先ほどの男は別の場所に行ったか」

「その代わりに、私が相手になってあげるわ。感謝なさい」

「誰がするものか！」

エーアデが地面を変動させる。

巨大な手が無数に出現し、それが芽吹たちに降り注ぐ。

「シズク、昂！自分でかわして！私は突っ込む！」

「無茶いわないでくれ！」

「ハッ！いつてくれるじゃねえか！」

降り注ぐ岩石の雨を掻い潜り、芽吹はエーアデに接近する。

そのまま銃剣の刃を正面上段から叩きつける。それをエーアデは

変形させた土で防ぐ。

「無策——ではないにしても突っ込んでくるか！」

「こっちは接近しないとまともに戦えないんでね！」

一方で、優理の方は。

「——ブラック黒解放」

明日香、将真同様、悪魔を宿す者としての共通上限解放能力『ブラック黒』を
開放する。

弓が黒弓となり、その弓を持つ腕が真っ黒になる。

(さて、俺は明日香のような運動神経を持っていないし、将真のようなパワーを持っている訳でもない。だが、その分、体の身軽さには自信はある)

目の前には見るも巨大な竜巻。

その竜巻に、例え矢を打ち込んでもその風の壁の前に防がれ、霧散してしまうだろう。

ならばどう対処するか——？

「決まっている——流れにのって中に侵入する！」

『インビジブルロード霊子滑走』を発動し、凄まじい速度で回転する竜巻を、その風の流れに合わせて駆け上がる。

凄まじい程に荒れ狂う風を巻き起こす竜巻の中を、優理は全力で入っていく。

風の中に安全に侵入するには、そのまま真っ直ぐ進んでも良い。だが、あまりにも速い速度で回る竜巻は、その風圧ゆえに、入った瞬間、すぐに巻き上げられて、そしてすさまじい高さから地面に叩きつけられて死んでしまう。だから優理はそうならないよう、風と同じ速度で走っているのだ。

しかし、事はそう簡単にはいかない。

竜巻の中には、巻き上げた瓦礫や、竜巻を起こした張本人であるヴェント自身が発生させている雷が迸っており、それらを躲してヴェントに近付かなければならないのだ。

「くそが……！」

悪態を吐き、優理はその瓦礫をかわし、雷を霊子の壁で防ぎつつ、ヴェントに接近していく。

「舐めるなよ……ガキが……！」

街中を勇者の脚力によって、走り回る美森。

怪物となった少女

「――銀ちゃん！」

翼が、叫ぶ。

しかし、返事をしようにも、上手く声が出ない上に、今は落下中だ。もう、痛みも感じない。

そんな、叩かれて落ちていく感覚の中、突然、何かに支えられたと思ったら、視界の端に、見知った顔が見えた。

「翼……」

「くそ、くそっ……僕がついていながら……！」

翼は、悔しそうに顔を歪めながら、敵に背を向けて逃げる。

だが、そんな翼を狙いすましたかのような、巨大な矢の一撃が、翼を打ち据える。

「ぐああああ!？」

肩を掠っただけなのに、凄まじい衝撃が翼の体を叩きつけ、落下していく。

そのまま巨大な蔓や根の間に落ちる。

そして、アタシが投げ出された。

「ぐふ……」

血が、口からあふれ出る。

ああ、畜生。あのサソリ野郎、ぜってーゆるさねえ。

でも、もうダメみたいだ。

「銀ちゃん!!」

翼が駆け寄ってくる。

「っ……ば……」

「喋るな！頼む！喋らないでくれ！」

翼が、必死に、アタシの腹から溢れ出る血を止めようとする。

「……」

「ぐ……ふ……！」

「ツ!?銀ちゃん！」

ああ、だめだこりゃ……これじゃあ、どっちにしろ、アタシは

助からないかも……

「しつかりしろ……死ぬな銀ちゃん……こんな所で死ぬようなタマじやないだろ……！弟がいるんだぞ……生まれたばかりの弟がいるんだろ!?園子ちゃんに料理を教えるんじゃないやなかつたのかよ！認めない。こんなの認めねえぞ！」

翼が、喚くように、何かを呟いてる。でも、それを理解する事は今のアタシには理解できない。

せめて、何か、言わないと……

「っ……ば……さ……」

「ッ！だからしゃべるなって……」

「——ありが……とう……さよな……ら……」

本当に、ありがとうな。翼。お前と一緒にいられて、須美や園子と一緒にいられて、アタシ、幸せだったよ。

だから——だか——ら——

そこで、三ノ輪銀は一度死んだ。

そして、銀は、今度は冷たい感触の中で目を覚ました。

(ん……んう……?)

意識が、覚醒するも、目を開ける事は出来ず、ただ、肌から感じる感触を感じ取っていた。

(なんだこれ……なんだか、めっちゃつめたい……匂いも感じないし……ふわふわしてる……ひんやりだ……それに、なんだか頭冴えてるな。暗い……なんでこんなに暗いんだ?……ああいや、アタシが目を閉じてるだけなのか……)

そこまで自覚した所で、銀は、おもむろに目を開けた。

そして、自分がどこにいるのかを、最初は理解できなかった。

(え・・・?)

そこは、どこかの水槽の中だった。

丸い、詰めれば大人十人は入れるだろうサイズの円柱状の水槽の中に、銀はいた。

(なんだこれ!? どうしてここに? アタシは一体・・・どうしてこんな所に・・・!?)

銀は、思わず水槽のガラスを殴る。だが、水中じゃ上手く力を込められず、その上、勇者としての力がない故に、割る事が出来ない。

(くそー! どうなってるんだ!)

「アモルさん、被検体50番の意識が覚醒しました」

「あら、やっと起きたのね」

水槽の外、そこに立っている、同じ年と思われる少女が目の前に立っている事に気づき、その少女が呼んだ女性が、改めて水槽のガラスに触れ、銀を見た。

「お目覚めはいかがかしら? 三ノ輪銀ちゃん」

『だれだお前!』

「私? 私の名前は倉科愛里、ここじゃアモルって呼ばれてるわ」

ピンク髪の女性は、妖しく嗤う。

『ここはどこなんだ!』

「それは言えないわ。だってここは所謂、私の秘密基地なんですもの。その秘密の場所を教える奴なんていると思う?」

『ぐ・・・』

銀は歯噛みする。

(くそ、なんなんだこの女は・・・気持ち悪い・・・それに、本当にここはどこなんだ? アタシは、一体、どうしてここに・・・あれ? でも何か、体に違和感が・・・)

そこで銀は、水中の中にいるのに酸素マスクらしきものをさされていない事に気が付いた。

『がぼっ・・・!?!』

「安心なさい。その液体の中なら呼吸をしていなくても生命活動は停止しないし意識もあるわ。なぜなら皮膚に触れている液体から直接酸素と養分を送っているからよ。だからその中ならマスクをつけなくても大丈夫って事。心配しないで」

確かに先ほどは慌ててしまったが、冷静になると確かに息苦しくない。だが違和感ありありで、空気ではなく水で呼吸しているのだから、なんともいえない気分になる。

それに、左腕に僅かに痛みを感じる。見てみれば、酸素マスクはなにのにかしらのチューブが自分の左腕に針を通して突き刺さっているのではないか。

それに、ひんやりしているから風邪をひきそうで怖い。

「これで今残ってる全個体の覚醒を確認したわね」

「はい」

アモルの言葉に、少女が答える。

「さて、今日も試験に取り掛かるわよ」

(試験？一体何をやる気なんだ・・・?)

そう、思った直後。

『いやだああああああ!!』

突然、どこからか男の悲鳴が聞こえた。

気付けば、自分の他にも、いくつもの同じような水槽が一定の間隔で設置しており、液体の入っている物の中には、決まってまだ若い少女が入っていた。その中の一つに入っている男子が、ガラスの中で暴れていた。

『やめて！やめてくれ！ば、化け物に、化け物になりたくないいいいいいい!!!』

(化け物・・・?一体なにを言ってる・・・)

銀には、何がなんだか分からなかった。

だが、それが何かを理解する前に、アモルは、その男子の入っている水槽の横にある装置に、何か、筒状の何かをセットし、そして、何かしらのボタンを押した。

『やめ、やめて・・・やめろ、入ってくるな、俺の中に入ってくるなああ

ああ!!」

そう、叫んだあと。

『うぐあ．．．ぎつああああああ!!』

突如として男が呻き出し、やがて凄まじい悲鳴と咆哮と共に、その体から真っ黒な毛が溢れ出し、顔の形が変わり、体が膨れ上がり、やがて異形の存在へと変り果て、水槽を突き破る。

その姿は、さながら狼だった。

「あら、今度は比較的安全な狼男の因子を入れてみたんだけど、だめだったのね」

「グルアアアアアア!!」

狼人間へと変貌した男子は、そのままアモルに襲い掛かる。

だが――

「ハッ!!」

「ぐぎゃあああ!?!」

いつ移動したのか、先ほどまで銀の水槽の前にいた少女が狼男の上において、そのまま右拳で狼の頭を殴り、地面に叩きつけた。

恐ろしい膂力である。いや、それだけじゃない。

(なんだ．．．いつ着替えた!?)

少女の服が、まるで黒百合を想起させるかのような装束へと変貌していた。

まるで、勇者システムのように。

そう考えているうちに、すぐさま立ち上がった狼が今度はその少女に襲い掛かろうとしたが、それよりも速く、アモルが背後から剣を突き刺した。柄も握っていないのに、まるで、見えざる手に掴まれていくかのように、その剣は狼の背中を貫いていた。

「がふ．．．」

狼は、血を吐いて地面に崩れた。

「やれやれ、また失敗ね。死体は処理しておきなさい」

「わかりました」

少女は承諾すると、その自分の倍以上に大きくなった狼を片手で軽々と持ち上げて、どこかに行ってしまう。

その、あまりにも短い時間で起きた出来事に、銀は、何も理解できなかった。

(な……ん……だよ……あれ……)

何が起きた？なんであんなった？人間が狼に、いや狼なのかあれは？二本足で立ってた。人間っぽいのに、人間じゃない……あれは、なんだ？分からない。化け物？怪物？そんなものが存在するのか？いや、バーテックスがいるからあんなのもいて当然……？

考えれば考えるほど、訳が分からなくなる。

どうして自分はここについて、どうしてあの人はあんなって、それについてあいつらは一体なんなのか。

それがさっぱり分からない。

本当に、何が何だか分からない。

元々、考えるのもそんなに得意ではない。

だからどんどんこんがらがってくる。

頭を掻きむしり、銀は今自分が置かれている状況を整理しようとするも、あり得ない程の情報量によってすでにパンクしかけているのだ。

正直いうと、考えるのを放棄したくなってきているのだ。

だが、ここで考えるのをやめると、何かを失うようで怖い。

だから、考えるのをやめられない。

そんな時だった。

『驚いたでしょ？』

ふと、そんな声が聞こえた。

『え……』

『人があんな化け物になっちゃうなんて』

見れば、そこには短く切り揃えた髪型の銀と同年ぐらいの少女がいた。

その顔は少しやつれていて、目も僅かにうつろ。まるで、諦めているかのような目だった。

『私、『川越遥香』っていの。貴方は？』

『……三ノ輪銀』

『そう、銀、ていうんだ。どうしてここにいるか分かる?』

『さあ・・・アタシ、死んだ筈なんだけど・・・』

あのサソリ型のバーテックスの持つ毒にやられて、銀は死んだはずだった。

サソリの、スコープオの針の右腕の肘から先を吹っ飛ばされて、死んだはずだった。

なのに、どうして・・・

『実はね、わたしも死んだの。首を絞められてぽっくりつてね』

『首つて・・・殺されたのか?』

『そ。あなたは・・・どっかの工事現場で鉄骨にでも貫かれたのかしら?』

『いや、ふっ飛ばされた』

『アハハ! 一体どうやったら腕なんてふつとぶのよ!』

遥香と名乗った少女は愉快そうに笑った。

『そ、そんな事より! ここはどこなのか教えてくれ!』

『ここはあの女の研究所よ。まあ、場所はわからないけど、良い所じゃないのは確か。だけど今問題なのはそこじゃないよ。あの化け物たちの事』

『ああ、そうだ。それを聞きたかったんだ。なんだったんだあれは』

遥香は、そのうつろな表情に笑みを浮かべて、言う。

『あれはこの国で言う所の『妖怪』って呼ばれてる存在の因子を、植え付けられた化け物』

『妖怪・・・?』

『そ。実在する訳ないって思うかもしれないけど、実際にあんなものを見せつけられたら、信じるしかないよ。だって、今さっき、私たちの前であれは化け物になったんだよ?』

遥香は語る。

妖怪は、民間信仰における、怪奇現象や非現実的な存在の事。

その存在たちの因子を、自分たち人間に移植し、増殖させる事によって、自分たちを人の外の存在へと進化させようとしているのだ。

それがこの実験。

今さつきやられた男は、銀よりも十四番も前、遥香は銀の一番手前の番号だ。

その男が投与されたのはいわゆる『狼男』の因子で、それによって男の細胞が書き換えられ、その力が男の本来の精神を凌駕、浸食して消し飛ばし、そして暴走へと至らしめたのだ。

この、四十七回にも及ぶ実験の中で、成功例はほんの六人。

超人的な身体能力に加え特殊能力を操る・・・聞こえはいいかもしれないが、その成功率はあまりにも低いとの事だ。

六人であってもここまで行けたのは奇跡らしい。

『それで、失敗した奴らは例外なく皆殺し・・・だからわたし、諦めたの』

『諦めるって・・・このまま死を受け入れるって事なのかよ・・・？』
『ええ。だって、わたしじやこの水槽割れないし、割った所で奴らにかまって連れ戻されるのがオチだし。だからここで大人しく死なせてもらう事にするわ』

遥香は、とことん諦めたかのように乾いた笑みを浮かべた。

それに対して、銀は、

『・・・いやだ』

『ん？』

『アタシは嫌だ！弟がいるんだ！まだ生まれたばかりの弟がいるんだ！それに、友達の事も放ってはおけない。すぐにでもここから出てやる！』

銀がガンガンと水槽のガラスを殴り始める。

『やれやれ、そんな事しても無駄なのに』

『ぐっ！このおお!!』

体当たりや頭突きをしても壊れる気配がない。

しかしそれでも銀はやめない。

この現実から、少しでも目を逸らすために――

やがて明日が来て、次の犠牲が出た。

『今回はろくろ首か・・・うえ、首が無駄に長いのって実際に見ると気持ち悪いわね』

遥香がそう軽口をたたく横では、銀が未だ水槽のガラスを叩いていた。

『まだやるか。いい加減諦めなよ。その水槽はわたしたちには絶対に破れないよ』

『・・・勇者は、根性』

『またそれ？勇者勇者言ってるけど何？あんたどこぞのヒーローにでもなり切ったつもり？』

銀は無視してガラスを叩き続ける。

『はあ・・・ねえ、どうしてそこまでやんの？どうせ帰ったって、貴方幽霊扱いされるだけよ？』

『それでも・・・帰らなくちゃいけないんだ・・・』

寝てないからか、声にはきがない銀。

『どうしてそこまで帰りたがるの？』

『家族に、会いたいから・・・』

『あつそう。・・・貴方、本当に家族に愛されてたって思ってるの？』

『温かいご飯を与えられて、欲しいものを買ってもらった？自分が欲しいものを買ってもらえた？わたしは一切なかったよ』

そこで銀の手が止まる。

『正直言って、わたし、貴方のような奴大っ嫌いなのよ。私は一切家族に愛されなかったわ。親父は酒に飲んだくれ、母親は他に男を作って出た。兄にはストレス発散の為のサンドバックにされて、姉には使用人のようにこき使われたわ。正直言っへど出るような人生だった。友達なんていなかったし、わたしにはない幸福を持っている奴が妬ましかった。だからここににいる奴らを見ると気分がよくなるのよ。普段は幸せそうな家庭に暮らしてるやつが、今は絶望に顔を歪めるのがね！』

うつろな目で、狂ったように笑う遥香。

その姿に、銀は信じられないような顔になる。

『せいぜい足掻くといいわ。どうせいくらやったって無駄なんだからね』

周囲は、表情を絶望に染めて、呻いたり叫んだりしている者がいた。もう、何十回と見せられる光景になれる者もいれば、現実逃避している者もいる。

いくらか脱出を試みた者もいたのだろう。だが、無駄だったのだろう。

だれも、助からなかったから――

『……友達、いなかったのか？』

ふと、銀がそう話しかけた。

『……さっきの話聞いてた？』

『……なつてやろうか？』

何気ない、言葉のつもりだった。

だが、そういった瞬間、遥香の銀に向けられる視線が、酷く冷たくなった気がした。

『……同情なら、やめろ』

その声に銀は怖気づき、遥香は、それっきり黙ってしまった。

翌日、また次の犠牲者が出た。

銀は、ガラスを破る事に力が入らず、ずっと虚空を見ていた。

しかし――

『あ――!!暇だあ――!!』

突然、叫んだ。

『なあ遥香！何かしよう！』

『……なにかって何するのよ？』

『え？えーつと……しりとり？』

『……』

『ああ！なんか期待外れって感じて向こう見ないでくれえ！』

思わず涙目になる銀。

『うるさい。わたしに話しかけるな』

『そんな事言わずにさ！』

『だから黙れって・・・』

『じゃあアタシから!』

『人の話を聞けえ!』

『りんご!』

『え!?あ、つと・・・ご、ゴリラ!』

『ラッパ!』

『パンドラ』

『らくだ』

『団子』

その日は、それで一日を過ごした。

また、次の日は、自分の好きなアニメや特撮物について語り合った。

『特撮と言ったらやっぱり仮面ライダーだろ!』

『スーパー戦隊に決まってるでしょ』

『いいや仮面ライダーだね!』

『スーパー戦隊!』

何故か白熱した。

また別の日は、好きな食べ物について話し合った。

『なに?醤油味ジェラートって・・・変な味しそう・・・』

『何おう!?このアタシがおすすめるんだぞ!絶対美味いっての!』

『あつそう・・・ま、期待しないでおくわ』

『期待しろー!』

次の日も、そのまた次の日も、何かを話し合った。

それがどうしようもなく楽しくて、だけど、ふと疑問に思っ

まった。

『ねえ、銀』

『ん?なんだ?』

『・・・貴方は怖くないの?これから化け物になっちゃうのに』

もう、自分たちの番が近づいてきているのだ。それなりに覚悟しなければいけない時だっていうのに、どうしてこの少女は笑っていられるのか。

しかし、遥香は見る。銀の手が、震えている事に。

『……怖いよ』

初めて、銀の声が震えた。

『とつても怖い……もし、このまま、家族や、友達に会えなくなるって思うと、なんだか、すげえ怖くなるんだ……まだ生きてるのに、せつかく、生きてるのに……また、死ぬなんて……怖い……怖いじゃないか……』

銀は、震える拳を、もう一方の手で覆って、それを額に当てて、歯を食いしばる。

それっきり、銀は喋らなくなってしまった。

彼女も、年頃の少女だ。

怖いものは怖いし、辛いものは辛い。それを、持ち前の気力と胆力で乗り切ってきたただけだ。

だけど、やはり、目に見える死に対する恐怖はそう簡単に拭えるものじゃない。

だから、銀は、何かを言い続ける事でそれを凌いできた。

だが、それを改めて遥香に確認された事で、とうとう銀を保ってきた何かを壊してしまった。

きつと、銀が水で満たされた水槽の中にいなければ、涙を流しているのが分かっただろう。

だが、そうなつてはあとの祭りだった。

そして、とうとう遥香の番が来てしまった。

『今日はどうとうわたしかー』

『……』

遥香が、空笑いをするも、銀は膝を抱えたまま動かない。

それを見て、遥香は嘲笑する。

『なに？今更怖くなったのかしら？手が震えてるよ？』

確かに、銀の手は震えている。

しかし、手が震えている理由は、怖がっている理由はそれじゃない。

『……違っ』

『ん？』

『違う・・・アタシが怖いのは・・・それじゃない・・・』
『じゃあなんだっていうのよ?』

思わず聞き返す遥香。

『・・・お前が消えるのが怖い・・・』

『・・・は?』

「はいはい、おしゃべりはそこまでね」

『!?!』

そこでアモルの声が聞こえた。

見れば、銀と遥香の水槽の間の前にアモルが立っていた。

「これ以上時間をかけるわけにはいかないから、今日は二人一緒にいくわ」

見れば、背後にはいつもの少女の他に、もう一人、青い装束を着た少年が立っていた。その背中には、剣が一本。

『あーら意地悪な事・・・当然、わたしが先なんだよね?』

「当然、順番は守らないと」

アモルが遥香の水槽の前に立つ。

「あなたには、女郎蜘蛛の因子を打つわ。覚悟しておいてね」

『あら、それは楽しみね』

若干、ひきつった笑みを浮かべる遥香。その最中に、銀の事を盗み見た。

銀は、こちらを見ていて、その目には、懇願の色が見えた。

それを見て、遥香は――

『・・・銀』

アモルの手が、スイッチに触れる。

『・・・ありがとう。最後に貴方に会えてよかった』

銀の目が、見開かれる。

『・・・友達になってくれて、ありがとう』

直後、

『――やめろおおおおおおおおお!!』

銀は、絶叫した。

『……る』

「ん？何かしら？」

アモルがボタンに触れる寸前、銀が何かを呟いた。

『——殺してやる……!!』

「あ、そう」

そう言つて、アモルはボタンを押した。

「——ハッ!？」

目を覚ます銀。頭には、鈍い痛みが響く。

「く……つう……アタシは、一体……？」

頭を押さえつつ、銀は起き上がる。周囲には崩れた瓦礫がそこら中に散らかっていた。

だが、視線の先にいる存在に気付いた時、銀は全てを思い出す。

「ほう、生きていたか」

その男は、一言で言つて獣のような男だった。

上半身に衣服は纏わず、目立った武器は無く、体が大きく逞しく、その三白眼からはすさまじい程の殺気を感じた。

「罪人の身でオレの攻撃を耐え切るとは、敬意を表する。が、罪人は必ずしも殺さなければならぬ」

恐ろしい噛み顔を銀に向ける。

「そうだ、兄貴……！」

一方の銀は、自らの兄の安否を探した。

そして、見つけたその先では、建物の壁を貫通してぐったりとうなだれる剛の姿があった。

「兄貴……!!」

「あの男は死んでいない。気絶しているだけだ。だが、すぐに殺す」

気付いた時には、男は巨大な瓦礫を片手で持ち上げていた。

そして、そのまま剛に向かって投げ飛ばす。

このままでは、剛に直撃してしまう。しかし——

「強化骨格——脚力強化ッ!!」

プラスチックがひび割れるような音が響くのと同時に、男が投げた瓦礫が真つ二つに割れる。

「ほう、貴様、その姿は……」

男が、興味深そうに、今瓦礫を叩き割った銀の姿を見た。

正確には、銀の足だ。白骨が体の中から突き抜け、それがまるで鎧のように纏われている。

「なるほどー！それがアモルの研究の成果か！骨によって足を補強し、操作する事によって通常の数倍もの身体能力を得ているという訳か……面白い」

男が身をかがめる。

「我が名は『絶望』のブルーメ！少しの間、遊んでやろう！」

瞬間、男の姿が消えた。

「は——」

「……だ」

声が聞こえた時には、銀は、何かが折れる音と共に横に吹っ飛ばされていった。

「ガッ——!?!」

折られたのは、首。

銀は何が起きたのか理解できず、そのまま地面を転がる。

「フハハハハハ！脆い！脆いぞ人間！やはり人間は脆い！」

訳の分からないまま吹っ飛ばされた。何も出来ずに殴られた。

「その男はオレの攻撃を察知して上手く防ぎ、気絶する程度のダメージで済んだというのに、お前は何も出来ずに吹っ飛ばれた。つまり貴様は弱いという事だ」

ブルーメは銀を嘲笑い、背を向ける。

しかし、パキパキという音が聞こえたかと思ったら、声が響いた。

「誰が……弱いつて……?」

ブルーメが振り返れば、そこには首をさすりながら起き上がる銀の姿があった。

「ほう、首を折られて即死かと思っただが、生きていたか」

「二度目の死は老後って事にしてるんだ。悪いな……」

銀はそういつつ、近くの瓦礫を口にに入れて噛み砕き飲み込む。

銀の体は今、がしや髑髏のそれになっている。周囲にある無機物を取り込む事でそれを自らの肉体に変換して再生する事が出来るのだ。(今は事前に腹の中に入れていた瓦礫のお陰でどうにかなったが、これがいつまで持つか……)

思考しつつ、銀は立ち上がって戦斧を構える。

敵はあまりにも速い。風の魔眼をもってすれば見切れるかもしれないが、今はその風はおらず、剛は気絶しており動けない。

つまり、この状況を銀一人で対処しなければならぬのだ。

だが、そう結論をつけた直後に、

「悠長に考えている場合か？」

「ッ!？」

いつのまにかブルームが背後に立っていた。

速い、あまりにも速い。

「がッ——!？」

蹴り飛ばされて正面に吹っ飛ぶ。さらに、その吹っ飛ぶ最中の銀を追い抜き、その先でさらに銀を上空へ吹っ飛ばす。

そして止めと言わんばかりに両手を組んで銀を地面に叩き落とす。

声を上げる間もない、たった一秒以内で行われた三連撃。

「がっは……」

(み、見えない……!?)

銀は何が起きたのか理解できず、今地面に降り立ったブルームを見る。

その顔はなおも獣のような笑みを浮かべており、こちらを嘲笑うかのように見ている。

「どうした? その程度か？」

「——ッ!!」

歯を食いしばり、攻勢に出る銀。戦斧に備わったブースト機能を発動させて、回転しながらブルームを強襲する。しかし、その攻撃は、戦斧を素手で掴まれる事で未遂に終わる。

「無駄だ」

「強化骨格」——『脚力強化』ツ!!」

銀の両足が、まるで恐竜の足のように骨が纏わりつき、それによって作られた仮想筋肉の稼働によって、数倍の威力で繰り出された蹴りが、ブルームの顔面をとらえる。

しかし——

「ビースト・フォース——『犀ノ鎧』」

何かの装甲によって、阻まれていた。

「なに・・・!?!」

銀は驚愕し、ブルームはその笑みをさらに獰猛にする。

「ビースト・フォース——『大猿ノ鉄拳』」

ブルームの拳に何か、魔力のようなものが収束し、形を成し、ただでさえ巨大なブルームの拳を、一回り大きな光の膜が覆う。

それが、恐ろしい速度を持って銀に叩きつけられる。

「——『腕硬度強化』ツ!!」

掴まれていない戦斧の方の腕を骨で多い、その一撃を防ぐ。しかし、その盾はいともややすく碎かれ、腕をへし折り、さらには銀の体を紙屑のように吹き飛ばす。

そのまま、天高く打ち上げられ、地面に落ちる。

「が——つはあ——」

「ほう、生きていたか」

あらかじめ内臓などの重要機関を骨によって覆っておいたが、それでもそれを上回るほどの威力で叩き潰された。

今は、胃の中にある瓦礫で再生しているが、それで完全再生できるかどうかは難しい所だ。

むしろ、体の中がぐちゃぐちゃのスクランブルエッグになっていて生きているという事実に驚きたい所だが、今はそんな事はしている暇がない。

(た、たった一撃で・・・)

あの『大猿ノ鉄拳』とかいう技を一発貰っただけでこのありさまだ。もう一度喰らえば、次はないかもしれない。

そして、敵は今、こちらに止めを刺そうと歩いてきている。すぐに立ち上がらなければならぬのに、体を動かす事ができない。

再生が、間に合わない。

(ち……く……しよう……！)

こんな、こんな現実を、知りたくはなかった。

一度死んで、他人に迷惑をかけて、がしや髑髏の力を手に入れて、それでこの有様。

兄の役に立とうと家事を覚えて、弟たちの面倒を見れるようになって、何も出来なかったあの頃からは完全に決別したと思った。

(なのに……何も、変わってないじゃないか……！)

泣き虫で、弱虫だった自分。その自分から、一体どれほど変わったか。

結局、自分は弱いじゃないか。

そう思うと、次から次へと、涙が溢れてくる。

(遥香……アタシは結局、何がしたかったんだろうなあ……?)

ふと、視界の端に、兄、剛の姿が見えた。

(兄貴……こんな役立たずな妹でごめんな……)

——だから、せめて。

(怪物になった、アタシを、許してくれ……)

どうにか動かせる右手を、持ち上げる。そして、それを顔に近づけて

——その手に噛みついた。

その声と共に、怪物に駆け寄るのは、青い、朝顔を想起させる青い装束を着た少女、東郷美森である。

美森は怪物の頭部付近に駆け寄り、必死に、怪物の本当の名を呼びかける。

「銀！しっかりして！銀！」

『○○○○○○』

今の怪物には、まともな思考は残っていない。あるのは相手をどうやって倒すか、低下した知能で考えうる最善策で戦う事のみ。

そして、誰が敵か、味方かを認識するのみ。

突如として怪物が骨を生成。それで美森を覆う。直後、その骨の壁に無数の剣が突き刺さる。

「!？」

「あーらー、なんで防いじやうかねえ」

それはすぐに光と共に消える。そして、その剣を放った本人も、ブルーメの隣に降り立つ。

それは、ボロボロのローブを着た、一人の男性だった。

「おいラヴァンド。邪魔をするな。アレはオレの得物だ」

「もちろんだブルーメ。僕の目的は元からあの子一人だよ」

ラヴァンドと呼ばれた男が、ブルーメと話し合っている間に、怪物が起き上がる。

『○○○○○○○○』

「ツ!?だめよ銀！これ以上は……!」

『○○○○○○○○○○!!』

美森の制止は、怪物の方向によって掻き消される。

そして、大地を揺らしながら怪物は二人に向かっていく。

「やれやれ、言っておくけど、僕らにもそれなりに縦社会的なシステムってものがあつてね。僕ら『第三の罪科』^{サード・シン}を筆頭に、四神官、処刑衆っていう感じになってる。僕は『不実』のラヴァンド。何事にも不誠実に生きてるよ」

その瞬間

『フェイクスキル
『贗作技』』

『ファブニール・ブレス
『劣・怒り狂う邪竜の咆哮』』

ラヴァンドの掌から、黄昏色の砲撃が迸り、怪物を吹き飛ばす。

「——ッ!?」

その一撃は怪物の胴体を吹き飛ばし、うなじ当たりにはいた本体を引きずり出す。

「今だよ」

「させないッ!!」

引きずり出された本体に止めを刺そうとするブルーメを食い止める為に、美森が狙撃銃を顕現させてその引き金を引く。

だが、その弾丸はブルーメの皮膚に容易く弾かれる。

「そんな・・・っ!!」

「終わりだ」

「ッ!?ダメー!」

叫ぶも、間に合わない。

ブルーメが落ちていく骨を足場に、一気に怪物の本体に——銀に接近する。

『獣ノ力』——『鷹ノ爪』ホーク・クロウッ!!

その手に纏われる魔力が、その指に合わせてまるで爪のように伸びる。

美森が、すかさずブルーメに向かって狙撃銃を向けるが、それよりも速く、ラヴァンドが美森の狙撃銃を弾く。

『鷹作技』フエイカーズキル——『金弓箭』

その手には、黄金に輝くボウガン。

「やめてええええ!!」

美森が叫ぶ。しかし、それを聞くような相手ではない。

「死ね、罪人!」

銀は、気絶していて動けない。

空中に投げ出されたまま、そのまま、鷹の爪の餌食になるのか——

「——満開」

その直前に、黄色い光が迸り、ブルーメが地面に叩き落とされた。「!?」

その突然の事に、その場にいた者たちが、二人を除いて驚愕した。「ぬうーなんだ!?!」

地面に叩き落とされたブルーメが見上げた先には――

「……剛先輩!」

三ノ輪剛が、銀を抱えて空中に佇んでいた。

その服装は、先ほどの勇者装束とは一線を駕し、より神々しく、より猛々しい姿へと変貌していた。

その色は――青。

大海と天空と同じ色。地球の色。青き星と呼ばれた星と同じ色。

そう、それが剛に与えられた新たな満開。その名は――

『満開・星廻ル紺碧』

「銀……」

剛は、ボロボロになった銀の姿を、悔しそうに眺めた後、すぐさま美森の元へ降り立つ。

「悪い東郷、銀を頼む」

「分かりました……」

美森は銀を受け取る。

そして剛は、敵二人に向きなおる。

「なるほど、先ほどの状況から再び立ち上がったか。誉めてやろう」「うっせえ。でもさつきは悪かったな。一撃で気絶しちまってよ」

正確には、吹き飛ばされた際に瓦礫に頭をぶつけたのが原因なのが。が。

「でも今は、一味も二味も違うって所を見せてやるよ」

「フハハハハ！面白い！では見せてもらおうか、その力とやらを！」

ブルーメと剛が睨み合う。しかし、その間にラヴァンドが入り込む。

「はいはい、僕もいる事忘れないでよね」

そう、今の状況は、二対一であるのだ。

美森は銀を抱えて戦う事は出来ない。

だから剛一人で対処しなければならないのだ。

だから、剛は冷静に、この状況を打開する方法を探していたのだが

「ええ、そうですね。僕がいる事を忘れては欲しくはないですね」
「ッ!？」

突如、ラヴアンドが横に吹き飛ばされた。

どこからか飛んできた、青い流星によって。

「翼!」

「すみません、遅くなりました!」

六道翼である。

「いたた、酷いねえ君い」

「黙れ。貴方が須美ちゃんを狙っていた事を、僕は許す気は無い。

翼が、明確な敵意をもってラヴアンドを睨みつける。

「翼、満開しておけ。こいつら、舐めてかかれる相手じゃねえぞ」

「分かりました——満開」

剛の言葉を受け、翼が満開を発動する。

翼が纏うのは、黄金。

太陽の光。世界を照らす、天の恵み。暗闇を打ち払う、黄金の光。

その名は——

『満開・天照地恵光』
あまてらすちめぐみのひかり

前の満開である『岩盤貫く黄金の弓箭』ゴールデン・ブライト・パリスターの時にあつた巨大なボウガ

ンは無く、いつものサイズのボウガンが、翼の腕に装着されている。

その装束は、なおも神々しく、そして清々しいほど美しいものだった。

髪も金色に染まり、彼の輝きを一層強くしていた。

「覚悟しろよくそつたれども」

「無事に帰れるとは思わないで下さい」

「フハハハハ! 罪人の癖に、粹がるな」

「覚悟するのは君たちの方だ」

三ノ輪剛、六道翼、ブルーム、ラヴアンドの四人が今、対峙する。

最高司祭（アークビショップ）

槍が迫る。

「ぐうあ．．．!?!」

それを千景が真正面から受け止める。

防御に使った太刀から伝わる衝撃が、腕を叩き、体を打ち据える。

そのまま靴底をすり減らす勢いで後退させられていく。

「くそつたれが．．．!」

（なんて重いのに．．．!?!）

千景の前に立つのは、漆黒の槍を持った男。

その姿はまさしく戦闘に特化した者の装束であり、その頭は頭全体を覆う兜をかぶっていた。

しかし、男はこちらが反応するよりも早く、槍を振るって千景を襲う。

「白鳥さん——ツ!!」

（OK!）

武器をすぐさま鞭へと切り替え、男の槍の連撃を凌ぐ。

振るえば振るうほど威力を加速増幅させる鞭をもつての防御は、男のあり得ない程の速度で振るわれる槍を紙一重で弾いていく。

だが、それも長くは続かない。

いつの間にか、間合いを詰められていた所を腹に重い蹴りを喰らう。そして吹っ飛ぶ。

「ぐ．．．あ．．．!?!」

建物の壁に叩きつけられ、そのまま砕けた建物の瓦礫に埋もれる。

「．．．ふん」

男は鼻を鳴らす。その直後に、瓦礫が吹き飛び、中から千景が這い出てくる。

「ハア．．．ハア．．．ハア．．．ハア．．．」

その体はすでにボロボロで、装束はどこどころ破れている。

この、目の前にいる黒づくめの男は、突然、ヒュアツインテとの戦いに割り込んでくると、瞬く間に戦況を逆転させた。

いや、互角だったのを一気にやられたといった方が正しいだろう。とにかく、こことは別の場所で、園子と辰巳はすでにやられている。ほんの一瞬の事だ。目の前の男が辰巳の地面に叩きつけたと思ったら、園子の顔面を蹴り飛ばし、そしてその後、千景に槍の一撃を浴びせた。その一撃を、千景は球子の楯をもって防いだが、それでもかなり吹き飛ばされた事には変わりない。

「くそ、このままじゃ・・・!」

「あらあら、まだ抵抗する気なんですか?」

そこで、ヒュアツインテがやってくる。

これで完全な二対一。絶望的な状況だ。

「ヒュアツインテ、何しに来た?」

「最高司祭様の活躍ぶりを拝見しに来ました。以外とてこずっているようですな」

「ふん、すぐに仕留める」

槍を手の上で躍らせ、視線を千景に向けて構える。

このままでは、確実に負ける。

相手は、明らかに強い。

このままでは負ける。

(こんな所で負けられる分けがねえ・・・!!)

その手に持つ刀を握りしめる。

奥の手として、あの超真解があるが、あれはあくまで『対城用』。対人に使うものじゃないし撃った後はしばらく御神刀が使えなくなる。

だから、今自分もてる全てを使って戦うしかないのだ。

(どうする・・・?今の俺の武装は、球子さんの楯、杏さんの弩、歌野さんの鞭に暁さんの刀、そしてご先祖夫婦の拳銃と鎌・・・そして使える属性は色々ある。炎に氷、水・・・近くに水源があれば上手く立ち回れるかもしれないが・・・)

ふと、千景は近くに水場はないか思い出す。

「何を考えているのか知らんが、貴様らが死ぬ事には変わりはない」

「ッ!」

いつの間にか背後にいた男の槍の一撃を、千景は鎌でぎりぎりの所

で防御するも吹き飛ばされる。

「ぐう……!?!」

千景の顔が苦悶にゆがむ。

「俺は最高司祭『ジガ』。お前たちを破滅させる者の名だ」

男、ジガはそう名乗り上げる。

「くそ、破滅させるとか、そういうの勝手に言ってるじゃねーよ……!」

一方の千景は、そう言うや否や、どこかへ向かって飛ぶ。

しかし、そこへヒュアツインテの剣が迫る。

「づつ!?!」

「どこに行こうとしてるんですか?」

吹き飛ばされるも、逃げる千景。そのまま道を曲がって二人の視界から外れる。

「追いかけますか?」

「いや……」

ふと、ジガが右手を持ち上げた。

「俺がやる——『超高熱光線』」

その時、ジガの右手から眩い光が迸ったかと思うと、それが赤熱する光線となって放たれる。それは建物を容易に貫通、溶解する。

そして、ジガはそれを、千景に向かって薙ぎ払った。

建物が溶断され、そして爆発する。

一瞬にして、周囲が火の海となる。

「あら? もう終わりですか?」

「いや、躲したか」

崩れていく建物の中、その合間を縫って鎖で立体的に飛ぶ千景の姿を視認するジガ。

「追いかけるぞ」

「はあい」

地面を踏み砕き、ジガは千景を追いかける。その後を、ヒュアツインテが追随する。

「だらっしやああああ!!!」

左の剣を熱気を振り払った直後に、右手の大剣で敵を突く明日香。しかしその一撃は容易に交わされ、頭上からの炎球攻撃をかわす。

超速で行われる空中戦闘。

炎と黒が、空中で入り乱れる。その下では迫りくる無数の氷刃に対して、土の散弾で対抗する将真の姿があった。

「ぬうー!」

「ほらほら、どうしたの?」

背後から迫る氷刃を弾きつつ、将真は土の拳を形成、それを目の前のヴァッサーに叩きつける。が、それはヴァッサーに触れる前に凍りついて動くなくなる。

「無駄よ。私の前では全てが凍る。それは大気であつても同じ」

ヴァッサーが冷笑を浮かべる。

「うお!?!」

一方の空では明日香の剣が弾かれ、後退を余儀なくされる。

「ハッ!どうした?その程度か?」

「くっそお・・・!!」

流石に押され始めている。

(この状態もそこまで長く保てるわけじゃねえ・・・何か、策はないか・・・!?!)

彼らの奥の手である『黒』^{ブラック}は、使用後はかなりの疲労と筋肉痛が代償として跳ね返ってくる。

さらに、維持にもかなりの集中力を有し、明日香の場合は、一日に三、四回が限界だ。

将真も二回までは可能だが、そこまで持つ訳じゃない。

早々に決着をつけなければならぬ。

どうする——?」

さらに一方で、うねる大地に対して超高速で駆け抜ける芽吹は、襲い掛かる土の鉄槌から逃げていた。

その最中で、銃剣を撃つ。しかしその弾丸は、エーアデに直撃する直前で土の壁に阻まれる。

「無駄だ。お前の弾丸は私には届かない」

「くっ、なんて固い」

エーアデは、自らが作った高台の上で芽吹を追い立てていた。

エーアデの『地下世界』は、本来の能力である土を操る能力に加え、様々な鉱石を生成する事が出来る。

故に、ダイヤモンドを作り出し、それを弾丸として撃ち出す事も可能なのだ。

「喰らえ！」

「やばっ!？」

芽吹が足場になっている地面から無数のダイヤモンドの弾丸が放たれる。それを間一髪で避け続ける芽吹。

「なんて身のこなし・・・だが、いつまで避けていられる？」

ダイヤモンドの弾丸が、芽吹の戦衣の外装を吹き飛ばしていく。それだけでなく、掠って破ける事も。

「く、せめて近づければ・・・!」

走り避ける中で、思案を巡らせる芽吹。

(あるいは、もう一丁、銃剣があれば・・・!)

そう、思った直後。

「終わりだ」

「ッ!?!しまった!」

いつの間にか、四方を固められてしまい、上空からはこれまた巨大なダイヤモンドが芽吹を押し潰さんと迫ってきていた。

「死ぬ、罪人——」

そのまま押し潰されるかにみえた、直後。

「——はいはい、そうはいかないよっと」

突如として、ダイヤモンドが爆発、粉微塵に吹き飛ぶ。

『!?』

それを見て、その場にいる誰もが驚く。

「やれやれ、偶然にも俺が通りかかったからよかったけど……こんなかわいこちゃんやんと戦うのは、気が引けるね」

いつの間にか芽吹の動きを封じていた壁も破壊されており、そこには、一人の中年の男が立っていた。

トロイアの戦士を服をきこみ、その手には槍を携える男。

「お前は、何者……」

「俺が何者かって？聞かれたからには名乗るしかないね」

男は、槍を手の上で踊らせて、それを肩に担いで名乗り上げる。

「俺は救導者、七つの大罪『怠惰の罪』森谷真武郎だ。よろしくね」

中年男、森谷真武郎がそう言ってウインクをする。

「そうか……死ぬ」

そして直後にエアアデが真武郎を潰しにかかる。

「そう焦るなよ」

しかし、真武郎が指を鳴らすと、一瞬にしてエアアデが操っていた土は爆散する。

「な……!?!」

「ありとあらゆるものを『爆』破する。それがこの『爆撃槍』の能力だ」
傍から見れば、真武郎が何にも触れずに自身を潰そうとした岩石を爆破したように見えただろう。だが、芽吹の目には見えた。

真武郎が、目にもとまらぬ速さで岩石に槍の切っ先を当て、その後で指を鳴らして爆破したのを。

(なんて男なの……!?!)

その男の事を、心底恐ろしいと感じた芽吹。勝つ自信はあるが、油断ならない相手という事を、芽吹はその一瞬の間で理解した。

「そこのお嬢さん、戦っているとところ邪魔して悪いね。ちよつと勝手ながら、援護させてもらおうよ」

「それはいいけど……確か、私たちは貴方たちを襲ったのだけけれど？」
「昨日の敵は明日の友ってね。うちのリーダーはそう気はないし、む

しろ狙われて当然と思ってるから気にしないでいいよ」

真武郎が槍を構える。

「そんな事よりも、まずはアイツを倒す方が先決じゃないかな？」

「・・・そうね」

芽吹も、銃剣を構える。しかし、

「芽吹さん！」

「ん？おっと」

そこへ銃剣がもう一丁投げ込まれる。

視線を向ければ、そこにはシズクと昴の姿があった。

「ソイツはあとで問いたです！だからさっさと勝ちやがれ！」

「僕らの事は気にしないでいいから！」

「分かったわ！さあて・・・」

二丁の銃剣を構えて、芽吹はエーアデと対峙する。

「銃が二丁になった所で、お前たちが敗北するという運命に変わりはない」

「はっ」

エーアデのその言葉に芽吹は鼻で笑う。そして、周囲から、土の腕や岩石やら迫る。

「私たちの運命を——」

しかし、それらすべてが、切断され、爆散する。

「——お前が決めるなア!!」

芽吹の怒声が響き渡る。

その迫力に、エーアデは一瞬気圧され、その直後に、芽吹の地面が爆発。真武郎が芽吹の地面を爆発したのだ。だが、それでいい。爆風によって芽吹は飛び、エーアデに直進する。

「チィッ!!」

エーアデは、すぐさま反撃として岩石の散弾を飛ばす。

空中にいて、突っ込んでくる芽吹にそれはかわせない——ならば、迎撃すればいい。

「銃剣二丁と、二刀流は違うのよ」

瞬間、岩石の散弾は全て弾かれる。高速で振るわれた銃剣が、散弾

を弾いたのだ。

「なッ!？」

「終わりよー!」

芽吹の右の銃剣の刃が迫る。しかし、エーアデはそれを空に飛んで躲す。

「チッ!」

「いいや、まだ終わらない!」

「え?おいお前なんでオレを持ち上げて——」

大きく振りかぶる真武郎。その右手には、シズクの胸倉が——

「レッツゴートゥーホール!!」

「お前後で覚えてろおおおおお!!」

「シズクちゃああああん!!」

投げ飛ばされるシズク。その投げられる瞬間に爆風が巻き起こり、一瞬にして芽吹の元へ。

「芽吹!構えろ!」

芽吹を追い越したシズクはそこで地面に足を突いて急停止、そして銃剣を振りかぶり、後からやってくる芽吹を待ち構える。

「行ってこおおおおい!!」

ホームランバットの如く振るわれた銃剣、それを足で受け止め、一気にエーアデに突っ込む。

「逃がさないわよ!!」

「こ、の、罪人風情があああ!!!」

巻き起こる竜巻の中、『インビシブルロード霊子滑走』を使って駆け抜ける優理。

竜巻は常に内から外へ向かって風が回転しながら吹いている。だから、内に入るのが難しい。

さらに、巻き上げた瓦礫や、雷が襲ってくる為に、うかつには近付けない……が、近付けないわけじゃあない。

「覚悟しろ・・・弥勒を傷つけた事を後悔させてやる」

悲鳴をあげるヴェントを睨みつけつつ、優理は徐々に距離を詰めていく。

だが、そこで気付かなかった。

小さな花瓶の存在に。

「づあッ!？」

頭に直撃し、意識が遠のく。

(しまった・・・!?)

あまりにもヴェントに集中し過ぎていたがゆえに、警戒を緩めてしまった。

それほどまでに、冷静さを欠いていた。

我ながら、なんと間抜けな事だと思った。何故、こんなにも気持ちが高ぶっているのか——・・・

『あなたがゆうりですわね！わたしはみろくゆみこといいますの！』

(ああ、そんなの、当たり前だ)

弓を握りしめる手に、力が入る。食いしばった歯を、さらに食いしめる。

態勢を立て直し、熱くなった額の熱のままに、優理は顔を上げた。

(弥勒を傷つけられて、怒らない道理が無いッ!!)

この時、優理は初めて、冷静さを捨て、激情のままに行動した。

先から、風に沿って進んでいたのを、突如として進路を変更して、一気にヴェントに向かって直進し始めたのだ。

「貴様だけは許さん・・・覚悟しろッ・・・!!」

腰にある柄を抜き取り、そこから光の刃を出現させ、一気にヴェントに直進していく——!!

「喰らいなさい」

「ぬっ!？」

上空から、無数の氷の刃の雨が降り注ぐ。

「くおおお!!」

すぐさま土による防壁を形成し、防ぐも、大量に降り注いでくる刃の雨によって削りに削られ、ついには砕かれて、その驟雨を受ける。

「ぐああああ!!」

「ふふ、良い悲鳴ね」

血みどろになって膝をつく将真。

その上空にて、明日香は体のそこかしこに火傷を作って息を上げていた。

「ゼエ・・・ゼエ・・・ゼエ・・・」

「ギャハハハハ！無様だなあおい。そんなんでこのアタシに勝てると思ってたのか？ああ?」

嘲笑うフォイア。しかし、依然として明日香は諦める気など微塵もなかった。

「ああ、思ってるぜ・・・」

ちらり、と将真を見る明日香。

それに気付いた将真は、僅かに首を縦に振った。

「アハハハハハハ！どうやって勝つっていうんだぞ？なんか策でもあんのか？ああ?」

「ああ・・・ちよつと命懸けだがなあ!!」

明日香が、突如としてフォイアに突進をしかける。

「無駄だっつってんだろうが!」

フォイアが、火球を作り出してそれを一気に明日香に放つ。明日香はそれを薙ぎ払いつつ、どんどんフォイアに接近していく。だが、今のフォイアは周囲を熱気で包み込んでおり、その大気に触れるだけでも肌が焼け爛れるほどの高温だ。そんなフォイアに向かって、何故明日香は突撃しているのか。

理由は、すぐに分かった。

明日香は、もうすでにフォイアの目の前に来ていた。それを迎撃し

ようとすするフォイアだったが、明日香は、一瞬にしてフォイアの後ろに回り込み、その襟首をつかんで一気に落下する。

「なッ!? てめつ、何を・・・!?」

「このまま一緒に落ちて行つてもらうぜええええ!!!」

落下していく明日香とフォイア。もちろん、フォイアの周囲は灼熱の大气があり、通常なら一瞬で焼け爛れるところだが、明日香はその手に自分の悪魔の力を纏わせて遅行させている。

その下には、ヴァッサーが一人。

「うおおおおお!!」

そして、将真は、地面を殴って、ヴァッサーの両側に巨大な壁を作った。

「何を・・・」

「おとどけものでええええええつつす!!」
「!?」

そして、明日香はフォイアをヴァッサーに投げつけた。

「フォイア!」

「ぐお!?」

フォイアを受け止めるヴァッサー。

そして明日香は、大きく空を飛んで、やがては地面すれすれにフォイアとヴァッサーの元へ、宙を駆け抜ける。

「まさか——!?」

それを見て、明日香と将真の意図を読み取って青ざめるヴァッサーは、すぐさま上空へ逃げようとする。

「逃がすものか」

しかし、すでにヴァッサーの足は将真の操った土によって掴まれている。

「しまった!?!」

「うおおおおおおおおおおおお!!」

すでに、最高速度に達した明日香は、まさしく、黒い流星の如く。

右手に持つ大剣を振りかぶって、将真の作った壁の合間を駆け抜ける。

空を飛ぶ芽吹。その先には————巨大な土の鉄拳を用意して迎え撃とうとしているエーアデの姿が。

「落ちろおおおおお!!」

エーアデの拳が、振り下ろされる。

「往生際が悪いぜ」

しかし、すでに真武郎はそれの迎撃準備を完了していた。

「標的確認、方位角固定——」

『キャノンランス大砲爆槍』、吹き飛びなア!!!」

投擲される槍、それが腕に直撃し、振れた途端に爆発を引き起こし、木端微塵にする。

「な——!?!」

それに、エーアデはただ放心するしかない。

「——対天武術」

その一方で、芽吹は銃剣を剣のようにもって、それぞれの肩に担ぐように構える。

そして、その刃を、エーアデに叩きつけた。

「喰らえ、ガキ」

『インビジブルロード霊子滑走』による加速と、超振動する刃による斬撃が、今、ヴェントを襲う。

『霊子滑走』をヴェントの周囲に展開し、その周囲を回転しづ付けるがままに、ヴェントを滅多切りにする。

「終わりだあああああああ!!!」

明日香の超速の一撃が、フォイアとヴァッサーを打ち据える。

「——『いづのが亥角狩り』ッ!!!」

「——『神速劍』ツ!!」

「——『黒流星斬』ツ!!」

三カ所にて、同時に決着がつくのと同時に——

「がああああああ!?!」

千景が川に叩き落される。

「ぐ……げほっ……」

『大丈夫!?!』

肋骨が軋み、体中があまりにも痛い。

それほどまでに、敵の追撃を受け過ぎた。

(せっかく川についたってのに……!)

視線を上げれば、川の縁にて見下ろす、黒衣の男とドレスの女の姿が見える。

いわずもがな、ジガとヒュアツインテだ。

そして、ジガが右手を上げる。

「終わりだ」

「ツ……白鳥さんツ!!」

『OKよ!』

『文字連鎖』——『八岐大蛇』ツ!!

千景の体を入れ墨のような蛇が生き物のように駆け巡り、目を赤く光らせ、次の瞬間、千景のいる川の水が持ち上がり、数本の槍となつてジガとヒュアツインテを襲う。

『超^{ゼットビーム}高熱光線』』

しかし、その水の槍は、ジガの放つ赤熱光線によって全て蒸発し、霧散してしまう。

「……無駄だ」

「くっそれでもダメなのかよ!!」

「そうだ」

逃走を図ろうとする千景。だが、それよりも速く、ジガが千景の横に立っていた。

「無駄なのだ。全て」

次の瞬間、五発の突きが千景を貫いた。

「がっ……」

防ぐ暇もなく、吹き飛ばされる千景。川に仰向けに倒れ落ち、その水を赤く染めていく。

「が……がっ……」

『大丈夫ですか!?!』

杏の叫び声が響く。しかし、全て急所を穿たれており、致命傷なのも確実。早々に治療しなければ、確実に死ぬほどの重症だ。

「おっと、動かないください」

しかし、千景が何か行動を起こす前に、ヒュアツインテの剣が千景の喉元に突きつけられる。

「このまま掻っ切ってもいいですけど、それじゃあ面白くありませんので。このまま苦しみながら死んでください」

清々しいほどの笑顔で笑うヒュアツインテ。

『野郎……!!』

『ひなたさんに、そんな事を……!』

自分の中にいる思念体たちの怒りが伝わってくる。それは、千景も同じだ。

自分の先祖の友人である彼女を、ここまで貶めるなど、言語道断。

断罪の神、やはり許すまじ。

だが、そんな事を思ったところでこの状況が好転するわけじゃない。何か、方法を見つけなければならぬ。

ヒュアツインテは、川の上の堀に腰かけている。一方のジガは、ゆつくりとこちらに歩み寄り、下手な事をすれば、すぐさま右手の赤熱光線を放てるように準備している。

剣は相当重く、そしてヒュアツインテはそれを浮遊させて念力のように動かしている。

その一撃は重く、踏ん張らなければ吹き飛ばされる程に重い。

一方で、あの男は、そんなヒュアツインテなんて目じやない程、いや、雲泥の差がある程に強い。

あの赤熱光線もさることながら、単純な格闘技術だけでも群を抜いている。

その一撃は鋭く重く、そして速い。

郡の記憶から読み取る、若葉の超神速居合を連続で繰り返すかのよくな攻撃ばかりだ。

だから、千景はここまで追い詰められたのだ。

「やめろおおおお!!」

『!?!』

だが、そこで、千景に突きつけられていた剣が弾かれる。

それは、小さな無数の刃。その刃を操る者は、この場に一人しかない。

園子だ。

園子が、千景とジガの間に立ちはだかる。

「彼は絶対にやらせないッ!!」

絶対的な決意をもって、園子は千剣八咫鳥の能力をフルに生かしてジガを攻撃する。

「ふん」

それを見てジガは鼻を鳴らし、そして襲い掛かる千本もの刃を、槍一本で全て凌ぐ。

「く……うう……!!」

無限に襲い掛かる刃を、ジガは槍を振り回し、全て叩き落とし、ねじ伏せる。

「な……んで……!?!」

その、無数に襲い掛かる刃を、何故ジガは迎撃できる？

一度に四〜七本、同時に突撃させているのに、ジガは、その全てを一度に叩き落している。

いや、正確には違う。

突っ込んでくる刃の数に合わせ、それが七本であるなら、七回、叩いたのだ。

その、単純な動作を、奴は、まるで一度にみえるかのように行っているのだ。

そして、ジガが園子の刃を制して、一気に園子に接近する。

「くっ！」

園子は槍を構えて迎撃の姿勢を取る。

二本の槍が交わる。

超高速で振り回される槍の連撃が園子とジガの間で火花を散らし、激しい金属音と共に、交錯する。

だが、それなりの技量を有している園子であっても、ジガのそれは遙かにも及ばず。

「うああ!？」

拮抗はすぐに崩れ、槍を振り回せなくなり、耐えるような形にされ、やがては弾き飛ばされ、飛沫を巻き上げて川の水面の上に落ちる。

「園子!？」

自身の能力で止血をした千景は、思わず園子の名を呼ぶ。

「いい腕をしているが・・・だめだ」

ジガの槍が、園子に突きつけられる。

「貴様では俺には勝てない」

「く・・・うううう・・・!!!」

悔しそうに唸る園子。

しかし、それは事実であり、園子の手は、ジガの重い一撃を受け続けた事によって痺れて動かなくなっている。

「死ね」

そして、ジガの刃が、園子に突き刺さる。

「終わりましたね」

その様子を、傍観していたヒュアツインテ。

「さて、最後はあの御老体ですが……」

今思い出したかのように周囲を探るヒュアツインテ。しかし、その直後に――

「!!!!」

人間のものとは思えない程の咆哮が轟き、次の瞬間、黄昏色の光柱が、街の中から空に向かって立ち上った。

「な、なに……!?」

突然の事に、ヒュアツインテは驚きを隠せず、それには流石のジガも攻撃の手を止めた。

その立ち上る光の柱。それは、眩い光を発していたが、やがてその光もなりを潜めて消えていった。

「……なんだったんですか」

そう、眩いた直後に、それは、ヒュアツインテの背後に落下した。思わず後ろを振り向けば、そこには、黄昏のオーラを発しながら立つ男がいた。

竜胆を想起させる灰と白の装束。エメラルド色の瞳。山鳩色の髪。

それだけならまだ良い。問題なのは、その特徴を持つ者は、三百を過ぎた老人である事。今日の前にいる男は、そんな男とはあまりにもかけ離れている程に若く、そして、逞しい。

そして、そんな男の正体を知る者は、この場にいる。

方や、その者と会った事のある人物の子孫、方や、その者から直接師事され、そしてその写真を見た者。

「師匠……?」

「足柄さん……!?!」

そう、彼の名は辰巳……足柄辰巳だ。

全盛期時代の姿だが。

「なんで!？」

勿論、驚くのは無理はない。

「師匠わかい！」

園子の方は感性が可笑しいので突っ込まないが、とにかく、なぜか辰巳は若返っていた。

「足柄辰巳……なるほど、神と交渉して肉体の時間だけ巻き戻したのか」

ジガは、冷静ながらも警戒を解かず、そう指摘する。

「ああ」

それを、辰巳は肯定する。

「流石に、あの体のままでは限界があった。ファブニールどころか勇者の力さえも振るえない。頼れるのはこの鋼の肉体と磨き上げた技のみ。どれほどの時間であろうと、あの日、勇者でなくなった時点で、俺はすでに戦いの場から弾きだされた存在だ。……だから願った。もう一度戦いたい。そしてこの土壇場でその願いを叶えてもらった。その結果がこれだ」

若返る事によって、勇者の力をもう一度使え、最も力を付けた高校生としての復活を果たした。

今の辰巳は、あの大決戦の日よりも強く、そして、二度と倒れない。

「それで、どうする?まさか、俺に勝てると思っているのか?」

「もちろんそのつもりだ。でなければ、俺はここに立っていない」

両手で手の中にあるバルムンクを握りしめる。

「園子」

「え?なんですか?」

「ひなたを頼む」

そう、短く、頼んだ。

その頼み事に、園子は一瞬目を見開いて、やがて決意するかのよう
に頷く。

「分かりました!」

園子は、ヒュアツインテに視線を向けた。

「どうする……?」

『残念だけど、今の私たちでは足柄さんの足手纏いよ。ここは任せましょう。その代わり、私たちは園子さんの援護を』

「分かった」

郡の指示に従い、千景も園子と同じく、ヒュアツインテの方をむく。

「……頼んだぞ」

「はい」

「おう」

その行動に、ヒュアツインテは再び浮遊する。

「はあ……いいでしょう。切り刻んであげます」

剣を展開し、そうほくそ笑むヒュアツインテ。

「改めて、足柄辰巳、推して参る」

剣を正眼に構え、辰巳は、敵を睨む。

一方のジガは、その兜の奥で、ほくそ笑む。

「くく……まさか、ここで初代最強の勇者と手合わせ出来るとは……この巡り合わせは偶然か必然か……まあ、どうでもいい事だ」

槍を回し、構えるジガ。

『最高司祭』ジガだ。いざ尋常に——」

今、戦いの火蓋が、切って落とされる。

『———以外に、手こずるか』

神樹の張る結界の上空。そこに浮遊する城にて、断罪神マジアクルスは、結界内の様子を見て取る。

すでに何人か敗北し、死んだ。この状況から見て、マジアクルスは

思案を巡らせる。

『これ以上時間をかけて、『本隊』が到着すればどうなるか・・・流石に、あの御方の手を煩わせるわけにもいかん』

この城は、マジアクルスが支配している。その気になれば、城内部の構造を根本から作り変える事が可能だ。

だから、城の奥深くに封印されている存在を、いつでも射出できるように作り変えたのだ。

『こいつを投入しようか』

ふと、マジアクルスの視線が、ある少女へと向けられる。

『・・・結城友奈』

もう、その体のほとんどの外殻が剥がれ落ち、その正体が曝け出されつつある。

『お前の正体も、すぐに暴かれる事になるだろう。それまで、精々逃げ回るが良い』

そして、マジアクルスは、それを投下した。

不道千景、消滅まで、あと一時間三十分——

死へのカウントダウン

「アハハハハハ!!」

炎が襲ってくる。

それを風、樹、冬樹は躲す。

「ほらほらあー!どうしたのお?その程度お!」

「だああああ!!この炎うざい!!」

「そんな事言ってもしょうがないよお姉ちゃん!!」

「うん、無駄」

「あああ!!樹はともかく知らない誰かさんにまで否定されたあああ!!」

喚く風を他所に、炎は相も変わらず襲い掛かってくる。

それはまるで生き物のように、巨大な塊となって三人を襲う。

「なかなかすばしっこいわね…そんなんで、この私を倒せると思ってるの?」

「安心、して、すぐ、終わ、る」

「ハッ!いい大口叩くわね!いいわ…やれるものならやってみなさいよ!!」

レジーナが炎を操り、それを彼女たちにぶつける。

「少し、時、間、稼い、で」

「どうにか出来るの?」

「出来る」

風の問いに、迷いなく答える冬樹。

「そう…分かったわ」

風はそう答えて、その火球の前に立つ。

「お姉ちゃん!」

「今は信じるしかないわ樹。頼んだわよ!!」

そして、風は、剣を巨大化させてその炎を正面から受ける。

「ぐ…うう…」

その熱量に必死に耐え、風は、その炎を支える――

「——つしゃあああああ!!」

「——つうおおおおお!!」

雄叫びと共にハイタッチを交わす明日香と将真。

「まずは一勝!!」

「我々のチームワークの勝利だ!」

「ワーハツハツハツハ!!」

腕を組んでくると回る二人。

「はッ! そういえば芽吹たちはどうなったア!」

「そういえばそうだったあ!!」

そして今更のように思い出す。

「心配しないで。無事よ」

「おお! 芽吹!!」

だが、多少傷つきながらも勝利した風貌で現れる芽吹、そしてシズク。

「・・・てえ!?! なんであの時のオッサンがここにい!?!」

「今は味方だから安心してくれ」

そして、当然の事ながらさらに後ろにいた真武郎に向かって指差す

明日香。

「一応、倒せたみたいね」

「そっちもな」

互いの勝利に喜びつつも当然という感じて見合う芽吹と明日香。

「おーい! さつき優理君たちの所見てきたけど、勝ったみたいだよ」

そこへ、昴が飛んでくる。どうやら、優理達の所に向かっていたようだ。

「だけど夕海子さんが怪我を・・・」

「そう・・・優理は動けるのよね?」

「うん、でもそれでも手傷を負ってる」

「だったら優理には夕海子を引かせ次第、すぐに戻るように伝えておいて。あ、雀は呼んどいて」

「はいはい・・・やれやれ、雀ちゃんも災難だな・・・」

一人、これから起こるのであろう雀に対する災難を嘆きながら、昴はすぐさま優理たちの方へと走っていった。

「とりあえず、これで四人撃破って所ね」

「よおおし！このまま他の奴らもまとめてぶっ飛ばしてやろうぜええええ!!」

明日香の雄叫びと共に、他の者たちも動き始める。

「おおおおおお!!」

「ぬおおおおお!!」

剛とブルーメの拳が正面から衝突する。

そこから激しい拳の応酬が展開される。

互いに一步も引かず、拳を叩きつけ、防ぎ、また反撃し、攻撃を受け止める。

『大猿ノ——』

「ッ!？」

『——鉄拳』ッ!!』

銀の内臓をぐちゃぐちゃにした強力な拳打が剛に迫る。

「ぬんッ!!」

「なに!？」

しかし、それを剛は渾身の一撃で真正面から打ち返し、止める。

「ぬう・・・罪人の癖になかなかやるな・・・!!」

「そりゃあそうだけ、何故なら俺は、ドラゴンボールシリーズの大ファンだからな!!」

力を比べをしている拳とは違う拳を掲げる剛。

以前の満開とは違い、『星廻ル紺碧』状態の剛にハンマーは存在しない。その代わり、持ち前の喧嘩スキルによる格闘戦特化の状態となり、それに合う戦闘能力を手に入れている。

そのベースは——ドラゴンボールだ。

「らあッ!!」

剛の掌に出現した気弾が、ブルームに叩きつけられる。

『ライノメイル
犀ノ鎧』

しかし、その一撃はブルームが展開した防壁によって防がれる。

すかさず、ブルームの拳が剛に迫るも、それを剛は軽々と後ろに飛んで躲す。

「フハハハハ!!どうした?その程度か!!」

「ハッ! テメエこそ、なんださっきのへなちよこパンチは?まさかそれがテメエの全力って訳じゃねえよなあ?」

「罪人風情が、ほぎくな!!」

瞬足をもって、剛に接近するブルーム。そして剛はそれを迎え撃つ。

「来いッ!!」

その上空では。

「ハアアアッ!!」

翼の蹴りがラヴァンドに迫るも、それをラヴァンドは軽々と避ける。

上に飛んでいくラヴァンドを、翼はボウガンか矢を放つ事によって追撃するも、それはラヴァンドが手にした二対の剣によって弾かれてしまう。

「チッ」

「ちよつとちよつと、君い、本気になり過ぎじゃない?」

「そうですね。少し冷静になるべきですね……ですから、冷静に貴方を殺す」

「だからそれが本気に……って聞いちゃいないか」

話し終える前に、翼はすでにラヴァンドの目の前に迫ってきていた。

振り下ろされる拳の一撃を、ラヴァンドは紙一重で回避する。その反撃にラヴァンドは翼の腹に手をあてた。

『フエイカースキル鷹作技』——『エンドレススクリーム斥力炸裂槍』

ラヴァンドの手から生成された斥力フィールドが変形、形を成し、全てを削り取る矛となって翼を襲う——はずなのだが。

「八つ裂き光輪ッ!!」

それよりも速く、翼の手に展開されたリングが、ラヴァンドを襲う。

「うわっと!」

それによって砲撃は中断。ラヴァンドは下がる。

「逃がすか——『スペシウム光線』」

右腕を縦に、左腕を水平に交差させて、平面上の光線を放つ翼。

スペシウム光線、とは言っているが、これはあくまで、ただのオマージュであるためにウルトラマンの攻撃そのものではない。

だが、今回の戦いにおける満開の強化バージョンは、それぞれが戦いやすいように神樹が改良したものだ。その能力の大体は、使用者本人の『戦闘に対する強い情景』というものが反映されており、園子の場合は、無数の刃による多目的援護および動けなくても助けに行けるという思いの元、作られたもの。

そして、剛の満開は、彼の『ドラゴンボール』のように戦いたいという子供の頃からの情景、そして、その力があれば仲間を助けられるという強い意志の元に展開されたもの。

そして、それは翼もしかり。

ドラゴンボールとウルトラマン。互いに戦士という共通点があり、二人の戦い方に合った戦闘方を持つ空想上の力を、神の力によって実現したので。

故に、翼は今、ウルトラマンの超初級技である『スペシウム光線』を放つことが出来るようになっていたのだ。

「うわっと!」

しかし、それすらもかわされる。

「やれやれ……いい加減にしてくれないか？」

ラヴァンドから、どす黒い殺気が放たれる。しかし、翼は動じず、殺気を真正面から受け止めつつ、同じような殺気を返し、答える。

「それはこちらのセリフですよ。いい加減倒されろ」

その答えに、舌打ちが一つ。

「そうか、そんなに死にたいのか……」

くつくと笑ったのち、ラヴァンドの周囲に、無数の剣が形成される。

「だったら苦しみの果てに地獄に落ちろ」

それに対し、翼は、

『無限大剣』
メビウムフレード

腕に装着されているボウガンの先から、光の刃を形成し、答える。

「御託は良い、さっさと来い」

「ゼアアアッ!!」

信也の蹴りが、巨大パンダの顔面に蹴りを入れようとする。しかし、それをのけぞる事で躲かれ、さらにパンダは横から信也を拳で叩き落す。しかし、寸での所で防御に成功した信也は地面に両足で着地して、地面を踏み砕くやすぎさま走り出して追撃をかわす。

そしてすぐさま逆方向に飛んで、再びパンダに回し蹴りを叩き込む。それを左腕によって受け止められ、すきかず右拳による反撃が飛んでくるも、それを足を上に乗せる事で躲し、そのまま腕の上を回転して、パンダの顔の間にまで来て、その顔に蹴りを叩き込む。

(野郎っ！)

当たった……が、手ごたえが浅い。どうやら直撃の瞬間のけ反つて威力を半減させたようだ。

(のんびり癒し系アニマルの癖してなんて反射神経していやがる……ッ!!)

バック転をしたパンダは、そのまま信也を見据えるや、すぐさま飛んでこちらを殺そうと襲い掛かる。

「ガアアアアアッ!!!」

肩の角を突き出して、信也を串刺しにしようとする。しかし、それに対し信也は――

『機関銃蹴撃』ツ!!』

威力に対して手数で勝負した。直撃する瞬間のパンダの角の尖端に無数の蹴りを叩き込んだ。

しかし、パンダ自身の運動エネルギーは消えず、角の直撃を躲した信也に向かった強烈なラリアットを叩き込む。

「ぐふう・・・!!?」

胴体に直撃し、血を吐く信也。そのまま建物に激突。何件か貫通していった。

建物が派手に壊れ、起き上がったパンダが、勝利の雄叫びとばかりに咆哮する。

「おい」

粉塵舞う中、しかし声が響き、パンダの懐にすでに信也はボロボロの状態で構えていた。

「勝ちどきあげんのはまだ先じゃねえのか?このエセクマ公がアッ!!」

怒りの一撃がパンダの腹に直撃する。

『肝臓』・・・!!』

さらに二撃、三撃と攻撃が入っていく。

『腎臓』『小腸』『大腸』『直腸』

五撃。

『踵骨』

脚を叩いて膝を着かせる。

『頬肉』ツ!!』

こめかみに爪先が突き刺さる。それも左右両方。

『舌』ツ!!』

続いて顎。

『肺』ツ!!』

そして両胸、その奥にある肺を叩き、

『脊髄』ツ!! 『脾臓』ツ!!」

肩に乗ったと思ったら踵落としの容量で背中を叩き、さらにもう一撃叩き込んだのち、首に回し蹴りを叩きつける。

『食堂赤筋』ツ!!」

そのまままたパンダの前に出ると、今度は四撃、また腹に蹴りを叩き込む。

『胃 撃』—— 『一番』 『二番』 『三番』 『四番』ツ!!」

もはやパンダの意識は消失寸前。

しかし信也は一切の手加減なしに止めを叩き込んだ。

『心臓』—— 『牛内臓連打』ツ!!」

最後の一撃が、心臓へと突き刺さり、地に沈むパンダ。

『もう二度と会う事はないだろう』

倒れるパンダに背を向け、立ち去る信也。

その一方で、もう一つの戦いも決着を迎えようとしていた。

クマの鍵爪が白露へと迫り、その度に白露はその敏捷性をもって、その爪の嵐を全て躲す。

「ほらほらあー!どうしたの?その程度!」

爪の嵐の一瞬の間隙について、飛び上がる白露。

『虎爪』

そのまま、すれ違いざまに右手の爪でクマの右目を潰す。

悲鳴を上げ、よろけるも、潰された事による怒りによって動揺を消し去り、背後へと振り向くクマ。しかし、そこにすでに白露の姿はなく、すでに白露は高所からの落下攻撃を仕掛けていた。

『狩虎・稲妻』ツ!!」

二対の爪が熊の首をとらえた——かに見えたが、間一髪の所で両腕を犠牲にされて防がれる。

「つちやー、防がれちゃったか」

しかし、白露に焦りはない。いや、実際はかなり疲労しているのだが、それでも余裕の表情だけは崩さない。

「グゴオオオオオツ!!」

両腕が死んだクマの攻撃方法は、もはや牙による噛みつき攻撃しか

ない。さらに、クマの頭蓋はかなり固く、弓矢などはどれほど鋭利でも簡単に弾かれる。そのクマ本体が化け物クラスなら、その硬度もまさに規格外だ。

そのまま白露に向かって倒れていく。その大口を開けて、白露に今にも噛みつかんと襲い掛かってくる。

「遅い」

しかし、虎の敏捷性には敵わない。

一瞬の内に、クマの首の横を駆け抜け、その肉を食いちぎる。

「——不味い」

そう吐き捨てるや否や、空中で反転、そして再度、爪と高所からによる強襲攻撃を仕掛ける。

『狩虎・稲妻』ツ!!」

首の頸動脈を切られ、失血によって絶命するクマ。

血を浴び、白い装束が赤く染まる中、白露は手についた血を舐める。

「んー、まずい。無益な殺生しちゃったか……」

そう吐き捨て、白露はその場を去り、次の場所へと向かう。

「オオオオオ!!」

優の拳が、レンリの仕込み杖に直撃する。

「ぐう!？」

「オオツ!!」

さらに、追い打ちをかけるような鋭い右の回し蹴りが叩き込まれ、さらに後退させられる。

「く、このお……!!」

「無駄ア!!」

反撃に転じようとしたレンリであったが、それすらも許さず、優の左足が仕込み杖を持つ手を蹴り上げる。

その手から、僅かながら血がこぼれる。

優の一挙手一投足全てが一撃必殺にして刀の如き斬撃を有している。

その、いわゆる『刀人間』と化している優に対して、猛獣がいなければ大した実力も出せないレンリは追い込まれるばかり。

「ふん、三流は三流でも、お前はその下の下、そのさらに下だな」

「ぐ、舐めやがってえ・・・」

「だからさっさとくたばれ」

間髪入れずの貫手ぬきてがレンリを襲う。

それを間一髪で防ぐも、さらに吹っ飛ばされる。そのまま壁に激突、砕け散らせる。

「目障りだ」

「ぐ・・・くう・・・」

あまりにもかけ離れた実力差、その事実、レンリはその思考を、その疑問へと費やしていた。

（なんでだなんてだなんてだ！なんで僕が倒れてるなんで奴が立っている!?地面に伏せて悲鳴をあげるのは向こうだろ!?どうして僕なんだ！ありえないありえないありえない!!）

あまりのナルシスト思考に到底この状況を信じられないレンリ。

もはや意地とプライドだけで戦ってるだけに過ぎないレンリに対して、レンリと同じ意地とプライドを持っているうえに圧倒的技術力と鋼の体を持つ優は、レンリにとってもはや暴れるだけの豚同然。

このまま料理されてしまうのがオチだ。

「うがあああ!!」

半狂乱となって優に襲い掛かるレンリ。

しかし、それすら軽くあしらってしまふ優は、最初の一太刀を弾いた直後に、引き絞った左拳をレンリの鳩尾に叩き込んだ。

「ぐげう・・・!?!」

吹っ飛び、建物の屋上から落ちて地面に墜落する。

「ぐう・・・げえ・・・ごほ・・・」

先ほどの一発が効いたのか、血を吐くレンリ。

「へえ・・・人間じゃないと思ってたが、なんだ、赤いじゃないか」

そんなレンリの吐く血を見て、そう冷ややかな感想を述べる優。

「まあ、それで手加減する気は毛頭ないが」

徐々にレンリに歩み寄っていく優。

(くそう…ふぎけるなふぎけるなふぎけるな！僕は処刑衆の一人『猛獸刑』のレンリなんだぞ！なのになんであんな余裕そうな表情をしてこつちに来るんだあのガキは!!)

もはや、迷っていられない。

あんな子供に敗北するぐらいなら、獣以下の存在にでもなんでもなってる。

そんな思いがレンリを駆り立て、その体に、一本、注射をした。

「…!?!」

一瞬、レンリの体が痙攣によって跳ね上がる。

「許さない…もう許さないぞ…お前はボクを怒らせろ…だから、イマ、ココでシねエエエエエ!!」

体が肥大化し、瞬く間に筋骨隆々な体格へと変化する。その肌も変化し、どこか緑色へと変色している。

「ウガアアアアア!!」

拳を振り上げて、振り下ろすレンリ。

しかし、そんな変り果てた姿となったレンリを見ても優は少しも動揺せず。

「…たかが、そんな変化した所で」

優の手刀が瞬く。すると振り上げられたレンリの腕がまるで肉厚のハムのように肩までスライスされていた。

「ナ、ナアアアアア!」

「出直してこい——『十連・瓦割正拳』ツ!!」

優の右拳がレンリに炸裂する。

それによってレンリが吹っ飛ぶ。するとどうだろうか。突然、レンリの体がさらに跳ねる。しかし、一度だけにとどまらず、その跳ね上がりは回数を増していき、十回目で、レンリの体が爆散した。

「ふん…さて、皆さんはどうなったでしょうか」

肉片と化したレンリに一瞥もくれず、優は、さっさと信也たちの元へと向かった。

刃が交錯する。

千の刃が降り注ぎ、しかし直撃するもの全てを弾いて無傷でしのご。

「ふふ、いくらやっても無駄です。どうあがいても、貴方たちに勝ち目なんてありません」

「そん……なの……やってみなくちゃ……分からないッ!!」

園子の槍が唸って、右薙ぎにヒュアツインテを打ち据える。

しかし、その一撃はヒュアツインテの操る剣の一本に防がれる。

『エリザベート血欲する婦人』

「ッ!」

死角から、血のように真っ赤な剣が園子に向かって振り払われる。それを園子は状態をのけぞらせて、頬の薄皮一枚にとどめる。

しかし、その掠り傷から漏れ出た血が、急激にその剣に吸い取られていく。

「くっ!」

『封印縛鎖』『止血』ッ!!」

そこへ、千景がすかさず園子の傷口を止血、吸血を阻止する。

「ふふふ……まだ足掻きますか?」

「当たり前だ」

鎌を構えて、公然と言い放つ。

「こんな所で、諦めてたまるかってんだ……!!」

「早々に諦めた方が、身のためですよ?」

ヒュアツインテの両側から、炎が舞い上がる。一方はわずかにどす黒さを持つ憎悪の炎、もう一方は、龍の形を成す、嘘殺しの炎。

「さあ、処刑を続けましょうか」

剣と槍が交錯する。

「オオオオオ!!」

「ぬううん!!」

辰巳の渾身の振り下ろしをジガは受け止め、反撃といわんばかりに槍を突き返す。

激しい攻防、押して押されての打ち合い。

激しい打ち合いの中で、しかし押されているのは辰巳、ジガの刃は、すでに数十発と辰巳に叩き込まれている。

しかし——その全てが邪竜の鎧を纏い、元の邪竜の力を全開にしている辰巳の皮膚にはわずかながらの傷を付けさせるだけだった。

「邪竜ファブニール・・・それを浴びた英雄は、無敵の肉体を得たと聞いたが・・・なるほど、まさに伝説の再現だ」

「言ってる!!」

横薙ぎの一撃を飛んで躲される。

その攻防、その間、わずか十秒。

それによって、すでに数千にも及ぶ剣の打ち合いが行われていた。

「しかし、それでは追い付けないどころか勝てんぞ」

「ああ、そうだな」

ファブニールを纏っていてもこの有様、互角に持ち込めないどころか押され気味だ。

いや、むしろ相手は本気すら出していない。こちらが一方的にあしらわれているだけだ。

(重ね掛け・・・三百年前に一度やったきりだが・・・リスクもあるが仕方がない。すでにこの体はどうの昔に人間をやめている・・・!!)

覚悟を決め、神樹へのアクセスを開始する。

しかし、

「それをみすみす見逃すと思うか？」

「だろうな」

突き出された神速の突きを、辰巳は己が剣、滅竜剣バルムンクをもって弾き飛ばす。

「戦闘と平行して・・・!?!」

「この一撃を防げればいい————来やがれ————『ジークフリート』ッ!!」

間髪入れずに、神樹からの情報が辰巳の肉体に叩きつけられ、上書きされる。

肉体は変化し、鎧さえもその形を変え、最適な形態へと。

宿すは滅竜の英雄と黄昏の邪竜。

振るうは英雄の剣技と肉体、そして黄昏の力。

その相反する二つの力をもって、辰巳は、その姿を幻想の英雄へと顕現させる。

「ハアツ!!」

重い一撃がジガへと叩きつけられる。

「ぬう・・・」

ぎりぎりの所で槍によって防がれる。紙一重ともいえるその差は、しかし辰巳にとってはさらなる絶望を叩きつけられる事となる。

(その紙一重さえも超えられないのか・・・)

「ふむ、良い一撃だ・・・だが、まだ足りない」

確かに攻撃は直撃した。しかし、それが効いたかと聞かれれば否。

相手は全くの微塵も同様していない。辰巳の渾身の一撃さえも、奴は防いで見せたのだ。

「ジークフリートとファブニールの技術と膂力をもってしてもその程度か・・・!」

ジガが襲い掛かる。それに対し、辰巳はこれから起こるであろう戦いの展開を脳内の片隅に思い浮かべつつ、せまる死のカウントダウンを必死に引き延ばすための努力の準備をした。

戦いは、様々な所で展開していく。

「——あと、四体イっ!!」

幸奈の拳が、アリエスを落とす。

残るは、鯨型のバーテックスと、ペルセウス、そしてベアーとレオ

ののみ。

「いや、あと三体だ」

そこへベアーに向かって矢の雨が降り注ぎ、その表層全てを削り取って、その御霊さえも破壊する。

「よし、このまま押し切ろう!!」

「うがああああ!!」

ホエールの上では、美紀がペルセウスに対して白兵戦を挑んでいく。

「やあああ!!」

美紀のナイフによる突きを丸い盾で防ぎ、右手のハルパーで切り返す。

しかし、横に薙ぎ払われるその一撃を、床に倒れ込む事によって回避、その膝裏を蹴って折って膝を着かせる。

そして、ペルセウスの右側から首を搔っ切りに行く。

しかし、ペルセウスがついたのは、右の片膝のみ、美紀の攻撃が届く前に、そのハルパーを美紀の首へと迫らせる。

(はやい・・・!?)

その速さに驚愕するも、しかし間に合わない。

このままでは、美紀の頭と胴体がお別れしてしまう事になってしまう。

しかし、その時は訪れない。どこからともなく飛んできた矢が、ハルパーを弾き飛ばし、美紀の首切断を阻止した。

その正体は佐奈。すでに落ち行くベアーの上から狙撃してきたのだ。

そのまま、美紀のナイフの一撃は、ペルセウスの首を搔っ切る。バランスを崩したペルセウスは、そのままホエールの上を転がり落ちていった。

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

その様子を見届けた後、美紀は立ち上がって佐奈に向かって手を振る。

「ありがとうー！佐奈さーん！」

その様子に、佐奈も微笑んで手を振り返す、が、すぐさまその表情が強張り、美紀が首を傾げた所で、声が美紀の耳に届く。

「美紀、逃げて・・・!!」

それは真斗のつたない声。しかし、美紀は、背後から来るすさまじい殺気を感じ取り、直観のままに前に蹴りだして、背後から振り抜かれた凶刃を回避する。

そして、改めて美紀は背後を見て、絶句した。

空を飛んでいるのだ。

ペルセウスが、翼もなしに、千切れかけている首をそのままに飛んでいる。

まるで、幽霊のように。いや、この表現は正しくない。ただ、そこに、背中に翼があるかのように飛んでいるのだ。

その姿に、美紀は戦慄する・・・も、すぐさま美紀の背後から矢が吹き抜け、ペルセウスはその矢を盾によって防ぐ。

「美紀、飛べ!!ペルセウスはその伝説上、怪物退治に神々から様々な武器を貰っている。空を飛んでいるのはその一つだ!!」

佐奈の声に従い、その後続く言葉を見殺しつづ、ホエールから飛び降りる美紀。そんな美紀を受け止めたのは弘だった。

「その名もタラリア、羽のついたサンダルって聞いてるけど、羽なんてついてないじゃないか嘘つきめ」

そんな軽口の前、弘は取り出した飛行体『ヴィマーナ』によって他の仲間たちを回収する。

「これで残りは三体」

「ああ、一気にかたを——ッ!」

しかし、そこで港側の海から大きな水柱が立ち上る。

「何!?!」

「あれは・・・」

よく目を凝らすと、巨大な人型とも言い難い形状のバーテックスが、海につきりながら何かを睨みつけていた。そんな真っ白バーテックスに、無数のミサイルやらレーザーやら砲弾やらが叩き込まれていく。

『!?』

形容しがたい悲鳴と共に、爆炎を喰らうバーテックス。

そのバーテックスを打ち据えた存在は、今もなお、その巨大な武装をもってそのバーテックスを追撃しようとしていた。

「海路君・・・」

「あの狙撃手か、凄まじいな」

「・・・皆、前」

『ん?・・・うおああああ!?!』

気付けばホエールが吐き出した霧状の何かが襲い掛かってきていた。

慌てて回避に成功するも、戦闘はまだ続いているのだと再認識させられる。

「と、とにかく観戦は後回しだ!今はさっさとあのデカブツ共を蹴散らすぞ!ファイアー!!」

『ファイアー!!』

「・・・つて、わざわざ子供向けアニメの幼稚園児家族のような事言う必要がある?」

幸奈のツツコミはこの際無視されて、戦いは続いていく。

あちらこちらで、戦いが継続していく。

地面から杭が突き出す。その全てを、夏凜は超人的な身体能力をもって全て躲す。

その一方で、別方向から血の刃が襲い掛かる。リアルタイムで無制限に、そして現在進行形で変形していくその刃は、普通に弾くだけでは防げない。しかしそれすらも夏凜は両手の刀をもって凌ぐ。

が、実際はかなりきわどい。

(極限羅刹は・・・使うにはあまりにもエネルギー効率が悪い・・・!!) ようはペース配分なのだが・・・正直、このままだと押し切られる

可能性がある。

「どうした？その程度か？やはり我々二人を相手にするのは少々荷が重かったようだな」

「ふふ、随分と自信があったようだけど、それじゃあだめよ。自信だけじゃ私たちには勝てない」

ほくそ笑み敵二人に対して、夏凜は齒噛みする。

ダーナの能力は一定範囲内による杭の無限召喚。その召喚される杭の数に限度は無く、その領土の広さもあまりにも広い。

一方のラミアの能力は自らが垂れ流した血による攻撃。弾丸や剣、槍など変幻自在だ。

その上、リサイクルしてくるのでそれほど巨大なものじゃなければ何の問題もないらしい。

非常に厄介な話だ。

こっちは今後の事も考えて力を温存しなければならぬのに、相手はとことん本気だ。

もういつその事、力を使ってしまった方がいいのでは。そんな思考が頭を埋め尽くした時。

「何をしている」

次の瞬間、夏凜でも凌ぐのは骨が折れそうな程の数の杭と血の攻撃の嵐が迫っていた光景が、一瞬にして晴れてしまった。

そして、その光景に、新たな影の存在が。

真っ黒な和風装束。足には白い足袋と藁草履。そしてその手には夏凜から見てもかなりの業物の刀。

それは、間違いなく、夏凜の兄、三好春信だった。

「兄貴!?なんでここに!」

「なんかよく分からないびりびりする奴を片付けて次の敵を探していたらお前を見つけた。思った以上に時間がかかったが問題ない。すぐに片付ける」

「いやいやいや何さぞ当たり前のように言って・・・あぶない!!」

夏凜が悲鳴のような声をあげる。春信の背後からは、先ほどとは比較にならないほどの杭と血の雨が降り注いできていた。

空を埋め尽くす程、大量の。

「いいか夏凜、もし時間が足りないのであれば」

春信の体から、何か、オーラのようなのが揺らめいた。

依然として、春信は、焦っていないかった。

「一瞬の内の全力をもつて、すぐに片付ける」

勝負は一瞬。春信が五秒をもつてその杭と血を全て打ち払い、一気にダーナとラミアへと接近する。

「秘奥——」

「ツ!!」

迎撃は不可能と判断したのか、ダーナとラミアは防御姿勢に出る。しかし、無事防御の構えはとれたが、春信は、その上を行っていた。

「——『蓮華の太刀』」

横一閃、二人に叩きつける春信。

それだけで、敵二人の胴体を、横に両断した。

「まさか……たった僅かな時間で勝負が決してしまうとは……み、見事……」

「う、嘘よ……こんな、あつけなく……」

言葉、またずして地面に倒れ伏す敵二人。

「は……はは……」

そして、夏凜は乾いた笑い声しか上げられなかった。

これが、自分の兄。歴代勇者最強の實力を誇る、正真正銘、最強の勇者の實力。

勇者システムなんぞ使わなくても、先ほどまで夏凜が苦戦していた相手を、二人まとめて倒してしまうなんて。

(追い付けるイメージが湧かない……)

あまりにも、遠すぎる。

これが、最強。自分が目指しているもの。

「それで、結城友奈は見つかったか?」

ふと、そこで春信から話を振られる。

「いいえ、まだよ。今、東郷を先に行かせた」

「それなんだが、今さつき三ノ輪銀の戦闘不能を確認した。東郷は今、

銀を連れて結城を探している」

「え!? 銀が!？」

それには流石に驚く夏凜。

「なんで……」

「先ほど、巨大な化け物が見えた。三ノ輪銀が以前話していた、『禁じ手』だろう。おそらくそれを使って力を使い果たしたといった方が妥当だろう」

「なるほど……」

とりあえず、これで納得はした。

しかし、だからと言って友奈が見つかったわけではない。

「お前は俺と一緒に行動しろ。今は乱戦状態。何が起ころのか分かったものじゃない」

「いいわ。行きましよう」

そうして、二人は行動を共にする。

戦いは続いていく。しかし、徐々にその戦況は傾いてきている。

そう、だんだんと、襲撃してきた軍勢の数が減ってきている。

今の所、防衛側の被害は最小限に収められている。このままいけば、勝てるだろう。

そう、状況は勇者側の優勢で進んでいる。

ああ、だからこそ、敵は――

――起死回生の一手を打つのだ。

それは一番早くに察知したのは、今、強大な敵との戦闘をしているものでも、味方の援護の為に動こうとしている者でも、今、敵に勝つための準備をしている者でもなく――

――唯一戦闘に参加していない彼女だった。

おもむろに、路地から出て、彼女は、空を見上げた。

その体は、もはや人間の皮膚のほとんどが剥がれ落ち、右腕は全てが赤黒い肌を晒し、顔の一部など、体中の様々な所も、その赤黒い肌を晒し続けている。

しかし、彼女は、それすらも忘れて、これから墮ちてくる存在に、怯えずにはいられなかった。

「……来る」

そう、眩いた直後に――

空が、碎け散った。

完全生命体

空が、砕けた。

それは、神樹が作りだしていた幻想が壊されたという事であり、新たな敵の来襲を知らせる、警報となった。

まず、大きかった。

まさしく、怪物ともいうべきサイズの怪物で、それは一見、ウルトラシリーズで言う所のゴモラのようなサイズを誇っていた。

次に、その姿。

おおよそ、異形ともとれるその怪物は、シンプルなつくりとは言い難く、背中になにかの噴出孔の管が二列に四本づつ、計八本も伸びており、手は三本、そこから体中を縫うように黄色い筋が浮き上がっている。霊長類とはいえない、短い脚と長い尻尾も有しており、その顔は、まさしく恐怖の対象だった。

その巨大さに、その場にいた勇者、襲撃者、防人、救導者は圧倒されていった。

「な、なんだよ・・・あれ・・・」

茫然とする信也。あんな巨大な敵を、今までに見た事が無い。

「分からない・・・でも、なんか、ものすごく危険だというのは分かる」

隣にいた白露も同様だった。

とにかく、巨大で異質なそれは、有り余る存在感を発して、圧倒していた。

ふと、その怪物が動いた。

まるで屈むように上半身を前に突き出すと、突如としてその背中の管に光が収束する。

そして、その光が限界にまで収束した瞬間——それは解き放たれた。

放たれた光線は、何十、何百、何千にも枝分かれして、香川の街に降り注いだ。

その絶対的な暴力が、建物を、木々や草花、人が築き上げてきた文明を、一瞬にして消し去ってしまった。

後に残ったのは破壊された建造物の残骸と、抉られた地面のみ。

「——なん、だったんだあれはア!?」

どうにか躲す事に成功した明日香たち防人組は、その破壊跡に戦慄していた。

「何よこれ・・・」

「全部消し飛んでやがる・・・」

「うわああああああ!! 終わりだああ!! この世の終わりだあああああ!!」

「あーもううっさい! 雀ちゃんは少し黙れ!!」

「ひどい!?!」

だが、確かに喚いていても何も始まらない。

「ツ! そうだ、他の皆の無事も確認しないと」

「そうだな・・・お前たち、動くぞ」

芽吹の言葉に優理がうなずき、他の仲間たちに命令する。それに全員頷く。

「よし、行くわよ!」

「・・・う、んん・・・」

頭ががんと痛む。

ぶつけでもしたのだろうか。

そう思いつつ、風は目を開けた。

どうやら、崩れた瓦礫が互いに支えになって、どうにか潰されずに済んだようだ。

気付けば、彼女の腕の中には、気絶している樹の姿があった。

「良かった……」

その事に安堵しつつ、風は、樹をそこに寝かせて、自分たちがいた場所から抜け出す。

「ひどい……」

そして、見た。街の惨状を。

思い出も、居場所も何もかもを過去のものへとしてしまった、あの光の雨。

それが降り注いで、次に気付いたら、この惨状とは、あまりにもひどすぎる。

「う……嘘よ……こんな……こんな事……」

「!?」

ふと、声が聞こえた。

聞き覚えがある。これは、レジーナの声だ。

どこからだ？そう思って周囲を見渡した結果、風は、四肢を失ったレジーナを見つけた。

「こんな……こんな事あっちゃいけない……私は、処刑衆の一人、

『火刑』のレジーナ様なのよ……なのに、どうして……」

「それ、は、私、が、貴方、の、四肢を、斬った、から」

呻くように呟き続けるレジーナの傍に、冬樹が立つ。

その体は、ところどころが血にぬれている。

それは、彼女自身が負った傷から溢れたものではなく、返り血によるものだ。

あの雨が降り注いだ瞬間、彼女たちのいた建物は崩れて、落下する事になった。その一瞬の混乱を使って、冬樹は、自分に光の雨が直撃してしまうかもしれない事を覚悟の上でレジーナの四肢を切断したのだ。

もう、こうなれば哀れという他無い。

冬樹は、無言で刀を逆手に持ち上げた。その切っ先は、当然、レジーナに向けられていた。

「ま、待って……まさか、殺す気なの？こんな、無防備な私を？冗談

言わないで・・・なんで、罪人である貴方なんかには、私が殺されなくちやならないの？おかしいでしょう？そ、それに、貴方まだ子供でしょ？殺しなんて、早すぎる・・・」

「——あなたたちが殺しに来た。それなら、殺される覚悟もあるよね」

レジーナの言い訳の一切を無視して、冬樹は、その切っ先をレジーナの首に突き立てた。呼吸が止まり、窒息、そのまま酸欠で、血の泡を吹いて、レジーナは死んだ。

それを見届けた後、冬樹は、水を使って装束と刀を洗い、そして鞆へと納めた。

そして、初めて風を認識して、振り返った。

「・・・」

「・・・妹」

「え？」

「妹、さん、は、寝て、る？」

「・・・ええ。向こうで寝かせてるわ」

「なら、良かった」

何が、とは風は聞かない。

こういうのは、心優しい彼女には重すぎる。

「傷、治す」

「え・・・」

冬樹の眩きに一瞬、きよとんとした風であったが、次の瞬間、風は冬樹が操る水に包まれていた。

「んぐ!？」

「大丈夫、溺れない」

「んん?・・・あ、ほんとだ」

何故か水中でも呼吸が出来る事に困惑しつつも、訳が分からず、冬樹が何かをしていた。

やがて、体中の痛みが引き、負っていた怪我や汚れなども全部完治した。

「すぐ・・・」

水から解放されて、感嘆する風。

「私、は、回復、役、だか、ら」

「なるほどね・・・」

「それ、よりも、移動、した方、が、良い」

確かに、この惨状の中、一か所にとどまるのは得策ではない。

また、いつあの雨が降り注ぐのか分からないのだ。

「分かったわ。今、妹を連れてくるから・・・」

風が走り出した瞬間、凄まじい地震が、そこを襲った。

怪物が次の行動を起こすまで、それほど時間はかからなかった。

次に怪物が行ったのは、管から、今度はレーザーではなく、丸い何かを発射した事だった。

それは山なりに、バラバラに讃州の街に降り注いだかと思ったら、着弾した直後に爆発、炎上した。

「——ナパーム弾だ?!」

その着弾直後に燃え上がった物体を見て、狼狽する翼。

「おーおー、今回も派手にやってるねえ」

「あれはなんだ?!」

翼の怒声にめんどくさそうにしつつも、ラヴァンドは答えた。

「アレの名前は『イフ』。知性を持っていない、ただの怪物さ」

「知性が、無い・・・?」

「そ、ただアレの厄介な所は、『受けた刺激を学習し、撃ち返す事』でね。元々細胞一つになっても瞬次に再生する肉体を持つてるから、どんな攻撃を受けてもすぐに再生して全く同じ攻撃をそのまま無制限に撃ち返しちゃうから、反撃したが最後、そこは更地になって全部終わって寸法さ」

「そんなバカな・・・まさか、実在していたなんて」

翼は、奴と同じような存在を知っている。しかし実在するなんて思

わなかった。

まさか、あんな最強の存在が実在していたなんて、夢にも思えない。
「どうやっても勝てないよ。アイツには」

「——ていうか！そんなものあるなら先に出しとけよ馬鹿野郎ツ
!!」

「ワハハハハ!! 貴様は馬鹿なのか!? あんなものなしで片付けられなければ、我々に存在する価値などないだろう!!」

激しい拳の応酬が繰り広げられる剛とブルーメの戦いは熾烈を極めていた。

「喰らえギャリック砲—— ツ!!」

「甘いわ!」

いともたやすく躲される。空振りした砲撃はそのまま崩れた瓦礫を吹き飛ばして突き進んでいってしまう。

「しかしアレが出た以上、オレたちに出番はもうない」

「何!？」

「さらばだ。せいぜい生き残るが良い。人間」

ブルーメが何かを取り出し、それを握りつぶした。

中から緑色の煙が出たと思えば、瞬く間にブルーメの姿は煙と共に消えていった。

「な!?! 逃げられたああああ!?!」

「モドリ玉かよ……」

一方の翼も同じように緑色の煙に紛れて逃げたラヴァンドに舌打ちしつつ、すぐさま剛の元へ向かった。

「剛先輩!」

「おう翼か!」

「今すぐあの怪物の所へ向かいましょう。あれはやばい」

「オーケー。すぐに行く」

翼の提案を受け入れ、二人はすぐさま怪物の——イフの元へと飛んで行った。

「なんてこと……」

そして、その惨状は奏と雅にも見えていた。

「全武装無力化……というか完全に破壊されたわね」

「ただの一掃攻撃……それでこの威力だなんて」

初撃でこの惨状。死んではいないながらも何か怪我をしているかもしれない。

「雅さん、ここはもう大丈夫です。貴方は、すぐにみんなの加勢に」
「分かったわ。奏も気を付けて」

重力を操り、それによって浮かんだ雅は飛んでいく。

その様子を見送り、奏は両手を合わせ、懇願した。

「どうか、創代様のご加護があらん事を……」

「ハア……ハア……ハア……」

「当時より確かに強くなっていたとは言え、所詮はこの程度か」

ジガより辛辣な言葉を受けつつ、地面にへたり込む辰巳は、修復されていく疲弊した体に鞭を打って立ち上がろうとする。

そこへ、ジガの槍の一撃が迫り、叩き込まれ、吹き飛ばされ、また倒される。

「みすみす立たせると思うか？」

「ぐ……」

圧倒的な力の差に、辰巳は歯噛みする。このジガという男。あまりにも圧倒的な実力を有しているのは確かだ。

少なくとも、辰巳では敵わない。

「もはや、お前に俺を倒す事は出来ない。そのまま倒れていれば、命だけは助けてやろう。だが覚悟しろ。立ち上がったその瞬間、貴様の首を跳ね、その三百年の人生に終止符を打ってやろう」

確かに、いくら辰巳とて、首を切断されれば絶命してしまう。

そう、辰巳の唯一の弱点は、脳だ。

心臓をつぶされようが腕がみげようが脚を切断されようが何事もなかったかのように再生する辰巳の体だが、しかし唯一、脳だけは修復されない。

何せ、人体、というか生物において、決して失ってはならない器官なのだ。

それがなくなれば、すぐさま辰巳は絶命してしまう。

どれほどの再生能力を持っていようと、そこだけはどうやっても無理なのだ。

しかし、それでも辰巳は立ち上がろうとする。

まだ死ねないのだ。

今を生きる園子ゆすこと春信はるのぶの為に、そして、今の勇者たちを導いていく為に、生きなければならぬのだ。

それだけではない。

ひなたが生きていた。

だけど、記憶が無い。ならば、その記憶を取り戻すまで、死んでなんていられない。

だから、立つのだ。立って勝ち、勝って生きなければならないのだ。

「立ったな」

しっかりと、二本の足で大地を踏みしめる。

「ならば、覚悟しろ」

ほぼ一瞬、辰巳ですら反応できない速度で、ジガは辰巳の首に、その槍の刃の切っ先を迫らせていた。

その一撃は、瞬き一つにすら満たない短い時間で繰り出された一撃

だ。

だから、ジガの刃は、辰巳の首に、なんの抵抗もなく突き刺さり――

そして弾かれた。

「!?」

その、一撃で槍が弾かれ、たたらを踏むジガ。

そして、ジガは、目の前に降り立った、新たな乱入者を認めた。

「……無事ですか？ 師匠」

漆黒の装束を纏い、藁草履で地面を踏みしめる、その男は――

「……春信か」

――歴代勇者最強の称号を持つ、三好春信だった。

「大丈夫!?!」

ふっと安心してしまい、倒れかけた辰巳を支える夏凜。

「夏凜、丁寧に扱え。その人は俺の師であり、俺たちよりも三百歳は年上の御方だ。粗相をした暁には貴様の首を刎ねる」

「怖つ!?! て、師? え? この人が? あ、えつと妹の夏凜です。兄がいつもお世話になっています」

「いや、気にするな……それよりも春信。何故ここに……」

「師匠が危ない目にあっていると、参上した次第でございますが、それにしても……随分と若返りましたね。見間違えました」

「それで俺だと分かるお前も十分凄いなと思うが……春信ツ!!」

辰巳の声が届く前に、春信の背後からジガが槍を振るってきた。

その神速の一撃を、春信は何も見ずに弾き飛ばした。

「ツ!?!」

「……俺は今、師匠と話しをしている。邪魔をするな」

「ひえっ……」

ドスの効いた声に、夏凜は思わず短い悲鳴を上げた。

一方のジガは、自分の槍を見た後、春信の方を見て、感心したように声をあげた。

「見事だ。今を受け流すとは、貴様かなりの使い手か。少なくとも、その男よりも遙かに上だな。だが、武器がお前の動きについていけないようだ」

気付けば春信の持つ刀は刃こぼれを起こしていた。

「兄貴ッ!!」

「ぬう……」

これには流石の春信も難しい顔になる。

「時間をやろう」

ジガはおもむろに夏凜を指さす。

「その女は貴様の妹だな。聞いたぞ、勇者システムは血統に起因して継承されると……その女が使う端末は、お前が使っていたものと同じだな」

「……それがどうした?」

「それを使え。使わなくてもいいが、その代わりに、お前の寿命がさらに短くなるだけだ」

ジガの提案。それはまさに自分の首を絞めている事と同じ事なのではないのか。

そう疑問に思った夏凜ではあったが、肩を貸している辰巳が春信に言った。

「奴はこれまで戦ってきた奴らとは格が違う。少なくとも、勇者システムなしでまともに太刀打ちできる相手ではない……決めるのはお前だ」

その問いに、春信は、しばし沈黙した。

「……夏凜ッ!!」

しかし、春信は叫んだ。

「お前の勇者をよこせッ!!」

変身を解除し、スーツ姿へと戻った春信は、その手に持つ刀を夏凜に向かって投げた。

「ええ……ええ!受け取って!!」

夏凜も、春信の意思をくみ取り、変身を解除、勇者システムを搭載した端末を春信に向かって投げた。

それを受け取った春信は、ジガを見た。

「……起動しろ。それぐらに時間は待ってやる」

「……」

春信は、すぐさまアプリを起動した。

赤い閃光が迸り、春信の姿を、変えていく。

それは、さながら武士のような有様だった。

赤い袴と、赤い小袖を着込み、背中に、見るも巨大な大剣を背負う。

想起するはマリーゴールド。

それは悪を挫き、生命の輝きを示し、変わらぬ愛情と、亡き友との

信頼を示す。

別れの悲しみを誰よりも理解し、絶望を知り、もう二度と、その悲しみを与えないという誓いの意味を持つ。

太陽神の伝説を纏う、その花は、まさしく春信に与えられるべき花だろう。

「……よく見ておけ、夏凜」

「え……」

「あれが、『勇者』三好春信だ」

目の前に立つ、兄の姿は、確かに、勇ましくもあり、そして、寂しさもあつた。

だけど、だからこそ、彼は、勇者たりえる。

春信は背中の大剣を引き抜いた。鞘はなく、代わりに長い包帯に纏われていたその刃に鏢はなく、柄もなく、ただその刃の部分のみの巨大な剣だった。

「師匠^{せんせい}たちは、あの怪物をお願いいたします。俺はコイツを」

「分かった。行くぞ」

「え、ええ」

夏凜は、春信が使っていた刀の機能を開放して、身に纏う。

「……」

しかし、すぐにはいかず、兄の後ろ姿を心配そうに見て――

「……頑張った」

短く、そう告げて、夏凜は辰巳とともに、あの怪物の方へ飛んで行った。

「……頑張った、か」

そう呟いた春信の前に、おそらくこの戦いの最大の敵となりうる男が立っている。

「始めるぞ」

「ああ、いつでも来い」

巨大な大剣を両手でもち、春信はジガを睨みつける。

しばしの沈黙の後、二人は激突した。

「ふふ、アハハハハハッ!!」

気付けばヒュアツインテはこらえきれず笑い声をあげていた。

「何が可笑しいの……!?!」

しかし、園子の怒号が、轟く。しかしヒュアツインテは、笑いを抑えきれない。

「ふふ、何が、ですって……?この光景を見てまだ分からないのですか?貴方たちの築き上げたものが、たった一度の攻撃によって全て消し飛んだのです。これを笑わずしてどうしろっていうんですか!?!ふふ、アハハハハ!!」

「ツ……!!」

あまりにも、変り果てた讃州の惨状を見て、園子は胸が締め付けられるような思いになった。

ここには、勇者部として大切な思い出がいっぱい詰まっているのだ。

それを、こんないともたやすく破壊されて、それを笑われたなんて、黙っていられる訳が無い。

槍を握る手に、力がさらに込められる。

「——貴方はああああ!!」

園子の操る刃がヒュアツインテを襲う。しかし、その全てがヒュアツインテが操る剣に弾かれる。

「さて、イフが来た以上は私に出番はもうありませんね。今日はここでお暇させてもらいます」

「誰が逃がすって言った」

鎖がどこからともなく飛んでくる。しかしそれすら防がれる。

「無駄です。貴方の攻撃は届かない」

「それはどうだろうなツ!!」

千景が操る鎖が唸る。

「ツ!?!」

ヒュアツインテの足元に仕掛けられていた鎖が飛び出し、それがヒュアツインテの体を打ち据えようとする。

さらに、剣の防御の合間を縫って、水、弾丸、矢などが一気に飛来してくる。

「もうなりふり構ってられないんでな。どこに逃げようと、鎖の檻がアンタを逃がさない。そして、アンタはこの攻撃を防ぎきる事は出来ない!」

鎖は、彼女の剣を全て封じている。

もはや、ヒュアツインテに、全方位からの攻撃を防ぐ手段はない。

(当たる・・・!!)

あんな怪物が出てきた以上、もう、ヒュアツインテの——ひなたの体の事を気にはしてられない。

体内にある彼女たちの協力によって、文字の分割し、同時使用するこの荒業で、一気に仕留めるのだ。

直撃する———そう思った時、

「———『時^{ツク}が動く頃^{クワ}には全て^{スベ}が終^{オハ}わつて^ルいた』」

次の瞬間、ヒュアツインテの姿は、全ての鎖が断ち切られるのと同じ時に消えていた。

「な・・・!?!」

突然の事に、千景の思考が停止する。

「時間が無かったので、貴方の元には辿り着けませんでしたが、お陰でこの剣だけは取り戻させてもらいました」

いつの間にか、ヒュアツインテの手には、一振りの剣が握られていた。

「……おい、待て。その剣は……」

彼女が、それを天上に向かって掲げた時、園子もその剣に、顔を強張らせた。

「嘘……それは……!」

ヒュアツインテの口角が吊り上がる。

「——『咆えよ、我が愛する者の黄昏の大剣』」

次の瞬間、黄昏の咆哮が、崩れた讃州の街を駆け抜けた。

「何よこれ……」

突然の巨大な敵の来襲によって、幸奈たちは陸に降り立っていた。

実は幸奈達はあのミリオンレーザーの射程にいたのだが、その時はどうにかホエール・バーテックスたちと、弘が展開できるだけの楯をもって防いでお陰で大事には至らなかつたが、それでも一発でも直撃していたらと思うと、背筋が凍るような思いだった。

そして、彼女らは、街の惨状を見て茫然としていた。

「そんな……街が、こんな、あつけなく……」

破壊され、炎上する街を、彼女たちはただ眺める事しかできない。

しかし、そんな時間すら与えてくれないように、彼女たちから横にある瓦礫が吹き飛んだ。距離は、百メートル。

「何!?!」

「あれは……」

見れば、そこから真つ白い体をした四足歩行のバーテックスが、浮遊する巨大な武装をした海路と凄まじい撃ち合いを繰り返していた。

「海路君……!?!」

「……今は立ち止まっている時じゃない。彼の手助けをするぞ！」
街の惨状は、ひとまず置いておく。今は、目の前の事を片付けるのだ。

佐奈の指示に従い、彼女たちは、海路の元へ走っていく。

各々が、動きだす。

しかし、怪物はまたしても動きだす。

また、屈んだかと思ったら、体の各部が発光した。

その突き出た口を開き、その口に光が収束する。

「——まずい」

それを見た奏の血の気が一気に失せた。

『クラッシュ・ビーム』

次の瞬間、全てを破壊するレーザービームが街を抜き抜け、山を穿ち、そしてそのまま薙ぎ払われる。

全てが溶解し、赤く焼け爛れる。

「奏!!」

それを見た雅は、思わずその渦中にあつた奏の事を叫んだ。

御神刀の力によって強化された視力で、奏の事を探せば、その焼け

爛れた岩石、いや、溶けて溶岩となった山の中、なぜか一部分だけ焼けていない場所があった。

そこに奏はいた。怪我もなく、無事なようだ。

「良かった・・・」

それに思わず安堵して、ついで雅は、すぐさま、怪物に鋭い視線を向けた。

「よくも彼女を——ッ!!」

扇を振るえば、彼女の左右に巨大な重力の塊が展開される。

全てを吸い込み、消滅させるブラックホールを、直線状にぶつ放す、彼女の最強の必殺技。

その名は——

「二連『超重力砲』ッ!!——消し飛ばへ!!」

全てを飲み込み、消滅させる重力の嵐が、怪物に——イフに叩き込まれる。それも二本、交錯するかのようになり、その体を貫く。それだけにとどまらず、その周囲の肉すら吸収して、消滅させていく。

「どうだ・・・!!」

絶対的破壊、修復する事は敵わない、消滅の一撃。

彼女自身、禁じ手として封じてきたこの必殺技を、容赦もせず放てるのなら、万々歳も良い所だ。

そう、普通なら、これで終わるはずなのだ。

上半身のほとんどを削られ、下半身すらその原型をとどめていない、その状態において、もはや生命活動は不可能なはずなのだ。

だが、雅は知らない。

その怪物が、ブラックホールすら喰う化け物だという事を。

変化は、すぐに起きた。

消滅していた部分の傷口が急激に膨らみ、膨張したかと思ったら、それはすぐに形を成し、やがては、元の形へと再生したのだ。

その、あまりにも速い再生に、雅は、思わず止まってしまった。

「う・・・そ・・・」

絞りだすかのように呟いた言葉を掻き消すように、イフは、次の行

動に出ていた。

手が変形し、手首から二本の角のようなものが飛び出したかと思うと、その間で電流が発生。やがてそれは一つの球体を生み出し、その手を空中にいる雅に向けられた。

そして次の瞬間——それが直線状に解き放たれた。

「え——」

何かを呟く声すら掻き消して、雅は、その光に飲み込まれた——

「う……そだろ……」

「雅姉の、『超重力砲』を……」

体のほとんどを消し飛ばされたはずなのに、一瞬で回復し、そしてすぐさま学習したかのように、雅と同じ『超重力砲』を撃ち返した。その、たった数十秒の間で行われた一連の動作に、信也たちは、絶句するほかなかった。

「……!?! 雅さん……雅さんはどうなったんですか!?!」

「雅姉……雅姉!!」

白露が叫ぶ。

『……大丈夫』

すると突如として右耳から声が聞こえた。

「! 雅姉! 良かった、生きてた……!!」

『ええ、どうにか……樹、だっけ……? その子に助けられたわ……』
放心しているのか、あまりにも力のない言動に、流星の三人も心配になる。

「怪我はないんだな?」

『ええ、五体満足。丁度、冬樹もいたから、落下の際の傷も回復してもらった。だけど……あれは反則でしょ……』

雅がいわんとしている事は分かる。

あの怪物は、あまりにも規格外だ。一挙手一投足全てが何かの破壊につながる。あの化け物は、本当に、あまりにも異常だ。

正直、倒せるかどうかも怪しい。

『手は、限られるわ。すぐに皆で合流しましょう』

「まさか・・・あれをやるつもりか？」

「で、でも、あれは、優ちゃんに一番負担のかかる技で・・・」

「やりましょう」

優の、力強い声が場に響く。

「どうせここでくすぶっていても、時間の無駄です。今は一刻も早く集まって、あの技を使いましょう。あの——」

「——『空前絶後・画竜点睛』を」

アンミリテッド・エンディング

「・・・ああ、分かった」

瓦礫の山の上に寝転がり、そう通信をうけた千景は、通信を切る。

「何かあったの？」

「集合して、俺たちの最大の一撃でアイツをぶっ飛ばす」

横で座り込む園子の質問に、そう簡潔に説明した千景。

どうにか、あの砲撃を躲して、こうして五体満足でいられたが、その代わり、ヒュアツインテには逃げられてしまった。

「くそ・・・辰巳さんのバルムンクなんて反則だろ・・・」

「あれはバルムンクじゃない」

「は？」

「偽物だよ」

「・・・」

いじけた子供のように、そう言う園子に溜息をつきつつ、立ち上がる千景。

「とにかく、俺は行くからな」

「あ、待って、私も行く」

集合場所へ、急いで向かう千景と園子。

（もしこれが失敗に終わったら、奴は同じ奴をなんのデメリットもなく撃ち返せる事になる。あれは、技そのものを再現するんじゃないやなく、威力と性質と効果だけを真似するだけ。そこに代償デメリットは存在しない。さらに、その技をいつでも撃てるように体を最適化するからなお厄介。どうあがいても、奴を一撃で消し飛ばさない限り、奴を倒す手段はない・・・!!）

藁にも縋らなければ、奴には勝てない。とにかく、今自分たちが放てる最大の攻撃で、奴を倒すしかない。

その為には――

突如としてイフの体に何かが直撃する。

「!?!」

そちらに視線を向けてみれば――

「あの馬鹿・・・!!」

「ダメか」

スペシウム光線を叩き込んでみたものの、聞いている様子が無い。まるで効いていないのだ。

それどころか、奴の体中から同じスペシウム光線が無制限に放たれる。

「く、この程度の攻撃じゃ、掠り傷にもならないっていうのか!?!」

「フアーイーナールー……」

「!?」

「フアラアアアアツシユウウウウウ!!」

眩い光と共に、巨大な光線がイフに叩き込まれる。

しかし、その一撃は体を傷つけはしたが一瞬で返され、イフの口から同じだけ返される。

「うおあ!?くそッ!ベジータ最強の技すらも吸収するかこの野郎が!!」

「どうか真似ですね。どの技使っても効果が無い……しかも攻撃した瞬間、その攻撃がそのまま返ってくる」

「ちまちまやつても意味がねえな……ん?」

宙を舞う翼と剛、その姿を認めたイフが次に取った行動は、手を、剣の形に変形させる事だった。

そして、その巨大さに反した恐ろしいまでの速度で、その刃を振るってきた。

「うおおおおお!?」

「ッ!?」

それを間一髪で避ける二人。

「なんだよあの動き!?!」

「空気抵抗とかそういうのを完全に無視して振るってきた……しかも上手い、何か、剣術の使い手にでも斬られたか!?!」

出鱈目に見えて、その全てが一撃必殺の一撃。

それらを間一髪で避け続ける翼と剛。

しかし、それでも限界はやってくる。

ついにイフの剣が翼をとらえる。

「ッ!?!」

「翼ア!!」

吹き飛ばされる翼。しかし、ぎりぎりの所で『無限大剣』メビウムフレードを発動させて防いだようだ。

「危なかった……」

下手をすれば下半身と上半身が真っ二つにされている所だった。

続けてイフは剛をとらえる。

「そう何度も上手くいくと思うな！喰らえ！気円斬ッ!!」

手を真上に掲げて、円盤のような気の塊を作り出して、それを投げる。その一撃はその刃の付け根に直撃し、スツパリをくれて空高く飛んでいく。そして、その刃は焦土と化した街に落ち、地面深くに突き刺さる。

「どうだこの野郎!!」

「剛先輩、まずい!!」

「は?」

また、イフに変化が起こる。

体中に何か、とげのようなものが出現し、その先から円盤状の気が発動される。

「……やべ」

「逃げろおおおおおお!!」

無数の気円斬が、二人を襲う。

「何やってんだアイツら……」

「急ぎましょう!!」

「……いや」

その様子は、辰巳と夏凜の目にも映っていた。

そして、今無数の気円斬に襲われている翼たちを見て、唐突に辰巳は立ち止まって、背中の大剣を引き抜く。

「ここから撃つ」

黄昏色の光が剣から放たれ、それがやがて天高く立ち上る。

溢れ出る力の奔流が、辰巳の持つ剣から溢れ出て、そして辰巳は、それを空に向かって解き放った。

「——咆えろ『怒り狂う邪竜の咆哮』」

凄まじい激流が解き放たれ、それが、翼たちとイフの間に駆け抜け、

イフが放った気円斬を全て消し飛ばす。

「・・・すつごお」

「それでも気休めだ。次が来る。急ぐぞ！」

「あ、はいー」

剣を背中の鞘に叩き込み、走り出す辰巳と夏凜。背後からは、凄まじい戦闘音が響くが、気にしていられない。

(今は、あの怪物をどうにかする事が先決だ)

なりふり構わず、彼らは走り抜ける。

やがて、救導者たちは集合した。

「悪い、遅れた！」

「あ、千景さん」

「大丈夫だ。俺たちも今来た所」

「それで・・・そちらは確か・・・」

「乃木園子っていいます」

千景、優、信也、雅、冬樹、白露、真武郎、海路の他に、園子、風、樹の三人もいた。

「そういえば海路、あのキルル・バーテックスはどうしたの？」

「幸奈たちに押し付けてきた。とりあえず懇切丁寧に説明してきたぞ」

「あ、そう・・・」

海路の返答に呆れつつ、彼らはイフを見上げた。

イフの前には、翼と剛がどうにか応戦しており、地上からは、芽吹たち防人部隊が援護しようとしていた。しかし、それでも焼石に水のように、効いている様子はない。むしろ、こちらの攻撃の全てが奴の力となってしまっている。

「とりあえず、やるしかないな」

「やるって何をよっ」

風が、聞いてくる。

「風先輩たちはここで見ててください」

千景はそれだけを告げて、イフの方を見た。

「……やるぞ」

『応』

そして彼らは、その御神刀に秘められた力を開放した。

「『真解』——」

『剛蹴脚』

『炎帝之蹴馬』
えんていのしゅうば
みなそのものこぶ

『水誠刀』

『水底之武士』

『重華扇』

『重皇無尽』
じゅうおうむじん

『爆撃槍』

『終局爆破槍』
しゅうきよくはくはそう

『虎之威』

『月下之白虎』
げつかのしろとら

『射墮填』

『超武装絶対射無双』
ちようぶそうぜつしやむそう

『虚像布』

『呪装滅布』
じゆそうめつぶ

『天鎖刈』

『滅砲・解業罪乃鎖刀之弾影』
めつぱう かいごうつみのくさりがたなのたまかけ

全員が、己の御神刀に秘められた第二の力を開放し、そこに立った。

基本的に、『真解』は『強化型』の方が多い。だが、ごくまれに『一撃型』の真解があり、真武郎の『終局爆破槍』と千景の『滅砲・解業罪乃鎖刀之弾影』がそれにあたる。

信也の装束は赤く燃えるような赤に変わり、炎を纏う。

冬樹の装束はそのんだら羽織を水へと変えて、その下にある軽装へと装束を変える。

雅の装束は、どこぞの女帝のような赤い鮮血の振袖を着込み、扇を掲げる。

真武郎の装束は、上半身の服が消し飛び、その手に持つ槍も、一回り大きくなる。

白露の装束は、その服を全て消滅させて、体中を白い虎柄の毛皮が覆っていた。目も、猫のような目となっている。

海路の装束は、その体にありとあらゆる銃器や重火器を身に纏い、

まさしく完全武装という相貌になった。

優の装束は、それ以前に体がやや成長し、ジャケットが消え、その体中に黒い包帯を巻くような姿となる。

千景の装束は、『天竺葵』を想起させる赤い装束と、『沈丁花』を想起させる刀を携えていた。

「収束せよ、我は地獄の業火を纏う者——」

「我は剣を極めし者、故に我はこの世の理を打ち破らん——」

「刮目せよ。これが皇たる我が力、万物を縛る力を操る、我が力を——」

「標的確認、方位角固定——我は全てに終局を与え、塵一つ残さない——」

「月下に咆える虎は空を見上げる、その爪は万物を引き裂き、万象を切り払う——」

「標的を視認、標準を固定、全武装、発射用意——」

「過ぎ去りし過去をもって、我は征こう。この剣は未来を紡ぎ、過去を語り継ぐ、勇気の剣——」

彼らは、一斉に、己が最大の一撃を解き放った。

「『魔纏絶炎砲』 ツ!!!」

「『绝技・無明三段突き』 ツ!!!」

「『皇帝・超重力砲』 ツ!!!」

「『終焉の一撃』 ツ!!!」

「『咆えよ、山の神虎よ』 ツ!!!」

「『全弾全力放射』 ツ!!!」

「『過去は過ぎ去り、それでも未来はやってくる』 ツ!!!」

悪魔がくべる地獄の業火が、

飛翔する全てを貫く三撃同時の刺突が、

全てを飲み込み消滅させる重力の咆哮が、

そこから一帯全てを更地に帰る終焉の一撃が、

全てを引き裂く虎の爪が、
ありとあらゆる破壊の暴力が、
辛い過去によって放つ、未来への一撃が、

全て、イフに向かって突き進んでいく。

それらが、飛翔する最中で一つに纏まり、強大な一撃となつてイフに迫る。

しかし、その全てを消し飛ばしかねない一撃の前に、一人の少女が躍り出た。

優だ。

その小さな体で、強大に膨れ上がったエネルギーの塊の前に、何故彼女は躍り出たのか。

「全ての呪いは私の前で全て跳ね返る。それに千差万別例外なく、呪い如きで他人を苦しめるぐらいなら自分が苦しめ——」

右手で手刀を作り、それを体の左側に構える。

「——『呪詛返し』^{フルカウンター} ツ!!!」

そして、その強大なエネルギーの塊を、数倍にして弾き返した。

数倍になったそのエネルギーは、さらに巨大となり、救導者たちの元へと戻っていく。

「千景ッ!!」

「おう」

しかし、彼らは動じない。すぐさま、千景は優に巻き付けた鎖を一気に引き戻す。

引っ張られた優はすぐさま彼らの元へ戻っていく。強大なエネルギーとなったその砲撃は、なおも彼らに迫る。

「——当代救導者、究極奥義——!!」

そして、優はまた構えた。

「——『空前絶後・画竜点睛』 ツ!!!」

さらに、倍返し。

優の『呪詛返し』の特性は倍返し。弾いた技を何倍かにする事が出来るのだ。その最大は三十倍。最初の詠唱によって三十倍の『呪詛返し』で他救導者の必殺技を弾き、そして千景によってその三十倍となった必殺技を、即席で出来る最大の五倍返しでさらに弾き飛ばす。ただでさえ街そのものを滅亡させる事が出来そうな威力となつている必殺技の合わせ技を、さらに三十倍と五倍にする。

その積は、三十倍×五倍＝百五十倍。

惑星一つ消し飛ばす事が可能な一撃が、今、イフに迫る——ツ!!

「いけええええええッ!!」

信也、優、冬樹、白露が叫ぶ。

星殺しと化したその砲撃は、まさしく画竜点睛、即ち、締めといエンディングう名に相応しい。

その砲撃が、イフに直撃する。その一撃は、等しくイフの全細胞を吹き飛ばし、海を掻き消し、神樹の結界さえも貫いて、宇宙を駆け抜けた。

そして、後には——何も残らなかった。

そこにイフはなく、ただ抉れ、モーゼの十戒のように割れた海しかなかった。その海底も、大きく削れている。

救導者の皆は、すぐにこと切れたかのように膝から崩れ落ち、全員、息を上げていた。

「や……やった……?」

そう呟く白露。

それに答える者はおらず、しかし、その返答として、沈黙のみがその場を支配した。

もう、イフは、出てこない。あの、無敵に見えたあの怪物は、跡形もなく消し飛んだ。

「……やったんだ」

「うん……もう、いない」

復活する事はない。あれは、八人の必殺技の概念を複雑に絡み合わせて、さらには純粋な威力でも理論上は惑星を破壊する事の出来る一

撃だ。

あれで、生きているなんて、あり得ない。

これで、復活なんてすれば、今度こそ絶望する。

「はは、終わった……」

「どうにか、倒せたか」

「やったわね」

どうにか、あの怪物を倒せた。もう二度と会いたくないのが正直な所。

彼らは、あの怪物に勝った。

「やった、やりましたよ、千景さん……」

優が、千景にふらふらになりながらも歩み寄る。

しかし——千景だけはまだ険しいままだった。

「……千景さん」

「……悪い皆」

勝ったと、そう、思っていた。

「……まだ、生きてる」

同じことを、二人、言った。

次の瞬間、イフの咆哮が轟いた。

『——ツツツ?!?!』

背筋が凍る、血の気が失せる、全身の筋肉が硬直する、脳が委縮する、内臓が収縮する、心臓が跳ねる、胸が締め付けられる、その、恐怖を示すありとあらゆる反応が、一度に起きた。

気付けば、目の前の海に、イフは立っていた。

その体を最適化するかのように変形させて、完全に再生して、そこ

に立っていた。

「……う、そ……だろ……」

「そんな……な……」

あの、自分たちの、最大の技を凌がれた。どんな事があっても防ぐ事の出来ない攻撃を、奴は、凌いでしまったのだ。

「あそこまでやって……まだ……」

絶望が、広がる。

「もう……ダメ……戦えない」

諦めが、支配する。

「こんな所で……」

もう、彼らに、成す術なんてない。

「イフはどんな事があっても必ず復活する。例え吹き飛ばされ塵になろうとも、決して死ぬ事はないんですよ」

神樹の作る壁の上で、ヒュアツインテが呟く。

「そして、イフは、受けた刺激全てを同じように打ち返す事が出来る——」

そして、忘れていた。

イフは、全ての刺激を、真似して打ち返す事が出来るという事を。

イフの腹部の一部が発光します。

それは、エネルギーの収束——惑星をも破壊する、絶対破壊の一撃。

「まさか——ッ!?!」

「アレを打ち返すつもりか!?!」

逃げようと立ち上がろうとする。しかし、先ほどのイフ復活の衝撃が抜けずに、足に力が入らない。

逃げられない——ッ!!

放たれる、星殺しの一撃。

それが讚州の街に激突する寸前——突如として出現した防壁に、星殺しの一撃は、上へと逸らされた。

『!?!』

街へは直撃せず、遙か後方の空へと、それは消えていった。

『——皆さん、無事ですか!?!』

「奏さんか。全員無事です」

『良かった……先ほど、創代様の力でどうにか逸らす事には成功しました。ですが、二度目はありません』

見ればわかる。障壁に『熱量遮断』『衝撃遮断』などの文字が見えた。だが、創代の力をもつてしても、あれを防ぐ事は出来ず、逸らす事しかできなかったのだろう。

そして、あの一撃によって、防壁はすでにボロボロ、二度目を受け止めきれぬ保証はどこにもない。

「あの一撃を喰らって肉体が最適化されてるから、もう通用しないだろうな……他の勇者たちを集めるっていうのも考えられるが、時間が圧倒的に足りない……」

すでに、イフは次の砲撃の準備に入っている。二度目は、先ほども言った通り、耐える事は出来ない。あの砲撃がここに叩き込まれてなにもかもが消し飛んでしまう。

しかし、もうここにいる救導者たちは戦意を喪失しかけている。

あれほどの攻撃をしても、復活したあの化け物に対する対抗策が見つからないのだ。

もう、成す術は無い——

たった一人を、犠牲する手以外は——

「……」

『使うのね』

郡が、話しかけてくる。

いつの間にか、自分の左手を見ていた。

『わかっているのよね・・・それを使えば、もう・・・』

「分かっている。分かっているからこそ、やらなくちゃいけないんだ」

元々、長くはない命。来年の春を迎えられない命なのだ。

だったら、今ここで、その全てを自らの力として、燃やし尽くしても、なんの問題もない。

千景は、彼らの方を見た。

「ありがとう。ここまで戦ってくれて」

その場にいた者たちが、千景を見た。

「今まで楽しかった。もう、残す事は何もない」

「・・・千景さん、まさか」

優が、千景がこれから何をするのかを理解したかのように声を上げる。

「ああ——『神奪』を使う」

神奪——それはかつて、郡千景を破滅させ、そして三百年前の災害を引き起こした力。

神を対象に力を奪い、その力を振るう事の出来る、神を冒瀆する行為そのものの、忌むべき、『神殺し』の力。

「ダメです・・・ダメですよ!!」

優は、千景に縋りつく。

「ダメです、そんなのダメです・・・!こんな、こんな事で、私は嫌です・・・!貴方一人が犠牲になる必要なんて・・・!」

「じゃあどうする?あの怪物を倒せる方法が他にあるのか?もうこれしか手がないんだ」

千景は、諭すように言う。しかし、それでも優には到底受け入れられなかった。

「でも、他の誰かが、どうか・・・」

「それまで、待っていられると思うか?」

「でも、でもお・・・!!」

駄々っ子のように泣き喚く優。

「やだあ・・・千景さんがいなくなるなんてやだあ・・・!!」

今、翼や剛たちが、必死にイフを足止めしようとしているが、それ

でも焼石に水にしかならないだろう。

もう、これ以上時間を無駄にしてられない。

そう思い、千景はしがみつくと優を鎖で引き離し、縛り付けようとした瞬間、

「分かった」

「!?!」

信也が、優を引き離した。

「信也さん!?!」

「信也……」

「もう、俺たちには何も出来ねえ。だから頼んだぞ、千景」

信也は、優を引きずって立ち去っていく。

「離して……離してください……!?!お願いです……このままじゃ、千景さんが……」

「いい加減にしろッ!!」

「ッ!?!」

信也の怒号が、優を黙らせる。

「……いいか優、男がな、何かを心の中で決めちゃったら、もう子供の癩癩で止まるもんじゃねえんだよ……」

そんな信也を見て、千景も背中を向けつつ、背中越しに彼に言った。

「……涙は、子供^{ガキ}が出来て、結婚する時に残しておけよ」

それを最後に、千景は、笑うのをやめた。

そして、左手を空へと掲げる。

『……いいんですね?』

杏が、聞いてくる。

「ああ」

『もう、友達にはあえねえぞ』

球子が、警告する。

「分かってる」

『部の皆にも、会えなくなるわよ』

歌野が、心配する。

「承知の上だ」

『そう……なら何も言わないわ』

最後に、郡が諦めたかのように呟いた。

『……後悔は残すな』

「……ああ」

最後の言葉に、千景は、鎖を四方八方に放った。

その鎖は、崩れた街の上空を飛翔していき、やがて地面に向かって落ちて——勇者に突き刺さった。

「な!?!」

初めに、園子と風、樹。

「これは……!?!」

しかし、それに痛みは感じない。突き刺さっているというよりは、中に錨を下ろしたかのような感覚。

次に、夏凜と辰巳。

「ぐう!?!」

「うあ!?!」

防人部隊と合流し、イフを相手にどうかしようとしていた所で背中に突き刺さった。

「何!?!」

「これは、鎖!?!」

「うわああああ!?!まだ敵がいるんだああああ!」

騒然とする場。

「くッ!!」

その鎖をすぐに断とうとする明日香。しかし——

『待て』

「ッ!?!」

突如として、体が動かなくなる。

「明日香!?!どうしたの?」

そんな明日香に芽吹が駆け寄る。

「わ、分からねえ、体が……」

まるで、自分よりも高位の存在に威圧されたかのように、全身が委縮していた。

『それを斬るな。でなければ、お前たちに勝利はない』

「ぐ・・・なん、なんだ・・・!?!」

頭の中に響いた声に、まるで逆らえない。

明日香は、そのまま動けずに、その場に立ち尽くした。

次に、翼と剛。

「ぐツ!?!」

「がツ!?!」

突然つきささった鎖によって、地面に叩き落とされる二人。

「ぐう・・・なんだこれ・・・!?!」

「分からない・・・でも、痛みは感じない・・・?」

腕に突き刺さった鎖をみて、翼は、その鎖が伸びる方向に目を向けた。

次に美森と、銀。

「これ・・・は・・・!?!」

突然突き刺さった鎖に足を取られて転んでしまった美森は、その鎖を見た。

そして、その鎖には、不思議と見覚えがあった。

「あの人の・・・」

鎖の伸びる方向へ、美森は、空を見上げた。

そして、友奈。

「・・・——くん?」

外殻が僅かに残ったそのわずかな部分に突き刺さった鎖を、ただ虚ろに眺める友奈。

激しく錯綜する刃と刃の衝突の最中に突き刺さった鎖に、春信は混乱を隠せない。

「これは・・・!?!」

「なんだ、それは・・・？」

どうやら、ジガは何も知らない。しかし、不思議と痛みを感じなかった。そして、鎖が伸びる先を、ただ茫然と見上げた。

「——全勇者との接続を確認」

『接続連鎖』。鎖によって相手と自分を繋ぐ、あるいは複数の人間を繋ぎ合わせる技。

その、全ての大本である一本の鎖を、千景は左手で持つ。

「・・・『神奪』発動」

そして、一瞬、躊躇つてから、神奪の力を開放した。

そして力が、流れ込んできた。

「ぐううううう!？」

一気に力が抜ける感覚が体中を支配し、体を弛緩させてへたり込ませる。

「こ・・・れ・・・は・・・!？」

それは、全ての勇者に一齐に起きた。

力が鎖によって吸いだされるかのように、どんどん力が抜けていく・・・かと思つたが、そうではなかった。

「つう・・・俺たちの体を中継点に、神樹の力を奪っているのか!？」

そう、勇者たちを中継地点として神樹にアクセス、そしてそこにあるデータを無理矢理抽出、そして自らの体に流し込んでいるのだ。

「何考えてんだ・・・この鎖の野郎は・・・!？」

「とにかく、早く切らないと・・・!!」

メビウムブレードを発動させて、その鎖を断ち切ろうとする翼。

しかしその寸前——

『大切なんだろ！だったら自分の事情なんかより、あいつを優先しろッ!』

唐突に、誰かの声が頭の中で再生された。

「な．．．!?!」

そして、自分の記憶の中にあつた、何もなかった。認識すらしていなかった空白の部分から唐突に、記憶が呼び出される。

「あ．．．ああああああ!!」

夏凜が絶叫する。

「三好様!」

「夏凜!」

涙を流し、頭を抱えてうずくまる。

「そん．．．な．．．なんで．．．なんでよお．．．!!」

信じられない事が、彼女の事なんて関係ないともいうように置き続ける。

「なんで．．．アイツの事を忘れてたの．．．!!」

『そうなんだよ。ほんと、優しいよお前のお兄さんは』

「う．．．ああ．．．ああああああああ．．．!!」

美森は、泣き叫んでいた。

『どうして、どうしてなの．．．どうして、今更．．．!!』

『——お前はここで待ってろ』

『いやお前、これ取られた時かなり動揺してただろ?』

『これぐらいの事はさせてくれよ。他でもない。お前の為にさ』

『どうして、千景君の事を、思い出すの．．．!!』

神樹から流出していく情報は、神樹が奪っていた記憶も一緒になっていた。それが、勇者たちの空白を埋め、やがては神樹が作っていた誰にも気付かれる事の無い、世界の穴を埋めていった。

そして――

「――精霊の憑インストロル依を開始・・・完了――」
奪ったのは、三体の精霊。

一つは力の権化。

一つは空の覇者。

一つは妖の達人。

それらを、全て、一つの体に押し込める。

「全ての精霊の憑インストロル依の完了を確認。全て正常。異常は確認できず――

――

『――あらあら、懐かしい匂いがすると思ったら、貴方だったのねえ』

『三百年前は世話になったわね』

『あまりからかうな。しかし、凄まじい精神力だ』

『まあ、この人はいわゆる異常ですからね』

『ふん。まあ、『今』の友奈よりはマシか』

『久しぶりね。さあ、ここから反撃といきましょうかッ!!』

「――『玉藻の前』『大天狗』『酒吞童子』、憑依、および、完全同調フルレソナンスを完了」

全てを強奪せしめし鬼の王、天空を支配せしめし天狗の長、そして、すべてを騙し嘘を真実とする究極の妖。

それら、日本三大妖怪たちを同時に降ろしたその姿は、まさしく化け物。

人の原型を保ちつつ、その身を、三体の異なる肉体で構成した、その姿は――

「——『絶景・人外妖ノ極』」

ゼツケイ ヒトノミアラズ

どれもが、神に匹敵する力をもって、千景は、飛ぶ。

不道千景消滅まで、残り、三十分——

仮令、この身尽きるまで

漆黒の翼をはばたかせて、千景は飛んだ。出し惜しみせずに、戦闘機でいう所のアフターバーナーの仕組みで炎を推進力に、イフに突貫していく。

そして――

「ここから出ていけええええええ!!」

純粹に、鬼の拳で顔を殴り飛ばした。

(このまま――!!)

そのまま懐に潜り込んで入れ替え気味にもう一方の拳でイフを殴る。その衝撃はすさまじく、一撃で巨大なイフを大きく下がらせた。

「あああああああああッ!!」

そこから、なりふり構わずイフを殴り続ける。イフは反撃の間もなぐどんどん下げられる。しかし――

「ぐう!!」

突如として千景が殴り続けていた場所からとてつもない衝撃波が叩きつけられた。それは、千景が殴り続けた事によってイフの体を循環していた拳の衝撃波。それが千景が殴っていた場所から逆に放ったのだ。それによって距離を取らされる。そこへ、イフのミリオンレーザーが飛んでい来る。

「舐めるなああああああ!!」

それに対して、千景は反物質による迎撃を敢行。無数に作り出した反物質の球体を、放たれた枝分かれするレーザー全てに叩きつける。

「風遁――」

天狗が持つ風を操る神通力と、妖狐が使う妖術の合わせ技による、暴嵐の槍が放たれる。

「――『魔風激槍』ッ!!」

それがイフに直撃し、さらに下がらせる。

当然、その風の一撃を受けたイフは、すぐさま体を最適化させて反撃に出る。

同じ威力の魔風激槍が飛んでくる。しかし――

「人を呪わば穴二つ——」

その手に鎌を構えて、大きく振りかぶる。

『呪詛返し』ツ!!」

妖狐も呪いを操るゆえに、呪詛を返す事など容易い事——いや、その倍率は、優のを超えて、おおよそ百五十倍。その威力の風の槍が、イフに叩きつけられ、さらに弾き返す際に手を加えたために、その風は絡みつくようにイフに纏わりつき、そのままイフを——壁の外に追い出した。

灼熱の大地と煉獄の地獄が支配する神樹の外。

そこはおおよそ人が住めることは出来そうにない世界。

神々によって奪われた、人の世界。

イフに知性はなく、何も考えず受けた刺激を返す。

「来いよ、パクリ野郎……」

しかしその反撃は当たらず、そこにいるのは一人の人間。否、人間と呼ぶべきかどうかの相貌だった。

髪は絹のように長く、金色の麦のように輝いていて、しかし翼は地に落ちたかのように黒い。さらにその手にはその美しい顔には似合わないほどの剛腕の手甲がつけられており、そしてその傍には見るも巨大な鎌が浮遊している。

「今ここで、テメエを殺す」

「ぐ……くう……」

力を奪われた事で満開が解かれてしまい、さらに記憶が戻ったショックで立ち直れずにいる翼。

「ちか……げ……くん……」

視界の先では、穴の空いた壁の向こうで、いくつもの閃光と爆発音が聞こえてくる。

「おい……翼……生きてるか……?」

「人聞きの悪い事を……ええ、生きてますよ……」

「よし……それなら、行くぞ……」

剛の言葉に頷き、立ち上がろうとする翼。

もう一度満開して、千景の援護をしにいくつもりなのだろう。

だが――

「悪いな」

突如として後ろから声が聞こえた。

「そうはいかない」

次の瞬間、視界が急速に変わり、すぐに誰かに担がれている事を認識する。

「な!？」

「どつちみち、お前らじゃ勝てねえよ」

それは、黒いコートを着た、自分たちと同じくらいの少年だった。

その少年は、そのまま千景の戦う戦場から背を向けて、走り出す。

「は、離してくれ!どこに連れていくのかしらないけど、今は……」

「千景の援護に行くってんなら、悪いがそれはさせねえって奴だ。今は傷を治す事に専念しろ」

「おまつ……千景の事を知って……」

「ああ、知ってるよ……お前らが知ってる時より、前のアイツをな」

その意味を知る事はなく、二人は、とある地点に連れ戻される。

そこは、防人部隊と辰巳、夏凜のいる場所だった。

さらに、他の勇者部の面々や、襲撃者たちの姿もあった。

「冬樹、二人追加だ」

「勘弁、して、結構、キツ、い」

乱暴に落とされ、視界を開けた先では、怪我をした者たちの治療をしている二人の少女がいた。

一方はやや水色の髪をした少女。もう一方は黒髪で褐色気味な肌をした、まだ小学生にも思える少女だった。

「剛、翼、あんたたちも来たのね……」

「風……」

声が出た方向を見れば、かなりやつれた顔でこちらにやってきた風

の姿があつた。

「・・・ひでえ顔だな」

「そうね・・・たぶん、アレ見たからかも・・・」

「そうか・・・」

風は剛の隣に座った。

「・・・どうして、忘れてたんだろ、アイツの事」

その声に、感情は無かった。いや、感情を押し殺しているかのよう
に、抑揚が無かった。

剛は、無言で風の頭をなでる。

一方の翼は、美森を探していた。

奴らの襲撃の後だ。死んではいけないだろう。だが、それでも、千景
の事を思い出した彼女は、かなりのダメージを負っているはずなの
だ。

何故なら、彼らは勇者部の仕事上では、パートナーの関係だったの
だから。

そして、見つけた。

膝を抱えて、うずくまっている彼女の姿を。

「須美ちゃん・・・」

どう、声をかければ良いのかわからなかった。

自分も忘れていた。彼女も忘れていた。だが、その衝撃の大きさ
は、明らかにあちらの方が大きい。

あんな形で思い出したのだ。そして、あまりにも突然過ぎた。

処理が、追いついていないのだろう。

でも、だからこそ、放つてはおけない。

そつと歩み寄り、翼は、美森の横に座った。

「・・・須美ちゃん」

返事は、無い。

いや、すぐには返ってこなかっただけだった。

しばし待つたために視線を切った所で、美森が話しかけてきた。

「・・・翼くん」

「・・・」

「翼君、私、今まで、君の事忘れてたよね」

「・・・そうだね」

「忘れたら、相手がどんな気持ちになるか、わかるよね・・・？」
「・・・うん」

「もう二度と、誰かにそんな思いはさせない・・・そう、決めてた。決めてたのに・・・」

すすり泣く声が、聞こえた。

「わたし・・・ちかげくんのこと・・・わすれてた・・・!!」

それつきり、彼女の泣き声だけが響いた。

その涙を、止める事が出来ない事に、翼は、ぎりり、と歯を食いしばった。

ふと、そこへまた一人、誰かがやってきた。

「全員、いるでしょうか・・・？」

「まだよ。一人は向こうで。もう一人はまだ探してる」

見れば、そこにはもの見事な十二単を着た女性と、巫女服を着た年上の少女が立っていた。

「足柄辰巳さんおられますでしょうか？」

「足柄なら俺だが」

少女の言葉に、辰巳が立ち上がって答える。

「私は、千景君がここに来る前にやっていた御役目、教導者の導き手として、そして、我が街の主神、創代様に使える巫女である、神代奏と申します」

礼儀正しく答える彼女に、しかしどこか、彼女の漂わせる雰囲気はどこか、恐ろしかった。

何か、怒りを必死に隠しているかのような、そんな、雰囲気だった。「そうか・・・こちらの自己紹介は省かせてもらうが、治療をしてくれている事には感謝している。だが、貴方方は、その為に俺たちを集めた訳ではないのだろうか」

「はい。私たちが貴方たちに・・・特に、勇者部の皆様にご報告する事があるために、ここに参上した次第でございます」

奏と名乗った少女は、一度周囲を見渡すと、やがて、良く通る声で、

話し始めた。

「単刀直入に言いましたよう。千景君の命は・・・諦めてください」
突然の、死亡宣告だった。

「おおおおおおおッッ!!」

迫る剣を鬼の腕力と鎌で弾き飛ばす。

しかしそこへすかさず紫色の火球が無数に迫る。それが近づくと突然変色して、広範囲の爆発を巻き起こす。

その爆発の中で、斥力を発生させてその衝撃全てを防ぎきり、なおかつ反撃として斥力の槍をイフに叩きつけた。

だが、それすら一瞬で再生し、体中から触手のようなものを伸ばして、それを縛るのではなく突き刺そうと迫らせる。

「無駄だ」

しかし、その触手は千景に触れる前に腐食していき、朽ちていく。
「殺生石・・・が、あんまり効果はないか」

朽ちた触手はそのままイフに到達したが、それに対応したのかそれ以上腐食していく事はなかった。

それを見て、千景は鎌を構えて、イフを睨みつける。

「だったら、手当たり次第に叩き込むだけだ」

無数の元素や原子、法則や物質を作り出して、千景は、どこまでも回復し、成長し続ける怪物に向かっていく。

「諦めろって・・・どういう事よ!?!」

夏凜の叫びが、響いた。

しかし、奏は動じずに話を続けた。

「順を追って説明致します。まず、事の始まりは数ヶ月前のあの決戦の日、勇者部と襲撃者たちがぶつかった日、千景君は、敵の大將であるアモルの撃破に成功しました。しかし、問題は、その後に起きました——」

千景は、アモルを倒した後、神樹にその体を貫かれた。その時、神樹は、彼の体中の機能を奪い、そして、その体に祟りをかけた。

神樹とは、地の神と天の神が、異世界の神々の襲撃によつて、自らが集まつて現世に現れた存在。

いわば、神々の集合体だ。

その力を、千景は神奪によつて奪い続け、とうとう神樹を怒らせてしまったのだ。

そして、その体に、天の神からは祟りを受け、地の神からは体の機能全てを奪われた。

体の機能が奪われたのならまだいい。創代によつてまた作つてもらえればいい。

だが、問題なのは祟りの方だ。

その祟りとは、時間がたつにつれて、体中が焼けるような激痛に苛まれていき、そして、最終的にその祟りが体中に完全に回つた時、その体は灰となって消失し、その魂は、生と死の間で、永遠に閉じ込められるという事だった。

何も見えず、何も感じず、幸福になる事も、不幸になる事もなく、ただそこに、ただの魂としてあり続けるだけの存在へと下がる。

そんな、完全な死よりもつらい、絶対なる孤独となる罰。

それが、千景に与えられた、祟りなのだ。

本来なら、その完全な発動は来年の三月末、四月になる直前の日なのだ。

だが、その前に敵がやってきた。

千景は、自ら皆を守るために、戦いの場に出て、誰にも干渉せず、ただ戦つて勝つただけだったはずなのだ。

だが、そこでいくつもの誤算が生じた。

勇者部の自室搜索、防人の襲撃、そして、勇者部が、自分の事を調べているという事。

忘れられていたはずなのに、まさか自分のことを搜索されてるなんて思いもよらず、しかし彼は一切を干渉せずにより過ごす気でした。

だけど、あのイフの登場で、全ての算段が水泡に帰した。

あの、どんな攻撃を受けても再生し、撃ち返してくるあのチート性は、もはや、チートを殺せる反則技で倒すしかない。

だから、千景は、あの切り札を使ったのだ。

それがあの、『絶景・人外妖ノ極』ヒトノミニアラズだ。

そして、その使用の代償として、崇りの侵攻を速めてしまった――

「あの状態の千景君は、いわば、死亡率100%のドーピングをしている状態であります故、勝つても死、負けても死、途中で解除しても死です。何があるうと、彼はもう、死の運命を逃れる事は出来ません」
しばしの沈黙が、場を支配する。

「……それで」

しかし、翼が口を開く。

「もう、千景君は助からないから、ここで指をくわえてみてろって言うのか？」

「その通りです」

次の瞬間、壁が粉碎される。

「ふざけんな」

翼が、裏拳気味に殴ったのだ。

「もし崇りがあるってしているなら、それを解除すればいいだけの話だろ？なんでそれをしないんだ？」

「奪われた寿命は、元には戻りませんから」

「……寿命？」

「ええ。彼は、すでに来年の春までしか生きられない程の寿命しか

残っていません。文字通り、寿命を奪われたのですから」

想定の外をいく返事に、思わず翼は黙ってしまふ。

「だ、だけど、それは祟りを解除できれば、二元に戻るんじゃない？」
「いいえ、神樹がかけたのはあくまで苦しめる祟りだけ。寿命はすでに、神樹によつて供物としてささげられています。ですので、もう二度と元に戻る事はない」

『——ツツ!?!』

寿命が、奪われた？なんだそれは。それじゃあ、例えば祟りを解除しても。

「そして、今、彼は全ての寿命を投げ出しました。猶予は十五分。すでに七分が経過しているため、残りは八分といったところでございましょう」

悔しくなってくる。

まさか、ここに来て自分たちの無力さをたたきつける事になるとは。

だが、そうであっても、せめて最後。手伝いに——

「どうせ行つても、今の彼の足手纏いになるだけですよ?」

こちらの内心を見抜いたのか、奏は容赦なく言い放つ。

「そんなの、やってみなくちゃ分からないだろう?」

睨みつけて、反論する。他の勇者も、同じ気持ちのようだ。

「いいえ、分かりますよ。貴方たちは、自分の攻撃を防ぐ手段はあるのですか?」

「え……」

「自分の全力の斬撃を受け止める覚悟は?自分の最後の力を振り絞つた力を撃ち返す体力は?自分の最大の一撃を防ぐ手段は?ないでしょう?何せ、貴方たちはそれだけの力を持っていない。そして、どんな生物であっても、自分の攻撃を防ぐ手段を持っていません。彼を見てください」

千景は、撃ち返された攻撃全てを、自分の力によつて防ぎ、返している。

「彼は、自らの攻撃を自らの力で防いでおります。貴方たちに、あの激

しい撃ちあいの中で、あれほどの事が出来ますか?」

「それは・・・」

「例えそうであっても、アイツは勇者部の部員よ。友達なの。だから、助けに行くわ」

答えられない翼の代わりに、風が答えた。

「それに、一発でもぶん殴らないとこっちの気が済まないのよ。一言だけでも言ってくれば、手伝ってあげたのに、それを全部一人で背負い込むんじゃないわよ。あの馬鹿は・・・!」

拳を握りしめて、風は奏に向かって言い放つ。

「だから、貴方がどういおうと私たちは行くわ。アイツはアタシたちの仲間よ。仲間なら、助けにいくのが道理でしょ」

そう、言い切った時、

「——ガキが」

底冷えた声が、届いた。

その、暗く、ドロドロな、真つ黒な冷えた怒りの感情が、その口から漏れ出たのだ。

それは、目の前に立つ、巫女服の少女だった。

「もう一度言うわよ——お前らが言った所で足手纏いになって時間切れになって負ける。どんな事があっても、お前らがどれほど努力しようとも、お前たちは、千景君の足枷となるだけと言ってるのよ。何をしようが、満開使おうが、お前たちが束になった所で、奴には勝てない。それがなぜ分からないの」

風どころか、辰巳さえも震えあがるような、凍てついた怒りの感情を迸らせる奏。

そして、その感情に呼応するかのように、彼らの前に、三人、立ち塞がった。

真武郎、雅、そして、信也。

彼らも、軽蔑するような目で、勇者部を見ていた。

「コイツら・・・」

今ここで殺し合いを始めてもおかしくない程の殺気が充満していた。

その気になれば、治療に専念している彼女たちも加勢して、すぐさまこちらを殺しはしないまでも骨の一本や二本は持つていかれるかもしれない。

「分かったのなら。そこで大人しくして。お願いだから」

また発した奏の声は、先ほどよりは和らいでいた。

だが、その声に含まれる怒りと軽蔑の感情は、消えていなかった。

「分かった」

「・・・!? 師匠!?」

そして、それを辰巳は承諾した。

「どうして・・・」

「逆に聞くが、園子。お前は奴を倒す事は出来るのか?」

「それは・・・」

「もう、何もかもが遅い。俺たちが今頃動いた所で、もう、誰にもあの戦いを止める事は出来ない——」

辰巳は、遙か彼方の空で戦う千景の姿を見た。

「——俺でもな」

その姿に、一人の少女を重ねて。

「ああああああああああああああああああああああああああああ!!!」

絶叫と共に、撃ち返された攻撃全てを迎撃する。さらには、空から降り注いでくる爆弾やナパーム、レーザーや砲弾を岩の弾丸で全て迎撃し、さらにイフが振るう無数の斬撃を鎌と飛翔能力で全て躲す。

そして、懐に飛び込んだ所で、その顔面に鬼の拳の上に風の一撃を込めて殴り飛ばす。

それだけでは終わらず、雷を落として細胞から分解しにかかるも、それすら効かず、逆に相手に放電させてしまう。

しかし、それに対して絶縁する空間を生成して防ぎ、その最中で

レーザーを放って、イフの体中を貫きまくる。だが、それすら回復される。

手はないはず。どれほどやっても無駄なのに、千景はそれでも攻撃の手を緩めない。

火球を生成。巨大な半径五メートルはありそうな程巨大なものを、叩きつける。

水を生成。高圧で首を切断する。

風を圧縮する。圧縮して圧縮して、限界まで圧縮した所で体の中に叩き込んで体内で炸裂させる。

土をかき集めて、巨大な隕石を作って叩き落した。

それでも奴は死なない。

それどころかどんどん強くなっていく。

(まだか・・・まだなのか・・・!!!)

崇りが体を蝕んでいく。体中が焼かれるように痛い。意識が持っていかれそうだ。視界が黒に塗り潰されている。まだだ。まだ、戦わなければ。

『アレ』を撃たせるわけにはいかない。アレをもう一度撃たれば終わりだ。

だから、負けられない。

「負けられないんだ・・・ッ!!!」

絶叫をあげて、千景は鎌を振り上げて、その足を切り飛ばす。

上空からイフの掌が迫る。

しかしその横から風の拳が叩きつけられる。

翼が赤く燃え上がる。

天上を焼いた炎がイフを焼く。しかし、すぐさま再生してしまう。

全てを強奪する鬼の拳がイフの頭部を砕く。しかしすぐに再生してしまう。

しかし、どれほど攻撃しても、イフは決して倒れない。

『——そこはこうするべきなんじゃないかしら?』

頭の中で声が響く。

それと同時に、今生成していた炎が変化し、青く燃え上がる。そし

て、その青い炎は、明らかに赤い炎よりも高い威力でイフに叩き込まれた。

『ただ空気を入れただけよ。それだけで、あれほどの威力がでるの』

玉藻の前である。

『来るわよ』

翼を羽ばたかせて、上に飛ぶ。その下を先ほどの青い火炎が通過する。

『——次は斬撃だ。右斜め上に動け』

別の声が、響く。

その声に従って、右斜め上に避ける。すぐ横を、斜め気味に振り下ろされた刃が通過する。

『俺が指示をする。お前は指示に従って避け、お前のタイミングで攻撃すれば良い』

大天狗だ。

『——拳を握りしめて、ケツの穴を引き締めて、腕を引き絞れ』

また、別の声。

『そして、今だ。殴れ』

言われた通り、全力でイフの顔面を殴り飛ばす。骨が砕け、気持ちの良い感触と音が響いてイフは下がる。

『もうちよいタイミングは遅い方でいいぜ。その方が威力はもうちつと上がる』

三体を同時に完全同調しているからか、彼らの自我が、自分に話しかけてくる。

彼らがするサポートのお陰で、千景は、自らの力を最大限引き出す事が出来ていた。

それだけではない。

また、無数のレーザービームが襲い掛かる。

『——させるかああああ!!』

球子が防御壁を作りそれを防ぎ、

『ハイですー!』

杏が、鎌の柄を使ってイフを狙撃し、

『Very slowね!』

歌野が回避を促し、

『死ね』

郡が攻撃をする。

一つの体に、人の意識が五つ、人外の自我が三つ。計八つの人格が点在するこの状況で、彼は人の処理能力を超えた行動に出る事が出来ていた。

「おおおおおおおおッ!!」

襲い掛かる必殺の攻撃を、千景は全て躲しきって見せる。

鎌で斬り、風を叩きつけ、火炎で燃やし、雷を落とし、水で貫かせ、土を落とす。

持てる全ての手を使い、イフに、先ほど受けた星殺しの一撃を放たせないようにしていた。

「なるほど」

そして、その様子を壁の上にて、『第三の罪科』^{サード・シン}は傍観していた。

「わざと攻撃の手を休めない事であの大技を放たせないようにする・・・封殺する為に、あのような戦いをしているようですね」

「ハハハハ!!時間を稼いだところでイフを倒す事は叶わんと、まだ分からんようだな」

ブルームが、必死に戦う千景を嘲笑う。

「ま、その善戦ぶりは、素直に敬意を表してあげるよ」

ラヴァンドは、高速で飛び回る千景を見た。

「だけど、時間切れだ」

十五分、経過――

「が——!?!」

とうとう、千景に与えられた猶予が、消えた。

千景の動きが止まる。

倒しきれなかった。

そこへ、イフがその大口を開ける。そこに、光が収束する。

回避に移るべきだ。だが、翼が思うように動かない。

体中を襲う熱さが引いていき、意識も混濁していく。体の表面を駆け巡る紋様が、顔全体を覆う。

その間に、イフはすでに発射準備を整えて、それを千景に向けていた。

千景の背後には、崩れた街と、仲間たち。

「千景君!!」

美森が思わず叫ぶ。

「もう十五分経過したのか……!」

「そんな……」

動きの止まった千景を見て、そう、絶望する一同。

しかし、救導者の者たちだけは、冷静に、しかし、本当に辛そうにな表情で、千景の変化を見た。

「……始まる」

クラッシュ・ビームが放たれる。

全てを焼き尽くす、星殺しの一撃さえも上乘せされた、絶滅への一撃が、千景に向かって放たれる。

千景は、避けようとしなない。いや、避けられない——

そのまま、光が千景を飲み込もうとした、その時——

光が、拡散した。

それは、まるで何かの球体に弾かれ後ろに飛んでいく水のように、千景に直撃する事なく、後ろへと駆け抜けていく。

やがて、収まったその一撃を耐え切った千景の姿を見た時、ありとあらゆる者たちが絶句した。

一つに、髪が真っ白くなっていた。全ての色を失い、全てを失ったかのような事を象徴するかのようだった。

次に、目の色。茶色かった目が、赤く、血のように輝いていた。

上半身の装束も消滅し、その体中を、真っ黒い紋様が駆け巡っていて、背中の翼は、まるで深淵の闇のような色へと変色していて、そして、鬼の手甲も消え、その額に見るも立派な二本の角が生えていた。そのさらに上にも、真っ白な三角耳がある。

何から何まで異様で、全てが、彼らの知る千景ではないようだった。それは、希望と呼ぶには程遠く、化け物と呼ぶには相応しく、そして、事実彼は、人間をやめていた。

人としての寿命を失った事で得た、『死』のエネルギー。

それは、人の体を腐敗させ、白骨化させる、その者の生が終わった時に生み出されるエネルギー。それは無限に溢れ出し、どれほど抗おうとも逆らえない力。

この世において、最強にして最悪のエネルギー。

それが、『死』

「死する事で得られる、死のエネルギー。奴を倒すには、もはや、この力しかありません」

全ての生物に与えられる、回避不可能な結末にして真実。
かの妖狐が、逃げに逃げ、嘘を吐き続けた果てにこの世に唯一にし
て本物の真実を作り出した、その力。
全ての生にひとしく終わりを与え、そして死を生み出す、絶対絶命
の力。

それが、今の彼を動かす力。

「おおおおおおおおおおお———」

!!!

絶叫が迸り、千景は飛ぶ。

鎌を振りかぶり、翼を羽ばたかせて、イフに突っ込む。

ここに来て、イフは、初めて自分から攻撃した———ツ!!!

降りかかってきたのは、隕石。それも一つや二つなどではない。

無数———イフは重力を操って、隕石を呼び寄せたのだ。

しかし、千景はそれを意に介さず、力を行使する。

持ってきたのが物質であるなら、それを全て吸い込めばいい。

「重力展開———黒玉・消滅ツ!!」

重力を収束させて作り出した、全てを飲み込むブラックホールを生
み出し、それを使って全ての隕石を吸収、消滅させる。

それだけにとどまらず、突如として何も無い場所から岩の柱が出
現、それがイフの腹を打ち据える。

否、それは岩の柱などではなく———火薬の塊。

「爆ぜろ」

指を鳴らし、着火。ダイナマイトと呼ばれる、通常の爆弾より威力
のある爆弾が、イフの体内で爆発。

それだけにとどまらず、すかさず千景はイフの頭上に今度は何かの
丸い爆弾のようなものを出現させた。

それは、人類が作った最低最悪の、小さな孤島すらも吹き飛ばす、原
子の力———

原子爆弾だ。

それが炸裂し、全てを融解、消滅させる爆発が解き放たれる。さらに、ダメ押し。

ありとあらゆる属性で作った拳を展開。それを鬼の腕力で、原爆をもろに喰らったイフにマシンガンの如く叩きつけまくる。

何度も何度も殴られ、どんどん下がっていくイフ。

「あああああああああああああああああああああツツ!!」

千景の絶叫が迸り、無数の拳がイフへと叩きつけられていく。しかし、その無数の拳を受けてもなお、イフは死なず、何かが光ったかと思うと、極細の熱戦が千景の右肩を貫いた。

「ぐう・・・!?」

ぎりぎりの所で冷却したからよかったが、そのまま放置していたら、右肩が一瞬で溶けていた所だ。

『来るわよ!!』

見ればイフは左手を突き出して、その極細のレーザーを放とうとしていた。そして、あの速さからして、迎撃と回避は——不可能ツ

!!

『かむやたてひめ神屋楯比売』エツ!!』

かつて、球子が使っていた楯を投影し、それによって無数に襲い掛かってくるレーザーを全て防ぐ。

無制限に放たれる攻撃。それらを長く封じていられるのも時間の問題。

否、それ以前に、この体がもたなくなる。

死のエネルギーは、想像以上の速さで生成され、この体を朽ち果てさせようと急速に体中を駆け巡ろうとする。

そこまで、時間はかけていられない。

神屋楯比売を解除すると同時に、飛来してくるレーザーを躲して、飛び上がる。

「手加減はしない——影分身ツ!!」

実態ある分身をつくりだし、それら全てがそれぞれ別々の属性による攻撃を開始する。

その暴力の嵐にさらされたイフは、当然の如く反撃に出る。

ミリオンレーザーは勿論の事、ミサイル、ナパーム、クラッシュビームなど、ありとあらゆる攻撃方法を率いて分身たちの数をどんどん減らしていく。

しかし、それでも一向に減る気配がない。それは、回避や防御を担当している者たちがいるからもある。だが、それ以前に、その分身に無意識に与えられた、火傷をするかのような情熱が、消える事を拒んで、イフに攻撃し続けていた。

近接戦に出る者もいれば、拘束をしようとする者もいた。または遠距離から安全に攻撃する者たちもいて、その援護をする者もいて、何が何でも、イフをそこに留めるかのように、全力でイフを攻撃していた。

しかし、それも長くは続かない。

イフの体が、突如として赤く変色する。そして、イフの体から発せられる熱量も、毎秒毎にどんどん上昇していつている。

そして、体を丸めるような姿勢——熱は、変わらず上がり続け、赤く光り出した部分も、その光をどんどん強める。

それに、千景は気付いた。

（自爆——）

気付いた時にはもう遅く、イフは自らの体を爆発させた。

光が全てを包み込み、あたり一面を吹き飛ばす。

強力な再生能力。知性がないから例え脳が吹き飛ばうとも、その怪物はその事を覚えている事は無い。

だから、こういう事も平気でやるのだ。

そして、イフの周囲には何もいなかった。

全ての敵が消失し、もう、阻む者は誰もいない。

だから、イフは自分の頭の中にある命令に従う。

『人間を滅ぼせ』

ただそれだけの為に、イフは、考えられない頭で、人間のいる方向を見た。

そして、今度こそ、星殺しの一撃を、そこに叩き込もうとする。

もう、阻むものはいない。だから、力が溜まった瞬間、それを解き

放ち、人間を根絶やしにする。

ただ、それだけの為。自分に与えられた存在意義を全うするためだけに、その生物は、人間を――

「――咲き乱れるは紅い花、染め逝くは死した生命」

声が、聞こえた。

「――花は時と共に散り、それ故に世界は廻る」

だけど、気にしない。気にしたところで、無駄なのだ。

「――故にこれは世界の真実、我が唯一にして最後の真実」

だから、早くこれを撃たなくちや。

「――生きとし生ける全ての生命いのちに、それを逃れる術はなく」

早く、撃たなければ、

「——故に我等に弱さは許されない」

なんで、早く、なんだろう・・・？

「——咲き誇れ」

気付けば、それは空から降ってきた。

「——『終わらぬ命など無く、それでも世界は廻り続ける』」

紅い流星が、イフの体を貫いた。

「——終わりだ」

それは、あまりにも些細な、鎌の一撃だ。

その程度の一撃、イフには何の意味もなさない。

それが、ただの一撃なら。

『終わらぬ命など無く、それでも世界は廻り続ける』

それはこの世の理。全ての生命が逃れる事の出来ない、絶対的終着点。

故に、それから逃れる事は出来ず、何があろうとも回避する事などできない。

必然にして運命。定められた、絶対的な理。

だが、イフは完全なる生命。故にその理の輪には外れているはずなのだ。

だが、この技は、全ての命あるものに等しく死を与える。

この必殺技の本質は、『運命』。全ての生命のこれからの未来を断絶し、代わりに死の運命を与える。

それは、世界の理から外れた存在生命であつても例外ではなく、当たればすぐにその死の運命が体を蝕み、問答無用で対象を『死』に至らしめる。

死が、イフを襲う。

溢れ出る死のエネルギー。そのエネルギーに際限などなく、いくらでも溢れ出てくる。そして、それは時が立つにつれて、その溢れる量はどんどん増えていき、加速する。

それに対抗するように、イフの細胞が必死にイフの体を生き長らえさせようと躍起になって死んだ細胞を捨てて新しい細胞を生成し、回復させようとする。

しかし、いくら体のほとんどが消失しても再生するイフの細胞であつても、『死』のエネルギーには敵わず、どんどん体を蝕まれていく。やがて、イフが放とうとしていた星殺しの熱量は鳴りを潜めていき、どれほど力を入れても、また再点火される事はなかった。

すでに決定された運命には逆らえず、どれほど抗つても押し流されて、やがて、イフはその体から力を抜けさせて、地面に崩れ落ちる。

死が、イフの体を支配していく。

『終わらぬ命ガなど無く、ナそれでも世界は廻り続ける』が決まった時点で、すでに勝敗は決していた。

もう、イフは立ちあがる事は出来ない。

蘇生する事も不可能だ。すでに決められた運命は、イフを死に繋ぎ

止めて、決して復活は出来ないようにしていく。

意識が遠のいていく。

考える事の出来ない頭で、必死に体を動かそうとする。

しかし、それよりも、突然やってきた強烈な睡魔に襲われて、イフの意識は遠のいていく。

眠る機会は何度もあった。それも強制的に。

今回も同じだ。

だから、イフは気にしなかった。

完全なる生命体は、今来ているものがなんなのか理解できず、そのまま眠りにおちていった。

そして、イフは完全に沈黙——死亡した。

「……」

イフの死を確認した。

もう、戦う必要はない。

勝ったのだ。勝ったんだ。

勝ったのなら、戻ろう。ここにいる必要は、もうない。

しかし、その前に、鎌を持っていた手が、ぼろぼろと崩れていった。

「……アあ……そうか」

——身体が、塵と消えていく。

それもそうだろう。それほど、無茶をしでかしたのだ。

死んでもはや骸と化した躰で、本来、人が行ってはならない領域へ足を踏み入れて、痛覚の無いまま、時間を許すまま、躰が完全に壊れるまで、全ての感覚が狂っていくのにまかせて、戦い続けた代償がこれなのだろう。

だけど、不思議と後悔は無い。

伝える事は伝えた。

守る事は守れた。

戦える事は戦えた。

やれるだけの事は、やった。

もう、十分だ。

翼が消える。落下する。

その落下の中で、体がどんどん灰となり、空へと消えていく。

すでに両脚が消失していて、腕も、完全に消えていくのも時間の問題で、内臓すらも、おそらく塵となって崩れている事だろう。

このままいけば、体は本当に完全に塵となってきていくだろう。

恐怖は、無い。これから、深淵の闇へと落ちていくのに、怖くはなかった。

目のまえに、郡が、悲しそうにこちらを見ていた。

「そんな顔、しないでくれよ・・・」

もう、腕が無いから、その涙を拭う事は叶わない。

「これは・・・俺が望んだ事なんだからさ・・・貴方が悲しむ必要なんて・・・どこにもないんだよ・・・」

その言葉に、郡は、消えゆく千景の体を、霊体のまま抱きしめた。

温かいぬくもりが、体を満たす。

ああ、この暖かさ。これがあれば、もう、十分だ。十分なのだ。

だけど——ああ、だけど、最後に、一言だけ、彼女に伝えたい事が、あった。

「——好きだ。友奈」

その、声どころか音にすらならない声で、その言葉を告げた。

そして、不道千景は、二度と抜け出す事の出来ない、無限の闇に身を投じていった。

温かい、ぬくもりと共に――

不道千景――死亡。

不浄なるもの

「……千景の消滅を確認してきた」

戻ってきた真武郎の手には、白鞘の脇差が握られていた。

「そう……ですか……」

絞り出すような声を出して、奏は差し出されたそれを受け取った。

「回収、ご苦労様でした……おそらく、敵の最大戦力が倒された事で、敵は撤退を決めるでしょう……被害も、向こうの方が大きい筈ですので……」

「そうさせてもらおうわ」

そう言つて、真武郎は近場の瓦礫の横に座つて、背中を持たれかけさせた。

静寂が、その場を支配していた。

誰も、声をあげず、ただ一人の死の実感が湧かないまま、ただそこで、時の流れるままに――

しかし突如としてどこかの瓦礫が砕かれた。

見れば、そこで信也が瓦礫を蹴り碎いているのが見えた。

「……ちくしょう」

「信也君……」

必死に何かに耐えるように、歯を食いしばる信也を見て、心が締め付けられるような感覚を覚える幸奈。

こんな時に、何もできない事がとても悔しい。

大きく空けられた穴からは、幸いとしてバーテックスは流れ込んでこなかった。

それが、唯一の救いだろうか――

ふと、足音がした。

そちらを見れば――

「……友奈ちゃん？」

友奈が、そこに立っていた。しかし、その姿は元のものから大きくかけ離れていた。

体のほとんどが赤黒い皮膚となり、元の肌色の部分は、左手と顔の

一部を除いてほとんど剥がれているかのような状態だった。

「結城友奈か・・・しかし、あれは・・・」

人間、と呼ぶにはあまりにもかけ離れていた。形こそは人だ。だが、しかし、今見せている彼女の赤黒い皮膚は一体なんだ？

あれが、本当に人間の皮膚なのか。

「・・・千景君は？」

友奈は、静かに問いかけた。

その問いへの答えを、彼らは躊躇う。

果たして、彼女にその事を言ってもいいのだろうか。

「死にましたよ・・・」

しかし、答える者がいた。

「貴方が、無様に逃げていた間に・・・!!」

それは、まだ小学生である、優だった。

「貴方が、戦わずに逃げていた間に・・・千景さんは死にましたよ・・・

今更何しに来たんですか・・・全部終わった後で・・・!!」

彼女を糾弾するように、優は泣きながら言い切った。

「今更もう遅いんですよ。貴方が今来た所で、もう何も戻らないんで

すよ・・・死んだんですよ・・・千景さんはあ・・・!!」

優の糾弾する声が、その場に響く。

その、子供の癩癩のような言葉は、向けられた本人だけではなく、他

の者たちの心にも突き刺さる。

泣き喚く優の肩に、白露が手を置く。

「それぐらいにしてあげよう・・・」

「う・・・ううううう・・・!!!」

唸るような鳴き声。

「今言った通りだよ。千景は死んだ。だから、ここにはいない」

「・・・そっか」

友奈の顔に、感情はない。

「千景君・・・もう、いないんだ・・・」

『———そうだ。そして、貴様はいつまで自分を偽るつもりだ』

突然、声が聞こえた。

地鳴りがするような、重い、その声は、その場にいる者たちを震え上がらせた。

「な……ん……!?」

「これは……一体どこから……」

「ツ!?空をみてみる!?」

優理の言葉に、全員が海の方を空を見た。

そこには、機械仕掛けの巨大な何かが移っていた。

「——断罪神……マギアクルス……!!」

『!?』

奏の言葉に、その場にいた者たちに戦慄が走る。

「じゃあ、あれがすべての元凶か!?」

「ツ!?なんだって!?」

「じゃああれが敵の親玉って事かよ……!!」

一同は身構える。しかし、先ほどの千景が死んだショックでまだ完全な戦闘態勢に入っていない。

ただ、空に映るマギアクルスの姿は、どこか透き通っているような気がする。

『——『第三の罪科』、そして『最高司祭』よ。ただちに宮殿に帰還せよ』

しかし、次にマギアクルスが言った言葉は、自らが攻撃するでもなく、攻撃を命じるでもなく、『撤退』の一言だった。

「いいのですか?」

その言葉に、ヒュアツインテは質問した。

『どちらにしろ、奴の正体を暴く』

「そうですか。でしたら戻らせていただきますしよう」

「ハハハハ!!御身の命令とあらば仕方がない。ここで撤退するとしよう」

「やれやれ、やっと休めるよ」

その言葉のまま、三人はその姿を掻き消した。
そのまま戻ったのだろう。

「すまん」

もはや更地となった地面の上で、ジガが謝罪をする。

「我が主の命令だ。ここで撤退させてもらう」

その体にはしばしの傷が残っている。

「だが、いずれ貴様の本気を見せてもらおう。もし生き残れたのなら、再戦を楽しみにしておこう」

「なんだと・・・？」

春信が何かを言いかける前に、ジガは消えた。

「ツ!? 待て!・・・逃げられたか」

先ほどまでジガが立っていた場所を眺め、春信は背中に大剣を担いだ。

「しかし・・・生き残れたのなら、とはどういう意味だ・・・？」

春信は、それだけが気がかりだった――

そして、それはすぐにわかることとなる。

「正体を暴くって、どういう事だよ!」

剛の怒号が、空に映し出されたマギアクルスに向かって飛ぶ。

『貴様らが結城友奈と呼んでいる『怪物』の正体の事だ』

「どういう事だ・・・友奈ちゃんの正体って、一体なんなんだ!」

訳が分からない。奴は一体、何を言おうとしているのだ?

『人には感情がある、喜怒哀楽、正の感情と不の感情、慈愛と憎悪。感情は常に対となる感情が存在する。そして、人は常にその感情を周囲

にまき散らしている——』

感情は常に特定の誰かに向けられる。

意中の相手、どこかの知らない誰か、組織など、様々だ。

それは言葉となつて相手の精神、魂に届き、そして影響を及ぼす。

言葉には意思が宿り、感情も宿る。だから誰かの精神に影響を与えるのだ。

そしてそれは行動にも作用する。感情のこもる行動にも、誰かの精神に影響を及ぼす。

しかし、それは相手には完全にはつたわらない。

負の感情については特にだ。人は負の感情を拒絶する。そしてその感情は行き場を失い、漂い続ける。

溢れ出る負の感情。それらは自然と集まり、やがては自我を持ち、それ相応の感情を持ち始める。

怒り、悲しみ、憎しみ、苦しみ、憎悪、軽蔑、羨望、嫉妬、絶望、独占欲、背徳感——感情というものは様々だ。

それらが集まり、形を成した存在は、日に日にその感情をその身に受け続けた。

やがては怨念までその身に宿すようになった。

死してなお、人々を恨み続ける怨霊。それすらもソレは受け入れるようになった。

やがて、それは感情を持つようになった。

意識を、持ち始めた。

やがて、ソレは『人』に興味を持ち、近づき、数々のいたずらをした。

時に水びだしにさせ、時に物を壊し、時に畑を荒らし、時に川に落とすとした。

ただの遊びだった。

しかし、当の人間たちにはたまつたものではない。

人々はソレを恐れた。だから、名のある陰陽師や祓い屋などを雇つて、それらを退治しようとした。

だから、その怪物は逃げた。消えたくないという感情が、必死にそれを突き動かし、自分を消そうとするものから逃げ、時には反撃し、逃げて逃げ続けた。

やがて、ソレは思った。どうして人は自分を嫌うのだろう、と。ただ、遊んでいたかっただけだった。

そのの何がいけないのだろうか？

悲しみがうれしい、怒りが心地よい。ただそれだけだ。

なのにどうしてこんな事をされなくてはならないのだ。

可笑しい、可笑しい、可笑しい——それつきり、ソレは人とかかわるのをやめ、ただ常に流れ込み続ける負の感情を受け止め続けた。

それから、数百年の時間が過ぎた。

怪物は思った。

人間になりたいと——

『——それがソイツだ』

マジアクルスの言葉に彼らは茫然とした。

なんだそれは、あまりにも実感が無い。

「・・・例え、それが本当だとして、友奈ちゃんや僕らの仲間だという事には変わりはない。一体何が言いたいんだ？」

『六道翼、貴様は、ソイツがどうやって人間になったのか知っているか？』

知る訳が無い。いや、知った所で動揺なんて——

『奪ったのだ』

「は？」

『奪ったのだ。人間から、その体を』

「・・・は」

何を言っているんだ？奪った？人間から、体を？

「訳が分かんねえよ。もつとわかりやすく言えッ!!」

「奪った・・・体を・・・まさか・・・!?!」

剛の怒号の横で、奏だけは理解した。

「まさか・・・『結城友奈』という人格から体を奪ったの!?!」
『!?!』

その答えに、驚愕する者もいれば、まだ分からないという者がいた。
「え、えーつと、どういう事だ?」

「結城友奈は元から、俺たちのようにただの少女だ。それは分かるな? 明日香」

「え、ええ・・・ですがそれが一体どうかしたんですか辰巳師匠?」
「いいか、俺たちは、生まれてきた体に名前を与えられる。それは個人を特定するものであり、誰にも奪えるものでもない。だけど、奴の言う、負の感情の集合体は、結城友奈という少女の体を奪った。つまり、乗っ取りだ」

「え!?!じゃあイツの中身って・・・」

「ああ、結城友奈本人じゃない」

場に、衝撃が走る。

まさか、まさか、結城友奈が、その体の中身が、友奈本人ではないのか。そんなこと。普通分かる訳が無い。

「馬鹿な!」

真向から反論したのは翼だった。

「今まで友奈ちゃんにそんな素振りはなかった! そんな言動もなかった! 負の感情の塊が友奈ちゃんの中にあるというのなら、少しでもそんな言動を取ったはずだ! 身も蓋もない事をいうな!」

『我は神だぞ。神が、それを見抜けなくてなんとする。それに、今、ソイツに起きている変化をどう説明する気だ』

「それは・・・」

反論が出来ない。確かに、今彼女に起きている変化を、説明する事は出来ない。

「だけど、それでも・・・」

「友奈ちゃんは、それでも誰かを傷つけるような事をしなかった! 悪意ある行動なんてしなかった! だから、彼女が負の感情の塊であるは

「ずがないんだ！」

そう、あの心優しい友奈が、そんな存在であるはずがない。

そんな事、会っていい筈がない。

それだと、今までの、何もかもの思い出が、嘘になってしまう。

こんな、千景を失った状況で、そんな事実を叩きつけられてしまえば――

「……友奈って、誰？」

ふと、予想外の所から声が聞こえた。

「友奈っていう人は、もうここにはいないよ？ここにいるのは、私という『不浄』しか、いないよ？」

「……何を言ってるんだ……友奈ちゃん」

そこには、無感情に微笑む、友奈の姿があった。

「あの人のお陰で、私、思い出せたんだ。自分が何者かで、自分は一体、どうして人間になりたかったのか」

外殻が、剥がれる。

「やつと。分かったんだよ……だから――」

――隠す必要なんて、もうないよね。

器が、はじけ飛ぶ。

真っ黒い、感情の嵐が友奈を中心に迸った。

それが収まれば、そこには、一人の黒いなが立っていた。

赤黒かった肌は暗い紫に染まり、髪は紅白く、長い髪は頭の後ろで結われて膝まで伸び、額には細い日本の角が伸びて、その服装は、黒い装束に身を包まれていた。それは、元の勇者装束とは色も形もかけ離れていて、着物のような装束を身に纏っていた。

その姿は、まさしく、『鬼』だった。

「この私が勇者に成れたのは、結城友奈の外殻があったからだよ。それがプロテクターとなって私を神樹様に探知されないようになっていた。元々の友奈ちゃんの体って、勇者適性がとっても高かったみた

いだから、ラッキーだね」

妖美に、彼女は笑っていた。

「でも、もう人の振りをする必要はなくなったんだ。ただね、この子の体を奪った時に記憶とか大体吹き飛んでたから忘れてたけど、これが、私なんだよ」

誰も、声を出せなかった。

子供のように、彼女は笑って。

「私は結城友奈じゃない。友奈っていう子の人間の皮を被った、ただの化け物だよ」

場が騒然となる。

あまりにも、突拍子もない事で、理解が追い付かない。

「何・・・言ってるのよ・・・」

そこへ、夏凜が、ひきつった笑みを浮かべてふらふらと友奈に歩み寄る。

「悪い冗談はやめなさいよ・・・そんな、嘘ついても、なんも良い事ないわよ・・・ねえ、友奈・・・？」

震える体を、必死に抑え込んで、夏凜は、友奈に話しかけた。

その言葉に、友奈は、ふっと笑って――

「『絶砲ぜつぱう』――」

拳を引き絞って――

「唯我独尊ゆいがどくそん」

砲撃した。

「ギャリック砲オオオオオオオオツ!!!」

「メビウムシュートオオオオオオオ!!!」

それに対抗するかのように、満開した翼と剛が同じ砲撃技で対抗。ぎりぎりの所で威力を相殺して事なきを得た。

しかし、何より衝撃的だったのは、友奈がその砲撃を殺すつもりで撃ってきた事だった。

「テ・・・メエ・・・なんのつもりだあああ!?!」

剛の怒号が轟く。

「何って、夏凜ちゃんを殺すつもりだったよ？」

「どうして、夏凜ちゃんを殺すなんて……」

「私は友奈じゃないよ」

また拳を引き絞る。

「今度はもう少し本気で撃ってあげるよ」

友奈の拳に、エネルギーが溜まり始める。

「やめて！」

しかし、そんな友奈の前に、美森が両手を広げて立ち塞がる。

「やめて友奈ちゃん！どうしてそんな事するの!?! どうして殺そうとするの!?! 夏凜ちゃんは……友達じゃなかったの……?」

涙がにじむ目で、友奈を見る美森。

その視線と言葉に、友奈は——

「だから、私は友奈じゃないんだよ？」

「それは——」

「それにさ——」

友奈が、美森にしか聞こえない声で、何かを呟いた。

そしてその直後に、『唯我独尊』を放った。

「須美ちゃん!!」

ぎりぎりの所で美森に浴びせられる筈だった砲撃を、翼が展開したバリアで防ぎ、その威力のまま後ろに吹き飛んで距離を取る。

「クソっ！まさかこんな事になるなんて!!」

「冗談じゃねえぞ!!」

まさしく予想外の展開。

友奈が敵に回るなど、誰が予想したのか。

「ふざけるな……」

ふと、優がそのように呟いた。

「千景さんが、守ろうとしてくれたのに……千景さんは、貴方が、好きだったのに……!!」

「ッ!?! 優ちゃんダメ!!」

『落ち着け！優!!』

いつの間にか真解を発動させて、優は、友奈に向かって突撃する。「なんで壊せるんだああああ!!」

飛び掛かり気味に友奈に殴りかかる優。しかしその拳は受け止められる。しかしそれでも優は攻撃をやめない。

「千景さんの想いを、気持ちをも、全部踏み躪って満足か!?それで心が満たされるのか!?そんな、そんな理由で守りたかったものを簡単に壊せるのか!？」

もはや冷静とは言い難い状態で、優は友奈に殴りかかっていた。

「嘘だろ……」

そして、友奈は、優の拳や手刀に存在する、『斬撃』を受けていなかった。

卓越した技術で、優のの攻撃全てをいなしていた。

「答えろおおおお!!」

左拳の攻撃を左手で抑え、右拳を優の腹に当てた。

「少し黙ってようか—— 『死拳・疑心暗鬼』」

『ツ!?やべえ!!』

虚像布に搭載されている、疑似人格『虚』が友奈の拳から感じた悪寒に、無理矢理彼女の纏う装束を操って、その拳から逃れようとする。

しかし——

「がはっ……」

口から大量の血を吐き出し、仰向けに倒れる優。

「優ッ!!」

「優ちゃん!？」

仲間が悲鳴を上げる。

「う……ふ……」

「あれ、完全には決まらなかったか」

拳は、掠った。

それで、この威力。

「まあ、このまま踏み砕けばいいよね」

「やめてええええ!!」

右足をあげた友奈に対して、幸奈がその頬に拳を叩き込む。

しかし、その一撃は寸前で止められていた。

「ッ!？」

「アハ、久しぶりだね、幸奈ちゃん。でも残念。届かなかったね」
「離れる幸奈ア!!」

いつの間にか幸奈の足元には、何らかの方陣が組まれていて――

「滅陣・暗箭傷人」
あんせんしょうじん

光の柱が幸奈を襲う。

「幸奈ああああ!!」

佐奈の叫びが響く。しかし――

「大丈夫だッ!!」

ぎりぎりの所で信也がかっさらって助けていた。

「あ、ありがとう信也君……」

「礼はあとにしろ。とにかく、今はアイツを……」

轟音が響く。

見れば、辰巳が友奈に向かって大剣を振り下ろしていた。

「今度は貴方が相手をしてくれるんだ」

「もうやめろ。これ以上やって一体なんになるんだ?」

「んー、世界が終わりやすくなる……かなっ?!」

「ッ!!」

天に向かって掲げた手刀が光を纏い、巨大な剣となる。

『魔剣・生離死別』

それが一気に辰巳に叩き込まれる。

「師匠ッ!？」
せんせい

粉塵が舞う中、横から辰巳が転がり出てくる。

「くそッ!なんて力だ!?!」

「アハハ、どうしたの皆あ?その程度なのかな?もっとかかかってきていいんだよ?」

友奈が、嘲笑う。

あまりにも、自分たちの知る彼女とはかけ離れたその行動と言動に、周囲は完全に動けないでいた。

それに友奈は、つまらなそうな顔をする。

絶望

想像を遥かに超える、緊急事態。

「つばさ……くん……?」

友奈の拳が、翼の鳩尾を貫き、そこから血が滴る。
その口から、血が吐き出される。

「おっと汚い」

その血を、友奈は拳を抜くと同時に躲した。その拳には、翼の真つ赤な血が塗られたくられていた。

そして、よろける翼を見て、友奈は笑う。

「翼君ならそう来ると思ったよ。だって、大切な者は身を挺してでも守りたいもんねー?」

「ぐ……がは……」

ついに片膝をつく翼。

「翼君っ!」

美森が、悲鳴をのように名前を呼び、翼に駆け寄る。

しかし、それよりも速く、友奈が翼を横へ蹴り飛ばす。

「がはッ!?!」

地面を転がっていく翼。

そんな翼を追い越して片足で踏みつける。しかも、その位置はさきほど友奈が穴をあけた部分だった。

「ぐああああ!?!」

「アハハ、いいよいいよ。でも違う。私が聞きたいのは悲鳴じゃないんだよ」

「そこをどけええええ!!」

すぐさま、剛の拳が友奈に迫る。

その一撃を躲すも、すかさず剛は追撃のラッシュを繰り出す。その全てを、友奈はいなししていく。

「テメエ!自分が今何をやってるのかわかってんのか!?!」

「分かっていますよ。その上でこうしているんです」

「ふざけんな！お前にとって、俺たちとの・・・勇者部との思い出は全部、下らねえものだったのか！あの笑顔は、全部嘘だったのか!?流した涙も、全て！」

「そんなわけないじゃないですか！」

突如として友奈から上げられる苦痛な声。

「私だって・・・私だって・・・」

うつむいて、悲痛そうな声をあげる友奈。その様子に、剛は思わず攻撃の手を止めてしまう。

懺悔するかのような、友奈の声。

しかし――

「――なあんちゃって」

動きの止まった剛の腹に、拳を突き立て、背中へと突き抜けさせる。

「ごは・・・!?!」

「アハ、こんな猿芝居に騙されるなんて、とんだあまちゃんですねえ」腕を引き抜き、風穴の空いた剛の腹から止めどない程の血が溢れ出る。

「ごおおおおおおううううう!!!」

風の悲鳴が響き渡る。

「騙し討ちしやがった・・・!?!」

「なんて事を・・・」

本来なら、絶対にありえない友奈の騙し討ちは、これ以上にならない程決まった。

そして、膝をついた剛を見下して、

「アハハハハハハ!!」

天に向かって、面白おかしく笑い声をあげた。

「無様ですねえせんぱあい！こんな嘘泣きで騙された気分はどうですかあ!?!ねえ、どんな気分なんですかあ!?!」

「て、てめえ・・・」

空けられた風穴はおおきく、すぐに止血しなければならぬほどの重症だ。

そして、そんな剛を嘲笑う友奈に対して、巨大な大剣が振り下ろさ

れる。

「友奈ああああああああああああああああ!!!」

風だ。

巨大化した剣の一撃が、友奈に振り落とされる。しかし――

「アハハ、そう、その感情を待ってたんですよ!」

友奈の二本の指の前に、悉く受け止められていた。

「~~~~ツ!?!」

「憎いでしょう?許せないでしょう?怒っているでしょう?その感情をもっと私に見せつけてください。叩きつけてください!ああ、貴方は、怒りに燃える姿が一番素晴らしい!!」

大剣を弾き飛ばし、一気に風に接近する。

「まずい――犬吠埼のカバーに入れツ!!」

辰巳がすぐさま怒鳴る。

ほぼ一瞬で距離を詰めた友奈を横から信也の蹴りが叩きつけられる。

腕でどうにか防御したものの、勢いまでを殺せず横に吹っ飛ぶ。そこへ弘が召喚した大地のような見るも巨大な大剣が振り下ろされる。

その一撃を紙一重で躲した友奈に対して、将真の岩の拳が叩きつけられる。

「アハ、まさか即興でここまで連携出来るなんてすごいね。でも、ダメだなあこれじゃあ」

しかし、岩の拳はあまりにも脆く砕かれ、巨大な大剣もへし折られる。

「馬鹿な!?!」

「なんと・・・!?!」

いともたやすく危機を突破した友奈は、笑いながら彼らに歩み寄る。

「ほら、もつと来てよ。私、まだまだ遊び足りないよ?」

「くそが・・・」

よろよろとしながらも、剛が立ち上がる。

「戦いを、ただの遊びと興じるなんて・・・そこまで落ちぶれたか・・・

!!

翼も、どうにか立ち上がる。

「待て二人とも！そんな体でどうやって……!?」

「今やらなきや、全員死ぬ……!」

「ここで意地見せなきや、千景に顔向けできねえだろうがツ!!」

開いた穴から血をばたばたと垂れ流し、二人は、友奈を睨みつける。

その視線を、友奈は妖しい笑みと共に迎え撃つ構えを取る。

「ダメよ翼君！そんな体で戦ったら……」

「ごめん須美ちゃん……でも、どちらにしろやらなくちゃ……」

「剛もよ！すぐに穴をふさがないと……」

「そうは言ってもよお……奴さんはそんなの許してくれなさそうだぜ？」

「アハハ、当然だよお？」

子供のように笑いながら、友奈は告げる。

「そうみすみすと逃す訳ないじゃーん、攻撃チャンス」

「友奈……あんた……!!」

「友奈ちゃん……」

残酷過ぎる言葉に、風は怒りをあらわにして、美森はやはり信じられないとでもいうかのような表情で、友奈を見た。

「もういい。もう黙れ……これ以上、君の口から、そんな言葉を聞きたくはない」

「ええー。もう少し話し合おうよ？」

「黙ってる、この……」

二人の絶叫が響き渡る。

「馬鹿野郎があああああああああああああああああ!!!」
「うおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!」

出力全開で、二人の拳が友奈に叩きつけられる。しかし、その一撃を友奈は両の掌を使って弾き飛ばす。そこから翼と剛の二人によるすさまじいラッシュが繰り出される。

常人が見れば見切れない程の速度で繰り出されるパンチやキックの連続、しかし、二人がかりでやっているのにも関わらず、友奈には

その一切が届いていなかった。

ふと友奈の拳が剛の顔面をとらえ、一瞬剛の動きを止めた。そこへすかさず翼の拳が飛んでくるも躲して掴み、体を回転させ、その反動で翼も一緒に回り、その回転を利用して地面に叩きつける。そして、その屈んだ状態から、友奈の拳が剛へと叩きつけられ、吹き飛ばす。そんな友奈の背後から、明日香が右の大剣を薙いだ。

「おっと」

「チッ！」

すでにブラックと化した明日香の攻撃を空中へ避ける事で躲す友奈。

「馬鹿め」

そこへ優理と防人部隊の銃剣持ちによる一斉射撃が敢行される。

「知ってたよ」

友奈が手を向けた。

『破弾・寸善尺魔』
すんぜんしやくま

「ッ!? 護楯隊っ！前へ!!」

友奈からの攻撃を察知した芽吹が指示して護楯隊を前に出させる。

しかし——

「ダメだよオ！逃げろおおおお!!」

「ッ!?!」

雀の叫びが炸裂し、次の瞬間、友奈の手から発射された弾丸は、楯を容易に貫通して防人部隊に襲い掛かる。

「な・・・!?!」

楯の強度を上回る威力の弾丸が、防人部隊を襲う。

しかし、誰かの命を奪う前に、巨大な大剣が彼らの前に掲げられる。風だ。

剣を巨大化させてそれを楯代わりになっているのだ。

「誰も殺せなかったな」

「テメエの相手は俺たちだろうがッ!!」

剛が、掌に集めた球—— 彼的に言えば、『気』の塊が友奈に向けられていた。

そして、自分の手を見た。

曲がりなりにも、友達を、この手にかけてしまった。

その事を実感するとともに、その手は震えていた。

「……友奈ちゃん……」

悔しがるように、翼は、拳を握りしめて、額に当てた。

「——今のは流石に焦ったよ」

顔をあげた。

粉塵が収まってきたあの場所に、一人の人影があった。

そこには、全くの無傷でどこか余裕そうな表情を浮かべる友奈の姿があった。

「でも、どうにか防げたからいいよね」

『拒絶・四面楚歌』

彼女の、最大の防御技。

「馬鹿……な……」

翼にとっても、本当に最後の力で放った一撃だ。それを、ああも容易く防がれるなど、思ってもみなかったのだ。

「うーん、流石に今ので戦意喪失しちゃったかな？」

「誰がするかッ!!」

上空から、雅の重力砲が降り注ぐ。

それに完全に飲み込まれる友奈。

「どうだ……!!」

「良かった」

片手を突き出す雅の腕を、その砲撃の中から伸びた手が掴んだ。

「まだ戦ってくれるんだね」

「——ッ!?!」

子供のような笑顔を向けられて、背筋が凍る雅。

無茶苦茶だ。触れたもの全てを飲み込むこの重力砲の中を突き進んでくるなど、常軌を逸していると思えない。

否、今の彼女は人間の理から外れた存在。こんな無茶も、無茶の内に入らないのだ。

腕を掴まれた事で重力砲が終わる。

「重力展開——」
グラヴィティオン

しかし、すぐさまもう片方の手を突き出し、すぐさま友奈を重力の鎖で拘束する。

「——『牢獄・不返』かえらず ツ!!」

自分の腕ごと重力の檻に閉じ込める。

「やりなさいッ!!」

「絶技——」

そこへ冬樹が飛び込む。

「——三段突キッ!!」

ほぼ同時に三撃の突きを叩き込む渾身の一撃が友奈の心臓へと叩きつけられる——しかし——

「『絶砲・唯我独尊』」

それよりも速く、牢獄の中から砲撃。

「あ・・・!?!」

冬樹を吹き飛ばす。

「冬樹いいいいいいッ!!」

「冬樹ちゃん・・・!?!」

水の楯で防ごうとしたが防ぎきれず、戦闘不能に陥る冬樹。

そして、砲撃を放った事で牢獄が壊れ、友奈は今度は雅へと意識を向ける。

(まずっ・・・!?!)

「『死拳・疑心暗鬼』」

死の拳が迫る。

だが、そんな友奈の手を弾くかのように、どこからか飛んで来た刃が、雅の腕を掴んでいた手も、今叩きつけるはずだった手も弾き飛ばす。

「うわ!?!」

「あれ?」

「そこまでだよ。ゆーゆ」

そこには、千の刃を従えて、友奈を睨みつける園子の姿があった。
「アハ、今度はそのちゃんが遊んでくれるの?」

「悪いけど、私、遊んでいられるほど余裕ないんだ・・・」

園子の表情は、あまりにも友達に向けるものからはかけ離れている。

「園子・・・!」

園子が咆哮し、千の刃が一気に友奈に襲い掛かる。

しかし、友奈はその千の刃の悉くを、圧倒的な火力をもって吹き飛ばす。

そこへ園子が突っ込み、全力で槍を突く。その一撃は淡くも躲され、そしてカウンター気味に腹に一撃を入れられる。

「ぐう」

すかさず顎に膝蹴りを喰らい、さらに左拳、右拳と立て続けに叩き込まれ、よろける。

そして、腹に添えられた掌から、とてつもない衝撃が園子の体を突き抜ける。

「かつはあ・・・!?!」

「そのつちいいいい!!」

へこまされた腹、口から吐く血、そして両膝を着く。

「もう終わりなの?」

園子の装束の胸倉をつかみ、倒れないように引き寄せる。

「それなら、さつさと・・・」

「――園子から離れろ」

背後から、銀が戦斧を掲げて襲い掛かってくる。

「やっぱり」

しかし、それすらも読まれていた。

振り下ろされた二対の戦斧を振り上げた腕で受け止め、その瞬間に園子を掴んでいた手を離し、強烈な一撃を叩き込んだ。

「が・・・は・・・」

軽々と宙を舞い、地面に落ちる。

「銀!!」

「が・・・くはあ・・・」

腹から血を吐き出して、うづくまる銀。

「アハハ、皆やる事分かりやすすぎるんだよ。誰かがピンチなら必ず助けに行く。勇者って、皆同じ行動をとるよね」

そう言って嘲笑って見せる友奈。

あまりにも、自分たちの性格を知り尽くされている。その上、異常に強すぎる。

どうやら、それぞれに特化した技を持っているようだが、その特化力が常軌を逸している。

唯我独尊なら放った時の殲滅力に長けているし、生離死別は斬る事に特化している。

四面楚歌は完全無欠の全方位防衛。

あまりにも隙がなく、そして思い切りが良い。

力が、あまりにもかけ離れている。

「もうやめてー！」

「おっと？」

突然、友奈の体をワイヤーが縛る。

「もうやめて友奈さん！これ以上戦っても、何の意味も……」

「説得は無駄だよ。いーっーきーちゃん！」

それを力だけで振りほどき、ワイヤーを掴めばすぐさま引っ張っては樹を振りまわす。

そして、ハンマー投げの要領で樹を地面に叩きつける。

「樹い!!」

風が悲鳴を上げる。

「く……はあ……」

取り着く島もなく、沈む樹。

「アハハ、まだまだやれるよねえ？」

子供のように笑う友奈。

その笑顔が、今は恐ろしく感じて仕方がない。

今の友奈は、あまりにも異常だ。

とてもではないが、人と呼べるものじゃない。否、元々、彼女は人なんかじゃないのだ。

だからこそ、背後から襲い掛かった者は容赦なく刃を振り下ろし

た。

「ッ!？」

空ぶった剣は地面に叩きつけられるかと思ったら、あまりにも急激に方向を転換させてややしたから友奈を追撃する。

斬撃が迸る。

友奈の左腕が、二の腕から上が飛ぶ。

ざわりと場の空気が変わる。

攻撃が、届いた。

「アハ、やっぱり凄いなあ、春信さんは」

斬り飛ばされた左腕を右手で抑えつつ下がる友奈。

その視線の先には、春信が、大剣を振り切った状態で佇んでいた。

「あ、兄貴い・・・!!」

思わず、泣きそうになる夏凜。

(春信がいればこの状況を覆せるか・・・!?)

春信の実力は歴代最強。その斬撃なら、あるいは友奈の命に届くか・・・?

「流石に春信さんとはやりあいたくないからね・・・この人たちに相手をしてもらってよ」

だが、友奈は春信との対峙を拒否、差し出した掌から真っ黒い、ガソリンのような、泥のようなものが溢れ出て、それが地面に広がったかと思うと、その泥から人型の何かが這いずって出てきた。

『召喚・暗黒時代』——さあおいで、過去の敗北者さんたち」

這いずってきた者たちは皆、武器を持っており、その武器をもって春信に襲い掛かる。

「そんな有象無象・・・!!」

しかし、春信はそんな事しなかった事ではないとすぐさまその泥人形たちを切り捨てようとする。

しかし——春信の神速の初撃を、その泥人形の一体が防いだのだ。

「!？」

「嘘!？」

これには、周りだけではなく、春信でさえも驚いた。

「ここにいるのは昔名のを馳せた武将や侍さんたちだよ。主に鎌倉が中心かな？知ってる？鎌倉時代ってね……武士が最も強かった時代だったんだって」

源氏、平家は当たり前、藤原、北条など、ありとあらゆる鎌倉の武将たちが春信に襲い掛かる。

一体一体が雑魚ではなく、その中には春信に迫る技量を持つ者もいた。

「くそッ!!」

数の暴力とはこの事か、圧倒的な強さを持つ春信でも、それらすべてを一瞬の内で片付ける事が出来ない。

「アハ、しばらく足止めされててもらうよー」

友奈の斬られて半ばとなった左腕の傷口から管のようなものが出てきたかと思うと、それが斬り飛ばされた左腕の傷口につながり、一気に戻って繋げてしまう。

「よし、これで問題なしだね」

そう言った直後、背後から翼が襲い掛かる。

その左手の先からは、山吹色に輝く刃が出現していた——だが、その左腕が突如として消し飛ばされる。

「——ッ!？」

「ふふ、背後から奇襲を警戒しない訳ないじゃん」

肩越しに、極小の『唯我独尊』を放ったのだ。それが、翼の左腕を半ば消滅させて、その上を吹き飛ばしたのだ。

最後の力だったのか、膝をつく翼。

「あれれ〜?どうしたの翼君?もう終わり?」

「ハア……ハア……」

もう、答える余裕もないぐらいに、翼は消耗しきっていた。

いや、それ以前に、出血の量が多すぎる。

「ねえ、それ、苦しいでしょ?」

友奈が、訪ねた。

翼は、どうにか顔をあげる。

「私が、その苦しいのをどうかしてあげてね」

そう目一杯笑う友奈の顔を見て――

「・・・愛してるよ、須美ちゃん」

そう、呟いた。

――直後、翼の首が跳ね飛んだ。

一瞬、時間が止まった気がした。

溢れ出る血、崩れていく体、飛んでいく首。

それらすべてが、映画のスローモーションのように、その場にいた者たちの視界に、ゆっくりと流れていく。

やがて、司令部分を失った体は倒れ、飛んだ頭は、美森の前に落ちた。

そして、時間が戻った瞬間――

「――いやあああああああああああああああああああああああああああああ
ああ!!!」

樹の悲鳴が轟いた。

「やり・・・やがった・・・」

「信じられない・・・」

信じられない目の前の光景に、阿鼻叫喚となる場。

「そんな・・・な・・・翼・・・様・・・」

「翼・・・嘘だ・・・そんな・・・事・・・」

夏凜と佐奈は、目の前で起きた光景が信じられる、思考が停止している。

だが、そんな二人を嘲笑うかのように、威勢の良い笑い声がある。そこに轟いた。

「――死ーんじやった死んじやった、つーばさ君がしんじやった♪」

まるで遊ぶかのようにステップを踏んで歌う友奈。

そして翼の胴体を蹴り飛ばす。

「アハハ、たかが一人死んだぐらいで騒がないでよ！たかが一人だよ？これからもっと死ぬのに何をいまさら騒いでるのかなあ？」

アハハ、と嘲笑う友奈。

その表情は、本当に嘲っているようで、その場にいる者たちを見下していた。

「……………」

「ん？あれれ？東郷さんはまだ現実に帰ってきてないのかなあ？」

気付けば、美森は翼の生首を見たまま固まっていた。

「まずい、思考停止してやがる……!!」

「わっしー……!!」

ダメージで動けない銀と園子。

そしてそんな美森に歩み寄っていく友奈。

「ちやあんと、現実に戻してあげないとねー」

何をするのかは分からない。だが絶対に良くない事だけは確かだ。

だから、辰巳が飛び出す。

「そこまでだー！」

恐ろしいほど低い態勢から放たれる斬り上げ。しかし友奈はそれを片手で受け止める。

「これがどうしたのかな？……!?!」

受け止めた。しかし、そこから先が辰巳の狙いだった。

「刮目せよ。我は邪竜、我は竜殺し、故に我は黄昏の覇者」

詠唱と共に、剣から黄昏色の光が迸る。

「邪悪なる竜は失墜し、英雄は竜の血を浴び、栄光をその身に受ける」

その光はどンドン輝きを増していき、やがて――

「させないよ……!!」

しかし、それを阻止するかのようには、友奈が自爆覚悟に技を発動させた。

『滅陣・暗箭傷人』

立ち上る闇色の光が辰巳と友奈を飲み込み、やがて爆発を引き起こ

す。

「ぐあああああ?」

「師匠!!」

吹き飛ばされる辰巳。

「ハア：：ハア：：流石に、その技だけは喰らう訳にはいかないよ：：」

「そうかよ：：」

「!?」

いつの間にか、剛が背後に立っていて、両手を合わせた状態で友奈にそれを向けていた。

「だったら、これを受け止める勇氣があるか：：!?」

「しまっ：：!?」

『ファイナルフラッシュ』——ツ!!!!

閃光が、友奈を包み込む。

剛の合わせられた両掌から放たれた眩い光が、友奈を襲い、崩れた街を駆け抜ける。

「ハア：：ハア：：」

光が収まり、走り抜けた先に友奈の姿はなく、大きく抉れた地面が一直線に現れていた。

そして、そこに、友奈の姿はなく——

「ぎあんねんでした〜」

剛の心臓を背後から貫いていた。

「が：：」

「一度避ける事が出来れば、あとは何も出来ないから背後に回って不意打ちしちやえば簡単だよ」

腕を引き抜けば、心臓を潰される以前に血を失い過ぎていた剛は、そのまま地面に倒れ伏してしまう。

「：：剛?」

目の前の光景に、翼とは打って変わってあまりにも現実味の無い現場。

「剛：：」

呼びかけても、彼は動かず。その目からは、光はすでに失われてい

そのまま地面に落ち、沈黙する。

「ミノさん!!」

「銀……!!」

沈黙した怪物。

その様子を見て友奈は嘲笑い、そして視線を巡らせた。

圧倒的すぎる強さを誇って、周囲の戦意を喪失させた。

そして、残酷過ぎる仕打ちを行い、ついに自分にかつての面影は無いのだと知らしめた。

額から伸びる角は彼女を人外と認識させる事とさせ、その赤黒い肌から禍々しい雰囲気醸し出し、その顔で他者を嘲笑う。

まさに、『鬼』。

今の彼女は、まさしくそう呼ぶに相応しい。

そして、彼女は、また、誰かの想いを踏み躪らんと行動を起こす。すぐさま、それを阻止しようと、勇者や、救導者が動こうとする。防人部隊はさきほどの攻撃でほとんどが戦闘不能となっているため動けず、襲撃者たちは、そんな防人たちを守ろうとしていた。そして、彼女が狙った次なる獲物は――

美森の目の前で、翼の跳ねられた首を潰す事だった。

飛び散った血は美森の顔に僅かにかかり、潰された翼の頭は原型をとどめず、その瞬間を見てしまった美森の時間は強制的に動き出し、周囲の人間は目の前で起きた事に思考を停止させて、やがて美森は友奈の顔を見上げた。

しばし、視線が交錯し合った後。

友奈が、嘲笑った。

その瞬間、美森の中で何かが切れた。

「あ……ああ……」

距離をとつても、美森のそれは遠距離武器。悪手である。

「ああああああ!!」

がむしやらに、ただ友奈を仕留める気満々で光矢を連続して放つ。それを、友奈は美森を中心に弧を描くように動きながらかわしていく。

ただ、美森は今、理性が完全に蒸発している。だから、無差別だ。「うおあ!」

信也のすぐ横を矢が通りぬける。

「くっそ!滅茶苦茶しやがる!!!」

「当然よ!あんな事されて、怒らない訳ないじゃない・・・!!」

冬樹を抱えて、飛んでくる光の矢を躲しながら、碎かれた翼の頭を見て、顔を歪める白露。

「くっ!」

「佐奈さん!もつと下がって!!」

「しかし、このままでは東郷が・・・!!」

見れば、美森の皮膚に亀裂が走っている。

「なんだアレは!?!」

「鷲尾須美・・・いや、東郷美森の満開はエネルギーが凄まじいんだ!おそらく、理性が吹き飛んで力の制御を誤っているんだろう・・・だが、このままでは、奴の体は確実に崩壊するぞ!!」

「なんですとおお!?!」

美森の体にどんどん亀裂が入っていく。

彼女の満開に使われる膨大なエネルギー。本来の精神状態、そして使用なら問題なく扱えただろう。だが、今の美森は理性が蒸発し、そして力のリミッターを外している。

矢を形成し、放つ際のエネルギーに、体が耐え切れず、崩壊を始めているのだ。

このままでは、美森の体は崩壊して、死に至ってしまう。

「ツ!やむを得ないか・・・明日香!東郷を剣で叩け!!」

「やっていいんですか!?!」

「構わない!これ以上、死人を増やすなア!!」

辰巳の怒号に、明日香は、その迫力を間近に受け、そして頷く。

「了解!!」

「困るなあそれは」

「ッ!」

いつの間にか、友奈が明日香の後ろにいた。

「ッ!」

「今良い所なんだから、邪魔しないでよッ——」

しかし、友奈のその言葉が最後まで届く事は無かった。

「それは、こちらのせりふだ……!!」

春信が蹴り飛ばしたのだ。

「行け! 明日香!」

「ハイ! ありがとうございまあすッ!!!」

春信の援護により、明日香は『黒』^{ブラック}化に成功。そのまま一気に美森に突撃する。

「ああああああああああああああ!!」

もう、顔にまで亀裂が走ってきている。

「一撃を許してくれ……!!」

背後で友奈が邪魔しようとする。しかしそれを、春信の大剣が邪魔をする。

それがなくとも、もうすでに手遅れである事は変わりはない。

明日香の大剣の一撃が、美森に叩き込まれる。

「——ア」

短い声を漏らして、美森の変身が解除される。

あるべき姿、元の、人としての姿に『正』されたのだ。

美森の体に走っていた亀裂からは、僅かばかり血が流れている。

「ふいー……」

「あの光そのものは神の光……異能が作用していた部分が彼の能力で直されたのね……」

奏の推測通り、異能によって変えられてしまったものを『正』すのが明日香の能力だ。今回の亀裂は、美森の体内で暴れていた異能であり、明日香の正す能力によつてすでに異能が作用していない部分以外

は修復されたのだ。

そして、明日香の一撃と共に、正気を取り戻した美森は、泣いていた。

「……………どうして……………」

もう、原型をとどめていない翼の頭を見て、美森は……

「どうして……………こんな事に……………」

現実を受け止めきれないのか、ただ俯いて、泣いていた。

そんな、悲しい雰囲気をぶち壊すかのように、春信によって斬り飛ばされた友奈の腕が宙を舞う。

「くッ!!」

距離を取り、斬り飛ばされた腕の傷口を抑える友奈。

「あーらら、元に戻っちゃったよ」

「黙れ。もうその汚い口を閉じろ」

春信の、友奈を見る視線は、すでに、汚物を見るかのようなものだった。

「……………流石に限界かな」

なにかを呟き、友奈は空を仰いだ。

「ねえ、見てるんでしょ？隠れてないで出てきてよ」

その友奈の声に、答えるかのように、仮初の空に、またマガアクルスが現れる。

『何の用だ?』

「私を匿ってくれないかな?」

その言葉に、場が騒然となる。

『我が貴様を匿って、こちらに利益はあるのか?』

「別にタダって訳じゃないよ。匿ってくれたら、そっちに味方してあげる」

『ふん……………その為にかつての友を殺したのか……………』

見下すように、マガアクルスは友奈を見下ろす。

「貴様……………まさか、敵に寝返りたいがために……………六道と三ノ輪を殺したのか……………?」

春信の持つ剣の切っ先が、震える。

「・・・そうだ、って言ったらどうする?」

瞬間、友奈のもう片方の腕が斬り飛ばされる。

「アツ・・・!?!」

「今すぐ斬り殺す・・・!!」

距離が開いているのにどうして斬撃が届いたのか。

(これは、マズイかも・・・!)

両腕を切り飛ばされ、成す術のないように思える。

それすらお構いなしに、春信は再度、その包丁のような大剣を振り下ろす。

斬撃が、飛ぶ。目に見える形で、三日月型の斬撃が友奈に向かって突き進む。

直撃する。誰もがそう思った時――

目に見えない障壁によってその斬撃は霧散してしまふ。

「な・・・!?!」

『――いいだろう』

声が、轟いた。

『貴様を、我が宮殿に招き入れよう』

「アハ、やったあ」

その答えを聞いた友奈は、すぐさま両腕を回収、腕を繋ぎ合わせる。

「何を・・・言ってるんですか・・・!?!」

その答えに、奏は、怒りを露わにして叫ぶ。

「貴方は・・・お前は・・・断罪の神なんでしょう!?!なのになぜ、罪の塊である彼女を招き入れるのですか!?!」

断罪の神であるなら、友を殺した罪人を受け入れるわけがない。

何故、そんな事をする?何故そんな、自身の矜持を否定するような事をするのか。

そして、返ってきた答えは、あまりにも予想に反するものだった。

『――我は、常に『あの御方』の御意思にのみ従っている』

「・・・は?」

『故に、この行動は、我が主の意思である』

その言葉の後、友奈が光に包まれる。

「バイバイ」

「待て……待ちなさいよ!!」

夏凜が吼える。

「あんた……どうしてそんな簡単に逃げられるのよ!? どうしてそんな簡単に人を殺せたのよ……どうして、どうしてそう簡単に裏切れるのよおおおお!!」

泣き崩れる夏凜を目にして、友奈は――

「だって……」

その声は、酷く切なくて。

「――だって、千景君のいない世界なんて、嫌なんだ」

その言葉を最後に――友奈は、マジアクルスと共に消えた。

全ての脅威が過ぎ去り、静寂が訪れる。

その静寂が、酷く痛くて、苦しくて、失ってしまったものが、あまりにも大きすぎて。

やがて、一人の絶叫と共に、失ってしまったものを認識した。

絶叫が、壊れた街に響きわたり、しかし次の瞬間、空に、大きな方陣が展開される。

中心に『修復』の文字の入った、真っ白な方陣。

小さな光の粒子をまき散らして、壊れた街に降り注ぎ、やがて崩れた瓦礫が持ち上がって、建物が修復されていく。

まるで、何事もなかったかのように、全てが元に戻っていく。

「……創代様、酷いですよ」

涙を流しながら、奏は、自らが信仰する主神を罵倒した。

「……あの子が、戦った証を……消さないでください」

しかし、その声は届かず、街は修復されていき、しかし失った命は返らず、砕かれた体は修復されず。

ただそこには、誰かを失ったという、絶望に打ちひしがれる者たちしかいなかった――

——香川防衛戦、報告書にて。

功績——敵勢力の大多数の撃破に成功、撤退に追い込む。

被害——結果的に、一切の被害は無く、協力者が信仰している神のお陰で全て修復された。

しかし、協力者の内、一名と、勇者二名が死亡。

どれも、戦力の中核を担う。

名を以下の記載。

不道千景——身体の消失により、死亡。

六道翼——失血、及び頭部の破壊により、死亡。

三ノ輪剛——失血、及び心臓、頭部の破壊により、死亡。

なお、これらの死亡により、勇者及び、協力者の精神に、多大なるダメージが確認される。

そして、今回の戦闘で出た、『裏切者』について。

元『結城友奈』を、今後、災厄の意として『サイカ』と呼称。

以前より計画されていた『神婚の儀』は、これにより中止を具申。今後、最重要討伐対象とす。

なお、敵勢力にさらに『上』が控えている可能性大。

さらなる勢力の存在を警戒すべき。
今後、対策を立てる必要有り。

以上、報告終了。

作成者——三好春信。

上里家

——上里本家。

「——以上です」

「ご苦労様、もう下がっていいわよ」

召使いによつて着替えを行つてゐるまだ十二とも思えるほど小さな少女が、後ろに控えていた男に告げさせる。

「はっ」

その返事とともに、男は闇夜に消える。

上里家直属の暗躍部隊『黒羽^{クロバ}』。先ほどの彼はそのうちの一人なのだ。

「・・・翼さんと剛さん、そして、かの災厄の子孫が死亡ですか・・・
そして、かの英雄の名を継ぐ者の裏切り・・・」

着替えが終わり、召使たちが下がっていく。

そして、召使いたちが部屋を出ていった後、少女は、感情の無い表情で呟いた。

「・・・さて、手を打ちましょうか」

少女——現上里家当主『上里ひより』は、仮初の太陽を見上げて、そう呟いた。

赤が、視界を染める。

綺麗な肌色が、赤に塗り潰されていく。

大切だったものも、大事だったものも、当たり前だったものも、全て赤に塗り潰される。

あまりにも、その景色は赤に染められていた。

その、赤の荒野に、一人の影があった。

その影はその赤の塊の山の上にたたずみ、嘲笑うかのように天に向かって笑い声をあげていた。

—— やめて

声は届かない。

—— お願い

花は^願なく、星^{希望}すらもなく、

—— やめて、お願い、やめて

あるのは闇^{絶望}であり、決して消える事のない影^{悪意}。

—— もう、これ以上

月^想さえも、闇に消え去る。

その、赤い全てが、今、自分の大切なものを——

「——ハッ!？」

唐突に意識が覚醒する。

激しい動悸、荒い呼吸、高鳴る鼓動。

そんな、混乱した状態の中、ゆつくりと納まっていくのをまち、そして、自分が今どこにいるのかを認識する。

見慣れない鉄の天井、知らない個室、知らないベッド、鉄の床。

ここは、自分の部屋でもなければ家でもない。

どこかの、知らない所。

だが、興奮が収まっていくとともに、昨日の事をゆつくりと、しかし鮮明に思い出していく。

「うっ……!？」

突頭な吐き気に、美森は思わず個室を飛び出し、トイレへと駆け込む。

「げえー……」

胃の中には何も無い筈なのに、どうしても、吐き気が止まらない。

やつの事でおさまった吐き気ではあったが、それでも、辛い事には変わりはない。

身体も、精神も、何もかも。

「ハア……ハア……」

思い出したくもない、昨日の悪夢。いや、それが本当に夢であつてくれたならどれほど良かった事か。

「友奈ちゃん……翼君……千景君……」

また、吐き気が襲う。

午前五時、彼女なりに言えば、マルゴーマルマル。

そこからの一時間を、東郷美森は吐き気に苛まれる事だけで過ごした。

「分かっていると思うが言わせてもらおう。今の状況は最悪だ」
辰巳の口から、そう告げられる。

今、この場にいるのは、奏、佐奈、春信の四人だけ。

「不道千景、六道翼、三ノ輪剛の死、そして結城友奈の寝返り。数だけみればそれほど重要な事でもない事のように思える。だが、戦力的に言えば最悪だ」

「不道千景は精霊の三体同時憑依が可能、六道翼は類まれなる戦闘の才、三ノ輪剛は持ち前の打たれ強さと戦闘センス。どれをとってもトップクラスの三人だ」

「その三人は、すでに死亡していて・・・そして、結城友奈は」
「正体が負の感情の塊にして、勇者適性過去最高値。そして、勇者の頃を凌ぐほどの戦闘力・・・過去の武将の召喚も可能となると、数による戦力差は一気に逆転される」

一気に暗い方向に空気が激んでいく。

ここは、大赦の保有するゴールドタワーの会議室。

あの戦いの後、勇者、及び救導者、襲撃者、防人たちは大赦によって保護され、そしてここに運び込まれた。

幸い、創代のお陰である程度の傷は完治しており、一晩は寝れば多少の体力の回復にはつながった。

しかし、精神的な解決には、いたってはいない者が多いのが現実だ。防人たちは被害が無かった為、そして痛みに対しては多少の覚悟があったためにすぐに戦線への復帰は可能、襲撃者たちも同様である。だが、救導者、勇者は違う。

千景を失ったショックで立ち直れない者がおり、それでも前を向い

て進もうとしている者もいるが、正直言つて危ういのが現状だ。

そして、千景の消滅に相次いで翼、剛が死に、そして友奈の裏切りを受けた勇者部は他の者たちよりかなり大きなダメージを負つてしまつていた。

「一応、友奈……いいえ、不浄王『サイカ』に対する手段はあるのでしょうか？」

「東郷の満開か」

美森の満開は破魔、不浄の浄化の効果が付与されている。

それなら友奈の——サイカの力に対抗できるのはすでに実証されている。

サイカとは、友奈に与えられた新たな呼称である。

もうすでに人間をやめた彼女には、似合いの言葉だと、春信がそう名付けた。

あの戦いからすでに一晩。体の傷は癒えても、心の傷はそう簡単には治らないのが現状である。

故に……

「あの状態でどうする？」

「……そうですね」

今の美森は、完全にやる気を失せている。

彼女だけではない。

剛を失った風も同様であり、銀も、樹も、夏凜も再起できていない。園子は、一応は再起しているが、それでも危うい所がある。

正直、目を離す事が出来ない。

そして、そんな状態の者たちにも、奏は思う所があるからこそ、何も言えない。

「……このまま続けて、希望なんてあるのか……？」

佐奈の、諦めにも似た言葉に、誰も答えを出せなかった。

用意された食事に味は感じなかった。

別段、料理がまずいという訳ではない。他の者たちにはちゃんと味がしたのだろうし、おそらく、自分のものだけがそういう訳ではないのだと思う。

だが、美森の味覚は、目の前に置かれた料理を美味しいとは思えず、むしろ、一切の味がしなかった。

「東郷・・・で、良かったかな？」

ふと、声をかけられてみれば、隣には黒髪の長身の女性がいた。

名前はたしか、桐馬雅だっただろうか。

「調子が悪い・・・というのは当たり前だったわね。味がしないとか、そう思ってる？」

なんと鋭い事か。

「え？東郷先輩、味がしないんですか？」

目の前で、樹が驚いたかのように目を丸くしていた。

ただ、彼女の声は、どこか力の無いように思えた。

「ううん。そんな事はないわ。ただ・・・」

そこから先の言葉が出てこない。

「どう言い訳しようか、と思っても、どうしても、次の言葉が出てこない。」

そんな美森に、雅が肩に手を置く。

「そんなに、無理するものじゃないわ。それじゃあ、いつか倒れちゃうわよ」

「雅さん・・・」

「それに、失ったものがあるのは、何も貴方だけじゃないし、ね」

雅が見る先、そこには、一人もくもくと食事をする優の姿があった。他にも、数人、暗い雰囲気でする者たちがいて、その空気が伝わって、食堂の雰囲気全体が重い。

「・・・はあ」

雅が、溜息を吐く。

「なんか、奏ちゃんも他の代表たちと話し合ってるみたいだけど、これからどうなるのかしらね・・・」

それが問題だ。

現状、大きな戦力を失い、しかも士気も低下してきている。

こんな状態で、また敵に攻め入られてしまったら、とてもではないが防ぎきれぬ自信が無い。

いや、むしろ、翼がいない世界なんて、いつそのこと・・・

(だめよ、そんなのだめ)

一瞬、頭をよぎった考えを振り払い、また改めて思いなおす。

(翼君が守ろうとした世界を、守らなくちゃ・・・！)

そう思うと、箸を持つ手に力が入る。

その様子を、雅は心配そうに見ていた。

(気負い過ぎよ・・・それじゃあいつか倒れるわ)

だが、それを言葉にする前に。

『——現在、この場にいる全ての勇者、巫女、襲撃者、防人、そして救導者の方々は、広間に集合してください。繰り返し——』

——

「集合・・・？」

「こんな時に・・・ね・・・」

断る理由もないうえに、このまま何もしないよりは良いかもしれない。

そうして、ゴールドタワーに設けられた広場に集合する。

「一体何の用だよ・・・」

信也が毒吐きながらも、何が来るのか待っていた。

やがて、壇上に、一人の少女が、数人の神官を引き連れてやってきた。

大赦の人間は全て神官の服と仮面を被っている。顔を知られないためか、それとも何かしらの掟か。

そして、その中心に立つ黒髪の少女は、無表情に周囲を見渡していた。

「召集に答えて下さり、ありがとうございます。私は上里家現当主、上里ひよりと申します」

ざわり、と場が騒然となる。

「大赦のトップが、あんな少女だというのか・・・？」

優理は僅かばかり動揺する。

しかし、辰巳は当然のように知っている訳であり、しかし春信は知らなかった。

「先に言っておきますが、この場には私の家に付き従う者が控えています。この場での私への攻撃は、全てその者たちによって阻止されるので、注意されるようお願いします」

一部の人間は認識している。この部屋には、数人、いや、数えるのも億劫な程の人間が控えている事を。

(あじな真似をしてくれる・・・)

心の中でそう毒づき、春信はひよりを睨みつけた。

一度、ひよりは周囲を見渡すと、やがて彼らに向かって、言い放つ。

「単刀直入に言います。今日から二週間後に敵本拠地への逆侵攻を実行してもらいます」

ざわり、と衝撃が駆け抜ける。

「な、なにを言っている・・・!?!」

「すでに大赦では決定した事です。そして、この二週間を利用して、貴方たちには今より強くなってもらいます」

有無を言わずに、彼女は続ける。

「訓練の内容はそちらに任せましょう。ですが、全人類の未来は貴方たちの手にかかっています。生半可な鍛え方は許しません」

冷めた視線を彼らに向け、彼女は続ける。

「拒否権はありますが、ここから出られるとは思わないでください。今、この四国にいる全人類の救済の為には、貴方たちの力が必要である事を理解しておいてください」

あまりにも、一方的な言い様に、誰も彼もが黙ってしまふ。

「・・・救済、ですか」

ふと、その中で、一言呟く者が一人いた。

「何故、全ての人間を救わないといけないんですか・・・？」

「優・・・？」

「優ちゃん？」

握りしめた拳をわなわなと震わせて、優は、ひよりを睨みつけた。

その表情は、今にも誰かを殺しそうな程の感情を滾らせていた。

「何故、貴方たちの命令に従わないといけない・・・私たちはただ千景さんについていただけに過ぎない。だからこれから何をしようとする私たちの勝手だ。だけど、その行動をお前たちに決められる筋合いはない・・・！何故私はお前たちに従わなくちやいけない！うんざりだ！お前ら大赦のクス共に、これからの事を決められて溜まるか！」

烈火のごとく、叫ぶ優。

『黙』『り』『な』『さ』『い』

だが、その言葉、唐突に途切れる事になる。

「・・・ッ!？」

優の口が、突然、縫い合わされたかのようにぴったりと閉じる。

それに、無理矢理口をこじ開けようと、手を使ったりしたが、一向に開く気配がない。

まるで、口を開けられる事を許されていないかのように。

「まさか・・・これが強制遂行・・・!？」

園子が、青ざめた様子で、口を押える。

(意思を持った言葉と命令形で言う事で、狙った、自分よりもたった一つだけでも劣っている対象に必ずそれを遂行させる、上里家の切り札『天下統一』コトワリラスベキ・・・やはり逆らえないか)

たった一つだけ。テストの点数が低い。運動が出来ない。地位が少しでも低い。下手に出る。自分よりも身長が下。活舌が悪い、ななど、そんな、身体的にも精神的にも、そして、社会的でもたった一つでも相手が自分より劣っていた場合、それが相手がどれほど優秀で立場が上な相手であろうと、必ず言葉として命令を実行させる、あまりにも隙の無い、対人最強の能力。

その強制力は、例え大切な家族がいようとも、それが体である限り、魂では反抗出来ない程にすさまじい。

まるで、操り人形のように操られるのだ。

まず、逃れる事は出来ない。

(なんて、あまりにも、隙が無い弱点・・・!!)

これを克服するには、自分が彼女より何もかもにおいて勝っていないければならないのだが、泣いた回数、歩いた歩数などもカウントされる。例えば今、この場で数歩後ずさったとしよう。その瞬間、自分はその場で凜々しく立っている彼女との対峙に負けたという認識が生まれ、その瞬間からすでに優劣が決まっている。

背中を向ける行為もそうだ。もし、一瞬でも背中を見せた瞬間、逃亡と視線をそらしてしまったというネガティブ方向にとられて、その瞬間においても敗北したとなる。

そんな、一挙手一投足で全ての優劣が決まってしまう状況において、彼女の強制遂行を逃れる術は、無い。

例え、耳をふさいでも、聞いているのは『魂』ではなく、『体』なのだから。

「貴方たちも、ここに立っている以上、大赦の命令には従ってもらいませぬ。どちらにしろ、貴方たちは、奴らと戦わなければならないのです。その邂逅が、早いか遅いかの違いだけです」

ひよりは、周囲を見渡す。

「二週間後、貴方たちがさらに強くなっている事を願っています。どちらにしろ、強制遂行を使って無理矢理連れていきますが、せいぜい、生き残る努力をしてください」

嘲るでもなく、見下したような、あまりにも冷たい視線を、ひよりは彼らに向ける。

「・・・ねえ」

ふと、風が、声を発した。

「もし、私たちが全員、自殺したらどうする気なの？」

ぞつとするような言葉に、全員が息を呑む。

「お姉ちゃん、何を言って・・・」

「そうですね・・・その時は、『代わり』を用意しますよ」
即答。

「貴方たちと同様の勇者適性者はいくらでもいるのです。彼女たちの中から選定して、新しい勇者を用意しますよ」

抑揚のない声、そして、感情の灯らない顔で、そう告げた。

「そう・・・」

その答えを聞いた風は、そう呟いて、

「やっぱりアンタもクズなのね」

「どうぞ、好きなだけ。感情の捌け口ぐらいにはなってあげますよ」

風の軽蔑するような視線をうけても、ひよりは動じない。

「・・・分かったわ」

「お姉ちゃん・・・」

「ただし、友奈は私の手で——殺すわ。それぐらいにわがままはいいでしようっ・・・」

「どうぞ自由にお陰で無駄に作戦を立てる手間が減るといいうものです」

そして、一度周囲を見渡したひよりは、彼らに言った。

「では、正確な作戦は後程、報告しましょう。ですので今は、修行にいきしんでください。ああ、考えさせる時間は設けさせますよ。一日だけですけどね」

それを最後に、ひよりは、扉の向こうに去っていく。

残ったのは、勇者や防人、襲撃者や救導者のみだった。

「・・・お姉ちゃん」

「義姉さん・・・」

「・・・ごめんね。少し先に部屋を戻ってるね」

踵を返すと、風はひよりが行った扉とは反対側にある扉から出ていく。

「フーミン先輩・・・」

「園子、この場は任せる」

「え？師匠？！」

そんな風を見送った園子の肩に手をおいてそう囁いた辰巳は、追

かけるように風が出ていった扉から出ていく。

そして、辰巳は、扉から左に数十歩進んだ先で肩を抑えてうずくまる風の姿を見つけた。

「ハア・・・ハア・・・」

「慣れない言葉を、あまり言うものじゃない」

そんな風の背中に、そっと触れて、辰巳はそうささやく。

「その時は大丈夫でも、後でその言葉の重みが押し掛かってくる。そうやって、自分を騙し続けていると、いずれ潰れるぞ」

「う・・・あ・・・」

「仲間には吐き出せないだろう。感情の捌け口ぐらいにはなってる」

振り向いた風の顔は、あまりにも酷いものだった。まるで、この世の終わりともいうような、そんな表情だった。

「・・・お前の恋人のように、出来ないが・・・」

「・・・ッ!!」

風は、まるで神にでも継りつく想いで辰巳の胸に飛び込んだ。

「・・・思いつきり泣け。それは悪い事じゃない。むしろ、溜め込む方が悪い事だ」

「うう・・・ううううああああああああああ!!!」

まるで、今までため込んでいた全てを吐き出すかのように、風は泣き叫んだ。

剛の事も、友奈の事も、何もかも全て、溜め込んできたもの全てを吐き出すかのように、風は、言葉にならない悲鳴を上げた。

懺悔を、自分のありつたけを、辰巳にぶつけた。

そして、その泣き声は、広間にも聞こえていた。

あまりにも大きい風の叫び声は、広間の静寂を、確かに破っていたから。

「・・・それで、これをBGMに悪いが、どうする?」

春信の問いかけに、真つ先に答えたのは、明日香だった。

「もちろんやりますよ。確かに、悲しい事はあったけど・・・でも、だからといって諦めるなんて事は俺はしねえ。諦めたら、そこで終了だからな」

そう言った後に、明日香は自分の仲間たちの方を見た。

「お前たちはどうしたい？こういった手前、なんだけど、俺は皆と一緒にやりてえ。正直、俺一人じゃ何もできないからさ」

その言葉に、横から芽吹がチョップをかます。

「おぶう!? な、なにするんですかああああ!?!」

「そんなの今更よ。私たちは一蓮托生。行くときも逃げる時も、皆一緒でない」と

「うむ。生きるも一緒、死ぬときも一緒。我々は、そう言った絆で結ばれているのだからな」

「当然ですわ。ですが将真さん。一つ訂正するべき所があるのではなくて?」

「ん・・・皆・・・生きる」

「やれやれ。ここで反対したら一人駄々こねているようで嫌だからね。僕もやるよ」

「ええー、なんか逃げ道塞がれてきてる・・・」

「俺は初めからやるつもりだ。やられっぱなしというのも性分じゃない」

他の者たちも、同じようだ。

「という訳で、私たちはやるわよ。他の方々はどうなのかしら?」

挑戦的な笑みを見せつける芽吹。

「もとより我々に、拒否権は無い。当然、参加させてもらおう」

佐奈は、そう答える。

「まあ、正直言うと死にたくないしね」

「頑張る・・・!」

「もつと皆と生きていたいからねー!」

「私たちが犯した罪を、償わないといけないから」

襲撃者たちも、同様のようだ。

「勇者と、救導者はどうするつもりだ？」

その問いに、両者は一瞬、たじろぐ。

「・・・正直、言う」と

だが、やがて、美森が口を開いて、話し始める。

「翼君がいない世界なんて、滅んでしまえなんて思ってた。だけど、私は翼君を守ろうとしたものを、壊したくない。それに、風先輩は、友奈ちゃんを殺すって言ってたけど、それを一人で背負い込ませはしないわ。勇者部の不祥事は、勇者部で解決する。友奈ちゃんの事は、私たちが解決するわ」

美森は、真っ直ぐな眼差しで顔をあげる。

「私もやるわ」

次の瞬間、その頭を銀に引つ叩かれる。

「あうち!?!」

「お前も抱え込み過ぎだったの。お前の場合は翼を失ったストレスで味覚なくしてんだだろうが」

「!? な、何故それを・・・!?!」

「分からないと思っただか、どれほどお前の親友として過ごしてきたとおもってただよ」

「つばくんほどじゃないけど、わっしーの変化ぐらい、簡単にわかるよ」

もう反対側からも、園子がそう話しかける。

「と、いう訳で、アタシら大橋組も参戦させてもらうぜ」

「ゆーゆの事もどうにかしなくちやいけないからね」

銀と園子も、賛成の声をあげる。

「わ、私もー」

そして、樹も。

「一緒にいきます。怖いですけど、お姉ちゃんを放っておけないし、それに、私も勇者部の一員です！翼先輩や、剛先輩・・・ううん、お義兄ちゃんや、そして千景さんが守ったこの世界を守りたいです」

「やれやれ、アンタたち。勝手に話を進めんなっての」

その後ろから、夏凜が頭を掻きながら進み出る。

「でもま、ここで断つたら完成型勇者の名が廃るわ。当然私も参加よ。兄貴もそうでしょ？」

そう言つて、夏凜は壁にもたれかかっている春信に呼びかける。

「もとより俺は辰巳師匠の命令で動いていた身……だが、それを抜きにしても、あのジガという男をどうにかしなければならぬからな」

そう言つて、壁から離れ、夏凜の隣に立つ。

「俺も参加させてもらおう。大人もいた方がいいだろう」

「それもそうだな」

扉から、声がした。

見れば、そこには、風を背負った辰巳が立っていた。

「師匠！」

「えーつと、背中にいるのは義姉さん……ですよ？」

「ああ、泣き疲れて寝てしまつてな」

「早ツ！」

「お姉ちゃん、エネルギー消費速いから……」

あの大食いもそれなら納得がいくというものだろう。ありつたけを吐き出したのか、憑き物が落ちたかのような寝顔だった。

「この三百年、俺はずつと生き長らえてきた。もう終わりにしたいと思つていた所だったが……俺の方も乗り込む理由が出来た。だから俺も行く」

辰巳も、しっかと答える。

「お前たちはどうする？ 救導者」

気付けば、残るは救導者のみだった。

その様子に、完全に出遅れた様子で、奏はたじろいでいた。

「えつと……私たちは……」

本来、救導者は他の三組とは違い、守るのは四国そのものではなく、高知の一部にある絡久良市だ。

だから、こんな大事に首を突っ込む理由はない。

「当然、俺たちも参加だ」

「え!？」

しかし、信也は迷う事無く、前に出た。

「千景が世話になった所だ。それに、千景は自分の命を捧げてでも守ろうとしたんだ。だったら俺たちもアイツの意思を継ぐしかねえだろ」

「ま、それもそうだよね」

後ろから、信也の肩に手を置き、白露も同意する。

「千景が全力で守ろうとしたものを、私たちも守らなくちゃいけないもんね」

「というか、もし私たちが参加しなかったせいで世界滅んだら、私の教師になるっていう夢もなくなっちゃうからね」

「孤児院にも小うるさいガキ共がいるんだ。そこの職員としては、守らなくちゃいけないからね」

「うん。頑、張ら、ない、と」

「・・・ふん」

「皆・・・」

信也、白露、雅、真武郎、冬樹、海路たちの決断に、奏は呆気にとられる。

「あんたも、そうだろ？」

信也の問いかけに、やがて奏も諦めたかのように溜息をつく。

「分かったわ・・・巫女である私は、戦いに参加できないけど・・・それでも、精一杯応援させてもらうわ」

そう、奏も呟いて、同意の意思を伝えようとする。

「・・・どうしてですか」

しかし、反発する者が、一人いた。

「どうして、そんな、簡単に戦うなんて言えるんですか・・・!!」

「優・・・」

まるで、裏切り者でも見るかのように、優は全員を睨みつけた。

「こんな、まともな作戦も話されていない中で、なんで皆戦うなんていえるんですか・・・!こんな、こんな・・・死に行くようなものじゃないですか!!」

敵の本拠地への突入。それは、失敗すれば死もありえる状況だ。

過去にも、自分たちの戦いにおいて死者は出ている。

それなのに、何故、死などしらないとでもいうように、戦うなんていえるのだろうか。

「翼さんや剛さんのように、惨たらしく死ぬかもしれないですよ……!!それなのに……どうして……!!」

結局の所、優は、もう仲間の誰かが死ぬ所を見たくないのだ。

救導者であるのなら、相手は殺さずに魔器だけ破壊する事が出来る。

だが、味方は死ぬ。

相手の攻撃は、全てが命に直結し得るものばかりだ。だから、いつか味方が死んでしまうかもしれない。

それが、優は堪らなく怖いのだ。

あんな、死を目の前にしたから。

駄々をこねる子供のように、少女は泣く。

「優……」

「優ちゃん……」

「馬鹿です……みんな……馬鹿ですよ……」

泣きじやくる優。

千景が死んでしまった。それだけでも、彼女にとっては相当ショツクな事のはずなのに、これ以上、誰かが死ぬ事なんて、見たくないのだ。

それほどまでに、優は、誰かの死を恐れている。

だが、そんな優に、歩み寄る者がいた。

「確かに、私たちは馬鹿だよ」

園子だ。

「勇者になるって言った時から、ずっと、私たちは馬鹿なままだよ。誰かが死ぬかもしれない。もう会えなくなるかもしれない。そんな事を一切考えなかった馬鹿だよ。だけど、だからこそ、私たちは死なないよう努力するんだよ。もう、誰も死なせないように、死なないように、精一杯頑張るんだよ」

あやすように、泣きじやくる優の頭を優しく撫でる園子。

「私のご先祖様はね、守れなかったんだ。親友も、友達も、誰も。ずっと

と守られてばかりだった。私だってそう。つばくんやごーさんを守れなかった。だけど、もう誰も失いたくない。だから、私たちはやるんだよ。まだ、守るべきものがあるから。貴方の手の中には、あと、何が残ってる？」

まだ、涙に濡れる瞳を園子に向ける優は、そつとその視線を自分の開かれた手に向ける。

そうして、また手を震わせて、涙を溢れさせる。

「・・・なかまが・・・います・・・！」

「そう。まだ、貴方には仲間はある。ふーくんはもういないけど、それでも貴方を支えてくれる仲間はあるんだよ」

園子は、そつと優の前に手を差し出す。

「一緒に頑張ろう。今度は、何も失わないように」

「はい・・・はい・・・!!」

涙を流しながら、そう返事をする優。

これで、全会一致。彼らは、これより、決戦の準備に入る――

そして、その一方で。

「・・・ほら、やはり彼らはやると言ったでしょう?」

誰に言うでもなく、そう一人呟くひより。

「どちらにしろ、それ以外に選択肢は残されていない訳ですし、彼らにはこうするほかありません。下手な事を言わない方が、彼らは動かしやすいんですよ」

うつすらと笑みを浮かべるひよりの表情は、まるで操り人形で遊ぶ子供のようだった。

「さて、彼らが動き出す以上は私たちもうかうかしていただけですね。訓練によって、彼らはこちらから意識がそれるわけです」

全ては、シナリオ通りだ。

翼と剛の死も、彼らが立ち上がるのも、千景の死も、何もかもが思い通りに事が運んだ。

果たして相手はどう思っているだろうか。

愚かだと思うだろうか？豚以下のカスに見えるだろうか？もはやどうでも良い。

今、重要なのは、敵にいかにして勝つか。どれほど手札をそろえる事が出来るかだ。

「至急、生贄の選抜を行ってください。ええ、出来るだけ上等なものが欲しい所ですが、とにかく数を揃えてください。儀式に必要な分をお願いします」

廊下に来る影に向かって、ひよりは何かしらの指示を与える。

「今のうちに進めましょうか——」

どれほどの犠牲が出ようとも、それが最小の犠牲であるなら、斬り捨てて見せよう。

ただの人間が出来ない事を、成し遂げて見せよう。

誰にも、異議を唱える事は許さない。これは、我々の、上里の意思なのだから。

故に我等は外道を進もう。

「——六道翼と三ノ輪剛の神格化を」

まるで、勇者たちの努力を嘲笑うかのように、ひよりは静寂にむかってくつくつくと嗤った。

錯綜する想い

不道千景、六道翼、三ノ輪剛が死に、そして結城友奈が敵に寝返って三日。

防人部隊の拠点、ゴールドタワーの訓練場にて。

「さて、昨日打ち合わせた通り、今日から二週間で俺たちの大幅な特訓を行う事になった」

大勢の集団を目の前にして、落ち着いた様子で辰巳は木刀を片手に話していた。

「この人数では、流石に俺や春信では手が回らない。だから、防人部隊と同様に、勇者たちにも六道家より指導してもらおう事になった」

その辰巳の言葉と共に、扉から人が何十人も出てくる。

「犬吠崎風は俺から直々に指導する。そして春信は夏凜と芽吹、そして園子を指導しろ。それ以外は彼らから選んでもらえ。いいな」

木刀を、肩に担ぐ。

「時間が惜しい。始めるぞ」

今回の訓練において、重要視される事は、敵幹部の撃滅。それに対する、『個』の進化だ。

相手は、あまりにも強大だ。故に、連携で倒そうにもそれを崩されてやられれば元も子もない。ならば、個々の力量を引き上げるしかない。

故に、ずっと大赦の闇を担ってきた六道家の実力者を選定し、それらを指導役に指名したのだ。

幸い、六道家はありとあらゆる武術に精通している。この三百年の研鑽は伊達ではないのだ。基本的な実力だけでみるなら、ここにいる勇者や救導者、襲撃者、防人なんかよりずっと上だ。

そして、もうなりふり構ってられない。使えるものはなんでも使

うべきなのだ。

「本当に大丈夫なんですよね？」

「ああ。上里家の息は掛かっているが、実力だけは本物だ。それに、彼らが翼の事において、何も思っていない訳じゃないからな」

「ゴールドタワー……ではなく、そこから遠い場所にある山奥にて、辰巳と風はいた。」

そこは、かつて辰巳が園子を徹底的に鍛え上げる為に使った場所であり、そこには、当時、園子が打ち込みにつかっへこんでいる木などが多く散乱している。

「うっひゃあ……」

「そこにある木は、園子が小学三年の時に折ったものだ」

「アイツ、呑気な振りしてこんな怪力隠し持ってたのね……」

「そうだ」

辰巳が木刀を抜く。

「時間が無い。とにかく俺の全てをお前の体に叩き込む」

「ちなみに、園子は貴方の全てを覚えるのに、どれくらいかかったんですか？」

「俺の技を全て体得するまで、おおよそ一年といった所だ。そして、あそこまでの実力を身に着けたのに、三年はかかった。合計、四年だ」「四年で掛かったものを、二週間でですか……」

「園子の場合、まだ幼かったからな。体を壊さぬようにプランを考えていた……だが、お前は違う」

風の体は、幼少期の園子よりもずっと丈夫だ。それを差し引いても、常日頃、樹の為に体を張っていたがゆえに、体を出来上がっているのだ。

「そこからさらに叩いて伸ばしていく。殺す気でやるから死ぬ気ですいていい」

空気が、変わる。

それは、かつて園子を鍛えた時のものとは全く別の雰囲気だった。

「ええ、やってやりますよ……」

風も風で、我流で構える。

「貴方の全てを覚えなきゃ、私は、アイツに勝てない……行きますよ……師匠!!」せんせい

次の瞬間、山奥に巨大な粉塵が舞い上がった。

一方のゴールドタワーでは。

訓練場では、六道家のそれぞれの担当が、勇者たちをみつちりと扱っていた。

音を上げるものはいなくても、あまりの激しさに、早急に足ががくがくと笑いだす者が続出していた。

その度に、その者には休憩が言い渡され、その間に別のものが地獄を見ていた。

その様子を、佐奈は懐かしそうに見ていた。

(この空気も久しぶりだな……)

この熱気、『表』とは違い、『裏』で修行する者は、常日頃から生き残るために、怪我をする恐れがある程の激しきで訓練に打ち込む。

それで怪我をすれば、その程度。その瞬間、死んでしまうかもしれない。それを、怪我をするたびに怒鳴り散らされるようにみつちりと恐怖を植え付けられるように言われ、その度に怪我をしないように、次こそは次こそはと練習を積み重ねる。

その中で、佐奈は、まだ幼いながらも拳を振るう翼の姿を見ていた。いつか、六道家の当主として、恥じないような立派な戦士へと鍛え上げる為の訓練を、いつもいつも、汗を滝のように流しながら頑張っていた。

だが、その翼は、もういない。

「佐奈さん・・・?」

ふと、背後から声をかけられる。幸奈だ。

「どうかしたんですか?」

「ああ、いや・・・少し、懐かしいと感じていな・・・」

ふと、自分の手を見た。かつて、この手で同胞のほとんどを殺し、逃走したあの夜。かつて想いを寄せていた人は当主の座を降りて、まだ幼かった翼が次期当主へと選ばれてしまった。

人殺しというだけでなく、その相手が同胞であり、その所為で、想い人の人生を狂わせてしまった。

果たして自分に、彼らの指導を受ける資格はあるのだろうか・・・。

「ずいぶんと腑抜けたようじゃないの、佐奈」

ふと、そんな声が聞こえて、そちらに視線を向ければ、茶髪の佐奈と同年代のような少女が立っていた。

「瑠香・・・」

『相羽瑠香』あいはるか。かつて、佐奈と共に、六道家の『裏』で特訓していた者の一人だ。

かつては、佐奈のライバル的存在として、切磋琢磨し合っていたのだが。

「私の兄さんを殺しておいて、こうもぬけぬけと私の前に姿を現せたものね・・・」

「・・・」

その、刃物のような言葉に、佐奈は何も言えない。

「佐奈さん・・・」

俯く佐奈を心配する幸奈。だが、次の瞬間、

「ふんッ!」

「ぐう!?!」

瑠香の強烈な回し蹴りが佐奈の顔面に炸裂する。そのまま佐奈は後ろに向かって吹っ飛ぶ。

「佐奈さん!?!」

「っ・・・大丈夫だ」

否、靴底をすり減らしながら後退しており、どうにかぎりぎりとい

う所で腕でガードしたようだ。

しかし、瑠香は攻撃の手を緩めない。その狙い全てが、人体急所。それを、佐奈は受け流す。

「皆を殺した気分はどうだった？楽しかった？血をまき散らし、もう二度と会えなくなった時、どんな気持ちだった？私の兄さん殺してざまあみろって思った？ねえ、どうなのよ!!」

「くっ……うう……」

重い一撃が、佐奈に襲い掛かる。

鋭さもさることながら、その一撃一撃が凄まじい重さを誇り、打撃を受けた場所に、衝撃を残す。

(まずい……佐奈さんの動きが重い……)

その上、佐奈自身も動きが鈍い。

それに、今にも、泣きそうだ。

膝横に、ローキックが直撃し、膝をつく佐奈。そこへ顔面に向かって飛び膝蹴りが炸裂する。

「があッ!」

防ぎきれなかったのか、吹き飛ばされる佐奈。

「くうあ……」

「佐奈さん!!」

鼻を抑えて悶える佐奈。

だが、そんな佐奈の上に覆いかぶさり、瑠香は見下した。

「ねえ、どうなの?」

「く……あ……」

「皆の大切なものを奪って、期待を裏切って、どんな気分だったの?」
糾弾の言葉。それが、佐奈に深く突き刺さる。

「ねえ……答えなさいよ!」

胸倉をつかんで、顔を近づける。佐奈は、腕で顔を隠したまま。

だが、やがて――

「……最悪だ」

僅かに漏れた泣き声と共に、掠れるような声で、そう呟いた。

次の瞬間、瑠香の拳が、佐奈に叩きつけられた。

木の板が割れるような音。そして――

「・・・そう思うなら・・・もう二度と、私たちの前に出てくるな・・・!!」

拳は、佐奈の顔のすぐ横に叩きつけられていた。

その言葉を、最後に、瑠香は立ち上がって佐奈に踵を返していく。

「今回は、世界の終わりとかそんな話が持ち上がったから教えるけど、これが終わったら、もう六道とは縁を切りなさい・・・」

そう告げると、背後に控えていたであろう男に、「あと、よろしく」とだけ言つて、さつさとどこかに行つてしまう。

そんな、瑠香の後ろ姿を見届ける幸奈の耳に、騒がしい訓練の音に混じる僅かな泣き声が聞こえた。

それは、佐奈の泣き声だった。

今度こそ、何もかもを失ったかのような、そんな、絶望の淵で漏らすような、そんな泣き声。

床の上で情けなく泣くその姿が、幸奈には、あまりにも、哀れに見えた。

ほぼ八連撃の斬撃が、八方から襲い掛かる。

「う・・・っああ!!」

それを園子は研ぎ澄まされた感覚で全てを凌ぐ。

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

両腕に伝わる、重い連撃。

それが腕を伝い、体に染み込み、やがて足に来て、がくがくと笑いだす。

「く・・・うう・・・」

崩れそうになった足を槍でどうにか支える園子。

都合、二十四撃。

先ほどの技、『八艘飛び』なる技を、今までで三回、園子に向かって

放っている。

園子は脂汗をにじませて、こちらを見据える。

視線を外せば、夏凜と芽吹が不完全な『鬼気・極限羅刹』を発動させては打ち合っている。

二人とも、凄まじい程の勢いで剣を打ち合っているの、常人では手が霞んで見えるほどだろう。

そして、園子に視線を戻し、春信は改めて実感する。

(貴方の怪訝通りでしたよ・・・園子は・・・)

春信は、どうにか立ち上がろうとする園子の姿を見た。その視線は、何かを憐れむかのように細かった。

園子が、槍を構える。

「・・・園子」

「ハア・・・ハア・・・何？春信さん」

「もし、この二週間の間で俺に攻撃を当てる事が出来なければ、お前はここに残れ」

そうして、一日目が終わった。

山奥にて。

「え、園子を置いてく？」

「このまま春信に一撃を入れられなかったらな」

山でとってきた魚を竹串に差し、木で焚いた火で焼いたものを頬張りながら、向かい側に座る辰巳の言葉に、風はそう驚く。

「お前の実力は、今の園子を遥かに凌ぐほどの伸び代をもっている。この二週間をもつてすれば、お前は確実に園子を超えられるだろう」
「園子を・・・超える・・・」

実感が湧かないのか、自分の手を見ながら、そう呟く。

「実感は、今は感じなくていい。ただ、健康には気を付ける。体調管理を怠ればその瞬間、お前は戦線から外れる」

「それもそうですね・・・はむ・・・」

魚を頬張る。

「しっかし、この二週間で一気に野生児になりそうね・・・」

「もし生活が困窮して家を売り払ってしまった時は役に立つ知識だ。覚えておいて損はないぞ」

「そうね。ありがとう」

ふと、風は思う。

目の前にいる十七歳ぐらいの青年は、元はかなりの強面の五十代の見た目で、そして本当は三百歳の長寿なおじいちゃんだということ、とてもそうとは思えない。

「俺の年齢について気になるか？」

「なんでわかったし・・・」

「どっちかっていうと、体質の所為か・・・」

「体質・・・？」

「銀の使っている端末が、元は俺のものだという事は知っているか？」

「一応は」

「じゃあ、俺の体質が竜そのものだという話は？」

それには、風は首を横に振った。

それを見て、辰巳は語りだした。

自分の出生、三百年前の事、初代たちの事、千景の先祖である郡千景の事、そして、全ての始まりと今に至るまでの全てを。

そして、失ったと思っていたものが、突然目の前に現れた事を。

「・・・」

「だから、俺は、ひなたを取り戻す。そのために、俺はここにいるんだ」
握った拳にさらに力を入れて、辰巳は、そう言った。

その姿に、風はしばし呆気に取られて、一旦、その手に持つ魚を置くくと、そつと握りしめられた辰巳の手を覆った。

「！」

「あまり気を張り過ぎると、いざって時に失敗しますよ」

まるで、母親のように、優しい声で辰巳に囁く。

「それに、今のひなたさんは貴方の事を忘れている。ですが、きっと貴方が心から全力でぶつかっていけば、きっと思い出してくれますよ」

「……そうだな」

フツと笑う辰巳。

「……お前は随分と母に似ている」

「え？ 貴方の？」

「ああ、もうずいぶんと昔の事だから、顔も思い出せないが、お前のように、とても温かい人だという事は覚えている」

懐かしそうに、しかし悲しそうに語る辰巳。だが、やがて何かを振り払うかのように、風の方を見た。

「今日はそろそろ寝ろ。明日も早いうえに厳しくするからな」

「ええ。どんと来い！」

「ふっ、すっかりついてこい。俺の全てをお前に叩き込んでやる」

仮初の星空が、酷くすきんだ心に突き刺さる。

あまりの衝撃の連続に、味覚が麻痺してしまった今では、食事はもはや、ただの栄養補給の一環に成り下がっている。

それが、堪らなく虚しく、ぽっかりと空いてしまった胸の穴を、さらに広げているような気がした。

「翼君……」

失ってしまった、大切な人。自分が弱かったから、守れなかった、大

事な人。

隣に立つ。ただそれだけで良かった。だけど、自分は、彼の隣にすら立てていなかった。

(彼の優しさに、甘えていただけだ……)

そう思うと、もつと自分がみじめに思えて仕方がない。

(私が、あの時……)

「てい」

「あう!？」

突如として後頭部に衝撃が走る。

「くう……ぎ、銀!？」

いつの間にか、銀が後ろに立っていた。

「何辛気臭い顔になってるんだよ」

「あ、いや、その……」

「……翼の事か？」

悲しそうに、そう聞いてくる銀。

「……うん」

「そっか……須美って、いつもネガティブな方向に物事を考えるよな。

あれは自分の所為だ。こうすれば良かった。拳句の果てにはどうせ自分なんて。お前の性根はネガティブしかないのか？」

「うう……」

凶星なために何も言い返せない。事実、美森は他人が不幸になると必ず自分の所為だと自分自身を責め立てる癖がある。

実際、自分で壁を壊した時だって、まるで地獄からの呼び声のような自責の念を作り出して暴走したのだ。

否定するという方が無理だ。

「あんまり、気負い過ぎんなよ。ほら、この銀様に全部ぶちまけちまいな」

銀のその言葉が、妙に胸に刺さる。

しばし、迷った後に、美森は、口を開いた。

「……どうして、友奈ちゃんは何こうに行っちゃったんだろうね」

「そうだな。まあ、一番は千景が死んじまつたって事だろうけど……」

「その千景君が守ろうとした世界を、壊そうなんて、私はどうしても、理解は出来ても納得は出来ない。仮令、千景君がいない世界であつても、この世界を、千景君は守ろうとしたんだよ？なのに、どうして、壊そうとすることが出来るのかな……」

「……」

「どうして……翼君を、殺したのかな……」

美森の、拳に力が入る。

「……憎い」

その声には、怨嗟が込められていた。

言葉にすることで、初めて自覚した感情が、美森の胸からせり上がり、口から吐き出される。

「友奈ちゃんが……大赦なんかよりも……何かよりも……ずっとずっと……憎い……ッ!!!」

親友と思っていた人の裏切り。自分を救ってくれた人の嘲笑。いつでも自分を支えてくれた人の罵倒。

何もかもを壊された。友情も、友達も、恋人も、信じていた者によって壊された。何もかも、奪われた。

だから、堪らなく、憎いのだ。

「翼君にした仕打ちよりもっと惨いやり方で殺してやりたい……!!今生きている事が嫌になるくらいの苦痛を与えてやりたい……!!この手で、その命に止めを刺したい……!!アイツの、全てを、何もかも壊してやりたい……!!!……なのに……」

美森の膝が、崩れる。

「……憎み切れない……ッ!!!」

本当に、悔しそうに、美森は泣いていた。

「まだ、友奈ちゃんを信じたいって思ってる……きつと何かの間違いだつて、そう信じた……現実から目を逸らしたい私がある……もう、何が正しいのかが分からない……これから、どうすればいいの分からない……分からないの……」

嗚咽が、夜の闇に響いていく。

残酷なまでに静かな空間に、美森の泣き声だけが響く。

そんな美森の、小さくなっていく背中を、そっと抱きしめた。

「そっか・・・それは、辛かったな・・・」

「う・・・うううう・・・!!!」

「アタシも、翼を失って辛かった・・・だけど、須美は、アタシなんかより、ずっとずっと辛い思いをしてたんだな・・・」

結城友奈は、友達だ。だから、あの裏切りには、美森と同じように憎しみを抱いていた。

だけど、美森の場合は、記憶を失って不安だった時から、ずっとずっと助けてもらっていた。だから、そんな、恩人とも呼べる人間を憎もうにも、憎むことができないのだ。

憎みたいのに憎めない。そんな複雑な感情を、美森は、自身が思っている以上に巡らせているのだ。

おそらく、その気持ちに整理がつかないから、味覚が麻痺しているのだろう。

「銀・・・」

「ああ、今は、思いつきり泣いていいんだぞ・・・」

「銀・・・銀・・・ぎいいいん・・・!!!」

銀の顔を見上げる美森の顔は、何かに縋りたい程に、今にも、壊れてしまいそうなほど、弱々しそうだつた。

だから、その思いを受け止めてあげる事にした。

美森の、辛い泣き声が仮初の夜空にこだまする。

「・・・あれ？そっか？園子さんには？」

食堂にて、樹が園子がいらない事に気付く。

「いないのか？」

その質問に明日香が聞き返すように答えた。

「ええ・・・」

「確かに、園子さんのお姿が見えませんかね……」

夕海子も、園子の不在に気付く。

今、この場、というよりは、席にいるのは、樹、明日香、夕海子、信也、真武郎の五人だ。

「東郷と三ノ輪は先に飯食って外に行ってたが……」

「何かあったのか？」

そこで、夏凜と芽吹が信也の後ろをおぼんをもって通る。

「あ、三好に楠。乃木がどこにいるか知らねえか？」

「え、園子……？」

すると夏凜と芽吹の顔が曇る。

その事に首を傾げる一同。

夏凜と芽吹は、一度顔を見合わせると、やがて彼らの座る机につく。

「……今は、探さない方がいいかもしれないわ」

「え……」

夏凜の、神妙なその言葉に、芽吹を除いた全員が啞然とする。

「かなり荒れてるわ。今近付けば、槍の餌食になるかもしれないわね」

「何があつたんだあの人に……」

「……今回の作戦に関わる事よ」

夏凜の言葉は、あまりにも重かった。

場所は変わって、そこは訓練場の一角。

何かが落ちる音が静かな訓練場に響き、その根源には、四つん這いになって息をあげている園子の姿があつた。その傍らには、木製の槍。

汗を垂れ流し、今にも泣きそうな表情で、自分の手を見つめていた。

「ハア……ハア……ハア……嘘だ……」

信じたくない、信じられない。

でも、あの結果が、その現実を否応もなく叩きつけていた。

「やだ・・・そんなの・・・やだあ・・・」
一人、絶望に打ちひしがれる少女が、一人いた。

園子の強さ

深夜、春信は、自室にて、六道家の者たちが送ってきたレポートを見ている。

どれもが、全ての勇者や防人たちの個人的な身体能力や性格、そして、才能について、事細かく記載されていた。

それを、一つ一つ、しっかりと精査していく。

そんな中、扉からノックが聞こえた。

「神代です」

「入れ」

振り向かずに返事を返した後、扉から、奏が入ってくる。

「進捗はどうでしょうか？」

「まず第一に、犬吠埼樹の才能は目を見張るものがある。対人戦に対する才覚、隠された凶暴性、そして、どのような状況下でも屈しぬ精神力と発想力。どれをとっても、戦いにおけるセンスはずば抜けているらしい」

「救導者の中では、どのような？」

「やはり磯部だろう。サッカーにおける持久力とキック力は申し分ないらしい。シュートを打つ際の正確さも見受けられる。だから、鍛えれば狙った場所を狂い変わらず蹴り撃つ事が出来るだろう。脚力はもちろん、そのあたりも鍛えていくらしい。命中性、といった所だろうか」

「そうですか・・・」

「・・・何か聞きたそうだな」

春信の言葉に、奏は一瞬驚いて、やがて、不安そうに春信に聞いた。

「・・・乃木、園子さんについてです」

「・・・」

「彼女は、この作戦に参加できるのででしょうか？」

奏のその問いに、春信はため息を吐いて、手に持っていた書類を机の上に置いた。

「率直に言って、このままじゃだめだ」

「それは、何故・・・」
「・・・園子はあれ以上、強くはなれない」

昼間――

「ど、どうして・・・」

一撃でも当てられなければ、作戦には参加させない。

そんな言葉に、園子は動揺を隠せなかった。

「そのままの意味だ。俺に一撃を当てる事が出来なければ、お前はここで待て」

「ふーん、そっか・・・」

改めて言われて、気持ちの整理がついたのか、園子は槍を構えて得意気に笑う。

「じゃあ、春信さんに一回攻撃を当てられればいいんだね」

その答えに、春信はため息をついた。

「そういう意味じゃない」

「え・・・？」

春信の言葉に、首を傾げる園子。

「夏凜」

「ん？何、兄貴」

突然、春信は夏凜を呼びつけた。

「十本だけでいい。園子と試合してくれ」

「え？別にいいけど・・・」

「園子もそれでいいな？」

「うん。春信さんが言うなら」

なんともなし崩し的に決まった夏凜と園子の十本勝負。
夏凜は当然のように二刀の木刀を、園子は木製の槍を。

「言つとくけど、手加減はなしよ」

「うん。どつからでもかかっておいで」

対峙する二人。

その様子を、芽吹は春信の隣で見っていた。

「・・・春信さん」

「なんだ？」

「これに、一体どのような意味があるのでしょうか？」

「見ていればわかる」

芽吹の疑問に、春信は、そう答えた。

一本目は、園子が勝利した。

突っ込んだ夏凜に対して突きを繰り出し、それを夏凜が避けて園子の懐に潜り込もうとした所で、足払いをかけた。しかしその一撃は躲され、飛んで背後に回った夏凜だったが、園子が槍の柄頭を後ろに突き出し、それを寸でのところで防御した所を、園子の裏拳が夏凜の顔を打ち据えた。そして、槍を突きつけて園子が勝った。

二本目も、園子が勝った。

やや夏凜が対応してきた所で、園子が知略を巡らせての勝利。

三本目も園子が勝ったが、そこで、芽吹は気付いた。

そして、決定的な事実が分かったのは、四本目以降だった。

十本目――

「ハアッ!!」

「うあ!?!」

夏凜の右の振り下ろしが、園子の槍を打ち据え、地面に叩き落とす。

そして、流れるような動作で左の木刀を園子の喉元に突きつけた。

ほぼ、瞬殺。

ここまできると、芽吹は気付いた。

「まさか・・・」

「お前の懸念通りだろう」

春信が歩き出す。

「ご苦労だった、夏凜」

「兄貴……これってまさか……」

夏凜も、気付いたようだ。

そして、園子も。

「理解したか？園子」

「う……あ……」

呻くように、声を漏らす園子。その両目は、春信ではなく、自身の、何もない掌に向けられていた。

四本目以降は、全て、夏凜が勝利した。

それも、回数を重ねていく度に、その決着までの時間が短縮されていった。

それは何故か。

園子には、もう、成長する為の伸び代がないのだ。

即ち——

「お前はこれ以上、強くなれない」

死刑宣告ともいうべき事実が、園子に叩きつけられた。

「どれほど鍛えても、お前はそれ以上強くなる事はない。どれほど研鑽を積もうが、お前の実力は、そこまでなんだ」

春信の容赦のない言葉が、園子に浴びせられる。

「いいか。その実力で、なおも敵と戦おうとするなら、せめて生き残る努力をしろ。後ろに控え、決して自分では突っ込まず、防御に徹しろ。最も、もはや完成したお前の実力では、奴らの攻撃を防ぎきれぬ保証はないがな」

それを最後に、春信は、もはや立ち上がれなくなった春信に背を向けて、去っていく。

夏凜は、項垂れる園子を心配していたが、自分が声をかけた所で、負かされた相手に慰められるなんて仕打ちをする勇氣はなく、仕方なく兄の後を追っていった——

園子は、いわゆる、伸び代が人より短いのだ。

例えば、同じだけの量の修行をしている人間が二人いた。一方は、十年でその修行を完了させてしまい、もう一方は十五年で修行を完成させた。

果たして、同じだけの量をこなした二人の内、どちらが強いか。

当然、後者である。

前者より才能のあった後者は、前者より強くなる事が出来、そして長い修行をこなしていったのだ。

結果、後者は前者に勝つことが出来たのだ。

常人が、十年修行する事でその体を完成させる事が出来るのなら、園子は、たった五年でその体を完成させてしまう体質なのだ。

無論、そんな修行をしていない一般人が園子に勝てるわけが無いのだが、だが、園子の実力は、その一般人に、修行されれば簡単に追い抜かされる程度の実力しかもっていないのだ。

そう、園子は、弱いのだ。

全ての乃木の血を受け継ぐもので、最も弱いのだ。最弱だ。伸び代があまりにも短い、無能の塊。

武道における才能においては、園子は、あまりにも弱い。

だから、辰巳は彼女を幼少から鍛える事にしたのだ。

仮令、頭が相手の動きに対応できても、体が対応できなければ、意味がないからだ。

頭脳は飛びぬけているのだが、武道に対する実力は、まるで足りていない。それが、園子なのだ。

だから、今の園子に向かわせるのは、みすみす殺されに行かせるようなものだ。

だから、春信は、園子を戦線に外す理由と、それを実感させることで、園子を戦いに参加させないようにしたのだ。

「そんな・・・」

「今回の一見で、園子はかなり焦る筈だ。後はそこを叩けばいいだけの話。対応は簡単だ」

冷酷に告げる春信。

その様子に、奏は、何も言えない。

春信の背中が、これまでにないほど、悲しそうだったから。

「……貴方は、どうして、彼女にそこまでするんですか?」

何気ない、質問。答えてくれるとは思っていない。だが、聞かずにはいられなかった。

何故、一人の少女の想いを踏み躪つてまで、そこまでするのか。

「……確かにな」

春信は、窓から見える星空を見上げた。

「俺のような人間が、勝手に一人の子供の人生を捻じ曲げるなんて事をしていい筈がない……だが、俺は、一人でも死なせない事が出来るなら、なんでもしよう。俺は、その為にここに……」

すでに、勇者となれる期限を過ぎた身での、変身をしたのだ。

「都合三回……満開を使えば俺は、解除した瞬間に死ぬだろう……」

「嘘……」

年齢^{期限切れ}越えによる変身は、本人の体に多大なるダメージを与える。春信でなければ、たった一回で今後の人生にかなりの支障をきたす程のダメージを負う事になる。

春信であっても、先の戦いによって一回消費して、残り二回という回数制限を設けられている。

元々、超人的な身体能力を持っているからこそ、春信は体にかかる負荷に耐えられたのだが。

「まさか……死ぬつもりなんですか……?」

「もはや俺には死ぬ前提以外の選択肢はない。あのジガという男は、俺でなければ対処できない……だから、俺には、勝って死ぬ以外の選択肢は残されていない」

拳を握りしめる春信。自分でも気付かない程の死が、すぐ眼前に迫っている。

だが、その恐怖は、これ以上誰かが死ぬという恐怖なんかより、ずっと

とずっと些細なものだった。

「もし、園子が限界を超える事が出来たのなら、俺はこれ以上何も言わない。話は、これで終わりだ」

また、書類の精査に戻る春信。

その様子に、奏は、悲しそうに眺め、やがて立ち上がってドアに向かう。

そのドアの前で、一旦立ち止まった奏は、

「最後に、一つ、いいですか？」

「なんだ？」

春信に背を向けたまま、奏は、春信に問うた。

「園子ちゃんの事、貴方は、異性としてどう思っていますか？」

その問いは、ちよつとした悪ふざけでもあった。同時に、意地悪でもあった。

「……死んでほしくはない、とは思っている」

「そうですか」

「アイツは、意外と、もろいがな」

「……そうですか」

それを最後に、奏は、部屋を出ていった。

翌日、二日目。

「うおおあああああああ!?!」

明日香を含め数十名は、今、樹に襲われていた。

正確には、樹が自らのワイヤーで編んだ鉄拳なのだが。

それが恐ろしい速度で逃げ回る武装した集団に襲い掛かる。

一人、また一人と無限に伸び続ける鉄拳の餌食となっていく、場外に出される。

「う、うめんなきー!」

その彼らに、樹は涙目で謝る。

「別に、謝る必要はないわ。うちじゃこれが普通だし」

そんな樹の横では一人の女性教官がそう呟いていた。

彼女は樹の訓練指導官。樹のワイヤーは樹の意思によって無限に伸び縮みする上に編んで何かの形にする事も出来る。その事は、すでにかつての美紀戦で実感はしているが、ここまで破壊力のある攻撃が可能とは思ってもよらなかったのかもしれない。

「ワイヤーつてのは武器としての攻撃力はいまいち、ただし、細くて丈夫な分、圧力がかかって、何かに括り付けた時の切断力は剣よりも強い。固いコンクリートなんかも、細さと丈夫さ次第では簡単に切断できるとよ」

「そ、そうなんですか・・・」

「ただま、貴方のワイヤーは破壊力もあるし応用力も高い。このワイヤーを使って結界を作るのもいいわね」

まさしく千変万化。樹の能力は、この場の誰よりも応用力があるのだ。

そして、今の訓練は、樹が同時に扱える五本のワイヤー全てを使つて編み込んだ拳『無限拳^{パンチ}（仮）』の操作を向上させる為のものだ。

そして、その標的として、体力と瞬発力を鍛える為に、男子のほとんどが参加していた。

「鈴木がぶつとばされたぞー!!」

「ああ!? 今度が高田が」

「馬鹿! 重なるな! まとめて吹っ飛ばされるぞ!」

「ちよ!?! おま、俺を楯にすんぐわああ!?!」

「何してんだお前らー!?! ちゃんと避けるお! 樹ちゃんに失礼じゃないかア!!」

「テメエは暑苦しいんだよ!?!」

「すいませーん!!」

襲い掛かる『無限拳^{パンチ}（仮）』。新幹線の如き勢いで迫る拳の一撃は、彼らを車にはねられたが如く、宙へと吹き飛ばす。

「謝つていても容赦ないわね・・・」

その様子に雅は顔を引きつらせていた。

「樹おねえさん、本当ならもつとすげーいよ」

「え」

だが、背後で美紀が呟いた言葉でさらに顔をひきつらせ、一方の美紀はボロボロの状態ながらも自分の担当の教官の所で行ってしまった。

「……あの子、どんだけ底が知れないの……」

その呟きは虚空へ消えていく。

毎日が、激動の日々。親の方には、事前に連絡が行っていたようで、特に気にせず、訓練に打ち込むことが出来た。

くじけそうになっても、結局は世界は終わってしまう。くず折れる度に仲間からの励まし（一部そう言う名の道連れ）もあり、誰一人としてギブアップする事無く、確かな実感の元に、彼らは訓練を続けていた。

そして、五日目の事。

美森は、廊下を歩いていた。

「んん……ああああああ……毎度思うけど、あの人たちのマツサージは友奈ちゃんにも劣らないわね……」

訓練の後、滋養強壯の効果のあるマツサージと漢方薬を飲み、恍惚とした表情となっている美森。

最近になって、この厳しい訓練にも付いていけるようになって、その実感が現れ始めてきた。このままいけば、間違いなく、奴らと対抗できるだけの力が手に入るかもしれない。

このまま、ついてこれずに諦めなければ。

ふと、目の前を一人の男子が歩いている事に気付いた。

(あれは確か・・・)

「磯部君」

「ん？ああ、東郷か」

声をかければ、案の定、信也が振り向く。

「調子はどうかしら？」

「絶好調、と言いたいところだが、マッサージ受けても体力が完全に回復する訳じゃねえし、明日も同じ事すんだろうなと思って思うと、気が滅入る」

「アハハ・・・」

確かに、この訓練は普通の部活動の猛練習よりもキツイものだ。元々勇者になった拍子に身体能力は向上している故にこんな激しいメニューを組み立てられたんだろうが、普段はただの一般人。精神的にはかなり堪える。

「でも、翼君は毎日こんなに厳しい訓練を続けてたんだもの。私はまだまだやるつもりよ」

「俺もそのつもりだ。このままやられっぱなしで終わるつもりはないからな」

そう言つて、信也は腰に手をあてて、

「お互い頑張ろうぜ」

「ええ」

互いに、そう頷き合う。

「つと、そうだ」

「ん？」

「お前、千景の事は名前で呼んでたんだろ？」

「ええ、そうだけど・・・」

「俺、というか、俺たちの事も名前で呼んでくれよ。なんか苗字呼びつてなんか距離あるからさ」

「それもそうね・・・あ、でも私は東郷って呼んでくれなきゃいやよっ」
「それは何故だ・・・」

「なんででしょう?」

美森自身もあまり分かっていないようだ。

「まあ、いっつか。じゃ、話しは俺から遠しとくから、頼むぜ東郷」

「ええ、任せて、信也君」

と、ここまでは良かったものの、ふと美森は、何やら信也の背後が薄暗くなっているような気がした。

よく目を凝らしてみると、壁の角から顔を半分だけ出してこちらを睨んでいる幸奈の姿があった。

「うううう・・・」

心なしか、唸っているようにも見える。

「・・・何してるの?稲成さん・・・」

「え?あ、幸奈じゃねえか、何してんだよ?」

振り向いて信也も気付く。

「うううううう・・・」

「・・・いや、マジで何してんだお前?」

心なしか、美森の方を睨んでいるように見える。

そうこうしているうちに、幸奈は角から出てきてすたすたと二人に近付くと、

「ん」

「え」

「あ」

信也の腕に抱き着いた。

「・・・私の」

そして、掠れるような声でそう呟いた。

どうやら、抱き着いた所で自分が今何をしているのかを自覚して、恥ずかしさのあまり口が回らなくなり、どうにか声を絞り出した、という感じだ。

「んん?」

「あらあら」

信也は何故そうなっているのか理解できていない様子で、一方の美森はそんな彼女の微笑ましい様子に生暖かい笑顔を送っていた。

「何をしているんですか貴方は……」

そして、その後ろから優が歩いてくる。

「あ、優ちゃん……」

「貴方に名前で呼ばれる筋合いはありません」

名前で呼んだ瞬間、まるで殺すような視線を向けられて意気消沈する。

「おい、別に名前で呼ぶくらいいいじゃねえか」

「貴方が許可しても私が許可した覚えはありません。そんな事より、乃木さんを見ませんでしたか？」

「え？そのつちの事？」

何故彼女の口から園子の名前が出てくるのか。

「そのつ……いえ、この際聞かないでおきましょう。先ほど、夜遅くまで訓練していたようなので、大人しく休むように言って休ませたのですが、どこか上の空の様でしたので様子を見ようと思ったのですが、どこにもいなくて……」

「部屋にはいないの？」

「それがいなくて。今、雅さんや奏さんが探してくれています」

「まだ風呂とかそんなんじゃないか？」

「だいたいんですがね」

どこか忌々し気な優。

「小耳にはさみましたが、あの人、これ以上強くなれないそうですよ」

「え？」

「は？」

そして突然吐き出された何かの事実。

「強くなれないって、どういうこと？」

「そのままの意味です。伸び代がどう、とか、そういうものが一切ないそうですよ」

「待って、それ、一体だれが……」

「夏凜さんたちです。大本は春信さんだそうですよ」

なんとという事だろうか。

まさか、こんな事になっているなんて……

「このまま、春信さんに一撃を入れる事が出来なければ、あの人は今回の戦いに参加できないとか」

「そんな・・・」

「まあ私は同感ですね。弱い人がついていった所で、足手纏いなのは事実なんですから」

「そのつちはそんな・・・!!」

「弱くない、といいきれますか？貴方も気付かないうちに乃木さんより強くなっているのかもしれないのに」

優の鋭い視線が美森に突き刺さる。

「今のあの人は強さに飢えています。自分より強い人を妬むようになってきているでしょうね。そんな状態で、今回の作戦に参加させてみてください——死にますよ。わりと最初の方で」

まるでそれが決まっているかのように、そう断言する優。

「貴方は、どっちを選びますか？共に連れて死なせるか、置いて行ってしまうか？」

「それ・・・は・・・」

「足手纏いを庇いながら、貴方の仇を討てますか？弱い者を守りながら、敵を倒す事は出来ますか？今回の戦いは、一人でも弱い人がいるだけで、その突かれて一瞬で戦線は崩壊します。戦いにおいて、どれほど弱点を補えるか、とは言いますが、正直言って、彼女は間違いなく集中して攻撃されます。攻撃が出来ないどころか防御もままならない彼女が、果たして、あの五人の攻撃を防ぎきれるかどうか」

手厳しい言葉が、次々に口に出される。

「なあ、優」

そこで信也が口を出す。

「なんですか？」

「本当に乃木の奴は成長していないのか？」

「先日、夏凜さんと乃木さんが戦ったようでした、結果は三対七で夏凜さんの圧勝のようです」

「その内の二回は乃木が勝ったんだろ？」

「ええ、最初の三回だけは」

まるで説明が面倒くさいかのように、優は語る。

「回数を重ねるにつれ、戦いが決着する時間は短くなつていったんです。それは、夏凜さんが戦いの中で成長している証拠ともとれます。それじゃあ、乃木さんは？」

そこまで言われて、美森、信也、幸奈の三人は気付く。

「一切成長していない・・・!?!」

「そう、こうして数値的な要因でも、彼女が成長していないのは事実。多少の動きは覚えられても、その間の対応を考えても、彼女の体はそれについていけずに一撃をもらう・・・ここまで言えばわかりますよね？」

もう二度と、園子があれ以上強くなる事はない、と。

「・・・」

「決断を、東郷美森さん。これは、彼女の未来を決める事です。連れていくか、連れて行かないか。全ては、貴方たち勇者部の判断にゆだねます」

冷たい、優の視線が美森に突き刺さる。

「ん・・・？」

「ん？どうした、幸奈」

「今、あそこに誰かいたような・・・」

誰もいない虚空を見つめ、幸奈は、そう呟いた。

そして翌日、乃木園子はゴールドタワーから姿を消した。

乃木

『だめだ』

電話越しに師から返された言葉は、それだった。

「ですが……！」

『悪いが園子の事は諦めろ。むしろ、いい機会だったのかもしれない。あいつは、これ以上強くなれない。そんな奴を連れて行けば、必ず死ぬ。今のアイツの実力では、あまりにも、生き残る確率は低い』

「……でも、このままじゃ、そのつちは……」

『元々、俺たち初代の世代が不甲斐ないせいで、お前たちにも戦わせてしまっているんだ。これを最後に、アイツは、戦いから離れさせたほうがいいかもしれない』

電話越しの辰巳の声は、何かを思い詰めているかのようだった。

『お前はどうする気だ？このまま園子を探すつもりならやめておけ。アイツが余計苦しくなるだけだ』

「……分かりました」

園子の実力では、あの戦いを乗り切る事は出来ない。それを理解してしまっている美森には、そう返すしかなかった。

もう、これ以上、友達が死ぬのが嫌だから。

受話器を置いて、溜息を吐く美森。

「須美」

ふと、声をかけられて振り向けば、そこには、今このゴールドタワーにいる勇者部の面々がいた。

「どうだった？」

「……探すのは、やめておけだって。これを機会に、戦いから離れさせたほうが良いって」

「そんな……」

樹が、驚いたように声を漏らす。

「ここに来て、戦力が減るのか……」

「上里家の動向はどうなの？」

「今、ここにいる以外の奴らが探し回っているようだが、まだ見つかった」

ていないようだ」

美森の質問に、春信が答える。

初日にあんな事を言っていたのだ。一人でも多くの戦力を投入したいのだろう。

だから、園子を全力になって探している。

「探すのはこっちに任せて訓練に集中しろっていう事ね・・・」

その言葉で、自分たちが置かれている状況を改めて再確認する。

園子は、武道においては逆の意味で非凡であっても、頭脳の方は凄まじい程だ。

寝ている状態でも指名された時の寝ぼけていても対応できる無自覚力はかなりすさまじく、勘の鋭さも勇者部の中では随一だ。

そう簡単に、捕まる事はないだろう。

「とにかく、俺たちは訓練に戻ろう。その方がいつかの為に確実だ」

春信はそれだけを告げて、踵を返して訓練場の方へ向かった。

夏凜、樹も、それに従ってついていく。

その様子を、美森はその場に佇んで見ている事しか出来なかった。だが、そんな美森の肩に、銀が手を置く。

「銀・・・」

「大丈夫だって。きつと戻ってくるさ。戻ってこなくても、きつと元気にやるよ」

「でも・・・」

「心配すんなって。アタシは園子を信じてるから」

その言葉で、美森はハツとなる。

そうだ。こんな所でくじけるような彼女ではない。

「・・・そうね。行きましよう、銀」

「おう」

今は、自分の事に集中しよう。園子が参加しないのならそれも致し方なし。

だが、それでも、自分は彼女を信じている――

沈んでいた意識が、浮き上がる。

何やら、足がとても痛いうえに、体の節々が痛い。

一体どうしたというのだろうか。

そんな痛みに苛まれながら、目を開けた。

目を開ければ、まず初めに目に入ったのは、薄暗い灰色の壁だった。

「……あれ」

硬い冷たい地面、水の流れる音、横——体が横たわっているから上から聞こえてくる、エンジンの音。

ここは、橋の下だ。

とにかく、置きなければ。地面に手をつけて、起き上がる。

気付くと、肘や膝を擦りむいていた。すでにかさぶたが出来て血は止まっているが、零れた血が硬いごつごつとしたアスファルトの上に附着していた。

腰について、背中をコンクリートの壁にもたれさせて、何故自分がここにいるのかを考える。

そして——

「……そうだ。逃げたんだった」

ぼんやりと、園子はそう呟いた。

自分は、ゴールドタワーから逃げ出した。

これ以上、強くなれない事を知って。足手纏いになると知って。だから、逃げ出した。

「春信さんを除いて、一番だつていう自信は、あつたはずなのになあ……」

いつの間にか追い抜かされていた。いつの間にか、遠い場所にいた。

日が経つにつれて、差がどんどん開いていくのを感じた。

一分一秒、たったそれだけで、どんどん引き離されていった。その現実を受け止められずに、我武者羅に槍を振るった。だが、届かなかった。

あまりにも、春信が強すぎた。作戦を考えて、どんな手段でも使った。槍の投擲や捨て身での突撃、自分が思いつく限りの戦術を春信にぶつけた。

でも、ダメだった。

相手が強いのもある。だが、いくらやっても、自分の動きが向上する気配が見られなかった。

どれほど鍛えても、これ以上、強くなれる気がしなくなった。

三日ほどで、自分の強さが信じられなくなった。

春信相手に、まともに立ち回れなくなった。

いや、そもそも、自分の動きが、重かった。まるで自分の体ではないかのように重かった。

意識と体が、かみ合っていないかのように、重かった。

「潮時……なのかな……」

自分の手を見て、そう呟く園子。その手には、槍を振り回した事によってできたたこが出来ており、それを見るだけでも、かなり長い間、武術をやってきたのだという事が分かる。

だが、それももう終わり。これ以上、前に進めない事を続けていても、全て無駄なのだ。だから――

「あれ……」

突然、視界が霞みだす。

そして、頬を何か、冷たい液体が流れ落ちた。

「あれ……あれ……?」

慌てて拭いても、視界はたちまち霞み、その度に頬に何かの液体が流れ続ける。

そして、それはだんだんと勢いを増していき、園子も気付く。

それは、涙。

「なん……で……もう、全部……投げ出した……のに……うう……」

嗚咽は、漏れ続ける。涙は、溢れ続ける。

服装は、部屋着のまま。風呂を上がった後に、あの会話を聞いたから、そのまま飛び出してしまったのだろうか。

ここはどこなのか。どこへ来てしまったのか。ずいぶんと長く走ったような気がする。

「どこなんだろう、ここ……」

お金ももっていない。携帯もない。そんな、あまりにも生きる上で致命的な状態で園子は知らない街を歩いていく。

遠くにゴールドタワーは見えない。相当な距離を走ったようだ。いや、走り過ぎか。

「もしかして、隣の県に来ちゃったとか……まさかね……あ」
そんな事ある訳がない。と思っていた時期があった。

この看板を見るまでは。

「……高知県……絡久良……」

ああ、なんとという事だろうか。

どうやら自分は香川とは反対側にある高知に来てしまったようだ。それもかなり端の方。

「あれれ、私どうしてこんな所に……」

確か、ゴールドタワー飛び出した後、無我夢中で入って、何かの柵飛び越えて、何かが通っている所につつこんでそのまま頭が混乱したままで……

「……ダメだ。思い出せない」

酸欠状態だったのだ。脳の記憶能力が低下していたのだろう。それはともかく、

「おなか、空いた……」

それに、一晩中走った上に、今は昼時。腹が減るのは当たり前だ。
(どうしよう……)

お金はない。誰かに恵んでもらおうにも、知り合いがここにいるわけじゃない。

それに、もうあそこには戻りたくない。

「あ……」

つまづいて、地面に倒れる。

「うう……」

立ち上がる気力などどうの昔に無く、その上、意識が急激に遠のいていく。

自食作用とか、そういうものもあるのかもしれないが、それがあつたとしても、この飢餓状態はどうにもならない。

(いつそ……このままのたれ死んでしまおうかな……)

そう、生きる事すら諦めかけた時——

突然、抱き起されたかと思ったら、口に何かを突っ込まれた。

それには、程よい塩が振りかけてあつて……

「んん!!」

思わずそれを手で口の中に押し込んだ。

「そんなに慌てて食うと、喉につまらせるぞ。ほら、もう一つ」

あつという間になくなった白いなかをもう一つ差し出されて、それを無造作に搦んでは口の中に放り込んだ。

足りない。もっと、もっと欲しい。

もう一つないかと、見上げれば、

「すまない。今はそれしか持ち合わせていないんだ」

その人物は、申し訳なきそうにそういった。

その人は、女性で、肌が褐色色。髪の色は色素が抜けたかのように白く、そして何より目に入ったのが、その凄まじいまでの胸のでかさ。

(わっしーより大きいかも……)

「まだ何か食べたいなら、私の家に来るか?」

彼女はそう提案してきた。

その問いに、園子は、頷く以外の選択が出来なかった。

「娘が少し遠出をしていてな。家に一人だけで寂しかった所だったんだ」

「そうなんですか」

園子は結局、自分を助けてくれた女性の家で御馳走になり、満足感に浸りつつ女性の言葉に耳を傾けていた。

「もう一週間以上もたつが、だいぶ慣れてきたよ」

「娘さんは、どんな人なんですか？」

「頑固な子でな。それでいて、頑張り屋なんだ。ある人の為に一生懸命強くなるうとして、私のもつ技術を全て叩き込もうとしてやったよ」

「技術・・・何か武道をやっているんですか？」

「すでに潰れた道場にいたが空手を嗜んでいた。ちよつとある事があつて、全盛期のような力が出せないが、それでも娘にはまだまだ負けないさ」

「お強いんですね・・・」

「ああ。健気な良い子だ」

そう、嬉しさと寂しさが入り混じった笑顔で答える女性。

(私とは、大違い、かな・・・)

逃げた自分とは、違うのだろう。

そこで園子は、自分の出生について、振り返ってみた。

乃木家――

大赦におけるもつとも発言力を持つ三家のうちの一つ。

『何事にも報いを』を信条とし、厳格ある風格を持つ家である。

その家紋は『桔梗と彼岸花』。その理由は、乃木家初代を彷彿とさせ

る花とその友であつた者を想起させる花を一緒にすることにより、永遠に貴方を忘れない、という意味を込めているらしい。

その一人娘として生まれた園子は、幼少の頃より類稀なる才を發揮していた。

それ故にいい加減で、何事にもマイペース。人の話は聞かない上に無邪気で、おおよそ良家の娘とは思えないほどに素行は悪かつた。その証拠に、皿を割ろうが近所に向かつて悪戯して怒られてもまるで反省しないでさらなる悪戯に手を出す程だつた。

雇われた家庭教師の話も聞かない上、あまりにも散々な性格だつた。

そして、いつしか園子にはこんな話が立ち始めるようになる。

『彼女は乃木の娘として相応しくない』

彼女の陰口が屋敷内で立つようになり、そしてそれに敏感な園子は、その陰口を振り払うように、さらに大きな悪戯をするようになり、次第に園子の立場は危うくなって、彼女の両親も、養子を取ろうなどと言いつつ始めていた。

だが、それもいつの日か、終わりを迎えた。

勇者。

それに園子は選ばれ、そして、彼女の訓練指導官として、辰巳がやってきた。

そして、辰巳は、園子の事など一切無視して彼女を鍛え上げた。

これには流石の園子も根を上げて、そして泣いた。

泣き落としなどではない、本気の涙。あまりの厳しさに、とうとう耐え切れなくなつてしまつたのだ。

当時、辰巳の精神はすさんでいて、何度も死んでいく勇者たちの姿に心を痛めていた。それ故に、今度は死なせまいと、あまりにも厳しく過ぎたのだ。

そんなある日の事、辰巳が別の用事で数日家を空けるので、訓練が休みとなつていた日に、園子は、乃木家の中に設けられた辰巳の部屋に忍び込んだ。

鍵は盗んで開け、あまり物が置かれていない部屋の中で、何か仕返

ししてやろうと思っていたのだ。

だが、その中で、彼の日記帳を見つけた。

そして、日付を見て戦慄してしまった。

平成、と書かれていたのだ。

それは、この神世紀が始まる前の年号。即ち、三百年前の日付であること。

そして、その日記は一冊だけではなく、何冊もあり、その全てが、平成のある日から今日にいたるまでの三百年間の、彼の全てが記載されていた。

辞書を率いて、彼女は、それらを全て読み漁った。

食事をとるのも忘れて、ただひたすら、三百年分の辰巳の日記を読み漁った。

いつ、どこで、何をしたか。

今までの勇者が、どれほど死んだか。

そして、一人、また一人死ぬ度に、だんだんと無機質になっていく書き込みを、始まりから終わりまで、全部読んだ。

そして、最後のページを読み終えたところで、辰巳が帰ってきた。その時の事は、あまり覚えていないが、ただ、辰巳に抱き着いて、わんわんと泣いたのを覚えている。ごめんなさい、ごめんなさいと、何度も何度も謝ったような気がする。

それほどまでに、申し訳ない気持ちがいっぱいで、無知である事を、今までにない程に嫌った。

それから、人が変わったように園子は辰巳の指導を受けた。どれほど過酷でも、決して音を上げずに訓練を続けた。

悪戯もやめ、真面目に、おしとやかに（泥まみれになるほどの訓練を受けておいてなんだが）生活するようになった。

マイペースなのは変わらないが、今までよりはマシになったと思った。

そして、東郷美森こと鷲尾須美と三ノ輪銀、そして六道翼に出会い、ともに勇者として戦って、そして、三ノ輪銀が死んで（実際にはそうではなかったが）その後の戦いで満開をして、須美と離れ離れになっ

てしまい、ベッドの上での生活を強要されるようになってしまい、そして――

――三好春信と出会った。

出会いは、決して運命的ではなかったかもしれない。

それまでは、大赦の人間を毛嫌いして、近づく事さえも許さなかったが、この男だけは、どれほど脅しても臆するどころか、逆に自分を組み伏せてきたのだ。

それも、盗んだ勇者システムに対して、生身で対抗してきたのだ。その圧倒的さは、それなりの自身のあつた園子でさえも凌駕する程だった。

散々暴れた後で、取り押さえられた時に、自分は泣いて彼に問いかけた。

『どうして、そんな力があるのに私たちを守ってくれなかったの？』

それに対して、春信は――

『俺もお前と同じだからだ』

そのあと、訪ねてきた辰巳から、彼の事を聞いた。

彼が、自分より先代の勇者である事、その戦いの最中で友達を二人失った事、そして、友達を失ってからずっと一人で戦い続け、そして、一年間の停滞を作った事。

たった一人で、勇者何人分もの働きをした、歴代最強の勇者。それが、三好春信。

そんな、すごい人だったのかと、園子は驚いた。

そして、暴れたせいで春信の一日中の監視がなくなってしまった中で、あんなことをした園子に対して、春信は変わらず接してくれた。

その親切さが、無性に心を痛くしてきて、そして、同時に、だんだんと訪問する頻度が少なくなってくる翼では埋められない孤独感を埋めていつてくれた。

だから、園子は、春信に恋をした。

年が離れているのは分かっていた。

だけど、日に日にこの想いは募っていった。

塵も積もれば山となる、とはこのことを言うのだろう。

だが――

(もう・・・無理だよな・・・)

逃げてしまった自分には、その想いを伝える資格なんてないだろう。

「何かあったのか？」

「え・・・ああ、まあ・・・はい」

どうやら、表情に出ていたようだ。

「話してみるか？恋の話なら、一応これでも経験者だからな」

「娘さんがいるって言ってましたからね・・・」

ふふん、と自慢して見せる女性に、園子は苦笑する。

そして、何かを思うかのように、切ない表情で、園子は語り出す。

「その・・・実は、友達と一緒に、大きな行事をやるうって事で、えいおいおーでやってたんですけど、その、なんだか足手纏いみたいで・・・その、影で、そんな話を聞いちゃって・・・」

「それで、ここまで逃げてきたのか？遠路はるばる」

「ええ・・・まあ・・・」

「ふむ・・・」

俯く園子に対して、女性は顎に手を当てた。

「精一杯頑張ってたんですけど、限界を感じちゃって・・・実際に成長できなくて・・・」

「そうか・・・いわゆる、壁にぶつかってたって感じだな」

女性の言葉に、園子は、何も言い返せなかった。

事実、そうだったからだ。

思えば思うほど、自分が惨めに思えてくる。

(いつそ・・・消えてしまいたい・・・)

このまま、誰にも知られることなく、どこかで、静かに・・・

「なら、少し墓参りに付き合ってくれないか？」

突然、女性からそんな事を言われた。

「はい？」

「いや、今日が命日だな。本当なら娘と一緒に行きたかったんだが、生憎娘は外せない用事があつてな。だから、代わりに来てくれないか？」

「そんな・・・私、家族でもないのに・・・」

「いいからいいから。それに、あながちお前と関係がないとも言えないぞ?」

意味深な顔をする彼女に、園子は、きよとんとするほかなかった。

そうして連れられてきたのが、この街の墓地だった。

女性がまず立ち寄ったのは、『安座間』と彫られた墓だった。その目の前で、彼女は線香に火をつけ、そして両手を合わせた。

それに、園子も続く。

「私の夫の墓だ。娘が生まれる前に、事件に巻き込まれて、そのまま死んでしまったんだ」

「そんな・・・」

「だから娘は、写真の中でしか父親の事を知らないんだ」

寂しそうに、そう語る女性の背中を、園子はただ黙って見守る他無かった。

そのまま帰るのかと思ったが、彼女は、もう一つの墓に向かった。

それには、『不道』と書かれていた。

「あ・・・」

不道・・・間違い無い。これは、千景の苗字だ。つまり、この下には・・・

「これは、友人の墓だな。夫婦ともども、死んでしまったんだ。息子を一人、残してな」

「・・・」

「まだ小学生に上がったばかりのソイツは、街中から酷い虐めを受けていた。私は、そんな彼を助ける事が出来なかった。大切な、友の息子なのに・・・私は、守ろうとしなかったんだ・・・」

声が、僅かに上擦って聞こえた。

女性の顔は見えない。だが、手を顔にやって何かを拭うと、また喋り出す。

「知っているか？私の友人・・・不道千歳は、ある女の子孫なんだ。娘がやっている事を大昔にやっていた、我らが英雄・・・『久我楔』の子孫・・・」

「久我・・・楔・・・」

知らない名前だ。でも、自然と分かる気がする。

きつと、その人は、かつて千景がやっていた『救導者』をやっていたに違いない。

そして、英雄と呼ばれる程の事をしたのだろう。

「ちようど、その墓が、この奥の山奥にあったな。すまないが、そこまで付き合ってくれないか？」

「・・・分かりました」

女性についていくように、園子は、墓地の奥にあった山道を進んでいく。

やがて、日の光が差し込む、少し開けた場所に、それはあった。

小さな石で作られた、『久我』と彫られた、小さなお墓。

「実は、この話には続きがあつてな。久我楔、という名前は、彼女の生来の名前ではないようなんだ」

「そうなんですか？」

「ああ、その女の本当の名前。それはな——」

女性が、その名を口にする。

「——『郡千景』、っていうんだ」

瞬間、心臓が跳ねる。

郡、千景。

初めて聞く名前のはずなのに、なぜか、とても、懐かしくて、胸が、締め付けられる名前だった。

「知っているだろうか？乃木園子」

隣に立つ、女性がその名を告げた。

「え・・・!?!」

「千景から話は聞いている。写真も見た。だから、お前の事は知っている」

「・・・」

女性は、安心させるかのように微笑む。

「そういえば、自己紹介がまだだったな。私の名前は安座間椿。おそらく、そちらに邪魔をしている安座間優の母だ」

「ゆーちゃんの・・・!?!」

さらなる新事実を叩きつけられて、理解が追い付かない園子。

「え・・・!?!え・・・!?!」

「落ち着け。まずは整理しろ。ほら、深呼吸」

椿に促されるままに、園子は一度深呼吸をして一旦、頭を落ち着かせる。

「それで、どうして、椿さんは、私をここへ・・・」

「もし乃木と名乗る者が訪ねてきたら、ここに案内しろっていうのが内の昔からの言い伝えでな。理由は分からなかったが、千景から、先祖の親友がそんな名前をしているからって聞いていたんで納得していたんだ。そして、今ここに、お前がやってきた」

「・・・」

「園子、先ほどは逃げたと言わせてもらった。私はそれを撤回する気は無いし、お前自身、そう思っているだろう。だがな、それ以上にお前は勇気を持っている」

「勇気・・・?」

「ああ、逃げる勇気だ」

椿は、なんの躊躇いもなしに告げる。

「引けない時というものは確かに存在する。だがな、目の前に強大な敵がいた時、強い人間は逃げようとしない。だが、それじゃあダメなんだ」

園子の肩に、手を置いた。

「相手の力は、自分よりも凄まじく、決して勝てない。だから、殺され

てしまうかもしれない。そんな時、生き残る為にはどうすれば良い？
戦って勝つ？勝てる相手ではない事は明白だ。このまま何もしない？
それでは殺されるのを黙ってみているようなものだ。ならばどう
する？尊厳なんて何もかもを捨てて逃げるしかない。だけど、尊厳や
誇りを重んじる者にとつては、逃げるなんて事は出来ない。プライド
が許さないからだ。どんな危険な状況に立たされようとも、そんな人
間は決して逃げる事が出来ない。どんなことがあっても、自分の我を
貫きとおすだろう・・・だけど、それじゃあダメなんだ」

逃げたって良い。戦いたくないなら戦わなくていい。大切な人の
為に、生き残る事の何がいけない。

「時には、引く勇気も必要だ。仮令、踏み出してしまった一歩でも、そ
れが間違っているなら下がればいい。だけど、それは普通の人間には
難しい。だけど、お前は出来た。下がる事が出来た。それは、お前の
もう一つの強さだ。生きようとする意志なんだ。その意思是、この世
のどんな決意よりも、当たり前で強固なものだ。だから、それは、引
く勇気と同じで、進む勇気を遥かに強くしてくれる。お前は、そんな
勇気を持っているんだ」

「でも・・・私・・・!!」

自分は、逃げたのだ。全ての辛い事から、逃げたのだ。目の前にあ
る恐怖に敗北した。だから、ここまで・・・

「敗北は決して悪じゃない」

だけど、椿の声が自分の胸に響く。

「歴史は勝者が作っていく。自分の言い様に作り替えていく・・・確か
に、勝った者が正義、負けた者が悪なんて考えが芽生えるかもしれない。
い。だけど、負ける事は悪い事じゃない。負けて、生きているのなら、
次勝つための対策が考えられる。敗北は、そんな時間を作ってくれる
んだ。生きているなら、いつか必ず勝てる。勝てなかった相手に、必
ず勝てる。沢山の失敗から、人は学ぶ。引く事で得られることは、た
くさんあるんだ。逃げたなら、逃げたなりの成功が得られるんだ」

「逃げたなりの・・・成功・・・？」

「よくあるだろう？敵陣に乗り込んで、敵の情報を持ち帰ったから敵

に勝つことができた。一旦態勢を整えたから、相手と渡り合えた。ようはそういう事なんだ。お前は、そんな勇気を持っているんだ」

勇気。逃げる勇気。それが、私の勇気。

「……………」

園子は、自分の胸に手を当て、そして、久我楔の…………郡千景の墓を見た。

「…………ツ……………」

突然、知らない景色が頭の中を駆け巡った。

夕日の茜に照らされた、黒髪の少女の姿が、あまりにも綺麗だった

（今は…………）

呼び起された記憶が、誰のものだったかは分からない。

だけど、あの墓の下で眠る彼女の事を思うと、自然と、胸が痛んだ。

園子は、そつとその墓の前で膝をついた。

「…………あの時は、守れなくて、ごめんなさい」

そして、心の奥底から浮かび上がった言葉を、園子の声で、別の人の意思で告げた。

あの塔から、逃げたから、ここに來ることができた。

逃げたお陰で、憂いを晴らす事が出来た。

逃げる事で、新しい出会いを得た。

「……………椿さん」

園子は、立ち上がる。そして、振り返って、椿に告げた。

「私——行きます」

覚悟

園子が失踪して三日……相も変わらず上里家主導による六道家による搜索は続いているが、いくらなんでも痕跡が無さすぎた。

「そのつち……」

青い空を見上げて、美森は、いなくなった親友の名を呟いた。その直後、彼女が身を隠していた木にいきなり矢が突き刺さる。

「わ!?!」

「余所見とは良い身分だな」

亜門優理である。

「亜門君……!!」

次の矢が飛んできたことを予想し、走り出す美森。

そして、矢筒の中の矢を引き抜き、次の矢が飛んでき所を屈んで躲し、態勢を戻すとともに矢を番えて矢を放つ。

「うぐっ!?!」

確かな手応え。様子を見に行けば、そこには地面に仰向けに倒れている優理の姿があった。

その傍には、矢先にゴムのついた矢が落ちていた。

「今日は私の勝ちね」

「くそっ……」

そう吐き捨てる優理に苦笑する美森。

ここはゴールドタワーの近場にある森の中。ここで二人、というよりは、射撃武器を主とするものは、ここで実践訓練をしていた。

集団の連携よりも、個人の成長。

それ故に、行うのは常に一人でのタイマンかバトルロワイアルだ。

「他の皆は終わったかしら……?」

「さあな」

「それなら心配いらねえぜ」

ふと、上から声が聞こえた。

見上げれば、そこには、なにやら目つきが鋭い山伏しずくがいた。

「シズクの方が」

「おうよ。それよりも、早くゴールドタワーに戻れとのお達しだぜ」
「何かあったの？」

美森が聞くと、シズクは真面目な顔で答えた。
「乃木の奴が帰ってきた」

数分後。

ゴールドタワーにて、乃木園子は帰還していた。
電車を使って丸一日を使ってここに戻ってきたらしい。
騒然とする広間の中で、乾いた破裂音が一つ。

「……」
美森が、園子の顔を引つ叩いたのだ。

園子は、何も言わず、美森は泣きそうな顔で園子を睨んでいた。

「……どれほど、心配したか……」
「……うん、ごめんね、わっしー」

園子は、笑ってそう返す。

その笑顔を見て、美森は、園子に抱き着く。

「……おかえりなさい」

嗚咽を漏らす美森の背中を優しく撫でながら、園子は、目の前に立つ春信を見た。

「……春信さん、一試合、お願いします」

「……いいだろう」

「ただし」

そこで、園子が付け加えた。その内容は――

「……真剣でお願いします」

対峙する、園子と春信。

「何考えてんのかな園子の奴は……」

額に手を当てて頭を抱える夏凜。

その理由は、二人の持つ得物にあった。

春信のは、真正正銘の真剣、それに対して、園子も本物の刃のある槍を装備していた。

防具も無く、ただ相手の命を刈り取れる武器を、互いに持っているという事実がそこに存在していた。

「両者、真剣による一騎打ち……下手をすれば、どっちかが死ぬかもしれない……いいえ、自分が死ぬかもしれないってわかってるの……!?!」

「それでも、そのつちはそう言ってきた。きつと、何か、あるんだと思う」

夏凜の横で、美森は、穂先を春信に向けて構える園子を見つめた。

「戻ってきたんですね……」

一方、優は呆れ半分にその戦いを見ていた。

「戻ってきて残念か？」

「何を得たのか知りませんが、こうして死に戻ってきたあの人に、愚かだと馬鹿にしてるだけですよ」

「お前は相変わらずだな。小学生とは思えねえほどの冷酷さだよ」

「言っってください」

そっぽを向く優に、信也は苦笑する。

それでも、優は優しいのだ。その名に相応しく、冷たさの中に、確かな優しさを持っている。

(さて、どうなるかな……)

最悪、血を見る事になるかもしれない。それでも、この戦いは、誰にも止める事は出来ない。

そして、園子と対峙している春信は、

(なるほど……何か、雰囲気が変わったな……)

今までの、あつけらかなとしたものでも、焦りに身を任せる姿勢でもない。

確かな勝算があつて、ここに立っている者の目を、園子はしていた。
(下手をすれば、こちらがやられるかもしれない・・・)

この際、春信は自分が真剣を持つているという事を忘れた。ここに彼女が立っている以上、彼女は、死ぬ覚悟があつてここに立っているのだらう。ならば、それに答ええないというのは、彼女に対する侮辱だ。その手にもつ刀を両手で握りしめて、春信は、園子と対峙する。

「……来い」

その、短い問いかけに、

「——参りますッ!!」

園子は、叫んで走り出す。

一直線に、真つ直ぐ突つ走る。

それに対して、春信は、全ての判断を体へと委譲。ありとあらゆる全ての攻撃を、思考を排して対応する。

体の節々が判断し、無情のままに対応する、武術の最奥。

それを以て春信は園子を迎え撃つ。

一直線に、園子は春信に向かって行く。槍を左に振り被り、ただ、真つ直ぐに——

春信の刃が、園子の眼前に迫っていた。

常人どころか、達人であつても防ぎようのない一撃。袈裟懸けに振り下ろされた必殺の刃が、園子の眼前に迫っていた。

もはや回避は間に合わない。このままいけば、刃は園子の右鎖骨を砕きながら左脇腹へ突き抜けていくだらう。

だが——

園子は、あろうことかその刃を弾いた。

左に振り被っていたはずの槍はいつの間にか春信の刃に潜り込ませていた。それで刃を頭上へ弾いたのだ。

春信の体がのけ反り、これには流石の春信も驚く。が、やはり歴代最強の称号は伊達ではなく、すぐさま態勢を立て直し、頭上から一気に園子の頭を叩き割るべく刃を光速で振り下ろす。

その刃が、園子の頭上に振り下ろされる——

——引く勇氣は、それ以上の進む勇氣をくれる。

園子は、そんな言葉を思い出し——槍を捨てて春信の胸元へ飛び込んだ。

刃を振り下ろすときには、手と体の間に、腕の分だけスペースが出る。園子は、そこへ飛び込んだのだ。

だが、何故槍を捨てる必要があった？拳の一撃か？

春信には、ありとあらゆる可能性を考えた。一体どんな、どのような攻撃がやってくるのか。

だが、来たのは、あまりにも予想外な一撃だった。

頭の後ろに、腕を回される。そして、引かれるがままに頭を引き寄せられ——

春信と園子の唇が重なった。

『なアッ!?!』

そんな叫び声が聞こえて、気付いた時には春信は天井を見上げていた。

一体、何が起きたと言うのだろうか。

自分は、一体、彼女に何をされたと言うのだろうか。

ただ、分かるのは、あまりにも衝撃的な何かをされたという事だけ。ふと、胸に温かいものが押し掛かっているという事に気付き、見下ろせば、そこには、金紗の髪をした少女の頭があった。

それは、もともとぞを動くと、こちらを見て、やがて、にへらと笑う。

「一撃、入れちゃいました」

何の悪びれもなく彼女に、どういう訳かくらくと来て。

「……アあ、そうだな」

春信は、初めて降参を受け入れた。

「俺の負けだ、園子」

「えへへ、やったあ」

起き上がる園子が、本当に嬉しそうにはにかむ。

と、そこへ、園子の両肩に別々の手が置かれる。

「ん？」

「いやー、まさか園子があんな大胆な行動に出るのは思いもよらなかったナー」

「そうねえ。私としてはやっとそのつちが自分の気持ちに正直になっ
てくれて嬉しいんだけどネ」

「わ、わっしーに、ミノ、さん……」

意味ありげに頷く二人の親友に、園子は顔を引きつらせて……
「……頑張れ」

そして、良い笑顔でそうサムズアップしてきた。

「~~~~!!!!うわああああああああ!!!!」

そして自分が何をやったのかを自覚して、顔を真っ赤にして、園子
は突如として逃走。そのままどこかへ行ってしまう。

「あらあら」

「仕方のない奴だな」

「悪魔かお前ら」

真っ黒い笑みを浮かべる銀と美森に若干引きつつ、夏凜も夏凜で、
自分の兄の事をからかいにいく。

「それで？自分を慕う少女からの猛烈なアタックはどうでしたか？春
信先生？」

「うむ……そうだな……」

「ん？」

片手を口元に当てて、頬が若干赤みがかっている。

「なに？もしかしてまんざらでもなかったとか？」

「ここで否定したところをさらに追い打ちかける、そう夏凜は思っ
ていた。

「……そうだな」

「……はい？」

だが帰ってきたのは全く予想外な返しで、立ち上がった春信は、ま

「お前に伝えたい事があって来た」

「え……!?」

全くなんの悪びれもせずそんな事を言つてのける春信。

それに対して園子は、一旦フリーズした後、

「——ええええええええええええ!? そ、それってまさかこ、こここ——
——ええ!?」

大パニックに陥っていた。

（ま、まっつて、まっつてくださいお願いここ心の準備ができてな、あああ
あ!! お、おしやれとかしてないしこんな場所なんてロマンのない、
いやいやそんな事を考えている間なんて——）

「園子」

「は、はい!!」

思わず、直立姿勢になつてしまい、春信から紡がれる言葉に、半ば
目をつむつて覚悟して待った。

「——俺は、今回の戦いで必ず死ぬだろう」

「……え?」

だが、放たれたのは、全く別の言葉で、その言葉の意味を、園子は
すぐには理解できなかった。

「年齢越えの勇者への変身は、穢れた存在であるがゆえに、拒絶反応に
よつて本人の体を崩壊させていく。その結果、一回の変身だけで、本
人は死に至つてしまう。俺の場合は、そんな柔な鍛え方をしていない
がゆえに、三回までの使用が可能だが、俺が相手にすることになるだ
ろうジガという奴に対して、昇華と満開を使わずに勝つことは不可能
だ。だから、お前の気持ちには答えられない。すまない」

本当に、申し訳なきように謝る春信に、園子は、何も言わなかった。

だが、と春信は続けた。

「もし、俺が死んだら、お前に看取つて欲しい」

それでも春信は、真っ直ぐな眼差しで、園子を見た。

「本当なら、俺は、誰にも知られる事なく死ぬつもりだった。夏凜を残
す事が心残りになるが、そうするつもりだった。せめて、ジガだけは
仕留めてみせると。だが、そんな時にお前のあの行動から、お前の気

持ちを知った。そして、俺は自分の気持ちに気付けた。馬鹿な話だ。まさかこんな幼い少女に、俺は心を奪われていたとは」

「はる……のぶ……さ……」

「だからこそ、俺はお前に看取られたい。どれほど生きる努力をしても、こればかりは俺の力ではどうにもならない。だから、奴との戦いを、お前にだけ見届けてもらいたい……それではダメか？」
そつと、聞いてくる。

その問いかけに、園子は、言葉を発する事が出来ず、俯く。

「……私は、春信さんの事が、好きだよ」

「……ああ」

「私は……春信さんに、死んでほしくない……」

「……そうか」

「……どうしても、死んでしまうの？」

「……そうだ」

「……そ……つか……」

酷く、小さな声が、聞こえた。

俯くその姿が、酷く、惨めに見えた。

「……その」

名前を呼ぼうとした、その時。

春信が気付かない足取りで、園子は春信の胸元に飛び込んだ。

「……!?!」

「……分かった。春信さんの戦いを見届ける。だけど、場所は、春信さんの隣が良い」
抱きしめる腕に力がこもる。

「春信さんの隣で、一緒に戦う。春信さんの隣は私のものだって言い張る。春信さんは、私の、乃木園子のもものだって、自慢する。私の持つ全てを、春信さんの為に使う。その我儘だけは通させてもらいます……」

「……ああ、分かった」

園子の声に込められた想いは、本物で、春信に、それを否定する事は出来なかった。

「それと・・・」

園子が、下から春信を見上げた。

「春信さんを・・・私に刻んでほしい・・・死んでも、もう会えなくなっても、忘れないように・・・貴方に、傷をつけてほしい。この体の奥深くに・・・」

涙の滲む眼差しで見つめられる。その眼差しに、春信は諦めるように目を細めて――

「・・・分かった」

帰還した園子は、目に見えるほど成長していった。

一分一秒の全てを糧としているかのように、恐ろしい速度で成長していった。

まるで、限界の壁を突破して、そこに溜まっていた水が一気に溢れ出るかのように。

まさに、勇者の家系たる、乃木の名に相応しい程の成長ぶりだった。

「・・・そうか、分かった、ありがとう。今度は、戻った時に」

通話を切り、ポケットにスマホを仕舞う辰巳。

ふと、後ろですさまじい音が聞こえたと思ったら、何かバキバキと音を立てて倒れる。

「・・・ふむ、大分使いこなせるようになってきたな」

大量に倒れる木々の上に立つのは、木刀を持つ一人の少女。その上半身は、サラシで胸を隠している状態のみで、その上半身から分かる

ほどの筋肉がついていた。

「師匠せんせいの教えが良いからですよ」

その少女はニツと笑うと、その木々の山から下りてくる。

「いよいよ明日だな」

「そうですね・・・」

その少女は、自分の手を見た。

剣ダコだらけになって固くなった自分の手を見て、握っては何かを思うように、表情を険しくする。

「よし、そろそろゴールドタワーに戻ろう。今晚はゆっくり休んで、明日に備えよう」

「はいー」

夕焼けに染まる空。

その空を見上げて、少女は、もういなくなってしまった愛しい人の事を思い出す。そして、次に、その人を殺した、後輩の少女の事を思い出す。

「・・・待つてなさいよ」

確かな怒りを滲ませて、少女は——犬吠埼風は、歩き出す。

「武器の手入れは出来てるかしら？」

「ん？」

明日香の自室に、芽吹が入ってくる。

「ああ、準備も何も万全だぜ。どっから来ても大丈夫だ」

そんな明日香の傍らにあるのは、巨大な二対の大剣。片方はおおよそ人が振るうものではないほど巨大な、鉄塊のような大剣、もう片方は、こちらは両手で振るうような大きなものだ。

これを、明日香は片手で振るう事が出来る。

「他の奴らにも声をかけてきたのか？」

「ええ、防人全員にね。貴方は最後」

「悪いな」

立ち上がる明日香。しかしその身長はお世辞にも高いとはいえず、むしろ低い。

立ち上がったって、まだ芽吹が見下ろすぐらいだ。

「これが、最後になるのよね・・・」

「ああ、この三百年間の戦いを、俺たちが終わらせるんだ。それに、今の勇者たちと一緒に戦えるんだ。わくわくが収まんねーよ」

「相変わらずね・・・でも、そうね。気分が高揚しているのは分かる」
自分の手を見る芽吹。この二週間で、大幅なパワーアップをした実感がある。

その証拠に、手の皮膚が、大分固くなっている。たった二週間でここまで行けるとは、流石六道家といった所だろうか。

「初めて三好さんに負けて、六道さんに惨敗して・・・そして防人隊のリーダーになって、世界の命運を決める戦いに参加している・・・勇者と共に、私たちも戦えるという事が、私たちが勇者と同列になったという実感を与えてくれる。貴方はどう思う？明日香」

その問いに、明日香は、いつものように、不敵な笑みを浮かべて。

「もちろん、勇者たちと一緒に戦えるってのは今までにねえほどわくわくする。だけどそれだけじゃねえ。俺たちが知らない力で同じことをしてたやつらが一緒に戦ってくれる奴らが、あんなに沢山いるんだ。俺は、その繋がりに感謝したい。この繋がりをくれた運命って奴にありがとうって叫びたいぐらいだぜ」

「何よそれ。ほんと、貴方は馬鹿ね」

明日香の物言いに、笑みを零す芽吹。

「でも、その馬鹿さ加減が私たちを・・・私を救ってくれた」

勇者になれなかった劣等感が、これまでにないほど自分を焦らせていた時期があった。

自分たちが勇者よりも価値のないもの、いや、人間としてすら思われていない事に腹を立てていて、そんな現状が許せなくて、他の隊員に八つ当たりのような事をしていた。

そんな中で、明日香が芽吹を止めてくれた。馬鹿な癖して、自分を

超える身体能力で負かしたあの日の事を、芽吹は忘れないだろう。

その時の言葉も、きつと忘れない。

『お前がどんな気持ちで防人やつてんのか知らねえけどよ、その気持ちを他人に押し付けんな！この馬鹿!!』

馬鹿だからどんな困難にも立ち向かっていける。馬鹿だから、理屈が通せない。馬鹿だから、絶対に諦めない。

その、諦めの悪さが、いつも防人たちを引っ張って、背中を押して、彼の勢いに皆がついていった。

自分も、その一人だった。

「明日香」

「ん？」

芽吹が、手を差し出す。

「私たちが、あのくそつたれな神どもをぶっ飛ばしてやりましょう！」

「へ、おうよー！」

その手を、明日香が叩きつけるように掴んだ。

「・・・結局、参加するんですね」

優が、ジト目で園子の背中を見ながらそう言う。

「うん。でもゆーちゃんこそ、まだ小学生なんだから無理しなくていいんだよー！」

「子ども扱いするなそしてその名前で呼ぶな」

「お断りするんよー」

「殺ッ！」

必殺の手刀が園子の頸筋に叩き込まれる———と思いきや、霞に消えるが如く、優の背後に回り込み、抱き上げる。

「わあ!?!」

「対天武術『陽炎』。まだまだ甘いねー」

「くああ!?この、離せ!!」

「丁度いい、そのまま遊んでもらえ」

「信也さん!」

同じく傍にいた信也がニヤニヤしながらその様子を見ていた。

「ちよ、助けてください・・・!!」

「お前は愛想が無さすぎるんだよ。たまにはそうやってかわいい所見せてやれよ」

「いやああああ!!舐められるからいやああああ!!!」

ギヤーギヤーと騒いで暴れる優。

しかし園子の拘束からは逃れられない。

明らかに急激な成長をしているお陰だ。

「んっふっふっ」

「ん?どうした園子?」

「そういういーすんも、ゆっきーにべったりされてるけどね」

「ぐっ!」

実際には、信也は幸奈にくつつかれていない。ただ彼女の視線が彼にまとわりついているだけである。

「愛されてるね」

「そ、そんなわけあるかよ。アイツはどっちかっていうと千景の方が好きで、あれはあくまで俺をからかっただけだろ?」

「うわ、君今までそんな風に思ってたの?なんかひくわ」

「ああ!」

否定する信也に対してディスプレイスってくるお風呂上りの白露。

「本気で幸奈の気が、千景にしか向いてないと思ってるの?」

「んだよ?なら誰に向けられてるっていうんだよ?」

「それは・・・」

「ちよっとストップ!」

「んむぐ!」

突如として口をふさがれる白露。

「んぐ・・・何をするか!」

「ストップだよしらっち、こればかりはいーすん自身が気付かない

といけないんだから」

「うーん・・・それもそうね・・・」

園子の手が口から離れる。

「結局誰なんだよ?」

「んー・・・気が変わったからおしえなーい!」

「な!?!どこいく!?!待てゴラ!!」

どこかへと逃げる白露を追いかける信也。

「んー、青春だねー」

「それはどうでもいいですけどさっさと降ろしてください三枚に下ろしますよ?」

「私は魚じゃないんよ」

「正論で返さないでください!!!」

むきーっ!と怒り頂点状態の優を抑えつつ、園子は、自分の腹のやや下あたりに触れる。

(私は生き残る・・・何があっても生きるよ)

誓いを胸に、園子は今を噛み締める。

様々な、少年少女たちの想いが巡る。

「・・・」

「よっ」

「あ、銀・・・それに、佐奈さんまで・・・」

ゴールドタワーのベランダにて、美森、銀、佐奈が会っていた。

「気分はどうだ？」

「大分」

「そうか・・・味覚の方は、大丈夫か？」

美森は今、味覚を失っている。千景の死、友奈の裏切り、そして、翼の死。その三つのショックがまとめて降りかかってきたのだ。無理もない。

そして、まだ回復なんてしていない。

「いえ、まだ・・・佐奈さんの方は・・・」

「突き刺さる視線の中でやる訓練は、流石に堪えるものがある・・・あの様子じゃあ、士道と会う事も許されないだろうな・・・」

士道とは、翼の兄の事である。

かつては佐奈が想いを寄せていた相手であり、向こうも、彼女に想いを寄せていた、いわゆる両片思いな関係だ。

佐奈は、大赦に収監されていた頃は手紙を出していたのだが、どういう訳か返事が返ってこず、何度も送っているのだが、今回の訓練の事で色々と察しがついた。

「そんな事は・・・」

「もう六道にはかかわるなども言われてしまったし、このまま一生独身で生きる事になるのかな・・・もしくは・・・」

その先は、声にならず、佐奈の喉奥に押しとどめられた。

「いや、今する話じゃなかったな。忘れてくれ」

「いえ・・・そんな事はありませんよ」

「そうですよ。もつと自分に自信もってくださいよ。佐奈さん綺麗なんだからさ」

「ふっ、そうか。ありがとう」

夕焼けに染まる空を見上げる。

「・・・私たちが負ければ、この空を見る事は、もうできなくなるんだらうな」

「そうさせない為にも、アタシたちがいるんです」

「そうです。そう簡単に終わらせたりなんかさせません」

「ああ、それは分かっている・・・私が心配なのは、お前たちの方だ」

佐奈の懸念。それは、結城友奈の事だ。

友奈が裏切り、翼と剛を殺した。

そうであっても、彼女は勇者部の一員。かつての仲間を、彼女たちが迷いもなく討つ保証はどこにもない。

「お前たちは、かつての友を倒す事は出来るのか？」

だから、佐奈は心配だった。彼女たちが、かつての仲間を、友を、殺す事が出来るのだろうか、と。

「・・・それは、分かりません」

答えたのは、美森だった。

「もし、あの友奈ちゃんに、まだあの頃の心が残っていたのなら、私はきつと、引き金を引くのを躊躇います。ですが、もう、あの頃の友奈ちゃんでなかったのなら、私は、きつとこの引き金を引くでしょう」
ぐつと拳を握りしめて、美森はそう呟く。

「私の担当が言っていました。迷えば迷うほど、たくさんの命が失われる。無駄になっていく。だから迷わずに引き金を引け、と・・・だけど、いざ友奈ちゃんと対峙した時、私は、引き金を引けるかどうか分からない・・・ですが、それと同時に、友奈ちゃんの答え次第では、私はきつと、鬼にもなれると思います」

その目に、迷いは無い。

「そうか・・・全ては、会った時に決めるか・・・分かった。今はそれでよしとしよう」

佐奈は、その答えに頷き、ふと語り出した。

「おそらくお前たち・・・讚州中学勇者部は、結城友奈討伐に出るんだろう」

「ええ・・・」

「ならば、私たちは他の奴らの相手をする。お前たちは、他の事を気にせずに戦えばいい」

「それは・・・ありがとうございます・・・」

言葉に、力が乗らない。やはり、まだ迷いがあるのだろうか。

そんな中、背中をバンツと叩かれる。

「うあ!?!」

「そんな気負うなよ。それじゃあ、いざって時にやられちまうぞ」

「銀……」

「お前が迷う理由もわかる。だけど、いつまでも迷ってたって答えは出ないぞ」

銀が、美森を見つめる。

「お前がちゃんと真っ直ぐ引き金を引けるように、アタシがお前を守ってやる。翼の分も、兄貴の分もアタシがお前を守ってやる。だから、お前はお前の思うがままに引き金を引けばいい」

「……そうね。その時はよろしく頼むわね、銀」

「おう！大船に乗ったつもりでいろ！」

美森の返しに、銀は大いに笑って返す。

その様子を、佐奈は微笑まし気に見つめた。

（溜香……私とお前との道は分かたれてしまったが、彼女たちは、きつと私たちのようにはならないだろう……きつと、大丈夫だ）

決戦の日は、もう目の前——

「お姉ちゃん！」

「うわっと」

ゴールドタワーへと帰還した風に樹が抱き着く。が、飛び込んだ腹が異常に硬い事に思わず顔をしかめる。

「かたっ!？」

「あっははく……まあ散々鍛えられたからね」

「そのようね。それでこそ我等が部長よ」

そんな風をねぎらうように、肩に手を置く夏凜。

「師匠せんせいお帰り〜」

「お疲れ様です」

「ああ」

そして、辰巳の事も、園子と春信が出迎える。

「ん〜」

「ん？どうした園子？」

「ヤング師匠せんせいがなんだか新鮮だなくって思っ

「そう言われると、そうかもしれないな」

「でも春信さんには負けるけどね〜」

「言ってくれるな・・・」

神樹に若返らせてもらった故に、見慣れていないのが現状だ。

しかし全盛期の實力は伊達ではない。彼もまた勇者の一人なのだから。

「おかえりなさいませ、犬吠埼風様、足柄辰巳様」

『!?』

だが、そこで仮面を被った女性が、彼らに声をかけた。

「装備の最終調整の為、広間にいらしてくださいませ」

「そうか、分かった。行こう」

そのまま、一同は案内されるがままに広間に案内される。

広間ではすでに他の者たちは着替えていて、残すは勇者部の面々だった。

用意された端末で変身を施し、一同はそれぞれの装備を確認していた。

「ん？なんか武器の形が変わったような・・・」

風の大剣は、形状こそ変わっていないものの、鍔の部分にリングと円盤のようなものが取り付けられていた。

「説明書きによると、お前の剣に四大元素の力を込めていて、円盤を回せばそれぞれの属性に変化させることができるらしい」

唯一下手な変身が出来ない春信が説明書きを読み上げてそういう。「へえ、そんな機能つけてくれたのね。攻撃の手段が増えるというもののね」

片手で軽々と振り回す風。

「お姉ちゃん・・・少し見ない間に凄い事になってる・・・」

そんな姉の姿に若干顔を引きつらせつつ、樹は自分の二つになった手首のリングを見る。

さらにワイヤーの数を増やして、手数を増やした仕様らしい。合計十本。一本だけでも拳を作る事は出来るが、それでは威力が弱いために片方全てのワイヤーを使わなければならない為に、これは若干助かったりする。

「ふっ、ほっ」

夏凜と銀はもともと春信の端末を受け継いできたのだ。

ただ、代を重ねるにつれてコンセプトは変わり、初めの春信は火力担当だった故に、爆発的なエネルギーを斬撃として飛ばす事を重視した近中距離戦闘を可能にした仕様、次の銀はその火力を斧による攻撃時のブースト仕様、そして最後の夏凜は最も負担が少ない、火力を刀に圧縮して炸裂させるというものだ。

今回、銀の斧のブースト能力はそのままに、そのブーストを強化、一方の夏凜の刀は二人の能力を受け継いでいる。即ち、ブーストと飛翔斬撃、そして炸裂爆弾の使用が可能というフル仕様である。

一方の園子は槍だけでなく、春信と共に戦うという事で、勇者装束の強化も施されている。

丈夫さだけでなく動けやすくしており、槍も切れ味と頑丈さも底上げされている。

それであるのになりにかなり手に馴染むらしい。

そして、辰巳は、かつて使った『炎輪炉心機関』と『零式吹雪撃鉄』を強化した、『氷火竜式能動強化・改』が新たに装着されていた。

他の者たちも、自分たちの纏う力の強化仕様に馴れようとしていた。

そんな中、檀上に、上里ひよりが立つ。

「二週間の訓練、お疲れ様でした。よって、これより、敵勢力地への反抗作戦を開始します」

時刻は正午。

敵地への突入が始まる――

神樹の結界の上空にある、宮殿にて。

ヒュアツインテが、ある部屋に入る。

そこには、ブルーメ、ラヴァンド、ジガ、そして友奈の四人がいた。

「遅いぞヒュアツインテ」

「申し訳ありません。少し準備に手間取っていました」

「女は準備に時間がかかるって奴？そこにいるソイツは誰よりも先にここにきてたぞ？」

「褒めてもなにも出ないよ？」

「褒めてねーし」

「喋るのはそこまでにしておけ」

ジガの一言で、一同は黙った。

「四神官と処刑衆が全滅した今、次の戦力の補充まで時間がかかる。それまで、我々はこの宮殿を護衛しなければならぬ」

「攻めるっていうのはないの？ほら、向こうは主力の二人を失っている訳だし」

「今からでは無理でしょう」

ラヴァンドの物言いにヒュアツインテが口を挟む。

「どうやら、向こうはこちらへの反攻の準備が整ったようです」

「ほう、あの虫ケラどもが、随分と殊勝な事をしてくれる、自ら死にに来るとは」

ブルーメが嘲笑う。

「へえ、皆来るんだ。嬉しいな」

その中で、友奈は嬉しそうにはにかむ。

「笑いごとではありませんよ？ベリアル」

ヒュアツインテが、そんな彼女を咎める。

「はい」

「敵がこちらに攻めてくるという事は、それなりに勝算があるという事だ。油断はしない事だ」

ジガ、諭すようにそう言う。

「俺たちは、この罪人たちを迎え撃つ。この愚かな罪人どもに、現実というものを教えてやれ」

攻めてくるのなら好都合。こちらから攻める手間が省けるというもの。

ならば、徹底的に叩き潰してくれよう。

自分たちが、どれほど愚かな事をしているのかを、この手で思い知らせてくれる。

「分かったのなら、それぞれ準備に入れ」

ジガの一言で、それぞれがそれぞれの準備に入る。

「ベリアルさん」

ヒュアツインテが友奈に——ベリアルに声をかける。

「なあに？ヒュアちゃん」

「今回の戦い、手加減はしないでくださいね？」

「しないよ？何を言ってるの？」

笑みに隠れた殺気が、ヒュアツインテの叩きつけられる。しかしヒュアツインテは怖気づくどころかビビる事なく、ベリアルの横を通った。

「ならいいです。頑張ってくださいね」

ベリアルを背に、ヒュアツインテは去っていく。

ヒュアツインテがやってきたのは、ただっ広いドーム状の空間の中心に、やや塔のようなものの上に玉座がある、無駄に広い部屋。

ここはこの城の防衛システムを司る部屋。ヒュアツインテは、複数の剣を同時に操るがゆえに、この防衛システムも全て一人で操作できるのだ。

その玉座に、ヒュアツインテが座る。

「さあ、来てくださいいな。可愛くて可哀そうな罪人さんたち」

城の防衛システムを全て掌握し、ヒュアツインテは、これから来る敵を迎え撃つ。

決戦が、始まる――

飛翔攻防戦

結界上空の城にて。

「では、ラヴァンドさんとジガさんは私と一緒に対空戦闘をして、ブルーメさんとベリアルさんはもし侵入された際の防衛線として機能してもらおうと」

「そうだ」

空中に現れたモニターのようなものを操作しながら、確認するように聞き返すヒュアツインテに、ジガはそう返す。

「でもいいのですか？ 貴方も外に出て」

「問題ない」

「そうですか」

ヒュアツインテはそれ以上聞かなかった。

聞いたところで、この男は自分たちの仲では最強なのだ。

仕損じる可能性がどこにあるうか。

「では、今から城壁に転送いたしますので、準備をお願いしますね」
「ああ」

操作一つでジガを城壁へ転送し、索敵魔術に何かないか調べる。

今、彼女たちの主神^{ホス}であるマガアクルスはこの城の奥深くにいる。

おそらく、来たる日に備えての戦力の増強を図っているのだろう。

そう思いつつ、索敵装置から対空兵装について何か異常はないかと

探っていると――

警報が鳴った。

「来ましたか」

ヒュアツインテの顔が愉悦に歪む。

「さあ、来なさい。哀れな罪人さんたち」

戦いが始まる――

敵は、複数の飛行物体を使って飛んできていた。

それは、いわゆる旅客機というもので、それが合計十六機、楔型陣形で突っ込んできていた。

その先頭にそって三角に分かれる位置にある機体に、敵はいた。

正面には辰巳が立ち、その右には真斗、左に風、そのまた右には佐奈で左に弘が立っていた。

「なるほど、防御力の高いものを外に配置して、他の人は全員旅客機の中・・・なかなか考えましたね。そして数を用意したのはどれに乗っているのか悟らせないためでしょうね。その証拠に全てに索敵妨害の術式を施しているようですね。それもとびきり強力なのを」

その証拠に、ヒュアツインテの使う索敵魔術が機内まで索敵できないようになっていた。

「ですが、わざわざそんな中途半端な配置にしたという事は、人がいる所に乗っているという事ですよね」

基盤を操作する。標準を、一番先頭にいる機体、即ち、辰巳が立つ機体に主砲を向けて――

「では、さよならです」

砲撃した。

その砲撃は、十二と一の騎士を元にして作られた、全十三個の棺。その威力は、その騎士が使っていた聖剣の生み出すエネルギーに匹敵し、その砲撃を一度浴びれば、一瞬にして灰塵と化す、強烈な砲撃である。

その内の一つが、今、辰巳に向かって叩きつけられる――が、
「ハアッ!!」

気合の一声と共に、砲撃が割れ、後ろに向かって通過していく。

砲撃を防いだのは、楯。

かつて、とある神の妻の一柱にして、神の籠る家屋の鉄壁の女性、と

言われた、守護の神の力が籠った楯である。

その楯を回転させ、さらに竜の力を込めた事によって防御力は倍増、その上、バリアまで張って砲撃を凌いだのだ。

「……よし」

防御は、可能だという事が証明された。

そして、一体何が対空兵器なのかを知る事が出来た。

辰巳は、横にいる美森に視線で合図を送る。

それに美森は頷き。

「銀、出番よー」

そう連絡を送った――

「よもや防ぐとは……忌々しい限りですね」

顔は笑っているが目が笑っていない状態で防がれたと実感するヒュアツインテ。

「さて、次はどのように……ん？」

ふと、飛行機群の後方から、凄まじい勢いで何かが近づいてくる。気になってモニタを出してみると――

「これは……!?!」

楔型陣形で飛ぶ飛行機群の上空を、何かが通過する。

それは、白い体を持ち、否、骨の体であり、翼と腕は一体化し、武骨な足を持ち、長い尻尾と長い首を持つ、それは――まさしく、ドラゴンであった。

『○○○○○○○○○○○○!!!!』

その竜は咆哮し、翼にある噴出孔から熱量によるブーストをして白に一機に突っ込む。

「ひゃっほう!!」

その上で、園子は槍を振り回しながら手綱を握っては叫びながらも暴れる竜を立派に制御して城に突っ込んでいく。

この骨の竜は、いわずもがな銀である。

『怪物化』モンスターモード状態では、銀の理性は吹っ飛んでおり、あるのは彼女に眠る野生と力に振り回される事によって起きる暴走状態だ。

目につくもの全部にぶつかり壊すような状態の彼女を、ではどうやって制御すればいいのか。

早い話、なるべく人が乗れるサイズになってもらい、手綱をもって馬のように操るしかない。こればかりは二週間で制御させることが出来なかったのだ。

そして、そんな彼女を制御できるのは天才的な感性を持つ園子と究極系の天才である春信のみ。

さらに、『怪物化』を発動させる際、ある程度のイメージをもって発動させればその形への変身も可能だ。

だから銀は、『怪物化・竜型』モンスターモード モデルドラゴンを発動させることにより、敵の対空兵装を破壊する役割を与えられたのだ。

そして、今は園子が銀を操っているが、実は園子に後ろには春信が乗っており、いざって時は春信が操作する事になるのだ。

銀が怪物化する際にもなう熱量によるジェットブースト。それによって戦闘機並みの機動力を確保した銀を、砲撃でとらえることは不可能だった。

そして、そのまま接近されて――

「まず一つ目ええええ!!」

棺に向かって突進する。

すると一撃でその棺は粉碎され、砕け散る。

「よしー」

「油断するなー!」

「ッ!」

春信の叫びに園子は慌てて前を見る。

なんともう一つの棺がこちらに狙いを定めていた。

「油断大敵ですよ」

ヒュアツインテがほくそ笑む。

「くう!!」

砲撃が放たれる。

だが、そこで園子が自身の勇者システムに組み込まれたバリアシステムを展開し、その砲撃を受ける。

「ハアアアアア!!」

すると、園子はその砲撃を受け切った。

「なっ・・・!?!」

これには流石のヒュアツインテも驚く。

「驚いた? 鴉天狗はね、仏教の迦楼羅天っていう守り神が変化した存在だって言われてるの。その神様の防御力を舐めないでよね!」

飛翔する銀たち。

それに、ヒュアツインテはふむ、と考える。

「なるほど・・・ですが、いくらその神が守護の神であっても、いずれ破られるものです・・・しかし時間が惜しい。ジガさん」

『なんだ?』

「周囲を飛び回る羽虫を叩き落してください」

『了解だ』

城壁に立つジガが応答する。

「悪いな。そこまで好き勝手される訳にはいかない」

ジガが、空中へ躍り出る。

「むッ!」

「春信さん?」

「ジガが来る」

「!?!」

春信が見上げる先、そこからジガが、足の裏から発する熱量によって銀たちに近付いてくる。

それを見た園子が手綱を操り、銀を旋回させる。するとすぐ横をジガが通り抜ける。

「なるほど、あれが奴の能力か！」

ジガの能力は、とてつもない熱量を操る事。

火ではない。熱だ。万物に存在する熱を、彼は操っているのだ。

あの熱線も、おそらくその能力の用途の一つ。そして、この飛空も、熱による噴射で移動しているのだろう。

そして、その速度は、体の小さいジガの方が圧倒的に速い。

「くー！」

手綱を握る園子の顔に焦りが生じる。

「落ちろ」

ジガが、槍を振るう。

その一撃が、園子に向かって振り下ろされる。しかし——

その攻撃を、春信が全て叩き落とす。

「ぬっ!？」

「園子、操縦に集中しろ！」

「ありがとう春信さん！」

春信が、銀の上に立つ。

そして、剣を頭上に掲げる。

「対天剣術——」

「!？」

「——竜月ツ!!」
リュウゲツ

三日月型の斬撃が、ジガに向かって神速で飛んでいく。

「くう!？」

突然の事で反応できなかったジガは、その一撃を槍で受け止めた。

「園子、お前は棺の破壊に集中しろ」

「うん、わかっている」

「待っているぞ」

「・・・うん」

そんなやり取りを交わしたのち、春信は、銀が城の城壁の上に来た時に、その身を空中へ投げ出す。

「ツツ・・・!!春信さん!!!」

園子は、叫ぶ。

「絶対に、行くから！絶対に、それまで絶対に死なないで!!」

園子の叫びを背中に受けつつ、春信は、城壁に降り立つ。

「……ああ、当たり前だ」

包丁のような大剣を、前に突き出して、春信は叫ぶ。

「満・開ッ!!」

次の瞬間、赤い花が咲き乱れて、春信の装束が変化する。

広がった袖は腕に合わせて細くなり、纏う腰マントは腰全体を覆うようになり、まるで、鎧をつけない侍のような装束に変化する。

そして、その手に持つのは、あの巨大な大剣ではなく、その莫大なエネルギーが圧縮された事によって細くなった、どこにでもあるごく普通の刀が握られていた。

満開と昇華の合わせ技。

満開の莫大なエネルギーを、体内に圧縮した結果の、春信の最後にして最強の形態。

「来い……!!!」

それを見たジガは、

「すまんヒュアツインテ、奴ばかりは無視できん」

『そうですね……仕方がありません。彼女はこちらで対処します』

「頼む」

ヒュアツインテからの応答を聞いたジガは、春信に向かって飛ぶ。

次の瞬間、二人の武器が真正面から衝突する。

「決着をつけるぞ、三好春信」

「望む所だ、ジガ!」

床が崩壊し、春信とジガは、城内へ落ちていく――。

「園子……春信さん……」

その様子を、遠方より眺める事しか出来ない佐奈は、胸に拳を押し

当てて今にも溢れそうな感情を抑えていた。

だが、そんな事を気にしていられない事態が発生する。

「佐奈さんー！上ー！」

「!?」

美森の叫びに佐奈は上を見る。

すると、上空から、何かが突っ込んでくるのが見えた。

「ッ!!」

それを見た佐奈は、突如として隣の飛行機へ飛び移るべく走り出す。

「我に力を——アタランテッ!!」

その最中で、佐奈は精霊をその身に宿して、最速を誇る女狩人、アタランテを憑依させて、その脚力で隣の旅客機に飛び移る。次の瞬間、先ほどまで佐奈がいた飛行機の翼が折れて落下していく。

その落とした相手というのは——

「ラヴァンドッ!!」

どういう訳かトロイア戦争とかで使われた戦車に乗るラヴァンドだった。

その神速は、佐奈が憑依させるアタランテに迫るほどだ。

そしてラヴァンドは、佐奈を標的に襲い掛かる。

「くッ!!」

それを見た佐奈はすぐさま迎撃に入る。まるでマシンガンのように矢を連発し、ラヴァンドの操る天翔ける戦車を撃ち落とそうとする。

だが、その速さにどうしてもとらえられない。

「ほらほらっ?どうしたの?この戦車、実は君たちの世界で言う所のアキレウスが操ってた戦車なんだけどねえ!!」

「ッ!?!」

ラヴァンドのその言葉に、佐奈はゾツとする。

アキレウス。

アタランテと同じくギリシャ神話に登場する英雄の一人であり、トロイア戦争ではたった一人で戦況を覆した勇将でもある。

その理由はその不死性であり、右のアキレス腱以外の全てが不死身であり、弱点をつかなければ決して死ぬことのない大英雄でもある。アタランテは狩りにおいては類まれなる才を發揮する。

だが、人間相手ではとてもではないが後れを取る。それも、アキレウスという世界に名だたる英雄であるのなら、それは狩人の領分である狩りではなく、戦争における戦闘となる。そして、この状況では、もし狩りであるならば佐奈は獲物だ。

「くそ!!」

悪態を吐き、それでもなお佐奈は矢を射続ける。

だが、それでも当たらず、どんどん佐奈が飛び移る飛行機を落とされていく。

「どうすれば・・・」

「佐奈!!」

ふと、そこで辰巳の叫び声が聞こえた。

「もはやアキレウスに対抗するには、それ相応の英雄で対抗するしかない!!」

「しかし・・・私の戦闘スタイルは弓と格闘技だ!!しかし、ヘラクレスは私にはあまりにも荷が重すぎる・・・!!」

ヘラクレスは、アキレウス以上に有名で屈強な大英雄だ。

ギリシャ神話において知らぬ者はいないと言われるほどの英雄であり、十二の試練を乗り越えたギリシャ神話最強の英雄だ。

しかし、そんな英雄だが、その強大さは酒呑童子に匹敵し、それ故、佐奈の体はその大きさに耐えられず崩壊してしまう。

そう言い合っている間に、ラヴァンドの駆る戦車を引っ張る三頭の馬が上空から突っ込んでくる。

「しまっ」

しかし、その進行方向上に光の矢が通過し、ラヴァンドは戦車の軌道を慌てて切り替えた。

「ッ!?!」

「佐奈さん！空を見てくださいー！」

美森の叫びに、佐奈は思わず彼女を見返す。

「空に浮かぶ黄道十二星座！その内の一つにある、いて座の星座！常に弓を引き絞っているその姿は、まさしく馬人の雄姿！されどその星座となったその者は、ギリシャ神話における英雄のほとんどに、その知恵を与えた、教師の鏡！」

黄道の星座は、メソポタミアが起源ではあるものの、ギリシャ神話から出ているものも多い。

その内の一つ、いて座にはこんな話がある。

神話に登場する英雄たちに知恵を与え、戦い方を教え、気性の荒い馬人であるにも関わらず穏やかな生活で、人々を助け生きた賢人。

神の子であり、半人半馬でこの世に産み落とされた存在であり、不死であり、数々の英雄にその知恵を教えたその人物の名は――

「なるほどな・・・それは良いかもしれないな・・・!!」
にやり、と佐奈は笑う。

それなら、足の速さはアタランテに劣るかもしれない。だが、応用力なら、断然上だ。

「アタランテ、解除!!」

アタランテを解除する佐奈。

その瞬間、佐奈の身体能力は大幅に下がる。それを見逃すラヴァンドではない。

「ふ、馬鹿だねえ――『虚・撃ち出される剣閃』」

光速で駆ける戦車の周囲に展開された無数の剣、それが、一気に佐奈に狙いをつけて放たれる。

「――『巡る大地の根源』」

風が、大剣に新たに備えられたリングを回転させる。
すると、剣に風が纏われ――

「――『荒れ狂え、地の上翔ける暴嵐よ』ツ!!!」

その風が解き放たれ、ラヴァンドが放った剣を全て吹き飛ばす。
「なっ!?!」

「うっわ!?!」

だが、威力が思った以上に強かったのかバランスを崩す風。

「ふう・・・これ、思った以上の威力が出るわね・・・」

想像以上の威力に汗を掻きつつ、風は佐奈に向かって手を振る。

「これで足りるかしら!？」

「ああ・・・十分過ぎるぐらいだ!!」

佐奈が、その身に英雄を宿す――

「我に力を――『ケイローン』!!」

佐奈の装束に変化が起こる。

全体的に灰色を基調としたその衣装は武人を連想させ、腰から伸びる尻尾は馬。

頭に馬耳といった風貌であり、その表情は、まさしく冷静そのもの。その、冷徹に、鋭い視線を、空中を駆けるラヴァンドに向ける。

「ッ!？」

その視線で睥まれた途端、先ほどとは全く違う威圧を与えられる。そして、間髪入れずに、佐奈は弓を、マシンガンの如く乱射し始めた。

それは、まさしく精密機械が如きであり、放たれた矢はどれもこれもラヴァンドを――ではなく、その戦車を駆けさせる馬に狙いを集中されていた。

「チッ!」

舌打ちの後にラヴァンドは手綱を引つ張って攻撃をかわす。

「奴は私に任せろ。お前たちは当初の作戦通り、城へ突入しろ」

「分かった!」

辰巳の返事を聞き、佐奈は、空中を駆ける戦車を見た。

「さて・・・我が教え子の大事な戦車を返してもらおうぞ」

矢を引き絞り、自然を漏れ出た声に、なんの不快さも抱かずに、佐奈は矢を放った――。

砲撃が襲ってくる。

しかし、その攻撃をどうにかバリアで防ぎつつ、とうとう七つ目の棺の破壊に成功する。

「ハア・・・ハア・・・」

だが、数が減るにつれてエネルギーを集中させることができやすいのか、威力がどんどん上がっていき、バリアでは完全に防げなくなってきた。

その証拠に、銀の骨の体は、ところどころ碎けて削れてしまっており、園子も決して無傷ではなかった。

「あと・・・六枚い・・・!!」

叫び、突撃する園子。しかし、無慈悲にも砲撃が彼女たちを襲い、ついに銀の体に砲撃が直撃する。

「ああああああ!?!」

『○○○○○○○○○○○○!!?!』

戦闘機が墜落するかのようになると落ちていく二人。

だが、銀がどうにか砕かれた部分を骨で修復し、立て直す。

「はあ・・・はあ・・・く!」

『○○○○○○○○○○○○!!!!』

竜ぎんが、頼もしく鳴く。

「うん、そうだねミノさん・・・行こう!!」

手綱を握り、園子は空を駆ける。

放たれる砲撃、それを、園子は巧みな操縦で躲していく。

八つ目。

「でやああああ!!」

槍の一撃が叩き込まれて破碎する。

九つ目。

『○○○○○○○○○○!!!!』

銀の砲撃が直撃し、爆散する。

棺の砲撃が彼女たちに直撃する。しかし、バリアによって防がれる。

「くう、ああああああああああああああああああああああ!!!」

絶叫と共に、二人は突き進む。

そのまま十、十一と破壊する。

「あと、一二つうううううう!!!」

これらを全て破壊出来れば、辰巳たちがこの城に到達できる。

そうなれば、作戦の第一段階が終了する。

そうなれば、あとは、春信の元に行くだけだ!!

十二個目の、棺が破壊される。

「残り・・・ッ!?!」

突然、眩い光が輝きだす。

溢れ出る光は棺に収束されており、突如として、その棺の蓋が吹き飛び、その中から一本の剣が現れる。

それを見た園子の背筋が、深海のように底冷えする。

あの剣は——あの聖剣は、まずい。

あれは、この世の全てを光に飲み込む、星の剣にして『最強の幻想』ラスト・ファンタズム。そうか、ヒュアツインテは、ありとあらゆる歴史を剣として操る事が出来る。

であるならば、実在したと言われる聖剣すらも操れて当然の筈だ。

仮令、本来の担い手ではなかったとしても、その力を発揮するならば、十分な程に、魔力が籠められている。

あれを喰らえば、ただでは済まないのは必至。

避けようにも間に合わない。おそらく、他の全ての棺の破壊がトリガーの一撃だ。すでに発射準備は整っている。避けようにも、もう間に合わない——

『oooooooooooooooo!!!』

「ミノさん!?!」

突如として、銀が動き出す。口を大きく広げ、首を、体を、大きくのけ反らせる。

そして、銀の体が、黄昏色に発光する。

「ミノさん、まさか——」

次の瞬間、全てを極光へと飲み込む一撃が放たれる。

『約束された勝利の剣』

対して、銀が放ったのは竜の咆哮。

『怒り狂う邪竜の咆哮』

その二つの光が正面から激突する。

だが、完全にチャージされていた向こうの聖剣とは違って銀の咆哮は即興の砲撃。

威力があまりにも違い過ぎる。そして、案の定銀の砲撃は押され、聖剣の一撃が押し込まれていく。

精々、時間稼ぎが精一杯だ。

——そう、時間稼ぎなら。

「え」

突如として、誰かに抱き上げられる。

振り返れば、そこには——

「ミノさん……!?!」

「いけ、園子」

園子を持ち上げる銀が、大きく振りかぶっていた。

そして——

「オウラアアアアアアアア!!」

「ミノさああああああああああああああん?!?!」

投げ飛ばされ、振り返った瞬間、微笑む銀が、極光に呑まれた。

砲撃を喰らった竜が、燃え盛る大地へ落ちていく。

「——ツツツツ!!!!うわああああああああああああああああああ

!!!」

絶叫、後に、槍の切っ先を最後の棺に——その聖剣に向けた。

「伸オびイろオおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

!!!」

砲弾の如く、伸びた槍は真つ直ぐに聖剣へと放たれ、その贗作であり、先ほどの砲撃でボロボロになった聖剣を、一撃で粉碎した。

そのまま槍を元の状態に戻して、投げ飛ばされた勢いのまま城壁へと落ちる。

ぶごろごと転がり、どうにか止まった所で園子は慌てて下を見て、

銀の姿を探した。

そして、燃え盛る大地で、焼け焦げた骨の体の竜がぴくりとも動かずに沈黙していた。

「あ……」

その姿に、園子はゾツとする。

もし、あれで死んでいたら。

「み、ミノさん……!」

急いで端末にある生存確認アプリを起動して、銀の容体を見た。

すると、銀は健在であることが確認されて、そして、今は失神しているという事が分かった。

「良かったあ……」

これは創代が作ったシステムであり、もしもの場合を考えて、全員
の健康状態を確認する為のものだ。

とりあえず、これで銀の生存は確認できた。きっと骨の体を楯にしてあの砲撃を凌いだのだろう。

であるならば、自分のすべきことは一つ。

「春信さんの所にいかないか……」

「あら?どこに行くんですか?」

「!？」

声が聞こえた。聞き覚えのある、女性の声。

「ひなたさん……!」

「またその名前ですか。よくも私の『円卓シール・サーティーンの十三騎士』を破壊してくれた拳句に、そんな屈辱的な名前と呼んでくれるものですね」

ヒュアツインテの顔は笑顔だ。だが、そこに込められた憎しみの感情は、見るからに漏れ出ていた。

「しかし、変ですね。貴方たちはどうして、あのような機動性の低そうな機体を使つて突撃をしてきたんですか?まるで『落としてください』と言わんばかりのおろかっぷり……もしや、こちらに攻め込んできているのは彼らだけで、残りは全て本拠地の防衛の回したのでしょうか?それだとしたら、私たちの事を舐めすぎではありませんか?」

重たい重圧が、園子に掛けられる。

確かに、あんな鈍重な機体では、彼女の防衛システムを抜けられる訳がない。

防衛機能を破壊する為の時間を稼ぐためならいざしらず、あれほどの数を用意するのなら何人かの犠牲が考えられる。

しかし、彼らはそう簡単に犠牲を容認するような人間たちではない。

であるなら、何故。

その疑問に、園子は、不敵な笑みを浮かべる。

「すぐにわかるよ」

「そうですか。では、その時が来る前に貴方は片付けさせてもらいます」

次の瞬間、園子の急所全てに、ヒュアツインテの八本の剣が全て殺到する。

しかし――

「ハアツ!!」

「!？」

槍の一薙ぎで、全ての剣を叩き落した。

「馬鹿な・・・」

「乃木の名前を舐めないで。それに、その名前の凄さなら、貴方が一番よく知ってるはずだよ」

何故なら、彼女は、その人物の親友なのだから。

「でも、貴方の相手は私じゃない」

「何を言って・・・」

突如として、上空から、凄まじい轟音が聞こえてきた。

見上げれば、そこには――

「見つけたぞ、ひなた!!」

「足柄辰巳・・・!!」

なんと、剣から放出される黄昏の火力によって、飛行機から城壁まで一気に飛んできたのだ。

「オラア!!」

上段に構えた大剣を、一気に振り下ろす。凄まじい衝撃と風圧が叩きつけられ、煙がまき散らされる。

だが――

「・・・逃がした」

そこにヒュアツインテの姿は無く――

「うわぁ・・・」

床に大きな穴が開いていた。

「相変わらずの豪快さだねえ・・・」

「園子、俺はこれからひなたの所へ向かう。お前はすぐに春信の所にいけ」

「分かりました」

辰巳の言葉に園子が頷いた後、辰巳は穴の中に入っていった。

「さて、私も春信さんの所に行きますか」

後ろでこちらに向かってくる仲間の事を気にかけてつつ、園子は春信の元へ走り出していった。

激しい空中戦が繰り広げられる。

矢が飛来し、それを躲し、反撃に突撃と応射をする。

そんな異次元にも似た戦いが、今、佐奈とラヴァンドの間で繰り広げられていた。

ただし――

「くっ!!」

次から次へと飛行機を飛び移る佐奈。

そして、飛び移った瞬間に飛行機がどんどん落とされていく。

反撃に、佐奈が矢を撃ちまくるも、その悉くを躲され、すかさず敵の体当たりが迫る。

「回れッ!!」

ケイローンの記憶にある魔術を行使。飛行機に仕掛けられていた

術式を読み解き、飛行機を操作。それによってその機体がローリングし、そのまま突っ込んでくるラヴアンドに向かって落ちてくる。

「チッー」

それを見てラヴアンドはすぐに対策を思考、回避は不可能と判断して両手を掲げた。

そして、そのまま落ちてくる飛行機を真正面から受け止めた。

「な!？」

「ぬうおおおおお!？」

予想外の力技。否、あの光速で動き回る戦車を操っていたのだ。それ相応の腕力が無ければ扱える訳がない!

そして、その予想は的中し、ラヴアンドは、その機体をもって佐奈を押し潰そうとしてきた。

「無茶苦茶な!!」

思わずその異常さに笑みがこぼれ、そして渾身の魔力をこめた一撃でその飛行機を爆砕した。

当然、ラヴアンドはその爆発からは逃れている訳で。

「惜しかったね」

背後から佐奈目掛けて槍を突き出していた。

「ああ——」

だが、それに対して佐奈は避けようともせず。

「その位置だ」

「ッ!？」

次の瞬間、戦車を引つ張っていた馬たちが撃ちぬかれる。

「然るべき刻、然るべき座標、然るべき速度。——必要なのはそれだけだ」

ケイローンはケンタウロス、即ち弓の名手であり、狩りの達人。さらにそこにケンタウロスとしての荒々しさは無く、あるのは冷静沈着な頭脳と積み重ねた経験則、そしてすさまじい程の膨大な計算式。

矢の速度は知っている。であるならば問題なのは向こうの速さであり、どのように動くのかという事。

あらかじめ撃っていた矢が到達する位置。そこに敵を時間通りに

誘導するなんて事は本来不可能だ。

だが、この英雄ならそれを可能にする。

何故なら、ギリシヤに出てくるほとんどの英雄たちに、その知恵を授けた、賢者なのだから。

だから、こんな事は造作もないのだ。

「チツ」

舌打ちをして、ラヴァンドは呆気なくその戦車を捨てた。

操縦者を失った戦車はただ真っ直ぐに走り抜け、やがてどこかへ消えていく。

そしてラヴァンドは飛行機の上に降り立つ。

「やれやれ参ったね。まさかこんな方法で戦車から引きずりおろされるとは思わなかったよ」

「そうか、まあこちらとしては弟子の所有物を開放できて幾分か気分は良くなっている。だが——」

佐奈が、矢を引き絞ってラヴァンドにその鏃を向けた。

「弟子の名誉を傷つけた事は、お前の命をもつて償ってもらおう」

確かな怒りを滲ませて、佐奈はラヴァンドに矢を向けた。

「やれやれ。君たちにはつくづく不快にさせられるよ。罪深き人間の癖に、よくもまあ償いだとか言えた者だね」

「私たちにとってはお前たちの事などどうでもいい。だが、過去に人類を殺戮し、それだけでは飽き足らずに領土まで奪った。そんな相手に、一体どうやってこの怒りを抱かずにいられる?」

「それ、君が言えた事かな?」

「もはや私には償い以外ありえない。そして、この戦いは私の贖罪だ」
確固たる決意。それに、ラヴァンドはため息をついて——

「じゃあここで死んじやいなよ」

佐奈など比較にならない程の圧力が放たれ、彼の周囲に、凄まじいまでの武装の数々が出現する。

彼の能力は模倣。ありとあらゆる敵の能力、技を模倣し、コピーする。それは、一度見ただけでその特性などを劣化版ではあるがコピーで

き、さらにその性質まで深く理解する事が出来たなら、完全模倣も可能なチート能力。

それが、こいつのバカげた『贗作者』フェイカーという能力なのだ。

「さて、どんな風に切り刻んでやろうかな？」

笑っているが目がそうじゃない。完全にこちらを殺る気だ。

とてもではないが、佐奈一人では、このラヴァンドの相手は荷が重すぎる――

そう、佐奈一人なら――

「――『咆え轟け、怒れる火山よ』ツ!!」

炎を纏った大剣が横に薙ぎ払われる。その一撃はラヴァンドを背後から襲い、されどラヴァンドはその攻撃を郡の楯で受け止める。

「マジツ!?!」

「甘いよ」

「と、思うじゃん?」

風が大剣を異空間に収納させ、伸び退く、それと同時に佐奈も別の機体へ飛び移る。

そして、上空が輝きだして――

「――『原初へ回帰する雷神の鉄槌』ツ!!!」

雷神の鉄槌が振り落とされ、飛行機を消滅させる勢いでラヴァンドに叩きつけられる。

「やったか?」

「ちよ!?!佐奈それフラグ!!」

だが、叩きつけられた雷の柱ははじけ飛んでしまう。

「んー・・・惜しかったね」

ラヴァンドは、まったくの無傷。借り物とはいえ、神の一撃を耐え切るなど、あまりにも規格外だ。

「く、なんて奴だ・・・」

「こうなりやこつちもこつちで奥の手使わないとまずいかもね・・・」
左足の太ももにある満開ゲージ触れる。

「いや・・・」

しかし、佐奈が手で制す。

「城に到達するまで時間を稼ぐことは出来る。それまでの間に、東郷を城に到達させればいいんだからな」

「それもそうね」

風がジオ・リングを回転させる。

その属性は、水。

『狂い流れ、紺碧の激流よ』

水を纏い、その水圧を利用する事による機動力と回避性に特化した属性。

「行くぞ。二人とも」

「ええ！」

「うん！」

佐奈の言葉に風と真斗が答え、襲い掛かるラヴァンドを迎え撃つ。

「ふうん、そういう事か」

ヒュアツインテのいる無駄に広いドーム状の制御室にて、ベリアルが何かに気付いたかのように呟いた。

「何かに気付いたの?」

「うん。とても強い隠蔽をされてたけど、あの飛行機、全部誰も乗っていないよ」

「全部・・・まさか、本当に・・・」

「ううん、そんなんじゃないよ。あの人たちはきつと全戦力を投入する気だよ」

「ほう・・・どうやってですか?」

「東郷さんは巫女さんだからね、だから、神樹様だけじゃなく、他の巫女とも繋がっているんだよ」

「他の巫女と・・・繋がって・・・ッ!?まさか!」

ここにきて、ヒュアツインテは顔色を変えた――

「跳躍範囲内・・・」

佐奈たちが必死にラヴァンドを足止めしてくれたおかげで、美森の乗る飛行機が、城の城壁のジャンプ範囲内に到達した。

否、正確には、勇者単体での跳躍では届かない距離で――

「いっけええええ!!東郷おおお!!」

誰かに飛ばしてもらおう事で、城壁に到達できる距離に来たという事。

そう、彼らの目的は、初めから一つ――

風が、『荒れ狂え、地の上翔ける暴嵐よ』をもって美森を吹き飛ばす。

そうすれば、美森は簡単に敵の城壁に到達できるわけであり――

「――カガミブネ、起動」

床に手をついた美森を中心に、方陣が構築され、光が進る。

「皆さん、気を付けてください」

国土亜耶の心配そうな表情に、芽吹はその頭を撫で、微笑む。

「大丈夫、必ず全員生きて帰って見せる」

「おう！しつかり待ってるよ！」

明日香がサムズアップをして、二人は、光り輝く方陣へと足を踏み入れる。

その様子を見届け、亜耶は、叫ぶ。

「頑張ってください！」

その言葉に、方陣の中にいる全員が頷く。

「最後の確認をするわ!!」

芽吹が叫ぶ。

「この最終決戦の最終目標は敵の親玉である断罪の神『マジアクルス』の討伐！そして、裏切り者結城友奈と、他四名の討伐！これに失敗すれば、人類に未来はない!!いいわね——これが最後よ!!」

光が全員を包み込む。

そして、次に、彼らの視界に映ったのは、見るも巨大な城の城壁の上。

「転送完了を確認——カガミブネ、成功・・・!!」

「作戦開始イ!!」

勇者、襲撃者、防人、そして救導者。

今、人を守るために戦う者たちの、最後の戦いが始まる——

荒れ狂う獣

矢が飛来し、それをラヴァンドが躲す。そこへすかさず風が大剣を叩きつける。だが、それすらも躲され、隣の飛行機へと飛び移られる。

そんなラヴァンドに向けて武器を向ける風、佐奈、真斗の三人。

だが、ラヴァンドは視線を横に向けて、舌打ちを一つ。

「まさかそんな方法で乗り込んでくるとはね」

「少人数の方が動きやすいからな」

「やれやれ、君たちには困ったものだよ。あの数相手だと、流石に手厳しいだろうからね……ここで撤退させてもらおうよ」

「な!? 待て!!」

佐奈の叫び虚しく、ラヴァンドは虚空に消える。

「くっ、逃げられたか」

「佐奈、それよりも……」

「ああ、そうだな……」

真斗の呼びかけに頷きつつ、佐奈は、城の方を見る。

とにかく敵城に乗り込むことに成功した勇者一行。

しかしやはりというべきか、早速城内にいた骨の兵隊——『竜牙

兵』や『土人形』^{ゴレム}の襲撃にあっていた。

「うおりやああああ!!」

明日香が大剣を振り回し、竜牙兵たちを無双する。

彼の剣は全ての異能を無効化し、正しい形へ正す。故に剣に触れるだけで異能で動いている竜牙兵たちはがらと崩れて地面に崩れていく。

それだけではない。防人部隊に新たに支給された大口径アサルトライフルは一撃一撃の威力が以前のものより遥かに高く、その銃身につけられた銃剣の頑丈さも切れ味も比較にならないほどに強化され

ている。

さらに楯も強化されており、任意による展開型の結界を張れるだけでなく、楯そのものの強度もかなり底上げされており、仮令、レオ・バーテックスの火球が飛んできても防げるほどの強度を誇っている。これを見れば、創代という神のすさまじさが見て取れる。

「B隊！右からの兵に対応！C隊！衝撃に備えて！A隊はC隊が攻撃を受け止めた直後に反撃！」

芽吹の凄まじい指揮能力が、防人隊たちの一糸乱れぬ行動を可能にしている。

「ほんと、すごいわね！」

その一方で、夏凜たちは巨大なゴーレムたちを相手取っており、個々の力が強化された今、敵ではなかった。

他もそうだ。

海路の光弾が打ち貫く、樹のワイヤーが切断する、幸奈の拳が粉碎する、雅が押し潰す。

そのほか、誰もが襲い掛かるゴーレムたちを粉碎していった。だが、いつまでもここで戦っている訳にもいかない。

「夏凜、行きなさい！」

「芽吹!？」

「ここは私たち防人だけで十分よ！私たちがこいつらをやっているうちに貴方たちはさっさと親玉を倒して来なさい！」

「そう、分かったわ!!」

芽吹の言葉に、他の全員も頷く。

「そういうなら、そうさせてもらいます。行きましょう！」

優が誰よりも早く、竜牙兵の集団を突破し、それに続くように勇者たちが奥へ突き進む。

「よし・・・さあ！根性見せるわよ!!」

『応!』

芽吹の言葉に、全員が応じて、戦いは、さらに激化していく。

「それで！この先通路が三つに分かれてるんだけどどうするの!？」

虎の文字の影響で夜目に強い白露がそう叫ぶ。

「私たちは真っ直ぐいくわ」

「それは何故ですか!？」

美森の言葉に、優が聞き返す。

「・・・この先に友奈ちゃんがいる」

『――!』

美森の根幹的能力は月。月の光は、万物の戒めを解くといわれており、故に浄化の力に特化しており、そして、闇を感じる事が出来る。

「じゃあ、私たちは真っ直ぐに行くのね」

「あ、あの、お姉ちゃんを待った方が・・・」

「それもそうね・・・」

樹の言葉に頷きかける美森。

「では、私は右に行きましょう」

そこで優がそう発案する。

「おそらく、右にはラヴァンドがいます。彼の能力はおそらく異能に特化しており、それに対して私の能力が有効な筈です」

「大丈夫か？」

信也が心配そうに聞いてくる。だが、優が睨み返す形で言い返す。

「誰にもものを言ってるんですか？私は先代の虚像布所持者である安座間椿の娘ですよ？余裕です」

そう得意気に言い切る優。

「じゃあ、私が優についていくわ。あと、弘君も一緒にいいかしら？」

「僕でよければ」

「冬樹も一緒に来て」

「分かった」

「よし、それじゃあ後は左に行つて」

雅が、そう発案し、残った者にそう促す。

「分かった。皆、気をつけろよ」

「分かっている。勇者部五箇条、『成せばたいいなんとかなる』」

おまじないのように呟き、美森、樹、夏凜の三人は真っ直ぐに、優雅、弘、冬樹の四人が右へ、そして、左には信也、幸奈、美紀、真武郎、海路、白露の六人が向かう。

長い通路を走り抜け、彼らは今、その先に待つ強大な敵と対峙する。

そして、それは、この男も同じだった。

巨大な扉を潜り抜けて、辰巳は、愛しき相手と対峙する。

「あら、もうここまで来たのですか」

「あんな骨くず共に後れを取る訳がないだろう」

ヒュアツインテが、玉座から辰巳を見下し、辰巳が、床からヒュアツインテを見上げた。

「ふふ、一応彼らも貴方と同じ、竜の骨から作られたのですけどね」

「だとすれば随分と脆かった。どこの竜から作られたんだあれは」

背中から、大剣を引き抜く。

「そんなくだらない事を俺は言いに来たんじゃない」

「あら、では何を言いに来たのですか？」

「——お前を連れ戻す」

次の瞬間、辰巳は地面を蹴っていた。

そう、いた、だ。

一度の踏み込みで、弾丸の如く加速した辰巳は、一気にヒュアツインテへと疾走する。

「野蠻なこと」

しかし、そんな辰巳の動きを、ヒュアツインテは目で追いつつ、

『毒の女帝』

「ッ!?!」

次の瞬間、辰巳の口から血が吐き出される。

「ぐっごほ・・・!?!」

絶叫が迸り、辰巳は思わず膝をつく。

「貴方用に調合しておいた、対竜用の霧毒です。触れば、即、体が焼け爛れて細胞組織が崩れるのですが・・・」

「来やがれ——『フアブニール』ツ!!」

辰巳がフアブニールを飛び出し、鎧に身を包む事でその毒を完全ではないにしろ遮断。そのままその鎧の治癒力をもって崩れた組織を再生させる。

「ふふ、その鎧があればまだまだ楽しめそうですね」

ヒュアツインテの顔が愉悦に歪む。

「ちくしょうが・・・!」

そんなヒュアツインテを、辰巳は鎧越しに睨んだ。

左の通路へ入った信也たち。

「佐奈さんたち、大丈夫かな・・・?」

「俺はどっちかっていうと東郷たちの方が心配だな・・・」

信也の懸念は最もだと思う。なぜなら、風達が相手にするのは、かつて勇者部に所属し、皆のムードメイカーとして盛り上げていた結城友奈なのだ。

そして、彼女たちの掛け替えのない、友達でもあった少女だ。

いざって時に、手加減をしないだろうか。それが、信也の心配だっ

た。

だが、そんな信也の肩に、真武郎が手を置く。

「俺たちは俺たちのやる事に集中していればいいんだよ」

「真武郎さん・・・ああ、そうだな」

信也は前を見る。その視線の先には、扉が一つ。

「行くぞ！」

「おう！」

「ええ！」

「うん！」

「ああ」

皆の返事を聞いて、信也が、その扉を蹴り開ける。

そこは、一見して、ドーム状の広い空間であり、なんの変哲もない空間だった。その部屋には、一人の男が待ち構えていた。

「来たか、罪人ども」

「絶望のブルーム・・・」

「予想的中だね」

皆、すぐさま臨戦態勢に入る。

「ふむ、六人か。ずいぶんと舐められたものだ。あの三ノ輪剛とかいう男よりもやりがいの無い奴らが何人集まった所でオレに勝てる訳がないが、たった六人とは、随分と舐めた真似をしてくれる」

「言ってる獣野郎。テメエはここでぶっ倒れてろ」

「口先だけは言い様だな。だが——」

瞬間、

「遅い」

「ッ!？」

ブルームの姿が消え、信也の後頭部を、恐ろしい程重い衝撃が迸って吹き飛ばされる。

「信也く——」

いつの間にかブルームが信也の背後に立っており、地面を何度も跳ねる信也を恐ろしい速度で追いかける。

「ぶっ、このッ！」

「どうにか態勢を立て直し、信也は、高速で迫るブルーメを迎え撃つ。
ビースト・フォース
『獣ノ力』——『兎の跳躍』ツ!!」

ここでブルーメは地面を蹴って弾丸の如く信也に突進。そして、拳を引き絞る。

一方の信也は左足を下げて、爪先を地面に引っ掛けるように構えて

「馬兎蹴」ツ!!」

渾身の回し蹴りがブルーメの顔面を狙う。

だが、顔面を狙ったブルーメの頭の高さが唐突に低くなる。

「なっ!？」

「フハハツ!!遅いぞ!!」

ブルーメは、突進する際、わざと態勢を高くしていた。それは、信也が反撃してくることを予想し、その為にわざと頭を突き出す事で顔面を狙わせたのだ。そして、その目論見は成功し、信也の仰角の高い蹴りは見事に空振り、そしてブルーメは瞬次に信也の背後に回って、その後頭部を叩いて地面に叩きつける。

「ごっ!？」

「フハハハ!!のろい、のそいぞ罪人共よお!!」

が、そこでブルーメがすぐさま飛び退き、そこへ白露の爪が錯綜する。

「かわされた!？」

「問題ない」

すかさずブルーメが逃げた先の周囲に光の方陣が無数に展開され、ブルーメに向かって一気に解き放たれる。四方八方から襲い掛かる銃弾の嵐。それをブルーメは掻い潜り、白露へ『大猿ノ鉄拳』を叩き込もうとする。その一撃を白露はその柔軟性を生かして躲し、さらに懐に潜り込んではその腕の上に乗って、ブルーメの顔面に蹴りを入れる。だが、

「惜しいな」

「やばっ」

その蹴りは受け止められていた。

ブルーメがその足に力を込めようとした所へ。

「その手を放せええ!!」

幸奈の拳がブルーメの腹に叩き込まれる。

「無駄だ」

「ッ!?!」

だがそれですら、ブルーメの展開する『犀ノ鎧』ライノメイルに阻まれる。

このままでは白露の足は握りつぶされる。だが、それを黙って見過ごせる程、真武郎は甘くなく、そのブルーメに向かって槍を投擲する。

恐ろしい速度で飛んでいく槍はすぐさまブルーメの胸に飛び込むも、その刃はやはり光の鎧によって防がれる。

だが、真武郎の目的は直接的な攻撃ではなく――

「爆ぜろ」

爆発によつて吹っ飛ばすことだった。

「ぬうお!?!」

その衝撃でブルーメは靴底をすり減らしながら後退。吹き飛ばされた拍子に白露を話してしまう。

「助かったよ真武郎さん!」

「なーにお安い事よ」

どうにか踏み止まったブルーメは状況を確認する。

健在なのは幸奈と白露、そして狙撃手に槍の男だ。床にめり込ませた信也は死んではいなくてもしばらく動けない筈だ――

(・・・もう一人はどこだ?)

確か、部屋に突入してきたのは六人のはずだ。だが、今確認したのは五人。一人足りない事に、ブルーメは気付き――

「そこか」

「うわ!?!」

背後からブルーメの首を搔つ切りに来た美紀を殴り飛ばす。

「美紀ちゃん!?!」

メスが砕かれている。だが、吹き飛ばされる最中で美紀は態勢を立て直し、どうにか着地する。

「大丈夫!」

見ればブルーメの拳に一筋ながら切り傷が出来ていた。

殴り飛ばされる瞬間、ブルーメでさえも見えない程細いピアノ線とメスで防いだのだ。

「ぬう・・・」

「オラアッ!!」

さらに、もう復活した信也が上空から踵落としを叩きつける。

「ぬるいわ!!」

「づっ!?!」

しかしブルーメはそれを真正面から迎え撃ち、逆に信也を吹き飛ばす。だが、信也の足には思った以上のダメージは来ておらず、くると空中を回転した後に、幸奈達の元へと着地する。

「くっそ、どんな反応速度だよ」

「威力はともかく、頑丈過ぎて攻撃が通らない」

「私の速さにも追い付いてくるし・・・」

「でも、効いていない訳じゃないと思うよ」

真武郎が指差す先。ブルーメの胸板がやや焼け焦げている。

真武郎が爆撃した所だ。

「高威力の攻撃なら通用するようだねえ・・・」

「だったらやる事は簡単だ」

信也が炎に包まれる。

「真解——『炎帝ノ蹴馬』」

それに続くように、白露、幸奈、美紀も己の奥の手を発動する。

「真解——『月下之白虎』」

「ぶっ壊せ——『スリユム』ツ!!」

「やっちやうよ——『ジャック・ザ・リッパー』」

四人の姿が変化する。

「フハハ、それが貴様らの奥の手か。ずいぶんとちんけな恰好だな」

「うっせえよ上半身裸野郎」

「ちんけかどうかは、一度やり合ってから決めなさい!!」

幸奈が仕掛ける。

その背後で、海路が狙撃銃を構え、その引き金を引く。

銃口からだけではなく、空中に方陣を描いて放たれた弾丸は全部で五発。

それらがまるで蛇のような軌道を描いて、四方からブルーメを狙う。

「笑止ッ！」

だが、それらすべてを一度に叩き落され、次に迫る幸奈を迎え撃とうとする。

そうして、幸奈がブルーメの射程範囲に足を踏み入れた瞬間、両側から影が一つ幸奈を追い抜く。

「ぬっ!？」

「やあ!!」

白露の爪がラヴァンドを襲う。だが、それをラヴァンドは白露を逆に殴り飛ばす事でそれを防ぐ。

「がっ!？」

そこへすかさず幸奈の全てを凍てつかせる拳が叩きつけられる。しかし、それを恐ろしいまでの柔軟性で、体を逸らす事で躲され、その態勢で体を回転させて、拳を幸奈の腹に叩きつける。

「げぼっ!？」

天高く飛ばされる幸奈。しかし、

「ぬっ!？」

拳が凍っていた。

幸奈の全身は常に氷点下の冷気が纏われている。それがブルーメの拳を凍らせたのだ。

そこへ、三発の火球が迫る。

それがブルーメに直撃する。が、その三撃はブルーメの展開する鎧に阻まれていた。

信也の『フレイムシュート火炎砲撃』である。

「はっ、その程度か？」

嘲笑うブルーメ。そして左手で自分の顔のすぐ横を殴った。

確かな手ごたえ。しかし肉の手応えではなく金属の手応えだ。

「あう!？」

吹き飛ばされる小柄な影。

その影は吹き飛ばされる中で態勢を立て直し、上手く着地する。

「くっ……!!」

砕かれたメスを見て、美紀は悔しそうする。

「ふはは。同じ手が何度も通用すると思うな」

腹を殴られた筈の幸奈は、冷気を感じたブルームエが拳を減速させたお陰で大事には至っておらず、白露はその柔軟性を使って衝撃を上手く逃がし、ダメージを軽減していたので、無事に着地していた。

そして、その場にいる全員が、ブルームエに勝つつもりで彼を睨んでいた。

それを感じ、見たブルームエは、

「……不快だ」

その身の内に巣くう殺気を増大させた。

『——ツツ!?!』

「貴様らのような罪人が、我々と張り合おうなどと片腹痛いわ」

押し潰されるような殺意の重圧。空気が張り詰め、呼吸がままならなくなる。

「いいだろう。ならば貴様らに思い知らせてやろう。貴様らに希望などなく、あるのは絶望だけと。罪人が行きつく先には絶望しかないのだと、それを今ここで証明してやろう」

ブルームエの殺気が増大するとともに、ブルームエの纏う魔力が膨れ上がる。

(こいつは……獣なんかじゃない……!!)

そんなものは生温い。これは、獣などとは明らかにかけ離れている。

そう、これは、例えるなら、この、怪物は——

——『魔獣』だ。

『魔獣ノ力』——

次の瞬間——

「がつ!？」

海路が沈んだ。

「なッ!？」

「海路——」

次に、真武郎が吹き飛んだ。

その時、幸奈は、瞬きをした。

そして次に目を開けた時には、

「あ……」

信也は壁に叩きつけられ、白露は地面に倒れ、美紀は、ブルーメの手で血塗れになってぐったりとしていた。

真武郎は、あの一瞬で吹き飛ばされて壁にめり込み、海路は地面に頭をめり込ませていた。

残っているのは幸奈であり——

「貴様で最後だ」

その声を最後に、幸奈の意識は吹き飛んだ。

優たちが向かったのは、ブルーメの部屋と同じく、だだっ広い部屋だった。

そこには、さも当然のようにラヴァンドが待ち構えていた。

「やあ来たねえ。少し竜牙兵たちに足止めされるかと思っただけど、どうやらそれすらもできなかつたみたいだね」

「あんな雑魚、遅るるに足りんわ」

「うおっ、優って怒るとこんな口調になるんだね……」

「という、か、こっち、が、素」

「へ?」

「そんな事より構えなさい。来るわよ」

雅の言葉に全員が構える。

「準備が早いのは良いことだよ。まあ最も、それで君たちが勝てる保証は、ないんだけどね」

そこでラヴアンドが指を鳴らす。次の瞬間、ラヴアンドを中心に床に波紋が広がり、さらに部屋中に、剣や槍やらが出現する。それもどれもこれも地面に突き刺さっている状態だ。

「これは・・・!?!」

「これ全部僕の支配下にある剣だよ。だからまあ・・・」

「ッ——」

真っ先に対応に走ったのは弘。空中に剣を展開する。だが、その展開した剣は、地面から突然、飛び跳ねるかのように浮き上がったかと思うと、浮き上がったと認識する前に、弘の展開した剣を全て自らの刀身からだもろとも砕き散らせた。

「なッ・・・!?!」

「こうして先手を打つことができる」

ラヴアンドはすでに剣を用意している事に対して弘の方は展開してから射出する。それ即ちワテンポ、弘は遅れるという事であり、何事においても先手を打たれる事になってしまうという事でもあるのだ。

「やられた・・・」

「僕、これでも結構めんどくさがりでね。だからさっさと死んでもらうよ」

いくつかの剣が浮き上がり、その切っ先が全て彼らに向けられる。それに対して、彼らはそれぞれの武器を構えて迎え撃とうとする。そして、彼らに向かって一気に剣が叩きつけられる——その瞬間に、

「フルカウンター
呪詛返し」

威力が倍増されて、全てラヴアンドにはね駆ってきた。

「ッ!?!」

それには、流石のラヴアンドも驚き飛び退る。

「ああ、そうだったね」

そして思い出す。

「君はそういう技を持つてたんだっけ」

殺到する剣を弾いたのは、優ただ一人。ありとあらゆる物理攻撃、及び異能攻撃全てを威力を倍増させて撃ち返す事の出来る、反撃特化の真解『呪装滅布』を起動させることで、ラヴァンドの放った剣を全て撃ち返したのだ。

「貴様は私が殺す……」

呪詛のような言葉と共に、地面を蹴る優。

「ちよっ!？」

その行為に思わず瞠目する雅。

「雅姉、本、体は、任せ、て、私、たち、は」

「ええ……ええ、そうね。準備はいいかしら？」

「いつでも」

襲い掛かる刀剣を迎え撃つ雅達。その一方で優は真解によって肉体の成長による身体強化された体による踏み込みでラヴァンドに迫る。

拳が空ぶる。ラヴァンドは上空、すかさず飛び上がって手刀で追撃するも、やはり躲され背中を蹴られて地面に叩き落とされる。どうにか着地した所で、背中に気弾が何十発も叩き込まれる。

だが、優の防御力はそんなものを通す事は無く、見事耐え切って振り向きざまに後ろ回し蹴りを繰り出す。しかしそれすら躲され、距離を取られる。優はすぐさま距離を詰めて拳を握りしめるなりラヴァンドではなく地面を殴る。半径五メートルの範囲に亀裂が迸り、そしてその亀裂の上を踏んだラヴァンドの足に隙間から布が飛び出し拘束する。

「なにッ!？」

「ゼアア!!」

優の拳がついにラヴァンドに届く。それによってラヴァンドは吹き飛ばす。

「どうだ……」

「と、思うじゃん?」

「ッ!?あぐっ!?」

しかし背後から声が聞こえ、振り返れば頬に衝撃が走り、吹き飛ばされる。

何故か、後ろにラヴァンドがいた。

「ど、どうして・・・!?」

「単純な話、あれは偽物で、僕が本物だ。いや・・・それはどうかかな?」

気付けば、優の周囲には数十にもわたるラヴァンドが出現していた。

「分身か・・・」

「その通り」

そのラヴァンドたちの一人が優に襲い掛かる。

「ふうー・・・」

それに対して、優は深呼吸をし、そして腰を落としては拳を腰に当てる。

そして、ラヴァンドの手に握られていた剣が、優の首に向かって叩きつけられる。

だが、それはある意味では悪手だ。

ラヴァンドの攻撃が直撃した瞬間、そのラヴァンドの腹から鮮血が飛び散る。

「ぐっふっ!?」

『オートカウンター
自動反撃』

ありとあらゆる攻撃に対して、ほぼ脳髄反射で相手に反撃する、優の基本戦術。

相手からの物理攻撃を誘い、そして相手が射程に入り込み、そして、攻撃という絶対的な隙が出来る瞬間にその攻撃を自ら受けて反撃する。

その後手必勝の力を持つ優だからこそ、この数を相手にしても一切怖気づく事がない。

「なるほどねえ。それはちよつと厄介だな」

「分かったのならさっさと死ね」

「それは嫌だ。僕はこれからも怠惰に生きていたいんだ。だからね」
全てのラヴァンドが優に向かって手を掲げた。

「？」

「その力、ちよつと封じさせてもらうよ」

「何を言つて・・・うぐあ!？」

次の瞬間、ラヴァンドから電撃が発せられ、優に直撃する。

「くう・・・これが一体・・・」

『やばいぞ優・・・』

その時、彼女のサポートAI的立場にいる虚像布専用の精霊『虚』
が、震える声で優を呼び止める。

「虚君・・・？」

『体が柔らかくなつていやがる・・・化身刀タメミカツチが解除されていやがる!!』

「な!？」

「そういう事だ!」

ラヴァンドの一人が剣を振り上げて襲い掛かってくる。

その一撃を、優は思わず拳で迎え撃ち、弾き返すが、もう一方から
襲い掛かるラヴァンドが優の脇腹目掛けて襲い掛かる。

(大丈夫、私の体は鋼だ。だから刃は通さない、通さないはず——)

次の瞬間、ラヴァンドの刃が、優の脇腹を抉った。
「うつきいっあああああああああ!?!?!」

鋭い痛みが脇腹から迸る。そして優は、絶叫する。

「ツ!?!優・・・!?!」

その事に気付く冬樹。

「う・・・あ・・・」

痛みを耐え切れず、地面に崩れ落ちる優。

(な、なんでこんな・・・!?!)

痛みなら、椿との特訓ですでに克服している。だが、この痛みは、その時の何十倍も痛い。そう、まるで、感覚を引き上げられたかのよう
な——

「正解だよ」

ふと、突然ラヴァンドが何かを肯定し始める。

「あの電撃には君の固い皮膚を柔らかくするだけじゃなく、感覚を操作する効果もあるんだよ。今の君は、痛覚だけを引き上げさせてもらっている。そうだな、分かりやすく言えば、ただの人間の拳が弾丸ぐらいの威力に感じる程かな？」

「感覚……を……そう……さ……!?!」

「そう、これが僕の『贗作技』^{フェイカースキル}の一つ、『無慈悲なる拷問』^{クルーエル・トーチャー}。これを発動すれば、相手の感覚を強化し、逆に剥奪させることもできる……例えば、こんな感じに」

次の瞬間、優の視界から全てが消え失せる。

「え……あ……」

突然の視界のブラックアウト。景色はともかく、手すらも見えない。

「今、君からは『視覚』を剥奪させてもらった。ほとんどの生物は周囲への認識のほとんどを目に頼っているからね。突然何も見えなくなるのはとても怖い恐怖になるだろうね」

耳元でささやかれた。優は己が勘に頼り、振り向きざまに手刀をなぐ。

だが、手応えが無い——

「次に、君からは嗅覚を遮断させた」

気付けば、流していた筈の血の匂いが消えていた。

いや、違う。これは、匂いがしないんじゃない。嗅げなくなったのだ。

「さらに、触覚」

地面に足をつけている感覚が消える。

「あ、あれ……?」

（私……倒されたの?それとも、宙に浮いているの?）

何も感じない。何も匂わない上に、目も見えない。

（でも、まだ……耳が——）

「そろそろ、君から全ての感覚を剥奪してみようか」

次の瞬間——本当に何もわからなくなった。

（あ……れ……）

へ光弾を叩き込もうとする。

しかし寸での所で足裏から水を高压で噴出し、前に飛び出す事で直撃を回避する。

「ツ、手強い・・・!!」

分身体なのにこの強さ。冬樹は思わず歯噛みしてしまう。

「うあああああああああああああああああああ!?!」

「ツ!?!」

絶叫が迸り、見れば、ラヴァンドが優を徹底的に攻めていた。

「あぎっひ、が、くあ、あぎいつあ」

倒れ伏し、悶え苦しむ優の上空に光の球が浮遊している。ラヴァンドが手を掲げ、それを振り下ろせば、球は矢となって優に降り注ぐ。

「あああああああああああああああああああ!?!」

彼女のイメージではすでに自身の体は滅んでいるものと同じ程の苦痛が何度も何度も叩きつけられているのだ。

まだ小学生である彼女には——あまりにも荷が重い。

「あ・・・うあ・・・」

これ以上は、優の身が持たない。

急いで駆け付けなければ。

「ごっのおー!」

弘が門を開いても、すかさずラヴァンドの剣に弾き飛ばされる。

「くっ!」

雅が重力砲を放とうとすれば、すぐさまラヴァンドの分身体が異能を率いて妨害してくる。

そして、冬樹に至っては——

「く、う・・・」

凄まじい連撃によって完全に封殺されていた。

「さて・・・」

「うぐあ・・・」

優の腹を、ラヴァンドは踏みつける。

「そろそろ命乞いしたらどうだい? そうすれば、すぐに楽にしてあげるけど?」

聴覚だけを戻し、そう囁くラヴァンド。

ここまで痛めつけたのだ。そろそろ楽になりたいだろう。

「ツ……絶対に……いや……」

だが、そうであっても、優は決して、首を縦に振らない。

「ふーん……じゃあ、痛みに悶え苦しみながら、死ね」

ラヴァンドが優から離れる。そして、片手を掲げると、優の真上に何かの塊が出現する。それは物質ではない。別の何かだ。

「これは痛みと苦しみが詰まった『痛覚の檻』（ジュエル・ベイシ）という技でね。蓄積したダメージや痛みを、凝縮したのがこれだよ。さて問題だ。これを、今の痛覚を最大にまで引き上げている状態で使ったらどうなるんだろうねえ？」

「なっ、まさか……!?!」

「やめろお!!」

雅や弘の言葉など当然聞き入れる訳がなく。

「さあ……人生最大の苦痛を味わってから、死ぬと良いツ!!」

ラヴァンドの手が振り下ろされ、痛みの塊が振り下ろされる。

すでに、優に動けるだけの余力はない。

(ち……かげ……さ……)

ただ思う事、それは、先に逝ってしまった、想い人の事だけだった。

そして、『痛覚の檻』が、優に落とされた。

「優ちやああああああああん!!!」

雅の絶叫が迸る。炸裂した光は拡散し、爆発を引き起こす。

「終わったね……ん？」

その様子に、ほくそ笑んでいたラヴァンドであったが、突如として優がいた方向から矢が飛来する。

「うわっど!?!」

「『雷神の一撃』（ミョルニール） ツ!!!」

「なにツ!?!」

さらに、ラヴァンドの真上から、極太の雷が落とされる。

「今の雷は……まさか……!!」

「うん……おまたせ……」

「真斗君!!」

見れば、そこには巨大な体躯を持った少年、真斗が片手にハンマーをもって佇んでいた。

「優も・・・無事・・・」

そして、真斗が指差す先には、

「・・・よく頑張ったな」

腕の中で、静かな寝息を立てる少女が生きている事を確かめ、そして、その傷つき様に、ぎゅっと、その小さな体を抱き締める。

「やれやれ酷いなあ、一応僕は君たちに恨みなんてないんだけど？」

「当然だ。なぜなら私たちはお前たちに、一切、攻撃なんてしていないんだからな」

優をそつと寝かせ、彼女は立ち上がる。

「だが、私にはある」

怒りを瞳の奥で滾らせて、佐奈は、ラヴァンドを睨みつけた。

「やれやれ、こんな所まで追いかけてくるなんて。君、案外僕に気があつたり?」

「私が生涯愛する者は、すでにいる」

「それは残念。そのついでといつちやなんだけど、ここで引いてくれると嬉しいんだけど・・・その気は全くなさそうだね」

「ああ、私はその為にここにいます。お前を討ち、マジアクルスを狩る。それが、私がここへ来た目的だ」

佐奈が、弓を引き絞る。

「構えろラヴァンド。この安室佐奈、罪人^{とがびと}としての贖罪の為に、今ここで貴様を討つ!!」

ラヴァンドの瞳に、暗い苛立ちが垣間見えた。

「罪人が何が贖罪なのかを決めるんじゃないよ。それじゃあ断罪人としての立場がなくなっちゃうじゃないか。だから、僕が君に贖罪とはなにかを教えてあげるよ」

一触即発の緊迫感が、部屋を満たす。

だが、その拮抗はすぐに破れ、ラヴァンドが走り出していく。そして佐奈は、そんなラヴァンドに向かって矢を解き放つ――

四国香川県丸亀市、乃木邸にて――

乃木の家には、代々より受け継がれてきた、一本の刀がある。

初代勇者が振るっていたとされる刀であり、言い伝えによれば、その刀には、その初代勇者の魂が刻まれているという――

その刀から、唐突に青い炎が燃え広がり、保管されていた地下室から天井へ一気に飛び上がり、そしてそのまま乃木邸の屋根をどこへともなく飛んでいく。

一体、何がどうなって、そうなってしまったのか。

その理由は、誰にも分からない――

ただ、その刀が飛んでいった先にあるもの。それは――神樹の御神体だった。

願いを求めぬ者（エゴイスト）

——刃が錯綜する。

赤い流星が、赤熱する熱線に突っ込み、空中に波紋を広げる。

そして立ち上るは熱の壁。それを、手に持つ刀によつて一気に切り裂く。

その時、頭上に熱を感じて見上げれば、形を成した熱が、槍として三本も形勢されていた。

「ゼエアアアア!!」

気合の声と共に、それらが叩き落される。

それらが彼に当たり、爆発を引き起こす。大きなきこの雲が立ち上る。

だが、その熱の中を、青年はその装束を燃やしながら、討つべき敵に突っ込む。

「オオアアア!!」

「くっ!!」

突進、刃を押し付けるように、敵に激突する。そのまま弾き飛ばし、追撃の斜め下からの切り上げを続行。

刃が掠める。しかし当たらず、神速の突きが彼を襲う。されどそれらを斬り払い、青年は反撃に斬撃を飛ばす。

されどその斬撃は弾かれ後ろに飛び、その背後の地面を断克する。

「——見事だ」

敵が——ジガが称える。

「お前は、俺が今まで戦ってきた者の中で、誰よりも強い。その技に、剣に乗せた想い。それら全てが称賛に値する」

「それは光栄な事だ。だが、俺はお前に勝たなければならぬッ!!」

青年——春信はそう叫ぶなり、弾丸の如き速さでジガに接近する。

繰り出される神速の斬撃、それらをジガは全て防ぎきる。

だが、最後の一発、槍が思いっきり弾かれる。

「ぬっ!!」

「竜月ッ!!」

そして、春信最大の得意技『竜月』が炸裂する。

竜の爪の如き勢いで、月を描くように斬撃を繰り返す事から、その名がついた技。

「見事——」

その一撃すら、ジガは称賛する。

「お前の剣から、守るべきものを持つ、戦士の気迫を感じる——」

突きの構えを取る。

「このままいけば、俺は負けるだろう」

地面を蹴り、突きを放つ。

「どうやら今のままでは、不足らしいな」

その言葉に、剣閃が鈍る。

不足。それは一体どういう意味なのか。

鈍った剣閃を弾かれ、距離を取らされる。

「故に俺は、お前に勝つために、さらなる力を解放するしかない」

「さらなる力だと・・・!?」

「そうだ。お前たちで言う所の、満開というのだろうか・・・だが、お前たちは神からその力を借りている身、この力は、真正正銘、俺の力だッ!!」

ジガの熱の色が変わる。

「我が真の名は『ジガ・ゴジラ』。かの世界にて世界を蹂躪せしめし世界の王。我、その名の元に、我が真なる力を解放させん。そう、何故ならば——」

その色は、青。

膨れ上がる、絶対的圧力。

ジガの胸が、背中が青く、発光する。

「『我、地球の神』也」

熱が解放される。

「ぐおっ」

放たれる熱量は、先ほどの比ではなく、一気に肺が焼かれてしまう程熱い。

ジガの体は青く発光し、周囲の物質が一気に溶けていく。

その姿は——まさしく神。

「お前は・・・一体・・・!?!」

「さあな。だが、ただ分かる事は——俺は熱の化け物だという事だけだ」

ジガが構える。

「行くぞ」

そしてそう呟いた瞬間、春信が吹き飛ばされる。

「ぐうあ!?!」

吹き飛ばされた春信は、そのまま砲弾のように飛んでいき、すぐさま追い付いてきたジガに地面に叩き起こされる。

そして、先ほどとは比べ物にならないほどの威力となった熱線が放たれる。

『レディエーションビーム放射火炎』ツ!!」

体を転がす事によって回避。だがそのビームは春信に向かって薙ぎ払われ、一気にその射線上の地面が大きく抉り溶かされる。

その様子を見届けるジガの横から春信が飛び掛かる。

叩きつけられる刃を、ジガは受け止める。

「甘いッ!!」

「ッ!?!」

ほぼ反射的に体を捻る春信。その横を、ジガの熱線が通過する。

耳が僅かに焼け、痛みが響く。だが、それを気にしていられる時間はない。

左手に持った刀を一気に薙ぐ。だが、それすらも躲されて、ジガが上空からあの青い熱線を放つ。

「竜月ッ!!」

反撃に渾身の斬撃を飛ばす。

熱線と斬撃が正面からぶつかる。

だが、その拮抗は、五秒で終わり、春信の方へ押し込まれていく。

「ッ!？」

その熱線が、春信に直撃してしまう——その時、その熱線が突如として拡散する。

「ッ!？」

それに目を見張る春信とジガ。

「ヤアアア!!！」

そして、ジガを横から、襲う者が一人。

金紗の髪をなびかせて、一人の少女がジガに襲い掛かる。

その手には、柄の長い、槍。

放たれる斬撃は千剣が如く、その斬撃がジガに一気に叩きつけられる。

それらを全て弾き飛ばし、ジガはすかさず、熱線を放とうとして腕を振りかぶる。だがその手に向かって、どこからともなく何かが飛来し、その狙いがジガの手だと悟るや、ジガはすぐさま攻撃を中止し、その何かを弾く事に対応する。

そして、そのジガに向かって、少女の蹴りが叩きつけられ、吹き飛ばされる。

ジガはどうか態勢を立て直して地面に着地する。

「・・・ふむ」

蹴られた胸に触り、ジガは関心を示す。

「良い太刀筋だ。あの時とはまるで別人のようだ」

「それはありがとう。でも、私は貴方を倒すからね」

少女は槍を手の上で踊らせる。

そして、背後に立つ春信に、少女はこう声をかける。

「遅れてごめんなさい、春信さん」

少女は——乃木園子はそう言った。

「やれやれ、お前という奴は・・・」

そんな園子に春信は思わず笑みを零す。

「いつも、良いタイミングで来てくれる」

「えへへ」

その言葉がよほど嬉しいのか、はにかむ。

園子の隣に立って、ジガにその剣を向ける春信。

「約束だ。俺の隣で戦え、園子」

「うん。絶対に、貴方の隣は誰にも譲らないから」

そんな、二人の様子に、ジガはなるほどと納得する。

「比翼連理とはこのことか・・・良いだろう。二人まとめてかかってくるが良い」

ジガがその両手に熱を集める。それを見た二人が一気に駈け出し、次の瞬間、ジガと園子と春信がぶつかる――。

「だあああ!!倒しても倒しても全然減らねええええ!!」

襲い掛かる竜牙兵やらゴーレムやらを数えきれない程倒して、明日香はそう絶叫する。

「黙れ明日香!気が散るだろうが!!」

「そしてこの辛辣な返し!」

「でも、確かに疲弊が激しいわね・・・一旦、どこかに退避するわよ!」

指揮官として、部隊の疲弊を案じて後退を支持する。

「もう少し倒して成果を挙げたい所ですけど、仕方ありませんわね」

「チツ!しゃあないか」

「将真、『土散弾』ッ!」

「承知した!」

将真が地面を叩く。床が砕け、無数の礫が空中に散らばる。将真はそれを操り、襲い掛かる竜牙兵に向かって一気に放つ。

「銃剣隊構えッ!!目標、敵集団の一点ッ!ってー!!」

素晴らしい程整った動きで構えられた銃剣が一斉に火を噴く。そ

の方向は今まさに背後から襲い掛かろうとしていた竜牙兵の集団に向かつて叩き込まれ、一気にその数を減らされる。

「今よ！護盾隊！突撃イ！！」

そして、護盾隊が銃剣隊と入れ替わるようにその方向へ突撃。ほとんど竜牙兵を倒したとはいえ、まだ生き残りがいる。その生き残りに向かつて盾による突進を敢行したのだ。

案の定、生き残っていてもはやその突進を耐え切る余力のない竜牙兵たちは一気に砕かれ、彼らの突破を許す。

「走って！！」

芽吹の叫びに、他の者たちも一気に駆け抜ける。

そうして、しばらく走った後、唐突に戦闘を走っていた雀が突如として通路の片隅にある部屋に突っ込んでいった。

「雀？！」

「あそこだあー！」

一目散にその部屋に入っていく雀。

「皆！雀に続きなさい！」

雀の未来予知にも匹敵する生存本能があそこを示したのだろう。ならば従わない手はない。

彼らはまとめてその部屋に入る。幸い、その部屋は広く、防人部隊が全員入ってもかなりの余裕があるほどの部屋だった。

そして、大急ぎで扉を閉め、全員に静かにするようにと合図を送り、壁に耳を当てる。

がしやがしやと竜牙兵の骨同士が擦れるような足音がいくつも聞こえていく。

だが、その音はやがて遠のき、完全に消えた所で、芽吹は一息つく。

「どうにか凌いだようね・・・」

とりあえずは一安心といった所だろうか。

その事に、芽吹のみならず防人部隊全員が安堵の息を吐く。

「だがどうする？このままここで戦っていてもじり貧である事には変わりないぞ」

「もう敵の所にはついていないでしょう。一応、足止めするっていう役

割は終わったわ。後は、彼らの援護に行くだけよ」

そこで芽吹は腰のポーチから何かの端末を取り出す。

タブレットサイズの携帯端末ようだ。

「それって確か・・・」

「ええ、神代さんがくれた、勇者全員の安否を確認できる端末よ」

ついでに、全ての勇者が通った通路についても自動でマッピングしてくれる優れものである。

「辰巳さんがヒュアツインテと単独で戦闘、他の勇者たちは四人に分かれていて、浅羽さん、磯部さん、新井さん、稲成さん、森谷さんがブルーメと、桐馬さん、安座間ちゃん、水霜さん、加賀さん、車田くん、安室さんがラヴアンドと対峙してて、そして東郷さん、樹ちゃん、夏凜、風さんが今結城さんの所に向かってるわね。そして春信さんと乃木さんがジガと交戦・・・三ノ輪さんは今の所戦線離脱って所ね・・・」

「辰巳師匠・・・一人で大丈夫だろうか・・・」

そう呟く将真。

「大丈夫だって」

「明日香」

「辰巳師匠が強いつて事は皆知ってるだろ？誰に扱かれたと思ってるだよ」

そう言っ胸を叩く明日香。

そんな明日香に、皆呆氣にとられ、そして次に全員が一斉に嘖き出す。

「そりやそうね、一番やられたアンタが言うと言説力あるわ」

「あれー、なんか場の空気が和んで良い事のはずなのに、なんか嬉しくねー」

妙にしっくりこない明日香の差し置いて、座っていた芽吹が立ち上がる。

「じーっとしててもどうにもならないわ。今から複数の班に分かれて、それぞれの援護に向かうとしましょうか」

その芽吹の提案に、一同が頷きかけた時、

「隊長！」

一人の男子隊員が、部屋の奥から声をかけてくる。

そちらに一斉に視線を向ければ、そこには三人の男子隊員が、謎の球体を指差していた。

「あれなんでしよう?」

その球体はガラスのようで、その中には、何か、結晶のようなものが入っていた――

剣が飛来し、それを辰巳は弾き飛ばす。

「ふふ、一体いつまで逃げ回るつもりなのでしょうか?」

そんな辰巳の様子を、ヒュアツインテは嘲笑い、いつまでも、ドーム状の部屋の周りをぐるぐると走り続ける辰巳を眺める。

「くそっ……」

悪態を吐くも、それでも剣は襲ってくる。

炎を纏う『紅蓮の魔女』が地面に突き刺さる。すると火炎は辰巳に向かつて走り抜け、その炎から無数の槍やら剣やら杭やらが突き出し、串刺しにしようと襲い掛かってくる。

それを大剣の一撃で薙ぎ払えば、今度は『人喰らう女王』が突っ込んできて、それを弾けば今度は血を操る『鮮血の伯爵夫人』が血の刃を降らせ、吹き飛ばせばすかさず『嘘殺しの龍女』が竜となって襲い掛かる。

その火炎が直撃し、その炎の中から辰巳が転がり出てくる。

「ハア……ハア……」

初めの毒の影響で、酷く体が重い。だが、それでも、対応できない程ではない。

「なかなかしぶといですね。人の身に圧縮された竜の力が、私の毒を吹き飛ばしているのでしょうか? いいえ、ありませんね」

ヒュアツインテが、八本の剣の内、七本を集合させる。
『シャッフル・ヒストリア
歴史 改変』

剣が回転する。

その一回転で、その剣の形状が変わる。

「ッ!?!」

「やりなさい『秀丽なる鬼女』」

一際巨大な剣が襲い掛かる。それを横に飛ぶことで躲すも、その剣が叩きつけられた地面が、呆気なく割れる。

「なんツ!?!」

『カラミティ・ジュエル
平原の女王』

銃弾が飛び、辰巳の足を撃ちぬく。

「がッ!?!」

『復讐に走る守護の女王』

さらに、一本の短剣による突撃を喰らい、吹き飛ばされる辰巳。

「ぐうあ!?!」

「まだまだ行きますよ。『撃ち抜く海』『斬殺する賊』」

さらに、二本の剣が飛んでくる。一方はカトラス、もう一方は、引き金のついた銃剣——

「ッ!!」

突っ込んできたカトラスを弾くもすぐさま返ってきては追撃の斬撃を放ってくる。その対応に見舞われる辰巳に、背後からゆっくり狙うは引き金のついた銃剣。

そして、カトラスが器用に辰巳に攻撃をしかけていると、辰巳に出来た一瞬の隙に向かって、背後の銃剣が弾丸を放つ。

放たれた弾丸の狙いは、辰巳の肩。その弾丸は、寸分変わらず彼の肩を撃ち抜く。

そして、そこへカトラスが辰巳の首を跳ねんと水平に斬撃を放つ——だが、その斬撃を、辰巳はあろうことか素手で止めた。

「この、程度で……」

撃ち抜かれた肩の傷は、すでに塞がっていた。

「俺を仕留められると思うなッ!!」

一気に地面に叩きつける。そして、背後の銃剣に向かって竜月を飛ばし、弾き飛ばす。

「一か八かだ——ッ!!」

後ろに振りかざした大剣が黄昏の光を纏う。

「ふむ、そう来ますか——」

それを見たヒュアツインテの声に動揺は無く。

「——『見通せよ、汝の未来』」

ヒュアツインテの左目に、時計が映る。その時計が、高速で回転し、そんなヒュアツインテの視界に見えたのは——

「見えました、貴方の未来が」

不敵に笑い、ヒュアツインテは、一本の剣を手を取った。

「——『黄昏に咆える——』」

そして、辰巳の剣の光が、その臨界点を突破し、そのエネルギーが一気に解き放たれる。

「——『邪悪なる竜』ウツ!!!」

放たれた黄昏色の光。それはまさしく邪竜の咆哮であり、全てを融解させる必殺の一撃。

それが、ヒュアツインテに向かって放たれる。

その光が、ヒュアツインテに迫る。

だが、それでもヒュアツインテは冷静そのものであり、

「——我、司るは時」

手にある剣が、時計回りに回転する。

そこへ辰巳の『黄昏に咆える邪悪なる竜』が直撃する。

「時は全てに平等に与えられ、決して止まる事は無く、戻る事はない——」

だが、その光が螺旋状に拡散してしまう。

「なッ!?!」

「されど我は時を司る。それ即ち未来を見通し、過去に行き、時間を歪める——」

その理由は、ヒュアツインテの手の中で回転する、一本の剣にあった。

剣が飛翔してくる。それをアタランテの瞬足をもって部屋を駆け抜け、躲す。

そして出来た隙に矢を撃ちこむ。だけど、それら全てはいともたやすく弾かれ、反撃の砲撃が迫る。

それすらも佐奈は躲し、そして、その砲撃が着弾した衝撃によつて打ち上げられた剣が一斉に佐奈の方をむく。

「させるかっ!!」

そこへ弘がすかさず剣を射出、それら全てを砕き落とす。

さらに、剣を操っているラヴァンドの死角から、雅が黒玉を多数出現させて、それらを一気に放つ。

「甘いよ」

それに対してラヴァンドも同じ黒玉で対抗。全て相殺し、さらに――

『ライトニング・ヒース貫通雷鳴』

神速の矢が反撃として放たれる。

「ッ!!」

それを雅はさらなる黒玉で防御。そこでラヴァンドの側面から冬樹が接近。

「二歩――」

一度、踏み込んで飛び、

「二歩――」

二度、速さの壁を超える。

「三步、で、最速――ッ!!」

三度、達人の領域へ。

これぞ浅葱色を身に纏う、最強の剣士の最速の剣。

「――絶技・三段突きッ!!」

神速の突きが放たれる。

それに対して、ラヴァンドはその手に剣を――刀を取り、そして、冬樹と全く同じ形で全く同じ技を撃ち返した。

「ッ!?!」

(私の技を……!!?)

「言っただろう？ 僕の能力は模倣だつて」

「ッ！」

相殺した所でラヴァンドは手を振りかざし、空中に鎖を展開する。

「それはっ!？」

『封印縛鎖』

千景が御神刀『天鎖刈』を率いて使う、相手に起きる全ての事象、行動、身体機能に制限を駆ける能力。

それを、冬樹は間一髪の所で逃れる。

「お前……ッ!!」

だが避けたにも関わらず、冬樹の顔は怒りで歪んでいた。

「便利だろう『贗フエイカースキル作技』。これがあれば、どんな必殺技でも、どんな武器でも、完全ではないにしろ模倣できる。そして、その模倣できる数が僕の武器だ。そして、僕は、今見せているものを含めて、あと、一万三千二百七十三個もの技を保有している」

多い。あまりにも多い。これが、全てを模倣する『贗フエイカー作者』という力の本領なのか。

だが、そんな数の技を保有している事はどうでも良い。

ただ、冬樹が許せない事はただ一つ。

「お前のような奴が……千景の技を使うなあああ!!!」

冬樹の姿が掻き消える。

「へえ……」

それを見て、ラヴァンドは顎に手を当てて口角を僅かに上げる。

気付けば、冬樹は無数の残像が現れる程に、ラヴァンドの周りを駆けまわっていた。

恐ろしい速度である。

否、残像が見えるように緩急をつけて走っているのだ。

「お前は許さない……!!」

その言葉を発すると同時に、攻撃をしかける。恐ろしい速度で、ラヴァンドの襲い掛かる。

斬撃が斬撃に続き、残像が残像に消える。

それほどまでに激しい連撃。それを、ラヴァンドはあろうことか全て躲していた。

まるで、踊るかのように、激しい冬樹の攻撃を全て躲していた。
(動きが・・・読めない・・・!?)

まさしく水流。冬樹の激流とは違い、まるでされるがままに流れる水のように、軽く躲していた。

「奴は踊る事で一種のトランス状態になっている!!今の奴は意識が薄れている状態と同じだ!気配を読んで動きを先読みする事は出来ないぞ!!」

佐奈の叫びが耳に届く。だが、冬樹は、下がらない。

「冬樹!？」

(こいつ・・・こいつだけは・・・!!)

千景を侮辱された。だから胸糞が悪い。許せない。だからコイツは、こいつだけは絶対に斬る。何があろうと、絶対に——!!

「やれやれ、聞き分けの無い子供は、将来ろくな大人にならないよ」

「お前に、説教、される、筋合いは、無い!!」

斬撃がラヴァンドに向かって飛来する。

「無駄だよ」

突然、足に鋭い痛みが走る。

「なッ!？」

その痛みに、思わずよろける。

何が起きたのか。それは、ほんの些細な事だ。

小さな棘が、冬樹の足を甲まで貫いていた。ただそれだけ。

だが、足を攻撃されたのは致命的だった。

踏み込んだ足が、痛みにがくりと落ちる。

その隙を狙って、ラヴァンドの掌が、冬樹の右肩に触れる。

『フエイカースキル贗作技』——『シャットインパクト』』

衝撃が、冬樹の体を貫く。

「がッ!？」

その衝撃によって冬樹の体が宙を舞い、ごろごろと地面を無様に転げる。

「冬樹!!」

雅が悲鳴を上げる。

だが、冬樹を吹っ飛ばしたラヴァンドに向かって、雷が落ちる。

「——『原初ソニアへ回帰ミヨする雷神ニールの鉄槌ル』ツ!!!」

全てを原初の塵へと回帰かえす、雷神の一撃が、ラヴァンドに向かって叩き落される。

その雷槌を振り下ろした真斗。だが、その背後にはすでにラヴァンドがいて——

「はい、残念」

「うがッ!」

その体を、鎖によって何重にも縛られ、動きを封じられ、倒れる。

「う・う・うううう!!!」

「外そうとしても無駄だよ。これは不道千景の鎖じゃない。神の力を封じる為に作られた特別製でね、今、ツールとかいう神の力を使っている君じゃ絶対を外せないよ? 最も、素の頑丈さもすさまじくで、仮令解除しても無駄だけどね」

ラヴァンドが嘲笑う。

どれほど頑張ろうとも、その鎖が決して切れる事がないという絶対的な自身があるのだろう。

「このッ!!」

雅が、重力を収束させる。

『超重力砲グラビティ・ブラスト』オツ!!」

放たれる砲撃。それが一気にラヴァンドに迫る。しかし、その砲撃は、ラヴァンドの掌の前にあっけなく霧散する。

「そんな・・・!!?」

「重力の反対のものをぶつければ、簡単に相殺できるよこんなの。仮令どんな防御手段を率いても防げない攻撃でもあっても、それを相殺できるものをぶつければ、対応なんて簡単だ」

気付けば、雅の足元にロープのようなものが巻き付いていて——

「があああああああああああ!?!」

凄まじい電流が流れ、雅の体に凄まじいまでの電撃を与える。

「が……か……」

その電流が流れるのが終わると、雅が、力尽きるように、倒れる。

「ツ！桐馬!!」

「さて、最後は君たちだけだね」

ラヴァンドは、まだ残っている弘と佐奈の方を見る。

佐奈と弘は身構える。

攻撃手段があまりにも多い。衝撃波や真斗の雷撃を躲した瞬間移動、雅の超重力砲すら防ぐ能力。そして、千景の鎖。

手数じゃこちらが圧倒的に不利だ。

「さて、どんな風に料理してあげようか」

ほくそ笑むラヴァンド。

しばしの膠着、だが、それはすぐに破られる。

「よし、こうしよう」

「ッ!!」

次の瞬間、佐奈の背筋に、凄まじい悪寒が走り抜ける。

そして、佐奈は弘を蹴り飛ばした。

「うぐあ!」

蹴り飛ばされた弘は訳が分からず、地面を転がる。

そして、どうにか転がるのを耐えた所で顔を上げた瞬間、

「ぐあああああああああああああ!」

佐奈の絶叫が迸った。

見れば、ラヴァンドの蹴りが脇腹を掠っただけのようであり、それに佐奈は絶叫を挙げて、地面に膝をつく。

「ぐ……が……!」

『フルーエル・トーチャー』
『無慈悲なる拷問』。痛覚以外の感覚を全て遮断。そして痛覚を限界にまで引き延ばさせてもらったよ。もう、お前に僕を仕留められる手段はない」

今度は、確実な一撃が佐奈の腹を叩く。

「ぎいあッ!」

唾が口から飛ぶ。

さらに追撃が叩き込まれ、佐奈をさらに追い立てる。

限界にまで引き延ばされた痛覚。自分が今どうなっているのか分からず、攻撃すらも予測できないこの状況。

まさしく、無慈悲なる拷問。

「ほらほらほらほら!!もつと叫べ!もつと苦しめ!!罪人は罪人らしく、痛みへのうち回つていればいいんだ!!」

様々な攻撃が、佐奈に一方的に叩き込まれる。

佐奈は、声にならない悲鳴をあげながら、その攻撃を受け続けていく。

「佐奈さん!!」

弘は、迷わず佐奈を助けに行こうとする。

「邪魔をするなよ」

「ぐあ!」

だが、その足へラヴァンドの剣が突き刺さり、固定され、倒れてしまう。

「ツ・・・佐奈さん!!」

「ここで見てなよ。ここで、君たちの仲間が苦しむ姿をさ」

ラヴァンドが、さらに佐奈を責め立てる。ありとあらゆる攻撃が佐奈を打ち、一方何も見えず、何も感じる事の出来ない佐奈は、その攻撃を一方的に貰い続ける。

そして、痛覚を限界にまで引き上げられた今の状態では、仮令、軽く小突いただけでも弾丸の一撃に匹敵してしまう。だから、今、佐奈を襲う痛みは、今までの何よりも辛く激しいダメージとなっている筈だ。

そんな彼女に、ラヴァンドは容赦なく、攻撃を叩き続ける。

すでに佐奈は満身創痍。このままいけば、確実にやられる。

だが、それでも、佐奈は倒れない。

それに、ラヴァンドは思わず疑問に思う。

(おかしい・・・普通ここまでやられたら地面をのたうちまわると思うんだけど・・・)

「まあ、いつか。この方がやりやすいからねえ!!」

ラヴァンドの拳が、引き絞られる。

「次で楽にしてあげるよ」

その拳が妖しく光る。

『フェイクカースキル
贗作技』——」

それは、とある武術化が編み出した、二度打つことを必要としない、一撃必殺の拳。

「——『絶・无二打』にのうちいらす」

その拳は、仮令牽制やフェイントに使ったとしても、確実に相手の命を取るといわれた凶拳。

その拳が、今、佐奈の顔面に吸い込まれるように迫り——
やがて、拳が炸裂する音が響いた——

「呆気なかったですね」

七本の剣に串刺しにされて地面に倒れ伏す男を見て、ヒュアツインテは嘲笑う。

「もう少し骨があると思っただのですが……所詮は人間で罪人。この程度ですね」

拳が引き抜かれ、ヒュアツインテの元へ戻る。

「さて、他の方の援護に向かうとしましょうか……」
そう、言った直後だった。

「——■■■■■■■■■■ツ!!!」

おおよそ形容しがたい絶叫を挙げて、ヒュアツインテに、絶命した筈の辰巳が襲い掛かる。

「ツ!?!」

その一撃を、ヒュアツインテは思わず六本の剣を率いて防ぐ。

「まだこのような力があつたとは、驚きです……」

そして、残り二本のうち、一本を手に取り、その剣に黄褐色の光を収束させる。

「消えなさい——『咆えよ、我が愛する者の黄昏の大剣』」

黄昏の咆哮が、辰巳を飲み込み、されどあまり効いていないようで、ただ吹き飛ばされるだけにとどまる。

地面に上手く着地し、鎧越しに、辰巳はヒュアツインテを睨みつける。

「その剣……なぜ、持っている?」

「あら、自分と同じ剣を持っている事がそんなに珍しいですか?これは、とある英雄が持っていた剣を、その妻が復讐に使ったからこそ私の手元にあるのです」

「そうじゃない。お前、何故その剣を入れ替えなかった?」

「……」

その問いに、ヒュアツインテは答えられなかった。

「見た所、全ての剣を入れ替えたように見えた。だがお前は、ただ一つ、その剣だけ入れ替えなかった……それは何故だ?」

「それ……は……」

指摘されて、初めて気付く。

他にも、この剣以上の力を備えている剣はいくらでもある。だが、なぜか、この剣だけは、今の今まで決して入れ替えなかった——ただ一つ、自分の能力である『時の支配者』の根幹である漆黒の剣は入れ替えられない事を外せば、唯一、入れ替えられるのに入れ替えなかったこの剣。

一体……なぜ……?

「安心した」

その事に、辰巳は、本当に心の底から安心したような声を漏らす。

「お前が、俺と同じ剣を、ずっと使ってくれていた事に、とても安心した——」

辰巳が、立ち上がって、剣を構える。そして、黄褐色の光が、彼を包む。

「やはり、お前はひなただ。俺が見間違える筈がない。俺が好きに

なって、愛して、それでも守り切れなかった、俺の大切な人だ」
光が、彼の体に変化を与える。

銀色となり、長くなつた髪。兜は外され、されど鎧は体を包み、そしてエメラルド色の瞳は、ヒュアツインテを映す——

拳が炸裂する音が響いた——

その時、誰もが、佐奈の死を覚悟した。

何故なら、ラヴァンドの放つたのは、相手を必ず死に至らしめる、必殺の拳だ。

一方の佐奈は、全ての感覚を封じられ、唯一、痛覚だけが限界にまで引き上げられている。

だから、避けるなんて不可能。そう、誰もが思っていた。

そう、誰もが、佐奈が死ぬという未来を確信していた。

あの時と同じように。翼と剛が死ぬ時と同じように。

「うぼあ……」

だが、拳が炸裂していたのは——ラヴァンドの方だった。

佐奈の左拳が、ラヴァンドの顔面に突き刺さっていた。

一方のラヴァンドの拳は、佐奈の顔のすぐ横を通り過ぎており、当たっていない。

そう、佐奈は反撃したのだ。

何も見えず、何も聞こえず、何も感じない、その状況から、反撃したのだ。そして、直撃した。

「な……なんで……!!?」

何が起きたのか、分からないラヴァンド。

だが、次の瞬間、さらなる攻撃がラヴァンドに叩き込まれる。

「ハアッ!!」

「うぐあ!?!」

右のブロウが腹に直撃する。その時、ラヴァンドだけでなく、佐奈

の顔も苦痛に歪む。

それもそうだ。拳を叩きつけた時の衝撃は、僅かながら自分にも返ってくるのだ。そのついでに、今の佐奈は触られるだけで激痛に苛まれる状態。ただで済むはずがない。

だが、佐奈は、それすらお構いなしにラヴァンドを殴る。

「うおお!!」

「ッ!」

また、拳がラヴァンドに迫る。その一撃を、どうにか受け止める。

「なんでだ・・・なんで僕の位置が分かる!?!なんで攻撃を当てる事が出来る・・・なんで、お前は動く事が出来るッ!?!なんでだ!?!」

ラヴァンドには、訳が分からなかった。

全ての感覚を奪い、そして、痛覚を限界にまで引き上げて、そして痛めつけ、まともに動けないようにした。

それでも、佐奈はラヴァンドの位置を的確に狙い撃ってくる。

それは、何故か――

「・・・はは」

その時、弘が力無さげに笑う。まるで、何か、バカげたことを思い出したかのように。

「そうだった。佐奈さんはそういう人だった。理屈で動いているように見えて、本当は、馬鹿みたいにふざけた事をする人だったつけ・・・」

弘は、否、襲撃者たち全員が知っている。

安室佐奈という女を。その強さを、その、願いを――

「佐奈さんだから、出来るんだ。こんな、ふざけた芸当が!!」

佐奈だからこそ、こんな事は容易い。佐奈だから、どんな苦境に立たされても戦える。

そう、佐奈は、自分の願いの為ならどんな事もやってのける人間なのだ。

「・・・お前たちが、一体、どんな想いで、どんな気持ちをもって戦っているのかは知らない。だが」

唐突に、佐奈が話し出す。

「私は、願いを叶えるためなら、どんな事でもやってやる。仮令、どれ

ほどつらく、厳しい道だったとしても、私は、私を貫き通す・・・!!」
ラヴァンドが、左拳を振りかぶって、佐奈の顔面を殴ろうとする。
だが、それを佐奈は受け止める。

「私の願いは、この世の全ての子供たちが、笑顔でいられる事だ!!荒唐無稽な話だろう!!だが、それでも私は私の願いを貫き通す!!そうだ、足柄辰巳だって、この世界を救うという約束を背負って戦っている!!自分の自己^{エゴ}を、貫き通すために戦っている!!だから——」

ラヴァンドの拳が、みしり、と音を立てる。

「私はお前を倒し、願いを叶えるツ!!」

その時、ラヴァンドの拳が握りつぶされる。

「ぐああああああ!!」

「ああああああ!!」

そして、その握りつぶした手を握りしめて、佐奈は、ラヴァンドを殴り飛ばす——

「俺は、俺の願いの為に、この戦いに参加した。その願いはただ一つ。ひなた、お前を取り戻す事だけだ」

「何を・・・いって・・・」

たじろぐヒュアツインテ。それをお構いなしに、辰巳は、言葉を続ける。

「思えば、安室佐奈も、たった一つの願いの為に、世界を壊そうとした。仮令操られていたとしても、それは、紛れもない、アイツの願いだ。アイツは、その願いの為だけに、自分の全てを投げ打った・・・」

剣を正眼に構える。

「正直に言つて尊敬する。ただ一つの願いの為だけに、それだけの事

をやつてのける事の出来るアイツを、俺は、称賛する。それだけの自己^{エゴ}を貫き通したい、そのアイツの想いを、俺は純粹に凄^{エゴ}いと思つた」
左腕の『炎輪^{タマ}炉心^マ機関^{エンジン}』が回転を始める。

「だから、俺も俺の自己^{エゴ}を通させてもらう。お前を取り戻し、必ず世界を取り戻す。それが、俺の願いだッ!!」

黄昏色の光が迸る。その様子に、ヒュアツインテは、目元をおさえて、苛立つた声音で言葉を漏らす。

「な・・・にが自己^{エゴ}ですか・・・!!」

計八本の剣が、ヒュアツインテの周囲に展開される。

「憎い、憎い憎い憎い!!それだからお前たちが人間が憎いんです!!傲慢で浅はか!!己の領分を弁えない自己^{エゴ}中心者^{セント}どもが、自分の我を通せると思い込み、そして、愚かで醜い過ちを犯すのです!!これだから、進歩の無い、下等種族がでしゃばるんですッ!!そんな、身の程を弁えないクズ共は、私がこの手で裁定を下すッ!!」

ヒュアツインテが、剣を操り、そして一気に振り下ろす――

追撃をした筈の佐奈の顔面に、ラヴァンドが放った光弾が直撃し、破裂する。

「ぐあああああああああ!?!」

絶叫が迸り、佐奈は地面に倒れ伏す。

「ぐうああああ・・・!!!」

その痛みに悶え苦しみ、そして、その上をラヴァンドが踏みつける。

「調子に乗るな・・・下等な人間がッ!!」

ラヴァンドのその表情は怒りに歪んでいた。

「何が願いだ。お前たちに叶えられる願いなどない・・・お前たちはただ、断罪の名の元に駆逐されるだけの有害因子だ!!お前たちのその身勝手な行いの所為で、お前たちは自らの滅亡を招いている事に、ま

だ気付かないのかっ!?!お前たちの傲慢な行いが、破滅を招いている事が、まだ分からないのかア!!」

踏みつけられ、佐奈の顔が、苦痛に歪む。

「そうか。分かった・・・」

ラヴァンドが、片手を掲げる。

「分からないというのなら仕方がない。このまま、地獄に落ちて自らの過ちを悔い改めるんだなア!!」

そのまま、ラヴァンドの一撃が、佐奈に振り落とされるその寸前――

「まだだア!!」

「ッ!?!」

いつの間にかその手に持っていた弓に三本の矢をつがえ、そして一気に放つ。

その矢、全てが、ラヴァンドの胸、右肩、右手首に突き刺さり、攻撃を中断させる。

「ぐぐあ!?!」

そして、その勢いそのまま吹き飛ばされ、地面に倒れる。

「げほっ、ごほっ・・・!!」

荒く咳き込む佐奈。

だが、それでも佐奈は立ち上がる。

放たれた剣が、一斉に弾き飛ばされる。

「ッ!?!」

それに、ヒュアツインテは目を見張る。

「・・・下してみろよ」

そこには、全ての剣を弾き飛ばし、剣を振りかぶった状態で静止す

る辰巳の姿があった。

「どれほどお前が否定しようともお前も結局は俺たちと同じだ。そんなやつに、俺は負けない」

剣を後方に構え、腰を低くして、ぐつと足に力を込める。

「行くぞひなた・・・これが俺たちの、二回目の夫婦喧嘩だツ!!!」

そして辰巳は、弾丸の如き勢いで、ヒュアツインテに突進する。

「倒れているんだろう・・・立てツ!!」

立ち上がった佐奈が、床に倒れ伏すラヴァンドにそう怒鳴り散らす。

「貴様が何をしようが、どんな事をしようが、私はお前を倒すツ!!何があろうと、どんな事が起きようと、私たちはお前を必ずぶっ倒すツ!!!」

指を突きつけ、佐奈はそう怒鳴る。

「行くぞラヴァンド・・・ここから先は、私たちのステージだツ!!!」

希望VS絶望

ブルーメと対峙した者たちが、全員、地面に沈む。

「これで終わりか。他愛無いな」

ブルーメは、地面に沈んだ者たちを嘲笑い、背を向ける。

「ふむ、他の所はまだ手こずっているようだな……どれ、一つ、手伝ってやろうか……」

ブルーメが、そう言つて、他の場所へ向かおうとする。その時、

「どこに行く気だ……!!」

「ッ!？」

信也の後ろ回し蹴りが炸裂する。

しかし、顔面を狙ったその一撃は、掲げられた腕によって防がれる。

「鬱陶しい虫ケラだ」

「ッ!？」

振り返ったブルーメの顔は狂喜に歪んでおり、その顔に信也はぞつとしてしまう。

だが、ブルーメが何か行動を起こす前に、掲げられた腕の反対側の方向の顔面に、幸奈の鉄拳が炸裂する。

だが、その一撃は障壁によって阻まれていた。

「無駄だ」

そう囁かれた直後に、信也の胸に、幸奈の腹に、それぞれの拳が突き刺さっていた。

「ぐっ!？」

「がっ!？」

それぞれの方向に吹き飛ばされた二人は口から血を吐き出す。

そのまま地面に落ちる。

「う……ぐはっ……」

「が……がはっ……」

さらに血を吐く。

相当ダメージが深い様だ。

「フハハ、どれだけ貴様らが束になって掛かった所で、無駄な事だ。絶

望には勝てないのだ!!」

嘲笑うブルーム。しかし、彼らは立ち上がった。

「仮令、絶望しかなかったとしても……」

がくがくと笑う足を無理矢理抑えつけて、二人は立ち上がる。

「その絶望を乗り越えて、私たちは、必ず見つける……」

立ち上がって、ブルームを睨みつける。

「希望は、絶対にあるから……アイツは、それに向かって真つすぐ進んでいった……だから……!」

「俺^{わたし}たちは絶対に諦めないツ……!!」

信也と幸奈はそう叫び、そして地面を蹴る。

「フハハ!! たった二人でこの俺に立ち向かうか!! 良いだろう! 貴様らの言うその希望……この俺が叩き潰してくれよう!!」

「おおおおおおッ!!」

「ハアアアアアッ!!」

信也の足払いがブルームの両踵を狙う。だがそれを飛ばれて躲される。その飛んだ所で幸奈の右拳が飛ぶ。されどそれすら体をのけ反らされて躲され、その右腕を掴まれて、体が回転する勢いのまま背中から地面に叩きつけられる。そのブルームの背中に向かって信也の後ろ回し蹴りが迫るも、それは前方に飛ばれる事で躲される。

さらに、いつ掴んだのか、その手には地面を砕いた際に出来た破片が握られており、それが音速を超えて投げられる。それを間一髪の所で躲すも、そこへ瞬次に接近してきたブルームの膝蹴りが砲弾の如く迫る。

その一撃が、信也に叩きつけられる直前、信也がその膝に自らの左足を乗せ、その衝撃を上手く受け流して後ろに飛ぶ。

そして、その横から立ち上がった幸奈がブルームに殴りかかる。その顔面を狙った一撃は頭を下げられる事で躲され、その腕が掴まれそうになると、入れ替わるように左拳が直撃する。

だが、それすら防がれると今度は蹴りが幸奈の腹に向かって放たれ、その一撃を幸奈はブルームの肩に手を置く事で体を上方へ動かし、その足に乗り、今度は顔面に向かって蹴りを叩き込む。

「先ほどから同じ場所しか狙っていないな。そこ以外狙う脳がないのか?」

しかし、やはり防がれていて、すかさず足を引つ込める幸奈に向かって、ブルーメの掌打が叩きつけられる。

「ぐう!!」

どうにか腕を交差させて直撃を防いで後ろに飛ぶ幸奈。二、三度地面を跳ねるもすぐさま態勢を立て直す。

その間にまた信也が飛び込み、脇腹に向かって渾身の蹴りを叩き込む。

だが、

「無駄だと言っているだろう?」

しかしその一撃も装甲に阻まれ届かず、その足を掴むなり幸奈に向かって投げ飛ばす。

「ぐうお!!」

「え!!」

砲弾のようになげられた信也に幸奈が当たり、地面を転がる。

「何度やっても無駄だ!お前たちに、希望は無いのだア!!」

高々とそう叫ぶブルーメ。

絡み合って転がった二人は、信也が上、幸奈が下になるように地面に転がっていた。

圧倒的、とはこのことだろうか。

二人とも、真解と切り札が解除されているとはいえ、あまりにも攻撃が通用していない。

他の仲間は全員気絶している。

二人だけで、この状況を打開するのは、あまりにも絶望的だ。

「うる・・・っせえ・・・」

信也が、そう呟く。幸奈の上から、どうにか起き上がり、ブルーメを睨みつける。

「絶望の中に・・・希望って奴があるんだろうが・・・お前がどれほど絶望絶望言おうがなあ・・・」

炎が迸る。

「諦めない限り、希望は必ずあるんだよッ!!」

炎が迸り、信也が地面を蹴る。

「だああ!!」

「無駄」

真解を発動した状態での、蹴り。だが、それをハエをはたくようにブルーメは弾き飛ばす。

弾かれた信也は、そのまま吹き飛び、地面に落ちる。

「無駄、無駄、無駄ア!!」

「くどいッ!!」

叫ぶブルーメの頭頂部に、さらに幸奈の踵落としが決まる。

「だから無駄なのだ」

「くっくッ!!」

だが、やはりブルーメには効かない。

すぐさまその足を掴まれて、地面に叩きつけられる。

「ああああ!!」

「幸奈!!」

一度跳ねて、信也の足元に落ちる。

「大丈夫か・・・?」

「ええ、まだいけるわ・・・!」

信也の言葉に、幸奈は頭から血を垂れ流しながらも立ち上がる。

「いい加減、不愉快だ・・・」

流石に、ブルーメも苛立つてきたのか、殺意を膨れ上がらせる。

「もう倒れる、虫ケラども」

ブルーメの両腕に力が収束する。あれで決めるのが分かる。

(くそ・・・まだ力が足りない・・・)

(スリウムでも力不足だった・・・)

二人は、必死に考える。

どうすればこの化け物に勝てる? どうすれば、この絶望的状况を打開できる?

一体、どれほどの力が必要なのだろうか?

どのような反則技を使えば、勝てるのか。

「これで最後だ」

もう、ブルームの両手に溜まったエネルギーは、今の二人では止める事は不可能。

であるならば、どうする？もう手はない。

本当にそうか？

何かを見落としてはいないだろうか？

何か、重大なことを、見落としてはいないだろうか？

今、限界を超える可能性がある方法がある方法が、あるんじゃないのか？

「絶望の果てに死ねッ!!」

ブルームが、その両手を前に突き出し、絶望の咆哮を解き放つ。

『魔獣ノ力』『黒竜の咆哮』ツ!!!」

虚無の咆哮が、二人に迫る。

—— あった

—— あの、反則技が・・・!!

そして、光が二人を飲み込む——

土煙が舞い上がる中、ブルームは、自分の勝利を確信していた。

「呆気なかったな・・・くく・・・フハハハハハハハハハ!!!」

嘲笑い、思わず高笑いをするブルーム。

だが、

「おい」

「まだ終わってないわよ」

唐突に、声が聞こえた。

「なに・・・？」

その声に、思わずブルームは高笑いをやめて、そちらを見た。煙舞う中から、何かが叩きつけられる。

「これは・・・熱い・・・いや、冷たいのか?・・・いや、これは、両方か!?!」

その二つの温度に、ブルーメは思わず驚く。

そう、これらは普通はありえないのだ。

熱いと冷たい。これは本来なら、両立する事なんてありえないのだから。

そう、であるなら、これは――

「真解――『岩漿・炎帝竜』」

「二体同時憑依――『霜の巨人と吹雪』」

信也の纏う装束は、溶岩を表すかのように緋色と黒を主とした、竜を模したようなものに。

一方の幸奈の纏う装束は、氷壁を表すような紺碧と黒を主とした、どこかの姫を思わせるようなものに。

そして、二人の纏う正反対の熱気と冷気は、明らかにその威力を増していた。

「・・・なんだ?それは?」

その姿に、ブルーメは首を傾げる。

「第三文字・・・かつて、千景の先祖がやってのけたっていう、己の心象心理を元に、御神刀に文字を焼き付ける、奇跡みたいなものだ。救導者の歴史上、それをやってのけたのは、千景の先祖ただ一人みないでな。真解を初めて発動させたのもその人だけだ・・・でも、俺にもできた」

「私のは、二体の精霊を同時に己の体に憑依するもの・・・だけど、最強の精霊っていうのに疎いかしらね・・・事象そのものを憑依させてもらったわ」

二人は分かかっていない。

信也は、確かに第三文字である『竜』を呼び起こした。だが、それだけではなく、彼は、己の力の本質そのものを変えた。

彼の力は『炎』だ。それを『岩漿』即ち『マグマ』へと変質させた

のだ。

大地の力そのものたるマグマ。それを、彼は今、発言させたのだ。一方の幸奈は、事象と言ったが、それは言つて容易い事ではない。ブリザードは現象、人々が知覚出来る、形無き自然の力。

人間の力では、自然の力を制御することは不可能。なぜなら、自然の猛威は、どうあつても防ぐことなどできない。

出来る事すれば、それを凌ぐ術のみ。

だが、自然の猛威に意思はない。だからこそ凌ぐことは出来る。だが、それが意思を持ったとするならば？操れたとするのなら？

疑似的なものではなく、吹雪という、強大すぎる猛威を操る事が出来たとするならば？

それは、まさしく、災害ではない——新たな化け物の誕生である。

マグマとブリザード。

どちらも、自然の猛威。人が触れてはならない、本質を持つ力。

その力が今、二人の手の中にある。

「ふん、それがどうした？」

しかし、ブルームは侮る。

たかが人間。その程度が一体なんだというのか。

所詮は、人間の力。恐れるに足らない。

『魔獣ノ力』——」

ブルームの両手に、光の爪が三本つつ現れる。

それを展開したまま、ブルームは、音速を超えて二人に接近する。

そのまま二人の首を刈りに行く。

この速度に、反応できる訳がない。なぜなら、人間だから——

その悔りが、彼に、初ダメージを与える事となる。

信也の蹴りが、幸奈の拳が、それぞれ、顔面と腹に叩きつけられる。

纏われていた装甲を貫いて。

「ウラアアアアツツ!!!」

「ハアアアアアツツ!!!」

「ぐごえツ!?!」

熱気が腹を突き抜ける。冷気が顔を焼く。

その二つのダメージをもって、ブルーメは吹き飛ぶ。

「ば、馬鹿な・・・!?!」

信じられない、という表情で、ブルーメは吹き飛ぶ中で二人を見る。

「全力で来い」

信也が、左手でくいくいと挑発する。

「じゃねえと、屈辱にまみれて死ぬことになるぜ」

その顔は笑っておらず、二人は真っ直ぐにブルーメを見ていた。

油断も隙も無い。全力でブルーメを倒すという姿勢だ。

その姿に、立ち上がったブルーメは。

「人間、風情が・・・」

その殺気を明らかに増大させて、立ち上がる。

そう口角を吊り上げて、目を血走らせて叫ぶ。

「いいだろう!!ならばすぐにお前たちを絶望の底に叩き落してくれ

るツ!!」

「やってみろオ!!」

ほぼ同時に、双方は駆け出す。

そして、衝突と同時に、凄まじいまでの攻撃の応酬が繰り広げられる。

マグマの熱が迸り、吹雪の冷気が叩きつけられ、それを魔獣が喰らうかのような反撃が飛び散る。

もはや、人間の目ではとらえられないような激しい殴り合いが勃発していた。

その最中でブルーメが二人を両の拳で殴って弾き飛ばす。

「うわ!?!」

「ぐう!?!」

弾かれてもどうにか耐える二人。そこへブルーメが神速をもって襲い掛かる。

「ッ——アアッ!!」

だが、それに対して動いたのは信也。右足を煮え滾らせて、その拳の一撃を真正面から衝突させる。

「があああああ!!」

迸る熱は推進力となり、その推進力が破壊と威力を生み、ブルーメの拳を弾き飛ばす。

「な!?!」

「ハアアア!!」

そこへ、幸奈の拳が炸裂する。絶対零度の拳が、ブルーメの顔面をかばう為に掲げられた左腕を撃つ。

「ぐう——舐めるなア!!」

その一撃を耐え切ったブルーメが消える。

そして間髪入れずに背後から二人の後頭部を地面に沈める。

「お前たちが、俺に勝つことなど、あり得んのだアああ!!」

床に碎け沈む二人にそう怒鳴り散らすブルーメ。だが、次の瞬間、信也の周囲の床が溶け、逆に幸奈の周りは一気に凍りさらに碎け散る。

そして、それと同じようにブルーメの右手が焼け、左手が凍る。

「なッ!?!」

「うるっさいんだよ——」

「うるっさいのよ——」

「この獣畜生がアッ!!」

二人の蹴りが、ブルーメの腹に炸裂し、上空へ吹き飛ばす。

「ぬぐう!?!」

「ハアアアアア!!」

炎と氷が、岩漿と吹雪がその猛威を振るう。

飛び上がった二つのエネルギーは、上空のブルーメに向かって一気に突っ込む。

だが——

「舐めるなああ!!」

絶望の咆哮が二人を襲う。

「ぐああああ!？」

「あああああ!？」

それを喰らった二人はたちまち地面に叩き落とされる。

そこへ、ブルームの伸びる拳が叩きつけられる。

「薄汚い罪人共が・・・なぜ絶望しないッ!？」

二人を飲み込む程の無数のラッシュが、地面に向かって何度も叩きつけられる。

それも、一発逃さず、全て、信也と幸奈に叩きつけられる。

「勝ち目のない、未来の無い世界の為に、何故そこまでして戦う!？何故命を削ってまで戦う!？どうしてそこまでして無意味な戦いを続ける!？」

それが理解できない。分からない。そこまでして、命を懸ける意味が全くと言っていい程分からない。

そこまでして、戦う価値が、一体どこにあるというのか。

この終わりしかない世界に、一体、どんな意味があるというのか。ラッシュがやめば、そこには、散々殴られてボロボロになった信也と幸奈が倒れていた。

ブルームが地面に降り立つ。

ここまで滅多打ちにされて、普通なら生きてはいない程のダメージだ。

しかし——二人は立ち上がった。

「何故だ・・・」

足ががくがくと笑っている。腕も震えている。血も、かなりの量を垂れ流している。

もはや、立ち上がる力など無い筈なのに、二人は立ち上がる。

「何故だア!？」

その二人に、ブルームは怒鳴る。

理解できない。何故そこまでして、命を懸けてまで戦う必要があるというのか。

そんな事をして、無駄だというのに。何故。

「何故立ち上がる!？もうお前たちの世界は終わるといふのに、何故お

前たちは戦う!?!何故絶望しない!?!何故お前たちはそうまでして絶望しないんだアアアア!?!」

「うるせえよ」

ブルーメの怒鳴り声の中で、すつ、と信也の声が、冷たい刃の如く届く。

「絶望しないだあ?そんなもん、してる暇ねえ」

「言ったでしょう?私たちが諦めない限り、希望は必ずあるの...それに、どんな絶望的な状況でも、千景君は決して諦めなかった...!!」

あの日の事を、自分たちは決して忘れない。

たった一人で、強大な敵に立ち向かった、一人の勇者の事を。

誰よりも、絶望に抗った。たった一人で、強大な敵に立ち向かっていった。

いつもそうだ。

彼は、いつも一人で戦っていた。

どんな敵にも、必ず一人で立ち向かい、そして一人で勝ってきた。孤独に戦っていた。

仲間がいても、彼は、いつの間にか一人で戦っている。一人でどんな先に行ってしまう。

自分たちの知らない所へ、知らないステージへ、知らないレベルへ。気付けば、遠い存在になってしまっている。

そして、それに追いつけない自分が、堪らなく悔しくて。

だから、絶望している暇なんてない。

絶望していたら、止まってしまう。もう二度と追い付けなくなってしまう。

だから、戦うのだ。

「だから、俺たちは戦うんだ...!!」

「千景君が戦った時と同じように、私たちは、絶望なんてしない...!!」

信也の踏み出した右足を中心にマグマが迸る。

幸奈の踏み出した左足を中心に吹雪が巻き起こる。

「これで最後だ——」

煮え滾る熱気と吹き荒れる冷気。二つが混じり合い、とてつもないエネルギーが生まれる。

「煮え滾るは灼熱の海——」

「吹き荒れるは氷の風——」

「溢れ出る熱意は勝利を呼び」

「凍てつく闘志は砕けない」

「燃え上がれよ、限界まで」

「激凍心火、その身尽きるまで」

「想いのままに迸れッ!!」

地面を蹴り、飛び上がる。そして、燃え上がり、凍りつく足を突き出し、飛び蹴りを放つ。

それはさながら、『ライダーキック』のように——

「『溢れ出る極激の想撃』!!」

マグマとブリザードが螺旋を描いてブルーメに迫る。

「舐めるなあああ!!」

だが、それをまともに受けるブルーメでもない。

拳を振りかぶり、その腕に、どす黒いエネルギーが収束する。

それは、まさしく、全てを飲み込む虚無の一撃。

絶望の咆哮——絶望への、終局の拳。

「——其は最大にして最強の怪物」

込められる魔力はこれまでの比ではなく、彼の感情全てが込められた一撃。

「かの大神を打ち倒し、世を絶望へと陥れる、真なる怪物——!!!」

ブルーメが、今迫る信也と幸奈に血走った目を向け、拳を振りかぶる。

「ひれ伏せ、慄け、身の程を知れ。彼の者こそ、世界を統べる者ッ!!」

今、神話最大の怪物の一撃が放たれる。

「——『^{テュ}神々の王討ちし怪物の王』ッ!!!」

絶望そのものが、奈落の底から放たれたかのように黒い拳が、二人の蹴りと衝突する。

その瞬間、凄まじいまでの衝撃が迸り、大気がはじけ飛ぶ。交錯点で凄まじいエネルギーの衝突が起きている事によって、光が輝く。

「オオオオオオオオ!!」

「ハアアアアアア!!」

「ガアアアアア!!」

絶叫を挙げて、己の全力を押し切ろうとさらにエネルギーを増大させる。

だが、その拮抗も、すぐに崩れる。

「あああああああああああツツ!!!!!!」

二人の蹴りが、ブルーメの腕を弾き飛ばす。

「なツ……に……い……!?!」

神々の王に匹敵する力を有している怪物の力を弾き飛ばして、二人の必殺の一撃は、ブルーメに突き刺さる。

「ぐあああああああ!?ば、馬鹿なああああああ!?こ、この俺が、人間如きにいいいいいいいい!?!」

「絶望——」

「貴方の——」

「負けだああああああああああああああああああ!!」

ブルーメの絶叫が迸り、そして、その体が、莫大な熱気と冷気によって吹き飛び、二人の一撃は、ブルーメの体を貫いた。

貫いたブルーメの体は、焼けて蒸発するか、凍りついて砕け散り、消滅していった。

「はあ……はあ……勝った……?」

「ああ……俺たちは、勝ったんだ」

そう呟いた直後に、二人は背中から倒れた。それと同時に、変身も解除される。

「でも……もう一步も動けねえ……」

「そう……ね……」

あれほどのエネルギーを操り、そして戦ったのだ。疲れないうちが可笑しい。

『マグマ・ドラゴン』と『スリウム・アンド・ブリザード』という規格外の力を行使して、
『岩漿・炎帝竜』と『霜の巨人と吹雪』という規格外の力を行使して、
まともでいられない訳がない。

だから、これは当然の結果。二人は、ほどなくして気絶する。
だが、生きている。

誰も死ぬことなく、生きている。

ブルーム、死亡——残り敵幹部、四。

彼らの勝利である。

願いの為に

何も見えない。

何も聞こえない。

何も感じない。

あるのはただ、過剰に敏感になった痛覚だけで、

あるのは自分の意識だけで。

上も下も分からない。立っているのかどうかさえも分からない。

右を向いているのか、左を向いているのか。それすらも分からない。
い。

だけど、この拳だけは——

——しっかりと届いているから。

「アアアアアア!!!」

「ぐぼあ!?!」

佐奈の拳がラヴアンドの顔面に炸裂する。

よろけた所を、さらに膝蹴りが腹に炸裂し、そして肘打ちが叩き落される。

地面に叩きつけられたラヴアンドは続く踏み足を転がって躲し、鎖を召喚、その端の楔を佐奈に叩きつける。

「がっ——アアアアアア!!!」

それでも佐奈は止まらない。

「くそっ……なんなんだよお前はア!?!」

全ての感覚を遮断して、さらに痛覚を通常の数十倍にはね上げていく。それでも佐奈は倒れない。

もう何度も攻撃を受けているはずなのに、佐奈は決して止まらない。
い。

地面が変形し、形成された複数の棘が佐奈を貫く。

「罪人の癖に・・・!!」

さらに風の砲弾が顔面を打ち据える。

「なぜそこまでして戦える!？」

炎の鍵爪が引き裂く。

「お前たちに未来はない！今戦ったところでお前たちが敗北する事には変わりない」

水の鞭が打ち据える。

「なのになぜ諦めないツ!？」

蔓が足に巻き付き、振り回されて、そして壁に叩きつけられてそのまま壁に引きずられる。

「ああああああああああ!？」

佐奈の悲鳴が響く。だが、佐奈を繋いでいた鎖が、突如として断ち切られる。

「!？」

「おおおおお!!」

そこへ、ラヴァンドに向かって大剣を振り下ろす弘。その一撃をどうにか躲したラヴァンドに、立て続けに雅がその手に極小のブラックホールを形成させてラヴァンドに叩きつける。

「ぐっ・・・このっ・・・!!」

だが、その一撃はラヴァンドの作った障壁に阻まれる。

「今よー」

しかし、すぐさま雅がもう片方の手をかざしたかと思うとラヴァンドの体にとてつもない重圧がかけられる。

「空間重力強化・・・!」

「ぐ・・・この・・・!？」

さらに、突如として空が輝く。

それは真斗が引き起こした超常現象。

全てを原初の塵へと変える、雷槌の一撃。

「——『原初へ^{ソノ}回^ア帰^{ミヨ}する雷神の鉄槌』ツ!!!」

振り下ろされる渾身の一撃。その一撃は雅を巻き込んでラヴァンドに直撃する。

「ぐう……あああああ……!?!」

「つうっ……うううう!!」

雅は、どうにか重力の壁で自らを守っていたが、防御する暇のなかったラヴァンドはその攻撃をもろに受ける。

「ぐ……く……がああああ!!」

絶叫——そのすぐ後、『原初へ回帰する雷神の鉄槌』が弾き飛ばされる。

「ハア……ハア……くそお……!!」

その雷撃と同じだけの威力の衝撃で絶縁効果のある障壁を飛ばして相殺したのだ。だが、かなりのダメージを受けた事には変わりない。

「まだ終わってないわよ……!!」

「!?!」

そしてさらに、雅の重力砲が炸裂する。

その一撃をどうにか躲したラヴァンドは地面を転がる。

「がつ……くそ、なんでだあ!?!」

「分からないのか……?」

「ツ!?!」

訳が分からず、叫ぶラヴァンドの背後。振り向けば、無数の拳打がラヴァンドに炸裂する。

「ごおっあ……!?!」

「さつきお前は言ったな……私達に未来はない、と……それは違う」

倒れ込むラヴァンドの顎に、止めの一撃が炸裂する。

「ごぼあ!?!」

「私達は、未来を切り開く為にここにいるんだツ!!それを何故と言われる筋合いはないツ!!」

回し蹴りが炸裂し、吹き飛ばす。

叩き落された場所に、粉塵が舞う。

「だから、私達は立ち上がれるんだ」

ラヴァンドに向かって、優はそう告げた。

「……くそが」

粉塵舞う中で、ラヴァンドが立ち上がる。

「くそがくそがくそがくそがくそがア!!」

粉塵が吹き飛ばされ、血走った目を優に向けるラヴァンド。

「何か未来を切り開くだ!!お前たちに切り開ける未来などないッ!全てが断罪の元に裁かれ、永遠に地獄を彷徨い続けるだけだ!それがお前たちの辿り着く未来だ!!それがお前たちの運命だ!!それがお前たちの罪だああ!!」

ラヴァンドの周囲に、何か、得体の知れない力が収束される。

それはまさしく、どす黒い感情。恨み、憎しみ、怒りと言った、負の激情と言った感情。

「それがお前の正体か……醜いな」

優が、力を暴走させるラヴァンドを蔑むように見る。

「そんな醜態をさらすぐらいな……ら……!?」
「がくり、と足が崩れる。」

『うおっと』

しかし、倒れる事はなく、どうにか持ちなおす。

『おい優、無茶すんな』

「虚くんは黙ってて、急いで奴を止めないと……」

「その必要はない」

ふと、後ろから声が出た。

振り返ってみれば、そこには、弓を片手に歩いてくる佐奈の姿があった。

「あとは、私がやる」

何かの力の奔流がラヴァンドに収束していく。

それに対して、佐奈は弓を引き絞るだけ。矢も何も番えていない。

「今ここで、しねええええええ!!」

「——東ねるは我が信仰せしめし、神々の光」

その時、黄金の光が、辺り一面に、金粉のように現れる。

その間に、ラヴァンドは自らの頭上に凄まじい程にまで圧縮された負の激情の嵐の塊を形成していく。

「今一度、我が言葉に耳を傾け——」

光が、佐奈の手に収束していき、やがて一本の矢を形成する。

溜めに溜め込まれた負の感情が、ラヴァンドの手によって振り落とされそうになる。

「我が願いを聞き届けよ——」

それに優が思わず『呪詛返し』の態勢に入るも、その肩を弘が掴む。

尚も舞い続ける黄金の煌きは、佐奈の一本の矢に収束していき、その輝きは、太陽よりも眩しい光と成る。

「我が願いはただ一つ——」

振り落とされる、負の激情——

「『定められた絶対なる運命』オオオツ!!!」

強大な力。大きすぎる力。であるならば——

「——幼き命の希望と成る事——」

放たれるは一条の光——その名も——

「——『神々への祈祷・我こそが希望』」

我は、地獄を殺す——

一寸の光陰軽んずべからず——その一撃が、ラヴァンドの砲撃を貫き、そしてラヴァンドすら撃ち抜く。

力の大本を失った巨大な負の激情は佐奈たちに直撃する前に霧散し、消えていき、消滅する。

「——私達は、先へ進む。まだ見ぬ未来のために」

その言葉と共に、ラヴァンドは背中から地面に倒れる。

「……あ……れ……?おかしいな……僕が……負ける……はず……」

震える手を、空に向かって伸ばす。

「ありえない……僕は……僕は……さー……ど……シン
の……ラヴァ……」

だが、その手はふと糸が切れた操り人形のように、ぱたりと地面に

落ちた。

そして、血だまりが、ラヴァンドを中心に広がった。ぴくりとも動かない彼の姿は、あまりにも残酷で――

――彼の敗北を示していた。

「勝った……のか……?」

弘が、そう呟く。

「……そうみたいね」

ラヴァンドが起き上がらない所を見て、雅がそう呟く。

「勝て……た……」

そう思うと、どすん、と腰を着いて安堵する冬樹。

「勝てたんですね……」

同じように、優も腰について安堵の息を吐いた。

勝てた。勝った。

それは紛れもない事実だった。

全力で戦って、そして、勝った。あの、敵幹部の三人に。

だが、その為には体力を大幅に消費した。流石に動くのは難しい。

そして、それを代表するかのよう、佐奈が仰向けに倒れた。

「佐奈さん!?!」

「佐奈……!」

その佐奈に思わず駆け寄り寄る弘と真斗。が、

「くう……くう……」

寝た。それは見事なまでに素晴らしい寝顔で寝た。

『……』

「なんとというか……」

「意外とマイペースな人ですよね」

「いやあれほどのダメージを喰らってたらそれこそ泥のように眠たくなりますよね!?!」

しかし、動けないのは事実。

「しばらくここで休みましょうか」

雅の提案に、反対するものはいなかった。

ラヴァンド、死亡——

剣が飛ぶ。

「ダラアッ！」

「くっ！」

高速で飛んでくる剣の全てを弾き飛ばし、辰巳は弾丸の如きスピードでヒュアツインテに迫る。

さらに上空から飛んでくる砲撃を躲し、さらに玉座へと迫る。

「なぜ・・・当たらない・・・!?!」

振るわれた剣は達人の如き速さと鋭さ、そして威力をもって辰巳を襲っている。だが、辰巳はその全てを避け切っていた。

「やはりな・・・」

躲す中で、辰巳はほくそ笑む。

「お前は取り乱すとすぐに動きが単調になる。真っ直ぐになる。だからこそ、俺には簡単に読めるしいなせる」

「戯言を！」

ヒュアツインテが一本の剣をその手に持つ。

『鋼鉄の処女』……!!』

次の瞬間、走っていた辰巳の目の前にアイアンメイデンが出現する。

「ッ!？」

剣に追い立てられていた上に全速力で走っていた為に止まれず、すぐさまアイアンメイデンに閉じ込められる。

その足元からは血が流れ出るも、すぐさまアイアンメイデンは爆発四散、中から辰巳が飛び上がって剣を振りかぶる。

「——『竜月』!!」

三日月型の斬撃が飛ぶ。

その一撃をヒュアツインテは二本の剣をもって防ぐ。が、防ぎきれず斬撃はその威力のままに飛び、ヒュアツインテに炸裂する。

「馬鹿な……!？」

間一髪、飛ぶことで躲したヒュアツインテ。

「これで終わりだと思ふなよ」

「ッ!？」

だが背後から声が聞こえ、振り向けば、辰巳の大剣が眼前に迫っていて、慌てて身をひるがえし、辰巳よりも高度を取る事でどうにかその攻撃を躲す。

「チッ!」

「落ちなさい」

ヒュアツインテのバルムンクが輝く。

チャージ率三十パーセントの砲撃が、辰巳を床に叩き落す。

「ぐうっ!？」

さらに、自分が操れる八本の剣全てを自分の元に集め、漆黒の剣『時穿の剣』とバルムンク以外の全ての剣をシャッフルする。

そして、七本の剣を全て床にいる辰巳に向かって一斉放火する。

「ッ!？」

襲い掛かるのはどれも高威力の砲撃ばかり。『紅蓮の魔女』や『嘘殺しの龍女』はもちろん、どれもが凄まじい威力を誇る歴史に名を刻んだ乙女の名を持つ剣の砲撃だ。

そのどれもが、辰巳に殺到する。

「があああああああああ?」

絶叫が轟く。粉塵が巻き起こる。

その様子を見ていたヒュアツインテだったが、その粉塵を突き破るように、辰巳が飛び出してくる。

「なっ!?!」

「おおおおあああああ!!」

振りかぶられる大剣。思わず剣を重ねて防御の姿勢を取ったが、辰巳が剣から黄昏色の光を放出。それが推進力となり、ヒュアツインテの横に出て、その大剣を叩きつけ、吹き飛ばす。

「ぐうあ!?!」

吹き飛ばされたヒュアツインテはどうか空中で踏みとどまったが、さらなる追撃が彼女を襲う。

飛ばされた斬撃は一寸の狂いもなくヒュアツインテに直撃し、地面に落ちる。

「カツ・・・ッハア・・・!!」

激しい追撃に、ヒュアツインテはついで防御できずに肺から空気を限界まで吐き出してしまう。

「(、(、(までなんて・・・!?!)」

遠くの位置で、辰巳が着地する。

そのまま、彼はゆっくりとこちらに向かって歩み寄ってくる。

このままでは、確実にやられる。

「ふざけるな・・・!」

その様子に、ヒュアツインテは怒りを滾らせる。

(人間の分際で神に反逆し、その運命を受け入れない、汚らわしい存在の分際で、私を見下すなど・・・!)

ほぼ執念で立ち上がったヒュアツインテは左手に自らの能力の根幹である漆黒の剣、右手には敵と同じ大剣をその手に持つ。

「人間、風情が・・・!」

そう呟いたヒュアツインテを、辰巳は悲しそうに見つめた。

「本当に・・・何も思い出さないので・・・」

「意味が・・・分かりませんね・・・私はヒュアツインテ、『第三の罪』サード・シンにして断罪の神『マガアクルス』様の忠実な下部・・・他の誰でもない、私の名前は・・・ヒュアツインテです!!」

未来を見る——次にくる、辰巳の攻撃を予測する為に。

しかし、その目が写した未来は、彼女の予想とは全く違うものであった。

それを見たヒュアツインテは、突如として部屋の天井を見上げた。

その行為に、辰巳は警戒して腰を落としたが——

「だらっしやあああああああああ!!」

景氣の良い叫びと共に、天井の一部が砕け散った。

熱線が迸る。それを園子が防ぎ、その隙に、春信がジガに迫る。

突き出される槍、されどそれを春信は弾き飛ばし、返す刃でジガを打ち据えようとする。

だが失敗し、躲され、後ろに飛ばれる。

そこへ園子が飛び込み、激しく槍を撃ち合う。

「以前よりも凄まじく鋭い槍捌き、見事だ!!」

「それは、どうもツ!!」

園子の槍の一撃がジガを弾き飛ばす。

その進行方向に春信が待ち構え、刃を振り下ろす。

その一撃を受け止め、今度は春信と撃ち合う。

「やはりお前から以前と同じ高揚が感じられる。だが不思議だ。お前はあの娘と共に戦っていると、この高鳴りはさらに増していく!」

「当たり前だ。俺の隣は、奴だと決めているからな!」

「納得だ!」

薙ぎ払われる槍、その槍から熱波が飛び、周囲の大気を一気に焼く。

「やあああ!!」

だが、その熱波を突っ切つて園子が飛び掛かる。その園子に向かつてジガが槍を薙ぎ払う。だが、その槍は園子の眼前を空ぶる。

(外した!? 目測を誤ったか・・・いや・・・)

園子の足元には板のようなものがあつた。否、それは板のような刃。

園子はすでに自らの満開である『千剣・八咫鳥』を発動させている。だから、無数の刃を一度に操る事が出来る。その操作制度は、先の修行によつて各段に向上している。

もう、自動操作する必要もない。

千の刃が、ジガを襲う。

それはさながら、羽の嵐のように。

周囲にばらまかれた刃が一気にジガを襲う。だが、それが直撃する寸前に、ジガが熱を解放。

太陽と見まごう程の熱量が放たれ、刃が全て溶かされ蒸発する。

「なっ!?!」

園子は驚きに声を漏らす。

熱が、一切伝わつてこない。

あの刃を全て溶かす程の熱量を解放しているはずなのに、熱が一切伝わつてこないのだ。

今もなお、彼の周りの地面は半径五メートルの範囲で溶けているというのに――

「熱を固定しているんだ」

「春信さん?」

「奴は熱の範囲を絞り、圧縮する事によりあれほどの熱量を捻り出している。であるならば――」

春信が地面を蹴り、刀をその手に上段に振り上げる。

「ゼアアアアアア!!」

振り下ろした斬撃、それが、ジガの放つ熱波を一気に切り裂く。

「すごい・・・!!」

「見事だ!」

「おおおおお!!!」

さらなる追撃がひらめく。薙ぎ払われた刃は飛んだジガを打ち損ね、しかしそこへ園子が新たに召喚した刃の嵐が襲い掛かる。

「ぬうおおおお!!」

振り回される槍が、園子の刃全てを叩き落す。

だが、そこへ追撃として柄が伸びた園子の槍がジガを打ち据える。

そのままジガは吹き飛ぶ。その槍の上に春信が乗り、凄まじい速度でその上を駆け抜ける。

瞬く間に追い付いた春信の振り下ろしの一撃がジガを地面に叩き落とす。

土煙が舞い起こる。

だが、その中で、槍を地面に突き刺したジガが、その手に熱を収束させる。しかし、すかさず園子が横から追撃してくる。

だが、ジガはそれを予期していたかのようにその手の熱を園子に向け解き放つ。

「うわあああ!?!」

それを喰らった園子は一気に吹き飛ばされる。

「ッ!?そのっ——」

ついで春信の横から熱線が叩きつけられる。

そのまま春信は地面に落ちる。

だが、二人はすぐに立ちあがった。

「ふふ・・・ハハハ!!」

その様子に、ジガは高笑いをする。

「やはり、やはりお前たちは、俺が今まで戦った者の中で最も強い者たちだ!ここまで心が高鳴ったのは初めてだ!三好春信!乃木園子!」

突き刺していた槍を抜き放ち、槍を突き出すように構えるジガ。

「故に俺は、全身全霊をもってお前たちを討ち果たそう。仮令お前たちの体が消し炭になっても、俺はお前たちの事をこの心に刻んでおく」

次の瞬間、ジガの持つ槍に今までとは比べ物にならない程の熱量が収束する。

赤かった熱は青、そして紫へと変化する。

そして、その熱量は、まさしく太陽そのものを圧縮したかのような輝きを誇っていた。見ているのも、辛い程、眩い光だ。

あれを喰らえば、確実に人は消し炭・・・いや、灰すら残らないだろう。

「それは困る」

だが、それでも二人は退く事はせず、

「こいつには、これから先も生きててもらわなければならない。それが俺の願いで、未来に託す希望だからな」

春信が、両手でその手の中の刀を握りしめる。

「私も、困るんよ」

園子も、穂先を下げ、柄頭を持ち上げるような構えを取る。

「この戦いを生き残って、春信さんが生きたって事を証明しなくちゃいけないんだ。だから、私は死ねない。これから先、生き続けて、誰かの希望を守り抜いていくために・・・!!」

目の前の化け物に、二人の勇者が立ち向かう。

無数の花そよぐ草原にて――

黒い炎を滾らせて突き進む、一人の少女がいた。

その少女の前に立ちふさがるのは、二人の少年と一人の少女。

黒い炎が通った道に花は無く、その周りも、今もなお、花は枯れ果て、風に消えていく。

憎しみに血走らせる目を立ち塞がる三人に向ける少女は、その手の剣を持ち上げる。

対して三人は素手。だが、三人はそこをどかない。

次の瞬間、黒い炎が、その花畑に迸った――

それでも君を愛してる

天井が破壊される——そこから現れたのは、一人ではなかった。

「——って、うおあああああああ!?!」

「なんで考えなしに床破壊するのよ貴方はあああああ!?!」

それは、緑色の装束を身に纏った集団。そう、彼らは——

「防人……!?!」

防人部隊だった。そんな彼らが真つ逆さまに落ちてきていた。

「何故、こんな所に……!?!」

これには流石のヒュアツインテも動揺を隠せない。

「ん? あ! あれは足柄さんではなくて!?!」

落下するなか、夕海子が辰巳に気付く。

「ちよつと待って! 向こうには金髪の美女が!?!」

「金髪の美女ってなんだ!?! 敵だろうが!」

落下していく防人たち。

その様子に動揺していたヒュアツインテは、とにかく彼らを敵と認識して剣を向ける。

それを見た明日香と芽吹は、いちやはく対応。

明日香が『黒』^{ブラック}を発動。それによる飛行能力でむかつてくる剣を全て弾き飛ばす。

その最中に芽吹が指示を飛ばし、それに対応した者たちが一斉にヒュアツインテに銃口を向け発砲。放たれた弾丸の嵐はヒュアツインテを襲う。

しかしそれらは躲され、しかしすかさず明日香が接近してヒュアツインテに襲い掛かる。

剣が入り混じり、火花が散る。

その援助に優理と将真が行き、その間に芽吹たち残りの防人たちは辰巳の元に向かっていた。

「辰巳さん!」

「お前たち、何故……!?!」

「至急、貴方に伝えたい事があつて・・・」
「うおあ!？」

明日香の叫び声が聞こえ、振り向けば巨大な火の龍が明日香たちを襲っていた。それだけではなく、血の刃や地面を焼き尽くすように燃え上がる闇の炎が、彼らを襲っていた。

「くっそこいつやつぱつえええ!」

「チツ、時間がない・・・辰巳さん、彼女に隙を作ってください。その間に我々が彼女をどうかします」

「本当にどうにか出来るのか?」

「ええ。貴方の望む形で、確実に」

芽吹の真つ直ぐな視線に、辰巳は押し黙る。

「うおああ!？」

「芽吹さん!このままでは優理たちが・・・!」

夕海子が急かす。

「辰巳さん・・・!」

芽吹が真つ直ぐに辰巳を見る。その様子に、辰巳は一度、ヒュアツインテと戦う明日香たちを見る。

明日香の全てを正し無効化する剣、優理の操る霊子によって生成された矢、将真の地面を操る踊り。それらを彼らは駆使してヒュアツインテを抑え込んでいた。

しかし、このままでは押し切られるのは目に見えている。

「・・・芽吹」

「はい」

「任せた」

大剣を両手に持ち、防人の集団を突っ切って、炎を掻い潜ってヒュアツインテに肉迫した。

「ッ!？」

「オオオオオ!!」

辰巳の剣の一撃がヒュアツインテに叩きつけられる。その一撃はどうか掲げた剣によって防がれるも、押されていた。

その間に、芽吹は部隊を集合させていた。

「手筈通り行くわよ。いいわね」

『応!』

「よし、行動開始!」

芽吹の指示で部隊が動く。

辰巳とヒュアツインテが激しく剣を交えているその横から、防人のうち、男子の二人が辰巳の両脇か銃剣を突く。しかしそれは躲される。だがすかさず屈んだ護盾隊の味方を踏み台にして飛び上がった三名の女子の防人が一斉に銃撃する。

その弾丸は辰巳の頭上を通り、ヒュアツインテに直撃、剣によつて防がれる。

だが、その横から横五列縦二列に並んだ防人たちが一斉射撃。その銃弾の嵐がヒュアツインテを襲う。それを喰らつてヒュアツインテはその方向にふらつき、しかしそこへ突然粉塵が巻き起こる。

「な!」

「どうだ見えまい!」

将真が地面を叩き、土煙を起こしたのだ。これで視界がふさがれる。

そして、そこへ、明日香がヒュアツインテの懐に潜り込み、大剣を振りかぶっていた。

「これで——」

「舐めるな!」

しかしヒュアツインテの背後から剣が飛んできて、明日香の額に迫る。

「うお!」

思わず態勢を崩す明日香。だが、剣は尚も明日香の額に吸い込まれていくかのように飛んでいき、

「シッ」

優理の矢がその剣を弾き飛ばす。

だが攻撃を中断された明日香はその場にひざまづき、

「ハアアア!!」

「うおりやああ!!」

その後から、夕海子とシズクが迫り、銃剣をないでできた。
「なっ!？」

これで防げたのは流石か。首に直撃する寸前で剣二本で防げたのはほぼ奇跡に等しい。

しかし、本命はこれじゃない。

本命は、上空の芽吹だった。

実は夕海子とシズクの背後には雀がいて、その雀が後ろに盾を掲げて芽吹の踏み台となり、そして、夕海子とシズクに注意をひかせることで上空への注意を逸らし、奇襲してきたのだ。

「そんな・・・がっ!？」

上から芽吹に襲い掛かれ、地面に倒れ伏すヒュアツインテ。芽吹は、マウントを取るようにヒュアツインテの上に乗っかり、そして、その左手に、何か、青い鍵のようなものがあり――

『メモリー記憶』

鍵の取っ手部分のボタンを押すと、そのような音声が響き、ヒュアツインテの額に、鍵穴のようなものが出現する。

「これで・・・!？」

「待って、何をする気で・・・!？」

ヒュアツインテの制止を振り切り、芽吹はその鍵穴にその鍵を突っ込み、そして捻った――

振るわれる槍、錯綜する斬撃、振りぬかれる刀身。

どれもこれもがミスれば命に関わるものばかり。

だが、それでも彼らはその刃をふるう事をやめない。

どれほど傷つこうとも、今、この瞬間を戦い続けるために。

「ハアアアア!!」

園子が槍を薙ぎ払う。それをジガは飛んで躲し、そこへ春信が飛び込んで渾身の刺突を叩きつける。それを槍の柄で受け、逸らしたジガ

はすぐさま槍の柄頭で春信の顎を打ち据えようとするが、すかさず園子の操る刃がその柄頭に叩きつけられ、阻止される。しかしそれにジガはさほど驚いた様子もなく、槍を回転させて穂先を春信に向けると、既に刃を引き戻した春信と激しい程の斬撃の応酬を繰り広げる。凄まじいまでの連撃の末、互いに弾き飛ばし合って、距離を取り合う。が、園子が刃を操作して踏ん張っている春信の足裏にひっかけさせ、それを使って春信は剣を大きく掲げ、斬撃を飛ばした。

「——『竜月』 ツ!!!」

三日月型の斬撃を繰り出す対天剣術が技の一つ、『竜月』。春信や辰巳程の腕となれば、その斬撃は飛翔し、敵に迫っていく。

その一撃をジガは弾き飛ばし、続く園子の無数の刃を槍を振り回して一つも撃ち漏らすことなく叩き落とす。

だが、続く第二波に対応しきれないと悟るや、ジガは掌から熱戦を放出、一気に薙ぎ払って溶解、蒸発させる。

炎の壁が立ち上る。その壁を突っ切って、影が一つ踊り出てくる。春信が、突っ込んできたのだ。

ほぼ不意打ちに近い状態。春信の振り下ろしを槍で受け止め、一方の春信はそのまま一気にジガを押し込む。

その春信を蹴り上げて上空へ弾き飛ばしたのち、さらに飛んできた園子と激しく刃を交わらせる。

そして、上空からの春信の斬撃。それを後ろに飛ぶことで躲す。「見事だ・・・お前たちの剣からは、守るべきものを持つ戦士の気迫を感じる」

距離をとり、二人をそう称賛するジガ。

「どうやらお前たちを倒すには、今のままでは不足らしい・・・!」
雰囲気が、変わる。

ジガの発する熱量が、膨れ上がる。
「ツ・・・」

その熱量は色を変え、赤から青、そして紫へと変化していく。

「故に俺には、絶対破壊の一撃が必要だ!」

発せられる。それは、すでに吸い込むだけで肺を焼くほどのもの

だったものが、さらに強力になり、吸っただけで肺が蒸発しそうな程の熱量へと跳ね上がる。

「ツ……！」

そして、二人は気付いた。

ジガの体が崩壊しかけていると。

おそらく、ジガも自滅覚悟でその大技を放つつもりなのだ。

放ち、当てれば必勝、されど命懸け。

文字通り、命を削って放つ、必殺技。

回避は不能。防御する事も、おそらく不可能。

それに対し、二人はどのような行動をとればいいのか？

「オオオアアアアアア!!!」

答えは簡単だ。
シンプル

真正面から迎え撃つ。

彼らは、外側に武装されるべき満開のエネルギーを内側に押し込める昇華を併用している。

圧縮されたエネルギーの威力は、水鉄砲の穴が小さいほど遠くに飛ぶのと同じように、通常の数倍の威力を持つ。

故に、刀や槍の切っ先という『小さな穴』から放たれる一撃は、とてつもない一撃となりえる。

「我が人生において、最大にして最強の好敵手に敬意を表して、この一撃を捧げよう」

「来い……！」

掲げられた槍に、ジガの体から放出されている熱が収束する。

「園子」

「うん」

春信の剣が、紅く、朱く輝き出す。

それと同時に、園子が自らの操る全ての刃を、何重もの円を描くように、春信とジガの前に展開した。

そして、それが高速回転すると同時に、光の粒子が、その円いっぱい広がる。

それは、発射台だ。

「——それは怒り。それは轟き。これは世界の叫び。命の源たる、炎の証」

「——我振るうは、たった一太刀。故にそれは我が集大成」

春信とジガが同時に駆け出す。園子が作り出した光の円に自ら飛び込み、その粒子を纏い、加速する。

「故にこれは神の力。神々の慈悲である」

「振るうはただ一刀のみ。されどその一刀神にも届かせてみせよう」

第二、第三の光を纏い、春信は加速していく。その最中で、春信は感じる。

「全てを殲滅せし、今、ここに神の一刺しを」

「これは全てを両断する、最後の一刀なりッ——!!」

その光に込められた、園子の『想い』を——

「——焼き尽くせ『大地^ホ焼き払^フう、神^トの槍^ツ』ッ!!!」

「——討ち斬る『蓮華の太刀』イイイツ!!」

もはや星の最大温度にまで到達して白い光と化したジガの槍と、己が全てをただ一刀に収束させた春信の一撃が、今ここで錯綜する。

「春信さああああああん!!!」

そして、園子の絶叫が響いた——

錠が、開く、音がした。

その瞬間、芽吹の持っていた錠が光の粒子となって消失。そのまま、光はヒュアツインテの額に入っていく。

静寂が、一瞬よぎり——

「あぶねえッ!!」

明日香が危険を察知して芽吹の戦衣の襟首をもって引っ張った瞬間、芽吹の目の前で何かが錯綜した。

それは、ヒュアツインテの操る、二本の剣。

「まさか・・・失敗・・・!?!」

「いや・・・」

狼狽える芽吹の言葉を明日香は否定する。

「ちゃんと成功してる・・・だから——」

立ち上がったヒュアツインテの顔は——泣いていた。

そして、その髪の色も、金から黒へと変わっていく。その髪色は、元の、上里ひなたのもの。

「自分の罪を自覚した・・・じゃあ！」

思い出した。

そう言おうと雀の言葉を遮るように、ヒュアツインテは——ひなたが周囲に無差別攻撃を始めた。

「ああああああ!!」

「ッ!?!」

想定外の事態。

突然、絶叫と共に、自らの操る剣全てを滅茶苦茶に動かす。

「ッ・・・ひなた!」

辰巳が、ひなたの名を呼ぶ。それに、ひなたの表情がさらに青ざめ、浮遊したまま逃げ出す。

「なっ・・・待ってくれ!」

辰巳が叫ぶ。だがひなたは待たない。

「ごめんなさい・・・ごめんなさい・・・!」

そのまま、ひなたは部屋の反対側にある扉へ一気に突っ込む。

このままでは、逃げられる。

(ひなた・・・!)

折角、会えたのに。

あの日、守れなかった彼女が、目の前にいるのに。

また、届かないというのか。

滅茶苦茶に振り回される剣が、近寄る事を拒むように振り回される。近付こうとしても、逆にどんどん距離が遠のいてしまう。

このままでは、彼女は扉の向こうに消える。

また、届かないのか。

「ひなた・・・行かないでくれ・・・！」
もう、離れたくない。だから――

「――逃がすなああああ!!」

明日香の絶叫が、ドーム状の部屋に轟く。

「誰でも良いから扉を塞げエ!!」

次いで、芽吹が指示を飛ばす。

それにいち早く反応したのは将真と優理。

すぐさま土の壁と光子の壁を生成し、ひなたの退路を塞ぐ。

「あつ――」

「逃がすかよ!!」

そこへ、いつの間にか突破してきていたシズクが飛び掛かり、ひなたにその銃剣の刃を突き立てようとする。

「くっ!」

ひなたは、苦しい顔をしつつ、自分のすぐ傍にあった時穿の剣を操り、シズクを弾き飛ばす。

「っ撃――!!」

だが、そこへ芽吹の号令による防人部隊全員による一斉射撃が降り注ぎ、ひなたは、一層扉から離れていく。

「くう・・・!」

「どこに行こうってんだよ!」

「ッ!」

いつの間にか、^{ブラッッ}黒化した明日香が、襲い掛かってきていた。

その斬撃を、ひなたは間一髪で躲し、続く第二撃を、時穿の剣で受ける。

「きゃああ!!」

「旦那が待ってるぜ!」

地面に叩き落され、ひなたは立ち上がる。

そして、目の前に――辰巳が立っていた。

「辰巳さん・・・」

ファブニールとジークフリートを解除している為、その姿は、かつての勇者装束とは違い、幾分か成長しているが、その姿は、紛れもな

い、彼女自身が愛した、足柄辰巳その人だった。

「・・・ひなた」

「来ないで！」

一歩踏み出した瞬間、境界線を引くように、『紅蓮ジャンヌ・ダルクの魔女』が駆け抜ける。

吹き上がる粉塵と風の中、辰巳はそれでも前に進もうとする。

「来ないで！」

次は、『嘘殺キキしの龍女ヨヒメ』が、その大口を開けて辰巳に噛みつきこうとする。

「ぐおー！」

まさかの本気の直撃。それに辰巳が飲み込まれる。

「辰巳さん!?!」

「辰巳師匠！」

その様子に、防人たちが冷や汗を流す。

だが、その竜はすぐさま斬り裂かれる。

その中から、多少火傷すれど、すぐさま回復に入っている辰巳の姿があった。

「・・・ひなた」

「だから、来ないでって言ってるでしょう！」

ひなたは、泣きながら、自分の操る剣を全て辰巳にぶつける。

そのどれもが、辰巳の硬い皮膚を貫く程だった。

「どうして分かってくれないんですか!?!私は、わたしはもう、貴方に見合う女じゃなくなっただんです!自分の世界を破壊したクソ神様に付き従ってしまった悪女なんです!だから、だから、もう、貴方の隣にいる資格はない・・・もう、初代勇者と共に戦った巫女『ひなた』はいないんです！」

時穿の剣が、辰巳を吹き飛ばし、そして叩きつける。

「私は、『第三サード・シンの罪』の『ヒュアツインテ』!貴方の敵です!敵だから、私をそんな目で見るなあ!」

泣きながら、ひなたは、辰巳に言う。

もう、あの頃には戻れない。三百年がたち、何もかもが変わった世

界で、敵として人を滅ぼそうとした自分は、彼には相応しくない。
そんな思いが、辰巳を拒絶していた。

こんな思いをするぐらいならば、そもそも、思い出したくなんてなかった。

悪女『ヒュアツインテ』のまま、彼に討たれたかった。

「……」

「どうしたんですか足柄辰巳！私は敵です！敵ならその剣を向けて私を討ってみてくださいよ！」

考える事を投げ出し、ただ彼の剣で討たれる事を望むひなた。

舞い上がる土煙。砕けた床に、辰巳は埋もれて、そのまま沈黙していた。

「……ああ、くっそ」

だが、次の瞬間、粉塵が振り払われ、辰巳が姿を現す。

「どんな言葉掛けようかと思ったが、なんも思いつかない」

そう言いながら、辰巳は立ち上がって、剣の切っ先をひなたに向ける。

「だから剣これで語る事にする」

その言葉に、周りは——絶叫した。

「二は、ハアアアアアアアアアアアアアアアア!?!」

「ななな何考えてんすか貴方はあああああ!?!」

「ひなたも剣を持っているんだ。だったら後は簡単だ。目には目を、拳には拳を、剣には剣で語り合うしかないだろ」

「いやいやいや相手女の子ですよ!?!女の子であんたの奥さんですよ!?!
それなのに何故剣で語り合うという戦士の思考になってるんですか!?!」

「もともと話し合いなんざ出来る状況じゃないんだ。だったらこれに分からせるしかないだろ」

剣を八相に構えて、辰巳は、地面を蹴った。

「俺がどれだけひなたを愛しているかをなア!!」

「二結局それかあああい!!」

全員のツツコミを受けつつ、辰巳は、ほぼ一瞬にしてひなたに接近。

そのまま振り下ろせばひなたは慌てて二本の剣を呼び寄せて防衛する。

「さあ、始めようか」

「何をですか・・・!?」

「決まってるだろ・・・夫婦喧嘩だ！」

辰巳がひなたを蹴り飛ばす。

「なんですかそれ！」

それに対してひなたが辰巳のすぐ傍の剣を操作し、それを辰巳に叩きつける。それによって辰巳も吹き飛ぶ。

「意味が分かりませんよ!?」

「俺だってお前の言ってる事分からねえよ！」

だがすぐさま態勢を立て直した二人は、またぶつかり合う。

「お前はひなただ！俺が生涯で唯一愛した女のひなただ！」

「私はマギアクルスの配下のヒュアツインテです！貴方の敵です！敵敵敵！」

「いいやお前はひなただね！その眼の下のほくろとか、綺麗な肌とかこの黒髪とか！全部俺の知ってるひなただ！俺だけのひなただ！」

「だから知らないって言ってるでしょう！何度言ったら分かるんですか!?馬鹿なんですか!?」

「馬鹿に馬鹿って言われたくないね！」

「ハア!?馬鹿なのはそっちでしょう!?私との約束破って死にかけたり！皆さんの裸を舐めるように見たり！拳句の果てには歌野さんと良い雰囲気になったり！」

「なつてねえよ何言ってるんだお前!?そういうお前こそ、しっかりしてるように見えて、意外と抜けてる所あったぞ！つまみ食いして太って隠れてダイエットしてた事とか!?」

「なんで知ってるんですか!?」

「ついでに神樹に一番近い巫女の癖に勝手に誘拐されやがって！すごい心配したんだからな!」

「それは申し訳なく思ってます！でも助けてくださいたじゃないですか!?!」

「そりやあ大切な人だからな！助けるに決まってるだろ馬鹿！」

「ま、また馬鹿って言いましたね!? 貴方だって同じようなものなのに！同じなのに！」

「うるせえ言ったもん勝ちだ！」

「それなら私だって言わせてもらいます！馬鹿！辰巳さんの馬鹿馬鹿馬鹿！」

もう、戦いを通り越して痴話げんかである。

やってる事は互いの命を奪い合う殺し合いなのに、言い合っている事は全く持って低レベルな次元の話だ。

「うわぁ・・・」

「これはまた・・・」

「何これ!？」

「あらあらまあまあ！」

「何をやっているんだあの人たちは・・・」

「うおおおお！そこだああああ!! やれえええ！」

「貴方は相変わらずうるさいわね!？」

「誰が痴話げんかしろと言った!？」

これには防人組も呆れていた。

だが、その間にも戦いはより過激になる。

「大体なんなんですか!? 私たち敵同士なのに、どうして貴方は私を取り戻そうとするんですか!？」

「愛してるからに決まってるだろうが！」

「嘘です！この三百年で絶対に褪せてます！」

「褪せるか！この三百年ずっとお前への想いを途切れさせた事はねえよー！」

「嘘です！人間が記憶できる年月はたった百五十年分なんですよ!? 覚えてる訳ないでしょう!？」

「その理論で言ったら俺は人間やめて竜になつとるわ！ドラゴンだぞ今の俺はー！」

「全然ドラゴンっぽくないでしょう！」

「だとしても俺はお前の事忘れた事なんてないわ！」

「うるさいうるさい！もうほつといてくださいよ！」

ひなたが、時穿の剣を使って、未来を見る。

次の瞬間、降り注いだ辰巳の滝打をかわし、右手に持った時穿の剣でその首を刎ねに行く。

だが、その刃は届くことはなく、頭突きでその剣の機動を反らし、頭上へそらす。

「無茶苦茶・・・！」

「知ってるだろ！」

「うう・・・もう！なんで貴方はそんなに・・・!!」

凄まじいエネルギーが、ひなたのもう一本の剣に収束する。

それは、辰巳の持つバルムンクと全く同じ形状の剣。

「恰好良いんですかあああああ!!」

「「ええええええ!!そこおおお!!」」

「お前こそ可愛いだろうがああああ!!」

「「もうなんなのお前ら!」」

次の瞬間、二人が同時に黄昏の咆哮をぶつ放す。

『クリームヒルト・フォン・バルムンク』う——ツ!!!」

『フェアニール・フォン・アテム』ウ——ツ!!!」

二つの強力な砲撃が真正面から衝突し、凄まじい爆発を引き起こす。

それと同時にとてつもない衝撃が辺り一面に叩きつけられる。

その衝撃波によって、二人は強制的に距離を取る。

「いつも、いつもそうですよ！貴方だけは私のペースを完全に乱してくる！貴方だけにはいつまでたつても勝てない！それがどうしても悔しい！」

「そりゃ勝たせる訳ねえだろ！俺は剣士だ！どんな事があつても勝ち譲らない主義だ！」

「たまには勝ちを譲ってくださいよ！そんな主義もってるから私以外にモテなかったんじゃないですか!」

「ハッ！お前に惚れられてるってだけで十分過ぎるわ！」

「くく!!もう！貴方はいつもいつも！私が見えぬじやないで

すか！」

「お前ほど綺麗で可愛い女はこの世のどこ探しても見つからねえわ！
みじめだとか言うな！この馬鹿！」

「また！また言いましたね！馬鹿って！馬鹿って！貴方だって馬鹿な
のに馬鹿って言わないでください！」

「そうだ！俺もお前も馬鹿だ！この三百年で戦いを終わらせなかった
俺も馬鹿だ！勝手に敵に寝返ったお前も馬鹿だ！もう馬鹿以外の何
者じゃねえよ！」

「貴方は、いつも、そう自分勝手に!!!」

ひなたが時穿の剣を掲げる。

「自分勝手なのはどっちだ!?!」

辰巳もバルムンクを掲げる。

その瞬間、ひなたからは全てを飲み込む闇色の光が、辰巳からは全
てを融解させる黄昏の光が立ち上る。

「……おい、これやばくないか？」

明日香がそう言うや、

「全員退避イイイ——ツ!!!」

「なんで痴話喧嘩で大技ぶっぱなそうとするんだあの馬鹿どもはアア
ア——!?!」

すぐさま全員、ドームの隅へ全速力で走る。

「——我司るは時」

「刮目せよ。我は邪竜、我は竜殺し、故に我は黄昏の覇者」

「時は全てに平等を与えられ、決して止まる事は無く、戻る事はない——
——」

「邪悪なる竜は失墜し、英雄は竜の血を浴び、栄光をその身に受ける」

「されど我は時を司る。それ即ち未来を見通し、過去に行き、時間を歪
める——」

「されどその人生に叶えた願いは無く、英雄に喜びはなく」

「全ては私の思うがまま。何故なら私は、時を司る神——」

『時司る神』なのだから」

「邪竜に生は無く、されど満足することも無く、その人生に終わりを告

げる」

「故にこれは、我が力の全て」

「我が手には我が振るい、我を討ちし、黄昏の魔剣」

「——称えよ『狂い乱れる時の神の咆哮』うッ!!!」

「——解き放つ『天魔撃ち落とす黄昏の大剣』オッ!!!」

片や、時を司る神の力が内包された究極の神剣。

片や、聖と魔の両側面を持つ竜を殺した魔聖剣。

それを、完全開放による全力の砲撃を、真正面からぶつけ合う二人。

当然、その余波を受けた者たちはただではすまない。

「「ぎやあああああああ!?!」」

「そ、想像以上に威力が強すぎるぞ!」

「ぎやあああ!!死ぬううう!!」

「た、耐えるのよ!もう耐える以外に私たちに選択肢はないわ!」

「んな無茶苦茶な!」

凄まじい衝撃が周囲に振り撒かれる最中、二人の砲撃は拮抗する。

ひなたが操るのは『時』。

『時間』に関係する事なら、対象の動きの時間のみを止めたり、逆に自分一人だけ時を止めた世界を動けたり、さらには未来の事象すらも観測して予知する事が可能。

そして、その力を使つて、過去に名を馳せた偉人のその歴史的背景を利用して、それに見合った能力を発動する事が出来る。

そして、それは自由に入れ替える事も可能だ。

そして、この『狂い乱れる時の神の咆哮』は、『時』を歪める程のエネルギーを放つ事で、相手の時を歪め、時間を破壊して、『一瞬の永遠』に葬り去るといふ能力を秘めている。

それに対して、『天魔撃ち落とす黄昏の大剣』だが、これは竜の咆哮そのものであり、膨大な熱エネルギーそのものだ。

その熱エネルギーは空間すらも歪めるほどの力を秘めている。

時と空間。

その二つを歪める砲撃が、真正面からぶつかり合えば、一体何が起こるだろうか。

答えは簡単だ。

時空が壊れる。

それは突然の事だった。

突如として世界そのものを揺らす程の揺れが起き、この城だけでなく、神樹の守る結界内にまでその影響が及ぶ。

今までに類を見ない程の大地震が、否、空間そのものが揺れる事で全ての世界やら宇宙やらが歪む。

海は突如として暴れ出し、空気は吹き荒れ、地面が割れる。

まさしく大惨事である。

そして、その『揺れ』の原因——時空の歪みが、辰巳とひなたの衝突した砲撃から発生し、その『揺れ』によって態勢を崩し、砲撃が中断される。

だが、それで割れた時空が元に戻る筈がない。

「うわあああ!? あれは絶対やばいってえええ!!」

「ツ!? やべえー!」

その危険性をいち早く察した雀と明日香。

その予想通り、歪みは何もかもを飲み込もうとするかのように、その歪みに向かって全てが吸い込まれようとする。

「ツ!? 皆! 何かに捕まって! もしくは地面に銃剣を刺すなり盾を突き立てるなりすればいいから!」

芽吹の指示に、全員が反応し、全員が必至に歪みに飲み込まれまいと踏ん張る。

「明日香!」

「おう!」

そして、芽吹の叫びに応えるように、明日香が飛翔する。

明日香の能力は『正』。全ての異能や奇跡によって歪められた事象をあるべき姿に正す能力だ。

その明日香が、^{ブラック}黒化してその能力を強化、飛翔し、一気に歪みに突っ込む。

だが、そんなとんでもない事態になっているにも関わらず、この夫婦ふたりはなおも戦いをやめない。

砲撃を外しても辰巳はなおも上空のひなたに向かって駆け出す。

それに対して、ひなたは自らの操る時穿の剣以外の八本の剣を駆使して辰巳の接近を阻止しようとする。

剣が、辰巳を襲う。それを辰巳は、対天剣術『縄張』をもって全て叩き落そうとするも、全ては仕留めきれず、肩や脇腹を僅かに抉られる。だが、止まらない。

背後から襲い掛からせようとも、正面から止めようとしても、横から吹き飛ばそうとしても、弾かれ、例え喰らっても止まらない。

「ひなたあああああああ!!!」

辰巳が絶叫し、飛び上がる。

「辰巳さああああああん!!!」

ひなたも絶叫し、時穿の剣を振りかぶる。

一見、達人である辰巳に対して、ひなたは剣を振る事に関しては素人だ。だが、ひなたは剣を操作するときと同様に時穿の剣すらも操作し、速さだけでも追いつこうとする。

高所から飛び掛かる辰巳と、それを迎え撃つひなた。

そして、歪みを塞ぐべく飛翔する明日香。

三人の刃が錯綜するとき、全ての戦いが幕を閉じる。

そして――

「だらっしやあああああああ!!!」

明日香が、歪みと交差するように剣を振るい、歪みを一瞬にして塞ぐ。

時空の歪みが収まり、その明日香の眼下では、辰巳が、床に倒れるひなたの顔のすぐ横に剣を突き立てている姿が見えた。

その胸元の服は斬り裂かれ、血も流れていた。

「ハア……ハア……」

「ゼエ……ゼエ……」

互いに息を挙げており、辰巳は、倒れまいとして剣を杖代わりにしていた。

そんなひなたは、僅かに痛む胸元の事を無視して、疲労しきった辰巳の顔を見上げていた。

「……こんなに、激しく喧嘩したの……初めてです」

「ハア……ハア……ああ、俺もだよ。まさか、お前とこんな形でガチにやりあうとは思わなかった」

そんな風に言い合い、ひなたはまた話し出す。

「私は……戻ってもいいのでしょうか？」

「何度も言わせんな。良いに決まってるだろ」

「でも、私は、今は敵ですよ……？」

「よくある話だろ。好きな人が実は敵だったり敵に寝返ったりっていうパターン」

「でも……私は……貴方や、他の人を、沢山……」

「んなもん、俺が全部帳消しにしてやる。もしそれでお前の気がすまないっていうなら謝りに行けばいい。俺もついていくから」

「でも、私は、これでも三百歳のおばあちゃんなんですよ？そんな私でもいいんですか？」

「何言ってるんだ。それなら俺だって三百過ぎてるジジイだ。それに、どれだけ時間が経っても、俺の気持ちは変わらねえ」

辰巳は、ひなたを抱き上げて、顔を近付かせる。

「どんだけしわくちやのばあちゃんになっても、どんだけ時間が経っても、それでも俺はお前を愛している」

この三百年、一度も変わらなかった想い。

彼女との、戦いを終わらせるという願いを叶えられず、されど変わらず、色褪せる事のなかった想い。

辰巳の、たった一つの真実。

「例え敵だろうがなんだろうが、俺がお前を想う気持ちは変わらない。それだけは、何があっても変える気はねえよ」

「……本当に、私で良いんですか？」

その、ひなたの問いに、辰巳は――

「お前じゃなきゃだめなんだよ」

それ以上の、言葉は不要だった。

それ以外の感情は全て、戦いの中でぶつけ合ったのだから。
大勢の少年少女に見守られる中で、二人は、その唇を重ねた――

衝突した二つの一撃の衝突の瞬間、春信は悟った。

――三秒で死ぬな、と。

どれほど洗練された究極の一撃であろうと、神のもたらす本気の一撃には遠く及ばない。

視界を真っ白に染める程の熱量は、園子の司る千剣の力をもって、溶ける事を防いでいるが、その熱エネルギーのもたらす威力は、流石の春信をもつてしても、打ち勝つ事は不可能だった。

その衝突の瞬間、春信は、己の全神経を極限にまで活用して、目の前の状況を打開する策を模索する。

頭ではなく、体の細胞一つ一つで。

与えられた三秒間という猶予の中で、春信の体は必至に考える。視覚から送られてくる情報よりも肌で感じる情報を頼りにする。

衝撃で全ての音が消えうせた為に耳からの情報も頼りにならない。残り、二秒。

次の瞬間、春信が動く。

それは、己の最期を悟っているが故の行動だった。

（神樹よ――）

神樹への祈祷。その瞬間、自らが纏っていた満開を重ね掛けで発動

する。

咲き誇った花に目を見開くジガだったが、それでもねじ伏せるとい
う結論に至ったまま、そのまま槍を押し込もうとする。

その一方、満開によってさらなる力を得た春信であったが、それ
も、届かない。

どうやら三秒という力の差は、そう簡単には埋まらないらしい。
ただ新しい三秒が出来ただけだ。ここから、さらなる手段を模索し
なければならぬ。

だが、どうする？もはや使える限りの手段は出し尽くした。後はこ
の一撃をいかにして相手に叩き込むかという事だ。

どうする？

だが、そこでふと春信は思い出す。

彼女なら、この三秒で、この一撃をどうにかしてくるだろう、と。
そして、それは、残り一秒で現実になる。

それは、彼女の血。彼女の血脈。その血の辿った宿命にして人生。
かの始祖の少女は願った。全てを守る力が欲しいと。

人々は思った。彼女には、矛が相応しいと。
だが、少女はすでに戦える体ではない。

ならばそれは子孫に託すことにしよう、と少女は言った。
既に戦える身ではない。だが子を産み、育む事は出来る。

であるならば、未来に託すしか道はない。
それは、辛く険しい道であろう。だが、それでも少女は未来に縋
りつかない。

その縋った結果が――彼女の矛だ。

「――屠れ『生イクノ太刀ノ・倶利伽羅カハラ』ア――ツ!!!

それは、神すらも恐れる、魔王の炎。全てを焼き尽くし、全てを焼
土に変える、地獄の炎。

その炎の一撃が、ジガの槍の横から叩きつけられ、機動が逸れる。
例え、全てを焼き尽くす真っ白な炎であっても、悪魔のくべる地獄
の炎に打ち勝つ事は不可能なのだ。

だが、威力そのものは殺せず、その一撃は、春信のすぐ右を通過、背

後の全てを穿つ。

圧倒的熱量が、春信の半身を僅かに炙り、されど春信はとまらず前に踏み出す。

「おおおおおッ!!」

右手で掲げた刀の渾身の刺突。

だが、その一撃は、ジガの掲げられた手によって防がれる。

刃が突き刺さるのと同時に、刃ごと腕を動かし、無理矢理そらす、それによって、最後の一撃が逸らされた——かに思えた。

「オオオアアアアアア!!」

「——ッ!?何——」

いつの間にか、春信の左手には、園子の槍が握られていた。

春信が刺突を繰り返した際、園子が手渡したのだ。

完全な虚。決定的な隙。完璧なタイミング。

そして、想い。

戦いの終着点。それが今、叩き込まれる。

園子の槍の春信の一撃が、ジガの心臓を貫いた。

「——一手、及ばなかったか」

貫かれた胸を抑え、よろよろと後ずさりをするジガ。

その顔は、満足気だった。

「この人生、ずっと戦いに捧げてきた」

槍の柄を地面に突き立て、男は一人、二人の男女の健闘を称える。

「この戦い、お前たちの勝利だ」

「ああ、そうだな・・・ぐふっ・・・」

春信が、膝をつく。

「春信さん!」

「ぐう・・・そろそろ限界か・・・」

満開を、維持出来なくなっている。

もはや体を動かす為の力すらも、満開の維持に回さなければならなくなるほど、春信は限界なのだ。

おそらく、満開を解除すれば、その瞬間——

「他の者が見れば、無様だと思うだろうな。勝った者が見上げ、敗者が

見下すこの光景を」

「ああ・・・そうだな」

園子に抱えられ、春信は、悠然とその場に立つジガを見上げる。
「戦いしかなかった人生において、お前は・・・いや、お前たちは、最高の好敵手であった。二人で一人、比翼連理とは、この事か」

ふっと笑うジガ。

「そういえば、お前の名は聞いていなかったな。冥土の土産に、名前を聞いておこう」

「乃木・・・園子・・・」

「乃木園子・・・良い名だ。そして先祖の名に恥じない素晴らしい戦いであった」

「そつか・・・だったら、嬉しいかな」

園子は、ジガの言葉に、笑みを零す。

ふと、気付けばジガの体が朽ちて崩れている事に気付いた。

「ん？ああ、俺の体は、死すれば炭化して崩れ去るようになっていた。そういう一族だ。その上、我が最大最強の一撃を放ち、そして敗北したのだ。こうなる事は必然だ」

「そんな・・・」

「悲観するな。もとより我らは敵同士。であるならば命の奪い合いは至極当然だ」

左腕が、崩れ落ちる。

「そろそろ時間か・・・まさか、戦いの中に生きた俺に、こんなにも安らかな死がもたらされるとは・・・」

本当に、満たされたような表情で、ジガは消え去っていく。

「三好春信、乃木園子。お前たちの名前、このジガの脳裏に死してなおも永久に刻まれるだろう。誇るがいい。お前たちは、この俺に勝ったという事を」

体の崩壊が、ついに、顔にまで到達する。

「最後に、ベリアル——結城友奈についてだ」

「結城友奈・・・ゆーゆがどうかしたの？」

途端に、園子の目が冷める。

当然だろう。何せ、彼女は、多くの友達のことを裏切ったのだから。

「奴は——」

ジガが告げた言葉。それは、春信と園子をおおいに驚愕させるには十分なものだった。

「……嘘だ」

「信じるか信じないか、お前たち次第だ。だが、これだけは覚えておけ

——奴と勇者たちの相性は、『最悪』だ」

それを最後に、ジガは完全な炭となって消えた。

「……」

その言葉を、園子は頭の中で反芻する。

「園子……」

だが、そんな事よりも、園子は、春信の方を見る。

「春信さん……!」

「どうやら……もう限界のようだ……」

春信の勇者装束に、亀裂が入っている。それは、どんどん広がっていつていた。

満開の外装が、外れかけているのだ。

春信は、最後の満開による体の崩壊を、この外装によって抑えているのだ。

だが、それに亀裂が入ってきているという事は、もう。

「そ……っか……」

震える声で、園子は、呟く。

「じゃあ、最後にお話ししよっか」

無理な笑顔を浮かべて、園子は、自分の膝の上に、春信の頭を乗せる。

「春信さん、私、頑張りましたよね?」

「ああ、今までにないくらい頑張ったな。だが、本当の頑張りどころはここからだぞ」

「分かっていますよ。すぐにわっしーの所にいなくなっちゃいけませんから」

「分かっていると思うが、結城友奈は、勇者の頃よりも圧倒的に強くなっている。油断すると、簡単にやられるぞ」

「限界を超えた私ならおちやのこさいさいですよ」

「まあ、お前ならそのテンションの方がいつもの力を出せるだろうな」「えへへ。勝つたらすぐに婚姻届ださないとなく」

「お前、まだ十四だろう？結婚するのは二年後だ」

「え。それまで待てませんよ」

「舐めるな。俺がそこらの女に目移りすると思うか？」

「ありませんね」

「だろう。だから気長に待て」

「はい。子供は何人ぐらいほしいですか？」

「多すぎても困る。多くて四人だ。少なくとも男は二人は欲しい」

「じゃあ残り二人は女の子ですね。私、頑張るんよ」

「あんまり気張るなよ。母親が健康である事が一番だからな」

「分かっていますよ」

ふと、そこで会話が途切れる。

理由は、目に見えていた。

園子の両目から、涙が溢れ出て、それが春信の顔に滴っていた。

「あれ・・・おかしいな・・・泣かないって決めてたのに・・・なんで・・・」

その時、もう動かすのもつらいであろう春信が、そつと傷だらけの手で、園子の頭を撫でる。

その行為に、園子の顔が、くしやりと歪んでしまう。

「はる・・・のぶ・・・さ・・・はるのぶさん・・・！」

一度溢れだした感情を、抑える事は出来なくて、園子は激しく嗚咽を漏らし、そして、泣きながら春信に言う。

「いや・・・だよ・・・やだよ・・・はるのぶさん・・・私、はるのぶさんと・・・いっしょにいたいよお・・・!!」

「わかっている・・・俺だって、出来ればお前と一緒に生きたかった」「ちゃんと、けっこんして・・・子どももつくって・・・それでわっしーたちと子どもがあそんでるところをみてわらって・・・それで・・・それで・・・さいごまで、いっしょに歳をとっていききたい・・・こん

な・・・ところで・・・別れるなんて・・・やだよお・・・!!」

涙は、次から次に溢れてくる。しかし、いくら喚いたところで、春信の勇者装束の亀裂はとまらない。

いずれ限界が来て、春信の命は消える。

「園子・・・」

「ひつく・・・えぐ・・・」

「最後に、お前と共に戦えて良かった・・・お前のような強い女に見惚れられて、俺は幸せ者だ・・・だから・・・」

春信は、力を振り絞って、最後の願いを口にする。

「笑ってくれ」

それは、春信の、心からの願いだった。

「お前は、笑顔が一番だ」

その言葉に、園子は、溢れ出る涙を拭って、力いっぱい、笑顔を作る。

それでも、涙は溢れ出てくる。

不格好になってしまっただろうか。

でも、今は、これが精一杯だった。

「笑う・・・笑うよ、春信さん。これからもずっと、春信さんが心の底から羨むぐらいに、幸せになるからね」

すると、春信は安心したように手を園子の顔から離す。

「なら、安心だな」

そう言って、目を閉じた春信。

それと同時に、春信の勇者装束が、亀裂で埋め尽くされる。

次の瞬間、園子の視界が真っ赤に染まる。

押し込められたエネルギーが一気に開放されたのか、春信の血が、辺り一面に広がる。

全身に春信の血を浴びた園子は、腕の中の春信の顔を見つめて、そして――

泣いた――。

ここに至るまで、ゴーレムや竜牙兵の邪魔は多くあったものの、無事に辿り着くことが出来た。

途中、風と合流出来た事も幸いだった。

これなら、決して遅れをとる事はないだろう。

ここに至るまでに、様々な感情が、胸中を駆け巡っていた。

憤怒、憎悪、困惑、嗟嘆、愛絶、激憤、自棄、呪詛――

数えれば、キリがない程に、彼女への感情は沢山あった。

だが、やはり一番に来るのは、恋人を殺された事に対する『憎悪』と、裏切られた事に対する『絶望』と『怒り』だった。

あの日、初めての土地で不安を感じていた自分を救ってくれた、初めての友人。

感謝もある、悲しみもある、躊躇いもある。

だが、それよりも、倒さなければならぬ『使命感』と、それを後押しする『憎悪』が、何よりも勝っていた。

だから、この引き金を引くことに、躊躇いはもう無い。

隣にいる風も、同じだろう。

後ろにいる二人はどうなのかは知らない。

だけど、もう、止まる事は無い。

部屋に入れば、そこには彼女がいる。

「アハ、久しぶりだね。東郷さん」

「——友奈」

いつも通りの彼女に、フツと怒りが沸いて、ドスの効いた声が出てしまう。

だが、これでいい。

もう、かつての関係には戻れないのだから——